

FGO DLC実績『鬼血の 継承者』獲得

秋の自由研究

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

はい、よいスタート（棒読み）

実績の確実な獲得の為RTAはしていませんが、出来るだけ最短ルートを狙って走り抜けていきたい所存です。

と言った感じの、Fate／Grand Order原作の二次創作、のリメイク作品です。淫夢要素？ そんな物、ウチにはないよ……。

リメイク前を超えて行きたい所存です。（所信表明）

注意

この小説は原作、F a t e / G r a n d O r d e rのネタバレを含みます。
そう言うのが嫌な方はブラウザバックを押してください。

目次

新規マスター作成

2

第一章

10

第一章・裏：山に棲む少年

16

第二章

25

第二章・裏：焰の中で笑う男

32

第三章

43

第三章・裏：動物狩りの要領

51

第四章

60

第四章・裏：大空洞決戦

67

第五章

76

第五章・裏：鬼の子

83

第六章

93

第六章・裏：聖女から見たハゲ頭

100

第七章

108

第七章・裏：彼が彼女を知ってる訳

115

第八章

124

第八章・裏：ムツシュ・ド・パリ

132

第九章

139

第九章・裏：とある王妃が町を救う日

146

第十章

155

第十章・裏：サーヴァントとして

第十一章	——	171
第十一章・裏：マスターとしての		
177		
第十二章	——	186
第十二章・裏：断頭台に立つ男	——	193
第十三章	——	203
第十三章・裏：狙われる者	——	210
第十四章	——	218
第十四章・裏：家族について	——	224
断章：獣と盟する者	——	232
第十五章	——	238
第十五章・裏：薔薇の皇帝	——	244

第十六章	——	251
第十六章・裏：城門前の攻防	前編	
258		
第十六章・裏：城門前の攻防	後編	
266		
第十七章	——	274
第十七章・裏：故郷と母	——	281
第十八章	——	289
第十八章・裏：神君の苦悩と敗北		
296		
第十九章	——	304
第十九章・裏：女神の戯れ	前編	
310		

第十九章・裏：女神の戯れ 後編

第二十三章・裏：憎しローマ 中編

318

387

第二十章

—————

326

第二十三章・裏：憎しローマ 後編

第二十章・裏：二つの勢力の思惑

395

332

第二十四章

—————

403

第二十一章

—————

340

第二十四章・裏：首都にて

—————

409

第二十一章・裏：陰に潜む者

—————

347

第二十五章

—————

417

第二十二章

—————

355

第二十五章・裏：聖杯でなく

—————

424

第二十二章・裏：負より生じる『カチ』

断章：紫紺の神の行き先。

—————

432

362

第二十六章

—————

440

第二十三章

—————

371

第二十六章・裏：戦力増強に関してのエト

第二十三章・裏：憎しローマ 前編

セトラ

—————

448

378

第二十七章

—————

455

第二十七章・裏：蛇と禿	462	断章：とある船にて	530
第二十八章	470	第三十二章	537
第二十八章・裏：少女と刃物の思考実験	477	第三十二章・裏：ブラック・ピアード	
第二十九章	485	第三十三章	552
第二十九章・裏：酒宴で日が暮れて	492	第三十三章・裏：ドラゴン狩りのハゲ	
第三十章	499	第三十四章	567
第三十章・裏：利用し、利用され	506	第三十四章・裏：攻守交替	
第三十一章	514	第三十五章	582
第三十一章・裏：ゴルゴーンとえうりゆあ	521	第三十五章・裏：黒髭決着	
		第三十六章	597
		第三十六章・裏：怒りを澄ませば	

第三十七章	604	第三十七章・裏：雷光と支配する女	611
第三十八章	618	第三十八章・裏：世界を亡ぼす女	627
第三十九章	634	第三十九章・裏：ヘラクレスを討て	641
第四十章	647	第四十章・裏：成功者	655
第四十章		第四十章・裏：怪物の言い分	670

第四十一章		第四十一章・裏：そして海賊は次の冒険へ	678
第四十二章	739	第四十二章・裏：被害者の理屈	693
第四十三章		断章：千年京の怪人	708
第四十三章		第四十三章・裏：霧の都から	716
第四十四章		第四十四章・裏：『霧の都』にて	732
第四十五章		第四十五章・裏：灰の都の『グレイ』	746

820	第四十九章・裏：皆防衛戦 後編	829
813	第四十八章・裏：皆防衛戦 中編	
805	第四十八章・裏：皆防衛戦 前編	
	第四十七章・裏：危険への自覚	788
	第四十七章	780
	第四十六章・裏：飛竜襲撃	769
753	第四十六章	761
	第四十九章・裏：別勢力の影	837
	第五十章	845
	第五十章・裏：紅の圏内	853
	第五十一章	861
	第五十一章・裏：探索の中で	869
	第五十二章	877
	第五十二章・裏：むかしがたり	885
	第五十三章	893
	第五十三章・裏：策の成立へ	901
	第五十四章	909
917	第五十四章・裏：破壊の影 前編	
	第五十四章・裏：破壊の影 中編	

925

第五十四章・裏：破壊の影 後編

933

第五十五回

941

第五十五章・裏：しかめ面の思惑

949

第五十六章

957

第五十六章・裏：海の脅威のあれやこれ

965

断章：獣コンビのエトセトラ

973

第五十七章

981

第五十七章・裏：海原と残骸

988

第五十九章

996

第五十九章・裏：軍師対海賊 前編

1004

第五十九章・裏：軍師対海賊 中編

1012

第五十九章・裏：軍師対海賊 後編

1020

第六十章

1029

第六十章・裏：怪傑黒髭

第六十一章

1045

第六十一章・裏：海原馬鹿旅情

第六十二章

1061

第六十二章・裏：迷宮狂乱

第六十三章

1078

1078106910611053104510371029

第六十三章・裏：特異点考察	1086
第六十四章	1094
第六十四章・裏：迷宮決着	1101
断章：企む怪僧	1109
第六十五章	1117
第六十五章・裏：サメの餌	1125
第六十六章	1133
第六十六章・裏：最後の『指し手』	1141
第六十七章	1150
第六十七章・裏：エルメロイの帰還	1158
第六十八章	1166
第六十八章・裏：小賢しい男	1174
第六十九章	1183
第六十九章・裏：とある宮廷の二大才女	1191
前編	1191
第六十九章・裏：とある宮廷の二大才女	1200
後編	1210
第七十章	1220
第七十章・裏：『記憶』の特異点 前編	1226
第七十章・裏：『記憶』の特異点 後編	1236
第七十一章	1236
第七十一章・裏：カルデアの大人達	1236

第七十三章・裏・塔に秘されしモノ	1299	伍
第七十三章・裏・塔に秘されしモノ	1291	肆
第七十三章・裏・塔に秘されしモノ	1283	参
第七十三章・裏・塔に秘されしモノ	1275	貳
第七十三章・裏・塔に秘されしモノ		壹
第七十二章		
第七十二章・裏：対霊戦線		
第七十三章		
第七十三章・裏・塔に秘されしモノ	1267	
第七十三章・裏・塔に秘されしモノ	1259	
第七十三章・裏・塔に秘されしモノ	1252	

第七十六章	1364	1372
第七十五章・裏：『浄化』のやり方	1364	1372
第七十五章・裏：マスカレイド	1355	1347
第七十五章	1339	
第七十四章・裏：輝ける聖なる槍	1339	1331
第七十四章	1322	
第七十三章・裏・塔に秘されしモノ	1314	
第七十三章・裏・塔に秘されしモノ	1314	
第七十三章・裏・塔に秘されしモノ	1306	
第七十三章・裏・塔に秘されしモノ	1306	

第七十六章・裏：平安の時へ	1380
第七十七章	1388
第七十七章・裏：『相方』	1395
第七十八章	1403
第七十八章・裏：狡猾な童	1410
第七十九章	1418
第七十九章・裏：鬼の本姓	1426
第八十章	1434
第八十章・裏：剛の雷	1441
第八十一章	1448
第八十一章・裏：とある死線	1456
第八十一章・裏：雷電一閃	1464
第八十一章・裏：おにさんどちら	1472

第八十二章	1472
第八十二章・裏：それでもマシに	1480
第八十二章	1487
第八十二章・裏：主従出撃	1495
第八十三回	1502
第八十三章・裏：実力拮抗	1510
第八十三章・裏：悪魔のささやき	1517
第八十三章・裏：振り向けばそこに	1525
第八十四章	1535
第八十四章・裏：黄金の益荒男	1542

	第八十五章	1551
	第八十五章・裏：語らずとも	1558
	第八十六章：討鬼の巻・その一	1566
	第八十六章：討鬼の巻・その二	1575
	第八十六章：討鬼の巻・その三	1584
	第八十六章：討鬼の巻・その四	1595
	第八十六章：討鬼の巻・その五	1608
	第八十六章：討鬼の巻・その六	1616
	第八十七章	1626
	第八十七章・裏：『三騎目』	1634
	第八十八章	1644
て	第八十八章・裏：新入りとマスターに付い	1651

	断章：森の中の死闘	1660
	第八十九章	1668
	第八十九章・裏：活きる少年	1676
	第九十章	1684
	第九十章・裏：荒れ狂う神槍	1691
	第九十一章	1700
	第九十一章・裏：太陽の如く	1708
	第九十二章	1717
	第九十二章・裏：アメリカの賢人	1725
	第九十三章	1733
1741	第九十三章・裏：陽動作戦 前編	

第九十三章・裏：陽動作戦 後編

1750

第九十四章

第九十四章・裏：景より、怨、滲みて

1764

第九十四章・裏：シャーマンにして戦士

前編

第九十四章・裏：シャーマンにして戦士

中編

第九十四章・裏：シャーマンにして戦士

後編

第九十五章

第九十五章・裏：剣客風聞

第九十五章・裏：復讐言論

第九十六章

第九十六章・裏：ラーマと荒野を行く

1828

断章：甘やかな影の中で

第九十七章

第九十七章・裏：忘れ得ぬ郷愁

第九十八章

第九十八章・裏：米国乱れ舞い剣閃

第九十八章・裏：米国乱れ舞い剣閃

第九十八章・裏：米国乱れ舞い剣閃

第九十八章・裏：米国乱れ舞い剣閃

第九十八章・裏：米国乱れ舞い剣閃

18201812

1757

1836

1772

185918511844

1780

1866

1788

1875

18041796

後編

中編

前編

第九十九章	断章：暗殺指令	第九十九章：裏：皇帝立つべし	第一百章	第一百章・裏：酷い交渉術	第一百章・裏：鬼と武者、再び	第一百章	第一百章・裏：二凶騒乱	第一百章・裏：二凶騒乱	第一百章・裏：二凶騒乱	第一百二章	第一百二章	第一百二章・裏：逢瀬二人
前編	中編	後編	前編	中編	後編	前編	中編	後編	前編	中編	後編	前編

1981197319651957194819411933192519171909190018921884

第二百二章・裏：歪みを解くなら	第二百三章	第二百三章・裏：『師』の参戦	第二百三章・裏：『師』からの言葉	2013	第二百四章	第二百四章・裏：眠れぬ夜を	2028	2021	2052	2044	断章：神話大戦の前夜、ワシントンにて	2036	2052	第二百五章	第二百五章・裏：荒ぶる戦場の中で
1989	1997	2005	2005	2013	2021	2028	2021	2052	2052	2044	2036	2036	2052	2052	2052

2060

第百五章・裏：鬼の牙と武者の太刀

2067

第百五章・裏：平安の戦

第百五章・裏：危鬼決戦

第百五章・裏：危鬼決戦

第百五章・裏：危鬼決戦

第百六章

第百六章・裏：台無しの手

211521082098209020832075

新規マスター作成

皆さんこんにちは、ノンケです。

今回プレイするゲームは、ソーシャルゲームのオーパーツ（再現不可能という意味で）の Fate / Grand Order を原作としたゲーム『Fate / Grand Order』です。

ストーリーモードで主人公、藤丸立香の物語を追体験するもよし、人理焼却モードで『なんでこんなに人材少ないんだろう……』とか思いつつ必死こいて主人公のぐだ男君を粉砕するもよし。人理凍結モードで他のクリプター共を出し抜く為に陰謀を練るも良しの盛りだくさんのモードです。あ、マイルームモードで絆を結んだサーヴァントの皆と交流する事も出来たりもしますねえ!!

で、今回プレイするのはその幾つもの楽しそうなモードの中でも『四十九人目の候補生モード』です。藤丸君と共に、人理修復の旅路を駆け抜けるモードですが、恐らくこのゲーム内で一番デカイコンテンツでもあります。

このモードはキャラクターのメイキングの幅に定評があり、通常でも一般人から逸般人までクリエイトでき、DLCを入れる事で、光の巨人から某改造人間にまでもなれま

す。その結果、なんかヤーマムっぽいキャラを作ったのもいい思い出。

そしてこのゲームのもう一つの特徴として、あり得ない程の『IF』の可能性に分岐した特異点を巡る事が出来ます。

その特異点のIFはキャラクターの行動一つで大きく変わるので何度プレイしても同じ特異点で同じルートを巡る事は不可能、とまで言える程です。

そんなこのゲームで、今回挑戦していくのはDLC追加実績『鬼血の継承者』達成です。例によって超高難易度なので、プレイヤーの精神を保つためにRTAはせず実績達成狙いでエンジョイプレイしていきます。

さて、この実績について。キャラメイキングしながらこのプレイの具体的な内容についてお話していきたいと思います。

この『鬼血の継承者』はDLCで追加される生まれである、『鬼の混血』を選択してからスタートして、とある特異点の、とあるエネミー『サーヴァント』を倒す事で実績解除となります。

ただ倒すだけなら簡単では？ と思うこの実績、何がキツイかと言えば、はい。自分で倒す必要がある事です。もう一度言います。自分で倒す必要がある事です。

えー、ここで皆様もご存知でしょうが。一応お教えしましょう。普通の人間では文字通り千人束になるろがサーヴァントの足元にも及びません。

で、主人公が鬼の混血だろうと、そのサーヴァントのつま先によろやく這いよれたくらしいの差異しか生まれません。という事で、先ずプレイ内で最低でも一般サーヴァントにも勝てる程度の力を獲得する必要があるのですが……イヤーキついっす（素）

という事で、余りの難易度に私はRTAを断念し、堅実エンジョイプレイを目指す事にしました（素直）

とはいえRTAではないかと言って余り寄り道はせず、確実にホモ君を強化していくスタイルなので、見所さんには欠けると思いますが、その辺りは温かな目で見て頂けると幸いです……と。完成しました。

名前は当然ランダム……なんですが、『本造院康友』君とかいう、なんか何処ぞの魔性菩薩を思い出す名前になりました。召喚しろと？（半ギレ）

キャラは『エロ漫画で酒呑と共演しても違和感のない竿役ハゲ』を目指した結果、顔面で人を殺せそうなゴロツキハゲが出来上がりました。どっちかというと某如くの主人公レベルで迫力があるチンピラですね。顔の傷が恐怖でしかありません。

とはいえ酒呑の横に立って取り敢えず『ウス』って言うだけの樺地枠にはなれるレベルの迫力はある気がしますのでセーフという事で。

で、ここからは属性。及び特殊能力と能力値を決定していきますが……先ずはプレイ上一番やりやすい『混沌・中庸』に属性を設定。

その上で特殊能力を取っていきますが、このゲームのルールとして、基本的にプラスの能力を取ったらマイナスの能力を取る必要があります。型月世界に完璧な人間は存在しない。基本的には相性ゲー。某あかいあくまの言うとおり、完璧な存在は無く、あらゆる存在はちやんと欠点が存在しているのです。バランス重点。

その上で、先ず獲得するプラスの特殊能力は『偶の本気』です。この能力は特定の能力を使うと自動発動するもので、その能力が発動している間、クリティカル威力が大きいく跳ね上がります。このプレイで目標を達成するのに基本的にクリティカルに頼る事になるのでこの能力を上手い事活用する必要があります。

で、その代わりにマイナス能力を獲得しないといけないのですが、そこは型月ゲーム。長所は選ばせてくれますが、一番ケアしたい弱点は決して選ばせてくれません。流石の鬼畜仕様。とはいえこのモードを遊ぶ以上は通らにやならん道ですので。

さあ、決定ボタンを押してマイナス能力、何が来たか！ 『平和主義（偽）』!! うん!! クソ!!!

……『平和主義（偽）』は、武器の使用等に制限の付くマイナス特殊能力です。つまり戦い方がステゴロ限定になります。つすうううううう……ただでさえ厳しい実績達成条件だというのに、強力な武器でのブーストが難しくなりました（半ギレ）

嘘やん、サーヴァントの皆様を前衛にして、弓とかで遠距離からリスクを減らしつつ

確実に始末する予定だったというのに……これじゃ台無しだあ（震え声）

という事で速攻でプレイ方針変更です。本来なら安定プレイをする予定だったというのに、まさかこんな鬼畜スキルを引く事になるうとは……流石型月ゲー、そう簡単に攻略をさせてはくれない模様ですね。

——しかし、再走は致しません。こうとなれば、新たなチャートを自らの手で構築するしかありませんし。こうなつても『鬼の混血』スタートであればまだギリギリで立て直せる範囲なのがあるがたい。

『鬼の混血』は、発動すると自分のステータスに大きくブーストがかかる覚醒系の特殊能力である『鬼種の魔』を最初から持つて生まれてくるのですが、そのブースト幅は、ちゃんと鍛えればサーヴァントとある程度渡り合えるようになるレベル。余りの強さにデメリットを元から内包してバランスを取っている程に強力なプラス特殊能力です。

とはいえサーヴァントと殴り合う事が非常に危険な事にはありませんが……安定扱が潰された以上は仕方ありません。コレを最大限生かして殴り合うしかないでしょう。

で、もう一つ特殊能力を取れるのですが……ここで出来るだけこの先の安定を取るためにこの『嘗ての誓い』を取っておきます。このスキルは、基本的には役に立たないのですが万が一の場合に役立つ、言わば保険のスキルとなります。詳細は後のプレイ内で

説明する機会があれば。

で、その代わりに取るマイナスのスキルを決定しましょうか……『軽薄』ですか。まあまだマシな方なのでしょう。このスキルは、バトル開始時に相手の攻撃力が上がり、防御力がちよつとだけ下がります。一応デバフスキルとして使えない事も無いのですが、基本的に相手の攻撃力の上昇率の方が高いのでまあ……って感じで。

取り敢えずは、特殊能力はこんな感じですよ。

残ったのはステ振りですね。

このゲームにおけるステータスは、基本的に型月のステータス準拠です。筋力、敏捷、耐久、幸運、そして魔力……ではなく、『神秘』というステータスが存在します。

神秘は、上げれば上げる程、『鬼種の魔』等、特定のスキルの出力が上昇したり、魔術を使うキャラなら、使える魔術や、その質が上がっていきます。魔力の量も、この神秘ステータスに準拠します。

まあ要するにホモ君にとって一番重要なステータスである事は間違いないので……取り合えず全ての初期ポイントを敏捷に振り込みます（矛盾精神） 今外野から確実に『お前クリアする気あるのかよオ!?』とヤジが飛んできそうな事をしましたが、一応理由があるのです。ちゃんと。

確かにホモ君にとっては神秘が一番安定するステータスではあるんですけど、最序盤

において戦闘系マスターを製作するのにまず全力で上げなければならぬのが敏捷なのです皆様。

まあどうしてか、と言えば。このゲーム、敏捷が早いキャラから行動順が決まるシステムなので、雑魚より早くないと雑魚に撲殺されます（半ギレ）そして、このゲームの最初のステージは普通に難易度それなりに有るので遅いと死にます（確信）

という事で、まず最初の特異点を生き残って経験値を稼ぎつつ、後のモンスター相手にもある程度先手を取れる数値を取るために、最初のポイントを全て敏捷に注ぐのは戦闘系マスターでは基本となっています。

いえ、最初に逃げるかどうかの選択位は出来るのですが、戦闘系マスターを組みたいのであれば経験値稼ぎは必須なので。

——と、こんな感じで、一応キャラクターの構成が完了しました。

『滅多に本気を出さず、平和主義（偽）を掲げた過去に何かしら含みのあるヘラヘラ系足腰超つよつよ（人間基準）男子』となっております。成程ですね。いや濃過ぎい!!!（嘆き）

どうしてこうこのゲームのキャラクターは最終的に家系ラーメンの如く濃いキャラクターが出来てしまうのか。型月に味の薄いキャラクターなんて出来ねえだろオがぁ!? という制作人の熱い思いが反映された結果なのでしょうか。

まあ濃いキャラクターじゃないと、醬油がぶ飲みレベルの濃さを誇る型月の住人相手には埋もれちゃうから仕方ないね……という事で、このキャラクターで人理修復、駆け抜けていきたいと思います。

対戦、よろしくお願いします。

第一章

はい、よいスタート（棒読み）

という事で、初期スタート地点を確認……するまでも無く山ですね。はい。『鬼の混血』を生まれを選択していると、生まれは日本の、山中の一軒家に固定されます。やっぱり鬼はYAMA育ちって相場が決まっているのでしょうか。

ん？ 家族？ そんな物、ウチには無いよ……まあこのゲームで親無き子なんていうのはよくある事なんで流していきましよう。
で、ここから何をやるか。

このゲームは基本的に計画フェイズ、準備フェイズ、実行フェイズ、場合によってバトルフェイズ等を挟んだりして、それらで一つのサイクルを形成しています。そして、最初の計画フェイズでは基本的にどこのエリアに何処のキャラを送り込むかを決定します。そこでどんな行動を取るかも選択できるのですが、今は選択肢がないのでニューtralで。

次の準備フェイズは、今の所活用できるだけの事が無いのでスルーします。

そして特に何も無い、ニューtralな状態でそれを行うと自動的にそのエリアをホモ

君が探索し、アイテムなんかを見つけてきたりします。このように、エリアにキャラクターを送り込んで様々なアクションを起こすのが実行フェイズです。

で、今回の実行フェイズの結果は……お、これは『ボロい筆』ですね。『触媒』を発見して来ました。

『触媒』と呼ばれる類のアイテムは消費する事はなく、英霊召喚……味方を増やす際に特定のサーヴァントを呼びやすくなる効果があります。

完全ランダムだと万が一コナンの犯人の親戚みたいな人を呼んでしまった場合、このゲームは早くも終了ですねとなってしまいうので危険です。少なくともそうならない様に偏りを作る触媒は当たり系です。

とはいえこの様に筆とかだと、作家系サーヴァントを呼ぶ確率が高いです。作家系サーヴァントはサポートにおいて優秀なのですが、前衛を任せられるか……となると非常に苦しいと言わざるを得ず。やはりホモ君も前線を張るしかない模様です。哀しいかな（諦め）

いえ、そうなると半ば想定してステ振りをしているので大丈夫ですけども。

それは兎も角。実行フェイズを終えようと、経験値が入ります。実行フェイズで何をしたらによって増減はしますが、基本的に一切経験値を得られない、という事はありません。全ての行動を糧とする、人間の鑑みたいな主人公だア……それくらいじゃないと人

理修復なんてクソみたいな任務熟せないってそれ。

という感じで取り敢えず一サイクルは終わり、コレを三回繰り返して一日を終了するのが基本です。例外も当然ありますが、まあそれはおいおいという事で。

でまあ何の変化も無いサイクルこなしを映しても変化がないので、レベルアップ迄バツサリカットし、レベルアップしたモノが此方になります。序盤は素早さ重点の方針は変えずにレベルアップで貰ったボーナスポイントを全て敏捷に振っていきます。

で、カルデアに連れていかれるまでは兎に角、出来るだけのレベルアップを目指していきたくない訳なんですけど。こうなってくると山スタートは恵まれている方ですね。

このゲームにおいては様々な初期スタート地点が存在します。時計塔の名家だったり、深い森の奥で獣に育てられてたり、試験管スタートだったり。その中でも山、しかも単独スタートは難易度は高めのスタートです。

型月の山は、『山』と『YAMA』に分けられ、単独スタートは基本的に『YAMA』である事が多く、野生のケダモノが元氣よく襲い掛かってくる……あ、行ってる傍からですね。探索してたら猪君とエンカウントしました。

YAMAのケダモノは基本的に馬鹿にできません。本来カルデア入りしないと出ないレベルの敵がホイホイ出てきます。

こんな奴らをマトモに相手してたら命がいくらあっても足りませんが、ここで極振り

しておいた敏捷値が活きてきます。

ここまで敏捷値を上げて置けば、例えYAMAスタートとて十分に逃げられない可能性を潰す事が出来ます。自然の驚異に無理に逆らつてはいけないうてハッキリ分かんだけ。

そして敵わない敵から逃げるのも立派な作戦、という型月のリアルが反映され、戦闘から逃走しても経験値がちゃんと入ります。その強さに応じて経験値は当然の様に増えていきます。

バトルに勝利した時の経験値と相対的に見れば僅かではあります。

しかし、初期のこのレベルであれば十分にレベルアップに貢献できるレベルの量があります。最初は無理をせず、逃げてでも生き延びてある程度レベルを上げる、というのが基本な訳ですね。

で、こうしてレベルを上げていると……ああ来ました。町に行けるようになりましたね。通常スタートなら初期マップの町ですが、カルデアに行くまではここで追加の経験値を貰えるクエストなどを受けます。当然クエストを受けて行きましょう。

取り敢えず山で受けられる依頼を全て受けて、でもって速攻で町から離れます。全力です。もう街には近寄りません。

どうしてそこまで町から逃げるのか、文明が嫌いなのか？ 野生児か？ と思う方も

いらつしやるでしょうが、しかしながら、この行動をするのにもちゃん理由があるんです。

『オイ、小僧。チョイと待て』

あ、早速話が出てきましたね。雷牙お爺ちゃんにも負けない程の迫力をした、一見ヤクザか？ ん？ とか思うこのお方なのですが……町内会長です。もう一回言います。優しい町内会長です。

まあ型月では良くある事で、絵付きのキャラは基本的にアホほど濃いです……じゃなくて、今注目すべきは此処ではありません。この後です。

『最近、怪しい余所者が町に入って来ておる。気を付けておけ』

来ましたね。探索ではランダムに誰かと遭遇して話を聞くことがあります。会話の内容は様々で、サブイベントやメインの状況などの進行具合を聞く事も出来て、今はメインに繋がる話を聞く事が出来ました。

不審者、とは言っています……間違はなくカルデアからの刺客ですね。

このモードで自キャラがカルデア行きになるきっかけなんです、拉致監禁なんですよ。カルデアって……そんな容赦なかったでしたっけ……？ でも自キャラが分かりやすくカルデア入りするにはそれくらい無理矢理の方が宜しいと判断したのでしようか。

で、問題はこの人達に、何時カルデアに連れていかれるか、です。

この自操作キャラがカルデアに連れていかれるトリガーは、『町』を何度か探索する事で起動します。町をうろついていると、謎のカルデア黒服メンバーの皆様が全員で操作キャラを包囲し、何処かへと現れて連れて行くという割とホラーな演出で回収されていきます。

しかしこの条件には穴があり、『町』に居なければカルデアへの強制連行執行が始まる限界までは時間を稼ぐことが出来ます。その間にレベルを上げなきゃ……（使命感）

という事で兎に角山です。山にこもるのです。馬鹿程山を探索し、少しでもレベルアップしてその数値を今は全て、全て敏捷値に！ カルデア入りするまでは全て敏捷値です。

まだ上げられる……まだっ……まだっ……あつ待つてください、カルデアの皆様、早いです！ 山まで来るのが早い！ う、うもうっ……（強制拉致）今の所、全てのレベルアップの数値を敏捷につぎ込みましたので、それなりの敏捷値には仕上がっています。

とはいえ、特異点Fの難易度からは考えて、絶対に安心とはいかないレベルでしかないのが……いえ、ここで弱気になるのは失敗の元。ここは強気に、カルデアフェイズへと進むとしましょう。さらば、短かったが我が故郷よ……

第一章・裏：山に棲む少年

——この季節になると、獣共が降りてくる。

目覚めから、丁度飢えてくる時期なんだろう。人里に現れて……悪戯ならまだいい。町に住んでる奴に被害を齎したら洒落にもならない。普段からも忙しいというのに、更に忙しくなるのだから、プロに任せてしまった方が良いと思うのも、当然だ。

……プロ、というには、少々と若すぎる輩も居るが。

「おう、坊主。来てくれたか。待ったよ」

「呼び出すなら電話の一本でも寄こしてくれよなあ、爺ちゃん……こちとら、今日の夕飯豪華にしようって野菜とか張り切ってたさあ」

「お前以上に、あの山に詳しい知りあいがおらんのだ」

「あつそう……へへ、そう言われちゃやる気になっちゃうんだ、これが」

ドカツと些か乱暴に椅子に腰を下ろす。まるで極道の鉄砲玉の様な厳つい見た目をしておいてこの男は酷く呑気だ。今、目の前で机に置いてある菓子をどうでも良さげに齧っている辺りで、何となく察する。

生意気盛りだろうに、そんな生意気らしさも無い。もう少し、スジモノらしい気合い

と熱が欲しいと思つてもバチは当たらんだろう。

「今年の山の具合は、どうなんだ？」

「どうなんだつて言つてもなあ。山全体を見れてる訳でもないし？ そんな正確な意見出せつて言われても無理だつていつも言つてるじゃんか」

「だがこんなでも、頼らないよりは大分、大分マシなのが、頭に来るといふか。伊達にあの山に住んでいる訳じゃない。」

「それでも良いつて言つてるのも何時のもの事だと思ふんだが？」

「あー？ そうだっけか？」

「いい加減にしろボウズ。こつちは生活掛かつてんだ。お前のおふぎけに付き合つてる暇はねエ。さつさと言えつてんだ」

「おおこわ……へいへい。じゃあまあ所感で宜しいなら、と」

決して真面目な様子を見せないのは、別に真面目にやる必要も無いと思つたからか。こやつがこの町に来てから、ずっとこの調子で。

正直それでも問題ないと分かっているのが余計に小憎たらしいと言えば小憎たらしい。

「まあ、よかあねえつすわ」

「良くない」

「いつもより大分気が立ってる。俺がちよつと見回つてただけで、こつち突つ込んで来る奴も結構多かつた。面倒くせえつたらありやあしねえ」

「そこまでか……人里には」

「降りてつたら、まあ、エライ事態になるだろうな。間違いなく」

「回答に淀みはない。虚勢を張っている様子もない。体はリラックスしたまま。常に自然体で話をしてる。そこから虚飾の色は全く見えない、つて事を読み取るのは容易い。」

あくまで事実を陳列しているだけだと言わんばかり。随分とふてぶてしい貌をしてやがる——その上で。もう一つ。

「……降りて行つたら?」

「うん。そう。降りて行つたら」

違和感を突けば。

待つてました、又は、良く出来ました、とばかりに笑う。わざわざその下りを強調したのは恐らく。気づいて欲しかったからこそ、露骨にしたのだろう。こうやって、相手をおちよくつたりするのも、基本的に真面目に事を進めたがらないこやつの性分からか。

「降りない、のか?」

「降りない、って言うよりは降りられないって感じだろうよ」

「どういう事だ。この時期になれば多少なりとも荒れると言っていたのは……」

「俺だけだ。今回は例外って奴だよ。怯えてるんだ」

「怯えてる？」

それと同時に……コイツが余程気にして欲しい部分でもあるのだろう。そう言う所をさりげなく、というやり方が出来ないのは、まだまだ若い部分でもあるが。だがしかし今回は何というか。いつも以上に露骨と言えば露骨か。

「興奮してるって感じじゃあなかった。警戒して、必死に追い払おうって言う感じだった」

「そうなのか」

「ああ。興奮してるならいつも以上に理性的じゃあなかっただろう。だが、今日の山は人生に一度レベルで……暴走して居た気がする」

「暴走？」

「感情に従ったんじゃない。決して。感情に振り回されてたって感じだ」

——言い方としては似たような物に聞こえるが。

少しばかり真剣になったような感じの坊主の顔からは、そんな……汲み取って欲しい、という表情をしてやがる。寧ろこれは……分り易いくらいだ。

「山に入らない限りは安心だと思ふ……ま？ 断定は出来ないがな」

「そうか。そう言う事なら、獵友会とも話し合う事も、少なくて済みそうだ」

「お役に立てましたかね？ ご老体？」

「おう。参考になったよ。町の奴らにも、暫くは山に入らぬ、入らせぬように徹底するよ
うに固く言つておく。任せて置け」

「……ありがと。爺ちゃん」

恐らく、その辺りを望んでるんだらう、つて事を強めに口にしてやれば。奴もその表情を少し緩めた。恐らく、ここに来る前から、こういう会話になる事は想定していたのか。

だがそれでも結局は真剣な顔を隠せない辺り……そして、その真剣な部分を出さない方がカツコイイ、と考えている辺りはまだガキ、という感じはするが。

「じゃあまあ俺はこれで失礼するよ。用も終わったる？」

「オイ、小僧。チョイと待て。もう一つある」

「なんだよ」

「最近、怪しい余所者が町に入つて来ておる。気を付けて置け」

「……よそ者つて。時代がかつてる言い方してんな、爺ちゃん」

「儂とて普通に町に来る奴をその様には呼ばん……害にしかならんと思つてゐるからこ

ういう言い方をしている」

ガキだからこそ。こういう時はしつかりと注意しておかねばならん。思い出すのは山の事と一緒に話題に出ていた、不審者の話。町の奴らが見かけるようになった輩。服装自体に特に怪しきは無いのだが……どうも、態々町の外から、何日か間隔を開けて、何度も来ているらしい。この街にも宿位はあるのに、だ。

タクシーの運転手が、念のために、と話していた事だが。酷く個人的な、老人の勘らしきものが、働いていたのだ。

「ほーん。不審者って奴？」

「そうだ。とはいえ見分けが付くかどうかは分からん。夜には迂闊に出歩かぬようにとだけは町の奴らにも周知している。お前にも、一応な」

「ま、本当に一応だな。俺は基本的に御山でのんびりしてる訳だし」

「つつても偶に降りてくるだろう。暫くは直ぐに帰るようにしろ」

「へいへいっと。お節介な爺ちゃんだねえ」

……正直な所。儂だつて明確な根拠なんて無い。

だがこの町は特に何か名所がある訳でもない。一応、北の天神様の分社があるがそれが観光の名所なんて呼べるかどうか。それが態々、何日か空けて、なんて言う面倒な真似をしてまで幾度も。つて言うのは。

「もし面倒が起きたら儂の責だ。それは避けたい……お前は知らぬ顔でもないからな。一応、忠告はしておいたぞ」

「大丈夫だよ。こんなおつかない見かけの奴を攫う物好きなんて居ないだろうし」
「世の中、常識で計れる事ばかりじゃあない。一応気を付けておけ」

正直な話。小僧が言う事を聞くとは思っていない。まだ若いからこそその無鉄砲。無理、無茶。当人に自覚はない。こういうのは言っておくのが肝要なのだ。

「へいへい。じゃあ精々気を付けさせてもらおうけどさ」

「……けどさ、なんだ」

「あの御山の獣共に比べたら、大抵の事はそんな大変じゃないよ。うん。全然」

——そう言つて立ち上がる背には、自信があつた。

その自信は……しかし、一切の根拠もない虚構、という事も無いだろう事は、分かる。小僧にとつては、今も住んでいるあの山の方がやつかい極まりないだろう。そもそも、自分であの山を管理したくてしている訳ではないのは間違いない。

初めてあの山に越して来た時の話を、今でも覚えて居る。それ程に、あの小僧の表情というのには酷いものだった。

「……管理をそもそも考える積りも無いクソの如き山か」

そもそもの話。あの小僧はこの町の人間ではない。元は別の都市に住んでいたのが、

あの山の管理の為にここに越して来た……たった一人で。

それが一年、それに加えて半年ほどか。正確な時間は分からないが、その間ずっと山の中で暮らして来ていた。苦勞する様子も見せなかったのは不思議と言えば不思議だった。

『どうもどうも。この度、あの山のボロ小屋に引つ越す事になった者です。まあ頼りない管理人ではございますが……そう言っても、やりたくて来た訳じゃありませんのでその辺りはご容赦頂ければ、と』

そう言った時の苦々しい、小僧の顔は忘れられん。無理矢理余所行き of 笑顔を、パイ生地のように張り付けてその下の明らかに、『ふざけるな』という恨みと憤りを忍ばせて。それも若さだったのだろう。不満を決して隠し切れないその態度は。

「ま、足腰は山の仕事でイヤって程鍛えられてるもんでね。逃げるだけならそう難しくも無いでしょうよ。山育ち舐めちやいかんよ町長さん」

「……自分が山猿みたいな育ちしてると言いたいのか、お主」

「山猿はちよつとヒドイ言い方だなあ……ま、劣ってるつもりもねえけどさ」

今、目の前に居る剽軽な若造とは、似ても似つかぬ。山にやって来てから少しはマシになった、と思ってしまう程に。来たばかりのアイツは——

「他になんかある？」

「いいや、特にはねエよ」

「あつそ。なら今度こそ帰らせてもらうけどダイジョーブ？」

「構わねえ。くれぐれも、さつき言った事忘れんじやねえぞ」

「……うん、ありがとうな。爺ちゃん」

——いいや、あんまり嫌な過去を思い出すのは止めよう。

少なくとも、ここに来た暫くで、漸く此奴は、こうやつて屈託なく笑えるようになってんだ。掘り返しても、ロクな目に会わねえって言う話だ。

彼奴がここに来る前、どんな目に会ったか、なんて。それこそ、お節介つて奴だ。

第二章

カルデア行きにされる実況、はい。よーいスタート。

目が覚めたら、そこはカルデアだった……はい。という事で黒服君に連れていかれた所からの続き、場所はカルデアの廊下です。やっぱりFGOと言えば廊下からのスタートって相場が決まっていますからね（いない）

とはいえ流石に藤丸君のようにレムレムしている訳ではありません。ちゃんと意識がある状態からスタートです。で、計画フェイズ……出ました。カルデアの地図。

行けるエリアは……当然のように廊下だけです。取り敢えず廊下を探索しろハゲって事なんでしょう。はい。実行フェイズで、探索成果が出ました。出たのはカルデアの他施設ですね。廊下を探索して色んなエリアを見つけた模様です。

そして、そのままイベントフェイズが開始されました。基本的にカルデアを最初に探索した時はカルデアの全体的なマップ把握が終わった後はスムーズにイベントが進行するように（余計な事をされない様に）案内役の人がブリーフィングに案内してくれるのです。

流石F.G.O、我々奏者の動きを良く分かっていらつしやいます。

『——お、漸く見つけたぞ』

このふくよかなフォルムは……ムール貝さん！ 新所長に名前を覚えてもらえないムール貝さんじゃないか！ ぐだーずを連れて行くのがマシユ、んで他の主要メンバーもほぼぐだーずとの運命の出会いで忙しいので、一般職員の中で一番動かしやすい彼が基本的に新しい主人公達を案内してくれます。

因みに最悪のアンラッキーを引くとレフが案内してくれます。特に何か差異がある訳ではありませんが、ムーニーマンさんと違って非常にムカつきます。それだけです。で、そんなどうでもいいことはさておき、その間に発見した施設なんかの解説をしてくださるのですが、取り敢えずこの辺りは後で、施設を實際使う時に自分でやるのでスルー。一気にブリーフィング迄行きましょう。原作イベントが近いですよ皆様！

という事で見慣れたブリーフィングルーム。
ああ。白い髪の可愛らしい女の子が居ます。ロード・エルメロイ二世の君はあんなに幸せだったのに……皆大好きオルガマリー・アニムスフィア所長です。天体科の才媛、アニムスフィアの御令嬢で、このカルデアを取り仕切る、ちよつと自信ない系虚勢お嬢様です。

『一人欠員が居るみたいだけど』

『どうやら遅れている様だね。もう少し待とうじゃないか、オルガマリー』

その可愛らしい女所長の隣にいるモジャモジャしてるのがレフ・ライノール。彼女の右腕としてカルデアで辣腕を振るっている才媛です。優しそうに見えますね。うーんコレは裏切りとかしないタイプ（確信）

このカルデアは、目の前の二人によって管理、運営され、人類の存続を保証する為の任務に就いています。凄いいお似合いの二人ですね。この二人に運営されるなら盤石だな!!

……凄いいんでも良いんですけど、カルデアの白い制服、馬鹿程ホモ君には似合ってますね。うーんカラー変更後でしておきましょうか……あ、カルデアの礼装はある程度色を弄れます。こういうのもキャラクリモードの醍醐味ですよ。

『すみません！遅れました!!』

つと、来ました。この大事な大事なブリーフィングに遅れてくる呑気な奴と言えば、世界広しと言えどただ一人。え……あ、どうやら性別はぐだ男君の方みたいです。因みにこのゲームではぐだの性別は完全ランダムです。どっちのぐだーずにもちゃんと利点があるのでそれぞれの攻略チャートをしつかりと構築しておきましょう。

で……この後なんです。原作通り、遅刻した藤丸君が怒られて、この部屋から退出させられて、でもって自分の空き部屋に案内されて、という原作の流れが展開されてい

きます。

まあ原作通りの流れなのですが……このまま行くと普通にホモ君も死んでしまします。ですがご安心を！そこは元一般人のホモ君です。こんなバカみたいな専門話聞いて起きて居られる訳ないと思うんですけど（名推理）

話が始まって五分で居眠り判定、即退出ですよ。いやー流石現代の若者。因みにどんな主人公を作ってもこの流れは変わりません。一体どれだけ呑気だというのか……

しかしホモ君には一緒に付き添ってくれるカワイイ後輩はいません。自分の手で取り敢えず自分に割り当てられた部屋に向かいます。マップに追加された『マイルーム』にホモ君を割り当てて……計画フェイズを終了。で、実行フェイズ。

ここに来て、漸くマイルーム機能が解放されます。マイルームの機能はFGOと殆ど同じ感じですね。

まあそれは兎も角。ここでイベントが挿入されます。

震えるカルデア！緊急事態のサイレン！親の顔より見たカルデアテロの始まりですね。この時点でエリートな皆様はほぼお亡くなりになっていると考えて行動しましょう。ほぼ、お亡くなりになっているので。

で、ここでの行動如何によつては、特異点Fに乗り遅れたりする可能性があるのですけれども……行くに決まってるんだよなあ!？（奔走）

エリア一つ探索するだけでもチュートリアルとは経験値の量が変わってきますからね。ガンガンレベルを上げて、一刻も早く混血らしい力強いプレイが出来る様になりましょうねえ。

イベント終わり次第、計画フェイズで『カルデアスルーム』を選択。ホモ君を送り込みましょう。乗るしかない。このビッグウェーブに。

で、ここでカルデアを駆けるハゲと合流するのが、先程追い出された友達の藤丸君とそして……このオレンジ紙のポニテ優男。

『——君は!?!』

ホモです（名乗り）

冗談です。この人はみんな大好き、Dr. ロマニ。夢女子製造機とも言います。藤丸君と一緒に彼のマイルームでサボりを敢行していた肝の据わったお医者さんです。一応医療関係のトップらしいのですが、全然見えませんね（失礼）

そんな事はどうでもいい。イベントは進み、いよいよ……うわあ。

全面画面が真っ赤、大炎上が大変、目に優しい状況です。い、一体誰がこんなひどい事を……!!（迫真）レフ教授は！レフ教授は無事なのか!!（迫真）オルガマリー所長は!!（真・迫真）

んまあこんな地獄みたいな状況で誰が無事で済むというのか。普通の魔術師は数十

回殺されても新たなBB素材と共に蘇る810みたいな事は出来ないので。

『……しつかり、今助ける……!』

そんな中でも自分の運命を見つけ出す主人公の鑑。中心で大変な事になってる薄幸っぽい少女に向けて一直線。あの浜風のようなHOT GOGOこそ我らが後輩、マシユ・キリエライトちゃんです。初対面が巨大な瓦礫の下に挟まれてる所なんて、これは刺激的な出会いだなあ……(すつとぼけ)

まあそんな藤丸君を、ロマニが避難するように促すのですが、それを素直に聞くなら主人公である訳もなく。

何が凄いつて、藤丸君つて助かるつて確信があつた訳でもないのに、この状況下でちよつと話しただけの女の子の傍に居て、手を握るつていうのを躊躇わらない事ですよ。主人公かよ……(賞賛)

そう言う先輩だからこそマシユちゃんも……あ、すみません語り止めて実況に戻らせて頂きます。はい。キモかつたですね。

で、最大の問題はホモ君がここでやる事が無いという事です。じゃあ何のためにお前ここに來てるんだよお前よオ!? だつて下手になんかこの美しいシーンに割つて入るとか、百合に挟まるレベルの重罪なので。仕方ないね。

まあとはいえ、探索結果が出る辺り、何かしていたのは間違いないと思うんですけ

ども。まあ成果が出なくても仕方ありません。イベントを起こす為の行動なので。

という事で、何時ものレイシフト画面です。その文字が青いのは原作順守。

さて、ここから先は魔の巣窟たる特異点F。幾多のRTA奏者がガバ運を發揮し轢殺されて来たチュートリアル相当のワールドです。チュートリアル相当でも容赦なく確殺取ってくるのが型月ゲーの恐ろしさで、最近のゲームの様な甘さは一切ない。ハッキリわかんかね。

まあそうならない様にホモ君のステータスを調整して来ましたが、さてそれがどれだけ通用するか……もしバーサーカーとかにうっかり遭遇して千切られたりしたら笑ってやってください。

さあ、特異点Fへ、いざあ……♂!!

第二章・裏：焰の中で笑う男

「——一つ聞きたいんですけども」

「どうした？」

「俺って誘拐された割には結構、こう……厚遇されてるつすよね。どういう事なんで？」

「……まあ、それに関しては、事情がある。正直勝手な事を言ってるとは思……が。あんまり喚かないな」

目の前の少年は、一応ハイスクールに通っている年なのだという。絶対嘘だと思うんだが。こんな気合入ったパンピーが居るか。多分単純な迫力だけならウチの誰よりも凄い。ベリルの奴も独特の凄みがあるつちや有るが、それとは違う。見かけの圧力だけならばつちぎりだと思う。

というか、どうしたら、そんな顔に三本の獣傷……いや本当に、漫画みたいな傷を作ってる高校生が一体何処にいるってんだ。しかも、いきなり連れてこられたってのに、ちよつと困ったような顔するだけで、大人しいもんだ。

「……こつて、外で人が生きてられる？」

「いやー、外見れば分かるけど、無理だよ」

「でしょ？ 地理もクソも無い、外は一面真っ白。そんな場所に出されたら現代っ子の俺は死にますよ。ここまで絶望的だと……もう運命とか感じちゃって。ねえ？」

いや、普通は取り乱してそれどころじゃないじゃないと思うんだが。ガチもガチになるとこうなるのだろうか。人間、あんまりにも現実離れした事が起きると、それを夢だと認識するみたいに。いや、違う気がするが。まあ、取り乱さないなら話は早い。

「一つ確認したいんですけど。俺って帰してもらえんんですか？」

「あー……任務が終われば帰してもらえるし。多分君はあんまりやる事は無いと思うよ」

「ええ!? じゃあなんでわざわざこんな所まで連れて来たんですか？」

「補充要員、って言ってたな」

曰く。世界中から集めて来た、この任務の為の人材が万が一……ダメになってしまった時の為の、保険の保険の保険。そのレベルで普通に人誘拐するって辺りが、魔術師の人でなしぶりを証明してると思う。

というか、俺がコレを言わないといけないのが、色々辛い。何も知らない一般人相手に『お前は補充要員として無理矢理に連れて来たんだ』とか。なんで言わなきゃいけないのか。

「ほ、補充……こりゃあなんとも酷い扱い」

「まあ念には念を入れる程、重要な任務なんだ……って言うのは言い訳にならないか。悪い」

「そうだぞ、だからお詫びに馬鹿みたいの高い肉奢ってくださいよ。出来るだけ分厚いゴッツイ奴で、マツシユポテト付けて、ニンニク醤油で」

「……本当は余裕だろ」

とかいう気遣いは全く必要ないのかもしれない。

もしかしたらナイーブになっている可能性もあるかもしれない、とか思ったけどマツシユポテトに、ソース迄指定してくる辺りは完全に余裕があるようにしか見えないのは気のせいじゃないと思う。

「さあてね……それで、お兄さん。ここってなんの場所なんです？ 実験場？」

「なんで実験場」

「いや、こういう菌一つない、って感じの真っ白な施設ってそう言う……実験施設的なイメージがあります。映画とかでよくあるじゃないですか」

「あー……あるっちゃあるな」

なんかそう言う系の、バイオ的な映画で見た事はある。自分の専門のジャンルじゃないが一応は話題の映画とかは、一オタクとして確認はしている。オタクという程、深みに嵌ってる訳じゃあないが。

「まあ、大丈夫だ。そんな事を目的とした組織じゃない」

「へー……じゃあ後は……世界を救う、組織とか？」

「――」

それは恐らく、やっぱり創作の世界のイメージで言ったんだろう。

「良く分かったじゃないか、正解だ」

「……へ？」

「ここは、世界を救うために作られた最後の砦、って奴だ。チープな言い方すればな」

だが、その荒唐無稽な想像こそが大正解。

人理という、人間の描いてきた歴史。人の存在を保証する、最も大切な情報。それを守るために設立されたのが……この人理保証機関、フィニス・カルデア。世界を救うつて言う余りにも分かりやすく、そして子供の夢みたいな目標を叶えるために、馬鹿正直に戦力をかき集めている。

「……俺、その為に連れてこられたんですか……？」

「ああそうだ。ちよつとはビックリしたか？」

「……何っーか、啞然としてます」

流星に、さつきまで堂々としてたBOYも、度肝抜かれたみたいで。びくびくと顔が引き攣っている。世界を救うなんてそんな目標に関われ……って、言われた時は同じよ

うな顔をしたと思う。自分の顔は全然見てないから想像なんだけども。

「俺で、良いんですかね。正直、そんな高尚な目標なんて……あー、いや……面倒、つてわけじゃあ……ないんですけど」

「そりゃあそうだな。まあでも、俺から言える事があるとすりゃあ……不躰かもしれないが気を抜いて、楽に居る事だな」

「誘拐された先で？」

「そうだ。俺にはお前を逃がす事も出来ないし……まあ、せめてものアドバイスだ」

まあ、そもそもな話。化け物みたいなメンバーが揃っているのだから、やる事もクソも無い。覚悟しないで飯を食ってるだけなら、心が削られる事も無いだろう。

「さつき補充要員って言われてたけど、正にその通りな訳ですかい?」

「そうそう。だから気軽に、気軽に。上手い事やっていった方が良いぜ。ボウズ」

「随分な言われようつすね。つたく、俺は好きでここに来た訳じゃないんですけど。最初っから使命に励むもクソも無いけどな」

「そっか。なら心配いらん。任務が終われば、おふくろさんの所にも返してもらえるさ」

記憶を消して、という枕詞は付くが……カルデアは、魔術協会の様な過激な組織ではない。神秘の秘匿の為に処置はするが、基本的に一般から連れて来た奴らは、ちゃんとお家に帰すように、とは所長の方針だ。

曰く『一般の奴らを処理なんて出来る訳ないでしょう!! 殺した奴の責任なんて負えないわよ私には!!』との事だった。

「——あー、それは、えつとお」

「なんだよ。心配すんな。キツチリ返すから」

「いや。俺は……その、なんだ。とつくに天涯孤独、擬きみたいなものだよ」

……その言葉で、悟った。

此奴がここに連れてこられてきたのは、恐らく素質もあるんだろうが。それ以上に。連れてきても、後に問題が残りにくいという結論が出ていたからか。つたく、カルデアは比較的マシとは言え、やっぱり人道的とは、口が裂けても言えないか。

「……なんだ、悪かったな。変な事聞いて」

「いやいや別に。まあ、お家に帰してもらえるなら……若しくは」

「若しくは？」

「やる気が無くても構わないなら、ずっとここに置いて貰う、って言うのは、アリなんですかね？ お兄さん？」

それに関しては、即答する。

「……馬鹿。無しだろ」

「そうかあ……へっ、世知辛いな」

世知辛いというか。正直、こんな場所に残りたいなんて、自殺行為だ。魔術に関わつた奴の末路なんざ、ロクな事にならない場合が多い。俺がそうならない……つて言う保証もないがしかし、そうならないようにするコツくらいは知ってる。

でも此奴は一般から無理やり連れてこられたんだ。クソみたいな世界に関わつて、悪い部分に染まらないという保証は一切ない。

善人つて訳でもないけど。流石に自分からろくでもない世界になんも知らないパンピーを引き摺り込むのはちよつと、とは思ふ。冗談だというのは分かっているが、一応強めに言葉は吐いておく。

「帰る家位はあるだろうよ。大人しく帰れ。誘拐犯と一つ屋根の下に住む気か？」

「うわ、その言い方……いや全くそうなんですけれどもね？ まあ、そんな美味い話は無いって事かねえ」

「そうだよ。世間は冷たいのさ」

「へいへい。大人しく暫くのバカンスだと思つて楽しめますよ」

若い奴つて言うのは、どうにも無鉄砲な真似をしたがる奴が多いと言うが。だから、一瞬本気じゃないのか、と思つてしまった、というの、ある。

「じゃあ、そのバカンスを過ごす為の施設をこれから紹介してくから、快適に過ごしたいならきつちり頭に叩き込んでおけ。おすすめのサボリ場所とかも紹介してやるから」

「そりやありがたいこつて……じゃ、期待させてもらいますよ」

「おうおう。因みに何に一番期待してる？」

「サボり場所」

——目の前が揺れて、そこから記憶が途切れてて。気が付いたら、目の前が火の海になつていったんだ。

正直な話、眼鏡を落として机の下に、潜り込んでいたのが……ラッキーだった。隣の奴は、見たくもない様な有様だった。一言二言、業務連絡しただけの奴だったけど。シヨックだった。吐き出しそうだった。

「なんだ……どうなつてんだよ……っ！」

目の前は火の海。コフィンに入つてた奴らは……軒並み全滅？ それとも……息がある奴も居るのか？ それも分からないし……そもそも、近寄れない。怖い。

「——せ、せめて、せめて外部に」

そう思つた時。ふと中心を、見た。見て、しまった。

見慣れた、薄い、藤色の髪が——赤い、炎の中心で……アレは、間違いない。マシユ・キリエライト。俺だつてよく話していた。可愛い、妹分みたいな奴だ。このままじゃ間違ひなく死ぬ。

迷つてしまった。あの子を……少しでも、遠くに連れて行くべきか。それとも、外部への連絡を優先するか？

「……………しつかり、今助ける……………」

「お、おい藤丸……………つて、んだあ!!? こりやあ!!?」

その中に。入り込んで来る人間が二人。

一人は……あまり見覚えが無い。黒い髪と蒼い瞳の少年。中心に居るマシユに向けて、一直線に走り出していた。そこでふと思ひ出した。確か、マシユが案内していた、もう一人の一般からの補充要員が居た。彼がそうか。

そしてもう一人。禿げた頭の男が……間違いない。俺が案内した、あの少年だ。

燃え滾る室内に驚いて……ひとしきり周りを見回してから、ふと、一点で目が留まる。コフィンの中に居たオレンジの髪の少女。恐らくは、マスターの一人だったのだろう。彼女に目を見開き、そして、一步を踏み出して。

「——クソツたれ、やめろよ……………っ! 俺の前で……………」

少年が、その拳を構えた様に、見えた。

何をする積りなのか。彼はその腕を、思いつき後ろに引いて——

〈中央隔壁、緊急封鎖します。館内洗浄まであと百八十秒〉

それを止める様に、機械的な音声割り込んだ。

その直後、この部屋に唯一通じる出入り口に、巨大な隔壁が降りてくる。それに振り返ったのは……一人だけ。拳を振りかぶった少年の方。明らかに驚きを隠せていない表情で。振り上げた拳を、ゆっくりと下ろして。

「っ……おい藤丸。後ろ」

「分かつてる」

「分かつてるって……あーもう、こんな炎の中でラブロマンスか!? 見せ付けやがって頭湧いてんじゃねえのかお前!」

「そんな事してないっての」

燃え盛る中で、もうどうしようもない、とても言いたげに肩をすくめ……逃げ場のない炎の海の中で。あの子供はそれでも腰を下ろさない。

俺は動けないのに。もう助けようがない、と体が竦んでいるのに。

炎の中に居る当事者は、全く怯えていないように、見えた。

『そうかあ……世知辛いな』

そういつて。少し困ったような顔をした、あの瞬間と。今の顔は、まるで変わってない様に見える。呑気なのか? もはやそれでは説明なんてつかない気がする。

あれは、こんな状況も……受け入れているような。

〈適応番号48

藤丸立香

適応番号49

本造院康友

の2名をマスターとして

再設定します アンサモンプログラムスタート 霊子変換を 開始します

「……」

「自分達だけの世界に浸りやがって……はーあ、俺もそんな可愛い後輩ちゃん欲しいな」

「だから、そんなんじゃないってば」

「良いから良いから。ホラ、しっかり手を握ってやつとけ。それだけでも……きつと大分マシになるだろうよ。こんなクソみたいな状況だったら」

〈レイシフトまで〉

〈3〉

〈2〉

〈1〉

——レイシフトが始まるその瞬間。

「……報いかね。これは」

最後に。アイツは。

笑っていたようにも、見えたのだ。

〈全行程 クリア ファーストオーダー 実証を 開始します〉

第三章

炎の中からこんばんわ、はーじまーるよー。

さて、無事特異点Fに到着しました。FGOで最もよく目にするマップと名高い特異点Fのマップでございます。まあね。藤丸君とマッシュと一緒に行動できればこんなチヨロイチヨロイ……とか思ってる皆様。甘いですね。

はい。ホモ君一人旅の始まりです。いやー酷いですねこのゲーム。絶対にプレイヤーを甘やかさないという強い意思すら感じます。

驚くべき話なのですが、どんなに戦闘力の無いマスターでも、絶対に藤丸君と離れて単独行動をさせるのがこのゲームです。

基本的に、藤丸君達と合流するか、ある特定の場所まで行かないとサーヴァントを呼ぶことが出来ません。でもって、その特定の場所、というのは……まあFate知識に詳しい方ならお判りでしょうが、この冬木におけるオーナー、遠坂邸……は、吹っ飛んでしまっているので存在しません。ので間桐の屋敷、そして武家屋敷EMIYAの何方か。そこに辿り着くとサーヴァントを呼べます。

流石にこのゲームも鬼ではないので、一応過去に使われた召喚陣をその三か所に遺し

てくれていて。そこに向かうとイベントと併せ、サーヴァントを呼ぶことが出来ます。呪文とかその他諸々なんで知らない筈の一般公募が呼べるのかは不明です。多分運命でも見つけたんでしょ（適当）

しかしながら、目覚めた場所を探索しなければその周辺を調べる事は出来ません。ホモ君が目覚めた場所は……X―D。港エリアの模様です。ここは深山町とは大橋を挟んで反対側の新都にあるエリアで、F a t e / Z E R Oでは聖杯戦争の初戦の舞台になったのがここですネ。

で、当然ですが目的地のある三つの地点とは、真逆の方面に属する場所です。これは幸先が悪いですね間違いない……

愚痴ついても仕方ありません。まずは港エリアを探索し、次につながるルートを発見しましょう。という事で計画フェイズ……からの準備フェイズすつ飛ばして実行フェイズに入ります。

さて、これで何事も無く次のエリアを発見できると良いのですが……まあ当然の様にそんな甘い訳もなく。

出てきました。スケルトンです。この冬木に闊歩する生きる屍……なんです、通常マスタートルートなら逃げるのを優先するにしても、ホモ君は鬼種の魔補正でステータスが上がっている、スケルトン程度なら十分単騎で潰せます。

というか、竜牙兵クラスなら兎も角、あくまで動く屍に過ぎないスケルトンに負けるようじゃ一生サーヴァントになんて勝てません。

という事で軽くカット。

武器持ったちよつと強めの一般人をぶん殴ってんのと変わんないですからね。先手を取ってダメージを与えてしまえば相手にターンが渡る前に一体は倒せますし、冬木レベルの敵より圧倒的な敏捷値なので、殆どの確率で回避してくれます。敏捷に全てを振っておいたからこそその勝利ですね。

という事で勝利です。原作F G Oと同じ、エネミーを倒せば素材がもらえます。素材はF G O本編と同じなので解説は特にしません。サクサク進めていきましょう。

そして戦闘終了と共に、マップにもう一つのエリア、大橋が出現しました。ここで暫く待機していると確実に藤丸君達と合流できるのですが……今回はそのルートを使いません。

実は藤丸君達と合流すると、サーヴァントの召喚タイミングが大分遅れてしまうんですよね。これは所長が現地の調査を優先する為に行動するのが原因なのですが。基本的にこのゲーム、サーヴァントは一人でも多い方が勝ちですので、所長の行動方針なんて待っていられません。

ガンガン探索し、そしてとつととサーヴァントを呼び出して生存を目指す。コレが大

安定チャートです。崩してはいけない（必死）

という事で大橋の探索はカット。その次に出現するエリアX―B、爆心地に進みます。ここには爆心地にぎりぎり含まれなかった間桐邸が存在し、探索をする事でイベントが発生しサーヴァントを召喚する事が出来ます。

で、画面にはいつもの間桐邸の一枚絵が写っておりますが、空が赤いですねー流石爆心地近く。こんなに近いのになぜ間桐邸は無事なのか。もしかして魔術王殿が忖度をしたのか。だったら寧ろ焼き尽くした方が変に疑われる証拠も無いと思います。などと色々思わないでもないですが。

さて、サーヴァントの召喚ですが、ここで先日入手していた『触媒』を使う事になります。作家系サーヴァントを召喚する事になるのですが、問題は作家系サーヴァントの誰を呼ぶことになるのか。

とはいえ、作家系サーヴァントの時点で直接攻撃にはあまり向いていない方が多いです。当然、直接戦える方もいらつしやいますが正直確率は低いです。サーヴァントというだけである程度は対応は出来ませんが……

因みに作家系というと本を書いているサーヴァント、という事になるので、ごく稀に刑部姫やジャンヌ・オルタの水着バージョンが召喚される場合があります。戦闘力的には申し分ないのですが、そうなった場合ルルハワ行きが確定するのでちよつと喜びにく

いですハイ。

さて、実行フェイズが終わり、後は召喚のイベントを挟むだけですなー

『——おや、生き残りが未だいたなんて』

……ファツ!?

ま、待つてクレメンズ。この黒いシルエットは……シヤドウサーヴァント!? バカな
どうしてこんな所に!

シヤドウサーヴァント。存在が零落したサーヴァントの劣化版みたいな存在ですが、
この冬木においては十分破格の強さを誇っているエネミーになります。なんてったつ
て元がサーヴァントですからね。同じサーヴァントが居れば怖くないんですが、今はホ
モ君一人ですので、当然の様に蹂躪されるでしょう。

一応救いと言えば救いなのが、戦闘に入る前に一応逃走を選択できる事なんですけ
ど。実は相手とステータスに圧倒的な差があると、その逃走も確実じゃなくなるって言
うレベル差ステ差大正義なゲームなので……

とはいえ、やらないよりはマシなのでワンチャンにかけてやって……ああ逃れられな
い!! (逃走失敗) せめてステータス上がってるんだから一撃は受けて欲しいですが無
理です (致命傷)

一発で体力半分以上持っていかれました。ステータスに補正が乗っかっていてもこ

の威力です。やっぱりシャドウサーヴァントってやべえわ……何がヤバいつてこれRPGなので必ず相手のターンが回ってくるのがヤバイ。

も、もう一回くらい逃走を試し……ダメみたいですね（失敗） あっあっあっ、アツ……直撃イ!! し、死……

『——やはり人間というのはか弱い。こんな軽く小突いただけで、地面に情けなく転がるなんて……』

生きてるウー！（生の喜び） ど、どうやら負けイベントだったようですが……こんなイベント見た事ありませんね。条件は何でしょう。もしかして、間桐邸でライダーさんに遭遇すると発生するイベントなんでしょうか。

それは兎も角、これって無事召喚は出来るんでしょうか。私は普通に召喚した事しかないの……一体どうなるのか……あ、逃げ出した。

まあ、そりゃあ一切敵わない相手にマトモに立ち向かう方が馬鹿つちや馬鹿なので仕方ないですけど、見事な逃げっぷり。流石現代の若者。諦めが恐ろしく早い。しかし、ここで諦めて撤退した所で、最早袋のネズミ。召喚が出来なかつたら負けが確定するのですが……どうやらホモ君は屋敷の地下室を発見した模様です。

さあここへ逃げ込んで、でもって鍵を閉めて。ここまでは怪物に襲われたホラー映画の主人公のテンプレ行動。しかし、これはFate世界。

ことこうなったら、初代 Fate からの伝統があります。現れる強敵、窮地どころか、死にかける主人公。そして……少年／少女は運命に出会う。コレですよ。ただし今回の少年は強面チンピラなので美しいもクソもありませんが。

さて、いよいよ地下室に描かれた召喚サークルの前に辿り着きました。事こうなったら行う行動は一つだけです。

『――閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する』

詠唱だよなあ!?

何でホモ君がこの詠唱を知ってるかは言及しません。取り敢えず、味方が増えるヤツター!! 位の軽い気持ちでいてください。

『汝 三大の言霊を纏まとう七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ――!』

さあ、ホモ君最初のサーヴァントは……!?

『サーヴァント、キヤスター。紫式部と申します。文に親しみ、詞に焦がれ、ひとの想いに寄り添う女にて……どうぞ良しなに……』

うおつ、なんだあのデツカイモノ♀……という事で、メツチャ洋風な和風美人が出てきました(息をするように矛盾) この大正的な和風に、未亡人という言葉がここまで似合うサーヴァントは一人しかいません。

キャスター、紫式部。FGO原作では星五として実装されたサーヴァント。性能としては魔性のエネミーに強いキャラクター、と言った所でしようか。そして、純作家系サーヴァントの中で、結構戦闘がこなせる方が来てくださいました。大当たりですよクオレハ……これでホモ君の生存確率は飛躍的に上昇しました。

後は、特殊な得能として『泰山解説祭』という読心術の様な物を持っていますが。取り敢えずそれは後。今は、扉の向こうでメツチャラブコール（殺意）を送ってくるとんでもないシャドウサーヴァントをシバいて頂かなくては。

シャドウサーヴァントとサーヴァントの間には相当に力の差があります。パーティに式部さんを加えての初陣、その事をしっかりと確認していきましようか。

第三章・裏：動物狩りの要領

「サーヴァント、キャスター。紫式部と申します。文に親しみ、詞に焦がれ、ひとの想いに寄り添う女にて……どうぞ良しなに……」

——目を開けた時、ちよつと泣きそうになつてしまいました。

「……む、紫式部つて。偉人つてのはそう言うくくりもありなんだ……なんか、最強の使い魔だとか書いてあったから、もつと筋肉隆々の奴が来るのかと思つてたけど……いや、寧ろこの筆を、触媒、だったかに使つたからか。はっ、山のガラクタがこんな縁を繋ぐとは」

何せ、私を呼び出したマスターは、一目見るだけでも明らかに危険と申しますか。その……失礼な言い方をすれば、素行が良さそうな方だとは思えない。そんな、物凄い、強面で。昔宮廷で見かけた、お武家の方々にも匹敵する程に。

その怖い、という印象は、その直後の言葉でひっくり返つたのですけれど。

「貴方が、マスターで宜しいでしょうか」

「あー、そう……なるのかな」

「そう、なる、ですか？」

「すまんね、目の覚めるような別嬪さんに聞かせるような話じゃないんだが。こっちはこういう事態に、全くの素人童貞でね」

「素人……どっ!?!」

「家の中探つてたら出て来た『物凄い存在を呼ぶ呪文』ってあったもんで。それに全てを賭けただけなんだ……いやー、アレを俺が相手出来たら、良かったんだけど」

その顔で、ケラケラと軽く笑う姿は……なんと言うか、迫力という言葉からは最もかけ離れている、と申しますか。寧ろ、剽軽と申した方が良い気がしてしまいました。というかそもそも、言い方が、ちよつとふざけてる部分もあつて。

『——この気配は……ほう?』

恐らく、それが気になっていたからだと思いますが。

ふと、上の方から漂ってくる、妖気にも似た淀みに、その時になつて初めて気が付いたのです。マスターは、その存在から逃げおおせる最中に、私を呼んだのだと。

——バキヤアツ!!

「——やはり小癩にも、サーヴァントを召喚していましたか。諦めの悪い事」

「そりゃあ、こんな所で死ぬませんしなあ……」

降りて来た相手は、女性。

髪も長い、美しい女性でした。人ならざる、という言葉がとても似合う……しかし、そ

の視線の鋭さはその美貌であるからこそ、心胆寒からしめる程の迫力を醸し出している。間違いない、私より格上でしよう。それでも……!!

「つて事で、アレ、どうにか出来ますか？」

「……少々の陰陽術ばかりが頼りですが、出来るだけの事は、させていただきます」
「頼もしいお返事ありがたい。ならお願いするよ。戦い方は……取り合えず——!!」

「はいっ!」

「——逃げよう! 全力ぶっ飛ばしてから!」

「はいっ! ……えっ?」

——思わず、その言葉に勢いで頷いてしまった。そのままの勢いで、私の出来る全力を放ったのですが……逃げる、という言葉に思わずビックリしてしまった。どうしてなんでしょう。マスターからの初めての指令が、逃走の為の全力攻撃って、それは、普通なのでしょうか。サーヴァント的に。

「くっ……!!」

「つしや入り口空いた! 離脱だ離脱、あーばよーねーちゃん!!」

「は、はいいい!!」

私の放った呪力の弾丸は、直撃する事はなく、そのまま入り口の周りを挟るばかりで……しかし、その相手が避けた一瞬を待っていたかのように、マスターは上への階段へ、

私の手を引いて逃げ出してしまいました。全力でした。有無を言わせぬ手際でした。

「ま、マスター!？」

「あんなんと閉所で殴り合うとか誰だつていやつしよ! お外に出るに限らあ! 真つ当に戦つてやる必要がどこにあるつてんだ! ——でもつて、式部さん扉に今攻撃! 急いで!」

けど、その視線が……ただ逃げ腰になつただけではない事には、直ぐに気が付きました。唯逃げただけではなく、恐らくはこの機を作り出す為に。意表をついて逃げ出す、という行動に打つて出た、ということでしょう。

「——分かりました!」

「全力ブチかましてくださいよオ!!」

指先が虚空に触れ、そこから生み出される黒い墨の如き呪の矢。それが……扉を通過して丁度私達を追いかけて来た女性に向けて殺到する。

流石に、こんな所に攻撃が置いてあるとは思つて居なかつたのでしよう。そのままぶつかう様に——直撃。くぐもつた呻き声が、聞こえた気がしました。私自身、そこまで戦いが得意という訳でもありませんから、ここまでピタリと当たるとは、思つてませんでした。

「つしやあドンピシャア!!」

「やりましたね」

「いやーハマって良かった……獣相手にする感じでやったけど、行けるもんだな」

「獣相手？」

「いや、なんでもねい。それより急ごう！」

暗い家の中を駆け抜け、マスターは……どうやら外を目指している様で。当然と言えば当然でしょうか。自らの危機になり得る相手がいるような所に留まるなんて、絶対に出来ないと思いますし。

「で、アレで仕留め切れたと思うか否か！」

「えっと……否かと！」

「おーらい、じゃあもう十発くらい軽くぶち込んでやって！」

「手当たり次第ですか!? お、お家が壊れますけれど！」

「全然構わん！ 狙いなんかつけないでいい！ 兎に角数！」

そう言われ、三度、呪力の弾丸を打ち出します。先ほどの女性の方が居た方に、只管に。無数に。狙いなど付けていないので、四方八方にぶつかっては弾け、埃や塵を撒き散らしてまるで煙幕の様に広がっていきま

……一応、本などにぶつからない様に気を付けて撃つてはいます。そんな細やかに撃てる程、腕は良くないので。本を見かけた方向に撃たない、位の積りではあります。

「あ。あの！ アレは当たっているのでしょうか!？」

「いんや？ 一発も当たってないと思う」

「……ええっ!?! 当たってないんですか!?!」

「さつきみたいなハメ技でもない限り、狙わなきゃ当たらんよあんな奴相手に……でも、当てなくて良い」

えっ、と思つて目を向けた先、マスターは……室内に巻き上がる、煙を見つめています。

「ドーブツと一緒よ。デカい音がしたら警戒して頭を出せない。頭を押さえて……で、一旦隠れるんだ！ 兎に角！ 殴りあい得意なタイプじゃないでしょ!？」

「え、えっと。はい……」

「なら兎に角逃げて仕切り直して、その後有利な場所から一方的にぶち込む！ それが一番でしょう」

……人に指示するなど、マスターは得意ではない、とはおっしゃっていましたが。しかし荒事に関しては相応に慣れていらっしやるようで。

少なくとも、素人の私よりも。

「つってもあんな化け物相手に何処から有利に弾丸をぶち込むのか……それに関しては正直分からんけども」

「……それに関してなのですが」

「ん？」

「そのマスターの稼いでくれた時間で……一つ、提案が」

「……えっと、これでおしまい？」

「はい。特別な触媒を使っている訳でもないのです、簡単な物ですが……」

「そうかそうか。で、これで倒し切れる？」

「わかりません。ごめんなさい……私も、陰陽術を極めた訳では無くて」

「さっき聞いた時は驚く暇も無かったけど。紫式部って陰陽術が使えたんだなど、初めて知ったよなあ。歴史の妙は複雑怪奇」

「へ、下手の横好き程度で申し訳ないのですが」

マスターは、綺麗に陣を書いてくださりました。曰く『山の看板を書くのでそう言うのはなれてる』だそうで。術が発動しているのが、分かりました。

「——随分と、好き勝手やってくれましたね」

そして、その完成した直後に、彼女は此方へとやってきました。私達の事を探して居たのでしよう、明らかにその表情は、怒り狂い、猛っています。あの術を使わずとも、余りにも分かりやすく。

自分が……死地に入った事も、気付かぬ程に猛り狂っているのでしょうか

「舐めた態度を取った報いは、受けさせてあげますよ。人間に、木っ端サーヴァント風情が」

「へっ、その木っ端サーヴァントに、これからアンタは消し飛ばされるんだけどな」

「……なんですって」

彼女の足元には、マスターの描いた……いいえ、刻んだ陣が。多少踏まれても、効果は変わらず発動する程に、しつかりと刻んでいただきました。

その陣は……酷く単純な。清明様に言わせれば『単純すぎて見なくても書けるようなお呪い程度の代物』だそうです。私から言わせれば、十分強力な、退魔の陣。妖気を撒き散らす邪鬼には十分通じるでしょう。

「じゃあ式部さん一発宜しく!!」

「承知いたしました。拙い術では、ごぎいますが……!」

「——なにっ!? これは——」

陣の縁から現れた壁、そしてその内に満ちていく光は、間違はなく内に佇む女怪を焼き。苦悶の嘆きを上げさせることすらせず、その影は溶ける様に、消えていきました。

——清明様曰く、『御山の鬼相手には力不足に過ぎる術だから、君が覚えるのが適当だろう』との事でしたが。正直私が扱っていい規模の術ではないのではないのでしょうか

……晴明様。

「おーおー、本当に消えた。すつごい威力」

「ふう……上手く行つて良かったです。これ、生前には、上手く行つたためしがなくて

……」

「えっ?」

まあ、でも。

今は、兎も角余計な事を考えず。このマスターと共に。生き残れたことを純粹に喜びたいと思いました。

第四章

予想以上にサーヴァントが強い実況、はーじまーるよー。

いやー、凄いですね式部さん。決して戦闘能力ずば抜けて強い、って訳でもないサーヴァントなのに、ズバズバシャドウサーヴァントにダメージを叩き込みました。

このゲームってサーヴァントは『サーヴァント』っていう異能持ちで、その能力があるとダメージに超凶悪な能力補正と、ある条件以外では、一定以上『神秘』パロメーターに数値を振っていないとダメージの入らない特殊な耐性を誇ります。原作型月の『最強の使い魔』という設定を忠実に再現している仕様ですね。

しかし、サーヴァントがよーい！ たーのしー！ となつて頼りきりになつてしまふと全然レベルが上げられなつてしまいますので、余り頼り過ぎないように、自分で倒せる敵は慎重に倒して行きましょう。

さて、現状間桐邸……ではなく、爆心地な訳ですが、現状藤丸君達が何処に居るかが分かりません。だって藤丸君達と違つて通信も復旧していませんし……現状、パーティに加わっている式部さんだけが俺の癒しです。

という事で、無事サーヴァントを召喚した所で、次は藤丸君達を――

『漸く見つけたわよ！ 手間かけさせないでちょうだい!!』

発見したところ迄バツサリカット。

な、探索する際の映像は……!?!? 残念だったな、そんな無駄な時間を皆さんにお見せする訳がないでしょう。という事で、二回目の探索で漸く発見しました。大橋で張つただけですけどね。

さて、どうやら無事、キャスニキをお仲間に加えて特異点を探索できている様ですね。

『——な!?! アンタ、その隣のは……サーヴァント!? どうやってそんな物を!?!』

因みにこの時点でサーヴァントを連れていると、所長の可愛らしい反応を見る事が出来ます。うへへへ、羨ましいかい? それとも怖いかい? 何れにしても狼狽える所長は可愛いですね(ボ)

まあ所長のカワイイ反応は兎も角として。藤丸君達と合流し、これで大洞窟へと向かうフラグが立ちました。後その前の信奉者戦とかも。戦力も十分、道中の敵はもうほぼ怖くないと言つても良いでしょう。

とはいえ、この特異点Fのボスも、正直最序盤の敵としては破格の強さですので、油断は出来ませんが……

さて、ここらで大洞窟に辿り着く迄の間、我らが藤丸君、そしてマシユのステータスを紹介しておきましょう。所長のステータスは……乙女のヒミツつて事で(目逸らし)

藤丸君は、ステータスはほぼ全部初期値、それで成長値も飛び抜けて高いとは言えないのですが、問題は『レイシフト完全適合者』とか言うチート得能、これ一つでサーヴァントとも契約し放題というバカみたいな能力を持っています。

これだけならまだしも、更に『盾の契約者』というもう一つの得能はありとあらゆる毒の類をはねのける無類の耐性を持ち主に付与するバカ性能。

一方のマシユは原作でも異常に使い勝手の良かった防御特化バフの持ち主で、その堅牢さは健在。現状はまだまだ星三のナスビちゃんですが、これからの成長具合を考えれば今の控えめさが嵐の前の静けさにしか見えませんね。

特にこのゲームにおいては、原作にはなかったマスター狙いという禁じ手を普通に敵がやってくるので、マシユの防御性能の高さが、システムの違いでより際立つようになっていきます。

具体的に言くと、マシユが居ないと、第一特異点で普通に藤丸君は死にます（白目）はえー藤丸君って偉いんすねえ……

と言った感じで……えっ？ さっき言ってたキャスニキは一体何者か？

曰く、キャスタークラスのクー・フーリン。頭脳派などと気取っていますが、実際の所星三のキャスタークラス内でも一番の攻撃脳サーヴァント。自分への状態異常を治し、矢避けて相手の攻撃を捌き、クリティカル威力を上げてぶん殴るキャスゴリラ。

具体的に性能を言うと、無敵を張れて場持ちも良く、頑丈さもそこそこで前衛も張れる自由機動砲台、と言った所でしようか。マシユと組み合わせると、相当長い間粘る事も出来る名コンビと化します。

アプリ版FGOと違い、このゲームには前衛後衛の概念が存在し、基本的にマシユの様なサーヴァントは前衛、キヤスニキの様な後衛系とマスターは後衛に配置されます。ですがキヤスニキに関しては、他の後衛系と違い前線も張れる、という相当に強力な特徴を持っていて、これと組み合わせ、援護と敵のヘイトの分散、二つの役割を器用にこなせる等、アプリ版とは違う側面を見せてくれています。

後は、前衛後衛のスイッチも出来るのですが……それに関しては、上手い事使えば面白い事が出来るので、いずれやる機会があれば。

こういった様々なサーヴァント達が、アプリ版の評価とはまるで違う、別の側面を見せてくれるのがこの『Fate/Grand OVER』の特徴でもありますね。

とか言ったら大洞窟へ到着してしまいましたね。で、この準備フェイズでイベントが起きてここでキヤスニキは離脱してしまいます。ば、バカな。キヤスニキが活躍の場も無しにあつさり離脱……だと……？

あんまりの扱いがショックな諸兄は、FGOのアプリ版か、アニメ版、見よう！ カッコいいキヤスニキの姿が見れるぞ！

で、残ったホモ君、藤丸君、マシユ、式部さんのパーティで大洞窟に潜る事になります。因みに所長はパーティに含まれません。ちや、ちゃんと仲間だから……戦闘時は援護とかしてくれるから……

で、洞窟内の探索すると、イベントが入ります。何時もの洞窟内奥の背景と、そして……

『——ほう、面白いサーヴァントが居るな』

はい、出ました。特異点Fにおいて出ちゃいけないレベルのA級サーヴァント、セイバーのサーヴァント、アルトリア・オルタ様のご登場です。正直サーヴァント同士の殴りあいだったら最強クラス。

その強さは、文字通り動く要塞と言ってもよく、防御も攻撃も高いレベルで纏まつてさらには出力の瞬間的な増強も出来る、長期、短期、どっちもいける有能サーヴァントです。

ゲーム的な性能で言うと、前衛では高火力タンク、後衛では一発のデカいほぼ当たるロマン砲、という目が飛び出るような有能。キャスニキとは別ベクトルでどっちもこなせるサーヴァントです……前衛後衛どっちもこなせる有能多くない？（困惑）

という事で全戦力を注ぎ込んでも全然問題ないレベルの強敵です。え？ そんなバケモンに勝てるのかって？ 勝てる訳ないじゃん（呆れ）

まあ当然の如く、イベント戦みたいなものです。一定量体力を減らして進行度を進めてつていうのを繰り返して、後はとある少女の覚醒と、キヤスニキの合流を待つて反撃する……つて言うのが主な流れですね。

因みにここでは殆どプレイヤーは役立たないのですが……実はとある系統のスキルを持つていると、ここの戦闘でチュートリアルとして使う事が出来ます。

そのスキルというのは……覚醒系のスキルですね。どのスキルも、大抵は攻撃が全て確定クリティカルになる、プラス何らかの付加で差異がありますが、この覚醒系スキルが一番の重要な所は、確定クリティカルになる、という事です。

何が良いのかと言えば。このゲームのクリティカルは、どのような防御、及び特殊耐性も突破する正に切り札の様な仕様を持つていて、適当に一発ぶつ放すだけでも偉い。それだけではなく、確定、というのが実に素晴らしい。

サーヴァントの『サーヴァント』には各種耐性がある、というのはお話ししました。その耐性の恐ろしい点は、その耐性の突破手段であるクリティカルの発生確率をゼロにする、という荒業でクリティカルを封じてきていている点です。

詳しい仕組みは兎も角として、サーヴァントの、生中な神秘が通らない、という仕様をこうして再現して来ています。

ですが覚醒系スキルのクリティカルは、確立に関係なく『確定』でクリティカルを取

れるのでサーヴァントの耐性を突破してダメージを叩き込む事が出来るのです。

覚醒系スキルの、このゲームでの一番の役割は神秘防衛の突破。一瞬だけです。相手の守りを突破できるだけの神秘を發揮できる爆発力。因みに今は覚醒のターンが持つのは一ターンだけなので、マジで現実世界でもほんの僅かな時間なのが伺えるのが笑えます。しつかりレベルを上げればその長さも変わる様になるんですけどね。

で？　なんでこの話をしたかと言えば。ホモ君の持っている『鬼種の魔』は覚醒系に属するスキルなんです。皆様。そうです。ここで初めて使用が許可されるんです。シャドウサーヴァントにあっても使わなかったのは、こういう理由があったからなんです。ね。

まあ、如何に覚醒の能力が優秀だと言っても今のホモ君のステだと、サーヴァント相手には蛙の面に小便みたいなものなんですけど。クリティカルダメージで相手を怯ませられる事もあるので、一瞬の足止めくらいに考えましようか。

とはいえ此方の戦力も十分盤石……叩き潰してやりましよう！

『構えるがいい、名も知れぬ娘。その守りが真実かどうか、この剣で確かめてやろう！』

さあ、来ますよ黒い王様が……！　気を引き締めていきましよう！！

第四章・裏：大空洞決戦

「——う、ああああああ……!!」

少女が、我が剣より放たれた一閃に耐える姿は、いつそ痛々しいまである。

戦いに身を置いていたようには見えぬ、そもそも鍛えられている様にも見えぬ。いや寧ろ戦いなどに連れてはいけぬ程に、『儂い』という言葉が似合う少女だ。私が僅かに首に力を入れれば……ぼきん、と。

だというのにその手に構えられた盾は、重荷になっっている様には見えぬ。寧ろ……その傍らにある、年若い少年を守ろうと手に握られている盾は、彼女に——

「いや、戯言か」

とはいえ、目の前の少女に集中しているばかりにもいかない。此方を狙って飛んで来る、魔力……ではない何かによって象られた矢を打ち払う。魔術師が組み上げた物……とは少し違う。威力自体は、マーリンやらの魔術師に及ぶものではないが。

しかし、ほんの僅かの残滓に触れた時……同じく僅かではあるが、この身を蝕む力を感じ取った。

恐らくは、この身が変生した理由が関係してくる。人間の悪性、呪いの類、それを受

けて反転したこの身は、それなりに呪いを纏っているのだ。それに、退魔、若しくは呪いを退ける類の術が切り込んだのだろう。

「——私に多少通じる魔術師を連れてくる辺りは最早、向こうに天運が付いているとしか言いようがない、か」

しかし。

その程度の戦力に屈してやるほど、私は物分かりが良い訳ではない。続いて飛んで来る弾丸も全て打ち落とし……その術者に目を向ける。

盾の少女とは、別の意味で儂げな女だ。その顔立ちから、恐らく東洋の英霊だとは想像できる。そして、そのマスターと思われるのが……その傍らのハゲ頭だ。

その目を良く知っている。酷く厄介な類の眼だ。マーリンや、ヴォーディガン。諸王達とは全く違う……サー・ケイに感じた光だ。

相手をよく見て、弁舌を振るう。同時に、自分自身も客観視し、決して強いと驕る事はない。寧ろ自らの弱さを良く知り、全てをよく見て戦い、決して負ける戦いをしない。『弱さ』と『強さ』を良く知っている眼に他ならない。

「私が彼女に目を向けた瞬間を的確に狙い……そして、私が攻撃を打つ時は、必ずあの盾の少女の影に、サーヴァントを連れて逃げる。小賢しいマネを」

私と、自らの圧倒的な力の差を理解しているからこそその行動だ。少しにやけた面をし

ているのは、彼とは少し違うが……それが彼なりの処世術なのだろう。怯えた内心を晒さぬようにと、軽薄な笑顔で内面を覆い隠している、と言った所か。

こういった輩は、過去、現在、未来を通して酷く厄介な手合いである事は間違いないであろう。軍師として知恵を磨けば、それだけで英雄の座に上り詰める事も難しくない程に。

——アレを先に潰しておくべきか、と私の王としての勘が告げている。

——少女を目覚めさせねば未来が終わる、と私の微かな善性が告げている。

優先すべきは——

「——まあいい。これから先を思えば、アレくらい悪辣な小僧が居る方が、上手い事行くだろう」

目の前の、彼の盾を携えた少女であろうと、手元の剣を構えなおす。その盾を手にした物の前に立ち塞がるのが……アーサー王としての、最後の役割だろうと、自分勝手なエゴを胸に抱きながら。

「見ていて下さい、マスター……！」

——我が一閃を、穢れ無き盾が跳ね返す。

「よくぞここまで持ちこたえた——倒壊するは……ウィツカーマン!!」

一瞬の隙を突き、アイルランドの光の御子はその宝具で我が身を焼く。

「——っ!」

力は、もう残っていない。

先の一撃の上に、忌々しいアイルランドの御子の全力だ。威力は分かっていた。もはやこの体はあつと言う間にひび割れて使い物に——ならなくなる、筈だったのだが。しかしながら。予想を遥かに超えて、体は頑丈にできていたらしい。

ここまでやったのだ、合格、として舞台から去つても構わぬのだが……しかし。こう見えて私は負けず嫌いなのだ。

「……………ふむ」

ちらと見れば、やはり油断している様に見える。盾の少女と一緒に居るマスターらしき少年は勿論、その後ろに控える女術師も……その傍らの禿げた小僧は？

——にやり、と口が弧を描く。

やはり、サー・ケイとは経験の差が出ている。

流石に、とでも思ったのか。明らかに体から気を抜いていた。勝った瞬間に見える、油断が見えていた。他の者に比べれば少ないだろうがしかし。それでも。私が反撃し

て来るとまでは考えていないのだろうか。

それでは教育してやろう。悪役というのは、最後の最後まで、醜く足掻くものだという事を。それを経験とし、先に進むか。それとも私の最後の一矢で何人かもぎ取られるかは。

「……お前たち次第だ」

膝を、態と着く。剣にもたれかかるように、体勢を崩して見せる。そうして見せれば、ああ、向こうから私は限界を迎えたように見えるだろう——キャスターの奴めも、ほんの僅か気を抜いたのは、演技の才能があつたようだ、ほくそ笑みたくなつた。

これで、完全に気を抜いたか。その油断が手に取る様に、見ずとも分かる。戦を繰り返して来た故の、血なまぐさい経験則……決着の最後まで、息を吐かぬ事。それが如何に大切な事かを……教示する。

「そこだ」

緩めた体を、一気に引き締め……膝を突いたままに、剣を腰だめに構える。大技は撃てずとも一人を狙い撃ちにする程度は、出来るだろう。狙いは、一番外側。最も気配の薄い白い髪の女——一撃で、消し飛ばす積りで。

「——っ!?!」

気づいたのは……いや、気付いたというよりは、向けられた殺気に怯え、気付かされ

たというべきなのか。女は、その顔を青ざめさせて。

そして。それに気が付いたのは、やはりと言うべきか。あの禿げ頭。勝利に沸くでもなく呑気に周り等見ていたのが幸いしたのか。顔色を変えた女に、直ぐに気が付いた。私が溜めを必要とする分、先んじて動けたのだろう。

他は……間に合わない、私が誰を狙っているのか、把握できたのは一人だけだ。

「——伏せろっ!!」

「その反応の良さが命取りになったな……一人、貫つていくぞ」

地面を走る魔力の塊が、地面を走り、そして……男に辿り着く。飛び込む様に、ではなく体を丸める様に突っ込んでいったのが幸いしたのか、直撃ではなく、体を掠り、弾かれるように吹っ飛ばされるだけ済んだのが見える。

致命傷にはならないだろう。中々に、運がいい。

「……これで、本当に限界か」

今度こそ、力が入らない。そう遠くない内に、体も瓦解するだろう。まあ少しは悪役としての仕事は仕切ったか、とは思う。最後の一発は余計ではあったが……これも、最後まで世界を救おうと足掻いた私の執念、という事で、許してもらおう。

とはいえ、傷程度は残るか、そう思つて、男の方を見つめ——

目が、合った。

「っ!？」

立ち上がっている。

致命傷ではないにせよ、それなりのダメージを与えたはず。立てるような怪我ではない筈なのに。立っている。そして、今、私と合っているあの目は。目は。

男が、一步を踏み出す。確かな足取りで、更に、もう一步。

更に、もう一步——いや、大きく、足を踏み出して、そこから、地を蹴った。

「——」

「——」

正に、一足飛びだった。

普段ならば、問題にもならぬ速さだろう……しかし、問題はそこではない。それなりに離れていた距離を、当然の様に一足飛びで詰めて見せた、その化け物染みた脚力だ。人間離れしている、としか言いようがない。

そして、その額の……雷の様な、角は。

「おい、調子コいてんじゃねえぞ」

「貴様——」

何よりも。目が違う。

今までの若い、それでも理性的な目ではない……暗く、沈んだ。

——ゴキ

僅かな衝撃が、体に響く。これだけボロボロになった体でも、神秘を纏わぬ拳など意味をなさない……そう、思っていた。しかし。

こめかみに叩き込まれた男の手には、確かな神秘が纏わりついていていた。それが、サーヴァントの神秘の法則を通過する。それなりに神秘を纏った一撃であるのならば、この崩れかけの体に僅かな傷を入れる事も、敵うだろう。

「死にかけなら、とつと沈め——愚か者」

地面に体が吹っ飛ぶ。そして……体が、解けていくのを、感じる。

最期に思ったのは、無念ではなく——疑念だった。

先ほどまで、ただの小僧だった男が、突如として身に纏った神秘。魔術をやっている様にも見えない。そしてこの神秘は、現代のそれとは、匂いが違う……私が生きていた。

あの頃を感じた、確かな……古い、古い神秘の匂いだ。

現代の魔術師であっても、容易くは纏えぬ……そんな物をどうやって。

考えられる可能性は二つ。

一つは、この男が術師としての技量を隠し切れるだけの服芸を会得しているか。

もう一つは。

——古い神秘の、濃い、濃い血族であるか。

そこまで考えて……私の意識は、
死の時には余りにも不釣り合いなほど、美しい……
黄金の光の中へと溶けて行っただ。

第五章

漁夫の利が基本の実況、はーじまーるよー。

やりました。このタイミングしかありませんでした。その完璧なタイミングに横やり打ち込んで、ラストキルを掻っ攫えました！

このゲームはラストキルを取ると経験値ボーナスが入る仕様がありますが。このボーナスというのが重要で、サーヴァントにとっては一レベル上がる程度の微々たる量なのですが……レベルもまだ低い人間にとっては、それこそ膨大なレベルの量なのです。

このゲームは、レベルアップしていくに連れて凄まじい勢いで必要経験値がガンガン上がっていくえげつない曲線の上昇をするのですが、しかしながらレベルが低い今であれば一気にレベルを上げるチャンスではあるのです。

そして、このセイバー戦での最大のダメージソースである、イベントによるマシユの盾カウンター、及び兄貴の宝具の二つはダメージが固定で、黒セイバーを最低でも、マシユのパンチで削り切れる程度にはダメージを与えてくれます。

実はこの仕様と、覚醒のチュートリアルを使って、少々悪い事が出来るのです。

このゲームは、基本的にアプリ版FGOでの体力や攻撃力を凡そ踏襲しており、そのダメージ量から換算すると、このレベルのホモ君はクリティカルを込みでサーヴァントにダメージを与えられても、二桁以上には行かないのです。

ほんへにはないサーヴァントの神秘耐性の偉大性が分かりますね。

しかし逆に言えば、このレベルでも相手の体力を二桁迄まで削る事が出来ればたった一発の微々たるクリティカルでも相手を倒す事が出来るのです……そして、イベントダメージは固定。つまり、です。

その固定値を覚えて居れば、その固定値でほんの僅か、ダメージが残る程度に調整さえ出来れば……召喚したサーヴァントの攻撃力まで把握し、クリティカルが出ない様に徹底的に気を付けておくと、案外と出来るんです。この調整。

そして……ここで初期に上げた敏捷が非常に役立つてきます。マスター内では最速クラスのスピードを持っていると、マシユや式部さんが行動を終えた後に行動が出来るので、確実に仕留める事が出来るんです。

藤丸君自身がダメージを与える可能性はほぼ無いのですが、マスターは自分のサーヴァントに命じて追加でサーヴァントに行動権を与えられるので、追加攻撃でマシユに勝手に攻撃させちゃうと全てが無駄になります。

それよりも先んじてダメージを叩き込める、この、このタイミングこそ、初期敏捷で

買ったかった最大のチャンスだったんです。

いやー、コレを間違えらともう一回初めからやり直しになるのですが、一発成功してよかったです。

お陰でホモ君が一気にレベルアップ。で、ここからは……敏捷値ではなく神秘に全てを振っていきます。

敏捷は初期はガンガン上げること推奨ですが、しかしその上げるべき初期のタイミン
グはもう超えて、十分な経験値を経てレベルアップもしています。レベルアップで各ス
テータスは伸びるので、あとはボーナスポイントを含めて最低限を満たす事は難しくあ
りません。

因みにどうでもいいですけど、セイバーさんの例のセリフは、実はホモ君が倒すと発
生しません。その代わりに……

『アーチャーの野郎が妙な事を言ってるやがったな……グランド、オーダー、だったか?』
兄貴がああワードを言ってくれます。

これに関しては、一部をやり終わったばかりのマスターが聞いていると『おつ辻褄合
わせかな?』と思ったりしますけれども、アプリ版をしっかりとやり切った極まりマス
ターがこのセリフを聞くと『そりゃあこの人が言わない訳ないわな』と思ってしまうん
ですよええ……まあそれは兎も角として。

『いやまさか、君達がここまでやるとはね。計画の想定外にして、私の寛容さの許容外だ』
『よ』

という事で、特異点の最後のクソ野郎、レノフの御光臨でございます……が、コイツの存在そのものが寛容の外なのでバツサリカットします（無慈悲）

結局所長が焼かれる結末は、我々のアバターたるホモ君が居てもそう容易く覆せるものではありません。

一応『魔術的技術職』の生まれを選択しておけば、最初期からカルデアに所属して助ける事も出来ませんが……これ以上はこの話はおしまいになるので止めておきましょうか。

という事でカルデアに戻って来て、親の顔より見たグランドオーダー発令が来ました。FGO特産の聖杯というエネルギータンクが投下されて、それが歴史を悪い方向に捻じ曲げる原因になってるのでそれをどうにかしよう！ という話です。

しかし、今注目すべきはそこではありません。実は、式部さんが引いた時点で、あるチャートを構築する事を考えていたので、取り敢えずその下準備に行きます

『ダ・ヴィンチちゃんの素敵な工房にようこそ♡ じっくり見ていつてくれたまえ』

という事で、先ずお世話になるのはダ・ヴィンチちゃん工房です。

計画フェイズでダ・ヴィンチちゃん工房を選択、探索ではなく『工房へ立ち寄る』を

選択すると工房、いわゆるシヨップに立ち寄れます。

ダ・ヴィンチちゃん工房は、アプリ版FGOとは少し違い、マナプリズム、レアプリズム、そしてピュアプリズムによるアイテム販売の他に最初から『礼装作成』という項目が存在しています。

『礼装作成』は先ず必要なスキルを突っ込んで、その能力を作るために必要な素材を必要数集める事で『魔術礼装』を作成する事が出来ます。

アプリ版において藤丸君は沢山の礼装を使いこなしていましたが、その逆、ホモ君は自分にとって最も適性のある特製の礼装を製作して使用するのが基本です。

数と質、と言えば良い方は良いですが、礼装作成は基本的に一回作ると、作り直すのに時間がかかるので、最早作り直さない位の気持ちで徹底的に万能、何処でも通じる様にするつもりで言った方が良いでしょう。応用の利く能力にしないとね◆

で、ホモ君は基本的にクリティカル確定状態の覚醒以外では、雑魚的に対してしか大きな火力は出せないのです、全てを覚醒状態での一発にかけた方が良いでしょう。つまり基本的に自由付与のクリティカル関連で固め……しかし、もう一つ必要な能力があります。

それを突っ込んで……で、必要素材を確認すると。ああやっぱり、三つ目のスキルのお陰で製作コストは比較的安いですね。十分第二特異点には完成が間に合うと思われる

ます。

これでヨシ！ 第七特異点まで、しつかりと大ダメージを稼げるようになる特製礼装のデザインが完了しました。後、デザインを選ぶことが出来るんすねえ……じゃあZe ro Order礼装を思い出すスーツで。

うっわ。完成予想図が完全にマフィアのドンかヤクザの幹部やん。正体表したね。まあ白礼装の藤丸君、黒スーツのホモ君で対比は出来てるし良いんじゃないでしょうか。

準備は完了。後は……あ、そうだ(唐突) ちゃんとカルデア探索も忘れないでやっておきましょう。こういうちよつとした探索が後で攻略にボディーブローの様にじわじわと効いて来るんですよ。

で、この中で一番重要なのはカルデアス前……の、隣にある観測室です。何時もロマニが居て、通信を行ってくれる部屋でもあります。ここは必ず、何度も訪れておきましょう。後で良い事が有ったりなかったりします。

さて、一応一通り回ったりしまして。カルデアでは各エリアに仲間のアイコンが表示されそこに行くくと仲間との会話が行えるのですが……

あ、一応シミュレーターとかに寄ってレベルは上げておきました。

サーヴァントの経験値はシミュレーターでの戦闘で稼ぐことも出来ます。とはいえ、

これでレベル九十迄上げられる……という訳でもなく、最初は第一特異点で戦えるレベルになれるだけのシヨボい経験値しかもらえません。

そんな所で永遠に経験値を稼いでいても動画のテンポ的に宜しくないので、取り敢えず程々にしておきます。

特異点を超える毎に、その時の難易度に応じた経験値が貰えるようになるので第一特異点を突破するまで待ちましょう。

さて、次回は第一特異点へ向けて出発です。

果たして現状の戦力で無事突破できるのか、ご期待ください。

第五章・裏：鬼の子

「——これが、君がああのセイバーを殴り飛ばした時の、バイトルだ」

先に出されていた、マスターの平常時のそれを比べると。差異は、明らかでした。

けれどそれを見てマスターは……少し、困ったように。頭を掻いているばかり。まるでそれが他人事であるかのように。

「すっげえなあ。人間ってこんなに変化できるんだなあ。ビックリ人間に出場できっかな」

「本造院君……心当たりは、無いのかい」

そんなマスターとは違い、ロマニ様は酷く真剣で。そして……その視線に少したじろいだ様子でつるりとした頭を撫でて、手元の紙に、マスターは目線を向けました。話半分で聞いてくれ、と前置きをした後に。

「……我が家は、随分と古い家系でね。平安時代よりも前から続く家系なんだって。つっても古いだけで伝統の名家とか、そう言う事は一切ないんだけども」

「千年近く、続く家。そりゃあまた」

「そ。ビックリするでしょ？ 旧さだけならぶつちぎり。それ以外誇れないけど」

ご自身の家の事なのに、マスターは、酷く饒舌に、そして自虐的に話している。その様子はおどけているようにも見えますが……私には、少なくとも楽し気、という風には感じませんでした。

口を釣り上げて、表情は笑っている様にも見えませんが、その眉間に寄っているのは、笑顔の皺ではなく、怒りのそのように思えました。

「で、我が家の親戚が、揃いも揃って代々、本気で信じてるクソツたれた言い伝えがあつて」

「代々？ え、それは千年もずつとつて事かい？」

「そ。馬鹿みたいにずーつとだ」

「いやあなんとというか……すごい執念だね」

「正直、もう凄いつて言うか、それ以外言葉が無いつて言うか。だつて信じられるか？

別に良い格の家つて訳でもないのに古くからの言い伝えを馬鹿正直にさ……ああいや、これは別に関係ないか。悪い」

そして、皺は直ぐにほだけ、次に浮かんで来たのは。今度は、確かに笑顔でした。しかしそれは良い笑顔、ではなく。誰かを下に見た、嘲りの表情。

私も朝廷でよく目にした……そんな。

「で、その言い伝え、というのは」

「——むかーしむかし。ある所に住んでいた女が、悪い鬼に見初められて種付け○イプされて快樂墮ちしてアへ顔ダブルピースから子供を産んだ。その子供って言うのが、俺達の御先祖様なんだと」

……その直後に飛び出した言葉に、室内が凍ってしまいました。

一応、私とマスター、そしてロマニ様以外には、誰も居ませんがしかし。その少人数であつても、空気を悪化させるのに余りにも十分な単語が、マスターの口からスラスラと。私顔が赤くなつていないでしょうか……

いえ。それよりも……今マスターは、間違いなく、鬼、と。

「鬼の、子」

「みたいねえ」

「え、えつと。その」

「いいよ。俺も同じような事思つたし」

「マスター、その……その言い伝えは、何時」

「初めて聞かされたのは……小学生になるか、ならないかくらいの頃だつたつて。婆ちゃんが誇らしげに話して下さつた」

マスターは、分かりやすく……ちよつと分かりやす過ぎる位に話してくださいました
が。

「しかも、その女がどう過ごして、どういう風に鬼に見初められて。んでもってどんな感じに股座に——」

「分かった、分かった……あの、それくらいにして……お願い……」

「ん？ ああゴメンゴメン。ショッキンクな話を聞かせちまったな。まあ、兎も角、そんな感じ」

言い伝え、伝承として伝わっているという事は、つまり、そう言う事なのでしよう。マスターは途中で止めてしまいましたが。そんな話を自分の子供に当然の様に話すのが、当世の常識なのだとは、到底思えません。

「凄いだろ？ いやー、小さい頃の俺だって『えっ、なにこの話』って思うレベルだよね」
「……えっと、その話が関係、あるのかな」

「ある。その話には続きがあつてな。何時か、その鬼の血を引く選ばれた子がこの家に生まれて。呪われた我らの血を浄化してくれるんだと。恍惚としながら婆ちゃん言つてた」

しかし。

その話を聞いて、マスターが今、どうしてこんな態度をするのが漸く分かつてしまいました。現状と照らし合わせて考えると、その彼らが待ち望んでいた、鬼の血を引く選ばれた子というのは……

「——君、か」

「せーかーい……」

遂に口に浮かんでいた笑顔すら消え。マスターは、酷く苦々しい貌で、医務室の天井を仰ぎ見て居ました。

「マジで信じたくも無いんだけど。クソみたいな言い伝えが真実だったとか実感すんの」

「二応聞くけど、君の家が千年も続いている、って言う事に信憑性は」

「まあ間違いないと思うぜ？ 言い伝えもまあ古いが、家にある物もそれに負けないくらい古い。しかもみんな口をそろえて『爺ちゃんも、そのまた爺ちゃんも、その兄弟迄皆で伝えて来た』ってニッコニコでいうんだよ……小さいガキに、そんな口揃える必要性、ある？」

「……それもそうだね」

マスターの事情は詳しくは分かりませんが、しかし。信じがたい程醜悪な言い伝えに辟易としていて、それに折り合いをつけた年頃に、それが真実だと嫌という程思い知らされてしまった。その時の気持ち。

私なら、正直。書くのも躊躇う程に……

「……一つ聞いて良いかい」

「なに」

「あの力は、今まで発現したことは」

「無い。アレが初めて。つうか、あつたとしたら俺はこんな所に居ない。世の中を儂んでどつか山深い所に隠遁生活してる」

「そつか。分かった。先ずは……」

そんなマスターに、先ずロマニ様は。

「その力を分析して……それから、君自身の手で、ちゃんと制御できる手段を、見つけないかね」

「——へ」

優しく、声を掛けられました。

「……俺が言うのもなんですけど、結構アレな話聞かせましたけど。先ず、それ？」

「当然だ。僕は医者だぞう。患者が困ってるなら助けるのは当然だとも」

「患者……患者、ですか。俺が」

「制御できない力を持っていて。それが望むべき力では無くて。それに君は苦しんでいる。その苦しみを取り除く、または軽減できる様に努力するのは、医者が患者にする最低限の義務だとも」

——そう言われたマスターの顔は、一瞬ポカンと、大口を開けて……少しした後二

ヤリと、底意地の悪い笑顔に変わりました。

「それってえ、どうにもなんなかつたらドクターの所為って事で良いっすか？」

「え!? あ、いやそれはそうなんだけど努力はするから信じて欲しいというか!!」

「へへっ、どーかねー。ドクター、なんかこう……頼りなさそうだし」

「たよっ!!」

それは、先程までの余裕の無かつた姿とは違い……私を召喚した時の、何処か飄々としておどけた、あの時に戻っていました。ロマニ様を揶揄って笑う姿には、少しばかり愉悦すら感じられます。

「ぼ、僕はこれでもカルデアの医療班のトップだ！ 頼りになるんだぞう！」

「へいへい。んじゃまあ頼りにさせてもらおうとします。俺自身、なんも分かってないからドクターに丸投げだから、その辺り宜しくねー」

「え。あ、うん。分かった……って丸投げ!! ちよ、君もちゃんと協力してくれ！」

「気が向いたらねー」

そして、愉悦だけではなく。

何処か、安心したように見えたのも、きつと。気のせいでは無かつたと、思いました。

「……式部さんは？」

「え？」

「気持ち悪くなかった？ 女性には正直、キツイ話したとは思うけど」

病室から出てきたマスターは……私におずおずと、そう問いかけて来ました。思い出したかのように振り向いたマスターの顔は、まるで悪い事をした事を子供のようように、私の様子を伺うかのように。その厳ついお顔とは余りにもかけ離れたその姿。

思わず、少しクスリとしてしまったのは、不自然な事ではないと思えました。

「……確かに、少し驚きましたが。それとマスターとは、関係はございません」

「そ、そうかなあ。生まれがちよつと、アレ過ぎない？ 正直、女子からしたら近寄りたくない汚物、的に見られても……」

「じよ、女性にどんな偏見を抱いてらっしやるのですか!？」

何と申しますか。掴み所のない方だと思っていました。

やはり、未だ若い男の子には間違いないのでしょう。まだ感情の機微に聡い訳でもない。そして、自分の事を必要以上に意識してしまう。そんな若さゆえの微笑ましい部分を見せてしまう。

「……平気なら、良いんだ。アレだ。ずっと協力してもらおう人にずっと不快な思いをさせるのは、忍びないって言うか」

「話一つでそんなに印象を変化させる様に、見えましたか？」

「アンタと会って、まだ間もないからね……方が一って事もあるだろうよ」

——そんな少年が、これから歩む道を考えれば。

「では、これからゆつくりと、互いに分かり合っていきましょう。お互い、長いお付き合いになりそうですし」

「……それもそうか。じゃあ、先ず。俺のサーヴァントはそう言う話にも寛容な大人な女性って事で。取り敢えずはそういう感じで良いかな？」

「おとつ!? え、えつと……」

行く先の災禍を払う為に、微力ながら力になりたい、と考えるのも。きつと間違っていないのだろうと思うのです。英霊という、今を生きる彼らの、先達として。

生者のみが抱き得る、輝きが潰えない様に、と。

「へへへっ、大人な女の人にしては、結構狼狽えるやん」

「も、もうマスター！ お互いに、良き理解をしていこう、という話をした直ぐ後に！」
「悪い悪い、どうにも真剣になり切れないのが俺の悪い所だね。さて、折角だ。親睦を深める意味でも、雑談カルデアブラつきツアーとか、しておく？」

「うう……その間に、諸々な誤解を解いてもらいます……」

ただ。

このマスターは、些かと若すぎるといふか。もうちよつと落ち着きという物を持つて

欲しいのも確かでした。はい。

「もしかしたら、発見されてない未知のシステムとか見つかるかもしれないぜ」

「……もしかして、意外と余裕なのですか？ マスター」

「そんな事無いよん。好奇心を満たして心の余裕を取り戻そうとしているだけさあ!!」
「うう、余裕が無いようには見えません」

その後。

「し、式部さん。マシユも藤丸も、全然気味悪がったりしなかった！ 良い人だ！ めっちゃ良い人多いぞここ！」

等と、出生の話を為された事を、微笑ましい様子で報告して来たマスターに、良かったですね、と返したりしたのはまた、別の話でございます。

第六章

第一特異点へ突入する実況、はーじまーるよー。

さて、前回で第一特異点に突入する準備が整いましたのでいよいよカルデアス前で『特異点へ移動』を選択。第一特異点へと出発しようと思えます……とか言ってる間にレイシフト完了。到着したるはフランスはドンレミ。姉なる者生誕の土地でございます。フォウ君もシレっつついて来ていつも通りです。

さて、ドンレミを探索し……流れる様にマシユがBADコミュニケーションをかましました。いやーエクスキューズミーの発音が良くなかったんですね（白目） まあそれは置いておくとして、藤丸君のツツコミ通り、マシユがミスを犯した訳ではなく、現地の緊張がピークに達しているだけなので、マシユちゃんは心安らかに。

そんな緊張感がピークに達し暴徒と化したフランス兵はさくつと処理しますか。うーん特異点最初の相手がコレとは。まあ経験値にはなるので。ヨシ!!

で、実行フェイズが終わったので、その次に出て来た場所を探索しつつ、このカエル野郎共が錯乱しているフランス特異点について、概要をお話します。

この第一特異点はメシマズとカエル野郎が馬鹿みたいな年数殴り合ったフランス百

年戦争を舞台とした特異点です。で、フランス特異点で気にするべきは当然ながら、フランス百年戦争を戦い抜いた雄の一方フランス軍……ではありません。

『シャルル王は焼かれたんだよ。魔女の炎によつて』

で、此方の兵士の言つた通り、フランス軍は頭を失つてタダの敗残兵と化しています。でそれに追い打ち掛けてる最大の要因が。

『ドラゴンが来たぞ！ 抵抗しなきゃ食われちゃうぞ!!』

出ましたこの特異点で最も注目すべきエネミー。ドラゴン……ではなくドラゴンの亜流種のワイバーンです。

第一特異点の特徴として、このクリティカルをバンバン量産してくる、低いレベル帯にしても攻撃力の高いワイバーン種が相手の雑兵の主力なのが大きいです。元のアプリ版FGOでは『話の途中だがワイバーンだ!』というネタにされていましたが、しかしながらこのゲームだと正直、サーヴァントの体力をしつかりと削れるレベルの化け物です。

先にも言いましたが、サーヴァントは基本的にそれなりの神秘を纏っている攻撃で無いとダメージが通りません。神秘と攻撃力の高さは比例せず、攻撃力が低くても神秘の値が高ければ、サーヴァントにダメージを与える事が出来ず。

しかし、ワイバーンは神秘の値も、攻撃力も序盤の敵にしては相当に高く、サーヴァ

ントに普通に手痛いダメージを与えられて、マスターなんて紙装甲の雑魚は一撃で引き裂くレベルです。

覚醒含めて、ギリギリ張り合えるかで……で、覚醒は本当に一戦に一回、使えるか使えないかなので。まあオサツシ。

やはり、最初からサーヴァント無双をさせないための処置なのでしょうが、このワイバーン君のクリティカルが偶然直撃してガメオベラ、つてなつたマスターは実に多いので、第一特異点のワイバーンは『見つけ次第確実に殺せ』というGの如くに嫌われているとんでもない害悪です。なお普通に数はいる模様。プチプチを潰すよう絶滅しましょう。

……で、ここまで説明して分かると思うんですが、そのレベルの怪物が大挙してそのフランス軍に襲い掛かって来てるのが、この特異点の現状です。悪夢みたいな話ですね（絶望） 因みに現状もそうです。クソが!!（半ギレ）

『そこのお方! どうか武器を取って戦ってください! 私と共に、続けてください!』
——ですが皆さん、ご安心ください。

こんなゴツイワイバーン共ばかりがこの第一特異点の見所さん、ではありません。この特異点がフランス百年戦争であれば、欠かせない英霊がいらつしやります。という事でご紹介しましょう。

この金髪碧眼の、絵に描いたような鎧姿の旗持ち美少女。彼女こそ救国の聖女、ジャンヌ・ダルクさんです。ドラゴン共と戦う為に、パーティに加わって戦ってくれます。

が、加わるのは藤丸君のパーティだ（孤独のグルメ）

えっ？ 藤丸君のパーティとはどういうことだつて？ いえ別に藤丸君とホモ君の

チームが割れているだけですけど？

まあふざけるな説明しろバカヤローという反応が来るのは分かっていますので説明いたしますと……このモードにおいて、カルデアのマスターは二人いて、それぞれが別のサーヴァントと契約しています。

なので、全員が所長の指揮下にあつた特異点Fとは違い、第一特異点からはホモ君と藤丸君、二人それぞれがパーティを結成、それを操作する事になります。当然ながら藤丸君とホモ君のパーティは別の場所を探索する事も出来ますので、自由度が跳ね上がりました。因みに『Aチーム人理修復ルート』DLCを入れると最大で七チームが操作できるようになりますがまあそれは兎も角。

で、重要なのは、パーティの経験値は、それぞれ別に入る、という所です。

ホモ君は、どうしてもレベルをドンドン上げていく必要があります。で、敵のチームを潰してパーティに入ってくる固定の経験値以外には、直接倒して入れる歩合制の経験値があるんですが、当然頭数が多い方が得やすいのは間違いないです。

が、問題なのはこの歩合制の経験値は、全員に分割して入ってしまうんですよね（ブチ切れ） 当然ながら頭数が増えると、その分実入りが減ります。

サーヴァントに関して言えば、この特異点レベルで手に入る経験値なんて誤差みたいなものですが、クソ雑魚ホモ君には余りにも重要。出来る限りホモ君のパーティは頭数を増やさないと、より多くの経験値を入手したいのです。

という事で、ワイバーン君は兎も角として、一緒に来てる骸骨兵君達はホモ君自ら対処しましょう。式部さんは大火力で雑兵を圧倒できる程にパワーがあるキャラクターではないので、サーヴァントとして強敵ワイバーン潰しに集中して頂きましょう。

でもって、問題のホモ君のバトルスタイルですが、基本的に素手で殴る事しか出来ません。

まあそう言うマイナス異能を背負っていますのでこの辺りは当然ですが、その問題の素手という武器種がどんな特徴を持っているのか。

まあ、簡単に言えば『一発に賭けるクリティカル番長』ですね。

攻撃力はそこまで高い訳でもないんですが、しかしクリティカルになった時の攻撃の跳ねあがり方は尋常ではない、って感じですよ。基本的に一発で大ダメージを与えて、それで潰し切れなかったら……うん。って感じでの薩摩スタイル。

基本的に通常攻撃から拳をガンガン使う老書文さんや燕青さん、ルーラーマルタさん

とかが該当していません。特にこのゲーム内でのルーラーマルタさんは、素手の性能が相まってマジでガン殴りグラップラーと化しています。

で、この素手とホモ君の戦闘スタイルの相性ですが……良いです(ニッコリ) 当然ながらホモ君は基本的にクリティカル一発屋なので、クリティカルが絡む素手縛りはデメリットにはなり得ません。接近戦をせざるを得ないという一点を除いては(泣き笑い) プレイヤーの想定通りの構築になったとしても、この先に待つ目標をシバキ倒す時は出来るだけ近寄らずリスクを取りたくないのですけれども。もう仕方ありません。

——等と説明している間に、取り敢えず骸骨君は殴り倒せました。まあこのレベルの相手で特別な耐性がある訳でもない雑魚敵なのでね。

で、式部さんも問題なく……ではもちろんなく、しっかりとダメージ入ってます。不利クラス相手に無茶させてしまつて大変に申し訳ないですが、今の所、ホモ君のレベルを上げるにはこうしてぶん殴るしかないのです。ユルシテ……ユルシテ……

何時までも何時までも不利クラス相手に殴りあいさせるのも申し訳ないので、せめて四騎氏の内、残りの三棘みの二騎くらいは揃えたい所です。

で……戦闘後、イベント継続です。マシユのエネミー登録にドクターが増えたりとかいう微笑ましい事態は取り敢えず置いておくとして。問題は、味方として出て来てくたさつたジャンヌです。

『そんな、貴女は……いや、お前は！ 逃げろ！ 魔女が出たぞ！』

美しい聖女様に魔女だとオオラア!? お姉ちゃんだろお!? (海なるもの) 何と無礼なフランス兵隊。やっぱカエル野郎ってクソだわ……とりたい所なんです、こうなってしまうのはまあ一応理由がございまして。

それこそが、この特異点の異常に直結しているというか。まあ率直に申し上げますとワイバーンでフランス丸焼きにして食ってんのがジャンヌです (風評被害)

まあジャンヌだっていつても、このジャンヌがそうって訳ではないんですけどね……じゃあこの国を丸焼きにしてるジャンヌは何方のジャンヌ? って言われますと、まあ中二病に感染したジャンヌとしか (熱い風評被害)

中二病に感染した結果、ドラゴンの召喚まで出来る様になりました。スゲエな中二病。まあとどのつまり聖杯の力なんですけど (小声)

で、そんな中二病とは縁のないこのNormanなジャンヌと共に、この特異点を修正する流れになるのですが……この先の、ラ・シャリテにてこの特異点の第一の山場がやってきます。正直、今の戦力で安定して抜けられるかは分かりませんが、気を引き締めていきましよう。

……まあ、マトモに戦うとは言ってませんが (ニッコリ)

第六章・裏：聖女から見たハゲ頭

「——聖女ねえ」

「えつと……その……なんでしよう」

「本造院さん、どうしてそんなにジャンヌさんの顔を穴が開く程に……」

「ん？ ああいや、俺の周りには居なかつた人種だしな。珍しーなーとか、アレだ。動物園で急にタスマニアデビルとか展示してあつたらさ、その。気になるじゃん」

「せ、聖女を珍獣扱いはマズいんじゃないか!？」

「いやあくまで例えて珍獣扱いはしてねえよ?」

——何というか今、私がどんな扱いを目の前の男の方からされてるのか。藤丸の言葉で凡そは悟りました。正直、喜んで良いのか、怒るべきなのか。まあ、こういう反応は生前沢山されたと言えはされましたが……ここまで露骨なのは初めてで。

「確かに無垢そうというか。初心というか。そんな感じするなあ」

「初心!？」

「マスター! 高名な神職の方に……そんな、初心、なんて失礼ですよ!」

「いやいや褒めてんのよ? 初心って言うのは、言い換えれば純粹って事にもなる。こ

んなに純粋なのは別に悪い事じゃない。寧ろ凄いな事だけお嬢さん」

でも、こんなに露骨に見てくるにしては、何というか、純粹と言えればいいのか。その目線に悪いモノは余り含まれていないように感じます。不思議なのは……まるで、懐かしい物を見ているような、目をしているのが。

「——つと、あんまり見てるのも良くないな。ま、これから宜しくつて事で。自己紹介が遅れたな。顔面偏差値落第点、本造院康友だ」

「する前にマスターが話の腰を折ったのではないですか……えつと、紫式部、と申します。少しマスターはその……ひょうげた所がございまして。お気になさらないでいただけると」

そんな彼に、片割れの東洋の女性——紫式部さんは、とてもピツタリだと思えました。藤丸とマシユの様に、純真で、互いを生かし合う様なコンビとは違い、一癖も二癖もある様なマスターと、それを補佐できる落ち着いた教養人。互いの弱点を綺麗に埋める、本当に良く出来たペアの様に、見えたのです。

「——ふーん。その御大層な竜の魔女様は自分より弱い者だけに照準絞った虐めがご趣味と……ほー、そりゃあ御身の身の丈に合ったご高尚なご趣味だ事で」

「ま、マスター!?!」

「いやー憧れちゃうなースツゴイなー真似したいな〜」

……一癖どころか癖しかないのかもしれない。

何者かの襲撃によって、地獄のるつぼと化したラ・シャリテ。そこでの惨状を治める為に戦っていた私の前に現れた、黒い私。

自らを裏切ったフランスを燃やす私。こうして戦う私を愚かな小娘と笑い、自らの削ぎ落した残滓に、最早未練はないと威を示す私。

狂えるサーヴァントを引き連れた『竜の魔女』。

その恐るべき怪物相手に……速攻でした。本当に。彼女が朗々と語り終わったのを、聞き終えて。全て聞き終えて。そこを狙ったかのように。

本当に。敬意の欠片も無い。心の底から、嘲りの感情しか見えない、そんな声色で。しかもニッコニコの笑顔で。マスター・本造院は。そう、言いました。

間違いありません。煽ってます。

「——なんですって?」

「いやー得るものが沢山あるんだろうなー教えて欲しいなーひゅーひゅー」

『ちよつ!? 本造院君何言ってるの!? あ、あのスイマセン、ウチの子ちよつと、ちよつとだけあの……ポンで!』

「本造院さん!? 急にどうなされたんですか!」

黒い私に向けて、満面のニッコリとした笑みを浮かべて。

明らかに向こうの表情が変わっています。ニッコニコの彼とは正反対に、張り詰めた空気が漂っているのを見て、急いで式部さんが制止しようとして……

「いけません、マスター！ きけ——」

「周りの皆様もねえ、さぞ楽しんでたんでしよう？ 堂々とおいでなすつたからねえそりやあもうさぞ、さぞ!! それしか目に入らない位!!」

ふと、何かに気が付いたようにその動きを止めて、ゆつくりと下がりはじめました。一歩、また一歩と……まるで、彼から離れる様に。しかし、黒い私と、彼女が率いるサーヴァント達からは目を離さぬままに。

それに気づいてか気付かないか。彼は言葉を止めません。

「やりたい事やったんでしょ！ ねえ、麗しの竜の魔女様!! お返事くれませんかー!!」
「……サーヴァント共、先ずはそのハゲからです。私の元に、四肢を引き千切つて連れて来なさい。あの枢機卿よりも惨めで悍ましく殺してやります」

「あらこつわ。そんな急に怒らないでよー……ホールドアップでもするからさー」
ぱつと、両手を上げたその瞬間。

黒い弾丸が、式部さんが下がった方向から、計五発……正直、度肝を抜かれたのは間違いない。私の頭の上を飛び越えて飛んでいくそれは、味方の私ですら想定して

いなかった弾丸。

「っ!?」

「——!!」

当然ながら……敵である相手にとつては、それ以上。驚いた顔をした黒い私と、銀髪の女性の二人の反応は、当然と言えるでしょう。完全な不意打ち。しかし残る三人は、その事に驚くよりも先に飛びのく構えを見せました。

間違はなく、その三人は手練れなのでしょう。

「——藤丸! マシユちゃんに防御任せる! 撤退だ!! 急げ!!」

しかし、その三人が反応したのに被せる様に声が響きます。

その声に真っ先に反応したのは、声を掛けられたマスター・藤丸。近場に居たマシユの肩を叩き、下がっていた式部さん、そして、急いでその位置から逃げ出して来たマスター・本造院が自分達の後ろに下がるのを待って、私に首肯して見せました。

「くっ、舐めた真似……つてあぁっ!」

そして、黒い私が付いたのでしようが……既に私達は、大きく距離を取っています。マスター・藤丸はマシユさんに抱えられて、そして……そして、本当に、本当に信じられないのですが……マスター・本造院がシキブさんを抱えてマシユさんに並走しています。

『——まって!? 君本当に人間!?』

「どうやら混血みたいですけどオ!?」

『ああそうだね……つて違うそうじゃない!』

「山丸ごと一つ管理する為にはこれくらいのは必要だったんだよ! 我が山は広さだけはそこそこあつて一人で管理するには健康な足腰が必須なんだ! 人間舐めん!!」

……マシユさんが、特別素早いサーヴァントではないではない。というのは間違いない模様で明らかに『余裕』という物を投げ捨てた声を張り上げました。

「つつても全力も全力で後先考えないからこの後間違ひなく死ぬからその辺りは加味して頂けると非常にありがたいです!!」

「ご、ごめんなさい私の所為で!」

「式部さんは関係ないわ寧ろ羽のように軽いからご安心を!」

「えっ、あ……ありがとうございます……」

その割には軽薄なやり取り取りなきつてる、とは思いましたが……その横顔を見て、その考えは投げ捨てました。

目が血走り、歯を全力で剥いて脂汗を吹き出しながら、決死の形相で駆けるその姿に……その、余裕、とか見るのは、失礼とか、もうそういう次元じゃないです。正直に言

わせてもらおうと若干、ヒきました。凄い失礼だとは、思うんですけど。

多分、会話で気を紛らわせないと……切れてしまうんですよう。今、この速度を保つのに必要な何か。きつと。

「だ、大丈夫か本造院!? あ、あの！ 終わったたら回復礼装使う？」

「ぜ ひ お 願 い し ま す!!」

「う、うん！ 分かった！」

後ろをちら、と確認しますが、今の所……誰かが追ってきている、という様子はなさそう。完全に隙を突いて逃げ出す事には成功したようです。

「どうやら振り切った模様です！」

「ドクターッ！ 後何キロオツ!？」

『そ、そんなに必要ないよ！ もうちよつとだけ！ もうちよつとだけ頑張つて!』

「オーライその言葉を待ってたあと十秒と持たないからその辺りシルブプレ!!」

『う、ウイマダム!!』

——その後。

本当に十秒ほどで限界を迎えたマスター・本造院は物凄い勢いで地面へと倒れ伏してしまい。後は私が担いでいく事になったのですが……その時の彼の表情は、本当に死んでいるかのように見えた、とだけ。

「……」

「凄かったわね、今の殿方！」

「うん。(顔が) 凄かったね。出来ればマリアに近づけたくない位には」

「あら、どうして？ ああやってとても頑張る人、私は好きよ！ それに周りの人達も」

「それにしたつて、あんな鬼みたいな顔してる人を君に近づけたくないよ」

「でもきつと、このフランスを助けようとやって来てくれた人たちよ？」

「……まあ、君が言い出したら聞かないのは知っていたけどね。分かったよ。行こうじゃないか。その代わり、あの禿げ頭にはあんまり近寄らない様に」

「もう、アマデウスったら。心配性なんだから……」

第七章

フランスをハゲが駆け抜ける実況、はーじまーるよー

前回は、遂に第一の山場に突入し……撤退しました（爆笑い）

実はこのゲーム版FGO、幾つかのイベント後のバトルは、撤退してもイベントが進みます。その代わり経験値は全く入らないのですが、下手に挑んで全滅するよりは、探索の分で手に入れた経験値で妥協するのもアリです。

因みにここで撤退した場合、悔しがる邪ンヌの可愛いボイスが聞けるので、邪ンヌの事が大好きなジル予備軍の方々はそれを目当てにここで撤退を選ぶのも宜しいでしょう。

『——活躍は見せて貰ったわ。旅人の皆様』

『活躍って言うか逃走劇だけだね。見たのは』

そして、本来は邪ンヌとのバトル中に合流するお二方とも、撤退の関係でタイミングがずれて合流となります。

という事で、美しきフランス女王。マリー・アントワネット様と、その従者兼音楽家のヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト。両者とも、逃走した場合に聞ける場合

のボイスで初登場です。逃げて申し訳ない。でも生きねば（ジブリ）なのでお願いユルシテ……ユルシテ……

取り敢えず麗しきマリー様と下ネタ全力音楽家（正当評価）を仲間に加えて……藤丸君のパーティにシユウウウウウウツ!! 超!! エキサイティンツツ!! この現状で僅かでも固定歩合経験値が減る可能性があるのを絶対に……絶対に……アアアアアアチクシヨウどうしてももう一人入れないといけない! 編成人数のチュートリアルウウ……! 特異点Fで終わらせとけえええ……!!

という事で、編成人数を最低限三人にしろ、というゲームからのお達しが来ましたのでせめてもラストキルだけは取られない様にアマデウスを選択しておきます。アマデウスは式部さんと違い、純正サポーターなので戦わせるのは寧ろ悪手、敵の妨害と、式部さんの火力上げに集中してもらいましょう。

『いかに悪魔の如き演奏者とはいえ、僕はサーヴァントだ。指揮棒は、君に譲るよ』
宜しくオナシヤス!!

一見軽薄そうに見える彼ですが、その実は一本筋の通ったマリー親衛隊。彼女から引き剥がすのは正直心が痛みます……でもまあ仕方ありません。我が実績解除の糧となれ。

さて、今回はド派手に逃げ出したのですが、しかし何度も何度も逃げる訳にも行きま

せん。逃げてばかりでは経験値もあまり入らないので……はい……あ、霊脈に召喚サークルが設置されましたね。

さて、取り敢えず暫くは此処がキャンプ地になります。で、ここくらいしかタイミン
グが無いので一回くらいは入れておきましょう。

計画フェイズで、キャンプ地を選択、そして……仲間との交流を選びます。

エリアを探索してキャラとの交流イベントが発生するのは違い、特異点ではカルデア勢力内のメンバーで直接交流する事が可能です。カルデアの時は各々好きな時間を過ごしていますが、特異点では固まって行動しているのでこういう事が出来る……って感じなんですけど、このせいでカルデアで特定の人と交流したい場合ってちよつと手間だったりするんですよ……まあ、それは置いておいて。

今回、交流するのはやはり我が第一のサーヴァント。式部さんですね。自分のサーヴァントとは絆を上げて置く事に越した事はありません。

式部さんとの交流での特徴として、特異点毎にその時代に沿った本のお話をしてくださいます。顕現したばかりで一体何処から仕入れたのか、という豊富な知識を披露して下さいるので、普通のためになったりもしますね。

まあこんな見た目ヤクザの軽薄ハゲに書物の情報を説いて一体どうするのか、という疑問はございますが……野獣は勉強しちゃいけないという法律はないし……（目逸ら

し)

後、たまにですが、持つてるスキル等に影響される、ランダムな『泰山解説祭』絡みの会話が行われるのも特徴ですね……で、行われているのがそれです。あれ、おかしいな。たまに、つて言つてたのにどうしてこんな事に。そんな無駄な縁は必要ないんですけど……

『はわわわっ!? 申し訳ありませんマスター! わ、わざとでは無くて……!』

でも可愛い式部さんの慌て顔が見れたのでモーマンタイです(愉悦)

まあホモ君の心の内くらい幾らでも見せて置きゃええやろ。見せても減るもんじやないですし……良いから絆上げだ! とばかりホモ君の犠牲を踏みしめて、さてこの次は流れる様に探索で経験値を……あつ。イベント。

このタイムリングでの襲撃、という事は間違いなくあの方ですね……因みにアマデウス の『寝息は堪能させてもらった!』発言はFGOの中でも間違いなく上位に入る名言なので聞くに越した事はないです。

ただ最上位陣に比べると霞んでしまいますけど。FGOつて変態発言する人多すぎませんかね……?

『何者——そうね、私は何者なのかしら』

シヨウゲキ! バーサーク・ライダーIIサンのエントリーだ!!

いえ、別にバーサークライダーさんが単身殴り込みかけて来たっていう男らしい状況では無くて。その前に現れた先遣隊は、この間に殲滅しておきました。特別なモンスターが出たのかも無いので、はい。

さて、ここで現れた美しい蒼い長髪を湛えた美人さん、ことバーサーク・ライダーさんの真名は、マルタ。聖女マルタさまです。そのへそと胸の谷間を強調する服を着た聖女が一体何処にいる、と言われてしまうマルタ様です。

その逸話は、嘗て巨大なドラゴンを拳一つで鎮めて……あ、間違えました。その身一つで鎮めて見せたという、人類史の中でも結構なヤバイお人です。

日本では聖人としてその名前が挙がる事は少ないですが、海外、それもキリスト圏であればその知名度は恐ろしい事になる高名な聖人である事は間違いありません。

で、このゲーム版FGOにおいてのマルタさんですが、まあキャラとしても人気は高いのですが、問題はその攻撃性にあります。

アプリ版とは違い、一ターン限定ではありますが自らの宝具であるタラスクを召喚し、しかもタラスクは召喚されたターンで消えるので反撃が出来ないというクソみたいな攻撃をして来ます。しかもその火力は第一特異点とは思えないレベルの一発で、複数人を対象に取る事が出来ます。

それだけではなく、状態異常を掛けても普通にスキルで治療されますし、こつちには

デバフを撒いてきますし、器用貧乏とかただの嘘だろう万能サヴァントやんけって言う一面を容赦なく見せ付けてきます。

セイバーを倒した時は、最後の最後に前後を入れ替えてサヴァントを狩る、というバカみたいな行動をしていましたが、アレは危険性を出来るだけ減らせる行動パターンがあつたからなので、絶対に今回はホモ君を前面に出せません（半ギレ）

正直、サヴァント一騎分のラスキル経験値があれば、相当成長できるのは間違いないのですが。セイバーのそれを経て尚、全然ホモ君は人間相応です。無茶は出来ません。

ホモ君が死んだらゲームオーバーなので、生存を優先して頑張つて頂きましょうか。因みに私はマルタさんの経験値をゲットしようと思つて欲張つて死んだクチですはい（前科一犯）

という事で、絶対に後衛にはホモ君を置いて全力で仕事をして貰いましょう。サヴァントの追加行動権はホモ君も使えますので、今回はマスターとしての仕事をしっかりしてもらいましょうか。

あ、雑兵のスケルトン君は狩ってもらいますけど（経験値狂）

……どうでもいいですけど、相手ライダーなんですよね。ウチのパーティ、キャスターしかないんですよね。うんうん。

成程。

藤丸君のパーティーに任せようかな！

第七章・裏：彼が彼女を知ってる訳

「——凄いなあ、聖女、つてのは」

「どうなされました？ マスター」

戦い終えたその後。

バーサーク・ライダー、マルタは、リヨンへ迎え。竜殺しを探せと言いました。恐ろしい災厄を従えるという、竜の魔女を倒す為に、と。

抗いがたい狂化を付与されて尚、私達に助言を残すその意思の強さは、きっと誰であつても感じ入るものがある筈。しかし……マスターの表情は、それとは少し違う様な。

「……ん？ ああいや。ちよつとなあ。あの心の強さは見習いたいって言うか。それだけなんだけども」

「そう、ですか？」

「それだけだよ」

マスターの瞳に一瞬、寂しい光を見た気がしたのです。それも、嘗てを偲ぶような、遠い何処かを見つめるような。そんな。

誇り高い英雄としての矜持を見せた、マルタ様。彼女の最後の姿を、マスターはじつと見つめて居ました。目を離さぬように、と自分に言い聞かせている様に、食い入るように。透き通った瞳で。

その顔が印象的で、つい見ていたからこそ、その事に気が付けたのだと思います。

「……」

「……もしかして、心読んでたりする？」

「い、いえそうでは無くて……その」

……実際に読めるとは、口が裂けても言えませんが。

「そんなに分かりやすかった？ んー、じゃあアレかな。自分が思うよりも、結構あの聖女様に心動かされていたのかねー」

そんな私の心の内など知る由もないマスターは、まいったね、と困ったように呟きました。

「いやさ、自分がセコイからね。綺麗な物に憧れるのは、人間のサガって奴じゃない？ 物語を綴るお方として、その辺りは分かるんじゃないかな」

そう言われ、考えてみれば。確かに自分が物語を綴っていた時も、確かに人の感情の悪い部分や、マスターの言うとおり、美しい部分に焦がれ、それを少しでも、表現したいという原始的な願いが根底にありました。

マスターは、筆の縁で私を呼んだ、と言いましたが、案外それだけでは無いのかもしれないと思いました。

「——マスターは、そう言った心を、笑わないのですね」

「ん？ そりやあなあ。思いの強さって奴を、嫌って言う程知ってるし？」

「そうですか……そうですね。ふふ。であれば、私達の相性は宜しいのかもしれませんが」

「おや、そうなの？」

「申し上げたではないですか。今、ご自分で。私は思いを綴る英霊にて……思いの強さを知り、そして信じていたからこそ、そんな所まで、行けたのです」

そう言った私にマスターは、一瞬視線を向けて。

「——ああ、そうだな。きつとそうだ。そうだと良いな」

笑ったのです。

私がそれに抱いたのは、喜ばしき……だけではなく、いえ、肯定された喜ばしきよりも勝っていたのは、驚き。そのマスターの笑った顔が……召喚された時からの剽軽な印象からは想像もできない程の、優しい微笑みだった事への。

「……さて！ 取り敢えず、問題は片付いたんだし……どうする？」

「へ？」

「もうこんな時間だ。休むは休むにしても……アマデウスの野郎には気を付けないとい

けないぜ。何せ、さっきの発言聞いてなかったまさか？」

「あ、そういう……つて、マスター!？」

けれど、それは直ぐにカラっとした笑いの中に溶けて消えて、見えなくなってしまうだけだ。

「おいおい、僕が何時だつて女性の生理的な音に耳を傾けてると思ってるのかい？」

「何時だつてどころか四六時中でしょ？ 男だもんねえ」

「アハハハハハッ！ 分かっているじゃないか！」

そうして、アマデウス様の方へと脚を勧めたマスターは、もう何時もの剽軽な様子でした。アマデウス様のその……些か……な冗句に対しても、まるで怯む事もありません。本当に変わったご様子もなく。

「だからアンタは式部さん達から離す。そう決めた」

「……えつ、マジかい？」

「抵抗しても良いぜ？ ジャンヌやマシユちゃんに鉄槌下して貰う口実が出来るからなげひひひひひ」

「うっわ、せこいなあ」

そのままアマデウス様と共に、焚火の傍へと行ってしまいました。

「……」

「どうしたの？ そんなに彼の背を熱く見つめて」

「はわっ!？」

「きやつ」

……それに集中していた所為か、後ろに人が来ていたのに全く気が付かなかつたので、声を掛けられて素つ頓狂な悲鳴を上げてしまったのは、あの……とても、とても恥ずかしかつたです。はい。

振りむいた先に居たマリー様は、少しびつくりされたお顔をされていましたが、直ぐにくすくすと笑い始めました。

「あら、ごめんなさい。そんなに驚かせるつもりは無かつたの」

「い、いえ……少々大袈裟に、反応してしまつて……」

「そんなに周りの事が見えなくなるくらい、彼の事が気になつていたのね」

「……はい」

マリー様は、私の言葉に頷いて、それから先ほどの私と同じように、マスターとアマデウス様に目を向けました。

「罪な人ね。こんなに綺麗なお婦人をやきもきさせるなんて」

「い、いえ！ マスターが悪いのではなくて……」

「ねえ。まだ話す機会がないのだけれど、あの方はどんな人なの？」

「え？ えっと、それは……明るい方だとは、思うのですけど」

私自身も、そこまでマスターに詳しい訳ではないので……と、言う前に、マリー様はパンと一つ、胸の前で手を合わせ、ニッコリと微笑まれて。

「ええ、ええ！ 丁度いいわ、今から話してきましょう！ 分からない事は自分で知るのが一番いいもの！」

「えっ、あの、はい、その……それは、宜しいと思えますけど」

「では貴女も一緒に！ 相互理解を深めるのは良い事だと思うわ！」

「えっ」

殿方同士で話をしているのですから、割って入るのも如何な物でしょうか……等という暇もなく、あれよあれよという間に手を引かれ、私はマスターの元へと引つ張られて行つてしまひまして……しかし、反応したのは、マスターやマリー様よりも先に、アマデウス様が先でした。

「おやマリア、こんな男くさい所に何か用かい」

「そちらのツルツとした殿方に御用があるの。良いかしら」

「——ああ、良いとも！ コイツ思つてたよりも全然ヘタレで、マリアに悪影響与える程気合なんて入つてないよ！ この見た目でさあ、ウケるよねいやマジで！」

「酷い言い方だねえ……ヘタレって」

「いやだつて君……そのなりで繊細とかほざく積りかい？」

「そう言う事じゃねえつてんですよお。まったく傷付くわあ」

——どうやらマスターとアマデウス様は、暫く話している間にある程度打ち解けた様でした。殿方はこういう所ありますよね。等と思つている間にも、マリー様はその屈託のない笑顔をマスターへと向けられて。

「あら、そうなの？ 見た目にそぐわずというのは失礼かしら」

「……いや、その、ヘタレじゃねえつすよ」

しかし、マスターはその笑顔に、笑顔で返すという事も無く……なんというか、少し気まずそうというか。

「そんな気合入つてる訳でもないですけど、人並みです人並み」

「でもアマデウスの人を見る目は確かだよ？ いいえ、聞く耳、といった所かしら」

「まあ、そりゃあ大偉人様の評価を覆すのは難しいにしても。そんなヘタレてるんだつたらそもそもここに立つてないでしょうよ女王様」

「……あの、その綺麗な後ろ頭だけじゃなくて、お顔、見せてくれないかしら」

「いや怖い物見る必要ありませんよ」

そもそもマリー様を見て居ません。完全に。目を明後日に向けています。禿げた後頭部しかマリー様に向けて居ません。気まずそうとかそう言う問題じゃありません。

アマデウス様のヘタレという評価を覆せませんそれじゃあ。

一体どうしたんでしょう。

「私、貴方に何かしたのかしら……」

「……いや、何かしたって、訳じゃなくて」

「じゃあどうして？」

「どうして、って、そりゃあ。あの、イメージと大分違ったから、その……」

「イメージ？」

「……アンタの事は、少しは詳しく知ってるもんでな」

マスターは一瞬、マリー様の方をちら、とみて……改めて顔を下に向けました。

「あら、そうなの？」

「フランスの美しい王妃様。有名な発言とか……」

「あら、美しいなんて。お上手ね」

「いや、でも……そこじゃなくて、ですね」

「そこじゃない？」

「……あー、もう……兎に角！ 良く知ってる偉人という話をすればいいんだって戸惑ってたんだ！ それ以外にはねえんですよ！ 小市民なもので！」

そう言ってマスターは立ち上がってしまっ、マリー様から離れ、私の方に近寄って

きて来ました。なんとというか、逃げる様に来たというか。マリー様の静止をも振り切るその勢いに若干圧されてしまいました。

「……どうなされたんですか？ マスター」

「いや。だって、ちよつと……これ以上はなあ」

「話しくい？」

「だって……知るきつかけが、さ。自分の、その……」

マスターは周辺をちらちらと見回してから……私の耳元にそつと口を寄せると――

「……ご自身の処刑に関する本だった、なんてさ……言いにくいじゃない」

――と、囁いてきたのです。

第八章

フランスを激走する実況、はーじまーるよー。

良く考えれば、マルタさん相手に式部さんをぶつけるとか言うともない無茶をせざるを得ないという。不利相性だつてアレだけ言つてんだろうが!! し、仕方ないんじゃない皆様、このコンシューマー版F G Oはアプリ版と違つてそう簡単に召喚が出来んじゃないグギギ……

という事で、最初に式部さんを引いた時点でこの地獄の様な状況は覚悟してました。はい。でも召喚し直しはしませんそれが運命つて奴なので。

という事で、アサシンクラスの居ない辛い戦闘ではありましたが、なんとか勝ち切りました。レベル上げをしていて本当に良かった……!! あとNPCのジャンヌ、そして藤丸君の相棒マシユ、二人のコンビで守りを固めると、序盤でやつちやいけないレベルで優秀になります。

経験値はそれぞれですが、バフとかは文字通り全体に入ってくれるのがこのゲームの良い所ですね。じゃあ別にパーティ分けする必要ないじゃん、とか思いますけどマスターごとの指揮権が別なのでパーティに分けた方が分かりやすいのでしょうかがないね。

『いい、最後に一つだけ教えてあげる。『竜の魔女』が操る竜に、貴女たちは絶対勝てない』

そして、マルタさんを撃破した事で次なる目的地が示されました。

『リヨンへ行きなさい。嘗てリヨンと呼ばれた都市に。竜を倒すのは聖女ではない。姫でもない。竜を倒すのは、古来から『竜殺し』と相場が決まっている』

バーサーク化してのにこうして道しるべを示して下さるマルタ姉さんは實際聖女。もし召喚する機会があったら皆さんも彼女の姉御っぷりを味わってみてください。ト
ぶぞ（真剣）

という事でマルタさんからの助言に従って善は急げ、リヨンへ向かうとしましょう……という流れなんです。しかしながらここで俺氏、敢えてリヨンには向かわず何故か周辺の探索を開始。

まあここまで見ていてくださった皆様ならお判りでしょうが、リヨンに向かうにはリヨンの情報を手に入れないといけない訳です。まあ冬木と同じですね。別の都市に向かうルートを見つるのであれば探索は必至。

で、竜の魔女に滅ばされたリヨン、そしてそこから逃げてきた避難民と、大きな剣を持った守り神。そして、ジル元帥に率いられたフランス軍の残党の情報をゲット。

これでリヨンへの道が開きました。後は頑張つて来たマスター二人へのマリー様の

情熱的な褒美とかがありました。それはマリー様にとっては当然の事なので余り気にする必要ありません。

透き通ったガラスみたく純粋で、情熱的な人ですからね……つと、それだけで終わってはいけません。まだまだ探索は終わらせませんよ。ここでやらないと間に合わない。

『——竜の魔女の兵隊？ ああ、見たよ。ドラゴン共だけじゃない。黒い影みたいな恐ろしい化け物共さ。それを言っても、誰も信じてくれないんだけどな』

よし。先ずはこの会話が聞きたかった。え？ この会話がなんなんだって？ いやー、実績解除のには必要なんですよね……

実績『鬼血の継承者』は、特定のサーヴァントを倒す事で獲得できる実績なのですがしかしながら、その特定のサーヴァントは出すだけでも相応に苦労するキャラクターなのです。

DLCなんでサツとね、そのキャラクターを出して貰える思いきや、しかし型月ゲーは甘くなかった。

まずそのフラグを立てるために、各特異点で特定の会話や、行動で発生するサブイベントを熟す必要性があります。

サブイベント、と言っても会話が発生させてしまうとメインイベントが終わった直後

に発生するので必ずクリアする必要があるのですが。

まあ何はともあれ、実績を解除する為の用が終わり、道も開けました。こうなればもう迷う必要もなく速攻リヨンです。

マルタさんから言われた『竜殺し』にお会いしに参りましょう。まあ竜殺しなんで、この空飛ぶ蜥蜴だらけの特異点では大活躍してくれるでしょう。いやー楽しみだなー楽しい楽しみだなー

『然様。人は私を——オペラ座の怪人と呼ぶ』

うるせえ!! 香子さんのカモになるようなサーヴァントはカットだカット!!

……すみません。いや、ファントムもね? カッコいいサーヴァントではあるんですよホント。でもこのファントムは、マジで邪ンヌの尖兵以外の役割が無くて……一応、この後やべー奴が来るヨ、的な事を警告してはくれるんですけど。この後のロマニの『サーヴァントを上回る超巨大生命反応だ!』っていうセリフにつなげる前振り役として雑な扱いを受けてるんですよ。

まあ、兎も角今は正直蛇足としか言いようがないというか。

彼の本当の活躍、というか。悪役としての活躍が見れるのは大分先なので、ファントムさんをしつかりと映すのは取っておきましょう。(やるとは言っていない)

さて……妨害は入りましたが、本邦初公開!

Fate/Apocryphaの黒のセイバー。最初に脱落しても多分一番カッコ良かった大英雄！偉大な竜殺し！セイバーと言えば青いのと赤いのとこの人！しかも謙虚に『すまない』と、言った！ジークフリートさんです!!

『——次から……次へと……!』

いや死にかけとるー!?

酷い傷という事が余りにも分かりやすい絵。まさかここの立ち絵が追加されていると誰が思ったでしょうか。こんな所でクオリティ上げなくていいから……いや問題はそこではありません。なんてこった！竜殺しが使い物にならねえと来た！（鬼畜外道）

違うんですよ、この人は元からこんなだったわけではなくて……困難を経て（激ウマギヤグ）こんな体になってしまっただけ。取り敢えずジークさん回収。

ロマニの言った超巨大な生命反応がこっちに來ている状況で、ジークフリートさんはボロボロって言う中々なシーンですがしかし、ジークフリートさんは、こんな時でも大英雄です。

『二度蘇ったのなら、二度喰らわせるまでだ……!』

ジャンヌ、マシユの二人の完全防衛でなんとか一撃だけはしのげるレベルの怪物、型月において無理ゲーの代名詞、真の竜種、ファブニール。

邪ンヌが再びリヨンと、カルデア一行を焼き尽くす為に連れて来た切り札ですが、このボロボロのジークフリートさんの残る僅かな魔力を賭けた『幻想大剣』で、あつさり退きさがりやがりました。

これに関してはファブニール君がクツソ情けない蜥蜴野郎、という訳ではありません。ジークフリートさんが凄いのです。かつこいいいなー、憧れちゃうなー。

しかし、これでジークフリートさんは本当にダウン。このボロボロの彼を引き摺ってカルデア一行は、リオンを離れ退却する事になります。そして邪ンヌも、彼を見逃す訳もなく、追手を差し向けてきます。

ここで来るんです。サブクエスト関連のイベントが。

このリヨンからの撤退の際、カルデア一行は、リオンに攻め入ろうとして、しかし逆にワイバーンとかに襲われているフランス軍に出くわします。率いる將軍は、当然ジル・ド・レエ元帥――

『アレが竜の魔女だ!』

ではなく、ここでの指揮官はモブなんですけど。

ここに襲い掛かっているワイバーン、そしてスケルトン君達を追い払おうとする一行に、更なる脅威が襲い掛かってきます。

んで、この戦力は追手の数人のサーヴァント達。本来のメインストーリーだとこれだ

けなのですが、実はさっきの話を聞いておくとこれにシャドウ・サーヴァントの援軍が加わるのです。

まあこれ自体は余り脅威ではないので、ちよつとオマケが付いたくらいに考えても大丈夫です。肝心なのは此奴が出現した事で、実績解除の道筋が立ったという所です。

で、その追撃を仕掛けてくる敵は三騎。

先ずはこの前に紹介し損ねた(意図して逃げ出した)女性アサシン、カーミラさん。血の伯爵夫人。ホワイト髪が美しいセクシー系美女。尚趣味は拷問。

『処刑人として、一人の人間を二回殺す運命なんて、この星では僕達二人だけだと思っただ』

後この発言とその時の恍惚とした表情で『あつ、やべーやつだ』と分かりやすい処刑人のシャルル・アンリ・サンソン君。ロクデナシのアマデウスが『うげ』的な反応をしている時点でどんな相手かはお察しを。

いや、今がおかしいだけであつて、ずっとこうな訳では無いですけど。

で残る一騎は……まあ、普通に面倒くさいバーサーカーが一騎。金髪碧眼コンプレックス(風評被害)で、ジャンヌさんを見つけると激昂します。

この三人に加え、シャドウサーヴァントが一騎、付いて来ています。油断せずに、確

実に仕留めていきたいと思えます……なんてこつた！ シヤドウ・サーヴァント以外、
敵側に変人しか居ねえ!? (震え声)

第八章・裏：ムツシユ・ド・パリ

勝負は、アマデウス様の一撃にて、決着しました。

もはや、先程迄脇を固めていた黒い影は地に付せ、動かず。

「ぐっ………！」

「気分は、どうだ？ 変態野郎」

処刑人、シャルルIIアンリ・サンソンは、遂にその膝を地面に付きました。敵方の三人の敵の内一人を打ち倒し……近くを見てみれば、ジャンヌ様は敵方の女将を打ち据えて退け、黒い騎士も、マシユ様の守りを突破できていません。

そして今……空のワイバーンは、突如として現れたフランス軍の砲兵の火力によつて退けられようとしていました。

「——なんだ、あのサーヴァントの硬さ……は………！」

「サンソン！ ランスロット！ 撤退を——！！」

「ぐっ」

形勢逆転、とまでは行かずとも。なんとか彼らを退ける事には成功したのでしよう。そう思うと、体から力が抜けそうになって。

「……麗しの君。マリー・アントワネット」

「サンソン」

「次こそは、君の首を——僕が」

「やめとけやめとけ。アンタに切られたんじや、この人も無念に思うだけだ」

——一瞬で体に入れました。

ぎよつとして首を向ければ、サンソンとマリー様の間に、マスターが彼女を庇うように立っていて、目の前の処刑人に睨まれていたのです。

「……部外者が、僕と彼女の間に割って入るな」

「部外者なのは百も承知だけどよ。でも俺は事実を申し上げたくてな」

「何？」

「処刑人、つてのはプロだ。国に命じられて、私情を封じて相手の死を安らかな物にする為に一撃で首を刎ねる……凄いいもんだと思うぜ、ムツシュ・ド・パリ刑人頭領」

しかし、そのサーヴァントの眼光にも怯まず、マスターは言葉を紡ぐのをやめません。止めようと思って近づこうとして、しかし……そのマスターの眼光に、足を進める事をやめてしまいました。

その眼は、相手をさげすんでいるのではなく、まるで。

「だが今はどうだ。アンタは私情も私情で、自分の獲物に舌なめずりをする、獣そのもの

じゃねえか」

「け、獣だと!？」

「ああそうだ。雇い主に命じられて、冷酷に、そして真面目に。自分が生涯を賭けた仕事を執行していると、自分に誓えるか処刑人！ 例え悪逆に落ちても、自分の仕事に誇りをもつて執行してると、言えるのかよ!!」

その眼は——まるで、憐れみを持つて、煮えたぎっている様に、見えて。

「……………」

「アンタは敵だ。それにどうこう言う積りはねえよ。でも今のアンタが刎ねるべき首は少なくとも、麗しの王女さまじゃなくて。狂った衝動に任せて、自分の仕事にも泥を塗った愚か者じゃないのか」

マスターは、今まで私が見て来た時以上に、確実に饒舌でした。心から、サンソン様に語り掛けているように思えました。感情に任せて必死なように、見えました。

燃え滾る様な瞳の熱は、しかしマスターが言葉を紡ぐたびに、少しずつ失われている様に見えて……………少しずつ、悲しみに、彩られている様に、見えて。

「——処刑人つてのは罪人の最後を飾る、崇高な職業じゃないのか」

「君は……………」

「そんな仕事だからこそ、私情を挟んじやいけねえだろうよ。仕事に順じ、冷静に首を刎

ねなきや、樂に行かせてやる事なんて、できねえだろうよ……」

声も少しずつ、小さく、最後には言葉は消えて。

そんなマスターの様子に、サンソンは……何も、返せないようでした。

「なあ、処刑人。罪人に寄り添う人。アンタの刃は、今振るわれるべきか？」

「――」

「しつかりしてくれよ……そんなんじゃ……」

そのまま地面を見つめるサンソン。私の隣のアマデウス様は、少し苦い顔をしながら、マリー様は、少し心配そうな表情で彼を見つめ……その可愛らしい目が、驚愕で見開かれたのを見ていたのは、その三人を外から見ている、私だけだったのでしよう。

「ダメっ」

打ち倒され、地面に伏せていた筈だったので。しかし。

黒い影法師。シャドウ・サーヴァントが突如としてばね仕掛けの如く体を起こしました。その片手に握られていたのは、片刃の剣。日本刀と呼ばれるそれ。日の光を照り返してキラリと輝いたそれは、マスターとサンソン様を庇うように出た、マリー様に――

!!

「マリー様ッ！」

「や、やめっ………！」

——その、瞬間でした。

閃いたのは、片刃ではなく、両刃の大剣。正しく一閃の斬撃が、影法師の首を見事に断ち切つて、刎ね飛ばしていたのです。

「——」

「サンソン……?」

「その少年の言うとおりで。僕は情熱ではなく、冷酷を持って、君を切るべきだったんだ。そうでなくては、刃先は情で狂いかねない」

大剣を振り切つたのは、地面に膝を突いていた、サンソン。立ち上がり際、踏み込んで放つた斬撃とは思えぬ程に、鋭い一撃でした。

しかし驚いたのはそれだけではなく……本来、敵方の筈のサンソンが、何の躊躇もなく味方を切り裂いたという事。マスターの命令は、私達の追討の筈なのに。

「王妃。君を……苦しまず、送るのであれば、ね」

「——スゲエな、コレが……」

「これは、それを思い出させてくれた、礼だ。ただ一度きりの助太刀だよ」

「ムツシユ・ド・パリの、本気の処刑の太刀かよ。ぜんっぜん見えなかつた……ははっ、そりゃあ、苦しむ暇もなくあの世行きだな」

そして、味方を一人切り倒して見えたその表情は……先ほどまでの、熱に浮かされた

それとは大きく違い、涼やかで……冷ややかで、思わず見ているこちらの背筋が凍り着いてしまう程に。

今の彼は目の前に無力な赤子が連れてこられたとしても何も考えず一撃でその首をすっぱりと刎ねる。そう言われても、納得するだけの迫力に満ちて居ました。

「——サンソン、何をしているの!?! そのシャドウサーヴァントは……!」

「僕を切りつけようとしてきた。だから迎撃した。僕らは仲間でも何でもないだろう」

「……つち、ジル・ド・レエめ。不良品を渡して来たのね」

「それより、ランスロットは。撤退の指示はしていたのでしよう」

「従う積りがないのよ……もう放っておいて逃げるしかないわ」

一歩下がっていたもう一人のアサシンは、どうやら戦っていた黒い騎士、ランスロットに撤退を呼び掛けていた模様ですが、未だ前線からから離れていない様子を見るに、どうやら本当にまだ戦うお積りの模様です。

「——そうか。であれば構わない。僕らだけでも」

「ええ……どうやら、あの黒い騎士は、聖女様にご執心の様ですし——その命燃え尽きるまで戦いなさい! 狂騎士ランスロット!」

そう言つて撤退する二人のアサシン。

どうやら……なんとか、退けられた模様です。ジークフリート様を守らねば、あの恐

るべき竜に、太刀打ち出来ないこの状況で。敵の不意打ちも、結果として不発に終わりましたが。これは我々の勝利だと言えるでしょうが、しかし。

シャルルⅡアンリ・サンソンのあの変容は……正直、脅威を覚えざるを得ません。想いの持ちよう一つで、人間は意外な程大きく変わるもので。

「——つたく、やったな君。ああなつちまったサンソンは厄介だぞ」

「いやーま……えつと……アレだ！ あ……どういえば良いんだろうなこれ」

「君以外に分かる訳ないだろうが。もしかしてだけど、彼のファンだったりする？」

「……ファンって訳じゃないけども。まあ良く知ってはいるだけで」

「何で知ってるんだい。アイツの事なんて」

「ノーコメントで」

——マスターは、マリー様の事を、処刑の事を書かれた本で知ったのだと言いました。であれば、サンソンについても……

マスターは、どうしてサンソンという存在を知ったのでしょうか。

あの表情に、言葉に、関係があるのででしょうか。

それが、少し、気にならなかったと言えば。嘘になります。

第九章

ジークフリートさんを癒す実況、はーじまーるよー。

前回は、シャドウサーヴァントを加え強化された敵戦力を見事撃退しました。まあ正直苦しいという事は無かったです。所詮はセイバー単騎の影鯖が増えた所でそこまで全てがひっくり返る、という訳でもなかったのです。

とはいえ、コレが居る、ということ自体が大切なので。それに、この謎の影鯖がウザっとなくなってくるのはもつと後半です。今余裕だからと言って、油断をしてはいけません。

さて、今回はジークフリートさんを治療する為に奔走する回となります。

というのも、ジークフリートさんの傷はタダの傷ではなく、呪いをかけられて治療が難しくなってしまうついでです。仕事をしてもらうには、先ずその呪いを解いて、その上で傷を治して貰わないと厳しいです。

その呪いの解除を聖人が少なくとも二人は必要、との情報が聖人専門家（本人が聖人）のジャンヌさんから出ました。という事でフランスを聖人探してあちこち向かう必要がございます。

しかし、このフランス領を一つのチームで巡るといふ効率の悪い事はしたくない為、チームを二つに分ける事になりました。

『思いついたわ、わたし！ 今こそくじ引きをしましょう！』

そして王妃様のお言葉により、パーティがシャッフルされます(絶ギレ) ホモ君に経験値を出来るだけ裂きたいって言うのによオ!!! アプリ版だと、アマデウスが藤丸君チームについて仕事をしていたのですが、今回は一体どうなるというのか……出来ればアマデウスにはこっちのチームに……!!

『じゃあ私は、此方のチームに！ よろしくお願いするわね！』

ああああああ(絶望)……はい。分かってました。シャッフルとは言いますが、實質このくじ引きは、原作通りのパーティを作るための言い訳に過ぎません。

ホモ君は原作でマスターの居なかった、マリーとジャンヌチームについて行くことが決まっているのです。まあ、戦力的には申し分ないんですけど……経験値……経験値！ という事でこの無念をフィールド探索に込めてやりたいと思います。因みに此方のチームだと特に何か、特別な事が起きる、という事も無く。基本的にはアプリ版の動きをなぞるばかりになります。

まあとはいえ、この流れはもう読み切っていた事なので文句は言えません。特別な事はありますが、一応戦闘と、ここでしか聞けない会話もありますし。

という事で、しばし藤丸君、マシユ、アマデウス、ジークさん達に別れを告げて、ここからホモ君はノンケのお友達大歓喜なハーレムパーティ（諸説）で、ここからフランスをノンビリ行くことになります。

まあアプリ版では聞けない会話など、このコンシューマー限定の要素は拾っていくようにしましょう。

『そう言えば、このチームは貴方以外女性ね！ どう、殿方としてはこういうのが嬉しかったりするのかしら？』

とか言ったら早速ですね。

この会話は、二分の一の確率で聞ける会話です。ホモ君が召喚したサーヴァントが『女性』とハッキリ明記されているサーヴァントだった場合、この会話が発生します。まあホモ君はホモなので、女性が沢山、ヤホー！ とかはならない紳士ですよ。

まあ一応選択肢は出ますが、どっち選んでも大してプレイに影響は全くもって出ないので気軽にNOと選んでおきマシユ。

『あら、意外とお堅いのね。誠実な殿方は好きよ』

どっちを選んでも王妃様には褒めて貰えますが、個人的にはこっちのお返事の方が好きです。でもホモ君は軽薄属性。

王妃様に褒めて頂いてありがたく、とか思ってる間にもガンガン探索は続きますので

その辺りを……加速して一気に探索を進めた所まで!! ティエール……ではなく、此方は直接、探索して見つけたサーヴァント、ゲオルギウスさんと遭遇です。

ゲオルギウス。別名として聖ジョージとも呼ばれるヨーロッパに広く伝わる聖人です。その最大の伝説は、竜殺し。悪竜を討ち果たした竜殺しの聖剣、アスカロンは彼の代名詞とも呼べる伝説的な武器です。

FGOにおいては竜でなくても竜にする、冤罪系聖人として有名で、宝具で竜特性付与して竜特攻で殴るといふとんでもないマッチポンプで火力を出すライダーです。そしてタゲ集中持ちの壁役としても運用できる攻防両刀使いのサーヴァントでもありません。

二つの役割を果たせるサーヴァントは得てして強力と決まっているので、コンシューマー版においては引ければ大当たり枠とされています。

しかしながらそのエゲツナイやり方と性能とは裏腹に、FGO界限でも屈指の常識人ぶりと、カメラという現代にも通じる趣味から、FGOでも相当に貴重な休日のパパ的なほのぼのの人気を得た方でもあります。

まあ今一番大切なのは、聖人であり竜殺しであるという一点です。ファブニールに抗できる貴重な竜を殺す力で、そして、ジークフリートさんの呪いを解除する力も備えた正に切り札、と言える存在になり得ます。

この人を勧誘できれば特異点はクリアしたも同然！ 当たり前だよなあ？

『町の人間は避難を開始しています。それが終わり次第、出発しましょう』

しかし、素直に勧誘できる訳でもなく。

ここで町の人の避難待ち状況……これは、フラグじやな？（震え声）

でもって案の定、先ぶれと言わんばかりに雑魚共が群がってきます。ワイバーンもまあ沢山いますねえ！

アプリ版ではこんな襲撃なかつたんですけど、プレイヤーを休ませるものか、と言わんばかりのゲーム制作側からの意図を感じますねえ!!

しかも。前回起動させたDLC実績の影響で、シャドウサーヴァントが嫌がらせの様に襲撃に混ざって来ています。今も、画面には二体ほどヌツと立っているのが見えてますねえ。

このシャドウサーヴァントですが、前回のシャドウサーヴァントのようにやはり日本刀を携えています。これはDLCの特徴で、シャドウサーヴァントは皆、日本系の装備を整えたキャラが出て来るのです。

このシャドウサーヴァント共には、ずっと付きまとわれると思っただ方がいいですが、今はまだ脅威ではありません。

ここはゲオルギウス氏に協力して、軽く追い払ってやりましょう。

シャドウサーヴァントは、普通のサーヴァントよりは強くないので、実は上手くやれば経験値を大量に入手する事も出来るのですが……まあ、よつぽど上手くやらないとどうしようもないのでそれに関してはもう諦め方向で。

まあサーヴァントが四人もいるんですからここは作業ですよ。というかシャドウサーヴァント二体に本物のサーヴァントが二倍の数で殴り掛かるとかいう暴挙。

で、ここを切り抜けた後は……

『ワイバーンでしょうか。全くきりのない』

『いえ、違います。この感覚は……“竜の魔女”……！』

はいきました本命！ 邪ンヌがファブニールを引き連れてやってまいりました。

如何にゲオルギウスさんが竜殺しとはいえ、ファブニール相手では些かと分が悪いです。やっぱり伝承通り、ファブニールはジークフリートさんが相手して、そして勝つのが法則。

という事で、ここでは撤退を選ぶことになるのですが、しかしながら住民の避難は未だ終わっておらず……お決まりですなえ!!

そしてゲオルギウスさん。この町の事を任せられた身として、ここで見捨てる訳にはいかぬと聖人ぶりを発揮。お決まりですなえ!!!

『どうか、その役目を私にお譲りくださいな』

しかし、ここでゲオルギウスさんを失っては、ジークフリートさんを治療する手立ても無くなってしまう、王妃様が、その事と『未来も過去も関係なくフランスの民を放っておけない』という二つの理由から殿を志願。

マリー様のお心遣いを見無駄にするわけにもいかず……許して……ユルシテ……

しかしマリー様の出番はまだまだ終わりません、寧ろこの後がこの特異点の最絶頂なのです。

という事で、今日の実況はここまで。

マリー様の最後は、折角ですし実況無しで見たいと思います。

第九章・裏：とある王妃が町を救う日

「……どうなのかね。それは」

そうやって禿げた彼が呟いたのは、私とジャンヌが話を終えた、その直後の事だった。しみじみと、ただ一言。聞こえる積りで言っただけのつもりが無いのか、彼は誰も見ないで遠くの空を見つめて。

「あら、私がどうかしましたの？」

「ん？ あ、げ。聞こえてました？ あーいや！……なんていうか」

でもその声は、独り言というのはちよつと大きすぎたのね。ジャンヌも、私も。もちろん、驚いた表情で此方を見る彼の隣にいた、式部さんにも。

それに気が付いたのか、ハゲ頭を困ったように撫でながら、本造院康友……カルデアのもう一人のマスターは此方に視線を向けて来たわ。

「ふふ、貴方の様にむくつけき人がそんな態度をなさるなんて。なんだかおかしいわね」

「そう言われしてもねえ。誰だって自分の独り言を他人に聞かれてるってのは……さ」

「それはそうだけど。でも聞こえてしまったのだから、そこは諦めて欲しいわ。それで私がどうしたのかしら」

「あー……いや。アマデウスの言葉から、ちよつとね」

——この国が君に恋をした。

彼曰く。その言葉を聞いた時に、思ったのだそう。恋される側というのはその気持ちだが、想いが……重くないのか、と。

「想いが、重い？」

「……も、もしかしてそういう？」

「——盛り上げようとしたのですか？ マスター？」

「ちがぁう!? このタイミングでそんな事を申すかぁ!？」

必死になって否定するその様子はちよつと面白かった。つて、そうじゃないわね。気にするべきところは。

「俺みたいなパンピーからすると、国全体から愛される、つていうのはちよつと想像もつかないから。ちよつとね。まあさっきの聖女様との会話で全てかもしれないけど」

「——うーん、そうね」

「答えられない、つて言うなら全然」

「ああいいえ。違うの。そうじゃなくて……」

少し、困ってしまったのは確かだけれど。答えられない、つて訳じゃない。

その問いはきつと、私とその想いを……決して手放しに喜べるものでは無かった。と

思っているのを前提として、言っているのだと思ったの。

「貴方が求める回答を、言えないかもしれないわね」

「……俺が求めるって」

「そもそも……私は、皆からの想いを、重責と思った事が無いのよ。だって、誰かに想われるって、それだけでとても素晴らしい事じゃないかしら？」

そんな事は無かったのよ。

人が誰かを想う事。そして想われる事。それは私にとって幸せな事ではなかったの。

「い、いや……マジすか？」

「マジですわ♪」

「いや、でも。それだけ、自分が見られてる、って事ですよね？ それだけ、その振る舞いだって……ねえ？」

「気にした事は無いわ。それは王族として当然の務めだったもの」

そう言い切った時の、目の前のお顔の、可笑しいったら！

そんな考えなんて、聞いた事も無い、って言う。のがあるありと現れていて。そう言う所は、私達の時代より、恵まれているのだと思うわ。きつとそう。生まれに左右されない生き方を出来るのは、とても素敵な事。

でも昔の事を語れるのは、先人の特権だもの。おばあちゃんが孫に話すような気持ちで一つ、昔語りでも。

「私は王族として生まれて、そうして振舞うのも、楽しかったわ。いいえ、私はそう生まれたからこそ……マリー・アントワネットとして生きられて。色んな人に会えた」

「だから、王妃となった事に、後悔は一つもない、って事ですか？」

「ええ、そうよ。後悔なんてしないし、したら失礼にもなるわ。私と、王妃マリー・アントワネットと出会って良かった、と言ってくれた人たちへの、ね？」

アマデウス。サンソン。愛しいあの人。

他にも、沢山。沢山。だから……

「私は、皆に想われて、それが幸せで舞い上がって……あの結末に辿り着いた。それを言ったらアマデウスに怒られたのだけど。でも、私は王妃として幸せだったことを、絶対に否定しないわ」

「——そっかあ、そっかあ……はは、パンピーの発想なんか、英雄はすんなりと超えて行くってか。いやーすげえ。ファンになっちまうぜ王妃様」

そう言って、康友はなんだか嬉しそうに笑って——

「マリー・アントワネットの名にかけて、この町は、私が必ず守りますから」

それを思い出して、少しだけ、申し訳なくなってしまったの。

あんな笑顔が見る影もなく。目の前の康友の顔は……今にも泣き出しそうな、子供の様な顔をしている。

「——ダメだ王妃様、それは」

「いいえ。ここ、こそ。私の呼び出された意味なのよ。康友」

「それをされて誰が喜ぶってんだ、皆の想いを大切にしたいなら、アンタは死んじやだめだろう!？」 それくらい、単純な理屈じゃあないか!」

「でも、見捨てられないのよ」

私はどうなるか。凡そ結果なんて見えていた。

だから彼が心配するのは、当然の事。だから、私が諭さなければ。

「ダメだよ、いっちゃ。そりゃあ、良くないよ」

「ええ。分かってるわ。でも、ここで私だけが逃げるのはもつといけないと思うの」

「……ああ……そりゃあ、そうだろうなあ。そんなんバカでも分かるけど。だけど、けどなあ、それで納得しろって——」

「ふふ、そりゃあファンになった弱みで。私のお願い、聞いてくれないかしら」

そう言った言葉に、一瞬何か口を開こうとして、けれど何も言えなくて。それでも必死になって、何か言葉を紡ごうと、頑張っているその姿が……なんだか、可笑しくて。

つい、その頭に手を伸ばしてしまった。

髪の毛無い、ツルツとした頭を撫でた時、少しその感触にくすつとなつた。

「……そんな言い方、ずるいよねえ」

「ええ」

「そつか。そつかあ……あーチクシヨウ。かーなしいなあ。こんなに、良い人なのに。いいや、良い人だから、なのかなあ」

「そんなに良い人じゃないけど。でも……そう言つて貰えてうれしいわ」

地面に顔を向けるその背に、式部がそつと手を当てる。きつとこれからの旅路は困難の連続。これ以上の別離も、多くあるでしょう。意地悪だけど、これで慣れて置けば、彼の旅路も少しだけ楽になるかしら、なんて思う。

「マスター……」

「分かつてるよ。これ以上は、偉大なるフランス王妃様の覚悟に泥塗る事になりかねないんだ……王妃様」

——そして、起こしたその瞳に、見つめられた。

「何か、伝える言葉は」

「——じゃあ、アマデウスに。そうね……」

謝つておいて。と伝えようとして。

ふと、さっきの私の言葉を思い出す。後悔なんてしない。でも、謝っていたなんて伝えたら、彼はもしかしたら後悔するかもしれない。私だけが後悔無く先に行ってしまうなんてそれこそ、不公平な気がした。

じゃあなんて伝えよう。ピアノの事……ああ、じゃあ。こう伝えて貰おうかしら。

「——お約束は、次の機会に。その時まで、きつと忘れないでね、って」

「……確かに。ピアノの腕、磨くように言っておきます」

「ええ！」

康友は、敢えて仰々しく、私にお辞儀をして見せて。それはきつと、この場の空気を少しでも、悪くしないように。

哀しい別れにならないように、と。

「お去らばです。フランスの強き王妃様。絶対に、その生き方、忘れませんから」

「ええ。さようなら。東洋の若き冒険者様。きつと世界を救われますよう」

「……ホント、世界を救うなんざガラじゃないんですけど。やれるだけはやりますよ」

そう言つて、背を向けるマスター。その隣で、ゆつくりと頭を下げるサーヴァント。

何も言わなかったのは、きつとマスターを立てての事。良いコンビだな、なんて。

そしてもう一人。私が話をしなければならぬ人。

「マリー……」

「ジャンヌ。少しの間だったけど、貴女と一緒に旅を出来た事。戦えたこと。そして、お友達に慣れた事。どれも、本当に光栄で。誇らしい出来事だったわ」

「……止められないのは、分かっています。だから」

「はい」

「——待つてます。貴女が、元気に手を振って、戻ってくるのを」

そう言つて貰えた時。

ちよつとだけ、勇気を貰えた気がした。私の事を、信じて待つていると、そう言つて貰えたなら。それこそ、王妃として。頑張らなきや、つて。

「——マリー。やはり君が残つたんだね」

「あらサンソン。貴方が先に来たの」

「ああ。竜の魔女の御命令とあれば……と言いたい所だけど、どうやら竜の魔女はこの町も人も、ご自分の手で焼きたいらしい。殆ど僕は露払いの様な物だ。どうやら今の僕を彼女は余り好んではおられない」

空の彼方に、黒い影が見える。

「それなら私の首は刎ねないのかしら？」

「首を刎ねろ、との厳命あれば、だけど。独断専行は処刑人の行いじゃない」

「じゃあどうしてここに？」

「シャルルⅡアンリ・サンソン個人として。君の最後を見届けに来ただけだ」
私の仕事は、アレに立ち向かう事。フランス王妃として。

「じゃあ……見ていて。そしたら、もうちよつとだけ、勇気が出るから」

「ああ。何方の邪魔もしない……やり遂げてくれ。マリー」

そう決意して。

ちよつとだけ、拳を、きゅつと、握って見せた。

第十章

シャドウサーヴァント共を蹴散らす実況、はーじまーるよー。

……マリー様が、えー。ご帰天なされました……もうね。既定路線とは言え。結構来ますね。フランスを守るために、もう一つの宝具、『愛すべき輝きは永遠に』を展開して。因みにこのマリー様のご帰天は、マスター契約をしていなかった彼女がファブニールの攻撃を受け止めた事によるオーバーロードによる自壊です。相手にやられた訳ではないのが物凄い覚悟。

そして、このコンシューマー版においては、そのクリスタル・パレスが美しいグラフィックと共に描写されており、マリーの覚悟の表れがより胸に迫ってきます。

美しいです。そりゃあ……そりゃあ、パーティ編成とかぶち壊された恨みとかはありますけど。居なくなつて欲しい訳じゃなかったですよ。

非常に無念です。

この怒りを込めて、邪ンヌに目に物見せてやるのを、この特異点の新しい目標にしましょうか。無事にゲオルギウスさんを仲間に加えられたので、ジークフリートさんがその出力を復活させられるようになったので、いよいよあの忌々しいファブニールを叩き

潰す準備は整いました。

しかし、ジークフリートさんをそう簡単に敵が強化させる訳もなく。この竜の魔女の襲撃直後に、シャドウサーヴァントが出現するようになっているとシャドウサーヴァントを引き連れてランダムなサーヴァントが襲撃を仕掛けてきます。

今回仕掛けてきたのは……どうやらデオン君ちゃんの模様ですね。

で、このタイミングのサーヴァントなのですが、なんか邪悪なオーラを纏って強化されているのが特徴です。攻撃、体力、何れにしても侮れない強敵です。

『——悪いが、君達を逃がす訳にはいかない』

いえ実は本来、デオン君ちゃんが一番楽な編成な筈なんですよ。相手するのであればですけれども……正直な話、こちら辺のシャドウサーヴァントは基本的にセイバーのみなのでね。アーチャーが一人でもいれば殴り倒せるレベルの敵でしかありません。

しかし此方に居るのはキャスター、ライダー、セイバーにルーラーと。サーヴァント的に有利を取れるのはいません（半ギレ）

というかそもそもこっちはマリー様を失ってるんだ！ 少しは気を使って欲しいものです。極道だつて喪に服するというのに……！ お前らに仁義はねえんだな？

ならば此方も——本気で叩き込ませてもらう！

『くっ……悪徳に染まった騎士には、お似合いの結果か……っ！』

君との戦いの全カットという結果を！（激怒）

正直、ちよつと硬いだけのサーヴァントと、シャドウサーヴァントが四人くらいしかない上に、等倍で殴り合うテンポの悪い戦いなので容赦なく全カットです。マリー様の喪に服す暇も与えてくれなかった恨みも込めました。

しかしここでデオン君ちゃんは倒し切れないんですよ。無念なんですけれども……お前ッ！ 逃げるなあ！ 人間は！ 不利な！（ry

取り敢えず炭次郎構文をした所でどうしようもありません。ここに関してはシステムの壁に阻まれてアウトです。おのれ……さてはデオン君ちゃんを鼻屑してるな!!? おのれFGO！ だがその趣味誉れ高し。

まあ真面目な話をする、ここで敵サーヴァントが減つたりすると此方が有利になるのでやらないでしょうね。このゲーム、簡単にはこっちが有利になるIFをやらせてくれないもので……う（ご）い。

簡単に出来るのは難関の形が変わつたり難関の数が増えたり難関の質が跳ね上がつたり更なる難関に繋がつたりと難関コンボしか来ないって言う。

酷いときなんか、ラスボスレベルの敵がもう一人ガッツリ増えたりします。なんなら敵勢力も増えます。ふざけんな！（声だけ迫真）

とは型月らしいと言えはらしいですが……まあ今は置いておきましょう。取り敢え

ず今はジークフリートさんを復帰させる事が重要ですので、気を抜かないで置きましょう。

え？　なんでかって？　言ったじゃないですか、更なる困難に繋がったりって。ホラ来ましたよ追撃のシャドウサーヴァント！　デオン君ちゃんの指揮下にあつたんじやないかって？　違うんですよねー。

あのシャドウサーヴァントは別のサーヴァントの指揮下にあり、それを他の将、バーサーク・サーヴァントに付けて運用してるのさっきの襲撃って感じですよ。

つまり、リーダー格であるバーサーク・サーヴァントが抜けても、一応ちよつと強い使い捨ての兵隊位の感覚で送り込んで来る事もありません。そんな強敵ではないので気を張る事は無いですが、確実に粉碎していきましよう。

ここでゲオルさんを削られたりしたら笑い話にもなりませんし……

まあこのCPUは基本的にゲオルさんを狙うようにできているので、ゲオルさんを守る様に動けば滅多な事は……おっ、なんや！　シャドウサーヴァントが瀕死になつてるやんけ！　漁夫の利して経験値稼いだろ！

へへへ……、覚醒使う最大のチャンスやんけ……！　退けい！　その経験値はワシが貰い受けるぜえ！

等と。迂闊に掴みかかるのはトーシロのやり方でございます。

今回は覚醒は使わず、確実に式部さんに一発入れて貰って始末します。覚醒はこの章では基本切りません。礼装が出来てからお披露目するつもりです。

まあ覚醒を迂闊に使って殴りかかったりすると事故死が本当に怖いので……覚醒に關しては礼装でしっかりと火力が出せるようになってから。堅実路線チャートを歪めてはいけない（戒め）

それに、今はジークフリートさんを治療するのが最優先です。

今の怒りの念を全て邪ンヌに叩きつけてやる為には、ジークフリートさんが必須になってきますので。ここでゲームオーバーになったら元も子もないのです。

そして、マリー様の意思を次いで藤丸君達と合流しました。

此処のアマデウスのシーンすごく好きです。本当は色々あるでしょうに……何時も飄々とした調子を崩さない。アマデウスらしいその態度が好きです。

『あら、もう一人マスターが居たの？』

さて。アマデウスのカッコいい所を見せて貰った所で。

ここで新たに加わったサーヴァント、エリザベート、そして……清姫とも合流しました。ふふっ、実はこの時、禿げたキャラを使っておくと、とある特殊なイベントが……

『——そちらのお方。丸められたその頭。もしや、僧の方ですか？』

そうです。ハゲパーツを使っていると、清姫が反応するのです。流石に安珍判定は入

りませんが、やはり思う所があるのでしようか。

んでもって……ここで選択肢が出て来るのですが。清姫に自分が一体何を信仰しているかご説明する事が出来ます。因みに僧です、と答えるときちよつと面白い反応が見れるのですが。

しかし、そんな選択肢は選びませんよ。この隠しイベントは、この清姫の反応を見る為だけに存在していると過言ではありません。さあ、張りきって選びましょうかこの……!!

『いえ。空飛ぶスパゲツティモンスター教を信仰しております』

『——ああっ!? なんです!? 頭の中に……麺……肉の塊……いやあっ!? せ、聖杯からの……こんな知識……いやああああっ!?』

はい。清姫すら退散させるこのスパゲツティモンスター教の力。

こういう面白い要素があつてこそFGOですよね! いやーあの暴走特急を狼狽させられるのは間違いなくコンシューマー版FGOだけです!!

……はい。

マリー様が居なくなつた後の寂しい気持ちをこうして癒してくれる清姫には感謝感
謝でございます。

実況がね、暗いままに進むのはあんまり良くないので。取り敢えず箱入りぶりを遺憾

なく発揮している清姫を背景に、今回はここまでとなります。

次回は、いよいよオルレアンに進撃い……ですかねえ……？

第十章・裏：サーヴァントとして

「何処へ行くのかな。皆様方」

町から離れる我々の前に現れるのは、黒い影と……白い姿。

マリー様が全てを賭けて逃がして下さったのを、竜の魔女は許さなかつた。故にこそ自らの将と、シヤドウサーヴァントという兵隊までも差し向けて来た。自分が来なかつたのはその必要も無いと思つたからなのか。

「——そこを退きなさい。バーサーク・セイバー」

「悪いが、君達を逃がす訳にはいかない。その首を僕の手で、百合の花の様に、ぼきりと手折るのが、マスターから命じられた命令だからね」

余りにも無慈悲な追跡。しかし、ここで捉えられる訳には参りません。このフランスや町の人達を救うためにたった一人、殿となつて残つて下さった王妃様を……思えば。ここで諦める事なんて。

そう思つて、マスターに声を掛けようとした時。

背筋が、冷たくなりました。

「うるせえなあ色男……ジョークもそこまでしてくれないか」

「ジョークなんて言つて無いさ。僕は君達を」

「それがジョークじゃないんだつたら、へへへ……いやあ、笑えねなあ。ええ？ まさかあの人が必死になつた姿を見て、こんな空気も読めない行動するなんてなあ」

マスターは、笑つてらつしやいました。

とても穏やかで。にこやか、と言えるような綺麗な顔なのに。

これほど、今の緊迫した状況にそぐわない表情も無いでしょう。私だつて、明らかに緊張している、というのを私自身が自覚しているというのに。

笑顔というのは、本来攻撃的な表情である、というのは、何処かで聞いた事がありますが。マスターは……それ以上ない程に、笑顔で、目の前のサーヴァントを威嚇しているのです。

「今、俺達はマトモに戦つてる時間も惜しいんだ。居なくなつてくれると凄いい助かるんだけどもなあ？ いや、それ以外は一切助からねえよ。イカレ野郎」

「随分な言いようだね」

「寧ろそれ以外の反応されると思つてたのか？ 地頭も悪いのか？ なあおい」

怒っている。

のかも……今の私には、分かりません。マスターの表情を全て読み切れるほどに彼の顔を見慣れている訳でもありません。しかしながら。ただ一つだけ。分かりやすい事

を言うのであれば。

「ふふ、好き勝手言うじゃないか——どうだい？ 私に対して、武器でも持つて打ちかかってみるかい？ そんなに気に入らないのなら」

「お生憎と、殺人剣士様相手に真つ向から殴り合うのも、武器を持つなんてのも、正直趣味に合わねえんだ。アンタみたいな野蛮人と違って、平和主義なんでね」

「平和主義が随分好き勝手言うじゃないか」

「言葉で切り合ってる分には傍からは『平和』って事になるんだよ」

マスターは、今までで、一番の敵愾心を目の前の相手に燃やしているという事だけ。サーヴァントを相手に殴り掛かる姿を見ました。相手を煽り倒している姿を見ました。しかしながら。

こんなに……恐ろしい形で、マスターが感情を顕したのを見たのは、恐らく初めてではないでしょうか。

「——まあ、俺だつて平和主義を謡う割には、サーヴァントの後方からあれこれ言うしかない腰抜けだ。それがピーチクパーチク何を御大層なお言葉を言ってるんだ、つて言う話ではある」

「そんな事は思つて無いけど……君は、そう思ってるんだ」

「当然。だけどな……それでも何も言わねえよりはマシだと思ってるよ——式部さん、

構えてくれ。このロクデナシを——潰す」

そして、私に目をくれたその一瞬で、笑顔は何処かへ引っ込んでしまつて。残つたのは能面の如き無表情ばかり。しかし、構えろ、と言われれば他の事を考えている暇もありません。マスターが怒つているとして、それは正当な怒りではあると思ひますし。

——今、旗を構えなおしたジャンヌさんも。剣の切っ先を影に向けたゲオルギウスさんもきつと。同じ気持ちだと、思います。

「そんなに気合を入れて貰つて申し訳ないんだけど。私の狙いは……そちらのサーヴァントだけだ。他は、適当にあしらうだけでもいいんだけどね」

「ゲオルギウスさんは、こっちの希望だ。させると思うか？」

「——まあ、そうだろうね!!」

そんな我々の心の内など知る由もないのでしよう。

黒い影が二つ、回り込む様に迫り……そして、その二つを置き去りにするように、サーク・セイバーは、その細身の剣を構え、此方に飛び掛かつて来たのでした。

「——全く……何時だつて、君はそうだ。出来るかどうかも分からない約束を一方的にして去つていく。天真爛漫で……困つた人だよ。マリア、君は」

アマデウス様の表情は、とても親しい方が亡くなつたとは思えない程に。にこやかな

物でした。彼女には、既に別れを告げられていた……こうなるのは、分かっていた。故にあまり気にするな、との事で。

「ふむ。それにしても」

「なんだよ」

「——いいや？ 僕が言っても仕方なさそうだ。ホント、君つて奴はヘタレだなあ」

「だーかーらーヘタレじゃないって言ってるんだろうが」

「良く言うよ。さっき迄死にそうな顔と音してたくせに」

「してないんだが？」

私もマリー様の最期に何も思わなかった訳ではありません。アマデウス様の胸中はきっとそれ以上でしょう……しかし、そんな私よりも、アマデウス様よりも、セイバーを打ち払った、あの時のマスターの表情は……

酷い貌でした。

『テメエツ！ 逃げてんじやねえよ！ お前が立ち塞がったんだろうが！ 他人の都合で好き勝手に！ やれると思ってるんじやねえ！』

私達の目的は、あくまでもゲオルギウス様と共に無事に藤丸様達のグループ合流する事です。しかし、明らかにマスターは我を忘れていて。

——なぜそこまでマスターは取り乱したのか。バーサーク・セイバーとは特に因縁が

あつた訳でもなく。寧ろ立ちほだかつた行動そのものに、怒り果てていたようにも。しかし、それを気にする余裕はありません。

『マスター！ 今は追う時ではありません！ 落ち着いてください！ マリー様の御意思をここで、無駄にしては……なりません！』

私は、必死になつてマスターを止めました。一切気持ちが分からない、という訳ではありません。体を張つて。人間のマスターは私でも押さえつける事が出来ますし、そんな無茶をさせる訳にはいきません。

サーヴァントとして、人として。感情に任せた事で、大切な事を取りこぼしてしまわない様に、と。

そうして、落ち着いた後のマスターは酷い顔をなさっていました。不機嫌なような苦しんでいるような……疲れ切っているような。歩いている間、ずっとそんな顔を。

ですが、私に何が言えただでしょう。マスター自身、自分の行動への後悔や他様な思いが渦巻いて、そんな顔になつて居るのです。まだマスターの事を詳しくも知らない私ではむしろ余計に……

顔色が良くなったのは、藤丸様達と合流する時でした。というより、顔を叩いて無理矢理に気合を入れた、と申しますか。そんな過程を見ていたからこそ。今こうして楽しそうになさっているのが、カラ元氣に見えてしまいます。

「つたくよお……所で藤丸」

「ん？ 何？」

「その奥の赤いのと緑なのは……誰？ ナンパでもした？」

「いやいやいやいやしてないしてない」

「ああ、そうなのか。てつきり俺はこの状況下で戦力を強化する為に鋼の精神でこの空気の事など一切読まずに追加戦力をナウでヤングに言葉巧みに……！」

「どんな偏見!？」

……もしかしたらカラ元気ではないのかもしれないかもしれませんが。

その後、新しいメンバーのエリザベート様と自己紹介をし足り、清姫様がマスターが信仰する謎の宗教に絶叫して居たりしましたが。まあ、それは。

いえ、あの、私も頭の中にイメージが出てきたのですが、もし逸話通りの清姫様がアレを見たとなれば。些かどころか、物凄いい、お可哀そう、と申しますか……なんなのでしよう。あの文にし難き謎の飛翔体は。

「人間の知恵の結晶だよ」

と、おっしゃっては居ましたが。アレが結晶だとすれば、どうなのでしょう。人類。何か間違っている気がしました。

「……あの、さ、式部さん」

兎も角、二人の聖人が揃い、ジークフリート様の呪いを解く準備が整ったのは間違いなく、ジャンヌ様とゲオルギウス様は無事、解呪に入られました。

その間、私達は暫し手持無沙汰で、マスターは、落ち込ませてしまった清姫様に謝罪に向かう……と言つて、私達から離れて沈み込んでいる彼女の元へと向かおうと――

——その時でした。

「は、えっ？ あ、はい!？」

「先に、あの、お礼を言っておきたくてさ」

マスターは私の隣でピタリと止まって。

そして……少しだけ恥ずかしそうに。頭を下げたのです。ちよつと、だけ顔を赤らめながら。

「——ありがとう。止めてくれて」

「あ……」

「あそこで止まらなかつたら……王妃様の犠牲を無駄にしちやつたかもしれない。式部さんが俺のサーヴァントで、良かったよ」

そう言つて、マスターは去っていききました。

——正直、マスターを止めた事に、一切の負い目が無かつたかと言えば、嘘です。彼

が激昂する理由は確かにあそこであって。それでも、止めたのですから。

でもそう言って貰えたのであれば。マスターとサーヴァントとして。ああしていくのが間違っていないと分かって。少し……うれしかったのです。

第十一章

パリに進撃する実況、はーじまーるよー。

さて、前回の襲撃を凌ぎ、ジークフリートさんを復活させました。更に藤丸君側で合流した二騎のサーヴァントを仲間に加えて、戦力も万端。いよいよ竜の魔女の本拠地たるフランスの首都、オルレアンへ進撃する準備が整いました。いよいよもってその戦力は完璧でございますれば。

しかし、此度の最終決戦。FGOの本編でのフランス特異点のそれとはある程度は違ってくる。最大の問題として、シャドウサーヴァントが最終決戦にも現れる事ですね。いえ、単体では別に脅威でもなんでもないですけど。ちよつとワイバーンよりも強い程度です。

ただ、それがバーサーク・サーヴァントの随伴として現れるのが悪夢ですマジで。此処で出て来るバーサーク・サーヴァントはボスキャラとしてしつかりと強く、それに加えてシャドウサーヴァントが出て来るって言う。

アプリ版と違って強いサポートサーヴァントを謎の別時空から連れてこられる訳でもないございます上に、この最終決戦の場においてはストーリーに合わせて敵サーヴァ

ントとのサシのバトルになります。

尚、ホモ君達のバトルのみシャドウサーヴァントが居るのでサシとは言っていない。
なんだア……？ この難易度……？ D L C 実績達成の為には仕方ないのです。

ライダーが居ないので地獄にこそなりません、それでも有利取れるキャラが居ないんですよね。アサシン二人は、新戦力のエリちゃんと、アマデウスの二人が相手をしている所に加勢する形になるので、大して有利クラスである事は意味ありません。

で、向こうの戦力でホモ君達がしよっぱなから戦うサーヴァントはそう多くなく、バーサーク・ランサーのヴラド公と、バーサーク・セイバーのデオン君ちゃんの二人だけ。

バーサーク・ランサーのヴラド公は単体宝具に、ガッツを張って耐久戦を仕掛けてくるサーヴァントです。稀に此方の宝具発動に必要なゲージを吸い込んで来たりして、単体宝具の回転が早まったりします。因みに魔性属性を持ってません。特攻が乗りません。

バーサーク・セイバーのデオン君ちゃんは、回避、魅了や能力ダウンデバフを撒いて耐久戦を張ってくるのですが能力ダウンして、その状態でクリティカル貰うと昇天とかあります。因みに、此方も当然の様に魔性属性を持ってません。特攻は乗りません。

こう見ていてお判りでしょうが、式部さんではそのどちらも明確に有利が取れる相手

でもないのです、それにシャドウサーヴァントが追加されたら本当に地獄みたいな話です。あー、泣きたい。

別にシャドウサーヴァント含めても戦いようがない訳でもありません。

要するに宝具を最初に撃ってシャドウサーヴァントを速攻で全滅に追い込むのが基本です。そしてその為の手段は、今の所ホモ君は一切使っていないのでここで投入するべきでしょう。

——等と言っている間に、パリに進撃する際の、最後の障害になり得るサーヴァントのご登場……なのですが、取り敢えずエリちゃんが居れば作業なんですよ。バーサーク・アーチャーなので。

というか、この有能な全体攻撃宝具持ちが決戦に出るでもなく、ワイバーン君と一緒にごこからへんで遊撃隊やってたんですけど、もしや邪ンヌは指揮ヨワヨワ説……？

『——これでいい。これでいい。全く、厄介でどうしようもなく損な役回りだった』
まあとか言ってる間に撃破出来ました。

今回、エリちゃんは編成人数の都合上、そして経験値の回収目的でホモ君のチームに入れてあります。なので、エリちゃんがトドメとって経験値はホモ君チームが総取りです。エリちゃん一人だけしかないので、そこまで経験値も分散はしません。

後、女性の式部さんと、エリちゃんのバフの相性がいいっちゃいいので。火力も上げ

られる気がしなくてもない、のです。エリちゃんが居た時点で式部さんを必要なかつた
と思いますけど。

とはいえ、パリに突撃した後は、パーティ組んでもクソも無く因縁の相手と此方の
サーヴァントとの個人戦になるのであんまり関係ありませんけど……個人戦というか、
個人戦。プラス藤丸君の加勢、って感じですけども。

まあ他の特異点でも因縁の相手とサシでのバトル、なんてよくある事なんでございま
して。今はその予行演習みたいなもんです。

さて――

『オルレアンから、ファブニールが出発したらしい。つまり……いよいよ決戦だ！』

どうやら向こうさんも総戦力を出撃させてきた模様です。

ここからは、敵のボスとの連戦が待ってます。今から出来る事はありませんが、取り
敢えず誰と戦うかをじっくりと選ぶとしましょう。

――で、早速此方の総大将と向こうさんの総大将が向き合っております。

此方白ジャンヌ。向こう黒ジャンヌ。

向こう大量のワイバーン。そしてファブニール。うーん総戦力！ コレを突破せね
ばフランスを攻略できないって言う。第一特異点から規模が太すぎる。

『この戦いが終わってから、存分に言いたい事を言わせてもらいます』

『ほざくな……！ この竜を見よ！ この竜の群れを見るがいい！ ——このワイバーン共が我が祖国を巢とし、あらゆる物を食い漁り、そして……：最期には、互い、共に食い合い潰す……！ それが！ 真の百年戦争……：邪竜百年戦争だ！』

いやーバチバチでございますね。フランス百年戦争を、ワイバーン同士の食いつぶし合つて不毛の大地にするっていう。悪夢みたいな話です。

しかしながらその竜の群れ、消えるよ（暗黒微笑） 何せ、此方には竜殺しの聖人たるゲオルギウスさんに加えて、フランス軍が加勢して下さるのです。あ、ファブニールに砲弾が直撃した。噂をしてたら御到着ですね。

『恐れるな！ 嘆くな！ 退くな！ 人間であるならば、ここで命を捨てろ！ もう一度言う！ 恐れる事は決して無い！ なぜなら、我らには——聖女が付いている』

『……ジル……！』

そりゃあジャンヌ・ダルクが居るのですから、正気な方のジル・ド・レエ元帥が放つておくわけがないという話ですよ。

フランス残党、そしてカルデアの戦力。その他諸々をかき集めて、こつちも一大勢力になりました。いよいよここで決着という雰囲気かひしひしと出てきていますねえ！

……とまあここら辺で、ゲオルギウスさんは敵の主戦力であるワイバーン共を殲滅……もとい足止めする為に離脱します。

いや、実はゲオルギウスさん、隠しのミニゲームでワイバーン無限殲滅ミニゲームとかあるんですけど、それでハイスコア叩き出せる逸材なのでまあ、一切心配ない所か、多分ほつといたらワイバーン達を全滅させるまでありますが。それは兎も角として。

『我がサーヴァント達、前に出る!!』

さあ、来ましたよお。サーヴァント連戦です!! で、最初に出て来るのがバーサーク・ランサーとバーサーク・セイバーの二体。その何れかをホモ君で相手する事になります。で、今回選ぶのは……

バーサーク・セイバー。デオン君ちゃんです。

理由なんですけど、宝具による事故死が一番怖いんですよ。クリティカルは結局確率の問題で避けられそうなので、宝具は回避か無敵で無ければ避けようがありませんし……マシユと藤丸君が必ず勝利するのが確定してますので。

なら都合の悪い方は藤丸君に処理して貰う方が簡単でしょう……という事で、今回はバーサーク・セイバーを相手にする事になりました。

『僕の相手は……君達か』

さあさあ勝負。

ここで有利な方を選んで負けたら笑い話にもなりません。行きましよう!!

第十一章・裏：マスターとしての

『……式部さん。サーヴァントとのサシでの戦いは、初めてになる、と思う』

『今までは、他のサーヴァント達が居たから、その人達に合わせて戦ってればよかった』
『でもまあ、今回はそうはいかない。俺は……アンタと、あんまり未だ親しいって訳じゃないし、サーヴァントとマスターとして、連携が上手く取れるか……分かん』

『負けたくないんだ、俺は。だから……頼む』

『俺を信じて、手を貸してくれ』

「僕の相手は……君達か」

『俺達が相手するのは、あのサーヴァント二人のどっちかだ。あの二人を急いで倒してから、他の皆に加勢する』

そう言った藤丸様の言葉に、マスターは、一呼吸入れる間もなく、目の前に立つ、パーク・セイバーと戦う事を選びました。逃がした相手は、ここで確実にぶん殴る、とだけ告げて。

「ああ。あの白い髪の親父とお前。どっちかと言えば因縁があるのはアンタの方だ」

「——ふふ、この前よりは落ち着いているね。そこに油を注いで着火するような真似はあんまりしたくないんだけど。君達との正々堂々の決戦、という訳にはいかないんだ」
「ああ、分かっているよ……後ろにいらつしやる、ポン刀構えたヤクザ者の方々も加勢するんだらう?」

白い剣士の後ろに並ぶ……黒い剣客達。幾度となく我々と交戦したあのシヤドウサーヴァントは、今回は最も多い、四人程

「——流石に、不利っちゃ不利か?」

「そうだろうね。だけど容赦はするつもりはないよ」

「そんなん要らん。要らんが……お前が負ける前に、一つ聞かせるセイバー」

「なんだい?」

「その後ろの黒い奴ら。他の所には居ないな……なんで俺らの所だけ、そんな黒い奴らが居るんだ? 他に応援に回せばいいんじゃないか?」

そう聞かれたセイバーは……酷く、奇妙な表情をしました。

「それに関しては……僕も知らないんだ。ただ、ジル・ド・レエ……まあ、僕らの参謀役の様な男が居るんだけど。ソイツから君を確保するように言われてるんだけど」

「……そんな奴は知らん」

「そうみたいだね。僕としては、君が彼に個人的な恨みを買っていると思っただんだ

けど。だからこつちの方が驚きなんだ。なぜ彼が君を狙うのか、余計に分からなくなつた」

——敵の言う事を鵜呑みにする、という訳ではありませんが……そんな嘘を吐いてもマスターを捕まえやすくなる、という事はないでしょう。そんな事する意味はバーサーク・セイバーにはない様に、私には見えました。

「マスター……」

「ああ、分かつてる。嘘じゃないのは。俺だつて、馬鹿つて訳じゃないんだ」

「逆に聞きたいんだが、君に狙われる心当たりはないのかい？」

「あつたら聞いてねえよ」

「——それもそうか。で？ 質問はそれで終わりかい？」

「ああ、ありがとうよ。後は決着をつけるだけだな。この前は、まんまと取り逃がした。

次は……逃がさねえ」

そう言ったその直後、バーサーク・セイバーは華のように微笑み……その剣の切っ先を天へと掲げました。その動きに合わせ、後ろのシャドウサーヴァントが、ゆらりとだらりと下げていた切っ先を構え——

「その言葉を待っていたよ。お喋りばかりしては腕を振るう機会がない」

「多数で攻めて来ておいてよく言うぜ……まあいい。そこの黒子共が他に散らないだけ

マシって奴だからなあ」

「安心したまえ、彼らと一緒にには戦わないさ——纏めて切り裂いてしまつては、折角付けてくれたジル元帥に少々と申し訳ないから」

——その一瞬、マスターとバーサーク・セイバーのその視線が交わつたように、見えました。生まれる間。お互いの出方を伺う、一瞬の時間。

「——令呪を持つて、俺のサーヴァントに命じる！ 宝具を解放しろ!!」

先陣を切つたのは、マスターでした。

戦闘前に伝えられた令呪の仕様と、その運用。私に流れ込む大量の魔力。そしてそれを見て目を一瞬見開いたバーサーク・セイバーは、如何な理由か、再び微笑み、そして。ゆらり、天に掲げた切っ先を……

「 限りあれば 薄墨衣 浅けれど 」

「突撃せよ。切り裂け」

振り下ろしました。

しかし、それよりも早く、私は宝具の発動に踏み切る事が出来ました。詩を詠むのは生前から、慣れた行いだつた故に……後は、宝具が決まるまでの一瞬を。如何にして稼ぐのかという事。

私が読み上げた後、間髪入れずに、ぐい、と横抱きに担ぎ上げられたのは、マスター

の手によって。黒い影が距離を詰めるより前に、ほんの僅か。全ての動きを決めていた私達の動きが先手を取ったのです。

私を抱えたマスターが相手から距離を取ります。一気に飛び込んで切り裂こう、と考えていた黒い影は一步足りず、更にもう一步を踏み込もうとして。その時にはもう、マスターは更に一步下がる態勢に。

反応してから行動する相手の動きと、もう下がる事を既に取り決めていたマスターと私の動きでは。向こうの方が如何に早くとも、どう足掻いても一步及ばず。

「涙ぞ袖を 淵となしける」

黒い影が我々の元へとたどり着く迄に、既に私の詠唱は終わり……そして、目の前で剣を振り上げたその果敢なる姿に、あはれを覚えました。

私の詩は、彼らの滅びを招く、詩でございませうれば。

『』

その剣が振り下ろされる前に、黒いその影は、私の目の前で、滲む様に溶けて消えて行つてしまいました。

「——源氏物語・葵・物の怪」

私達の敵は残り、ただ一人。後方にて戦いの成り行きを見守ろうとしていたのである。うバーサーク・セイバーただ一人だけです。

「これは、これは……まさか最初に宝具を切つて来るとは」

「俺も初めて宝具見たけど、こりやあすげえ。派手じゃないのが、逆に恐ろしいなあオイ。コレが、想いと言葉の力つて奴？」

「……この歌は、些か曰く付きですので」

「怪談かなにか？ まあ良いけど……さて？ 漸くこれで、サシでの勝負だなあ。バー

サーク・セイバーさんよお！」

ゆつくりとマスターは私を地面に降ろし……改めてバーサーク・セイバーと向き直りました。バーサーク・セイバーは近接を得手とし、私などではマトモに戦えるかも分からない剣士のサーヴァント。

「そうだね。これで、漸く条件としては対等だ……でも私とそこのご婦人とは些かと力の差があり過ぎるんじゃないかな？ 見た所、キャスターだろう？」

「そうだなあ。キャスターだ。近距離戦は得意じゃないとは、当人もおっしやつてた。だけどもあ、勝てる様にサポートするのがマスターの仕事だろうし……お前に勝たせるくらいなら、そう難しくもねえさ」

「——言ってくれる」

そのまま剣を胸元に引き寄せ、低く伏せて構える。全身のばねを使つて、一撃を持つて貫く積りなのでしょう。恐らくは、私ではきつと……避けられません。

逃げるべきでしょうか。それでも、マスターに『信じてくれ』と頼まれました。サーヴァントとして、マスターの命を聞くのはおかしなことではありませんし。勝ち目の無い無謀な戦い……という訳でもありません。

それでも、私が意識するのはたった一つの事。

「ならば、決着を付けようじゃないか」

「決闘って奴だな。ハンカチでもくれてやろうか？」

「必要ないよ。届く前に……」

ぐ、と。

セイバーが僅かに、身を縮めた、気がして。

「——っ!？」

「届く前に。なんだ？ バーサーク・セイバーさん？」

その直後に私は、その斬撃から僅かに、体をよじって逸れて居ました。やった覚えはありません。しかし……マスターの礼装が私を、その様に動かしたのでしょう。

緊急回避。サーヴァントの身体能力、特に敏捷性を向上させ、そこに『相手の攻撃を回避する』という行動を強制させるギアスという魔術を組み合わせた、マスターの礼装の機能。戦士だけでは無く、私の様に動く事得意としないサーヴァントでも、僅かな間だけ敵の攻撃を回避できるようにサポートできるとの事でした。

「——式部さん、やっちゃってくださいよお!!」

返事を返す間もなく、私の指は既に虚空に触れました。

「ずつと考えて、そして構えていたのは……攻撃の為。回避する事を考えず、回避が終わった後に何をするか。それだけを考えていました。」

黒い弾丸が三つ、私の指先に生まれます。陰陽の術は、何時もよりも力強く、そして濃く。瞬間強化の機能が既に働いています。緊急回避で相手の攻撃を捌いてからの、カウンター。単純明快な作戦でした。

相手が如何に歴戦の戦士であろうと。

後出しで、後手を封じる先手として放つならば。如何様になろうとも、私の一撃が先んじる。反撃も、間に合いません!

「……見事だ」

三発の弾丸は、大きな隙を晒した側面、それも胴体を捉え。バーサーク・セイバーを、地面へと打ち倒しました。

「——やりましたね」

「そうだなあ。うん。なんだろうな」

「はい」

「初めて。マスターっぽい仕事した気がしますわ」

「ふふ、ええ。大変見事なお手前でございます。マスター」
「ありがとうございます」

第十二章

こうすれば良かったんだ！ 実況はーじまーるよー

デオン君ちゃんは強敵でしたね……（誠の旗） 勝ちましたけど。

結局の所、シャドウサーヴァントは敵の取り巻きとして出て来る訳ですよ。サーヴァントとは一騎打ちになる訳です。

となればやる事は唯一つ。もうサーヴァント相手に宝具を打つ事は考えず、令呪を打って初手でシャドウサーヴァントを全滅に追い込む事です。一番マズいのは、下手に雑魚敵のラツキーパンチをガンガン貰ってガリガリ削られる事。

で、そこさえ突破できてしまえば。

デオン君ちゃんとの一騎打ちなので、まあそうキツイという訳でもございません。普通にクリアは可能です。デオン君ちゃんは、基本的に回避と、デバフ宝具を打ってくるだけで、デカいダメージをぶつ放して来るといふ訳でもないのです。

……まあ、前も言った通りそれを喰らって防御が堕ちてクリティカル貰うとクツソ痛いんですけどまあそれは事故だと思つて割り切るしかないとして。

ダメージレースなら、キツチリレベルを上げてる式部さんで、しっかりとクリティカ

ルを叩き込める時に狙い、デバフもしっかりと入れれば意識すれば問題なく撃破出来ません。流石はサーヴァント。火力はしっかりと高いです。

そして……今まで全くホモ君の覚醒が役立っていないという事実……第一特異点までは準備期間みたいなもんやし（目逸らし）

DLCの覚醒が脅威を發揮するのは、しっかりと育成が出来たり、礼装が完成してからです。それまでは『普通の実況じゃねえか！』と言われるのも仕方なし。マスター無双は一日にしてならず。根気よく、粘り強く育成をしましょう。

まあそれは兎も角として。

セイバーを倒したその後は他の敵との決戦に加勢する事になるのですが……藤丸君はエリちゃんの方に向かわせたので、ならば此方はキャスター・アマデウスの方に向かうとしましょう。

という事で、この特異点での因縁の二人目、シャルルⅡアンリ・サンソンとの二戦目でございますが。まあサーヴァントが二対一、さらに此方はアサシン有利のキャスターのサーヴァントが二人。特異点のレベルから考えても、流石に負けは無いと思います。『――僕は、処刑人としての仕事を執行させてもらう。お前への私情も挟む積りは無いから安心しろ。アマデウス』

『くそつ。安心できるか！ そう言う状態のお前が一番厄介なんだ……！ もうちよつ

と前までのお前の方が……戦力的には可愛げがあったよ!」

「おや……? セリフが何か違いますね? (白目)」

えー、先に説明した通り、様々な選択肢次第で特異点のイベントが色々に変わるので、その中には敵の強化フラグも含まれます。どの敵が強化されるか、等は本当に特異点での過ごし方次第で決まるので、予想するのは難しいと申しますか。

で、それを判断する一番分かりやすい基準が、セリフです。

強化された個体は、イベント前のセリフが大きく変化します。当然会話する相手もセリフが変わります。そりゃあ強化されてるんだから、多少なりとも心持ちが変わるのも不思議ではないという話ではありますが。

そして、セリフによって強化されているかは分かったとしても、実際どれだけゴリゴリに強化をされているか等は、正直実際見てみるしかありません。下手するとその特異点のレベルを大きく超える強化を――

『証明してみせよう。シャルルⅡアンリ・サンソン……我が処刑の刃、この心が狂乱に囚われて尚、一切の曇りはない事を!』

——あががががががががが?! 待って、待って待ってくださいちよつと待って! 体力が! 体力が倍近く違います! いけません、いけませんこれは……少なくともこの特異点でのレベルでは最上級の強化が施されていますねえ!!

なんか謎にオーラまで漂っています。これは第一特異点で唐突に現れた高難易度サ
ンソン君です……幾ら二対一とは言え、気を抜いていたらやられかねませんね。

因みに強化個体の特徴として、ランダムな永続バフが付与されるのですが、それを鑑
みて今回のサンソン君は……クリティカル率上昇付与ですか。あーなんていう悪夢。
実質全攻撃がクリティカルと考えて良いですね。

正に処刑人、放つてくる一発一発が慈悲無き処刑の刃と言えるでしょう。いやーとて
もサンソン君らしい強化ですね!! (震え声)

如何にキャスターが相性有利とはいえ、クリティカル乱発でダメージを叩き込まれま
くつては削り切られても不思議ではありません。更には、先程のデオン君ちゃんとは違
いサンソン君は単体宝具なので、一発でも当たればとんでもない痛手になってしまいま
す。

持久戦は土台無理、ここは気合入れて、一ターンで削り切るつもりで全てのバフデバ
フを投入して行きましょう。

しかし……こうしてチャートに存在しない筈の脅威が突然沸いて来るのが、コン
シューマー版FGOの恐ろしい所ですね……でもそれが楽しいビクンビクン(ドM)
しかし、戦い自体はコマンド選択等しているだけなので全カットです。

いやまあ、究極絶対に残したい戦いは、は実況の目標に直接関係有る最終のバトルだ

けなので、それ以外はカットしちやっても良いんですよ。ましてや、なんかホモ君にサーヴァントのラストキルの経験値かすめ取らせるような神プレイをしている訳でもないのではない……安定こそ至高、コレ鉄則。

『——もうここに、僕の切るべき首は無かった。ただ、それだけの事だ。』

とはいえ、強化されたサンソン君のセリフは良いですね。

正に『処刑人』としての誇り高い部分が前面に出されている気がします。しかも、そのセリフを言っている時に、まさかの笑顔で言う。彼がこんなに爽やかに退散するとは思っていませんでした。

さて、残る戦力、もう一人のバーサーク・アサシンのカーミラさんは藤丸君達が無事撃破致しまして。そして……いよいよ残るはファブニールです。

今までの敵とはやはり格が違う強さを誇る強敵ではありますので。と申したいのですが。実はその強さはジークフリートさんを連れていけると格段に落ちます。これは第一特異点の最大の強敵としての風格を滲みださせてますわ、とは口が裂けても言えません。

『再び土に還るがいい、邪竜……！』

FGOアプリ版とは違い、ジークフリートさんにはファブニールをぶち殺さんとするバフがガンガンに乗っています。こういう演出をしてくれるようになって、プレイして

いる私もF G Oの成長に涙が止まりません。

その分ファブニールくんも若干体力高めですが、しつかりとジークフリートさんを防衛しつつ、藤丸君とマシユ、そしてホモ君のパーティで殴り倒せば。

『ギャオオオオオオオ……』

はい。即落ちファブニール君の出来上がりです。

そりゃあ竜殺しと謡うだけあって竜相手には無類の強さを誇りますよ。宝具一発で此方の現状の出力では絶対に叩き出せない、良いダメージをしつかり叩きだしてくれますよ。流石最優のクラス、セイバー。そして大英雄ジークフリートさんです。

そして、一番の親玉であるファブニール君をシバキ倒したので、その子分的な扱いだったワイバーン君達は狼狽えまくりです。

向こうはいよいよ総崩れ。となれば後は総大将をシバキ倒すだけでございますが。

『……っ！』

『お戻りあれ、ジャンヌ！』

ここでジル元帥（キヤスター）迫真のインターセプト。

総大将が倒れてはおしまいとばかり、堂々の割り込みでございます。ここで邪ンヌとの決戦……とはいきません。ここで邪ンヌは撤退。仕切り直させる機会を与えてしまった形になります。おのれ元帥。

という事で、ここからは邪ンヌへの追撃戦……なのですが、大将首を失って恐るべきはその後の後処理です。

それをどうにかするのが、恐らく次の……というか、第一特異点での、ホモ君の仕事になると思われます。

第十二章・裏：断頭台に立つ男

「ちいっ！ 恨んで良いかいホント！ 余計な事を言ってくれて！」

「腐り果てて消え去るよりは大分マシだと思いたいねえ！」

「だからって覚醒させる意味あるかい!？」

「……ないっ！」

近寄せたなら終わり。とばかりに、此方から飛び交う無数の弾丸。アマデウス様の指揮棒に合わせて踊る紫の音の塊、そして、私の呪力の弾丸。二つで、何とか相手を近寄せられないようにしてはいるのですが。

「——ふん」

正直、何方も戦いにおいては素人同然。

全てが当たるといふ訳でもなく……そして、バーサーク・アサシン、シャルルⅡアンリ・サンソンもそれも理解しているのでしょう。最初から無理に距離を詰めるような事をせずに、ゆっくりと歩みを進めつつ、自分に直撃する者だけを見極めて……確実に切り払う。

しかも、それを顔色一つ変えず、涼しげな顔で行っている、というのが恐ろしいので

す。

「チクシヨウ、あんな歴戦の剣士みたいな真似出来るタイプじゃないだろうに！」

「ああ、だから君達の弾幕を切り払って進むのは無理だ。こうして、自分への直撃を避けつつ、ジリジリと進むのが精いっぱいだよ」

「そもそも処刑人は弾幕を切り払わないんだよ！」

「今の僕の感覚は、酷く澄み渡っている。その弾丸も、切り落とすべき首の練習台と考えれば外さない」

「は、そんな微笑みで恐ろしい事を言うな！」

—— 凄腕の剣士であれば、無駄に相手に付き合わず、速攻で近寄って切り捨てる。

そう言う話を、聞いた事があります。であれば、今のサンソンの動きは、確かに剣士として褒められた動きでは無いのでしょうか……彼は、処刑人。

本来、動くことのない相手の首を、一刀にて切り捨てるのが役割。ならば、寧ろ自分が激しく動く必要は無く、自分の邪魔をするものに、ゆつくりと狙いを定め切り捨てる。今のやり方に帰結するのは、彼にとって当然なのかもしれません。

「僕はクライアントの命令を果たすだけだ。気に入らないのであれば、僕を真つ向から討ち果たせばいい」

「出来ればもうやってる！」

そのブレぬ切っ先と、鋭い刃にアマデウス様は明らかに辟易となさっています。私も冷たい物が背筋を通り抜けますが。しかし。

「そんな状況で……良く笑ってられるな！ 君は！」

ただ一人。マスターだけは……寧ろ、笑っていらしたのです。

悠々と歩いて来る、サンソンのその姿に対して……にやにやと、この戦場には似つかわしくない、そんな何処か楽し気な、悪戯が成功した子供の様な笑みを浮かべて。

「だってなあ。自分の憧れの英雄が、イメージ通りの姿でいるんだからそりゃあニコニコにもなるだろうよ」

「ホント趣味悪いな!!」

「悪かったな！ でもしようがないでしょうに！ アンタだって、マリーさんが酷い顔してたら発破かけるでしょ!? 実際かけたし!!」

「——ノーコメントだ！」

アマデウス様がその返事と共に放つ弾丸に合わせ、私も一射、二射程。正直弾幕を絶やさぬようにしているだけなのです。兎も角、近寄らせてはいけない、というだけの意識で撃っているに過ぎません。

どうしてマスターは、笑っているのでしょうか。

「しかし、アレをどうやって叩き潰す！ キツイぞ！」

「なあに、恐るべき怪物を潰すやり方なんて、昔から決まってるだろうが！ 相手に毒の餌を喰わせるのさ！」

「——はあ!? 毒の餌!?!」

「ここに居るだろう? どれだけ罠と分かってても、喰いつかざるを得ない餌がよ!」

——しかし、それ以上に目を見開いてしまうのも無理はなく。

マスターが、餌と呼んで指差したのは……自分でした。間違いなく、それは、つまり
どういう事かと言えば。

「君、正気かい?」

「そりゃあ目覚めさせたのは俺だからなあ! 責任を取らないといけないんだよ!」

「しかし、マスターが死んでは……!」

「どうせここで負けたら俺も死ぬんだ! まだまだ先は長いんだろう? だったらここで自分の命捨てる位の経験しておくのも悪くない」

——確かに、マスターを前に出して、そこに食らいついたサンソンを仕留めるのは
真つ当な一手だと思われず。

しかし、余りにも現状、露骨過ぎる一手なのは間違いないありません。今までずっと私達
の後ろに居たマスターを、急に前に出す……若しくは、マスターから離れるなど、不自
然なのは、戦下手の私でも分かります。

「かかると思うか？」

「——確信がある。コレを見逃したら、処刑人じゃねえよって一手がな」

「何？」

「俺だつてここで終わるつもりもない。死にたくないし、無事にお家に帰るかは……まあ兎も角として、だ！ さあ、覚悟決めろよ偉人様方！ こつからが勝負時だぜ！」

——悠々とマスターが前に出ました。ゆつくりと。

そして、アマデウス様と、私はマスターの傍をゆつくりと離れます。それを見て、彼は少し眉を顰めました。余りにも露骨に過ぎる誘いです。誰だつてこんな誘いに誰が乗るか、言われるかもしれません。きつと。

「——諦めた訳でもないだろうに。陳腐な誘いを」

「おっと、直球な上に余計な一言も無しと来た。良い切れ味だ」

「ふ、流石に僕だつて節穴じゃない。そんなに『何かやってやる』と言つてる目を見て諦めた、なんて……たとえ面と向かつて言われても信じないよ」

……やはり、無謀なのではないでしょうか。

「はは、そう言わずになあ。ムツシユ・ド・パリ。一つ、俺の話を聞いてくれや」

「何の話を、だい？」

「アンタは誇り高い処刑人。俺は……そうだな。アンタに相對するなら、薄汚い罪人が良い所か。なら、俺はそういう役割らしく、一つ汚い手でも打とうかな、と」

私達は、双方に分かれ、サンソンを挟み込む様に、動いていきます。今だ彼に動く様子はごいけません。そもそも、私達から視線を離していません。

「……まで全く相手が動揺していないと、そう思ってしまうのも……」

「汚い手、とは。随分と堂々と言ったものだ」

「そりゃあそうさ。アンタをハメて、潰そうつてんだから」

「それを言つて、僕が引つ掛かると思っているなら……どれだけの間抜けだと思われているのだろうね」

「間抜けなんてとんでもない……アンタが優秀な処刑人だからこそ。俺はこの手を打とうと思えたんだから、寧ろ誇つて欲しいな」

——そう思つた時でした。

マスターが一步、無防備に足を踏み出し……そして、二歩目にてゆつくりと、地面に膝を突いたのです。

私達は、当然驚きました。幾ら囮とはいえ、膝を突くなんて。咄嗟に逃げる事も難しい姿勢に……しかし、そう思つていたのも束の間で。更に。

マスターはそのまま、サンソンの前に首をゆつくりと垂れたのです。

私は、声を上げない様にするので精一杯で。しかし驚いているのは此方だけでは無く。

「な……なにを!？」

目の前の彼も、同様でした。

のけぞり、一步下がって。狂化されているとは思えぬ反応でした。

「見ての通りさ。首を差し出ししてるのさ。処刑人に」

「……そんな、それは……」

——その姿勢に気が付きました。

サンソンが動揺するのも不思議ではありません。

両膝を突いて、首を差し出すそれは、間違いなく……処刑人とその首を打ち落とされる直前の罪人の姿。俯いて、項垂れて。希望も何もない、と言いたげに、全てを諦めたその様子。

彼が恐らく、一番見て来た光景に間違いありません。

「——っ!」

「処刑人は罪人の首を刎ねるもんだ。そうだろうムツシユ・ド・パリ。目の前の首を見逃して、何が処刑人か。ましてや俺はマスターだぜ? 討ち取れば……サーヴァントは弱体化する。何を躊躇う、何時もの仕事だ」

仕事をしろ。

そうマスターは堂々と宣言しました。

英霊というのは、自らの生き方を人理に焼き付けて、そこより生まれ出でた影法師。故にこそ、自分の生前の生き方に縛られ、そして自らの死因に縛られもします。

ならば、今のこの状況は……例え、狂わされて居ようと。いえ、全てを殺すように仕向けられているからこそ。避けようがありません。

自らの生き方に沿い、そして、今こそ首を落とすべき、と言われているようなこの、この現状であれば。

「……なんとまあ、甘美な一言を告げる」

「処刑人が殺すように告げられてる。そして目の前に罪人の首が……ある。ならやる事は一つだろう」

「そうか。そうか。成程、悪辣、というのは間違いないかな。ここまでお膳立てされた状況を断つては、処刑人としては死んだも同じ……ならば、仕方ないか」

ゆつくりと、彼が近寄ります。

マスターの傍ら、差し出された首に拳を振り下ろしやすい場所に。そして……私達が最も挟み討ちをしやすい場所に。

「……一つ、聞く」

「なんだい」

「君は、首が落されるべきと。する程の罪の自覚があるのかい」

「人間罪なんて誰しも犯してるもんだろ……違うか？」

「愚問、という奴かな。ありがとう……ならば僕もまた、断頭台に立つとしよう」

ただ一言。

そう言葉を交わして。私も、アマデウス様も、既に撃つ準備を構えています。たとえば相手がどんな動きをしようと、一步先んじる事は難しくありません。

確かに、マスターの言うとおり、これはサンソンにとつて……避けようのない一手。

「——見事だ。カルデアのマスター。例えそれが悪辣な一手だったにせよ……」

「……」

「悪に徹した処刑人には、お似合いの結末だ」

目の前の首を落とすべく。その剣を振り上げたサンソン。

その一瞬……がら空きになった胴体に、アマデウス様と、私の一撃が突き刺さります。

相手は強固な霊基を誇るといふ訳でもなく……この一撃に耐えられる訳もございませぬ。二つの弾丸は、間違いなく、彼の霊核を砕き——

「——ここに、僕の切るべき首は、無かった……それだけの、事だ。ああ」

「それだけの事が、こんなにも、嬉しい——」

彼を、黄金の光へと還したのでした。

「つたく、君って自殺志願者なのかい？ ヘタレに加えて」

「ヘタレじゃないって言ってるんでしょうが。ヘタレだったらあんなやり方しないし」

「は、どうだか……しかし、これで何とか……やったか！」

「ええ、後は他の方の救援に……」

「あー、いや、僕無理。疲れたし」

「ええええ!？」

「……切るべき首なら、ここにあったよ。ムツシュ・ド・パリ」

「——え？」

「ん？ いやいや、何でもねえさ。じゃあそのサボリたがりは放っておいて、救援に行こうぜ。ファブニールはまだ潰れてないんだから……さ」

第十三章

第一特異点終了まで駆け抜ける実況、はーじまーるよー。

前回、全バーサーク・サーヴァント撃墜、ファブニール失墜、そしてワイバーン軍団大混乱でほぼ使い物にならぬ、という三重苦を邪ンヌに浴びせた結果、保護者が出てきて全てをうやむやにしてきやがりました。おのれヅル。

とはいえ、ドラゴン軍団が終わったとて戦力が全部削り切れたわけではございませぬ。ワイバーン君達は統率が取れてなくても、そこら辺の兵士君達に襲い掛かるのでその対処が必要になります。

『マスター、竜の魔女を追撃しましょう！』

しかし逃げだした邪ンヌを逃がす訳にもいかないの……となればここで追撃するのはやはり主人公でしょう。このタイミングで、ホモ君達のパーティと一緒に邪ンヌを追撃するか選べるのですが……ここで追撃するのはやはり主人公のパーティでしょう。

あと、ここは任せて先に行け、というのがやりたいのでここは藤丸君に任せます。

『後をお願い。行こう！ マシユ、ジャンヌさん！』

いやーこの主人公のセリフ。コンシューマー版オリジナルなんですすよねえ。主人公

君の立ち絵が凛々しいこと凛々しいこと。コレを見るためにコンシューマー版買つて
るまである。すみません全力で嘔吐きました。

という事で、残る戦力を相手に、死なないように立ち回るのがこの特異点の最終任務
でございます。

正直な話、ここから先は完全に時間がかかるだけのターンなので、今回の特異点で得
た成果と、それに関連する諸々の事について説明しておきます。

今回の特異点についての探索において、一応素材に関してはは規定数を手に入れる事
が出来ました。探索の度に情報だけでは無く、アイテムという名の素材も地道に集めて
いたので……ふ、探索で手に入るアイテムというのは、主に素材が美味しいのですよ皆
様。

で、第二特異点から新礼装を手に入れてそれを運用する事になるのですが、それを踏
まえていよいよ覚醒と併せて効率的に使っていく事になります。

その上で第一特異点である程度レベルを上げる必要がありますが、レベルも十分上
がりました。スケルトン君とかを狩っていたのが報われた形です。やったね！

それでもレベルは上げておくに越した事はないので、この耐久戦で出来るだけ稼ぐつ
もりではあります。

因みに覚醒の『鬼種の魔』の特性を考えれば、どういう使い方が出来るかはまあ想像

が付くとは思いますが……折角ですので楽しみにして頂ければ。上手く運用すれば第二特異点ではオーバー気味の火力になる可能性もありますので、大分期待します。

——等と言ってる間に、もうホモ君がスケルトンを何体か処理して、レベルが上がってますね。レベルが上がれば鬼種の魔も強くなるので、無理せずこらでレベルを上げていきたいと……

『——!!』

あ、お前らは式部さんに連絡するからな（大逃げホモ）

そうなんですよねえ……この耐久戦、当然のようにシャドウサーヴァントも紛れてるんですよねえ。コイツ、ジルの私兵なんですけど、まあこの最終決戦の為に温存していたのか十体近くゴンゴン沸いて来る。

いったいジルの何処にこんなリソースのへそくりがあつたというのか……それに関しては何れ明らかにされる事になるでしょう。

全員セイバーなので全然いいですが、しかしながらこの先にもこのシャドウサーヴァント達はどんどん沸いて来るので、まあ今の内に追加シャドウサーヴァントの沸く環境に慣れておくのが吉でしょう。

因みに、ここで豆知識ですが、シャドウサーヴァント達のグラフィックは、FGO内に登場するサーヴァントを模したモノ……ではなく、専用の黒フードのグラフィックが

実装されています。

当人のシャドウサーヴァント、と明記されない限りはこの汎用グラが使われたりするんですが……しかしこの黒フードグラがカッコイイんですね。普通に。

正に黒い刺客って感じのこのグラがシャドウサーヴァントの雰囲気によく似合うんですよ。

『はあああつー!』

で、ワイバーンはどうなのかと言えば。

正直、ジークさんとゲオルさんが居る時点で、つて言う話です。ワイバーンは確かにこの時点の脅威ですが、ドラゴンキラーが二人いる状況では正直、蚊トンボ扱いです。ジークフリートさんの宝具で確実に全滅まで持つていける上、硬い個体はゲオルさんの追撃で確実に沈みます。うーんこのドラゴンキラー二人の強さ。

実は本来のストーリーのジルと邪ンヌを相手する方が厳しいというか。うーん辛い戦いを引き受けてくれる主人公の鑑。

それを踏まえても最大の問題として、カルデア側、というかホモ君の最大の主砲である式部さんがワイバーン君相手に不利属性という。

うーん、せめてアサシンが欲しい所ですが……そう簡単に弱点が補填できる程このゲームは甘くはないのですよ。聖晶石を買い込んでぶん回して解決が出来ない。お金

で買えない、ゲームの勝利。

あ、因みに当然の様にジークさんとゲオルギウスさん、及びアマデウスは同じパーティです。強制編成なので外す事も出来ません。経験値……経験値が……っ！

まあここら辺って耐久戦なので、耐久してれば幾らでも経験値を稼げてしまうので、それを予防する為の仕様なんでしょうけど。経験値稼ぎに厳しいFGOでございます。

それは置いておくとして……この戦いの面倒な点として、地味ーに、地味ーにシャドウサーヴァントが硬いので、宝具撃つた後に必ずワイバーンだけ消えてシャドウサーヴァントだけが残るって言う。

しかも下手なタイミングでワイバーンを処理して黒い野郎が残ると、しっかりとチャージ攻撃が飛んで来て大ダメージを頂きます。

そう言うのを避けるために、シャドウサーヴァントの動向に気を付けつつバフを張って既定ターンが過ぎるまで耐久する、というのがコレの面倒な所です。

クリアするだけならみんな防御してれば安全に行けるんですけど、しかし今は実績獲得の為のプレイングをしなければならぬのでここで戦わぬ選択肢は無い……辛いつ！

因みに後半になっても稀に混ざってるスケルトン君は盛れなくホモ君のおやつにしなければならぬので余計に気を張らないといけません。キンチョウ！ 弱い奴を介

護して強化するってこんなに辛いんすねえー……

『——ワイバーン達が』

と、そんな事をグチグチ言いながら敵をシバキ倒して居れば、漸くワイバーン君達も消えはじめ……耐久戦終了。どうやら藤丸君達が無事に決着をつけてくれた模様です。流石主人公、決める時はしっかりと決めてくれるものです。

『急いでこっちに来てくれ！ 特異点からの退去が始まる！ 一緒に居ないと取り残しちゃうかもしれないから！』

——んで、自分がこっちで時間稼ぎしていると、ドクターロマニが急にそんな事言ってくるんですよ。じゃあこっちで時間稼ぎをさせるなど！ いや、自分で選んだことなのでそんな事言っただけじゃないんですけども。

という事で、フランス特異点。これにてクリア。後は、フランス特異点と一緒に戦ってくれた仲間たちとお別れするつもりでしょう。

『そういえば、敵のジル・ド・レエが言っただけだ』

『あのシャドウサーヴァントは……どうやら誰かが彼に貸していた、物らしい』

『それが誰かは分からないけど、もしかしたら。それがコレを引き起こした黒幕なのかもしれない。そっちのデータも解析を進めなければいけないね』

……と、ロマニの意味深な発言があったりもしますが。まあそれも何れ。

という事で、今回は此処までとなります。ご視聴、ありがとうございました。

第十三章・裏：狙われる者

「藤丸の奴、大丈夫かねえ。相手は大ボスだ、なんかとんでもない切り札とか準備してあったら笑い話にもならないよなあ、なんてフラグかね」

「物語とかでは良くあるよねー」

「……なんか凄い調子良さそうだな音楽家殿」

「そうかい？ 気のせいだと思っけど？」

……一瞬見えた『エリザベートのクソみたいな音色が聞こえないのは最高に心地が良いと思うアマデウスであった』という心の声は、私の心に仕舞っておくことにしました。どうしてこう、要らない所でこの術は発動してしまうのかと思ってしまいます。今言ったら間違いなく士気が暴落するような一言を。しかし、アマデウス様をして……それだけ酷い音色と言いつけられるそれが一体どれだけなのか。若干気になる所ではありませんが。

「というか、なんでこう俺の周りには、この黒い奴が集まるんだかー」

「藤丸に聞いて来るように頼んだんだろう？ 知りたいなら、それ待ちするしかないんじゃないかい？」

「俺こんなまっくろくろすけに恨み買った覚え、本当に……ないんだけどっ！ 助けて式部さん恐ろしい化け物がやってくる!!」

「わっ、わかりました!」

そう。

現状、あまりにも黒い影法師が襲い掛かって来る今、そこに気を取られては命取りになりかねません。以前の数を軽く上回る、十数人の黒い影。一人一人の質は落ちていく、とはジークフリート様のお言葉でしたが……こう数が多いとあんまり関係ない、とはマスターの切実なお言葉でした。

「とうか! 分かった! あの黒子ども明らかに俺だけに狙いを定められてるんですよねえ! どうして!」

「それを聞く様に頼んでるんでしょ?」

「そうじゃない! 向こうから明らかに狙いに来てる!! これジル・ド・レエ由来じゃない気がする!」

「呼びましたか!」

「呼んでないです!」

……それは間違いない気がします。他のサーヴァントに付き添っていない今の状況の方が明らかに生き生きと、そして、やはりマスターを狙っています。

「つたく、藤丸頼むよ……何でもいいから、情報を……!」

「マスターよそ見はなさらぬよう、どんどん来ます!」

「分かつてるよ、つたく。一人一人妙に固いんだからもうさあ!」

——しかし、不思議なのが。

此方に向かつてくる敵の全てが、その手に携えているのが……太刀なのです。源氏武者の方々が携えているようなそれ。鋭く、刃渡りもそれなりに長い一本。どうやらその全てが私の故郷由来のようなのですが。

「全く、ジャパニーズ・カタナは切れ味が良くて、切られても気づかないって聞いた事あるけど、それをここで味わいたくはなかったよ!」

「なんかそれ色んな逸話が混ざってないか!」

「多分どれもジャパニーズの逸話だから同じだよ!　　って言うか、君もジャパニーズだろう!　　こういう怖い話とか知らないのかい!」

「これ怪談カテゴリ!?　　シャドウサーヴァントだつってんだろ!」

まあ刀を振り回すその姿が恐怖を演出するのは間違いないです。そしてそれ以上に厄介なのが……戦力としては、戦うのが得意とはとても言い切れない私でも、何とか対応できる程の強さなのですが。その代わりと言わんばかりに、数がいることです。

少なくとも、もう私は三人程打ち倒していますが、まだまだ戦場のそこかしこにちら

ほらと黒い姿が見えます。

「とうか、無限に湧いてるよーに見えるんですけども」

「聖杯ってリソースがあるんだから、ちよつと強いだけの兵隊なら何とでもなるんじゃないかい!？」

「そんなもんなのかね」

「今は考えてる場合じゃないだろう、こっちは手一杯なんだ、早く向こうが決着を付けな
いとマジで……!」

そう、アマデウス様がぼやいた、その時の事でした。

「——っ?」

「なんだ、ワイバーン達が……」

戦場のワイバーンが全て、ぴたりと止まったのです。時でも止まったかのように。

そして……その場で、空に溶ける様に、霧散していくのが見えました。

「消えていく、って事は……」

「藤丸様達が勝ったのですね」

「どうやらそうみたいだな。あー、まったく寿命が縮んだよホント」

我々が勝った……そう見て取ったお二人の反応は、早かったです。

マスターはもう、立っていられない、とでも言いたげに腰を地面にどっかりと下ろし

てしまいました。偶に向かつてくるスケルトンなどを蹴つ飛ばし、四方八方から襲い掛かるシャドウサーヴァントに気を張ってらしたのでお疲れなのは間違いないでしょう。

そんなマスターと一緒に、アマデウス様も腰を下ろしていたのは、ちよつと謎なのですが。サーヴァントつて、そんなに疲れやすかつたでしようか。

「はあ……ようやく終わつたのかい。つたく、本当に音楽家に重労働なんかさせるんじゃないよ。疲れすぎてケツに火が点きそうだし」

「ケツは使つて無くない？」

「気分だよ気分」

「あつそ」

——そうして、お二人は一つ、息を吐いた後、空を見上げ。

『——お疲れ様、本造院君！』

そこで、ドクターからちようどマスターの通信機に連絡が入りました。

「ああ、お疲れ様ですよ本当に……」

『うん。それに関してはありがとう。なんだけど。今は急いでこつちに来てくれ！ 特異点からの退去が始まる！ 一緒に居ないと取り残しちゃうかもしれないから！』

「……ああん!? なんだよそりゃあ!? 聞いてないつすよ！」

……確かに血相を変えても仕方ない程の事態でした。

急いで立ち上がったマスターに、私も急いで駆け寄ります。そんな私達を見て、アマデウス様は笑ってらっしゃいます。

「はは、随分と忙しいね」

「うるさいですね……」

「事実を言ってるだけなんだけどなあ。つたく、別れの挨拶の一つでもして行けよ。ジークフリートとか、ゲオルギウスとかにさ」

「あー……それもそうだな」

——最後に、マスターはアマデウス様に。アンタへのは必要ないのか、といつて。アマデウス様は、湿っぽいのは嫌いなんだ、とだけ。返されました。

「——つたく！ また式部さんを抱えて走る事になったじゃねえか……！」

「す、すみません！」

「物凄い形相だったよね」

「清姫さんが怯えていらつしやいましたね……」

「皆、お帰り」

カルデアス前にて。無事にレイシフトを終え、カルデアに帰還した私達を、ドクターが出迎えてくださいました。その隣には……まるで絵画から抜け出たかの如き美人が

一人。

マスターがお会いしていた、カルデアの英霊召喚で呼び出されていたサーヴァントの
お一人。ダ・ヴィンチ様が。

「無事、第二特異点は修正された。これで、僕らは漸く第一歩を踏み出せたわけだ」

「こんなのがあつてもあるんだろう？ 悪夢みたいだなあ」

「まあまあ……あ、そうだ。本造院くん。一応確認しておくけど、君の家つて本当に古い
だけの家なんだよね？」

——その時、ロマニ様が浮かべていた笑顔を消し。真剣な表情でマスターに問いかけ
られました。

「……一応、ね。何度も言うようだけど、封印指定も、魔術も、何も聞いた事はありません
んからね。マジで」

「そう、か。じゃあどうして……」

以前、ご自分の出生に付いて話されていた時に、そう言ったモノとは一切縁がない、と
はしっかりと言い切つてらしたのですが。

それを聞いたドクターは、その表情を怪訝な物に変えられました。

「……なんなんすか？」

「いや。ジル・ド・レエの私兵があつたシャドウサーヴァントだったって事は……」

「一応、それっぽい事は聞いた」

「そうか。それで、ジル・ド・レエはアレを『至高のパトロンからの借り物』と言っていて。そして……その捧げ物として君を探して居る、と言っていたんだ」

「バーサーク・セイバーもそんな事を言っていました。どうやら彼本人が、マスターとかかわりがあった、という訳ではないようです。」

「パトロン、というのは出資者、だったのでしょうか。という事は……」

「そのパトロンってのが、黒幕という可能性も？」

「それがどうかは分からないけど。どうやらジル・ド・レエのパトロンというのは、君に相当執心しているみたいなんだ。心当たり、ある？」

「……いや、ないですけど」

「マスターは、此度の一件に。何らかの形で関わっている、という事なのでしょうか。」

「当のマスターとは言え。心底不思議そうな顔をしているばかりで。何がどうなっているのか、分からないという表情を浮かべているばかりでした。」

第十四章

フランスへのお別れを告げる実況、はーじまーるよー

——さて、成長報告の、お時間でございます。

と言つても数値をべらべら言つても仕方ないので、凡そ型月のどの人のクラスなのかを發表していくだけになります。……前回は取り敢えず足に全てを振つて、全力快速少年になった訳ですが。

で、今現状の数値の総合値から考えて……取り合えず初期士郎君クラス、といった所でしようか。第一特異点の現状であれば、まあまあ進捗です。

覚醒前の士郎君でも、ギリギリでランサーの攻撃を一発だけ凌げるレベルはあるので取り敢えず漸くそこに追いつく事が出来ました。といつても、魔術をホモ君は使えないので魔術込みでの士郎君と同等、くらいですね。

成長早くない？ と思われるでしょうが、これにはカラクリがありました。神秘にガッツリ振つてるお陰で、覚醒前のステータスへのブーストがガンガン上昇しているのです。

お陰で、普通に人間レベルの成長でも、元値がデカくなればブースト後の値も結構な

事になり、更に言えばブーストもどんどん高くなっていくので……うへへへ。

とはいえ、魔術込みでも初期士郎君は型月内で強い、とはいえず、寧ろ魔術師としてはへっぽことしつかり言われているのでたかが知れています。それでも身体能力（とブースト）のみで彼と対等に渡り合えるというのは凄い成長です。

第二特異点ではもっと大きく成長したい所ではありますが……まあ人間の身体能力の成長はある一定まで行くと頭打ちになってしまうので、そこ迄期待はしていません。

基本的に、人間の極限まで極めたそこに、魔術なんかでのブーストを掛けるのが基本なのでまあ。しかし、ホモ君はそんな物を必要としない程の強力な覚醒スキルをもっているから平気だな！（傲慢な壺）

そして、特異点突破のボーナスとして、得能をゲットする事が出来ました。

因みに魔術は特定の条件を踏まえないと会得出来ない得能なので、ここでは取得できません。残念。

で、ここでゲットした得能は『血の意思』ですこの得能も覚醒系関連で、覚醒ターンが一ターン固定で伸びます。覚醒関連のスキルとしてはほぼ必須レベルなのですが、最初に『偶の本気』を選んだのはまあセイバーさんの一件があったからで。ここで確実に。

これで少なくとも二ターンは相手にホモ君のクリティカルを叩き込む事が出来る様になりました。

そして……これに加え、もう一つ!!

『——おつまたせー。ダ・ヴィンチちゃん特製の礼装が出来上がりさ!』

来ました。第一特異点にて素材をかき集め完成した、この特製のYAKUZAL礼装。二ターンの間、まっくのうち! まっくのうち! する事が出来ませぬ。なお通常エネミー相手にしか出来ない模様。

しかし、第二特異点程度の敵であればサシであつても全く苦戦はしないでしよう。多少強いエネミーでも、まあ勝てない事はありません。

因みにサーヴァントであれば、前者は一蹴、後者は『クリティカルの実験体にはなるかな?』なので全てにおいて桁が違いますねえはっはっはっ……早く強くなりたいなあ。ダメかなあ……強さは一日にしてならずなので無理です(適当)

さて、早速この礼装をば装着して……うわっ! ただの敵ついただけの顔だったのが怖い顔になって完全にその筋の人にしか見えない! これは藤丸君の優秀なボディガードですわね間違いはない。

尚、もつと優秀で更にカワイイマシユマロボディガードがいらつしやる模様。何と云う事だ。全てにおいて負けて居るとは何という無能。本当にボディガードだったら即死だった。

これで藤丸君とは一応差別化が出来たと思えますので……いえ、そこじゃないですわ

本来の目的は。という事で、実績解除の見込みが漸く立ちました。

というかここままで生き残って尚且つ、専用のビルドを組んで、漸く解除の見込みが立つとか言うこの実績の難易度です。

ここからは覚醒を駆使し、確実に敵をホモ君の手で叩き潰して経験値を稼いでいきたい所です。第一特異点では覚醒を使わなかった分、ここからは覚醒に頼りっぱなしに……なれる程に今は優秀ではありませんが、ここから優秀になっていくと思いたいです。

という事で何時ものカルデア探索をしておきましょう。

特定の人と交流が出来るようになるのはもうちよつと後ですが……しかし、それでもやれる事はやっておきましょう。マシユ、藤丸君、そしてムニエルさんやロマニ、ダ・ヴィンチちゃんや……式部さんですね。取り敢えず全員と交流が出来るまで粘ります。

まあ第二特異点に向かうまではそれなりの探索の機会があるので、その辺りを全て皆と交流する機会に振ります。当然、探索する場所は観測室に重点を置いておきます。良い事があるかもしれないので。

ああ、当然ながら式部さんとはもう交流をしています。

実は特定の人と交流するには、その人と多少絆レベルを上げれば可能になります。仲が良くなれば、よりお互いの事が知れる。現実と同じですね。

んで、その絆イベントにて、式部さんがカルデアのライブラリの管理を任された事を聞かせてもらいました。式部さんは何れ、カルデアの書籍データを實際の本……つばいものにして地下図書館を管理する事になるので、その布石になります。

式部さんは、そもそも戦闘を得手とする英雄では無く、こう言う本などに關して、なんなら執筆なんかを得意とする英霊なので。正直前線で砲台として戦っているのが可笑しいんですけども。

とはいえ式部さんが居ないとホモ君死んじゃうからね。しょうがないね。

こうして絆イベントを進めていくと、少しずつ式部さんがカルデアに馴染んでいく過程を見れるので、戦わせている事に罪悪感を感じている兄貴姉貴は、絆イベントを進めて式部さんをカルデア地下図書館の司書様に就職させてあげましょう。オレモ（式部さんの地下図書館就職を望むかと言えば）ソーナノ

まあそれは兎も角として。

今は目の前の式部さんです。ライブラリを任せて貰ってその本をお勧めする式部さんが可愛いですね。これから貴女はもつと戦力として酷使する事になるから今のうちに楽しんでおけよ？（豹変）

まあおすすすめされている本と一緒に楽し気に読んでいる姿は本当に見ていて微笑ましいのですが……因みにホモ君におすすすめされたり、ホモ君が読んでる本は、次の特異

点が何かによって決定されず。

なので、次がメインストーリー関連か、イベント特異点か、この本で凡そ判別する事も出来ず。なんでこういう無駄な所まで凝ってるのか、誇らしくないのか？ 読んでいる本はなんだ？ 『カリギユラ』関連ですか。なら次は確定的にメインストーリーですね間違いない……

まあ基本的にイベント特異点のフラグを意図的に踏みに行ってる訳でもないのに出て来られても予定が壊れるので嬉しいですけど。

さて。カリギユラと言えばローマ皇帝。つまり、次回の特異点は第二特異点、セプテムになります。イタリア半島付近を舞台として巻き起こる、麗しい薔薇の皇帝を中心とした物語。

そして、ホモ君の礼装のお披露目の機会でもあります。

第一特異点ではあまり活躍出来なかったホモ君ですが、今回はそうならない様に。というかそうなったらマジでホモ君が成長しないので、頑張って活躍させて、実績達成に間に合うように仕上げていきたいと思っております。

……まあその前にカルデアの探索の機会はまだ残ってるので、その辺りをしっかりと探索していきましょか。おらっ、観測室を観測！

第十四章・裏：家族について

——マスターが閲覧を希望したのは、世界の歴史、それも悲劇について書かれた書籍のデータでした。

「此方の本に、何かご興味が？」

「あ、いいや。ちよつと目に付いたもんでね。こんな本まであるとは。人間の興味とは尽きぬものよなあ……藤原の」

「えつと、そう呼ばれるのはちよつと」

「へへへつ、ジョークだよジョーク」

それを適当に端末でスライドさせて、あるページで、マスターは手を止めて。

何が目に留まったのか、ちよつと気になってしまって、立ち上がって見に行ってみました。本好きが高じて、こうしてライブラリの司書など任せて貰えたので。どんな本でも気になってしまうと言えば。そうです。

「……『カリギュラ』、ですか」

「狂った皇帝様のお話だよ。凄いなあこりゃあ……弟の様に可愛がった養子を殺し、妹と近親相姦。更には浪費三昧と。これ全部本当なのか、って言えば疑わしいらしいけ

ど」

マスターはその本を、俺は妹は大切にしたいねエ、なんて呟くくらいには、読み込んでいた模様で。

「彼に目が留まったのは、次の目的地が、ローマだからですか？」

「いや気になっただけなんだよなあ……この格好の俺が言うのも変だけど、ヤクザよりヤクザしてねえかこの皇帝様」

事実は小説よりも奇なり、とは申しますが。確かに物語に描かれる任侠の方々よりも確かに、強烈な逸話である、とは思いますが。

その道の方の様な格好云々に関して言えば……今マスターの格好が実際そうとしか見えないのは、あの、えつと。そう言うファッションという訳では無く。マスターが注文した礼装が、たまたまそう言った感じの物に仕上がっただけなように。

しかし見た目だけではなく、その性能は本物だと、先程の試験で、証明されています。

「——という事で、レオナルドの作った礼装の試運転をしたい」

「礼装、つて。注文してた、俺のアレを制御する為の……？ いや、幾らなんでも早くねえか？」

マスターがそう言うのも無理は無く。

マスター自身、制御なんてとてもできず、どうやって発動するかも分からない。それを外からどうかしようというのです。詳しくない私でも、非情に困難な事は分かりません。

「本当に可能なのですか？ 血に眠る……その」

「カルデアのデータベースを舐めないで欲しい。神秘の発動の仕方はそれこそ無数。ありとあらゆるアプローチを考え、その中でも最も可能性の高い幾種類かを組み合わせる形で礼装に組み込んであるんだ。ふふん」

「もちろん、僕も監修して君の体に負担がかからない物を厳選してある。医療班のトツプとして、安心して使える代物じゃなければゴースインは出してないよ」

ロマン様の言葉は……それこそ、余人が思い浮かべるような『暴走』や『副作用』などの不安要素を先に取り除いている、と宣言していて。

その言葉に、感嘆した、という表情と共に、マスターは口笛を一つ。

「良く分からない物に初挑戦するんだ。多少なりとも一か八かの要素は入る、なんてのは創作で良くあるし、そうなるのも不思議じゃないと思ってたけど」

「創作だからそれは許される。リアルでは、一か八か、奇跡を信じるなんて、それこそ基本的にあってはいけないんだ。だから。万が一にも君に危険のない様に、組織に所属する者として、責任もって仕上げたよ」

それを誇らしげに言うでも無く、自慢げに言うでも無く。当然の事だとも言いたげに自然な表情で。

「その礼装は、君も想定していない脅威にも対応できるように、と出来るだけを施したんだ。ぜひ活用して欲しいな」

「——そうかい。なら、その気遣いに応えないとなあ？」

ロマニ様が手渡したのは、黒いスーツ……の、様な礼装でした。

それにマスターが手を通せば、黒いシツクに決まっているスーツは……確かにマスターにはとても似合うのですが。しかし、あの、似合い過ぎてしまっていて。本当に。本当に失礼なのですけれども。

「ま、マスター……あの、えつと……良く、お似合いです」

「えつと……デザイン、考え直した方が良かったかなあ」

「いや俺が『普通なスーツで』ってオーダーしたんだし。俺もここまでその道の方に見えるようになってしまふなんてなあ。俺の顔って、本当にそっち方面なんだね」

そうなのです。明らかにそう言った道の方にしか見えないのです。しかも、幹部というよりは、どつちかと言えればちよつと中間管理職で、自分から戦場に殴り込んでいくような些か、そう。あの……言い方は宜しくないのですが、

兎も角あんまり上の役職ではないと申しますか。そんな感じの迫力が。

「でも、式部さんの護衛みたく見えない事も無いな。此処まで敵ついと」
「そ、それでは立場が逆なのでは」

「まあそうだな……でも、こんな綺麗なご婦人を護衛できるなら、俺は喜んで志願しちゃうけどなあ？」

「きれっ!？」

——ちよつと、マスターに揶揄われたりしたりもありましたが……今の若い方は皆こうなのでしょうか……いい、いえ。それは今気にしても……それは、兎も角。

その後、簡単な試運転をしてから、新作のお披露目とばかりにマスターがカルデア全体を練り歩こうと提案されて。その時に、ロマニ様からカルデアのライブラリームの管理をいつでもに任されて、ビックリしたりもしました。

それなら、と。カルデアのライブラリームはそこまでしっかり見て居なかった、というマスターの言葉で。

行ってみようか、という話に。

……その結果、じゃあいつそ藤丸様やマシユ様も一緒に誘って行こう、という話になりました。それでいつでもお披露目でもしようじゃないか。と。

……因みに藤丸様は、マスターの格好を見た時『うわっ！ 似合い過ぎ!？』とビック

りされてましたし。マシユ様は『これがジャパニーズ・GOKUDOですか』と冷静に反応されてましたし。どう足掻いてもそういう風にしか見えない模様でした。

「……そんなに怖い顔してるかなあ」

「ええと、それは、その」

「顔とかに傷、出来てるからかなあ。でもしようがねえんだよ。この傷、全然治る気配とかなしいなあ……」

そう言つて、マスターは少しその顔の傷を撫でました。

……マスターは、まだ若い身です。そんな顔に傷が出来るほどの修羅場に身を投じるなんて想像も出来ません。そもそも、傷が治らないで残つてしまうとは。それ程に深い傷なのか。それとも、幼い頃に出来てしまったキズなのか。

荒事にも慣れていて、というそこから邪推してしまうのを止められず。

聞くのは、正直失礼だと思つてしまいます。けど……逆に腫物の様に、その事に触れないのも、如何なものなのでしょう。

「——あ、あの」

「ん？ どないしたん？」

「その顔の傷、つて……」

迷つた結果。

かつて晴明様に言われた『君は迷つてウジウジしてるよりも思い切つて振り切つた選択した方がおもしろい……いい結果になると思うから、迷つたら突っ込んでみなさい』という言葉を思い出し、突っ込んでみる事にしました。

何かを間違つた気がするの……気のせいとして。

「ああ？　これ？　いやーお恥ずかしながら、小つちやい頃に妹と遊んでたら、ちよつとした事故でね……顔がザックリいつたから皆、凄いい声を上げてたっけな」

しかし覚悟を決めて突っ込んだわりに、案外と肩透かしなお答えが返つてきて、ちよつとだけ力が抜けそうになつたのと……同じくらい、良かった、と思つてしまいました。恐ろしい鉄火場をマスターが経験して居なくて良かった、と。

「あ……そ、そうなのですか」

「こんなおつかない傷だけど、案外拍子抜けする由来でしょ？　喧嘩で出来た名誉の負傷とかだつたら武勇伝になるんだけどねえ」

「いえそんな」

「まあでも、これも家族との大事な思い出だから。愛しい傷ではあるんだけどね」

——そう言つて傷を撫でるマスター。

ふとその横に、浮かんで来る文字が。マズい、とは思いましたが。もうこれは止められません。せめて私以外が見ない事を願つて、チラリと見てみますと。

『あの時の妹は本当に楽しそうで。可愛らしかった、と思う本造院康友であつた』

……そんな言葉が、見えて。

「——マスター」

「ん？」

「妹さんは……その」

「あー、いや。大丈夫だよ。これの黒幕を恨んではない。世界を救う、なんて難行に恨みなんて持ち込みはしないよ。それが足引つ張つたら、良くないしな」

そう言つて踵を返すマスターの横には、もう何も見えなくなつていて。

……それが本音なのか、どうなのか。今は分かりません。けれど……いずれにせよ。

マスターをきつと、日常に返さねばならない、と。

そう思つたのです。

断章：獣と盟する者

「——全く、本当にしぶとい物だな。カルデア」

豪華な装飾の中に、少し似つかわしくない男が立っている。整った服装ではあるが、かしわりと比べれば些か見劣りする。

男は、魔術師——に、擬態した刺客であった。

それも、ただの刺客ではない。人間たちが過ごして来た世界。歴史。すなわち人類史全てに対する、余りにも巨大なテロを敢行する為の使徒。

男は……かつてカルデアにて、その任の為に暗躍していた。

その時には自らをレフ・ライノールと名乗っていた。

「自分達の滅びを受け入れず、ああも醜く足掻くとは。全く、私自ら捻り潰してやりたくなるといふ物だ。触れたくもない、というのはそうだが……アレを見ている方が気分が悪いという物だしなあ」

人類を滅ぼす為の任務に従事していただけあって、男は人類という物を疎んでいた。蔑んでいた。否んでいた。もつとあっさり滅んでくれれば手が掛からないのだが。と思う程度には人類を否定していた。

「——独り言か。マスター」

「いいや？ 私がどれだけアレを視界にも入れたくないかを説明すれば、貴様の様な使
い魔風情にも、やる気を出して貰えるか、と思つてな」

「言われずとも。私はそなたの命令を遂行するとも」

「ああそうか。心配する方が愚かだった……貴様は私の命に逆らえぬ、哀れな英霊風情
だったか。ではいい。すまなかつたな、余計な事を言つてしまつて」

——否。従事していた、という言い方は正しくない。その任務から今も、彼は離れて
はいない。寧ろ、精力的に人理を亡ぼす為の細工をし続けている。

彼が居る場所は特異点だ。第一特異点の最期を、如何なる手段かを用いて知り……そ
してよりカルデアを叩き潰す為に、更なる細工を弄するようになった。

「さて、貴様はもう行け。愚かな民衆を導くがいい。自らを亡ぼす為の道へな」
「……」

その為のサーヴァント、そして駒が、目の前の大柄な男だ。まるで樹木の如き大槍を
携えた、浅黒い肌の英霊である。

恐らくは、この特異点において、最適な『圧力』にして『強権』となり得る怪物的な
存在だ。確実に勝利する為に、先ず『レフ』が召喚した切り札だった。一切の容赦をし
ない為にも呼び寄せた。コレが存在する限り負けは無いとすら思っている。

「——一つ聞きたい。何時も、ここで何と話している?」

……ただ、この男の少し出しゃばりな所は非情に忌々しいとすら思ってはいるが。

「貴様、私に質問できる立場だと思っているのか? さっさと行け。貴様は貴様の仕事を全うしろ。これ以上は言わせるな」

「……了解した」

取り敢えず、改めて適当に退散させて……改めて、この玉座の中心に視線を向ける。今は定期連絡の時間だ。

レフは、その相手を好んでいる訳ではない。人類と同じくらいには疎んでいる……が、しかし同時に、人類以上に警戒している相手でもある。現状の人類よりも、相手は自分達の脅威なり得るのだ。

「——」

「……来たか」

——中心に、黒い霧……否、染みのような何かが溢れだす。それは、取引相手が作り出すゲートのような物だった。

「——」

「調子はどうだ、だと? 良い様に見えるか? 貴様が我々に貸し与えている戦力もさして役に立たんというのに」

「……必要は無いのか？ ふざけるな、さつさと寄せ……まあ万が一の予備選力程度にはなるからな。精々、利用して——」

瞬間、溢れ出す黒い霧のような何か。

凄まじい圧力。それは、恐らく自分達を束ねる『王』にも届き得る力だ。

七つの獣ですら司りきれぬ、人の悪性を知る者。今は人理焼却を成す為に、あれと敵対するのは些か以上にマズい。

「……分かっている。我々と貴様の目的は衝突し得ぬのだからな。貴様にとってはあの小僧が必要。逆に我々にとっては焼却の邪魔にしかならん……それを貴様に引き渡せば更なる支援が来る。利益しかない話だ」

「だが、これが終われば貴様と我々は敵対するのだ。それを忘れて貰っては困る。一時的な協力関係に過ぎないのだから」

そこまで言い終えた所で、黒い霧から溢れ出した霧は少しづつ戻って行って。

それは、『レフ』の言葉に、分かっている、とでも言いたげな様子をしていた。レフは冷や汗などかいた事は無かったが、しかしながら今、恐らく人生で初めて、それに類する物を彼は体験していた。

「それで……今回此方に寄こすのは何体ほどだ」

『――』

「ほう。五十……待て。五十だと？ 以前の特異点ではそれだけの数を投入はしていなかったはずだが……!? 何故それだけ増やせる。成り損ないとはいえ、サーヴァントだぞ!？」

それは、彼の尽きぬリソースにも理由があった。

シャドウサーヴァントとは。サーヴァントとなるには霊基の足りなかつた者。サーヴァントの成り損ない。故に、その力はサーヴァントに大きく劣る。

——だが、それが弱いかと言えば決してそんな事はない。

霊長類の守護者たるサーヴァントは、幻獣種にも匹敵する力を発揮する存在である。それに足りずに成り損なうという事は、逆にそこに辿り着ける可能性があつた。

その事実だけでも、そこら辺のゴーレムや、魔獣風情とは一つ程格が違うのだという事は分かる。しかし、それ故に。リソースも、十分に必要だ。

だが。今までの所、『レフ』が目の中の相手がリソースで苦勞している所を見た事が無いのである。

汲めども尽きぬ無限の盃。そんな伝承は世界各地にあるが、目の前の相手は実際それを持つていてのではないかという程に。彼はシャドウサーヴァントを、気軽に此方に回

して来る。気軽に、である。

「……まあ良いだろう。十分だ。カルデアのマスターは必ず其方にくれてやる」
『――』

「約定を違えるな、だと？ 人間と一緒にして貰っては困る。契約は果たす」

それが、特異点での穴埋めに役立つているのも確かだが……何れ敵対する相手が、それだけの力を持っているのは、脅威としか言いようがない。

それに……何よりも。

目の前の黒い闇の向こうに居る存在は、ある意味で自分達よりも容赦が無く。

そして、用意周到だ。

自らを新皇としか名乗らず、自らの本名を明かしていない上、此方からの干渉が出来ぬよう、自らも滅多に干渉してこない。不文律を守り、隙を見せない。そして、無駄に主張をせず徹底的に実だけを求める。

間違いなく切れ者だ。

「では、そろそろ失礼するよ。其方もまあ……頑張ってくれたまえ」

人理焼却という大業を成し遂げた後。

アレ、という最後の難敵が待ち受けている事。群として成る存在の『レフ』はしかし。ただ一人『厄介だ』と思わざるを得なかった。

第十五章

ローマ！ な、実況。はーじまーるよー。

前回にて成長しましたホモ君で、遂に第二特異点に殴り込みをかけます……と、言いたい所ですが。前回報告し損ねた赤得がどんな悪さをするか。今から不安でしかありませんいやマジで。

いえ、そんな弱気言ってちゃいけませんね。

第一特異点とはレベルが違うホモ君の実力という物を、ここでお見せするとしましょう。尚、披露するのはボスキャラでは無く雑魚相手なのでございますが。だって雑魚相手じゃないと今のマスターではマトモに戦えませんし……

さて、第二特異点の舞台は、イタリア！ の首都ローマ！ の過去！ ガチで世界一の覇権を握りかけていた頃のローマが舞台です。

何!? パスタ野郎がそんな栄光を手にした時代があつたというのか!? という第二次大戦時代兄貴、型月においてローマはバビロンに次ぐクラスの化け物です。ドイツとか日本とか比べ物になりません。源氏武者も中々ですが、国単位ですと、まあ。はい。兎も角、多分世界で一番イケてた頃のローマが可笑しくなっているので何とかしま

しようと言うのが今回のミッションになります。

前回からサーヴァントは増えて居ませんが、まあ流石にこの特異点を突破すれば今度こそ戦力が手に入るので……

FGOは基本的にマスター一人に三人のサーヴァントを編成するのですが、その為かサーヴァントを積極的に確保しに行かなくても、特異点二つ毎にカルデア側からリソースを頂いて、三人のサーヴァントが揃うまで召喚が出来る様になります。

三人が揃うと、後は自力でリソース集めたり、イベントを熟してイベントサーヴァントを召喚したりと、それでサーヴァントを召喚する事になるのですが……ホモ君の強化に全てを充てる勢いの本ブレイにそんな余裕はありませんので……

さて、皆で楽しくレイシフトした先は……まあそんな普通の丘陵地帯ですね。おフランスの最初と似た感じですよ。そして再び上に広がるなんか、デカイリング。おフランスの時と同じデカイリングです。

おフランスだけの異常気象では無かったもようです。これも重要と言えば重要なのですが今は置いておいて。

今回は、ローマの首都付近にレイシフトした模様です。

『この音——何処かで戦闘が?』

『はい、これは多人数戦闘の音だと思われれます』

んで、首都付近だからといって治安が良い訳でもなく。

早速のデカイバトルのお時間という。流石フランスよりも展開が明らかに早い。音を聞きつけて、ズツコケカルデア四人衆は音の元へ向かいますと……そこでは赤と金色の似たような軍隊が二つ。殴りあいをしてらっしやいました。

で、マシユちゃんの判断と、首都側を防衛する動きを見せている、という事で少数側の戦力を守りに行きます。防衛は任せろーバリバリー

まあ言うてもそんな相手が強いつてもないので、気軽にぶちのめしたいのですが……しかしこういう雑魚敵こそ、今のホモ君で殲滅するには丁度いい敵です。

専用の衣を身に纏い、強化されたホモ君のパワー……見るがいい！ 喰らえ！ 確定クリティカルの暴力！ 見ろオ！ 雑魚敵がゴミの様に倒れていくのだから！

何というプレイヤールの暴力。雑魚敵を粉碎し続けてやれば、気分はもう某ブロッコリーでございます。むううう……気が高まるウ……溢れるウ……化け物？ 違う、動くな、俺はホモだ（混成語録）

なおサーヴァントの皆さまはそれ以上にあつと言う間に敵兵を蹂躪していらっしやる模様。コレが……これが英霊と一般クソ雑魚鬼混血との力の差……！ 圧倒的……！ これが原作再現というのが、型月世界の人間の貧弱さを物語っております。

ま、まあホモ君も覚醒状態なら雑魚敵を処理できるようになったから（震え声） 補助

して尚それっていう産廃具合を分かっているんですかね……？

という事で一つ覚醒したホモ君のパワーを見せた所で、あとはもう処理です。サーヴァントの皆さまの力の暴力を見せ付けて差し上げましょう。あー遠距離からプチプチ式部さんで処理すんのたーのしー（悪意充填）

『剣を納めよ！ 勝負あつた！』

その結果としましては、全ての雑魚敵をささつと殲滅し、あつという間にエンドです。いやーすっかり今回もレベル上げはしていたので。楽勝ですよ。瞬殺です。それにまだまだこの特異点から出て来る強敵は居ないので……

さて、そんな事は取り敢えずどうでも良いのです。今重要なのは、此方が救援した側の人です。黄金と赤の美しいお嬢さん。しかし……この顔を、皆さまは知っている！

『ともあれ、この勝利は余とお前たちの物。たつぷりと褒賞を与えよう！』

このワダ○ルコ顔の赤いセイバー。EXTRAからFGOへ出張なさって来たイケメンにしてクソ可愛皇帝、ネロ・クラウディウス様の御光臨です。

あゝローマになるゝ（意味不明）

因みに現状では名前は『??』と表記されていらつしやいますが、まあここまで実況を見て来た型月訓練済み兄貴姉貴なら『なぜわざわざ『??』表記にしているのか』ぐらいには思つてらつしやるでしょうし積極的にバラして行きます。

さて、取り敢えず道中、ネロちやまと共にローマにそのまま帰還……とはいかず。

まあ雑魚敵がいらっしやって。それを蹴散らしたその後が問題です。ロマニからの報告で、近くに敵正反応ありとの事。

『我が、愛しき、妹の、子よ』

『叔父上……！ いや、いいや、今はあえてこうよぼう。いかなる理由からか迷い出でて連合に与する愚か者……カリギユラ……！』

早速のサーヴァント戦です。

敵サーヴァントの名はカリギユラ。伯父上とネロちやまがおっしやっついていらっしやるように、彼女の血縁。そして、彼女の前にローマで皇帝をやっていたお方。

FGOにおいてはバーサーカーとして実装されましたが、そのクラスは彼の逸話からしても恐らくは的確かと思われませんが……それは兎も角。

ランスロットに続き、二度目のバーサーカーのサーヴァント戦になります。

バーサーカーは、一部を除いた全てのクラスに攻撃有利を取れる代わりに感度三千倍の宿命を背負った防御に一切の自信無しニキなクラスです。別名全方面攻め急ぎクラス。とまあ、これはプレイヤー側の話。

敵側のバーサーカーはと言えば。プレイヤーのバーサーカーより遥かに高い体力で、此方の殆どのサーヴァントに有利を取れるとんでもないバ火力モンスター。油断する

とあつと言う間に味方が堕ちます。

今はマシユが味方に居るのでまだまだマシですが、もしホモ君だけの時に遭遇したりしようもんなら最悪クラスですよ……

という事で、まあ今、近くにいらつしやるアドバンテージであるマシユちゃんをしつかりと利用していきましょう。作戦はいたってシンプルに。最高火力である式部さんをマシユでしつかりと護衛しつつ、確実に削り取っていくとしましょうか。

対戦、よろしくお願いします。

第十五章・裏：薔薇の皇帝

『■■■■■■■■アアアアアッ!!』

『シールドエフェクト……発揮します!』

『良いぞ、盾の少女よ! 攻めは任せよ!!』

天高くから振り下ろされる鉄拳は、文字通り一切の容赦なく破壊の爆弾。バーサーカーのがむしやらかな攻撃は、遠くに居る私も、少し身震いしてしまいます。マシユ様や、前線で戦う藤丸様は……それ以上なのは間違いないでしょう。

それでも、引かずに敵の動向を見極め、そして必死に皇帝陛下と機を合わせる為に指示を打つ藤丸様、そしてその指示に的確にこたえ、狂戦士の一撃を凌ぐマシユ様。そのお二人の雄姿は、きつと語られるべき、若しくは、綴られるべき英雄譚にもなり得ましよう。

しかし、その文言を考えている暇はありません。今は兎も角、私の役割は、援護。遠距離からの砲撃なのですから。

「——で? どうよ、俺の礼装からの援護」

「何となく、ですが。相手の動きを捉えやすく……なった気が、しますっ!」

「そっかー。なら良かった。この礼装、まさか俺の補助専用かと思ってたけど、そんな事無くて。役立たずのタンクになる所だった」

「タンク？」

「んー……水補給用の水瓶的な？」

「あ、其方ですか——そこですっ！」

マシユ様達が相手の動きを引き付けている内に、カリギュラへの攻撃と、そして周辺の兵士を討ち果たす。オルレアンを経て、漸く様になって来た私達の連携、というか。基本的な攻撃態勢。

そのサポートに役立ったのは、マスターの礼装でした。

曰く、鬼の力を引き出す時に、暴走をしない様に、と。力の制御に重きを置いた礼装との事で……その『力のコントロール』のサポートは、サーヴァントにも十分に応用が出来る模様でした。

先ほどもでどんな感じかを実戦で試していたからか、どうにも勝手がわからない様子でしたが。段々と礼装の使い方にも慣れてきたみたいです。

そのサポートがあれば。流石に、魔獣が相手、という訳でも無いこの状況。そう苦戦はする事無く、仕事をする事が出来て居ました。

「おー派手に吹っ飛んだ。お上手う」

「あ、ありがとうございます。てつきり……職業、といった感じだと、思ったのですが」
「……聖杯ってそんな知識までサポートすんのか。ったく、余計なのか必要なのか、いまいちわからん——」

「連合帝国の敵い！ 覚悟オっ！」

「——あ、そう言った覚悟はしないですうお帰りくださあい^^」

「ごげっ!？」

……当のマスターは、その力を引き出さずに、私の周りに近寄ってくる、屈強な男の方々をどうにかするくらいは、なさっているのですが。

鎧の上から、ではなく。的確に鎧の顔の隙間を狙って殴るのです。鼻の柱を押し折るのです。とても的確に。争いの無い時代のお人とは思えない程、冷静でした。

「ったく、幾ら厳しい訓練で鍛えられてるって言ったつて。獣と真つ向からやり合った事あるのかつての。山育ちは逞しいんだよ。で、えつと？ なんだっけ？」

「な、なんでもないです」

マスター曰く。

山の藪を突つ切つて突つ込んで来るそこそこデカイ猪と比べれば全然迫力不足、だそ
うです。

マスターの山は自然豊かで、その分動物たちも活気づいていたのだとか。猪などは言

うに及ばず。鹿や、狸、貉。稀に熊なども現れるほど。そう言った獣が元氣満点に動いている姿に比べれば、と。

藪を突っ切つて来る猪を、活気づいているの一言で済ませて良いのかは少し、悩みますが。

「……動物の類と真つ向から相争うなんて、そうそうないと思います」

「まあそうだろうな。俺だつて別に好きでやつた訳じゃないし。因みに式部さん、動物好き？」

「え？ えつと、猫の類であれば、愛でた事もございますが」

「へー。宮廷つて猫居たんだ」

「は、はい。献上品、だったそうで……つて、話している場合ではございませんー！」

「ごめんごめん。リラックスできればなつて、おらよつー！」

そもそも猪の話をしている場合ではございませんし、話している場合でも無いのです。なのですが、マスターは私以上に何と申しますか……気軽です。

フランスで戦つた時もそうでしたが、戦場での血なまぐさい空気というのは、やはりあまり慣れているものではなく。私自身、割としっかりと気を張つて戦つているので、戦場では相当に消耗するのです。

ですがマスターにとっては、案外とそうではないようです。

フランスにおいては、相手が人間の兵士で無かったというのもありますし、殺意という点では……恐らく、今ほどでは。同じ人間の一つの塊から、濃密な殺意を向けられるというのはどうしても精神的にクルモノがある……そんな気がしますし。しかし。

「皇帝陛下の為にイーっ！」

「はいはい凄いい凄いい。山で走り込みして出直しといで！」

「べっ！」

……奇妙な話なのですが。

マスターって。オルレアンの時の様に、スケルトンの類を殴る時よりも。同じ人を殴っている方が慣れていると、そんな感じがするのです。

私自身、素っ頓狂で、奇天烈なことを、自分でも申している自覚があります。

人以外も、人相手も、殴り慣れているのはどちらも間違いなくおかしいと思います。ですが、その辺りは今はおかざるを得ません。

それ程にマスターは、人を殴り慣れている……というよりも。相手に襲われても顔色一つ変えない。相手に明確な敵意を向けられるのに慣れていたのでしようか。それとも、他に別に理由があるのか。

「——式部さん、援護援護！」

「えっ、あつ、はい！ すみません！」

……それが何故かは、考える余裕はありませんが。

何せ、未だ敵のサーヴァントの勢いは衰える様子を見せなかつたのですから。

「……気配は、もう感じません。敵方の部隊も引き上げていく模様です」

「伯父上があゝの軍団の将であつたのだらうな。まさか、またお顔を見る事になるとは」

暫くの戦闘の後、カリギユラは突如として撤退……ロマン様おっしゃるには、バーサーカーのクラスがが自らの意思で撤退する事はあまりない、との事で。向こうにはサーヴァントを使役するマスターが存在するのではないかと。

マスター、すなわち魔術師が存在する、といった所で。一旦話は、私達が救援した豪華な装いの……貴人と思わしき方にその主導権を持つていかれました。

そのお方のお褒めの言葉、そして……その名乗り。

「余こそ、ローマ帝国第五代皇帝、ネロ・クラウディウスである！」

正直、驚きました。

皇帝。貴人どころの騒ぎではありません。国を治める王、それを更に統べるお人こそ、皇帝。そんなお方が、こんな戦場に、剣を担いで……出て来ていらつしやるというのは、私の常識では考えられない事でした。

ですが、それ以上に驚いたのが、マスターと藤丸様でした。マスターはあんぐりと顎を開いて、藤丸様は目を大層丸くしてらっしゃいます。

「……えっ!!? ネロって……あの、あの皇帝!!? あのローマの!!? えっ!!?」

「(びっくり)」

私も聖杯の知識が……一応は来しました。

どうやら世界的な伝承では、男の方だったそうなのですが。今、目の前に立っているのは見目麗しい女性。しかも、明らかに少女の様にしか見えないのです。なんでしょう。歴史の妙をこの目にした気分でした。

「む、何をそんなに驚く……と、普通は驚くがしかしながら。ふ、余が相手ならばそれも当然であるか。ふふ、分かってしまったぞ? 薔薇の美貌を誇る、皇帝たる余を初めて見て、感極まっておるのであらう!!」

「……なんか勘違いしてるぞ」

「……取り合えず合わせておこう。なんか勝手に気分良くなってくださってるし」

第十六章

ローマを全て踏み潰す実況、はーじまーるよー。

と言つても、踏み潰すのはネロちやまのローマではございません。この世界には一杯のローマがございますのよねえ。ローマ一つじゃないのか……（困惑）

まあそれはきつと後程明らかになるという事で。今は皆様、こうしてローマの首都に到着したのですからそれを喜びましょうか

凄いですよ、このローマ。今ホントに圧倒的な多数に攻められていた都市とは思えない程に、メツチャがやがやしております。

『うむうむ、そうであろう、そうであろう。何しろ世界最高の都だからな！』

これは為政者の有能ぶりが垣間見えてますね間違いない……まあそれは兎も角として。少なくとも、この特異点の皆さまは、必死こいて敵の送り込んだ侵略者共と戦い抜いている模様です。

イエーイ！ ポロ負けしたフランスの人見てる？ w w w こっちは凄い頑張つて抵抗しちやつてまーす w w w

まあ煽るのは兎も角として……このローマも、しつかり抵抗できているという訳でも

ごいません。

んで、ネロちやまに連れて行ってもらった王宮にて、この特異点の現状を教えてくださいました。

先程も申した通り、旗色が良いとは言えません。

ローマの所領の半分は持っていかれていますし、こうして首都近くまで攻め入られている訳です。更に言えば、ネロちやまの側近や、お抱えの魔術師もやられているとう。まあボロボロです。

ネロちやま自身、ここから一人でどうこう出来る、とは思ってらっしゃらないようです。故に、こうして我々をここに連れて来た訳です。

『故に、だ。貴公たちに命じる、いや、頼もう！ 余の客将となるがよい！』

という事で、皇帝陛下からの依頼で、我々はローマ帝国の客将として働く事になりました、と。給料が出るかどうか気にしている藤丸君は割とユーモア利いてると思います。まあそれは兎も角として……

ネロちやまとの契約で、取り敢えずレフの野郎をシバキ倒して殺すのと、聖杯の確保は援護して貰えるようになった所で、敵側が早速攻めて来ました。

とはいえ、今回の敵の主力は人間なんで、そんなに警戒する事もありません。適当に殴り倒しておしまい！ 平定！ まあここまでは敵の戦力も人間の兵士が主力なの

で問題ありません。

問題は、最初の客将としての任務の、夜警備などが終わった翌日ですね。

『この時代における我々の活動を安定させる為に、エトナ火山へと参りたいのです』

このエトナ火山への遠征は、カルデアにとつて重要な仕事。霊脈に向かい、そこにターミナルポイント、簡易拠点を確保する為に動き出す事になります。

問題は、ここでどのようにパーティを割り振るかです。

このゲーム、以前にも言うていたように、藤丸君のパーティとホモ君のパーティを別行動させる事が出来るのですが、今回は、藤丸君とホモ君を、都市の守りと、エトナへの遠征組に分ける事が出来るのです。

と言うても、マシユの盾を設置しなければいけない都合上、藤丸君がエトナ遠征に向かう事になるのは確定しているのですが。それにホモ君がついて行くか、それとも残るかという話になります。

今回に関しては……此方。ネロちやまと共に都市に残ろうと思えます。

というのも、こちら首都において探索をしないとイケませんので……基本的にホモ君はイベントがある所で探索をして貰わねば。この第二特異点でのイベントトリガーは早めな方に配置されているので。

さーて会話でるかなあ……？ おっ、出ました。

『こ、この前……都市に、人とは思えない程に恐ろしい奴らが……夜の闇に紛れて、俺の友達を……連合はあんな奴らまで味方に付けてるのか……』

はい、という事で確定しました。シャドウサーヴァント君達出現フラグでございませぬ。どの特異点でもこのシャドウサーヴァントを切欠とした、様々なイベントを熟した敵をシバいたりしないなどないししようも無いので……はい。

さて、この会話が出た後の夜からですよ。イベントの発生は。

『敵襲…… 敵襲だあ……』

コレを待っていたかのように敵が連合首都に襲い掛かってまいります。敵の首魁は!? ねえよんなモン(辛辣) シャドウサーヴァント君単独です。いえ、単独というより単一という方が正しいでしょうか。

どうやらシャドウサーヴァント君達が一個小隊規模ではせ参じてきた模様です。凡そ三十人くらいです……シャドウサーヴァント多すぎイ!?

サーヴァントの成りかけだっつってんにこれだけ出してくるとか、リソース一体どうなっているのか。とはいえ、一応これだけ出せるのにもカラクリはあるのでそこまで怒っても仕方ありません。

そしてシャドウサーヴァントが出て来た時点で、ホモ君は再びお飾り確定です。まだシャドウサーヴァントを殴り倒せる程に強い訳ではありませんので……レベルを早く

上げてえなあ……

まあ後は、赤得に関しても気にしなればなりません。正直な話、ここで発動する類のモノでもありませんが、万が一という事もあります。

ああそう言えば、このタイミングで説明した方が宜しいでしょうか。丁度話題にも出ましたし……入手する事になった赤得について説明しましょう。

で、突然ですが皆様、覚醒スキルって強いんですよ。

そりゃあ他の得能とは一線を隔すレベルの性能を誇ってますよね。ステータス全体に補正がかかるとか。馬鹿強いですよ。

しかしながら、そんな超強力スキルを何のリスクも無しに使わせないのがこのゲーム。

ランダムで付く赤得のテーブルは、特定のスキルを習得すると、増えます。もう一度言いますが、増えます。今回の場合、覚醒系スキルを取得している事により、その覚醒系に紐づく赤得が増えるのです。どっさり。

で、今回赤得ガチャで見事に引き当てました。

それが此方——『覚醒：躁鬱』でございます。青得の様に見えるでしょ？ 全然赤得なんですよねえ……このスキルの効果ですが、覚醒スキル発動中に、確率でホモ君が一ターン程スタンします。

もう一度言います。スタンします。覚醒中解除不能の混乱が付くようなものなんですよ。

低確率ではありますが、覚醒スキル最中に常にリスクが隣り合わせるとかクソみたいな赤得ですよね!! 折角の覚醒スキルを絶対にノーリスクで使わせない、という強いご遺志をゲームから感じます。

『!!』

あーそうそう。こんな風に後方で戦いを眺めている内に経験値が欲しくなって、迂闊に出て殴ろうとするんですよ。前線のネロちやまにばかり負担をかける訳にも行きませんかからね。

まあ体力が減った挙句、向こうも態勢崩れますし潰せそうと踏んだわけです。走者は基本的に貪欲だからね、しょうがないね。

で、ここで覚醒を使って、まあ一ターン目は、態勢崩してる一人を蹴っ飛ばすじゃないですか。でもって二ターン目にね、こうやってスタンする訳ですよ。あー完全に動けませんね。

……ファツ!? (恐怖) どうして流れる様に赤得のマイナス効果引いてるんだこのホモ!? 危ない危ない、ネロちやまがカバーしてくれて助かりました。

一応、敵が崩れていて、更にネロちやまが一緒に前線張ってくれてる、という事で万

が一にもスタンにより事故死の可能性が無い状況ですから経験値稼ぎに行きましたが……こんな風に、いきなり無防備になる事がある赤得なんですよね。

いやーやつぱり危険ですねこの赤得。どつかのタイミングで消すか、せめて対策出来る様に……気は進みませんが、やるしかないかあ……

まあ今回は、無事ローマの本拠地を防衛できたので、良しとしましょうか。

第十六章・裏：城門前の攻防 前編

「——此奴ら、ジル・ド・レエの私兵じゃなかったのか……!?!」

「マスター、此方へ！」

「ええい、何度も何度も……ここで根絶やしてくれるわ！」

異変は、藤丸様がエトナ火山に辿り着いた、という連絡が付いた時に起きました。

何処からか湧いてきたのは……黒いシャドウサーヴァント。その片手には紛れもなく太刀が煌めいています。あのフランス特異点の時よりもさらに数を増やして、しかも今度は、彼らだけで。ゆらりゆらりと、此方へ攻め寄せてきているのです。

即座にネロ陛下は迎撃の為に出陣し。私達も直ぐに打って出ましたが……しかし。

「一人に最低でも十人で当たらねば、足止めにもならんとは……！」

「皇帝陛下、次々！ 急がないとマズいつすよ！」

「分かっておる！ ええい、なんとも地味に強いのが面倒だ！」

『気持ちは分かりますけど頑張ってください陛下！』

「ええい姿の見えぬ魔術師、お主らも客将であろう！ 仕事をせい！」

シャドウサーヴァントは、やはり一体毎の強さがしつかりとしているので、これだけ

の数に一気に攻めて来られる、というのは苦しいです。

兵士の皆様では足止めが精一杯で、シャドウサーヴァントはネロ陛下と私達で一人ずつ狩っていく行くしかありません。しかもそれなりに数も居ますので、どうしても時間がかかってしまいます。

「……というかお主!!」　なんでそんなに全力で逃げておる!？」

「何の因果か、此奴らこつちを狙ってるんですよ!　俺が前に出たら確実に狙われますんで理由も無くそんな愚を犯すわけにはいかんというか」

「なに?　あ奴らの狙いはお主らか!？」

「あ、いえ俺個人ですけど。いや、アレを呼び寄せたのが俺って訳じゃないですからねいやマジで!」

『それに関しては此方も保証します……本当にすみません……』

更に言えば、マスターも護衛しなければなりません。

マスター曰く『勝てる相手であれば相手もするが、しかし命がけで立ち向かわねば勝てない相手が複数いる時に前に出るの間抜けすぎる』との事で……一応、私と一緒に後方に下がりがつつ、ネロ陛下を援護しています。

「分かった、だが……それでも前に出てきて欲しいものだな!　我が兵達もそう長くはもたんのぞぞ!」

「そんな事言われましても！」

「ぐぬぬ……せめて、せめてあ奴らを纏めて仕留められれば……っ！」

確かに。私達が前に出て、もっと積極的に援護を出来れば、と思いますが……とは言えここでマスターが出て行つて、マスターが倒れても、それはそれで大変な事態です。迂闊な事はできませんし……

「ど、どうすれば……！」

「——いや待て、じゃあ俺が前に出ればいいのか！」

「そうそうマスターが前に出れば……マスター!？」

「要するに俺が狙いなんだろう!? だったら、俺に集まつてきた所を纏めて……! 理由があるなら前線にも出ないとな！」

「どうしてそんな危ない事ばかり考えつくんですかマスター!？」

た、確かに理屈は間違つてはいないのですが……だからといって、そんな軽々に自分の命を投げ捨てるような真似をしなくても！

「——うむ、それだ！」

「こ、皇帝陛下も説得を……つてもう承諾してます!？」

「了解了解。んじやまあ式部さん、警護ヨロシク」

「ひーん」

取り敢えず前に出て行くマスターを追いかけようとして……瞬間、黒いサーヴァント達が一斉にぐるり、とマスターに視線を向ける光景を目にしました。

これにはネロ様も、当然ながら対象となったマスターも、少しばかり顔色が……あ、いえ少しどころではありません。『余計な事したかもしれぬ』って感じですよ。脂汗もかいてます。

「——ふう。早まったかもしれへんなあ、式部はん」

「だから申しましたのに！」

案の定、足止めをしていた兵士の皆様など、当然その後ろの都市など知った事ではないと言わんばかりに、黒い影は此方へと歩みを進めようと——

「成程」

したその一步目で、幾人かがその胸を真つ二つに割られ、地面に倒れ伏しました。

そのまま、マスターの傍に駆け寄ったのは、ネロ陛下。文字通り、黒い影を後ろから一閃し、そのままの勢いで、我々を守る様に立ち塞がったのです。

「まことにお主狙いか。無秩序に攻め寄せようとしていたのが、一気にお主ただ一人を狙う動きになった……故に、分かりやすいぞ！」

振り切った剣がさらに一閃。

周辺に迫っていた黒い影を牽制するように。

「おおく……」

「ふふん、余を余り侮るでないぞ。狼藉者共め」

「皇帝陛下つてホントに人間？ 別の種族にクラス替えしてない？」

「……助けられた者から人間かどうか疑われるのは心外なのだが」

「あらそう？ ゴメンゴメン」

黒い影は、ネロ陛下のその一閃に怯んだのか、はたまた本能的に相手の脅威を察して動かないのか。少なくとも、サーヴァント相手にすら引かずに戦うネロ陛下に、悪しき影達が敵う道理が無いのは確かです。

最早、この勝負。凡その趨勢は見えたか。

ですが、黒い影達は。私の甘い認識など嘲笑うように、ネロ陛下へと走り出しました。しかし直線的で、余りにも分かりやすい攻勢の構え。ネロ陛下にとつては、紅い大剣を構えながら迎撃に動くのは、実に容易い程で。

その総数、凡そ二、三人。全員が突っ込んで来るといふ事はありません。

ふと覚える、違和感。

ネロ陛下と、私の援護射撃。そして周辺の兵士達に動きを止められていたというのに。ネロ陛下一人に、何故少数でかかるのか。寧ろ多人数で襲い掛かった方が、当然の様に戦いやすいというのに。

『——!』

「ふん、その様な見え見えの一撃で……!?」

振り抜かれようとしたその剣に……駆け出して、突っ込んで来た筈の影が、飛びついたので。自ら、剣に切られるような軌道に。

皆、目を丸くしてその暴挙を見ていましたが。しかし。その本当の狙いに真っ先に気が付いたのは、その暴挙を受けたネロ陛下——ではありませんでした。

「——陛下! 剣を引け!! 持つていかれる!」

「何ッ!」

突如響いた大声に、反応した陛下が無理矢理に剣を引き戻しました。

その時、ハッキリと私にも分かったのは。その黒い影が飛びつこうとしてしたのは、陛下の剣だったのだらう事。引き戻した動きに無理矢理合わせる様に、黒い影が、赤い刀身を追いかけて、地面に倒れて行きました。

「——余の剣を奪い取る為だけに、己の身を……!?」

「……………」

驚いて、しまいました。

シャドウサーヴァントとは、あくまでサーヴァントに成れなかった者。不完全な影。意思疎通が出来るものと出来ないものが存在しますが……しかしながら。彼らはオル

レアンの時と同タイプ。オルレアンの時は、複雑な思考が出来ている様には見えません。

「……式部さん、後ろの奴ら」

「は、はい……倒れた瞬間に、一步、前に踏み出しました」

『——今、こつちもモニタリングしてた。間違いないよ。彼らは、意図的に仲間を使って此方を無力化しようとした』

それが。どうでしょう。目の前で彼らは、仲間を犠牲にし、確実にネロ陛下を無力化しようとしたのです。それが正気の行いかどうかは兎も角として……仲間を捨て駒として戦局を有利に動かそうとする、策を一手打ったのです。マスターが気が付いていなければ、危なかったかもしれない。

それが、どういう事か。入って来た通信、そこから聞こえるロマニ様の声色で、凡そは理解出来ました。

『学習した……間違いなく、強くなってる』

「マスター」

「あんな猿知恵が使えるようになってるんだ。今度は俺だけを狙ってくるような事もするかもしれないねえ……」

冷たい汗が流れます。

マスターに人一倍気を付けなければ。乱戦の内に近寄られたら……そう思って、マスターに目を向けて。

「——ああ。ったくよお」

マスターは、焦っている様に見えませんでした。ならば、相手が強くなっているのに冷静に対処できている……そんな風にも、見えませんでした。

マスターは、笑って居ました。それは、今まで見た事がある笑い方では無くて。

「忌々しい……」

酷く、冷たい……薄笑いを、浮かべていたのです。

第十六章・裏：城門前の攻防 後編

「——式部さん。前面に出た俺に釣られた奴を叩く作戦は続行」

「えっ、ですが……！」

事ここに至り、敵には多少の知恵が付いている状況。適当にマスターを前面に出しておけば、そこに一点で集中してくるという理想的な展開になる……とは限らなくなつたと思われます。

こうとなれば、普通に護衛しつつ敵の撃退を目指すしかないでしょう。そう思つていた所なのですが。

「ちよつとくらのリスクは許容範囲でしょ。ここはネロ陛下の本拠なんだから。全力で護衛しないと……ねえ？」

『ちよ、本造院君?!』

「ああいう手合いは、厄介だよ。直ぐに仕留めない」と

ドクターの言葉にも耳を貸さず、マスターはもう一度、前へと踏み出しました。流石に放っておくわけにもいかず、傍に控える積りで動いていますが。

「マスターー!!」

「——頼む。ああいう顧みない特攻つてのは、巻き込まれたら危ない。人の命つてのはそれだけの重みがある。俺達の足をきっちり引つ張るだけだな」

目が、合いました。

私から目を逸らさない。いえ……寧ろ私の瞳の奥を見通す様な。そんな……真つ黒な瞳でした。自分のやる事に自信を持っている目でした。いえ、自信というより。確信している様な。イヤな事になると。

「ま、アレが人にカウントされるかは微妙だが」

「……それは、ご自身の、経験から？」

「さて、な。兎に角、ヤバい事になる前に、アイツ等を釣つて……」

「——狩る、か。うむ。良かろう」

そんなマスターの言葉を継いだのは、隣にいつの間にか剣を構えて立っていた、ネロ陛下でした。相手を睨みつけるその迫力は、ローマの皇帝として相応しい眼光。先ほどよりも明らかに険しい顔は……此方へとにじり寄つて来る黒い影達へと。

ですが、それがただ距離を詰めてきている訳ではない事には、直ぐに気が付く事が出来ました。

「——あれは、もしか……味方を、盾にしているのでしょうか」

「ふむ。戦にさして慣れている、とは思えぬ其方の術師もそう思うのだから、余の見立て

は間違っていない模様だな」

「だってなあ。あからさま過ぎるだろ、幾らなんだって」

その形は……酷く歪な形でした。

前に位置し、広く展開した黒い剣士たちは、一様に剣を下ろし、ハンズフリーの状態。そのまま、此方に掴みかかるかのように大手を広げ、近寄ってきている。そして、その後ろでは、普通に刀を構えた剣士たちが見えます。

一見して、此方を包围しようと近寄ってきている様にも見えませんが……しかし、そうではありません。寧ろ、壁の様に歩幅を合わせて先頭が近寄ってきているのです。

『要するに、本造院君を叩ければ何人だろうが……って事かい!』

「でしようなあ——ここでドクター、本造院君からのワンポイントアドバイス」

『えっ、なに?』

「覚悟ガン決まった連中相手に消極策は愚策だ。勢いで負けたら一気に瓦解する」

そう言うマスターは……再び、先程の様な、薄っぺらな笑顔を顔に張り付けて。目は全くもって、笑っていないのです。

「ソースは俺の親族」

『……』

「凄いで? 一般人が、それこそ地元癒着の極道とかに気迫で勝つんだ。そしたら向こ

うさんはなんと捨て台詞しか吐けなくなる——今も同じさ。一つの事に固執する、って言うのは尋常じゃないパワーを生む」

——婆ちゃんの目、今思い出しても、怖かったなあ。

それはきつと。嘗ての記憶を思い出しての顔なのでしよう。

ご家族との経験を戦いに適応して良いのか、という問題は兎も角として。その言葉には一定の説得力があるように思えました。

『狂奔、って奴かな』

「向こうが実際狂ってるかどうかは分からんが……こつちから見れば狂ってるようなやり方取ってるんだから、そう言う事だ」

『だから、向こうを狩るつもりで行かないと、って事か……筋は通ってるような』
「偉そうに説教できる立場では無いけど。一応、ね」

そう言ったマスターの言葉を裏付けるかのように……先頭の黒い影達は、少しづつ此方へと近寄る速度を上げ……先ずは、と言わんばかりに、ネロ陛下へと向かおうとしています。盾、兼邪魔者を排除する捨て駒、という事でしょうか。

しかしネロ陛下はこれに焦る事無く、一撃で、先ず一人を切り捨て……そして飛び掛かってくる残りは、私が術で足止めをしました。

「分かりました。マスターが、そう命を下すのであれば」

「おう……ありがとう」

……その表情は、ありがとう、の物では、とてもではありません。無理をして笑っているというより、笑うしかない、とでも言いたげな、物でした。

『——殲滅成功！ お疲れ様！』

そのロマニ様の言葉に、ほっと一息を吐きました。

結局の所は多少策を練って来たところで、それに対応できる位に意識すれば、単調な動きには変わりなく。ネロ陛下と、私の援護で、自然とその数は減っていき。特に問題無く黒い影達は一掃されていきました。

正に快勝、と言わんばかりに、ネロ陛下は笑顔で堂々と胸を張っています。

「うむ！ やはりお主らを引き入れた余の目は間違つて居なかつたな。攻勢の際も、この調子で頼むぞ！」

「まあ主に戦力になるのは式部さんなんで、其方を期待して頂ければ」

「何を言う、お主の指揮の仕方もあるに違いないか。どうだ？ 二人共、客将としてではなく、正式に余の元へと来ぬか？」

「いや、絶対にまぐれですから」

『引き抜きは止してください皇帝陛下……』

とはいえ、幾度か危険な場面も無かったわけでは無かったです。それこそ、私達では想像もしなかったような、捨て身の攻撃等……しかし。

それを止めたのは、マスターの指示でした。

まるで『知っている』かのように相手の動きに反応し、私に其処を撃つように伝えてくるのです。実際に其処へ打ち込めば、ネロ陛下の足元に暗い影がいつの間にか忍び寄って居たり、という事もよくあつて。

ネロ陛下がお褒めになるのも決して不思議ではありません。

「ご指示、お見事でした。マスター」

「あー……ははっ、まあマスターなんて仕事にもちよつとずつ慣れて来たの、かな？」

……しかしマスターとは言えば、それに喜んでいたり、誇らしげにしていたり、という事は無いのです。寧ろ、何処か困ったように笑うだけで。

「なぬ？ 指揮の経験は浅いのか？」

「そうですよ。だからまぐれなんで、そんな期待しないで下しあ」

「ぬぬぬ、それにしても的確に……」

そもそも、ネロ陛下に結構寄られているので、そんな顔をしているのかもしれないというのは、多分、あるとは思いますが。

「まあ良い、今は大分疲れた……話は改めて、城の中ですとしようか」

『いやだから引き抜きはご勘弁願いたいんですけど』

「——あーいや、皇帝陛下。ちよつと俺は後から戻るんで。お先に戻つて頂ければ」

「ぬ？ 何故だ？」

「んつと、言つたじやないですか。慣れてないつて。だからちよつと、空気に酔つたというか、まあ気分が悪いというか……」

——とはいえ、そういう方面、という可能性も無いでもありませんが。

取り敢えず、マスターが残るといふのであれば、私が残らない訳にも行きません。ネ口様にその旨を伝え、そして振り返つた所……マスターは、先程の黒い影が倒れていた辺りに立っていました。

「……どうしたんですか？ マスター」

「いや。ちよつと、な」

顔色は、言っていた通り悪い様に見えます。見えますが……それが私には、体の不調から来るようには見えませんでした。

思い出すのは、政敵との丁々発止に些か疲れ果てた、宮の内の官僚様方の姿。思い出したくもない、といった様な顔をしていた人たちの顔。

そう言つた事に興味の無い私にとっては、そう言つた方たちが、どうして死ぬような顔をしてまでそう言う事に命を燃やすのか……些かと、理解に苦しむ部分もありました

が、けれど。

「——やな事思い出させやがって、ホントによお」

そう言った方々の、どうしようもない程に疲れた表情というのは、本当によく覚えて
いるのです。何処か、病んでいる様な……

今の、マスターの様な。

第十七章

ガリアへ応援に向かう実況、はーじまるよー。

という事で城壁でのシャドウサーヴァント迎撃に成功、そしてエトナ火山から藤丸君達が帰還しました……

『戻ったばかりで済まぬが、これからガリアへと遠征を行おうと思う』

そこから、いよいよネロちやまと、ローマで両軍団が戦っている戦線の一つであるガリア遠征に向う事が決定いたしました。

曰く、ガリア戦線はローマでの戦いでかなり重要な役割を担っているのです、そこを鼓舞しに行くらしく。アイドル志望皇帝としての仕事を果たすお積りでしよう。

因みにガリアへと向かう道中では、馬に乗り慣れない藤丸君を見る事ができます。後、山育ちなキャラだと、主人公キャラが馬に乗り慣れている……というより、獣に慣れているので乗りこなす事が出来る、といった感じのムーブを見せてくれます。山育ち万能！

まあ山育ちに関しては兎も角として。

当然道中が無事に終わり……とか言ったら何か型月ゲーかとなるのでそうはならず。多少のトラブルやバトルも挟む事にはなりません。

で、ここでそれなりに活躍すると、ネロちやまからお褒めの言葉を頂くとともに、余の元に来ないか、という勧誘を受けます。

後、芸が細かいのが……自分が直接戦闘で活躍すると『余の下でその力を生かすつもりはないか?』という誘い文句になり、自分がサーヴァントを指揮して……まあ要するにマスターの、サーヴァントへの追加命令権を生かして活躍すると『その指揮の腕、余の下で振るうつもりはないか?』という誘い文句になります。

因みに、魔術を多用して活躍すると『我が宮廷、いや余自らの手で重用するもやぶさかではないぞ?』という誘い文句に変わったたり……まあここだけでも細かい事、この上ありません。

そんなホモ君に関しては『その強面を生かして余の警護でも務めるか?』というお言葉を賜りました。まあお判りでしょうが、顔を意図的に怖く偏らせると貰えるお言葉です。

キャラクターの顔の造形一つとっても、キャラクターが異なる反応をしてくれるのは大変うれしいですね。因みに、ホモ君はこれから『顔が怖い』『顔が厳つい』だの好き勝手に言われるようになります。第一特異点ではそんな事も言われませんでした。ここ

からはそう言う要素もありますので、楽しみにしていきましょう。

さて。お褒めの言葉を頂いてありがたがっている場合ではございません。

面倒を抜ければ、いよいよガリアの野營地に到着です。ネロちやま率いる正当ローマと似非ローマが取り合っている重要な地方と申しますので。まあそれなりに戦力が詰めております。

『皇帝ネロ・クラウディウスである！ これより謹聴を許す！ ガリア遠征軍に参加した兵士の皆、余と余の民、そして余のローマの為の尽力ご苦労！ これよりは、余も遠征軍の力となろう。一騎当千の将もここに在る！』

『この戦い、負ける道理がない！ ——余と、愛すべきそなたたちのローマに勝利を！』
 そして、このローマ野郎共の野太い大合唱でございます。女性の演説に高揚して咆哮を上げるその様子は正にアイドルの追っかけ。いや、こんなゴツイ追っかけが居たらアイドルが気絶しますけど。ローマクラスのアイドルならばこれが普通なのでしょうか。
 とはいえこの人気の凄まじさは流石全盛期と言っても良いでしょう。因みにこの後のネロちやまについては……言及はしません。

まあ何はともあれ、このガリアにおいての鼓舞やらなにやらは上手く行った模様です。兵士の士気も上がり、そしてここには強い将も居るので、もうほぼ負けは無いな！

(フラグ量産機)

『おや、思ったよりお早いお越しだったね。ネロクラウディウス皇帝陛下』

』

その強い将が此方のお二人。メツチャゴツイお人ととんでもない美人。此方、我々の前からローマの客将をやつてたお二人です。

で、赤い髪のボンキュッボンなグラマラス美人さんは、FGOアプリをやつていない人でも、FGOにお世話（意味深）になった方は、顔だけは知っている、という人もいるんじゃないでしょうか。

お名前はブーディカさん。

こう見えて（そうとしか見えない）人妻。経産婦です。じゃない。重要なのはそこじゃない。ブリテンに語り継がれる勝利の女王。強さで語るのであれば、多分サーヴァント界でも中々のレベルのある、エース級サーヴァントです。

特に軍隊の指揮においては、相当です。何せ、嘗て全盛期だったローマ相手に技術力の劣るブリテンの勢力である程度戦い抜けたのですから。

んで、お隣の灰色の偉丈夫は……この人に関して余計な事を語るのは失礼にあたるので端的に参りましょう

筋肉！ 叛逆！ 暴走！ の三拍子そろった偉大なる勇者。スパルタクスです。パワーで全てを蹂躪するお方です。後サーヴァントとしては基本的に呼んではいけない

お方でもあります。

その理由についてはスパルタクスを呼んで確かめよう！ 因みに走者の再走理由の一割くらいは初手スパさんを引いた事故死だぞ！

といった感じで、サーヴァントが二騎、このガリア戦線には詰めている訳ですが……この時点で一騎当千を体現する存在が居ても応援が必要という事実が浮き彫りになってきます。それ程に敵の戦力は強大という事です。

さて、それは兎も角。何はともあれ探索探索ウ！ 素材はいくらあっても困るものではありません。探索してたらサーヴァントの再臨素材が揃ってた、なんて事は幾らでもあります。故。

それに、偶にですが探索してるとイベントも起きますし。

っと、早速ですか。

どうやら……お相手は藤丸君の模様です。絆もそれなりに上がっていたので可笑しな話ではありませんね、と。

藤丸君の交流イベントの特徴として、何方かと言えば此方……操作キャラクターの素性に付いて藤丸君が色々質問して、それに答える、という。どっちかと言えばホモ君の幕間の物語的なサムシングに仕上がっています。

やっぱ主人公は物語を聞かされる側なんすねえ。

まあホモ君が何方出身だとか、藤丸君に質問攻めにされている所ですが、今はあんまり関係ないので取り敢えず次に行かせて頂きます。

探索が終わるとイベントが入り、ブーディカさんから『YOU達戦えるの?』といわば腕試し的な事をしようとお誘いを受けます。

こちらはサーヴァント二騎、相手もサーヴァント二騎。なのでパーティー一人で相手する、という感じで、何方を相手するかを選ぶことが出来るのが、今回の手合わせです。

そして、この二人で何方と戦うかと言えば……当然私が選ぶのはスパルタクス先生の方です（覚悟完了）

だって……ブーディカさんライダーなんだから……キャスターじゃボロ雑巾にされて終わりなのだから……バーサーカー相手も十分に重いけど、不利クラス相手にあっさり死ぬよりはマシなもの……

という事でバーサーカースパさんお相手です。

で、スパさんの性能ですが、バーサーカーに似合わぬ超耐久タイプです。リジエネチなのですが、このスパさん、何とほんへとは違い割合回復を持っています。

流星に味方キャラ時の基準での固定値回復では、体力の増えた敵状態では微々たるものだったので、その辺り敵状態でもリジエネがしっかり働くように調整されているのだ

と思われます。

故に、割合リジエネを発動すると、バーサーカーらしからぬ耐久性を發揮しつつ結構重たいパンチを叩き込んできます。これが原作再現のスパさんですが、そんなんズルじゃんと言いたいです。

まあそれをどうにか制するのがこのゲームの醍醐味なので、グチグチ言っていないでスパさんを殴り倒すようにしましょう。対戦、よろしく願います。

第十七章・裏：故郷と母

ローマの皆さんもそうだが、マスター同士も親睦を深めるのは良いことだ。

そうおっしゃった藤丸様は、先ず当たり障りのない、マスターが何方の出身であるかという所から、お話を始めました。

「何処出身ねえ……」

「うん」

「……山奥？」

「いやそういう凄い曖昧な答えじゃなくて」

「いや、実際そう言う答えしか出来んのよな。うん」

そんな藤丸様の話を受けて、マスターの答えは……曰く。分からない、との事でした。分からない、というのは、本当に文字通りの意味のようです。自分のご実家が、一体何処にあるのか、マスター自身も本当に分からないそうです。

「……そんな事ある？」

「あるよ。マジでマジの山奥だったし、なんか近くに『何処の県だ』って分かるもんがあった訳でもないし。ビビる位田舎。スマホだって、実家から出て来てから初めて見た

くらいだし」

藤丸様が目を丸くしておられます。

私が暮らしていた頃などは、そもそも日ノ本で、多くに知られている場所の方が少なかったです。私に話しかけてくる殿方などは、何処かへと旅に出た時の見聞を手土産にやつてくる事もありました。新たな知見を得ただけで、十分な宝物となり得た時代。

しかし、マスターの居る時代は……そうではありません。多くの情報が手軽に手に入る様になり、未知の地など、それこそ数える事すら出来るかどうか。

そんな中で、その様に外界から隔絶した……まるで『隠れ里』の様な場所があるなんて。当世に詳しくない私ですら驚いてしまいました。

「いやどんな僻地に住んでるの?」家族!? ホントに日本!?

「僻地、つて。ちよつと言ひ方酷くない?」

「不便だと思わなかったの?」

「んー……いや? 飯を食う分には問題とか無かったし。遊ぶ場所とか色々あつたしなあ。そこ迄では……ああいや、ああいや僻地故の迷信とかはうざったかったけど」

「め、迷信かあ」

……マスターの家のそれは、迷信というよりも、因習と呼ぶべきものだと思うのですけれども……とはいえ。

確かに異様な言い伝えだとは思っていたのですが、しかしそこまで外界から切り離されているのであれば、ずっと伝えられていっているのも不思議ではないと申しますか。

——いいえ、寧ろそれを子々孫々にまで永遠に伝える為に、その様な閉鎖的な生き方をしていた、という事も……

「……考えすぎ、ですかね」

「しかし、お主……魔術師か何かだったのか？」

「……それ本物の魔術師に殺されると思うんですけど陛下」

「む、そうか？ 余にとつては、いきなり額から稲妻の如き角を生やす輩は魔術師とそう変わらぬ程度に胡散臭いのだが」

「胡散臭いと思われてたんすか俺?! ひでえ?!」

……ネ口陛下がおっしゃっていたのは、マスターの礼装によって運用される、鬼の力の事でしょう。

使ってみたマスター曰く『なんか頭バチバチする』だそう。その後頭から角が生えてきて大層驚いた様子でした。本当に生えるんだな、と。それは私のセリフだと言いたかったです、我慢しました。それくらい綺麗に生えてました。

藤丸様などは『カッコいいね!』と言つてらして。マシユ様には『なんだか綺麗です』

と言われ、少し照れてらっしゃいました。

「しかし、余にとつてはその程度の胡散臭さなど大したことではない。どんな者でも受け入れるのがローマの懐の深さである」

「——ま、元敵のアタシだつて受け入れるんだしね。そりやあ広い、広おいでしょうよ」
 そして、そんなマシユ様を可愛がつているお人——ブーディカ様にそう言われ、ネロ陛下は若干、お顔を顰めてらっしゃいました。

「……」

「安心しなよ。嫌味で言つてる訳じゃない」

「う、うむ……分かつている」

先ほどお会いになられたスパルタクス様もそうですが、ブーディカ様も時の為政者……特に彼女は、ローマに抵抗されていた方です。そんな方々を客将として引き入れて居られるネロ陛下の人材コレクターぶりは凄まじいモノが在ります。

……彼らが、既に死している者。英霊、サーヴァントと呼ばれる存在である事は一切知らなかった模様ですけれども。

「でも角が生えるつて、なんか凄いな。今時の子つてそんな事出来るの?」

「あー……まあ一発芸みたいなものだし、あんま気にしないで貰えると」

「どんな一発芸?」

とはいえ。

ネロ陛下の人柄を考えれば、例えサーヴァントだとしてもあまり気にしていなかったと思われれます。だからこそ、元敵のブーデイカ様を、こうして信頼できる戦線に送っているのだと思いますし。

「まあでも、それが無くてもさっきのコンビネーションを見てれば十分戦力になるのは分かったからそれは良いけど」

「お、やったぞ式部さん、褒められた！」

「はい。良かったです」

……一方のブーデイカ様は、ネロ様への確執をわすれている、という訳では無く。単に我々の敵、歴代皇帝たちが連合という形を取ったもう一つのローマ帝国が気に入らないのだそうである。

『ローマ相手に恨みを晴らしている』のは、基本的に変わらないのだそうですが、ああしてマスターと朗らかに話す彼女からは、そんな暗い感情は、少しも感じられません。

「うーん素直！ こんな良い子ばかりだったら、世の中苦しい事もないんだけどね」
「いやいやそんな……言うてそんな良い子でも無いですし」

「何言ってるの。君達は、こうやって知らない時代で、慣れない戦場に必死に立ち向かっている。それだけで、とても頑張ってる……それでも文句ひとつ言わないんだから」

「……あく」

ブーディカ様はそう言つてマスターの頭をぐりぐりと撫でまわして居ます。つるつるとした頭を撫でまわされて、マスターはグラグラと揺れています。

困つたような顔をされているのが、ちよつとおかしいと申しますか。

「良い子良い子、つてね」

「それに關して言えば、まあ俺ら以外居ないんだからしゃーないつて言うのもあるし。まあ良い子ちゃん、つて言いきれぬ訳でも」

「ハイハイ言い訳は良いから。素直に褒められてなさい」

「あー首がゴキゴキ鳴るう〜〜」

……しばしの間撫でまわされてから解放されたマスターは、『目が回つた』と言いながら地面に寝つ転がつてしまいました。適当な所で止めるべきだつたでしょうか、と思ひながら取り敢えず、傍に付いている事にしました。

マスターは寝つ転がつたまま、マシユ様を猫かわいがりするブーディカ様を見てます。

「楽しそうでしたね」

「ブーディカさんね。いやー、ああいうなんていうか、気持ちのいい女傑、つて言う感じの人。嫌いじゃないよ」

「ええ……」

「俺の母さんが、ああいう人だったなあ」

……そう言ったマスターの目は、とても懐かしい物を見るような、そんな光を湛えています。

「お母さまが」

「うん……俺の家って、田舎も田舎だって、前に藤丸に言ったじゃない」

「はい」

「母さんは、そんな事を全然気にしない人だったし……遠くから買い出ししてくるのも文句一つ言った事なんて無かった」

家から町までは、最短になるように特定の道を辿って、それでも一時間どころか二時間以上も余裕でかかる……自分は、そんな所にどうして住んでいるんだろうと、不満を漏らす事が多かった、とマスターは話します。

「そんな俺に、母さんは何時もちゃんとお説教をしてくれた。適当に流すんじゃない」「……ちゃんと、マスターに向き合ってくださいだったのでね」

「不満たらたらのガキの文句なんか、適当に流しても良かっただろうに。一回二回しつかりとなあ。愛されてたと思うよ。うん」

ブーディカ様とどこか似ているのだそうで。あの様に、気風の良い、堂々とした話し

方など、本当にそっくりなのだそうです。

「……その頃の俺は、良い子なんかじゃなかった」

「そう、ですか」

「うん……その頃の事、思い出しちゃって。今はお説教してもらおう事も、もうない。だから何か。誤魔化すのも、嫌で。まあ」

……そこまで言つて。マスターは黙り込んでしまいました。

その先を促す事はしませんでした。それを聞かせて欲しい、等というのは。些か以上に野暮で……そして、酷であると思つてしまったので。私は。

「……頑張りましょうね、マスター」

ただ、そう還す事にしたのです。

第十八章

デブを叩く実況、はーじまーるよー。

さて、無事にガリア遠征軍の將軍方の信頼を得た所で、ここからは全軍をもつてガリア方面の敵軍にぶつかるターンとなります。まあその前に探索は欠かさぬように……探索をしている間に、次の戦いについてノンビリ解説しましょう。

次の戦いは、この第二特異点にて行われる大規模な会戦の一つ目。そして中ボス戦の一つ目でもあります。今まで出てこなかった戦力も出てきますし、敵の数も中々です。連続した戦闘にもなるので油断は出来ません。

そして、ここで一番油断できないのは、敵の投入して来るゴーレムです。体力も高いですし、更にバーサーカーで、防御を固めるスキルもあるという。

雑魚敵ですが、それなりに強いので、コイツ相手にホモ君を前線運用するのは避けたい所です……と、今までなら言っていました。

一応、クリティカル殴りを会得したホモ君であれば、削られた後のゴーレム相手であれば一発で粉碎する事も可能な程度には育っている……サーヴァントで殴り、微妙に残ったゴーレム君を叩く、という戦法も取れます。どうかそうします。

ここから多少リスクを負ってでもレベルを上げて行かないと。その為の手段があるのに使わないというのは論外になってしまふので……レベルを上げて覚醒で殴りに行くべくさあいよいよ実戦ですよお！

——んでもって、ガリアのボスキャラなのですが。

『そ、それは……皇帝陛下カエサル様、御自らはお出になると？』

『阿呆——私が出るのではない、奴らが来るのだ』

出ました。ふくよかさ全一のサーヴァント。しかしこの恰幅の良さだというのにここぶるイケメンというこの矛盾は一体何なのか。いえ、別に恰幅が良いからと言ってイケメンではないという法則は存在しないのですけれど。

そしてこのお方の名は、当然世界全体にとどろく程の名声を誇っているでしょう。そうその通り。皇帝とかいうちやちな位に収まらない『神君』ことカエサル。

ローマの歴史に燦然と輝く、文字通りの大英霊であり、稀代の弁論家であり、かの世界三大美人の一人、クレオパトラを妻にした歴史に名を残すプレイボーイでもありません。

その『司令官』としての才覚は文字通り桁違い。

軍を率いての戦いなら、ネロちやまは勿論、將軍としての才覚に優れたブーディカさんでさえ一歩か、下手すれば二歩程遅れを取ってしまうでしょう。

恐らく彼と比較になるのは、それこそかの征服王、イスカンダルクラスの指揮官で無いといけません。

まあ訥々と説明しておいてなんですが、問題は敵として戦った時の性能です。なんですがこの神君……普通にサシでも強いです。

流石に戦士系サーヴァントと互角、という訳にはいきませんが、その宝具たる黄金剣は幸運判定が成功する限り相手をなます切りにし続けるとか言うバカみたいな性能を誇りますし、最優のクラス、セイバーとしての適性を持つくらいには剣の腕も立ちます。

ゲーム的には、宝具後のクリティカルなど、油断していると割とシヤレにならない火力を叩き込まれたりします。相性不利の筈のアーチャーですら、育成が不十分だと普通にもぎ取って行かれる有能セイバー。

その指揮から繰り出される兵達と、更にその先に居るそれなりのサーヴァントと戦うのが今回です。

『露払いはアタシとスパルタクスでやる！ アンタ達はネロと一緒に本陣へ突っ走れ！』

『はははは。素晴らしい、此処にはすべてが在る。圧制者の魔手と化した敵兵は幾百、幾千、幾万か』

まあ、兵隊たちに関しては、ブーデイカさんとスパルタクスさんが引き付けて、手薄

になった所を少数精鋭で突き進む予定なのであくまでフレーバーで済みます。因みにそれがフレーバーで済まない場合も当然あります。

フレーバーで済まない場合、兵隊がカエサル殿の指揮でバフを掛けられて、第二特異点レベルではない火力でグサグサ来ます。辛いです。

更には、お味方に引き付けて貰つてるとはいえちやんと敵は来ますので、ホモ君の活躍の場がない訳ではございません。

とはいえ、式部さんに削つて貰つて殴り倒す、という流れは変わりませんので。結局は序盤は式部さんの火力頼みでございます。

式部さんお願いします！ 削つて！ バーサーカーにキャスターは攻撃有利だぞ！ 全員が基本そうなんだよなあ……完全有利になりたければフォーリナー引つ張つて来て、どうぞ。

そしてゴーレム君が程よく削れた……もとい、式部さんがね、運悪く倒しそこねてしまったゴーレムをね。マスターが責任を取つてサポートするのが仕事です。

ゴーレム君にめり込む拳！ 膝！ 派手に一発叩き込む！ 砕け散る岩石！ 飛び散る砂！ あークリティカルの音おへへ そして入る経験値の音おへへ 礼装のバフも入つて第二特異点時点とは思えない火力を叩きだしてます。

コレを繰り返して殴り倒すのが基本ですね。楽しくぶち壊せ！ もしかしたら綺麗

な石とか（八連双晶）をドロップするかもしれないぞ！ 因みに式部さんに八連双晶が使えるか否かと言えば……よし、ゴーレムを殴ろう!!

あ、いや……殴るまでも無く、もう敵の眼前迄迫ってましたね。そりゃあアンタ、ブーデイカさんとスパさんに引き付けて貰って少なくなつた敵を突破してるんですから、そんな数多かつたら困りますよ。

さて、いよいよご対面。サーヴアント。『神君』カエサルご登場でございます！ こうして敵が眼前に迫つてなお、全く怯まないのはボスの特権。

『その美しさ——』

『美しいな。美しい。実に美しい、その美しさは世界の至宝でありローマに相応しい』

『我らの愛しきローマを継ぐ者よ。名前は、何と言つたかな』

うわあイケメエン……もうセリフ回しからして、世の中の他の巨漢キャラ（オブラー ト済み）とは一線を隔す紳士ぶりでございます。

『——っ』

『沈黙するな。戦場であつても雄弁であれ——それとも、貴様は名乗りもせず私と刃を交えるか。それが当代のローマ皇帝の在りようか？』

アンタホントに中ボスカよお!? 言い回しがラスボスのソレ。そしてちよつと残念 そうなその表情にもなんか……風格があります。

カエサル様って、皇帝という地位が無い、じゃなくてそんな地位なんてこの人にとつては要らない、というのが正しい気がします。そんなものが無くても、この人は堂々たる『神君カエサル』なのです。

もうここでカエサルに勝った！ セプテム完！ でもいい気はしますが……とはいえそうは問屋が卸しはしないのでございます。この人はあくまで中ボス。じゃあこの後何が残ってるんだよ……（畏怖）

『さあ、語れ。貴様は誰だ。この私に剣を執らせる、貴様の名は』

さて、その化け物染みた中ボス相手に、ネロちやまはどう返すのか。逃げるのか。それとも……

『——ネロ。余は、ローマ帝国第五代皇帝』

『ネロ・クラウディウスこそが余の名である。僭称皇帝。貴様を討つ者だ!!』

ここBGM、宝具の時に流れるアレ。

カツコ良すぎますよねえ……やっぱり、EXTRAシリーズにて主人公を務めるだけはある胆力の強さ。セプテムの主人公はね、藤丸君じゃなくてホモ君でも無くてネロちやまつてハッキリ分かんかね。

こういうね、私の強い、文字通り我が儘な主人公って珍しくなっちゃいましたよねえ……私こういう主人公大好き！ 君も好きかい？

！
そんなネ口ちやまを負けさせちやあいけません。男ホモ、大一番、張らせて頂きます

という事で、相手は単体宝具セイバー。事故死に気を付けて、じっくりと攻略してま
いりましょう！

第十八章・裏：神君の苦悩と敗北

「なあ藤丸！　一つ確認して良いか!？」

「なに!？」

「あの後ろの方に居るふくよかな奴ってブラフかな!?　露骨過ぎないか!？」

「……多分違うと思う!　多分だけど!　明らかになんか強そうな気がする!」

「だよな!　でも露骨過ぎやしないか幾らなんだって。あんな分かりやすい『司令官』って体形見た事無いんだけども!？」

——褒められていない事はまあ分かる。

攻め寄せるは我が方の敵。正当なるローマの軍。そして……それに与するカルデアと呼ばれる組織。そして、私の標的は正当なローマの皇帝と、もう一人。その標的を探して視線を巡らせ……

見つけた。余りにも分かりやすかった。人相が悪いという特徴にバツチリと当て嵌まっていた。真つ黒な服装が、人相の悪さをより引き立てている。確かに、兵士としては良く似合う人相だと思う。

我々のパトロンの御所望なのだが。なぜ彼なのか。見た目が特異なのは間違いない

がわざわざあれだけの戦力を我々に貸し与えて欲する必要があるのか。

まあそもそもな話。これだけの戦力を当然の様に貸し出せるパトロンが一体何者なのか、という事実すら知らないのがどうにも、私としてもしつくりこない。

「……今回の会戦でその一部が、万が一にも知れたとして……まあ、ほぼ持ち帰る事は出来ないか」

もちろん負けるつもりはない。だが……あの後方に控える、薔薇の如くに輝く女が、そう簡単に諦めて負けると思うか、と。いや、無いだろう。

正直、こつちとしては負けても構わないというもある。

「では、後は私に出来るのは、自分の仕事をするくらいだな。おい」

「はっ」

「『傭兵』を出す。巻き込まれぬように気を付ける様に伝えよ。そうなった場合は撤退するがいい。これは命令である」

「はっ」

……全く、あの方の酔狂にもほとほと困ったものだ。

意思のない群体となった今のわが軍と、あの『傭兵』とは余りにも相性が悪い。標的を見つけ出せば敵も味方も関係なくそこへ直進するのだから、下手をすれば此方の同士討ちで戦線が崩壊。その挙句、敵に付け入る隙など与えようものなら。最早何方かを使

わぬほうがまだマシな程。

一応、指揮をしてやれば其方を優先する程度の脳はあるが、それも不安定で、何処まで頼れるものか。

「しかし、使わぬ訳にもいかぬのが、ああ、全く」

しかしマスターを支援しているパトロンとしては、この傭兵は出来るだけ運用するようにとの仰せらしい。我がマスターからも使える物はすべて使って、確実に潰せとの命令が下っている。

……私個人の見立てではあるが。

運用直後よりは、あの黒い『傭兵』共は、動きが良く、そして無駄のない動きが出来る様に見える。パトロンが、出来るだけ使うように、というお達しを出しているのと併せて考えれば……自ずと、目論見も何となく見えてくるという物。

最終的に、あの黒い影共をどうするつもりなのか。それに関しては、想像の域どころかそもそも明確な輪郭すら見えてこないが……碌でもない目的なのは分かる。

そして、加担したくもない『育成』に関しても……その命令を此方は断れる立場ではない訳で。

我が陣営は、どうにも二つの勢力の思惑が入り交じり、十全に戦う事すら少々とばかり厳しい有様だ。全く、ストレスで更に肥えてしまいそうな……おっといかんいかん。

今生はそう言った事で太る様な体ではないな。

「——はあ、戦と政治は分けろと言うに」

いや、傭兵を使えと言うのは正確には政治に関連する話ではないんだが。上の都合という奴だが。しかし戦の最中に押し付けてはいかんという点では殆ど変わらない。政治の都合で戦争が始まるのはいいとして。その戦争に政治の意向が差し挟まれるのは愚の骨頂。

なんなら上の都合であと一步という所で兵を引かされたりなんぞすれば……全く、生前の事を思い出してしまった。

「つと、ごちやごちやと考えている場合ではないか。さてあの傭兵共がどれだけの戦力を削ってくれるか……」

そして、件の傭兵共でもある。

正直、会戦で使うのではなく、こやつら単体で使う『遊撃隊』として使うのが最も良い運用方法だと思う。味方の事も関係なく暴れるので、軍団単位での運用にまあ向いていないというしかない。それでも尚、ここで振るえ、というのだ。

全く、本当に……自由に、自由に運用をさせて欲しい物だ。如何に私が優秀な司令官だとしても、こうも縛りを設けられては厳しいというしかない。

正直な話、やれる事をやったとしても勝てない気もしている。

「——あれは……!!」

「シャドウサーヴァント!? 嘘だろ、首都に來た奴らも結構いたつてのに、未だこれだけ居るつて」

「だとしても退く訳にはいかん! 敵將の元へ!」

とはいえ。それらの心配諸々を振り切つて、あの黒い傭兵共がもし、あの者達を削り切つてしまつたら、私の見立てもいよいよもつてさび付いていたという事になる訳だ
が。

——ああいや、それは最早、杞憂か。

「退けつ!」

「マシユ! 陛下の援護だ!」

「式部さん、前衛は充実、好き勝手にブチかまして頂戴!」

「はいっ!」

赤い一撃が、突つ込んでいく傭兵たちを一閃にて薙ぎ払い、包み込む様に飛び掛かつた黒い影は、重厚な盾に蹴散らされる。後ろからの魔術の弾丸は、後ろに続いていた一団へと降り注ぎ、幾人かを打ち倒し。幾人かの足を止める。

——後は、怯んだ後ろの影共を、一瞬で突破し、前へ、前へ、前へ!

ああ何と苛烈か。

しかし、そうだ。それこそローマではないか。

「実に——見事」

その、一歩たりとも気を抜かずに、前しか見ぬその瞳。正にローマ皇帝として十分な輝きではないか。

その資格を示すように——見るカエサル。お前の前に、当代の皇帝は立って見せたぞ。

私という偽の皇帝を討ち果たすために、死より戻って来た卑怯者を討ち果たすために。

「待ちくたびれたぞ。一体いつまで待たせるつもりか」

「……カエサル、って。皇帝の名前だよ。皇帝がこんな強いって……凄いな」

「は、はい。彼の剣は強力な攻撃でした……先輩の指示が無ければ、守りぬけなかったかもしれない」

まあ私の見立てがさびび付く訳もなく。

負けた負けた。一応、本気でやったつもりではあった。約定を果たす気概も十分に持っていた。それでも。負けると。しかも二度三度、仕切り直したうえで切り結び……それでもはつきりと負けた。

些か、赤面物の負け方としか言いようがないが……ここまで負けが込むと、いやはや。何とも清々しい物ではないか。

「うむ。いや。此処まで負けるとはな。あの傭兵共も、存外と役に立たなかつた……いやそうではない、違うな」

当代の、今を生きようと抗う者達の輝きに、死して尚、過去の残滓に縋りつこうとした愚かな偽の皇帝が敗れた……それだけの事だ。

結局は、自業自得に過ぎない。

「そも、私が一兵卒の真似事をするのは無理があるというのに。全く、あのお方の奇矯にはこまつたものだ」

「あのお方——？」

「……つと、敗軍の将とは言え、これ以上に口を滑らすのは無粋か」

私の体が黄金の光に解けて行く。

その時、一瞬マスターの一人と目が合った。

やはり、あの黒い傭兵共の目的とするには不思議な。少しばかり、傷も多いがまあ、ごく普通の少年……の、様に見えるが。しかし。

近くで見て、漸く気づく事もある。

その視線には、決して理不尽に負けぬとばかりに輝く、克己の光だけでは無いものが

混ざっている。それは後悔に狂いながら、それでも何か焦がれるような。そんな……
激情だった。

第十九章

DEBUを討ち取った実況、はーじまーるよー。

討ち取ったカエサル殿からこの戦いにおける重要な情報が出てきたり来なかつたりな前回。シャドウサーヴァント君も当然の様に乱入して来るというトラブル（既定路線）もありましたが、無事に突破出来ました。

まあこつちとしては、そのシャドウサーヴァント君や、途中のゴレムと兵士君達をシバキ倒した経験値の方が本命というか、美味しいのですが……それを言い出したら雰囲気無しなので、一応カエサルからの情報を。

曰く、皇帝以前の支配者たるカエサルよりもっと上な人が、連合の首都にいらつしやる的な発言をしてらっしゃいました。その発言的にネロちやまはちよつと思う所があつた模様で。ちよつと考え込んでらっしゃいます。

まあFGOをやり込んだ勇士の皆様としてはセプテムの黒幕を知ってる分、彼女には頑張つて、としか応援を送れないと思います。

今はそれよりも優先するべき事柄が全然あるんで。経験値稼ぎとかね。ホモ君も徹底的に神秘に振っているんで、成長速度も著しいモノが在ります。

神秘に振ると、覚醒系の能力を使った時のふり幅はどんどん大きくなります。

ただ、神秘というのは案外と融通、というか、範囲の広いステータスだったりするんですよね。先に説明した通り、魔術の使用だとか、覚醒への影響もそうですし……：神秘性が強くないと、生まれ次第で手に入れられる『魔眼』も使いこなせません。

まあその中の一つに、『同じ神秘への耐性』という物が存在します。

藤丸君が第七特異点のバビロニアに赴く際に、『神秘』の濃い空気にやられない様に特製の礼装を使用していた様に、現代の人間にとつては、昔の神秘が強く残っていた時代というのは空気だけでもアウトな訳です。

酸素が濃すぎると些か人間、酔ってしまうというか。まあそんな感じの仕様な訳ですよやっぱり。

このゲームでも、その辺りは良く出来ていて、第七特異点とかに専用の礼装で行かないと『神秘』に対する耐性がガクン、と下がって普通に神秘に殺されたりするんですよ。で、そこから概算して、称号獲得の為に赴く特異点は、まあ……：神秘が馬鹿濃い時代なんですよ。

ウルク程じゃないですけども、それでも放っておくと大分体調を崩してしまう訳ですよ。という事で、神秘の能力を上げるのはステータスを上げる為だけではないんです。

で、ホモ君の構成上、専用の礼装以外はほぼ使いようがないので……神秘に全ツッパしてるのは、そう言った時の、神秘に対する耐性をガンガン上げる為、というのもあります（食い気味）

故に、もつとレベルは上げておきたい所なんです……シャドウサーヴァントを偶に漁夫つて結構稼いだ、と思ったんですが。いやー予想以上に上りが低いです。

カエサル様の所で、もつと稼ぐつもりだったんですけど、予想よりも稼ぎが弱いと申しますか……いやー、他にチャンス探していくしかないですね。

さて、ガリアから帰還するにあたり、ここで本編上、重要なイベントが一つ。ホモ君にとつてもやはり経験値の狩場になり得そうな所です。

『曰く、地中海のある島に古き神が現れた。酷く具体的な噂話です』

はいはい来ました。ガリアからの寄り道、地中海の名も無き島への寄り道イベントでございます。古き神とか言うクトウルフ感。いや、クトウルフっぽいサーヴァントはもつと先に出て来るんですけども。

まあ神様というのがホントかどうか、真偽は定かではありませんが、此方のローマは向こうのローマと違って戦力不足。藁にも縋る気持ちで力を借りにいこう、という話になりました。

いやー、どんな神様なんだろうな！ きつと、清楚系で、腹黒く無くて、本当に麗し

い女神様なんだろうな!!!

『ご機嫌よう、勇者の皆様。当代に於ける私のささやかな仮住まい。形ある島へ』

こんな女神様ですよ（溜息）

という事で、此方のロリ系サーヴァントの中でも最も危険度の高い一角とされる双子の女神、その姉（一応）のステンノ様が降臨でございます。

皆様もご存知の、メドゥーサさん。第一特異点で私が撃退した、あのサーヴァントのお姉さんになります。全然似てないと言われますが、昔は似ていたんですよ……まあその辺りは暇が在ったら話すとして。

このゲームにおけるステンノ様との一連のイベントは、彼女のちよつとした女神らしさを前面に出したイベントとなっております。

まあ先ず、そもそもステンノ様が協力して下さるかと言えば、して下さりません。なんてこった、当てが外れた!!! とは言いますが、まあ理由がございまして。

そもそもこのステンノ様、そもそも戦闘を得意とするサーヴァントの類ではございませんで……ご自分で『愛でられるのが仕事』って言ってんですよね。大胆な愛玩用発言は女神の特権。別に愛玩用とは言って無いだろ、いい加減にしろ!!!

という事で此方は戦力にならない、という発言でしょんぼりした!カルデア一行様はお帰りになる……筈だったのですがしかし。この状況下で、女神様からまさかのお言葉

が。

『それでは貴方たちには、女神の祝福をあげましょう』

せつかくここまで来たのだからと、女神様まさかの太っ腹発言。やっぱりステンノ様がナンバーワン!! いやー楽しくなつてまいりました。その前の『メドゥーサを嚇ける』発言なんて聞こえない!

……まあ嘘です。ハイ。あの漏れた発言から分かる通り、凡そは碌な事考えてません。洞窟の奥に安置してるとか言ってますが、その安置してあるものが問題なんですよ。

——まあ等と長々言つては来ましたが、結局の所、やる事は女神の無理難題(戦闘)を熟すだけなので、その辺り全てカットしてから、目的のモノをゲット、でいいですかね。ではささつと、カットに……

『——あら、其方の殿方は、少し残つて下さる?』

……アレ?

ホモ君に残れ発言? おかしいですね。ステンノ様とはそんな特別に因縁は持つてなかつたはずなんですけど。うーん、何かあつたかなあ。

あ、いや、ありましたね特大つて言うか、えげつない因縁が一つだけ。

さて皆様問題です。第一特異点で、彼女の妹さんを屠り去つているのは、さて、何方

さんだったでしょうか!? 正史では藤丸君? そりゃあ貴方そうですけど、今回は?

無惨にも屠り去ったのは其処のホモハゲだよ!!!!

というか、メドウーサさん倒すとステンノ様に睨まれるフラグ立つんですねえ。はえ

ゝ初めて知った……(無知)

や、やべえ……消し去られる奴! 女神の逆鱗に触れるフラグにいつの間にか……!

マズいですよ! クソツッ! このガバ走者!! 女神にぶち殺されるフラグを立てて

『経験値ヤツホー』とか喜んでやがって!!!

……いいでしょう。

今、この場で戦闘向きじゃない女神に負けてるようじゃ、此処からの悪意の連鎖にどうしようも対応しようも無いでしょう。ならば……受けて立ちましようか!!!

第十九章・裏：女神の戯れ 前編

——愚かな妹だった。

気が利かなかつたし。デカいし。私達と違って、成長する。変に気にしないな、小心者な所もあつて……だから出来るだけこき使つてやつた。何も気にならない様に、と。
ステンノウリユアレ
私と私で。徹底的に。

ああでも——私の妹。たった一人の、妹。

あの子の匂いがする男にあつた時。それを見た。

焔の中で、あの子を討ち果たす……男の姿を見た。

それは、あの子が私の妹だったからこそ見えた物だったのか。それとも……あの子の無念が。滅ぼされた怨念が、私に景色を届けたのか。

ああ、本当に、愚かな子。

私は。生前ですら滅多に抱かなかつた、どす黒い物を、胸に抱いた。私達に傳いた、愚かな勇者気取りに抱いた、憐れみや侮蔑ではなく……そんな、立場が下の者に抱くそれじゃなくて。

ここに在るのは、明確で、しっかりとして、そして。他者へと抱く……ああ。そう

だ。これが……

「——あら、其方の殿方は、少し残って下さる？」

リアルな、怒りという、感情なのだと思う。

「——くっ！」

「あら、どうなさったのかしら？ 私——か弱い神なのに。もつとか弱い存在が目の前に居るわ。とつても不思議。ああでも……仕方ないかしら」

——日ノ本において、御霊……神という物は、男神、女神に関わらず、あらぶれば恐ろしい物として語り継がれてきた。では。外の国では？

その答えとなるかは分かりませんが……目の前の女神、ステンノ様は。間違いなく神と呼ぶにふさわしい力を有している、と思いました。

彼女は、確かに御自ら戦う苛烈な力を有している、とは言えません。それでも、適当に魔力を振るうだけで、それなりの『力』へとなるのは、正に神の御業かと思いますが、しかし。そこではありません。真に恐るべきは……

「こんなにも逞しい勇士様達が、力を貸して下さるのだから……」

「くっそ。なんだ此奴ら……おんなじローマの兵隊だつてのに、迫力が、つて言うかパワーが全然違うぞ?!」 ドクター!?! そつちはどう!?!」

『ダメだ、通信が繋がらない。完全に分断された! それより、気を付けてくれ。彼ら明らかに正気じゃないぞ!』

「そんなん見てわかるわ! この可笑しなパワーはなんだつてんだ!」

彼女は、マスターを呼び止めて、こう言いました。

『何も聞かず、ここで散つてくれるととても嬉しいのだけど』

『え、いやですけど……?』

その直後。

いやでもそうなつて貰う、と言つた女神様の、その号令一つで現れたのは……無数の兵士達。ネロ陛下の指揮する側、ではなく。我々に敵対する側のローマの兵隊達であるのしようが何処か、様子がおかしい事は直ぐに察しが付きました。

胡乱な目。一言もしやべらず、ただ彼女の周りに跪くのみ。

「たくっ! 式部さん、平気か!?!」

「申し訳ありません……引き剥がせません……!」

『くっ、キャスターのサーヴァントの腕力の貧弱さに加えて、五人がかり、』

まるで、女神の操り人形。

彼らは、油断していた私を、凡そ五人がかりで拘束し……そしてマスターに、残りの五人程が差し向けられたのです。その間も、一切の言葉を紡ぐことも無く、一つ頷いて動き出す。

不気味でした。

熱狂的なあのローマの兵士達とは対照的に過ぎるその姿は……

「——一つ聞く。アンタは」

「どっちのローマにも付いていないわ。嘘は吐いていない」

「じゃあこの兵隊は、なんだ」

「彼らは、私に力を貸してくれる、勇士様よ?」

「はっ……力を貸してくれる勇士様が、こんな精魂抜き取られたような無気力野郎と、ちよつと見る目が無さすぎないかい?」

「いいえ? 現に、貴方を苦戦させるくらいは出来ているわ。私の為に……全てを燃やし尽くして戦ってくれているのよ? 権能すら持たないか弱い女神の為に」

そこから、何となくですが、想像が出来ました。彼女の、本当の力という物……恐るべき力とも呼ぶべきもの。

神にも、色々あるとは、あの女神様もおっしゃっていた事。しかしながら、彼女の言う自らの在り方……『愛玩される女神』というのは、少し違ったのかもしれない。

正確には『人を狂わせる程に、魅了する女神』。その凄まじき美貌で、それに惹かれた人間を操り人形にすら変える。そんな力。

権能を持つていない、という言葉は真実かどうかも分かりませんが、しかしながら彼女は……

「……俺、何かしたか？」

「ええ。少しばかり」

「心当たりがないんだが……教えてくれないかね」

「あらそう。じゃあ——知らないまま、死んでいつてくれないかしら？」

今、彼女は目線一つでマスターへと、兵隊を向かわせている。その兵隊たちは、自らの国、ローマも忘れ……目の前の女神に心酔し、彼女の手足としてマスターに襲い掛かっているのです。彼女の美貌に、魅了され。

彼女にとっては、人をそうして操る事等、権能すらなくても容易い事なのでしよう。

そんな屈強な男達に囲まれながらも、マスターは器用にそれを避けていますが……動にもおぼつきません。戦場において、彼らと同業の相手に、一步も引かずに戦っていた時とは、明らかに違います。

「つたく、戦場ではどれだけ式部さんの存在がデカかったか……実感する！」

「きよ、恐縮です！」

「あら、よそ見している余裕があるのかしら？」

「ねえけど唯の現実、逃避だよ！ くそつ、四方八方から本当に……！」

マスターが戦場で戦って来た時。極端な話をすれば『多対一』という事はありませんでした。私に向かつてくる兵を真っ向から、一対一で叩き潰しているだけでしたから。しかしながら……今は？

周りに二人どころか、五人がマスターを取り囲んで、襲い掛かっている現状。

マスターの顔には目が幾つもあるわけありません。人間です。二つほどしかありません。死角も多いです。向こうの方が数も多ければ目も多い単純計算、相手の方が五倍は有利なのです。当然、マスターが暴れられないのは必然でしょう。

故に。

「つたく……怪我してもしらねえぞ……!!」

起動するは、マスターの礼装。

額より生える電の如き角と……その輝きとは正反対の苦々しい表情が、女神に向けられました。

「——へえ？」

「つたく、何度起動しても慣れねえな、この感覚……」

「面白い芸を持つてるじゃない」

「芸かどうかは、その屈強な勇士様で試してみたらどうだ」

それに返されたのは言葉では無く、彼女の言う所の勇士である、ローマ兵の襲撃。静かな、低い突進を前に、マスターは何か身構える事も無く。

まず、突撃を一步、左に寄る事で横に躲す動きを……その後ろから、もう一人。

危ない、という暇もなく、マスターの裏拳がその後ろからの襲撃者の中心に。直撃。

声も無く、後ろに崩れ落ちました。

間髪入れず、自分の目の前を通り抜ける男の胴に、膝。一撃。

「勘弁しろよ」

「——」

そこから、崩れ落ちた二人を一切気にすることなく、残り三人が三方向から、ゆっくりゆつくりと、距離を詰めようとして——した所で、マスターから見て前方に先に距離を詰めたのは、マスターの方でした。

踏み込み、振りかぶり、一発。横つ面を殴り飛ばし。

揺らいだ体を土台に、反対へと跳躍し。後ろから迫っていた男達に向けて、自らの体を振り回し、蹴りを以て、薙ぎ払う。

勢いそのままに、豪快に砂浜にそのまま転がりながら態勢を立て直した時には……もう、男達は砂浜に全員崩れ落ちて居ました。

「幾ら様子がおかしいって言ったって、体は人間だろ？ だつたらやれない事も無いわけだし……つつても、パワーに振り回されちまつてるか。これじゃ。やっぱあんまり慣れてないなあ。やっぱ、あんま乱発するもんじゃないなコレ」

「で？ どうする？ そつちの奴らも、喉けるかい？ ただ、そつちは一人でも欠けたら一瞬で吹っ飛ばされると思うけど……」

マスターの言葉に。

ステンノ様は、ただ……少し、肩をすくめてから。ゆつくりと、両の手を天へと掲げ。

「降参」

とだけ、言ったのです。

第十九章・裏：女神の戯れ 後編

「——妹を殺した人間が、目の前に立ったことはあるかしら？」
どうして、こんな事をしたのか。

その、ドクターの問いかけに帰って来たのは、その言葉でした。

息を飲んだ音が、自分の耳にもはつきりと聞こえた気がしました。

メドゥーサ。蛇の女怪。彼女の妹……先ほどまでは、全くもって結びつかなかった一人の顔と、その名前が結びついたのは、二つのヒント。

私……いえ、私達が打ち倒した女性。そして、藤色の髪。

覚えがない、訳がありません。

『——やはり小癩にも、サーヴァントを召喚していましたか。諦めの悪い事』

あの時、燃える火の中で打ち果たしたシャドウサーヴァント……彼女は、しっかりと話しそして、その美しい姿も、ハッキリと保っていました。

彼女は、魔性と成りながらも、その美しい貌を失わず。そして、その特徴をよく覚えていました。

私とマスターが打ち果たしたあの女怪こそが、恐らくは……

「……そうか。じゃあ、妹さんの敵討ちって訳かい」

「敵討ち、なんて面倒臭いししないわよ。けれど、目の前に立たれると、案外と目障りに感じるのよね」

「目障りかあ」

「ええ。だから目の前から排除する。出来れば、永遠に……失敗したけど」

漸く。彼女がマスターを急襲したその理由というのは、そこに有るといふ事を理解したのです。彼女にとっては……マスターは、サーヴァントとはいえ、妹を殺した存在に他ならない、と。

「……一つ、聞かせなさい」

「何かね」

「アンタは、どうしてメドゥーサを殺したの」

「やれなきややられてたから」

「……それをマスターも理解していると思われるのに、何故マスターは顔色一つ変えずにそういう事が言えるのか。」

「直球ね」

「嘘ついても何の慰めにもならないってのは、一番良く知っておりますから」

「あら、貴方も誰か殺された事がございまして？」

「んー……殺されたかどうかは兎も角、近しい人が亡くなった事はある、かな」

そう言うマスターは、お嬢さんの気持ちに寄り添えはしないけど、と最後に付け加えて。岩の上でばたばたと脚を揺らす、ステンノ様の前にどか、と腰を下ろしました。如何に体格差があろうとも、地面と岩との高低差もあつて、多少見上げる形になります。

状況的に、追い詰められているのは多分ステンノ様なのですが、しかし地面に座り込むマスターを見下ろすその姿は、実に様になつてゐる気がします。

「ふふ、私の怒りを鎮める積りが無いのかしら？」

「そう言われても。最初の発言で『ああ、これは何もしようがないな』つて言うのは悟つたし」

「悟つた？」

「近しい人が亡くなつた。その想いは、他人にそう簡単に慰められるものじゃない。ましてや、神様の心なんて慰めるやり方知らんよ」

一方のマスターはと言えば。

何か特別、気持ち顔を顔に出しているという感じではありません。世間話でもするかのような感じで、ステンノ様に話していらつしやいます。

人の死について話しているとは思えない程にあくまで普通な……恐らくは、もうすっかりと心の整理を終えて、その方との別れを済まされて……話をしてるのでしよう。

「……とはいえ、まあアンタと話しが合う部分があるとするれば、亡くなったのはアンタと同じ、妹だった事かねえ」

「――！」

ですが。

その次に出て来た言葉には、私の方が度肝を抜かれました。

顔に出来た傷を撫でるその仕草で、ハッキリと思い出せます。マスターの顔に傷を作ってしまった、というエピソードを、恥ずかしげに、でも懐かしそうに、楽しそうに話していたのが。

あの時のマスターは、ただ妹さんとの思い出を語った訳では無く。二度と戻らぬあの日を思い出して……

「……そうなの」

「ああ。可愛い盛りだな。本当に。俺より先に……あんときは、結構きつかった」

「ふうん」

「今のアンタの気持ちとは、まあ違うだろうが……妹を想う気持ちは、一応知ってるつもりでは、ある」

ステンノ様は、その言葉に微笑みを……嘲笑うかの様に、浮かべました。「だから元気を出せって？」

「そうは言わんよ。俺自身、そんな事言われたら言った相手ぶん殴りたくなるからな」
「じゃあ私はどうすれば良いのかしら？」

「——さて、な。逆に聞きたいんだが。女神様」

相手は、サーヴァントです。それも神霊の類……もし戯れに彼女が目の前のマスターに手を出せば。どうなるか。

だというのに、マスターは、時折、此方に視線を寄こすのです。私が動こうと、そうする前に。私を制するように。

「俺を粉みじん、肉片に変えたとして……それで気が晴れるか、って話」

「何を言うかと思えば。敵討ちとかではない、といった筈だけれど？」

「ああそうかもしれない。でも俺が目障りなのには変わりない訳だ。それで？ その目障りな気持ちは……俺の醜い死にざまを見て、晴れるようなもんなのかね」

マスターは、酷く自然体でした。

恐れている様には見えません。ステンノ様の目を、真正面から見ているらしいやいます。ただ、見ているかと言って、何かしらを伝えたいような……そんな気迫もありません。

本当に、世間話でもするかのよう。

「俺は……もし妹に、仇が居たとしても。そいつを八つ裂きにした所で、なんの気持ちも

晴れないし、どうにもならないと思うよ」

「あら、どうしてかしら?」

「想像出来るからかなあ……多分、妹は喜ばないし、だからといって俺を叱ったりもしないんだよ」

優しい子だからなあ、と。マスターは、笑っていらつしやいました。

「多分、困ったように笑うだけだと思うんだよ。うん」

「何も言えなくて?」

「そうそう。まあ死者がどういう反応するかは分からないけども。少なくとも、俺が知ってるアイツはそう言う反応をするんだろうなあ……って。思っちゃうわけで、さ」

「……」

マスターの顔は、何方かと言えば、険しい方に属すると思われれます。表情を見て居れば、どんな気持ちなのかは分かる位、表情は豊かですが、それでも顔つきの険しさは多少印象には残る方です。

ですけど……今のマスターの顔は。普段の険しい顔つきが薄れるほどに、優しく、それでいて、何処か寂しげで。

「なあ、神様よ。アンタの妹さんは……どんな顔すると思う?」

「——さあ、どんな顔をするかしらね。そんなの考えるのも面倒だけど。でも。ええ。少なくとも……」

その先をステンノ様は、呟きはしませんでした。

けれども。その顔には、マスターと同じような色が含まれている気がしました。嘗てを思い出す様な。懐かしむ様な。戻らないそれに、手を伸ばすような。

「……」

「だから、許してくれって懇願もしない。だからって好き勝手にしろとは言わない。ア
ンタが……アンタの妹さんが、どんな顔をするかで、決めてくれ、とは言うかな」
「——別に、メドウーサの為なんて言つて無いでしょうに」

——その後、ステンノ様は、マスターに何をするでもなく、岩に腰かけたまま。

ドクターからの追及をするすると躲しながら。マスターのハゲ頭に、時々その足を乗せたり、額を軽く蹴つ飛ばしたり。マスターは、それに特に何をするでもなく、されるがままになっていました。

何と言うか、その姿は……女神というか、何処にでもいる少女の様にも見えて。

「ねえ」

「なんですかい」

「貴方の妹は、どんな子だったのかしら」

「あー……お転婆な子でしたよ。俺の顔面、こんなにするくらいには」

「そう。手が掛かったでしょうね」

「そりゃあ、ね。でも、手が掛かる分、本当に可愛かったですよ」

マスターは、ただ女神の言葉を聞いていました。慰めを言う事なく。此方から声をかける事も無く。ただ、ただ女神様の言葉を、黙って。落ち着いて。先を促す事もせず。ステンノ様の赴くままに。

ロマニ様の救援要請を受けて、駆け戻ってきた藤丸様達が、その光景を見て、首を傾げるまで。ずっと、ずっと。

第二十章

まだまだ終わらぬ女神の島編、はーじまーるよー

いやあ……女神の加護の恐ろしい事。何と此方に向かつてきたのは、全員連合側のローマ兵の皆様でした。ローマに忠誠捧げた屈強な男共が『女神様万歳！』となつてゐるのは若干痛々しかったですよ。ええ。

まあ取り敢えず、祖国を裏切つた屈強な兵士様はオシオキ代わりにボロカスになるまで捌り切つたので良しとしましょうか。

『——全く、乱暴なのね？』

貴方が先に嚇けたんでしようが（半ギレ）

そんな『まあこわい』みたいな面しても騙されんぞ。お主が嚇けて来たんじやろがい！ という怒りと共にステンノ様に全力をぶつけようと思いましたが、しかしステンノ様は此処ではタコ殴りにする事は出来ません。

まあ流石にあの女神系美少女にハゲのチンピラが襲い掛かるのは些かと見た目が宜しく無さすぎるので、助かったと言えば助かりましたけども。

この責任は、第七特異点にて妹さんをシバキ倒す事で償つて頂かないといけません

か。まあ第七特異点に行けるかどうか、つて言う点がそもそもこの実績を解除する為にはちよつと難しいと申しますか。

とりあえず、第七特異点は藤丸君に任せる事になるとは思いますが。じゃあホモ君はどうすんの？ つて言うのは、その時なつてからお話しましょうか。

で、そんなオチと共に女神の乱暴狼藉（事実）に付き合い終わつた所で、藤丸君達が戻つて来てくれました。どうやら向こうの方もろくでもない接待を受けて来たようですね。とても疲れてらつしやいます。藤丸君、マシユ、ネロ陛下三人ともボロボロです。お宝、と言つても完全にエネミーの群れ。しかも最奥に潜むは大型キメラとかいう悪戯とか言うレベルじゃねーぞ！ つて言う歓待。これは許されない。

とはいえ、これで漸くステンノ様のお戯れも全プログラム終了。さて、後はステンノ様からお目当ての情報を……

『何よ、だらしないわねー。私はあんな大きな猫くらいどうつて事無かつたわよ？！』

——キシヤアアアアアアッ！ おのれステンノオオオ！ 懲りずに次の刺客を放つてきたか、しかもまさか今度は暴力は暴力でも。音の暴力を叩きつけて来るとは。女神め、人間が何を脅威に想つてるかを良く分かつてやがるじゃねえか!!!

……という訳では無くて。この角とマゼンタカラーのお嬢さんは、第一特異点でも出会つていた、通りすがりのエリザベートさんです。はい。

サーヴァントが通りすぎる事ってあるのか……？ とお思いの皆様、甘いです。このFGOにおいてサーヴァントが通りすぎる位、そんなに珍しい事では無いのです。通り過ぎるの仮面ライダー位の気持ちでいいと。

あと、実際にゲームシステムのサーヴァントが通りすぎる……というか、突然沸いて来る事も、無いでもないです。シャドウサーヴァントと同じように、特定の条件を満たすと敵か、味方か、何れかが急に現れる事もあります（食い気味）

エリちゃんなんかその典例で、条件を満たすとありとあらゆる特異点、更には異聞帯に混ざり込んで来るんですよね。ギャグかな？ とか思っていると、案外とスポ根アイドル者的な活躍を……ああいや、今は関係ないですね。はい。

『あははははははっ！』

後、その隣に居るのは本当に何処から湧いたかも分からない猫ちゃんです。可愛いですよ。ゴールデン猫缶を与えると喜ぶのですが、今は持っていないので残念ですね。

冗談はおいておくとして、このエプロン姿の狐っ子は、タマモキャット。立派なサーヴァントです。しかも、普通にランクとしては上位に位置するタイプのサーヴァントです。そう思えない見た目してるって？ 否定は出来ない。

後、彼女に『猫か、狐か、犬か』という疑問を抱いてはいけません。脳が粉々に破壊されます。

でもって彼女達は、本来ステンノさんに雇われた的な傭兵チツクなサムシングの方々です。藤丸君相手に振るわれるはずだった暴力は、キャットがその仕掛けをお釈迦にした事でご破算となり果てました。やったね!!

ではいよいよここで、その雇われた力を振るうのかと言われますと……いやそうでもないですよ。エリちゃんも、キャットも、決して戦わずして事が終わります。

おい、此処まで立ち絵出しておいて特に何かする事も無く終わりか!? ええ。終わりなんです。何せ……そうする前に、別の敵が此方へと殴り込みかけて来るもんで。

『余、の……余の、行いは、運命で、ある……!!』

ハイ伯父上。

神の元へとお話を聞きに来たところでの追撃。ここで凄いのが、ステンノ様という麗しの女神が居るのに一切反応せずネロちやま一直線という所でございます。流石バーサーカーですね。一点集中の熱意は恐るべきです。

さてそんなネロちやまのストーリーカーである伯父上ですが、そのオマケと言わんばかりに黒い影がズラズラといらっしやいます。そうですね、シャドウサーヴァントさんです。それ以外は一切の戦力はいらっしやいません。

……皇帝、ちよつと人望無き過ぎやしないか? お付きが味方って言えるのかどうかも分からん黒子ばつかりっていう。

それでも戦力的には十分ですが、しかしそれだけの戦力をたった一人、ネロちやまに
向ける為に連れて来たとか言う執着の強さ。

……いえ、その、違うんですよ、本来はホモ君関連の追加要素なのにコレの所為で伯
父上の執着具合が跳ね上がっている様に見えるというこの理不尽、お分かりですか皆さ
ん。完全な冤罪で草も生えません。

そんな哀れな伯父上は、出来るだけ火傷しない内に徹底的に火力を叩き込んであげま
しょうか（無慈悲） まあその前に黒子共を殲滅しないといけない訳ですけども。ここ
まで成長したカルデアの力を見せ付けてやるとしましょう。

と言つても今回の戦闘に関しては、何か見所がある訳でもないので無慈悲なカットに
なります。

伯父上がサポート系の宝具を持っている都合上。シャドウサーヴァント君達と一緒に
にかかってくるなら結構厄介な気がしないでもないんですけど、シャドウサーヴァント
と伯父上はてんでバラバラに向かってくるんですよ……そりゃあ各個撃破の的よ。

『おまえ……は……。とて、も……うつく、し、い……月の、女神……より、も……。聖
杯の……輝き、よりも、も……だ……』

『伯父上……』

『……敵将カリギユラ、此処に打ち取った。僭称の「皇帝」をまたひとり、屠つて見せたのだ!』

とはいえ、如何に全カットとはいえ敵中ボスの一人を撃破。

さてそれを記念してと言わんばかり、ここで女神様からとある提案が。ここまでの流れでネロちやまから『オイ怪物寄こした奴が何言ってるねん』と遠回しに言われていますが、彼女、全く気にしておりません。流石女神様だけ……!』

『特別に、本物の女神の祝福を上げる。今度は怪物では無くてよ?』

『貴方達と敵対している連合帝国とやら。その『皇帝』たちが集う場所——連合首都。その場所を正確に教えてあげましょう』

——という事で、この女神の島へと来たことによる、値千金の情報だが、女神様からもたらされました。

敵の本拠地。いよいよ、正体不明の連合について、明確な手掛かりが示されたのです。女神の祝福を賜る当代の支配者。正に伝承に語られる場面と言っても過言ではないでしょう。

あ、因みにエリザベート、タマモキヤット両名共に、これ以上の活躍等はありません。ここで終わりです……態々『何もしていない』とまでテロップに書かれる程何もしません、まあそういう役割だったという事で。

第二十章・裏：二つの勢力の思惑

——カリギユラは、単騎では先ず勝てない。

それは、セプテムに派遣された……この、レフ・ライノールという端末のみがはじき出した結論であるが、しかしある程度正鵠を得た結論だとは思っている。

ネロ・クラウディウス。そして、カルデアからの援軍。オルレアンでの現地戦力、そしてシャドウサーヴァント、其々の戦闘を鑑みて得た結論だ。根拠もない憶測ではない。そもそも、自分達はそのような憶測には頼らない。

故にこそ、シャドウサーヴァントをカリギユラの援護をする為にとともに送り込んだ。奴らは、言われていた通り、戦い、倒される度に、確かにしつかりと学習し、少しずつ強くなって行っている。本来、サーヴァントの残り香に過ぎないアレらが、どうして生み出される度に強くなるのか。その仕組みは、レフの側に一切知らされていない。

探りを入れた事はある。最終的には敵対する相手だ。その手の内を理解し、対策を講じようと思った事はある。対等の敵であるからこそその策略だったのだが……

向こうは、それをさして重要な事と捉えず、更に『恐らく時間の無駄になるからやめておいた方がいい』と諭される始末である。それが、何故なのか問うた時、闇の向こう

のソレは、こう答えた。

「……我々だからこそ、理解できない仕組み……フン」

ブラフ、だと思わないでもなかった。

しかしブラフというには、彼らのシャドウサーヴァントに付いて探りを入れる事への無頓着さが気になる。本当に、レフの一派には理解できない仕組みで、強化しているのだとでも言外に告げている様な態度。

今回、彼らガもしカリギユラと共に全滅しても、彼らにとつてはさして痛手では無いのだろう。それ程に、彼らはシャドウサーヴァントを気前よく提供する。

「まあ良い。カリギユラが負けようと……此方には、このローマにおいての絶対的な切り札があるのだ」

それがある限り此方には敗北は無い。セプテムでカルデアを全滅させる。協力者についての対策を考えるのは、それからでも遅くない。

『――』

「……っ!?!」

そう、思っていた時だった。

レフの真横に『闇』が開く。定期連絡には些かと早い時刻の接触に、思わずして体が跳ねてしまう。まるで、人間の様な反応をってしまった自分に苛立ちつつも、レフはそ

ちらに顔を向けた。

「なんだ、定期連絡には早いぞ」

『——』

「……何？ 島の女神を？」

島の女神、といえは……カリギユラを向かわせた島に居るといふ、神性……の、絞りかす様なサーヴァントがそこに居るのだという。それを求めてネロ・クラウディウス率いるローマが、島に向かったという情報を聞きつけ、カリギユラを送り込んだのだが。正直、戦力になる様な存在かと言えば、そうではない。あくまで、ちよつとした悪戯が出来る程度の存在だ。

そんな島の女神を……彼らは、欲しがっているのだという。

「我々には何の価値も無い存在だ。問題は無いが……」

『——』

「さて。何故そんな物を欲しがる。貴様等のシャドウサーヴァントの方が、よっぽど戦力としては役立つはずだ」

正直な話。

戦力としてはそう珍重できるものでもないが、その人を狂わせる程の美貌の力、というのは如何様に悪用も出来る。今回はそれ以上の物があるから必要ないだけで、もし他

に無ければ、彼女を旗印に、この特異点を支配しようと思つていた可能性はある。

故に、下手にその力を悪用されるくらいなら、という考えが、今、彼の頭にあつた。

『』

「呼び水……だど？」

『』

「戦力の増強……カルデアの戦力を鑑みて、その為の措置？」

しかし意外にも。彼らが欲していたのは彼女の『愛玩される』性質では無く……彼女そのもの、といった方が良かった。

触媒……彼女の、『神』としての血を、欲しているのだという。その言葉に、レフ・ライノールは彼女についての思考を巡らせる。

当然、レフは無能ではない。万が一、神性ごときに邪魔をされても構わないと、例の島に降臨した女神に付いても十分に調べた。そして、先の結論にまで至つた。特に我々の脅威になるものではない。

生贄として何かしら利用できるか？ と言つても、そうするにはその『愛玩される者』としての性質が面倒に過ぎる。リスクとメリツトが合っていない……

それでも、彼らは女神を欲するのだという。

「活かしようは幾らでもある、か……まあ構わん。どうせ我々には必要のない存在だ。

どう利用しようと貴様等の自由だろう」

『』

「しかし貴様らがどれだけ足掻こうと、お前たちも消し去るのは最早決まり切っているのだから、無駄な事はあまりやらない方がいいのではないかな？」

……正直な話。

これ以上に向こうが力を肥大化させる前に、叩く必要があるのではないか。という意見も出てきている。七十二柱の集合体故に、意見が一切割れない、という事は無い。人理焼却……そして、それを踏まえた『真の目的』に関しては意見は完全に一致し、完全に統率されて動いているものの、此度の一件に関しては完全に例外だ。

何方にも利点はある。シャドウサーヴァントという尖兵は、確かに十分な戦力になり得るのである。カルデアのサーヴァントに悉くしてやられている。等と、短慮な思考をする事は無い。

彼らが示したプランの通りだ。あの影の『成長具合』も、少なくとも、第五特異点の前には、このままのペースで行けば、プラン通りの戦力になるだろう。

そうなれば……いよいよカルデアに勝利の可能性は無くなる。

元々から、所詮ここまでの特異点など攻略されても構わない。第七特異点とて、元から突破は不可能な計算であるが。

それに加え、彼らの戦力があれば、もつと確実に勝利を収められる。となれば、今は無理に敵対する必要は無いだろう、と。

……さらに言えば。

現状、ぶつかり合えば間違いなく我々が勝つ。

しかし痛手を負う可能性は十分にある。自分達が如何に精強な群れであったとしても過信する事はしない。カルデアなどという、考慮にすら値しない、僅かなレジスタンス擬きなどとは違う。と、レフは改めて脅威を定義する。

しかし、カルデアとして牙を持っていない訳ではない。今、協力者と衝突し痛手を負えばその隙を突かれ……という事もありえるかもしれない。

故に。カルデアという、ほんの僅かな不安要素を排除するまでは、彼らと協力関係を維持するべきではないか。という意見も十分に多いのだ。

「……良いだろう。別に無害な女神一人を其方に引き渡す程度で戦力を増強できるのであれば、乗ってやろう」

『――』
「増強を完了するのにどの程度かかる？」

『――』
「そう時間はかからない、か。まあいい、カルデアが此処に来るまでには増強を完了して

貰えると、私も骨を負った甲斐があるのだがね」
故に。

今は、良好な関係が続けている振りをしておく……カルデアを、排除するまでは。

このセプテムにてカルデアを排除すればもう協力関係が続けるなんていう茶番をやる必要もない。オルレアンは奇跡的にカルデアに突破されたが。しかしここ、セプテムには自分が詰めている。

王の使徒たる自分が。

オルレアンの無能なサーヴァントとは、格が違う。

万が一、此処迄攻め込まれたとしても。此方には二重三重の策が用意してある。最悪の場合でも……自分が相手してやれば良い。

自分は矮小なサーヴァント共とは格の違う存在だ。たかが数人のサーヴァント程度ならば自分一人でも十分に攻め滅ぼせるだろう。

「……それで、そのシャドウサーヴァント共はどう動かせばいい？ アレは細かい動きは出来ない筈だが？」

『――』

「自分達で動かす？ では私にいちいち言わずとも……ああ、あくまで捕獲と輸送、引き渡しは我々で秘密裏にやれという事か。全く、何処まで自分達の情報を秘匿したいの

か、貴様等は」

レフ・ライノールは笑顔の仮面の裏で、闇を見据える。

その深淵に座する者を、さて、どうやってこの後始末してやろうかと……現状にて本来の敵である、カルデアからすら目を離して。

第二十一章

女神様に教えてもらった実況、はーじまーるよー。

女神様のお戯れに無事に付き合あった結果、無事に重要な情報入手する事が出来ました。ここまで女神様に付き合って、一体どれだけのお宝情報が転がり込んできたというのかと申しますと。敵の本拠地の場所が抜けました。

……えっ？ それだけ？ って思った方。そもそも現状、此方は敵の本拠地が何処からすら分かってなかったんですよ。

ネロちやま的には、急に現れた敵方のローマに領地を食い荒らされた挙句に、その対応に右往左往させられて、向こうの状況など探る暇など無かったと思われれます。ガリアというローマの要地迄奪われていた訳ですし。

今、漸くガリアという要地を取り返し、戦力を立て直し、そして勝利という士気を上げる結果を納めた。ネロちやまとしては、漸くここから反撃に移れる……といった所だと思われれます。

そんなタイミングで敵の本拠地が割れたのです、この情報は正に値千金でしょう。此処から反撃、という発想にもなり得ますよねえ。

『なぜ馬に乗らぬのだ。そうだ、戦車でも用意すれば良かったか?』

『ならば、皇帝陛下。次の遠征には戦車を用意しましょうか』

『自ずと必要になってくるであろう。何せ次の遠征は連合首都への本格侵攻だからな
!』

ホラごらんなさい。ネロちやまも兵士さんもノリノリです。今までやられっぱなしだったのが、一気に敵に迫れるような情報を手に入れて、要地を手に入れて、向こうの勢いも落ちる……そう分かっている様な状況です。テンションも爆上がりですよ!

……とまあ、敵の勢いが落ちる、って思ってる訳ですよ。この現状は。

『つと、皇帝陛下。敵襲だ』

ですが、現状こうして敵がガンガン送り込まれてきている訳ですね。敵もそう容易くやられてやるつもりもない模様で

しかもレノフは更にサーヴァントを召喚すらしています。今強襲をかけてきている部隊もそのサーヴァントの仕切りによるものなんですよね。中ボス倒してもそれに匹敵するボスが更に即装填されるとか言うクソゲー。

これが、聖杯の力という奴です。ヤツパ聖杯ってチートだわ……

で、今回の敵ですが……珍しくホモ君の稼ぎ時だったりします。ああいえ、強さ的には普通に結構危ないレベルではないんですが。

その強さに見合わない位結構経験値が入るんですよ。ある理由から。

相手は、レオニダス王率いる三百人のスパルタ兵です。そのスパルタ兵なのですが、その強さは、全員がサーヴァントとか言うチート性能。えっ、レオニダス王って個人のサーヴァントじゃないんですか!?

いいえ、そんな事はございませぬよ。群体のサーヴァントも居ない事は無いんですけどそんな何百人も百鬼夜行みたく引き連れるサーヴァントいる訳ないでしょう。常識的に考えて。

アレは、レオニダス王の宝具なんですよ。

自分達が最後に指揮していた戦力、三百人のスパルタ兵士を召喚するという効果を持つ宝具です。受けた攻撃を跳ね返すカウンターの様な効果を持つ、守勢を得意とした宝具なんですけれども……

しかし、敵指揮官の無能ぶりが発揮される遊撃隊運用。攻め寄せる戦いに宝具を使わせるとか言う。

確かに三百人のサーヴァント相当の兵士の戦力は確かに脅威ですが、それを有効に活用できないようではマスターとしては無能以外の何物でもございませぬ。やーいやーい、この無能!

防衛に置けば突破に異常に苦しむ事になる様な優秀なお兄さんですが、下手な扱いし

たせいで台無しなんですよね。

お陰で、こう言うプレイヤーに取っては良い感じの稼ぎ場として利用される感じになってしまっています。

腐つてもサーヴァントクラスの存在で、しかも宝具。撃破すればそりやあボーナスも乗りますよ。経験値が入らない、なんて事はありません。ホモ君が一人でも撃破出来ればそれ相応の経験値が入ります。

しかも、通常のサーヴァントよりも比較的弱く設定されているので、式部さんの攻撃で多少削つてからホモ君で漁夫……といったやり方も十分に可能です。それを考えるところが稼ぎ時だと言っている理由もお分かりだと思います。

レオニダス王自体が強いかと言えば、まあ普通に強い近接戦闘のエキスパートではあるので彼自身も攻撃的な戦闘スタイルをしている訳では無く、運用され方も間違っている。

ので、現状の此方の戦力を考えれば、倒せなくてはいけないレベルの相手ではありません。

という事で、レオニダス王には取り敢えず此方の経験値になって頂く事になります。本当に申し訳ない……

はい。取り敢えず、レオニダス王には普通にご退場頂きました。あの、本当に申し訳ないと申しますか……どうしてももうちょっとサーヴァントを尊敬した様な編集を出来なかったのか。

でもTNPの事を考えない訳にも行かず……大変申し訳なく……いや、レオニダス王の活躍とかお見せしたかったです。めっちゃ防御カチカチになって最後まで粘るレオニダス王とかそういう凄い抵抗を見せていたんですけども。全てはデータの虚構海洋行きます。

さてレオニダス王を撃破し、ローマの首都へと凱旋。いよいよ、女神様からの祝福を以て進撃を開始いたします。目指すは連合ローマ首都でございます。

そして連合ローマへの反撃に打って出るといふ、正に完璧タイミングで……新たなる戦力が合流を……

『恐れながら皇帝陛下に申し上げます！ 特別遠征軍、首都ローマへ機関の途にあるとの事！』

『なに——あの者達が、帰って来たか！』

『はっ。將軍、兩名ともご健在！ しかし現在、連合の大攻勢に遭って足止めを受けているとの事です！』

なんで俺に気持ちよく連合ローマへの反撃をさせねえんだ（決闘者）

そりやあ向こうからしてみれば気持ちよく反撃されたくないでしょ（正論）

……はい、という事で、えーネロちやまが先んじて味方にしていた二人が戻ってきた模様でございます。しかし、合流する前に襲われているとの事で。ネロちやまと一緒にお迎えに行きましようか。

敵に関しては、まあそんな強い訳でもなく、シャドウサーヴァントも居ないので戦闘に関しては気軽に全カットしますけど……

で、ネロちやまがお味方に付けたお二人というのは。

『私はアサシン、荊軻。君達と同じくネロ・クラウディウスの客将をしている』

はい。先ずは中国は始皇帝の時代。

彼をあと一歩の所まで追い詰めた伝説の暗殺者。荊軻でございます。無頼漢にて酒豪。反体制派筆頭みたいなサーヴァントでございます。白い装束を着こなす、少女とも少年ともとれる美貌が本当にお綺麗ですね。

『■■■■■■■■■■』

そしてもう一人。中国は三国志の時代。

多くの君主を裏切りながらも、その圧倒的な武力で多くをねじ伏せ、しかし最後にはそのしつぺ返しを食らって死に絶えた三国志最強の武人にして、もつとも義に欠けるとすら言われた武将、呂布です。

そして流れるようなバーサーカーでございます。

このお二人だけで、恐ろしい事に数人の『皇帝』を討ち取って来たいわば『皇帝キラー』でございます。サーヴァントの強さという者が良く分かりますよね。ネロちやまが帰還の報告を嬉しそうに聞いたのも間違いではありません。

……一つ言つて良いですかね。

なんで一応は、この時代の体制側の将が悉く反体制側か、裏切りの伝説の残る武将なんでしょうか。皮肉なんでしょうか。

第二十一章・裏：陰に潜む者

『ネロ陛下の熱の入れようから考えても、恐らく、次の会戦……敵、連合ローマ首都への攻勢が、セプテムでの最大の、そして最後の戦いになる——と、考えて構わないでしようか。陛下』

「うむ。……で、決着をつけるつもりだ」

『となれば……陛下にはお伝えしておかないといけない事があります』

——ドクターがネロ陛下へと告げたのは、レフ・ライノールが居る可能性を考え、カルデアのメンバーは都市の制圧では無く、首都、というより敵の本丸への突入を優先する、という事だった。

ネロ陛下が目指すのは、『正しきローマを取り戻す事』なんだけど、カルデアの目的は『この特異点の修正』だ。そうなったら、連合ローマ首都襲撃に際し、二つの取るべき行動に差異が出て来る訳で。

だったら……先ず俺達、カルデアが叩くべきは、このセプテムにおいての異常……連合ローマを統率する、首魁、そしてその首魁に使えているという魔術師——レフ・ライノールと思われる——の二人が最大の目標である。

聖杯を持つているとすれば、恐らくは敵戦力のトップの二人だろう。

『如何でしょうか』

「うむ。それに関しては元よりそれを頼む積りであった故、問題はない。敵の首魁が一体どんな力を備えているか、想像もつかぬ。想像もつかぬ脅威には。うむ。此方の想像を超える活躍をして来た……お主たちをぶつけるに限る」

今こうして、ネロの前に集っているローマの主力の皆……ブーディカや荊軻。スパルタクス、呂布。今こうして自分達と共に戦っている者達を信じている。口には出さなかった。そう言外にネロ陛下が示しているのは、分かった。

『ありがとうございます。そして、それに関して……ネロ陛下。それと、今其方に言っているカルデアの皆に話しておきたい事が』

「ぬ？」

『……今回、敵はスパルタの大英雄、レオニダスという強大なサーヴァントを投入して来た。それで、ネロ陛下は、彼の様な戦力がローマにて戦っている、というのはご存じなかったのですね？』

「う、む。あの様な勇士が敵の一角として暴れていたなら、流石に報告の一つでも入ると思ってはいる、が……」

ドクターの声は、真剣、というより、深刻、といった方が良い感じの物だった。

『この事から、敵はサーヴァントを投入できるだけのリソースを持っている……まあ、相手に聖杯という切り札があるなら当然と言えるんですけど』

「うむ。まあそれだけの切り札が無ければ、余のローマにをここまで追い詰めるなど」
『——ここで、一つの疑問が出てきたんです』

そんなドクターが視線を向けたのは……此方、というより康友だった。

『先日、シャドウサーヴァントが其方に強襲を仕掛けてきたんだよね？』

「ああ……そりゃあもう、結構な数が来てたよ」

『そして、カエサルとの戦いの時も、多くのシャドウサーヴァントが此方へと突っ込んで来ていた訳なんだけど』

「ホント何処でも沸いて来るよなアイツ等」

『……可笑しいとは思ってたんだよね。正直な話』

どうして、シャドウサーヴァントなんだろう——と、続いたロマニの呟きに、なんの事だろうと思っってしまった。

『シャドウサーヴァント、というのには、何処まで行ってもサーヴァントに成れなかった存在なのは、君達に説明したとおりだけど……』

「俺達にとつちや、サーヴァントよりも馴染み深くなってるよ」

「俺は、康友よりは馴染みないかなあ……」

「おう自分が襲われてないからって生意気良い寄ってからに貴様……」

実際、シャドウサーヴァントに襲われるのは康友ばかりで。とか思ってたら本人からどれくらい勢いで詰められた。うん、本人にとつては完全に他人事ではないとしか言い様が無いというか。シバキ倒されても文句言えない位怒ってる……

そ、それは取り敢えずいいとして。

『……続けていいよね?』

「あ、はい」

『シャドウサーヴァントって言うのは、サーヴァントが召喚できるなら呼び出す必要あるのかな、って言う話』

「――あ」

「そう考えて見りゃあ、確かに?」

そう言われてみればそうだ。

あんなレオニダスの様な英雄を、何時でも呼び出せるとなれば、無理にシャドウサーヴァントを呼び出す必要も特にないじゃないか。それは、確かにロマニの言う通りなのである。となれば。

「なんでシャドウサーヴァントを呼び出してるんだろ……?」

『リソースを節約する為、って言うのは『聖杯』のあまりの力の強さから考えれば、殆ど

あり得ない。サーヴァントとしての強みの一つ、宝具もマトモに使えないような存在を呼び出して、メリットがあるかと言えば』

「無いのだな？」

『……魔術師、としての立場からの意見ではありませんが』

では。
単純なメリットの他に、彼らがシャドウサーヴァントを呼び出すだけの理由があるのだろうか、サーヴァントと共に運用するだけの。

そんな中で、口を開いたのは……先ほど、敵軍勢を蹴散らしつつ帰還した、特別遠征軍の片割れ。頭脳担当の荊軻であった。

「ふむ……元暗殺者の立場ではあるが一つ」

「申してみよ荊軻」

「私であれば、サーヴァント、という手札に全てを注ぎ込むとは思う……サーヴァントの力が大きければ、それを十全に生かした方が効率がいい。シャドウサーヴァントを使うなど無駄でしかない。そう言った無駄は、後で確実に自らの足元を掬う」

「それは、確かに一理あるか」

「——荊軻の言うとおりだとすれば、アタシから一つ」

そこから繋げたのは、ブーディカ。

「なんだ？」

「そいつ等にとつて無駄でしかないなら、そいつ等じゃないんじや？」

「ふむ、というと……奴らは連合ローマ、という一勢ではないと？」

「私なんかは軍勢を率いてたけど、決して私が支配してる軍団のみ、つて訳じゃなかったんだ。ブリテンに居た、色んな奴らを纏めて戦った。そいつ等の中には、私らの装備より上等なものを持つてた人達も致し、そうでない人もいた」

「——つまりシャドウサーヴァントと、連合ローマの勢力は、全く別。陣営の違う者達が結託して動いている、と？」

頷くブーディカさん。

そう言われてみると、其方の方が腑に落ちる気がした。無理に彼らが非効率的な事をしている、と考えるよりは……サーヴァントは聖杯の持ち主、すなわちレフ側が召喚し。シャドウサーヴァントを召喚し、戦わせているのは全く別の陣営なのではないか。そうなる。

「連合ローマとは、その二つの連合である、という意味だったのか？」

『ああいえ、そうでは無くて……連合ローマが聖杯を持っていて。その連合ローマの影に隠れて暗躍している勢力が、あるのかと』

「う、うむ。左様か」

……一瞬自分も同じ事を思ってしまったのは黙っている事にする。

兎も角。連合ローマが聖杯を手にし、サーヴァントを使って特異点を荒らす中で。別の目的で動いているもう一つの勢力が存在する事実。

「——だとすれば厄介だな。もう一つの組織のその目的次第では……連合ローマを打ち倒しても尚、問題が解決しない可能性がある」

『横から聖杯を搔つ攫われたりしたら、目も当てられませんか』

「もう一つの勢力とやらにも、注意を割く必要がある、か」

『……ええ』

そして、ロマニがチラリと見つめた先には……康友の姿。あくびなどしながら『あ、自分頭の良い話にはちょっと参加できないんで』みたいな顔色してる。

今は話題に出していないけど、シャドウサーヴァント達は、どうしてか康友を狙う事が多かった。彼らの目的にとって、康友は必要な存在なのだろうか。

もし……康友が奪われたらどうなってしまうのか。

「であれば、王宮に突入するお主らには、十分に注意して貰わねばならぬか」

『そうですね。万が一にも不意を打たれたりすれば全てが瓦解しかねません』

「……正体を探れば良いのだが。この戦いが終わった後も、連合ローマに味方していた輩が残って暗躍を続けようものなら、余のローマの安寧が危うい」

分からない事は多い。

特異点という中で、多くの事情や思惑が交差する中で……その影に潜んでいた謎の勢力は余りにも、不気味に思えてならなかった。

第二十二章

ローマ進撃！ 実況はーじまーるよー。

さて、前回でネロちやまがローマの戦力たる荊軻、及び呂布と合流。こちら側の準備は整ったと見て、セプテム最大の会戦が始まる事になりました。

ホモ君のレベルとしては……取り合えずセプテムでは邪魔にならない位にはなったと思われます。お前いつつもこんななんとも言えないレベルしてんな。こんなんで間に合うか私自身不安でございませうが。

未だゴーレム君相手に素での殴りあいでは勝てる、と豪語出来るほどではありませんがまあ、取り敢えず覚醒状態なら、海魔くんをサシ素手で料理できる、位にはギリギリなつたと思ひます。

サーヴァントの皆さまは一撃で海魔薙ぎ払って叩きにするんですけどね……サーヴァント並み戦力への道は、まだまだ遠いのです……藤丸君視点から考えれば破格の成長を見せてはいますが。まあそこはゲームですし多少はね？

で、現行ローマ軍の戦力は、カルデア含めサーヴァントが六人。サーヴァント並みの戦力の皇帝が一人。無数のローマ軍団……あれっ？ 聖杯大戦やってるんだっけ今っ

て。俺達は星見の陣営だった……？

流石は史上最大の聖杯戦争。化け物染みた規模の戦争もそりやあ十分起きる可能性もあるとは思います。まあそれは兎も角として、ですよ。

現状、荊軻さんの偵察を以て敵首都の実在は確認できました。

ネロちやま率いる正当ローマは、カルデアチームも含めて、最大戦力、最早後は全力で攻め寄せるのみでございますね。

で、先程から連合ローマとの散発的な戦闘が続いております。まあゲーム的には、何度も敵と戦うだけなんですけども。兵士のみだったり、前衛のみだったり、偶にゴールムが混ざってたりとまあランダムな編成ですね。

まあ取り敢えずは緒戦なので、そう苦しくもありません。ホモ君でも十分対処できるので、積極的に前衛に出て行きましょう。

で、当然の様にシャドウサーヴァントも出て来るので、見かけたらホモ君を後衛に下げます。セプテム編の大詰めという事もあって、セプテム編でのエネミーが総出動と相成ってます。

今の所はネロちやま率いる正統ローマ軍が連戦連勝。このままの勢いのまま、と行きたい所ですが、物語はそう甘くはありません。

『恐れながら皇帝陛下に申し上げる！ 前方に敵軍の影有り！ そして後方にも敵軍

！』

とまあ、敵もやられているばかりではございません。取り敢えず此方を挟んで押し潰す位はやってきます。問題は、後ろのスパさんと呂布將軍は、到底制御なんて利かない暴れ馬である事で……ここで暴れ出させる訳には参りません。

さて、ここでフォローの為に藤丸君チームが離脱。ホモ君のみで、前方からの軍を抑える事になります。

今まではマシユの防御バフがあつたので若干雑でもなんとかりましたが、それが無い以上は普通に事故死とかが怖いので、より慎重に戦っていきましょう。ホモ君への前衛、後衛の交代はより細かに。

セプテム戦の特徴として、軍が相手、という事で兎に角敵の頭数が多いのです。おフランスよりも。

敵の火力とか、単騎の性能自体はオルレアンの方がまあ圧倒的ですけれどももしかしながら、一回相手のターンとかに回ると、怒濤のタコ殴りにあうのです。その総計は普通にワイバーンと同等のレベルになるっていう。

まあ全員残ってれば、の話なので。一人も残さず根絶やしにしてしまえば一切ダメージ喰らわず済みますし、全員は無理でも、一人でも多く減らせばダメージの絶対量は減るので広く浅く、で叩くのではなく。一点集中で一人ずつ処理していきましょう。

因みに、この戦闘に関してですが、後ろの藤丸君達が戻ってくるまで前線を支える必要があるので、終わりはありません。いわゆる九十九体お代わりステージです。

ああいえ、正確に申しますと、次のターンにどんどんお代わりが補充されてくる形式です。幸いながら、相手は全部兵士で、ごく稀にゴーレム君が出て来る程度なんですけれども、それくらいですわね。

さて……一定ターンを倒されないまま凌ぎ続けていると、戦いは次のフェイズに移行し始めます。藤丸君達が戻って来て、取り敢えず状況を打開。スパルタクスと呂布將軍を温存出来て一安心。

『指揮に優れた敵将がいるな』

『敵将……「皇帝」の一人でしょうか』

『なんとも。だが、いざれ分かる』

……不穏な空気が流れておりますけれども!!! 取り敢えず!!! 温存できたという事で!!! 終わりにしたいです!!!

■■■■ーっ!!!

終わりに出来ませんでした!!!

はあーっ(クソデカ溜息) あほくさ。

取り敢えず、ぼやいている場合ではございません。敵もさらなる戦力を投入して来ま

した。当然のようにサーヴァント。セリフの感じからして分かる通り、敵の戦力はバーサーカー。そして、そのサーヴァントは……？

『な、なんだこの音は……！ 獣の咆哮か？』

『いいえ、サーヴァントの気配です。敵性サーヴァントが出現した可能性があります』
獣の咆哮とか言われるサーヴァントさん可哀そう。実際、ゲームでの叫び声はマジでデカイ獣のそれなんですよね。体のデカさも相まって恐ろしさが倍増なんですよね。なんか炭を体に塗りたいくらいってんのって言う位の黒さも相まって。

という事で、黒い！ デカイ！ 厳めしい！ の三拍子そろった、余りにも伝説の英雄の迫力に満ち溢れた大巨人。

此方、ダレイオス三世様。ペルシャの大英傑にして、彼の大英雄イスカンダルの征服に立ち向かった、*嵐*でございます。

あ、因みに投入した、とか申しておりますが此方のサーヴァントは厳密にはレフが意図して召喚した存在ではないんですよね。

じゃあなんなんですか、って言うのと。先ほどの不穏な発言。後方の戦力を引き離そうとした敵の采配が光っているに過ぎません。

どういう采配？ って言われましても……島の女神様って、お二人ほど味方を連れてた訳じゃないですか。それに関しては彼女が、まあ独自に召喚した、というか。連鎖で

召喚されたというか。

で、それを見て『お？ 連鎖召喚なんてあるんや……じゃあ僕も出来るやろ！』、これですよ。

いやどんな采配？（素）

まあこんな頭おかしい采配しないと、あの時代で偉大なる征服を行う事なんて出来ないでしょうけども……という事で、このダレイオス三世を連鎖で呼び出すだけの縁を持つだけの因縁と併せ、敵方の将は、彼になります。

征服王イスカンダル……の、若き姿。

此度の敵将の名は、アレキサンダー三世です。

そう。かのダレイオスと戦った張本人。そりやあまあ、その因縁に呼ばれて彼を呼んでも不思議ではございませんよね。彼とダレイオス殿の因縁はまあそりやあ深いものではありますし。

だからといってサーヴァントの連鎖召喚とか言う、サーヴァントのルールの中でも例外中の例外を狙って使うな（半ギレ）

とはいえ、策が成立してしまっているので仕方ないので取り敢えず、あんまり時間をかけない様にダレイオス殿をシバキ倒すと致しましょうか。

まあどれだけ時間をかけずとも……

『客将の皆様方に申し上げます！ 皇帝陛下からの伝令です！』

『後方にて敵の奇襲在り、しかる後にスパルタクス將軍及び呂布將軍が戦線を離脱！』

『そこに、左右からの更なる別部隊の奇襲在り。ブーデイカ將軍が虜囚となつて敵の手に落ちました！』

この結末は変えようがないのですが……

という事で、ダレイオス殿に目を奪われたその一瞬に將軍を搔つ攫われるとか言う。これが彼の征服王の采配ですか……（畏怖）

という事で、次回はブーデイカさんを無事に救い出せるか、と言つた所からになりますね。後、虜囚に落ちたブーデイカさん、という言葉に熱い物を覚えてしまった悪い子は後で職員室に来るように。

プレイヤーは覚えました（正直）

第二十二章・裏：負より生じる『力チ』

「——先生的には、どう見立ててる？」

「何がだね」

「僕らのパトロン、について。考えが無いわけでもないんだろ？」

「……」

——戦局は、やはり現皇帝ネロの率いる正規ローマ側の有利から始まった。

此方もそれなりに戦力を整えているし、サーヴァントも居る。精力的に言っても、此方の方が総力では上かも知れない。此方には、『聖杯』というインチキがあるのだからそれが当然なのだ。

それでも現状、ネロの側が圧している理由として……個人的な感想を言えば、向こうと此方では、圧倒的に向こうに『熱』と『勢い』という物がある、と僕は思っている。戦というのは、戦略と戦術、そして総戦力。その合計で決まる……なのであれば、らかなのだけでも。

やはり、人同士がぶつかり合うのだ。不確定要素でひっくり返る事だってある。

その内、重要な要素の『熱』と『勢い』だ。

彼らは、自らが正当な皇帝を頂き。そして、その皇帝がローマを守るために奔走しているという、その自覚がある。祖国への熱、敬愛する皇帝への熱。それは正しい形の『熱』に他ならない。

自らが『白』の中に居る事を強く実感している人間ほど、ここぞという時に強い人間はいない。迷わず、全てを傾けられる、というのはとても重要な事なんだ。

そして……『勢い』。

ネロ帝率いる現行ローマは、今まで、負け続け。それこそ僕でも分かる程、暗雲立ち込める状況だったと思う。

でも、カルデアという、僕らのマスターが始末しようとしている組織が味方に付いて、そこからの逆転劇は、正に天啓に等しい。

今までが鬱屈とした状況だったからこそ、溜まりに溜まった不満は、連続の勝利によつて裏返り、爆発的な『躁』を生み出した。

こうなつた群れは、兎に角強い。勢いに乗つた軍勢の勢いを止めるには、生半可な作戦じゃどうしようもない。

結論。

一応、先生の作戦等もあるけど、それで止められなかつたら、多分彼らはこのまま勝

利するだろうというのは、未熟だろうが余りにも分かりやすい結論だと思う。

まあそうならないようにするのが、僕と先生の役割な訳だけど。

正直、あんまり気乗りはしない。ので。まあ……こうやって暇つぶしするのも、やむなしと思つて欲しい。

「彼らが如何な組織なのか……目的が何なのか、という事かね」

「いや。それは流石に先生でも分からないでしょ。状況的に、向こうは資金、というか戦力提供を積極的に行つて、その代わりに自分の情報を殆ど明かしてないんだから」

「ふむ、その辺りは理解しているか。その通り、彼らは自分達の情報を決して明かさぬように徹底している。その点において、私はこの人理の異変を起こした犯人よりも、別の意味で厄介だとは見ているよ」

で。今回の話題は、といえば。

僕らの傍にこうして控えてる、シャドウサーヴァントの提供主様。世界を亡ぼす為の恐ろしい一勢に戦力を提供するという、奇特を超えて狂気の所業を行っている輩だ。

マスターと、あんまり相性が良くない僕に対しても、気前よくこのシャドウを寄こしてくれたりもした……正直、良く分からない輩だ。

「じゃあ、やっぱり恐れているのかな」

「ふむ。恐れているとは……我々を使役している勢力を、パトロンが、かね？」

「うん。彼らの正体は分からなくても、動機は想像する余地がある。一番あり得そうなのは……恐れから」

「戦力を提供する事で、レフ・ライノールと、その首魁に取り入ろうとしている、また自分達だけでも。そう考えれば、自分達の事は知らせないのも、迂闊に知られて弱みなどを握られるのを恐れての行動、という事かな」

僕としては、それが一番自然な気がするのだが……どうやら、先生はそうは思っていないらしい。

「その仮説であれば、何故マスターを確保しようというパトロンの意向が反映されているのか、大きな疑問になるな」

「あー……そう言えばそれがあつたね」

「そしてもう一つ。向こうが情報を隠しているのが、恐れから、という理由であれば……寧ろ自分達の腹を晒して無抵抗を示し、その内を隠すような事はしないだろう」

そうした方が、自分達は無力であり、付き従う存在だと示せるわけだからな。という先生の言葉に、確かにと言わざるを得ない。

「そうか。うーん。些か視界が狭かったかな」

そう考えれば、酷く不思議なパトロンだと思う。

パトロンというのは、自分の目的があつて投資をするか、さもなければその投資先に相

当の思い入れがあるか……何れにしても、投資する利があつてこそなのは大前提だ。

そこを前提として、彼らにとつての『利』という者は、自らの生存ではないか。と思つていたのだが。

彼らにとつての利というものが、他に存在するのか？ 正直な話をすれば、僕には一切思いつかない。

何せ、僕らのマスターはシャドウサーヴァントを使い潰してばかりだ。マトモに運用できているかと言えば微妙に過ぎる。彼は有能ではあるが、戦を上手に運べるタイプかと言えば首を傾げざるを得ない。

そんな相手に戦力を提供する必要が一体何処にあるのか。僕たちのマスターを恐れていないとすれば、提供するだけじゃなくて、自分達で上手に使おうとするのではないか。そっちの方が、自分達の利になり得る。

されど、その僕の考えは、些かどころでは無く、浅い読みだったらしい。

「彼らにとつての利、とは何だろう」

「——君は、酔拳、という物を知っているかね」

「スイケン？」

「ああ。中国の拳法の一つで、地を転じて『負の中より勝を見出す』という物だ。この憲法の特筆すべきは、『マイナス』の状況の中から自らにとつての『プラス』を見出すとい

う所にある」

「へえ……」

「この思考は、存外と万物に通じるのだよ」

先生曰く。何時でもプラスの状況からプラスを見出すのではなく、敢えてマイナスの状態になってから、そこより利を見出す、というのも立派な戦術の一つだという。

「彼らが利に合わぬ行動を取っているのなら。その利に合わぬ……一見マイナスの行動の中にこそ、彼らにとつてのプラスがある、と考えても良いかもしれない」

「成程。という事は……彼らを使い潰される事こそ、目的だったりするのかな」
「それは断定できないがね」

使い潰されて。消えて。そして無駄になる筈の戦力提供。それが彼らにとつては、大きな利点となり得る。だから彼らはマスターに問題無く戦力を提供し、浪費させ続ける。そう考えれば。寧ろ、確かにしっくりくる気がした。

それ程に、彼らは無作為に、そして何の躊躇いも無く戦力をドンドンと送り込んで来るのだから。さて、それが分かった所で、僕の脳裏には、新たな疑問が。

「そうだとして、彼らにとつての利とは何だろう」

「それに関しては、詳しく探るには要素が少なすぎる、と言わざるを得ない」

「それはそうだけど……まあ、思考実験というか、一つの余興として。やるだけやってみ

るのも良いじゃないか。どうせ暫くは、僕らも動かないんだし」

それをこうして、相手の戦力を見ているこの段階の時間を使って、少し考えて見たくなった。どうせ『目標』としてゐる彼女を攫うには、まだ時間がかかる。少なくとも、目論見通り『事』が起きてくれないと。

確立次第だが、分の悪い賭けでは無いとは思っている。なら、それまで考え事に付けるのも悪くない。

こういうのは、若い僕の良い所だと思ふ。大人の僕よりも、更に好奇心という物が疼いてたまらない。

「であれば。まあ想像を遊ばせる位の事は出来るが」

「例えば？」

「そうだな。例えば、彼らを使い潰す、という一点において思考を巡らせてみようか。敗北において生じる『利』と言えば。何が存在する？」

「失敗、敗北は次につなげる事こそ寛容。『経験』かな？」

「そうだな。多くの敗北、失敗は。沢山の経験を生む。それを生かし、次の成功に繋げる事こそ成功者の秘訣と嘯く事もある」

「彼らを使い潰した、『敗北』の経験を欲している？」

「実験というのであれば、多くの失敗は寧ろ賞賛されるべき事ですらある」

シャドウサーヴァントを大量に送り込み、敗北させ。いや、無数の敗戦を重ねさせる。そこから多くの経験を得る。もし、その先に大きな成功を見据えているのだとすればそれは確かに大きな『利』となり得る。

「敗北こそが、目的」

「と言った想像も、出来ない事は無いという話だ」

無数の敗北を重ねた結果として……彼らが成長し、強くなったりすれば。それは確かに大きな利点となり得るだろう。

「だが、それ以上にあるのやもしれん」

「というところ？」

「……些かと生々しい話になるが。敗北によつて生まれる利というのは他にもある。敗北すれば、その相手に次は勝つ、というやる気、モチベーションになる。それもまた利ではあるが。それ以上に溜まる事があるモノが在る」

「というところ、恨み、つらみだったりとかかな？」

「そうだな。相手への恨みは、あらゆる行動への原動力ともなり得るものだ。それを生み出すのが目的……という策も、無いわけではない」

……恨み、辛みを残す為の戦い。

それは次への布石になるのかもしれないけど。しかし。余りにも悪辣な。悍ましい

策であると言わざるを得ない。

そんな事を平然と実行できたとすれば、その相手は、余程『恨み』という物事を理解して……その上で。

「『人』とは思えないなあ、そんな事を当然の様に出来るとしたら」

第二十三章

ブーディカさんを救う実況、はーじまーるよー。

という事で、なんてこった！ ブーディカさんが攫われちゃった！ 將軍が攫われてちやいかんでしょ（正論パンチ） という三段活用からのスタートでございます。

連合ローマへの侵攻が、いよいよ勢い付いたという所でまさかの急ブレーキ。スパさんと呂布將軍も離脱し、戦力が激減してしまったという。

『故に、今は——ブーディカを助け出す！』

しかしここで皇帝、しっかりと反省してからの救出作戦の決定。ここで動きが鈍らない事がネロちやまが皇帝やれている所以だと思います。こういう時に、呂布とスパさんとかの事まで考えてうだうだやるのは愚策ですからね。

という事で皇帝様の命令に応え、今回戦う敵の元へと参りましょうか。どうやらブーディカさんを連れて、彼らは砦まで引いた模様です。

で、ロマニ曰く、サーヴァントが複数この砦には詰めている模様です。全く、サーヴァントを当然の様に複数砦に置くな（ブーメラン）

『どこだ、ブーディカ！ 返事をしろー！』

『よもやまだ死んではいまい！ 分かるぞ、余には分かる、貴様は死なん！』
『……ううん。それは、随分と勝手な物言いじゃないかな』

さて、そんな敵の事等恐れぬネロちやまのお言葉に、出て参りました。今回の敵将が二人ほど。片や燃えるような赤い髪が特徴の精悍な少年。そしてもう一人は、黒髪長髪、鬘め面の黒スーツ長身紳士でございます。

ふむ、鬘め面黒スーツのヤクザ具合では、恐らくホモ君の方が上……美少年具合では赤毛の少年の方が圧勝……成程、この初戦、分けと言った所か（理性消失）

『僕は、アレキサンダー。正確には、アレキサンダー三世という。で、彼が——』
『ロード・エルメロイ二世。故合つて、いや縁あつて、彼の軍師をしている』
んな事はどうでも良いんですよ。

重要なのは、彼らの事です。赤毛の少年はアレキサンダー。歴史に詳しくない人でも知つてゐるような、超有名人でございます。征服、と名の付く行為において最も有名な男。またの名を征服王イスカンドル。

彼は、その幼年期がサーヴァントとして形作られたもの。

因みに、征服王イスカンドルとしての全盛期が、今の少年姿かと言われれば、いやいや全然違うんですけども……まあそれはおいておくとして。因みに、時の流れは非常に残酷である、とだけ申し上げておきます。

で、もう一人……黒いヤクザめいた厳めしい長身男性ですが。

彼は、一応サーヴァントです。ではロード・エルメロイという名前の英雄が存在するのでしょうか。そう言う名前の偉人は、もしかしたら世界に存在するかもしれませんがしかし、そう言う英雄は、まあ先に言ってしまうといません。

この英霊の真名は、きちんと別であるんですよ。しかし今は明かされないという事です。一旦はスルーです。彼が名前を明かさず、ロード・エルメロイ二世として名乗っているのであれば、無理に明かすのは些か以上に無粋なので。はい。

ではロード・エルメロイ二世っていうのはなんぞや？　って言う話ですが……まあこのサーヴァントには色々複雑な経緯があります。その経緯の部分に、名前に関しては関係してきます。

Fateシリーズの一作、『ロード・エルメロイ二世の事件簿』にて主人公を務めていたのが、そのロード・エルメロイ二世なのですが、その方こそ目の前のお方。本名、ウェイバー・ベルベットでございます。

……そんな人がなんでサーヴァントやってるのだった？　人生って不思議ですよという事しか私には申し上げられません。

ですが、彼、ロード・エルメロイ二世の能力に関しては疑いようもなく。アレキサンダー三世とが組んでブーディカさんを捕獲する為の策を練ってきたのですから少なく

とも無能ではございせんので。

『先輩！ 皇帝陛下！ 敵兵がこちらにきています。陛下を狙っている模様！』

『くっ、挟撃か!?!』

『ああ、安心して。僕らは何もしないよ。でも——もう連合の兵達は止まらないだろうね。彼らは、君の存在に気が付けば半ば自動的に襲い掛かる』

『来ます！』

とまあこういう事もしつかりしますよね。

僕らは何もしないと発言して普通に後方から兵を送り込んで襲わせるとか言う大犯罪ムーヴ。いや本当にこれが征服王のやり方かアツツツ!! (オーガフェイス)

やり方がこすつからい！ とか思う人もいらつしやるでしょうが……それ以上に、このお方が何故こんな事を企画したのか、って言う話ですよ。

あ、その前に襲い掛かって来た輩は全員シバキ倒しますねー (無慈悲)

この人直属の連合ローマ兵士の皆さまだからと言って、特別に強い兵隊、とかでもないのぞりやあね……しかも指揮してるとか言う訳でも無いですし。

今の所、ゴレム、及びシャドウサーヴァントとかが混ざってないとあんまり苦しくない訳で。苦しくさせたいならその辺り連れてこいや!!

『——ふふ、残念ながらまだ終わらない。それに……ネロ・クラウドイウス。君と話しが

したいんでね。邪魔者は彼らに対処して貰おう』

だからってシヤドウサーヴァントを気軽に交代わりで出すな（半ギレ）

……アレキサンダーくんの目的がね？ 当代のローマ皇帝を試すだとか。話をして彼女に聞きたい事があるとか、色々ありますよ。でもそんな事はどうでも良くて。気軽にシヤドウサーヴァントを何人も何人も出して来るな。

数と質の暴力で此方を責め立てるな。

いや、そうなんですよ。この人、ネロちやまと話しがしたいがためにこれだけの兵力をこつちにぶつけてきやがってるんです。

これが相手と話すのには一番早いと思います、とかなんていうガバガバ理論で群を丸ごと動かすんじゃないやねーよって言う話でございます。

等と、今は文句を言っても仕方ありません。

戦う度にちよつとずつレベルが上がっていくこのシヤドウサーヴァント君達は、それなりに強くなって来ました。まだスキルと使うとかそう言う事は無いですけど、油断したらエライ事になります。

今回からは、ホモ君も攻めに参加してもらおう事になります。経験値とかでは無くてホモ君の僅かな削りでも、取り敢えずダメージソースとして使って、出来るだけマシユに粘らせる時間を減らしたいためです。

それなりに強くなった敵に粘られて、クリティカルダメージを叩き込まれようものならそれこそ戦線が崩壊しかねません。僅かでも時間を短く。

『——今！ この時に皇帝として立つ者は、ネロ・クラウディウスただ一人である！』
『民に愛され、民を愛する事を許され、望まれ、そう在るのはただ独り、ただ一つの王聖だ！』

『退かず、君臨し、華々しく榮えて見せよう！ 余こそが！ 紛うこと無きこの世界である！』

で、マスターを薪代わりと言わんばかりにくべつつ敵を撃退すると、ネロちやまの覚醒フェイズ。

『YOU無駄な戦いはもうよしなYO！ 下っちゃんいなYO！ 何で抵抗してんの？』
『という煽り交じりの一言に、『は？ 無駄な戦いじゃないが？』とブチ切れて、誰がロ—マを譲るものかという強い皇帝様のお姿を見る事が出来ず。

さて、強い皇帝陛下のお姿を見た所で、後は目の前の征服王（若）を叩き潰すだけ—

—

『—』

『—!!!』

『う、うあああああつ……アアアアアアアアアアッ!?』

……だと思っただけですけども。

何かシャドウサーヴァント君が余計な事しかしてくれてるんですけど。何？ なんで急にブーディカさんに憑依覚醒なさってるんですか？ どうしてブーディカさんが殺意の波動を纏ってるんですか？（電話猫）

第二十三章・裏：憎しローマ 前編

「——アアアアアアアアアッ?!」

全員が度肝を抜かれていた。

黒い影共が、突如としてブーデイカの元へと集まって……突如、消えた。イヤ、消えたというより……黒い霧の様になって、ブーデイカの周りに纏わりついたのだ。

直後響いた絶叫に、この場に居る者全て、手を止めて視線を送ってしまった。それ程に大きく、そして、胸を抉る様な叫びだった。

悲痛な叫びだった。

「ブーデイカ?! どうしたのだ?!」

「先生!」

「——残っているシャドウサーヴァントを即座に片付けるんだ! 彼女にこれ以上近寄らせるな!」

シャドウサーヴァントは、まだ残っている。アレらがブーデイカに異常を引き起こしたとするならば、その指示は確かに正しい。だが、先ずは……あやつをどうにかせねばならぬのだ。

「皇帝陛下！ 残りは俺と式部さんでやる！ アンタはブーディカさんを」

「——済まぬ！」

それを汲んでくれたのか。本造院と、式部がシャドウサーヴアントを蹴散らして。それに一言だけ返して、藤丸と共に、急いでブーディカに近寄った。

ブーディカは……頭を押さえ、声にもならぬ呻き声を上げて苦しんでいる。病か。呪いなのか。いずれにせよ、放って置けるような状態ではない。

「ブーディカさん！」

「私が抱えます！」

「急げ！ 直ぐに医者……魔術師でも良い！ 兎も角専門家の元へ！」

今は多少後退する事に成ろうとも。連合ローマを倒す為の人材を失う訳にはいかぬ。ならば今は——

「——ブーディカさんから離れろ!!!」

「お前らを……許さない！」

——そう考えていた、本当に、一瞬の事だった。

余の反応が僅かでも遅れて居たら死んでいる。それを、額から流れる紅い血が、証明していた。浅く切れている。本当に、僅かに切っ先が掠っただけだというのに。

そして何よりも、その剣には……殺気が乗っていたのだ。

「ネロ陛下下っ!？」

「ブーディカさん、何を!？」

「ローマ……ローマ……私の、大切な物を……奪った……! お前らを!」

抜き身の剣を揺らし、だらりと盾を下げ。髪を振り乱して此方へと迫ろうとする幽鬼の如きその姿……可愛がっていた、盾の少女すら睨みつけるその眼光に、最早正気は宿っていない様に見える。

こうなった原因について、知っているとすれば恐らくは。あのシャドウサーヴァントを従えていた二人だろう。

「藤丸! マシユ! ブーディカを抑えよ! その間に……そちらの二人に余から聞く事がある……!」

であるならば。

ここで短慮を以てブーディカを切り捨てるのは、皇帝として正しい行いでは無い。可能性があるなら、救える可能性を捨ててはならぬ。故に、カルデアの四人の戦力から考えて今の所、ブーディカを止めるのに最適な人材を選び、命を飛ばす。

二人が時間を稼いでくれているその間に、何としてもあの異常について聞き出して、ブーディカを助ける。否、助けねばならぬ。

だがそう思って振り向いた先。アレキサンダーの表情は、優れぬ。

「——君が望む様な事は、僕は知らないよ。残念ながら」

「ほざくな……！ 知らぬ訳が無からう！」

「いいや、本当だ。アレは僕のマスターと提携しているパトロンから無償で提供された戦力だね。運用しろ、との命令を受けているだけで、詳細は僕らも知らされていない」「なんだとお!？」

思わず、殴り飛ばしそうになった。そんな物を戦力として投入する等と。連合ローマは何を考えているというのか。

「くうっ……!」

「どけっ！ ローマを……皇帝を！ 殺す！ 仇を取るんだ！」

「ブーディカさん、落ち着いてください！ 今、我々が戦うべきは、ネロ陛下のローマでは無く……!」

「許さない！ 此方に向け皇帝！ 私と戦ええ!!」

もし。

もし、戦場で、指揮官があの子の影に取り憑かれようものなら。最早正常な判断も出来なくなるやもしれぬ。ブーディカのように、感情のままに全てを亡ぼす様になったなら。そうだったなら。誰がその暴虐を止めるといえるのか！

「——とはいえ、アレを放置していたのは確かに僕に責任がある。先生」

「……アレをどうにかしろ、と言われても、無茶振りでしかないぞ」

「それでもやるしかない。ここで僕らがやらなきゃ——ネロ・クラウディウス。一応僕らも加勢する。僕は何処までやれるかは分からないけど……先生は『はぐれ』だ、マスタールの影響を受ける事もない。頼るなら、彼を頼ってくれ」

「ぐぬぬぬ……！」

正直、改めて殴り倒してはやりたい。しかしながら、今そんな事をしている時間も何も無いのだ。ブーディカを正気に戻してやらねばならぬ。

正気に戻す……否、アレがもしやすれば、ブーディカの、本音なのやもしれぬ。だがそれを受け止めるのは、偽りのローマを討ち取ってからだ。今ではない。

ブーディカを……処すのは、最悪の、最悪の場合だ。連合ローマとの戦いにおいて迂闊に戦力を浪費するなど、愚の骨頂だ。ならば先ずは余が。皇帝として知恵を巡らせねばならない。だが、余一人で突如として変貌したブーディカについて、解決は……出来ぬ。

故に、今はこの軍師と言う男が何処まで役に立つか、という話になってくる。

「それで！ 其処な軍師！ 何か妙案は!!」

「無い」

「ふざけるな！ 冗談は通じんぞこの状況で！」

「落ち着け。今は無い、という話だ。私はどんな魔術も一発で看破するような、そんな大それた術者ではない。故に……見て判断する必要があるので。アレが、どんな術式なのかをな」

……未だ実力が見れた訳ではない。しかし、未だこの状況で冷静さを失わず、落ち着いて対応が出来る辺り、間違いなく優秀な軍師ではあるのだとは思う。

「ただ私見になるが、あの状態は……一種の憑依現象にも見える」

「憑依？」

「そうだ。悪霊などに憑かれた時のそれと酷似している。ああいう類は、当人の正気を失わせるモノが多い。到底本人の物とは思えぬような言動をしたり、と」

そう言われると、確かにそうではある。

あの取り乱しようもそうだが、何よりも先日までアレだけ可愛がっていたマシユに、何の躊躇いも無く剣を振り下ろすその姿は、確かに正気を保っている様には……一見見えぬ気がする。

さりとて。余が見る限りではあるが。その目が狂気に囚われているようにも見えぬのも確かだ。

「……伯父上の様ではない」

「むっ。」

「正気を失っている。狂気に囚われている……伯父上の事を何度も見た。アレは……もうどうしようもない。言葉も。理性も。全て」

伯父上も、彼女の様に、余を狙っていた。だが、感情のままに、余を守ろうとする者どころか、周りにも関係なくがむしやらに突撃して来るその姿。まるで爆炎の様に撒き散らされる感情の渦。そんな印象を抱いた。

「——退いてっ！ そいつを！」

しかし、ブーディカはどうだ？ 彼女は……余に、ローマに。明確に恨みを向けている様に見える。

マシユの盾に阻まれつつも、剣を振るい……彼女を横へと押し除けようと足掻き。その癖、視線は余から一切外れていない。ブーディカは、間違いなく余、ただ一人を殺そうとしている。

その感情には、明確に指向性がある様に見える。伯父上が爆炎ならば、ブーディカのそれは槍の如く、鋭く、一点を狙って来ている。

「くっ……い、かせません……！」

「ローマだ！ 私が殺すべきは……！ ローマなんだ、ローマだけなんだ!! アンタ等じゃない！ 邪魔、しないで！」

「マシユ！ 礼装で強化を入れる、持ちこたえて！」

「わかりました！」

その研ぎ澄まされた殺意に、ブーディカは……

「……一つの感情に、振り回されている様にも見えるのだ。余には」

「そうなる様に、仕向けられていると？」

「あくまで、個人的な意見ではあるが……本当に正気を失った者とは、似て非なるものなのではないか、と」

「ふむ」

正直。こうしてのんびり考えている場合なのか。余としては、今すぐにもブーディカを助けねばならぬ、と思わないでもない。だが……余の感情のままに突っ込んで、あやつを失う事になれば。

「成程、悪霊の類とは少し違う、か……そうなる」と

「——ねえ先生」

「ん？」

焦る心に、ふと聞こえる少年の声。

ふとその方向を見てみると……カルデアの女術師、式部に親指を指す、アレキサンダーの姿。どうやら、シャドウサーヴァントの殲滅は終わった模様だった。

その表情は……勇気を出して腹をくくったかのような顔をしていた。

「彼女、何か思う所があるみたいだよ？」

第二十三章・裏：憎しローマ 中編

「——アレは、恐らくは怨霊の類に取り憑かれているのかと思われませう」

口元を抑え、目を伏せて。少し、自信も無さげにそう式部は口火を切った。まずオリヨウ、という言葉に関して言えば……

「ふむ。聞きなれぬ言葉だな」

「時間がありませんので簡単に説明すれば……他人を恨んで死んだ方が、霊の類となった姿、というのが一番分かりやすいかと」

カルデアの女術師曰く。

その怨霊に取り憑かれた人間というのは、その怨霊の感情に引つ張られる事があるのだという事で。確かに……いきなりブーディカが豹変した、というよりは。その取りつかれたことにより、感情が引つ張られている、という方が現実味がある気がする。

「ではあの黒いシャドウサーヴァントが、それだと？」

「……確証は、ありませんが」

「ふむ。どうだ。其処な軍師」

「——シャドウサーヴァントとは、サーヴァントに成り切れなかった者の総称だ。その

状態にもよるが……怨霊の如く、呪詛を撒き散らす者も出て来る」
「つまり？」

「それを怨霊の様に定義づける事も不可能ではない。サーヴァント、というのは霊的な存在でもあるからな」

黒い影……シャドウサーヴァント、という者をその『怨霊』という者に寄せるようにして、ブーデイカを操っている。

「——という認識で、合っているか？」

「そう、ではないかと」

「では簡単な話ではないか。ブーデイカから、そのシャドウサーヴァントとやらを払えば良い。それで終わりであろう？」

「いいや。あくまで仮説な上、霊を体から退散させる、というのは簡単な話ではない。それこそ、専門家の知識が必要な話に……」

そう言われ、自分の浅慮に歯噛みしてしまう。

確かに、自分には怨霊、とやらの知識など存在しない。魔術に類する類の知識であるなら多少ではあるが、門外漢の事に出したとて……下手をすれば、それこそブーデイカをそのまま失いかねない。

「……専門家」

「えっと……」

「ミス・式部。貴方の知識はどの程度あるのかね」

そう悩んでいた所に、ふと軍師が向いたのはカルデアの女術師。そう言えば、怨霊に付いて、彼女はある程度知識を有していたではないか。

専門家と呼べるかどうかは兎も角として、余たちよりは。

「わ、私は陰陽道を少々齧ってるくらいなので、怨霊の類を払ったり、鎮める方法などはあの……ほ、本当に専門家なんて言えない位で……」

「余達よりはあるのだな？」

「は、はひ」

半泣きになっているが、泣いている場合では無いのだ。その知識が無ければブーディカを助け出せぬやもしれぬのだから。

「——マシユ！ 藤丸！ もうしばしだ！ 時を稼ぐのだ！」

声を張り上げた。

式部と、兎に角出来得る限り最速で詳細は詰めた。後は、実行に移せるか否かという話になってくる。その時ブーディカを如何に足止めをしておけるか。

ブーディカの裏に、既に式部より作戦を伝えられた本造院が密かに回り込んでいる。

やはり母国の言葉や文字を理解しているマスターの方が、という事で式部が選出した人材である。

『……俺、式部さんの助手役、慣れてきちやいそんな気がするよな、いい加減に』
「分かりました！ マシユ、もうちよつとだけ、頑張つて……！」

藤丸の言葉に答える様に輝く藤丸の服。それに合わせ、マシユを緑の光が包み……些かと圧されていた所から、息を吹き返す。ゴリゴリとぶつかり合っていたブーディカの盾を無理矢理に押し返す。

「了解しました、マシユ・キリエライト……マスターの期待に応えます!!」
重厚な盾がまた、その力強さを取り戻す。

ブーディカの勢いは異常だ。それに圧されるのも不思議では無かろう。しかしながらその後ろには、信じられる仲間が存在が居る。藤丸という存在が、マシユという少女の輝きを更に増すのである。

「ぐっ……！」

「まだです、ブーディカさん……私が……！　ここで止めて見せます！」

その気迫は、ブーディカの様な暗い物ではない。決して未来を諦めぬ、強い輝きより生じる強い迫力。決してブーディカにも引けを取つてはいない。否、寧ろブーディカが気圧されている様にすら見えるではないか！

「……（コクコク）」

「ネロ陛下。準備が整いました。後は……」

「うむ。余の定番であるか」

そんな輝きに、余が遅れる訳には行かぬ。皇帝として、仕事を果たす。たとえそれがどのような役回りでも。

「マシユ！ もうよい、下がれ！」

「ネロ陛下……!?!? ですが！」

「そやつは余と話をしたがっているのである。であれば、逃げる訳にも行くまい。それにこれ以上はお主も、辛かろう」

「——！」

顔が少し悲痛に歪む。

当然だ。マシユは、誰よりもブーデイカに可愛がられていた。そもその話、味方であつた相手が急に此方を狙う。そんな景色に慣れている訳も無かろう。

そもそも、彼女を止める為に戦うのすら辛かつた筈である。

であるならば。本来向き合うべき余が……そろそろ立つべきだろう。

「ブーデイカよ！ お主の憎しローマが来たぞ！」

「——ああ、そうだなあ……ローマ！ 私の国を、汚した国！ お前を……お前たちを潰

せつて、皆が叫ぶんだよ……皆つて、誰だ……ああそうだ、私の国の皆が!!」

「そうか。お主には、その様な叫びが聞こえるか」

「聞こえるとも! 耳の傍で、囁く様に!! さつきからずつと!」

——それはきつと、あの黒い影が取りついた時、からなのではないのだろうか。

式部の言っている事が本当ならば、あの黒い影共はこの世に恨みを持つて死んだ死霊共の群れだ。そ奴らがブーデイカの恨みを煽つたのだろう。

ブーデイカの耳元に張り付き、あやつが愛した民の名を騙つて。

……もしそうだったとして、自らの国の為にブーデイカの民を殺した余に、それを責める資格があるかどうか。煽られるだけの恨みを生んだのは、余に違いないだろう。

だが。それでも言いたい。

「——では向かつて来い」

「ああ、行つてやる、お前の元へ、その喉首搔つ切つてやる! お前の全てを奪い去つてやる! 私の国の様に……!」

「ただし! お主の恨みを以てだ!」

「……なに?」

それは、お主の恨みではない。

お主が燃え滾らせた恨みでは無いのだ。ブーデイカ。お前が、自分の意思を以て燃え

上がらせた恨みであれば。受け止めてやるのもやぶさかではない。しかし今お主が燃え上がらせているのは、元はお主の恨みであって、今はそうではない。

それを受け止めるのは、余には到底出来ぬ。お主自身の恨みで無ければ、余が受け止めるなど、死んでも嫌だ！

「そのように他所からの横やりからの恨みでなど、余は相手してやらぬ!!」

「なんだと!!」

「しつかりと、改めて！ お主自身で！ 恨みを向けてこい！ 正気に戻った後で！」

万が一、巻き込まれてはマズいので一步下がり……ブーデイカは、止まらずそこへと到達した。余達の狙い通りに

向かってくるブーデイカ。真つ直ぐ、一直線。そしてその直線上には、誘導するように言われていた、術の円の、中心がある。

「——今です！」

「キヤスター二人がかりの対ゴーストタイプの結界だ！ 少しは効いて貰わねば困る！」

「なっ!?!」

余達の周辺が光り始める。式部と軍師が作り上げた結界が、輝きを以てブーデイカを閉じ込めそして……その動きを縛り付けた。

「ぐ、あああ……！」

「先輩、見てください！ ブーディカさんに纏わりついていて、黒い靄が……！」
「消えて行く！」

結界の中に満ちる光に、黒い影が少しずつ溶けて行く。それにつれ、ブーディカは少しずつ、地面へと膝をついて行き、そして。最後には地面にゆつくりとその身を横たえて。

その時には、もう……黒い靄は、ブーディカから完全に消え去っていたのだった。式部と、サムズアツプを交わした。

その様子を……アレキサンダーが、実に面白そうな顔で見ていたのが、少しイラつとは、した。

第二十三章・裏：憎しローマ 後編

ブーディカは死んだように眠っていた。とはいえ、命に別状はない。カルデアの姿を見せぬ術師曰く、『酷く疲労させられている』らしい。回復するにはしばしの時がかかるとの事であった。

とはいえ、無事に戻って来ただけでも儲けものである。そして……後は。

一応、協力していた、というか。停戦関係であった、本来の敵との決着を付けねばならないだろう。それを分かっているのだろう……余の目の前には、アレキサンダーと、その軍師が立っている。

「——全く、君を試そうと思っていたんだけど。とんだ水を差されたものだ」

「黙れ。貴様に試される理由も無い」

「あはは、そりゃあそうなんだけど。でもどうしても思ってしまった。ごめんね」
しかし。

どうにも目の前の小僧の様子に、些か毒気を抜かれてしまうのも確かだ。悪意がある様には見えぬのである。歳が若いというのも恐らくは影響しているのだろうが。それを分かっている節があるのが、引っ掛かるが。

「けど、試す必要も殆ど無かったと思うよ。例え味方が自分へと襲い掛かろうとも、それが嘗ての因縁に起因するものだろうと……君は堂々真つ向から向き合つて見せた。怖気づく様子など、全く見せなかつた」

「ふん、当然だ」

「そして……僕との勝負も、最早決着はついたようなものだ」

そう言つて傍らの軍師に笑いかける姿にも、何も後ろ暗い所は一切ない。その軍師は頭が痛い、という表情をしているのが何とも言えないが。

「全く。アレだけ直接対決の時には援護してもらうだとか色々言つていたくせに、結局はそれか。ひとの事を振り回す性質は若い頃からだつた模様だな」

「うん。そうじゃなきやあ王様になつてなれないでしょ。大人しくて、清貧な王様なんてそれこそ悪い冗談だよ」

「……そうだな」

「何？ その顔。何か言いたい事でもある？」

「いいや。無いとも」

「ふーん。ならいいけど」

——さて。

という言葉と共に、赤毛の少年は改めて此方を振り向いた。その顔は、微笑を浮かべ

ていた先ほどまでと違い、真剣なものだ。

「さて。君達は勝者だ。敗者は勝者に全てを持つていかれるけど。でも僕には奪われる者すらない。死者の身だからね」

「……それがどうした」

「でも、何も無いという訳でもない、つて事さ。ヒントを最後に遺すよ。消える前に」
「何？」

消える、とはどういう意味か。そう言う前に、アレキサンダーは腰に履いていた剣を下ろし……そして、大きく手を広げ、胸を張つて此方を見つめた。意図も分からず、取り敢えず見つめ返してみる。

その後、見つめ合う事数秒程。溜息を吐かれた。意図が分からぬのだから仕方ないだろうと言いつ返しなかったが。

「君は勝者だ」

「ああ。そうであるな」

「であれば、敗者の将をどうするかは決まっているだろう？」

「——馬鹿な、戦場では無いのだぞ。将を殺さねばならぬ法は無い。寧ろ、お主に聞きたい事は多くある。捕まえた方が有用なのだぞ」

「いいや。僕は生かしておいてはいけない。死者は基本的に眠っているべきだ。余程の

事が無い限り、消えておく方が良い。ロクでもない事になるのは凡そ決まってる」

そう語るアレキサンダーの瞳は……自らを殺せと言っている割には、なんだか酷く落ち着いている様に見える。寧ろ、余に殺される事を当然としているかのようである。

隣の軍師に目を向ければ、さして驚いている風には見えない。少し目を伏せてはいるがしかし、特に何かを言う事も無かった。

「そんな……」

「盾の少女。そんなに悲しむ事は無い。元に戻るだけなんだから」

「で、ですが貴方は……ブーディカさんを戻すのに、力を貸してくれたでは無いですか」
「力を貸したのは主に先生だよ。僕は基本的に何もしてはいないさ……いや、本当に何もしてないんだよねコレが」

「二応、彼女の意を汲みはしたがな」

だが。しかし。別に余は殺しをしたくて皇帝をやっているのではない。如何に敵将として活かせる時は活かす。相手とこうして話が出来るのであれば。即座に殺すなど短慮にも程があるのではないだろうか。

「まあ正直な話、こうして相性が宜しくないマスターの下で働き続ける、って言うのも肩が凝るんでね。早めに成仏させて欲しい、って言う欲望もある」
「自殺の幫助でもしろと?」

「そこは、勝者が敗者への情けとして。頼めないかな？」

——する訳がない。

勝手に死ぬ、とすら言いたい所ではある。勝者が敗者をどうしても何も文句は無いだろうが。それをなぜ殺せだの指図されねばならんというのか。舐めるな。貴様こそ、皇帝を一体何だと思っているのか！

先ほど言つた唯一の王聖という言葉を本当に理解しているのか。それを言う前に、余の一步前に出て来たのは、式部のマスター……本造院。

「——アンタを潰せばいい訳だろ」

そう言つて、ちよいちよいと手招きしたのは、自らのサーヴァントである式部だ。それは要するに……アレキサンダーは、自分達で始末するという事だろうか。

「おや。意外だね。君が真つ先に出て来るとは」

「別に。誰がやつても変わんないし。だったらさっさと終わらせるのが一番だと思つたもんでね。式部さん。ごめんね任せちゃつて。サーヴァントを倒せるのは、基本的にサーヴァントだけらしくて」

「は、はい……ですが、マスター。あの……」

「死ぬ覚悟が出来てる人を無理に生かすのは、あんまり良くない。というのが個人的な意見なんだよ。まあだから」

容赦なく行く。

口には出さなかったが、そう言う積りだったのだろう。そして一瞬、マシユと藤丸の方を見てから、改めてもう一度口を開いた。

「……悪いな」

「いいや。君の所為じゃない。寧ろ、君はこの場において正しい行動を取った。他の人が取れない行動を、ね」

「褒められた事じゃないのは確かだと思うけど。自分でやる訳でもなく、誰かの手を借りてさ……介錯くらい、自分でやれって言う話じゃない」

式部が黒い輝きを指先に貯える。本造院は彼女に改めて頭を一つ下げて。彼女はそれに目を伏せ、少し悲し気な顔をした。

アレキサンダーはと言えば。自らを狙う凶器が準備されているにもかかわらず、何も恐れている様子すらなく。寧ろ穏やかな顔をしている。堂々と、自ら胸を張って『ここを撃て』と言わんばかりだ。

「そう言う律儀な所は、君の美德だ。大切にしまえ。カルデアのマスター」

「……マスターは俺だけじゃねえさ」

「申し訳ありません。介錯、務めさせていただきます」

「構わないよ。ああそれと……僕の先生兼、臣下は、よろしく頼むよ」

——放たれた弾丸は、一撃でアレキサンダーの胸の中心を貫いた。

「……全く、貴方らしい気遣いではあるな」

「お主は、どうする」

「本来なら、彼と共に戦って消滅するつもりではあったが……まあよろしくと言われたのでな。ブーディカ將軍が戻るまでの代打程度には仕事もしよう」

そう言つて立ち上がる軍師。その実力は……一応先程は見た。ブーディカが倒れてしまった以上、連合ローマを叩ける人材は一人でも多く欲しい。

「と言つても流石に矢面に立て、というのは」

「問題無い。お主は元は連合の立場。後方にて指揮を執つて貰う」

「ああいや、そう言う事では無いのだが……まあ、お気持ち、ありがたく頂戴させて頂くとしよう」

さて、後方の補給路と、前線への指示。その中間に立つてもらうのが一番か……等と考えていた時、ふとカルデアの面々の方に視線をやった。

地面に座り込み、本造院が、アレキサンダーの立っていた場所を眺めている。それ少し離れた所から、藤丸が見ていた。

「……」

「——強く、ならないとね」

「ならなくていいさ。お前は……そのままでもいいよ」

「そんな事。今だって……」

「俺がロクデナシなだけだから。それで良いんだ。あんまり、マシユちゃんの大事な先輩が強くなりすぎてやるな。一緒に強くなつてけ」

「偉そうに」

「エラいんだよ」

その二人を。

少し、寂しげな顔で、式部が。

覚悟を決めた様な、凛々しい顔をしながら、マシユが。

それぞれ、見つめていた。

第二十四章

急に強化されるじゃん、な実況。はーじまーるよー。

……急にブーディカさんがギャグの通じないアヴエンジンモードに入ってて震えたんですけども。これに関しては、まあ実績解除の為のいわば必要な仕様というしかありません。強化されたエネミーなんかが普通に出て来るんですよねえ。

オルレアンでも多少ながら強化されたエネミー……まあ、サンソン君とかも出て来たのでその親戚とでも思いましょう。原因ぜんぜん違いますけど（震え声）

とまあ、ランダムに敵を強化したりするのも、この実績を完走する大いなる壁となっている点ですね。鍛え上げたキャラクターが、不意に湧いて出た強化エネミーに蹂躪されるのは、とてもとても悲しい物だ……（戦争狂並感）

取り敢えず、当初の予定とはちよつと違いますが、ブーディカさんを救出する事は成功しました。しかしながら……まあ、助けるために派手に暴力をふるった甲斐あつて無事ブーディカさんはダウン。一時戦力は減少致しました。

因みに、ブーディカさん登場の流れから一つ。ロード・エルメロイ二世が此方に加わってくれたのですが……特にサポートに出て来てくれるとかではありません。じゃ

あ何の為の加入か！

まあぶつちやけ話の流れ上、アレキサンダー君は敵側だから叩き潰すとしても。元ははぐれサーヴァントのロード・エルメロイを容赦なく殴り殺す訳にもいきません。

という事で、味方として後方への移動になったんでしようけども……まあ一応、ロード・エルメロイが付いてくれたおかげで、ターン制限付きとはいえ、この後のバトルには攻撃力アップのバフが付く事になります。

これが後々結構効いて来る、のかもしれないね。ハイ。

で、強化が入って、しかしブーデイカさんは未だ復活しておりません。

直ぐに戦線復帰するとはいえ、ブーデイカさんの穴を埋める必要性が出てきましたので王宮攻略には……藤丸君が。

ホモ君は王宮の外にて敵の兵隊のお相手をする事になるでしょうか。オルレアンの時と同じことになるとは思うので。

さて役割分担もしっかり決まった所で。いよいよ……連合首都へ。いよいよ大決戦でございます。セプテム最終決戦。さあ、その号令をかけた所で——！！

『待った！ サーヴァント反応を感知したぞ。近いな、前方に見えるはずだ！』

『……勇ましき者よ』

『実に、勇ましい。それでこそ、当代のローマを統べる者である』

早速敵の将が出ていらつしやいました。

凄いですよ。腹筋バキバキ。胸板が馬鹿みたいな分厚さを誇り、更に下手に日に焼いた輩とは桁の違う肌の黒さ。肉体美全一見したいなゴリゴリのマッチョメンでございませぬ。

あ、一瞬でも『竿役のマッチョ男みたいな説明やな』とか思った人、不敬罪でございませぬよ。取り合えず罰としてこのお方に聖杯を捧げましょうね。全力で。

『なんと愛らしく、何と美しく、何と絢爛たる事か。その細腕でローマを支えて見せたのも大いに頷ける』

『さあ、おいで。過去、現在、未来。全てのローマが、お前を愛して居るとも』

という事で、此方の肉体美極まった偉丈夫にして神々しさすら感じられるお方は……いえ、我々では無く、ネロちゃま自ら説明して頂きましょうか。

『あ、ああ……そなたは……いいや、あなたは……』

『あなただけは、あり得ぬと……余は。思っていたのだ……信じていたのだ、信じたかったのだ……』

『しかし、貴方は余の前に立ちはだかるのか！ 紛う事無き、ローマ建国王！ 神祖ロムルス……！』

はい、という事で偉大なるローマの建国者にして、神格化された偉大なる祖先。神祖

ロムルス陛下の御光臨でございます。健全な魂は健全なる肉体に宿る、という言葉を地で行く偉大なるお方。

日本における、神武天皇……ではなく、その祀られつづりを考えると、どつちかと言えばイザナギだとかイザナミレベルのお方です。

普通の人間の筈が、余りの偉業を成し遂げた結果、マジの神格になった。日本では徳川家康とかが有名ですが、その人気ぶりは狸とは桁が違います。この大敗ぶりには豊臣方もニツコリ。

多分ですが、カルデアの王様連中では一番マトモだと思われる人格者で、言動の突き抜け方を踏まえて尚、サーヴァント内でもトップクラスの常識人だと思われれます。

因みに神としての格もそれなりにあります。

んで、その神祖様に率いられたのが連合ローマという事で。そりゃあ士気も高いですよ。連合ローマは。

——ところで皆様、アイドルの追っかけはご存知でしょうか。

ああいう人たちって、やっぱり熱量が段違いですよ。最早ただのファン意識というだけでは無く、信仰にも近い熱狂を以て暴走したりしています。人間って、熱に浮かされるとそうなるんですよー

で、なんで今それを話したかって言えば。

『オオオアアアアアアア!!』

はい。連合ローマ首都に居る市民たちがそうだからなんですよね……神への狂信というのはアイドルへの執着心が強すぎて暴走するファンにも似る。神祖様の邪魔をするなどばかり此方へと襲い掛かってきます。

恐るべきはこの突撃してくる人たち、兵士が殆ど、つて訳でもなく半々くらい市民つて言うのが……

まるで死を恐れていない一般人たちが、自分達を正義と信じて突撃してくる事の恐怖たるやという話。熱のボルテージがヤバいんですよ。自らが正義だと信じている輩は何処までも暴走しますし、絶対に間違つてると思わないつて言う。

全力で理性がいけいけゴーサイン出しちゃつてるんで止まらないんですよねえ……正に狂気。

で、後になつたら藤丸君達が王宮へと入り込み、そして黒幕を打倒するまで……この全員をホモ君達で相手しなければならぬとか言うとしてもない事態ですよ。

恐ろしさが分かつていない人は、結構デカイ都市が丸ごと襲い掛かつてくると考えて頂ければ。どこぞの海賊王にそんな奴いましたね。まあ似たような感じですよ。

『敵正反応。これは……怪物の類かな』

まあ今は先ず、連合ローマの奴らを殴り倒しておかないといけません。

因みに、神祖ロムルス相手にネロちやま平気なの？　と思う方、全然平気ではございません。荊軻さんもブーディカさんも明らかに凹んでおりますって判定を出しております。兵の士気落ちてんよ……（不安感）

ですが、ここで皇帝陛下を元気づけるのはホモ君の役目では無く藤丸君の役目なのでホモ君に出来る事は、元気づけている藤丸君を守るために、兎に角敵をシバキ倒す事くらいしか出来ません。

とはいえ、ゲーム上の敵のレベルが此処低いかと言えば、まあこの面の最終決戦に相応しいしっかりとしたレベルの高いモンスターが出てきます。普通に油断しているとボッコボコにされますよ。

という事で、油断せず確実にボッコボコに致しましょう。

ネロちやまを藤丸君が復活させたら……

後は、このセプテムのラスボスたちを殴り倒すだけです。

レフ・ライノール。そして現れたラスボスの一角、神祖ロムルス。それに……まだまだレフ側に切札はあるかもしれませぬ。あるかもしれないっていうか、あると思うんですけれども……

まあ、その切り札を殴り倒すのは藤丸君になるのか、それともホモ君になるのか。まあその辺りは、取り敢えず目の前の怪物を殴り倒してからですかね。

第二十四章・裏：首都にて

狂乱。ただ、その一言に尽きましよう。

四方八方、何れからも迫るローマの兵士……だけではなく。守られるべき民までが。雑多な、武器とすら呼べぬような、板切れを、小石を、食器を、片手に携えて。

まるで波の様に迫りくるのです。怒濤に。

自らを栄光の一部と信じて、熱に浮かされた、そのままに。自分達が死ぬことなど片も厭わずに。

王宮への進入路を見つけた事を知ったから、等全く関係ないのでしよう。目の前に自らの神祖の敵がいるのだから、襲い掛かっているだけ。しかし……その暴走加減は、私達にとっては、一種の助けでした。

「——ネロ達はもう向かったか!？」

「は、はい! 後は……」

「ここで相手の動きを止めるだけ、か。しかしこの熱気。全く下手をすれば、吞まれそうなほどに、渦巻いているではないか……!」

彼らの全ての視線が、こうして大通りに立っている我々に向かっています。全員。欠

片も視線を逸らさず、です。ネ口陛下達が向かった先には誰にも向かつている様子は見られません。囿としての役割は十分に果たしていると思われます。

それにしても、ですが……嘗て皇帝の喉元に一度は迫ったはずの荊軻様が、隣で顔を顰めるのも、分かつてしまいました。

人々の熱気の総量。私などは、もう足がすくみそうになってしまいました。

ローマの祖。その存在がローマの民にとつてどれだけの存在なのか。それをイヤという程に見せつけられているのです。今。

「しかし——ふふ」

「……ん、なんすか」

「随分と落ち着いているな。意外に肝が据わっている」

しかし、今にも足が竦みそうな私とは違い、マスターは……とても、静かでした。

周りで此方を伺う者達を見えています。とても冷めた目で。

「いや？　こういう痛い奴らを見てると、なんか却って、凄く……脳の芯が冷えるつて言うかき。周りが熱くなつてると、こうならない？」

「そういうものか？」

「案外とね。えつと？　んで？　此奴らはシバキ倒して良いんだよな」

「そりゃあ当然。ここで皇帝様に横やり入れさせないのが私達の役割だ」

「オーライ……じゃあ、ちつとばかり」

そこから一步を踏み出すと同時に、額より生じる角。飛びついて来る人を払いのける様にして、力任せに投げ飛ばして。その顔は……笑顔ではありましたが、しかし、先程よりも冷たさはやっぱり、増している気がします。

「——ホント、嫌な事ばかりなあ」

「ま、マスター……」

「分かつてる。あくまで時間稼ぎだから。あんまり手荒にはしないってば」

……そこを言いたい訳では無いのですが。

笑顔で相手を殴り倒すその姿。とても、とても荊軻さん怪訝な顔をされてマスターを見てらっしゃいます。眉が寄つてます。キレイに。

笑顔で敵を殴り倒すその姿は、確かにそんな顔をされても不思議ではない、と思ってしまう。私は、慣れている……とは言えませんが。しかし一応、こう言うマスターを見た事があるので、驚きはしないと云いますか。

「ローマを！」

「守るなサッツと寝てろ」

「おわあああああつ!?!」

あの、印象的に……多分ですけど。マスターが華麗に投げ捨てている訳でもなく、力

任せに彼方へと放り投げているのが余計に为什么呢、印象をちよつと悪い方向に変えていらつしやると申しますか。

「……荊軻さん。あの、マスターは別に……その」

「ああいや。別に本当にヤバイ奴だとは思つてないよ。流石にそれくらいは判別も付く」

「そ、そうですか」

「感情を素直に表に出していないのは気にはなるが……まあ今は気にする必要もない」

目の前の敵に集中するべきだろう、という一言と共に、荊軻様は人並みの中へと飛び込んで行つてしまいました。

大丈夫なのでしょう、かと戦において素人も同然な私が心配してしまうのを他所に。奥の方で戦っていた将と思われたお方が倒れるのが見えました。

恐らくは荊軻様がお仕事をなさっているのでしよう。

「……」

「あのー、式部さーん?」

「はひい!?!」

「あ、ごめんごめん。あのー援護して貰えると……つしやあつ! あり、がたいんだけども! ハイもう一名様!」

「……す、すみません!! 今、今やります!! 申し訳ありません!」

いけません、荊軻様とのお話に夢中になって、完全にマスターから意識を逸らしてしまつて居ました!

「つて言うか、そんなに笑つてる俺?」

「……えつ、聞こえてましたか!?!」

「そりやあそこまで離れてるつて訳でもないし。そりやあしつかり聞こえますよ!」

「そ、その。申し訳ありません、ひそひそと!」

「ああいや、それは良いんだけど。俺そんなに笑つてる!?!」

……そう言つて、兵士の方を蹴り飛ばすマスターの表情は、もう笑顔ではありません。若干怪訝な顔になっています。ですが……先ほどまでのマスターの顔に関して言えば。満面とまでは行かずとも。

「笑つては、いらしました!」

「んあー……そつかあ。そうか。まあ、意識してなかつたけどなあ。じゃあまあ気を付けないといけないかなあ流石に!」

「あの、驚かれないのですか?」

人を殴る時、意識せず笑っている、というのは……恐らくですが、本人も結構驚くと思うんですが。マスターは、何方かと言えばそれに関して、驚いているというよりも、納

得したという感じでした。

「あーいや、まあ。ちよつとした癖みたいなもの。言われるんだよなあ。結構おつむに來てる時ほど笑つてないかって」

「癖、ですか」

「そそ。なんなんだろうねえ。なんで笑顔になつちやうかねえ！」

「そう言われましても……ああ」

「ん？」

癖ならば、私には何もお答えできないと思うのですが……と、思っていたその時です。マスターの通信装置が、音を立てて起動しました。その直後、空間に浮かび上がるロマン様の顔が。

そして、其方には。マスターの目は向かつて居ません。

『本造院君かい!! レフだ! レフ・ライノールを発見した!』

「——マジか。大当たりだったか」

『ただちよつと、色々様子が……援護には來れ……なさそうだね!!』

「うん無理。そつちで何とかして貰えるとありがたいですなあ!!」

——やはりセプテムにおいて、裏で糸を引いていたのはレフ・ライノール。それを示すレフ・ライノール発見の報が、藤丸様側から入りました。

念のため、援護に行けそうなら行く、という事を打ち合わせておいたのですが、しかし現状、此方からはどうしようもない事は確定していて……今、マスターが見ていた先にその理由はありました。

「一応確認するけど、そつちに居る？ シャドウサーヴァント」

『え？ えーつと……いないけど？』

「こつちに来てらつしやいますよ。群れを成して。うーん、本丸に辿り着かれてるつて言うのには、俺完全にマークされてんねえ」

『——そうか。であれば、そつちはそつちで頑張らないといけないか』

「そう言う事。んじや、切るわ」

「シャドウサーヴァントが……ずらずらと。今までの数よりも、更に多い。大通りに広がって歩く程度には、その数も増えています。」

「本当に標的は俺らな訳ねえ」

「マスター」

「ああ、んじやまあ。目的になさつてる俺がしつかりと囿になって、アイツ等の処理でもしましうかねえ！」

「そう言つて、此方へと突つ込んで来る黒い影を迎撃する為にマスターと共に、私はシャドウサーヴァントの方へと向かい……」

「おお圧制者の走狗たちよ！ 汝らを抱擁せん！ 来るがいい!!」

「■■■■■■■■■■ーッ!!」

——あつと言う間にバーサーカーのお二人に吹き飛ばされていきました。

それを意気揚々と足を踏み出した私達二人は呆然と見ているしかなくて。とんでもない勢いの突撃は正にバーサーカーというべきなのですが……

「うーん。なんだろうな。出鼻派手にくじかれたね」

「そ、そうですね……」

私達が『シャドウサーヴァントについて色々調べてみるのも良いのかもしれない』等と考えていたの等、お二人には関係ないのでしょうか。とはいえ……取り合えず、私達もシャドウサーヴァントを打ち倒す為。遅れて動き出しました。

第二十五章

藤丸君達の為に足止めする実況、はーじまーるよー。

いよいよ足止めするレベルは、シャドウサーヴァントにまで上り詰めて来ましたね。シャドウサーヴァントは質は勿論の事、数も結構な増えていきます。一体一体を確実に仕留めつつ……なんて悠長な事を言っていると削り切られるので、もうここまで来たら令呪切っても全然いいと思います。

令呪を一角切つても、体力を持たせて藤丸君達が王宮内でボスラツシュをクリアするのを待たないといけないのでね。オルレアンの時もそうですが、いつつもこんなんだなホモ君側は。

まあ第二の主人公なんて大抵裏方の地味な所で頑張ってるのが基本ですし。それにオルレアンと違い、この後はホモ君にもきつと出番がある……かもしれないので。

『サーヴァントでもない、幻想種でもない！ これは——伝説上の、本当の悪魔の反応か……!?!』

とか思ったらもう大分進展してて草も生えませんよ。遂にレフ・ライノールが本性を現しました。見えます？ 王宮の方から生える柱一本。王宮の屋根位突き抜けるあの

馬鹿デカイ肉の塊。

目が沢山ついてるスツゲエキモ……げふんげふん。非常に奇天烈なデザインのカリーチャーが生えております。

アレが、この特異点の黒幕たる、レフ・ライノールの正体……魔神フラウロス。ソロモンの七十二柱の悪魔の一角を名乗る肉の塊でございます。

いよいよこの黒幕を打ち果たし、そしてシャドウサーヴァントとの戦闘も終わりを告げました。ヨシ！ これで最終決戦だな。と思った方に朗報です

ローマ市民と兵士のお代わりがございません。
戦えると思った？ 残念!! まだまだ雑魚敵がいらつしやるんですねえ。神祖口ムルスが退場しているかはともかく、彼が魅了した市民の皆さまはまだ夢の中でラリつていらつしやるのです。

というかその神祖がいらつしやる場所から気持ち悪いぶつといモノが生えてるっていうのに何も言わないのがちよつと危なすぎる気がする。

まあ結局の所、藤丸君達アレを伐採するまでは時間稼ぎは終わらないって言う。

とはいえ、ここから先はさつきと同じローテで伐採が終わるまで時間稼ぎになるので。ここはバツサリとカットしよう！（提案）因みにここからブルーデイカさんが味方として復帰してくださいませ。やったねホモ君！ ちよつと時間稼ぎが楽になるよ!!

——で、カットした後の

なんで王宮周辺どころか、大通りまで消し飛んでるんですかね（震え声）

此方が頑張つて無数のローマ市民と軍のちゃんぽんを凌いでいる間に、藤丸君の方の戦局は、いよいよ最終局面に移つてまいりまして。しかしそんな乱戦の中、ホモ君達の真横を突き抜ける白い極光が！

当然ながら王宮は崩壊。どころか大通りの一部も、結構削られたりするくらいの威力です。これは対城宝具の威力（確信）

因みに敵方はシャドウサーヴァント君達も纏めてきれいに全滅なさいました。なんて事を……（義賊）

そして……見るも無残に崩れ去った王宮から白い、スレンダーな美人さんが悠々と進み出て参りました。キレイなのは間違いありませんが、少なくともネロちやま陣営ではありません。お、やべえ。110番だな!!（危機察知EX）

どうやら……セプテム編最後のボスが出て参った様です。さて、彼らが此方に追いついて来るまでは時間があるので、少しばかり相手してやろうじゃないか。

『——私は。破壊する者である』

という事で、此方がセプテム編のラスボス。

アレ？ レフは？ さっきのラスボスっぽい人はどうしたの？ という皆様。ご安

心ください。無事藤丸君達が討伐に成功しました。はえ〜スツゴイ強い……もう藤丸君達だけでええやん。となつていますが、しかし。

アレを相手するのは我々でございませぬ。

『藤丸君達は、初撃で打撃を負つて……正直に言つて、動けるかは分からない。だから君が彼女を頼む！』

そりやあまあ、王宮の中であれだけの宝具をブツパしたんです。幾ら防御特化のマシユが居たにせよ、流石に無傷つて言う訳にも行きませぬ。ブーデイカさんが一緒に居たらまだ話も変わつていたかもしれませぬが……

アレ？ そう言えばブーデイカさんが居なくなつた遠因つて、ホモ君のDLCなのでは……ツスウウウウウウ……細かく考えるのは止めましょうか！ お腹が減りませぬし！（意味不明）

はい、という事で。自分の不始末は自分で何とかしましょう。此方の方のお相手は、私が行わせて頂きます。

アプリ版のセプテムにおいてはラスボスとしてネロ陛下の前に立ち塞がった。そして今はホモ君のラストバトルの相手として立ちはだかつたのは、嘗て自らの民族と共にローマを亡ぼしたものの。

文字通りの征服者。フン族の大王たるアツティラ。

彼女自身の名前は、アルテラ。クラスは最優たるセイバー。

ローマを亡ぼしたその実績は、ローマの全盛期たる、この時代を亡ぼす切り札としては余りにも丁度良く。正にローマ特攻の超人でございます。

ホモ君達に名前を明かす事は無いので、表示上は『白い女』のままですが……まあ強いですよ。当然の様に。

何せ、レフ・ライノールにトドメを刺したのはこの人です。いやはや負ける寸前になって全てを吹き飛ばしてやるとばかりにレフがヤケクソで召喚して見せたのがこのアツティラちゃんなんですよね。

しかし弱ってたレフには彼女の制御が出来ず、結果として……まあ、頭のとっぺんから股下まで、キレイに唐竹割りにされることになったのですが。

で、レフに『この時代を破壊する者』として最も相応しいとして呼ばれた彼女は、マスターのからの命令では無く、自らの意思で全てを『破壊』する為に動き始めた、と。スゲエどこぞのビルみたいな名前の破壊神じゃん……

で、その強さと言えば、間違いなく単体での強さはトップクラス。というかその強さだけでトップサーヴァント確定の破格の強さを持ちます。

その強さは、特殊能力的に強いとか、そう言う問題では無くて、単純に強いのです。火力だとか。剣術だとか。そういう単純な『力』の要素が特別に強い。いやーこういうの

が一番怖いですよねえ……

で、先程の宝具を見た通り、当然の如く宝具は『対城宝具』クラス。戦い方とかは違いますけど、単純に型月の顔の一人たる青いセイバーを相手してるのと大体同義です。

あの青いセイバー、ネタにされる事も多いですけど普通にお強い方ですからね。

そんなサーヴァントと同レベルの化け物染みた相手を、専ら支援が得意な筈なキャスタークラスで戦わなくてはいけないという実質死刑宣告。何とかしろと言われたので何とかします。

一応は、復帰して下さったブーデイカさんをはじめとした、ローマ軍将軍衆がお味方として参戦して下さるので、カルデアメンバーが式部さんしか居なくても、ギリギリで何とかなる、と思います。

ブーデイカさんが復帰して下さった所為か、上手い事呂布、スパルタクスのバーサーカー組を誘導して下さって、戦線離脱という事もありません。

というか、サーヴァント五人がかりで『なんとかなる、かなあ?』位のレベルの化け物つて事なんですよね。あの人。

『——阻むのであれば。粉碎するまでだ』

藤丸君がローマの建国王と黒幕を倒したのであれば。

ホモ君はその黒幕が召喚した、ローマを亡ぼす為の切り札くらい倒さないと、やっば

第二の主人公とは言えませんかからね。 よーし討伐、イクゾーツ！ オアアツ！（気合入れ）

え？ 裏方みたいな地味な仕事をしていればいいとか言つて無かつたかつて？ ないです（断言）

第二十五章・裏：聖杯でなく

「——あー……しんどかった」

そう言いながら。マスターが地面に座り込んだ事で……：私自身、戦いがようやく終わった事を自覚しました。

いつの間にか指が、次の一撃を放とうと構えを取っていた事に、今更気が付きました。当然意識していた訳ではありません。それ程迄……：緊張の一戦だったのです。

天を見上げようと、顔を上に上げたその時……：ふと視界に入る、一筋の何か。マスターのお尻の下まで伸びるその長さは、優にマスターの身長など越え、細いながら底は見えません。信じられなれないのですがそれは、余りにも巨大な斬撃の跡です。

「大丈夫？」

「……ああ、いや、ホントに世界って広いなあ。ああいうのが居るんだねえ」

「あの強さは、そう言う問題じゃないと思うけど。ねえ？」

「は、はい。正直、この様な惨状を作り出せるなんて……：最早人間業を遥かに超えている気が、致します」

大通りの全てに出来た無数の切り傷は、たった一人のサーヴァントが作り上げたも

の。建物の高さも何も関係ないとばかり建物に刻まれる一文字。

マスターが座っている場所の傷の様に、建物だけに留まらず地面にまでも深々と延びている切り傷も、いくつもあります。切られた柱はズレて無惨に崩れ去り、そのまま瓦礫と化している建物も幾つか。

一体どれだけの膂力と技量があれば、こんな事が出来るのでしょうか。私の時代。源氏武者の皆様とて、ここまでやれるでしょうか。

「皆さんが居なけりや詰んでましたよ。ええ」

「それはこつちも同じ。誰が欠けてもなます切りにされてたと思う……スバルタクスなんか見てみなよ」

……スバルタクス様は、呂布様と共にそんな暴力の最前線で戦っていたのです。我々の援護などどれほど役立ったのか、と言わんばかりの激戦でした。

その筋肉の鎧に無数の傷を負って。何時もは雄弁なスバルタクス様は、無言で大地に腰を下ろしていらつしやいます。呂布様は、立ってこそいますが……その場から一步も動いていません。己の武器に体重を預けて、立っているのがやつとなのでしょうか。

「これは、我々の勝利という奴だ……女流作家殿」

「荊軻様……」

「まあ、トドメを貰ったのは私だがな。はははは」

「け、荊軻様……」

そして、そのお二人の激戦によって……正に千載一遇、とても言えるような機会を突いて見せたのは荊軻様でした。

ブーディカ様を一瞬の盾とし。陰から襲い掛かってセイバーのサーヴァントの喉首を掻つ切るその姿……正に、古の皇帝に迫ったとされる、荊軻様の伝説を再演するかのようない撃でございました。

『——お疲れ様！』

「いやーホント。きつかったよ……いきなり連絡寄こして『その人を止めてくれ！』だもんなあ。皆様が居なかったら詰んでた。ホント、俺じゃなくてローマの諸將軍様に感謝してくれ」

『うん、正直な話、それは絶対にする……するけど。マシユも、藤丸君や自分、そしてネロ陛下を守るので精一杯だった。大きな怪我は無かったけど……ダメージは大きかった』

「いやマシユ達を責めてる訳じゃないけど」

……寧ろ、荊軻様の様な方であつたからこそ、討ち取れたのかもしれない。

真つ向から、全力で渡り合えるか、と言えば。マシユ様、藤丸様、ネロ陛下の三人が反撃すら許されず、宝具の一撃で戦えなくさせられてしまった。

その原因か。それとも、たった一因だったのか。

『本造院君。聖杯は？』

「あー……式部さんが回収してる。大丈夫」

その一撃で、彼女の元に現れた聖杯に関して、私が今、手元に持っています。この特異点を成立させていた、大きな要因。つまり……この聖杯を私が手にした、という事は。この特異点は、ようやく解決した、という事になります。

特に横入がある訳でもなく。

あつさり……この特異点の原因は、入手出来てしまったのです。

「後でマシユに渡せばいいんだっけ。ロマニ」

『了解。でも急いで、そろそろ帰還が始まるはずだから』

「あーそれまでについて事か、じゃあ休んでる暇もねえな、つと」

とはいえ、マシユ様のシールドに格納するのが、一番の安全策ではあります。

マスターが立ち上がるのに合わせ、急いでお傍に駆け寄って……そのままなぜか抱えられてしまいました!?

「あつ、あのっ!?! マスター!?!」

「時間無いから抱えて走るけど良い? 申し訳ないがイエス以外は聞けない。後急ぐんで皆にお別れを告げるんであればお早めに!」

「え、えつと!」

流石にローマに来てお世話になった方々に何もなしで帰ると言うのは申し訳ないの
でしかし丁寧に言うのもちよつと時間が無いと申しますか……どうしようかと思つて、
周りを見渡せば、私の近くに居た荊軻様の姿。

ブーディカ様含め、前線で奮戦なさっていた他のお三方は戦いの疲れで、休んでいる
所を妨げるのは良くない。ので……せめて。

「あ、あの……お疲れ様でした! また機会があれば!」

「ほーう、サーヴァント相手にまた機会があれば、というのは随分だな。今度は聖杯戦争
でという事かな?」

「はわつ?! いいえそんなつもりは全く!」

「ふふ。冗談だ。ああ、また機会があれば、轡を並べようではないか」

荊軻様は、そんな私に豪快に笑いかけ。

「——カルデアのマスター」

「ん?」

そして。マスターにも。

笑顔から、一転。真剣な表情で。

「私の勝手な想像から、勝手な忠告だ」

「え？ はあ、そりやあ、どうもって言や良いんですかね」

「自分で自分を潰すな。自滅程みつともない事も無いぞ。特にお前の様な、若い男ならば猶更、な」

「——そりやあ御忠告どうも。そんな軟な体してないんで、大丈夫です！」

マスターは、そう言い残して走り出しました。

その一瞬、荊軻様に言葉を返す時に、何か間が挟まれたように感じて。マスターを腕の中から見上げます。

特に何か感情を浮かべている、という訳でもない様に見えて。その視線が少し、泳いでいるようにも見えます。

「……心当たりがおありですか？」

「無いよ……って言いたいけど。ま、若いと無茶するのは、ね」

「荊軻様は、歴戦の勇士ですから。その御忠告、ありがたく受け取っておくべきかと」

「そーねえ。まあ俺みたいな若造よりは、経験豊富か」

崩れた王宮内に、藤丸様、マシユ様達の姿が見えます。ネロ陛下が驚いています。それは……帰還の光に包まれ始めたお二人の姿を見ているからでしょうか。危なかつたです。聖杯をマシユ様に渡し損ねる所でした。

「マシユ、フォウ君は!？」

「大丈夫です！ 後は、式部さんから聖杯を——」

「マシユ様、藤丸様！ 此方です！」

出来るだけ早く渡した方が良いと、声をかけて、それから聖杯を掲げます。それを確認したマシユ様が向こうからも駆け寄ってこられ……聖杯を、確かに受け渡す事が出来ました。危なかつたです。

そして、私達の合流を見て……ネロ陛下は、少し寂しそうな顔を、なさっています。

「もう、行くのか」

「は、はい……一応、異変は終結した、みたいなんで」

「もう一つの勢力とやらはどうするのだ。余が一人で……どうにかするのか」

『その勢力に関しては。こうして我々が帰還する時点で、大丈夫だとは思いますが』

もう一つある、と予測されていた勢力に関して警戒すべきは多くありませんでした。

その勢力が聖杯を奪取し、特異点を利用する可能性。そのカギである聖杯を私達が回収できた以上は、ローマはもう、大丈夫です。

「……そう、なのか」

「はい——俺達が力を貸せるのは、ここまでです」

「後は、ネロ陛下のお力で。ローマを……私達が共に戦ったローマを、支えて行ってください。私達が、遠くからでもネロ陛下のご活躍が分かる様に」

藤丸様と、マシユ様がそうネロ陛下に告げて。ネロ陛下は……ぐっ、と何かを堪える様に口元をキュツと引き絞って。それでも、最後は笑顔で、お二人に向けて堂々と胸を張られました。

「——うむ！ 当然！ お主らの耳に毎日入る様な、ローマにしてみせるぞ！」

「——行つてしまつたか。全く、極刑ものだぞ。余の誘いを断るなど……まあ、仕方あるまいか」

「さて。これからが忙しいか。やるべき事は山積みだ。領地の復興に、新たな防衛施設も築かねばならぬ……？」

「んぬう？ この髪飾り……なんだ、見覚えがある様な……あ」

「そうだ、あの島の神が、髪を括つておつた。アレだ。しかし、何故こんな所に」

断章：紫紺の神の行き先。

——暗闇に、彼女は立っていた。

紫紺の髪。麗しい神だった。

その美貌は、到底こんな殺風景な暗闇に立っていていい存在では無かった。誰からも愛玩され、誰からも傳かれる。そんな神だった。

彼女、ステンノに何時もの姿と違いがあるとすれば、二つに括っていた髪は、髪飾りを外されて、長髪になっている事くらいか。

彼女は思考する。形ある島から攫われた事。正に一瞬の出来事。

二人の……護衛的な存在。彼女達が目を離れた一瞬で、信じられない程に機敏な動きで攫われた。黒い、シャドウサーヴァントと呼ばれていた存在に。

一人だけ潜んでいたのだ。気づかれぬように。

「——全く、なんなのかしら。こんな所まで連れてきて」

そこからは、なんだかいけ好かない魔術師と対面させられて。此処まで連れてこられたのである。彼女の機嫌はもう最低も最低を更新していた。正直、舌打ちをかましてやりたいがしかし。女神としてのプライドが、それだけは堪えさせていた。

そもそも。

彼女は、特別鋭敏な感覚がある訳ではないが、しかし。この場所の空気が、〃良くない事くらいは分かっていた。普通の人間ならここに居るだけで、徐々に病んで行つても不思議ではない程に『淀んでいる』。

こんな所に女神を放つておくなど、不敬だとかが言語道断レベルである。ステンノの不機嫌メーターは、既に限界を振り切つていた。

ホント、神の怒り、恨みという物を思い知らせてやろうか。等と。出来るかどうかも分からない事を夢想するくらいには。

『ンンン！　そう警戒なさらずとも宜しいかと、麗しきゴルゴーン三姉妹の長姉殿！』

——ふと、声が聞こえた。

何も無い闇の底から。おつそろしく胡散臭い声だ。いろんな人間を見て来たが、それら等足元にも及ばぬ程に胡散臭い声だ。多分、神罰を与えられるような力があれば声を聴いた瞬間に『あ、コイツはやっておいた方が後で良いな』と、やる。絶対。

こんな奴の言葉を欠片でも信じようものならその時点で自業自得は確定するだろう。

「あらあら。貴方は何方様？　私に何か御用なのかしら？」

『取り繕う必要はございませんぞ。貴方様がどのように我々の事を考えているかは凡そお見通しですので。ハイ』

「——そう？　であればさつきと返して欲しいのだけど。こんな空気の悪い所にいたいな少女を一人置いておくなんていう礼儀知らず共の元に、一秒たりとも居たくないのよ。汚れる気がするわ」

『ンンンンンン！　予想以上のお言葉。これは拙僧も思わず笑いが零れるという物』
取り敢えず、全力で煽ってみたが……まるで効いている気がしない。

感情を制御出来ている、というよりは。そもそも彼女の言葉に対する、本人の感覚自体が違う……と言った感じか。こういう手合いとはマトモに話すだけ無駄なのだ。

そして、そんな厄を固めたような男は、今、少しずつ暗がりから姿を現していた。その服装は、少なくとも西洋のモノとは思えぬような意匠である。

『しかし申し訳ありません……我々としても、貴方様を帰す訳には参らぬのです』

「あら、どうして？　こんなか弱い少女一人。贄にしたとしてもたかが知れていてよ？」
『ご謙遜を。貴方様の高貴な血であれば、一人でも生贄には十分に過ぎるという物でしょう、とはいえご安心をステンノ様！　貴女の役割はそれではございません』

それは恐らく、東洋の着物と呼ばれるものではないかとステンノは判断した。となれば少なくとも、ここは自分が居たあの“ねじれた”時代ではないのだろう。聖杯の知識が、初めてマトモに役立った気がする。

そして……その着物を着た存在は、意外にも大柄な体をしていた。声からして、細い

体の、暗躍を得意とする類の輩ではないか、と推測していたのだが。寧ろ、勇士として称えられても、辛うじて問題ない程度には、肉付きが良い。

「——我が主は、貴女の『存在』をこそ求めているのです。何かを奪おうだとか、その様な乱暴な事は、とてもとても」

まるで、獯猛な肉食獣を想像させるような男だった。

そんな要素はどこにもない。しかし、その男は獲物を前に、牙をむいて喰らい付き、しゃぶりつくす。骨しか残さない。そんな光景が容易に思い起こされる。

猫を被る……否、人の皮を被つて化けているのだ。目の前の男は……そう思えてならなかった。

「そう。貴方の様な男が仕えている相手、という時点で凡そマトモなご主人様では無いわね。麗しき肉食獣さん」

「ははっ！ 彼の希臘の女神からそのように例えて頂くとは！ 何と最早恐悦至極にございますれば……まあ我が主が真つ当な輩ではないのは保証いたしますが」

「あらそうなの？ 部下からもそのように言われるなんて、素敵なお方なのね」

「ええ、ええ！ この私めを従えるお方ですから……ああ、これは申し訳ありません。ご挨拶が遅れました」

暗がりから、完全に姿を現した男は、白と黒に分かれた珍妙な髪色の頭を、彼女の目

の前に垂れた。下げ切る前に、その顔に裂けるような笑みが浮かんでいたのを、見逃しはしなかった。

果たして……ステノは、その笑顔がただの癖にも等しい物なのか、それとも自分を嘲笑っていたからその様な顔をしていたのか、その何れでもありはしないのか。

少なくとも、何れの可能性であつても間違ひなくその笑みは此方に向けられる刃の如くに、酷く攻撃的で、刺すようで。

「私、キャスター・リンボと申します。以後多く貴方様の眼前に馳せ参じるこの身なればよくよく覚えて頂ければ、幸い！」

リンボ。

聖杯から与えられた知識によれば、とある聖者を崇める宗教においての地獄であると
の事だ。そんな名前は本名な訳が無いので、明らかに偽名だ。

名前すら名乗るつもりがないのは……やはり、此方の事を警戒しているのだろうか。

名前というものは、それだけ重要な情報だ。神霊を相手に迂闊に名乗りを上げない、と
いうのは適切な知識を持っている者でなければ出来ない対処法だ。

「ええ。分かった。今すぐ忘れておきますわね」

「ンン、なんとも手厳しいですなあ」

「それで……そのリンボさんだけを寄こして、主様は来てくださらないのかしら？」

「申し訳ありません。我が主も些か以上に忙しく。何分敵の多い方ですので。というよりこの世にあるだけで衆生の仇として扱われていらつしやるので、敵しかいない、というのが正しいのですが」

その一言が本当なのであれば、胡散臭いこの目の前の術師に加えて、敵以外がほぼ存在しない主も居るといふ。正直、捕まる相手としてはこの上なく最悪なレベルではないだろうか。思わず顔も歪んでしまうというもの。

「さてステンノ様。此方の自己紹介も終わった所で……此方の要求をお伝えしたいのですが、宜しいかな？」

「お伝えも何も、私は此処から出られもしないか弱い女神よ。何をされても抵抗すら出来ないのですから、何も言わずに強行すればよろしいのでは？　そもそも、貴方の役に立てることなんて無いけれど？」

繰り返すようではあるが。ステンノ自身、自分が戦の最中で何か出来るサーヴァントであるとは欠片も思っていない。居るだけで崇められる才能ならそこらの神など物の数にもならない程あると自負してはいるが、それ以外では過信などした事も無い。

贅として使わない、と宣言していて、加えて、今でも敵がわんさかいるかのような言い回し。ならば何のために自分を攫つて来たのか……いよいよ話が見えてこない。

「いいえいいえ!!　お忘れですか？　貴女様は、居るだけで価値がある、と申し上げたで

はありませんか」

「……ただの戯言、若しくは比喩だと思っていたのだけど」

「全くその様な事は！ 故にこそ、我らはこう頼むのですよ……『何があつても、そのお心に正直にありますよう』、と」

そんなステテンノに……リンボは、そう笑いながら、のたまつた。

「ふうん。では、ここから出して欲しい、というのも言つて良いのかしら？ 幾らでも」

「当然！ それを叶えるか否かは我々次第ではありませんが……貴方が、ご自分の心に正直になればあるほど、我々としては好都合。諦めてもらうなどとてもない!!」

いけませんその様な事、等といかにも大袈裟によよよと顔を伏せる姿に、余計に苛立ちと不信感が募る。けれど。

何もかもが意味が分からない。自分を拘束するだけしてはいるが……その一点を除けばもはやそれは自由に行っている、と言われているのほとんど同じではないか。それは。

自分が此処から抜け出せるとは思っていないのか。それは間違いないと思うが。しかしながら、自分を伏兵で攫い、そしてここに幽閉するまでの鮮やかな手並みをやつてのけた連中とは思えぬ杜撰な管理だ。

嘘か、それとも。

「……随分とお優しい事。そこまで言うなら好きにさせてもらいますけれど」

「ご随意に。要り様の物が在ればこちらにお申し付け頂ければ」

——だが。

目の前の男が取りだした人型の札は、男が宙に放り投げ、印を結べばその姿を黒い影法師に変えた。出された命令を聞くだけの使い魔の類、要するに召使という事か。至れり尽くせりである。

「ここまで来て、自分を騙す意味はあるのだろうか。少なくとも、ステンノには思い至らなかつた。」

「じゃあ、先ずはお願いしようかしら」

「はい」

「——椅子の一つでもさっさと持ってきてくれるかしら。立ちっぱなしで居るのはちよつと疲れるのよ。それとも、その召使が椅子代わりになつてくれるの?」

となれば。ステンノは、目の前の男に視線を向ける。

今は、女神らしく、傲慢に、怯む事も無く……その提案に乗つてやろうと、取り敢えずは目の前の男の顔を少しでも歪めてやろうと、我が儘に言葉を紡いだ。

第二十六章

第三特異点へと終わらぬ旅へ……の準備。はーじまーるよー。

前回、セブテムを無事に突破。いや本当に良かった……最後の戦いであのお人を押し付けられる事はこのモードでは凡そ、分かり切っていたんですけれども、それでも割と重かったんですよ。彼女はマジで。

単純に現状のステでは重い上に、自分を強化してデバフを弾ける様にしてから一発を叩き込む。此方へのデバフ等せぬ、と言わんばかりの正面からのゴリ押しが恐ろしい。

デバフで弱らせて特攻叩き込む、っていう式部さんへのアンチテーゼみたいなの相手だよ本当に。いやそこ迄ではないんですけども。

それに、最後の相手が彼女だったせいで、結局の所礼装の『最後』の機能は使わずして終わってしまったのでまあ。使う余裕が無かったと申しますか。ハイ……次はちゃんと運用できるようにしたいですね。

これがラストエリクサー症候群ちゃんですか……（絶対違う）

で、いよいよセブテムを突破した事で……来ましたよ！ 新たなスキル習得！ それに伴うデメリット増加！ 素直に喜べねえ!!!

……まあスキルに関して言えば、一応望む物がもらえるので良いんですけれども。

さてここで問題になってくるのは次に何を手に入れようか、って言う話なんですよ。赤得がくつついて来る以上、それすら帳消しにする様なウルトラCクラスの選択をしなけりやいけません。

前提として、ホモ君は覚醒時のクリティカルにワンチャンを通す型なので、兎に角その関連を積むのは確定です。

では、その選択肢は二つ。安定を投げ捨てて、全てを殴り倒すか。それとも継戦能力を確実に上げて行くか。

因みに何方にせよ、最後には地獄の様な流れにはなるので、どっち選んでも最終的に苦しいのは間違いありません。

で、その上で……何方を取るか。私が選んだのは。

『適応・覚醒』というスキルですね……何方かと言えば、継戦能力を重視したゲームスタイルになります。簡単に言えばレベルを上げれば更に覚醒の持続ターンが伸びる様になりました。

まあ上限突破用のスキルですね。これ以上の成長を見越して、最終的にある程度以上は長いターン戦えるようになって欲しいんですよ。まあ継続型ですよ。

短期決戦仕様で相手サーヴァントを削り切れるかとなれば……ハイ。

という事で持続ターンを伸ばす策をもう一つ。此方の策は速攻では無く、後からじわじわ効いて来るタイプのスキルですが、後々への布石と考えて、取り敢えずコレを使って行こうと思います。

まあ使っていくのは良いとして。次が問題です。

ランダムのマイナススキルが一体どうなるのか。噛み合いが良ければまあいいんですけどさて……ここで、ストップ!!

『歪む精神』

フアーwwwwwwwwwwwwwwwwww……はあー

あほくさ

自分再走良いすかとまで言いたい。赤が、赤が兎に角キツイ。確率スタン、武器使用不可、相手の攻撃力上昇と、どれもこれも結構重たい物ばかりだというのに。

さらにこの……このスキルですが、常時発動タイプのモノで、敵を倒すと次のターンの行動が攻撃確定になるという、まあ、行動制限系のスキルなんですよ。

これの所為で後方にスイッチできず、そのまま殴り倒されてゲームが終わる哀しい事故とか全然あるんですよ……いやーこういうゲームで主人公のキャラクターを縛る系の赤得は本当に危ないの!!

しかし、これでもやって行かねばならないのです。という事で、どうにか外部で補え

るかを模索しておりますが。

無い事も無いのです。実は。

『——サーヴァントを召喚するかい？』

このゲームでは、基本的に自由にサーヴァントの召喚は出来ません。一人目は特異点Fの最中か、その後のタイミングでと決まっています。そして、第二特異点を突破したタイミング。敵の正体が明確に現れて来たこのタイミングで、戦力増強の為にサーヴァントを呼び出す事が出来るのです。

魔神柱なんて物が現れて、戦いが加速していくその直前なので、機会としてはピツタリですよ。通称レフからのプレゼント。ありがとうレフ。

そして、二つの特異点を超えて、探索も何度かやっていたお陰で素材も集まりつつあります。そろそろ香子さんも良いレベルになって来ましたので、再臨も行う頃合いだと思います。

ここで一気に戦力増強をして、ホモ君が背負いやがった余計な業を何とか帳消しにしていきましよう。

新たなサーヴァントと、香子さんの第二スキルで、少しでも事故死を防ぐことが出来れば……というのが此方の目論見です。

香子さんの第二スキルは、相手の宝具、というか強力なチャージ攻撃を妨害する類の

スキルでして。万が一、そのタイミングでホモ君が敵を倒してしまっても、チャージ攻撃の直撃を避ける事は出来たりします。

正直、あの能力を引き当ててるまでは生存率を上げられる（超重要）位だと思っていたのですが、あの能力を引き当てた事で生命線（必須）になったと思います。まさかこんな所で香子さんを引き当てた事が生きるとは……

『――衣替えにございます。気分が変わりますね、ふふ』

その衣替えで助かる命（物理）があるので誇って欲しいです。

さて、問題は此処から。新規サーヴァントの方です。

個人的にはどんなサーヴァントであっても、このゲームでは圧倒的な戦力になりますので良いんですが……強いて言うのであれば、持続力を持っていて、単体で完結している。相手の妨害能力を持つているサーヴァントお……ですかねえ？

そんなピツタリなサーヴァント出て来る訳が無いんですけども。一緒に戦ってくれる気の良いサーヴァントであれば全然。はい。

では召喚してみましょうか。さて、状況にピツタリなサーヴァントが出て来てくれると嬉しいんですけども……オラア!! 召喚サークルに虹石をシユウウウウウウウウツッ! 超! エキサイティン!!! 回れまーわれメリーゴーランド!!

さあ何時もの召喚演出。出て来るセイントグラフは……おおっ! 金色にサークル

が輝いております！ これはパチンコ難民救済の裏技ですわねえ。そして金のセイントグラフも確認！ あれ、しかしこの絵柄って、めっちゃ縛られてるんですけど？

『……ふん。復讐者、ゴルゴーンだ。上手く使うがいい。私も貴様を上手く使う。何方が先に末路を晒すか、見物だな？』

ア → ア → ア → ア → ア → アイクツ……（チーン）

つしや！ 攻撃力もある！ 妨害能力も高い！ ガッツ持ち！ 単体で完成してる系のサーヴァントだな！ 大当たりじゃないか!! 因みに最大の問題として、コミュニケーション失敗すると食われるアウト系のサーヴァントって事かな!!

……今までは自分の赤得でああ、ある程度は自業自得だと思っては来ました。しかしここで、ここでこのFGORPGの一番の地雷要素を引くとは。

FGORPGは、本家FGOよりも自由度が高い分、キャラクターのコミュニケーションなどで多数のイベントなどが追加されています。汎用だったり専用だったりとありますが中には当然……BADコミュニケーションした場合のしつぺ返しがデカい人も。

ゴルゴーンさんはその典型例です。BADした場合どうなるか……一番ひどい場合で問答無用で食い殺されてジ・エンドです（半泣き）

え？ そんなん人理修復の旅としておかしくないかって？ おかしくないですよ。

アプリ版では省略されていた『どんなサーヴァントでも呼べる』という事の綱渡り感を寧ろ前面に出してきてるんですね。全く、気が狂いそうだ!!!

とはいえ、とはいえ、ですよ。

ゴルゴーンさんの第二スキルの魔眼は相手を行動不能にする強力な物。ホモ君が万が一事故ろうとも、敵の行動を減らしてダメージをも減らす事が出来ます。それを考えると大きな戦力増加ではないでしょうか。という事でゴルゴーンさんも再臨しましょうねえー。

『私の素顔を見たな？ フフ……そう怖がるな。石になどせん。貴様は私の大切なマスターだ。最後までたつつぷりと……丁寧に扱ってやろう』

コワイ!!

落ち着け。BADコミュニケーションをしなければいだけですし……コミュニケーションに関する青得取らなきや……（使命感）

因みに、マスター二人、というかカルデア全体の戦力増強なので藤丸君もサーヴァントを召喚しているのですが……此方は此方で結構な面白いサーヴァントを呼んだので、その紹介はまあ次回の見所さんの一つとして取っておきましょうか。

と言った所で、取り敢えず第三特異点への準備は、こんな所ですかね。

あ、忘れないうちにカルデア内の探索も忘れずにやっておきましょうねえ。特に観

測室は、ほら、舐める様にやらないと（物理）

第二十六章・裏：戦力増強に関してのエトセトラ

「——試験終了。良い感じだね」

『良かないっすねえ。つたく、ホント疲れるんですけれどもー?』

「あははは。仕方ないじゃないか。君のデータを地道に取って、そのデータを兎に角、フィードバックする事が、君の事への理解につながるんだから」

『……頼みますよドクター。この変人天才様の手綱、ちゃんと握っててちよーだいね。俺はあくまでモルモットなんだから』

「あははは……努力するよ」

ダ・ヴィンチから『改めて、礼装の試験運用がしたい』という提案が出された時は、好機だと思った。

セプテムでの試運轉的な幾度かの使用では……今の所、何か不穏な様子を見せていない。此方のデータでは、特に問題がある訳ではない。故に油断してしまっている部分が無いと言われれば、否定は出来ない。

医者としても、ここは気をより引き締めて挑むべきだ、としつかり頭のネジを締め直し目の前のデータを見直す。

シミュレーターでの幾度かの調整。ただ能力を発現させて調子を見るだけのそれは、本来なら礼装が完成してからやるべきだったのだけど……特異点を攻略する為には些かとその時間が取れなかった。

故に次の特異点までには、出来るだけの調整を繰り返して。彼のデータを集め、それを元に……更に安全性を高め、本造院君へのリスクを徹底的に減らす。彼の中に流れる血が暴れ出さない様に。

彼の血については、色々分からない事も多いのだ。

そもその話、先祖が鬼だったからと言って、鬼の能力を使えるか、と魔術的観点から話をさせて貰えば……そうでもない。

極端な話をすれば。神の血を引いているからといって、その神の力が使えるのか。と言えばそうでもないのだ。当然ながら。受け継がねばならぬのは極端な話にはなるが、血ではなく、神秘なのだ。

「——彼の家が、正しい神秘の保存をして来たのか」

それに関しては、疑問符を付けざるを得ない。

何故なら彼の親族は魔術師ではない、というのは確認済み。当然本造院君に魔術刻印等も存在しないのは分かり切っている。

であれば。彼が発現させた力はという理屈で発動したのか。鬼の混血なれど、何世

代も何世代も後の彼に、何故。

やはり分からない事が多すぎる。

一般候補の一人として彼が連れてこられたのが、その血が原因だったのか、という色々な想像を働かせることも出来るが……

「ロマニー？ 何をポーつとしてるんだい？」

「あ、いや、ごめんごめん」

今はそんな事をしている場合ではないだろう。

「全く。礼装の設計や開発は出来ても、人体に関する面においては、一応医者である君の方が優れているんだからさ。ちゃんとデータを取って貰わないと」

「そうだね。君に好き勝手作らせる訳にも行かないしね」

「そんな事はしないんだけどなあ」

「意識してはしなくても、興が乗っちゃってやっちゃうことがないって言える？」

「——さー、実験を再開しようか！」

ダ・ヴィンチが幾ら天才だからと言って。データが無くては改良の仕様もない。彼自身も、開発者として礼装の安定性、及び性能の十全な発揮の為にこの実地試験に協力してくれているのだから。

それに、余り彼を拘束しておくわけにはいかない理由も、出てきてしまっている。

「それで？ 先日来てくださったお嬢さんの様子はどうだい？」

「……正直、穏やかに過ぎると言えばそうだね」

ここから見える位置に配置してある監視カメラのモニターには、シミュレーター内でエミーとの模擬戦闘に興じているサーヴァント……アヴェンジャー、ゴルゴーンの姿が映し出されている。

エネミーのレベルは、セプテムでの戦いを元にして、それなりに高レベルにしあげてるのだけど、まあ物ともしていかない。戦力増強としては、これ以上ない程に心強い相手を引き当てたと言えるだろう。

彼女は、これから激しさを増す戦闘に合わせて、追加での召喚を行ったサーヴァントなのだが……問題は、彼女の気性にあった。

反英霊。そうカテゴリされるサーヴァントが存在する。

神話において、怪物を討伐し……討ち取るのが英霊であるのなら。そのまた逆。討伐される側の存在も、サーヴァントとして召喚される事が、あるのだ。

それこそが、英霊に反する位置に居る存在。敵役。物語の怪物。人類を憎む物。彼らは人類史が危機に陥っているとしてみ方してくれるとは限らない。そんな存在なのだ。

そして、その中でも、ゴルゴーンともなればひとしおだろう。

「正直、人と相いれる理由がないんだよ。彼女」

「一応は此方に味方してくれるらしいみたいだけど、寧ろ彼女の境遇考えるとそれってあんまりにも都合が良すぎる、というか」

「うん……」

此方に協力してくれている相手にこの様な事を言うのは失礼どころの騒ぎではないだろうが、しかし。

彼女は、反英霊の中でも、分かりやすく英雄に討ち取られたタイプの存在。ゴルゴーンの怪物。神霊によって遣わされた英傑にとつて討ち取られ、その首を幾度となく利用され尽くしたという、恨みしかないような逸話があるのだ。

彼女についての情報を知っていればいるほど……

「マスターが近くに居るからつて言つて、遠慮して下さるとは限らないけどねえ。まあ居ないよりはマシ、くらいなのかな」

「この中で、彼女に問題なく話しかけられるのは、召喚した張本人の彼だからね」

無論、僕らだつて彼女を無駄に刺激しようとは思わない。協力してくれている分此方も色々彼女に融通を利かせる積りもある。別に彼女を腫れ物扱いするつもりもない。

それでも、サーヴァントに一番近い立場なのは、結局のところマスターの本造院君一人なのである。

彼女と本造院君との仲次第では、カルデアが空中分解し、人理修復は失敗……という事も十分にあり得てしまう。カルデアという組織は、それ程に薄氷を踏むが如き状態にあるのである。

「——とはいえ本造院君本人は彼女と相性が良さそうだって言ってたけど」

「え？　そうなのかい？」

「ああロマニは聞いて無いか。さつき礼装の調整に行つた時、ゴルゴーンについて聞いてみたんだけど、そう言つてた」

しかしながら彼は、そこに関して心配はしていない、らしい。

「曰く、『同族の匂いがする』だつてさ」

「同族の匂いつてなんなんだろう」

それが事実かはさっぱり分からない。若い子の感性は独特なのかもしれないし。でも此方としてはマスターに余計な事を吹き込んでサーヴァントをコントロールしよう、とかやつたら絶対アウトな事は出来ないのです、彼の胸先三寸に賭けるしかないのだが。

これが、藤丸君が召喚した方のサーヴァントの様に、全く心配いらぬ人であれば、此方も心を落ち着かせられるのだけでも。

「少なくとも藤丸君が召喚した方の、アルトリアよりは近しい物を感じるって」

「……何となくニュアンスだけは分かる気がする」

「良い子だもんねえ。彼女」

サーヴァント、セイバー・アルトリアは、藤丸君と既に良好な関係を築けている。マシユとも真面目な気質が良く合っている様で、何も心配する点は無い。

「とうか、彼女が苦手なんだとも言つてた」

「え。あんないい子が？」

「本人にももう言つて言つて言つてたから、間違いないと思うけど」

「凄いな……本人に得意じゃないって言えるつて、心が鋼で出来てるのかな」

「いや、言わない方が不誠実じゃないかと思つたんだつて。彼女自身が嫌いつてわけじゃないらしくて」

「あー」

……そんな少女とも、合う合わない、というのはあるらしいというのは、今まで見て来た彼らしいと言えば、そうなのだけど。なんとうか、ダメな時は本当に『ダメ』というタイプらしいので。

「何がダメなのかな」

「女の子が刃物を持つているのがトラウマなんだつて」

「……どんな限定的なトラウマなんだろう、それ」

第二十七章

海へ飛び出せ！ 実況はーじまーるよー。

さて、前回で言つてました第三特異点、オケアノス。いよいよ突入なのですが……偶にはこの特異点がどんな特異点なのか。はじまりの景色から予想して貰うのも面白そうなので、ちよつとお見せしましょうか。

さて、レイシフトを超えた先……見えて参るのは、おつ、彼方がめつちや青いですね。ですが空の色ではありません。その輝きは水面に照り返す陽の光でございませう。

そして、今。カルデアのメンバーが立つていらつしやるのは木目の板の上ですね。そもそも地面でもございませぬ。今までは開けた大地とかにデーんと出て来てたのですが、いやー不思議ですなえ。
で。

『良く分からねえが……野郎共、やつちまえ！』

周辺には屈強なバンダナを頭に巻いた海の野郎共が十何人か！ そして船の帆の上に翻る髑髏のマーク！ これらが、第二のヒントになります！

……まあ凡そ、皆様予想は付きましたかね。

えー第三特異点は。海です。デカイデカイ海です。凄いデカイ海の中のたった一隻の船の上に、我々はレイシフトしたのでございます。そして……その船が荒くれ物の巣窟とかいうね。ギャグの様な。はい。

ロマニの謝罪案件は間違いありません。オラツ！ 謝罪！！！！
謝罪動画！ ごめんなさいしろつ！ マシユのお団子食べた事も謝罪しろつ！！

ロマニの謝罪が入った所で、ホモ君で、海賊を殲滅しにまいります。はい、今回は今まで成長してきたホモ君の運用試験代わりです。ほとんどが人間で、特別に怪物が居るという訳でもないので、試験には最適な相手でしょう。

『すいませんでした……』

因みにマジで試験にもならないレベルの雑魚なんですよねコイツこの海賊君達は。負けたらホモ君にオシオキレベルで弱い。哀れよなあ……こんな角生える肉体はハゲの相手をしなけりやならんとは。

所詮は木っ端海賊君ですよ。ホモ君一人で対処できるレベルです……と言いたい所ですが、強くなったというのもあります。本当に。という事で、これが丁寧丁寧に育成したマスターパワー!!

覚醒入れてしまえば、先ずマトモな人間相手ならワンパンで終わります。後、レベルを上げた事で、回避率と防御の値もちゃんを上昇するようになったので、海賊クラスの

攻撃なら割と躲すようになりましたし、防御を選択して居れば、二、三回喰らっても致命傷にもなりません。

順調に人間をやめていつている性能になっていきますね。

で、シバキ倒した海賊君達はしめやかに失禁！ 土下座！ 命乞い！ まあ、失禁は冗談にしても、割とガチで許しを請うて来ています。これがホモ君一人で出来たというのが成長を感じ取れて気持ちがいい（恍惚）

ロマニも、曰く取り敢えず足が出来たからよかつたじやないかと。まあ実際、マシユ一人でなら苦戦も無く、本当に片手間、余裕で制圧できていた程の戦力ですし。

強化されたマスターであれば、結構ひーこらひーこらいながらですけど何とか制圧くらいは出来る気がしたのでやってみました。というか、こころ辺で通常の人間さんを制圧できる位は出来ないと、ね。

これでシバキ倒した海賊君達を足として、大海原を駆け巡る第一歩、というか足掛かりをつくる事が出来ました。

まあ最大の問題点として、彼らも役に立つ事を何か知っている訳でもない上に、更に羅針盤やらなんやら、海賊として必要な物が悉く役に立たないって言う緊急事態みたいな状況であるって事で。

『そんな状態で私達に襲い掛かって来たのですか……？』

マシユちゃんの疑問も当然だと思います。

こんなしよーも無い海賊共ですが、暫くはお世話になるのでちゃんと言護して上げましょう。因みに練度としてはローマ正規兵の皆様と違ってしつかり低いです。やっぱならず者じゃダメだな!!（無礼）彼らに期待するのは目的地への足だけです。弱くても一向に構いはしきないですけど。

で、そんなしよーも無い海賊連中は、物資諸々が乏しくなってますので只今、その物資を補給しに、海賊島という場所に向かっていたとの事です。

海賊がたくさんいらつしやるとの事で、この特異点の現状を把握するには、やはり人が集まる所が一番。海賊島が、現状我々が目指す目的地になります。初めてこの特異点に来たのですから、先ずは情報収集から。

さて。この海賊船に乗り込んだ後なのですが、船に乗っている間は探索の出来ない特殊な進行になってきます。代わりに同じ船の上にいるキャラクターたちとの会話タイミングが増えたり、特別な会話が聞けるようになっていきます。

因みに私が引き当てましたゴルゴンさんとの迂闊な会話は出来るだけ避けたいですが、コミュニケーションを怠っていても目を当てられない結果になるかもしれないのでどうすればいいでしょう。

結局の所藤丸君みたいなパーフェクトコミュニケーションをやるしかないのが現状

なのですが、まあ行けば分かるさ。最初の一步を踏み出していきましようか!!!

『……海、か。そこまで得意ではないな。アレを思い出す』

はい行かない方が良かったですね!!!

……まあ、そうなんですよ。只の氷辺なら兎も角として海はね。メドウーサさん系列の人達はあのお方の関しての思い出があるんですよ。ペガサスさんとか貰ってましたけどそれが原因で後々に……とかありましたし！

因みに絆値が上がっていなくても一応こういう特殊会話は聞けます。そう言う辺り細かいですよねこのゲーム。

まあとはいえそんなゴルゴンさんには朗報なのですが、今我々がのんびり目指している海賊島には、そんなクソツたれなギリシヤ下半身脳にスカツと目に物見せてくださったお方が居るので、それで留飲を下げて貰えれば。

さて、続いては式部さんの方に行ってみましょう。海に関しては特に何か因縁を持っていた訳でもないの、此方はまあ安全ですよ。

『海というのは本当に、斯様な輝きを放っているのですね……何処までも蒼い、この景色を、しかも船の上から。陸から見える景色、船からしか見えぬ景色。それぞれが人を惹きつけて止まない。それ故に、この海に魅せられ、帰ってこない者もいるのでしようね』
そうコレ！ こういうのですよ!! こういうので良いんですよ！ ホント式部さん

は清涼剤……マシユちゃんの様に、自然と海に関する話題を言ってくださるのが本当にありがたく存じます。

実際、この海に魅せられて海を旅し、そして財宝や黄金に魅せられて、そして大抵の場合死んでいくような連中が、今船を借りている海賊なのですけれども。

F G Oにも海賊系サーヴァントはそれなりに居ます。船乗り系のサーヴァントも居ますがそう言ったタイプと海賊系が明確に違うのは、海賊系は『色んな意味で濃い』事です。異常に。

男も女も、押しなべてまあ濃いのです。そりゃあ刹那的に快楽を求めて海に沈んでいったような連中なんでそりゃあまあ個性がぶつちぎって濃いとかは当然レベルなんですよねええ。はい。

その中でも特に濃い輩は何人かいるのですが、こんな海ばかりの特異点で当然のように出て来るんですよ。そいつとの接敵が今から怖くてしようがありません。

とはいえ、今は目の前の海賊島。

そこに居る、この旅のナビゲーター役のお方ですよ。その方は、恐らく海に関するサーヴァントの中ではトップクラスの怪物なのですが……そこは会ってみてのお楽しみ、という事で。今回は此処まで。

取り敢えず、ゴルゴーンさんにはあんまり積極的に、しかし継続的に話しかける事で

暫定的な措置としようと思います（日本人特有の玉虫回答）

第二十七章・裏：蛇と禿

——何故、こんな男が私を呼んだのか。

「いやー気持ちがいいなあ船つてのは。俺、こう言う帆船乗ったの初めてなんだけど、普通の船だとかと違う感じが。こう。なあゴルゴーンさん？」

「……」

「うん。ゴルゴーンさんも楽しそうだ！ 水平線見つめちゃって！」

全くもって楽しくはない。不愉快ですらある。私にとつては、この船は些かと狭い。とはいえこのまま苛立ちのままに暴れて船を壊し、水の底に沈む、等という間抜けを晒したくないから堪えてやっているだけだ。

流石に私が不機嫌な事くらいは、他の人間共も察する事くらい出来るだろう。海賊共は遠巻きに怯えているし、怯えてはいないカルデアの他の連中たちも、ここまで露骨に話しかけては来ない。

だが。この男は……その辺りに鈍いのか。それとも態とやっているのか。いずれにせよ神経が苛立つ。今すぐにでもこの男の首を締めあげてやりたい。喋れなくしてやりたい。普通に耳障りだ。

「あ、あのですねえ……旦那、あの、ですね」

「ん？ どした？ もつぱつゲンコツ行くか？」

「いいえなんにもございませんはい!!」

少しは努力をしろ。そこの愚か者の口を閉じさせろ。

とはいえ、この愚かな召喚者にアレだけ叩きのめされたのだから、怯えるのは分からないでもないが。私からすれば退屈な争いではあったが、しかし、あの海賊共にとつては悪夢以外の何物でもなかったらう。

『——何なんだよ此奴!?! なんだよその角!?!』

『おしやれアイテム!』

『ごあつ!?!』

『俺、お洒落には気を使ってるから! このハゲ頭もお洒落の一環だから!』

まるで、子供と大人の喧嘩だった。必死になって振り回された手を軽く受け止め、そして返しは拳の一発で確実に一発で殴り倒す。殴り掛かっていなくても、無造作に近寄って殴り倒す。呆然としても殴り倒す。逃げようとしても殴り倒す。少しばかり、その滑稽な光景は多少の見物ではあった。

まあその中で可笑しな神秘を身に纏っていたのも確かではある。

しかし、だからと言って。それは、私が目の前のサルを止めない海賊共に苛立ちを覚

えない理由にはならない。だからと言って、私が反応しようものなら目の前のサルは間違はなく更に凶に乗るだろう。

だから、止められるのは周りの人間共と……もう一人。

「あの、マスター。ゴルゴーン様は、その……」

このマスターが召喚しているもう一人のサーヴァント位な者だ。と、言いたかった。だが正直この女に関しては、あの海賊共よりも頼りにならない。

そもそも気が弱すぎる。戦士でも無ければ、術師という訳でもないらしい。本領は作家との事だが。

「程々に、なされた方が」

「ん？ いやだつてねえ？ サーヴァントと会話もしない、それで普段から連携取ろうなんておこがましくないかい？ ちゃんとアイコンタクトで意思の疎通が出来る位がサーヴァントとマスターの理想だし……だよなーマシユちゃん？」

「あ、はい！ それは正にマスターとサーヴァントの理想形かと！」

「マシユ！ 今、今その発言はマズい……！」

「？ マシユさん何か間違つた事言ってますか？ マスター」

「セイバー、そうじゃないんだ、そうじゃないんだけど！」

もう一人の方のマスターの方は……一応、それなりに見れる形ではある。姿形が、と

いう事ではなく。キッチリとサーヴァントとのコミュニケーションとやらが成立しているように、私には見える。

少なくとも、この目の前のマスター擬きよりは、しっかりとマスターをやっている様に見える。

向こうのマスターの様に、少しでもサーヴァントという物を……いや、そもそも『私』という存在を理解して行動して欲しい物だ。もし理解して居れば、この様な軽々しい態度などせず、生贄の一つでも進呈して来るものだろうに。

「……」

「まーまーそう怒らんでよ」

「怒ってなど居ない。『怒る』という次元の位に貴様は存在しない」

「あらそう……いやーでもさ、やっぱ戦いの後って、どうにも辛気臭くなっちゃうし。だからまあ、誰かとの会話でも使って、色々熱を覚ましたいとかさ」

そんなのは貴様の都合だろう。

そう思い、ふと言葉の違和感に引かかった。使って、という言葉が、付けるべきではない所に付いていた気がするのだが。会話でも、使う。

気になって、禿げた頭に視線を向ける。その視線に気が付いたマスターは、ニヤリといたずらっ子の様な笑みを返した。少し苛立ったので髪で噛み付いてやった。

「……まー、単純な理屈な訳だよ。ゴルゴンさん。俺がこうやって話しかけてるのは、俺からすれば、なんだけどね」

「ほう？」

「あの、マスター。噛まれてます。大丈夫ですか？」

男はしかし、一切動揺する事無く、此方の目を見て、口を開いた。流石に私を呼んだ時もそこ迄反応を見せなかっただけはあつて、肝はそこそこ据わっているらしい。文句を言わないのであれば、とそのまま続行しつつ、話を聞いてやる。

「アンタは召喚する時に、自分も、俺も、互いにうまく利用しろと言ったな」

「ああ。確かにそう言ったな」

「ちよつとな。最近では暴れてると、熱が……頭に籠つちまう事が多い」

「あの、マスター。牙が。血が。本当に大丈夫ですか？」

残虐性なんてのは、少しの事で溢れだす……等と知ったように語る顔に、とはいえ一切わからない訳ではない。人間の残虐性は、私の様な怪物のそれよりも余程悍ましく、そしてほんの小さな事で膨れ上がるものだ。

男は、あの様に暴れるのは、最近ではそう珍しくもない、と語った。そしてそれに少しづつ慣れて行くにつれ……それが脳の内に溜まるのだと。

「それが、私に話しかける事と何の関係がある」

「話しかける事で頭の中の熱を引かせるのさ。自分を、日常に戻す為に」

「あのマスター、本当に熱が引いて来てます。血の量が、量が」

その言葉に、ふと思ひ出す事がある。マスターは、サーヴァントを現世に留める楔の役割をしている。その役割は、まるで……

「私が、日常への楔という事か」

「端的に言えばな。もちろん他の人達でも良いつちや良いが、個人的な理由でアンタに話しかけるのが一番、自分で自分を律しやすいくらいからな」

「ご自分を律する前にご自分の状態を見てくださいマスター、もう凄いです、血が滝の様に、もう滝です、コレ」

随分と可笑しな話だ。

この男にとっては、私のようなあくびの出るような平和から程遠い怪物こそが、自分を諫めるのに必要なのだという。私に期待する役割としては、恐らく何よりも遠い場所にある仕事ではないか。

兵士が、故郷の娘を思い出す事で、戦場にはびこる獣になるのを何とか堪える……そんな話を聞いた事がある。その娘が私か。思わずして笑みがこぼれた。遠いどころの話ではない。この男、感性が死んでいるのではないか。

「——成程、間違いも無く、この上なく自分勝手に私を利用している訳か」

「そう言う事だ。今度こそ怒ったかな？」

「何度も言わせるな。怒るなどという次元に居ない。それに……利用しろ、と貴様に言ったのは私だ。貴様が利用するのなら、私も精々利用してやるのに一切の手心も要らん」

「……いいね。やつぱり、話が分かるよアンタ」

「ご自分の事は一切わかってませんマスター。もうお顔が真っ赤です。真っ紅です」

しかし……目の前のマスターを見る。頭が沸いている、平和ボケのマスターかと思っていたがしかし。存外と、捻くれた精神をしている。

そう言った輩を好むわけではない。ないが、純真で、何も知らぬ子供の様な相手をする、というのも得意ではない。何も知らぬ輩を利用する……というのは、何も感じぬ訳ではない。人間の様に、そこ迄悪辣にはなれん。

しかし『今からお前を利用する』と宣言されているなら、僅かなしこりも残さず、問題なく利用できるという話だ。

「成程……貴様が私を呼んだのは、相性の良さゆえだった訳か？」

「さあて、どうなのかね。俺は意外といい関係を築けると思ってるからだけど」

「調子に乗るな。まあ……だが、評価を少し修正してやってもいい」

愚かなマスター。

その評価を、多少は付き合い方を分かっているマスター、程度に上方修正してやる位なら。別に問題も無いだろう。

「――で、早速ゴルゴーンさんにマスターとして、一つ話題提供だ」

「なんだ」

「この蛇って、何時外してくれるのかな」

「……まあ、そのうちな」

「その内じゃなくて今すぐ外してください!!!」

第二十八章

いよいよ新キャラ達の性能チェック、はーじまーるよー

前回はホモ君のみで仕留めて居ましたが、今回はいよいよ新入りさん達の実力を試してみたいと……思ってた時のシーンからスタートです。お相手は、途中で遭遇したちよつとした規模の不運な海賊船（モブ）の皆様。ゴルゴーンさんの餌にしても一切心の痛まない優秀な相手です。

という事で、ゴルゴーンさんのゲーム内での性能に関してですが……まあ、普通に強いですよ。香子さんがどっちかと言えば補助に特化しているので、そこから考えれば戦闘が得意なサーヴァントとの差は一目瞭然。

先ず接近戦が出来るのがデカい。

香子さんは基本的に後衛専門なのですが、ゴルゴーンさんは前線でガンガン敵を引き裂ける火力を持っているので、香子さんの援護で崩れた敵を粉碎！ 出来るので、後衛がさらに引き立つようになります。

しかも、その後衛からでも攻撃できる手段をも持つオールラウンダーです。マスターの様に後衛前衛どっちでもまあ仕事がない訳じゃない……とかじゃなく、戦闘面に関し

て言えばどちらも◎というのが強い。

更にガッツ持ちで場持ちも良いと……冬木のキャスニキもどっちもこなせるオールラウンダーでしたが、しかし此方はより攻撃的に特化したアタッカー。明確なアタッカーの加入は、本カルデアではあまりにも大きな要素です。

『ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ ！ ！ ！』

見てくださいこの、宝具で楽しそうにモブ海賊を薙ぎ払うゴルゴーンさんの頼もしい事！ 面白い様に気軽に薙ぎ払っています。

『カリバーン!!』

そして、もう一人。

藤丸君の召喚したセイバー・リリイは、遠距離こそこなせませんが、瞬間火力に関してはゴルゴーンさんをも凌ぐ可能性を持つ星四セイバーの逸材。そして近距離での戦闘を専門としたアタッカー。

HP回復を主にしたスキルを持ち、そしてFGOから固定値ではなく多くのスキルがHPに対する割合回復になったので、相当に強い事になってるんですよ。体力回復。

場持ちの良いアタッカーが二枚で、更にその場持ちをさらに良くする盾役のマッシュ、そしてサポート方面が強い香子さんが組み合わさる事で、此方の作戦は大きく幅を持たせる事が出来るようになりました。ホモ君の事故死の確率もグッと下がったと思います。

同時にホモ君の経験値ゲットの機会も減っては来ますけど……仕方ないんです。あんな不利な赤得ついちゃったらもうオリチャー発動も発動ですよ。フオウ君も思わず呆れかえるようなクソ運にもう許せるぞオイ！（矛盾精神）

という事で、この戦闘は圧倒的にカルデアチームの圧勝でございました。では、カメラを現在の海賊島にお返しします。

はい。此方現地の実況側。カルデア一行の護衛が付いた船は多少の敵達との遭遇を潜り抜けて、いよいよ噂になつてる海賊島に辿り着いた訳ですが……

『ヒヤッハー！ 無防備な旅人だ！ 獲物だ！ 狩りだ！ 楽しそう！』

海賊はやっぱ海賊だな!! 陸でも海でもやること変わんねえ!! そんな悪い子は正義のゴルゴーンさんでおしおきだどー（全体宝具） 余りにも無慈悲な攻撃に我ながら草も生えない。

ゴルゴーンさんのプレスでら○まバリのポーズで飛んでいく愚かな海賊の皆さまの姿が見える見える……

『勘弁してつかあさい。悪気があってやった訳じゃないんです……』

という事で襲い掛かってまいった集団の長を正座させておいたところでございます。ゴルゴーンさん一人で、しかも赤子の手を捻るかのように制圧してしまつて、本当に申し訳ないと申しますか。まあ襲い掛かって来たからお相手つて事で！

という事で、このボコボコにしたお方に、この海に詳しいお人が誰か居るかを教えて頂こうと思います。

『それなら……姐御ですかね』

という事で、此方の追いはぎ野郎の姉御さんが詳しいそうなので其方へ行ってみようかと思えます。

で、そのアネゴってのは何者だ？　ここにおわすアーサー王様よりも立派なお方か？　申してみよ。海賊風情が。

『へっへっへ、聞いて驚け。我らが栄光の大海賊、フランシス・ドレイク様だ！』

申し訳ありませんでした（土下座）

ドレイク船長ですよ皆さん。もうこんなん土下座一択ですよ。何方様って言ってる方、スペイン人の方に取り敢えず謝ってどうぞ。スペイン人の方にとってはドレイク船長の名は張遼にも匹敵する程の恐怖の象徴ですよ。エルドラゴ、すなわち悪魔です。

彼の無敵艦隊、スペインに置いて最強と謡われた船団をぶっ潰した英国の提督にして海賊でございます。栄光の大海賊、というのも間違いではありません。何せ海賊と呼ばれた連中の中でも恐らくですが、女王に取り立てられて一番出世し、世界一周を成し遂げる波乱万丈の人生を送り、そして流星の如く輝いて散っていった人物です。

この固有絵持ち海賊さんが誇るのも無理もない話です。まあそれはそれとしてフォ

ウ君食べようとしてんじやねえこの雑魚海賊。泣いても磨り潰すぞ。つたく……どうやったらこんな可愛い生物を食べようとか思い至るのか。ならず者だからか。

『恐らく大食漢で巨人、片手でタルを掴んで一気飲みする豪傑と想像されます』

この海賊がこんなならず者だからか、マシユにとつてのドレイク船長がまるでどこぞの黒い髭野郎の様な事に……マシユが無垢なのもありますが、もうちよつとカッコいい海賊を想像して欲しかったです。

しかし、実物を見ればそんな印象も変わるでしょう。はい。

『それで、アンタ等何者だい。ウチのアホウ共が世話になったようだけでも？』

見てくださいこのマゼンダの髪色！ 紺碧の瞳！ 顔の傷だってその美しさの一部、抜群のスタイルにモデルも真つ青な美貌となれば『この美しさでならず者名乗るのは無理でしょ』と言わんばかり。マシユもビックリしてます。

という事で、此方の美女が太陽を落とした英国伝説の船乗り。彼のアーサー王と同一視された程の救世主。フランシス・ドレイク船長でございます。みんな拍手。

太陽を落とした女、というのがF a t eでの異名ですが、それすら不可能ではないと思わせるお方でございます。とはいえいろいろ強すぎて周囲から一切女性として見られず。お陰で史実としては男性として伝わっているという悲しい設定もあります。

『私はカルデアという機関に所属するマシユ・キリエライトと言います』

『カルデアあ？ 星見屋がなんの用だい。新しい星図でも売りつけに来たとか？』

因みに強いだけでは無くて、頭も良いです。流石に伝説の軍師様だったり犯罪界のナポレオンだったりそいつをライヘンバツハに叩き込んだ名探偵だったりとかの知力チーター共に比べれば劣りますが、カルデアの起源となった所を知っていて、即座に此方の目的を推察するくらいには。強くて頭も切れる、滅茶苦茶厄介なタイプのお方です。

で、こんな船長だったら普通にこの海の異変位気が付いてるのでは？ というマシユの指摘も間違いではなく、当然の様に分かっちゃいるんですよこの人は。

『——だがね、そのおかしいは異常って意味じゃない。こんな面白おかしい世界は他にないって意味だよ！ そうだな、野郎共！』

『ハイホー！ ヒヤツハー！ 姐さん最高！ 無限に湧き出るラム酒最高!!』

これだよ（呆れ）

……まあ要するにドレイクの姐さんにとって、こんなおかしい世界でも冒険するには楽しい世界。海賊というのは自由と楽しさを優先し、その為なら多少の悪徳だって許容する人たちの事です。なんて事を……（憤怒）でもそんな船長が好き（手のひらドリル）

『どうしてもアタシと話しがしたいなら、力試しと行こうか!!』

では皆さん。そんなドレイク船長と交渉（物理）のお時間ではございますが……今回は、ちよつと編成に縛りが付きます。

『――流石にこつちの全戦力で一人の、しかも現地の人をタコ殴りにするのも……』
という真つ当な藤丸君の提案によつて、こちらも代表一人選出でドレイク船長と戦う事になります。まあそうですね。流石に敵なら兎も角、現地の人に全戦力を注ぎ込むのもちよつとアレですよ。

戦力が召喚によつて増える第三特異点だからか、こう言う本家FGOとは違う部分もちよこちよこ出て来るんですよ。

相手がアーサー王と同一視されたドレイク船長なら、此方はその張本人（リリイ）でお相手するとしましょう。という事で今回は藤丸君に任せます。頑張え〜

第二十八章・裏：少女と刃物の思考実験

「やあああつー！」

「つたく、こんな小娘が……錨でも振り下ろしてんのか、この馬鹿力！」

——サーヴァントという物を、ここまでの特異点で良く知っているマスターとしては、サーヴァントと対等に戦うドレイク船長の屈強さに目を奪われるばかりにごさいます。ハイ本当に。

後、マシユが『マスターももしかすれば……』という視線を向けてくるのが非常に心苦しいのであんまり現地人が遅しすぎても困る人理修復中のマスターです。

という事で、この可笑しな海を人理修復に来た旨を話した結果、『こんな面白おかしい海は無いから楽しんでる』『話をしたけりや力試しからだ』という話になって。カルデア側からはアルトリアが。海賊側からはドレイク船長が代表として決闘を行う事になった。

流石にカルデアのサーヴァント四人がかりで現地人を蹂躪すると言うのは、それは、どうなのだろうか。それは向こうとやつてる事変わらないのじやないだろうか。

『うん、流石に見た目が宜しくない』

『美学もクソも無いなあその力攻め!』

元軍師経験もあるダ・ヴィンチちゃんからのお墨付きも貰って、一騎打ちになったのだが。しかしその判断がちよつと甘かった可能性がある。

「遅しいなあ、船長」

「そりゃあこんな特異点で海賊やってんだから遅しいだろうよ」

「限度が無い? 幾らなんだって」

ドレイク……フランシス・ドレイクと言えば世界最強のスペイン艦隊を破った伝説の提督。にして海賊。大海賊。

大英雄に間違いはないのだが、しかしながらサーヴァントを相手出来る程か。というロマーニの建てたフラグはまあ的中した。

結果として、長剣対拳銃という、漫画での題材になってる率ぶつちぎりのロマン対決が実現したのだけでも。

「ドレイク船長って、超人だったって言う逸話、あつたっけ?」

「えっと……無いと思います。多分ですけれど」

「だよー」

兎も角ドレイク船長が強い。

俺のサーヴァントになってくれた彼女……アルトリア・リリイは確かに騎士として、

剣士として、若い身ながら目の覚めるような剣の冴えを見せていると、素人ながら思う。多分だけど。少なくとも俺が目の前に立ったら間違いない、なますだ。

真正面からの戦いで、彼女を越えようとなると……ちらと見るのは、康友が新たに召喚した、ゴルゴーンさん。神話に語られる程の彼女であれば可能ではあるだろう。

逆にそれくらいの格が必要な程、可憐なる少女騎士、そこに秘められた棘は、鋭いどころの話ではないのだ。

しかし彼女を相手取るドレイク船長は、地上という自分のテリトリーでもない場所での戦いでも、全く引けを取っていない。引けを取って居ないというか、上手に引く事を知っているから負けてないというべきか。

「そおらっ！」

「何処を狙って……いえ、上ツ!!」

リリイが反応したのは目の前ではなく……自分の真上。戦場ではあまりにも致命的なそのよそ見を、ドレイク船長が見逃す訳はない。

「そつちに反応したね、なら終わりだっ！」

リリイは、剣での攻撃、そして接近戦では圧倒的な強さだろうが……ドレイク船長はそれに一切付き合っていない。

地面を転がり、今見た様に木の下に誘導してヤシの実を打ち落として攻撃する等、二

次元的な戦闘ではなく、三次元的に動き、搦め手も併用し、徹底的にマトモに戦わない。故にこそ……

「——甘いです！」

「つはあ！ また避けるかい、今度こそ当てたかと思っただけど」

「そう簡単に当たりません！ さっきまでは大袈裟に避けてましたけど、何となくわかってきました！ 避け方！」

「だからって簡単に避けるんじゃないよ！」

超人的なアルトリア相手に、互角に戦えている。

そう。ドレイクの攻撃は、アルトリア・リリイに通じる程に強く、信じられない程に動きは機敏だけど……しかし、それでも単純な機動力では、リリイの方が上回っているという事実。

地形を全力で利用し、圧倒的に経験を生かして、相手を翻弄し。けれどその幾つもの手札に、リリイは若さゆえの勢いと剣士としての技量で食い下がっている。

結論としては、『リリイもヤバイ。ドレイク船長もなんでかヤバイ。マシユはコレを参考に人間を計らないで欲しい』というマスターの哀しい結論が出ている訳なのです。俺はあそこ迄遅しくなれません。

「……剣もって甲冑着て暴れるのかい藤丸君」

「冗談は止してくれ。絶対に足手まといにしなければならないの目に見えてるじゃないか」
「あつそ。似合うと思うけどなあ……あの子よりは」

——そんな事を考えながら、ふと隣で二人の争いを共に見ているマスター友達を見つめた。彼は結構ハツキリ物を言うタイプだが、実際にリリイに対し、苦手と言っていたのは記憶に新しい。

『嫌いつて訳じゃないんだ、ゴメンね』

禿げた頭を掻きながら、申し訳なきそうに言ったアイツは、リリイはとても良い子だろうし、と何度も何度も念押しをしていたのが記憶に残っていた。じゃあなんで苦手なのかというのは……結果、聞いて無かった気がする。上手い事誤魔化されていた。

まあ人によって好みなんてそれぞれだから詳しく聞く必要もないんだけども、こうしてリリイが目の前で活躍しているのだから、折角の機会な気がする。

「……普通に似合っているとと思うけど。リリイには」

「似合ってる似合ってる問題じゃないんだよな」

「何がそんなに気に入らないんだよ」

——その言葉に、リリイに向けられていた禿げた頭が、少しだけ此方を向いた。

「……」

「なんだよ」

「んじゃあ、一つ思考実験というか……そんな感じの事をやってみようじゃないか。マスターとして、交流の一環的な感じだ」

「それは、リリイに関係ある事、って事で良いんだよな」

「今の流れで関係ないこと話されても困惑しないか、普通」

それは全くそうなのだが……と、思っている俺を他所に、康友の言葉は続く。

シチュエーションは、自分の家。自分は居間や自室で寛いでいて、そこに少女が入ってくるのだという。前提条件として、目の前に居る少女が自分にとって非常に親しい関係である事。

まるで慣れているかのように、そこまで淀みなく康友はスラスラと言葉を並べた。

「こういうのって好きなの？」

「いや。別に。こんな話題出したのだから初めてだし」

「そうなんだ」

「そりゃあそうだろう。こんな遊び日々楽しくやってるのはインテリだけだ」

「それは流石に偏見じゃないかって思うんだけども」

「そっか。んじゃあこれ以上の偏見が出る前に……一つ、この前提条件を元に質問をしようじゃないか——その子が、包丁を持って部屋に入ってきたら、どう思う？」

そう言われた時、ふと目の前に浮かぶ、マイルームの景色。

考えてみる。親しい子が、急に刃物を持って部屋に入ってくる。自分の場合は、最近親しくなってきた……マシユとかが、入って来たと考えてみる。そりゃあ、そりゃあ。

「驚く、かな。理由を聞くかもしれない」

「んー、何とも普通な回答だ」

「なんだよ。普通で悪いか」

「いいや、普通の回答で安心したよ。そこで『取り敢えず抱き締める』とか言われてても困っちゃったしな」

「どんな情熱的な人だと思われてるんだ」

「答えはしたが、これが何の意味を持っているのか。」

「で、その質問に対する俺の回答は……『ちよつと身構える』」

「身構える?」

「その子が親しいからこそ、俺の事を良く知っているからこそ……そして、暴力とは離れた印象を抱く相手だからこそ」

「問いかけようとして見た、隣の男のその眼は……目の前の激闘を見ている様で、そうでない様にも見えた。もつと、もつと別の所を見ている気がした。あくまで、確信は一切ないのだけでも。」

「その刃物には、重要な意味が込められているかもしれない。例えば、その刃物が俺に対

する感情の回答になるだとか」

「……それは考え過ぎじゃ」

「ま、言われても仕方ないけども。俺はそんな風に怯えがちなもんで。ちよつと刃物を持った女の子は個人的に、苦手なのよ」

——それが。

唯の印象の話でそう言っているのか。それとも……

それを問いかけようか少し迷っている間にも、目の前の激闘は、佳境を迎えようとしていた。

第二十九章

酒が進む実況、はーじまーるよー。

前回は……ドレイク船長と一騎打ちをする事になりました。此方からはアルトリア・リリイさんを選出する事となりました。

そしてその後、その一対一の結果は……無事にセイバー・アルトリアさんで撃破しまして。此方に協力して頂く事に同意してもらいました。いやー、クリティカルタイプの手サーヴァントでなかったのが非常に幸いと申しますか。体力回復でジリジリとアドを取つての勝利と相成りました。

よし、これで勝利したのでいよいよこの特異点での案内人をゲットしました。この嵐の海の如くな特異点も、案内人さえいればモーマンタイ！ 実際この人が居れば海では殆ど負けは無いと思われる位には凄い人には間違いないので。

『それじゃあ野郎共、新しく仲間になったカルデアの連中に……アレ、違うか。新たに仲間になったアタシ達に、乾杯だ！』

『カンパーイ!!』

まあだからと言って即座に特異点攻略が始まるならドレイク船長は海賊やってない

んですよ。という事で、先ずは海賊らしく宴がスタートでございます。スゲー緊張感な
んざ欠片もねえ！　そして藤丸君は既に適応している！　流石コミュニケーション能
力なら全マスターでもトップクラス！

今、こんな事やつてる暇なんざ無いというマシユちゃんの発言も間違っちゃないんで
すけれども。この宴も実況的に必要な事は間違いないんですよ。真面目に。

何の必要があるって？　まあしばし後に取り敢えず宴内での探索を行うので、先ずは
そこから。見ていてくださいよ。この宴内での特別な会話なんかもありますので。そ
れも楽しみつつ、ね。

ああそう言えば、皆様。この酒宴を開いてくれやがったドレイク船長について余りお
伝えはしてませんでしたっけね。

という事で、この特異点においての船長についてお話していこうかと思えます。

そもそもこの話ですよ。皆さん。

唯の現地人であるはずのドレイク船長が、普通にアルトリア・リイと戦ってたの、気
になりませんでした？

ゲーム的な意味でツツコミは入れませんでしたけど……そもそもどうしてこの人サー
ヴァントとやり合えてんの？　ネロちやまみたいに神秘が凄かった時代の人でもない
のに。って思ってる方もいらっしやるでしょう。

『おお、なかなかいい飲みっぷりだねえ』

『あの……先輩……聖杯が……』

此方がその原因、此方黄金に輝く聖杯でございます。

……聖杯だ！ 捕まえろ!!! 逃がすな！ 特異点の原因！ 後、その聖杯で体に出たり入ったりつていう表現しないでくださいエツチすぎま（ry

失礼しました。

えー皆様呆然としていらっしやる事でしょう。どうして聖杯がドレイク船長の手に握られているのか。特異点の原因は聖杯。その聖杯を彼女が握っているという事はつまり彼女がこの特異点を形成している……？

いやそんな事は無いですよ。だったらなんで特異点修正する我々の軍門に下り、こうして藤丸君を酔い潰しに掛かっているかという話。せめて毒くらい盛れ。

では敵じゃないドレイク船長がなんでこんな凄まじいお宝を持っていて、それが体に勝手に出入りし、その盃で藤丸君に酒注いでるのかって言う話ですが……実はこの特異点は、一度世界の危機に瀕しているのです。

現状そうだろうか？ いえ、これとは別に。

『いつまでも明けない七つの夜、海という海に現れた破滅の大渦！』

『そしてメイルシュトロムの中から現れた、幻の沈没都市、アトランティス！』

『時は来た。オリュンポス十二神の名の元に、今一度大洪水を起こし、文明を一掃する也……!』

えー、以上。海賊君達の証言を原文ママでご紹介いたしました。しつかりとご報告をしないと現状をご理解いただけないと思いますので。

で、そのデカブツはポセイドンと名乗っていたらしく。はい、皆さんが知っているあの海の神様ですよ。そんなポセイドンを相手取って持っていた聖杯を奪い取って、都市諸共海の底に沈めてやったそうです。

……カルデア必要? (困惑)

い、いや一応こうやって特異点解決はまだしてない訳だから、我々もまだ仕事をする余地があると思います。多分ですけど。

しかし実際にそう思ってしまったほどのとんでもない大偉業なんですよ。神を打ち落とす日とは正にアタシの事と言わんばかり。

型月において、神秘と、非神秘との差と言うのは、ファンの皆様におかれましては私以上にご存知かと思われます。大人と子供、と言うより大人と赤子程度には格差が存在するのです。はい。

いわんや神秘の極限の一つ、神霊ともなればアリが恐竜に挑むが如し。

彼我の差は絶望的通り越して、最早ギャグマンガでしか書かれないような圧倒的な格

差となつて現れてきます。

『あのデカブツ、海神を名乗りやがつて。船乗りとして許せないじゃないか——だから邪魔してやった。お宝もこうして奪つてやった。最後には都市ごと渦に沈めてやった。最つっ高!!』

その偉業はこんな風に『飲み屋でムカついた野郎が居たから足引つ搔けて、序にボコボコにしてやった』と海賊の酔つた武勇伝的に語つていい物じゃないんです。時代が時代なら『神殺し』として更なる大英雄として目されていたかもしれない怪物。

と言う事で、とんでもない格上殺しとこの海を救つた結果として、この時代の『正しい聖杯』に選ばれた人物と成り上がったドレイク船長ですが。

『ハハハハハッ！ なんとも滑稽ではないか！ あの海神が敗れるとはな！』
うーんこのゴルゴーンさんの嬉しそうな顔。

いえ、一応関係が無いわけでもないんですよゴルゴーンさんは。ポセイドンと。寧ろ後の問題の諸々の原因を生んだのつて海神の関係者ですし。殆どアイツが原因みたいなものですし。

と言う事で、ゴルゴーンさんのこの宴時限定会話……というか、ポセイドンを撃破、又は一杯喰わせてやった人が居る時の限定会話です。

この時ばかりは普段の不機嫌そうな顔なんざどこへやら、ニッコニコになつて会話し

てくださいます。可愛いけど、諸々の歴史を考えると全く喜べないという事実。今位はクソツたれの頭海神野郎の痴態を着にお酒飲んでください……樽で……

まあこんな風に、関連するキャラが居ると特別な会話が利けるのもF G O R P Gの醍醐味ですよ。元のF G Oが元からキャラとキャラの関係とか、それに関するボイスなんかを楽しむゲームではあったので。

因みにカイニスが居るとこれと同レベルのニッコニコ笑顔が見れますが、まあ取り敢えず今はおいておくとしましょう。

私が優先すべきは、海賊君との……あ、出ましたね。ドレイク船長の船のネームドモブであるボンベとの会話って事は、確定でしょうか。

『最近の海は、ホント不思議なもんでな……噂には、昔の剣士の魂を乗せて運ぶ幽霊船が存在するんだってよ。顔も、存在すらもはぎとられた哀れな剣士の群れ……怖ッ』

這い出ました此方の会話。シャドウサーヴァント君達のフラグが此処で立ちました。こういうのんびりと会話できるタイミングにやっておくのは間違いではありませんから。ね。

この特異点の特性上、そんな彼らと出会うのは中々の困難ではあるのです。故にフラグを早めに立てておかねば、戦う事も出来やしません。この章でも当然、戦わずして実績解除は不可能でございます。

と言う事で、この章では、確立次第で出会う、彼らの幽霊船を鎮めねば実績解除が来ないという運ゲーをやらされるわけでございますが……そんな海賊船の噂を聞いた所で今回はここまで。

次回は、ドレイク船長の仕切りで海に行くことになるかと思われます。ご視聴、ありがとうございました。

第二十九章・裏：酒宴で日が暮れて

「全く、神様モドキを叩き潰したと思つたら、今度は蛇の大化け物とは！ ホント、この海は退屈しないねえ!!」

「いや、退屈しないのはこっちなんだけど……香子さん、どう?」・

「ダメですマスター。ゴルゴーン様、完全に出来上がってしまっています」

「おい！ 次だ！ ドンドン酒持ってこい!! ハハハハッ！ 今日は宴だ!」

——ドレイク船長の話を聞いてからというもの、こうなってしまうて。

船の上で明らかに不機嫌でしたのが一転。その大口を開いて物凄い勢いで酒を飲みほしていらつしやいます、その姿に……召喚の際、ご自分を復讐者と己を名乗ったゴルゴーン様の姿はありません。ただの酔っぱらいがそこに居ました。

ドレイク様が打ち倒したポセイドン、というギリシャの神様には、ゴルゴーン様は因縁がお有りになる模様で。

「凄いですねゴルゴーンさん。むすつとしてたのが、ニコニコしてます、マスター」

「……昔の因縁って、凄いなだね。カルデアのマスターとして、ちゃんとその辺りも考えないとなあ。リリイはそう言う人いる? ぶん殴りたい人」

「えっと、多分いないと思います、はい」

「先輩。ゴルゴーンさんは相当に合縁奇縁あつての事なので、リレイさんには居ないと思えますけれど」

ゴルゴーン様の合縁奇縁というより、ドレイク様との奇跡のようなめぐり合わせと申しますか。

ドレイク様は、嘗てこの特異点にて、オリユンポス十二神の名の元に現れたポセイDONをなんと……生身にて打ち破り、本当の意味で聖杯に選ばれたのだそう。私達としては正しい聖杯をもっているというのが驚きでしかありません。

とはいえ、ゴルゴーン様にとつては、そんな聖杯についてはどうでも良く、ドレイク様が殴り倒した海神ポセイDONこそが重要であつた模様で。

ポセイDON撃退を見事に成し遂げた事は、彼女が持つていた聖杯こそが証となつて。そこからはもう……あの調子です。

「そうだなあ。マスターとしての責任も色々考えないといけないよなあ」

「所でマスターとしてあの勢いで酒飲んでるのは良いのか？ 止めなくて？」

「うーん……楽しそうだから良いんじゃないかな」

「そんなもんかなあ」

しかし、余りにもこの、ゴルゴーン様の勢いが乗り過ぎていらつしやるのは、如何な

ものかと思つてしまふのですが。もう樽からお酒を呑んでらっしゃいます。

サーヴァントは酔いもするとは言いますが、しかし。もうあれは泥酔とかその域では。楽しいからとかそれで済ませて良い域ではないと思います。

サーヴァントに酒精がどれだけ利くか。それに関しては分かりませんが、もし二日酔いになってしまうと恐らく誰にとつても悲しい結果にしかならないと思うので、お二方はそろそろゴルゴン様を止めて頂ければと。

あ、樽がもう一本空になりました。もうさつきから樽からお酒では止まらず、樽から一気飲みされていらっしゃいます。

「あの、マスター、宜しいのですが？」

「いや実際楽しそうだし……止めるのも野暮つて奴じゃん？」

「ですけど」

「まあ二日酔いとか心配だけど、でもゴルゴンさんがあはしたいんだから、さ」

楽しそうじゃない。と言うマスターは私程焦つていない様に見えます。マスターも若いのですから、お酒の後に残る、あのしこりの恐ろしさを知らないのでしょうか……私も少しばかり、酒の席で口が滑つてしまった事もあつて、その結果悲しい事になつてしまったと申しますか。

「……そんな心配そんな顔しなくても、なんも考えてない訳じゃないよ」

「でしたら」

「考えた結果が、『放っておく』ってだけだからさ」

——マスターは、ゴルゴーンさんとの距離を、考えていると言われました。

これからの特異点を超えるにあたり、本当にサーヴァントとの仲を丁寧に考える。そして、その為に考えた、その結果。只無為に話しかけたり、諫めたりなんてするのは違うのではないかと。

好きにさせる。暴走させるといふ訳では無くて。今、サーヴァントがやりたいようにさせるというの、マスターとしての仕事ではないかと。

「ゴルゴーンさんが飲みたいて言うなら、今くらい良いじゃない、って思っただけなんだよ。周りに敵がいるって訳でもないんだから。多少恥かいてもそれもいいでしょ」

「いいのでしょうか」

「そう言う後の事をサポートしてこそ、仲良くなれるって所もあると思うよ」

その後の面倒は、良く知っているけれど、と何処か遠い目をしたマスターは……ぼつぼつと口を開きました。

「小つちやい頃なんかは、家で開かれた宴会とかの後始末とかしてたもんだから。まあ親戚のおじさま方と直ぐに仲良くなったよね」

「えっと、それは、どうしてでしょう」

「自称酒豪の方々が何で勝負するか分かるでしょ。で、その結果として……お二人が相打ちになるかどっちかが勝つか。どっちにしても残る物はあるんだよ」

その結果として。地獄の様な量の、その……ご家族の方の遺物を処理する結果と相成ったそうで。最早その数は二桁に届く程の回数だったと言います。そう言った時など最早無我の境地に到達する事もあったと。

しかし、その結果として、一緒に片付ける羽目になった多くの親戚のおじさま方は、本当に仲良くなれて。それは自分にとつての大きな宝になった、と。臭かったし、ぬるっとしてたけど、と。焦点の合わない眼で言われました。

「……それならその後の惨状もご存知なのは」

「止めようとした結果宴が更なる惨事を生む事も知ってるんだよ。だから酔っ払いは放っておいて、後を綺麗に片づける。そうすれば余計なしこりも生まれない」

それを幾つの時に覚えたかなあ、と。

「式部さんはどうだったの。そう言う辺り」

「ど、どういう辺りでしようか」

「酒宴とか。平安お貴族様のそう言う宴とか、やっぱり経験して来たんじゃない」

「それは、まあ」

「安倍晴明の酒の失敗談とか無かったの？」

では翻って見て。私はどうなのかと問われれば。

確かに酒宴に呼ばれる事はありましたが、それがどのように終わったか、全てを覚えていられるかと言えはいえ全くそんな事は無く。印象に残った出来事こそ多かったのですが、しかしそのどれも話のタネに出来るかと言えば余りにも醜聞と申しますか。

「多分、お話しできるような事は……特に清明様についてはなにも」

「そっかあ」

「あの方に關しては、そもそも私も知らない事も多かったので」

清明様は……そもそもそこまでお酒を嗜まれていたかどうか。私は確かで弟子ではあつたのですが、決して、あのお方の私生活に近い弟子では無かつたので。

……というか、私に關しては面白がられていた節があつた事も何となく分かつていました。弟子つて言うより、なんででしょう。当世風に申しますと……『おもしれー女』的な、扱ひを受けていたと言いますか。文字通りに。

そんな清明様のお酒……について考えてみると。

少なくとも、お友達と、花見酒を行われていた事だけは覚えていきます。確か……博雅様等とは、諸々喋つていらした所をちらと見たくらいですが。

「ふーん。やっぱ安倍清明ともなれば、酒の嗜み方も問題無しか」

「私の知る限りですが。少なくとも、都に蔓延る魘魅邪魅についてスラスラと話してい

らしたので、酒でおぼつかなくなっている、と言う事は無かったのかな、と」
「さっすがー。酒に酔っても呪には参らず」

「私には分からなかったのですが、人の評判を勝手に弄る事で、その方を死後に呪う方法なども話されていて……」

「何それ怖っ」

——こんな事を話していると。マスターがサーヴァントとの距離を真剣に考えているという先程の言葉も、嘘ではないというのが、分かります。

楽しそうに、私の取りとめもない話を聞いているマスターの顔を見ています。

第三十章

明日に向けて船が進む実況、はーじまーるよー。

さて、ドレイク船長に案内人となつて頂きまして。聖杯探すのどついでにお宝も探そうかという大分温い雰囲気ですが……初めて海を見渡してちよつとハイテンションになつてるマシユを見てればこんな温くても良いなと思つてしまふ訳ですよ。

まあそのマシユを眺めている間に幽霊船（幽霊船ではない）に遭遇してシバキ倒している訳なんですけれども。中身はこの特異点に焼き付いた海賊と言う概念（原文）なので外れでございます。いやー……黒い影が乗っている件の幽霊船とは何時遭遇できるのか。

この特異点でシャドウサーヴァント君と戦うのは、結構難しくもあるんですよ。特異点の形の都合上。そもそも人があんまり居ないんですよ。この野郎どうしてこんな悪意満点の特異点をおつくり遊ばせたのか黒幕。善意満点の特異点作られても困りません。

『東北方向に島です！』

で、シャドウサーヴァントガチャ一回目に失敗しつつ、取り敢えずうろついていた所

でいよいよ新たな島を発見でございます。で、島にはサーヴァント反応。船長と共に島に上陸致します。

とはいえ、まあ此方はサーヴァントが五騎程いらつしやりますので……等と余裕を持つてると事故で普通に死ぬかもしれないので、油断はしないで参りましょうよ。ね。

『おーい、お前ら、こつち来てみな！』

でその上陸した島で早速の新情報。砂浜からでも視認できるレベルのデカさの石板を大発見!! 冷静に考えて、砂浜から森の背景に移り変わる位の距離があつて、それでも見つかるレベルの石板つてデカすぎんだろ……

『これは——ルーン文字の様ですね。ドクター、解読可能ですか?』

そして意味深なルーン文字。ドクターに解読依頼してんにダ・ヴィンチちゃんのスラスラ読んでしまうドクター涙目な展開もありまして。まあそれはどうでもいい、いやその言い方は酷いですけど、重要ではないんです。

問題はそこに書かれていた碑文なんですよ。はい。刻まれたルーンは新しいもので、一週間以内に記されたその内容は。

『一度は眠りし血斧王、再びここに蘇る』

いや演出がホラーのそれ。洋画のホラーの殺人鬼が蘇るそれ。場面が明るくて周りが屈強なサーヴァントだらけだから全然気にならないけど、夜中で、キャラクター一人

で、雷雨だったらもうB級ホラー映画の続編の導入ですよこれは。

さて、血斧王というその名前。

実は真面目に洋画のB級ホラーのキラーとして出て来そうなお方の異名だったりするんですよ。ノルウェーを嘗て支配したヴァイキングの王様。

そのヴァイキングの王様ですよ。そりゃあこの島にいるサーヴァントと関係ない訳もないでしょうし、きつと海賊を大量に引き連れて……

『——さっきの幽霊海賊の敵性反応！ 加えてシャドウサーヴァント反応も！ 群れで突っ込んで来るよ！』

あ、それだけじゃない。成程……

船のシャドウサーヴァント君以外、その直前とかにも来る、と。でも、このシャドウサーヴァント君は些かと扱いが特殊というか。実績達成の為には、あくまで独立した愚連隊を一度は叩かないといけないんですよね。

で、彼らは独立した愚連隊というより、率いられた兵士なので、扱的には実績解除には関係ないのです。じゃあ出すな、って話ですけど、フラグも立ったし……取り合えずのお通し感覚で出してるんだと思います。

という事で、ゴルゴーンさんとセイバー・リリーの本格運用がてら、彼らを芝刈りのに処理して行くとしましょうか。

『皆殺しだ。それ以外に何がある』

コワイ！ 流石に式部さんとかの良い子ちゃんとは違うダーティなキャラ。こういうのが居てこそそのカルデアですよねえやっぱり。正に百鬼夜行。この特異点に至りさらにレベルアップしたシャドウサーヴァント君達相手に、見せ付けてやりましょうって言っている間に全滅したんですが。何という弱き者……

まあサーヴァント四人、しかもデバツファーにタンク、アタッカー二人の完璧な布陣なのでそれは仕方ないですけども、あの、ホモ君の経験値になって下さる方、いらっしやいませんかねえ。いない？ そう……（適当）

まあ経験値的には寂しいけども仕方ないですね。

取り合えず何の問題も無い程にあっさり叩き潰せたことを喜びましょう。強くなるのも必要ですが、やはり生き残る事も最優先レベルで必要でございますれば。

で、これだけ暴れてもサーヴァントは動いていないとか言うガバ索敵。

それならば、とサーヴァント反応に向けて進みつつ。ドレイク船長の財宝論だとか、商人論とか、無欲に関する感想だとか、色々頭の良いんだか悪いんだか分からないお話を聞いていたんですけれども……流石にそろそろそのガバ索敵も、此方をキャッチしたのでしょうか。

来ますよ、血斧を構えた、恐ろしいバイキングが。

『ワガツ！ ワガナ！ エイリーク！ イダイナル エイリーク！』

『ガゴ！ コロス！ ジャマヲスルナラコロス！ ブチコロス！ ギギギギイイー
！』

うーんこのバーサーク感。

血斧王エイリーク・ブラッドアクス。残虐性で名声を高めたヴァイキング。グンヒルドという恐ろしい奥様も、その悪名を高めるのに一役買っているのですが……奥様については正直夫人よりもヤバいお方なんじゃないのって言う説が。

それはまあ置いておくとして。言葉がすっかりとしているというのに話を通じないタイプの中でも明らかに危ないと分かるっていう。これはB級ホラーの（ryそれはもうええ！ 問題はこのエイリークの強さじゃ！

戦闘続行を持つバーサーカーって言うだけでそれなりに厄介で、しかも全体攻撃の宝具持ち。デバフを掛けても普通に弱体化を解除でき、しかもHPアップとか言う実質HP回復なスキルを持っているという、式部さんとは微妙に相性が宜しくありませんねえ。

とはいえサーヴァント一騎。此方はサーヴァント四人とそれ並みの現地人案内人が一人でございます。敵なのでタコ殴りにする事に一切の躊躇いなく……

『気を付けて！ シヤドウサーヴァント反応だ!!』

まあそう簡単にタコ殴りにさせて下されば世話ないですよね。

そりやあ向こうも兵隊も居ますよ。今度はコピー海賊一切なく、シャドウサーヴァント君達オンリーの兵隊です。数を揃えているので、流星にあの兵隊を請け負う必要が出てきましたと。

藤丸君か、ホモ君か。何方がエイリークを叩き潰すか、つて言う話なんですけれども……当然ながら、ホモ君はシャドウサーヴァント君達を相手しましょう。実績の解除の為に必要と言う訳ではありませんが、しかし、アレはホモ君因縁の相手でございますれば。

さあ、じゃあお相手しましょうか……と言う事で、はい皆さんここで！ 注目！ バトルグラフィック！ 黒いシャドウサーヴァント君達が並んでいます……

黒いシャドウサーヴァントの顔面……なんか張り付いてませんか？ よく見てください。

お札、しかもなんか人形っぽい、目の描かれたお札が一枚。目の周りは赤い線で隈取っぽいのが書かれているのが。ペトって。なんか、雑に。うーんこのお札の柄見覚えがあるような、無い様な。

……笑うな、皆、未だ笑うんじゃない。こんな急に自己主張して来るとかどうしたん君さ。メツチャ『ンンン』とか聞こえてきそうな感じがします。

因みに、ここから先のシャドウサーヴァント君達には、このお札が張り付いて出てきます。なんか急に存在感表してくるタイプの、シャドウサーヴァントの後ろについている人についてはまだ言及は避けておきましょうか。

さて、ホモ君の戦力増強が終わった後、初めてのシャドウサーヴァント戦です。始めましょうか。

第三十章・裏：利用し、利用され

——黒い影が四方八方から迫りくる。

刃物を携えた黒い影。一騎のサーヴァントに率いられた出来損ないの影法師。

その大将にして最も厄介な相手。サーヴァント、エイリークはもう一人のマスターが対処しているが、しかしながらそう言う厄介さなどとは別に、面倒なのは間違いなく此方ではないか。そう思える程に……これは。

鬱陶しい。凄まじく鬱陶しい。

「——ええい、貴様ら一々、ハエの様に……纏めてかかってこい！」

「したらゴルゴーンさんに纏めてハチの巣にされるのが分かってるんでしょ」

「かと思いますが……さ、最初に一撃与えた時から露骨に……」

「……」

原因が何か。

……本当に、業腹ではあるが。恐らくは、私、なのだと思う。

イヤ命令を下したのはマスターで。それに従っただけだから。と言うのは、簡単だ。

だがマスターは確か『取り敢えず牽制くらいでやっちゃって！』とか言っていた気が

する。それが生ぬるい指令だと思って、一気に焼き払いに行つたのは、私だ。

その結果、露骨に私を警戒されて、森の奥から黒子が出て来なくなつた。私と、キャスターとマスターが、あのシャドウサーヴァントを相手にする、という段取りだったのだからかし……

「どうなっている！ 森を焼き払つたら余計に見つけにくくなるとは！ 隠れる場所が無くなっているんだぞ！」

「ゴルゴーンさんってゲリラ戦の概念ご存知!？」

「知らん！」

「でしような！ こういう状況を言うんだよ！」

木が倒れ、隠れる場所も無くなり、木の重さで潰せて一石二鳥……かと思えばその倒れた木の影からも出て来る。なんだ貴様等は。虫か何かか。黒い色が余計に鬱陶しく感じるのだが。せめて色を変えろ。

ええい、いつそ、島もう丸ごと消し飛ばしてやりたい程だ。だが、マスターという楔を消す訳にも行かないのがもどかしい。これがサーヴァントという物の面倒な点だ。

「へい！ マイ担当のダ・ヴィンチちゃん、状況どうだい!？」

『いやはや全然。向こうの妨害か何なのか、詳しい位置も分かんない』

「そうかい！」

『一応は、この妨害をやつてる輩は、この近くに居ない事だけは分かるんだけどね』
「つまりこれはどうしようもないと！ 最悪のお知らせありがとう！」

……どうやらカルデアの連中の援護も当てにならない、ともなれば。もうずっとこの調子は続くという事だ。成程。これは頭が沸騰しそうだ。怒りと、その他諸々で。

「ゴルゴーンさん、悪いけどもうちよつとモグラたたき頼むわ」

「そろそろ苛立ちで全てをフツ飛ばしてやりたくなるんだがな……！」

「藤丸たちがあのサーヴァントを撃退するまでの我慢だから！」

何が特別に苛立つかと言えば。なにもせず見ているというのであればまだ良い。まだ良いのだがしかし。常に気を張って、周辺から顔を出せばそこを打つ。鼬ごっこを繰り返している。こういうのは、特別苛立つ。

というかあの黒子共、ムカつく事に顔に何か貼っている。お洒落の積りなのか知らんがその貼られているモノのガラも、妙に不気味なのが苛立つ。

「——上等だ、その札諸共に……その顔を焼いてくれる!!」

「うわあ、お怒りだあ……」

「……」

「ん？」

正直目玉だけのあのデザインも、好みではない。私自身、目で有象無象を石にするの

を得手としているが、しかしながら、いや故にこそと言えばいいのか。ああいう柄は全くもって好まない。嫌味か。

欠片も残さず灰にして、それで漸く胸もすくという物。やってやろう。私に対しそのような物を見せた貴様らが悪い。許さん。

「あの札……」

「ん？ どしたの式部さん」

「い、いえ。何処かで、見覚えがある様な気が、すると申しますか」

「——それホント？ えっ、アレを誰が操ってるか分かるの？」

「あ、その、そう言う訳では」

——なんだと？

「誰だ」

「へっ」

「誰だ。この私の神経をここまで逆撫でする愚か者、というのは。言え。早く」

「ぴえっ……そ、そのような、確信を、もって、言える、様な、事では無くて……あの本当に……そんな気がするな、くらいのもので……」

「何でもいい。言え。さっさと言え」

ええいハッキリとしない。神経が苛立つ……。

「言うだけいえ。貴様の思っている事が合っているかどうかなどどうでもいい。それが合っているかどうかを判断するの貴様の仕事ではあるまい！」

「い、いえそうなのですけど……」

「——いや、ゴルゴーンさんの言うとおりで」

そのまま苛立ちのまま掴みかかろうとしたところで、マスターが間に割って入る。睨みつけようとした所で、視線で促される……言われる迄も無く分かっている。だが、しかしながら。

キャスターの話を書くのは、苛立つ輩を焼き尽くしてから、時間が出来てからでも構わん。私とした事が。感情のままに暴れるなど。下らん真似を。

『紫式部。これは天才の個人的な忠告ではあるけれど、どんな可能性でも言わないよりはマシだと思うよん』

「……」

「ウチには良いブレインが付いてるんだから、分からない事が在ったら投げる。それくらいで、取り敢えず幾らでも使い倒してやろうじゃないか。な？」

『うーん何と堂々とした酷使宣言。まあ君達のバックアップの為に居るんだから良いんだけどね。別にさ』

そうだ。この程度の事で心動かされず、あんな下らん輩共は、我が手で軽く焼き払う。

苛立つなど、それこそ向こうの思惑に乗るようなものではないか。この私が。たかが人間風情の率いる群れに。

人間共が私を恐怖し、怯え、竦む。感情に振り回され、逃げ惑う。それこそが正しい姿なのだから。乱されるのは私ではない。貴様等だ。感情が高ぶってくる。黒い力カシ共に向けて、砲口を向け……

「——苦しむがいい」

解き放つ。束ねられた魔力が無数の一閃となつて、襲い掛かる。

勘違いをしていた。一匹一匹を叩くのではなく。力づくで広く広く薙ぎ払う。狙うなどとまどろっこしいマネをせずとも、私の全てを注ぎ込んで破壊してやれば、自ずとその中に亡骸も転がっているだろう。

無駄に全てを破壊するまでもない。あくまで周りに結界でも築くかのように。狙った範囲を確実に制圧する。

その程度の事が私に出来ぬ訳が無いだろう。

「——どう、いけそう？」

「はっ、誰に物を言っている。また一人……焼き切れたわ」

「はえー。うっわ、なんだこの攻撃。レーザーネットつて奴？ 逃げ場ねー」

そうだ。網の様に、我が魔力を立体的に組む。檻のように、だ。そこから逃げようと

する輩を、更にもう一本の格子でも追加して、焼き尽くしてやればいい。

「いやー上手いな。藤丸達の所まで行かない様にやってる」

「ふん、サーヴァントとしての最低限の仕事をしてやっているだけだ」

「オーライ……じゃあまあ、チョイとしたサポートでも」

——ふと、感覚が冴え渡る。黒い奴らの動きが、今まで以上にしつかりと感じ取れた気がした。恐らくは、今なら奴らの動きを先読みして、焼き払う事も難しくは無いだらう。

とはいえ、私がやった訳ではない。可能性があるとして……ちらと隣を見れば、ニマ笑うマスターの姿が、目に入った。

「……何のつもりだ？」

「マスターとしての仕事って奴。さ、ダ・ヴィンチちゃんの解析結果が出る前に終わらせる為にも、存分にどうぞ！」

やれるだろ？ とでも言いたげな顔だった。

「良いだろう。精々利用してやるとするさ」

そんな生意気な顔をされて、流石に苛立つかと思った。だが。寧ろ僅かに愉快的な心持になった気がした。ほんの一瞬だが。

恐らくはそんな事は無い。ただの気のせいだとは個人的に思う。だが……それが気

のせいだとしても。

悪くはない。これが、マスターを利用し、マスターが利用する。私の想定した関係だとするのであれば。多少のやる気を出してやるのも……良いだろう。

「やるぞ、マスター」

「オーライ。初めての共同作業と行こうか」

第三十一章

シャドウサーヴァントの黒幕って……な実況、はーじまーるよー。

前回襲ってきたシャドウサーヴァント君達の顔に貼つてある札で、誰がこんな感じにちよつかい出してきてるのか。凡そ分かつてきたと思いますが……未だ黒幕とは限つてないのでお付き合いいただければ。

で、前回の最後、エイリークを無事に撃退し、シャドウサーヴァント君の顔のお札にドウマーンwwww!!した所からの、続きです。そんな自己主張の塊みたいなお札つけないで隠密出来ると思つてんちやうぞこの平安野郎。

とはいえ、ぶつ潰したエイリーク様の船から、新しい地図も獲得出来ましたし、成果はあつたと思われれます。お宝の匂いがしていたというドレイク船長の勘は間違つて居なかつたという話。

ちよつと待つて!? だとしたらマシユちゃんを連れて行かれちゃうやん!!! 止めてください! まあそんな茶番はおいておくとして。

で、ドレイク船長の船での導きもあり、その地図に記された島にはすんなり向かえそうなのですけれども、まあ一切の妨害も無く島にすんなり入れるかと言えばそうでもな

いようでして……

『北西に船一隻でさあ!』

『ようし、旗は?』

『見覚えのねえ海賊旗です!』

『要するに敵か!』

海が舞台の第三特異点。海賊だつてゴロゴロいます。まあ幽霊船とかじやないちゃんとした海賊船の模様ですが。先ずは彼らをシバキ倒してから、改めて島へ向かうとしましょうか。といつてもゴルゴンさんが居ればこの程度の相手には負けませんけど。まず。

で、その海賊の旗は一応ロマニに調べて貰う模様です。どんな情報でも収集するのは悪い事ではございませぬ。

そんな海賊共も蹴散らして、カルデアはエイリーク王が所持していた地図に記された島へ無事到着と相成りました。因みに想像していたよりも結構デカイです。

島……つて言うよりは陸つて表現してもギリギリ許される位にはしつかりとしたサイズしてます。

ロマニ曰く、此方にはカルデアにとって重要な、サークル設置の為の霊脈もあるとの事。ヨシ、これで活動も安定するな!

取り敢えず霊脈にサークルを設置する前に、この周りに散らばる骸骨兵ならぬ竜牙兵を叩き潰しておきましょうか。コイツは竜の牙から生成される特殊な使い魔的なアレなのですけれど……コイツは、優秀なキャスターとかが兵隊として使う事も多いんですよ。まあそれが何だつて言われると何も無いので軽く制圧しつつ、指定されたポイントへ。

取り敢えず、無事にサークルを設置出来ましたが……

『あ、そうそう。先ほどの海賊旗の結果が出ただけど——あの旗は伝説の大■賊「■」の■。つまり、あの海賊達は■■■■という■■■』

『ドクター？ ドクター、通信の調子が——ドクター!?!』

しかしながらそれで通信が安定しないという。召喚サークルは、霊脈確保でもあるので通信はむしろ安定する筈なのですが、まさかの悪化するという事態。そしてその直後に地震発生。

これは間違いなく妨害入ってますわ……どんな奴がどんな妨害しているか？ 知らん！ それをこれから調べるんだよ！ 先ず妨害している相手を知らん！

因みに、ドレイク船長の船も動かなくなってきましたので島から撤退するという手立ても基本使えません。マシユ曰く、結界が張られているので、此方から動けなくなっているとの事です。

術者を倒さねば、マシユを除いてはまず突破できないという事なんです。念入りで草も生えませんねえ……ドレイク船長の船が無いとこの特異点突破できないという、此方にとっては生命線なんですよ。ホント。

全く、こんな致命的な一手を打ってくれやがって。お陰でこの島に滞在せざるをえないという。こんな効果的な妨害をして下さるとは、一体どんな相手なのか。さぞかし妨害好きそうな凶悪な面してるんやろなあ！（素振り）

さて、島を行く我らが発見するのは、廃棄された砦やらの人工的なブツ。前の島と違つて荒野が広がつてたりして……そして。

『へえ。地下迷宮つて奴かい。良いねえ海賊の血が騒ぐねえ』

その最中に発見した、山の穴から潜り込んでその先に見つけましたのは、謎の地下迷宮にございます。明らかに何かあるつて言うのが丸わかりな施設。

しかしここでドレイク船長、まさかの海賊魂が擦られる事態に。地下迷宮、ダンジョンと言われて心躍らない冒険野郎はいない。楽しい事ならついやつちゃうんだ☆と言わんばかりにズンズンと進んでいく。

で、周りの敵は人型なんかではなく、ゴリゴリのモンスターだらけでございます。ラミア！ スケルトン！ グール！ ……因みにグールはRPGからの追加モンスターで、この地下迷宮の難易度は当然向上しています。RPGくん!? そんな所までパワー

アップしなくていいから……（困惑）

こんなモンスターが馬鹿程解き放たれている上に、内部はやはり相当な迷宮。下手な事をするとうつましい事故が起きる可能性があるという心配もあります。だからマシユが藤丸君を心配して手をつなぐっていう微笑ましいシーンを見れるのも自然な流れ。

そんなカルデア所属のピースト君もニッコリな微笑ましいシーンはマシユ以外にもまだ見れるので、楽しみにしておいてください。誰がそのシーンの主役になるかは今は明かしませんので。

さて、藤丸君達は手をつなぎ、ホモ君達は……どうなってるんでしょね今。メンバーが個性的なので、恐らくゲーム内の彼らは不思議な雰囲気になっていいる事でしょう。そんな愉快な特攻野郎補欠チームが地下迷宮をドレイク船長の勘頼りで突破して言った所。

『これは……サーヴァントです！』

迷宮の奥深くより。

ドレイク船長やらマシユの身長なんざ軽々と超えるタツパ。迷宮の通路一杯に広がる程の巨軀が、此方へと近寄ってまいります。屈強な肉体に浅黒い肌、そして黒い鋼のマスクと、二対の大斧。

見た目の強さとヤバさ役満な見た目。これは明らかなバーサーカー。この特異点

バーサーカーしかいない……（震え声）

『でかつ……なんだコイツ!』

『この……あすてりおすが……みなごろしに、する……!』

巨人が名乗った名はアステリオス。その意味はギリシャ語にて雷光。此処まで聞くと、あまりこの子が何処のどんな人なのか、分からない人も居るかと思いますが……もつと知られている名をこの子は持っています。

彼が、歴史に刻んだ方の名前は……ミノタウロス。

ミノス王の子。神の嫌がらせが生んだ犠牲者の一人。

ラビュリンスに潜む怪物。雄牛の巨人。迷い込んだ者を決して逃さぬ、巨大な迷宮の主として。恐らくは、世界で最も有名な反英霊の一騎だと思われます。

そしてつまり、ここ。ドレイク船長と共に我々が迷い込んだ此処こそ、彼の宝具にして伝説の一角。広大なる地下迷宮ラビュリンスそのもの！ 要するに我々はアウェイで野球の試合をしていたようなものです。

しかしながら相手が伝説に語り継がれるミノタウロスならば。

此方、カルデアにおわすは神話に名高き反英霊。悠久にその名を知られ続けて来たゴルゴーン。ギリシャ神話にてトップクラスの知名度を誇る神性の一角。

英雄ですら恐れる石化の魔眼の持ち主と、帰らずの地下迷宮に潜む猛牛。

正にこれは特異点怪獣大決戦でございますれば。当然ながらホモ君が迎撃を請け負いましよう。後ろの良い子ちゃん達は下がってな！ こっからは何でもありのダーティ特異点解決のスタートだぜ！

あ、此方の選出は当然二人なんで許してね？ だって……普通に真っ向から殴り合ったら体力が割としっかりしてるバーサーカーの火力で押し切られちゃうし……強いんですよ普通に。現時点としては。

改めて。此方はゴルゴンさん。セコンドは式部さんとホモ君。
相手はアステリオス、又はミノタウロス！ さあ、ファイツ！

第三十一章・裏：ゴルゴーンとえうりゆあれ

「――」

「やっぱり狭い？ 外で待つてたほうが良かった？」

「いいや。そうではない。そうではないが……ふむ」

マスターでは分からぬであろう。この迷宮の事。ちらと壁を見てみれば、その作りは
どうしてか……私の過ごした、あのエーゲ海を思い出させた。私が神殿を作った時、そ
れとそっくりの様式。

そしてこの匂いは。人間が過ごしているモノとは、明らかに違う。そこ迄、濃く、分
かりやすく漂っている訳ではないが、私の鼻なら、分かる。

同族にのみ分かる様に、と言う訳でもないだろうが……ここに住んでいるのは、間違
いなく私と同種の、化け物だろう事は、余りにも分かりやすい。

「気になる事でもあつた？」

「ふむ……さて？ どうだろうな。石造りの建物など見て、私の時代の事を思い出した
だけやもしれんぞ」

まあだが。それを今、隣を歩いている間の抜けた禿げに教えてやる義理があるかと言

えば無いのだが。精々驚いて醜態をさらして見せろとすら思う。

「そんなセンチメンタルある？」

「私がそんな風な輩には見えんと言う事か？ くく、随分と愉快な事を言うではないか」

「いや寧ろそんな軟弱な感傷なぞ抱くか、って言う方じゃないゴルゴーンさん」

「……」

「ま、マスター。そんな言い方」

……全くもって可愛げが無いマスターだ。もう少し怯えるだとかやって見せろと思うのだが。個人的な願望なのだが、可愛らしい儂げな女の召喚者であれば、もう少しやる気も出るという物だが。

その女の生き血でも啜ればなお健康に良い。

そこを考えると、この男の生き血なんぞ啜つてもマズいばかりか、変な病気にでもかかりそうだ。想像もしたくない。

「いやこの人弱い扱いされる方が地雷でしょ。式部さんが本焼かれるのと同じ位嫌なんじゃない？ ねえゴルゴーンさん」

「えっ」

「ふん。理解した気になるんじゃないぞ、マスター」

「理解してるって言うより、流石にそれは猿でもわかるんじゃないか」

……分かりやすく示している、と言うつもりはない。だが、別に隠している積りも無いのだから、察しても何ら不思議ではないが。しかし何となく知った風な言葉を言われるのは相当に、感情を逆なでして来る。

「——あ、敵が」

「ツチ!!!」

思わず怒りのままに敵に一発を叩き込む位には、感情が高ぶっている。マスターが間拔けた面を晒している。それどころかカルデアの面々が悉くこつちを見ている。

だが、どうにも怒りは収まらない。確かにマスターに生意気な事を言われたのは間違いないがしかし、どうしてここまで感情が揺れるのか。と言うか感情が安定しないのか。

理由は何となくわかってはいる。

なんだ、分からぬのだが。さつきから感じるのだ。何かが私の背筋に、忍び寄ってくる。この奥に居る何か……私と同族の気配だけではないのだ。きつと。

それを具体的に表せ、と言われても不可能な程に曖昧な感覚なのだ。強いて言うのであれば……嫌な感じ、というしかない。

寒気も無いのに震える。この感覚、覚えがある様な、無い様な。

「……………どしたの」

「煩い」

この可能性を無視すると、間違はなく……間違はなく、致命的な災厄が私に付し注いで終わる様なそんな……そんな気がするのだ。私を恐怖のどん底に叩き落す、そんなとんでもない物が来る予感がする。

この私にそんな物がある、等とあり得ぬ。そう言いきれれば良いのだが。サーヴァントとなつて蘇るなど、生前には想像もしない事態だった。私の想像など軽く超えてくるような珍事が飛び出して来る事等、幾らでもあるのではないか。

弱気な思考だ。しかし、それを想像させるほどの、嫌な予感がするのだ。私には……

「——ダサイ大盾女。さっさとアイツの所に連れて……あら？」

「マスター外に敵の気配がするさっさと迷宮から抜けるぞ急げ、命を賭けて逃げきれ」

「ふーん。成程ね」

出会つてはいけないモノが目の前に居た。小柄だとか、到底戦う力がなさそうだとかそんな……そんな生易しい話じゃない。あの人が目の前に居るだけでどうにもならん。私はもう逃げる。知らん。

「メド ウーサ？」

「ひいっ」

一瞬だった。不可能だった。秒殺だった。昔を思い出す位に圧倒された。有象無象の勇士なんて相手にもならなかった怪物の私が。腰が抜けた。抜けちやつた。何という事だ。向こうもサーヴァントなのに。なんであんなにあの頃のままだ。

というかそのデカいの。なんで姉上を肩の上に乗せている。ふざけるな。代われとは言わんがちよつと見せるな、それを私に。やめろ。辛い。

「……ああ成程。もしかして、これを感じ取ってたのかなあ」

「お二人は、神霊です。そう言う繋がり様なものを感じ取れる……のでしうか」「？」

「うーん、姉が強いっていうのは相場だけでも」

おいカルデアの者共。離れるな。こつちへ来い。頼むから今の私から離れてくれるな。姉上が目の前に居るんだぞ。私一人だったら対処しきれん。頼むから。助けて。もう今だけはプライドとか全部投げ捨てるから。

「……えう、りゆあれ。なんか、うれしそう」

「シヤラツプアステリオス。で？ 何をしているのかしら？ この愚妹」

「あ、あのですねこれは姉上決して姉上を害そうとかそんな大層な事を考えていた訳ではございませんのはい」

「何を突っ立ってるの？」

「へ?」

「頭を、下げなさい。顔が良く見える様に。髪で顔を隠そうなんていい度胸ね。そんな小細工覚えるなんて随分じゃないええ? あ、それに見上げるのも疲れるし」

いやそんな積りは一切ございません。等と言う間も無く畳みかけられる言葉。

取り敢えず、尻尾を畳んで、ゆつくり地面に足を下ろし、その上で石の床に膝を突く。冷たくて、地味に痛い。それが私をまた苛んでいるようにも感じてしまう。

辛い。このいたたまれない感じは、道理であの悪寒を感じる訳だ。本当に無理だ。本当に泣きたい。姉上に顔を向けられない。床ばかり見てる。助けてくれ。誰でも良いから。

「アステリオス。肩車しなさい。一番天辺から見下ろしてやる。このバカ妹……」

「えうりゆあれ。げんきになった。嬉しい」

「アステリオス。いいから。もう角に掴まるから」

「——あー、そこまでにしてくれないかな。麗しの女神様」

——最近聞きなれた声が割り込んで来たのは、その時だった。

見上げた先には、キレイな禿げ頭。姉上と私の前に、マスターが割り込んでいた。

「……何アンタ」

「ゴルゴーンさんの……アレだ。マスターですよ」

「マスター。ああ、そう言えばサーヴァントってそんなだったわね——それで？」

その割り込んだマスターに、姉上の声色がワントーン落ちたのが丸わかりだった。明らかに機嫌が悪くなってる。余計な事をするな、と言いたかったが……しかしながら、迂闊に割り込むと、姉上の機嫌を余計に損ねそうで。

「なんの用？」

「えっと、アンタと、ゴルゴーンさんの関係は……一応、知識としては知ってる」

「知識として、ねえ。じゃあ詳しくは知らないのよね。姉妹の話にそんな他人が割り込んで来る、なんて無礼なんじゃないのかしら？」

「無礼は承知。けども、ゴルゴーンさんは俺が召喚した人なんだ。その人について責任を負うのは当然のことなもので……いきなり正座させられて、でそんな死にそうな顔してんだぜ」

だが、一步も引かない。こっちが何を考えているのかも知らないで、姉上に相対している。その後、被害を被るのは私なんだぞ。姉上の機嫌を損ねてくれるな。

「私が妹をどういう風に扱おうが文句を言われる筋合いは無いわ」

「アンタの妹かもしれねえが、俺と一緒にカルデアで戦ってる……仲間？ か？ 分からんが。そう言う人でもあるから。だから先ず、いきなり正座強要とかじゃなくて。ちゃんと話して貰えれば、と」

ああもうダメだ。大分ご機嫌が斜めになる。この後、ボロカスに言葉で煽られるのが余裕で想像できてしまう。おのれマスター、許さんぞマジで。お前もボロボロにしてやるから覚悟しろ。後で。

「ふうん、姉妹の間に入り込んで。ずけずけと」

「別に特別な事言ってるつもりないんだけど。で？ コレを続ける？ こんな事するよりも、やることだつてあるんじゃない？」

「んー……そうね。ちよつと知ってる顔が出て来たから反応しちゃったけれども。そもそも、先ずアンタ等が何者なのかも教えてもらわないといけないかしら。メドゥーサ？」

「は、はいっ！」

思わず背筋がピンと伸びてしまった。

「——良かったわね」

「え？」

また何か言われるか、と思つたのだが。特に何も言われない。姉上はデカブツの上に乗つて、カルデアの連中のほうへと向かつて行く。特に何か言われる訳でもなく……なんだか機嫌が良さそうですらあつた。

……もしや、助かつたのか。

「気の強いお姉さんだな」

「貴様は許さん」

「えっ。なんで？」

「……はあ……」

本当に。何を勝手に割り込みおって……とは思うが。しかし。何をどういう心境の変化なのか、マスターが割り込んだ事で、姉上はどうやら気を変えた模様だった。

正直な話。助けられたという形になってしまうのは間違いないだろう。

借りを作つたなどとは決して思いたくはないが。

断章：とある船にて

「……うーん一隻に一中隊欲しかったわねえんこの人材の皆様」

『如何でございましょう。主とこのリンボの合作である影傀兵の使い心地』

「最高にござるよおリンボ氏い！ 拙者気に入っちゃったから追加注文しちゃう！ オマケとかあるとうれちいのでっけど！」

『それはもう！ 拙僧が手塩にかけて調整した怨霊もセットで——』

「あ、それはいらぬわ」

バアン！ という拳銃の音で、どうやら船長の仕事、と言うか商談が終わった事を、メアリーは悟った。テンションの上下は最早何時もの事なので気にもならないが、ちゃんと取引が成立しているのか。問題は其処だ。

「どうだったの？」

「いやーリンボ氏は太っ腹ですなあ！ 追加徴収にも快く応じて下さって！ これでアイツらがおにゃのこなぼでーしてれば完璧だったのにナ〜」

「ああそうだねとつとと死ぬ——まあいいや。兵隊はまだまだ補充されるんだね」

「いえあー！」

「なら向こうとの衝突の時も問題なくやれるって事かい。兵隊が足りずに押し切られた、なんて間抜けな事が無くて良かったよ」

まあ海賊らしい戦い方がアレらに出来るか、という疑問は残っていないでもないが。少なくとも命令に従うだけの頭脳があつて、アレだけ動けるのであれば能無しの兵士よりは全然マシだ。

準備はコレほどないまでに整っている。船長も、正直いて欲しいか、いて欲しくないかで言えば後者だけど……無能ではない。そして、切り札となり得る用心棒も、いる。

負けるビジョンは、個人的には浮かばない程の布陣なのだけど。その用心棒曰く『割と五分五分かもしれないませんぜ』とか。

「それでメアリー殿お。アン殿は何処へ？」

「マストの上。一応、逃げられない様に周辺を見張つてるつてさ」

「んもおくなんて頭の回るお方！ 海賊とは思えない位！」

「そりやあ『役立たず』判断受けたら背後から弾丸飛んできかねないからね」

その言葉に、一瞬目を細めた黒髭は……『そんな事しませんぞお拙者！ 紳士故！』とか抜かして船の中へと戻つて行つたけど。果たしてどうだかは、メアリーにはサツパリと分からない。

「お前が紳士なら、全ての獣は聖人だと思ふんだけどね」

「——今の所動きはありませんわよー船長……って、あら？」

「今は船内に引き籠もって留守。向こうの動きでも考えに行つたんじゃない？」

「そうですか……偶には真面目になるんですのねあの人も」

何時もそうだったら良いのに、という意見には全くもって首を縦に振る。とはいえあの船長がずつと真面目にしてるっていうのも、ちよつと息苦しく感じないでもない。あのままっていうのは、だつてずつと獣が牙をむいているような物だ。

結論として、黒髭には本物の紳士としての素養を求めねばならない。海賊にそれを求めるのが、土台不可能だというのは凡そ分かつているのだけれども。

海賊なんて、欲望をむき出しにして略奪を繰り返す、獣のような奴らしか居ないのである。紳士ぶつてる奴ほど、寧ろもつと危ないまである気がするのが海賊だ。

「しかし、いつも以上に気合入ってますわね。船長」

「そりやあ次の敵は……今まで相手にして来た木っ端海賊とかなんて目じやない位の大物だろうしね。さつき仕入れた奴らと良い」

「信用は出来ますの？ ああ黒いの。船でうろついている方は、とんと成果を上げてないみたいですよけれど」

「アレは黒髭だつてそんなに期待してなかつたじゃない。でも、さつきのは色々と改造されてて……」

今隣にいるアンも、言葉遣いも丁寧で、マナーもすっかりしてるけども、その根底は女豹と表現しても全く無礼じゃない程の獣性というか、ワイルドさが根付いてる。好きな男はガッツリ襲って明日にはその腰挿んで連れ回す位には。

では、翻つてこの船の船長である男……世界でもっとも有名な海賊である、黒髭はどうかと、メアリーは考える。

あの男に關しては、その獸欲に關して一切隠す様子無しに見える。酒、金、女。分かりやすくデフォルトメされた海賊であつたとしてもアイツ以上に下品ではないと思う。イヤな所で想像を軽く超えてくるのが黒髭だ。

女への執着心は尋常ではなく、財宝と酒に溺れる速さは恐らく人類最速。多分だらしの無さもずば抜けている……

「まあ兎も角、カルデアとフランシス・ドレイク相手に役立たず、つて事はないんじゃないかな。實際見てみた印象としては」

「大丈夫ですか？ カルデアだつて、決して容易い相手ではないというのに」「流石にそれを分かつてない訳じゃないでしょ」

——と思わせるのが、あの化け物は非常にお上手なのである。

女にだらしなく、金と酒に頭を鈍らせる。分かりやす過ぎる『悪の海賊像』だ。あの野郎にとって、その着ぐるみがどれだけ利便性が高いか。

世界一の名探偵。伝説の軍師。稀代の政治家。

恐らく、もし、奇跡的な確率を引いて……今の奴とは全く正反対の『属性』を抱いていたとして。間違いなく、奴は何れかの名で呼ばれていても全く不思議じゃない。それくらいには、奴は恐ろしく頭が回る。

自分が侮られる事のデメリットなんて、殆ど気にも留めていない。寧ろ、侮られている方がメリットが大きいとまで思っているのだろう。

実際、今だって普通に船員が居れば、船の中で戦術練るフリして、酒飲んでサボってるくらいはする、と思われても不思議じゃない。寧ろそう思うようにふるまってすら居たと思うのだが。

で、それで迂闊にも、舐めた態度する奴らが出てきたら、自ら出て行って肅清する。撒き餌に食らいついた魚を網で楽々掬うように。黒髭にとっては、それすらそう難しい事ではないのだろうし、寧ろ日常茶飯事くらいだ。

「……あー、ホントですわね。コレ。ちよつと近づいただけで大分」

「でしょ。相当に尖り切ってる。部屋の中でどんな顔してるとか想像もしたくない」

「口でも裂けてるんじゃないやせんのか？」

「そうしたらもう完全に化け物じゃないかなあ」

で、今の船長は？

いよいよ迫る、カルデアとフランシス・ドレイクとの激突に、そりやあ熱量を爆発させている事だろ。事は分かった。

どうあのカルデアの連中を攻略するか。どのようにフランシス・ドレイクを攻略するかに脳味噌を回して、そりやあもうラリっているのではないだろうか。

「一応近寄らない様に、黒子に指令出しときます?」

「万が一近寄って反逆者判定受けて粛清とか笑えないからね」

「……でも動きませんわよ?」

「いや、船が揺れてその拍子に、とか」

「それで切られたらもう運が悪かったのでは?」

「それくらい今の船長は危険って事だよ」

船の船室の方を見つめる。あの辺りは今、間違いなく魔窟だ。ドラゴンの巣窟に踏み込む程度には危険である。

「……で、船長に連絡する時はどうするの、メアリー?」

「今の船長に話しかける事自体が地雷だからね。短い付き合いだけど、これが珍しいって言うのは分かるし。お邪魔したら悪いし現場判断で——」

『構いませんぞー。全然話しかけてきて、』

一瞬、彼女はその言葉の違和感に、戦慄した。

平坦だった。話し方のテンポは、間違いなく何時もの黒髭のソレだ。

しかし、声に一切の上下が無い。ピクリとも。間違いなく正気のそれじゃない。

何時もの口調だというのに気持ち悪い、という感じが全然しない。寧ろ、変に抑揚が無いのに何時もの口調なのが余計に寒気を誘う。

口調からニマニマ笑っている何時もの船長が想像、出来なくもない。しかしながら。今の声色から想像できるのは、人でも喰った直後かと思ふ様な……

文字通り、化け物が笑っている姿だった。

間違いない。今、船長の精神は相当に危うい。下手に刺激したら吹っ飛ぶ、文字通りの爆弾である。

今のを聞いて……

「——スルー安定ですわね」

「ん」

話しかけるバカは、存在しないだろう。

第三十二章

いよいよ惨状。な実況、はーじまーるよー。

迷宮にカチコミかけた挙句、様々な誤解が交錯した前回。その結果としてゴルゴーンさんが被害を受けたりもしましたが原作仕様なので仕方ありません。

誤解は往々にして悲しい戦いしか生まないのよね。と言う事で、今回仲間になってくださった屈強なシヨタと超ワガママ系のお姫様のご紹介から入りましょうか。後半は兎も角前半……何……？　と思っただけいらっしやる方に向けて。

じゃあ先ずは後半。超ワガママ系お姫様（女神様）について。此方に関しては皆様恐らくお顔はご存知かと思えます。名をエウリュアレ。ステンノ様にそっくり、というか双子なんですけれども。紫紺の髪と、可愛いと美しいが同居した感じの麗しい御顔もそっくりでございます。

そして当然の様に双子らしく、その天真爛漫（混沌・悪）ぶりは健在。誰かに『やつてもらおう』事は彼女にとって当たり前の事ではないと言わんばかりのこの態度。これが女神って奴です。

ではその性能は？

……FGOサーヴァントには性能議論が行われる事も多く、そして、星三アーチャー内でのその議論は凄まじい勢いがあります。その議論に度々登場するのが、このエウリユアレ様になります。

その特徴はと言えば、火力。特攻を込みで考えると星三アーチャー……いえ、星五まで含めてもかなり上位に食い込む勢いの火力が出るのです。この可愛らしい少女の手から

当たり前のように十万どころか二十万を超えるダメージが出て来る。皆さん、信じますこの事実。

男性特攻と言う、結構幅広い特攻を持っているんですが、それが宝具にくつついていくという。凄いですよ。ハマった時の火力。どんなに固いサーヴァントであっても、男性でセイバーであれば『プレミ』と言わしめる程の相当に強烈な火力を叩きだします。

『アステリオス。動かないですよ』
『う』

そしてその彼女を守る巨人たる彼……前回は解説しましたが、アステリオス君です。彼については前回、熱く解説したばかりなので、取り合えずはそのアステリオス君の性能について。

彼は典型的なクリティカル火力を盛って殴り倒すタイプのスキル群を持っている

バーサーカー……かと思いきや。

その宝具が曲者。その宝具は地下迷宮を顕現させるデバフタイプで、そのデバフの倍率は異常。例え第一部のラスボスクラスの攻撃であっても、アステリオス君と防御バフを盛れるサーヴァントが一人でも居れば、余裕で受けきれぬ。しかもバーサーカーのアステリオス君当人であつても。

このデバフを撒いて、防御で凌ぎ、返しのターンで叩き潰す……意外にも受け方の運用も出来ない事も無いって言う。

しかもデバフは攻撃だけではなく防御にもかかってくるので、返しの一撃にクリティカルが乗ればとんでもない事態になり、流星は伝説に名高い、と思えるようなとんでもないパワーが敵に向けて飛んでいきます。

で、このお二人が船に加わり、更なる旅へと……と、言いたい所なのですが。しかしながらここで疑問が一つ。

エウリュアレさんの方は前回でもおっしゃっていたのですが、『アイツ』に追われていたといった旨の発言をしておりました。さて、一体誰に追われていたのか。

『ただの海賊じゃないわ。海賊のサーヴァントに狙われたのよ！』

そう。

ドレイク船長とは違う、生身ではないサーヴァントの海賊。彼女は、それに追われて

此方を必要以上に警戒していたという。まあ海賊に追われていたのならそりやあ此方を警戒しても仕方ないと思うのですが……

その海賊一体どんな奴？ という質問に、下された評価は『気持ち悪い』だそうです。怖いとか、強そうとかではなく。気持ち悪い、だそうです。

美の女神に気持ち悪いなんて言われるのはご褒美……とかそう言うタイプの気持ち悪さなのか。それともヒ○力的な気持ち悪さなのか。

スキュラすら襲わず撤退するレベルの気持ち悪さである事は間違いないそうです。

『姐御！ 前方に船一隻！』

『海賊かい！』

『そうです！ ……ああ、アレだ。あの旗だ！ 姐御！ あの船、例の旗と同じ海賊旗を掲げてます！』

で、そんな海賊の話題を出していたからか来ました。海賊船。我が船の船員が騒いでいる事から因縁深い相手の模様ですが……さて、一体何処の馬の骨が挑んで来たのか。こっちは海賊の中でもレジエンス。ドレイクの姐御だぞ。シャバい若造風情じゃ相手にもならねえってんだ。

『つまり、敵だね！ ……ん？ あの船どつか見たような……』

『例の旗……そうだ！ ドクター！』

さて、ここで向こうが何者なのかを探るヒントは、やはり海賊旗。そして当然のように通信妨害の時から忘れ去られていたドクターの解析結果から、そのヒントから推測出来た情報をプリーズ！

『あの旗は、伝説の海賊旗だ。それも、史上最高の知名度を誇る海賊だ！』
『史上最高……の、知名度……まさか！』

『そう、黒髭だ！ 真名エドワード・ティーチ！ 気を付けるんだ、マシユ！』

ふえっ（幼女） なんか凄いのが出て来たよ……

姐御の知名度はやっぱり凄まじいものがありますが、それ以上に『海賊』っていうカテゴリオンリーであれば、とんでもない出力を叩きだす野郎が居るんですよ。

フック船長などの『悪い海賊』の元ネタ、というか原典となった伝説上の海賊。皆が想像する海賊像の源流。

生きた海賊の『偶像』こそが、伝説上の大海賊。エドワード・ティーチ。通称『黒髭』です。同じ人を喰らう様な恐るべき海の魔物。コイツ人間じゃねえんじやねえのって言う逸話も幾らでもあるんですが……

『あーっ！ アイツ！ アイツだ！ アタシの船を追いかけて回してた海賊！』

『おい！ 聞いてんのかその髭！』

『はあ？ BBAの声など一向に聞こえませぬが？』

……あー、はい。まあ知ってました。

BBA。BBAと来ました。しかもその特徴的な喋り方。皆様、覚えがあるんじゃないでしょうか。そんな感じの人種に。

『だーかーらー！ BBAはお呼びじゃないんです！ 何その無駄乳、ふざけてるの？ まあ傷はイイよ。良いよね刀傷。そう言う属性はアリ。でもね、年齢が困るよね。せめて半分くらいなら、拙者許容範囲でござるけどね。ドウルフフフ！』

……ツスウウウウ……

えーここで黒髭君のプロフィールから抜粋をば。『……そんな黒髭も今では立派な全方位オタクです。本当にありがとうございました』との事です。

ブチ切れて、もうオラオラ金寄せ女寄せせみたいな悪役道一直線な奴が来るかと思つて居たら別の意味で女を求めるとんでもないキャラクターが出て参りました。

『――』

『姐御？ 姐御ー。死んでる……（精神的に）』

そりゃあ姐御も精神的に死ぬという物。直前にエウリユアレちゃんがコソコソ逃げたのも領けるという物。マシユが『夢に見ちやうぞ』という脅しをかけられて名前を教えちやうのも領ける物。

これこそがこの特異点の一人目の大ボス、黒髭の惨状にございます……

『大砲』

『姐御?』

『大砲。全部。ありつたけ。いいから。撃て。さもないとアンタ達を砲弾代わりに詰め
てから撃つ』

『あ、アイアイ、ママ!』

そりゃあ姐御も気色悪さと侮辱され具合でブチ切れるという物。コイツに最早容赦
は要らぬというばかり。黒髭もそれを見て寧ろ煽り返す位の余裕を見せております。
何という胆力。お前本当にオタクか?

『船を回頭しろッ! あんのボケ髭を地獄の底へ叩き落してやれエッ!』

さて。姉御のお言葉に全面的に同意したい所なんですけれども。

ここから先は船の上での本格的なバトルになるのですが……さて、FORPGから
の変更が吉と出るか凶と出るか。

ご視聴、ありがとうございました。

第三十二章・裏：ブラック・ビアード

船という特殊な場所での戦闘を、本当の意味で理解していたのか？

そう言われてしまうと、首を傾げざるを得ない。そもそも、現代社会で船に乗る機会なんてそこまでない上に、自分の知ってる船は、そこ迄揺れない。

結論として……今こうして、目の前に広まっている現状を、想定してなかった。

「くっ……ダメです姉御、向こうの一発、ウチ等よりも格段に上です！ 馬鹿見てえな水柱立ってます！」

「んなもん分かってる！ こっちの砲弾が全く通じてないのもね！」

「——っ、踏ん張り、きれないっ！」

「へばつてんじやないよお嬢ちゃん！ アタシとやり合った力見せな！」

砲弾の一発一発が、波を巻き起こし、船にぶつかり、甲板を揺らす。その時に発生する船の揺れと言うのは……完全にランダムだ。しかも甲板は、濡れて滑りやすくも変わっているのだから、力を下手に入れば、足を余計に滑らせかねない。

船の上での戦いに慣れていないのであれば、サーヴァントであっても苦しい、という現実がそこに有る。

寧ろ、向こうはそれを理解して、砲弾をドンドン撃ち込んで来ているのだろう。これが船と船との戦いという物だと、理解させるかのように。

「——ガアアアアアッ！」

「——」

ところでそれは向こうさんには適應されないのかと思つてしまふ訳で。全然船が揺れようとなんだらうと関係ないとばかりに大暴れしている。

サーヴァント、エイリーク。再召喚された彼と、シャドウサーヴァント達の動きは最早攻撃以外考えていない程に、狂つた前のめりだ。

いや、寧ろがむしやらなその動きこそが、この戦いで必要なかもしれない。それこそ自分の守りなんて関係ない位の前のめりぶりが必要なかもしれない。それをマシユヤリリイに命じろ、つて言うのも心苦しいけど。

「ゴルゴン閣下！ 今仕事出来るの貴女だけなんで頼みますぜ！」

「ええい他も少しは踏ん張れんのか！」

「やつぱりここまで激しい船上での戦いってのがヤバいんですよ！」

「船がひっくり返つてゐるって訳でもないだろう！ っち、私と、その牛とで踏ん張れるのも限度があるぞ！」

尻尾を上手に使つて事態を立て直しているゴルゴーンさんと、そして重心がしつか

りとしているアステリオスが、今、前線を何とか維持し、そして……この中で、唯一遠距離が出来る式部さんが、二人に加勢できている。

「二応式部さんも仕事してますからそこは忘れないうで上げて！」

「申し訳ありませんあんまり関係ない感じで！」

「関係あるさ。少なくとも、式部さんの援護がなけりや、持つてかれてたろうよそのワガママ女神さんは」

「誰の事言つてんのよそれ！」

……言い訳になるようだが。マシユも、リリイも。時間さえあればこの船の上でも戦えるだけの力があるのは、俺だつて分かつてる。けれど最悪なのは重要な最初の初手で、いきなり足場である船を盛大に揺らされ、そこから船と船が、乱戦に入ってしまった事。

度重なる揺れと、ドンドン乗り込んで来る敵に、凌ぎつつ、一気に押し寄せられない様に自ら対処するので精一杯。戦う体勢を築く事も出来ない。

そして。恐らくではあるのだが。それをきつと狙っているのだろう。あのサーヴァントである黒髭は……エウリユアレを狙いつつも。

「ハイハイどんどんどん！ 弾無くなつタラバ、君達を身を解して玉に積めてドカンするからそうならない様に気を付けてねえ！」

「船長、君もこつち来て手伝ったらどうだい！」

「いやー拙者そう言う危ない事したくないっていうかあ？ あ、そこですわよ」

——銃声一発。瞬間、響く甲高い金属音。

「マスター！ 大丈夫ですか！」

「ゴメン、マシユ……油断してた！」

「いいえ。それにしてもエドワード・ティーチ……言動からして非常に奇天烈な人物だと思いましたが。恐ろしい人物です！」

そこで、直ぐに気を引き締め直す。さつきからコレだった。

黒髭はちよくちよく、安全な自分の船の上からマスターである俺達二人を狙っているのだ。いや、正確には、マシユとリリーの行動を縛るために、俺一人を。

ふざけた言動なのに、やっている事は悪辣で、冷徹で。そして合理的。伝説の海賊黒髭の名前は、全くもって伊達なんかじゃない。

これに加えて、向こうには未だサーヴァントと思われる人物が二人ほど残っているのが此処からでも見える。

「藤丸、頭出すな！」

「でも伏せてるだけじゃどうにも……！」

「俺達が吹っ飛ばされたら元も子もないだろ！ 今は堪え時つて奴だ！」

「堪えているのは貴様等ではないがな！」

「ごめんよ！ あーでも、つったって！」

康友が苦しそうに周りを見つめる。その意味は、凡そ理解できた。

向こうの残りの戦力。こっちの大混乱。流石に特異点修正も三度目。素人マスターでも分かる戦の流れ。今までにない程に俺らは明確に——不利。

世界を亡ぼす軍勢。その強さという物を、今、再確認している。

でも、このままやられる訳には行かないのは、流石に俺だつて分かつてる。皆、まだ諦める積りなんてない。

「——船長！」

「分かっているさね！ ああ畜生、死ぬほど……煮えたぎりそうだけどなあ！ 頭も！

腹も！ 煙玉用意！ 兎も角、今は！」

撤退だ、と。船長が船全体に届くようにと号令を発する。

タイミングとしては、恐らく早い方だろう。そしてこれ以上の機会もない。ドレイク船長の判断力に一切の疑いはない。

それでも。開戦からそう時間は経っていない。だというのに状況は余りにも目まぐるしく悪化し、圧倒いう間に状況は最悪、混戦も混戦の最中になってしまった。此処から如何に、逃げ出すか。

「おいBB無理すんな。そつちが持つてる聖杯くれりやあ見逃してもいいですぞ……あ、出来ればエウリュアレちゃんも！」

「——喧し〜」

……そんな混乱の船内。

一閃の光が、全員の目を引いた。その一撃はまるで草むらに潜んでいた、蛇の不意の一撃にも等しい脅威で。それは、間違いない……黒髭の頬を裂いていた。

「囁るな。姉上が怯えている」

「——」

ゴルゴーンさんの冷たい視線が、黒髭を刺す。

目立つ見た目。巨軀。人から見れば異形。しかして、その美貌は正に女神。鼓膜を震わせる冷やかな声は、この不利の中でも絶対性すら思わせる。

それを見ていた康友、そしてドレイク船長が笑った。

「……ナイス」

「お前らあつ！ 気合入れな！ ここで逃げ切らねえと終わりだ！ ここで逃げ延びて必ず次だ！ 次でリベンジするよ！」

敵の船長を直接狙った、その一矢は、状況を変えた。感情も無い様に見えたシャドウサーヴァント達ですら、一瞬黒髭の方に視線を向けた。集団行動が出来ている様に

も見えていたのだが、あの様子では、船長を守る程度の指令は下りているのだろうか。

しかし、今までだったら強化だと思えたそれが、完全に此方の風向きを変えたのは流石に分かった。

黒髭がやっていた事だ。一足飛ばしに頭を狙うその一手。やられていたこつちがキツイからこそ、コレがどれだけの影響を持つか。

好き勝手やり込められていたからこそ、ここで相手の王座への直接攻撃と、相手のあおりの言葉を一闪するその両断具合が。船の士気を、確かに高めた。

「了解ッ！ 撤退！」

「オオオオオオオオオオオッ!!!」

「グ、ギ」

「マシユさん！」

「はいっ！」

船員の号令に合わせて、アステリオスが蘇った血斧王を押し返し、海に向けて吹っ飛ばす。自分達を抑えていたシャドウサーヴァント達に、マシユとリリイが、今度はこつちから攻めかかった。

打開、出来たかと言えば分からない。けれど……良い風が、吹いた。

「——メドゥーサ」

「へへっ。かつこいいでしょ。ウチのゴルゴンさんは——」

後は、俺達マスターが何とか無事で済めば。そう思つて振り向いた先の康友の顔が……凍り付いていた。どうしたのか、という暇もなく……

「きゃっ……っ？」

「……ッ！」

響く銃声の直後。

床に押し倒したエウリュアレを庇うように、鮮血が飛んだ。目を見開く。康友の腕が裂けていた。銃弾……誰が。そんなの、想像出来てしまった。

「——ツチ、しくじったか」

さつきまでの奇天烈さなど欠片も無く。

冷たい顔で。無表情に。黒髭が。その手に持った単発式の拳銃の銃口を、二人に向けていた。しくじった、というのなら。そして康友が庇ったのなら……狙いは、エウリュアレなのか。

何故。先ほどまで、寄こせとまで言っていた彼女を。

今まで、戦ってきた敵の中で。

目の前に居る男、黒髭、エドワード・ティーチと言う男……その底が、未だに、見えてこない。

第三十三章

船で敗北した瞬間ほど悔しい事はない実況、はーじまーるよー。

何の成果も……得られませんでしたあつ!!

はい。それは言いすぎにしても盛大に負けましたねクオレハ……ドレイク船長が悔しがるのも分かる程のこの手痛い敗北。黒髭の船の性能に相当にめっちゃくちやにやられた試合でございました。

結局の所、船の上での殴り合いをする以上は、足場の船の性能で差を付けられていると相当苦しい事になる、という良い見本になる試合でございました。FGOやっていると分かっていった事ですが、恐らくは初めて、真っ向から敵とぶつかり合った結果の、手痛い敗戦だと思われれます。

撤退間近で船を持ち上げてくれたアステリオス君達が居なかつたら多分普通に海の底だったと思いますから、相当にピンチだったのは間違いないありません。

『回復もロクにしないで、無茶をやるからよ。何処の世界にガレオン船を持ち上げて立ち泳ぎし続けるバカが居るの、このバカ!』

『いはい、ごめん』

カッコいい（KONAMI）

そんな漢なアステリオス君ですが、此方との戦闘でボロボロになった後の大奮闘だったせいで傷が開いて弱ってしまおうという事態。

『ドレイクさん。船の方は——』

『ダメだね。動きやしない』

いや、より正確に言うのであれば、僕も私も全員ボロボロのボロなんですけれども。船などは船底に穴が開き、マトモに航行も不可能な程です。

先ず、あの黒髭をぶん殴るにしても、そこからどうにかしないとダメです。こんな敗残兵みたいな状態でマトモに黒髭と戦える訳がありません。マトモにやっても勝てなかった相手なので。

しかし、実際のバトルも船の揺れを再現した前衛後衛交代ギミック、正に悪夢としか言いようがありませんでした。第七章のギミックを参考にして実装したのでしょうか。

偶然、本当に偶然にもゴルゴーンさんと、そして牛くんを後衛に下げて戦っていたのが幸いしました。後衛に居てもらおう予定だった式部さんが戦線に引きずり出されましたが、しかしながらゴルゴーンさんの石化の魔眼で一人の敵の動きを拘束しつつ、ソイツ以外を先ず撃破してしまえば実質ターンスキップ。被害は最小限です。

後は後衛に改めて藤丸君を置いて、んで前衛をそのままゴルゴーンさんと牛くんを努

めて貰えば問題なく。もし前衛に式部さん以外の全サーヴァントを置いていたらと思うと冷や汗しかかけません。

さて、そんな厄介な黒髭様方ですが、まあ今の最大戦力でも結構苦しいという事で何か突破口はないの？ ロマニ？

『ちよつと待つて。君達が撤退する前に、何か無かったかい？ 向こうに何かしらの損害を与えたような——』

『ああ、確かあの時は……エイリーク血斧王を倒したはずです』

『そうだ。うん。此方でも完全に消滅した事を確認しているな……ああ、つまりそういう事か！』

どういう事だ？（KRYUちゃん）

さて。ロマニの分析、というか推理して曰く。

黒髭の船は宝具であることは間違いないのですが、しかし最大の問題はその船の単純な性能ではなく、その性質。ロマニが観測したデータによると、その船の魔力量が、エイリークを倒した時に大きく減少したとの事で。

まあ要するに一杯船にサーヴァント載せてれば強くなるって感じですよ。

つまり黒髭がこれ以上仲間を増やすと余計に倒しにくくなってしまう事実。ええいクソ何という面倒な……！

という事で、ここから特異点を巡りつて戦力を集め、態勢を万全になるまで立て直してより、寧ろこの島で出来る事だけやったら素早く反撃した方が勝ち目がある模様なのです。そして、この島で出来る限りの事をする為の大切な素材が、今——『どうやらワイバーンの様だ！ 気を付けて！』

目の前に。

フランス特異点ぶりのワイバーン君でございます。このワイバーンこそ、今、現状我々が一番必要としているモノなのです。より具体的に言えば、此奴らの素材だとか

が。
要するに船がボロボロになって黒髭に対抗できなくなっちゃった……元からもどうしようもない……なら強化すりゃあ良いじゃん!! という事で。

船をドラゴン、とか竜種の素材で強化して黒髭にぶつけるんだよ!!! やってみる価値はありますぜ！ 化け物には化け物をぶつけるという話。

因みに加工は力強いアステリオス君にお頼み申す。あ、その前に君は皆でご飯食べて傷を癒そうねえ……鍛冶のおじさんにも会おうねえ……皆と交流しようねえ……海賊のお兄さんと肩組んで歌でも唄おうねえ……エウリュアレを肩に乗せようねえ……

という事で、アステリオス君が皆と仲良くしている間、カルデア連中はここからはワイバーンの素材集めを開始いたします。当然分かれて。やっぱり一緒に行動するより

分散した方が効率良いからな！

あ、因みにドレイク船長を何方かに付ける事も出来ませんが……藤丸君、行けヤア！
オラオラ仕事しろっ！ お前がドラゴンを集めるんだよ！

はい。こっちはこっちで仕事しようか。

さてこのドラゴン素材集めなのですが、島全体を示したマップ内を駆けずり回ってワイバーンを叩いて一定数を倒すとドラゴンが出て来る……と言った感じですよ。まるでFGOのイベントの如く。

『まだドラゴンが姿を現す兆候はないね。ドンドン行こう！』

あとこのドラゴン狩りの男！ をしている間は、此方のサポートにダ・ヴィンチちゃんが付いてくれます。ロマニは藤丸君側で頑張っているのです。

こうしている間にも、向こうは問題なく仲間を発見するんだろなあ……と。まあまあこっちはドラゴンを順調に狩っていくといきましょうか。向こうが質ならこっちは数なんだよオラア！ 素材落とせ!!!

素材を順調に狩って戻ってくれば、白い女神様とクマがご同行してらっしゃいます。ああやっぱりお仲間を増やしたねえ。

さて、この白い女神様とクマのぬいぐるみって誰？ って言う話なんですけれども。

此方のお二方が『オリオン』です。

ん？ 聞き間違いかな？ と思った方。安心してください。間違いなく彼女と彼のペアがオリオンでございます。あの可愛い白い髪のお嬢さんが。後、クマのぬいぐるみ。

いやいやいやいや、オリオンって言ったらギリシャ神話における狩人でもっとゴツイ奴なんじゃないの!? と思っただけです。それは後期生産型のオリオンになるのもうちよつとお待ちいただければ。

後期生産型のオリオンはまあ相当にゴリゴリマッチョメンのギリシャスーパーマンではございますので。

『ダーリン、今どこ見てたの?』

『イヤドコモ』

……で、場面を戻して先行生産型のオリオンでございますよ。

彼女が『オリオン』の本体だとするならクマのぬいぐるみって何？

ここで、今ぬいぐるみがダーリンと呼ばれていた時点で、訓練された型月の民なら『あつ……』と察しが付く方もいらつしやると思うのですが。あのクマのぬいぐるみ、彼こそがオリオンの本体なのでございます。

ではあの可愛いお嬢様の方は？ オリオンと一緒に居らつしやる女性、という事で分かる方は分かると思いますが、彼女がオリオンの奥方、アルテミスでございます。

本来『オリオン』として呼ばれる所を、奥方が旦那を傷つけないように代わりに出張つて来たのが今の彼女でございます。

とはいえ、ダーリンが居ないのは寂しい。という事で、ぬいぐるみっぽい感じに霊基を弄つて連れてこられたのがぬいぐるみみのオリオンでございます。

何という哀れな……まあ彼も奥様が傍らに居るのにナンパするようなダメ男なので別に問題無いかなあ（震え声）

さて、そんな彼女を仲間に加えつつも……さあ、ドラゴン狩りの男、再開と参りましようか。まだまだ素材が足りねえぞオラアン!?

第三十三章・裏：ドラゴン狩りのハゲ

「私は、此方の陣を構築しておきますので、お二人共。お願いいたします」

——キャスターが、ドレイクに頼まれて船の周りの野営地の結界等を構築する事となつて、マスターと私は一旦離れて狩りを再開する事となつた。

正直な話をすればあの白い女神とクマを見ていたくも無いというのがあつた。

『あら？ 貴女って——』

『……いやいやいやいや女神女神女神、ダメだ、ダメだぞ俺——』

『つて何を見てるのかしらダーリン♡』

『あ、いえ!? あの、人外サイズから繰り出される規格外おっぱいとか全然、全然見てませんからブギウウ』

『もーまたよそ見してるー！ おっぱいなら私だつておつきいもん！』

あんな吐き気がする程に甘つたるい雰囲気も、何もかもが嫌だつたというのものもある。後、姉上となんだか気まずい。

という訳で、こうしてマスターと一緒にこの島を巡っている訳なのだけでも。この男と二人きり、というのも初めてか。思えば。

隣のマスターは、酷く飄々としているばかりだ。破壊された船を補修する為の素材はそれなりの相手から入手する。そんな奴を狩る時も『ダーマツ!』等と氣勢と奇声を上げて楽しそうにやっつけていて。

船でサーヴァントの弾丸に晒されたばかりだというのに。呑気というか……危機感が欠如しているというべきか。

しかしそれは、この男が。あの海賊の凶弾から姉上を守ったが故のケガではある。この男の油断の所為かと言われれば、些かと違う。

寧ろ、姉上を助けてもらった事に関しては。

「――船での事、感謝する」

「しなくていいよ別に」

「……」

……不思議な感覚だった。

姉上を必死に守った男に礼を言うなど。昔ではあり得ぬことだった。寧ろ冷ややかな目で見ていた事すらあつた気がする。いや、姉上がどうでも良かった、とかではなく。姉上を命がけで守る、とほざいていた輩共は、姉上の美しさに見惚れ、半ば洗脳されるように無理矢理動かされていた事もあつた。

島に流れ着いたならず者共を我先にと駆逐するその姿に、死骸に集る蛆虫を見る時に

も似た嫌悪感を感じる事すらあった。

だが……

「それよりも、ドラゴンをガンガン刈らないとね。仕事、仕事」

「……ああ」

この目の前のマスターが姉上を助けた時。この男は、最後に私を見て親指をビツと立てたのだ。大丈夫だ、とでも言いたげなその表情は、まるで変わりがない。苛立ちを覚えはした。したが……しかし。だ。それよりも大きかったのは。安心、というか。

以前と変わらずイラついたのが、寧ろ安心させられた。この男は、姉上の美しさに狂わされて体を張った訳ではないのが、分かった気がして。

姉上を守られた、という事から来る安堵も当然大きかったが、それだけでは無かったようにも、個人的には思う。

「所でさ」

「なんだ」

「良いの？ お姉さんと一緒に居なくて」

……うむ。こんなデリカシーの欠片も無い原人の様なマスターだからこそ、多分姉上の魅力も全く通じなかったのだろう。女人に興味がないのか。それともそもそも姉上に興味がないのか。

「……こんな醜い姿を姉上の前で晒せとは。随分とサディストだな、マスター？」

「いや俺は現代的な感性持つてるから言うけど、カツコ良いと思うよ。ゴルゴーンさんは真面目に」

「カツコいい、か。女に向ける誉め言葉ではないな」

「今は女性を表す言葉として最上位に位置する言葉なんだけどなあ」

まあ何れにせよ。

マスターの言葉は特に何か気遣つてのものではないだろう事は凡そ分かる。というよりは言葉以上の意味を持つていない、というべきか。行かなくていいのであれば、それで良いのだろう。この男は。

ならば、もういい。今は考える必要も特にないだろう……となれば、気にするべきは其処ではない。今、気にするべきは。

「ま、それでいいならドラゴンの素材集めに熱中しようか、ゴルゴーンさんとワイバーン共じや格が違う。楽勝楽勝」

「当然の事を言われても大してうれしくもないが」

「気楽に行こうって話だ。んじやあまあ……やろうぜ！」

周辺から来る殺気に対応すべきだろう。

拳を鳴らしたマスターの動きに反応したのか、茂る森の草葉の中から、翠の色の化け

物共が飛び立つ。

空を舞い、天を回って叫ぶ者共は、蜥蜴にも似て鱗を持ち、しかしながら蜥蜴は持たぬ鋭い角と、天翔ける為の広い翼を、持っている。そして、天からゆつくりと此方に向けて降りて来て……甲高い鳴き声を上げながら我々の周りを取り囲んだ。

名を、ワイバーンと言う。

「ふん……随分な数だな」

「まあそれなりの素材にはなるんじゃないかな」

「ふん。我々が欲しているのは竜種の素材であろう。亜流の細やかなそれ等、どれほど役に立つものかな」

「無いよりはマシでしょうよ。ヨシ、やってやろうぜ！」

マスターと共に探して居た、獲物の一つだった。

「しかし、これどうやって運ぼうかね」

「私はやらんぞ」

「やらせないよ。後で海賊連中に頼むしかないかなあ。まあ、ドンドン叩いて落として、で良いんじゃないかな。取り敢えずは……ってえ、しかし、此奴ら硬いなあ」

数はそれなりに居たのは、確かだろうが。しかしながら。私を相手にするには余りに

も弱い手勢である。所詮、真に竜と呼べる類と比べれば、単に飛べるようになった蜥蜴でしかなく。人間にとつてはそれなりに硬い鱗だろうと、私に貫けぬ道理はない。

強いて言うのであれば、赤い色をした奴が僅かに硬くはあつたが……それでもまあ、ある程度である。こんな輩共でも、数さえいれば船の素材になるのだから人間共の小細工には驚きを覚える。

いや……今、それ以上に気になつたと言え。マスターの方が。

「まさか、ワイバーンに拳で殴り掛かるとはな。勇敢を通り越して、蛮勇ではないか？」
「舐められたら負けだと思つてるもんで。ポロカスにしてやつた」

「拳がボロ雑巾になりかけているではないか」

「叩き落してやるのに必要な犠牲だつた訳であります」

私がワイバーンと戦つている間、一匹程マスターの方に逃れた。殺されぬようにだけ注意しろとは言つたが、しかし。マスターは逃げるよりもまず、寧ろ角を生やして突つかかつて行つたのだ。

まさか素手で殴り倒しに行くとは思わなかつたのだが。気が付いた時にはワイバーンが一匹、地に伏せていたので、やりおおせたのだろう。拳から血を流しながら。棒切れの一本も拾わず。

「……マスター、結局貴様、あの生えていた角は一体なんなのだ」

「ん？ ああ、アレ。なんだろうね。俺の血に流れてる……モンスターの力？」

「何故首を傾げる」

「俺も分かってないのよ。アレが何なのか。まあでも今の所は、悪い影響は出てないから大丈夫じゃない、かな」

「神秘が強い、とは思っていたが。しかしながら。成程、化け物の血を引いている、か。そうなる。少し、口の端に意地の悪い笑みが浮かんだ。」

「——なんだ、存外似合いの召喚者だった、という事か？」

「ん？」

「貴様は化け物の血が混ざった半端者。私はいとしい姉妹すら喰らい尽くした正真正銘のバケモノだ。互いにロクでもない存在ではないか？」

——私としては、マスターの顔が苦く歪むのを想像していた。

多少、マスターが気安く話しかけて来てるのを見て、牽制代わりの一発だったというのもあった。利用し、される関係というのを変える積りは、あまりない。であれば、この辺りで少し、強めに。それで思う通りの顔が見れば、多少愉快な心地にもなる。

しかしそう思っていた……私が見たのは。

「——そう、だな。うん。似合いなのかもしれないねえな」

私の方を見て。ほんの少しだけ寂しく笑った、マスターの顔で。

この男が浮かべるにしては、些か以上に似合わぬというか。私が見ていたものとは、全く別物の顔を、見たのだった。

第三十四章

黒髭にリベンジする為の実況、はーじまーるよー

さて、今回は黒髭へのリベンジの為に、先ずはドラゴンの素材を集めて船を直そうとの事になり。そしてその素材集めの最中、新たな戦力が此方に加わって下さいました。

とはいえ、まだワイバーン狩りは終わりません。ワイバーンを指揮しているドラゴンを潰して素材が集まりきらねば補修もままなりませんし。

という事で、ドラゴンが出現するまでワイバーンを狩ったのが此方です。ゴルゴーンさんの全体宝具に寄る一斉掃射があつて相当に楽になりましたね。

『おう、こっちこっち。竜の巣つてのは、大体こういう荒涼とした場所にある事が多いんだよな』

で、案内人はまさかのオリオン（ぬいぐるみ）。如何にぬいぐるみの体になろうとも狩人としての知識は生きていますのでそりゃあもういい仕事をしてくださいますよ。ところで竜の巣の事を当たり前のよう知ってる狩人ってなんなんでしょうね（宇宙猫）
これが神話産のサーヴァントちゃんですか……

オリオン君がただのスケベサーヴァントではなく、神話産の狩人とかいうとんでもない存在である事を自覚した所で、まずは竜の巣周りのワイバーンのお掃除から入りませう。

『ねえダーリン。ドラゴンに雌雄つてあるの？』

『親はいるけど、雌雄は聞いた事ねえな』

——ギョオオオオオオオオツ！

『……………それは……………例えば……………ワイバーンよりも……………ずっと巨大な……………？』

『……………うん、ソーダネー……………』

で、その後はドラゴンが出て来るって訳。そりゃあ自分の手下どもをね、叩き潰されて怒らない親（分）はいないって言う話。ブチ切れて此方へと飛び込んでまいりましたこのドラゴン君をシバキ倒せば、船を直すだけの十分な素材が集まります。

フハハハ如何に強大な竜種とてお主、我らサーヴァントの軍勢ぞ。竜種風情が最早何するものぞ！

正直ドラゴン君つてここまでサーヴァントが揃っちゃうとただのデカい的なっちゃうんですよね……………しかも今回はサーヴァントのタイプに偏りがある訳でもないの、ちゃんとアタッカーの性能を最大限生かせるからまあ、ね？

『……………はじめてではありませんが……………やはりドラゴンと戦うのは厳しいです……………』

『なんで俺まで巻き込まれてるの……』

『う』

『まあいいじゃない。これで鱗は集まったのでしよう？ なかなか面白かったわ。見送って結果だけを知るのも楽と言えば楽だけど、こうしてリアルに人が足掻くのを見るのも楽しいわね』

そんな足掻く程でもない程度の難易度ですよ女神様。主に貴女の妹さんのお陰で……まあ、楽に鱗を集め終わったのは良い事です。

後はコレをアステリオス君に頼んで、頑張つて貰えば……

『加工及び補修完了！ 鮎底の穴は完全に埋めて水漏れも無し！ ついでに、余った鱗を衝角に装備させたよ。面白い事になりそうだし！』

それはもう魔改造に等しいのでは？ ボブは訝しんだ。

まあ取り敢えず、ドラゴンの鱗等でモンハンの強化を施した『黄金の鹿号』の完成とあいなつて、いよいよ黒髭野郎への復讐の準備も整いました。更には新戦力の加入もあつて準備万端。オリオンとアルテミス。エウリュアレとアステリオス。そしてカルデアの戦力。これ以上の状態は望めないでしょう。

……あれ？ この船って男女のカップル二つ無い？ リア充か？ リア充の船なのか？ エウリュアレとアステリオスはそんなじゃないつってんだろ！

等とホモらしからぬ感想を残したところで、いよいよこれから黒髭に挑みます。

で、気になるオリオンの性能ですが……星五版エウリュアレって感じですかね。まあ要するに男性特攻で殴り倒すのが得意なサーヴァントです。エウリュアレと揃って男性特攻がまさかの二人。黒髭をどれだけ殺したいというのか。

まあ実際ブチ殴り飛ばしたいのは間違いないので、やってやろうぜ！ お二人共！
最大の問題は敵がライダーだということ……セイバーであれ黒髭。

何だったら敵にはランサーっぽいのも居るんですよ……どうしてこの二人が居るというのに敵にランサーが居るのか。明らかに此方への悪意しか感じない。

『さて……それじゃあ、アステリオス！ 怪力無双、勇猛果敢なアンタの出番だ！』

『う、うー！』

『傷口は塞がった様ね。流石に頑丈。私の駄妹みたい……さ、やっちゃいなさい！』
『ううううううう——！』

やめて！ ゴルゴーンさんが泣いちやうから！ そうやってお姉ちゃん風吹かせないでユルシテ！ この光景をゴルゴーンさんがどんな顔で見ているのか。それを想像すると涙を禁じ得ません。

それは兎も角。さて、アステリオス君が周囲の雄共に尊敬の目で見られながら、船を砂浜から沖へと押し出してくださいました。強化された船の進水式、この船であれば、

黒髭の船相手でもそう容易くは負けないでしょうね。

所詮は人間様の船、竜の鱗を貫けるものかよ！　なお相手もバリバリサーヴァントの宝具の模様。はえー不安しかない……

『ようし、野郎ども！　あの黒髭野郎に復讐だ！　心配するな、今度は大丈夫だ！』
『アタシを信じて、ついてきな！』

さて。ドレイクの姐御の激励で士気が上がった所で、早速沖へ。この前のように奇襲を受けた訳でもなく前回よりも増強された戦力を乗つけて殴り込みに参加します。

そして流れる様に海賊船発見。いや、それは良いんですけども……なんでこのタイミングでシャドウサーヴァント達が乗った船を引き当ててしまうのか。黒髭とやる直前だつて言ってるダロオオン!?　全く、この幽霊船がよお……

まあ良いです。ぶっ飛ばすのには変わりありません。寧ろ、黒髭君も札付きのシャドウサーヴァント達を従えているので、その予行演習位にはなるでしょう。

つと、札付きの話題が出たので丁度良いですね。敵として出て来る、札付きと札付きじゃないシャドウサーヴァントの一番分かりやすい差と言えば？　結論から言うところの差ですかね。

普通のシャドウサーヴァント君達は攻撃体勢とかいう僅かな攻撃力アップしか出来ないクソ雑魚スキルしか使って来ないのですが、札付きは、とある大ボスが使ってくる

スキルを普通に使ってくるのです。

こっちのNP獲得量と防御力を落としてくる普通に厄介なスキルで、しかも人数が居ると一気に面倒くさくなる。集団である事の利点を最大限生かせるスキルを付けるんじゃないねえ（半ギレ）

ちやんと強化されている辺りあの札くつつけてる平安ワラビ野郎には恨みしか抱けませんがああずつとクソ雑魚ナメクジシャドウサーヴァントのままでも齒ごたえは無いので、丁度いいと思いますよ。

因みに幽霊船に乗っているシャドウサーヴァント君達は札付きではないです。つまりこっちの獲物同然って訳。いや普通に固いですしクリティカルは痛いですし、そこまて言える位弱い訳ではないですけれども。

さて、今回はちよつとホモ君も前線参加しつつ、レベルを上げてみましょう。こっから先は強化されたシャドウサーヴァント君達と、サーヴァントの皆様が大口開けて待つてますので、レベル上げもこまめに行わないと（使命感）

このシャドウサーヴァント君達を倒せば、この特異点においてやるべき実績解除も終わり、後は気軽に特異点攻略を楽しめるので、遠慮なく叩き潰してやりましょう。

そして。

この後は、いよいよ特異点において初めての大规模決戦。対黒髭戦です。事故死とか

がない様に気合入れて参りましょう。

第三十四章・裏：攻守交替

——作戦は、こうだ。

此方が遠距離から派手に攻撃して目を引いている間に、裏から回り込んだオリオンとアルテミスさんが敵船を掻き乱す。単純だけど、強力な射手が居るからこそこの策。

後は、此方に乗り込んで来る奴らにどう手出しをさせないか。この前のように、船を敢えて揺らされたら、どうするのか。

別に此方も、何もしてこなかった訳じゃない。

「乗り移ってきた連中から即座に叩いて！ マシユは広く雑でも良いから！ リリイは確実に一人ずつ！ 頼むよ！」

「はいっ！ マシユ・キリエライト、薙ぎ払います！」

「お任せください！ やあああつ！」

「——っ！」

船の上での戦いの難しさだって、マシユとリリイは嫌というほど分かったし。ダ・ヴィンチちゃんやロマニが、その戦いについて分析もしてくれた。

何も分からず、押し切られそうになって、ギリギリで逃げ出した、前とは違う。

俺だつてどうやって戦うのかも、考えた。

即ち……相手のペースに嵌らない事。足場が不安定でも向かつてくる相手にはガンガン攻めてやる事。要するにエイリークがやっていた事の猿真似だけ。やらないよりはずっと、ずっとマシだ。

カルデア最強の盾、マシユが豪快に盾を振り回し、敵の態勢の崩れた所に飛び込んだアルトリア・ペンドラゴン、白百合の少女騎士が、構えた長剣を振り下ろし、先ず一人を討ち取った。それに反応し、切りかかろうとしたもう一人を、返す刃で一刀両断。

「――船の防衛は藤丸に」

こんな風に倒しても……相手は、相も変わらず此方にシャドウサーヴァントを送り込んで来る。

一足飛びに船の間を飛び越えて、何人かが海に落ちようと、船に張り付けば這い上ってくる。まるで船に取り付く悪霊の様な奴らだ。

この前も、こうやってひっきりなしに船に入つてこられて、体勢を立て直す暇すら貰えずボロボロにされてしまったのだ。更に言うなら、向こうの船の砲撃の威力だつて全然変わらない。

「それでもつて、こつちからの攻撃は俺担当だ。お二人共。狙いは付けなくていいから兎も角数を頼むぜ」

「言われずとも。一々細かく狙いを付けるような真似は得意ではない」

「えっと、威力等も考えない方が良いでしょうか……」

「威力は考えて！」

でも。今回は、前と違ってこっちが強くなってる。

船の頑丈さも何もかもが違う。戦うと分かっているならこっちだってやりようはある。シャドウサーヴアント達の動きに惑わされたりはせず、兎に角上がって来た奴を叩く。攻撃は最大の防御だ。

船の上の仲間を守る事に徹すれば、後は仲間が成果を出してくれる。

砲手を担当するのはエウリユアレだけではない。ゴルゴーンさんと式部さんが無数に弾丸をばら撒く。と言っても向こうにとっての最大の明確な脅威は、エウリユアレの放つ矢なのだが。

「ぎやつ……」

「——ッ！」

「苦しむがいい……！」

なの……だが……

「船長！ あんなのが居たら、悠長に撃ち返しても居られませんわ！」

「アンだけにつてな！ あ、すみません銃口此方に向けないで……それにしてもまあ

わーお無差別ウ……やっぱあんときにエウリユアレちゃん仕留めらんなかったのは痛かったですなあ……コレ」

「ハ ハ ハ ハ ハ ハ ツ！」

いやそんな事はないのかもしれない。

ゴルゴーンさんが放つレーザーだったり、ぶつといビーム砲だったり、甲板に居並ぶシャドウサーヴァントや船員等、結構な人数を薙ぎ払ってる。エウリユアレの矢の当たる割合とか見てると、意外にもこっちの方が向こうへの脅威なのかもしれない。

というか、式部さんの術をも巻き込んで叩き落してるせいで若干威力が落ちてる気すらする。凄い勢いだ。

「全く、メドゥーサったら。傍に居たら巻き込まれそうね……アステリオス」

「う」

「おい貴様。なぜ私と姉上の間に挟まる。そのような事はしない。やめろ。私を何だと思ってるのだ貴様……あの、いや、姉上。そのようにどうして露骨に私から、あの、あの下姉様……」

いや、でもエウリユアレが距離を置こうとしてしまうのも分からないでもない。全てを飲み込む勢いで攻勢、前のめり。粉碎し破壊し焼き尽くしてやると言わんばかりのゴリゴリ具合。

そりやあ海賊の皆様にとつちや気楽に勝利の女神と騒げるが、ゴルゴーンのパワーを考えると……とカルデアのメンバーも思ってしまう程の爆発的な勢い。凄い、凄いのだが。確かにちよつとお姉さんの気持ちも分かってしまうのが、哀しい。

「あのっ！ お二人共！」

「式部さんだけに重責負わせないでねーお二人共……」

……まあ、その混乱の割りを喰つてる人がいるんだけど。という事で。

エウリュアレは仕方ない、とでも言いたげに。ゴルゴーンさんは一瞬間を顰めながら……実際式部さんは必死こいて術をばら撒いて必死に戦線を持たせていたので。そりやあ文句も言えないだろう。

「——そろそろだと思ukai？」

「どう、なんだろう……アルテミスさんが大暴れしてから大分経つてる気はしなくてもないけれども」

「だね。一応、何時始まってもいい様に、腹に力入れときな」

「はいっ！」

今の戦いの、何が凄いかと言えば……これだけのド派手な攻撃が、陽動にしか過ぎないという所か。ゴルゴーンさんの攻撃だけでも削り切れそうだと思ってしまう位だというのに、それですら相手の目を引く為の大きな花火で。

作戦が上手く行くかどうかは、先行して乗り込んだアルテミスと、オリオン。この二人こそが握っていたりするのだ。

「——船長さーん！ 準備できたわよー！」

——等と、思つて居たら。どうやら完了したらしい。

「つしやあ！ 総舵手、取り舵一杯！ 角度をつけて、衝角で土手つ腹食い破るよ！」

「あいよ、姐御！ 取り舵いっぱああああい！」

ぐるりと船が回る。アステリオスが、セイバーが、マシユが、各々の獲物を構え……そして俺も、立ち上がった。此処からは、俺達のターン。こつちに向けて歩いて来る康友に顔を向け、同じく康友のいた方向、相手の船へと、つま先を向けた。

「選手交代。派手に暴れてこい」

「任せろ！ マシユに変態行為してくれやがった借りは、必ず返す！」

「その意気だブラザー。とはいえあんまり前に出過ぎて、巻き込まれて重傷とかは止めろよな？ 俺じゃあないんだからさ」

「それ、自分で言うか普通」

少し言葉を交わしてから……パアン、と互いの手を掲げ、打ち鳴らしてバトンタッチ。その直後……赤い焰が、黒髭の船から立ち上る。

アルテミス、ゴルゴーン、エウリュアレ、紫式部。四人のサーヴァントの全力の遠距

離攻撃の影に隠れ、オリオンが船の内部に潜り込んで、ある一点に火をつける。そこは文字通り火が点けば爆ぜる、火薬庫。

爆発と、アルテミスの攪乱で、これ以上ない程に混乱した状況下。

トドメは、この前黒髭の船によってポロポロにされてしまった『黄金の鹿号』が、自分の手で。刺す。

「突っ込みなあ！ 『黄金の鹿号』!!!」

——ド　ゴン

事前に覚悟して踏ん張っていたとはいえ、それでもしつかりと揺れる位には来る、ラムアタツクの衝撃。しかしその威力をより強く体験したのは、こっちではなく、当然ながらブチかまされた向こうの方だ。

相手の船が宝具だとしても、同じく聖杯の魔力で強化され、更に竜の鱗で覆われた衝角での突撃だ。明らかにダメージを受けているのが見て取れた。そして。今なら……此方から、相手の船に乗り込んで行ける。

「さあて、掠奪開始だ。乗り込むよ、アタシの頼れるアハウども！」

「うううううう!!」

「アステリオス、行きなさい！ ——メドウーサ、アステリオスが居ない間、しつかり私と船を守りなさい。良いわね？」

「分かりました！」

船で暴れられるクロスレンジの猛者たちが、今度は遠距離担当に代わって黒髭たちの元へと討ち入る。船を守るのは、康友達のパーティーだ。

「セイバー！ マシユ！ 行こう！」

「はいっ！」

「マシユ・キリエライト。盾ですが、切り込みます！」

この前、してやられた分。

倍くらいに頑張つてやるから、覚悟しろ。黒髭!!

第三十五章

黒髭との決戦、はーじまーるよー。

前回は、幽霊船君をシバキ倒し、その勢いとはずみで黒髭戦に入った所からの、続きです。互いの船の3Dモデルが、そっくりそのまま自分達のいる陣地になっている構図がセクシー……ヒロインツ！（スタイリッシュ比喻表現）

黒髭との前哨戦は。船と船との間でのやり取りになるのですが。んで、この構図。船と船との間には一切の渡しも何もありません。

この戦いにおいてこちら側、すなわちプレイヤー側は、遠距離攻撃を持たないキャラクター……つまり、後衛からの攻撃が出来無いキャラクターを戦いに参加する事が出来ません。

この時点でマシユとリリイは攻撃に参加する事は出来ませんが、まあやる事はありません。敵を迎撃する、という立派な役割が。いやー、こつちからは乗り込めないのに、向こうからはシャドウサーヴァント君達が乗り込んで来るんですよね……

こつちの砲撃主である後衛メンバーに対し襲い掛かるシャドウサーヴァント君達を払うのがマシユとリリイの主な役割でございます。

ここで後衛メンバーが攻撃されると、こっちの攻勢が弱まってしまいますし、ある程度の攻撃を出来ないといゲームオーバー。それ以前に、乗り込んで来たシャドウサーヴァント君達の手によってマスターがやられたりすると元も子もありません。

攻勢と守勢を両方を付けて叩かねば……とはいえ、まあちゃんと後衛のサーヴァントの皆様が仕事をしているので、問題無く突破は出来るかと思われます。

『私、オリオンです！ 全員、射殺しちゃうゾ☆』

さて。各員がしつかりと仕事をしていけば、黒髭戦は次のフェーズに入ります。

敵の陣地側にオリオンが現れ、敵の船を大混乱に陥らせてくれる、のですが……ストリー的に敵は大混乱でも、実はゲームの難易度的にはさらに上がるって言う。おかしいだろそれよおオオン!?

何せ、敵の真つただ中に現れたオリオン（アルテミス）を援護しなければならぬので。敵の後衛にユニットとして現れたオリオンのHPが尽きない様に、こっちから援護をする必要があるのですよ。

攻撃してヘイトを稼がないと、彼女にヘイトが優先されるように設定されているので此方から必死こいて射撃を叩き込む必要があります。

敵サーヴァントとの戦闘で、定期的にHPは減るようになってるので、他からちやちやを入れられない様にしつかりと守っていかないと辛いです。

幸い、シャドウサーヴァント達が全員纏めてクラス・セイバーなので多少殴られようが問題無くやれるんですけど、女性二人組の方のサーヴァントがクリティカル叩き込んだりすると普通に落ちるので。

取り敢えずその女性サーヴァントを囲んで棒で叩いてヘイトをこっちに向けさせて守りましょう。やっている事が悪人のソレで草あ！

そして……悪人同然のやり方でここを突破すれば、対黒髭の戦闘は、最終フェーズに入ります。ずっと直接攻撃が出来なかったもどかしい所を打開する為の、オリオン（ぬいぐるみ）の決死行。

オリオンの入り込んだのは火薬庫。船の戦力を司る武器にして、しかしながら最大の弱点でもあります。そこに火が点いてしまえば……この様に、大爆発。

大混乱を迎えたアン女王の復讐号に対するは、ドラゴンの鱗で強化された、我らが黄金の鹿号によるラムアタックです。ダイナミックお邪魔します!!

『さて、掠奪開始だ。乗り込むよ、アタシの頼れるアホウども!』
楽しそう（小並感）

後はラムアタックでぶつかった所から、どんどん乗り込めー、ーして参ります。ここからが最終決戦!

で、漸く敵船に乗り込んだところなんですけど。事ここに至って敵には女性二人組の

サーヴァント。そして黒髭本人。前回、こっちの撤退直前にマスターを狙ってくるとか言う暴挙に出たランサーの三人がいらつしやいます。

これらを一気呵成に打ち破らねば……ですが問題はそれだけではなく、向こうにもシャドウサーヴァント達が当然いらつしやるので、決して余裕がある訳でもありません。

で、そんなシャドウサーヴァントを率いる幹部の皆様について……先ずは先方。二人組の女性サーヴァントの方々。

片やこの状況でも不敵に笑う赤と金の女海賊。担いだマスケツト銃が不敵。片や黒と銀の小柄な少女は、全くもって表情一つ変えておりません。良い胆力してんじやねえのお前ら、ええ……？

『メアリー、加わるわ!』

『うん!』

『この二人……一組でサーヴァント!?!』

この男、社長で仮面ライダー!! (大間違い)

それは兎も角として。

彼女たちの名前はメアリー&アン。彼女達もまた有名な海賊で、二人で一つのサーヴァント。恐るべきはそのコンビネーションでしょうか。後、当然のように戦う時も二

人で殴り掛かってくるという脅威。単純に二倍強いです。厄介過ぎないか？

とはいえ、この二人が単純に二倍強いという訳ではなく、何方か片方が倒れば、もう片方も倒れるというリスクも背負っています。その分、息の合った攻撃は此方に普通に痛手を喰らわせてくれますが。

コンビの女海賊として、盛大に悪名を高めたこの二人は、クラスはライダー。仮面ライダー!?（ホモは難聴）強力なクリティカルアタッカーです。油断していると敵側特有の唐突な通常攻撃のクリティカルで普通に体力もついていかれます。

というか取り巻きもシャドウサーヴァントなので、二人の連携に削られた挙句に雑魚に倒されるという事も全然あります。その辺り気を付けないと……

『其方にもたたくさんのサーヴァントがいらつしやるようですし……メアリー。ここはひとまず、何時ものように』

『——うん。僕たちはまだ負けて居ない。ここで君達を押し切れば、勝てるはずだ……行くよ!』

そう容易く突破できると思うなあ……!

と、粋がつてはいますが。此処を無事に突破できたとしてです。ここから先には文字通りの大ボス……この船の船長、黒髭が待ち受けております。

ワイルドな海賊風体から繰り出されるめっちゃオタク口調、そしてキモい。という事

しか今の所分かっていないこの男ですが……そんな単純な相手ではございません。

正に強敵と言えるでしょう……なおそれらを私が相手にするとは言っていない（半笑い）

だって、乗り込むのは藤丸君チームですし。えっ？ 私達も一緒に突撃するんじゃないですか？ いいえ、私達は居残りでございます。

一緒に乗り込めれば戦えるのでは!? と思っていていらつしやる方々、じゃあこつちつていか黄金の鹿号はどうするんですか？ がら空きですよ？ って話になってきます。

という事で、此方にも戦力を裂く為に、ホモ君チームは此方へ残り、こちへの船を潰そうとしてくる敵の迎撃をしなければなりません。え？ 敵船の戦闘員が乗り込んでいるんだからそんなこつちに手を回してる余裕あるんですか？

そりやありますよ。寧ろ、向こうにとつても、こつちの船が沈む様子を見せられればこつちだって色々と動揺するかもしれません……とか言うストーリー上の理屈は兎も角として。

そりやあまあ、ここで何もせずサーヴァント君達の暴力で何とか出来てしまったら面白くないですし。難易度調節と言ってしまえばそれまでですが。

『ちよつと待って、まだ乗り込んで来るわよ!?』

という事で、敵の戦力はシャドウサーヴァント君達と、海賊の皆様方です。敵の戦力

に余りにも芸が無さすぎる（直球）

「そりやあ下手になんか唐突なキメラとかの追加の戦力を送り込まれても『何処から湧いた!?!』ってなりますけど。」

「ここを耐え抜けば後は、藤丸君達が黒髭たちを叩き潰してくれるので、それまでしつかりと頑張りますよ。」

第三十五章・裏：黒髭決着

——黒髭は、嘗てメイナードという男が率いた、イギリス海軍の奇襲を受けた。

何十人といった部下は十数人程度まで減り、嘗ての栄華は見る影もない程に陰り、最早終わりの鐘の音は響いていただろう……しかしながら。それでも尚、彼は仕掛けて来た海軍に立ち向かったのだという。圧倒的な戦力差も全く気にせずに。

憤怒の表情を浮かべた彼は、そこから恐ろしい大暴れを見せた。多勢に無勢という言葉を覆しかねない程の大暴れをして見せた。

結果。二十五の刀傷と、五発の弾丸を体に刻まれて尚、メイナードの部下の多くを道連れにする程に彼は暴れ続け……最後には首が切られようとも彼の体だけが船の上を歩き回って、そして果てたのだという一節すらある。人であったというのに、彼はまるで怪物のように恐れられた。

「——オラオラオラオラアッ！ チミ達は拙者を怒らせたあ!!」

「威勢のいい割には後ろに下がってばかりいるんじゃないよお前え！」

「え、だってBBAが怖すぎますし……」

……目の前の男がそんな物凄い人物に、俺からは到底そうは見えないのは、どうにも

目の前の男が真剣に戦っている様には見えないからだろうか。

「それよりBBA。ワタクシにばかり集中してはいけないのでは？ 船にドンドン拙者のお仲間が乗り込んでパリーナイツ！」

「はっ、船には護衛は残してる、問題ないよ、おら死ぬっ！」

「どうわっ!? ととと、危険危険。そうでちゆか……ま、拙者もそんな事で隙見せられて負けられても拍子抜けですし」

しかし、真剣に見えなくてもその動きは機敏で、そして実に目敏い。ドレイク船長の放つ弾丸を躲す動きは、地を這い、体を投げだす泥臭い動きだが、しかし計算された動きなのだ。隅に追い込まれない様に。

今の弾丸も、空を切って、ロープの結び目の一端を切り飛ばすに終わってしまう。

もし躲せないタイミングだったとしても……そういう時には、時には冷静に誰かを盾にして避ける。いや、避けられないタイミングの時には、誰かが近くにいる様に動いているだろう。盾に出来る様に。

「あ、そこですぞ空気砲ドカーン!!」

「っ!!? ……外れだっ！」

「いや今の躲すとかどんなチート!?!」

「はっ、同じ層同士だからねえ。何処を狙えば『キツイ』かってのは分かってる」

「それに合わせて動いたって事お!? ううん海賊という言葉の意味を考えさせられたくなる大活躍! RPGの主人公か何か!」

ドレイク船長は、足元を狙って相手の態勢を崩してから本命を打ち込む。そんな搦め手を上手に使いながら戦っているのだから凶悪。しかし。

その間、ドレイク船長の攻勢を本当に僅かな合間を縫う様な動きが出来る時点で怪物なのに、反撃で弾丸をぶつ放してくるのだ。英雄というのはどれだけ規格外なのか。分かる様な戦いだ。だが……

「はっ、まあウザりたいそのやり方を取れるのもそろそろ最後だ」

「いやーBBA明らかにセリフが悪役ウ!」

「船員を盾にしてるそっちの方が悪役だろうが」

「あ、これは船員って言うかマジに優秀な木偶位の感じなので……別にどうやって使い潰しても良いですしおすし。それに、意外とまだまだおりますぞ。黒子君達。ほれほれBBAの後ろとか」

「……っち、本当にウザりたい!」

先ほどから、船員を盾にするやり方をしているというのに。ドレイク船長がそれを特別に咎める事もない。マシユは、最初に黒髭がシャドウサーヴァント達を盾にしたときなど悲鳴を上げかけたのに。

黒髭も黒髭で、当然と犠牲にしたシャドウサーヴァント達を、まるで伏兵のように運用したりもする。先ほど、撃たれたと思つたシャドウサーヴァントの一人がゆらりと立ち上がった後ろから切りかかろうとしていて……ドレイク船長がすんでの所で額を撃ち抜かねば切り裂かれていたかもしれない。

「硬い船員共だねえ」

「命令にも忠実ですしな」

「だからってこんな無茶同然やり方させんなドサンピン」

「海賊が無茶せずはどうするんですう〜？」

ドレイク船長は、まるでそこまで珍しくもない事のように接しているのが、彼女も同じ『海賊として悪逆を示す』事をしていた事を物語る。

目の前で広がっているのは、まさに海上と言う自分達のテリトリーの中で、互いに食い合つて只管に生き残り続けて来た『仁義なき者同士』の地獄のような争いなのである。

「つ……ドレイク船長！」

「任せる！」

「——分かりました！」

黒髭を相手にして、あそこ迄戦えるのはドレイク船長くらいだと思える戦い。故に……此方の方は、全面的に此方が引き受けるしかない。

「つたく……こんな真つ直ぐな剣を振るわれたらおじさん眩しくて目が潰れちゃうよ」
「そう言う貴方の槍は、なんだかやりにくいです!」

「まあそう言わせてこそそのおじさんの槍捌きなもんで。いやでも、厄介だねえ盾持ちと組んでる剣士の相手つてのは」

「お褒めの言葉と……受け取りますつ! リリイさん!」

「はいつ!」

特に、あのランサー。

先ほどから、リリイが攻めて攻めて、攻めて。マシユに防御を殆ど任せた強引な攻勢で兎も角相手に主導権を渡さない、そんな戦い方をしている。一見、二対一で、しかも攻め立てているリリイの圧倒的有利にすら見えるのに。

そうじゃない。

リリイの攻撃はさつきからランサーに全く届いていない。まるで木から取れた木の葉でも殴りつけてるみたいに。するりと抜けていく。どんなに攻めても、気が付いたら一歩間合いの外にいたり、攻めてるリリイの側面を取つてたり、だ。

確かにランサーに手出しをさせない程に、攻撃は出来ている、のだと思う。ランサーの顔も、余裕がある様には見えないし。それでもごく稀に……先ほどのようにドレイク船長を狙つて不意打ちしてきたりするのだ。

「……メアリーとアンの海賊コンビを倒して、少しは状況が良くなると思っただけとんでもない。」

黒髭、そしてあのランサーが残っているだけでも、黒髭は未だ落ちない。船長としての力量もそうだけど。伏兵を配置する位置だって、絶妙だ。策略家としても間違いない一流である。

「ああもう、チマチマしたのはもうやめだ……ケリ、付けようじゃないか御同輩！」

「お、BBA怒っちゃった？ 激怒？ 大激怒？」

「——いいや、それ以上に頭は冴えてるさね」

だけど。そんな敵に相対して尚。そのどうしようもないと思えるような所に壁を開けるのが……フランシス・ドレイクなのだという。

どんな相手であつても。勝ち目も、負けの目もぐっちゃぐちゃにかき混ぜられるこんな混沌の中でも。勝利と言う星を手繰り寄せる。それこそが。

『星の開拓者』なのだ。

「——オオオオッ!!」

直後、ドレイク船長の後方で上がる雄叫び。囲まれていたアステリオスがシャドウサーヴァント達を力で無理矢理押しつけたのだらう。そこにドレイク船長は目を向けた。

「はっ、そりゃあデカイ油断ですぞオっ！」

「油断だと？」

直後、不意打ち気味に黒髭のカトラスがドレイクに襲い掛かる。先ほどまで、全く見せて居なかつたその武器。寧ろ、こんな大きな隙を突いて切りかかる為に取っていたのだろうか。兎も角。

剣を持って、獣の如く躍りかかる黒髭相手に、しかしドレイクは……コレが油断に見えるのかと。

「此奴は……誘いつてもんさね」

「っ!？」

これは、お前を打ち取る為の罠だと。

後ろに向けて跳んだドレイクがその手に掴み取ったのは……シヤドウサーヴァント達の手から弾き飛ばされた黒い刀。アステリオスとの力の差を見せ付けられた証。そして……もう片方の手には、先程、間違つて穿ったロープの端。

飛んだ勢いで、ぐいと自分を揺らし、そしてそのまま振り子の如く……

「——いやー、コレが、ヒーローってやつかあ」

「チエストオオオオオオオオオッ！」

勢いに乗って。空を飛び。

紅い流星となつて……その剣を、黒髭の喉元へと突き立てた。

第三十六章

守護る将が恥ずかしくないの？ な実況、はーじまーるよー。

『黒髭が誰より尊敬した女が。誰より焦がれた海賊が！ 黒髭の死を看取ってくれる上にこの首をそのまま残してくれるなんてな！』

『それじゃあさらばだ人類！ さらばだ海賊！ 黒髭は死ぬぞ！ くっ、くははははははははははっ！』

皆様。ご覧ください。黒髭船長の御帰天でございます。FGORPGになってから消滅演出が足から頭に向けて消える様になってるのが、余計にこの帰還の際のカッコ良さを補填と言うか……パワーアップさせてくれると思うのですが、如何か？

と言う事で、対黒髭戦。漸く、ようやく決着でございます。ガッツとその他諸々が相まってかなり粘りましたが、最後はドレイク船長の宝具を絡めてのブレイブチェインでガッツ諸共全てを消し去る事が出来ました。

いやあ、アステリオスがシャドウサーヴァント達のフルボッコに有ったり、リリイというセイバーで対処して、不利全一だった筈のランサーおじさんが異様な粘りを見せたりと此方の予想だにしない様な事故がありました……

あ、一応此方から藤丸君側の戦況は見る事が出来ます。とはいえ、まあそこまで苦しい戦いになる訳もないやろwwwwとか高をくくつていたらファツ!? となつたので本当に見る必要があつたのか小一時間。

とはいえ、我々の勝利には変わりありません。さあ、いよいよ特異点解決に向けて障害も消えたので一直線に……とは上手く行かないのが人生。

えー、正直に申しますと。黒髭船長が死んだのは、我々の手によつてではありません。バトルでトドメを刺したのはドレイク船長ですが。

『いやあ……やつと隙が出来たよな、船長。全く油断ぶっこいてるふりして何処だろうと用心深く銃を握りしめているんだからねえ——オジサン、全く感心したぜ』

『天才を自称するバカより馬鹿を演じる天才の方がそりやっつかいだわ』

『……成程な……道理で、裏が読めぬ相手だと……しかし、この状況で裏切るとかアホでござるかヘクトール氏は』

そう。ポロポロになつた黒髭にトドメを刺したのは此方の方。遡る事数分前、まさかの黒髭側に付いていた筈の裏切り、ランサー——真名を、ヘクトール！

輝く兜のヘクトール。トロイア戦争においての、伝説の英雄アキレスの最大のライバルにして、トロイアを最後まで守護せしめた怪物。守勢において右に並ぶもの無し！

それがいよいよ船長に牙をむいたつて言う。会話からしてこの二人、船の上で波に揺

られている間も互いに牽制でバツチバチしていたのかという恐怖の事実。怖いよ黒髭の船って……

『聖杯……獲った!』

『ぬかつ、た……!』

そしてまずこのオケアノスにおいての特異点であった、黒髭から聖杯を強奪。弱りに弱っていた黒髭から強奪、とか言うとしてもない卑劣。これは穢土転生クラス。

更にはこつちのドレイク船長を狙い――

『正しい聖杯なんざどうでもいいさ。こつちの狙いは、彼女でね……』

『きやつ!』

と見せかけてエウリユアレ様を強奪に掛かりました。これは完全に誘拐犯。許されぬぞこのロリコン親父。黒髭とて手だしはしなかったのに!! なおエウリユアレちゃんを手に入れてたら確実に手出しはしていた模様。

まあとはいえ此方の船には我々ホモ君チームが居たのでね。さつさと取り押さえて、尾張ツ! 平定!! 幕府解散! (天下布武) 豪快にゲームオーバーにしてやろうと襲い掛かった訳ですよ。したら……

『つとお! まあ落ち着けよ。オジサンも……流石に別嬪の首を槍で搔つ切るなんてやりたくないんだよなあ』

勝つたらこれだよ!!!!!!

F G O R P G テメは、徹底的にこっちのハッピーエンドルートのを潰しやがって！お前ほんへでそんなダーティな側面見せた事もねえだろうが！ まあトロイア戦争での逸話でも結構な事してたし、原作再現では？（お目目グルグル）

と言う事で、此方のアステリオス君も、序にゴルゴーンさんも行動不能にされて準備された船で無事高跳びされてしまつて。許せんマジで……

こちらの宝と呼べるものを全て奪つて逃げましたあの野郎が。

黒髭との激戦の隙にさあ……割り込んでさあ……しかも人質なんて手段も使つてさあ。ホントに君、恥つてものを知らないらしいねえヘクトール氏……多分現状、黒髭の印象といい勝負で悪印象ですよ。

黒髭君は最後に漢気見せて行つたからね。そりゃあ黒髭の上がる印象とヘクトール氏の落ちる印象で綺麗に相殺もされます。という事で、とんでもなく舐めた真似をして下さつた怒りと共に、守護の名将の名声に自ら泥叩きつけたランサー野郎を追いましう。

『……………』

え？ ゴルゴーンさん？ ……会話フェイスでも話しかけても一切反応せず、この状態で一定以上話しかけるとガメオベラする位にはご機嫌斜めですよ。細かいねえFG

ORPGくんは……(震え声) こういう時はキャラに話しかけちゃいけないよ、って言う雰囲気を出してくれているんですね。優しい○

姉を搔つ攫われた訳ですから、そりやあこうもなりますけど。しかも人質なんてやり方までされて。これはヘクトール氏はゴルゴーンさんの手で無様な石像にしなきゃいけませんねえ。

まあ先ずはエウリュアレちゃん救出を優先ですけども。追いつけば自然とヘクトール氏を消し飛ばせる機会も出て来るとは思うので。

『えう、りゅあれ、を、たすけに、いく』

『……その気持ちは分かりますが。今は傷をいやす事に専念してください』

『いや、だ……!』

とはいえブチ切れているのはゴルゴーンさんだけに非ず。アステリオスも中々トサカに來ている状況です。こちらはマシユと、藤丸君の二人で取り敢えず宥めてはいますので未だ落ち着いていえると言えそうですけど。

そんな怒りを大爆発させそうな状況で海賊船やら何やらはどうでも良いんだよ! こつちに歯向かつてくるんじゃない!!

しかもそれだけではなく……この特異点からの悪意を持ったプレゼントかの如く嵐迄こつちに飛んでくる始末。クソツ、これで足止めしなきゃいけないのか……と、思っ

ている方はドレイク船長と言う方を分かっていない。

『この嵐の中だが、帆を全部這って全力疾走するよ!』

『もう一度、豪快に海の上をライディングしようじゃないか!』

ドラゴン素材で強化された船の耐久力を頼りに大嵐の中を全速力で走り抜けるとか言いなさる。とんでもない無茶ですよコレは。

まあとはいえ……その無茶を熟したからこそ、いよいよもって我々は、逃がした獲物の背を捉える訳なのですけれども。

『ようし、追いついた。問答無用で衝角をぶち当てる! 野郎共、準備はイイか!』

『うす!』

『はい!』

『ようし。あのいけ好かない野郎に一発キツイのを喰らわせてやるよ!』

と言う事で、ヘクトール氏には申し訳ないですけれども。此方の全ての恨み怒り大爆発諸々をもう顔面に叩きつけて絶頂から絶命迄追い込んでやるから覚悟しろホント……お前を芸術品にしたんだよ!!! (妥協最速RTA)

……さて、問題は相手。兜輝くヘクトールの性能なのですが。

確率とはいえ、スタンとチャージ減を両立してるとか言うクソスキルを撃ってくるんですよねこの人。しかも、最大の問題として敵側から飛んで来るこの類のスキルは大抵

直撃してスタンもチャージも減るって言う。

なんでしようね。あの敵にした時にある特有の中確率以上はほぼ確定みたいなバカみたいなガバガバ確率。更に普通にHPの回復と弱体解除も持つっていう耐久型ランサーとして完成されています。

此奴とシャドウサーヴァント達の組み合わせは普通に耐久として面倒な構築なのでしつかりと討ち取ってまいりますよう。

対戦、よろしくお願いします。

第三十六章・裏：怒りを澄ませば

「……」

「……」

——取り敢えず、ゴルゴーンさんについては俺が頑張るから、式部さんは他の奴を上
手い事、抑えてくれれば……多分下手に話しかけたりすると嘯み付いてきたりするくら
いにヤバい状況だと思うし。ん？　なんで分かるかって？　……まあ色々？

等と。マスターが言われてからというもの。ずっとお二人の様子を見ているので
す
が。

マストに寄りかかって一言もしゃべらず、表情も硬いゴルゴーン様。そんなゴルゴ
ン様の裏で、のんびりと青い空を見つめていらつしやるマスター。そんな構図がずつ
とずっと続いています。

藤丸様も何かしら元気づけよう、とはおっしゃっていましたが……私がマスターの事
を伝えると、それなら、とマスターにお任せするとの事でした。

周りの方々の顔色は……正直宜しくありません。

ゴルゴーン様から溢れ出す、とんでもない迫力、怒りの感情を、どんな方でも感じ取

れてしまうのでしょうか。

アステリオス様も少しばかり居心地悪そうにしてらっしゃいます。ドレイク船長は……口笛など吹いていらっしゃいます。アルテムス様は、不安げにオリオン様を抱き締めていらっしゃいます。

間違いなく、弾けたら大変な事になるでしょう。起爆する直前と言った感じです。それをマスターも感じている筈なのですが。どうにも、マスターは涼やかな表情をしていらっしゃいます。

流石にそんなマスターに気が付いていない訳もないでしょう。というか、マスターが何も言わず傍に座った時に、舌打ちすらされていたような……

もしや、今マスターは、とんでもない無茶をしていらっしゃるのではないかとすら思えて来るのですが。

「——マスター」

「やっていいよ」

……声をかけたのです。ゴルゴーン様から。明らかに不機嫌そうな声で。マズい、とだれもが思ったと思いますが……それ以上に驚いたのは、マスターの即答かと思えます。本当に、何の躊躇いも、戸惑いも無く。間髪入れず、回答したのです。

「……まだ何も言っていない」

「アイツをぶつ飛ばしたいんだろ。邪魔なんてしないよ。出会ったらぶつ飛ばせ、なんて生ぬるい事は言わんともき。消し飛ばしてやれ。跡形もなくな……藤丸、任せて貰つて構わないな。あのランサー野郎はよ」

「え、あ、ああ……うん」

マスターは、当たり前のようにゴルゴーンさんの言葉に答えました。まるで、なんていうのか分かつていた、とでも言いたげに。笑つて――

「俺達は、アンタのやりたい事を否定しないし、サポートだつてするからよ。取り敢えず今は落ち着いてもろて、な？」

「落ち着いていられないのが見てわからぬのか？」

「浮ついて牙が鈍る方がヤバいんじゃないの」

――そう、口を開きました

「……何？」

「言つとくけどな。助けられるのは俺じゃない。幾らでも利用されてやれるし、サポートも出来るけど……強いサーヴァント相手なんて出来る程強靱じゃない。アンタの思つてる通り貧弱な人間だ。出来るのはアンタなんだよ」

私の周り、当然私も含めて。全員の背筋が凍った音が聞こえた気がしたというのにさらにマスターは畳みかけるのです。ゴルゴーン様に。怒涛の勢いでした。頭が少しく

ラツとした気がしました。

確かに言っている事は、間違いないのですが。しかし、正論と言う名の鈍器で、相手の頭を殴りつけるかのような暴挙。些か感情的になって今のゴルゴン様に対して、それは、余りにも。

「貴様」

「俺は。アンタならやれると思ってる。でも……」

「だまれ」

ひつ、と。喉の奥がなってしまうのを抑えられません。

突如としてマスターの周りを取り囲んだのはゴルゴン様の髪が変じた化生の蛇。顎を大きく開いたその姿は、明らかに怒りに満ちている様にしか見えませんでした。

思わず、と言った様子で盾を構えたマシユ様を、藤丸様が手で制したのと同様でした。マスターはその蛇に……当たり前のように触れたのです。

「……良い感じだ。俺だったら一噛みだろうな」

「そうだ。貴様の体など当然のように噛み切れる」

「んで？ それでこの世に存在する為の楔を噛み切って自滅か？」

「……」

「俺はな。姉妹を奪われててブチ切れてるアンタの気持ち分かる。分かるから言っ

るんだよ。他がどうでもよくなるだろうな。でもそれでヤケなんぞ起こしたらペアだ。全部纏めて。それを許してくれるほど、この世界は優しくない」

冷たい目でした。

今までも、マスターが威圧的な表情をしたりするような事はありましたが……何方かと言えば、激情に刈られたような表情が多かったのです。ここまで冷えた瞳をこの人がするのは初めて見たと思います。

「それを一番分かっているのはアンタだと思っただけ……違ったかな」

「ぐ、ぬ」

「——イライラすんのも当然だ。感情的になるな、なんて言わないよ。人間の方がよっぽど感情的になって暴走する事なんてよくある事だ」

宥めている、と言うよりは。ゴルゴーン様を……叱っている、と言うべきでしょうか。人が。怪物を。見る人が見れば、傲慢にも思えるそんな無茶を、しかしながらマスターは一切目を逸らさず、焦らず。当然の事をしていると、自分で信じていると、態度で堂々と示している様に見えます。

「だからその感情を効率的に相手を潰す為に向けた方が、合理的だ。お姉さんを取り戻すんだろ？」

「……当然だ、姉上は必ず取り戻す。私の手で」

「オーライ。じゃあ俺に八つ当たりする前に、研ぎ澄ませてくれ。あのランサーへの怒りって奴をさ。まあこれはマスター命令だ。ムカつくとしても、そこで自分を納得させてもらえれば、つてな」

ゴルゴーン様が、眼を釣り上げて睨んでいらつしやいます。マスターが、相も変わらぬの顔をしていらつしやいます。

とんでもない無茶でした。皆様が息を？んでいました……そんな中で、ふう。と一息を吐いたのは、誰あろう……ゴルゴーン様。眉間に刻まれていた険しい皺と、固まっていた表情をふつと緩めて、マスターへと差し向けていた蛇をゆつくりと退かせました。

「利用しろ、と言うのは嘘偽りなしと言う事か」

「言つたとおりつしよ？ 何時だつて利用してくださいな」

「そうだな。ここで無駄に感情を爆発させても無為だ。利用させてもらうとしよう」
ゴルゴーン様がゆつくりと元の位置に戻られたのを見て、今度は皆が詰まっていた息を一気に吐き出して……そのままゴルゴーン様の尻尾部分に倒れ込んだマスターを見てもう一度皆が血の気を引かせました。

そんなマスターを、ペイつとゴルゴーン様は尻尾で持ち上げて投げ捨てて。マスターは笑っていらつしやいますが、ゴルゴーン様は……残念な方を見る目で見ていらつしや

います。けれど、先程よりも、明らかにのんびりとした空気が流れていて、漸く。今度こそ。

船内に居た皆様は、固まっていた体から、力を抜いたのです。

「——雨降って地、固まる……っつて奴でいいのかな？」

「恐らくは。っつて式部さん!?! どうしたんですか!?! 先輩、式部さんが!」
ただ。

私にはちよつと、一連の出来事が些かと刺激的過ぎて。ゴルゴーン様が尻尾でマスタ―を投げ捨てた時点で、腰が抜けてしまったのですが……はい。

第三十七章

金色を殴る実況、はーじまーるよー。

所詮貴様は単騎のサーヴァント……：我らに勝てる道理無し!! と言う事で、シャドウサーヴァント君達諸共、全てを爆破殲滅いたしました。この追撃時のヘクトール氏のお供つて実はい以外にも数が少ないって言う。

準備万端、タイミングを見計らった完璧な動きで黒髭氏に叛逆したヘクトール氏にしては意外にもああいう兵隊に關しての準備は無かったのでしょうか。詳細は分かりませんがまあこのタイミングでのヘクトール氏の追撃は苦しくはないという。

後は、なんでもか知りませんがえげつない位にゴルゴーンさんがクリティカルを叩きだして下さったのが本当にありがたかったです。星（クリティカル確率）が二十とか十位しか付いて無くてもでも全然クリティカル叩きだして下さるので。ヘクトール氏限定で。なんの恨み!?!（ZZZ）

『——ま、今回はオジサンの粘り勝ちって事で。いやはや、疲れた疲れた』

まあそんなクリティカルぶん殴られサンドバッグと化したオジサンを倒し、しかしながらこれでエウリユアレちゃんを取り返してハイッ！ 終わりッ！ とはならぬは世

の常でございまして。下山人に追いついたこの直後ですが出て参りました……ヘクトール氏の雇い主が。遂に。

さあ黒髭をダシにして出したんですからそりやあ大物なんでしょうねえ!!!

『——よし、見つけたぞ』

ヴオエツ!!! (拒否反応) カアツ、気持ちわりい、ヤダオメエ……! なよなよしてる

……肌白い!!……金髪……ジロツクだ、コイツジョツクだ! これは許されぬチエスト本能寺行っちゃいましょうか!!!

下姉様をさらったあのランサー野郎に追いついたと思ったらムカつく金色が出て来やがったんですよ……なあに!!? これは殴り倒さざるを得ない。

という事で、多分ですけどもこのFGO界限でもトップクラスに嫌われているサーヴァントの一角である、イアソン (騎) のご登場です。嫌われているかとはかくとしてクソ野郎度合いは間違いなくトップテンに入る逸材です。

イアソニス 誰と思う方は取り敢えず、『妻と親友に頼るのが全一の、肝心な時にしか役に立たない、めつつつちや嫌な白石由竹 (船乗り)・ギリシヤ神話出典』と覚えておきましょう。凡そそんな感じの英雄ですよ。逸話もないこともないんですけれど。

そんな事はどうでも良いんです。コイツの問題はそんな逸話がそんな有名ではないとかそんな事ではなく。ともかく『イラツ☆』とさせられる要素がてんこ盛り山盛りな

事。

此奴の立ち絵つて、ポーズからしてなんか、良い感じ、絶妙にムカつくタイプのポーズしてんのがイラツ☆とさせられてしまうというか。なんだその右腕は、ワインでも取めて良い感じにしてやろうか。

というか。

『一つ挨拶でもしてやろうじゃないか』

で配下に岩投げさせんのはどうなんだお前それエ!? お前の故郷は相手に岩投げする所から挨拶始めんのか。どんな蛮族? まあギリシヤ神話なんて殆どの男子が蛮族みたいなものやし(風評被害全一)

しかしこの、この憎たらしい貌ですよ。軽薄、つて言う言葉が良く似合うこの。こいつの! ヘラつて柔らかく口が開いてて、締まりがなく!

『ど、け……!』

『ぬ、おとおおお!!』

しかし、アステリオス君がこちら側について無かつたら非常に危なかつた状態ですね。実際、ここでアステリオス君が居なかつたりするとこの岩の一撃で船が大混乱し、沈没してオケアノス絶望ルートに行ったりします。アステリオス君ありがとう!!!

さて、こんなとんでもない無礼を働いて下さりやがった奴らには、さて。どのような

無礼講でお返ししましょうか。

『何だ、人間の出来損ないか！ 英雄に倒される運命を背負った、滑稽な生物！』

……スウウウウウウウウ……ハアアアアアアアアアアアアアア（クソデカ溜息）

お隣の、ね。儂げな少女の解説……アステリオス君に対しての解説を聞いた後の評価でございます。コイツもサーヴァントとか笑いが止まらないまであります。英雄の座の採用担当は此奴を採用しようと思つた時、泥酔でもしてたんじゃないでしょうか。

取り敢えず、こつちの無礼講レベルは今ので三段階くらい上昇したので、確実に踏み潰してやるから覚悟しろこの野郎。

『……で一切合切決着を付けようじゃないか』

『君達、世界を修正しようとする邪悪な軍団と——我々、世界を正しくあろうとさせる英雄たち。聖杯戦争に相応しい幕引きだ！』

バカな、（無礼講レベルが）まだ上がるだど……!? 此奴のイラつかせパワーは生半可な物ではありません。ホモ君がちゃんところこういうストーリー内でもセリフを用意されている感じであれば間違いなく石の一つでも投げたでしょう（言葉は否す）

しかし、如何にイアソンがウザくてぶん殴りたくて小物臭漂う雑魚にしか見えなくても油断してはいけません。

『ふうん。アレって、もしかしてアルゴ号？』

『アルゴ号……？　まさか……！　オリオンさん、アルゴ号って、あのアルゴ号ですか!』

『はい、ご名答だこん畜生！　ありや、真正正銘の『アルゴ号』だ!』

——アルゴ号。ギリシャ神話に詳しい方なら知っているでしょう。その名前。

人類史の中でも、英雄が集う集団と言うのは幾つかあつて。ブリテンの騎士王が率いた『円卓の騎士』達。あらゆる侠客たちが集う豪傑たちの総本山『梁山泊』。そしてその中でも札付きのバケモノが、アルゴ号でございます。

金の羊の皮という宝物を求めて旅立った、冒険者たちの船。人類最古の海賊船といつても過言ではない者達。恐るべきは、その面々。ギリシャ神話とか言う型月的に最強クラスの神話体系の英雄たちの上澄みだけをポンポン乗せていまして、中でも……

『■■■■ーッ!』

多分ギリシャ神話をたつた一人で最強格に押し上げていると言つても過言ではない文字通りの怪物。十二の神よりの試練を踏破した半神。Fateチートモンスターの中で、最も有名な存在。

ヘラクレス。またの名をアルケイデス。綺羅星の如き英雄達の中でも、更に恒星が如く輝く究極の一角です。

正直イアソンとかどうでも良いんです。あんな初期レベルの式部さんでも瞬殺で

きるレベルの愚物なんで。実際。アレの取り巻きこそが一番厄介って言う。アルゴノーツってなんでアイツが船長やつてるんだらうって言うレベルで周りが馬鹿有能なんですよ。

『私の願いは分かるよね？ あいつらを粉みじんに殺して欲しいんだ！ 君が弟をバラバラにした時みたいに！』

……んで、もう一人。クソデリカシーの無い事を言われて戸惑っている彼女。彼女もヤバいです。人類史、キャスターと言われれば恐らく、あの人が真つ先に上がるレベルの魔術師。ギリシャ神話において『魔女』と恐れられた知恵ある女性。

Fate/stay nightでのキャスター、メディア……その彼女の若かりし頃の姿。キルケーに師事し、アルゴノーツで辣腕を振るっていた頃の姿。メディア・リイ。神代の魔術師、と言われれば重篤な型月ファンは震えが止まらなくなるでしょう。

武の極致と、術の最高格が揃ってイアソンに味方している状況。で、その後ろからまるで自分がやっているかのように誇らしげに笑うイアソン。クソ見たいな状況ですがここを突破しなければエウリュアレは奪われてしまいます。あーあの金髪の顔陥没するまで殴りてええええええ！

——と、ここまで言っておいてなんですが。

実はここはそこまでの窮地でもないんです。まあこの戦闘が終わった後に理由はお話ししますが。と言う事で、先ずはメディアの送り込んで来る竜牙兵から片付けて参りましょうかね。

第三十七章・裏：雷光と支配する女

アステリオスは必死だった。

『あれはヘラクレス、人類史上最強の英雄よ。あんなの、災害みたいなもの。雪崩に立ち向かう人間は、勇者じゃない。只の無能よ』

そう女神が言った。それを分かっている。自分が無惨な結末を迎える事も承知して、それでも尚……彼は言った。それでも尚、誰かがやらねばならぬのであれば。自分がやるんだと。それが良いんだと。

だって、アステリオスにとって。それは当然の役割を引き受けたに過ぎなかった。その役割を引き受けられるのは、きつと自分しかない。そう思ったから。

『おれ、かいぶつ。なんにんも、こどもを、ころした』

それは本心からの言葉だった。罪もない子供を殺した自分は、恐ろしい化け物なのだと思います。それ以外には成れないのだと思っていた。ずっと。だけど。

そんな化け物が、旅をしたのだ。この海で。キラキラと光る、美しい蒼の上を、船で旅をしたのだ。薄暗い迷宮から飛び出して。

楽しかった。

見た事も無い景色を見た。船を直した。キレイな人を乗せて暴れた。仲間にかけてもらった。いろんな人たちに、頼りにして貰えた。全てが、初めてで、キレイな思い出。何よりも。皆が自分の事を、アステリオスと。名前で呼んでくれたのだ。

こんなに嬉しい事は無かった。こんなに喜ばしい事は無かった。自分は化け物だ。けれどそんな事を気にせず、皆が自分をヒトであった頃の名前で呼んでくれた。

こんな自分でも、彼等の仲間であった。

だから、仲間を助けようと思った。自分が、助けようと思った。もし、自分が犠牲になっても、構わない。そんな無垢な献身の心で。

「——アステリオス！」

「ぐ……」

「■■■■■■■■■■——ッ！」

——だけど。

一人じゃ、ない。

「よそ見をするな、筋肉達磨！」

「■■■■■■■■■■っ!？」

アステリオスの背後から。がつぷり四つに組んだヘラクレスに向けて、容赦のない一手が襲い掛かってくる。先ほどから、執拗に目を狙う容赦のない一発は、如何に最強の

英雄ヘラクレスと言えど、無視は出来ない。

一度蘇生する様を見せられた。だからなんだ。であるならば生かさず殺さず。じわじわと、先ずは足止めに徹する。アステリオスと、ゴルゴーン。二人の怪物が手を組んだ故の、奇跡の守勢だ。

そしてヘラクレスを抑えられれば……周りが生きる。

「クソツ……ゴルゴーン、アイツさえいなけりや……！ 化け物二匹が、身の程もわきまえないで逆らいやがって、クソ何やつてるヘラクレス！ さっさと潰せ！ メディア、お前もヘラクレスをとつとと援護しろ！ 何をやつてる役立たず！」

「申し訳……キャツ!？」

「申し訳ないねえ船長さんよ。アンタの嫁さんは此処で仕留めさせてもらう。女流作家さんよお、合わせなア!!」

「分かりました！」

——ヘラクレスには、もう一つの危機がある。

ゴルゴーンの石化の魔眼は、凄まじい力を持っている。如何に十二の命を持ち、生中の妨害等全く気にも留めない程の超人、ヘラクレスと言えど、一度は耐えられないと、言っていた。

そして……もし石化すれば。アステリオスは、決してそこを見逃さない。ヘラクレス

を海へと放り捨ててやるつもり満々だった。

如何にヘラクレスとはいえ、石化された上に水の底に放り込まれば、どうなる？
蘇生する間に大きく水の底へと沈んでいく。もし水圧がその腕でもどうしようもない所にまで至ってしまえば？

回収も出来ない。不死身のガラクタの出来上がりだ。

しかし、それを阻止しようにもヘラクレスを支援する他のサーヴァントは、マトモに援護に加われる状況ではない。

メディアを狙うのは、遠距離からの打点を持つドレイクと紫式部。竜牙兵も、援護もさせない程の連続攻撃。そしてもう一人。接近戦に混じって、共にヘラクレスの周りをどうにか出来そうなランサーはと言えば……。

「メドウーサー！ アステリオス！ もう少しよ！」

「う……ん!!」

「無様な石像になるか、頭を討ち取られるか……好きな方を選べ、大英雄」

「く……クソがつ!! ヘクトオオオル!! 何をやってる！ 早くヘラクレスを助ける！」

「アイツが動けばこんな奴ら直ぐにでもぶつ潰せるんだ！ 盾にでもなれ！」

「んな事言われたってなあ！ だったらアンタが此奴ら止めてくれませんかね船長オ
ー！」

ヘクトールを狙うのは、引き続き、マシユとセイバー。以前よりもしっかりと連携が取れるようになった二人が、ヘクトールを此方に向かわせない。

向こうを援護させない様に、此方が援護している。アステリオスが集中して戦っているのは皆のお陰だ。アステリオスは、体の中から力が湧いて来るようだった。こんなにも沢山、化け物を助けてくれる仲間がいるという事実が、とても心強い。

相手も自分以上の怪物だ。でも……負ける気がしない。

「——おれ、は……おまえを、にがさな、い……!!」

「■■■■……………」

「……、で、しずめ……だいえいゆう……!!」

一歩、踏み込む事すら出来る。決して負けない。退かない。ここで此奴を打ち倒し、エウリュアレを取り返してハッピーエンドだ。ミノタウロスとしてではない。アステリオスとして——

「——あー、クソ。こんなやり方、正義のやり方じゃない……私の本意じゃない……だが、だが……っ!　ここで、やられるくらいなら……いつそ……!!」

「ん?　船長?」

「おいヘクトール!　メディアア!　撤退だ!　船を一旦離す!」

——その時、アステリオスは、感じ取った。信じられない程に、冷たい予感を。

それは、きつと野生の勘だったのだろう。敵の船に視線を向けた。その先には、金髪の船長が居る。イアソンが、此方を嘲笑う様な目で見ている。

メディアアが、ヘクトールが、怪訝な表情をしている。その名前の中に、ヘラクレスの名前が無いのに気が付いたのだろう。

「マシユさん！」

「は、はいっ！ 撤退するなら……」

敵船に取り残されるのは愚の骨頂。マシユと、セイバーの二人が船へと戻ろうとするのが見えた——その瞬間の事だった。

「——今だヘクトール!!! やれ!! 奴諸共!!」

「……オイ船長、それマジで言ってます?」

「当然だ! 目論見通りに事が運ばないのなら……いやでもそうなるようにするのが、トップの仕事だろう?」

「つたく、しようがねえなあオイ! 嫌になって来たよホント!」

その後方で、躲されたやり取りを、確かに聞いた。言われた奴が誰なのかも分かった。どんな卑劣なやり方を取ろうとしているのかも分かった。だけど、今、逃げれば……どうなるのか。

分かっていたから。アステリオスは、一步も退かず、震える奥歯をかみしめた。

「——『不毀の極槍』!!」

飛んで来る槍は、完全に、アステリオス以外にとっては予想外の動きだったのだろう。全員が動きを止めていた。その軌道は間違いない……自分を、否……アステリオス諸共、ヘラクレスも串刺しにする、軌道だったのだから。

『いや……! アステリオス……!』

『ヘラクレスは十二の試練を乗り越え……それに相応しい報酬を手に入れた! 十二も命のストックという、破格の報酬をな!! 貴様が死んでも、ヘラクレスは蘇る。コレが力の差という物だ化け物、理解できたか! ハハハハハハッ!』

『アステリオスの野郎、まだ生きてやがる』

『……撤退だ!!』

体から抜けそうになる力を、必死になって押し留める。命を、さらに削つてでも。

エウリュアレが逃げ切るまでは。そしてこいつを、海の底に沈めるまではまだ自分は付き合ってくれる、仲間がいるから。

「離すなよ……アステリオス! もう少しで、望み通りの姿だ!」

「まかせ、ろ、めどう、さ!!」

「■■■■ツ……」

目の前の怪物諸共、自分の体が、足の先から石になっていくのが分かる。今は、それが嬉しかった。足から力が抜けても、立つていられる。コイツを、逃がさないでおける。頼んで良かった。コイツ諸共、石に変えろと。

この化け物から、出来るだけ皆を引き離すには。逃げられるようにするには。それがきつと一番良い。

エウリュアレの泣き声が聞こえる。悲しませてゴメン、と言いたい。でもそれよりもいう事は、きつとあるから。アステリオスは、大きく口を開けた。

「——えうりゆあれ！　ますたあ！　きやぶてん！　みんな！　ありがとう！　ぼくは、ぼく、は……たのしかった！　たのしかった！　いつしよに、ぼうけんが、できた！　あすてりおすのまままで！」

声を張り上げる。

喋るのは苦手だから、出来るだけ最後に残った力を籠める。もう殆ど力を籠めなくてもいい。首から下は殆ど……石になっていた。

「だから……ありがとう！」

ぐらり、体が傾く。

その先には……青い海が広がっている。その直前。

「――姉上は、任せろ」

そんな、涙ぐんだ声を、聞いた気がした。

第三十八章

「イアソン潰すぞオ!!!」な実況、はーじまーるよー。

歴史は……変えられぬ……俺は……無力だ……

えー、アステリオス君を、金髪腰抜け野郎が、やってくれました。いや、ヘラクレスをほぼ完封してやった結果、シナリオが若干別のモノになったのは良いのですけれどもその結果として『ヘラクレスの不死性を使ってアステリオスを無理矢理潰す』とか言うとんでもないクソ手をやらかしまして。許されませんよマジで。

いや、シナリオ通りと言えばそうなんですけれども……このシナリオをどうやって覆せて言う話。因みに覆すには剣の方のイアソン様を引き当てる必要があります。彼が居るとライダーの方のイアソン君の思考を全部読み取ってカウンター決めてくれるんです。

『やめろー！カス野郎！いや俺だが！ヘラクレスの扱い方がクソじゃねーか！チクシヨウコレが俺とかどういう罰ゲームだ！さつさとあの勘違い金髪を始末するぞマスター早くしろマジで急げ!!!』

と言う事で、自己嫌悪で『虎穴にて閃く』モードになったイアソン君が大暴れして向

この策略を徹底的に封殺してくれるのですが……いない……こつちには覚醒イアソン様はいないのよ……

半ば敗北した後みたいなの皆様のテンションを見ろよなあ……この無残な姿をよお……

お陰で女神様を取り返した、と言うのに相も変わらず船の上はお通夜ムードでございますよ。あの金髪羊の皮フエチ野郎には改めて致命の一撃をぶち込んでやろうと思いません。臍物をぶちまけてやる。血に酔ってやがる……獣狩りしなきゃ……

しかし落ち込んでいる訳にも参りません。まずは向こうが欲しがっているという……ブツ、『契約の箱』についてです。

ちよつと都合上カットしていましたが、イアソンがエウリユアレを狙った理由と言うのはこれに在りまして。この『契約の箱』を使って、この世界を救う……的なニュアンスで頑張っている、との事です。イアソンは。

んで、『契約の箱』ってなんなの？　と言う話になりますが。

恐らく、世界でもっとも有名な遺物、それも聖遺物とかいう特急の厄ネタの一つ。モーセという聖者が神より授かった『十戒』が記された石板を納めたその箱は、開けたらアウトの仕掛け爆弾の様な物。パンドラの箱と同じ『開けてはならない』系の逸話なのです。

ドクターの『使うなんて言う発想がない』というのは間違いではなく、使うこと自体がアウトと言う悲しい事実。

と言う事で、どうやって使うのかどうするのかも何も分からない契約の箱を、先ずこっちで奪取しようというのが此方の第一任務でございます。そんな厄ネタなんて拾いたいのかと言う話。

さて、先ずは契約の箱を探す為に各島を巡るファイズになつてはいるのですが……オトバジン乗つてそう（小並感）

とはいえ、契約の箱を手に入れて尚、あのヘラクレスを相手にどうやって戦うのかつて言う問題はどうにもなりません。

ではここで、クソチートサーヴァント最大の一角であるヘラクレスの詳細についての紹介コーナー!!!!!!（テツテレテター!!）

と言ってもね。シンプルです。クソシンプルですよ。コイツの性能を表すには。そんな複雑な言葉はいりません。強い!!! 速い!!! 死なない!!! 分かりやすいですよねマジで。

そうです。スーパーヒーローつてそんなですよ。特殊能力なんざ要らない要らない。フィジカルスーパー恵まれてて馬鹿程タフならそれだけで強い!!! 力押しで全てを粉碎して終わりツ!!! 平定ツ!!!

……真面目にこれなんですよ。いやホント。型月キャラの中でも一番分りやすいレベルで脳筋なんです。ヘラクレス氏って。パワーで全てを粉碎し、爆砕して終わりッ！彼の英雄王が唯一脅威と認めたその強さは伊達では無いです。

実際F G Oでもその強さは変わらず。単純なスキル構成ながら単騎で纏まった性能を發揮し、一番最後にヘラクレスを配置しておけば大丈夫という『ヘラクレスは単騎の方が強い』という確実に何かが違う結論に辿り着いてしまうほど。

『ヘラクレスの奴、あと十回くらい死ななきやいけないんだっけ？』
『十一回です』

あともう一つ。

此奴のタフさは、そんじよそこらのタフさではありません。尋常ではありません。ドレイク船長のおっしやる通り、この化け物。まさかの某配管工の如く命にスタックがあるので。某配管工のオツサンはワンパンで潰れるから許されてるんであって、お前ワンパンどころか一人の英雄が必死こいて漸く命一つ削れるくらいには硬いんですよ。馬鹿か？

と言う事で、脳筋ゴリ押しがあたりまえの、当然の戦法として通用するくらいの圧倒的なフィジカルと、無類無敵のタフ性が合わさって最強に見える。そんなヘラクレスが相手でございますはい。お、無理ぞ？

と言う事で、ドレイク船長にならない『出たとこ勝負』で、ヘラクレスの対策は後に置いておくとしましよう。どうにもならない相手ならいったん棚上げするのも決して間違ではないと思います。

先ずは『契約の箱』を先に抑えてエウリュアレちゃんを狙わせないようにするのが今は肝心寛容。

『なあに。イアソンが呟いた事が正しければ、アテが無いのはお互いに同じさ』

『だったら無能っぽい向こうの船長より、アタシがいる分、こつちにチャンスがある！』
後はキャプテンの性能差という物が存在します。ドレイク船長とイアソン君じゃ、もうね。若干哀れなレベルで力の差が存在するんですよ。所詮は冒険者の船の船頭と、嵐の海を渡って来た航海者にして、星の開拓者。海の上で生きる者、及び冒険者としての純度という物が桁違いです。

『ひゃうっ!?!』

『ダーリンの額に矢が!? 大当たり!』

だからこそこんなチャンスを先に掴んでいくスタイル。チャンスつて? ああっ!?! (悲劇のオリオン) 一体何のチャンスなのか、この矢ガモならぬ矢オリオン。

そもそもの話、現状取り敢えず行動しようという事で、色んな島を巡って、そしてその間に幽霊船を雑に沈めていつている最中に狙撃を受けたのですが。すわ敵襲かとな

るかもしれない一発。

後、オリオン君額にヒットしても無事なのどういうこと？ 君つてきては不死身なのか？

『ひい、ひい……死ぬかと思った……ん？ なんか付いてる』

死ななきゃおかしいのよ？（事実）

で、オリオンの犠牲（幻）を経て、我々が掴み取ったチャンスと言うのは……この矢文でござえます。古風だなあ……で、その中に書かれていた内容と言うのは……

『俺じゃ開けられないので、誰か開封して』

『はいはい、どれどれ……あー！』

『アルテミスさん？』

『うふふ、知り合いだったわ。相変わらず堅苦しいわね』

どうやらアルテミス様のお知り合いからのメッセージの模様です。しかし矢文とを本当にヒットさせるとは何という強気な弓手。

アルテミス様の評価を受けて曰く、愛を知らない純潔少女からの恋文（大嘘）の贈り物。さて、それを送ったのが一体誰か、と言えば……

『我が真名はアタランテ。女神アルテミスに仕える狩人である』

『そして、もう一人紹介したいサーヴァントが居る』

『『契約の箱』を持つサーヴァント。要するに、アルゴノーツの求める男だ』

『やあ、待ちくたびれたよ君達！』

『ダビデ、という』

この二人。

アルゴノーツを打倒する鍵を持つ二人。

純潔の狩人、アタランテ。そして契約の箱を受け継ぎし、ユダヤの王——緑色にカラーチェンジしたイアソンの雰囲気を持つ、ダビデ。此方の二人が、この特異点の最後の切り札にして、ピースです。

第三十八章・裏：世界を亡ぼす女

「なあ、アタランテさんよ」

「なんだ」

「あのイアソンの奥方つてのは……イアソンにどれくらい惚れてるんだ」

マスターがアタランテさんにまず聞いたのは、そこでした。私自身『そこなんでしょうか』とは思いましたがしかし。聞かれた当のアタランテさんは、更に珍妙な顔をしてマスターを見ていらつしやいます。

「……いや、別に答えるのは構わないが。なぜそれを聞く」

「いや。一応確認の積りでさ。俺の予想が当たってんのかな、つて」

「汝の予想、とはどの程度の物なのだ？」

「あの金髪クソカス野郎の為なら世界一つくらいは軽く攻め滅ぼしたり、全人類生贄にする位は鼻歌交じりにやってのける、位かな」

「なんだ。お主、分かっているではないか」

そしてそれに対して帰って来た答えも、珍妙を通り越して異常な物でした。そもそもマスターも何処からその発想が出てきたというのか。あの人畜無害そうな見た目の少

女から一体どう想像したらその様な……

「やっぱそのレベルか。成程な。ならいい。ありがとう」

「しかし良く分かったな。アレは見た目からその異常さは殆どわからないぞ」

「え？ 分かりやすくない？ ああいうタイプは大人しいか吹っ切れるかだし」

「……何故吹っ切れる方だと思つたのだ」

「あんなダメ夫の妻を立派にやつてるんだから、圧倒的に有能でぶつちぎれてる方じゃないかなと」

「イアソンが愚物……と言うのは、まあ置いておくとして。確かにメディアは能力に見合つてしまった性格をしている、か」

「それに、愛情つてのは……大暴走してナンボつて奴だろ？」

マスターがそう、したり顔で言うのを見て。私は余りにも納得できてしまいました。正直な話、宮廷の中で生きていた私としては、余りにも熱く、そして泥のようにねばつく一瞬、半ば、末恐ろしくなるほどの愛情というのが渦巻いていた事は……余りにも常識と申しますか。

深い、深い愛情と言うのは、とても美しいものであると同時に、恐ろしく醜悪な面も潜ませているモノでもあります。故に……爆発すれば、恐ろしい事を巻き起こす、と言う場合もあります。

「分かつている様な口を利くな？ 小僧」

「愛情の暴走つてのは若いうちに体験するもんじゃないかって思うんだが？」

「それが回答か。まあ確かに、若いうちというのは感情に任せて無茶をするというものだがしかし、それを言えるのは若い奴ではない気がするのだが？」

「……黒歴史が多いって事にしておいて」

……マスターの黒歴史がどうして想像できてしまう程に多いのかは、とりあえず聞きません。若気の至りと言うのは、本人の性格に関係なく意外にも多かつたりしますし。それよりも。そこまで言われて、寧ろ気になるのは。別にあります。

「しかし、結局汝が何故そんな想像をしたのか、それは分からんな」

「だから黒歴史が多いからだって」

「それは想像出来た理由だ。想像をした理由ではあるまい？」

「……まあ、そうなんだけど。あー……：そうそう、さつき、そのダビデのオツサンが言つてたじゃないの」

そこを問われて、マスターがつーつと視線を滑らせたのは……アルテミス様と共に私達を迎えてくださった、契約の箱の所持者であるダビデ様。微笑みながら「ん？ アレおっさん？ お兄さんじゃなくて？」と首をかしげていらつしやるのは……取り合えず、置いておくとして。

「言っていた？」

「契約の箱の使い方さ。誤った事を吹き込んだ奴がいる。イアソンに、アークを利用するように言った奴が……まあ、この特異点を亡ぶように仕向けてる、要するに本当の黒幕について奴が誰か、って思った時にね」

「そう言われ、ダビデ様が言われていた事を思い出します。『契約の箱』なる宝具。使えば如何なる事になるのか。」

「ロマニ様の懸念は……果たして。幸か不幸か。的中してしまったのです。開けてはならぬ玉手箱。同じ系統にある契約の箱は、しかしその玉手箱などよりも大きな災厄を天下に撒き散らす、大災厄。」

「神を捧げれば、大いに荒れ狂い……その力は世界を『死』に至らしめるとの事。しかもその力は、この不安定な特異点であれば文字通り、全てが、道連れに滅んでしまうとの事でした。」

「そして。イアソンはそれを知らずして……この海の覇者に成れると信じ、契約の箱を探している。アタランテ様曰く、それは誰かに吹き込まれた事なのではないかというお話でございました。」

「——それが、メデイアだど？」

「はじめは消去法だったんだよね。あの船の中で、イアソンをそそのかす奴って誰なの

かなって思つて……ヘクトールとヘラクレスが、アイツをそそのかす意味がある様には見えなかつた。個人的な印象だが」

「ふむ、まあそれはそうだろうな。ヘラクレスは勿論、あのヘクトールと言う男も頭を使う類の男だが。何方かと言えば戦争の中で戦術を巡らす類の男だろう」

「英雄のお墨付きを得たのは心強い。んで……話を聞いた結果として。俺の疑惑は確信に変わった訳だ」

マスターが、その黒幕と睨んだのは。イアソンの奥方……キャスター、メディア。

「その黒幕の所為で、アステリオスつて言う犠牲は出たし……エウリュアレは狙われる運びとなつた訳で」

こつちには、その黒幕をぶちのめさねえと気が済まない方が居ると思うんだ。

そう言つて、ちらと視線をやつたのは……エウリュアレ様を乗せて此方を見下ろすゴルゴーン様。その返事と言わんばかりに、一つ鼻を鳴らされました。

それを見て、マスターは口の端を笑みに歪めて……

「俺はゴルゴーンさんのマスターだ。その人がやりたいつて言うなら……」

「ああ。姉上を狙うように仕向けた愚か者は、私自ら誅する」

「どの事なんでね。なら先に黒幕っぽい奴を想像しておくのもマスターの仕事だ」

「ふ、褒めて遣わしてやろうか？」

「いや良いよ。当然のサポートってな……ただ、ゴルゴーンさんが仕留めたいのは、ソイツだけじゃないだろう?」

そう言われ、ゴルゴーン様は、ちらと傍ら……と言うより、その肩に腰を下ろすエウリュアレ様に視線を向けました。

「——私を狙った奴は、先ずはどうでもいい。あの子を……アステリオスを貫いたヘクトールと、それを命じたイアソン。私に対して泥を引つ被せる様な真似をした愚かな二人に先ずは、思い知らせてやりたいわ」

「との事でな。私個人の恨みもある故に……先ずは、ヘクトールだ」

「了解。じゃあ後の二人も必然的に、マスターの俺の獲物になる訳だ。さて、そうなるとしつかりとメディアやイアソンも、誰かが引き受けにやあならん」

マスターが立ち上がります。そうして、見つめてくるのは……私、でしょうか。えつとゴルゴーン様がヘクトールと戦うのであれば……メディアは、と言う問題になつてきますしその場合……ま、まさか。

「わ、私が神代の魔術師と戦うのですか!?!」

「おお察しが宜しい。まあぶつ潰せとは言わんから、取り敢えず邪魔が出来ない様にして貰えればと言う事で」

「え、ええええええええ!?!」

とんでもない大役を任せられる事となつてしまいました。

そもそも、私はキャスターとしては二流……いえ、三流かもしれないのです。一流以上のキャスター相手に、戦えるとは全く……！　そもそも、戦いになるのかすら怪しいのですが！

「あ、あの、マスター!?!」

「それと……イアソンは、俺が、叩く」

「——えっ?」

「——アルゴノーツは俺達で仕留める。藤丸達は手を出すなよ」

第三十九章

ヘラクレス潰すぞオ!!! な実況、はーじまーるよー。

さて、前回イアソンが半分傀儡である、という衝撃の事実（どうでもいい）が判明し。そして『契約の箱』の正体も判明しました。それがもし起動したら一体どうなってしまうというのか。

『アークは宝具としてみると三流の宝具でね……この箱に触れさせれば、相手は死ぬー
ーそれだけ』

アークの所持者たる英霊、ダビデ王の見解は此方になります。

具体的に言えば、動かせない。移動させる事は出来るけどそんな範囲広くない。滅茶苦茶目立つ。でも触れないと発動しない。これは三流宝具ですな間違いない……（困惑）

しかしダビデ王はそれだけ、と申しませんが。型月において、大抵の宝具は『相手の心臓を抉る』だとか『凄まじい魔力を解放して焼き払う』だとか『呪詛を撒く』だとかそういう『過程』を経て『死』という結果に繋がります。

故に相手に『死』という結果を直接与えるのは、それこそ宝具でもそう類があるわけ

ではなく、『直死の魔眼』とか言う型月の中でもスゴイ分かりやすい厄ネタとかが有している能力でもあります。

そしてその稀有な『死』という直接的な概念を叩き込む能力を持つ、このダビデ王の宝具たる『契約の箱』は、単純な『威力』という点において正にG O i s G O D（礼賛）

万が一、エウリユアレちゃんを本当に捧げようものならこの特異点を巻き込んで全てを吹き飛ばす位の大起爆は普通にします。具体的に言うとな、『世界が死ぬ』という結果だけが残ります。あきまへん……黄金体験しなきゃ……（使命感）

『バーサーカーでも宝具に漂う魔力は感知できる。自分から爆弾には近寄らないだろう？』

因みにマトモに使おうとすると全く使えない本人曰く三流宝具の模様。そんなものにどうやって触れさせろって言うんだ。

そんなのに世界を亡ぼす火力を付けるんじゃない!! 某スプリガンでもそうですがやっぱり契約の箱なんてものは碌な結果を生まないんやなって……

しかし、その契約の箱こそが、今回の我々にとつての切り札となりえる存在だったりもするのです。

『契約の箱』は触れば即死の制御不能の核弾頭ですが、しかしその威力だけは折り紙

付き。例えヘラクレス相手でも、例え何回復活するストックを持つていようと、それらを容易くナオキにします（ホモにあるまじき一撃必殺） 触れればですけど（水差し）ヘラクレスは絶対の大英雄。勝てる存在ではない……そう思っていた時期が、俺にもありました。そんな事は無い。ヘラクレスとて狩れるのだ。容易く。それは容易くね。まあ容易く行くには無数の前提を潜り抜ける必要がございますが（矛盾精神） こちらのチームは遠距離手段を主軸とするアーチャーばかり。

前線を張る事の出来るサーヴァントは此方の召喚しているキャラを含め……というか、此方のサーヴァントしかいない訳ですけども。まあそれに関しては、一応やり様が無いわけでもないのです、また後で、と言う事で。

それを使って確実にヘラクレスを潰し、そしてイアソンチームも叩き潰す、と言う事なのですが……今回のイアソン戦。ちよつとした試験をしたいと思えます。

というのも。今まで、礼装のクリティカル機能ばかり使って、全くもってホモ君の為にあつらえた第三機能が仕事をしていないという悲劇。そこで、この第三機能のお披露目と諸々の為に……イアソンとホモ君でタイマン張ります。

そうです。タイマンです。

正規のサーヴァントと。シャドウサーヴァント君達相手ですら今はちよつと厳しいというのに、です。

ですが、イアソンだけは別なのです。確かにイアソンは英雄、サーヴァントなのですがその直接戦闘能力、そして耐久力諸々は、通常の英雄の中でも最下級クラス。

そもそもケンカすらした事がない貧弱な坊やです。クリティカルによるダメージも普通のサーヴァントよりも圧倒的に通りやすい。

『弱い。』と言うか戦った事が皆無でな。弁舌とカリスマだけで、アルゴノーツを編成した怪物だが、本人の戦闘能力は目立ったものではない』

同僚からもこの扱いです。怪物なのに弱いとか言う矛盾塊。

イアソン君の弱さは同僚からもまあ折り紙付き……と言う事で。今までのパワー溢れるサーヴァントの皆様と殴り合うのはちよつと命掛け極まっているので、まあこれ位の試金石が欲しかったんですよ。

当然ながら、ゲームでは頑張ればイアソン君はシバキ倒せます。なんつってもセイバーの時のモーションがありますから、見かけと霊基をライダークラスの物に変えて、コンパチとして出すのもそう難しくありません。

で、その性能はと言えば……スキルは味方が居なけりやあ、あんまり機能したい奴ばかり。スキルを乱発されてもさして怖くはありません。因みに『アルゴノーツ』な味方が居るとマジで大蹂躪くらい普通にされます。悪夢です。

と言う事で、イアソン君を倒すのはタイマンこそが最も正しいという。マスターでそ

れをやる必要性は一切持ってありませんが、ここらでホモ君も飛躍の時を見せましようや。

んで、ホモ君がゲーム内で飛躍の時を見せるのならば、藤丸君はストーリー上でウルトラCを見せ付ける。ホモ君がイアソン君を倒す前提となるヘラクレスの始末は、藤丸君がやってくれるとの事です。

であれば……後はホモ君が勝てるかどうか。

今までホモ君チーム独自に動いてきたことはありますが、此方とサーヴァントの頭数と同じ相手取るのは初めてですし、なんだつたらホモ君がサーヴァントを相手取るのも初めてです。

で？ 勝てるかどうかとなりますが。

まあ正直な話をすれば、サーヴァント同士の削りあいであれば、勝てるは勝てると思います。ゴルゴーンさんという超強力で、非常に運用しやすいサーヴァントを引き当てている時点で、このレベルの特異点であれば余程の事が無ければ負けません。

まあホモ君がイアソン君に蹂躪されたら全てが崩壊するんですけれども。なんでこう自分からリスクを背負っていくのか……（困惑）そうじゃないと実績解除できないからだルオオ!! 実績の為に積極的にリスク負っていいけ？

とはいえ、ここでイアソン君と言う正確無比なサーヴァントを倒せば、いよいよ実

績に向けて大きく前進する事が出来ます。

と言うのも、次の第四章……の、後にいよいよ最初の山場が迫っておりまして。そこを無事に突破しないと実績に食い込む事も出来ないのです。そこまでにホモ君を地獄みたいに鍛え上げないといけません。

そもその話、この実績解除可笑しいんですね。第四章までじっくり時間かけて、更によえば丁寧にフラグ立てもしなきゃいけないって言う……拠点でも。

ん？ 拠点でのフラグ立て？ やったたでしよ？ 観測室、つていうか、指令室にねつとりと嘗め回すに何度も探索してたでしよ？ アレですよ。

まあ細かい実績解除でございしますが、いよいよ第三特異点辺りまでたどり着いて、後は最初の山場を迎えるばかりでございします。イアソン君位に苦戦している様じゃ山場も突破出来ないでしょうし、ここはらくらく突破しましょうよ。

んで、肝心のイアソン君をどう突破するのか、と言う話になってきますが……キーワードは『紫式部』、そして『特攻』です。ネクストホモズヒント。二つヒントがあるなんて名探偵も甘くなつたなあ……

と言う事で、今回は此処までとなります。

次回はいよいよイアソン討伐。ホモ君の今まで積み重ねてきた物がどれだけ出力を叩き出せるかが焦点となってきます。お楽しみに。ご視聴、ありがとうございました。

第三十九章・裏：ヘラクレスを討て

『契約の箱』の元まで彼女、エウリュアレを運ぶ役割は、誰が担うのか。

ヘラクレスを足止めする等、それだけでも難題であることは間違いない。そこはサーヴァントの皆に任せるしかない訳で……では、それを誰がやるのか？ 康友の言っていた事を考えて、此方にも思いついた事があった。

アイツがアルゴノーツを仕留めるなら、こっちは『ヘラクレスを引き受ける』。ヘラクレスと言う絶対的な脅威を討ち取るのは、彼を除くアルゴノーツ全員を打ち倒すのと、同じくらいに苦しい。

イアソン含め、メデシア、ヘクトール。彼等を侮っている訳じゃない。けれどアステリオスとゴルゴーンさんの二人がかりで、漸く均衡……それも、最終的には一時的な誤魔化しにしか持ち込めない、袋小路に持ち込めただけの、大英雄ヘラクレス。彼の實力を軽く見積もる事は、絶対にしちやいけない。

『ヘラクレスは、ただ一つで全てを覆し得る暴力である』

その前提で動くなら。此方もカルデアの全てを賭けて戦う。当然、俺の命だってかけなければいけないと思う。

「ほらほら気合入れて走りなさいな！ 追いつかれたらそれこそ終わりよー！」

「い、幾ら皆が足止めしてくれてるからって……しんどい……！」

にしたとしても。後ろからあのゴツイマツチョな神話の英霊様が追いかけてくるって言うのは迫力が物凄くて若干自分の判断を後悔しても仕方ないと思います……等と思いつながら、足が棒になりそうな状態で走っている。

敵のマスターと、生贄にする予定の女神が揃っている状態だ。あからさまな罠だとしても、向こうがヘラクレスを持っているなら、乗ってくる……という算段だったのだが当然のように乗って来た。流石アタランテさん。向こうの船長の性格を良く分かっている。

後は、自分が逃げ切るだけなのだが。まあそう簡単にはいかないのは、先程後方から聞こえてくる轟音が遠ざかっていない事で凡そ分かっってしまう。後ろで、サーヴァントの皆が足止めをしてくれるから心配ない……と、気楽には言えない。

歴史に名を刻む英霊たちが束になって、それでも足止めが精一杯なのだから、とんでもない。コレがヘラクレス。英雄たちの頂点の一角。

「……契約の箱まで、もう少し。でもヘラクレスも、あと一步の所まで来ているわね」
「コレが大英雄ヘラクレスって事か、肌身に染みるなあ!!」

「どう？ 震えて来た？ 大英雄の威光に」

「……いいや」

それでも。

もし、怖いと思っても。怖いとは表には出さない。もし表に出したら、それは周りに伝わるから。腹をくくって、齒を食いしばって、走るしかない。

「怖くはないよ。大丈夫」

「そう——良く言えたものね。その強がり」

呆れた、とでも言いたげな背中の中の女神様。俺だって仕方ないとは思う。こんなあからさまな強がり、呆れられても。でも仕方ないんだ。人類最後のマスターの片割れだから。ここで踏ん張らなかつたら、カツコ悪い。

……別に、康友に張り合つてるとかじゃない。

そもそもマスター業には、張り合うとかそういう言う雑念を持ちこんじゃいけないのは、此処までの特異点を潜り抜けて分かつてる。

そんな事をする暇があるなら、俺達は前に進まなければいけないんだ。この世界を、自分達の日常を、嘗て過ごした現実を、取り戻すためにも。ここは、踏ん張り所だ。

だから、頑張るのは当然なんだ。

——でも。

ちよつとくらい、カツコつけても良いじゃないか。

アルゴノーツを潰すつて、アイツが不敵に笑つて言つたなら。張り合う積りなんて無かつたつて、そりやあこつちだつて『やつてやろう』つて気になつたつてしようがない。

だからこの世界を取り戻すために、やれる事をやろうつて言うのが、殆ど。でもほんの僅かだけ、男の子として、カツコつきたいという思いが混ざつてる。その思いが——今、足を進ませている。

「でも嫌いじゃないわ。目を背けた訳じゃない強がりは」

「……女神様のフォローは効くなあ」

「私がフォローなんてする訳ないじゃない。これは評価つて奴よ」

背中を、頼りに走る。

今、マシユが。リリイが。ダビデが。アタランテが。オリオンとアルテミスが。この特異点で力を貸してくれた皆が。戦つてくれてる事を、この温度で思い出す。俺は、最も大切な役割を負つているのだと、思い出す。

「——さあ、見えて来たわよ」

「アレが」

そこに見えてきたのは、細長く、装飾のされた……正に『豪華な箱』と呼ぶのが相応しい物。だけど、その豪華さとは裏腹に、なんだか見ているだけでも寒気がしてくる。コレが、触れれば死ぬ、災厄の箱なのか。

「で、後ろも来てるわよ」

「——えっ?」

しかしそれを頭に入れる間もなく、振り向かされた。

入って来た入口の方向から、それは此方に向かつてきている。闇より浮かび出る巖の如き筋肉。真つ赤に輝く瞳。響く轟音の様な足音。なんてこった、アレはヘラクレスつて奴じゃないか!

あの五人の足止めを突破して来たのか。想定してたとはいえ、実際見ると馬鹿なのかと思ってしまう。彼一人で、本当に聖杯戦争全部勝ち抜けてしまう。

「悠長に止まってる暇は無いみたいね」

「分かってる……じゃあどうすればいいんですか!」

「飛び越えるのよ。生を掴み取る為に。死を」

そう言って、肩を越えて手が伸びる。指差す先には、死を具現化する宝具に他ならぬ『契約の箱』。成程、死を乗り越える、と言うのを物理的にやれという事だろうか。随分と無茶を言ってくれる……けど。

『——アルゴノーツは俺達で仕留める』

俺達と同じくらいの無茶をやろうとしてる一人のマスターがいる。

向こうは頭数は同じ、こつちには圧倒的に戦力を裂いて貰っている。これでヘラクレ

ス相手にビビりあがってしくじりました、なんて。口が裂けても言える訳ない。

少女を、地面に降ろし……共に走り出す。その一瞬で、大分距離を詰められたのが音で分かった。それでも。

振るえない様に足に力を込める。大きく踏み込んで、つま先で地面を蹴り飛ばす。目の前に触れれば終わる箱が見えて——それでも、躊躇わない。

「いくわよ——1、2の、3！」

アイツが行ったのだ。

だったら俺だって止まらない。寧ろ、跳ぶ勢いで！

「——っ!!」

足の下を過ぎていく『契約の箱』。足を出来るだけ高く、引つ掛からない様に飛び越得たとはいえ、プレッシャーは半端ない。

周りの景色が、スローモーションになっている様にすら見える。ああこれ走馬灯って奴かな。メツチャ『死』が近いから。後ろも、下も、全部『死』だ。だったらもう、走馬灯なんかにはビビってる暇はない——ただ只管、前に！

「——きゃっ」

「ぐっ……!!」

地面に転げる。

転げた、と言う感触がある。死んでいない。体は痛いけど……どうやら、乗り越えられたみたいだった。最後の関門を。

「ったあ……ホント、女神にする扱いはやないわよ」

「エスコートが下手で申し訳ない！」

「——でも、いいわ、帳消しにしてあげる。見なさい」

自分が飛んで来た方向に視線を向ける。そこには……地下墳墓の通路の高さでも尚、頭が詰まるような大男が堂々と立っていた。

決してどんな試練にさらされても負けないだろう、と言う迫力があつた。実際に目の前の男は、無数の試練を当然のように乗り越えて、此処にいるのだ。

「ヘラクレス」

「分かっているのです。それが自分を殺し得る物だと」

「■■■■■■■■■■……」

後ろには、駆け付けたマシュと、リリーの姿。そして、ドレイク船長達も、後ろに詰めている。

サーヴァントが五人以上、地下墳墓の奥地で逃げ場も無い。流石にここまで契約の箱が近づいたならば……押し込めるだろう……と、言い切れないのが恐ろしい。相手は十二の試練を突破した大英霊、ヘラクレスだ。

この場をただ一人で切り抜けても、何の不思議もない。
「でも」

康友は、今アルゴノーツを、自分一人で襲撃してるんだ。

戦力の殆どを此方に回してるんだから、ここで負けたら顔向けも出来ない。今生賭けて根性入れて、今——特異点の、正念場だ！

第四十章

ヘラクレスは任せた！ な実況、はーじまーるよー。

前回言ったヘラクレス潰すぞお！ はどうしたって!? 誉は涙で死にました（ホモは
深い）と言う事で、ヘラクレスと一緒に叩き潰すか、さもなければな選択肢で、ホモ君は
やはり別行動を取る事になりました。

まあ実質ヘラクレスをサポートするアルゴノーツメンバーもヘラクレスみたいなも
んやし……（支離滅裂な言動） 頭数はこっちの方が少ないし（震え声）

『ヘラクレスは強力だ』

『単純な話、彼一人で全てを覆し得る。英雄何騎分、なんて換算だつて冗談なく、彼には
最適な単位だろうよ。単純に考えれば、難題を突破した数、十二人分くらいはあるん
じゃないかな?』

『だけど彼を引つpegがしてしまえば、向こうの戦力は半減……いや、それ以上に減少する
かもしれないよ?』

まあ分かりやすい話をすれば、ヘラクレスを攻撃している間に、カルデアのもう一方
の戦力を遊ばせておく理由もクソも無いって言う話ですよ。ダ・ヴィンチちゃんと言

うんだからしようがねえよなあ!?　と言う事で戦力を分散、ヘラクレスの居ないアルゴノーツは此方でシバキ倒します。

此方、ホモ君が単独で動かせるサーヴァントは二騎、相手はサーヴァント三騎。でその内最弱のライダー、イアソン君を、ホモ君で打ち倒すという話でございます。前回説明しましたね。

とはいえ敵もさるもの引つ掻くもの、此方が別動隊を回そうと、混乱してくれる訳でもありません。

『ふ、ヘラクレス相手に戦力を分けるとは……浅知恵のサルとはこの事だな！　人間様の真似事をして策を練って見ても、寧ろ状況を悪くしただけなんだよ！　やれメディア
!』

『了解いたしました』

寧ろ調子に乗ってきましたあの金髪野郎は……取り合えず全力を持ってシバキ倒したいのは間違いないです。

が、そうは言っても向こうがそう簡単に此方が潰せる状況に持つて行かせてはくれません。敵兵が立ち塞がってきます。しかし此方の目の前にはメディアの生み出す竜牙兵……のみですなえ！　立ち塞がってきますやがるのは!!

舐めプか？　お？

まあ雑兵を先に配置して消耗させようって言うのは指揮官の定石。しかもその雑兵がいくら使い潰そうが問題無い様なマジの『雑兵』なんですからそうもすると思います。が。

お前から軽く生み出されて使い潰される雑兵風情に負ける程俺のサーヴァントは弱くないんですねえ!!

アサシン、セイバー、アーチャー混成と言うのも宜しくありません。キャスターに一切有利取れない編成ですからね。パパパつと（香子さんで）やって、終わりつ。せめてライダー一騎でも居れば話は別なんです。が、ライダーでもこのレベルじゃクラス相性の差があつても基本性能で圧勝できるし……

そもそもゴルゴーンさんでクリティカル！ バスター！ チェイン！ って感じ
でえ、大暴れしてしまえばもう終わりですよ。バスター一発で消し飛ぶ竜牙兵君の哀れな事……肉骨粉になってそう（小並感）

『——雑兵を始末したくらいで調子に乗るなよ。この海の……いいや、この四方を閉じた世界の王が率いる、無敵のアルゴノーツの力を思い知らせてやる。やれ、メディア。ヘクトール』

『分かりました』

『ほいほいつと』

その雑兵を配置したのお前だけどな（煽り） あつさり蹂躪されていたけれどもな？
（ド煽り）

と言う事で、ここからが本戦。メディア・ヘクトール（エアソン）戦です。

基本的に後方支援のメディア、前線のヘクトールとの試合なのですが、一応後方に一切攻撃せず、此方からの攻撃も基本は出来ないエアソンも居ます。

で、前衛のヘクトールは普通に厄介で、メディアの支援魔術を受けてステータス、特に防御面をガチガチに固めて来ていて、此方のサーヴァントの攻撃もかなり軽減して来ますのでやっぱり極まりなく。

如何に攻め手が一人であってもその一人に全くダメージが通らず、耐え凌がれて逆に宝具で返す刃が突き刺さり、ザンバラリンと哀しい事態にもなり得ます。単純に強いですよね、全体宝具って。

とはいえ、彼をサポートしてくるメディアは、一ターンは経たないと強力なバフをかけて来ません。でもってその時間は、礼装に付与できるスタンを使つて伸ばす事は出来ません。基本的には、このルートを辿るならそう言う準備をするのも必要ではありません。

が、今回はこのルートを選ぶと最初から決めていた訳ではなく、そもそもホモ君のキャラの構成上、そのスキルを組み込む余裕はありません。と言う事で、先ずこの正道での攻略は不可能です。やっぱ正道は恵まれた奴にしか出来ない仕様なんやなつて

……

一応ゴルゴーンさんで一ターン時間を稼げます。まあ一ターンに笑い、一ターンに泣くのがこのゲームではあるので使わない選択肢はありません。

ですので真つ当には戦わず、結局は最後はホモの拳で決める積りではあります。

王道がダメなら詭道。常套手段がとれないなら奇策に走ってこそ人類。この地球上で奇策と常套手段、どつちかを選べるのはそう多くありませんので特権を生かしてくださいませしよう。

で、どんな手段を取るかと言えば。

このバトルにはギミックが存在します。攻撃も何も出来ないイアソンがなんでかユニットとして、敵側に一緒に居るという時点でそれはまあ……何となく分かっていると
は思います。

どうやってそのギミックを起動させるか、と申しますと……単純明快、一定以上ヘクトールを削るだけ、です。

『——っ、しまった！』

このメッセージが出た、と言う事は成功ですね。はい。

本来は、カチカチに固められたヘクトールを削るために、リソースの管理をしつかりとしないといけないこの戦い。

ですが、マスターを戦闘系方面にガチガチに鍛えておくか、ここまで三騎目のサーヴァントを手に入れておくと、ヘクトールのダメージ量と、そのマスターかサーヴァントの存在をキーとして『イアソンとのタイマン』がイベントとして発生します。

文字通り、他のサーヴァントが攻撃したり出来ないタイマンのフィールドで戦う事になるので、ここにもし、サーヴァントを送り込めば勝利確定になります。しかしながら現状のマスター相手だと分が若干悪いか、大分悪いくらいですね。

というか、本来ケンカが出来ない筈の香子さんより戦闘力低いつてなんなんだよお前本当に……なんでホモ君に対してちよつと危なくなるレベルなんだよ……まあ付け入るスキがある方が可愛いって言うし。可愛いけないけど（矛盾精神）

この千載一遇のチャンスの為にとのサシの勝負の為に礼装のNP底上げ、及び令呪を切つての宝具二連打でゴリ押したのでここは勝つて欲しいですよ。乾坤一擲の大博打です。

さて、いよいよイアソン殿と一騎打ちに入ります。が、如何にイアソン君が弱い方のサーヴァントに入るにしても、結局の所、ホモ君が不利な状況事には変わりありません。サーヴァント、と言うだけで他のエネミーを軽く凌駕する補正を頂いているのには変わりないのです。覚醒しているタイミングでしか、相手に大ダメージを与えられないので。しかもイアソン君がガードなんぞしようもんなら撃破は不可能。

更に回避されたりしてもアウト。狙うのは相手が攻撃するタイミング、その一点を狙いますました一撃必殺。

礼装の三つのスキルと、式部さんの援護も必要になってきます。

『——くそ、役立たず共が！』

しかしイアソン君の、此方を心底忌々しいと思っている様なお顔をなさっているこの顔！ 同じ気持ちだぜイアソン……お前のその顔面に、同じくらいのクソデカ感情叩きつけてやるから見ろよ見ろよ、オラ（一騎当千）

こんなひでにすら力負けするなよなよした奴に負ければホモの名折れ。ホモの力で一撃必殺。いざあ……！♂

第四十章・裏：成功者

「——っ!？」

「よお腰抜け野郎……漸くお目見えだなあオイ」

——下民風情が、王たる俺の元に立ちはだかるな。ふざけるな。誰の許可を得て俺の前に立つてやがる。ふざけるな。潰せヘラクレス。

「くそ、役立たず共が!」

聞かせてやりたかった。この恨み言を。だが、周りにはヘラクレスは愚か、メデイアも、ヘクトールも、敵の相手をしていてこつちには来れない。今ここには、船長の俺しかいない。

ふざけるな、どいつもこいつも、役に立たない無能の癖に、船長の俺の足を引つ張りやがって。守り以外何も出来ないオッサンに、疫病神同然の魔女が。苛立ちしか募らない。だからこうやって俺が……

「とりあえずアステリオスに会いに行け」

「うわっ!？」

だが、そんなこつちが悠長に何かをする間もなく、男は先ず挨拶の代わりに、とても

言わんばかりに前蹴りをくれやがった。その頭にはいつの間にか一本、角らしきものが生えてやがる。なんだ、カルデアって所は、化け物でもマスターが出来るのか。

「こ、このっ……お前、誰を足蹴にしようとしてやがる！ 無礼者が！」

「ああ無礼者で良いさ。お前みたいな奴には無礼で丁度良い礼儀作法だろ」

「な!？」

「おらっ、無礼ついでだ」

額に、バチリと何かがぶつかった。

痛くは無かったが、男はにやにやと笑ってる。

虚仮にしてやがる、この俺を。

「正義って言つてたな。そうだな、お前は正義をこれ以上なく求めてる……お前は正義って言う甘い蜜に集る『蛆虫』だ。正義になんてなれやしない、足も手も無く、本当に美しいものにあこがれて蠢く悍ましい蟲」

——蟲風情が、囀るなよ。

だけど、こつちが言葉を差し挟む暇もなく、男は更に殴りかかってくる。握り固められた拳はギリギリ俺の傍を掠めて……後ろの樽を軽々と叩き割った。

ゾツとする。コイツも普通のパワーじゃない。見掛け倒しじゃない。目の前の男はマジのパケモノだった。そりゃあ、ヘクトールや、もちろんヘラクレスだとかと比べれ

ばカスみたいなもんだが……俺と比べたら？

「こ、こいつ……!？」

「やっぱ喧嘩は慣れてねえなあ船長さん」

腰が引けそうになる。俺は荒事なんざできない。肉体労働は他の奴の役割だろう。こんな奴と殴りあいするなんて冗談じゃない。メディアも、ヘクトールも、ヘラクレスも！揃って何やってやがる、船長の危機だつて言うのに。

だが……ダメだ。俺は今、サーヴァントなんだ。人間なんかと格が違う存在なんだ。こんな存在として格下の相手に背を向けて逃げ出すなんざ、論外だ。

逃げたら終わりだ。

どんな戦いだつて、勢いを失った方はズルズルと負ける事だつて全然あるんだ。

俺が逃げれば確実にこっちの勢いは削げる。人間相手に逃げたつて言うのが特にアウトだ。勝つなら、ここは逃げたら終わりだ。

「——は、ははつ。たかが下民風情が、多少ケンカが出来る位で、私に勝てる訳が無いだろうが……! 俺が作る理想郷の、礎にもなりもしない分際で!!」

「ほう。言うねエ。後悔すんなよその言葉」

幾ら此奴が化け物染みてるとしても、俺は世界の王となるべく英霊としてこの地に降り立った男だ。こんな奴とは格が違うんだ文字通り。そうだ。俺が負ける訳ないんだ。

俺は無敵だ。最強なんだ。このアルゴノーツの船長が、こんな下等な輩に!!

「——死ね! 死ね! とつと俺の目の前から消えろ!」

「その発言、全部まとめて返してやるよ船長さん……!」

真つ直ぐ、走り出す。

拳を固めて殴り掛かる。当たれば、こんな奴一発で殺せる。当たれば——前のめりに振り下ろしてやった。だけど、当たった感触が無い。

俺の横で、男は笑っている。角はいつの間にか引つ込んでた。そんな物、必要ないとばかりに。頭がカツとなる。見下すのは、俺だ。お前じゃない。

今度こそ殴ろうとして、無理矢理振り向こうとして、体勢を崩した。倒れない様に踏みとどまったけど、殴るところじゃない。歯噛みしながら振り向いて……

「どうした坊や。人の殴り方も知らねえか?」

男は、こつちを笑ってみていた。

「——死ねツ!!」

コイツの頭を力チ割ってやらないと気が済まない。兎も角、拳を振り回す。一発位当たるだろう。俺は、人間なんかと違うんだ、と。

でもダメだった。腕の間合いの一步外を、まるで遊んでるみたいにすり抜けていく。避けられる度、胸にドロドロとしたものがこみあげてくる。

苛立つ。苛立つ苛立つ苛立つ苛立つ苛立つ——!!

さつさと負けを認める。ヘラクレスがこつちには居るんだ。お前らが幾ら足掻いた所でヘラクレスが戻ってくれば終わりだ。足掻くな。面倒を掛けるな。お前らが居なけりや俺はもうこの世界の王になっているんだ。

「人間が！ 英霊に！ 勝てる訳もないってのに！ 調子に乗りやがって！」

「その英霊様のへなちよこパンチは掠つてもいませんなあ……？」

「うるさいっ！ 黙れっ！」

「口以外もしつかり動かさせよ。動かしても当たんねーけどな」

俺は理想の国を作りたかっただけなんだ。叔父に追い落とされて、馬屋に捨てられて。クソ見たいな思いをした。天上からどん底に突き落とされる気分が、お前らに分かってたまるか。俺には、王になる資格があるんだぞ。

誰だつて踏みつけて良い。誰だつて利用して良い。その先に出来る物を考えりや何をしてもお釣りがくるんだ。俺が作り上げた理想郷があれば！ 全て！ チャラになる！

そうだ。そうだつてのに……なんでコイツは、俺を見て、笑う。

俺が必死になつてるのを、なんで嘲笑つてみてられるんだ!!

「——気に入らねえのはその眼だ」

それはこつちのセリフだ。

嗤つてくるくせに。その癖、目は酷いほど冷えてやがる。見た事がある。零落した俺を哀れみながら、ざまあみると見て来た俗人共の目だ。俺が見返そうと思つた奴らの目だ
!!

「自分が被害者だから何をしても良い……本気でそう思つてやがる」

「ああそうだ！ 俺は追い落とされたから！ 王になる権利を有してるんだ！」

「ちげえよ。そんな権利ある訳ねえだろ」

「うるさい！」

なんで見下されなきやならない。なんでこんな目に会わなきやならない。悔しい、悔しい、悔しい——だから、必死になつた。俺の力で！ 俺は！ のし上がった！ 金色の羊の皮を求めて、大冒険に出た！

凡人共じゃ、俗人共じゃできない事だ！ 俺だから出来た英雄譚だ！ そうだ、俺は真に英雄足り得る男なんだ！ 本物の英雄だつて、俺の船に乗つてたんだ。そいつ等を束ねた俺も、また英雄だ！

「自分らが被害者だつて思つてる奴らは、本当になんだつてするな……良く知ってるさその事は。俺達がそうだったよ」

「っ！」

「自分達が傷ついたのなら、周りが傷ついたって問題無い。人間の心理らしいな。そう思つちまうのは。哀れだと思わないでもねえよ。そんな考え方しか出来ないんだから」
「そうだ。俺が見下されたんだ。今度は俺が見下してやるんだ！ 王になつて！ 自分の国を取り戻して！ あのどん底から立ち直つてやつたぞと！」

「自分が失つたもの以上の事を取り戻さないと止まらない」

「だまれっ！」

「成果が出なければ全てが無駄になる」

「だまれえっ！」

「傷ついた自分が哀れで哀れで、だから余計に成果を求めらるんだろ!! そんな自分がやつた事だから！ 賭けた労力を失うのが怖くてしようがなくなる！」

「だまれえっ!!」

「そんな事、言われなくなつて……!! 嫌つて程分かつてる！ 船を出した時から、もう後戻りはできない！ 誰が犠牲になつたつて！ 俺は王になるために進んだんだ！
そして王になつて、俺は……！」

「——目的を果たして」

——男は、酷く、冷えて目をしていやがるんだ。

「気持ちよくなつて、良かったな」

「俺は、目的を果たした後に来る、ツケだ。お前らが踏みつけにしたものだ。それを思い知りやがれ、『成功者』」

一瞬だった。

腹に物凄い衝撃が来た。と思つたら、もう俺は倒れてた。力が入らない。

腹が、馬鹿みたいに痛え。立ち上がる力もねえ。体が消える様な感覚は無い。吐き気もしてくる。立ち上がりたい。この無礼者に一発くらわしたいのに、自分の足が言う事を聞かない。

嫌だ。どうして俺がこんな目に会つてるんだ。どうして殴られなきゃいけないんだ。ちくしょう。ちくしょう。

「——サーヴァントつてのは本当に凄いな。これだけ全力で漸く、ダウンだけか。こっちは全部の切り札切つたつてのによ」

ちくしょう——！

「まあそれが、お前らが踏みつけにして来た奴らの一発だ。受け取っておけよ。素直に」

第四十章・裏：怪物の言い分

「おいマジかよ……サシとか」

「よそ見をしている余裕はあるのか？」

「そう言われてもなあ。アンタはどうなんだい？　自分のマスターがサーヴァントにサシの戦い挑もうとしてんだぜ」

よく平気で居られる。

アレが死ねば、私も自動で戦闘不能になるのは間違いない。

それを目の前の男も承知しているのだろう。だからそう言う。まあ、その心配は最もだろうが。にしても間が抜けている。

「それで動揺を誘おうというのは、些かと無茶ではないか。ヘクトール」

「……アンタ相手にどんな手を使おうが足りないのはそうだけど。割と本気で心配しているのは、マジツ！　つとお……なんだけどねえ」

爪があと一步のところですり抜けていく。随分と上手く戦う。カルデアの連中は、ヘラクレスばかりを怪物と警戒しているが、この男も大概だ。私の様な本物の怪物の牙や爪を、槍の穂先で『いなす』など。到底できる技ではない。

あの男とて、私と真つ向からの戦いはしなかった。

断言しよう。私を殺したあの男より、間違いなく守りの技量は上であろう。誇るがい。兜輝くヘクトールよ。

「サーヴァント相手に勝てると思ってる？」

「さてな。アレが『そうしたい』というから手伝ってやっただけだ。結果がどうなるか等、さして気にもならん」

「おいおい、じゃあ見殺し同然で送り出したって事かい？」

「そうなるな」

「随分とまあ……冷遇されてたとかそんな感じ？ 恨み代わりにそういうことしちやつ

た？」

とはいえ。

「いいや、そんな事は無い。それなりの待遇は受けていた」

「んじやまあ、その待遇がっ！ お節介で、嫌になった、とか？」

「くくつ、言うではないかっ！」

それを踏まえても、私の『髪』からこうも逃げつつ、良く口が開ける。余裕があるのかそれとも。余裕が無いからこそ、口を開いて、動揺させようとしているのか。

もし後者であれば。怪物にそんな生易しいやり方が通じると思っているのか。言葉

を解するとはいえ、私は人間を喰らう化け物だ。

——とはいえ、その化け物に対して『利用しろ』等と。生易しいどころか、バカではないかと誤解する程の言葉を投げかけたマスターが居るが。

「だとしたら冷たいねー。一応それなりの待遇貰ったのに、一切心配だとかはしないってのは。それに……愚かだぜ。弱点を守らないってのは」

「私を人間の尺度で計るとは。愚かしいとは思わないのか？　ヘクトール」

「そもそもそこに議論が無いんだよ。弱点を庇うのなんて動物として最低限の本能だろ」

ヘクトールは、そう言つて笑う。

マスターが弱点。確かにそうだ。我々サーヴァントなどよりも余程虚弱。貧弱。サーヴァントが必死にマスターを守るのは、アレが外付けの弱点であるが故でもある。

現世に死者の影法師を繋ぎ止める楔だ。それを破壊されては我々は現世に留まれないのも当然ではある。

貴様から見れば、弱点を突かせる為に送り出したようにすら見えているのか？　成

程、それは間抜けと笑うのも分らないか。

「——貴様は、私のマスターがイアソンに負けると思っているか？」

「そりゃあ、幾らウチの船長が……まあ、なんだ。戦力的に大したことないって言つても

さ。英霊と人間だぜ？ 格の差つてもんがあるでしようよ」

「英霊と人間の、か。まあ、確かにそうだ」

怪物が人間には敵わぬ様に。英霊が人間を圧倒するのも当然。どうしようもない存在としての格の壁。それは当然存在するだろう。挑むのも馬鹿らしくなってくる圧倒的な隔絶がそこにある。

無数の勇士が我々に敵わぬと理解して、それでも尚、挑み、捻り潰される。そんな景色を確かに、私はよく見て来た。蹂躪する側だった。

容易く千切り、石にし、その希望を握りつぶして来た。握りつぶすだけではなく、呑み込んで来た。まあ、やれるだけの殺し方をして来た。殺した数などまあ覚えても居ない。

種としての圧倒的な格差という物を、私は一番よく知っているだろう。

「くく」

ああだが、しかし。

しかし、その言葉に、思わずして――

「くくくつ、ハハハハハハッ！」

我慢できず、笑いが漏れてしまった。

「……アレ、なんかオジサン面白い事言った？」

「いいや、語るに落ちる、と言う言葉で文字通り聞く事になろうとは、私であっても全く想像だにしていなかったからな」

「はあ？」

「——怪物を打倒して来たのは、人間だ」

そうだ。人間共は、我らの様な反英霊を、怪物を、打倒して来た。

戦力、彼我の差。そんな物を、承知の上で、だ。

自分では敵わぬ。圧倒的な存在を相手に、しかしながら人間は当然のように挑んで来たというのに。

そして——本来あり得ぬその軌跡をたどり、そして奇跡を掴んで来る。それが忌々しき『英雄』と言う存在ではないのか。お前たちそのものではないのか。それを。どの口がそのセリフを吐く？

「その人間の英霊が、『格の差を越えられると思うのか』とはな！ それではまるでお前たち、怪物こわらぬの言い草ではないか！ ええ!？」

「……っ!？」

「お前から英霊は、そんな物を言い訳にして、戦うのを諦めた事があるか？」

違うだろう。

お前らこそが、最も、最も、諦めもせず、格差も捨てて。我々に必死になってくらくら

ついて来るといふのに。

どれだけがそれが鬱陶しく、そして此方にとって苛立たしいのか。脅威であるのか。お前たち以上に、私達は熟知しているぞ。

それでも『上位者』であるが故に。我々は確かに格差を知つて尚、挑んで来るかと挑戦者を笑うのだ。しかし……お前たちはそうではあるまい？

「なんだ、正義の軍団が、悪に傾倒している自覚があるのか？　これを笑わずして何を笑うヘクトール」

「あーっ、まったく……それは……」

「貴様等と違い、私は利用しているあのマスターが、そこ迄はやわだとは思っていない故な。格の差とて存外、飛び越えるやもしれん、程度には評価している」

あの男は。私の様な化物に対し、自分の事を利用しろ、自分も利用する、とまで言つてのけた愚か者だ。その呆れかえるような胆力だけは嫌と言うほど理解できている。

肉体の差など、そんな精神の強さと小細工でひっくり返す。そんな光景を、我々は嫌と言う程見せつけられてきた。殆どアレはするではないか。

故に……相手が倒されるべき『怪物』の様な言動をしているのだから。

それは此方もずるの一つでもやってしかるべきだ。そうだろう？　『英雄』。

「まあ相手は、口は兎も角、体の方は貧弱な小僧だ。行けるのではないか？」

「——それを聞いて、オジサンがこのままここに居ると思ってる？」

「良いぞ。背を向けても構わん。だが貴様が私の弱点を突く前に、私は貴様の喉首を掻つ切つて……いや？」

ああいや、違うな。こんな普通の問答では面白くない。相手が英雄であるのであれば。此方は怪物らしく言つてやろう。精々姉上に良い報告が出来る様に、出来る限り、翹つてやろうではないか。

『おお、恐ろしい英雄よ。一騎打ちの邪魔はさせぬ。この世界の平和の為に、貴様を討つ』……こんな感じか？ ククク」

「……生前から生半可な挑発には乗らない様にしてるんだけど。乗る乗らない以前に、『負け』を認めさせられるような挑発は、初めてだよ……！」

男は、槍を構えた。

英雄らしく、怪物を討ち取る為に。

だが敵に酔いしれる大義は無く、そして私を討ち取る為の武器も無い。私を相手に怯まぬ覚悟は、踏み込む一步は、突き出される槍は、確かに強いやもしれんがしかし……強いだけの輩など。

私は生前、幾ら討ち取つて来たか。

「——随分無様な格好で固まったな、槍兵」

「そうだねえ。全く。悪役らしいって言えば、らしい最後だ——」
そうして。

強いだけの輩の最後など。何時も決まっている。

無様な石像となって、立ち尽くすだけだ——

第四十一章

目玉狩り、はーじまーるよー。

前回は、イアソン様に遂に殴り勝ったところからの、続きです。礼装で汝は魔性、罪ありき！ からの特攻乗せクリティカルはやっぱ強ええわ……暴力は正義。慈悲は無い。

あ、前回イアソン様を殴り倒したカラクリ、というのはこの礼装三つ目のスキル。魔性特性付与です。○○特性付与、というのは竜特性だったり悪特性でFGOにはよく出てきていますが、今回はその魔性バージョン。

コレの何が良いかと言うと……式部さんの特攻がホモ君の攻撃に乗るんですよ。

結局の所、ホモ君自身で出力を上げるのは基本やっぱり限界があるのですよね。外部からの補助が必要にはなってるんですが。まあ外部サポートできるキャラクターって意外と来てくれないんですよ。

式部さんが来てくれた時点でこうするのは予定していました。クリティカル威力に特攻を乗せると、結構威力が跳ね上がるんでございますよ。乗算は正義。

試験運用でイアソン君をあそこ迄一発でボコせるなら十分な威力、ビルドがちよつと

ずつ実を結んで来た雰囲気がありますめえ!!!

経験値もがっぽり、自尊心も回復、やっぱこの、ガツチリ想定が当て嵌まってふつう信じられない位の威力をバチっと叩きだした時の脳汁ダバダバな状況になってこそそのマスター戦闘ビルドなんやなって……みんなも、やろう!!! (クソデカボイス)

で、この戦いは大将が倒れてしまえば此方の勝ち……つまり、初めてホモ君が特異点の戦況を左右したんですよ皆さん!!!! ビルド!!!! 頑張った!!!! 甲斐が!!!! あった!!!!

メディアさん、ヘクトール氏も!! マトモに戦わずして突破。そしてペラクレスは藤丸君が仕留めてくれる。これぞ完全勝利と言わずして何を勝利と申すのか……と言う事でオケアノス、完!!!

——ではありませんです、はい。

『……エウリュアレを『契約の箱』に捧げるなんてバカな考え、誰に吹き込まれたんだい?』

そう。此処からは宝具本来の持ち主、ダビデ王のターン。ドロロー!

バーサーカーソウル発動後、モンスターカードで只管殴るかの如く、矢継ぎ早に事実を叩きつける王。契約の箱に神霊を捧げれば無限の力を得られるだなんてあり得ない。時代そのものに死をもたらず終末装置。

契約の箱がただの『世界ぶつ殺し機』だった事に狼狽するいあそんくん(死後)の姿

は滑稽だなあオイ!!

さて、そんな滑稽な道化を生み出した張本人をご紹介しましょう。此方の方です!!

『——メディア、今の話は……嘘だよな?』

『……』

はい。奥様は魔女。と言う事で今回の特異点の真の黒幕、のフィクサー、メディア様です。いやーこんな虫も殺せない様な清纯可憐な美少女がしれつと夫を操って、世界一つ丸ごと滅ぼそうとしているという事実。情緒壊れる。

『神霊を『契約の箱』に捧げれば無限の力が与えられるんだろう? だって、あのお方はそう言うって——』

『はい。嘘などついておりません。だって、時代が死ぬという事は世界が滅ぶ。世界が滅ぶという事は敵が居なくなる。ほら——無敵ではございませんか』

……えー、これを正気でおっしゃっているのですよこの奥さん。敵を世界諸共皆根こそぎやつちまえば敵が居なくなるとかいいうジエノサイド理論止めろくださいオナシヤス! 環境を考えろオ! (明後日へのホームラン)

等と、色々言っていますが。イアソン君とかの事情を考えると、コレが一番丸い可能性もあるという事実。

イアソン君としては、此処に自分の理想の王国を築きたかった訳です。まあ王族だつ

た頃に親戚に酷い扱いされたんで見返してやるために自分の思う理想郷を作りたいって言う感じの野望です。生前もそんな感じでした。

しかしメディアアさん曰く『それをやるにはオメーの魂は捻じれ過ぎやろ現実見ろや』との事だそうです。此処まで酷い言い方して居ませんが凡そこんな感じですよ。

『俺は自分の国を取り戻したかっただけだ！ 自分だけの国が欲しかっただけだ！ それの何が悪いというのだ、この裏切り者が——！』

『……残念です。召喚されて以来、ずっと私は本当の事しか言ってますでした』

実際イアソン君、騙されていた……いや、誤解があったとはいえ、此処まで丁寧に尽くしてくれたメディアアさんをバリバリ罵倒する辺り、性根は間違いなく捻じり曲がり切っております。アウトです。

『彼の王に選ばれてしまったアナタを、こうしてお守りして来ました』

『例えば、今しがた守るといったでしょう？ どうお守りするかと言うと……』
だからこういうやり方をされる。

取り出されたるはイアソンの持つていた聖杯。これを使い、執り行われるはこの特異点のラストボスを召喚する邪悪なる儀式でございます。

FGO本編では到底描写されなかつたこの状態、人を目玉だらけの立派な柱に変えるメディアアさんがしっかりとムービーに映し出されています。そんなサービス要らない

から……（良心）

『なっ！ おま、おまえ！？ やめろ！ 何をする！ ひつ、やだ、からだ、とけるっ……！』

物凄いい情けない悲鳴してますが、実際自分がこんな事されたならば間違いない以上この悲鳴を上げる自信がございます。なんなら悲鳴すら上げられず意識を失って終わりっ！ 閉廷！ 以上！

なんでかつて変生までの過程がまあグロイ！！ 人が『とける』と言うのが、溶解されていく、と言うのではなく……なんて言うか、本当に『とける』としか言いようがないんですよね。初代 Fate のアニメ化第二作『UBW』においての間桐慎二君なんかになつていた状態が近いです。

んで、その『とけた』肉体が一体どうなるかと言えば……そこから再構築されて、ぐによくによ膨らんでいつて……最後には目玉だらけの柱に変化するのですよ。うわきつもち悪いなあオメエ！（罵倒）

まあしつかりを描写されている所為でプレイヤー自身の気力をゴリゴリと削つてくるんですよね。（こら）。

『さあ、序列三十、海魔フォルネウス！ その力を以て、アナタの旅を終らせなさい！』
と言う事で、ホモ君は前回の特異点においては、別行動を取っていたのでコレが初顔

合わせでございませぬ。この、肉の柱周囲に目玉塗れとかいう文字通りのモンスターな見た目をしている怪物こそ、黒幕の尖兵たる自称『ソロモン七十二柱の悪魔』、魔神柱でございませぬ。

こんな人間のS A N値を削りきる様なデザインしてるクリーチャーが序盤から出てくるっていうのがF G Oの凄い所だと思えます。

なれど、この尋常の存在じゃねえと一目でわかる化け物相手に、何の躊躇いもなく二丁の弾丸を叩き込む姐御が一人。

『当たった！ ようし、当たるんだったら倒せるさ！』

はえーすつごい胆力……他の人だつて『こんなん倒せるのか』っていう雰囲気だったところに、何の躊躇いもなく鉛玉を打ちこめるといふ。例え目の前に絶望が立ち塞がっていようと『まず進む』つて言う選択肢が取れる。さすがは『星の開拓者』。不可能を可能にする英霊に与えられる綺羅星の如き希望。

彼女の一喝で、怯んでいた船の空気もピシッと喝が入ってますよ。

『マスター、この時代最後の敵を確認。修正を開始します——！』
マシユちゃんの申す通り。

目の前のメディア、及び彼女がイアソンを媒介に召喚した魔神がこの特異点最後の敵。とはいえ、イアソンとのサシという大博打を乗り越えた後のコイツなど、実質此方

にとっては消化試合ではありません。

折角の海ですし、捌いて刺身にでもして海にリリースして上げましょうや。対戦、宜しくお願ひします。

第四十一章・裏：そして海賊は次の冒険へ

『貴方達では敵わない』『だから星を集めなさい』。

彼女は、初めから諦めていた。黒幕に敵わないと。魔術師である限り、『あのお方』には逆らえないのだと。そう言い残し、メデイアは消滅していきました。

「……意味深な事言い逃げしてくれちゃって」

「マスター」

「ん？」

「メデイアが口にしていた事。どう思われますか」

「それ聞かない？ 分からない程馬鹿じゃないやい、俺だつて」

神代の魔女。その実力は……私でも理解できています。正直、先程まで拮抗できていたのは、私が実力を抑え込めていた、と言う訳ではございません。

マスターが直接、お相手の船長と一騎打ちをしていた事に、彼女は間違いなく気が取られていたと思われれます。そうでなくては、私の実力では到底抑え込めなかつたでしょう。

相手をしていて分かるのです。圧倒的な実力の差。寧ろ、気もそぞろに私の相手をし

ていて尚、それでも彼女は積極的に攻勢に出ようとはしていませんでした。私は、本当に彼女がイアソンに対し何か特別に支援をしない様に気を引く……程度しか出来なかったのです。私としては。

それ程の力と技術、そして神秘の深さ。魔術師としての全てで私は足元にも及ばない様な存在の方が……『戦う前から諦めた』様な存在が。彼女たちの背後に居る。

「……折角特異点突破したつてのに。出てくる情報が悪い物ばかり。やんなるねえ」
「人類の歴史を焼き尽くした……これだけの大業にして大罪を成したのですから、恐ろしい黒幕が待っている、と思つてはいました、ですが」

「それ以上の闇が待つてゐるつて？　じよーだんじやねえや」
本当に大魔王でも出て来るんじゃないかね。と言う言葉は、風に流れて何処かへと消えて行つてしまつて。

酷く冗談めかした言い方ではあるのですが。しかしそれを冗談だと笑い飛ばせる事は、私には出来ませんでした。本当に。

「……笑つて欲しいんだけどな」

「笑えませんか……マスターがやった事も含めて」

ぎくつ、と言わんばかりの動きで、マスターの動きが止まりました。

ちらと此方を伺う様子は、まるで親に叱られてしまった子供のようですが……ですけ

ど、誤魔化されません。今度こそ。

先ほどはマスターに誤魔化されてしまったので……正直、メディアの言葉もそうですが私としては同じくらいに、其方も気にしなければいけませんので。

「くっ、それに関しては納得してくれたじゃあないの、お前さん……」

「私は納得……というか、押し流されはしましたけど、ドクターはそうではありませんでしたよ」

「あ、そつかあ……やべえな」

——ゴルゴン様などは、その紫紺の髪を揺らして笑っておられましたけど。

私のマスターはとんでもない愚か者ではないのか、と。その上でやってみろ、と言つてらっしゃいました。マスターがイアソンとの一騎打ちに臨む事に。

地雷踏まれたからぶん殴りに行く。全力で。という一言でぐいっと、前のめりで。私はどうすればいいのか、困りに困つて……首を縦に振るしかありませんでしたが。ロマン様にとつてはどれだけの心労だったか。

「ロマン、落ち着いて……!」

『止めるなー藤丸君。ぼかあー、アイツに一発ガツンとやってやるんだ。脳味噌武闘派カブトムシな彼をなあ、この言葉でえ、ねじ伏せてやるんだよお』

「ドクター?! やめて?! 落ち着いて?! どうしたの口調が変だよ!」

「……あの、結局何があったんでしょうか、此方では」

「さあ。私はマシユさんと一緒にヘラクレスを押し込むので精一杯で通信とか一切」

「フォーウ……」

恐らく、観測室から此方の惨状を見ていたのでしよう。此方を担当していらつしやつたダ・ヴィンチ様が。それを聞いたロマニ様が、どんな表情をしていたのか。それは激昂しても当然かと思えます。

……後でマスターがどんな状態になるか、それを想像するとやっぱり止めるべきでは無かったのか、と思ってしまうのは兎も角として。

勝てたのは、正直幸運と言うしかないのです。

「康友お……お前なにしたんだよお、ドクターが怒髪天だぞ!？」

「ダ・ヴィンチちゃんから詳細は聞いてくれ。こっちを見てたのはあの人だ」

「……通信のダ・ヴィンチちゃんめっちゃニヤニヤしてるんだけど?」

「そう言われましても。俺は一切そんな笑えるような事してないし」

——その後、藤丸様が駆け付けて魔神柱を討ち果たす……その前。アルゴノーツとの激闘の一部始終を聞いた藤丸様も顔が渋くなりました。そしてロマニ様を止める事をやめられました。

「……まあ、それは置いておくとして。あのメディアが言っていた星つてなんなんだろう」

「さーな。頭脳労働は俺らの担当ちやうべ」

「いやあ、俺達も頭脳労働しないと駄目だろうよ。だってマスターってそう言う職業じゃないのか？」

「じゃあアレだ、俺達は頭脳労働第一、ダ・ヴィンチちゃんロマニが第二、って事で。こう言う策略的な頭脳労働は俺達の担当じゃないって感じで」

「お前なあ」

そして納得した結果……戻ってくるのは、やはりメディアの言葉です。何者にも負けぬ輝きを持つ星。

そう言った時。チラリと、ドレイク船長を見た気がしたのです。メディアは。

星、というのはドレイク船長に関係があるのでしょうか。

「——つたく、アンタ等ホント。あんな化け物倒した後だつてのに随分と呑気してるね」

「あ、船長。大丈夫ですか？」

「あん？ まあちよいと喰らいはしたけど……この程度なら慣れっこさね」

「頭から血イ流して慣れっこって流石キャプテンですなあ。というか、そんな傷が気にならないレベルで大暴れしてたしなあ」

確かに。あの怪物を相手に全く怯まず、寧ろ前線に出張って誰よりも苛烈、怒涛。自ら敵の押し寄せる攻勢を切つて落とす如き奮戦。マシユ様の鉄壁の守りとの阿吽の呼

吸、リリイ様正道の剣舞と踊る邪道の武闘、ゴルゴーン様と張り合うほどの無数の弾幕、私が一切周りを気にしなくていい程のフォローの技巧。

夜空に輝く星の如く、確かに彼女は輝いておられました。間違いなく。

「全くだ。汝、本当に人間か？」

「聖杯もつてるにしてもねえ。いやホント、正直ヘラクレスよりも恐ろしく見えたよ」

「冗談は止しとくれ。あんなバケモノと比べられる程じゃないだろう」

「いんや？ アルテミスもちよつと目を丸くしてたしな。まあ並大抵じゃねえよ」

「むー、ダーリン。私も頑張ってたよー？」

「おうそうだな」

船に乗っていた皆様をも惹きつける輝き……そう言う事を『星』と例えてメディアアは言っていたのか。それとも。

私には分かりかねますが……

「——あ」

それは、此処から戻ってから考える事になるでしょう。

私達の足元から立ち上る黄金の光。それは、元の時代へと我々が帰還する合図です。あの魔神を討ち果たし、無事に聖杯を回収した事で、この特異点が修復される時が来たのでした。

ドレイク船長が、此方を見ている。

「……なんだい、帰るのかい？」

「えつと、はい。そう、ですな」

「あ………つたく、アンタ等程惜しい船員をみすみす返す事になろうとはね」

「すいません、一緒に海賊出来たらよかつたんですけど」

「そーだよ。アタシとアレだけ派手にやり合つた剣士なんざそりやあ惜しいよ畜生。盾の嬢ちゃんだつて、ウチの船で派手な冒険に付き合せてたかつた」

「そうドレイク船長はカラカラと笑つてらっしゃいます。」

「——ま、でもそんな湿っぽい感想で見送るのもアレだね。アタシの流儀じゃない」

「キャプテン……」

「楽しかつたよ。藤丸。マシユ。カルデア。今までの旅は、アタシの中で一番派手で愉快な冒険だつた。何時までも酒の肴には困らない」

「分かれは、決して湿つたものではなく。」

「その輝きは最後まで曇る事無く。」

「そして、決して後ろを振り返る事もなく。」

「お互いに暇でもあつたらまた会おうじゃないか。今度こそ、世界を救うなんて重苦しい仕事じゃなくて、宝を追い求めるみたいな、そんな冒険を、な」

「——はいつ！ 船長！ また何れ、何処かで！」

「おう、アタシが次の冒険でもしてる時に、駆け付けてくれや！」

少しだけ。メディアの言っている言葉の意味が、分からないでもありません。

確かに、世界を亡ぼす様な巨大な脅威に立ち向かえるのは……彼女の如く。決してどんな脅威にも怯まず、新たな世界へと踏み出して逝けるような。そんなお方なのでしよう。

同時に。

そんなお方でなければ、この先の旅を乗り越えていけない事に。改めて、身が引き締まるような思いがしたのです。

第四十二章

海を抜ける実況、はーじまーるよー。

さて。魔神柱を切り倒し、メデイア様のありがたーいお言葉を聞いて。そしてドレイク船長の激励を背中に受けた所で。リザルトでございます。

今回の成長はエグイですよ。やっぱリイアソン君を討伐できたのがイヤードカいっす。レベルの上りが天元突破。素のスペックもそうですが、ボーナスポイントがあゝ、たまらねえぜ。もう一度やりたいぜ。

どのくらい成長した？ いっぱい成長です……といっても、皆様には恐らく実感して頂けないでしょう。

ではサーヴァントで言えばどのくらいだ？ Cランクです（ボケずに入られない投稿者の性） 能力値じゃねえ、サーヴァント名言えサーヴァント名！ あゝ謎のヒロインX オルタです（強化済並感） あー良いねえ分りやすいねえ。

彼女とまだまだ三下のホモ君では強さは雲泥の差がありますが、成長幅は大体同じ位だと思われます。ホントXオルタのスキル強化は神だった……

いやーマジで、神秘にボーナスを全部振ってるお陰で、覚醒した際の火力がしっかり

跳ね上がっております。現在であれば、覚醒状態で火力が上振れると、特攻無しでもイアソンをワンパンで行けるかもしれません。因みにその一発で倒さないといけないのは変わりないので大博打には変わりありませんが（困惑）

さて。そんな嬉しいリザルトを他所に、今私は何時も通り観測室に来ております。特異点が終わるたびに、此処を地道に探索していたのですが……さて、回数的にそろそろだと思うのですが。如何でしょうか。

『——おや、何か探し物かい？』

つとお、来ました。今日も現代版モナリザの顔が眩しいダ・ヴィンチちゃんです。この観測室のダ・ヴィンチちゃんを待つてたんですよ私は。

観測室では、基本的に探索してもロマニか、ここで頑張つてサポートしてくれている職員との会話しか発生しません。ダ・ヴィンチちゃんと遭遇する、というか会話するのはダ・ヴィンチちゃんの素敵な工房に行かないと基本は出来ないのです……

しかし、何事も例外はあります。

そして、観測室でダ・ヴィンチちゃんと会話するという、その例外は、私が一番欲している『イベント』を発生させるのに必要な事なのです。

というのも、このゲーム。観測室でダ・ヴィンチちゃんと遭遇するのが『イベント特異点』の発生のトリガーとなっているのですよ。

イベント特異点と言うのは、FGOほんへにおける期間限定イベント……例えば悪名高きチエイテ城だったり、ルルハワだったり、魔法少女の国だったり、人理修復の旅に直接関係しない幾つかの特異点。

通称『イベント特異点』は、このゲームでは普通には発生しません。フラグを立てるだけでは。まあ基本はストーリーを追うモードではあるので、普通にストーリーをやっただけでは、全く掠りもしないのです。水着でさえ。

お陰で、水着サーヴァントを召喚するにはこのイベント特異点に条件を満たした上でそのイベント特異点で召喚を行わないといけないって言う。そうなんですよ、イベント限定サーヴァントの皆さまは普通は召喚出来ないのです……

まあ式部さんみたく触媒を用意して、って言うなら話も違うんですが。

触媒の用意の仕様の無いBBちゃん関連サーヴァントの皆さんだったり、疑似サーヴァントの幾人かだったり、マジガチで縁召喚しか出来ない、サーヴァントコンプなんぞやろうもんならストーリーやら何やらを周回する必要すら出てきます。

そして、このイベント群を発生させる為の大前提として、このダ・ヴィンチちゃんと観測室で会話する、と言うのが必要になってくるのです。観測室で幾度も探索を繰り返した甲斐があつたという物。

後は、しつかりここまでキツチリ探索が出来ていたかどうかで、狙いのイベントが発

生するかが決まりますが……というか、ここまでやらないとそもそもイベントが発生しないとかイベント特異点をプレイする、と言う事の難しさよ……

『電子書籍？ いけません。やはり紙の本が一番』

そう考えると、ホント触媒で出て来てくださる式部さんは期間限定サーヴァントの良心でしかない。

因みにですけど、召喚難易度トップクラスはやっぱ水着サーヴァントだと思うじゃないですか。違うんですよ。クリスマス限定サーヴァントがいつちゃんキツイんです。マジである短い一定期間しかイベントが出現しないんですよ。

と言う事で、イベント出現の条件は満たしたので式部さんと絆を深めております。順調に進んで絆レベル三でございます。このゲームで絆レベル上げでゴリ押しが出来ると思うなよホント……絆礼装とか本当にエンドコンテンツもエンドコンテンツですからね。

絆ヘラクレスの運用とか、はっ！ 舐めちやあいけません。ヘラクレス引く時点から先ず高難易度ですよ。

とはいえ、絆礼装が必要ない位にこのゲームのヘラクレスは強いので問題は無いのですけど……絆ヘラクレスはどうかと言えば、まあ原典の恐ろしさをそのまま再現していると言えば分かるでしょうか。マジで不沈艦ですよ。

それは兎も角。

さて、次の第四特異点なのですが……恐らく、単純明快な話で、ホモ君が最も活躍しがたい特異点になってくるでしょう。まあ諸々理由はあるのですが、それは次回に。

当然ながら、こんな所でレベル上げで詰まっている訳にも行きません。という事でここでこの第四特異点時でもガンガン経験値を稼ぐためのヒットチャート！ イベント特異点発生時のダ・ヴィンチちゃんこそがキーです。

藤丸君操作時のイベント発生キーダ・ヴィンチちゃんは、イベントが発生した次の本編の特異点終了直後に、イベントが発生するように確定します。そこからはイベントのフラグ等で発動するかが決まってきます。

んで、このもう一人のマスター主人公なのですが……なんと、このイベントダ・ヴィンチちゃんが出た直後にイベント特異点に向かう事になるのです。そう本編の直後ではなく

このダ・ヴィンチちゃんが出た直後に。このタイミングの差は、藤丸君は七つの特異点を突破する、と言う大前提があるからなのでしょうが。

まあそんな事はどうでもよろしい。

問題は、第四特異点というバカクソ不利な特異点を丸々スルーして経験値を稼ぐムブが出来るのですよ。このモードの奏者であれば、基本的にこの初回ダ・ヴィンチちゃ

んを上手く使って第四特異点をスルーする選択肢は割とポピュラーな択ではあるのです。

と言う事で、今回第四特異点の戦いに、ホモ君は参加しません。その代わりイベント特異点に殴り込みをかけて、そこで経験値を稼ぐことになります。

『どうやら今回は通常以上にシバで乱れが観測されているらしいね』

あ、これですね。

ドクターからこのセリフが出るとイベント特異点が確定します。で、乱れの具合でどのレベルの大きさが分かるようになっていたのですが……通常以上って事は、それなりに大掛かりなイベント特異点じゃな？（震え声）

イベント特異点には規模、という物が存在します。

んで、凡そ三段階に分かれていて、ネロ祭りの様な相当に限られた規模のレベル。ハロウィン、クリスマス、バレンタインの様な普通の特異点よりは小さいレベル。そして夏、コラボと言ったマップもあつてガチガチで普通に特異点レベルの大きさがあるレベル。

今回は……恐らくですけど、その第二段階以上がほぼ確定していると思われますね。いやー出来れば小規模クラスで軽く解決したかったんですが……それでも経験値はウマウマなので。

まあクリアできるかは兎も角として。

取り敢えず、第四特異点でより効率的に稼ぐためのルートが確定した事だけは先ず喜
びたいと思います。ご視聴、ありがとうございます。

第四十二章・裏：被害者の理屈

「このカルデアって、秘密兵器的なものあるの？」

「……なんだい？ そんな唐突に」

「いや。正義の秘密組織って事だから、印象だけで物を言ってる。正直好奇心」

「本当に好奇心旺盛だね君は」

本造院君は色々癖が強い子だと思う。

それは出身がどうこうとか、特異的な血がどうこうとか……そう言う話ではなく。

ロマニは『まあ男の子なんてやんちゃな事多いし』とか言ってたけど、にしたとしてもサーヴァントに対して突っ込んで行ったりとやんちゃじゃ済まない事だつてやらかしてたりもした。

「まったく、そんな好奇心任せで行動したら、またぞろロマニに叱られるぜ？」

「いやーはっはっはっはっはっ。その説に関しては大変無茶をしたと思っておりますが故にお許しを……」

実際、ロマニはイアソンに突っ込んでいった本造院君を見て目を回していたし、帰った後に『君はホントに何やってるのかな？』とか割と真顔で説教ブチかましていた。藤

丸君も苦笑いしてた。

当人は『ムカついたから一発だけ殴りに行った』だそうだけでも。

こつちとしてはそんな事でサーヴァント殴りに行かれちゃあ笑い話にもならない。シャドウサーヴァントなんかとは文字通り、桁という物が違うんだ。

特異点Fのセイバーの時からだろうか。こんな無茶をしたのは。

「——なんでそんなにムカついたんだい？」

「ん？」

「いや。サーヴァントが他のエネミーとは格が違う事。それくらいは君も分かっている筈だと思ってるね」

ただ、馬鹿じゃないのだ。この子は。

感情任せで、アドリブ塗れで動いている様に見えて、意外とそうじゃない。

サーヴァントへの指示は基本的に的確だし、戦闘経験の無い紫式部の、照準の様な役割を果たしているのも、マスターの彼に間違いない。

クレバーではある。そして、勝負度胸も中々のもの。マスターとして、藤丸君とはまた別の強みを持っているのは間違いない。

その特異な血に目を奪われがちだが、どうにも『浮世離れ』している印象は、ぬぐえなかつたりするのだ。

「……ホントにそんな大層な理由ないのよ？　たださあ」

「ただ、なんだい？」

「自分達が被害者だからってなんでもして良い……そんな奴らってどう思う？　ダ・ヴィンチちゃんの性的には」

彼は、此方を見てそう言った。

どういう意味だろうか。と考える前に。取り敢えずは質問について思考を回してみる。さて。要するに被害者意識に狂いきった奴。

戦争被害者なんかには、自分達が攻められたから相手をとことん破壊しても良いって感じで『タガ』が外れる場合がある……って言うのは、まあ常識の範囲内だと思う。天才基準で考えると。

軍人に見逃された民間人が、やって来た相手の国への復讐を誓い、屈強な軍人に成り上がった。なんていうのはよくある話だ。

「どう、と言われても、被害者がちよつとやり過ぎちゃうのは、何時もの事じゃない？」

「んー、普通なら、ね」

「普通じゃない時の事を話してるのかい？」

「そうだねえ。ちよつとしたきっかけで暴走した被害者意識ってのは、多分加害者よりも性質が悪いって話だ」

やっぱり日本の男子高校生が言う話じゃないよなあ。とは思う。男子高校生が被害者意識の高い、暴走してる奴を相手にする機会なんて……

——ふと、頭に閃く事がある。

「……もしかして、ご家族だったりする？」

「自分で言ってるだけだし。昔の、ホント、伝説みたいな事をずううつと語り伝えるって中々の被害者意識じゃない？」

成程。漸く理解できた気がする。

要するに彼が嫌悪しているのはご家族であり。そして彼らと似たような被害者意識の塊みたくない人達な訳だ。

「イアソンは確か、王の子息だったところから引きずりおろされたんだっけ？ 知ってたのかい？ 君は」

「しらんよそんな事。ただ、アイツの目は良く知ってる」

「目？」

「自分達がやってやるんだ、って言う変な熱が目に籠ってるくせに、目の奥は妙に卑屈って言うか。自分が底辺なんだって言う嫌な免罪符ばかりギラついてる」

だからタガを外して何でもしてくる、と。

「んで、その元被害者な加害者の皆様に蹂躪される皆様はたまつたもんじゃないって訳」

「……君は蹂躪された側?」

「華の幼少期、ほぼ洗脳教育された訳だろ? 実家から逃げ出さなかつたらマジで俺も

被害者意識を『植え付けられてた』」

……まあ、確かに。彼としては幼少期の頃のトラウマにも等しい訳で。それを目の前でちらつかせられたなら、渾身の拳一発で殴りに行っても、そりゃあ不思議でも何でもないって訳か。

とはいえ、だ。

「これからはそれも自重して貰わないと。気持ちは分からないでもないけど、そこを堪えないとやっていけない事も増えるだろうし」

「分かつてますよそりやあもう」

「そもそもマスターの体調が万全ばかりって事もないだろう。あんな無茶が出来るのは、本当に幸運な事なんだよ」

「そんな、脅迫みたいな言い方……いや、でもそうでもないのか?」

当然ながら。脅迫でも何でもない。

特異点の環境次第によっては、文字通り何の抵抗も出来ない様な事だつて、これからあるだろうとは思う。例えば……吸いこむ大気そのものが有毒な事だつてあるだろう。

濃い魔力は、それだけで一般人の体を壊す。そういった物に対する備えだつて無いわ

けではないけれど……それで凌ぎ切れないレベルであれば、マトモに活動できるかどうか。

その隙を突かれて、一気に此方の不利に持つていかれてしまうことだって。

「と言う事で、これからは心は強く律するように。ダ・ヴィンチちゃんからの特別アドバイスだよん」

「それに關して言わして貰えば俺が心を強く律した所で特異点側の都合はどうしようもないんだけどもさ」

「それを言っちゃおしまいだよ君」

まあ、僅かに逸れたりもしたけども。

大まかは伝わった、とは思う。

「……そんな状況を打開する為の秘密兵器とかありませんかね」

「君ねえ。今、結構真面目な話をしてたんだよ？ それが急になんでIQを下げたりするんだい。冗談じゃないんだよホント」

「だってなあ。そんな俺に何が出来るかって、覚悟する事だけだし……じゃあここでは話の花を咲かせてカルデアの麗しき技術顧問と交流を深める方が有意義じゃない？」

「うーん全くもって正解！」

後私の美しさを褒められちゃもう何でもいいやつてなつちやうなあ〜！ そりゃあ

もう私のボディはパーフェクトだからね！ うん！ よーしダ・ヴィンチちゃんなんでも話しちゃうゾ♡

……というのは、まあ、三割は冗談だけでも。実際彼の言う事も最もだろう。結局の所特異点での問題はこつちがどれだけバックアップできるかだ。彼がやれる事と言うのは私達を信じて強く心を持つ事だけ。

であれば、私達と交流を深めようと思うのは正しい事だと思う。

「それじゃあなんか気になるものはあるかい？」

「——気になるって言えば、そこ」

「ん？」

と言う事で、初めて彼が話題に選んだのは……この存在証明を行う部屋において、端の方に置かれている……函、としか言えないユニットだった。

「アレって、なんか文字が書かれてるけど……何？」

「あー、アレかい？ アレは……元々ここにあるシステムを組み込む予定でね。その為のスペースというか」

「って事は、アレって空っぽなの？」

「いんや。そんな事は無いよ。今は予備電源的なものが入ってるさ」

「ふーん……んじゃあ、元はなにが入る予定だったのさ」

しかし、指差されて改めて思い出す。何というか、思い出してみればここに来てから作った物は幾つかある。こうして滅ぼされかけて、そう言うのに目を向けるいい機会なのかもしれない。

何時までもカルデアのバックアップメンバーが無事なのかも……正直な話、分からないと言えてしまうのが此処だ。だからこそ、先ずは我が子を目覚めさせる努力をするべきなのだろうか。天才的に。

「ムネーモシユネー。私達の代わりに、特異点に向かった君達の観測を行う人口知能として作った存在さ」

「へー……凄そうだけど、何でダメだったの？」

「それが私にも分からなくてねー……」

第四特異点。

いよいよ、特異点攻略も、折り返しを迎えるのだから。

断章：千年京の怪人

—ここに軟禁されてから、どれほどの時間が経っただろうか。

等と思つてみるけど、凡その時間は分かるのでやめた。何せあの黒白半分分け怪人、見た目とは異様な程マッチせず、時間にはキツチリとしているのだ。

ここは外界から隔絶されているため、詳しい時間は全くもつて分からないのだが。それでも何度も何度も来たなら『全く同じ時間』に來ている事くらいは分かる。

私の管理も徹底している。一応私はサーヴァントではあるのだが、しかしながら私の性格を理解しているのか、私の生活環境は実に良い。というか、下手すると生前よりもレベルが高いかも知れない。

今、私が着ているのはとんでもなく上等な布で織られた和服、と言う奴だ。何枚も重ねて着るとするのは初めての経験だが、しかしこの煌びやかさは、あの地中海の美とはまた違う物がある。

服だけではない。

部屋に置いてある家財はどれもこれも上品な物ばかり。ダンス、そして……文机、だっただろうか。手触りだけでも、コレがどれだけ良い物なのかは分かる。私への貢物

として持つて来られても、恐らく及第点を与える程度には。

和装の侍女は常に五人以上は近くに文字通り侍り、朝になれば私の髪を梳きに来るし、食事の世話もすれば、眠るまで話し相手にもなってくれている。

私の扱いは虜囚、というよりは……まるで、姫の如しである。

『——麗しの女神、失礼いたします』

「どつどつ」

困惑している、というのは無いでもない。だが私、こう見えてちやほやされているのに慣れてしまっているのです、この状況には寧ろ『なつかしさ』という物を感じてしまっているのは、向こうの思惑通りなのだろうか。

まあそんな風に管理している怪人は、今回も当然のように私の部屋に尋ねて来る訳なのだけれども。

「お時間となりました。しばしこの部屋から動かず、お待ちいただければ」

「はあ……何時だつてここから出た訳ではないのだけど？」

「ンンン、それは一つの様式美、と言う奴でございます。そこはお分かりいただければ、と」

そしてこの男が基本的に来るのは、この事を伝える為……部屋から全く出て居ないというのに、必ず『自分が戻ってくるまで動かずにいて貰えれば』とだけ言い残して消え

ていくのである。

その間に、怪人が何か私にしているか、と言えば……なんにもされていない。驚くほどに何もされてはいない。部屋で大人しくしているだけで良かった。誘拐されておいてなんだが、これでいいのかと相手の側に立つて考える事も少くない

此方は一応女神なのだ。それを攫っておいて何もしない、と言うのは流石に私の無駄使いではなからうか。

「……ねえ」

「はい？」

と言う事で。慣れぬことをしてみようという気にもなる。

そもそもあのうさん臭い自称僧侶が、一体どこの誰なのか、と言う話だ。今まで全く気にもしていなかったが、キャスター・リンボなんていう趣味の悪い名乗りで納得なんて欠片もしていない。

「あの、あのお人……えつと……」

「法師様ですか？」

「そう。法師。彼奴つて、どのような人なのかしら？」

ちらと、傍らに控える侍女に問うてみる。侍女は小首をかしげて……少しばかり間を置いてから、口を開いた。

「えっと。えらいえらい、術師様です」

「……そう」

そして、私の目論見はあつという間にとん挫した。まあそりゃあそうだ。流石に自分の素性を知られる様な隙を晒している訳が無いか。あの怪人が。そこまで間抜けなら、そもそも私だつて逃げようという気になっているだろう。

私に付けている侍女も、自分に関する情報なんて殆ど持っていない様な……要するに私の傍においても問題無い者を選んでいるのだろう。流石に油断していたとしか言いようがないだろう。

「この千年続く都たる平安京にて、我々を守って下さっているのですよ」

「——守っている?」

「はい、えっと。急に居なくなってしまった、安倍晴明様に代わって」

——とか思ったら、予想以上になんかボロボロ出て来た。

誰か、と言う話は兎も角として。そもそもここが何処かも分からなかったのが急にここに『平安京』という言葉が出て来た。

何処か僻地かとも思っていたのだが。しかし、どうやら相当に大きな集落に、私は連れてこられていたらしい。そしてもう一つ

あの怪人というのは、想像以上に好印象を抱かれているという事。驚いた。見た目と

最初の印象で、今まで『紛れもない悪』という印象を抱いていたが意外にも……

「……? どうしました姫様。そんな微妙そうな顔をして」

「いいえ。なんでも無いわ。気にしないで」

いや、そもそも。私は誘拐されてここに来ていた。アレが悪人である事に一切の疑いはない。誘拐犯をどうして『意外にも』とか思ってしまったのか。実に良くない。アレには厳しく当たらないといけない。

「それに、あのお方が居なければ、この先の儀は執り行えませんが、ねえ」

「ねー」

「儀式? 何、邪教の儀式でもするの?」

「まさかそんな。ええつと……なんだったかしら」

「お公家様方が『千年平安京の為の儀式』なんて言っただけ。私達は詳しくは知りませんわ」

アレが。

都の平穩を守るための儀式を。

正直な話、全くもって似合わない。寧ろその裏で間違いなく何かしら策謀を練っている。当然くらいにしか思わない。

……恐らく練っているのだらうとは思う。こんな所まで私を連れてきて。その儀式

に利用するつもりなのだろうか。

「ふうん」

「ですけれど……彼の左大臣様が、これと推していらつしやるのは宮中でもう持ちきりなのですよ」

「でしたら私達に疑う余地なんてありませんわ」

こうして話を聞いてみると、平安京。左大臣。幾つかの聞きなれない単語が耳に残る。そしてその話し方から、恐らくは役職名、と思われる方が時の権力者である事は容易く分かる。

大きな力の傍に隠れているのか、その権力者そのものが、あの怪人の後ろ盾、黒幕であるのか。それとも……別の意味があつてその元に付いているのか。

こう見えても、人の営みを見て来た女神だ。その辺りの面倒な事だつて、知らない訳じゃない。一つの見えている面が幾つにも捻じれて、その根元を見たその結果、色んな悪だくみに通じてる事なんて当たり前だ。

私が想像した全てを、あの怪人が内包している事だつて、全然あり得るのだ。知性体の悪性というのは、私達の想像を容易に超えてくる。

権力者も、都も、全てを巻き込んで……アレは、私をどのように使う積りなのだろう。

「そう……であれば。私を態々ここに連れて来たのも、その儀式の為かしら？」

「あ、いえいえ。そうではないようです」

「え？」

「法師様、以前におっしやってましたから。私達に。『彼の姫君は我が貴重な宝物。決して傷つけぬように兎も角、丁寧に扱え。儀式の折は遠くへ離し、改めてお前たちに世話を任せるからそのつもりで居ろ』って」

そう笑って言う彼女の言葉に、余計に眉を顰める事になる。

確かに、その儀式とやらに使うなら、態々私を離す必要もない。というか、こんな侍女に堂々と話している時点で、それが重要な事ではない『話してもいい事』なのかしら。

本当に、私はその儀とやらに、無関係？

「……じゃあなんで連れて来たのかしら、あの変態怪人」

「それより！ 姫様、御髪が乱れております、整えますのでしばしお待ちください」

「あ、ちよつと待ちなさい……もう」

……分らない。私を攫って、何もせず。こうして軟禁しつつも、しかし一定の自由を容認し……下手をすれば、愛でている様にすら感じられる今の生活。

まるで、本当に『私がここにいる』事自体に意味があるような。私自体に、そんな大層な神格がある訳でもなく。そう思えるような要素も無いというのに。

不気味だ。あの法師、一体何を考えているのだろうか。

「ンンン、いえいえ脅迫などでは……寧ろ、やる気を上げること提案でございます」

「我々としても、貴方が現地で怨嗟を吠えたてる事は大きなふらす、でございますればええ、ええ！」

「貴方様が新鮮な『怨念』を排出して下さいる内は、あの女神には出来る限り世話を致しますので。それは、問題無く……」

「我が『亜種特異点』。予定していた物が無くとも、スポンサーのお陰で安定した運営が出来るようになった僥倖にて、最大限の勢を尽くさせて頂きますとも」

「そうそう。決して彼の『王』の配下には気取られぬよう。お気を付け下さいませ」

「それでは失礼いたします……魔獣の母、恩讐の女怪、ゴルゴーン様。ウルクでの任務の御成功、心よりお祈り申し上げます……」

第四十三章

霧の都への初旅行。はーじまーるよー。

前回の仕事によつて、第四特異点以降の布石は整いましてございます。と言う事で何の憂いも無く第四特異点以降に突撃していく所存にございます。前回の裏でホモ君が取得した青得赤得が如何に幸運と災いを呼び寄せるか。あるいは笑える展開を呼び寄せるか。

なおそもそも今回はホモ君自体が第四特異点では活躍しない模様ですが。しょうがないね。普通に第四特異点をプレイしても経験値は稼げますが……

『先ずは、前回得た情報の解析結果から行こうか』

『七十二柱の魔神……そう呼ばれる召喚式を使ったという、ソロモン王の時代の観測、です。ね？』

『そうだ。結論から言うと、ソロモン王の時代に異変は無かった』
はてさて。

場面は観測機シバの前。ロンドンから出発する直前のミーティングですが、ロマニがそのほにやっとした優男な表情を珍しくキリツとさせてソロモン王について語つてま

す。

ソロモン七十二柱を名乗る悪魔も二体目ですからね。しかもキャスターの最高点であるメディアさんが『イヤーキついっす』って最初っから諦める様な相手ですから。そりゃあ相当限られてきますよ。

……今更ながらですが、セプテムより現れたあの目玉の柱、ソロモン七十二柱についての一切解説も無いままに進んできました。知ってて当たり前、位の勢いでしたけど、そもそも『伝承に伝わる悪魔そのもの』というロマニの発言以外は一切の情報無しって言う。

設定におけるアレは、まあ何れ。ほんへでも詳細な正体は出てませんしね。

ゲーム内のエネミーとしては、基本が全体攻撃とかいうロクでもない能力を持つていて、正直な話、クリティカルとか乱発されるとどんなに追い詰めてもひっくり返されます。

あと特殊なクラスをしていて、フェイトの基本七クラスの剣、槍、弓に強く、残りの四クラス、術、騎、殺、狂の四クラスに弱い性能をしています。後、アヴェンジャーにも弱いです。

つまりアヴェンジャーとキャスターのクラスのサーヴァントを味方につけているホモ君にとってはただのカモです（半笑い） 前回も、ホモ君が主軸になってゴリ押して大

勝ちいたしました。

『紀元前10世紀頃に特異点が発生していない。つまりこれがどういう事かという』
『まことに遺憾だけど、ロマニの言うとおり、七十二柱の魔神を名乗るモノたちとソロモン王は関係ないという事さ』

んで、雰囲気で黒幕ソロモン説が濃厚になってきますのでソロモンの時代に異常が無いから、ソロモンは関係ねえ！ ソロモンは悪くねえ！ と言う熱弁を振るっている訳でございます。

ダ・ヴィンチちゃんもソロモン王が『クサイ』と睨んでいたものでこの事実には相当がっかりときている模様です。そりゃあ七十二って言ったらアイマスの千早かソロモンかって言う位には有名な数字なんですよね。

『ソロモン王がサーヴァントとして、誰かに使役されている場合は別、ですか？』
『そうそう。藤丸君達のように自分の時代でソロモンを使い魔にすればいい』

だから関係ないって言う証拠と事実諸々をしつかりと出して尚、それでもクソほど疑われるソロモン王で草あ!! サーヴァント、って言う例があるんですからそりゃあ徹底的に疑われもします。

しかしながらロマニ曰く『そんな悪しきマスターにソロモンは呼べない』との事です。同意して初めて呼べる、との事ですが……ホントお？（無邪気）

『ああ、それはそうか。私も同意したからカルデアに来たのだし』

はえ〜くダ・ヴィンチちゃんもそうなんすねえ。

まあカルデアの頭脳二人がそこまでいうなら、ほなソロモンとあの肉柱に関係はないなあ……（暗黒微笑）今は取り敢えず言う事にしておいてやろうじゃないか。尚黒幕に関係が無いとは今、一言も言っていない模様。

因みにダ・ヴィンチちゃんは、藤丸君ホモ君がカルデアに来た時も普通に活動していたカルデア最古参英霊ぶつちぎり……的な雰囲気を出してはいます。実際古参の一人ではあるのですが、最古参かと言えばちよつと違います。

ダ・ヴィンチちゃんは、カルデアに召喚された英霊第三号。第一号はその詳細は全く鮮明になっておらず、第二号はマシユの中に宿っている、と言う事以外は明らかになっていません。カルデアの禁則事項多すぎイ！

そんなちよつと秘密事項が過ぎてちよつと怪しげなカルデアですが、ダ・ヴィンチちゃんを召喚したって事で全部許せちやいそう。今、ダ・ヴィンチちゃんを呼んで無ければ一体どれだけの苦勞が今のカルデアを包んでいたか……

さて、ここまではソロモン疑惑を追及しかしてませんでしたので、そろそろ特異点についてお話を。ロマニから！

『では今回のオーダーの詳細を説明しよう。第四の特異点は十九世紀——七つの中では

最も現代に近い特異点と言えるだろう。けれど驚くには値しない。道理ではあるんだ』
特異点発生の時期は十九世紀——場所は欧州、霧の都ロンドンでございます。

この時期のロンドンが人類史にどれだけの影響を与えたか……この後の全ての時代、
というか人としての生活そのものにとんでもない規模の影響を与えております。

そうそれ即ち……産業革命。

蒸気の時代、多くの技術が発明され、そしてそれらが後に繋がっていきます。

コレが無ければ、現在の技術の殆どは存在して居なかつたでしょう。正に革新の時代
でございます。この産業の大きな発展の歴史が乱されると、こうして楽しく実況する土
台も消滅してしまいます。実況者殺しの特異点ですね。速やかに解決しなきゃ……（使
命感）

『了解しました。今回は都市の内部が活動範囲なのですな』

『うん、そうだね……いいなあ、ロンドン、霧の都。可能なら、ボクも行って見たかつた
なあ。シャーロック・ホームズに会ったらサインとか』

『ドクター。旅行では、ありません』

だつていうのに……スツゲエ呑気してんなあオメエ!? 　　つたくこのドクター、マシユ
に言われている通り、これは旅行じゃないっていうのに。

因みにシャーロック・ホームズの事に関しては架空の人だからサインはもらえないと

申しているマシユも『残念』という感想が頭についている辺り、シャーロキアン魂が隠し切れてませんねえ……まあ旅行テンションのドクターよりは全然良いですよ。うん。さて、と言う事で今回の特異点は霧の都ロンドンな訳でございますが。

——ホモ君には、全て関係がございません!!! 全て!!! 関係は!!! ございません!!
だってイベント特異点に向かう事が確定してるしなあ!?

で、ここまでは普通の特異点への導入でございますれば。ホントにイベント特異点へ向かうんですか? と疑問に思っけいらつしやる方は無数にいらつしやるでしょう。

皆さん、ご安心ください。此処からでも全然特異点に入れます。FGORPGのイベント特異点への導入は、無数、無限、バラエティに富んでおります。

例えば、FGOのイベント特異点が基本的に本拠地からのレイシフトなのに対し、このFGORPGは、特異点に入ってから謎の刺客が来て『騙して悪いが……!』的な事だつてやつてくるのがエグイです。

イベント特異点のフラグが立った時点でマジで悪夢みたいな不意打ちとかも全然あり得てくるんですよ。そう考えると、ここからどのようにイベント特異点に追い込まれるのか、最早逆に楽しみにすらなつてきました。

と言う事で、次回はいいよ特異点に突入……というか画面上ではもう特異点にレイシフト完了してる訳ですが。あつ、はい。そうですねバステ入りますよね……ホント

この特異点やだあ。

と言う事で、ホモ君に優しくない特異点からは出来るだけ早めにおさらばしたいですけれども……さて、何処で此方に差し込み入れて来るか。

第四十三章・裏：霧の都から

「……うええ……気分わるう……」

「全く、サーヴァント相手に啖呵を切っていた時とは大違いだな。マスター？」

「そう言われましても……マジで、ヤバイヤバイ……吐く」

「ろ、ロマニ様。これはどうすれば……！」

『取り敢えず礼装に多少の毒対策は施してるけど……それでどうにかなるかな』

霧が有害である事は皆も承知していました。しかしお二人ともバイタルに異常も無いから、と言う事で……マスターが異常を訴え始めたのは、藤丸様と共にしばしロンドンを歩いてから。吐き気がすると、端的に言う。

「さつきまで……普通だったのに……」

「だ、大丈夫か？」

「お前は平気そうで羨ましいぜ……」

「ドクター、周辺に休めそうな建物は」

『ちよつと待ってくれ、今急いで探してるから』

「周辺の警戒はお任せください」

リレイ様の構える剣の切っ先に絡みついて見える程に、余りにも濃密なこの霧は……濃密な魔力の霧なのです。常人が深く吸い込めば、その時点で卒倒してしまうほど毒性を持った。

それを耐え抜いていたのが、仇となってしまうた。

ロマニ様曰く『耐性が変に高い』との事でした。

マスターは、その血に眠る人外の血を目覚めさせれば確かに人間とは思えない程の力を発揮するのですが……逆に言えば、それを目覚めさせなければ、ほぼ人間と変わりがないのです。

しかし只人よりはこういった物への耐性は高いので、暫くは持っていたのが、限界を越えた結果一気に反動が来たのではないか……との事でした。

「すまないのう……藤丸さん……」

「良いって事よ。っていうか、礼装起動させてもダメなの、ロマニ」

『これに関しては蓄積したのが噴出した形だから、能力発動させて一気に体調が回復、なんて事は無いね。霧が入ってこない所で静養するしかない』

「うぐぐ、いきなり足を引つ張る形に……」

特異点においてここまで出鼻を挫かれたのも、意外と初めてではないでしょうか。非常に哀しそうな顔で私の肩に寄りかかっています。

『うーん、これは先ず当面の活動をする為の拠点的な所を探さないといけないかな』
「俺の事はいい……先に進め……」

『いやマスターの君を置いて先に進めないから。戦力半減しちゃうから』

「つつたつて、あの……人形共……が……霧に紛れて、急に現れるとか……」

そして、脅威は霧だけではありません。

先ほど戦った——機械の人形。霧の中を徘徊しているその人形は、此方に明確な敵意を持つて襲い掛かってきました。このロンドンに置いての初めての明確な敵性反応。

彼らは、霧の中から不意打ち同然に襲い掛かってくる。

それらを考えて——

「……全く、苛立たしいが……仕方あるまい」

「……マジで、ごめん……」

「喋るな。余計に体調でも崩されれば困るのは此方だ」

弱ってしまったマスターを運ぶのが、ゴルゴーン様。

マスターの調子を確認しつつ、おまじない程度の治療を施すのが私です。本当におまじない程度で、ちょっと吐き気を軽減するくらいしか出来ませんが……

藤丸様達は、周辺の警戒及び、我々二人の警護を担当して下さるとの事で。

『——敵性体の反応、今の所無し』

「頑張れー」

「……申し訳ない……うーおお」

マスターは、ゴルゴーン様の髪に加えて持ち上げられて、ぶらぶらと揺られています。それが悪影響を与えないのか……と思ってしまうですが、しかしながらマスターを安全に運ぶにはコレが一番と言う結論ですので、致し方なく。

万が一、襲撃を受けた場合には、ゴルゴーン様がマスターを加えたまま逃走する手はなくなっています。

『しかし、さっきの騎士……っぼい子を追いかける積りだったのが、この霧のお陰で思わぬ足止めを喰らっちゃったね』

「いやホント申し訳ない……」

『いやいや君を責めてる訳がない。寧ろ僕としては責められないさ。こんなレベルで危険な場所だったなんて、もうちよつとこの霧を調べて、影響を考えておくべきだった』
そして。もう一つ。

先ほど、マスターがダウンする前に出会った、全身甲冑の『騎士』。

黄金の髪と碧眼が印象的であつた彼女が、この特異点について何か知っているのではないかと。情報を求めて本来は追いかける積りだったので……その直後にマスターのダウンです。

それでも、もしやすければその騎士もこの先に居るかもしれない……彼女を見つけて追いかけるようになった時は、マスター一人を置いて行って、迂闊に叩かれる事もない様に、とも考えて。

『まあこの先にいるかもしれないし。運が向いている事を期待しよう。それよりも……』

「ロマニ、本当にこつちで良いの？」

『うん。今の所、空き家が多そうなのはこつちだ』

さて。

ここから如何にしてマスターを保護しつつ、特異点を突破していくのか。ロマニ様が提案するには、先ずは大通りに乱立する家屋の一つを確保しよう、と

やり方は……大変心苦しいのですが、犠牲の出してしまって、結果として放置されている場所も幾つかある、との推測から、そこを使わせてもらおうとの事で。

「良さそうな建物って、ありそう？」

『やつぱりサイ……人数的に！ 入れそうな所は結構限られてくるから！』

一瞬言葉に詰まったその瞬間、ゴルゴーン様の眼光が鬼の様に鋭くなったので、ロマニ様が何を言おうと考えていたのかは分かっています。特に私から言う事は無いので黙っております。

一つ言えるとすれば、私も女性ですので何方の味方と言えば、恐らくお分かりになるかと思えます。はい。

隣を見れば、首をかしげていらつしやるマシユ様と、笑顔の——その細めている奥の目が笑っていないのは余りにも分かりやすい——リリイ様がいらつしやいます。リリイ様は私のおつしやりたい事が分かっているのかと。

『……申し訳ない』

「どしたのロマニ」

『なんでもないんだ……』

——と言う事で。改めてロマニ様が指し示したのが、船着き場傍の工場……船を収める倉庫らしきものもあるとの事で、一旦そこに身を隠そうとの事でした。

『大所帯でも、何人でも入れるくらいは大きいから、ね!! ね!!』

「そうだな」

「そうでございませぬ」

特に何も言つてはいないのですけれども……さて。

ロマニ様が非常に頑張つて探して下さったその場所はまだまだ遠く。まだしばらくマスターはゴルゴン様の髪の毛の先で揺られる事になりそうです。

気を緩めない様に。

「——あの、ロマニ」

『スイマセンリリイさん！ もう、もうデリカシーに欠けた発言はしませんから！』

「いえ、そうでは無くて……大所帯つていつても、あの数も受け入れられそうなくらいでしようか」

——そう思っていた矢先。

リリイ様が、私達が歩いて来た方向に剣を向けます。その先から、先程襲われる直前、確かに耳にした駆動音が。それも……前回とは比べ物にならない程の数に。

「——機械人形!？」

『しまった！ 発見が遅れた……相当数いる』

「ゴルゴーンさん、式部さん。康友を連れて先へ。流石に戦闘に巻き込むわけにもいかないし。マシユ、リリイ、戦闘準備！」

「はいっ！」

「了解しました」

であれば。手筈通り。先ず我々は、ダウンしたマスターの保護を優先する為に撤退。ゴルゴーン様と共に、先を急ぎます。

「さっきの地点で合流しよう！」

「分かりました！ 武運を！」

「——ここを抜けた先、か？」

「はい。ロマニ様はそうおっしゃっていましたが……」

後ろから聞こえる剣戟が、遠くへ消えてしまう位には、移動したでしょうか。周囲の霧は相も変わらず深く、ともすれば一歩先も見えぬのではと思ってしまうほど。

今の所、敵には襲われてはいませんが、先程のようにいつの間にか傍に寄られているという事も十分にありえます。気は抜けません。

そんな中……私の隣を歩いていたゴルゴーン様が、その足を止めたのです。

「まあ、そう容易く進める訳もないか」

「え……？」

ちらとゴルゴーン様の方に視線を向け、彼女が顎をしゃくった方を見つめれば……霧の中より滲む、影らしきものが見えます。

『——ンンン』

「え……？」

『こうまで上手く運ぶとは。何とも僥倖！ であれば……』

霧の中で、少しくぐもって聞こえてくるその声に。

私は……聞き覚えがある様な、気がしたのです。

『我が！ 罨に！ ご招待申し上げる……いざ、急急如律令！』

第四十四章

イベント特異点突破作戦、はーじまーるよー。

前回は特異点に入った……と思ったら即座に別特異点に放り込まれたところからの、続きです。突如としてホモ君が迷い込んだのは……なんだかさつきとよく似た道の傍です。おいちよつとー眠ってただけじゃないのアンター。

同行して下さいっているサーヴァントのお二人も一緒ですし、なーんだ別の特異点に送り込まれたなんて夢だったんだ……

『――報告です、マスター。他の皆さんが居ません』

夢じゃねえなあ!?! 香子さんからの容赦ない報告で私の野望が成功した事が確定いたしました。

はい、と言う事で今回は式部さんをストーリー上の相棒としてイベント特異点を攻略してまいります。

こうして、このモード時。こちら側のストーリーリーテラー的な役割のマシユが居ない場合は、自分が召喚しているサーヴァントの中で、最も絆レベルが高いサーヴァントがストーリーテラー役をしていただきます。

今回は絆レベルがダントツで高いので式部さんがストーリーを進めてくださいます。

こう言う時、自分が召喚したサーヴァントが特異点を一緒に攻略してる、って感じが出るのはとても嬉しいですねえ！　そして自分の経験値がドンジャカ増えるのが確定してるのも分かって良いですねえ!!!

『よし、君への通信はこのダ・ヴィンチちゃんが引き受けよう。ドンとこの天才に任せたまえよ〜?』

そして、ホモ君の側は、基本的にダ・ヴィンチちゃんが通信を担当してくれます。藤丸君の側は基本的にドクターが担当しているので、そことの差別化だと思われれます。通信まで女性で固めるとかスゲエハーレム本みたいだな！

なお中心はヤクザ顔ホモ（真顔）　こんな奴が主人公の同人誌出してもサバフェスでは売れないよお……

まあそれは至極どうでもいいとして。取り敢えずは現状の把握でございます。先ほども言った通り深い霧の中、石畳の上にホモ君は寝ておりました。ふしぶしこわれる（布団信者並感）　そして言った通り、近くに藤丸君達はいらっしゃらない……との事で。

なんとという孤立無援で草ア！

幸い、体に今の所デバフも無く、ダメージが無い所を見れば、この場所に流れる霧は

毒素たっぷりと言う訳でもない模様です。それだけが幸いですねえ……

『ここは一体何処なのでしょう……一旦周りを探索して見ましょう』

そんな浮ついた話題は兎も角として。式部さんの提案に従って、取り敢えずこちら辺りを探索して見ましようか。久々に探索画面見せるから見てろよ見てろよく。

といつてもまあ、やるのは何時もの事です。マップ上に表示されているエリアを探索してフラグを立てるだけです。このゲームではクエストをクリアすればストーリーが自然と展開する訳ではなく、探索して次のストーリーへ進む感じですので。

で、こうして探索していると分かるのですが、このエリアの背景は、第四特異点の背景とは似て非なるもの、細かい部分が違うんですね。しっかりと建物一つ一つに特徴のあつたで第四特異点のそれと違い……コピペ臭いと申しますか。

と言った所で早速の襲撃が来ました。

スチル上の敵は白いドールタイプの敵ですね。それが、一、二、三……四、五、六いや待って待って数えてる場合じゃない背景を埋め尽くすレベルで多いってヤバいですって。なんだお前ら増殖するGか？ 第四特異点相当レベルの雑魚敵でどうしてここまでこの数を用意するんですか（困惑）

『——っ!? に、逃げましょう!』

そりゃあ式部さんだつてそんな反応もする。

しかしながら逃げようとした方向にもドールだ……やめてください！ 私達に乱暴するつもりなんですよ!? 数の暴力で！ 数の暴力で！ 逆に数の暴力で乱暴しなかつたら一体何のために数を集めたんですかね……？

と言う事で、先ずはこのぞろぞろと集まって来たキリングドールを殲滅……は、流石に不可能なのでここを突破する所からこの特異点、開始でございませぬ。

まあ別にさして強い訳でもない奴の群れですので殲滅してやるのに何の労苦もありません。ゴルゴーン！ ゴルゴーン！ 紫式部！ って感じであ……パパパつと出て来た機械人形を殲滅して、尾張平定!! (第六点魔王)

やつぱり、此処まで強力なサーヴァントのお二人を抱えていると、単独のマスターであつてもある程度は全然戦えますね。

しかしゲーム的な戦闘では圧倒できて、ストーリー上では押し寄せる敵の群れの一部を薙ぎ払って何とか突破口を作った程度ですので、ここでは逃げる事しか出来ませぬ。グギギギギギギ……(怒れる類人猿)

仕方なし、ここは逃げの一手！ お前ら後で芸術品にしてやるから覚悟の準備をしておいてください!! (WZP)

『ま、マスター……機械人形の群れが、もう二倍にも、三倍にも!』

しかしそうはいっても、寧ろ後ろから押し寄せる敵の数は増えるばかり。大通りを埋

め尽くす勢いです。しかも、どっかからドンドン合流して群れがデカくなって行つてますねえ!!

コレが数の暴力。このまま逃げ続けても、最後には物凄い数の機械人形君が押し寄せ、一気にカルデアホモチーム全滅のかもしれないとか言う勢いの危機ではありますが……

『——こつちだ、こつちに逃げ込みたまえ』

しかしここで垂らされるはお釈迦様の蜘蛛の糸。

突如聞こえて来た声に従い、ホモ君達は大通りから外れて、急遽路地裏へ。で、逃げ込んだ事の効果は……? 大通りでは、まるでギャグマンガでやらかした主人公を追いかける民衆が如く、ドールたちが爆走していきます。生きてるウゝゝ

突如、霧に包まれた町に連れてこられてこつちも困惑しているという状況です。誰だか知りませんが、お助け下さるのはありがたいですねえ!

『ふむ。君は……カルデア? なのかな?』

そして、入り組んだ路地裏の奥より現れしは、その雲糸を垂らして下さった張本人様です。拍手でお出迎えしましょう。

金髪ロング、そして青い瞳を持つスレンダー系の美少女。首元にまかれたファーが

キュート……可愛いッ!

ティーンエイジャーというより、良いとこの深窓のお嬢様と言う言葉がびつたりの彼女は曰く、こちら辺に結界を張って、彼等の視線から私達を隠したとの事です。

そしてカルデアか、という問いに応えようじゃないか……我々はカルデアだ！ どうした、カルデアが恐ろしいかね……怖がることはないじゃないか……友達になろう……『貴女様は？』

『おっと、これは失礼。いきなりジロジロと見回した挙句、挨拶も無しとは。流石に無礼と言うしかないかな』

さて、このお嬢さん、一体何者かと言えよ。

『——私は、ライネス。ライネス・エルメロイ・アーチゾルテ。エルメロイ家が当主、と言う事になっている』

『まあこの状況だ。自己紹介も偶には正直に、ね。よろしく頼むよ、カルデアの諸君』
キエエエエエアアアアアアアアアアアア!! (スポンジ・ボブは訝しんだ)

はい。と言う事で、此方ライネス・エルメロイ・アーチゾルテ。初出はFGOではなくFate関連作品の一つ、『ロード・エルメロイ二世の事件簿』。そこにて、黒髪ロングのロンドン紳士、ロード・エルメロイ二世の義妹として登場した彼女。

はたしてその彼女がどうしてこんな霧深い特異点の中に出て切つて、カルデアを援護

してくれたのか。

『さて、こんな路地裏で立ち話も何だ。一旦私達の現状の隠れ家に向かうとしようじゃないか。なあに、取って食べたりしないから安心してくれたまえよ？』

先ずは、彼女の隠れ家へとついで行ってみましょうか。

第四十四章・裏：『霧の都』にて

「さて——何処から説明したものかな。カルデアの諸君」

ライネス・エルメロイ・アーチボルトと名乗った少女が私達を導いたのは、古びた、集合住宅。ですが、今にも崩れ落ちそうなその見た目からその内部は、まるで想像も出来ませんでした。

絨毯に、重厚な作りで、しっかりと色塗りも厚い収納付きの机、そしてそれに見合う豪華な椅子。そして部屋を煌々と照らす確かな天井の明かり。

何処か、探偵事務所を思わせるようなその部屋の中心で、彼女は傲慢に、尚且つ楽し気に笑いながら、此方を見ているのです。

「……先ず、一つ聞きたいんだが」

「うん？ なんだい？」

「アンタ普通の人間か？」

その表情が驚きが変わったのは、マスターの言葉から。

色々訊きたい事は、間違いなくあるでしょう。しかし先ず状況の説明を求めるのではなく自分の素性を聞きに来たのが、相手の意表を突いた。

マスターとしては、特異点をこうして越えて来たからこそ、先ずこうして自分の目の前に居る存在が信じられるか、と言うのを優先したのでしょうか。だからまず、相手について尋ねた。

「ふーん。その顔に見合って、しつかり疑り深いね君は。可愛げが無い」

「疑ってる訳じゃないよ。俺達を助けてくれたんだから、アンタを信用できなかつたら詰みだし俺ら」

「じゃあいきなり『普通の人間か』なんて失礼な質問ぶつけて来るかなあ、普通」

「だってここが普通な場所じゃないのは、アンタだつてご承知の上だろう？」

マスターは、先程追われていた私達を見て、それでも尚当然のように私達を助けてくれたこの少女が、恐らくこの町の住人ではない、と言う事を分かっているのだと思います。

「アレだけの数の機械人形がドンドコ現れた所を、まるで待ってたみたいに、なんて。そんな偶然……流石に信じられる程、純真でも無い。だったら初めから協力して下さる何か、つて言うのはつきりさせた方が、お互い良いんじゃないかと思うんですよ」

「結局私の素性を疑ってるんじゃないか」

「だから信じてるは信じてるんだよ。でもここでアンタが人間である前提で話し勧めるのは絶対に違うって思っただけで」

……なんでしよう。このやり取りの、何と申しますか……間の抜けた感じは。ライネス様は『謎の助っ人美少女』を演出したいのに対し、マスターはそれを一切考えずに真正面から『腹を割って話そう』と猪突猛進なため……まあ、あの、全くもって嘯み合わないと申しますか。

『いやあ、ゴメンね。お嬢さん』

お二人の会話に割り込んだのは、ダ・ヴィンチ様。

ここに来た直後、そもそも一体何処かも分からない状態で、取り敢えず藤丸様を探しに行くか、今の所は体の調子は悪くないが直ぐに行動して良い物か……。

そんな中でただ一人、カルデアから連絡をして下さったのがダ・ヴィンチ様でした。

ロマニ様他、カルデアの通信機構で、唯一マスターに連絡を繋がられたのがダ・ヴィンチ様であった、との事だ。

他の方では、どれだけ調整しようと繋げる事すら出来なかつたのだと言います。

ロマニ様から、自分に代わって、色々な事を任された……突如の事とは言え『まあ一応こつちも大人だしね』と、笑って任せてくれと言ってらっしゃいました。

『彼はここに急に送り込まれて、混乱してるんだ……出来るだけ、分からない事は一切排除しておきたいんだよ。真面目な話』

「……情けない話ですけれどもね」

「特異点を察知してきた訳じゃないのかい、君達は」

『いんや、情けないが全く察知していなかった』

「俺はその時ダウンしてたから分からないんだが……どうやら、そうらしい」

しかしマスターがそう思うのも不思議ではなく。そもそも、我々は此処に来ようと思つて来た訳ではありません。

——第四の特異点。ダウンしたマスターを運ぶその最中。遭遇したその影が打ち出したのは、呪符。私にも馴染み深いそれを以て、陣を組み上げ。気が付けば……この場所に連れ去られていた。

それがどれだけの神業か……それを想像するだけでも脅威だというのに、我々は此処について、何も知らない状態なのです。それは余りにも心細い。

『だからさ、此方としては……先ず、そっちの全てを明かして欲しい。そうじゃないと怖くてたまらない、つて事』

「そんな顔には見えないけどなあ」

「元がゴツイもんでね。そう言われても仕方ない……かな」

『当然、此方も全てのカードを切ろう。それが誠意つてものだし』

——そう、ダ・ヴィンチ様が申し上げた所で、ライネス様はゆつくりと両手を天井に向けて上げました。やれやれ、とでも言いたげに。

「下手に小出しされるより、一番最初に分かかってオールベットしてくる輩の方がよっぽど厄介だよな。こういう場合……分かった分かった。白状しよう」

「白状って事は、アンタは普通の人間じゃない、って事で良いのかい？」

「そもそも人間ですらない。私は——サーヴァント。それも、少し特殊な事例なのさ」
ライネス様曰く。

自分はここ……『霧の都』と呼ばれるエリアに縁深い故に呼ばれた。というより『現界するに辺り最も縁も近く丁度いい代理人として呼ばれた』のだそう。

「私の中のサーヴァントは、この特異点にて活動するにあたり、こちら辺と相性の良い私を選んで、能力だけ託して今は思索の時間と決め込んでいる」

「そ、それは、なんとも」

「驚きだろうか？ 全く……その癖『真名に関して相手にはバレた時面倒になる可能性があるからギリギリまで伏せてほしい』なんて言い出すし。全く、信用を得るには、それなりの餌が必要なのは理解しているだろうになあ」

大きいため息を吐く彼女は、そのまま……視線をマスターに向け直しました。

「……成程な。カウンセラーとして呼ばれたサーヴァントって事か。なら納得」

「全く疑り深いねえ。そんなんで人理修復やっていけるのかい」

「誰であろうと先ず信じるのはもう一人の役目だね。俺はあくまで俗人、自分に紐づけ

られてる人が居るんだから、その人たちの為にも下手は打ちたくないんだ」

「——へえ？」

その表情は、次第に呆れ顔から、ニマニマとしたお顔に変わって行っています。その相手を値踏みするような……小悪魔の如き笑みが、とても、とても彼女に良く似合っているのです。

三日月に口を象った笑顔を浮かべるライネス様。

目を閉じて澄ました顔を浮かべるマスター。

相対する二人の表情は、余りにも対極で。

「君と言うのは『自分以上』の事を出来ない……いや？ あえてしないタイプなのか」
「自分の身の丈以上の事なんざ出来ないし、やれない。それを嫌って程知ってるから。だったら自分が『どれくらい』なのかを知って、その上でやれる事をやるのが一番だろ。まあそう上手くいかんけどな」

「なるほどなるほど。自分以上に自己を膨張させた老人共やら、身の丈に合わない下卑た欲望に手を伸ばす謀略屋気取り達よりは、よっぽど誠実で、マトモだ。イヤ失敬。先ほどの発言は撤回しよう。『カルデアのマスター』くん」

いいだろう、と。

ライネス様は、しっかりとマスターと目を合わせ……マスターも、ライネス様から目

を逸らす事はしません。

先ほどまでは、前哨戦。マスターをライネス様が値踏みしていた——となれば。ここからが漸く、本題になるのでしょうか。

「では、そろそろ腹を割って話そう。私がサーヴァントとして召喚された理由、この特異点——四つの領域に分かれたこの世界について……調べた事を、ね」

「四つの領域……？」

「そうとも。先ずは此処からかな。四つの中で最も危険な領域、『霧の都』についてだ」

「——おい」

その最中に、一つ。割り込む声。

「その話。長引くか」

「……まあ、それなりだから、もう少し我慢してもらえると嬉しいかな」

「そうか……狭いな」

私の後ろ。

明らかに窮屈そうに体を縮めたゴルゴン様が、少しイラついた、しかしながら何処か哀しそうな声で、現状を訴えておられました……

第四十五章

霧さえなけりやあなあ！ な特異点実況、はーじまーるよー。

さて。前回本特異点の内容がいよいよ明らかになった訳でございますが……少しおさらいをしましょうか。

此度の特異点は、何処か特定の国やらエリアを舞台にしている、と言う訳ではなく。一つの特異点が様々エリア分けをされ、その一つ一つが他とは全く異なる性質を持つているとの事で。

当然ながらエリアそれぞれで出てくるエネミーも、何処をとつても大きくタイプが異なるという事でした。

そしてもう一つ……ライネスちゃんが、ただの人間ではなく、サーヴァントであるという事実が判明しました。と言つても、真名についてはまだ教えて貰えていないんですけれどもね。

んで。ここ、現状ホモ君が居るのが『霧の都』エリアとの事。各エリアの中で最も静かで危険なエリア。此処を徘徊するのは先ほどのキングドール達で、その数は全エリア最大。と言うか頭一つ抜けて敵の数が多く、侵入者を感知するや否や即座に殲滅に動

き出す辺り殺意も最も高いという。

それが最初に送り込まれるエリアって初見殺し過ぎません……？ 止めましょうよ
そう言う所でF.G.Oの本気を出していくの。

『で、この『霧の都』にずっと居ると、間違いなく全滅まで追い込まれるだろうね。此処
にいる敵との物量差はさつき説明したとおりだし……そこで、先ずはこの『霧の都』エ
リアから『竜の都』エリアに移動したい』

さてそんな危険な場所に何時までも居られるか、と言うライネスちゃんの提案で、此
処から離脱する方針になりました。

『霧の都』が、マップ上で一番下に配置されたエリアでございまして。そしてライネス
が目指す『竜の都』は、霧の都から見て左上に存在しています。灰色ほぼオンリーみた
いな霧の都と違って、緑鮮やかな場所の模様です。

『だがそれに当たり……一つやっておきたい事がある』
『やっておきたい事、でございませるか？』

『ああ、実は私も、ここで単独で行動してた訳じゃない。こんな危険なエリアを一人では
生き抜いてはいけなかったからね。心強い仲間がいたのさ』

『ですが、今はお一人……と言う事は』

『情けないが、そう言う事だね』

しかし、ここでライネスちゃんから一つの提案。

ライネスちゃんは、どうやらここに召喚されるに辺り、どうやらもう一人お仲間を連れて行動していたのですが。しかしながらここ、『霧の都』での調査に赴いた時に、敵の物量に圧された結果。二人は離れ離れになってしまったとの事。

とはいえ、まだ消滅している訳でも無く、居場所も判明している模様で。その仲間を回収しがてら、撤退したいとのお願いです。

全くしようがない子達だねえ……良いよお！（サムズアップ）

『ありがとう——今、彼女はこの地点からそうは離れてはいない場所にいる』

『ではそこに行くまでは……』

『いや、そんな覚悟しなくても良い。この霧の都は色々入り組んでいるからね。それを活かして敵との遭遇は最低限に済ませて行こうじゃないか』

と言う事で、先ずはそのお味方との合流を目指して動く事になりました。お味方の少女が一体どんな子なのかを先ずは楽しみにしたい所ですが、実際迂闊に動いてはカラクリ人形の皆様に磨り潰されて終わりでございます。

と言う事で、ライネス嬢のご提案で、上手い事この町の中をすり抜けて脱出する事を提案されました。

と言う事でライネス嬢のお導きでまず行うのは……不法侵入だオラアアン!! 町中

の建物をぶち抜いて、入口から勝手口へ、勝手口から入口へ、色んな所へ飛び出しつつ最短距離を突っ切り、更に機械人形とかとのエンカウントも減らす一石二鳥のアイデアです。

『ここら辺の建物には人なんて誰も住んでない。建物はがらんどろで、私がこうして住み着いて家具を勝手に持ち込んでも全然セーフだ』
『つまり……』

『こうして建物への不法侵入をしようとはしようとは、咎める人も一切いらつしやらないって事だ！ さあ、どんどん行こう！』

何という強盗染みたやり方。しかしその罪の自覚有りの意識誉れ高い。やってる事、フランスに向かう為に取り敢えずスイスを通り道にしたドイツとほぼ変わらないんですがそれは……（困惑）

まあそんな事は置いておいてですよ。（悪鬼羅刹）

重要なのは今回のバトルから、我々を助けてくださったサーヴァント、ライネスちゃんのお力を借りる事が出来るという事です。

そして、その性能なのですが……めっちゃ有能です。とはいえバリバリのアタッカー性能と言う訳ではありません。サポーターです。

サポーターが一切いなかった、このホモ君のパーティに期間限定とはいえサポーター

が入って下さる、と言うのが余りにも大きいですねぇ!!

彼女のサポートはダメージと防御力の上昇の両方をカバーできる上、更にクラス相性のある程度無視できる上、NP……いわゆる、必殺技ゲージのチャージを上昇させられるめちやめちや優秀サポーターちゃんです。

彼女が居るだけで耐久、火力、宝具の回転率等、全てがグンバツになります(死語)

と言う事で彼女のお力をお借りしつつ、兎も角、先ずは現れた機械人形を素殴りでございます。クリティカル! ファイニッシュユ!(Ex-Aid)

心が高鳴って来たところで取り敢えず一戦目のドール君達は工事完了です……やっぱガラクタの解体を……最高やな!!! ホモ君のレベルから考えればこの程度の相手は覚醒が乗れば楽勝。まあ変な赤得が乗ってるんでホモ君自身、安全の為に絶対にトドメ以外は刺せないんですけど。ホント戦闘に絡む赤得はヤメチクリウム合金(空想科学)『よーし、快調快調。このまま私の仲間の所まで、一直線と行こうじゃないか』

まあ敵一体でも始末できれば経験値としては上々なので良いですけれど。

兎も角、バアン! デトロ! 開けロイト市警だ!! を繰り返して空き家となってる家を全部突破していきましよう。ホントやってる事は悪役同然なのですが、緊急措置と言う事で許されよ……許されよ……我らの罪を許されよ……

絶対に許されないお祈りを捧げた所で、さて場面はいよいよそのお仲間との合流地点

に到着した所に移りました。ところで、全然関係ないんですけど、あの妖精って、とあるイベントの背景にてコンちゃんと一緒に何処かで展示されてるっぽいです。皆もあのクソツたれを粉碎してコンちゃんを救おう!!!（鉄火場瀑布）

さあこの怒りを、合流ポイントだつて言つて!んのに突如として現れた機械人形共に叩きつけてやれ!!（止まらないカルデア一行BB）

やる事は一緒ですからね。気負う事無くササツと……あつ（深みを知る声）

やばい、最後の敵じゃないのに殴つちやつ、助けて、（赤得の力に）流されちゃボボボボボボツッ！ ボツッ！ あつ、マズい防御もクソも無い状態で殴れちゃ〜うう！ 後二、

三人は敵が居る！ そんなに殴られたらホモ君壊れちゃ〜うう！ ホワアツ!!

『——させません』

と、ホモ君がピンチに陥つた所でイベント！ フードを被つたニンジャのエントリール！ カラクリアサシン!!サン達のネックをデスサイズで一閃！ おおなんとカンパイ!!ビール瓶染みた光景か！ 首がポンポン宙を舞う！

普通に突破すれば普通に合流出来るイベントだったというのに、この辺りでファンブル引いたりすると助けに入つて来てくれるという気配り。止めてくれ……今の俺にはとても通じる……！

まあとはいえ此方の致命的なミスをカバーしてくれるこの子は実質GOD（確信）

ライネスちゃんのお仲間、さして、一体何方様なのか！

『——遅いじゃないか、グレイ』

『申し訳ありません、ライネスさん……！』

と言う事で、本特異点のもう一人の案内人——グレイでございます。

彼女が一体どんな人物なのか——取り敢えず、この霧の都エリアを突破してから、ご説明しましょうか。

第四十五章・裏：灰の都の『グレイ』

「——遅いじゃないか、グレイ」

「申し訳ありません。ライネスさん……！」

——銀閃一条。

その一撃で、マスターを包围していた絡繰り達の首は悉く宙を舞いました。

振りきられるは大鎌、しかしながらその輝きに禍々しさの欠片も無く、青と金の装飾に彩られ、何処か凛々しきすら覚える程です。

灰色のフードを被ったその方は……声と、小柄な体格からして、女性である事は間違いないでしょうか。

身のこなし、動きは、絡繰り達のソレなどよりも、真にしなやかで華麗で。

「やつー！」

返すもう一撃——しかし、その手に握られているのは、既に刃ではなく。いつの間にか金属の塊という言葉がよく似合う鉄槌が。体重を活かして、思い切り振り回し、首をなくした絡繰り達を、ことごとく彼方へと吹き飛ばしました。

一連の動きに、交わした言葉以外の淀みはなく。

彼女が、グレイ。ライネスさんが『もしかしたら君達よりも強いかも知れない』と言っていた少女——流石に冗談だよ、などと、意地悪気に笑っていらつしやつたのが印象的でしたが、それも全く冗談ではないと思える程の、見事な立ち回りでした。

しゅらん、と振り切られた鉄槌を、お手に戻し——その形はあつと言う間に、一つの匣へと変わり……一つ、フウと息を吐いて。

ライネス様は、その姿を見てから明確な笑顔を、それも先ほどの意地悪なそれとは違う優しい笑顔を浮かべていらつしやいます。

「彼女がグレイだ——グレイ、無事でよかった」

「は、はい。ライネスさんも……それで、もしかして、其方の方々が」

「ああ、そうとも。あの奇人変人の言っていた、カルデアだ」

ライネス様の傍へと寄つて。ちよこんと、その手に匣を乗せてその場で此方に振り向いた後、一つ、此方に会釈を。私も会釈を返し。その流れる様な動きに、乱暴な人でない事が伺える楚々としたものが感じられました。

「えつと……グレイ、です」

「……それだけかい？」

「はい。えつと、ほ、他に拙の何をお話すれば……」

「もうちよつと言う事あるだろう？ まあ君らしいと言えばそうだけど、さ」

「——あの、ライネス様」

「ああ済まない。彼女も合流したんだ。いよいよ大手を振って『霧の都』、脱出と行こうじゃないか。こつちだ、行こう」

道中にも、やはり一切敵も何も出ないとはいかず。しかしながら。グレイ様がいらつしやる事で、その脅威の度合いは、大きく変わってきます。

相手を砕く中心はゴルゴン様である事は変わりありません。ですが、更にそこにもう一手、鋭く相手を制する武士がいらつしやる事が、我々の安全を……特にマスターの安全を高めてくださっているのです。

「どうだい？ 私の友達は。可愛いし、頼りになるだろう？」

「……フン。まあそれなりではあるな」

「はい、大変お見事でございました！」

「いやー……先ほど助けられた身としては、それ以外のお言葉は出せません。マジで」

マスターはからからと笑いながら、頭を掻いています。あの一瞬の奇襲で体勢を崩してしまつて倒れていたのので、彼女が居なければ、あの人形の代わりにマスターの首が飛んでいたと思われず。

正に、完璧な機会での横槍。千両役者。

ライネス様のお言葉もまさにその通りかと思われ
ます。
なのですが。

「あ、あのライネスさん……私、どうい
う風に……」

「何、事実を言っていただけだ
が？」

「うう……ライネスさん……」

ニコニコと笑うライネスさんに対して、真
つ赤なお顔で俯くその姿。

本当に、先ほど、一撃にて敵のカラク
リを切り裂いたあの少女とは同じとは思
えず。
恥ずかしがる姿は、初心な町娘のよう
ですらあります。

「私は一切嘘は吐いていないよ？
いや全く本当にだ。私の頼りになる護
衛、だとね」

「そ、それだけですか……？」

「その八面六臂の活躍ぶりはベラベ
ラと話させてもらったけどね」

「ライネスさんっ！」

何と申しますか。それを理解して、
ライネス様はあの様におっしゃって
いた部分があるように。

その若干意地悪な面は嘗て、私に陰
陽術を教えてくださいました、晴明様
を少し思い出させるような。あのお
方も、普通に人を愛でるだけではなく、
何処か少し意地悪なやり方をなさ
っていたような……

『オイオイ、あんまり擲掬ってやるなつて。グレイの奴トマトみたいになつてるじゃねえか、イーッヒッヒッヒッヒッヒッヒッ！』

「あ、アツドも……！」

……おかしいですね。男性の事を連想していたからでしょうか。マスターとは明らかに種類の違う、ちよつと軽薄そうな男性の声。周りには誰もいないというのに。幻聴でしょうか。それとも……て、敵襲!?

そんな私の肩を叩いたのは、マスター。

「……式部さん、そんなキョロキョロしなくても敵襲じゃないよ。それだつたらゴルゴーンさんが真つ先に食らいついでるでしょ」

「貴様、私をなんだと思つてゐる？」

「いえいえ別に他意はございませんが」

「他意がない方が問題だが？」

「おつと藪蛇だこりやあ……ともかく、敵じゃねえつすよ」

「えつと、では今の声は」

そして、彼が指をさした先には、グレイ様の姿。一見変わったところは無い、と思つていたのですが……しかしながら。マスターはもう一度、指を彼女の……手元へと指示しました。そこをよく見ると。

なにか、跳ねています。

というか、グレイ様が持っていたあの、小さな箱が、跳ねているのです。ぴよんぴよんと小動物かのように。

「え、えつと……そちらの、方？　ですか？」

「そう、アレ」

『おいコラそのハゲ！　アレ呼ばわりに加えてヒトを指さすとか、教育なつてねえなおい！』

どうやらそのようなのですが……

箱が、跳んで、喋つて、マスターの無礼を咎めています。とりあえずマスターに代わつて謝罪をと思つて頭を下げました。特異点では様々な敵性的な相手と戦つて参りましたがしかし、それにしても、少し驚いてしまいました。

無機物でありながら、式神とは比べ物にならないほどに感情豊かに話し、そこら辺のエネミー以上に活き活きとされている気がします。

「えつと……グレイ様、そちらの、方は？」

「あの、その……アッド、です」

「アッド様、ですか。よ、よろしくお願ひいたします」

『イーツヒツヒツヒ！　お見合ひでもやってんのかあ俺らはよお!!』

「補足させてもらえば、アッドはちよつと特殊な魔術礼装でね。歌って踊れる可愛い奴と思つてくれればいい」

そう言つて、ライネス様は笑つておられるのですが。魔術礼装という事は、マスターが着ているスーツのご同輩、という事でしょうか。なるほど。なるほど？　ちよつと、で済ませているのでしょうか。マスターの礼装とあんまりにも桁が違つたと申しますか。先ほどは鎌にも鉄槌にも変形してらつしやいましたし。

「後はまあ……グレイの可愛い相棒、かな」

「——はいつ。とつても、頼れる相棒です」

とはいえ。

そう言つて、グレイ様が笑つていらつしやるのを見てみると、そんな事を気にせずともいい程に、恐らくアッド様は信頼がおける方なのだという事は、分かりました。

「うーん……可愛いかな？　ソイツ」

「少なくとも愛でるには些かと口が悪い気はするな。おい、次はどちらに向かえばいい。話せばかりではないつまで経つても抜けれんぞ」

「お、お二人とも！」

「はははつ、彼の口がちよつと悪いのは許してあげてくれ」

……むしろ、こつちが更に謝罪をしたくなつております。本当に。申し訳なく。

「さあて……グレイ。ここからは、しつかり働いてもらうよ。まだまだ霧の都は中腹くらいだ。みんなで必死こいて、ここを抜け出そうじゃないか！」

「——はいっ。行きましょう、ライネスさん！」

何はともあれ。

ようやく我々は、この『霧の都』を脱出するための準備を整えて。走り出したのでございませぬ。

そして——幾度かのからくり人形の襲撃を退けて。

霧と、廃墟の街並みの向こうへと、我々が走り抜けていった、その先には……——

「……ええ？」

「こ、これは」

「驚いたかい？　これがこの世界の特徴——『竜の都』の環境は、こんな感じだとも」

「霧の都とは違う、あまりにも牧歌的な……どこかの田舎道と思えるような世界が、広がっていたのです。」

第四十六章

いぎ竜の都、はーじまーるよー。

前回は、無数に押し寄せたカラクリども相手に押し通り、新たなエリアに移動した方からの、続きです。藤丸君チームが居ない代わりに、そのチームと同数の味方が一緒にいてくれるって言うのが大変ありがたいですねえ。お陰で無事に突破できたという物です。

さて、ここまでで一切前回と変わらないスタイルを突き通して参りましたが……ここら辺で、取っておいた新規青得がそろそろ仕事して来ると思われます。

覚醒した時の火力に全てを振っているのが基本でしたが、結局の所、その火力を生かすにしろ、その相手の防備を突破する為の一手が必要な訳です。んで、それをどうにかする為のスキルを、取り敢えず持つてきました。

イアソンとのやり取りで、今の所、まあ戦闘向きじゃないサーヴァント相手であれば何とか大打撃を叩き込めるレベルの出力は確保出来ている事は確認できたので、漸くこういう便利系のスキルが取れるようになって来ました。

『さあて、君達——ここ、竜の都の特徴、という物を教えてあげよう』

んでそれをこの竜の都で試していきたいと思うのですが……さて、早速出て参りましたね。この竜の都の主力エネミーである――

『アレはもしや……ワイバーンですか』

『そうとも。ここは、竜種足り得ないがしかしながら屈強であるのは間違いない亜竜飛び交う、この特異点でも一番平和なエリアなのさ』

そう、第一特異点、および第三特異点ではお世話になった飛翔する竜モドキ。彼らがまるで当然のように空を飛んでおります。まるで放牧されているかのようでいやー和んだりしちやいそうに……ならねえなあ！ 鱗と牙と羽が和むにはゴツイ！

という事でカチコチワイバーン君放牧地帯が、この特異点において危険地帯を抜けた次のエリアとかいう。

そんなもんが飛び交ってる場所が一番平和とかこの特異点頭おかしい……（困惑）
言ってる事が全て矛盾に溢れてて笑うしかありません。

しかしながら、キチンとそれにも理由という物が存在します。

『あのワイバーンは統率者も居なければ襲う相手も存在しない。正に野生動物。野生動物というのは、何の理由もなく敵意無く襲い掛かってくる存在じゃない。ここは彼らを刺激しなければ、本当に平和なエリアだ』

と言う事で、敵の能力は脅威ですが、しかしながら何かしてくるわけでも無いって言

う実際マジで平和なエリア。それが竜の都、でございます。

まあこっちは此処へ一旦避難して来ただけなので、此処の彼らとドンパチする理由は一切ないな！ ヨシ!! (安易な結論)

まあ万が一が起こるのが特異点です。それが起こるまではまあドンと備えて胸を張りながらゲームをプレイしましょうか。

『さて、漸く落ち着いた所で……ここで、改めて説明をしようじゃないか。この特異点、私達が調べた多くの情報を——さて、何から聞きたい?』

全部だよ!! (強欲で強欲な壺)

それは置いておくとして。さて、ようやく落ち着ける場所に着いた、という事でライネスちゃんからいろいろな事が聞けるようです。まあとはいえあんまり長々映像垂れ流すのもアレなので、再び簡潔に。

この特異点は四つのエリア[♂]によって構築されている、というのは前に説明した通りではありませんが、さてそれぞれの特徴を説明しきれたかと言えばそうでもなく。

で、もっと危険なエリア『霧の都』、最も安全なエリアとの触れ込みの『竜の都』、そして『紅の都』と、『海の都』の二つでございます。

ライネスさん曰く、『紅の都』はこの特異点で唯一まともな人間が住んでいる場所、『海の都』は、都とは到底呼べないエリアなのですが、一応は四つのエリアの内の一つなの

で都で呼称を統一している、とのことだ。

『人が住んでいる場所が、安全な場所ではないのですか？』

『いいや、そうでもないさ。あそこの狂信者共は、ここのワイバーン達なんかよりよっぽどたちが悪いからね。とはいえ、口で説明するよりなんとやら、残りは現地に着いてからという事で』

もーそんな風に、意地悪そうな顔で焦らしちやつてえ。ライネスちゃんったらこの危機的状况下でもお茶目さん！ さっさと特異点について説明しろ、やくめでしょ（正負の表裏一体）

しかしながらそんな役目は彼女には存在しないし情報を提供してもらうのはこちらなので提供してもらうタイミングを選べないのは致し方ないのですが。

とはいえ、この特異点の大まかな様子は、ようやく明らかになってきました。

先ず入り口にして最も難関なエリア、『霧の都』。ただ全力で今逃げ出して来てしまった場所でもありません。

で、そこから逃げ出してきたこの最も安全な『童の都』、『紅の都』、『海の都』が霧の都を囲むように存在しており、それぞれ大きく様子が違う、と。

『さて、これでこの世界の形は理解できたと思うのだけれども。問題はここから』

さて、皆さま、ここまで来て一つ、不思議に思ったかもしれません……こういう特

異点とかいうのは、それぞれのエリアに支配者だとか管理者、とかが居たりして、この特異点を管理してる、っていうのが定石だったり、現地民が物凄い抵抗していたり、っていうのが基本だと思うのですけれども。

『奇妙だと思わないかい？　あまりにも様子の違い過ぎる霧と竜のエリア、こんな地形は一体世界の何処にあるのやら……』

『言われてみれば』

『さてその正解だが。何処にもない、というのが正しい。仮説にはなるが、ここはそもそも何処にも存在しない場所なのだと思われる。さらに、ここでこの人が苦しんでいる、こいつがこの世界の異分子である……という明確な存在が居ない事も確認済み』

この世界にはなにもねえ!!　敵もねえ、被害者も居ねえ、そもそもここが何処かもわからねえ!　なんとというめちやくちやな話でしょうか……!』

この特異点の最大の特徴は『特異点たる要素が全く存在しない』という事。人理という物の何れかに存在する『染み』なのかも分からない程に、この特異点は全て法則から外れているという話で。

『唯一ほかの特異点と同じなのは、『聖杯』に相当するものを核に出来上がっていることだけだと思われる——』

『——特異点らしからぬ、特異点の様な世界……か』

ダ・ヴィンチちゃんもこれには大困惑。

特異点、というのは人理という歴史の何処かに出来上がる都合上、絶対に『この世界の何処か』を土台にしています。

かの悪名高いチエイテピラミッド姫路城とて、エリちゃんの領地である『チエイテ』という場所を下敷きに成り立っている特異点なのです。魔改造が過ぎて誰もそれを覚えていないかもしれませんけども。

んで。もし歴史の何処かに異常が発生してるなら分かりやすいのが、こんな『何処にあるのかも分からない』様な特異点だと明確にキツイ部分が出てくるんですよ。

『ふむ……ここです、ダ・ヴィンチちゃんには、とある懸念が思い浮かんできたのだけれども。ライネス嬢』

『貴方が思っている事は恐らくこうでしょう？ レオナルド・ダ・ヴィンチ殿……この世界を解決する方策が、見つからない』

そうなんですよねえ。

ここが実在する場所なら、コレが異常だからまずはそこを直す……例えば北海道に出来た鬼のテーマパークとかでも、そのテーマパークそのもの北海道に存在せず、そこが可笑しいから先ずテーマパークを調べる……とかは出来ませんが。しかし。

この世界はライネス嬢曰く『一見して世界の何処にもこんな場所は存在しない』との

事で。ならば、おかしいのは『このエリア全体』というしかない。何処をどう調べればここを元に戻せるのか、という手がかりを探し辛いのです。

聖杯を回収すればここを元に戻せる、といっても。この世界全体を疑ってかかるならどこに置いてあるか、隠されているか、本当に草の根を分けないと探せない訳で……なんてわかりやすいクソゲー。これは全エリアで探索コマンド連発確定だない!! (白目)『……という事で、ここを脱出するには、結構長丁場になる可能性が高い。ここ、一番平和な竜の都を拠点に、のんびり解決しようじゃないか、諸君』

ライネスちゃんも思わずこれには小悪魔顔。もうちよつと手心というか…… (苦笑)『大丈夫だとも。この竜の都は、ちよつとワイバーンの圧が強いだけで、実に平和な場所だ。グレイと共に、改めて霧の都の調査に向かうまでは、我々もここを拠点に——』

『——あの、ライネスさん』

『うん? どうしたのかな?』

『ここには、ワイバーンしか住んでいない、というのが真なら……あ、アレは何ですか』さて、険しい顔の式部さん、どうやら何かを発見したようです。

なんかよりゴツイワイバーンとか見つけたんかな? 大丈夫だつてへーきへーき、どんなワイバーンだつて襲つてこなけりやただの爬虫類の親戚だから!

『——人? いや、だが……あの黒い色は……?!』

『反応確認……いやはや、随分とまあしつこい事だね。我々のおなじみのシャドウサーヴァントだ！ しかもこれは……』

……おやつ？

『今までとは反応の強さが桁違いだ！ アレは最早……通常のサーヴァントクラスの出
力だぞ！』

『馬鹿な……ワイバーンが、こつちを睨んだぞ！』

なんか、旗を持って、故郷の仏を焼こうとしているようなシルエットのシャドウサーヴァントが出てきてるね。あれー、おかしいね（偽・倒置法）

という事で、急転直下でいきなり危険地帯に追い込まれたところで、今回はここまでとなります。果たして、我々の目の前に現れた旗を持ったシャドウサーヴァントは敵か味方か!? もう答え出てるから（冷徹）

とりあえず、今回は唐突に構成されたこの包囲網を突破するところからですかね……
（疲労困憊）

第四十六章・裏：飛竜襲撃

緑豊かな土地。何処までも続く田舎道。霧の都とは違う、長閑な風景。ライネスさんはこここの辺りの何処であつても、飛竜が襲い掛かってくる事もありえない、と申しておりました。ですが。

現状、我々の置かれている状況はといえば――

「――平和!!! IS!!! 何処!!!」

「私も平和だと思つてたんだよ！ 実際ここを偵察した時は本当に襲われなかつた！こんなに掌を返される事は時計塔でもなかつた!!!」

「ライネスさん、私の後ろに……!」

「つち、空飛ぶ蜥蜴風情を相手になんで逃げなければならんだ」

「ゴ、ゴルゴーン様……アレらを全部相手にしたら持ちません……!」

上下左右。おまけで後ろ。前以外には全てワイバーンがずらり。端的に申せば、こうでございます。完全包围一歩手前でございます。

……なんと申しますか、本当に一瞬の事だったので。

先ほどまで、彼らは何をしようとするかと全く反応はしませんでした。私たちが近くを

通つても全く。ライネス様の言う通り……野生の動物の如く、存外と大人しいままだったのです。

なのでライネス様のおっしゃる通り、ここで一つ、色々話し合おう……と、思つた直後の出来事でした。

「というか全部がアレが悪いだろうが！　なんだよいきなり出てきやがったあの真つ黒ヤロウは！　またシャドウサーヴァントじゃねえか！」

「でも以前見たシャドウサーヴァントとは様子が違つたと申しますか！」

『ふむ、いつもの刀らしいものはもっていないが……？』

やはりというより、またもと申すべきなのか。我らの前に立ち塞がつて来たのはシャドウサーヴァント。

しかし私達が今まで遭遇した物とはどうも違つたと申しますか。

そのシャドウサーヴァントは、突如として私達の前にふらりと現れ。その手に持った旗をかざしたのです。そして。それに従うように、突如として、私たちへの関心など、殆どなかったワイバーン達が……

突如として、私達に牙をむいたのです。

「それにアレって……」

「ええ、マスター……私の記憶に間違いが、なければ」

「何の話だ」

「ああそーいや、ゴルゴーンさんが来る前だったっけか!？」

ゴルゴーン様が召喚される、その前。

第一特異点にて。私達が相対したかの聖女。その『作られた可能性』たる彼女の姿を、あの影法師を見ていて思い出しました。

その影法師の旗の一振りに呼応するかのように、ワイバーン達は、突如として狂暴化して暴れだし……

「ああ思い出す……あの自称竜の魔女サマ、ワイバーンとか操ってたな!? なんでそれの再現を今ここでやらなきゃいけないんだ!」

「なんだい!? 彼女とは知り合いかい!？」

「全く知り合いですよございませんよあんな凶暴なお人はあー!」

というか、敵でした。

ワイバーンどころか、悪名高い邪竜をも従えた……黒いジャンヌ・ダルク。オルレアンを蹂躞せし黒い聖女。この景色は、かのオルレアンを思い出すこともありすし、余計にあの苛烈な炎の温度が思い浮かんできます。

今まで、幾度となくシャドウサーヴァントと渡り合ってきた我々ですが、しかしながら今回の影法師は今までと桁が違います。ワイバーンも大量に従え、正にオルレアンの

時の再現の如くです。

『兎も角逃げたまえ！ 方角的に、もう少しでレディ・ライネスの言っていた場所に辿り着くと思う！』

「流石のお言葉、グルジアの軍師様だけ！ んで、もう少ししてどれくらい？」

『……もう少し頑張ってくれたまえ！』

「流石のお言葉!!! グルジアのぐんしさますげーなー!!!」

「まあ実際そう距離はないから頑張りましたまえよ！」

であれば。この逃走劇は、決して間違っていないのでしよう。

ライネス様は、ここを拠点に特異点を調査していた、とのことで。我々はその時に使っていた『砦』をまず目指していたのです。その途中での、襲撃。

とりあえずは、そこに立てこもってワイバーン達とあのシャドウサーヴァントを撃退するのが、とりあえずの目標です。

「本当にその砦、大丈夫なんだろうなライネスちゃんよお！」

「流石に何もできないままに崩壊する程じゃないと思うよ、ワイバーンだけならね」

「ああそうかい！ あのシャドウサーヴァント、本当に余計な事ばかりなア！」

「——皆さん、前っ！」

ですが……その目標の事を考えていた所為か。その事に気が付くのに、一手遅れてし

まったのです。

グレイさんの指さすその先、我々が向かうその先に、既に何匹かが待ち構えていたのです。ワイバーンが。先回りされていたのでしょうか。

「つち、頭使いやがる……ゴルゴーンさん、礼装の強化回す、いけるかつ!」

「誰にモノを言っている。ちようど鬱憤が溜まっていた所だ、それを晴らすつもりで焼き払ってくれる!」

——しかし、それに動揺するも先に。

「グレイ! 援護はする、頼むぞ!」

「はいっ! アツド、お願い!」

『任せなア!』

マスターも、ライネス様も。手早く指示をお味方に飛ばし。ゴルゴーン様は魔力の光線を、グレイ様は、アツド様を……ぶーめらん、というのでしたか。その形に変形させて、全力で投擲を。

前に回っていた数匹のワイバーンは、その一撃で撃ち落とされるか、あるいは態勢を崩し、此方を阻むどころではありませんでした。

が、それでも一匹程はその攻撃をすり抜け、こちらへと突っ込んできます。

「——式部さんッ!」

「は、はいっ！」

「トリムマウ、よろしく頼むよ」

『——承知しました、お嬢様』

ですがその一瞬で、私もようやくやく態勢を整えられて……マスターからの礼装の支援を受けて、冴えた感覚で相手を狙う事が出来るようになっていきます。これで外す事は、恐らくそうはないと思うのですが……

……とりあえず。

「あの、ライネス様、そちらの方は？」

「ん？ トリムマウの事かい？ 私の……まあ、屈強なメイドだとも」

唐突に生えてきたそちらの銀色の方は一体どちら様なのでしょう……とか、そういった事を気にせずにいられれば、間違いなく直撃はさせられる、とは思いますが。恐らくですけれども。

「——つはあ……とりあえず、撒いた……訳じやなさそうだな」

「見失っただけのようだね」

『お嬢様、お怪我はございませんか』

「ああ、君のお陰で疵一つもね」

とりあえず、前方を突破し、何とかワイバーンの包囲網を築かれる事だけは避けられました。しかし。現状、未だあのシャドウサーヴァントを振り切れたわけではございません。こうして、森に姿を隠して様子を伺ってはいるのですが。全く警戒を解く気がいたしません……というか。

「しつこ過ぎねえか？ さつきからずうつとここら辺うろついてる……」

「普通ここまで探したら離れそうなものだけどねえ」

全く同じ場所を、あのシャドウサーヴァントは、ずっと歩いているのです。ワイバーンを引き連れて。マスターのおっしやる通り、一、二時間は変わらぬ足取りで、探しているでしょうか。

周辺を見回す、だとか。近くを探す、とかでもなく。ずうつと、ぐるぐるぐるぐると同じ足取りで。その間、空中に偶にとどまって周辺を睨みつける、ワイバーンの方がまだ人間臭く感じる程に。

「まるでロボットのようにも見えてきてしまうが……」

「どーやら、見た目は違っても俺が戦ってた、あのシャドウサーヴァントと同型みてえだなあこりゃあ」

「そうなのかい？」

「あの魂の抜け具合というか、命令に順守する、的な無機質な動きだとか……ね」

マスターのおっしやる通り。しかし、それを考えると、不穏と申しますか。

まるで量産型の如く、画一的なものしかいなかった、あの黒い影法師達。それらに、新たな形が現れた、というのは。

「つたく、どうする。多少のダメージ覚悟で打開、しかないか？」

「いや、私の言った砦は近い、下手なダメージは負わなくても、そこへ辿り着けはするだろうとは思う。とはいえ、タイミングが欲しいが……」

「んじゃ仕方ねえ。状況の打開のためだ……ダメージインちゃん？　令呪の使用、シルブプレ？」

「それ私が言う側だと思うけど……まあいいや、やっちゃっても大丈夫だとも」

「つしやあ！　んじゃあまあ、派手な一発だとバレちまうし……式部さん」

ですがそれを考える前に、ここを打開するのが先決。マスターの言葉に領けば、少し甲高い音を立てて、令呪が消えて……私の体に、魔力が回ってくるのを感じました。

「式部さんが宝具を開放すると同時に動く、でいいか？」

「よろしい、やってみたまえ」

「偉そうなのやめな〜？　……今っ！」

「——宝具、開帳いたします……『源氏物語・葵・物の怪』」

私の宝具は、呪詛を以て相手の滅びの運命を誘う者。正直、あまり派手なものではあ

りませんが、しかし……こうして、相手がこちらを視認できていない時に打ては、多少の不意打ちにはなり得ます。

びくつとしたその直後、数匹のワイバーンが唸り、その声を弱々しいものに変えていくのが見えました。

「——どけっ！」

「アツド、お願い……っ！」

シャドウサーヴァントが一步、反応に遅れ、そして……そこに集中するお二方の攻撃がワイバーン達を蹴散らします。

相手の動きを崩したのを確認し、マスター、およびライネス様、そして私も走り出します。シャドウサーヴァント側も、どうやら攻撃の余波を受けて、体を崩していたようでこちらへちよっかいをかけては来ません。

「へへっ、ざまあみさらせっ」

「油断しちゃいけない、まだ近くにワイバーンが潜んでいるかもしれないよ」

「つと、そりゃあそうだ。いかなー、どうにもパンピー時代の癖が——」

このまま追っ手を振り切れる。

そのような雰囲気は漂っていません。実際、後ろのシャドウサーヴァントは完全にこっちの奇襲に崩されて、指示の出しようもない、ように見えました。

しかし——

「……つぎけんなつ！」

「うわっ!？」

次の瞬間、隣を走っていたライネス様を突き飛ばしたのはマスターでした。何事か、とライネス様が視線を向けた瞬間には、既にマスターはその頭から、角を生やし……空中からの奇襲を仕掛けてきた、ワイバーンの顔を殴り飛ばしていたのです。

森に入っていたからこそ、木々に阻まれ見えなかつた、更なる上空からの兵力。危ないところでした。ゴルゴーン様も、グレイ様も、私も、一斉攻撃から離脱しようと考えていた所で、ライネス様に近いマスターでなければ、間に合わなかつたでしょう。

「——この野郎」

しかし。

相手の一撃を迎撃し、そのまま離脱すれば、終わりになる話……だと思われていたのですが。マスターの表情が、憤怒のモノに歪んだのは、その直後でした。

「上等じゃねえか蜥蜴が！ ひき肉でもなる準備を——」

「ま、まてっ、今は離脱優先だ！ 相手にするんじや……!」

ライネス様の静止の言葉は届かず。マスターはその降りてきたワイバーンへとこぶしを構えようとして……しかし——そのワイバーンと相対するマスターの後ろに、降り

立つ影がもう一体。

それが何かを確認する前に、術を編もうとしました……が。

「——マスター!!？」

「がっ……!!？」

一歩間に合わず。

もう一匹のワイバーンの爪牙によって切り込まれたマスターの背中から、鮮血が舞い上がるのを、私は、見ていることしかできなかつたのです。

第四十七章

竜の都を押し通れなかった実況、はーじまーるよー。

前回は、以前取った赤得の方が悪さをした訳ですが……ここまで全く悪さをしてこなかったというのに、どうしてこのタイミングで一気に牙をむいているんですか(困惑) お陰でホモ君初の重症だよ……

えー此方『竜の都』。ライネスちゃんの言った通り平和な場所、だった筈なのですが既に我々にとつては恐るべき敵地に相違ありません。何せ、周りのワイバーンがこちらに對して突如としてカチコミ上等になったわけでございまして。

ただ『霧の都』と違う点は、一体一体は強いとは言え、流石に圧倒的に数の差が存在する事でしょう。霧の都に関しては、マジで埋め尽くすのが当然と言わんばかりでしたがここでは、まあ集まって来ても一桁です。

『——うーん、ダメージが大きいね』

その一桁に油断して最悪の事態を招いた訳だけどな!! 赤得が最悪のタイミングで仕事をして下すったよ!! 敵を倒したら攻撃が止められなくなり、そのタイミングでキャラがスタン!! お陰でホモ君は初めての大ダメージ!! ダ・ヴィンチちゃんもシス

テムボイスでよう心配しとる!!

回復スキルの無い礼装にしたお陰でダメージを負っても回復も出来ないというふざけた状態。藤丸君が居れば彼の礼装で回復もして貰えたんでしようが……まあこのゲームだと一応、式部さんが回復宝具を持つてはいるので、それで回復もしましたけども。まあそれでもカバーはしきれませんよね……

まあ、どれだけ重症でも探索とかにはペナルティとか一切発生しないのがこのゲームの良い所ですかね。

『——ようやくついたね。ここが、私たちが拠点としていた砦だよ』

と言う事でライネスに導かれやって来たのは、ちよつと崩れた個所もあるけど全然現役っぽい感じの砦でございます。あれーでもこの背景ってフランスの特異点にそっくりだねフシギダネ（PKMN）まーこの程度の背景なら使いまわされてるってこともあるかもしれませんが、気にしないでおきましょうか!!（クソデカボイス）

さて入ってみてとりあえずは一息。現状、マスターが初めての重傷を負ったおかげでいよいよ今まで特異点では進撃進撃ともかく押せ押せーだった流れ（大嘘）が寸断されてしまいました。

こういう流れに乗れないと案外クリアできないのがゲームというもの。ぐぎぎ、ここで流れを戻すためにもリーチをかけるんじや……（泥沼）

まあいったん気持ちを落ち着けるのも必要という事なので、とりあえず先ほどの敵についておさらいしてみましよう

この『竜の都』に於いての敵は大量のワイバーン……に加えて。何処かで見たようなシャドウサーヴァントがお一人でございませぬ。いやーあの旗を持ったエネミーちゃんとか、ネ……そしてワイバーンにかけるバフとか、ネ……

まあこんな感じで、この特異点も、元の第四特異点に負けず劣らずの曲者。正規の敵サーヴァントは全く姿を見せておりませんが、その代わりに強力なシャドウサーヴァントがいきなりその兵隊たちといきなりにも程があるくらいに立ち塞がってくるという。

元の特異点で毒フォッグでダメージ受けるのと、今ボロボロになってるの、果たしてどっちがつらいのか……あれ？ イベント特異点を選んだ意味とは？（震え声）

『しかし、あのシャドウサーヴァント……まるで君たちが現れるのは待つていたかのよう、ここに現れたな。我々がここを探索した時には、まるで見かけなかったというのに』

イベント特異点を選んだ意義を探すRPGはともかくとして、ライネスちゃんからの証言が本当ならば、どうやらこの特異点がレベルを増したのはこちらホモ君たちの到着が原因だという事のように……はえー余計な事しかしねえなカルデア！（風評被害）それが原因だとはまだ決まってるやないんだよなあ……

『お知り合いだったりするのかい？ 彼らと』

『私たちが探索してきた特異点。そこで我々が相争った敵側のサーヴァントの方たちと、類似点が』

『ふむふむ？ 奇妙な縁、と割り切ってしまう事は簡単だけでも……』

ライネスちゃんに疑いのジト目で見てもらえるなら別に原因でもいいか！（思考停止）可愛い女の子のジト目はダメージにもよく効くからね、しようがないね。

風評被害と変態発言はともかくとして、ともかくホモ君たちが原因だとすれば、それを駆逐するのもホモ君の役割。今の所、ホモ君が新しく獲得した青赤共に得能が一切仕事をしていたらっしゃらないので、ここからですよ奥さあん……

んで。

とりあえず、こちら辺でストーリーを進める前に体を回復させるわけですが、その間にお味方と会話して絆上げもやっておきます。こういう細かいときにやっておくの凄いい凄い大事。どうせ今のホモ君は戦力どころか完全にお荷物なんで……

『貧弱な事だな……まあ、精々それを反省として、後方で震えていれば良からう』

ゴルゴーン様からの結構容赦ない一言かヴツツツ（心停止）とかなりますが、実際そうではないですよねえ……これも全部赤得って奴の所為なんだ！ 前線で戦って稼ぐタイプのビルドなのに前線で発揮されてしまう赤得満点って一体何なのか。もう

ちよつとビルドを上手にしなさい（天運への敗北宣言）

まあその辺りの不満とかは一旦置いておくとしまして。それを言い出すとこのプレイの根幹にかかわってくるので……クリアするだけならもつと頭良い構成できるんですよ。赤得が出来るだけ邪魔をしないようにとかも知れません。

が、この実績解除にはもう……ね。ホント。マスターがサーヴァントを倒すだけの出力を叩きださないといけないという、クツソ見たいな前提条件が必要っていう。

しかし人間がこの修羅たる型月世界に於いて英霊にも勝る力を得るためにはどう足掻いてもお祈りは必須になってくるといつつらい現実がゲームにも反映されております。ゲームくらい好き勝手に無双やらせろやオラアン!? だめです（無慈悲）

まあ心にくる言葉とは言え、事実は事実。この貧弱な体を恨みつつ、とりあえず今は体力を回復することに専念しましょうね……

唯一といつてもいい幸運は、この体力回復のターン、別に無駄に時間を費やしている訳ではなく、普通にストーリー上相手の攻勢からいったん避難しているターンを活かしている事。ダメージを負いましたが、タイミングが良かったです。まあこれを活かしても一晩で全快とは行かないのが問題ですが。

さて、そんな激動のターンを終えて……画面上、ホモ君が散歩しているようです。休めやオラアン!? こういう実際のゲームの状況と剥離している事になるのがRPG系

のご愛敬な所。

『——む？ おや、君か。マスターの君がこんなところに来ていて大丈夫なのかい？』
さて、そんな散歩の最中に遭遇するのは、今回の案内人であるライネスちゃん。どうしてこんな所にいるのですか、という問いには、どうやら向こうも夜のお散歩との事で、驚いたねえ、坊や、奇しくも同じ構えだ……

『まあ散歩だけではない……思考を整理するには、こうしてウロウロしたりするのも実に効果的だ。ずっと一処に居るほうが思考が回るといいうのは下手な偏見だよ。かのニュートンも、外を歩いて考えを纏めている時に、リングの法則を発見したというし』
おっそうだな（思考停止）

そんな頭のよさそうな会話はホモ君には無理なんで……こちとらワンチャン系全ブツパ脳筋ビルドやぞ。頭がいい訳ないだろうがこの戦い方が。孔明Pが近くにいたら間違いなく卒倒必須なんだよなあ……

まあそんな事はどうでもいいです。重要なのはライネスちゃんと夜半の二人きりデートってことだ！ なおホモ君は血まみれボドボドな模様。色気もくそもねえ!!
せめて黒タキシードとか来てみたかった……今だどう足掻いてもお嬢とお付きのヒトにしかならねえんじや！

あ、いやでもホモ君の見た目だとタキシードだとしてもどう足掻いてもその筋の方に

しかならないので、結局はお嬢とそのお付きの人にしかありませんね。しょうがねえ、ライネスお嬢と盃交わして指定暴力団時計塔に加入するか……（転職）

『——君たちが来たことで現れたサーヴァントについて考えていたんだ』

『こういう超常の現象でも、誰かが起こしている事件ならば必ず理由はあり……そこを紐解く事は、必ずや事件を解くカギになりえる……ホワイダニット。兄が謎を解くときに重要視してる考え方でね』

まあ暴力から暴力への転職はどうでもいいので置いておくとしまして。はい。

今は、ライネスちゃんが大切なお話をしているので黙りましょうねえ。

はい、という事で貴重なロード・エルメロイ二世要素。

ホワイダニット。サスペンスドラマで重要視すべき『誰が』『どうやって』『どうして』の『どうして』、つまり動機の部分ですね。『誰が』『どうやって』も魔術とかいうサスペンスぶち壊し要素がある世界では、この『どうして』を類推することが、事件の全体を把握する最も大きな材料になり得るのです。

『これが人為的な事だと仮定すると、君たちが来たたとんにシャドウサーヴァントが現れた事には間違いなく意味がある……と、思う』

『相手が君たちをどう思い、そしてどうしたいのか。そこが分かれば、次にどういう一手を打つかも、分かるかもしれない』

それを思考するのだそうです。こういう、相手の思考を読んで動くっていうのは、F
GOでは意外にも珍しいと申しますか。相手がどういう罠とかカラクリを仕込んでい
るのかを解き明かして攻略していく、っていう方が多いですから。

『で、気になったのは君たちが見たことがある敵が、出てきたという情報だ……そこで』
『私に聞かせてくれないかな？ 君たちが駆け抜けてきた特異点の事を。もしかしたら
何かのヒントには、なるかもしれない』

という事で、ライネスちゃんの要請で、特異点について話すことになりました。まあ
ホモ君に活躍を聞かせてライネスちゃんに目をキラキラさせてもらおう（絶対ない）のは
やぶさかではありません。つしやあ、んじやあ男らしい（当社比）活躍をライネスちゃ
んにぶちこんでやるぜ！

第四十七章・裏：危険への自覚

「特異点つてのは……っあー……今さっき話した通りこつちの度肝を抜く事、んぐ、ばつかりで、な。昔の人たちが目の前にいるつてのは、いや、そうは見えなくてもとんでもないシヨツクな……わけだよ」

「ふむふむ」

「それに加えて、俺を狙つてる……臭い、黒子が何人も向かってくるんだから、まあ……それについて『なんで!』つて思った事は、つすう……数知れずだよ。それは、言わな
いけどな」

「ふーん。なんでだい?」

「言つてもしょうがないから?」

目の前の禿げたマスターから、この特異点に来る前の事について、色々聞いてみているのは……まあ、ぶつちやけて言つてしまうとただの興味が半分以上を占めている。彼から聞いた特異点での経験が、ここの攻略に役立つかは、ぶつちやけると分らないし、確約も出来ない。

間違いなく情報はあるに越した事はない。だけでも、それにしたつて彼らが遭遇した

サーヴァントについて聞けばいいという話だ。でも、それだけを聞くんじゃあまりにも味気がないから。色々聞いている。

——問題を解決するための情報は、人と人とが交わる事ではか手に出来ない。SNSだって手紙だって、人と人がお互いの思考を突き合わせていることには変わりない。

「第一特異点、オルレ안의竜の魔女、第二特異点、破壊を嘯く超人、そして第三特異点の世界最古の海賊船……それらを越えてきたんだ、愚痴位言う権利はあるんじゃないかなあ？　我が兄なんて、常に愚痴とフ○ツクばかりだ」

「いやどんな治安？　あのねえ、俺がそんな事言い出したらダメでしょ。一応、世界を救うヒーロー……いやそんな柄でもねえな。ブチ切れると角だし、カタツムリみたい」

「君の角はそんな可愛らしい物じゃないんじゃないかな？　がつつりと生えてたじゃないか。雷みたいな角が」

……まあそんな話を聞いている彼は、さつきから結構ダメージに呻いている訳だが。彼曰く『動いていないと体が鈍る』らしい。動いたら余計に傷が開くのではないかとも思うがしかし、最近はず術後も、ある程度リハビリで歩くのが推奨される時代だ、そう考えると割と理に適っている……のかもしれない。まあそれは置いておくとして。

そんな風に彼が歩けているのも、この会話の中で、私が知恵を回す必要のある問題に

関係している訳だが。

「……まっ、角が生えた結果、今回はそんな特異点を乗り越えて来たなんていう自信が、無様でどっかに消し飛んだけれどもなあ……あつつう」

「——話は聞いたよ。君は、あの状態だと気性が荒くなるんだってね」

「にしたって、ここまでじゃなかった。しつかり律することが出来てりやあ、こんな事にはならず済んだんだ。ったく」

彼は、どうやらごくごく普通の一般人……という訳ではなかったらしい。

「東洋のデーモン……鬼種の血を引いて、それを覚醒させているとは。時計塔が生き残っていたら間違いなく研究材料にするだろうね」

「……なに？ とけいとう？ ロンドン？」

「ふふ、まあ一般人はそう思うかな……ま、ロクデナシの巣窟と思ってもらえればいい」

古い人外の血を目覚めさせた、ハーフデーモン。

幻獣種にも匹敵するレベルのレア物だ。剥製か、ホルマリン漬けか……何れにしても碌でもない事になるだろう。

私自身、話を聞いたときは目を疑ったが、しかし。あのワイバーンを殴り飛ばすだけの膂力、そしてがっつりと背中を切り裂かれて、魔術での治療を受けているとはいえここまで素早く復帰する生命力。流石に信じない訳にもいかない。

「まあよくわかんないけど……たぶん、ろくでもねえ組織なんだな」

「ひどい言い方をする。でも間違いないね」

「よく知ってらっしゃる？」

「私も時計塔で政治に関わるロクテナシの一人だからね。どうだい？ 私の暇つぶしの材料になりたくないかい？」

「いや、ご遠慮させてもらおうわ」

とはいえ、今、目の前の禿げた男は、普通の人間と変わらないようにしか見えない、そんな異常な力を発揮しているようには到底見えない、というのが。私の正直な感想なのだ……だが、それで済ませていい訳ではないと思う。

「……一つ聞きたいのだけでも」

「ん？」

「君、こういうことは初めて、なんだよね？」

「ちよつと頬を赤らめながら言うな。誤解を生む」

「あははっ、すまないね。でも、ちゃんと聞いておきたいんだ……私も、似たような、厄介なものを抱えている身でね」

——私の魔眼は、まあ具体的には違うものではあるが。しかしながらここは、シンパシー感じてもらうためにも、一つくらい、本当の事を言わなくてもセーフ。

「……ほーん？」

「私も、これを持って余していた頃もあった。まあ、親切な義兄のお陰で、なんとか生かすことが出来るようになったわけだけど」

「そうは見えないけどねえ」

「私個人としては制御できていなかった頃は、まあむず痒かったし、それなりに嫌な思いもしたわけで。君は……その辺り、どうなんだい。自分のその力の事を、どう思っているんだい？」

という事で、ストレートに。

正直な話をすれば。発動するたびに精神にある程度の影響を与える、という不安定さは個人的に……時計塔で色々と暗躍していた身としては、どうにも見逃すことは出来ないというのが、正直なところだ。

感情というのは、人間の最も重要な部分だ。ホワイダニットに直結し、それが無ければ人間は、『事件』という物を起こしたりはしない。動機の無い事件というものはそうは存在しない。

そこにすら影響を与える……というのは、能力としては相当に異質だ。

『力』というのは、直接、人格に影響を与える事は基本的にない。その『力』に酔い、心を狂わせるのは、力の所為ではない。己の責任だ。

もし、『力』が宿主を直接的に狂わせてくる、というのであれば……そこには、何かしらの悪意という物が存在する。

その悪意は……自覚しているかどうか、というので、大きく変わるものだ。

「——それはまあ……時計塔、だったか？ それに近い印象はあるわな？」

「ろくでもない、と？」

「これが真つ当な力に見えるんだつたら、そりゃあそいつの目が節穴だつていう証拠だからなあ」

——意外といえば、意外な答えだった。

彼は、あの能力を迷いなく行使している、という印象があつた。

言い方は悪いが……そんな悪意の見えるような力を軽率な考えの元、使っているようにも見えたのだ。

リスクがあるなら、それ相応の場面で切るべきだ。私を助けるにしたつて、別に突き飛ばすなり、他にも方法はあつた中で……敢えて力でねじ伏せる方を選んだ。

考えているようには、見えなかった。

私に言われたことで、うろたえたり、考え込んだり……若しくは、明確な答えは持っていない。むしろ、この短期間で力を得たのだから、そんな答えを出していなくも不思議ではないとすら思っていた。

そんなことを想像していたのだが。しかし。

「……意外だ」

「自覚があつたことにか？」

「まあ、率直に言つてしまえばな」

だが、彼は自分のあの『力』について、何も考えていない訳ではないようだった。寧ろ危険な部分がある、と即答し……さらに言えば、目の前の苦々しい表情は、自分の能力を過信しているようでもなかった。

「マジで率直に言うなあ……けど、軽率に力を振るつて自滅した、つて思われても仕方ないか、今日のアレは、マジで」

「いやそこまでは言つてないんだが」

心の中で思つてはいたが。

「別にごまかさなくていいさ……実際そうだからな」

「軽率に力を振るつた、と？」

「というか、リスクがあるのは分かつてて使つてた……世界が減んだんだ、そんなときにリスクにビビつて切れる札を切らないなんて、それこそバカのやる事だと思つてる」

「リスク、というのは、感情面の話か？」

「……さて、な」

——彼の力は、最近発現したものだと言った。

しかしながら……今の彼の表情を見てみると、とてもそうは見えない。何年も何年も自分の力と向き合ってきた、そんな凄みを纏っているように見えた。

あの命のやり取りの現場に於いての行動で、自分が軽率だった、というのを認めるのは容易い事ではない。

だがそれを『自分の能力の扱いが軽率だった』と容易く答えられるというのは……年齢にそぐわない、年月の積み重ねの様なものを感じさせる。

「——ふむ、であれば、大丈夫かな」

「……ん？」

「人とは違う能力について、先人として説教の一つでも垂れようと思っていたが。その必要は無いらしいね。自覚があるなら、大丈夫だろう」

持てる者の中に、自分の能力が危険だと、自覚を持ってない者が一体どれだけいるか、数えるのも馬鹿らしくなる中で。周りに迷惑をかけて、その挙句の果てに自滅する者までいる中で。

自覚があるなら大分、大分マシだ。

であるならば。

「さて、さっきの続きだ特異点の事をもっと話してくれたまえよ」

「……ええ？」

「気が変わったのさ。辛気臭い説教よりも、楽しい話を聞きたいじゃないか」

——それに。

彼が巡ってきた三つの特異点の話。

まだ触りしか聞いてはいないが、一つ。興味深い点も、見えてきたところだ。

兄上ではないが、一つ。私も謎解きに興じてみるとしよう。

第四十八章

仕方ねえ、竜の都攻略するぞオオオオオオオ！ な実況はーじまーるよー。

さて、前回砦にどうか駆け込み寺して、ダメージを回復。そしてライネスちゃんの特異点昔語り（ごく最近）をしたところからの、続きです。ライネスちゃん曰く、それを聞いたら相手の目標というかその辺りがぼんやり見えてきた模様。えっ、何それは……やっぱり脳筋ホモとは頭の出来が違うんやな、って。

『とはいえ、確認どころか、とっかかりすら微妙な所だからね……先ずは、調べつくしていたと思っていたここを改めて調べつくす必要がある。となれば』

『あのシャドウサーヴァントは、邪魔になるね』

とはいえライネスちゃんが叩き出した結論も、脳筋の変わらない模様で。とりあえず敵が出て来て下さったのでそれなら先ずソイツをぶん殴って打倒してから、という話で。

やっぱり特異点は脳筋で攻略するに限るな！（掌天元突破）

なんという行き当たりばったり脳筋思考。まあ敵がいないので殴る相手もない……どうすればいいんだっ！ って状況よりはマシだと思いましょ。

さて、ホモ君が回復し次第行動したい所なのですが……まあ、一応回復力だとかも人の血を引いてると上がる——とかそういう事もないので、まだ行動するには少し時間がかかってきます。

ではその間何をしているか？

砦の探索だオラアアアアアン!? 舐めるな! このゲームは元のFGOとは違うRPGなんじゃ! 探索もあるんだよおッ! 出来るだけ探索して素材を手に入れてやるからなお前ホント、無駄な時間は過ごさんぞ!

『——調べつくす、とは言ったが、ここまで調べる必要は、果たしてあったのかね。ここは私が何度も使って、最早我が家レベルなんだけども』

『まあまあ、灯台下暗しという言葉もあるし。こつちからも一応は探索も出来るし頑張ろう……まあ探索の精度はお察しだけどね! いやー不安定不安定!』

さて、念入りにこの砦を調べていた所、普通に会話イベントが始まりました。ここで始まるとは思ってませんでした。さて。一体何のイベントなのか。

『——ん? これは』

『どうかしたのかい?』

『反応だ。正確な場所は分からないけど……その砦の何処かにあるぞ』

お宝か!? つしやあ探すかあ! すごい雑な同人誌の導入みたく聖杯ぐらい見つけ

てやるからなあ!? という事で再び探索——した結果、さて一体何を見つけることが出来たかと言えば……

／＼紙が一枚／＼

……聖杯どころかケツ拭く紙にしか使えなさそうなものが出てきたんですがそれは。これは思わずして微妙な顔にもなります。畜生、ボロボロになるまでこちらの血か便を拭いさつてやろうか!?

怒りの表情にもなろうとんでもないやり方をされた訳ですが、しかし別にこの紙も何の意味もない、クソの役にも立たないブツ、という事ではありませんよ?

『おや、この紙……何か文字が書いてあるけれど、これは……?』

『——ムネーモシユネー、か』

——来たわね。

さて、この紙に書かれたムネーモシユネー、という言葉葉。

ここでダ・ヴィンチちゃんとライネスちゃんの解説!

『確か、記憶を人格化した女神……ギリシャ神話だったかな?』

『うん。ウラノスとガイアの娘だったはずだ。そこまでメジャーでもない女神だね』

『うーん私はそこまで言っていないんだけどなあ?』

めつつちゃ簡潔な紹介だなあおい!! でも、仕方ないんです……本当にムネーモシユ

ネーさんというのは逸話が少ないんじゃない!!

あのゼウスの父親たるクロノスの兄妹だったり、名付けを始めたたり、学問の事について祈りの対象になってたりと、すごい人だったりするんですけれども。あ、後はゼウスとの間に、恐らくそういう関係になった相手としては最大の九人の子供をもうけているのも有名ですね。九人の子供を産むとかどえりやあ肝つ玉母ちゃんじゃ……

まあそういう逸話はとりあえず置いておくとして。

その名前が書かれた紙、というか紙片、というべきサイズのモノが発見され申した。態々一枚絵まで表示されてる当たり、結構重要そうなアイテムではありそうです。

……え? この紙に見覚えしかない? はっはーまつさかー(棒)

『しかし、こんなもの、私たちがここにいる間はまるで見つからなかったぞ』

『はい。拙も……見た事は、なかったです』

ここをずっと使っているお二人から『んなもんなかったぞ』という明確なお言葉が飛んできている事で、この紙が途端に怪しく見えてくる不思議。おつ、友好型かあ〜? 擬態型だツ!!! (流行へのなだれ込み)

FGOなんてそれこそ擬態型しかありませんからネ本当に。しかも大抵が髭のイケオジ。菌茎が見えている方は果たしてイケオジと言つてよろしいのかどうか……つまり現状美少女しかない現状は裏切りを警戒せずともよろしい!? つよい(確信)

『——だが、これがただの紙でない事は明確だね……微弱だが、この紙からは確かに魔力を感じる』

『ふむ。そんなものが、何時の間にかここに現れた、という訳か』

『明確に畏としか思えないな……』

寧ろ畏じゃない場合を想像できないレベルで怪しいですよねえ。

という事で、ホモ君は速攻で紙から離されて、障ることも出来ないっていう。アレーおかしいね。ホモ君が一切信用されてないね（困惑） そりゃあマスターなんて

まあホモ君は主力たるサーヴァントの楔の役割が一番大きい訳なので、こんなあからさまな畏に触れさせる訳には行かないと。信用されてないか弱き生き物……

『——この紙、どうする？』

『今すぐ消滅させるのは、ちょっと短絡的かなあ』

『では何処かに保管しておく必要があるか……分かった。ひとまずは、私が預かろうじゃないか』

紙はライネスお嬢の元へ。まあこの中じゃ一番トラブルには強そうなお方ではございますけれども。という事で、これでこのイベントは一区切り。ホモ君が触れて何かひと悶着とかあり得そうだと思うってたんですけども。

ですが皆さま、ご安心ください……

『——皆さん、大変です！ シャドウサーヴァントが、ワイバーンを引き連れて向かってきます！』

別口でひと悶着はちやんとあります。

という事で、顔を青ざめさせた式部さんからのご報告で、どうやら敵がこちらの砦に攻め寄せて来てらっしゃるといふご報告が。向こうから攻め寄せてくるのか……（困惑） ってちよつと待て、ホモ君はまだ回復しきつていないんだぞ!? ケガ人ぞ!? 敵がそんなのを考慮してくれるわけないだろうガア!!!

という事で、負傷したまま砦においてシャドウサーヴァント君と第二戦でございませす。こちらには砦という守りの札、向こうにはワイバーンという明確な兵隊。なるほど、前回よりは互角ですね。まあゲーム上は味方に防御バフがかかるくらいですけれども。

とはいえ、ワイバーン君が特別固いという訳でもないの……あ、おい待てい。グレイちゃんにタゲ集中を付けるのは即刻中止せよ！ いくら雑魚エネミーでもクリティカル積み重なったら死ぬんやぞ!?

『行きます……!』

どうか行かないで（無茶を止めようとするマスターの鑑）

ええい、なんとという悪意あるステージ。グレイちゃんが敵を引き付けている間に敵を

叩けという事か……！ このゲームはキャラクターに優しくなさすぎる。

という事で、こんな鬼畜ステージを作って下さった皆様方にプレゼントするのは……こちらの最高火力のゴルゴーン様のダイレクトアタックじやああああああ!! 要するに一発で撃ち落とせばだれもグレイちゃんを傷つけられない……!! やられる前にやるのだ! サーチ&デストロイ! ウォルターでもアーカードでも持つてこい!!

まあ、現状のゴルゴーンさんのレベルはそれなりに高く、相手のレベルはゴルゴーンさんに比べれば低いので、アヴェンジャーの高攻撃力とペラペラ紙装甲ワイバーン君が噛み合って鴨撃ちに見えるのですよ。

このゲーム、割と本家よりもこういう事が起きやすいです。しつかり鍛え上げたサーヴァントは、マジで高火力を叩き出します。

が、まあこんなペラ装甲ばかりのモンスターで終わるなら、こんなに楽な事はないんですけれどもね……

『新手のお出ましのようだ』

そりやあ出てくるわなあ!!

緑のワイバーンの次は、赤いワイバーンです。そして更に……シヤドウサーヴァントがいよいよご自分の手で始末してやると言わんばかり、堂々と歩みを進めています。

流石に今までのワイバーンとはレベルと違う硬さと、シヤドウサーヴァントの二枚編

成に加えて……ああ、ペライワイバーン達も一緒ですね。

勝負はいよいよここからでございます。

さあ気張つてまいりましょうか！

第四十八章・裏：砦防衛戦 前編

「——意外だなあ」

「何がだい？」

「いや、俺たちが戦った、あの竜の魔女って……もつと、もつと物凄かったような気がするんだよなあ。迫力が足りないというか」

どうにも、肩透かしというか。

そう言っている彼の背筋には、先ほどまで少し、明らかに汗が伝っていたのを、私は見ている。オルレ안의竜の魔女、というのは、話に聞いている以上に苛烈な存在だったのだろうか、その汗から想像することは出来た。

因みに今は汗は引いている。

「強敵な事には変わりないだろう？」

「いやそうなんだけれども……なんだろうな。もう、俺も命を懸けて戦うぞっていう気合が空回りしたというか」

「じゃあその気合は今、目の前の敵に向けたまえ。まだ戦闘中だぞ」

——まだ激戦は終わっていないのだから、もうちよつと緊張してほしかったのだが。

先ほど、ゴルゴーンから『貴様は下がっている。手は足りている』と直々に言われたのが余程不満だったのか……それとも。

ともかく、彼の言う通り、こちらが優勢なのは間違いないと思う。シャドウサーヴァントが指揮を執るワイバーンとて、石造りの砦をそう簡単に壊せるわけでもない。こちらには地の利があり、後はその利を活かせば……

ちよつと下を見てみる。

そこには先ほどから叩き落されたワイバーン達の死屍累々とした姿が。

砦に籠ったこちらに向けて真正面から力押しで向かってくるのは、正直言つて愚策としか言いようがない。

例えばの話になるが。

こちらがただの兵隊で。向こうがサーヴァントだった時。その場合は真正面から攻められたとすれば、正直、普通に負けも見えるだろう。だが現状はこちらがサーヴァント、向こうは一般兵とは言わんが……まあサーヴァント相手では格落ちの相手だ。

結果は見えている。

「……マスター、これでは鴨撃ちも同然だ。退屈なのだが」

「前線に全力で出ておいてそう言われましても。頑張ってくださいとしか」

「全く。真正面から押し寄せてくるばかりでは何の面白みもない。ちよつとは思考を回

して見せろ」

「でも知恵回したは回したでイラつくんでしょ？」

「良く分かっていないではないか」

まあ相手のレベルが、なんとというか理不尽な差ではあるが。強さも割と理不尽だが、言っていることが割と酷い。

「……あの、マスター。グレイ様、全然援護必要そうじゃないのですが」

「あらそう？」

「はい。近づこうとするワイバーンは、全てゴルゴン様が撃ち落としてしまわれますので、殆ど一対一で……はい。全然」

まあ、それくらい理不尽な強さをしていた方が、グレイも危険に晒されずに済むという物だが……：ちら、とグレイを見たら、小さく手を振り返してくれた。アツドが掌でぴよんぴよん跳ねているのが少し微笑ましい

……いや、戦っている最中なのだから、微笑ましいとかいう感想を抱いてはいけないだろう自分で言ったのだから。

何はともあれ、前線を支える役割を担わせていた筈のグレイ、およびグレイの援護を任せていた紫式部も、完全に暇を持て余している様な状況だ。

「……緊張感も失せないか？　こんな状態だと」

「……否定はできないなあ」

正直、ワイバーンを統率する能力は脅威ではあるのだが。活かし方が真正面からの平押しという脳筋にも程がある戦法だ。非常に申し訳ないが、全く活かせていないというしかない。ちゃんと裏から回すとか、そういうやり方をしてれば、そりゃあここの防衛戦としてはそれ相応に苦労しただろうけども……うん。

「——つと、流星にこれで終わる訳ねえか」

「ああ、新手のお出ました」

しかしながら、そう簡単に終わる様では特異点ではないという事なのだろう。奥から出てきたのは、明らかに迫力とか大きさの違う、赤い、屈強なワイバーン。そしてそれに合わせて……黒い影が一步を踏み出した。

「なんかぞろぞろと強そうなのと、ほんで……？　一緒に御大将も出て来たか」

「精鋭部隊、つてところかな？　ああ……いや、それだけじゃないな」

そして、それに合わせ、さらに他のワイバーンが……まるで赤いワイバーンと、シャドウサーヴァントを庇う様に前に出る。どうやら、いよいよ業を煮やして、全面突撃という事だろうか。それにしたとしても、逐次投入の後に全軍突撃とは、やってる事が完全に愚策のそれなのだけだ。

とはいえ、相手はただの兵隊ではない。ワイバーンだ。飛翔する怪物。それらが一気

呵成に攻め立ててくるとなると……些か以上に厄介なことは間違いない。

「——式部さん。ゴルゴーンさん、集中プリーズ」

「くくつ、少しは歯ごたえのある相手が出てきたではないか……面白い」

「はい。気を引き締め直します」

「グレイ！ あんまり無理をしないで、こちらに近づけさせなければいい」

「はいっ、分かりました！」

流石に気合いを入れ直さないといけない。

ゴルゴーンが、ニヤリと笑って、一歩前へ……そして、グレイの傍へと、飛び降りて着地。どうやら、余程暴れたかつたらしい。

黒い影が、旗をかざす。それに合わせ……先ずは緑の影が、二人に向けて甲高い鳴き声を上げて突撃してくる。先ほどと同じように、ゴルゴーンの光線が、先頭集団の数匹を薙ぎ払い……だが、今度は数で纏まってきている所為か、倒れたワイバーン等気にせず遮り無二突っ込んでくる。

「やらせません……！」

『遠くなら、コイツだ!!』

その突撃してきた個体も、グレイの投げ放つアッド・ブーメランに首を刈り取られている訳なのだが。さらにもう一発、戻ってきたブーメランをそのまま弓に組み替え、さ

らに何発かがワイバーンの命を刈り取った。

連続で打ち取って、敵の壁をすり減らして尚……しかしながら、シャドウサーヴァントに先導されたワイバーンはまだまだ奥から突っ込んできて。

「——手ぬるいっ！」

が、そのままゴルゴーンが腕力で二匹ほどまとめねじ伏せた。遠距離攻撃で蹴散らすだけではなく、力任せで相手を叩き潰すことも出来るらしい。カツコ良く術を使おうとしていたのだらうポーズのまま、紫式部が固まっているのが物悲しい。

「ナイスゴルゴーンさん。パワフル！ マツシヴ！ 筋肉が唸り上げてるよー！」

「マスター、後で貴様は殺す」

「ヒエツ……」

「遊んでいる場合か！ 本命が来るぞ！」

そうだ。ワイバーンの肉の壁によって、無理やりに接近して来ているのだ。砦を落とさんとする、敵の本隊。赤いワイバーンとシャドウサーヴァントが、こちらに迫っている……のだが。

「——へっ、最後まで真正面からの平押しとはなあ、なんでゴルゴーンさんをさつきまで後ろへ下げてたのかも分からないくせに……さて。ゴルゴーンさん先ほどの事は土下座して謝るんで一発お願いできませんか!？」

「……ふん、まあいい。ちまちまと撃ち落とすのは飽きてきたところだ。おい、小娘、下がっている」

こちらにも当然切り札がある。

彼とて、何も考えず、遠距離から強力な砲撃が出来るから、という理由だけでゴルゴーンを後ろに下げていたわけではない。

多少攻撃しつつも、貯めていたのだ。

向こうの戦力が、それなりに多い事は分かっていた。ならばこちらもそれに相当するだけの、破壊をぶち込んでやる、というのが隣のマスターの決定であった。こちらの最大出力の一発を。

「——貴様らの呪いを返してやろう」

ニマリ、ゴルゴーンの顔が笑顔に変わる。

その眼前に展開される、赤い魔法陣。渦巻く髪が、逆巻く竜巻の如く絡まり、その中心に向けて一点、充填されていく禍々しい魔力。

まるで、魔力による核融合の如き、凄まじい魔力。

これですらただの劣化版でしかないというのが、彼女という存在の規模の大きさを語っている——そして。

「融け落ちるがいい——『バンデモニウム・ケトウス強制封印・万魔神殿』!!」

放たれた赤黒い破滅の光は。

文字通り、赤いワイバーンを融かし……そして、シャドウサーヴァントをも容易に飲み込んで。

そして、その一点に終息した魔力は、臨界を迎え。

まるで、水をたつぷりと含んだ風船の如く。盛大に、弾けた。

第四十八章・裏：砦防衛戦 中編

「ハツハツハツハツハツハアッ！」

——高笑いを上げるゴルゴーンの姿は控えめに言っても悪役にしか見えないのだが。

とはいえ、彼女が味方であるという事を加味すると、恐ろしくも間違はなく頼もしいのである。かつて、英雄ペルセウスをして女神の加護無くしては倒し得なかつた最強の蛇妖たる『ゴルゴーンの怪物』……その力を、文字通り全てを薙ぎ払う圧倒的な破壊力を、あの一撃は、我々に見せつけてくれた。

私も一応、サーヴァントの身ではあるのだが……その出力差というものは、歴然であると言わざるを得ない。というか、アレで『サーヴァント』（劣化した影法師）つていうのが信じられない。本来はあれ以上なのだという。ギリシャ神話というのは誰も彼もああなのだろうか。

「おーおー物凄い出力だ事。ゴルゴーンさん、相当溜まつてたんかねえ」

「……結局、私、何もしていません……」

「いやいや式部さんは本来戦える人じゃないのに無理やり働かせてる感じだから、仕方ないっちゃ仕方ないのよ。ね？」

「グレイも固まってるよ。いや、まあ仕方ないと言えばそうだけど」

実際、私もそれなりの激戦を覚悟していたのだが。あの一撃を受けて、ワイバーンはもちろんとして、シャドウサーヴァントも生き残っているとは到底思えない。良くて原型が残っているかどうか、悪ければ、恐らく跡形もないだろう。それだけの破壊を目の前に見せられたのだから、そりゃあ目も丸くなつて固まったりもするだろう。

「ま、流石にこれで勝ちだ。一応、敵はまだ残ってるかどうかだけ確認してから休憩にしましょうやお嬢」

「誰がお嬢だ」

私はそういう組織の一人娘とかじゃない。

まあそれよりも、確認か……いや正直、あれだけの出力を叩きこまれた後に生きているとは到底思えないのだが。一応はやっておくべきか。

煙が上がっている場所は、下よりも、此方からの方が確認が出来そうだ。取り合えず城壁の辺りに手を置いて、ちよつと身を乗り出して覗き込む――

「……………」

一瞬、その中に影が……見えた気がした。その直後、背筋に走る冷たい感覚と――頭に浮かぶ嫌な想像、光景。それを具体的に咀嚼したその直後、全力で頭を働かせ……それ以外の選択肢は全て排除出来ることを確認、誰よりも先んじて、その声を上げた。

「グレイっ！ ゴルゴーン！ その場から離れろっ！」

「——ゴルゴーンさん！」

隣の彼も、私の言葉の意味を理解したのかそれとも私の言葉に反応したのか、何れにせよ即座に声を荒げて、撤退を促すように、自らのサーヴァントの名前を呼んで。それが功を奏したのか……下の二人は、その命令に疑問を抱くことなく、急いでその場を離れた。

「式部さん、あの辺りに全力で攻撃！ 急いでっ！」

「えっ？ あ……は、はいっ！」

しかしそれだけでは止まらない。さらにもう一発、同じく城壁に残っていた紫式部に焦燥を纏った檄を飛ばし——本当に、あと一步の所だった。もし、あと少し遅れていたら文字通り……彼女達は、火の波に焙られていたかもしれない。

彼女の放った黒い弾丸は……煙の奥から、そこを食い破って、突如としてこちらに押し寄せていた大波の如き焰に突き刺さって、ぶつかり合って……その力を、完全にではないが、しかし大分そぎ落とすことに成功していたのである。

「——危なかった」

「くそッ、宝具食らって、あれだけの出力を吐き出せるって……なんだよ、今までは最大出力を出してなかったって事かい！」

「言ってる場合か!? 出てくるぞ!」

——そして、出てくる。立ち上がる煙の奥から、黒い、旗が。

シャドウサーヴァントは……所々から白煙を上げてダメージを負っていない訳ではないとは、思われる。倒しきれていないだけだ。足取りは堂々としているし、あの焰を吐き出している、その迫力は手負いとは全く思えない程のパワーで、こちらに歩いてきている、それ、だけだ。

「おいおい……せめてよろめくとかなさらない感じですかあ?」

「そんなに甘くはないみたいだね。どうやら」

「ゴルゴーン様の全力が撃ち込まれて、それでもなお健在なんて……!」

「——どうやら、想像よりも甘い相手ではなさそうだなあ……一人になってから本気出すとか、どんだけソロが好きなんだか! 式部さん、改めて、戦闘準備!」

「しよ、承知しました!」

ハゲ頭をぴかりと光らせ、紫式部へ指令が飛んだ……と同時に。

先ず、一步。黒い影が踏み出す。

しかし、それをけん制するかのように、今度はゴルゴーンが一步、前に出た。

「——マスター、援護を寄せ。叩き潰してやる。アレでも本気だったのだ、それを虚仮にされたようなものだ。こちらも煮え滾っている」

「オーケイ……式部さん、俺の援護のタイミングに合わせて——」
「承知しております！」

直後、ゴルゴーンに飛んでいく、礼装からの援護。そして……紫式部の陰陽術の弾丸は、ゴルゴーンの傍を通りすぎ、シャドウサーヴァントへと。

私も、今はアッドを鎌に変形させたグレイの元に、彼女を下ろして、指示を下す。彼女を守るように、と。

「グレイ、トリムマウを傍につける。くれぐれも気を付けてくれ」

「はいっ！ 分かりました！」

グレイの隣に、トリムマウが配置されたのを確認してか……さらに、黒い影は一步、そこから大きく踏み込んで、前方に飛び出す。

しかしながら、さらに奥へと踏み出そうとしたその目の前に、ゴルゴーンが立ちはだかり——相手が振り回し、薙ぎ払おうとしたその一撃を、片腕で受け止めて見せる。

ドスン、という重い音と主に……互いがしつかりと衝突し、どちらも一步も引かぬ、力と力のぶつかり合いに、二人は突入した。

「ふん、パワーに自信があるのか？」

「……！」

「残念だったな、所詮人間、私相手に力比べは……無謀も無謀だっ!!」

——どうやら、パワー比べに関して言えば、ゴルゴーンの方に軍配が上がったようだ。叩きつけた旗を、そのまま片腕で捕まえたままで、全くビクリとも動かそうとはさせていない。そしてもう片方は、見せつけるように爪を構え持ち上げて……そして、全力で振り下ろして……

「——つちー！」

だが、シャドウサーヴァントは旗に固執せず得物を離し、その一瞬で爪の射程から逃れて見せた。されに、その爪が振り下ろされた直後に、ガン、と旗を蹴り飛ばして、攻撃に集中していたゴルゴーンの手から弾き飛ばし、空中でその旗をつかみ取る。

得物を一旦手元から離してから、直ぐに蹴り飛ばして回収、そのまま離脱する……その大胆にも過ぎる判断は普通の人間が到底、出来る事ではない。

一手、完全に不意を突いたと判断したのだろう。そのまま空中でつかみ取った旗をそのままに、ゴルゴーンに向けて構えて、振り下ろそうと——

「させ……ませんっ！」

「——っ!?!」

——した。もし本当に一対一なら、そのまま旗を振り下ろし、致命傷を与えられていたかもしれないだろうが……しかし、此度の戦いは、卑劣なれど、こちらが、三。向こうが一なのだ。グレイが、その得物とゴルゴーンの間に入り込んでいる。

大楯に変形させたアツドにぶつかつた旗は弾かれて、シャドウサーヴァントの体は、背後へと大きく傾いだ。グレイとの間に、大きく隙間も出来て、反撃も防御も出来ないような無防備。

出来れば、そのまま動かないでほしい、と。一応、グレイの動きに合わせて背後に回していたトリムで、彼女の両手両足を拘束する。

「チエツクメイトだ——式部さん、ゴルゴーンさん！」

「はいっ！」

「一撃耐えたところで……無駄だつたようだな？ どつちにしろ……！」

その大きな隙を、見逃さず。

叩きこまれるのは魔術と、魔獣の爪牙。二つの一撃が×の十字にシャドウサーヴァントの胸を引き裂いて……その体が、さらにぐらりと揺らいだ。流星に、宝具の一撃で負つたダメージも軽い物ではなかつたのだろう。

「……ここが、決め時。」

「……グレイ！」

「はいっ！」

——最後の縦の一撃は。グレイの大鎌が。

黒い影に、上から下へ、一文字の傷を刻んだ。

第四十八章・裏：砦防衛戦 後編

「……消えねえな」

「まず間違いない、もう動かないとは思っただけだね。アレ、結構強めにドゴンって叩いてたし……ヒビ入っているし地面に」

「というか、こんだけの威力で殴って原型保ってるのが凄いな」

シャドウサーヴァントは、全く動かない。

グレイの最後の一撃で倒れ伏してから、全く反応が無い。しばらく遠目から見ても、ちよつと近づいてみても、それでも動かない。一応、ゴルゴーンの尻尾で叩いたりもしてみたけど、反応はやはりなし。

という事で、とりあえず彼女が最も倒すべき目標と思われる、マスター・本造院を近づけてみても、反応なし。ついでに、彼が一発程ごつんと殴ってみたが、それでも反応は無かった。

ここまでやって無反応なので、倒したという事は確認できた、のだが……シャドウサーヴァントの肉体が消えてはいないので、警戒心を解くことが出来ない。

「サーヴァントって、倒したら基本消えるよな？」

「倒した、というか霊核を砕かれたサーヴァントは消える。気絶した時はその限りではないんだけど。アレだけの尻尾の重い打撃を叩きこまれたら気絶からも覚める。で、それでも動かない」

「反応は全く示さない、罨を疑うな、つて方が無理なんだけど……俺に一切反応しなかったとくれば本当に罨という罨でもなさそう、か」

サーヴァントというのは、とどのつまりエーテルの塊だ。実体があるという罨でもないのだから、死体が残る罨でもないのだ。だけど……一応、死体らしきものが残っている。奇妙な話だが。それ以上に、これは見逃しては置けない案件でもある。

「放置するのが一番、か？」

「いや、始末するのが一番だろう、こういう場合は」

魔術的に、死体なんて幾らでも利用する事が出来る。一番簡単に想像できるものとするれば死体を利用した死霊魔術があるし、死体そのものだって、魔術の触媒に幾らだって利用可能だ。

シャドウサーヴァントという存在の死体がどれだけ色んな事に流用できるか。想像するだけなら無限に可能だ。それこそ代々受け継いできた魔術刻印とて、絶対に利用できないという保険は何処にも存在しない。

だから我々魔術師という存在は、迂闊に死体とかを残さないし、きつちり始末するの

はもはや常識ともいえるレベルだ。

「……魔術師って因果な職業ね」

「何でもありな職業だからね。因果にならざるを得ないのさ」

「そっかあ……」

「まあ君たちの国でも、仏様はきつちり死後の世界に送り届けるだろう？ それと同じ

ようなものだと思うおうじじゃないか」

「造詣が深いですなあ」

「ふふ、これでも一つの家の当主なものでね。それなりに色々覚えてはいるさ」

という事で、この死体は無事に座にお帰り願う事にする。万が一、如何に利用される可能性も残さないように、本当に塵一つも残らない程に。正直、過激と思われても仕方ないが、魔術世界なんて、いつだって泥水の中を這いずり回るのが如くなのだ。この程度は序の口である。

「……ま、火葬とかは出席するのはそこそこ慣れてるけど。流石に目の前で人間を塵にするのは、いやあ。流石に初めてよなあ」

「おや、親族が多くお亡くなりにもなっているのかい？」

「ら、ライネス様……！」

「いーよ式部さん。変に気遣って貰ってもそれはそれで困るからさ。ゴルゴーンさんな

んか見なよ、もう言われずともやる気だよ」

ちら、とゴルゴーンに視線を向ける視線と、禿げた頭の光。それに応じて、彼女も逆立てた蛇の如き髪をシャドウサーヴァントに向ける。あの紫の光で焼き尽くされれば、最早跡形も残らないだろうが、万が一がある。一応、私も火力アップに魔術の一つでも使うべきだろうか……かと考えて一歩、足を進める

自分を始末するといったような話し合いを真横で堂々とされているのも、全く動くどころかピクリとしないと来た。最早、本当に脅威ではなくなっているのか。だとすれば何故全く動かないのか。

——それが一瞬だが、大きな油断だった。

「……………ん？」

かちやり、と何か金属音の様な物を聞いた、その直後……首にかかる圧力と、突如として見える天に、呆然とさせられるほかなかった。何が起きたのかは、けれどその一瞬でおおよそ見当がついた。

やはり、生きていた。そして私を狙ったのだろう。

「——ライネス！」

「ライネスさん!?!」

「ぐ……………」

首を掴まれ、片腕で持ち上げられ……その直後の事だった。私の懐に手が差し入れられる。取り出されたのは……例の紙片だ。

なるほど、狙いは、私ではなかったわけだ。マスターにも反応しなかったわけだ。このシャドウサーヴァントの狙いは、初めから私ではなく、私が持っていた例の紙片だった。

「——ど……り、で」

「シャドウサーヴァントの狙いは初めからアレ……？　じゃあなんで俺らを襲って来たんだか！　お二人とも！」

こうなれば——私は不要だ、このまま始末されても不思議ではないだろう。

だが、こんな状況にあっても、カルデアのマスターというのは実に落ち着いている。不意を突かれ、味方が捕まっているこの状況であっても、決して取り乱すようなことはしていない。落ち着いて、自分のサーヴァントへ……

「——グレイさんを全力で援護！　ライネス嬢を無傷で助け出さなきゃならん、ド派手な技も下手な遠距離攻撃も無し、精密な近距離で決着だ！」

「っ……ありがうございませす！　ミスター・本造院！」

——私を助けるように、命を下す。

少し、笑いがこみ上げる。こんな絶望的な状況の中でずっと戦い抜いて来た。そんな

中でも先ず、人命救助で最適な指示を下す辺り、とことん、そういう汚いやり方とは、無縁だったのだろうと、察せられたから。

カルデア、という組織が、とことん誰かを助けようと、戦ってきたのだろう事は、今の言葉で凡そ察せられる。

「承知しました！」

「つち、ぬるいやり方を……」

「ゴルゴーンさんはマジで石化は今はタブーで！ ライネス嬢巻き込みじゃうからな！」

「——ええい、分かっている！」

……私を巻き添えにせずに、目の前のシャドウサーヴァントを打ち取るのは至難の技だとは正直思う。だが……しかし、それを口にすることも出来ない状況では、彼らの善意を甘んじて受けるしかない。

しかしながら、何もしないというのは論外だ。せめて、トリムをもう一度背後に——途切れそうな意識の中で、必死に操作しようと、して。

「——」

「……っ？」

違和感が気が付く。いつの間にか、私の首を締めあげていた手から力が少し抜けてい

るのだ。私の体を、手に保持する程度の力しか入れていない。なんだ、この違和感は。注意を促そうにも、声も出せない——

「——！」

「うあつ!?!」

「——つ!?! ライネスさん!?!」

直後だった。景色が吹っ飛ぶ。否、私が投げつけられたのだ。景色が吹っ飛んだそのすぐ後に、私を助けに来たであろう、グレイの腕の中にいて……その事を、何とか理解できた。そして……グレイの横を、黒い影が一瞬で抜けていくのも、辛うじて視界の端に捉える事が出来た。その先にいるのは——

「えほっ……さがれっ」

「しまっ——」

一步、警告は間に合わない。追いかけたその先に見えたのは——私に意識を向けていたのであろう、隙だらけのマスターに向けて……あの紙片が、押し付けられている光景。その直後、本造院が膝から、ゆっくりと崩れ落ちる。

悲鳴を上げそうな顔で手を伸ばす紫式部。顔をしかめつつ、それでも自分の武器を構えるのをやめないゴルゴーン。

やられた——そう、誰もが思っただろう。だが。

よく見れば出血も、何か呪詛の様な物をかけられたようにも見えない。どころか、本造院が適当に払った腕に、シャドウサーヴァントは、軽々と払いのけられてしまった。

「——」

そのまま、黒い霧の様になって解けていくシャドウサーヴァント。

驚きつつも、グレイに肩を貸してもらって、なんとか彼の傍に寄った。いつの間にか、額から角が生えていたが……直ぐにそれも引っ込んでいって。ダメージを感じさせない程に彼は、スムーズに立ち上がった。

「大丈夫か!？」

「——外傷、とかは……ない」

ゆっくりと立ち上がる彼の体に、確かに外傷は存在しないようにも見える……とはいえ他に何も問題が無い、とは言い切れない。一応、目視で確認できる部分に、魔術やその辺りの細工をされていないかは確認し……それも、無かった。

だが、目の前の本造院の顔は、険しい。顔色も優れない。

「どこがおかしなところは？」

「……ない」

「マスター、無理はなさらずに。少しでも違和感があれば」

「ありがとう……でも、これは、そういうんじゃないんだ」

片手で顔を抑えながら、少し俯きながら彼は立ち尽くしている。

「……はっ、記憶ムネモシユネの女神、ねえ」

「?」

「いいや、意地の悪い女神さまもいたもんだ、つて思っただけだ」

そういつて笑った彼の笑顔には……まるで、力も入っておらず。生きるのに捨て鉢になつた世捨て人の様にも、一瞬見えてしまった。

第四十九章

見えてきたな……な実況、はーじまーるよー。

しかし、なんというイタチの最後っ屁か。

シャドウサーヴァントちゃん迫真の特攻劇。その勢いでホモ君が紙片に触れた事で崩れ落ちて、マジもマジの大ダメージ……ではありませんが、謎のシヨックを受けて倒れこみました。

あの紙の欠片、一体どういう仕組みなのか。触れた時点でホモ君に致命的なダメージかどうか分からない何かをホモ君に装填して消えていきました。あの紙野郎……物質の癖して生意気な！（建前） ナイスウ！（本音）

あ、因みにゲーム上、マジで一切のデバフとかもございません。テンションは下がりが味でございますが。一体マジであの紙片なんなんだ……？

『——通りチエックしたけど、君の体に異常な点は見られない……かな。一応は。相変わらず、ある程度の精度しか担保できないのは申し訳ないけど』

あ、良いつすよ（寛容） とりあえず、異常な反応があるとかじゃなければ全部結果オーライなんで。問題は、この後後遺症とかが出るかどうかですが。まあいくらFGO

RPGが鬼畜とは言えど、そこまで悪辣なトラップは仕掛けていないでしょう。そう信じたいですハイ（気弱）

シヤドウサーヴァントを無事に撃破してやったー、とは言い切れぬすつきりしない最後となつてしまいました。

『一応、あの紙について、こつちでも得られたデータで調べてみるけど……あんまり期待しないでくれ。もつと正確に調べられれば良いんだけど、生憎と君の存在証明と周辺のマッピングだけでも結構いっぱいいっぱいでね』

とりあえず、ホモ君にいきなり膝を突かせたこの奇妙な紙に関しては、正体が分かればいいかなーくらいの感じで、今は放置という事になりました。ライネスちゃんも『情報が少ないすぎて類推も出来ない』とお手上げ。

とありあえずそんな事より、今は優先するべきことがあります。

『さて……では、次に問題にすべきは、アレかな？』

『ええ。突如として、彼方に姿を現した……』

『霧の都の方かな。あの、巨大な建造物らしきもの』

そう。突如として、マップに姿を現した……というか、霧の一部からこちらを覗き込む様に見えてきた巨大な……そそり立つデツカイ何か。の、一部。

ちよつとしか見えていないので、それが如何なるブツなのかはハッキリしませんが

……

『霧の都で、アレを見かけなかったのかい?』

『いや、全く。何処を見てもあんな巨大な建造物を見た事はない……この辺りから見えるサイズのモノなのにどうして今になって見えるようになったのか』

『考えられる可能性としては、あのシャドウサーヴァントの撃破か、それとも、あの紙に接触した事か』

少なくともこちらがこの竜の都にて、何かしらを行ったからこそその進展だと思われるますねえ! この特異点において、ようやくまともな『解決の手がかり』と言えるような異変が現れました。

(因みに調べたりはし) ないです。ええっ!? 放置するのかい!? 霧の都はこのエリア一番の危険地帯だつて言ってるダルルオ!? 何の準備もせず真つ向からぶつかつていい相手じゃないつてそれ一。

『焦る事はないよ。未だこの特異点を一体どうやって脱出すれば良いのか……こちらにも分からない事は実に多い。ようやくそのきっかけを手に入れたと思おうじゃないか』
『まずあの塔を起点に、という事かい? だが解析も何も、今は出来ないというのが結論ではないかい?』

『現状、私しか通信できない上に、そちらのサポートも万全に出来ないのが現状だ。けれ

どもまあ、少しずつそれも改善出来てきている……何れ、しつかりとあの塔を解析できるくらいにはなつて見せるさ』

それまでは、この特異点全体の調査を進める、という事で、以上、カイサン！（最新の流行に乗つていくスタイル）ウツホちゃん好き。狂おしい程好き。

カイサンはしません、とりあえずはこの特異点全体を流離つて、全滅させてやるつてんだよオツ!! いや、ちよつと過激すぎました。とりあえずほかの二エリアを確認するのが先決という結論に至りました。

では次にどこへ向かうかという話なのですが……問題は、その二つのエリアの内、どちらがより脅威かという話になってきます。

やつぱりどんなものでも、段階を踏んで、落ち着いて攻略していくのが一番でございますれば。

『——ライネス嬢、どっちの方がおすすめだい？』

『紅の都だね。私達にとつては、圧倒的にそちらの方が難易度が低かつた』

『ふむ、となれば順を踏んでいくなら……紅の都、かな？』

『竜の都を改めて調べ直した後になると思うけど、それをお勧めしたいね』

とりあえず向かう前に、諸々探索してから向かう事にはなると思われますがしかしながら、それでも紅の都行きは確定いたしました。やったね！ とりあえず竜の都は攻略

いたしました!! この特異点の四分の一は攻略。なんかそれが五分の一になりそうな予感も致しますが今は勝ったことを純粋に喜びましょう。

——とか言っていた所で、ハイ、まだ竜の都に探索のお残しが発覚しましたので、まだ紅の都には旅立てません。なんてことだ……悲しいねえバナージ……（大将KZ R）光の速さでユニコーン蹴り飛ばしそうだア……

『——一つ聞きたいんだけど、ここって隅から隅まで探索したん、だよな?』

『ん? ああ当然だとも。グレイと共に、色々調べた』

『せ、拙は余り探索のお役には立てませんでしたか……』

『こちらに突っ込んでくる敵を処理してくれていただけでありがたかったよ。それに私はこんな所で野宿などした経験はなかったし……彼女の助けが起きた』

『そうか。微笑ましい話ありがたいが……それが確認できただけでありがたい。となるとこれも、あの塔が登場した事による変化だろうか?』

ダ・ヴィンチちゃん何かが発見した模様です。んで、画面に表示されている画面はと言えば……なんか、何処かの田舎と、その向こうの町らしいものが表示されております。

『どうしたんだい?』

『あそこに見える町とかの話なんだけど……ちよつと、見えるか分からないけど、表示さ

せてみようか。確認してみてくれ』
『分かった、さて……んん!?!』

ライネスちゃん、表示された情報に思わず驚きの表情をせざるを得ない……ッ! し
かしながらこっちは何が何だか分からんよ。お二人だけで納得しないでちゃんとホ
ウレン草しろオラアン!?! (社会人意識)

『——馬鹿な、何故私は気づかなかつたんだ?! ああの町並みを、私が見間違えようもない
というのに……』

『え? ライネスさん、何かご存じなんですか?』

『……ロンドンだ』

『えっ?』

『ロンドンの街並みそのものなんだよ。私が暮らし、そして嫌になるくらいには慣れ親
しんで来た……あの辺りを見間違えるはずがない!』

おファツ!?! ホモ君はロンドンから逃げてきたというのに、結局は何時の間にかロン
ドンに舞い戻っていた……!?!

さて、化けの皮が剥がれた、と申せば宜しいのか。長閑な田舎町の景色の向こうに
待っていたのは産業発展の時代にも見えるロンドンの街並み。周りよりも若干色彩が
モノクロに寄っている様な気すらする雰囲気の違いはあまりにもアウェイな雰囲気。

『やっぱりそうか。確認できたデータの一部が一致したから、もしかしたらと思ったんだけど……こっちはまいち精度が微妙、でも、ライネス嬢がロンドン住まいで、太鼓判を押してくれたなら、間違いない』

『……どうしてロンドンの街並みが、ここに』

『元は、ロンドンだったんだろう。でも今は世界の形そのものが違う。まるで、上から別の柄を張り付けられたみたいに、ね』

型月において、世界というのは『層』というか『織物』というか、そんな感じのものになって『地球』という物の表面に縫い付けられる形で成立しております。

『——テクスチャ、ロンドンという土地に、別のテクスチャを張り付けている、とでもいうのか……だとすれば、一体どれだけの技量やリソースがあれば……!?!』

『聖杯というチート・オブ・チートがあつたとしても、それなりの技量は必要だというのは間違いないだろう』

その世界を現す『織物』の事を……型月では『テクスチャ』と呼びます。

インド神話には『インド神話のテクスチャ』が存在し、ギリシャ神話には『ギリシャ神話のテクスチャ』が当然存在します。そもそもこの型月世界も『現実世界』というテクスチャであり、この神祕が減退した世界を引つpegがしてしまうと、世界の裏側からとんでもない者が顔を見せて来ます。

この特異点の成り立ちは、ロンドンという土地の上にそんな『別の法則のテクスチャ』を被せる事で始まった……という事になります。さて、そんなテクスチャが一部とは言え剥がれ出す、というのがどういう事なのか。紙片か、シヤドウサーヴァントか、どう関係しているのか。

そんな事より実績解除だ!! (初志貫徹)

第四十九章・裏：別勢力の影

「……ふう……いやー、ほぼワンオベだから厳しいなあ、こりやあ」

——本造院君が、突如として第四特異点から厳しいなあ、こりやあ

当然、カルデアはもちろん、藤丸君のチームも、大いに揺れた。

カルデアの二人のマスターを分断し、各個撃破する……その可能性は、十分に考えられていて、それについて対策を講じていない訳でもない。常に彼らの周囲の調査は怠っていないかった。

彼が体調を崩し、それから別方面にいったん撤退した、その一瞬。本当に雷の如くだった。彼らの奇襲は。

追跡していた彼の反応の近くに、突如として別の反応が現れて。次の瞬間には、彼の反応はその場から消え失せてしまった。

観測チーム全体、ロマニも、私も、全員が驚愕で一瞬、呆然となつて……しかし、それでもロマニの一喝が間に合ったのは、幸いだった。礼装の反応を追いかける事が可能ではない事に、気が付けた。

こういう不備の事態に対応できる様に、礼装は発信機代わりにもなるように色々細工

をしてあるのだ。

彼の反応を何とか追跡し……その足取りを、私が真つ先に掴んだのだ。

『——レオナルド、ダメだ。通信機能が機能してない』

『分かった。私がかししてみよう……あれ？』

もう一つ驚いたのは。

不慮の事故で本造院君の礼装の機能が停止している……と、思われていた時。私が通信に出た途端に、通信機能が動き出したこと。

どうやら、私が彼の反応を掴めたのはただの偶然ではなかったらしく。

という事で、本造院君の存在証明はまあ色々周りに任せられるのだから兎も角としても、彼と通信するのは私の役割になって……そして、彼の存在を唯一確認できている私が、彼をたつた一人でサポートする流れとなった。

「——しかし」

彼が辿り着いた場所——否、招かれた場所。

一体何処か、というのは未だ、カルデアの施設をもつてしても確かな特定まではしきれない。一応『そこに存在している』ことだけは証明出来てはいるのだが。一体どうやったらそんな所へ、瞬時に隔離できるのか。

相手に、相当優秀な術者がついていいのか……それとも、敵の黒幕そのものがとんで

もないレベルの術者なのか。何れにしろ、どれほどの相手なのか想像もつかない。

だが、それにしても気になるのは、本造院君の反応そのものを完全に封鎖するわけでもない中途半端な対応。こちらからのサポートを許す程度の余地。それが意図しないモノなのかそれとも……態となのか。

「――敵の別勢力かあ」

ライダー・アレキサンダーが仄めかしていた『スポンサー』。シャドウサーヴァントを提供してきた謎の組織。人理を焼却した側とは、また別勢力、といった感じの物言いをしていたが。

もし敵の目的が各個撃破なら……とつくに本造院君、または藤丸君の何方かに猛攻を仕掛けていてもおかしくない。だが、そうしていない。分断しただけで話は終わっている。

確かに、分断され、協力できなくなるのは厄介としか言えないが……しかしそれだけなのだと結局のところ。各個撃破、はされる様子が無い。藤丸君も、本造院君も結果として無事だ。

中途半端なのだ。結局の所。

こちらの脅威として見なししていないなら、そもそも分断するなんていう真似をする必要は無い。だが、こちらを脅威に思ったにしろ、分断しただけで終わらせるのも、どう

にも一歩足りない。

——では、ここで一つ、考え方を考えてみる。

もし本造院君を隔離したのが、二人の分断が目的なのではなく……そもそも、本造院君のみを目的とした『誘拐』なのであれば？

本造院君に対して、シャドウサーヴァントは明確に特別な反応を見せていた。それが一体何なのか、今まではハッキリとはしてこなかったが……今回の一件を結び付けて考えてみると。一つ、浮かび上がってくる可能性がある。

「シャドウサーヴァントは、本造院君、という個人を狙っている……であるなら、そのシャドウサーヴァントを提供している勢力が独自に動いた」

本造院君が現地で遭遇した敵……というのは、シャドウサーヴァントであるというのとは話で聞いた。やはり、シャドウサーヴァント。彼らがいよいよ本格的に動き出した、と考えれば、この中途半端さ加減も、説明は十分つく。双方、互いの都合など考えずに行動してその結果として、二人を分断する形で終わった。

人理焼却を成し遂げた側は、未だこちらを『敵』として認識しているかも分ならず、逆にその相手に戦力を提供した勢力は、いよいよ一歩を踏み出した。

現状、それが最もしっくりくる結論だ。

「——レオナルド、本造院君の様子は？」

「ん？ ああ問題ないよ。存在証明、および身体のバイタル、問題なしさ」

「そうか。なら安心できそうだ。藤丸君とマシユにも良い報告が出来そうだよ——レオナルド、君の方はどうだい？」

「サーヴァントにそんなモノは関係ないよ——と言いたい所ではあるんだけども、ここまで気を張っていると、気疲れという奴になりそうだ……それで？」

——それを伝えられたロマニは、それが本当であれば、猶更本造院君のサポート体制を万全にするべきだと主張した。

「ようやく此方でも、反応を捉えたよ……さっきの『特異点の様子が変わったからちよつともう一度観測を試してみる様に』っていうのは、間違つてなかった。しかし、これは」

「場所、やつぱり『ロンドン』だったかい？」

「ああ……信じられないけど、今、ロンドン付近に、特異点の反応が浮かび出てきた……酷く不安定で、まるで霧に投影された映像のようだけど」

「ふむ、やはりそうか」

そこで、ロマニにサポート体制を見直してもらうと同時に、私の立てた、ある仮説を確かめてもらった。どうやら、無事その仮説は当たった様ではある。

特異点の様子を探り、シャドウサーヴァントと共に現れた『ロンドン』の街並みに、魔術的な観点から、ある一つの仮説が見えてきたのだ。

——彼は全く別の場所に連れていかれたのではない。

魔術の世界には、テクスチャーという概念がある。

まるで敷物の様に『惑星』という物に縫い付けられた『世界』をそう呼ぶのだが。小規模ではあるが、それが起きたという可能性はないだろうか——そう、私は自分の頭脳をフル回転させて、考えた。

すなわち、『ロンドン』という特異点に別の敷物……『世界』を張り付け、そこに本造院君を隔離した。すなわち。

「二人は、同じ場所の……別位相に存在している、という事だね」

「全く、どれだけの無茶をやればそんな事が出来るのか。聖杯だけじゃ、こんな事は到底不可能だと言わざるを得ない」

「相応に化け物じみた術者が必要だ」

私たちは、基本として、人理を焼いた黒幕を打倒すべき脅威として扱って来た。それは今でも変わらない、が。その脅威として認定すべき対象を、明確にもう一人増やすべきではないのか、という話だ。

人理修復、という目的を成し遂げるならば、これを起こした黒幕を最優先で脅威として打ち倒す。これは当たり前前の事だ。

故に、最悪。相手の協力者程度ならば、一旦置いておいたりするのは仕方ない。そし

てこちらは常に崖っぷちだ。常に最悪、常に絶望的、常に背水の陣。例えば味方の士気高揚の為だったりとか、特異点の解決だとか、そういうのにリソースを回すことは当然と言えばそうだけれども。

しかしながら、こちらに表立って敵対する等せず。例えば、相手に戦力を融通するだとか、そのレベルに収まっているなら。敵が何処にいるのか等まで詳しく調べて打ち倒す事はしないだろう。

だが……事情も変わってくる、そんな化け物染みた相手がいるとなると。

「並行して、紙片に使われている術式の解析を進めなきゃいけないね」

「正体を見極めるためにも……か」

「そうだねえ——ん？」

『ダ・ヴィンチちゃん？ ちょっと今、一人になってるからご報告したい事が』

——そんな謎の術者が共にある敵勢力から狙われる渦中の人物が、通信の向こうの、禿げた彼だ。

「ん？ どうしたんだい？」

『さっきの紙片についての事だ。流石に全員に隠すのもアレだし……ロマニもいる？』

「ああ、いるよ。今、隣だ」

『そうかい。ならロマニに伝えてくれ。メンタルケア請け負ってくれるかって』

「ん？メンタルケア？」

『そうそう——あの紙片、禄でもない記憶を思い出させてくれたからなあ』
いったいどういう理由で狙われているのか。

もしそれが分かれば……敵の動きや正体も。案外分かってくるのかもかもしれない。

第五十章

いざ紅の都！な実況、はーじまーるよー。

衝撃の事実！ この特異点はロンドンを下敷きとして構成されていた！？

前回の調査にて、こちら辺のエリアにあるが突如としてロンドンの街並みに変身したという驚愕の事態。どうやらこの特異点が何処の場所を起点として作られたかはおおよそ判明した模様です。

ダ・ヴィンチちゃん!? これは一体……!? ダ・ヴィンチちゃんではありませんので説明はしねえ!! 要するに世界を別の世界で上書きしたんだよ!!!

別の特異点でもその舞台となった土地とは別のテクスチャを被せて自分の有利な土地にして、自分の切り札取り戻したろ、くらいの気軽さでやってたのであり得ない話じゃねえな！ 良し!!

『とはいえ、これだけの神業、何処かで無理をしていない訳がない……今、目の前でテクスチャの一部が剥がれたのがいい証拠だ。アレを剥がしきれたなら、きつとこの特異点は崩壊するくらいには、不安定なんだよ』

『そのテクスチャが剥がれるきつかけは——あの紙片の可能性が高い』

んで、そのテクスチャを張り付けている要というか。そんな感じの役割をしていたのがホモ君に大ダメージ（精神）を叩きこんだあの紙片という訳ですねえ。まあ現状それ以外の可能性が存在しないだけですけれども。

『あの後、一応、あの紙片と類似する反応が無いか、カルデアでも出来る範囲で探ってみただけど、少なくともこの竜の都には存在しない事しかわからなかった』

『逆に言えば、他のエリアにはある可能性がある、という事かな？』

『どうせ他のエリアも遅かれ早かれ巡るんだから、試してみる価値はあるんじゃないか』
『——そうだね』

という事で、次の目的地は——まあ決まっています。紅の都なんですけれどもね。問題はそこで探すべき……例の紙片になります。

『紅の都というのも、このエリア並みの大きさがあるのかい？』

『ああ。今回は偶々、運よく……いや、悪くか？ともかく、発見できては居ただけど、紅の都に関しては、本当に一瞬見かけて調査しただけ。紙の欠片なんてものが何処にあるかの心当たりなんて当然ない』

『となると……地道に探すしかない、でしょうか？』

おつ、やっぱり探索ゲーか……いつ出発する？俺も探索する。思わずホモ君も花京院化。それだと最後にラスボスの能力を見破って死んだりしませんかねえ……？（困

惑)

まあその場合は全部をやり直すくらいそう辛くもねえな!! (感覚麻痺) 赤得も都合のいい感じの赤得取れるまでやり直すんだ!! (発狂) せめて青得を取るために努力をしろ (再度反転)

という事で紅の都も地道な探索を行う事が確定しましたところで、いよいよ紅の都に向けてバクシンバクシン! やっぱりゲームなんて太く短くスプリンターの駆け抜けて行きたいですからねえ。

まあそんなスムーズに行くなら楽じゃないんですけども。まあシャドウサーヴァントちやんが居なくなつたからと言って、ワイバーン君たちが収まった訳でも無く。こっちにケンカを売ってくるのも日常茶飯事なので、彼らを狩りつつ経験値も稼いでいきましよう。

そうやって狩り潰していった結果、竜の都と紅の都の間辺りで会話が発生いたしました。紅の都突入直前の解説パートでしょうか。

『——さて、そろそろ紅の都のエリアだ。現状の竜の都と比べても……いや、たぶんそう変わらないな、危険度に関して言えば』

『ん? そうなのかい?』

『うん。ここは唯一、人らしい人が存在するエリアでもあるんだ。あるんだけど、ここに

いる人間というのが、ちよつと異常というか。グレイも若干おびえてたよ』
 『……ちよ、ちよつと、近寄りにくかったです……ホントに』

ぬあ、ぬあんだとう!? 可愛い可愛いグレイちゃんを怯えさせるなんて、クソ、生意気なガキめ（偏見） まあ間違ひなく人間ではあるでしょうけれども。という事で話している間にも、紅の都エリア——入場!!

『——見つけたぞ!』

『我らが神を冒瀆する異端者共め、殲滅してやる!!』

した途端これだよ!!!（半ギレ）

凄いつつ! めつちや!突撃して来てる!

わーここつて竜の都とやっぱり雰囲気違うねー、空気で分かるねー、きやはは、的な修学旅行生的なノリでいたというのによお……!!

そんな仲良し空気をぶち壊しにしてやると言わんばかりに気軽なワンコイン襲撃ですよ!! つたく何が我らが神だよ! 紙を寄せ!（トイレ難民）

『——ぐ、おおお……』

『とまあ、こんな感じでね——ここにいる人間達は、熱に浮かされた狂信者ばかりなんだよ。というかそれ以外がまるでない』

『ライネスさんとここに入った時も、私たちの姿を見るなり『異端者め!』と襲い掛かつ

てくるばかりで……全く話が通じなくて』

紙どころか恐怖しか寄こしてこない。なんなんでしょうね。いきなりHP半分減らしてその代わりにいきなり三段階くらい攻撃力を上げてくるとか頭おかしい（困惑）
そのおかげで一発で殴り倒せるくらいに弱々しくなっているのが余計に怖い（恐怖）

熱狂って、程々にしないとこうなるんやなって……

因みにノーマルホモ君で殴り倒せるレベルで貧弱になってます。まあ相手の一発で全てがひっくり返されるレベルの火力はしてるんですが。

まあ、この先の生存とか一切考えないレベルで火力だけに振ったホモ君と思つて貰えば。今も大体そうだって？ 失礼なことをおっしゃる、覚醒が入れば全ての能力が跳ねあがって生存率も跳ね上がるようにビルド組んでるから……（言い訳）

『こんなのばっかりしかいないんだよねえ。だから町に異物が入ってきたら即座に察知してくるだろう。町の人間が全員監視カメラみたいなものだ』

『うわあ。万能の天才もそれにはドン引き』

『お、恐ろしいですね……』

こんなお方しかいらつしやらないこの町で、あんな小つちやい紙の欠片を探さないといけないっていうド無茶な作戦。すいませーんこんな感じの紙とか知りませんかーもしもーし、なんて言おうもんなら『おっ???' 異端者か???' 認定で路地裏に連れていかれ

て壺を大量に買わされかねません。水かもしれない（恐怖）

『彼らにバレないようにするのが前提……でも潜入して調査するにしたって相当気合入れて変装とかしないとダメだろうね』

『へ、変装……ですか』

当然ながら、ここで隠密行動をせねばあつという間に見つかってしまったってピンチという危険な状況下なので。変装だとかそういうのも必要になるだろうな、という話なので。

『我々が……？』

『あつはっはっはっはっ、無理だろうね！』

因みにここ、当然ながらどんなサーヴァントを引き連れていてもこの会話は変わらないのですが……まるで狙ったかのような発言ですよ。何せ、隠密だとかそういうのを一切考えないタイプのサーヴァント様がお一人いらっしやるので……体格とか大きさだとかその他諸々考えたら……うん！ 無理だな!!

『という事で、一切の変装だとかそういうのを考えない本気も本気の隠密作戦になると思うからその辺りは覚悟しておいてくれ』

『お、隠密……！』

だからそういう作戦に向いていないサーヴァントが（ry なんだライネスちゃん、

さてはゴルゴーンさんを煽ってんのか？ 偶然だけど。完全に。偶然だけど。

『まあそれも難しいだろうとは思うけどね。しかたない……ここは人数を絞った潜入作戦と行こうか。この中でも出来るだけ、運動神経と足取りが軽い者達で、進入できそうな箇所を探って内部に潜入、各建物を調査してから、一旦撤退する』

『成程、所謂細作（スパイ）の様に探る、と』

『カルデアの皆様、経験は……まあないだろうね。任せたまえよ、スパイについては心当たりはないが、他の家からのスパイを警戒し続けてきた当主のスパイ対策講座から、逆説的にスパイを伝授しようじゃないか——君に』

という事で、白羽の矢が立ったのは私、サーヴァントではなくマスターのホモ君でございます。ナンテコツタイ……なんで素のホモ野郎が選択されるんですかね。

ここでアサシンのサーヴァントが味方についていると、その方にこの任務を任せる事が出来るんですが。んなもんいねえ!! という事で結局はマスターにお鉢が回ってまいるのです。目立って強いよりも、強くなくても目立たない方がこの場合は適切だそうで。

どうでもいいですけど、この時にぐっパイセンを選んで諜報に出すと『……なんか囹としてがんばれって言われたんだけど、どういう事?』とか言われます。うーんぐうの音も出ない名采配!!

『安心したまえ。私も鬼じゃない。甘く、優しく教えてあげよう』

と、ライネスちゃんから女教師のかほりをかぎ取ったところで、今回はここまで。果たしてホモ野郎に無事、謎の紙片は発見できるのか……ご期待ください（不安）

果

第五十章・裏：紅の圏内

「——ほんとにガラツと変わるな、雰囲気とか」

「ええ。気温だとかもそうですが。空気そのものが、全く違うと申しますか」

「面白いだろう？ 『霧』という境界線を隔てなくても、『あ、もうここは違うテリトリーなんだな』というのが分かる」

『紅の都』は、気候的には『竜の都』と大差はない……と、ライネス様はおっしゃっていました。その上で『明らかに違う』との事で。それがどういう事なのか、いまいちわからなかったのですが……確かに違います。

竜の都は、なんと申しますか、牧歌的な雰囲気か漂っていました。紅の都は何処か気温とも違う『熱』の様なもの、渦巻いている気がします。

「……それに、目の前の光景だけで明らかに違うつてのが分かる。ほれ、見ろよアレ」
「町、でしょうか」

「みたいだな。しかも……こっから見るだけでも、活気に満ち溢れてるのが分かるくらいの賑わいだあね」

その熱の元、それは恐らく……この『紅の都』エリアにのみいる、とライネス様がおつ

しゃつていた……現地民、というより、人間でしよう。霧、竜、そして海、他の三つに人間が住んでおらず、その分がここに全て集中する勢いだ、とのことだ。

しかし……あの町、というか居住地の形式は。

「——ホント、形だけならローマそっくりだ」

「なんだ、貴様。ローマなんぞ行つたことがあるのか？」

「ゴルゴーンさんはご存じじゃなかつたつけ？ 俺たちが向かつた第二特異点は、そここそ全盛期のローマそのものを救う旅だつたんだぜ。なア式部さん」

「ほう？」

「は、はい。ですから、あの町並みは、私にも覚えがあります」

建築された建物や、住んでいる人の服装。その全てが、嘗て我々が向かつたローマの街並みのそれに、実に酷似しているのです。向こうのあの牧歌的な雰囲気、何処かオレレアンを思い出させるものであつただけに、今度はいきなりセプテムが如き光景。

移り変わる景色があまりにも激しすぎて、ここが同じ土地である、というのを忘れてしまいそうになるくらいです。

「ローマ、ねえ」

「ローマだ」

「——彼らがローマの軍隊だとして」

「……軍隊？ いや、俺たちが見てるのは町なんだけれども」

「いったい誰を崇拜すると思う？ ローマの専門家のお二人。ほら。来てらっしゃるよ団体様が。信仰を叫びながら、さ」

——そんな風に、のんびり街を見ている場合でも、無かった模様で。

はっ、と気が付けば町からこちらに向けて向かってくる土埃……そこから聞こえる雄叫びの様な声が近寄って来ていました。しかもそれは意気を上げるための魂からの咆哮ではなく……寧ろ、怒号と申しますか。敵に向ける声と申しますか。

「も、物凄い数が……来てらっしゃい、ますね」

「ちよ、なんであんな急に突撃してくるんだよ!? 俺たち、まだ何もしてないぞ!」

「私たちがここに来た時もあんな感じだったよ。どうやら、彼らは相当に『異端者』の匂いに敏感な様だね」

異端者、という言葉がどういう意味を持っているのか。何となく、少しずつ声が聞こえてくる度に分かって来ます。喉の奥から上がるのは、ただ一つ、熱狂。すなわちは……信仰にも似た声でございます。

我らが指導者に仇成す者に死を。

ひと際高らかに上がった声は正に、自らの胸に燃える信仰を謡うもの。自らの狂気を以て我々を殲滅する為の……だとすれば絶対に危険なのですけれども！ あの、あの方

たち確実に目が、目が血走つてらっしやいます。

「うわあ……」

「マスター。アレはエネミーだ。薙ぎ払つて良いな」

「い、いえ、薙ぎ払うのは些かと……マズい、のではないでしようか?」

「ふううううううう——うん、やって良いわ。頼みますゴルゴーンさん」

「マスター!」

とはいえ、彼らを真つ向から薙ぎ払うというのは……と、思っていたのですが。マスターが容赦なくゴーサインを出してしまいました。紙片を探すのに、聞き込みなどもないといけないというのに、あの方たちを焼き尽くしてしまうのは、些かと!

「心得た……」

「いや心得たじゃないよ」

と、思っていた所、私より先にマスターにびしつと物申したのは、ライネス様でした。

「えーダメ?」

「ダメに決まつてるだろう。殺さずに程々に追い返さないと。私たちはこれからあの中に潜入するんだよ?」

「——えっ!? せんにゆう!」

「ああそうだ——という事で、先ずは、彼らを適当に追い払つてから、話をしようじゃない

いか。諸君！」

とはいえ。マスターを止めた事よりも。さらに気になる事を、ライネス様はおつしやつて来たのですけれども……せ、潜入？

「——ぐ、おおお」

「むねえええええん」

「もうしわけない……」

という事で、目の前に積みあがった、兵士の皆様。誰も死んではおりませんがしながら、死屍累々としか言えぬようなありさまです。ゴルゴン様に真つ向から挑んだのですからそれは、当然と申しますか。ハイ。

「とまあ、こんな感じだね——ここにいる人間達は、熱に浮かされた狂信者ばかりなんだよ。というかそれ以外がまるでない」

「ライネスさんとここに入った時も、私たちの姿を見るなり『異端者め！』と襲い掛かってくるばかりで……全く話を通じなくて」

「なるほどなあ。グレイちゃんが怯えた、つてのはこういう訳か」

「道理、と言えば道理です」

しかしながら、困りました。

この『紅の都』で紙片を探す、というのであれば、彼らの様な物凄い熱量を持った方々の目を掻い潜って探さねばならないとなると、少し難しくなってくる気がするのですが。しかし、ここで気になってくるのが。

「もしかして街にいる人たちも……ですか？」

「おつ、そちらのご婦人、勘が良いですね。大正解だとも」

……訂正いたします。たぶん、とつても難しくなつたと思います。

「こんなのばつかりしかいらないんだよねえ。だから町に異物が入ってきたら即座に察知してくるだろう。町の人間が全員監視カメラみたいなものだ」

『うわあ。万能の天才もそれにはドン引き』

「お、恐ろしいですね……」

人の目というのは、恐ろしい物です。

こつそりとして行っていた筈の逢引きが、たった一人の奉公人の何てことない酒のつまみとして酒宴の中で上がり、そこから失脚していったお方がどれだけいた事か。

人の目を完全に欺くことは……不可能、とは言えないのかもしれませんが。私自身、そういうった手管に詳しい訳ではございませんので。ですが、それがどれだけ難しい事なのかは臆気ながらにも……

「彼らにバレないようにするのが前提……でも潜入して調査するにしたって相当気合入

れて変装とかしないとダメだろうね」

「へ、変装……ですか」

だからと言って、それを成す手段にも向き不向きという物は存在するとは思いますが。いえ、決して私はゴルゴーン様の事を申している訳ではなく。なので、この後ろから漂ってくる無言の圧力は……あの、そのですね。ただの気のせいだと、思いたいです。という事で。

「——俺と、グレイさんかあ」

「あ、あの。ライネスさん。拙で大丈夫なのでしょうか。その……潜入、なんてあまり得意ではなくて。目立たないのは、そこそこ自信はあるのですけれど……それとこれとはちよつと……」

「大丈夫だ。なんとでもなるさ。君はもうちよつと自分に自信を持ちたまえ——つていうのは建前で、君たち以外に隠密が出来そうなのが居ないんだよね。だから、ごめん」
「そんなあ」

……という事で。

マスターと、グレイ様が町への侵入を行う事になりました。

ライネス様、私は運動神経が良いとは言えず……かといって、ゴルゴーン様はどう足掻いても目立ってしまうのは避けられず。なので、消去法で選んだ結果ではございます

が、ハイ。

一応、気配を隠す護符だとかは作れない事も無いので、気休めにしかならないかもしれませんが、お渡ししてあります。が……グレイ様はあの、兎も角、マスターは、ちよつと、隠密には。ちよつと、あの町に混ざるのには、あの、ガラが悪すぎると申しますか。

グレイ様と並んでしまうと、もう……

「はあ、じゃあま、行こうかグレイさん。短い間だけど、よろしく」
「よ、よろしくお願いします」

……完全に、非常に申し訳ないのですが。

「婦女子を誑かすジャパニーズ・マフィア」

「言わないでおいでいたんですけれども！」

明らかにマズい光景にしか見えなかったのです。本当に。

第五十一章

忍びねえな……な実況、はーじまーるよー。

さて、前回無事に隠密も変装も絶望的だけど、まあせめて隠密の方がましだよね、という結論に至りました。グレイさん以外は全員お留守番、ホモ君とグレイちゃん二人での単独隠密潜入で『紙片』の反応を探るとかいうド無茶もド無茶な任務を任されてしまいましたとさ。

成程、目立たない様にしないで偵察を行えとはっはー……出来るかなもん!!!（半ギレ）こちとら日光照り返すサーチライトみたいな頭してんだよ!

と、普通ならプチ切れるでしょうがこのゲームでは見た目だけヤクザでもベッドヤクザでも問題なく隠密だろうが探索だろうが全然できるので安心! 見た目はあくまで見た目でしかないから……（真理）この世界の住人の皆様は、探索中だけはプレイヤーにお慈悲を下さっています。あ、ありがてえ……!

『……は、入り込むだけでも一苦勞ですね。凄い勢いで周りを睨んでらっしゃいます皆さま……睨んでるといふか、血走ってましたけど』

因みにんな事は全くもってなく、ホモ君とグレイちゃんが馬鹿クソ頑張って潜入して

るだけなんすけどね。ゲームでも探索エリアを一回探索して進入路を発見する処から始めて何度か周辺を探索すると、ようやく内部の探索が出来るようになるというこの徹底具合ですよねえ。

という事で、何回かの探索の後に潜入できたわけなのですが……

『我らが滅び、我らが望みよ——』

『偉大なる滅び——文明の破壊者——』

『来たれ、来たれ、我らの元へと——』

SCPでも感染してらっしやったりする???(恐怖) みんな笑顔でなんかを……なんか崇めてるう……何を崇拜してらっしやるの……誰に対して五体投地で頭を下げていらっしやるの……? 怖い……

とまあ、町の様子はこんな様子でございますよ。

ここには狂信者しか居やがらねえ!! こんな奴らの中で大人しく潜入作戦なんかしてられるか!! 俺はさっさと探索して帰るぜ!!

『やっぱり、建物を一つずつ、しつかり検査するしかないんでしようけど、これだけ人が居ると……大変ですよね』

『いやあ、建物一つをスキャンするのもそれぞれなりに時間かかるから、頑張つてとしか』
しかしそんな事は出来ず……ダ・ヴィンチちゃんが建物の近くに行ったらカルデアか

ら頑張つて搜索してくださるそうです。ちなみに探索能力は現状クソ雑魚ナメクジなので建物に張り付いてしつかり探索しないと効力を發揮しないそうです。おのれえ………！（英雄王実装）

『しかし、この景色、そしておかしな熱気は——思い出すねえ』

『ここ、この町の景色を見て思い出すんですか？』

『うん、私たちと敵対してた側のローマがこんな感じだったね』

『そう、なんで——あ、あのすみません、その言い方だと複数ローマがいらつしやる様に聞こえるのですけれど』

『私たちが戦つてたローマを合わせて二つくらいしかないよローマ』

『二つあるんですか!?!』

グレイちゃんの驚きも無理もない。ローマって普通一つしかないんですよ。二つあるってことはそれ『内戦』とかそういうのが確定つて事ですからね。そりゃあ特異点というものを微妙に理解しきれてないグレイちゃんも驚く。

とはいえ、ダ・ヴィンチちゃんに言われてみると、実際、連合側のローマにそっくりですよ。この人たち……マジで信仰力極振りみたいな事になってます。となるとここにも神祖みたいな方がいらつしやるのでしょうか。もしやと思いますがグランドラッサー神祖ご降臨クルー？ そんな相手に勝てるわけないだろ！ 難易度異聞帯レベ

ルじゃ!!

『さて、そんな紅と黄金に彩られた、ローマ臭さ溢れる町……紙は一体何処に落ちているのやら』

という事で探索開始いいいいいい!!

似非ローマ町を探索して、紙片を発見すればクリア!! 偶に発見されたりして市民が襲い掛かってくるけど、速攻で倒せば大丈夫!! という事で、いい加減にそろそろとって置いた青得が仕事してくれと思います。

今回取った青得は、覚醒した際の爆発力を高める為の『捨て鉢の覚悟』です。覚醒を発動した後一ターンまで能力が瞬間的に更に上昇するバフ系のスキル。

そして、神秘を磨いて覚醒が進化していくと、並んで進化するスキルでもあるので、とって置いて損はないスキルの一つになりますねえ!! まあ現状は二ターン目以降は元の出力に戻ってしまうので本当に最初だけのドーピングスキルなんですけども。

まあ瞬間で敵を倒さないといけない今回に関しては実に使い勝手のいい能力です。最初だけならシャドウサーヴァント君達にもキツチリ張り合えるレベルになりました。流石第四特異点(偽)にまで来たのですから強くなつたなあ……

『——うーん、ここら辺は調べつくしたんだけど、反応はないね』

『そう、ですか……』

という事で、偶に現れる市民の皆様に当身！（強め）をして眠りの世界に旅立ってもらって、おおよそ市内を地道に探索しつくした結果は？

『凄いな！ ここまでしつかり探して何の手ごたえもない！ 市内にはない、と断言できレベルで空振りだったね！』

『そうですね……それこそ、あの……おトイレとか、その辺りまで、頑張つて探つたんですけれども……』

『間違えてケツを拭く紙扱いされてても実に最悪だけどね。もしそうだとしたら、ミソついた紙を拾う事になるから』

『……うう』

何を話してるんですかね？（困惑）

まあそれは兎も角として、結果としては何の成果も……得られ（ry

こんな事だろうとは思つてた。そんな街中であつさり見つかるようなものじゃないでしょう流石に。後ダ・ヴィンチちゃんと言つてた通りの所で見つかつたら即座に捨てるレベルですのでむしろ見つからない方が良かったまでであつた……？

さて、町中不在ののなら、という事ですが。

『しかし、ここらへんでまだ探索してない所はある』

『は、はい。町の皆様がちよくちよく話されていた……』

『王宮。そこにある可能性を捨てちゃいけない。次は王宮に行ってみるとしよう。こつそりね』

はい、まあそりやあローマ風の街並みなんだし王宮ぐらいあるやろ！ あとなんか町の皆様が信仰つぽい事をつぶやいてらっしゃるし、その対象もまだ出て来てないし。それが居る場所がそこなんだろうな、うん!!

探索を続けた結果、マップに新たに王宮が出現。ここを探索すれば、恐らくは紙片の反応も出てくると思われまます。という事で、探索開始!!

『うーん。王宮、っていう割に警備はガラガラだねえ』

『はい。人も、いらっしやいません』

『そしてもう一つ。紙片の反応を見つげる前に見つけちゃった反応……これ、シャドウサーヴァントだと思うよ。それも、相当に強い反応を示してるよねえ』

そして見つかったのは紙じゃなくて敵っていう。

ここにサーヴァントは居ねえのか!? シャドウサーヴァントしか居ねえのか!? と思います、居ないもんは仕方ない。とりあえず、どちら様のシャドウサーヴァントか見てみるとしましょうか。

『——』

『……何やってるんだらうね、アレ』

『えっと、分かりません。たくさんの方が、一人を囲んでいるように見える、のですけれども……』

いるう！（怪談師）

シャドウサーヴァントを中心に何人も何人もいらつしやいます。ざわざわしてんねえ道理でねえ。皆でとりあえず囲んで、一体何をしようとしていらつしやるのか。

『おお我らが滅び！ 全てを滅ぼす力よ！』

『滅びを！ 滅びを！ 平等なる滅びを！』

『全てを灰燼に！ 悉くを塵芥に！ その力を示したまえ！』

うげつ、気持ちわりい、やだオメエ……!? 怖い（コナミ） 崇拜してんのあのシャドウサーヴァントを!? 見た目からして明らかに黒い瘴気とか纏ってらつしやいますし滅びを祈ってらつしやるし、あの、魔王崇拜でもしてたりする？

なお中心のシャドウサーヴァント……ちゃん？ かな？ これを事も無げにスルー。というか反応すらしてませんねクオレハ……

『……』

『気持ちはわかるけど、問題はそこじゃないよ、グレイちゃん』

『えっ？』

『あの中心のシャドウサーヴァント——覚えがある。アレは第二特異点の最後、ローマ

に召喚された、あの正体不明のサーヴァント……強さは、君も嫌というほど覚えているだろうか？ 彼女と、反応のパターンがそっくりだ。こりやあ難敵だよ』

——はい。

という事で、敵に崇拜されているシャドウサーヴァントが一人。

その元モデルと思われるのは……エクステラにおいて恐ろしい設定が明らかになりすぎたとんでもないサーヴァント、フン族の王、アツティラ——型月においては、アルテラとなります。

第五十一章・裏：探索の中で

「——ん？」

「どうした？」

「いや、今、そのの兵士二人に違和感があったような……」

「オイオイ、何言ってるんだ？ 我々の仲間を疑うなんて、不敬になるぞ」

「おおつとマズい。申し訳ありませんが偉大な神よ」

——先ほどの熱狂とは、全然違いますけど。やっぱり、ちよつと……怖い、です。

何人も何人も、こつそりと物陰に引き込んで気絶させて。そのままに放置……今もバレないか、肝が冷えました。今見ていた兵士の方も、拙と……隣の、ホンゾウインさんとで気絶させた後で立たせておいた……というか、置いておいたというか。

ともかく、バレたらとんでもない一大事の瀬戸際に今、私たちは居ます。

ライネスさんは『君なら大丈夫』と言っていましたけど、正直……自信はありません。

「……」

「——っし、こっちは大丈夫、つと……グレイちゃん、そろそろ行こうや。のんびりしてると見つかつちまうし。なあ……グレイちゃん？」

「あつ、す、すみません。行きましょう」

それは……当然、拙が自分自身を信じられない、というのもありますが。もう一つ。隣の彼と比べてしまうと、自分がより拙く見えてしまうと申しますか。

「……あの」

「ん？ どないした？」

「こーういった事、慣れてらっしやるんですか？」

「こそこそ移動する事、つていう意味ならYES、かね。気配を気取られたらあつという間に逃げられる事だつて多かつたし」

「逃げられる？」

「山の獣。ウチの山の獣が下手な事したら責任は俺に来るわけだし」

「うちのやまのけもの」

ホンゾウインさんは気配を殺し、そして静かに移動する事にも慣れていきますし。そして一瞬の隙に相手の懐に潜り込んで、殴り倒す。その動きも迷いがありません。有体と言えば、その。プロに見えます。

というか、自分の山つて何でしょう。ライネスさんからも、山を所有してる、つて聞いたことありません。お金持ちなんでしょうか。

「あー……なんだ、山を見回つて、あんまり人里に行かない様に、何処通るとか見極めて

色々、柵とか置かないといけないうだけ。その時に、下手に気配丸出しだと、警戒した獣に噛みつかれるとか、ざらでさ」

「け、気配を消すのは、それで慣れてるんですか」

「そんな感じ、かな」

獣に比べりやあ人間の感覚誤魔化すなんざちよろい、とはおつしやっていますが。そのちよろい、の基準が可笑しい気がします。獣の五感というのは、野生の中で自然と研ぎ澄まされているのです。墓地に迷い込んでくる獣には、近場のモノだけではなく、意外と遠くから死体の腐臭を辿ってくるモノもいるのを、墓守として良く知っています。

この本造院さんは、獣の感覚を誤魔化せる程度には彼らに慣れてる、とさらりと言いますけれど。それは普通に、凄い事だと思えます……ただ、ですが。

「いやー山の中で気配を殺すのって、割とむずいんだよなあ。この感覚分かる？」

「えっと、分かります」

「そっかあー。いやあ誰もわかってくれないんだよねえ。山に一回入っちゃえば全然分からなくなっちゃうとか無責任に言う奴がいてさあー」

彼のそれは、ちよつと違う気がするのです。

私も、墓守の仕事は……真面目にやってきたので、墓場を荒そうとする獣を追い払っ

たり、こつそりと捕まえたり、とやって来ました。なので分からない訳ではないのです。獣相手にどうやって気配を誤魔化すか。

ですけど、私の見る限り、ホンゾウインさんのそれとは……ほんのちよつとだけ違うと申しますか。私のやっていた方法が正しいか、それは分かりませんが。

あくまで私の主観ではありません。あるのですが。違和感があるのです。言葉にしようとするの難しいのですけれども。

本造院さんのそれは、獣の経験を人に生かしている……というよりは、人を相手にする事を前提として、動いているように見えるのです。

「——ん？ どしたん？」

「あ、いいえ、何でもありません……行きましょう」

「おう？」

ただ。もし、そうだったとして。どうして対人の経験があるのかは、全くもって想像もつきません。彼は、あくまで日本に住んでいるハイスクール生だという事だったので。平和な国の学生さんに、人を相手に気配を殺して動くような経験など、必要だったのでしょうか……はっ!?

「……ま、まさか」

「なんすか一体。なんでこつちを見る」

日本の……その、そういう、文化というのは。海外のそれよりも進歩している、と聞いた事があります。卑猥な形をしていた、とか、そういうレベルじゃない程に。

男の子、というのはそういうのにとつても、とつても、敏感、と申しますか。熱を上げるといふのを、ライネスさんが口にしていた事もあります。師匠は物凄いい顔をされて、否定されてしまいましたけど……も、もしやですが。

浴場を……!?

そ、それを繰り返したせいで、自然と磨かれていったという可能性も……!?

い、いえあまりにも失礼な想像だといえばそうなんですけどそういうのに敏感なのは男の方としては普通というか!

「あ、あわわわわっ」

「……なーんかエゲツない誤解されてる気がするなあ!？」

誤解だったようです。

「残念ながらご期待には沿えないつすよ……覗きなんてした事ないし」

「そ、そうなんですか。残念じゃないですし、喜ばしい事だと思えますけど」

「……獸相手より、人間相手にこつそりする機会が最初に来てたから、体が覚えてるだけなんですよ。いや、真面目に」

仕方ない、という風にため息を吐かれてしまいました……本当に申し訳ないです。不埒な妄想をしてしまった挙句、それを表面に出してしまつて。無礼でしかありません。本当にごめんなさいというしかありません。

「実家でちよつち、かくれんぼをする事が多くて」

「かくれんぼ？」

「うん。あらゆる大人の目を掻い潜つて、一切バレる事もなく、実家からそつと抜け出すレベルのガチガチかくれんぼ」

「そ、そうなんですか」

それはもうかくれんぼとは言わないのではないのでしょうか、と思ひますが。

「案外楽しかつたぜ？ 目の色を変えてこつちを探し回る奴を虚仮にしながら逃げ切つてやるのはさ。うけけけけ」

「えつと……ご、ご家族から隠れるつて、どういふ」

「……あー、いや普通に考えれば特殊か？ その環境は」

「えつと、それは特殊かと思ひますけど」

私も、家族……とは、多少なりとも、特殊な所はありますけれども。ただ家族の搜索を本気でかくれんぼで振り切つて逃げ切つた事は、流星になかつたのではないかな、と思ひました。

ホンゾウインさんが『そういえばそうだった』と言っているのが……若干、認識がズレているのかな、と思つてしまつて。

「ちよいと家族とは折り合い悪い、つていうか。いや逆に良すぎたのか……つと、こつち見たな、ストツプ。その物の陰に」

「えっ?」

思つていたら、いきなり手で制されて。ホンゾウインさんは、大通りに続く道からその向こうを睨んでいます。見つかったのか、と声を潜めて問いかければ、そうなる一歩手前だったという答えが返つてきました。

「つたく、足音も衣擦れも、出来るだけ最小限にしてるつてのに、どんな嗅覚してやがるんだか……変態共め」

「ど、どうしてわかつたんですか?」

「一応、こつちに視線が通りそうな場所に人が居るかは、チラつて見てるから。案外分かりやすいんだぜ、怪しい物を見つけた、つて思つた人間の反応つてさ。だから、本当にチラつて見るだけでも、気を付けてれば、見つけられる」

当然の様に言つて、再び動き出す姿は頼りがいがあります。

ただ。それと同じくらいに、もし彼の言っている言葉が本当なら、少し、物悲しい気がします。必死になつて家族から隠れていたことが、役立っているというのが。

どうして、家族からそんなに必死になって隠れなければならなかったのでしょうか。

「……？ どしたん？ 行こうぜ」

「あ、はい」

……自分と同じとは、思いませんけど。

何時か、彼の家族のお話も、聞いてみたいとは。思いました。

第五十二章

黒歴史が来るぞ！ な実況、はーじまーるよー。

本当にさ、文明を破壊するおねーさんはさ……第五特異点とか、その辺りのレベルだつて何度も何度も言ってるだろうが!!!（言つてない）存在としてのランクがマジでトップサーヴァントであつても若干霞むレベルの怪物なんですよ。後に明かされた設定から考えると。

あのギル様（ノーマルモード）であつても、間違いなく絶対に勝ちきれるとは言い切れない怪物が、一体どれだけいるというのか。その一角ですよ。彼女は紛れもなく、個の極致の一角なんです。本当に。

『もし、あのローマに現れた英霊を本当に模して……出力だけでも模倣に成功していたのなら、難敵、なんて生易しいレベルじゃない』

『かのカルデアであつても難敵と言わしめる程の敵か。竜の都のシャドウサーヴァントよりも厳しいかな？』

『正直な話、本当にあのままの強さなら、こちらの方が圧倒的だ』

『耐久性とかアレも大概だと思っけどね。それ以上だとしたら、確かに脅威以外の何者

でもない』

さてそんな存在のシャドウさんが、どうやらここに君臨……あれを君臨って言っているのか。完全に偶像崇拜の為の銅像みたいな扱いでしたけど。宮殿みたいなのところに立っているだけで。

とはいえ、現状本調子ではないカルデアの調査装置ですら『ヤベーです』という評価を叩き出すレベルの存在です。そこに立っているだけでも大型兵器と同等の脅威ではないのが厄介この上ない。

『しかも……反応は、ここを指し示してる』

『紙片は宮殿の奥、つまりはその黒い影の後ろに置いてあるという訳か』

『こつそり回収、なんて甘い真似を許してくれたりは……』

『『しないだろうね』』

『そうですよね……』

しょぼんとしている式部さんものっそい可愛い食べちゃいたい食べるね（悪業顕現）
唐突な異常性癖は兎も角として、実際式部さんも渋い顔になる事態。

要するにあのクソ強シャドウサーヴァントちゃんが紙片を守っているという事です。
じゃあ貴方……もうあきらめた方が宜しいかと思えます（気弱） 諦めんなあ!!（躁鬱）
ともかく、とんでもない最終兵器に紙片を守らせています。こつそりいただくなんて

ムリムリ！（先取りSON） じゃあ真っ向からの力押ししかない訳ですが……とはいえあれだけの化け物相手です、せめて数において負けている状況だけはどうかしたい所ではありますねえ！

『……ふむ、流石にこのままではどうしようもない——そろそろ出て来てもらおうか』
『出て来てもらおう？』

『ああ。私に力を託した英霊は、別に消滅したわけじゃなくて。私の中にちゃんといんだよ。真名はまだ明かさないらしいけど、だったら知恵の一つでも貸してもらわねば。体を貸している甲斐が無い』

それをどうにかするには、間違いなく策が必要になつてくるでしょう。

さて、そんな状況をどうにか整える為の存在がブレインという物。ここで、ライネスちゃんに力を貸しているというブレインタイプの英霊に、そろそろお力を貸していただくことにいたしましょう。

『という事でちよつと代わってもらおうぞ——あ、おい、待て。ちよつと代わるではないぞ待て、ライネス嬢!!』

『……もしかしてもう代わった？』

『……代わった。派手に姿等が変わらんと、そうそうご期待には沿えん』

はい。このライネスちゃんの目の光が死んで『なんだこのレ○プ目!?!』と勘違いしそ

うな状態になっているのが中身のサーヴァントとの交代モードです。見た目は誤解しか生みませんが、頼りになるのでお力をお借りしましょう。

『まあその代わりだが、俺の知恵も多少は貸す。とはいえあつと驚くような奇策は期待するなよ。真つ当な策しか出せん』

『ほう。ライネス嬢の中にいるのは、知恵者の英雄なのかな？』

『特別な事はしていない。ただ当然のことをやって当然の様に勝つだけ……今回も最終的には、真正面からぶつかる事になる』

さて、そんなライネスちゃんの中の人の人のお力を借りて、先ずはどうやって相手を攻略するのかという話で——えっ？ 真正面、力押し？ うそでしょ、それを策と呼ぶ貴方って本当に例のお方なんですか……？

『といつても、本当に真つ当な正面力押しをする訳じゃない』

『というど？』

『如何にして『勝てる』状況に持ち込めるか、それがこの策の基本だ。十全に準備を整えて十全に勝つ。事前の仕込みで、相手に一切の有利を取らせない。大層な事は必要ではないと思うがね』

おつ、間違いなくご本人だ！（掌返し）

という事でここから紅の都内の紙片を回収する為の作戦タイム。既に作戦は進行中

なんだよ！（兄貴イーっ!?）因みに作戦内容とかはまだお楽しみ模様です。そんなに内緒にすることないでしょうに。

まあともかく、探索を進めて準備を進め……それから作戦決行の日取りに――

『ふむ、敵地はいつも通り。晴天の元、狂乱の坩堝。これならば我が策も容易く嵌るだろう――という事で、また私だが。問題ないようで良かった』

そんな簡単にひよいひよい人格を入れ替えないで（困惑） 凄い光も無い怖い目になつてるところからいきなり小悪魔スマイルの似合うライネス嬢に戻られてもこつちとしては受け止め切れないから。

まあ何はともあれ、決戦の日取りと――

『後は、私たちがカルデア側も作戦通りに……って、言ってもまあ、やる事は猿でも出来る事ばかりだから、余裕でこなせないとねえ』

『そうですね』

『うう、緊張します』

あいなりました!!!（電撃作戦）

スピードこそ一番。既に準備は整ってます。後は準備をぶつけるばかり、という様子なのでしょうけど、こつちはその準備が一体何なのかもさっぱり分からないんですけれどもはい。

『では先ず——派手に暴れて騒ごうじゃないか』

『相手は轟音に怯え、気を離れた猪突の如し——周りも何も見えていない愚か者、だつたつけ？ 彼の言い分によれば』

『そうだ。後先を考えないなら、これが一番の作戦だつて』

『自信満々つて感じだったよね。よーし、始めよう！』

さて何をしろ、というのか——えっ!?

あの、いきなりライネス嬢とグレイちゃんが敵に回つてバトルが始まったんですけれどもすいません、一体どういう事なんですか!?! 何もわかりやせんのですけど!?! と、とりあえずやりましょうか——えっ、いきなりライネス嬢が『派手に行こうじゃないか』とか言いながらグレイちゃんかと自分に先行でバフ掛けたんですけど。ガチバトル!?! と、とりあえず、お二人相手の初戦闘となります。

えっと。ライネス嬢とグレイちゃんと戦う時の注意点ですが——ライネス嬢のスキルは基本的に自分と相手のチャージを増やす効果があるので、チャージ三で宝具の回転数がやばいアサシンがさらに宝具の回転数を跳ね上げて来ます。

というか優秀なサポートがいる時点でアタッカーが二倍近くの出力を吐き出す事は確定なので通常攻撃も痛いです。

そしてグレイちゃんですが、こちらのゴルゴーンさんと同じ、前衛後衛何方もこなせ

る器用なタイプ。正し、こちらは後衛になると些か攻撃性能が落ちるのですが……それでも厄介な事には変わりありません。こちらは何方もこなせるゴルゴーンさんを活かしてグレイちゃんに対応していきましょう。

で、片や一方、厄介なサポートであるライネスちゃん。防御アップ、無敵付与、宝具チャージを頻繁に一段階上げてくると、味方だと頼もしいのですが、敵に回ると厄介この上ないです。

とはいえ、グレイちゃんのサポートに徹して、先ず一切攻撃は行ってこないのが最大の救い。そこを突いて、一気に攻め落としていきましょう。

『——よしっ、これだけ暴れば十分だろう』

『反応する、とは思うけど』

『昨日は進入しただけでアレだけの過剰反応したんだ。気づいてもらわないと——と、反応ありだ、聞こえるだろう……?』

……雄叫びの様なSEが聞こえます。どうやら、敵の軍勢が来ているようですね。待つてください敵の軍勢引き寄せてないか!? コレ!?

『かかった! 後は野營地を放棄して後ろに回り込むだけでいい』

『ひ、引つ掛かるでしょうか……アレだけ我々を敏感に察知していた人たちが』

『普通ならかからない。だけど、一度敵を補足した彼らは今、敵を殲滅する事しか頭の中

にはない。だから引つ掛かりもする。後は、我々が彼らが我々を探すのを諦めて戻ってくる前に、都を叩くだけだ』

敢えて目立つ動きをして敵を引き付け、その隙に後ろに回り込む。すつげえシンプルな作戦だな!! とはいえ猪突猛進の敵にはこういう簡単な搦め手が一番引つ掛かる模様ですね。

さて、この隙をついて、いよいよ都攻め、というより紙片の回収作戦です。上手いくといいですなあ……

第五十二章・裏：むかしがたり

「——分かんねえなあ」

作戦決行は明日。夜は、町から離れて野宿。

因みにマスター以外は、サーヴァントとして現界したので、何か特別寝具等は、必要ではない、のですけれども。

ちゃんと寝床が無いと精神的につらくなる、見ている自分も、きつと私たちも、とのマスターの意見により、マスターたちが盗み出してきた毛布、というか、布にくるまっしております。ゴルゴーン様以外は。

とはいええそれを言い出した当人であるマスターは、起きていらつしやいますが。見張りと言つて。私はマスターを放っておくわけにもいかなないので、毛布にくるまっつて、一緒に起きています。

「何が、ですか？」

「……町の奴らの様子、見たろ？」

「ええ、はい。凄い熱気でしたね」

「俺は町の中に入って、熱気の中身をより近場で体験したけど……人間ってなんであんな

なにおかしくなれるんだと思う？ 式部さん」

そんな中で。マスターは、空を眺めながら眩くのです。ぽつり、と。

顔の横、揺れる焰と落ちる陰が、マスターの表情に力が入っていない様に……疲れているようにも、見せています。

実際、あの町から戻ってきた後のマスターは、疲れた、とは申しませんが。しかしながら何処か暗い影を落としていた様な。そんな顔をしていたので。

直ぐにお休みにならなかったのも、それが原因、なのででしょうか。

「おかしく、とは——一体どういう事なんでしょうか」

「まるで自分の意思なんてないみたい。皆、同じような事をさ。笑いながら唱えるんだよ。狂信者っていうのはああいうのを言うのかなあ」

「……狂信者、ですか？」

「ああ、少なくとも俺は理解したくはない類の、ね」

——狂信者、というのは、目を見ると分かりやすい。

という言葉からマスターは話を始めました。

目が、普通の人と全然違う。素人でも分かる。濁っている、という訳ではなく。寧ろ澄んだ目をしていることが多いのだと言います。

そして、透き通ったその目は不自然な程、キラキラしているのだそうで。

例えば、子供がおもちやを見て目を輝かせているのとは、違うのだと言います。目は輝いていても……その瞳は、何も写していない。まるで、ガラス玉の様である、と。

純粹、という言葉とは明確に違う。無垢などでは決してない。
例えば。

もともと持つている色を無理矢理抜いて、透明にする技術、という物が当世には存在するそう。彼らは、それに近いそうです。

自分たちの持つていた、悩みも、展望も、全て『信仰』という物で抜き取って、透明で純粹で、綺麗になろうとする——どれだけ歪な事なのかから、目を逸らしながら。「程度つてもんはあるけど——町の中に居た奴らは、一番見覚えがある感じだった」

「見覚え？」

「新興……でもねえか。カルト的な宗教に触れ合う機会があつてね。その信者共の目とそっくりだったよ、あそこにいるやつらは。って、カルト、ってそもそも知ってる？」

「詳しくは、知りません、概要は……」

「聖杯が、ね。便利だなあ聖杯」

めちやくちやばい奴ら、つてくくりで大丈夫、とはマスターは申しているのですけれども。とてもそれだけ、には見えない程に、マスターの表情は冷たく、無表情で凍り付いていて。

そういう奴らの中に居るように見えたのだと、マスターは言います。

町中を歩いている市民たちは……まるで目の前の現実を見ているようには見えず——熱に浮かされて、夢の中に居るかのようにならなくて、目を煌めかせていた。異様だったのは全てが、その表情を崩さないまま、ふらふらと歩いていた事。

その全員は、自らの信仰、というか。信じたものに溺れていて。自らの意思で、現実から目を逸らして、正気を放棄しているのだ、とマスターは言います。

「現実も、周りも、なんも見えてないから、好き勝手に迷惑をかけてくるんだよ」

「……それは——」

「もちろん全部実体験。凄いぜ、無駄な情熱とかさ」

「む、無駄ですか」

「無駄以外の何者でもないよ？ アイツら、俺らがどんなに『お前たちは迷惑だ』って言っても聞く耳持たないからなあ」

けらけら。けらけら。

笑い声が、暗い、星の瞬く綺麗な夜空に響いて。でも、マスターはまるで笑顔を浮かべていなくて。それが……マスターの淡々として、熱の無い語り口、他の音の一切ない空間の中である事が。異様な程に、真つすぐに耳に届く。

それこそ、不気味なほどに。

「……」

「嘘だと思ってる？」

「いえ、そんな事は……」

うそだとは、思いません。

そう、不気味な程に——その語り口には、真実味がある。迫力がある。腑に落ちる様な感覚があるのです。おおよそ、若いお人が語る内容ではない事が。

晴明様が、稀に宮中での『諍い』の話をしてくださることがありました。

貴族様が。女官たちが。文官の方々が。他の陰陽師の方々が。宮中というのは、人々の交わる場所。そこに顕れるのは、人の闇も、光も、幾つも幾つも、現れては消えて。

そして……その最中には光と闇とが交わり、また、光と光がぶつかり合い、若しくは、闇と闇とが食らい合い……その結果として起こる『諍い』。

その深淵の深さたるや。下手な怪談話など、欠伸が出てしまいそうになるほどの恐怖と悍ましいものに溢れていたのを、覚えています。

マスターの表情は——笑顔でそれを酒のつまみにしていた、晴明様を、思い出させるのでございます。正反対で、似通ったところなどどこにもないのに。

「実体験なんだから信用してほしいけどなあ……じゃあ、一つ昔ばなしでもしようか？」
「昔ばなし、ですか？」

「ここまできると意地になっちゃつてき。信じてほしい訳でも無いんだけど。一つの暇つぶしつて事で。どうだい？」

「見張りの最中なのに、暇つぶし、ですか？」

「まあまあ、どうせ誰も攻めてきたりはしないんだ。これだって、たぶん俺つて眠れないからこうして起きてるだけだし。付き合つてよ」

ぐりん

マスターは、首を急に回してこちらを見ると、口だけを笑顔にしながらそう言います。まるで物の怪の如き蠢きを見せた、そんなマスターの姿……暗がりの中、私を見つめる瞳は、まるで笑つてごさいません。

——そんな彼に、まるで恐れを抱けなかったのは。

マスターが、酷く小さくなつてしまつた様に見えるから。くるまつた布の中で、さらに体を縮こまらせた様に、見えたから。まるで、彼が見えぬ怪物に怯えて、逃げ出しそうにしていたから。

「むかーし、とある子供が居ましてね。そいつは自分と同じ血の流れる親族から、神様仏様、と愛でられて育つた——悪い子だつた」

「悪い子、ですか？」

「当人は、全然、それをありがたがつてなかつたのさ。親族中が、自分たちの全てを捧げ

てると言ってもよかったのに。それを全然、嬉しいと思わなかった」

……全てを捧げるとは、と私が問えば。

マスターは、ただ一言だけ、『文字通りだな』とだけ返しました。

「実際の所、そいつらが何を考えて彼にそこまで尽くしていたのか、まあ俺には知る由もないけど。傍からみりゃあ、さぞかし不気味だったんだらうな」

「……マスターは、その子と面識が、おありで？」

「面識……面識、はないか。会った事はない。けど良く知ってる。そいつの家族の惨状もよく知ってるのさ」

妹が一人。母が一人。父が一人。

少し、田舎染みて、閉塞的な雰囲気はあつたけれど。それでも、ごく当たり前で、幸せな家系だったのだと、マスターは言います。

「でも、ご家族もその子に尽くすようになった」

「——それは、どうして」

「そういう信仰の一族だったから、としか言えねえな。その子は、そうなつて来たから元の平穩で、暖かな暮らしを望んだ」

マスターは、私を見ています。見ているように見えます。ずっと。でも見ているのは私ではなく……私の後ろの、暗がりの様にも、思えました。そこに、マスターは何を見

ているのでしょうか。

「——その子は、ご家族に相談は」

「したんじゃないか？　当然。でも、そうは上手くはいかねえ」

その少年の、そんなささやかな願いなど、見えないし、聞こえなかったのです。そう、マスターは。笑って。締めくくりました。

第五十三章

かかったなアホがツ!! な実況、はーじまーるよー。

ライネスちゃんとグレイちゃんと殴り合っていた結果としてなんか軍隊の皆様が突撃して『ウオおおおお全員やれえ!!』と我々のキャンプを全滅まで追い込んでいらっしやるんですけれども。

因みに我々が背後にこっそりと抜けていった事には全くもって気が付いていないあたり彼らに周辺の警戒という物は存在しないらしい。ザルか？

『作戦成功! ダミーの拠点も用意しようかと思つてたけど、全く必要なかったね、こうしてみても』

『……そこに居ない、という事は考えないのでしょうか?』

『アレらは自分達の敵を殲滅する、という事しか考えていない。下手をすると獣よりもタチが悪いと思うよ』

自分たちの仮拠点を囿にして、その一瞬の隙をついて敵の本拠地に向かうという囿作戦で、シャドウサーヴァントを袋叩きにするという分かりやすい作戦に、見事に似非ローマの方々には引つ掛かって下さった模様です。

おかげで我々はガラ空きになった後ろを通つて悠々と敵本陣へと進軍が出来るつてもんです。さあお前らの崇拜する偶像をぶち壊してやるから覚悟しろよこの野郎。

『とはいえ、大部分を引き付けただけに過ぎない。少数、はぐれた輩が点々と存在してたりはするだろうから、その辺りは殲滅するけど——』

『——町に入つて、王宮に入つてしまえばそのはぐれた軍勢諸共、彼らは勝手に罠にハマる。重要なのは、速度だ。止まらない様に瞬時に、だよ』

グレイちゃんの小悪魔スマイル。ロクでもない作戦なのかなあ……（震え声） まあそれが敵に向けられたならセーフ（思考停止）

なるほど。つまり速攻という事。それならば青得がまだまだ仕事をしてくれるでしょうと思われませう。最初の一瞬だけならシャドウサーヴァントくらいの火力にはないので火力の足しにはなるようになります。つまり今までは足しになっていなかった……？ まあ雑魚エネミーくらいの出力でしたよ（笑い） 短小扱いをやめろ（激怒） 何時かロマン砲に変えてやるからなあ？

『さて、来たぞお。狂信者共だ！』

『——な、なにっ!? なんてこんなところに!』

『考えるな! 感じろ! そして滅ぼせ!!』

『暴力! 破壊力! 殲滅力!』

お前らさては体育会系か？（困惑） まあそれはいいです。問題は、ここからのバトルにはターン制限がついていて、一定ターン数以内に撃破しないと敗北する事になります。

スピーディに、敵をどんどん撃破して都市の奥へとすすむ——いい演出と難易度だ。感動的だな。だが、そんな少人数の雑兵風情が我々に勝てる訳もなく。

『『ぐわあああああつ?!』』

『よしつ、先へ行くぞつ!』

『な、流れるように……』

『それで良いんだ。一回捕まったら背後から急襲されかねない、数だけでも、強力な敵と合わされば厄介な事になる。速攻、速攻、相手の懐に雷撃の如く、つてね』

通信越しのダ・ヴィンチちゃんの写真と共に処理されるだけだつ! というかそもそもサーヴァントの皆様の雑な一発と、ホモ君のマジパンチ一発でダウンするレベルではあるので、一ターン処理余裕ですよ。

……というか、一ターンで処理しないと事故りかねないですよね。青得と一緒に取った赤得が、ホントに悪さしかねないので。

まあその赤得はまた悪さした時に恨みと共に全てを吐き出してやるとして。はい。今は取り合えず突破、突破、突破でございますよ皆様。

『町は——』

『もう目の前だ、良いタイムだけど——どうやらいいタイムを維持したまま行けるかどうかはこれから次第つてところかな?』

『——滅ぼせえ!』

『我らに滅びをもたらず為に! 敵を滅ぼすのだあ!』

『磔だ! 棒だ! なんでもいい、武器を持って! 我らが滅びを守れえ!!』

しかしながら町に入っても、別に敵が一切居ないという訳でも無く——さつきよりもさらに弱い者、軍に守られるべき市民達が、それでも立ち塞がろうとしてきます。市民ですら狂気の沙汰と言わんばかりの無謀な抵抗を行つてくるこの状況、正にかつて突破したセプテムそのものと言えはいいでしょうか。

『押し入るぞ!』

『申し訳ありませんが、押し通らせていただきます……!』

とはいえ気圧されたりもしていられません。数も増えてリスクが発動しそうなタイミングも増えそう、さらにはターン制限も厳しくなつて来てますが、しかしながらそれも、覚醒のタイミング次第で何とでもなります。

そもそも論、ホモ君以外のサーヴァントちゃんたちが強いので、ターン制限があつてもそれ以内に全員を殲滅する事は難しくはありません。とりあえずは雑に潰してまい

りませうか。はい、ヨロシクウ！（宝具斉射）一応でも、市民を相手に容赦なく宝具を撃つのか……（困惑）げ、ゲーム的には蹴散らしてるだけだから……

『セプテムの時と似ているけど……なんというか、より、違和感を覚えるような感じがするね。彼らからは』

『はい……個人的な感想にはなりますが。彼らには『信仰』という物が、どうにも足りない気がします』

『——止まるな！ 我らの滅びを、邪魔させるものか！』

といつても、蹴散らしても蹴散らしても、真つすぐに皆様戻ってくるのでゲーム的にもストーリー的にも連戦に次ぐ連戦なんですけれども。

一回一回がそうでもないせいで、なんか、限界までうつすくされたベニヤ板をひたすら叩き割っていく様な、微妙に手ごたえの無さと、それ以上に感じるバカみたいな鬱陶しさがあるといふか。

経験値が特別高い訳でも無く、只管出てくるのを叩くしかないので単調作業になりがちっていう。敵が脳死で突っ込んでできているという状況を現すのにはこれ以上ないやり方なんですよけども……

『けれど、我らが滅びて……どういふことなんですよ。まるで、滅びを望んでいるかのような』

『破滅願望、というのは昔から仏教でも特に禁忌とされている三つの欲望に入るくらいには、人間の抱く強烈な欲望ではあるんだ』

『——え？』

『恐らくは、文明の破壊者、という存在のシャドウサーヴァントを都合よく信仰させてその助け……盾として、戦力として僅かでも足しにさせる為に、その欲望を肥大化させたんじゃないかな』

ひえっ……なんか現地民が洗脳されてる……しかもたぶん元々の英国民でもないこの謎特異点に住む架空の現地民を洗脳するとかいう業深案件過ぎてびえん超えて口べスぴエンなんですけれども。

『そ、そんな』

『彼らにとつては、むき出しにされた破滅願望を何れ彼女が叶えてくれる、と信じているんだろうね』

『……残酷な、やり口ですね』

『ああ。間違いなく今までの特異点で、一番悪趣味なやり方だ。術者の思想が透けて見えるよね。全く、もしキャスターだとしたら同じクラスとして軽蔑するよ』

これをやったのが一体何方のキャスターなのかはサツパリだなあ!!! 俺たちをこつちへ引きずり込むとき『ンンンンンン』とか言ってたけど誰だろうなあ!? こういう

シナリオって大抵の場合悪役にされますよね。誰とは言いませんけど。

さて、ラストの相手が凡そロクでもない事が確定しているのですけれども。それはまだ気にしなくてもセーフセーフ。

『とにかく真つすぐ進め！ 押し通せ！ 止まるな！ 王宮に入り込めばその時点で作戦は成功だ！』

——さて、ここまで青得君がほんのちよつとだけ仕事をし、

サーヴァントの皆様がその二倍三倍くらいの活躍を気軽に叩きだしてくださっている訳ですけども。スゲエ！ 肝いりの気持ちで取った青得がゴミみてえに見える！
ホモ君だって成長してるんですけどねえ!?

何時になったら実績解除できるレベルに成長できるか不安になって参りましたが、しかしそれでも微々たるプレイヤーの活躍と頼れる英霊達の活躍で、いよいよ王宮前。

『グレイッツ！ 後は手筈通りに！』

『は、はいっ！』

『グレイが準備を整えるまで、我々はここで押し寄せる民衆を『食い止める』！ あくまで近寄らせない様に、押し返すところで止めおいてくれ！』

そしてパーティーメンバーから頼れるグレイちゃん離脱!! えっ? (予想外)
え、えつと。

とりあえず、グレイちゃん居ないこのメンバーで押し寄せる民衆を一定ターン抑える模様ですけれど……いったいこの作戦で最終的にどんな形に落ち着くのでしょうか。分からなくなってます。が。

案内人、ライネス嬢のお言葉は疑わず、命に従う事！

という事で、三人の能力を最大出力利用して、こなしてみましよう。なお前線を任せられるのはゴルゴーン様だけです。スイマセン！ オナシヤス！

『塵殺しだ。それ以外の何がある？』

足止めで!! オナシヤス!!!

第五十三章・裏：策の成立へ

背後で上がる雄叫びとも怒号ともつかない大声を上げる背後……我々を探しているというのに、そつと抜け出した我々に一切気が付いていないのが、本当に周りが見えていないと言えがいいのでしょうか。

マスターの言っていたことは的を得ていた。とはいえ、流石に実際に目の当たりにして見ると信じられないと申しますか。

アレだけ私たちを鋭敏に捉えたというのに、私たちを見つけれず、私たちが居たと思われる場所を、徹底的に踏みつけ、暴れ、目の前の敵を探し回る。敵を見ていない。自分たちが敵と思ったものを見ている……というのは間違いないでしょう。

「どれくらい引き付けたと思う!?!」

「正確には分からない。向かって来た敵は、出来るだけ倒した。後はほとんど戦う能力のない市民のみ、のはず。押しつける事は難しくない。そのあとは、シャドウサーヴァントを突破するだけだ——と、私の中の人はおおせだよ」

「本当に大丈夫なんだろうなあ、大分ガバガバにしか聞こえないんだけども!?!」

「はっはっはっはっ」

……その在り方は、歪であると言わざるを得ませんが。

ですが、今回はそれが幸いしているのです。誰よりも我々にとつて。予測しやすくそして策に乗せやすい。我々の目的は、紅の都の全てを破壊しつくすことではなく。あくまでこの異常な空間の是正と、脱出なのです。

その為に最優先は、紙片を回収する事。

紙片に触れる事で、この特異点にかぶせられた偽の皮を剥がせる。今、判明している事実はそれだけです。そして、紙片が反応を示すのは……唯一、マスターだけなのです。

「……紙片って、やっぱり触らないとダメか？」

「触って反応するタイプだから触ってもらわないと」

「あー、そつかあ……いやー、出来ればご勘弁だったんだけどなあ」

とはいえ。

マスターは、紙片に触る事をあまりよしとはしていないのですが。

『——やっぱり痛みとかが走ったりするのかい？』

「あーいや、そういうんじゃないんだ。ないんだけど……バイタルに異常って出てるんだよなあ？」

『そりゃあこつちから君の様子はモニタリング出来てるからね』

「だよねー……うん。分かった分かった、正直に言う。なんかもやつとすんの。アレ触

るとマジで。うん」

『もやつと』

「痛いもやつとする。めつちやもやつとする。あの、痒い所があるのにつけなくらい」
もやつとするそうです。

……いえ、それで終わりにして本当にいいのかどうかは分かりかねますけれど。ただマスターは、もやつとするんだよなー出来れば触りたくないけどしようがないかー、と零すばかりで。

ダ・ヴィンチ様も、Gを触る様なものかな？ となんだか呑気な事をおっしゃっているのですけれども。

「まあでも死ぬわけじゃないし……仕方ないかあ。そうじゃないとダメっぽいしなあ」
『相手にそう誘導されてる気はするんだけどもね』

「そう思わなかったら俺ら全員間抜けよ」

「……本当に、大丈夫なのですか？ 触らない、というのは」
「触った途端に特異点の化けの皮が剥がれてるんだから、何もしいっていう選択肢はないわなあ。今の所の突破する手立ては他にないっていう」

あの紙片を集める事は、この特異点モドキの解決に繋がっていく。しかし、その起動方法はあの紙片をマスターに触れさせること。段階を踏んでいった先に……何も起こ

らないというのは、流石に樂觀的に過ぎると、私も思います。

「紙片の使い方、つていうか意味つていうのを見せつけられてるんだ……吊り下げられたニンジンみたいによ」

『我らは馬車馬の如く走り抜けるしかない』

「よねえ、体に異常が出ない限り、は……しゃおらあつ！」

しかし、マスターが一発、蹴りで吹っ飛ばして……そのまま走り抜ける姿には特に体の調子が悪いようには見えず。実際、マスターが無事であるなら、紙片に触れて特異点を崩壊させる、という相手の意図に乗るのが最短である事は、間違いないのです。

『——とはいえ、こつちも何もしていない訳じゃない。次までには、それなりに対策も立てて見せるよ。通信も少しずつ改善していつてるし。ずっと何もできないまま、見てるだけつていうのも腹が立つんだぜ？』

「期待してますよお、万能の天才！」

『任せたまえ……とは言い切れないけれど。まあ何とかしてみよう』

……であれば。私が出る事は。

「あの、マスター」

「ん？」

「もし、夢見等が悪くなったりしたら、私に。せめて……お守りくらいは」

「——ん、ありがとさん。大丈夫。昔から悪夢とかぜんぜん応えないタイプだから」

せめて。マスターの調子が悪くならない様に色々と、配慮をすることくらいで。結局の所、我々はマスターの身に何か起きれば、全てがお終いでございます。それに……個人的にも、マスターに、死んでほしい訳では、ございません。ずつと、ここまで駆けつけて来た、相棒、ですの。

何の責務もなかったはずの、只人の男の子を。せめて、五体満足に戻してあげたい、と思うのは当たり前ではないのか、とも。思うのです。

「ま、目の前のこれ見ると、夢見悪くなりそうだけどねー」
「マスター、いい加減こやつら千切り捨てて良いか！」

「許可したいけど無理！　んな暇はないから兎も角前進優先！」
「ええい、いい加減周りを取り囲まれかねんぞ！　数を減らさねば！」

「——まあ、俺だつて気持ちちはわかるよつと！」
まあ、今は元気な事は、間違いないので、過剰に心配する事も無いのか、とは思いますが。

マスターが殴り飛ばした相手は、鼻血をまき散らしながら飛んで行つて……後ろから突っ込んできた方々に吹っ飛ばされ、別の方向へと飛んでいきます。

王宮まではあと少しですが、しかし奥へ行けば行くほど、殺到する民の勢いは更に苛

烈になっていくのは、自明の理。人の波を押し退けるように突撃を繰り返しながら——ライネスさんの方を見ます。彼女は、この状況でも全く取り乱さず、真つすぐ王宮の方だけを見えています。

「なあ、軍隊を引きはがして速攻戦、つていう話だけど……こいつらに纏わりつかれたらやばいんじゃないか!?!」

「いいや、これでいい」

「これでいい!?!」

「そうだ。なんで軍隊だけを引きはがしたと思う?」

「そりゃあ、暴れてる俺たちに対応するのは、市民じゃなくて、軍隊だから」

「それだけじゃないさ。まあ見ていたまえ。策が成った以上、後は奇手もいらすず当然の様に勝利は確定しているんだよ」

……軍隊の皆様だけではなく、こうして今は市民も我々に殺到している訳なのですけれども。ただ、この市民も、この作戦には必要なのだと、ライネス様は……明らかに、何かを企んでいる様な可憐な笑顔で。おっしやりながら……目の前を指し示します。

近づいてくるのは、目的地。王宮の門。

「——さあ、最後の仕上げだ。あの王宮に駆け込む——まえに、その前で時間稼ぎだ。グレイ、ちよつと場内に入り込んで、準備を整えてくれないか」

「え？ 準備……ですか？」

「うん。扉を固く固く、素早く閉ざす準備だ。それが完了するまでは、我々が時間稼ぎをする」

そう言ってライネス様はそこで踵を返し——マスターも、ライネス様の動きに合わせて足を止めます。私も、とりあえず後ろ、私たちが走り抜けてきた方へと体の向きを変えてみれば。見えました。そして、ちよつと……うつ、つてなりました。

人の波です。

物凄い怒号と人の熱が、暴走しております。足に響く地響きと勘違いしそうな程の、とんでもない人数の大激走。声だけでも、建物が震えている気がいたします。

一体どれだけの人数を振り切つて来たのか。その集大成でございます。

多少ケガをしていようと、血を流していようと。なにも構わずこちらへと突つ込んでくるのです。それだけの人数が。狂気が行きつくところまで行っている気がします。一步、下がりそうになりました。

「前提として、アレの集団を絶対に通さない」

「一人も？」

「そうそう。絶対に通さない様に、ここで足止めする。それがどれだけ上手くいったか。でこの後の仕掛けの効果の度合いが変わる」

「どういふ事？」

「——もし、我々の仕掛けに猪が気が付いて、戻ってきたとして。怒号を上げた群衆が集まっている場所を見れば、そこに何がいるかは想像もつくだろうね。そして。目の前の群衆に配慮して、我々を追うと思うかい？」

……そして、耳に聞こえてきたライネス様の言葉。

そこから思い浮かぶのは、一つの想像。何故グレイ様に先行させたのか。自分たちが閉じこもる事を優先しようと思ったのか。

「——もしかして、酷いことしようとしてる？」

「猪は動き出したら止まらない。味方だろうとなんだらうと、突っ込んで蹴散らそうとして、でも数は同格だからそう上手くはいかなくて。どちらも必死に王宮に入ろうとするから混乱を生む。ごく当たり前の、悪辣な作戦だよ」

どうやら、私の想像は……おおよそ当たっていた模様です。

第五十四章

いよいよ王宮の中へ——な実況、はーじまーるよー。

前回、押し寄せてきた民衆を盾に、軍隊を締め出すとかいうびつくりな作戦で戦える兵隊と将を、しっかりと引きはがした訳ですが。えげつない事をしますよねえホント……向こうで狭い通りで押し合いへし合いで地獄みたいな状態になって、寧ろ互いにつぶし合いしてますねえクオレハ……

『——取り合ず、ここまでは予定通りかな』

『敵を引き付けてその後ろを突いて王宮へ——そして、その後の市民も突破、そして王宮に突撃。我々を排除しようところちらを追いかけて殺到する敵対的市民を、纏めて敵軍の盾にして、時間を稼ぐ』

『まあそう難しくもない、ありきたりな手だ。これでしばらくは奴らも進入してこれないだろうな』

グレイちゃんと式部さんが悲しそうな顔をしていて、血も涙もない（多大なる風評被害）鬼の軍師連中は『ヨシッ！』的なお顔をしてらっしやるのが対照的ですねえ！ 同士討ちは戦術の基本、でも人道からはぐれメタル甚だしいので前者の反応が正しいで

す。

まあとはいえ、城門を閉めて、施設もしてしまったので、外の皆様を助けることも出来ないんですけれども（オリジナル笑顔） 精々互いにつぶし合つて数を減らし続けていただければ。二人とも元気出して……二人は悪くないから……（ニコニコ）

『内部にも敵は居るだろうけど。それはあまり気にしなくていいと思う。数も少ないし直ぐに蹴散らせる。』

『問題は——その先だ。ここまで持ち込んでも尚、シャドウサーヴァントの脅威は一切変わっていない。ようやく同じ土俵に着いただけだ』

さて、こうなった後は玉座についてる影法師を討ち果たすだけ。

しかしながら、ここまでは一切の邪魔が入らない様にしただけで、本番はこれからつという悪夢の様な事態。それに、外の人たちも、何れ城門を突破して入ってくるかもしれないので時間もかけていられない。

いい緊張感だア……ラスボス前にふさわしい……えっ？ コレがラスボスじゃないんですかっ!?!（困惑） そりゃあアンタ、まだこれ二ステージ目のボスですよ。なんとう絶望感か！

『しかし……凄いな、入ってみて初めて気づいたけど』

『作りそのものは平凡だが……いたるところにある、この破壊の跡。シャドウサーヴァ

ントが戦った跡だとすれば。正に距離も場所も、関係ないと言った所かな?』

『気になるのは、コレがどうしてつけられたのか。誰かと戦ったのか』

『我慢しきれず、滅ぼしてもらったんじゃないかい? ほら、そこ。見て』

『——ああ成程、そうらしいね』

そして廊下に散らばるローマ風衣装、鎧、ブキ、その他諸々。皆さま全員『私たちを滅ぼしてー♡』的なラブコールをしていたし、もしやそういう事? 先走るって気持ちよくなるとか紳士の風上にも置けない奴らですな……

『まあこれでここにいる人数が減っていると良かったんだけど……』

『そんな甘い事は無いらしいね。反応アリ、敵性かどうかは分からないけど、君たち以外は敵性反応しないと考えると、迷う必要は無い』

そしてまだ王宮に残っていらっしやる狂信者の皆様が、そう言った諸々のブツを踏みつけてご登場。どうやら暴発早漏野郎どもよりも訓練のされている奴らのようですが、しかしながら数がなあ!

そんな訓練された変態共も、ギャグ展開同時に瞬間処理。とはいえ、これで宮殿内にも変質者が未だ潜んでいる事は分かりました。宮殿の外に雑魚を全員隔離できる訳でも無いので、まあ——この後の決戦時には気を付けましょう。って事で。

『さーて蹴散らしていこう! ガンガン行こう! 奥へ奥へ、突っ込め! 敵と求める

ブツはこの先にある!』

『因みにこの先の策は一切ないから、真っ向勝負だ。その辺りは覚悟しておいて』

『——はいっ!』

さて——いよいよ、この次が。紅の都のラストバトル。覚悟決めて突撃いたしましうかね。この斬撃の傷塗れのボロボロの扉を見てみると悪夢しか感じ得ませんけれども。どうしてこんなにでかい扉に斬撃の跡を刻み込む必要があつたんですか? 何か気に入らない事でもあつたの?

そんな事を気にしている暇が突つ込めつて言つてんの!!

『——』

『さて、いよいよこの都のご神体とご対面——つて、おーおー、分かりやすいねこれ』

『いきなり剣を引き抜いて構える。下手な事はしない真っ向勝負の構えか』

『でも周りはソレを許してくれないらしいね——団体のお出ました!』

『とはいえ、これだけの戦力が居るんだ、負けたら笑い話にもならない——全力を持って打倒し、紙片を回収しよう!』

さて、そんなお言葉をもらつたので、最大出力を持つてシャドウサーヴァントの打倒を目指しましょうか——とはいえ、やる事と注意点とスキルも基本は変わらないので。

まあ後は雑魚敵が数匹いるくらいで、大して変更点はございません。冷静に刈り取つ

て参りましょう。因みに雑魚敵君は体力がもう終わっている代わりに、スキルでスタン、攻撃力は一発でホモ君をKO、サーヴァントの皆様とて冷や汗をかくレベルの重さになっておりますのでそこだけは気を付けましょう。あれ？ 大分脅威では？。

所詮は再生ボスと油断ぶっこいているとすりつぶされる可能性があります。幸い、こちらもライネス嬢から防御バフとかはいただいているので、落ち着いて相手の攻撃を凌ぎつつ打ち取って参りましょうね。

『——つはあ！ 危なかったあ！』

『ま、真つ当に、真つ当に強かったです……搦め手も一切なく……』

『本当に……つ、強かったです……』

『……疲れたぞ……』

全員へつとへとで草でございますね。アツドですら普段のおしゃべりが出来ない程になっております。

いや、本当にライネス嬢が定期的にかけてくれるバフと味方の運用、それらを上手くやりくりして戦う、文字通りの真つ向勝負のステージでした……その結果としてこっちマジでボロカス寸前なんですけれどもね!!

だって相手がこっちを弱体化するとかじゃなくて自分を強化してデバフとかを無効化するタイプなんだもんなあ……うちのサーヴァントはデバフ重点なもんで、弱体が通

らないと途端に火力が落ちるといふ、割と厄介な相手ではあります。

『——さて、問題の紙片は？』

『奥にありました。台座に、安置されているようです』

『そろそろ価値が分かったかな？ とでも言いたげだねえ。この明確な配置は』

はいムネーモシユネーの紙片。

さて、ホモ君がこの紙に触れる事で紅の都、といふかこの特異点に新たなる変化、といふかテクスチャの剥離が生じてまいります。

特異点を解決するためだ、ホモ君には犠牲になつていただきます。オラツ、しっかりと接触しろ！（当たり前）

さて、ホモ君が紙片に触れた事でワンダウン！ その結果、一体どんな変化が生じたか……な、なんだ？ 周辺の景色が急に変貌を!?

『——おお、ここが直接変化するのか』

『(ハ、ハ)つて……』

『驚いた。ここは——宮殿、しかも。かの……女王の負わす……代わりに破壊の体現者とやらを置いておくといふのは、何かの皮肉だったのか』

なんとという事だ。英国の女王の御座す筈の場所にテクスチャ被せて別の場所の王宮っぽく見せるとかとんでもない人類史への挑戦で草も生えますよ。似てる場所だつ

たからちようどよしと思つてこれにしたのでしようか。手抜き……つてコト!?

『これで特異点にかぶさつていた偽りの景色は、大分剥がれた筈、なんだけれども。どの程度変わったか』

『外に出てみましょうか、ライネスさん』

『ああ。あの謎の建造物も……確認したい所ではあるからね』

手抜き建築にちよつとちいさくてかわいい奴化しましたが、しかしこの紅の都が元のロンドンのどの地点だったのかは気にしても仕方ないので、この特異点解決に関係しそうな場所をチェックすると致しましょう。

『——かなり、露になって来ましたね』

『景色も、建造物も。このままいけば、偽りの景色は何れ剥がれて特異点も維持できなくなつてくる、かな』

『ダ・ヴィンチ様、中心のあの建造物……こちらからは、塔の様にも見えません。そちらでは何か分かりますでしょうか』

『ちよつと待つてくれたまえ——おお、これはすごい。現状のカルデアの探査で、遠目から分かるレベルで凄い神秘を内包してるじゃないか、アレ』

——見えてまいりました。

細長い胴の部分が、はつきりと。あの形は……塔、と呼称するのがぴったりの形をし

ております。うーん、一見してランスの刃の部分にも見えますねえ!! (チラ見せ) 一体
どんな建造物なんだ、見当もつかない……!! (目反らし)

第五十四章・裏：破壊の影 前編

——その黒い影は、堂々と立っていました。

黄金と紅に染められた玉座の前で。君臨する、というよりも。待っているかのよう。剣を床に突き立て。その前で。全く動かずに。です。

それだけです。威嚇も、何もしていません。私たちの目の前に、立っているだけなのです。他に、何もしていません。だというのに。

立っているだけの私は今にも意識を持っていかれそうな程に——

足元が震えている気がするのです。肌にビリビリと刺す感覚がいたします。頭の中で壊れてひび割れた鐘が鳴り響いているかのようです。

「……前は、割とイライラしてた時だったからか、そこまで気にしてなかったけど。今こうして相對すると……えっ、俺他のサーヴァントの皆様のお助けがあつたにしろ、アレに勝つたの？ 割と神業じゃない？」

「うん。だから私も信じられないんだよね。いまいち。ホントに勝てるのかい、アレ」
「本人には勝つたんだから大丈夫、と思いたいけど……式部さん大丈夫？」

「あ、あまり……」

その警鐘は、普段私が発する事が出来ないモノ。戦場に出ない私の鈍った、感覚、第六感と言ったものが、目の前の危機を前に、突如として隆起する。そのレベルで、目の前のシャドウサーヴァントは、強いのです。

では、このまま私は、尻尾を巻いて逃げ出すのか。

それは——出来ません。人理の危機の声に応えて来た。というのは当然あります。ただ今この時に限って言うなら……方が一、逃げ出そうとしても、恐らく目の前の存在は、私をきつと逃がしてくれません。

寧ろ、背を向けた臆病な者をこそ、狩りやすしと判断し、速攻で切りかかってくるでしょう。そんな、予感があります。

『——いやあ、上がってるねえ。各数値。こつちを認識したらしいよ?』

「ああ今、目の前で剣を抜いたよ。戦闘準備に入ってる」

「グレイ、油断しないように。無理だと思つたら、一旦下がってもいい」

「分かりました、ライネスさんは、出来るだけ後ろに」

「ゴルゴーンさん、式部さん。戦闘準備、こりやあ……楽な戦いにはなりそうにないぞ」
であるならば。皆で力を合わせ、目の前の相手を打倒する以外に……道は、あるでしょう。剣を抜き放った途端、最早、肌どころか、芯にまで響く程に圧力を増した、黒い影を相手に。

「苦しい、だと？ 下らん心配などする前に、黙って魔力を回せ——直ぐに哀れな供物にしてやろう」

「了解しました、マスター」

「——オーライ。じゃあまあ、ゴルゴーンさんから。やっちゃって、どうぞー！」

——マスターの宣言に応え。

先駆けと言わんばかりに先手を打ったゴルゴーン様の光線はしかし。隙間に入り込みながら、その幾つかを薙ぎ払う……シャドウサーヴァントの凄まじい反応速度と、剣の腕で凌がれて。

「ふん、生意気な」

「——」

「だが……私ばかりに気を取られていいのか？ まさかとは思いますが、人間の小賢しさを知らんわけでもあるまい？」

ですが、その凌がれた一瞬。

背後に回り込んでいるのは……アッド様を、鉄槌に変えて振りかぶった、グレイ様
「くくつ、その中で、崇められていたのだから」

「——っ!?!」

「はああああああつ」

切り裂く鎌ではなく、巨大な鉄槌。防ぐ事が出来たにしろ、その重さを殺し切る事は流石にあの一瞬では不可能。吹き飛ばされずとも、体勢は、大きく崩れ、流され……直ぐ背後に迫りいたゴルゴン様に、大きな隙を晒す事に。

既に、振り上げた爪はシャドウサーヴァントの頭蓋を切り裂き、中身をまき散らさんと振り下ろされています。

「――」
その爪を見て。彼女は、いかなる選択をしたのか。

普通であれば、無理やりにも避けようと、するのかもしれませんがしかし。私の目の前では、そんな矮小な想像など遠く及ばぬ――驚くべき、選択を、シャドウサーヴァントはして見せました。

吹き飛ばされて崩れる体。そして、迫る爪。ならばと――彼女は敢えて、踏ん張る事をやめて、後ろに向け、転げたのです。後ろへ、コロント。

「ちっ!?!」

「――」

大柄なゴルゴン様だからこそ、一瞬、足元がお留守になっていた……そこへと活路を見出し、もう二度ほど、ころん、ころん、まるで子供の様に、しかし子供のそれとは比較にならぬ程、身軽に転がり。彼女の背後へ。

立ち上がった時にはもう、剣は振りかぶられている——かもしれません。であるのならば。その一瞬を、埋めるくらいは。

「——救急如律令！」

放つ墨染の弾丸と共に、走る銀色の影。グレイ様が構えているのと、同じ鉄槌をその両手を変じさせて構えた、ライネス様の侍女にして魔術礼装たるトリム様の突撃が迫ってきます。

先ず私の弾丸はと言えば。

一閃。切り捨てられました。まるで歯牙にもかけられていません……分かつては居ましたがちよつと悔しいです。悔しいですが。

その一瞬の時間で、弾丸の後ろにびたりとついていた、トリム様が、その両の手を叩きつけられる距離に。

「トリムマウ——よろしく頼むよ」

『了解です』

銀色の鉄槌は、いよいよその黒い影を捉える……その直前まで迫っていました。

これは当たる、と思っていたのも束の間、シャドウサーヴァントは、私の術を盾に切り捨てたそのままの剣を地面にたたきつけて……突き刺した剣を足場に、彼女は高く飛び上がったのです。

無理矢理防ぐのではなく寧ろ、前のめりに躲す、その動きに対応しきれず、振りぬかれた鉄槌は空しく空を切り――。

「グレイの援護を、ね」

『!?!』

「遠距離なら……!?!」

「こいつだア!!」

投げつけられるブーメランは、既にその背後に。

こちらに意識を取られていたのが悪い、とは申しませんが。しかし、我々に気を取られているこの機会を、お二人が見逃すとは思えません。トリム様と、私が生んだ隙を、背後のお二人が突く。些か卑劣ではありますが、至極当然な戦い方ではあります。

さらに言えば、私の様な戦場を知らない甘い女ではなく……戦場の厳しさを良く知っている彼女ならば。当然の如く。

「――逃がさん」

ゴルゴーン様は、既にその逞しい尾で自ら跳躍し、既にシャドウサーヴァントの背後を取っています。ブーメランが直撃したその直後の隙を狙って、一撃を叩きこむお積りなんでしょう。

「――」

既に空中にて、躲しようもない一撃が、二重に。何方に対応したとしても、何方かは受けざるを得ない。最早、詰みと思っていました。

思っていたのです。

そのしなやかな体、そこに秘められた肉体の力はどれほどのものなのか——ゴルゴーン様が驚愕したのも、無理からぬこと。空中で体をくるり、と背面向きに縦に回したのは飛び上がったシャドウサーヴァント。ゴルゴーン様と目が合ったのでしよう。

しかも、只縦に回ったのではない、直撃以外にどうしようもないブーメランを、まるで背面跳びでもするかのように紙一重ですり抜けて——

「——！」

「ちっ！」

振りかぶった、ゴルゴーン様の爪と、再びその剣を打ち合わせ。その衝撃で自ら弾かれて飛んでいき……我々から離れた場所に何事もなかったかのように着地しました。

「小賢しい真似を」

「——」

驚くべき反応と、判断の果断さ。あの時、ローマで戦った白いサーヴァントの強さと、全く遜色ありません。

油断すれば、こちらが負けるでしょう。とはいえ、今の様な芸当を何度も何度も出来

るとは思えません。押ししているのは、たぶん此方だとは、思います。

——ですが。

「——勝て、ますよね」

「そう思いたいけどなあ……つたく、宮殿の中にもまだいるぞこいつら」

マスターの顔色は、優れず。それが何故なのかは。

何処からか現れた、武装した兵士を見れば、分かってしまいました。

「そんな、どうして……!?!」

「そりゃあ宮殿に警護の兵隊置いてない訳はないよ。我々が引きはがしたのは外回りの兵隊達だ。相当数減らしただろうけど、一人もいないというのはないんじゃないかな」

「真つ当なお言葉どうも!」

どうやら……落ち着けば勝てる、そんな甘い事は、無かった模様です。

ゆらり、と何事かをつぶやきながらこちらへと迫る兵士の姿の嫌な迫力を見ている。それを、肌で実感するような、気がしました。

第五十四章・裏：破壊の影 中編

「兵隊と、町の市民を引つpegがして……それでもまだいやがる。なんなんだ、どつから来てる!？」

「さつき宮殿の天井の窓あたりから、ぼとぼと零れ落ちてくるのが見えた!」
「クソツたれ! どんなどころから入って来やがる!」

「これでもまだマシな方だ、正面玄関が破壊されたらこれ以上になる、正念場だよ!」
私自身、周辺の敵に襲われそうになつていないのは……マスターに守ってもらつてい
るお陰というのは間違いありません。この状況下。周りから、大人数の束ではなく、一
人一人が突如としてとびかかってくる。シャドウサーヴァントとの決戦、と思つていた
のがしかしながら。蓋を開けてみれば、想像以上に神経を使う戦い。

周辺の市民か、兵隊か。何れにせよ、彼女の信奉者たちは、狙いを前線のお二方では
なく、後方に控える私たちを狙つて来て、先ほどから援護があと一步、届いておらず。ゴ
ルゴン様、グレイ様のお二人はあと一步詰め切れておりません。

「つち、どうする、令呪、ここで切つてもいいが……!？」

「貴重なりソースを無駄遣いするものじゃない——機会は必ず来る、まだ耐えてくれ」

「あのいきなり目の光を消し飛ばすのやめて？ 交代するなら言つて？」

状況は——互角と言える、のでしょいか。

先ほどから、偶にライネス様がお方と交代し、指示を飛ばす程には、予断を許さない状況で。ただ、我々は今の所、苦しい状況ではありません。

「とりむまう……だつたか？ が居ないからな。君には些かと無理を強いる事になるがもう少しばかりだ」

「ええいアンタに何が見えてるかは知らんけども！ 信じていいんだよな！」

「戦場の把握とこの頭脳以外に特に取り柄が無いからな、それを疑われては困る」

……いえ、苦しいのはたぶんマスターだけだと思われます。私自身はマスターに守つていただいています、しかし自分でもある程度はよけたり、迎撃もするようにはしております。 いるのですけれども。

「じゃあ脳以外に体も動かしてもらえませんかね!! 俺、さつきからお嬢さん……? のサポートに必死なんですよ!!」

「全体を見なければならぬからな。そうはいかない」

「ああそうかい！ ならやつてやるよ存分によオ!!」

マスターが警護してらっしゃるのは……主に、全く動かないライネス様です。トリム様をグレイ様の援護に回して、ご自身はずっと戦場を見つめる為に、後方の一点から動

いておりません。

その周辺をあくせく動き回るマスターのその姿は、まるでライネス様を守る若武者、従者の如くです。

「ふむ——やはりだな」

「あん？」

「我々を狙っているのは、やはりそういう基準だったか。であれば……うん。決めた。おい、カルデアのマスター」

「なんですかあ？ いったくけと、これ以上必死に守れとかムリだぞ」

「いいや、守らなくもいい。だがこれ以上に必死にはなつてもらう」

……もし本当に従者だとすれば、あの様に目が見開いて、眉間に目いっぱいしわを寄せたりは、たぶんしない、とは思いますが。見ている私も『不信感』『驚愕』『不安』を感じられる程に、いやそんな顔をしています。

「……」

「信じる。当然の様に勝つただけだ」

「ええー……つたく、信じるぜ、お嬢さん！」

「性別がこうなのはライネス嬢の体を借りているからで、俺は男だ……まあ、それは良い。耳を貸せ」

「ああ？ つと、その前にッ！」

——ですが、その顔をしていたのは一瞬。

瞬間、こちらに向けて走りだしてきたマスターのその顔は、真剣そのもので……マスターはこちらに手を伸ばして、私は……そのまま、抱きかかえるようにマスターの、懐に引き寄せられて……っ!?

「ま、マスター!？」

「ぼんやりしちゃダメよんお嬢さん。ほれ」

お、驚いてしまって、一瞬間が真っ白になって……

でも、そんな呑気な事を考えていたのもつかの間、マスターの指し示す先に転がっていた、信奉者の姿を見て、顔に上った血がサーツ、と引いていくのを感じました。

マスターが間に合わなければ、私は背後からの奇襲を受けていたかもしれません。けがを負わなかった、としても。態勢を崩し、隙を見せていけば……背後の戦いの天秤の拮抗を、崩していたかもしれない。

「あ、ありがとうございます、マスター……」

「大丈夫だ。まあこれつきりにしてもらえると、ありがたいかな。流石に——」

「——いいや、あともう一回肝を冷やしてもらおう事になる」

等と考えていたら目の前のマスターの眉間に刻まれたしわの数が一気に……えげつ

ないお顔になっていました。急転直下に過ぎてちよつと、温度差が……あの……

とはいえ、ライネス様、ではなく、中の方がおつしやる事を冷静に考えていると、私もそのような顔をしそうと申しますか。

「あの、ど、どういう事でしょう」

「何。あの剣使いをこつちに突つ込ませるんだ。寧ろ後衛まで巻き込んで楽しい楽しい乱戦に持ち込もうじゃないか」

マスターは——その言葉を聞いた後、今度は明確に、彼女を睨みつけて。しかし彼女はその鋭い視線に一切怯まず、泰然自若としています。

「——そりゃあ、冗談じゃねえんだな？」

「冗談じゃない。それが一番、勝ちの目が大きい」

「式部さんは接近戦もクソも無い。接近させるリスクは——」

「ま、マスター!?! 後ろ後ろ!」

——その一瞬でまた信奉者が飛び掛かろうとしていたのを、速攻で迎撃しています。ええ、今でもこの状況なのです。

シャドウサーヴァントがここに乱入して来たりしたら、我々、いよいよ瞬殺される可能性すらあるのですが。それは……たぶん大丈夫ではないと思います。

「——承知の上か？」

「当然だ。しかし、至近距離に引き込むことで状況を打開できることを考えると、許容するべきリスクだろう」

「……分かってんなら、カバーする方法も考えてる、そう思っているんだな？」

「あるとも。その辺りが無ければ提案はしていない」

「そうかい」

大丈夫ではないのですが。

「式部さん。これから無茶させる。やれるだけの事はやるつもりだけど……」

「いいえ。大丈夫です。私も、覚悟を決めていない訳ではありませんから」

「そっか。ありが——良い雰囲気壊すなあっ！」

それでも。ここで嫌だとは申しません。マスターと共に、いかなる戦いでも——と、思っていたのですけれども。怪鳥の如き雄叫びを上げて殴りこんでまいりました信奉者の方の所為で全てが台無しになった気がしました。

「——で!!!」

「あー、うん。こういう乱入は無くなると思うから、安心して欲しい」

「ならさつさとやるぞ!!! 殴り飛ばしてやる!!!」

「だからその殴り飛ばす機会も……まあいいか。じゃあ、説明するぞ。今回考えている

のは——」

「——ゴルゴーンさん！」

第一段階は——二人の前線を大きく下げ、我々のいる場所までシャドウサーヴァントが押し込んでくる様に仕向ける事。

そこで、ライネス様の方が、先ず意識すべきと言ったのは……前線にいる二人と一緒に下げない事。もし一緒に後ろに下げてしまうと、その機を狙って打ち壊されかねないとのことで。

「グレイさんを下がらせる！——好き勝手に暴れていいぜ！」

「——くくつ、ふはははつ！ 何を企んでいるのか、まあいいだろう。その言葉、後悔するなよマスター」

そして。その時下げるのは……グレイ様からが先。

その理由は、説明されずともマスターは理解しておりました。というより、私たちが自身が良く理解している、と申しますか。

単純明快。

ゴルゴーン様は、体が大きいのです。カルデアでも、体が詰まると文句をいう事もありますし。しかし、その分、大きな範囲を薙ぎ払い、破壊できるのです。が。

それを味方と共闘している時——特に、藤丸様と一緒に戦っていらつしやる時は、と

もに前線で戦うにせよ、後衛から私と共に援護をするにせよ……その圧倒的な攻撃範囲に味方を巻き込むことを警戒してもらわねばなりません。ゴルゴーン様がそれをよしとしていた訳ではございませんが……

しかし、今この時だけは。グレイ様だけを下げることのあるこのタイミングであれば。

「良いだろう、好き勝手に暴れさせてもらう。初めてではないか？　こうして現界してから、何にも気にも留めず——力を振るうのは!!」

その全力を振るう時が、今、来たのだと思われます。一瞬、ゴルゴーン様の方から、一陣の風が吹いたようにも錯覚するほどに。彼女が晴れやかなお顔をしているのが一瞬見えました。課せられていた拘束から解き放たれて、どれだけの……どれだけの……

あの、物凄く、前提がひっくり返る様な、想像をしてしまったのですけれど。

「……なあ、このまま勝っちゃう、って事は無いよな？」

「いや、流石に聖杯のバックアップを受けているはずの、敵を相手に……いやあ」

「あの、どうなさったんですか？　ライネスさん」

「私はライネス嬢では……うん、まあ、とりあえず、体勢を一応整えてくれ。もしかしたらそのまま勝ってしまうかもしれないが……」

第五十四章・裏：破壊の影 後編

——まるで暴風。

普通なら間合いの一步外の相手も尻尾で薙ぎ払いながら、相手が飛べば無数の光の剣で四方八方を空間諸共に焼き切つてさらに前進、突つ込んでくれば爪で受け止めて、自力で吹き飛ばし、更なる破壊を持つて、圧して返す。

相手が破壊の化身ならば、こちらは……怪物。

表現するには、それ以外の言葉は無い気がいたします。言葉を書き上げてきた身ではありませんが、しかしそれ以外は最早無粋にも感じる程の、圧倒的な暴威。

かつて、希臘において多くの英雄となるべく向かつて来た勇士が、まるで相手にもならなかった程の、圧倒的な力。それを、我々は見誤っていたのかもしれない。

「……なあ、勝負に奇計も切り札もいらなくて言つてたよな」

「要らないと言つたが欲しくはないとは言つていない」

「あの……それで、拙はどうすればいいんでしょうか」

「すまないな。もう下がっただけで役目は終わりかもしれない」

「えっ?」

……本当に。

先ほどから、シャドウサーヴァントの斬撃も、何もかも。それ以上に破壊し、押しつぶして、更に粉碎する。枷から解き放たれたゴルゴーン様の勢いと出力というのは、とんでもない事が良く分かります。

「いやー生き生きしてんなつと! あ、グレイちゃんはいいつ等を一緒にシバキ回しておいてくれると助かる」

「は、はあ」

「想像以上だった。まさか、ここまで全力を抑え込んでいたとは」

「周りを気にしないでいい、というのは本当にゴルゴーン様にとって楽なのでしょうね」
目の前で展開されているのは、正に神話の戦い。宮殿を破壊しそうな勢いの攻撃の間を剣一本ですり抜けようとする英雄と、その英雄を食らいつくさんとする魔の者の決戦。なお英雄が敵で、味方はゴルゴーン様なわけですが。

その戦いは、素人目ではありませんが……互角な様に見えます。お互いに競り合つてどちらも一歩も引いてはおりません。

もしかして、ですが。

本当に、このまま戦い続けていたら、何時かゴルゴーン様が、押し切ってしまうので

はないか。そんな期待が持てるような――

『ゴルゴーンという伝説に歌われる存在の力を、甘く見ていたのかもしれないね……今後から彼女お一人で戦ってみてもらう?』

「義理欠け過ぎないか?」

『いやまあそうだけでも。でもあれだけ戦ってるのを見てみると、ね?』

「おい。おしゃべりはそこまでだ。一応見てはいたが、やっぱり無理だアレは」

――しかし、それはどうやら私の甘い考えだった模様で。

「無理なのか?」

「無理だ。彼女の暴れ振りに一瞬目が眩んだが、互角では話にならん」

『うんまあ。冷静に考えれば。相手はこつち以上のリソースがバックにあるんだ、このまま戦い続けたらガス欠で押し切られるよ』

頭脳派のお二人のお言葉を聞けば当然と言えば当然。こちらは限られたリソース、相手はこの特異点を成立させている聖杯という圧倒的なリソースがあるのです。確かに、長期戦ともなればその差が出るでしょうし……

「という事で、そろそろ策を御覧じてもいいだろう。ゴルゴーンを下げるぞ。これだけ休んだんだ。準備が出来ていない等とは言わせんぞ」

「お、おう。そうだな。ゴルゴーンさんに暴れさせてはつかりだし……そろそろやるか」

という事で、マスターが正面を向きますが……

『——ハッハア!! どうした、その程度か!』

『』

ずびやああああ……ツドン! ゴゴガガガッ……!

「……アレ、俺の声届くのかなあ。明らかに魔王様の迫力醸し出してるけど」

「届かせてくれ。俺ではかの希臘の魔妖に進言など叶わん」

「アンタ軍師のサーヴァントって言ってただろ!? そこは口車回してなんとかさあ」

「そんなもの特異点を越えてきた貴殿らの絆に太刀打ち出来るものではない」

「……邪魔したって怒られそうなんだよなあ……」

ま、まあ。いかにゴルゴーン様が今、楽しそうに戦っていらしているとはいえ、それを邪魔された程度で、怒ったり、は……お、恐らくしなないとは思いますが。とはいえ言わねば仕方ないので……

「ゴルゴーンさん! そろそろ下がってもらえるとありがたいかなあ、なんて」

「……………ちっ」

「舌打ちしたなあおい!」

ダメだったようです。

とはいえ、ゴルゴーン様も、そのまま戦い続けたりはせず……切り結ぶか、すり抜け

て切るか、何れにせよ剣を構え、近寄つて来ていたシャドウサーヴァントを、尻尾で払いのけて、こちらへと下がって来ました。

「——それで、これでどうするつもりだ」

「これでいい。このまま、後は……」

そして、当然の如く、シャドウサーヴァントは一步下がったゴルゴーン様を追って、こちらへと近寄つてきます。一切怪しまず、こちらの動きに反応、いえ、今は追従するよ
うに動く姿はまるで、カラクリであるかのようです。

正に、こちらが意図した通りの動きでございます。

「き、来たけど!?!」

「グレイ。後は普通に相手をしていてくれ。隙は何れ私たちが作る」

「えっ、あ、の……」

「おい引き寄せるだけかよ!?! カバー案は!?!」

「ない」

そうなれば後はライネス様の、中の方の策が——えっ。

「おい! アンタなあ!?!」

「冷静に考えろ。さつきまで、あのシャドウは二人の間を抜けられなかった。ここでも我々に手出しは出来ん」

「ただど外から入って来てる奴らが乱入したり——」
 「しない。ほれ。見てみる。もう策は成った」

一瞬、物凄い投げ捨てられた意見が飛んだ、と思ったのですが、しかしそれだけでは終わりではないようです。その手袋を嵌めた手が、虚空を指さし

——いえ、正確には。今再び、シャドウサーヴァントと激突した前衛のお二方の、その奥の方、信奉者が向かって来ていた方を指さして。

そこにぬぼう、と立っているのは、どうやら今到着したらしい、信奉者のようです。目をらんらんと輝かせて、今にも再び激突を始めた我々の元へと飛び掛かって来そうですね……競う、な？

「……あれ？」

「こない、ですね……？」

「狂信者、というのは、信ずる者の邪魔はしない。ご神体の戦いは、邪魔してはいけない神聖なもの。であれば動きも止まる。彼らに合理的な考えはない。狂信だけがある」

何人も何人も、集っては周りに集まり、しかしながら。我々を中心に遠巻きに見守りながら手を合わせ、祈る様な仕草をするばかり。他に、何もしてこようとはしません。寧ろ祈りに熱を入れている様な。

「——あー、はいはい。分かった分かった。そっか、そうだな。アイツらに『主体性』つ

てもんは存在しなかつたんだっけか？」

「彼らの動きは、全て信仰に基づいている——たとえば、その状況が信仰対象にとって致命的でも信仰を優先する。それは神の事を思っている訳ではない。信仰という物に依存しているからだ」

もはや、こちらに飛び掛かってくる気配すら、ない。です。

「我々は最早『聖戦』の一部だ。彼らが手を出してくることは無い。そしてこの大きな大きな隙は——我々にとって利にかなり得ない」

「策は成った、ってか。なるほど。反吐が出るような習性を活かした、素晴らしい作戦だ事で。式部さん、大技準備。頼むぜ」

「あ——は、はいっ！」

私たちを狙ってくる邪魔者は、今はいません。

であれば最早、決着をつけるのに——支障は、もうどこにも、ない。

「——参ります」

「おう。神業も、二度、三度は通じねえだろうさ！」

虚空に走る、私の筆——描かれたそれは、力ある言の葉でございます。顕れば、そこに込められた思いを解き放ち、仲間を寿ぐ祝福にも、相手を縛る呪縛にも、そして、滅びを謡う呪詛にも。如何様にも、なり得ましよう。

宝具程ではございませぬが。

「——えいっ！」

走る文字は、黒い影を中心に回り、包囲するかのように渦巻いて——ですが、やはり捉える事は適わず、一閃にて、逃げ道を作られてしまいましたが。

此度は当てようと思つたわけではございませぬ。もう既に。

その目の前に、グレイ様と、ゴルゴーン様が。

「お願い、アツド！」

「イツヒツヒツヒツ！ やっちまえ、グレイ！」

「逃がさぬ……！」

渾身の一撃を構えられているのですから。

逃がすことも、最早——ありえないでしょう。

第五十五回

次は海じゃああああ!! な実況、はーじまーるよー。

前回は紅の都をいよいよ攻略完了いたしました! いやー……シヤドウサーヴァンは強敵でしたね。

さて、いよいよ見えてまいりました謎の構造物! 螺旋を描くような装飾! 大きなランスっぽい形!

それが一体何なのかはまだ明らかになっておりませんが、この時点でもまあまあFG O好きな皆さまならば何となく察しはつく形は致しています。

とはいえまだ、その正体は明かされてはいませんので、まあまあ。とりあえずは謎の建造物つて事で。置いておくと致しましょうか。

『……』

『どうした? グレイ?』

『い、いえ。なんでもありません』

なんか露骨にグレイちゃんが反応したりしてるけど何のことだか一体さっぱり分からないなあー! グレイちゃんのネタバレにもなるから言えないなあー!

『……やはり、そうか』

『どうしたんですか、ダ・ヴィンチ様』

『いや。一回目、それと二回目を比較して分かる。明らかにこつちの観測精度が跳ねあがってる。紙片で維持……していたと思われるテクスチャが、こちらの邪魔をしていたんだと思われる』

『という事は？』

『うん、今は、大分周りのチェックだとか、反応の確認等が出来るようになってる。流石に精度までは回復してないけど、今まで通りの範囲はカバーできるようにはなった』

茶番はそこまで

二枚目を引つpegがした事で、マップにも鮮やかな部分が減ってきて、中心のエリアの灰色とよく似たような色が増えてまいりました。紙片を全て手に入れたらこれら全てが灰色になると考えたら、一体どれだけテクスチャで舗装しているのかという話。

そして、そのテクスチャが剥がれた事で、カルデアからの大いなる支援が復帰して来しました。

あらゆる特異点において、カルデアがスムーズな調査、及び、正確な攻略を行っていた主たる要素、カルデア後方部の支援がいよいよここから復活……まあ全力ではありません

せんが、しかしながらそれなりに復帰してくるんですよ。頼もしいですねえ。

『これなら次の海の都から十分な支援が出来るようになる、と思う。相変わらず、私しか通信しかできないのは変わらないけれど……』

『——範囲、というのはどのレベルの範囲だい？』

『ふふ、少なくともこの紅の都、都市部分なら全部カバー出来るくらいには』

『フウ。それはいい。それだけ広範囲を探索できるとは、流石のカルデアと言ったところか——であれば、海の都も、心配する必要は無いかもね』

そしてカルデアバックアップを受けられるようになる青いフィールドが、次の舞台だと思われるのですが……あの、もしかしてこれ、地面とかじゃなくて、全部水だったりしませんか？ 水没してんの？ 次の場所。

『広い範囲での探索があると、相当便利になってくるから、次の場所は』

『ほう？』

『次の『海の都』は、そもそも陸地も何も少ない場所だ。その分、探索するのが難しい』
『陸地が少ない、って事は……もしかしてその名前の通り』

『その通り。文字通り、海と見紛うばかりの大量の水に満ちた場所。それが海の都だ』

本当に水没してて草も生えない。土地にテクスチャを張るにしたってお前、イギリス

の都を水底に沈めるんじゃない。誰も彼もがかのステイシスみたいに水没をネタに出来るわけじゃないんだよ。ブチ切れるんだよ。普通は。

という事で英国民ブチ切れ♡ みたいな所行きたくないなあ。と思つてもいかないという選択肢は存在しないので行くことは確定しているのですが……あの、水まみれの場所で、必要となるものがあるんですけれども。それはご用意されているんでしょうか？

『成程。ところで質問して良いかい？』

『先に応えておくけど、船なら見つけてないから、改めて見つけるか、一から作るかの二択だ。これでいいかな？』

『——いやあ、第三特異点の時は、本当に恵まれてたんだなあ』

無理ゴパア!?(ボーボ朝)

なんてこった。探索するための船も無いのに大海原に漕ぎ出せと……?!? そんなことしたら海原から現れる魍魎霊(英国バージョン)に引きずり込まれてしまつて海原の塵にされるだろ、いい加減にしろ!

とはいえ、向こうさんもそりやあまあそこまで親切をしてくださる訳もないです。しようがないです。地道にまずは漕ぎ出すための船を探すとしましょう………んで?

今度は船探しか? 最近は探索をフル活用させてくるなあ!!!(全力)

文句を言っても始まらないので、とりあえず、一路海の都へと……

『とはいえ、このまま突入する、というのもちよつと……ここはいったん戻る事を提案させていただくよ』

へ？ 行かない？ ライネスさんそれは一体なぜ？ 一旦、竜の都の拠点に戻るとはなぜホワイ？ 情報整理ですか。ほむほむ、了解。

霧の都を中心に三つのエリアが周りを取り囲んでいるので、竜の都で一旦休んでから海の都へ直行した方が、たぶん精神的にも宜しいと判断したのでしよう。まあ戻る道中で戦闘が増える度、ホモ君が覚醒の赤得発揮チャンスを渡る事になるのですが。覚醒は使えば使う程強くなるからね。仕方ないね。

『——さて、ここまでの情報を整理しようじゃないか？ お嬢さん方及び野郎一人』
『野郎……』

式部さんの控えめな抗議ありがたい。でもホモハゲなのは否定できない……

さて、ライネスちゃんからの野郎呼びとかいうご褒美を得たところで。ライネスちゃんのご説明たーいむ!!! なお今までの経緯ではなく、ホモ君と紙の欠片に関してなんですけれども。

『今まで、何も問題は出てない——で済ませちゃ駄目だと思う。私的には』

『それはカルデア側でも一致はしてる。たとえ、今は何の問題も無いにしても、この後に触ったことで更なる問題が出ない、とは言い切れないし』

『そうなんですよねえ。ゲーム上では触れた後、特に何かデバフとかがある訳ではないですし気にしなくてもええか！』というのはプレイヤー側の都合。ストーリーとして、マスターを保護するアレも何もなく、謎の紙に触らせて回ってるわけですから。サーヴァントを維持する楔が無防備にも程がある。

『となれば——対策が必要なんだけど。それで？ カルデア側でその紙片の解析はまだ出来ないのかい？』

『いやー、まだ無理だね』

『まずその議論の最初が無慈悲な結論過ぎる件について。つ、つまりホモ君に人理の犠牲になれるという事で宜しいか……？』

『とはいえ、こつちとて何も考えていない訳じゃない。カルデアの出した結論は……身代わりの利用だ』

『成程。実に分かりやすく、そして有効そうな手だね』

『ライネス嬢、そういった魔術の行使、出来るかい？』

『出来ない事はない、レベルだね。魔術の研究では、研究の最中の自分への影響を別の物に押し付ける、というのにも必要だったりするから』

流石にそこまで外道じゃなかった。信じてたぜカルデア!! という事で、ホモ君のダメージを一時的に身代わりに移す、とかいう実に分かりやすい手を。しかし身代わり人形なんてどこで手に入れるのやら……

『ふむ。この特異点内で調達するとすれば——ここかな?』

『待つてくださいライネスさん……!』

『あはは、冗談だよ 그레이。そんな顔をしなくてもいいじゃないか』

『絶対にしないとは、思います……思いますけど……!』

『いやあ私の事を良く分かって信頼してくれているからこそその回答だなあ』

嬉しそうな顔をするなあ!

背筋も凍る様なマジの『身代わり』を使うというブラックにも等しいお答えは置いておくとして……

『それは兎も角として、一番ちようどいい場所があるじゃないか』

『身代わり……人型……ああ、あるね。ちようどいい場所』

『ああ。灰色の霧の中、いくらでも再生するから幾らでも調達が利く場所が、ね』

正解は、『霧の都』でした。

人形、文字通りヒトガタ。人間の身代わりにするにはちようどいいブツだという事で。こちらで徘徊する絡繰人形を身代わりに仕立てた後で、改めて海の都へと向かう、

という事になりました。

第五十五章・裏：しかめ面の思惑

古代ローマの街並みも、やはり霧の漂う灰色の街並みに変貌している。

王宮は既に別の形の宮殿へと姿を変えて。一枚目に触れた事で、ここらも変化はしていたんだろうが。二枚目の変化でより顕著となった、と言ったところか。

しかし、テクスチャが剥がれる事と、特異点自体が崩壊する事はイコールではないのか我々は、未だここから出られている訳ではない。

やはり特異点全体を崩壊させなければどうにもならないのか。

「しかし、英国の宮殿にローマの王宮のテクスチャを被せて、狂信者共のご神体を置くとは……権威にも何にも屈しないし、気にも留めないタイプなのか」

『実際の英国人の感想は？』

「私は別に女王に特別敬意を払っている訳ではないが。まあ、好き勝手やってくれとは思うし、それなりに腹は立つ——と、一応形式的に怒っておくとする」

——まあ個人的に、私以上に腹が立っているらしい男が一人いるのだが。

「それで？ もやっとした感覚はいかほどだったのかな？」

「顔見て分かって欲しいなあ」

「うん。そりやあまあそうだよ。明らかに不機嫌そうな顔してるもんね……そんなに嫌なの？ その感覚」

「当たり前だろ。もやつとするって言うてんだからよ。今もまあ、もやつとしてんだよ」
明らかに言葉尻も荒つぽくなっている。険しい顔と合わせて、いよいよストリート辺りに屯するチンピラにしか見えなくらいには。

険しい、といつても。もやつとしている、という言葉で済むような表情ではなく、明らかに『不機嫌』と顔に出ているのが分かる。いや、ちよつと怒っている程かもしれない。そろそろ舌打ちまでしそうだ。

そこまでする『もやつとした感覚』というのがどんなものなのか、気にならないでもないのだけれども……しかし、いい加減、この辺りも対策した方が良いのかもしれない。「はあ、頭痛くなつてきそうだよいい加減……絶対に俺に嫌がらせしたいだけだろあの紙片を用意した奴。ホントに」

「一旦、休まれますか？」

「いやあ休んだところでなつて話だよ。精神的な話だし。まあ、美人さんを見てれば気持ちも癒されるかなあ、とは思う」

「……い、癒されますか？」

「式部さんは癒し系だとは思うよ」

……いや、別に特別に心配しなくていいのかもしれない。あんな歯の浮くセリフを吐けるんだから。余裕は全然あるように見える。一応、カルデア側で観測しているバイトルに変化があつた事は間違いないので、何も無い訳ではないんだけど。

それにしても大げさな反応をしているだけかもしれない。

「——おいマスター、女を口説いている余裕があるならさっさと立て」

「あ、スイマセン。そういえば俺の回復待ちでしたね……？」

「そうだ」

あ、私が言う前に色々言われてる。

実際、我々がそこらへんで待機しているのは、本造院の調子の回復を待っていたからであるし、まあ別に待たされている、という意識はないし、それ相応の激闘の後だから休んでも全然かまわないのだが。

……ここは乗って置いておいた方が面白い、か？ いや流石に本当に精神的ダメージを受けているかで微妙な所にいる相手にそういう事をするのは避けるべきか。

「——まあ、実際もうたいぶ回復は出来た。動くにも問題は無いから出発するか？」

「ならばさっさと立て」

『いやいやいや待ってくれ。本当に大丈夫なのかい？ ちゃんと確認して？ そんな女の子に冷たい目で見られたからって圧力に負けないで』

「いや別に本気である程度は回復できたからいいんだけどもなあ」

しかしまあ、流石は三つの特異点を越えてきた精鋭か。先ほどまで、本気で命のやり取りをしていたというのに、それを感じさせない。こういう時に切り替えが早いのは、実にいい事だと思う。

「あの……心の疲れ、というのは、馬鹿に出来ませんから……つらいなら」

「ああいや、グレイさん大丈夫。本当にそこまではきつくはないから。きつかったら多分恥も外聞も無く吐いてるし。ゲロゲロに」

「そ、そんなんですか」

「はっはっはっ……ごめんね、反応に困ること言つて」

まあ実際見た目キツイ男が『弱つてたら間違ひなく吐く』発言してきたらそりやあ私だつて困つてしまうが……一見して見ただけでは、それを強がりで言っているのか、それとも本当になんてことも無く、寒いジョークを言つて滑つてしまっただけなのかは、分からない。

「——まあ動けるなら、出来る限り直ぐに動いた方が良いだろうね。取り合えず立てこもれそうな一室に避難しているとはいへえ」

『開けろ！ 異端審問兵士だ！』

『逃げるなあああああ!! 断罪から逃げるなあアアアア!』

『もうこれで……終わってもいい……』

「——うるさい上に、彼女には狭いだらうしね。うん」

という事で、ここは話題を変える事を優先。取り合えず、現状のゴルゴーンのいら立ちの半分以上……というか、殆どを占めている現状を敢えて説明口調で。そうすれば注意も引きやすい、かなと。

いや、実際ずつと体を小さく縮こまらせているゴルゴーンが可哀そうになって、というの無い訳でも無いのだが。

「ではそこをぶち壊して外に出るぞ。構わんな」

「あーうん。大丈夫だと思うよ。後は逃げるだけだし。よしんば包囲網があつても、これだけの戦力で突破できないなんてことは無いだらう」

「……ごめんなさいね?」

どうやら余程この窮屈な場所に押し込められていたのが気に食わなかったらしい。もう既にエネルギーをため込んで、全力でうち放つ準備を——つて。

「ちよ!?! ここですんなものぶつ放したらまず——」

「——」

「——ああ駄目だコレ……ぜ、全員反対の壁に寄れ! 巻き込まれるぞ! 撤退!」

その言葉に、状況が理解できたのだらう、全員が急いで壁際へ——私を抱えて逃げ出

してくれたグレイに大いに感謝をしながら。

「——らあっ！」

紫の光が壁際で弾け……壁を押し退け、砕き、光が全てを飲み込まんと暴れた後には。相当サイズの大穴がドカンと開いていた。

アレだけの魔力、やはり近くに居たら塵になっていただろう。

「さっさと出るぞ。早くしろ」

「もーゴルゴンさんったらせつかちさん！ さ、式部さん。行こうか」

「は、はい……」

全員が外へと飛び出す。

外を確認。どうやら誰もいないらしい。本当に全員が王宮に殺到しているなら、周りも取り囲まれている事も想定していたのだが。それとも……今の魔力の爆発で相当数が吹き飛ばされたか。まあ何れにしても、誰もいないならそれが一番だろう。

当然言わない。別にいう必要もないだろうし。言ったところで現状に何か関係する訳でも無いだろう。変に士気を下げの方が今はよろしくないだろうし。

「んで、どうする!? このまま『海の都』に行くか!？」

「いや、一旦『竜の都』の拠点に戻ろう！ 勢い任せはよくない、どうせどっちの都からも直接行けるんだ。落ち着いて、情報を整理してからでも遅くない」

「はいはい。であれば捕まる前にトンスラするか！」

……引き続き、嘘は言っていない。うん。

『海の都』には行くべきじゃない、っていうのは本当だ。色々情報の整理も必要だろうし、当然ながら今後の対策も必要だ。今の所、紙片を触る事でテクスチャが剥がれている以上、紙片を彼に触って貰っているというリスクに、一つこちらから手を打つ事だつてしなければいけない。そのプランも、頭にはある。

だが致命的な問題はそこではない。

海の都は、グレイと共に一応、調査しようと思った時……最も『調査困難』として、最速で切り上げた場所だ。ある意味で、霧の都以上に真つ当な探索は不可能に近い。

というか、あそこをどうやって調査するつもりなんだろうか。あのしかめ面は。

「……こんな事なら『出師表』でもう一人程、呼んでくれても良かっただろうに」

「ら、ライネスさん。しーっ、しーっ、です」

「あ……すまない」

つと、考え込んで忘れていた。

どうやら、竜の都、紅の都は、確認した限り調査は終わっているらしい。一体、今何処に居るのかはサッパリだが……困役としては、そこそこの役割を出来ているのではないだろうか、思う。

彼はこの特異点の背後にいる者を、特定できるのか。
ま、信じて待つてみるとしようか。

第五十六章

海に行く前の準備、はーじまーるよー。

危ないなら身代わりを立てればいいじゃない!!!

という事で、昔から身代わりの代名詞を自称（大嘘）してきた人型、すなわち人形を鹵獲し、ホモ君の身代わりに仕立て万が一の事に備える。

これ以上の完璧な作戦は無い。勝ったなガハハ。という結論が出たのですが、じゃあそんなものを何処から調達してくるんだという話で。

という事で一路、向かったのは最初に立ち入った危険地帯、霧の都でございます。

しかし、初期の人形塗れの危険地帯にもこういう使い道があったとは。意外ツ！ それは身代わり製造場!!

『機械人形だし、どの程度の身代わりになるかは分からないけどねえ』

しかし希望的な観測に五寸釘を叩きこむが如くダ・ヴィンチちゃんの現実的な意見。まあ実際そうなんですけれども……やらないよりはマシ、って事で!!

基本的に、三つのどのエリアからも霧の都には進入できるようで、拠点としている竜の都からそのまま移動。因みに道中は当然のようにワイバーン君たちが送り迎えをし

てくれます。クソほどお世話になりたくない相手だア……

『いい機会だ。霧の都から、例の建物を見学してみるとしようじゃないか』

『で、でもライネスさん。以前は……』

『なあに、以前は初見のエリア、その後は完全に包囲されている状態に追い込まれたけれども、今回は情報があるんだ。いくらでも悪辣なプランを考えていけばいいのさ』

という事で、中の人が引つ込んだライネスちゃんの提案で、この辺りの調査もついでにやる事になりました。ふむ。最も危険なエリアに突入するのに、当然の如く追加のプランを立てましたか……二兎を追いかけた結果、薄い本案件か。大したものですね（一）
冗談はさておき、霧の都でやる任務は二つ。一つは人形を何体か鹵獲。もう一個は巨大な建造物の調査。何方もこれからの特異点解決に関わつて来そうな重要なピースではあるので、気を付けていきましよう。

『——さて、とりあえず、大方針は『包囲されない』。ここに尽きるだろう。という事でそれを踏まえた今回のプランは……マラソン、だね』

『マラソン……ですか？』

『そうだ。君のお師匠が一番苦手そうなジャンルだ』

そんな重要そうなピースを確実に回収する為に。最も危険なエリアに突入して何をすればいいのか、と言えば……要するに足を止めずに逃げ続ける事、になります。

敵に包囲されない様にするにはどうすればいいのか。動き続けて即座に攻撃、包囲される前に移動して振り切るか、包囲されても動きを止めず、一点を突つ切つて逃げる。とまあ、超ドスタンダードな速度重視のプランですね。

『このプランの重要な部分は、出来るだけ足を止めない事。なんだが。それにはちよつと致命的な部分が存在しててね』

『——あの、ライネスさん。拙、なんとなく分かつてしまった、気が……』

『グレイ。遠慮しなくていい。その代表的な問題が私だ』

なお運動得意な人ばかりだとは一言も言っていない。発案者のライネスちゃんも、サーヴァントとはいえ、特別運動が得意という訳でもなく……小柄で、一步の歩幅も少ないともなれば、まあ要するにおいていってしまう可能性が高い、と。

『以前は、見つからずにこそそこそ行っていたから、スピードとかは求められなかったけれども。今回は一当てはする必要がある。そして、一当てしたら先ず追いかけるけれど、その後、出来れば中心の建造物についての情報も得たい』

『でしたら一度振り切つたら隠れれば……』

『ダメだ。隠れた後に万が一周りを固められたら以前と同じ。出来るだけ、最低限の消耗で済ませたいからね。短期間で、パパッと終わらせるには』

『動きを止めない方がいい。でも、ライネスさんは……』

いやー困ったね、みたく笑ってんじゃねえ！ お前様のプランガバガバじゃねえか！
『という事で。それをカバ―するために、そのマスター君にも一肌脱いでもらいたいのだけれど。良いかな？』

『マスターに？』

『うん。君くらいの体格なら、私のこの軽い体を持つても、全く労苦じゃないだろ？』

まあ、要するに担いで走れ、と。

それならまあ別に……と、ホモ君が霧の都でのバトルに参加できなくなりました。まあマスタースキルを活かして、全力でサーヴァントを支援し、大暴れさせるタイプのマスター（聖杯戦争の基本）だったら痛手だったかもしれないがホモ君ですし（目反らし）

『ふふん、頑張っている姿を見せてくれたまえよ。私は働きの者が大の好物だからね』

それってどういう好物なんですかねえ……？ 意地悪な顔で笑っているライネスちゃんは兎も角として、この探索に、ホモ君のパーティにとつては何ら問題のない制限が付いたという事で、実質フルスペックでプレイが出来る。ある意味ラッキーです。

そんなフルスペックパーティで無事に到着したわけなのですけれども……

さて。霧の都では、兎も角只管に人形を叩いて壊して回って、確率次第で人形を確保できる、という要するに周回ステージでございませす。という事で、まあやつてる事は完

全に作業なのでね……全カットだ!!!

という事で今度はダ・ヴィンチちゃん達、カルデアの調査でございますよ。

今まで人形たちをシバキ回していた間、ダ・ヴィンチちゃんも地道なお仕事に終始されていたので、成果出て欲しいですねえやっぱいい……

『確保完了、本格的に身代わりにする作業は拠点でやるとして——後は?』

『こちらの作業なんだけれども……うーん、凄いなこれ。全反応がでつたらめだ! 数値しか出てなくても明らかにコレ『偽装されてますよっ!』って主張しかしてない』

それってもしかしなくても、何の成果も得られませんでした……ってコト……!?

いや、流石にそれは冗談だと言つて欲しいんですが……どうやら冗談ではない模様です。めちやくちやに偽装されたせいで『何も分からない』を得た状態になっておりますねえ! 無を取得じやないんだからもうちよつと何とかならなかったのか。

『やはり、そう簡単にはいきませんね……』

『いいや、そうでもないさグレイ。色々分かる事もある』

『え?』

しかし、グレイちゃんと同じ感想を抱いていたこの情弱のプレイヤー側と違い、頭の良にお二方には、それだけでも十分な情報になり得ている、らしいです。

『その中でも最も大きな事が一つ。偽装のされ方だ』

『され方?』

『普通は『偽装されている』という事が分からない程度に上手く誤魔化するのが基本だからね。しかしそのセオリーを無視するほどに、ここには色々細工をして情報を秘匿している』

『——セオリーを無視したいほどにこの情報を秘匿したい、という可能性がある』

『ああ。恐らくはそうだろうね。誰しも、触られたくないモノは、上手に隠そうとするだろうけど……本当に触られたくもないものは、逆に見えやすくなる程になりふり構わず隠そうとする人間も多かった——時計塔でもね』

例えばですが、自分の黒歴史ノートがあつたとして。それを誰にも見られない様に隠したり、部屋の奥深くへと封印したり、ガツチガチに守りを固めたりすると『あ、これ触れられたくないんやな』って判断しますよね。誰だつて。

そういう事が起きているようです。それをめっちゃ偽装されているっていう一点から即座に判断するのはサスガダア……

『万が一の確率で、アレが敵のブラフ、要するに目立つ罠である可能性も今までは、あつた。だけでもここまでガツチリ『正体がバレないように』ってしているなら、それはな
いと言つていいだろう』

『アレを調べる価値はある。アレの正体を解き明かせば、間違いなく前進する事が出来

るんだ——という確信を得られた。これは大きな収穫だぞ?』

確かに『なんも分かんもの』を調べに調べてなんも無い、空振りつてなった時のダメージって大きいですからねえ……それが無い、確実に成果はでる、と分かるのは現場にとつて相気が楽になると思われますねえ!!!

分からない事が分かった、つていう所からここまで思考を巡らせるのは、この二人は本当に頭の良い大人として書かれてる模様です。

さて、相手がどうしても秘匿したい場所という確信を得て、進んでいる方向は間違っていない、という指針の確認をしたところで、撤退。いよいよ次のエリアの攻略に移る事になります。

『……』

『グレイ? どうしたんだい?』

『あ、いえ。すみません。その……い、行きましょう。なんでもないです。』

『——ふうん? そうかい?』

とはいえ。

ライネスちゃん曰く、幾つかわかる事もある、との事だったので。グレイの反応についても、多少なりとも想像がついている可能性も、あるのかもしれない。

『形は、見えてきたかなあ』

という事で、ライネスちゃんが意味深な笑みを浮かべたところで、今回はここまでとなります。次回は……さて、第三のエリアにおいての大きな大きな、あまりにも大きな問題が残っているのですが、それを如何に解決するのか。

楽しみに見てくださいようか。

第五十六章・裏：海の脅威のあれやこれ

目の前には、もう灰色の薄暗い霧が漂ってきているのが見えて来ています。

そして、その霧の中に顕れ、そしてある程度はその姿を露にした建造物も。

アレは、この特異点を維持している者の、拠点なのか。それとも、全く別の何かなのかと。頭脳役お二人の議論は尽きませんでした。

とはいえ、結果、断定はできない、という結論に至ったのですが。一つだけ。先ほどダ・ヴィンチ様が例の建物を遠目から測定したその結果を見て……『あの建造物の外は固い外殻……卵の殻っぽい』という結果から来た感想だけが、今の所です。

『もしあれが卵だと仮定して。さて、一体どのような中身を守っているのか』
「特異点そのものを維持する文字通りの楔とか？」

『中身ぶるぶるで流動系の楔とか、頼りにならなさそうだねえ』

「料理してお供えものにもした方が良いんじゃない？」

『卵系のお料理。英国ならスクランブルエッグとか？』

「何の話をしている……？」

恐らくは、建造物に関しての話だと思われます。途中から何故か卵のお料理の話にす

り替わって行きましたけれども。

どうして急にそうなったのか、頭の良い方というのはやつぱり、常人には理解しがたい思考をしているものでしょうか……等と。頭の中が、『はてな』で埋め尽くされておりますが。

「やつぱ卵の形崩すのは良くないし、そのままゆで卵が一番宜しいのでは？」

「ふむ、一理はあるか？」

『美味しさはスクランブルエッグの方がいいと思うけどなあ』

「貴様ら本当に何の話をしている……？」

そう思っていたらそこにマスターも参加して混乱が加速しました。ゴルゴーン様の明確に怪訝なお顔も、更に深くなりました。

「生贄つてのには形つてのが重要だからさあ、やつぱり、そのまま変に加工しないつてのは縁起がいいんじゃないか——つと、そろそろご到着か」

「おや、暇つぶしのお時間も終わりかな？」

『その様だねえ。じゃあこつちも仕事するかあ』

……とまあ、そのような話をしていけば、何時の間にか到着でございます。霧の都。入り口の辺り。ここで人形を鹵獲して、身代わりとして、マスターの危険を出来るだけ軽減するのが目的。

「しっかし灰色だよなあ。剥がれた場所と色合いがそっくりじゃ」

「そう考えると、この霧の都は大本のロンドンを元にしたエリア、という事かな」

『そう考えるのが普通だろう。全体は覆いきれないから、中心だけは残して利用するのは随分とまあせこましいというか』

「でもま——ここ以外は、多分だけどそういう意図なんだろうなつてのは、想像つくよなあ、いい加減さ」

マスターが、ふと、といった様子で呟いたのはその時でした。そう思わないか、とでも言いたげにこちらに視線を向けて来たのですが……しかしながら、私には何をおっしやっているが全く分かりません。

「えつと……何の意図ですか？」

「……いきなりで悪い。ここの作りだよ」

「ここの作り。今までの二つの領域のお話ですか？」

「そうそう。竜の都も、紅の都もさ、まあそつくりの形をされてるじゃないの。今まで俺たちが巡つて来た所を、さ」

……そういわれてみれば、そうなのですが。

竜の都は、牧歌的な景色の中に跋扈する無数の飛竜を、旗を掲げた黒い魔女が率いる

第一の特異点——オルレアン。

紅の都は、狂気の神祖に率いられたローマの兵隊。ローマとローマの激突を繰り返していた第二の特異点——セプテム。

この二つに、確かにそっくりではあるのです。

「これで何の意図も無いっていうのは、詐欺だと思ふんだよな」

『まあ、それは薄々気が付いてるけれども。となると海の都もそういう事かな?』

「じゃあシャドウサーヴァントはどっちになるの? 黒ひげ? 筋肉達磨?」

『うーん海戦主体なら前者、島に上陸して戦う事になるなら後者かなあ。どっちもって普通にあり得そうなのがねえ。普通に凶悪なのはヘラクレスの方なのかな?』

もしヘラクレスがもう一度我々の前に立ち塞がった場合。もう一度勝てるか、と言われますと。無理です。シャドウサーヴァントという形に零落しても尚、恐らくは今までの二人を相手にした時以上に。

「……へ、ヘラクレスって、拙は一人しか知らないのですけれど、あの、ヘラクレスさんなんでしょうか」

「ひひっ、お前でも知ってるレベルついていやあアイツしか居ねえだろ。とんでもねえ化け物とぶつかり合ってるなあ teme エら!」

「おう褒めなくて良いぞ。っていうか、多分厄介さで言うなら、黒ひげの方が厄介だ」
ですが、マスターの感想は、それとは一つ違う模様で。

『いやー、厄介さという意味では確かにそっちも中々だよねえ』

「黒ひげって、師匠が持っていた、アレ、でしょうか」

「うん、あの樽に詰まったオジサンの元ネタ。世界一有名で極悪な海賊。知名度はハラクレスと同等の化け物。サーヴァントとしては、確かに脅威だね」

「舞台が、海じゃなけりゃあそうでもないんだけども」

しかし、聞いてみれば確かにそうです。次の舞台は、水に沈んだ場所という事……であれば海の上の黒ひげ、という怪物を、今度はドレイク船長抜きで相手にすることになるという……えっ？

「あ、あの、勝ち目って……ありますか？」

「ないっ。ぶっちゃけヘラクレス相手の方がまだ勝ち目あるんじゃないかな」

『あーそうだね！ こっちには船頭が居ない！ 黒ひげのシャドウサーヴァントを出されて、それがキツチリ海を渡るだけの力を持つてたら終わりだ！』

「……もしかして黒ひげさんって、物凄い人なんですか？」

「少なくとも樽に入ってピョンピョン飛ぶ人じゃないよねえ」

あの時は、ドレイク船長の巧みな操船技術と、海賊の皆様、ゴールデンハインド号という名船があつて、それで漸く互角だったのです。そ、それが無いという事は、要するに我々は海の上でただの狩りの獲物という事に。

そもそも我々は、勝負の舞台にすら上がれない、という事にならないでしょうか。もしかして、ですが。

「マジでどーしよーかなー……太陽を落とした女船乗りさんいないけど」

『どうする？ 現地召喚する？』

「ランダム要素が強すぎるだろう。船乗りを引き当てる可能性も無いのに、リソースを費やすのは、どうなんだろうね」

「じゃあ船員どうするん？」

「まあそう焦らない。今は目の前に集中、その後に改めて話し合うとしようじゃないか」
……確かに行かない、という選択肢はない以上、確かに焦って論ずるのはマズいのかも知れません。船員の当てがない以上は、それを補うだけのちゃんとした作戦を立てないと危険なのは間違いありません。

それに、この先は——あまりにも危険な領域。そこに入るにあたり、ここを安全に抜ける為に色々と策を練ったくらいには。

「さて、いよいよ身代わり人形の確保と、近辺での建造物の調査開始だ。足を止めぬように駆け抜けるとしよう——君がね？」

「あーはいはい。必死こいて担いで走るとしますよ……本当に走れねえんだよな？」

「ああ。私の魔術は基本的に研究用に調整されていてね、身体強化も出来ない訳ではな

いがたかが知れている。元の身体能力を考えると、特異点を越えて来た君たちに匹敵するなんて、口が裂けても言えない」

無理無理、と申されているライネス様を抱え、マスターは駆け抜ける事になっております。私はゴルゴン様に抱えていただくことになっております……単純に、動けない者を抱えて走る、ただそれだけの事なのですが。捕まれば危険、のこの領域においては、それこそが必要である、と。

「んじゃ——お姫様、でいいかな？」

「おや、そんなロマンチックで、非効率な抱え方でいいのかい？」

「女の子つてのはそういうのにあこがれるもん……という偏見がある」

「古い偏見だねえ。今だとそういうのつてセクハラに当たる場合もあるらしいけど。まあいいや、頑張りたいたなら任せるとも」

ライネスは、マスターの腕の中。そして、私は既にゴルゴン様の腕の中、俵の様に担がれて——ふと、ライネス様の方に視線が行きました。彼女は……霧の向こうを見つめているように見えました。

「——さて、何かしらの痕跡を見つければ、良いんだけど」

「そこはダ・ヴィンチちゃんに任せるかねーんでない？」

「あはは、そうだね……では、諸君。突入するでしょう。グレイ、一番身軽に動けるのは

君だ。くれぐれも頼んだよ」

「は、はい！ 頑張り、ます！」

断章：獣コンビのエトセトラ

「——ンンン、宜しいですなあ。実に」

海坊主。船幽霊。蛟。

男の脳内には、思い浮かぶだけの水の怪異という物が浮かんでいる。前半二つはあくまで餌に過ぎない。強化したシャドウサーヴァントの性能確認も兼ねてはいるが、基本は捨てるつもりだった。

しかし、第三特異点を模倣としたここ、『海』という概念を特異点の形としたこの場所であれば、故郷の怪異も取り入れる事も出来よう。好き勝手に暴れられる。そう考えてしまうと……思わず吊り上がる口の端を抑えられない。

「まあここで敗れ果てたならそれでよし……突破してくるのであればなおよし。何方にせよ此方にとっては得しかない。我らが大将も、実に悪辣な事！」

「——なんつくソゲー。拙者ならコントローラー投げてますなあ」
それに。

自分には——ここで切れる、強力な切り札がある。そんな自負が彼には有ってこそこの余裕である。圧倒的な慢心とも捉えられるようなこの、この、この満面、且つ、愉

悦に満ちた笑みなのである。

準備も万端の上に、完璧に制御できるだけのサーヴァントを絞った。強すぎてもいけない、かといって聖杯によって作られたうたかたの夢では召喚すら難しい……であらば。この第三特異点において最も暴れた彼に、リソースを費やすのは当然と言えた。

「それはもう！　好き勝手にさせぬように、貴方様まで召喚し、最大の戦力を託しておりますれば!!!　存分に『リベンじまっち』を楽しんでいただければ！」

「BBAいないんでしょ？」

「ええ、まあ」

「じゃーイマイチやる気起きんですわなあ。拙者カルデアの連中に恨み自体は無いですしお寿司。リベンジする相手が居ないとなあ」

……最大の問題として、その当人である——黒ひげ『エドワード・ティーチ』が一向にやる気にならない事なのだ。召喚した時からずっとこれで、未だやる気を引き出せたことがないのである。

自分が素直で分かりやすい……とは全く思っていないのだが。しかしながら、少なくともこの髭よりは扱いやすいという変な自信すらついていた。

「んねーマスター？　もうちよつとこう、拙者のハートにい、こう、ビビッ！　と来る様な報酬とか、頂けないんですのん？」

「ふむ……財宝では不足ですかな？」

「不足ですなあ」

そもそもマスターに普通に従わない。神秘の濃い時代の生まれでもなくせに、性根が京都などにうろついている、選りすぐりの魍魎魍魎やら魔獣共やらのそれなのである。反英霊ではあるのだが、それでも一応は人間であるといつの間にか忘れそうだ。

「——分かりました。何か欲しいものがあれば希望を聞きましょう。ライダー」

「全くう、初めつからそういえばいいじゃないですか。まだるっこしいのは拙者大大の苦手でございますよおん」

「貴方、まだるっこしい手とか大のお得意でしように」

「得意なのと好きなのとは違うって奴ですな」

「……確かに、貴方は気に入らなければ非常に直接的な行動をしようとしてきますし」

さらに言えばこの男。常にこちらの寝首を掻こうとすらしているのだから始末が悪い事悪い事。彼自身、目の前の大男を始末できるだけの術師であり、さらにそれなりにフィジカルにも自信があるからそう容易くはさせていないだけで。

例えば、こちらの総大将との通信している時だとか。

全くもって背後への注意は怠れない。一瞬でもそういうのを怠ったら、その瞬間に鉛玉がこちらの後頭部から前頭葉をぶち抜いて脳漿をまき散らしつつ消滅しかねない。

一応マスターではあるのだが、どうやら彼は自分とはそりが合わないようで。

一瞬でも隙を見せたら喉元を食い破られかねない。

まあこの体は身代わり故に、そうなつても余裕ではあるのだが。流石に何度も何度も死ぬ感覚を味わうのは流石に勘弁してもらいたい。

「それで？ その直接的な行動を抑制するには如何すれば？」

「そりゃあやつぱりおにやのこの出合いですぞー！」

「そうですか。直球ですねえ」

しかしながら、その捻くれた性根の割に欲望はドストレートなのは幸いと言えば幸いなのだが。もしこれで、こちらの迷惑を態と崩そうとして『マスターの命』だとか言い出す愉悦部であつたら、如何に有能であつてもその首を落とさざるを得ない。

金、女、権力。そういうので釣れるのが一番だ。とはいえ、その女をどうするのかを考えてしまうと迂闊な女は与えられなかつたりもするが。

「マスター、居ませんか？ マスターの身近に、女神様系の美形で、超絶ロリロリしていて、それでいて相当にプライドの高い、拙者が思わずおみ足を舐めたくなるようなブレイクスルー美少女つて奴」

「……」

「こうである。」

全く、全くの偶然である可能性はある。あるのだが。しかしながら相手がこの男であるというだけで不安になる。

どうして、こちらが確保している『女神』の特徴をそうも完ぺきに捉えた要望を、しれっと出してくるのか。

「——拙僧の元にはいませんなア」

「そつかー。そういう匂いがしたんだけどナ。気の所為だったか〜」
これである。

油断していたら、何時の間にかこちらの総大将に取り入っているとかなり得るくらいにはこの男、実に頭が回る。この見た目で怪力乱麻ではなく頭脳派なのは些か以上に面倒に過ぎるのである。

というか、匂いとは一体何だ。

「ですが、敵にはいらつしやいますぞ?」

「えっ、マジ」

「ある程度、特徴を捉えてはいますから悪くはないかと思うのですが……さて、このような感じなのですが」

という黒ひげの態度が実に面倒なので、気を反らすために敵の姿を見せてみたりする。本来は、この特異点に彼らだけを閉じ込めるつもりが、いつの間にやら余計な輩が

何人か紛れているのは、もう把握はしている。シャドウサーヴァントと視界を共有する程度の事は、そう難しくも無いのだ。

「ほー……おとおおとおおとおおおっ?!」

「如何でしょうか」

そのうちに一人。まあこの男の趣味に合致しそうな女が居る。

ライネス・エルメロイ・アーチボルトと名乗るサーヴァントは、この男が口にした全ての条件を満たす様な見た目をしている——その姿を見せるだけで、やる気が煽れるならば安い物。

何よりも。このサーヴァントはリンボにとつて一つの悩みの種だったからこそ、出来るだけ早く対応したかったというのがある。彼女が召喚されたのは、本当に唐突で、不意打ちにも近い出来事だったのだ。

魔術の秘奥の一つを元に編み上げた術でここを覆って、ここを防衛に最も適した守護者を配し。様々な細工を行った。脅威へのカウンターとしてここに呼ばれたサーヴァントもたった一騎だった。

「うっわ凄いですなあ、こんな『小悪魔』してる少女なんてこの世にいたんだ……これがオタクの待ち望んだエルドラド……!」

「大変ご満足されたようで」

そんな中で、突如として召喚された二人の少女達は、リンボにとっても完全に想定の外の出來事だったのである。

あの一人だけなら、自分の想定範囲内。しかも特に反抗的な作戦をする訳でも無く。こんな厄介な後は策が成るのを待つばかりだとばかり。とか思ってたら取り敢えず逃げ出した後に唐突に二人ほど呼び出された訳で。そりゃあ拙僧も最後まで驚きたつぷり、と言い出したかった。

厄介なのは、先のアーチボルトだけではない……もう一騎もそうだ。この特異点の性質上、灰色の彼女はこの特異点を崩壊させる一因になりかねない。彼女だけならまだしも、それを扱い熟す頭脳も一緒にいる辺り、恐らくあの二人が呼び寄せられたのは明確な『対策』だと思われる。

「彼女の扱いはお任せいたしますよ、黒髭殿」

「——よっしゃ、やる気出て来た。ちよつと明日の未来を先取りして本気出す。轢殺！ 略奪！ 凌辱！ の3Rですぞお！ ぐひよひよひよひよひいつひっひっひっひっひっ！」

万が一、後話の黒髭を召喚しておかなければ。そのまま『あの中』にまで到達されていた可能性があった。

とりあえず、ここであの二人にはご退場いただき。

もしあの少年がここを突破できたならば、あの少年を最深部まで誘導する——後は、あの塔を閉じれば、それで終わり。楔はそのまま、牢獄へと早変わりする訳である。

「——しかし、あの方も恐ろしいものだ」

無理矢理ではいけない。

自分から踏み込んで、自分から折れるという手順が大切なのだ、と今の主が言っていた事を思い出す。言い訳を作る余地を与えてはいけない。我々が貶めようとしていた、という感情を与えてはいけない。

自ら心をへし折らせる事でこそ——彼は、主にとつての最高の『導』となるのだと。そう言っていた、あの顔。

自らの悪辣さを柵に上げ、正に怨靈らしい、実に性根のねじ曲がった考え方だと。リ
ンボは、改めて苦笑いを浮かべた。

第五十七章

荒れる海に漕ぎ出す前に船を造る実況、はーじまーるよー

身代わり準備完了！ ヨシッ！ 後は船だな！ で？ 船の作成なんてそもそも出来るんですか？ 誰も出来ねえじゃねえかあ!! という所まで来ました。つまり、始まる前から我々は詰んでいたのだ……！

いやまあ、そりゃあそうですよ。第三特異点自体が、ドレイク船長という超ド級の当たりの船長と船がある、という奇跡の重ね掛けみたいな状態だったからスムーズに攻略できたものの、そもそも船の専門家なんていないカルデアで、どうやって水が大半の場所を攻略するんだという話です。

ちな、第三特異点で既に特定の船乗り系サーヴァントを引き当てていた場合ですが、第三特異点にて、ドレイク船長と二つの船を並べ、黒髭、アルゴノーツとの三つ巴大海戦となるド派手第三特異点に変貌したりするのですが……それをやる機会はまだありません。

というか、それまでに特定の船乗りサーヴァントを引き当てるのが面倒に過ぎるんですよね。多くの英霊の中からたった一人、二人を狙う事の困難云々。

そんな事はどうでもいい。今は現状の致命的な危機ですよ。

『今まで幸運に恵まれて、特異点攻略の地形に悩まされることは全くなかった。けど軍師として言わせてもらおうと、戦う時に真っ先に対処する問題の一つが、地形関連だったりするわけなんだよね』

『因みに解決手段は……』

『万能の天才たる私にも今の所は存在しない！ いやーカルデアってギリギリだねホント！ 現場に行けたら万能振り発揮したいけど、手が届かないって大変！』

つまり……これはどうしようもない、つてコト!? ワ……! ア……泣い……ちやつた……! そりゃあ泣きもする。どうして最初の一步踏み出したら水底に沈んで足を取られなきゃいけないんですか(半ギレ) こちとら水没王子じゃねえつつつてんだろうが!

『海を渡る手段、どうすればいいんでしょうか……』

『いや、無い事は無いよ』

『あるんですか!?!』

えっ!? あるんですか!?! (困惑)

流石この特異点の水先案内人。カルデアでは『うーんこりゃあキツツイね』としか結論を出せなかったこの状況に対して、一発パァンと。なんという打てば響く金の如く。

パーフェクトだライネス（当主並感）

『グレイと調べた時。海の都は、海の如き水面が広がる場所だという事を確認した。当然のようにここら辺の砂浜だって調べていたのさ。グレイも、その時の事は覚えているだろ？』

『は、はい……遠くから様子を伺う位に、留めていましたが』

『そして、その砂浜に、流れ着く船は多く。その中には船の残骸もあれば——文字通りの幽霊船が、泊まる事だってあるんだ』

『幽霊船？ そんなものが？』

『ああ、見たとも。虚ろに海を彷徨い、静かに砂浜に停泊する。ポロポロの船を、ね。正に海をもしたエリアらしい仕掛けじゃないか』

幽霊船。

第三特異点では幾度となく交戦し、何度も沈めた、海の怪異。

第三特異点ではただのそこそこ厄介な敵としてだけ出てきましたが、しかし現状、では違います。水を渡るための足もクソも無い我々にとつて、海を彷徨う亡霊は、確かに足にはなり得そうです。

ただ、彼らつてそんな都合よくこつちにやつて来てくれるんでしょうか。という疑問が当然沸いて来るわけなのですけれども。

『亡霊は、大なり小なり生前の行動をなぞる——だろう？　グレイ』

『あ、はい。あくまで例外は、ありますが……』

しかしここでその疑問に答えてくださるのは、今まで戦闘要員として大活躍して下さっていたグレイちゃんでございます。

『死して肉体を失った彼らは、しかし、その思いの強さから現世に留まる都合上……その強い生前からの思いに基づいて行動する事が、多い、です』

『成程、であればそれを利用して……ってコトかな？』

『その通り。件の幽霊船に乗りさえすれば、海の移動だけなら何とかなる』

おー。グレイちゃんが頼もしい。亡霊のスペシャリストとしての彼女の一面を全面的に出しています。グレイちゃんは、原作でもロード・エルメロイ二世に拾われるまでは、ご実家で墓守を営んでいらつしやつたので、そういう方面には多少の言がある。ただの気弱な死神少女ではないのです。

『……問題は、移動は何かなくても、そう都合よく船が動いてくれるかどうかは分からないってことだけど』

『それに関しては祈るしかないね。ここに戻ってくる、ここに停泊する、って事は分かっている船でも、何処へ向かおうとしていたのかは分からないし、行き先を変えることだってできやしない』

『この状況での博打は些か以上に勘弁願いたいなあ、と思つてしまふのは凡庸な感想かな?』

その『亡霊船に乗つてみた』した結果として、ただ乗りつばなし症候群になつてしまふ可能性も十分ありますけれども。

結果として俺たちが海の亡霊になる事だ。なんとというハゲ死神。ホモ君は不遇枠である可能性が? 不遇枠、海……はっ!? 蟹!? 蟹が何故ここに!? まさか自力で脱出を? (無言の腹パン) ホモ君はまだ蟹ではない。黄金聖闘士で一番好きなのはふたご座と蟹。デザインいいですよね。

それはともかく
閑話休題。

まあ分かりやすく言えばその幽霊船に乗つたとしても、乗つてるだけになる可能性が実に高いと。行つて、帰つて、さらに言えば、島を探索できなければ紙片を探すことだつてできない訳ですよ。つまりただ幽霊船に乗るだけではどうしようもない、と。

ここはカルデアの誇る頭脳と、時計塔の誇る策略家のお二人で、この状況を覆す何かしらの策をですね——

『亡霊を操る、なんて真似。それ専門の魔術師でも居なければ無理だよねえ』

『船があつても、行き先を決められなければ結局漂流してるのと変わらないからねえ』

『いつペン漂流でもしてみる?』

なんもなさそうだなあオイ！ 漂流でもしてみろって!?

カルデアも今まで、正に幸運と最大限の頑張りを合わせた『奇跡』の連発で越えられない筈の壁を無理矢理に突破して来たわけなのですけれども……今回は……今回ばかりは少し……厳しいのかもしれない……

『波に揺られながらのんびり考え事してみる、って言うのも悪くないんじゃないかな』
『いやあ、漂流しちゃったらそりゃあ敵からしても格好の獲物だろうし——?』

おやつ？

ここで反応したのはライネス・エルメロイ・アーチボルト選手！ 一瞬驚いたような表情を浮かべたその直後、臀部から伸びる悪魔の尻尾がにより！ そして顔も明らかにデヴィルスマイル、頂きました！

明らかに何か思いついたお顔です。

『——なるほど、そもそも前提を変えればいい訳か』

『お？ 何か思いついたのかい?』

『ああ。よく考えてみれば、どうして我々が態々骨を折る必要があるのか。うん。ダ・ヴィンチ殿。君のアイデアに乗ろうじゃないか』

『ん？ あ、漂流するのかい?』

『果報は寝て待て、ってニホンのことわざでも言うんだらう? なら寝て待ってみよう

じゃないか。実際』

ほう……?!

ライネスが思いついた謎のプラン。プレイ中の私としては全くもってピンと来ていないのですけれども。さて、一体どうやって紙片を探し出すつもりなのか。果たしてホモ君がずっとアイテム欄に入れている身代わり人形君は果たしていつ使うのか。そもそも何処にそんなデカブツを入れているのか。もしや背負っているのか!?

等とまあ、どうでもいい事も気にしつつ、今回はここまで。次回は海を渡る幽霊船に飛び乗って、海を征く、事になるのかは分かりませんが。はい。頑張って攻略していきましょうかと思えます。

第五十七章・裏：海原と残骸

「——おーおー、凄いなあこりや。船の墓場だ。陸上の」

腰に手を当て、日差しを遮るように片手を額に当てて、見回すマスターの視線の先に、その光景は広がっていました。

砂浜の上に横たわる、割れ、砕け、欠けている、船たちの残骸。それが、何処までも続く無情な光景。確かにこれは、正しく墓場と呼ぶべき景色。あれら一つ一つが、海に出ていった男たちの墓標。

その冒険の最中の歓喜、苦悩、衝突、そして……それでも目指す、果てない夢。その景色を思うだけで、一つ物語を書き上げたくなるものです。後の世で、多くの海洋冒険の名作が生まれたのも、決して不思議ではありません。

——なのですが。

ここの特異点の成り立ちを考えると、砂浜に転がるそれらに本当に人が乗っていたのか。それとも……疑問の余地は、大きく残ります。

そもそも、私達が乗り込もうとしているのも、人が乗る船ではなく。

じゃんる、だったでしょうか。そういったもので考えるなら、海洋冒険、ではなく。恐

怖を扱った怪奇小説に分類されるものだと思われるので。

「どうでしょうかダ・ヴィンチ様」

『——反応は今の所なし。まあ今の弱体化してる探索能力で探れる範囲だけど。もしかしたら視認できる沖の方に、何か見えるかもしれない』

「……今の所、船らしき影は見えませぬね」

『ま、そう簡単に見つかるなら苦労はしない、か……オーケー。気長に探すことになりそうだね。これは』

しかし、この晴天の砂浜の中、やってくるといふ幽霊船を待っている、というのが。特異点という物の奇妙奇天烈さを嫌という程表している気がいたします。

本来、神秘に分類されるそれらは、決して容易く姿を現さず。しかし、時折ひよいと人々の入り込んだ『隙間』に顔を出し。そんな僅かな遭遇しかないからこそ……我々は、出会ったときに、彼らを恐れるのでしようから。

闇の中、軋む音を上げながら現れる恐怖の象徴。しかし、昼の最中にそれらを迎えたとすれば。想像すると、少し間の抜けたと言いますか……しかし、異様な光景である事は間違いないでしょう。

「まあ待つていれば勝手に到着するだろうよ。亡霊の執念深さは折り紙付きだとも。グレイの、ね？」

「……は、はい。きつと、来ます。と、思います……はい」

「じゃあグレイちゃんを全面的に信頼するとして。先ず、俺たち優先するべきは——」
先ずは砂浜に到着する、という幽霊船を見つけるところから、ですが。今の所は幽霊船というより、幽霊船が行きつくであろう成れの果てしか転がっておりません。

……マスターは『大丈夫、式部さんとか幸運ランクAだし。来てくれるでしょ』とおっしゃっていました。正直自信が持てません。私の幸運とはそういう類のものではありませんし。

そんな不安を振り払えれば、と。坂の上から、改めて砂浜を見渡してみます。何処までも抜けるような青い空と、真つ白な砂浜は、やはり、第三の特異点の景色を髣髴とさせました。

「違いは、夢破れた船が大量に転がってる事か？」

「第三の特異点でも、こういった光景が何処かにあったのでしょうか」

「さて、ね。俺らは見た事ないけれども。あつたのかもねえ——兵どもが、夢の跡、つて感じに、さ」

「——近くで見ると、凄まじい散らかり具合だ。全く……雑多に過ぎる」

「見るに堪えないって感じスカ、ゴルゴーンさん。綺麗好きですもんね」

「別に特別そうという訳ではない。人並みだ。ただ……私の嘗ていた島の海岸も、割とこんな感じだったからな。片付けをさせられるのは慣れていただけだ」

あきれたように言うゴルゴン様の言う通り。近くで見れば、墓標、というよりは……正に塵捨て場というのがふさわしい惨状ではあります。

船から投げ出された積み荷が辺りに散乱し、砲弾は錆を纏い、割れた酒の瓶の欠片が転がって、そして元は何だったのか判別も難しい果実かなにかの成れの果てが、少し離れていても感じる程に、腐敗臭を発生させていました。

元は、誰かが船の中で生活していた、と思われるような跡……ですが、これを操っていたのは人ではなく。そもそも、この残骸が尋常の由来なのかも、分かりません。

「それらしく、作られていたりする、のでしょいか」

『雰囲気作りの為、っていうにはちよつと大仰すぎる気はするね……例えば、これらにも意味があるのかもしれない』

「意味？」

『うん。打ち捨てられたこれらの船は……『何者か』に沈められたもの。言わば、それが存在していた事を『証明』するための証拠、だったり』

「ふむ。逆説的に証明する、という奴かな？」

『無辜の怪物、なんていうものもある。人々が『そう』と認識するという事は、バカにな

らない力を持つ。であれば、こうして……何かに疵でもつけられて沈んだ、みたいな船だつて『それが存在した』という信仰を生んだりもするだろうよ」

そう言つてダ・ヴィンチ様が『そこ、見てごらん』と指示した先には……船の側面に、何かに引き裂かれたかのような大きな傷が見えます。もし、それが『爪』だつたとすれば、それらは尋常の大きさではないでしょう。

「こんな事が出来る海の怪異とか？」

『それらを大量に配置する為に、ここだけ凝つたやり方をしているのかもしれないねえ』
「ふむ。あくまで推測の域を出ないが……この地形と、私の中の英霊の見解を合わせると、ありえないとは言い切れない程度には『合理性』がある。海に出なければ平和そのもの。だが海に出れば……」

「恐ろしいものが、たくさん、潜んでいるかもしれない？」

グレイ様が、ぎゅう、と胸元の少し下あたりで拳をにぎりしめ、不安そうに見つめた先の海。キラキラと輝いている筈の水面の奥に、何故か、どこまでも暗い海の深層、見えない筈なのに、そこにいる何者かを想像してしまつて。

ゴルゴーン様にも匹敵するような、底知れぬ、人ならざる強大な神秘が――

「姉上たちの元に来た輩の残した残骸、姉上に言われていつも片付けていたのは全然関係ない私だつたな……なんだか、憂鬱になつて来た」

「あのーすみませんゴルゴーンさんちよつと後ろに下げていいですか!？」 あの、景色と相性が悪いみたいで!？」

「いや、今も言った通り脅威が無い訳でも無い、一応戦闘はする予定だから、その要に下がられると困るのだけど……」

……当の本人は、船の残骸を見ただけで、何時もの迫力は何処へやら。

両手をだらりと下げて空の彼方を見つめるゴルゴーン様のかつての境遇は、想像するだに余りありますが。

しかし、今考えるべきはきつとそれではないので。光景を想像してしまい少しツンとしてきた鼻の奥の事は振り切つて、取り敢えず、砂浜に改めて向き直ります。取り敢えず今考えるべきは、我々の足。幽霊船について、です。

『まあ戦闘ばつかりに気を取られて、肝心の船を沈めた、とかシャレにならないから。そこは程々につて感じだけでも』

「い、活かさず殺さず、という奴ですね」

『幽霊は元々死んでるけど、大体そんな感じかな』

我々は、その海の脅威の一つ。幽霊船に乗り込み、海へ漕ぎ出す……というか、運んで行つてもらおう予定なのです。取り敢えず海に出る事から始める、という方針の元。

『幽霊船を沈めない様に程度に制圧し、その船の一部を間借りする』という中々に暴力

的なプランで。

……出来るでしょうか。何時も私、全力で戦う事しかできませんが。

いいえ、寧ろ悪霊や魑魅魍魎の類は、私もある程度は得手。グレイ様だけに任せておくのではなく、こういう時こそ、清明様から学んだ陰陽の術を活かす時です。

倒すというより、封印したり、逆に使役したりと、様々な陰陽の術を使いこなしていた清明様……の様にはいきませんけれど。

『そんな気負った顔しなくても大丈夫だよ。こちらとしてもある程度は向こうの具合も測れるし、本当に危ないならストップだってかけるし』

「……そうですね。皆様が頼れるのは、よく知っています」

「だめっ、だれもいないったらー！」

「やはり英霊に取り憑かれていたか……」

……頼れる、のは、はい。良く知っています。きつと。

「ライネスさん？ ど、どうしたんですか急に？」

「ん？ ああいや、ごめんグレイ。ちよつと楽しくなっちゃって」

「いやー、反応してくれるとは思わなかった。お嬢さんってアニメとか見るんだ」

「ふふ、兄上の趣味がそっち方向だね。『本当に面白いのか』と気になったことがあって一本程。娯楽としては、確かに一定以上の面白さがある。君と同じ物を見たとは思って

いなかっただが」

「いやー、俺もアニメってつたらこれくらいしか見せてもらつた事なくて。運命ってやつかなー。わはは」

『——そこっ！ いちやつく前に幽霊船を探しなさい！』

「はーい」

……さて。

とりあえずは、先ず件の船が来ない事には話は始まりませんから。取り敢えず、後ろの方で唇を尖らせているお二方は見なかつたことにいたします。はい。あの、えつと。今まで、気を張っている時間ばかりだったので、気を抜く時間も大切だと思いますし。

そ、そんな事を考えているとは限らない、とか、無いと思います。はい。マスターのお顔とか、結構吞気そうとか……

第五十九章

海を征く実況、はーじまーるよー。

前回は何か思いついた模様なライネスちゃんのお言葉に従い、取り敢えず亡霊船へのチケットを手に入れる（暴力による交渉）事となりました。因みにその先どうなるかは、考えがある様なのですけれども……

さて、皆で砂浜に来たのですが、やっぱり船を探すとすると時間もかかりません。となるとその間、一肌脱いでみんなで水着に——なる訳もなく。

この動画にお色気成分なんざいらねえんだよ！（暴言）因みに水着サーヴァント確定ルートは既に変態有志の手で確立されているので第一特異点から水着サーヴァントとイチヤコラぬつぶぬつぶしたい方はそちらを見てどうぞ。邪ンヌを水着邪ンヌでなぎ倒そう！

では船を発見するまでの間どうするか？ そりゃあこういう綺麗な浜辺にはサメがいるのがお約束。だからサメでも殴ろうじゃねえか！！（サメ殴り代行）という事で。陸に上がって来た海賊サメをなぎ倒して暇をつぶします。えっ？ サメって陸に上るものかって？ 何言ってるんだ、空を飛ぶんだから陸に出てくるのも当然だろう？

という事で、先取にも程があるサメエネミーがここ、海エリアでの主な敵の一角です。後は海魔。

強さは竜の都、紅の都の中間位の強さですね。雑魚に関しては。まあ海魔君は悲しい事に魔性特攻が通ってしまうので、式部さんのおやつとなり果てるのですが。経験値置いていってもらいましょう。

『なんだこの敵は!?! ふざけているのか?!』

因みにサメ兵士を初めてご覧になったライネスちゃんの至極まつとうに過ぎる意見がこちら。本来は化け物染みている見た目の筈なんですけれど、実際にやられるとギャグにしかならないというサメ人間。結構愛嬌ある顔してるんですよね。

『全く。別に戦いたいわけではないけど、やるにしてもせめてこういう色物じゃないのとやり合いたいよ。緊張感ないし』

『一応確認するけど、海賊の亡霊と戦ったって言ってたけど……』

『これじゃないよ。寧ろこれ、海賊の無念諸共飲み込みそうな面してるじゃないか』

喜んで餌として食い尽くしてそう（小並感）

サメ兵士君って海賊サーヴァントにどれくらい受けが良いんでしょうか。実際。黒髭には大変不評だったように思えるのですが。他もそうなんでしょうか。やっぱり海賊と言えばサメの餌っていうのが定番ですから、微妙なんでしょうか。

まあ、その感想を聞くにも、ようやくやって来たあの船に乗ってる方々には、到底公平な意見は聞けそうにもありませんねえ……多分ですが、全員ここに来るまでにサメの餌を経験した方ばかりでしょうし。恐怖しか感じないでしょう。

『——で、その無念で蘇って来た船は、アレかな?』

『あ、そうそう。あの船だ。やっぱり戻ってくるものだねえ。まるで渡り鳥の帰巢本能にも似ている』

——やって参りましたよ。彷徨いながら檻褻切れの様な帆を堂々と広げ、そして千切れかけているジョリーロジャーを掲げて。最早、何時沈んでも可笑しくないレベルでポロポロな船が。晴天の空の中、そこだけ何故か色がくすんでいる様にすら見える、異質な存在感が存在する——これぞ正に、亡霊の船。

船の上では、ガイコツ共が半ばヤケクソにも見える仕草で、船を運転しております。

『大きな船ですね』

『船そのものが亡霊になるくらいだから、そりやあ乗っていた人数もそれなりに多くないといけない、とか何処かで聞いた事はあるね』

確かに幽霊船というと、それなりには立派な船の残骸、つて言うイメージがありますよねえ明確に。なんか、小舟とか、クルーザーとか、普通のサイズの漁船が幽霊船やつてる感じはあんまりしません。

やっぱりデカかったり、それなりにゴツイ船だったり、部屋が多かったりと。某奇妙な冒険の幽霊船っぽいのもタンカーでしたし。幽霊船、っていうのは色々な人々の靈魂がそれを形作ってるって事なんですかね。

『少なくとも、何の動力も無く海を航海出来るくらいには幽霊の力を借りているし、そもそも操舵しているのも幽霊だ。彼らを削りすぎた挙句、船が動かなくなりました、とかはシャレにならないかな』

『ふむふむ……グレイ？』という事で、勢い余って倒し過ぎてしまわない様に。グレイは頑張り屋さんだけど、ちよつとうっかりな所もあるからね。赤い方程じゃないけど』

『ら、ライネスさん……！』

頑張りすぎて幽霊さんを削りすぎちゃうグレイちゃん可愛いね♡ 力強すぎ手加減知らず、恥を知れ(脳味噌大噴火) 彼女の出生と、持っている武器が武器だけに仕方ないんですけれどもね、その辺りは。

さて、ここからです。

先ずは海を越える足を手に入れる為に——ここは譲れません (KG)

『——良しっ！ 全滅……は、してないけど、制圧完了！』

『…… (ガタガタガタガタ)』

とはいえただの幽霊船なのでね。そこまで苦勞はしませんよ。そもそもグレイちゃ

んの幽霊特攻でここに出る全員がおやつになり得る上、それでもあんまりやりすぎないくらいに手加減しないといけませんし。あんまり派手な戦闘は無いので戦闘は全カックトじゃけえのう！ シーステルスアタックしろ。

で、制圧してしまえば、皆さま（ゴースト）が恐怖とか諸々で震えております。本来人間を恐怖のズンドコに突き落とす役割のゴーストが形無しだなあオイ!? 恐怖としての矜持を粉々にされた気分はどうだ!?

『……（ガタガタガタガタ）』

『うーん、やりすぎちゃったかな？ ちょっと』

『人数は減っていないのですけれども。完全に我々を恐れ切っていますね……船の端の方から動きそうにありません』

あーうん見ればわかりますね。もう何もできないって感じかなあ……本来、海をとりあえず渡る手段としてこれを使うつもりだったというのに、これ、船は動いてくれるのでしょうか果たして。

『……まあ、敵わないって事は骨身の髓まで染み渡つたみたいだし。一旦放っておくでしょうじゃないか。取り敢えず、面倒を避けるために結界でも張つて。なあに、我々は急ぐ必要は無いんだ。のんびり行こう』

取り敢えずは全てをうっちゃってヨシ！ という事らしいです。果たしてそんなノ

ンビリ方針のライネスちゃんを立てたプランとは一体……とりあえず、皆さま船の中心に固まって休憩に入る模様です。

というか、ここまで来て思うんですけれども、ホントこのパーティって女子ばかりですね。この主人公のハーレム野郎、うらやましいね。俺もその間に入れてくれねえか？

ガツ、ガイアツツツツ！

『おや、動き出したかな？』

『我々が何もしなければ大人しい……と思つて下さつたのでしようか』

『であれば、第一段階は突破だね』

……さて、船の中心でぎゅつと固まって待機していた所、幽霊船は無事動き出してくれました。良かった、トドメ刺してなくて。生前やっていた事をなぞる、とは言います。がまさかここまで忠実だとは。恐怖にも負けない姿勢偉い。

さて、次の探索場所には自動で移動。ドンブラ揺られてやってきた先は、海の都、というか普通に海を中心。

『——海が綺麗ですね』

『おいおい、あんまり気を抜かないでくれよ？ いくら今の所、何ら問題ない状態とはいえよ』

『しかし今の所、問題ない航海が続いている。もしアテが外れたとしたら、マズいんじゃないかな？ このままだと』

『うーん。まあダメならダメで、普通に時間をかけるだけなんだけど——』

今の所、平和な航海（相乗り）が続いている模様です。まあ幽霊船が波にさらわれて沈んだ、とか笑い話にもならないので、当然と言えば当然なのですけれども……

『——つと、話していたら感アリだ』

『トリムマウ』

『確認しました。二時の方向。ジョリーロジャーを確認』

『こちらも霊基を確認した。間違いない、第三特異点で戦った黒髭のものだ。シャドウ

サーヴァントじゃないよ』

『ジャックポットだ！』

……んおつ？　なんか、流れるように全員が戦闘準備を……アレ？　あの、こつちとしては黒髭が急に襲撃を仕掛けてきたようにしか見えないのですけれども。

と、兎も角。どうやら黒髭襲撃の模様です。しかもシャドウサーヴァントではない、サーヴァントとして。お前がサーヴァントとして出てくるのか……（困惑）普通にアルテラさんとか呼んだ方が強かったのでは？

『デュフフッ！　待っててくださいらしいライネスちゅわあん！　今、拙者黒髭が愛を込め

た熱い抱擁をば——』

『撃て!!』

『——はっ?』

——ドツグワアアアアン!!——

『はえー!!?』

ドーンだYO!

……じゃなくてくろひー!? ゴウランガ! ライネスIIサンの仁義なき先行砲撃でエドワード・ティーチは爆発四散! オタツシヤデー! いや、まだ倒された訳ではない模様でしたけども。派手には吹っ飛んでいきました。

『ふふ、態々漂流して、君たちの襲撃を待っていた甲斐があった。砲撃する準備は万端だよ——グレイ、どんどん射かけてしまえ!』

『は、はい……アツド! お願ひ!』

『ハツハア! 派手に行こうじゃねえか!』

おお……ど、どうやら幽霊船に乗り込んだ理由は、この襲撃を狙つての事だった模様です。どうしてこの襲撃を待っていたのか、まだその真意は分かりませんが。とりあえず、黒いヒゲ野郎との再戦です。張り切つて参りましょう!

第五十九章・裏：軍師対海賊 前編

「——どわあああああつ?!」

船の上で、黒いヒゲのむさい大男の悲鳴が上がる。無論、此方の船ではなく、相手の船ではあるのだが。こちらの船からは、一も二もない矢継ぎ早で、攻撃がどんと飛んでいく。相手を沈める勢いで。

全力だ。全力だ。全力だ。

そう、事前に告げたとおりの全力だった。グレイ、ゴルゴーンと、紫式部。元から圧倒的な破壊力を持っているゴルゴーン、そしてここまで、じっくり準備……具体的には強化用の陣を設営して、能力を底上げた結果、その火力とも遜色ないレベルの十分な砲術で、敵の船を薙ぎ払っているのは、紫式部。

グレイも、その恩恵を受けて、矢による攻撃が、まるで柱でも打ち込んでいるのではないかと錯覚するような威力に変わっている。

「ちよつ、ちよつと待っておくんまし!」

「一切待たない。ここまで我々の考えに綺麗にハマってくれたんだから、そりゃあ歓迎だって全力でしてあげないと失礼ってものじゃないかい?」

「いやそんなことないですよ!」

『いやー、やっぱり方針は間違つてなかつたねえ。アレと真つ向からやり合う事になつてたら、多分苦戦してたよ』

方針、といつても。冷静に考えれば思いつく事ではある。

我々が今まで移動してきた、竜の都や、紅の都は。確かに脅威ではあつたのだが。しかしながら。突破できる程度の脅威だつた。彼ら、カルデアが生き延び、そして戦い続けて来た戦場に比べれば、あまりに、あまりに容易い戦いだつたと思われる。

シャドウサーヴァントが弱い、とは言わない。しかし、やはり総数が違う。敵がサーヴァントを当然のように複数運用していたのに比べ、基本は単騎だ。

実に不思議な話であり。そこで一つ、私の中の『彼』は仮説を立てた。

まだ、敵は本格的には仕掛けて来ていないのではないか。

もし本格的に仕掛けてくるのであれば……我々が門外漢、渡る手段も、戦うコツも知らないエリア。いかな英雄として、その能力を大きく封じられる——ここ。『海の都』の可塑性が、最も高い。

もし、自分の想定が外れ。海の都では何もなかつた。そうであるなら——それでいい。寧ろ、そうなつてくれた方が、何倍も何倍もいい。と、『彼』は言つた

軍師にとって、何時だつてしなければならぬ最悪の予想というのは、『最も当たつて

欲しくない可能性』なのだから。

相手はこんな大舞台を作り、只一人のマスターを隔離するようなスケールの大きな敵だ。決して油断はできない。

「——であれば、戦において、相手の出鼻を潰し、機先を制するのは当然の話だからな。そこを考えてライネス殿に提案したのは、俺だ」

『なるほどなるほど——ってアレっ？ 今はライネス嬢じゃなくて？』

「ああ、万が一があつては困るゆえに。交代させてもらった」

「(……全く、だからっていきなり交代しなくたって)」

彼の予想は的中……：シャドウサーヴァントどころか、正式なサーヴァントに加えて、船に乗っているのは無数のシャドウサーヴァント。

今までの敵の戦力が比にならない程の圧倒的な戦力。恐らく、相手がこの時を待つてじっくりと温めていた戦力だったのだろう。なら絶対にその目論見には付き合つてやらないのが、定石。故に、初手全力砲撃とあいなつたわけだ。

「しかし、アレが例の黒髭とやら、か……ふむ」

正直、今の印象だけなら強いとは思えない——つていうのは、全然ない。

個人的な目線では、アレだけの飽和砲撃を叩きこまれて、そりゃあ取り乱しても当然だろうし……：実際、取り乱しているようにも見える。見えるのだが。

「——このまま、一気に捻り潰せるのが理想だろうが。さてそう上手くいくかな」

「いかないのか？ お二人のパワーで滅殺されそうな寸前に見えるけど」

「本当にそうなる寸前だったら、此方を見る余裕も無いだろうね」

「見てくるのか？」

「さつきから十数回程目が合ってるよ」

こちらの様子を抜け目なく伺っている——そう、表に出ている彼は言っていた。その辺りの機微は分からないのだが。かの知の英霊ですら欺く程の芸を持つ相手に、私程度がどう類推したところで、その実力を推し量る事は不可能だろう。

……ただ、私をジーっと見ているその視線には、そういう色が乗っているのは流石に分かるが。

「——ライネス嬢の見た目は大変に好みなのだろうが、中に俺が居る事も見抜いているのだろうな。恐らくだが」

「えっ、マジ？」

「俺、というか。ライネス嬢の仕草が急に変わったのを見抜いた模様だな。演技も上手ければ、恐るべき慧眼も持っている。海の上では脅威、というものは間違いない」

まあ、それは兎も角として。あんな状況下でも冷静に、逆転の目も確実に狙っている。そんな事が出来るのは正に海賊として一流だからこそだろう。

もし、彼のホームグラウンドの、海上戦でマトモに戦っていたらと思うと……些か以上にはゾツとする。正直な話。しかしながら、カルデアは彼を海上で打ち破ったという話なのだが。どうやってやったというのか。興味しかない。

「故に、ここで逃がさず……確実にひっ捕らえる。グレイ嬢。砲撃が落ち着いたら向こうに乗り込む。その時は頼むぞ」

「は、はいー」

そんな危険な相手が出てくるようならば……こうして幽霊船にまで乗って沖に出る必要があったのか？ 陸の上で動かない方が良かったのでは？

いいや、違う。最悪の可能性があったからこそ、そこに合わせてこちらからカウンターを狙った。

今まで、この特異点で好き勝手に色々と罨やらなにやりに嵌められてきた訳である。竜の都では安全だと思いきやワイバーンに囲まれてシャドウサーヴァントに不意打ち染みた事をされ——セイバーのシャドウサーヴァントと、狂信者の集団にはまあ厄介というしかない物量作戦を強いられてきた。

まあ、正直な話をすれば。

やられっぱなしな訳である。我々は。全て切り抜けて来ているとはいえ、相手の掌の上で踊らされている事は間違いない。

『であれば。そろそろ相手の思惑の一つでも暴いて、反撃に転じたい所だ』

その為に必要なカウンターとは即ち……敵戦力の鹵獲。解析、敵の情報確保である。

シャドウサーヴァントから何かしら話してくれるとは思っていない。だがシャドウサーヴァントを運用している以上、何かしらの魔術の痕跡は残っているだろうと思われる。

そこから、推察の材料を引きずり出し、今度は此方から、仕掛ける。

態々敵からの襲撃の可能性の高い海に出たのも、相手の動きを誘う為だった。とはいえ、『彼』からすれば『このようなやり方は私の得手ではない』そうなのだが。それでも必要ならやる、との事で。

「しかし、シャドウサーヴァントを確保して取り敢えず、出方を伺う積りだったのが。会話できるレベルの相手が出てきたとなれば……」

『予想以上の相手が来てラッキー、って感じかな?』

「期待していた訳ではないが……降って湧いて来た幸運を活かせないというのは、軍師とかいう以前に、人としても二流だ。アレを確保するのは必須。貴重な反撃の種だ。逃がさん」

「あ、あの……ライネス、さん」

「分かっている。分かっているが……」

ともかく。その『種』……黒髭の周りには、もう敵の戦力であるシャドウサーヴァントも何もいないように見える。これだけの連続砲撃で攻め立てているのだから当然と言えば当然か。

だがそれでも、『彼』は敵の船、甲板まわり。そこを舐めまわすように、何度も何度も見回している……何をそこまで警戒しているのか、私にはいまわからないのだが。

「——やはり、おかしい」

「えっ?」

「想像よりも減りが多い……だが……なんだ、この違和感は、何が……?」

減りが多い。という事は……敵の甲板にいた、シャドウサーヴァントの事だろうか。何を当然のことを。繰り返し様ではあるが、あの圧倒的な攻勢を目の前に、数を減らさない方が可笑しいのではないか。

『彼』は、一体何を、見ている?

「——」

「——」

その時。甲板の上を滑らせていた視線が、一人甲板の上で逃げ回っている、黒髭の目線とぶつかった。こちらと視線が合って、睨むのかと思った。今、明確に優勢なのは間

違いなく此方なのは間違いない、のに。

男は、その必死そうに逃げていた表情を容易く緩め。

その代わりににんまりと、私達に向けて笑って見せて――

「――しまった!？」

「こちらの船ばかりを見ていたらいけませんぞ? おらいけ『呪われた船員』共!」

その直後の事

向こうではなく。今度はこちらの船が、大きく揺れた。

第五十九章・裏：軍師対海賊 中編

「——しまった!？」

「こちらの船ばかりを見ていたらいけませんぞ? おらいけ『呪われた船員』共!」

突然の事でした。

幽霊船がぐらりと揺れて、足元が揺れて、思わずして体勢を崩してしまって、へりに捕まる事で、何とか倒れないようにするのが精いっぱい——今、周りに何が起きているかも全然、理解できていなくて。

ぬるり、と何かが指先に触れた感触がしたのです。

「——えっ?」

まるで、磯の中に居る蛸にでも触れたかのような、ぬめりのある、あの特有の感触が。そして、酷く冷たい温度で、そして……酷く、鼻につく。磯の、匂いが。

それに気を取られていた直後、ぬるりとしたその感触は、あつという間に私の手首をつかみ取ったのです。それは節くれだった、それこそ、亡霊の様な。

手を掴んでいるそれは……黒い、影のようでもあるその手首は——!

「ふん、退け死人共が」

「きゃつ……!?!」

——綺麗に、宙を舞いまして。そのまま、海面にぼちやりと落ちていききました。

隣を見れば、伸ばしたその髪の毛が、私の手元に向けられているのが見えました。そしてその両手には、ぼたぼたと水滴を垂らす二人の影法師が首を掴みあげられています。

その直後、ゴキリ、という音と共に、その二人の影法師はびくりとも動かなくなり。甲板に落とされたその直後に、黒い霧となつて消えていききました。

「船の外面を上つてきているな。海に潜つての奇襲とは、随分と手の込んだ真似をする」
『シャドウサーヴァント……! ったく、こんなやり方ありかい!? 船の下、というか船の周りに、結構な数だぞ!』

「ありあり。なにせ、こちとら海賊ですから、なんでもありですぞく!」

我々も見慣れた、あの形のサーヴァントが。海から這い上がっています。シャドウサーヴァントとは斯様な事も出来るのか——と思いましたが、しかしサーヴァントの私にこんな事は出来ないのです。海での戦闘でも戦えるように、何かしら細工をされているのは、明確でした。

もし、先のシャドウサーヴァントに引きずり込まれていたら……海の中、絶望的な中でなぶり殺しにされていたかもしれない、と思うと。震えを止められませんでした。

「お、お手を煩わせて申し訳ありません……ありがとうございます。ゴルゴーン様」
「気を抜くな、まだ来るぞ」

「あ、はいっ！」

しかし、それで終わりかと言えば、そうではありません。急いで離れた船のヘリには既に、幾つもの手がかけられていて。何人か、甲板に上がってこようとしています。頭を出したところでゴルゴーン様に撃ち抜かれたりもしてますけれども。

取り敢えず、急いでマスターの傍へと駆け寄って周辺を見回せば……船の先頭から一人来ているのが見えます。そして、船の後ろにも——しかし、振り下ろされた黒い片刃の剣の前には、大鎌でその一撃を受けるグレイさんが。間に合わなければ、その後ろにいたライネスさんと、そしてマスターも、叩き切られていたでしょう。

「危なかった、ライネスさん！」

「ライネス嬢ではないがね……分かつているとも。全員、落ち着いて！ 敵の船への攻勢を緩めるな！」

「……つたくよお、ビビらせてんじゃあ」

直後、ライネス様の号令に反応するかのように、マスターが飛び出しました、額の稲妻を束ねた角で狙いを定めるように。そこから。空中で身を翻し、振り切る直前の爪先で狙う先は、グレイ様と切り結んでいる、シャドウサーヴァントの。

「ねえー！」

右の顔面。爪先は吸い込まれるように直撃。痛手を与えられているかはともかく、衝撃で明確に体は揺らぎ、横へと流されて——そのガラ空きになった胴体に、銀のきらめきが、一閃。グレイ様の鎌が、三人目の影法師を黒い靄へと変えました。

「ごめんね、余計なことしちゃって」

「い、いえ。ナイスアシスト、です！」

「そりゃあ良かった……！」

しかし、一人を倒しても、マスターの表情は苦いまま、その視線の先から、さらに現れる影法師は、一人、二人、三人と、どんどん増えていきます。取り敢えず、そちらに牽制代わりの符を放ちました、が。一方に撃ったところで、さして意味はありません。

周辺から這い上がってくる黒い影は、まだいます。

それを見て取ったのでしょうか。マスターは……先ず、立ち向かうのではなく、一歩下がって、ライネス様の体を抱えあげました。

ライネス様の表情は優れません。しかし、それは周りを囲まれているから？ いえ、ライネス様が今、見ているのは、周辺ではなく船の甲板……？

「軍師様、俺が運ぶからアンタは思考に集中しな」

「ありがたい、と言いたい……しかし思考して間に合うものか」

「あ?」

「敵は船から、ではなく海から襲撃を仕掛けて来ている。となれば、何処から崩すかは自ずと決まってくるのではないかね?」

——一瞬、マスターの顔が真顔になった、かと思うと。

「——ゴルゴーンさん、式部さん抱えてくれ! 退避だ退避!」

「何??」

「下手するともうそろそろこの船、沈むぞ!!!」

真つ青にその顔色を変えて。しかしながら、今までの会話の流れを聞いていた私と致しましては、マスターの判断に一切の曇りなく。思わず言われた直後にはゴルゴーン様の傍に駆け寄ってしまっていました。

……海からの襲撃。そして、側面から這い上がってくるシャドウサーヴァント。されどこの状況であれば、警戒するべきは海の上ではなく、海の下——すなわちは、私達がいるこの幽霊船の——!

「……そういう事か! ええい厄介な真似を、おい!」

「はいっ」

「マスター、先に跳んでいる——」

「申し訳ないゴルゴーンさんお先に失礼っ!」

「急げよ、直ぐにでも沈むぞこの船は」

「っつておい貴様ら!!」

私が小脇に抱えられたその時には、既にグレイ様と共に、マスターもライネス様を抱えたそのままに、船の外へと飛び出していました。

舌打ちと共に、その剛力を誇る尻尾をくねらせ、まるでばねの様にして、甲板から飛び出した、その直後。

『!!!』

甲板を突き破って出てくる、黒い影。シャドウサーヴァント。海中から回り込んで狙ったのは、船の底。我々の足場を奪う為に、たとえ怪異の船であろうと突き破り、まるで噴き出す瘴気の如くに、次々と這い上がり、生えてきます。

……見るだけで、震えの止まらなくなる光景です。本来揺るがない筈の足元から突如の奇襲。船の底から奇襲を仕掛けられるというのが、どれだけの脅威なのか。もしあの場に残っていた場合の事を考えると、それが良く分かります。

「あ、危なかった」

「……確かに危なかったが」

「あつ、ご、ごめんなさいゴルゴーン様、お礼の言葉が遅れましたー!」

「そうではない。アレ……沈むのに脱出できるのか?」

「……え？」

しかしながら。

事はそこまで、なんといいいますか、脅威というばかりではなかったようで……甲板の上に堂々と這い上がってくる彼らですが、しかしその大きく空いた穴から、あの、水が噴き出しているのが見えました。

「!？」

「——っ! ——っ!」

「——っ! ——っ! ——っ! ——っ!」

そして、自分たちがしでかした大惨状に今更ながら気が付いて、脱出を試みようとするシャドウサーヴァント達。しかしながら、慌てて動き出したからなのか、ぶつかったり甲板の上で足を滑らせたりと、そうこうしている内に。

先ほどまで悠然と海を渡っていた海の怪異は、大穴から空いた海水に浸り、想像よりも早く沈んでいきます。

噴き出す海水を浴びて、あつぶあつぶとしている者もいます。倒れた状態から必死に起き上がるうとして、まだ誰かとぶつかって転がっている者もいます。そうして慌てている間にも……

「……あ、沈んだ」

「間抜けか、奴ら」

……なんでしょう。確かに恐ろしい戦法を取られたのですが。終わりが、あまりにもその。ある意味で物悲しいと、申しますか。あの。

くるり、と振り返ってみると、今私たちが着地した船の主が、視線を明後日に反らしています。流石にあの惨状を見て、何も思わないではないのでしょうか。多分ですが、自業自得だと思われますし。

寧ろ態とであつてほしいくらいに、あつさりと。海から上がつて来たシャドウサーヴァントは海中に……

「……ふむ、成程な」

「おい、何とか言えよ間抜け」

「まだいますし！ 戦力！ 戦いは数ですぞー兄貴ー！」

何はともあれ。

戦いの第二幕は、どうにも締まらぬ始まりを、迎えたのでございました。

第五十九章・裏：軍師対海賊 後編

船の甲板は特別広いという訳でもなく。限られた足場の中には、何人もの黒い影。全てがシャドウサーヴァント。奴らは人数差を活かし、広く我々を包囲し、まるで押しつぶそうとでもしているかのようになり、じり、じりと前に詰めて来ている——我々をそのシャドウサーヴァントの中心で眺める、黒髭の指示で。

「沈んだにしろ拙者の部下はまだ居ますからなあ。奇策より王道のやり方が強いのがリアル。でも奇策でどんでん返し、一気に相手を追い詰めるのもまた男の子口マシ。うーん甲乙つけがたい」

「——戦場で浪漫など語るのが可笑しい。戦場に奇手も何も要らん」
「でもその奇策に追い詰められてますよねー。ねえねえどんな気持ち？ 自分とは合わないやり方で追い詰められてどんな気持ち?!」

海から仕掛ける奇手にて盤面をひっくり返し、自分たちの人数有利を取ってから、人数差で押しつぶす力押し、即ち王道のやり方に切り替える。見事な手並みだ。正直、此方としては、してやられたというしかない。

ただ当然の様に準備し、当然の様に勝つ。戦場に奇策も奇手も必要ない。それが俺の

軍師として戦うための基本だ。

しかし、奇手の効果を認めてはいないのかと問われれば。決してそうは言い切れないのが戦場でもある事を知らない訳ではない。

奇手、というのが一定以上の効果を上げられるのを、俺は嫌という程知っている。俺の戦場には到底必要ないだけで、向こうが使ってきた場合、警戒しないというのは違う。

俺の中で、一番厄介だと思っているのは。

奇手をあくまで、起爆剤、草分け、ファーストペンギンの様に最初の切っ掛けとして運用し。そこから王道の策略をねじ込んで、らちを開け、倒す。

一発逆転の奇策頼りではない、王道の一手を活かすための手として使う。

使い方を良く分かっている輩だ。

「……どうする。明らかに不利だぞ俺らはコレ」

「俺は一発逆転の奇策を練れる類ではない。すまないが」

「どうすんだよ」

「やるしかない。真正面からの削りあいだ」

「おい正気か。この数相手に……幾らゴルゴーンさんたちがサーヴァントだからって何でもできる訳ねえんだぞー！」

そんな事は誰よりも自分が分かっている。自分はサーヴァントだが、しかしながら相

手を圧倒できるような強みは持っていない。持っていないが……しかし、それでもやるしかないのだ。

「……とはいえ、この場所はマズい。まずは場所を移す」

「何処に」

「——先端だ。突っ切れ！」

言うと共に走りだす。向かう先は、船の先端方向。とがっている方。二択まで絞るような言い方をして、正確な行き先は伏せようかと思つたがしかし、万が一にも戦力が分散したりしたらこの後、戦う際により苦しい事になるだろう。それを考えるならば、行き先がバレルくらいのリスクは許容範囲内である。

「いやさせるとお思いでえ？ 行けっ黒髭特戦隊！」

黒髭の反応は正に一瞬。我々の目指す——船の先端。袋小路に行かせまいと動き出す。

普通なら、袋小路に追い込まれる、というのはそうされた側にとつては当然、致命的な不利になりかねない。だが……特定の、例えばこういう状況下で考えるのであれば、その『当然』というのはひっくり返る。

「ゴルゴーンさん、一睨み頼む！」

「——邪魔だ……！」

ゴルゴンの魔眼が睨み据えた先、阻止しようとした敵の動きがぴたりと止まり、その致命的な隙を、大ぶりに振りかぶった両の爪が、容易く黒い影をなぎ倒す——例えば、『当然』をひっくり返す要素の一つは、彼女だ。

彼女の魔眼、という物は、見据えたものを悉く石化させるが、しかし。逆に言えば見える範囲にしか効果が無く、さらに言えば、見ている範囲であれば味方も何も関係なく巻き込んでしまいかねない危険性がある。

しかし味方を背にして一方へ集中する事が出来れば、彼女の魔眼は文字通り、鉄壁の城砦を形作る凶悪な兵器になりかねない。

「うげっ、そういえばそんなありましたっけ。はいはい、皆様あ、どんどん立ち塞がって！ 逃がしちやいかんですぞオ！」

「させません——やあっ！」

「どうわっち?! ちよ、大将直接狙いはいかんでしょ！」

「平安の武者の皆様はそれが基本でした！」

「MJD!？」

例えば、彼女——キャスタークラスの紫式部。先ほども、幽霊船の上で簡単な陣を敷ける辺り、ある程度は実力のある魔術師だ。まあ俺も手伝いはしたが。何はともあれ、彼女の敷く陣は、古い神秘に属するモノ。強化の度合いは想像以上だ。

自分たちに有利な場所を築ける。一点に留まるのであれば、その要素は実に大きい。
「——つて、あ」

「話している余裕はあるのか？ 悪いが、場所取りは終了だ」

「つちやあ……」

まあ、分かりやすく言えば。

袋小路の奥を要塞化する事が出来るのであれば。寧ろ、袋小路の奥へと行くのは間違
いではない。要塞というのは、基本は要害に建設され、一方からくる敵を凌ぐための物
なのだから。

故に。侵入できる場所が限られるエリア——船の先端の辺りに陣取り、数を活かせぬ
ように、真正面からの削り合いを強制させる。それが、今取るべき最適解。

——とはいえ。

「えつと、取り敢えず、一方から攻撃受けられるような態勢を取る——であつてるかな軍
師殿？」

「その辺りは分かっているか、カルデアのマスター」

「喧嘩でも色んな方向から殴られんのはアレだったし……まあ一対一の構図を作るのが
良いって言うのは漫画でもあるあるだわな」

「分かっているなら良し。正し……一つ、留意して欲しい事がある」

「ん？」

先ほどの戦鬪を踏まえ、そして。ここまであつさりと先端にたどり着けた、この状況からして……俺の懸念は、間違いない中するだろう。だがしかし。問題は無い。

種が分かっているならば、もう二度目の奇襲など、通用しないのだから。

「……やつぱ、下手に踏み込もうとはして来ないか」

「こちらにはグレイもいる。遠距離の弾幕を掻い潜つて、その上でグレイを崩すのは容易ではない。想定範囲だ」

「このまま削り合いさせてくれれば良いんだけども」

ここまでは順調。こちらの火力の方が、圧倒的に高いなら。相手は鋼の壁に無為に拳を打ち付け、その拳を自ら砕く愚者と同意だ。シャドウサーヴァントの数が幾ら多くても真正面から打ち破れない事は、目の前の、俺と目を合わせる男も分かっているだろう。どんどんいけー！ 等と。まるで三下染みた大将の様な、無駄な消耗戦で正面から攻め立てる。圧倒的な戦力がある訳でもないのに。

城攻めの人数は、三倍は最低でも必要だ。敵の人数は此方の三倍を優に超える程度はいるだろう。

だが、今ここに築かれた城に詰めた殆どは、一人で一騎当千の力を持つサーヴァント

ばかり。サーヴァントに劣るシャドウサーヴァントでは、それこそ数人がかりでも厳しい相手。城攻めの常道は、全くもって踏めていない訳だ。

だが相手が、それを理解できていない訳ではないのだ。

「とんでもない前面へのゴリ押しだな」

「ああ。今の所、敗れる様子も無い——だが、しかし」

「……さつき、海を見た。いるね」

「船を沈めて見せたのも、今思えばブラフだったのだろうか——そろそろだ」

「りょーかい……」

ここに陣取って。防御を固めた。

相手にとつては好都合の展開だったのだろう。言ってしまったえば。行かせたくなければ最初から先頭、及び船尾に繋がる場所を分厚く固めてくる。

寧ろ、周辺をまんべんなく固めてきたのは、誘導すら狙っていたのやもしれない。

だから——誘導していたその動きに敢えて乗って、そして。

「……今だっ！ グレイ！」

「ゴルゴーンさん！ 式部さんは俺と一緒にその後が続いて！」

「はいっ！」

「良いだろう、苦しむがいい……！」

「参りますー！」

一斉に、前へと飛び出す。有利を捨て。

驚いたのは——黒髭の方だろう。彼の仕掛けた罠を完璧に読み切ったタイミングで、前へと飛び出した結果として、黒髭が『攻勢を仕掛ける』準備を整えていて隙だらけな、前面の敵に食らいつく事が出来た。

その直後、後ろからザバリ、という海から何か上がる音。

間違いない、海から上がって来た者たちの奇襲だろう。幽霊船と共に沈んだ愚かなシャドウサーヴァント……と見せておいて。寧ろ沈んで『伏兵』として潜ませ。裏から殴る準備を整える。この状況で最も安全、と思われる場所の、裏から。

海からの奇襲を最初にかましてくれたのだ。それくらいはしても可笑しくない。しかしその印象を消し去るための『間抜けな失敗』という訳だろう。

悪辣な手だ。黒髭、という男の頭脳が侮れない事は理解できる。

「だが——甘い」

「いやー……やっぱ本職には敵いませんなあ」

だが。

頭脳労働は我々の専門分野だ。舐めてもらっては困る。

結果は、我々の勝ちだ。シャドウサーヴァントを蹴散らし、彼の周りを完全に包囲し

ている。大将首を抑えたのだから。

「で？ どうする」

「——可愛いおにゃのこ多そうですし、めっちや裏切るっすよ！ 拙者！」

第六十章

敵が味方へと変わる実況、はーじまーるよー。

……前回、襲撃して来た黒髭を叩きのめしたら仲間になって下さいました。以上、起こったそのまま文字にいたしました。因みに黒髭君は向こうに召喚されたサーヴァントでございます。で、なんで裏切ったんだっけ、君？

『ぐふふ、ゴツイ男が相棒っていうのもやる気出ませんで、裏切っちゃいました！ 拙者特に首輪とかつけられてなかつたんですなあ！ コレが！』

これですよ。お前さあ……さっきまでライネス（中の人）と知能戦線り広げていたカッコいいお前は何処に行ったんだよ……どうしてこんなにかっこいいのとクソキモイ状態を超高速反復横跳びできるんだよ……そういう所だぞ人気があるのは。

はい。という事でハーレムパーティーにゴツイ陽キャが加わりました、と。いや実際サポートタイプのサーヴァントの加入はデカいんですよね。ライネスちゃんと合わせて更に火力が加速する。

『——その割には周辺のシャドウサーヴァントの挙動が奇妙だが？』

『ああそりゃあまあ。拙者、別にこいつらの制御とか握っておりませんし。命令こそで

きましたけど、裏切っちゃつたらそれもまあ……はい?』

『ええいその辺りも何とかしてから裏切れ馬鹿者! 全員構えろ、まだ来るぞ!』

しかしながらそれと引き換えにシャドウサーヴァント君たちの攻勢が激しくなった件について。ふざけんな!!! (半ギレ) 裏切る代わりに戦闘を押し付けてくるサーヴァントとか聞いた事ねーぞ!

という事で、裏切り髭の肅清に來たシャドウサーヴァント君達と引き続き戦闘続行という事で。コイツ、面倒事しか持って来やがらねえ……!!

『あ、先にお伝えしておく、そ奴らは海を渡るために、靈基に色んな改造された『実験体』らしいので普通に面倒ですぞ』

『……本当に厄介な事をしてくれた!!』

思わずライネスちゃんの中の人も激昂。そりやあ当然と言えば当然だと思いますけれども……しかし、シャドウサーヴァントの大量生産に加え、更に改造を施してパワーアップとは。ゲームの都合上とはいえ、とんでもない敵だなあ……とはいえ、あの拙僧野郎は未来でもつとえげつない事をしてるのであながち驚くべきことでもない、という。

『——それで、どんな改造をされたか、分からないのかな? 黒髭くん』

『あーん? 確か、呪われた船長だとかいってましたぞ』

『呪われた……なるほど、さまよえるオランダ人、死ぬことも出来ない船乗りの伝説、フライング・ダッチマンか!』

さて、引き続きシャドウサーヴァント君戦。どんどん海から這い上がって増えてくる上に『海を征く罪人』とかいうスキルで、ガッツを自身に付与してくる厄介なシャドウサーヴァントが相手です。

んで、ダ・ヴィンチちゃんのおつしやつていた通り、かのシャドウサーヴァントが施された改良は、『フライング・ダッチマン号』、または『さまよえるオランダ人』に関するモノ。海の神様に唾を吐いた結果呪われてしまった船とその船長、世界でもっとも有名な船の怪異です。海に適応できるように、との事でしようが……。

『ただ……それだけだと海に潜れる理由が分からないな』

『んー。分かりませんなあ。拙者は『船に乗る怪異』として、拙者の船をより強くするための調整としか聞かされておりませんし……そういうもんじゃないんですのん? ダッチマンの武勇伝って?』

『いや、あくまで呪われて一人、船と共にさ迷い歩く船長としての伝承しか残されていないよ。フライング・ダッチマンには。海に潜れる、なんて出来ないはずだ』

海に潜れるダッチマンなんぞ、それこそ棒パイレーツでカリビアンな世界だけでございますよ。もしや映画版の能力の調整を……? そんなチートやめろ。やめましよう

芹沢さん構文使うぞおら。

それは兎も角。途中合流してくださったゲストサーヴァント黒髭君は、レベルマックス、それに加えてスキルレベルもマックスのつよつよ仕様でございます。

彼の特徴的な女性回復能力も、この女性中心パーティにおいて、相当強力でございませぬし、頼りにはなりません。彼の能力を上手い事運用しつつ戦っていけば、負けは無いんじゃないかな。

『——取り合えず、上って来た奴らは凡そ弾き飛ばしましたかな？』

『みたいだね。全くしつこい敵だ』

『まったくですなあー、海賊ってのはこれだからもー』

『いや海賊』

『拙者海賊って言うか前提として紳士ですしおすし』

うるせえバーソロミューぶつけんぞ。

……それは兎も角、やはり問題なく敵を打ち倒す事には成功いたしました。流石は黒いヒゲのおじさん、スキルを使うだけでこれだけの出力アップ。ゴルゴーンさんのパワーで全てを蹂躪、式部さんもグレイちゃんも全体宝具なんで、全体宝具の三連打で全てを屠り去る事もより容易くなったのです。

これで晴れて黒髭君を鹵獲。この特異点を好き勝手航海できる——と、思っていた所

なのですけれども。しかし、裏切った黒髭君への制裁はまだまだ終わらない模様で。

『……ちよ、ちよつと待つて、この反応は……!?!』

『どうした。ダ・ヴィンチ女史』

『高魔力反応だ！ 向こうの海から——来るぞ！』

『あ、あのボケ拙僧、マジで準備してやがりましたか!?! やめなさいよねえ！ そういうサプライズはNOセンキューー!』

海から浮上するのは……黒い影！ というか黒いのつぺらぼう！ グラフィックは

聖杯の泥の巨人君でございます！

『ふ、船と同じくらいの大きさが……!?!』

『おい黒髭、アレは!』

『あのエセ法師は確か『うみぼーず』とか言っていましたかな!?!』

『海坊主——日本におけるもつとも強力な海の怪異！ 最大三十メートルにもなるという伝説もあるらしいが、アレはどうやらその最大サイズらしいね!』

という事でグラフィックは使いまわしてございますが、本特異点の真の中ボス、海坊主君の襲来でございます。

くろひー以上に体力が高く、全体クリティカル攻撃を当然の様にかましてくる、魔神柱やドラゴンと同じタイプの超大型エネミーです。

しかもクラスはライダー。式部さんが攻撃の範囲に居ようもんなら致命的な不利……クリティカルなんて貰えば一発で沈んでしまいかねません。

『海の怪異。その最大現に強力な一体、か——仕方あるまい。出来るだけ伏せたかったところだが……グレイ嬢』

『は、はい』

『君の切り札を開帳したい。出来るか?』

『——っ……はい、やれます』

しかし。

ここでいよいよ。今まで封印（クエスト中はバリバリ開帳）していたグレイちゃん最大の火力、即ちは……宝具が。シナリオ上、使用するには少し面倒な宝具なんですよね。しかしながらその制約を解き放ったその火力は——恐らく、ゴルゴーンさんの宝具すら上回るでしょう。

『切り札!?!』

『そうだ。彼女の持ち得る宝具——相手、状況、動機。全て問題ない。最大出力を叩き出せる。海という不利な状況下、次の一撃を放たせる暇すら与えたくない——』

『——古き神秘よ、死に絶えよ』

『故に。我々の持つ最大出力を、叩きこむ』

『甘き謎よ……悉く無に帰れ』

——其は、かのアーサー王の最期を飾った宝具。

伝説の聖槍にして、世界を繋ぎとめる楔。グレイの秘密の根幹を成す、現代に現存する神秘の中でも指折り、というか間違ひなく頂点に君臨する濃密な神秘であることに疑いようもないでしょう。

『——Gray……Rave……Crave……Deprave……』

『言っておくが、ライネス嬢は、グレイのこの切り札をあまり使わせたくないらしい。その辺りを留意してくれ』

あ、どうでもいいけど、この目を閉じてから、パツと開いた瞳が金色に変わってる演出、クツソグレイちゃんが可愛くてよくない？ お師匠さんに土下座して娘さんを僕に下さいしたい。理詰めで潰されそう（小並感）

『Grave……me……』

『基本は使わない、見せ札、というか……そんな感じだ。ああ、とはいえ』

『Grave……、for you……』

『こうして見ていると——分からないでもない、が』

それは兎も角。

名をロンゴミニアド。

限定的な力の使用ですら、城壁やら山やら問題にもならず打ち崩す程の破壊力を誇るグレイちゃん最大の火力。サーヴァントにすら通じ、というか生中なサーヴァントでは直撃すれば先ず助からない程です。

今回のバトルは、グレイちゃんのロンゴミアドによる、イベント戦闘のような物らしく、グレイちゃん単騎、バフ山盛り、NPフルチャージと、お膳立ても完璧。さらに言えば相手はライダー、グレイちゃんと相性不利。

『聖槍、抜錨——』

『『最果てにて』』

『『輝ける槍』——!!』

即宝具発動してしまえば。全体クリティカルも、防御バフの盛りも何の意味も成さねえ、余りにも哀れ。オーバーキルも良いところだ。

という事で、グレイちゃんが最大火力を見せつけたところで、今回はここまで。ご視聴、ありがとうございました。

第六十章・裏：怪傑黒髭

マスターの視線がここまで『不機嫌』と見えるのも初めてかもしれませぬ。

『——それで、敵の術者の名前は『リンボ』で良いんだよね？』

「多分偽名なんでしょうけれどもねー」

『それでもどうしてそんな名前を名乗ったか、そこから想像出来る事も多いと思うよ。東洋の英霊と思われる大男が、どうしてそんな欧州の地獄の概念を使ったのか、とか』

理由は、マスターの視線の先にいます。戦闘途中、もはや勝ちようもないと悟ったその瞬間に『こうさんしまーす！ お助けください！』と言ってあつという間に敵方を裏切った黒髭、エドワード・ティーチ殿。

……警戒しているのでしょうか。私も、そうではありません。

かの第三特異点にて。ドレイク船長と我々を、一度は敗戦に追い込んだ、海の伝説。それがいきなり『裏切りまーすぞー！』等と言われても、マスターの様な表情になるのも不思議ではありません。

ゴルゴン様など、汚物を見るかのような目線で彼を見ています。もしかしたら先ほど『おつ、セクシーモンスター系おねーさん八犬伝！』等と出会い頭に言われて、その

直後に殴り飛ばしたからかもしれません。間違はなくそれです。

しかし、目の前のライネス様などは実々にこやかに接していらつしやつて、こういった相手には慣れているというお言葉に偽りなし、なのででしょうか。

「いやーしかしこつちはいいですなあ。何処を見てもおにやのこ、おにやのこ、ビューティフル・ゴッド、ですからなあ、やつぱり目の保養！」

「はっはっはっ……いいからキリキリ吐きたまえ」

「くうーん……」

いえ、にこやかにしている、というよりその表情を張り付けて会話していらつしやるのでしょうか。声に張りが無い、と申しますか……何だか声色が乾いている気がいたします。誠に。

「全く容赦ありませんが。拙者、一応皆様の理になる事致したのですけれども？」

「昔から裏切り者への扱いつて言うのは決まってるものだろ？」

「あ……それで言えばまだまだ優しい扱いをされてるつて？ いや全くそれはその通りなんですけれども。贅沢は言わないので代わりばんこでお嬢さん方が膝枕と化してくださると最高なのですけれども……うおっほっほっ」

「いやぜいたくしか言つてないじゃないか……」

しかし。

そんな私たちと比べ、なんと堂々としている事か。いえ、あんまり堂々とされても反応に困ると申しますか。一応、彼は裏切ってこちらについたとはいえ、一応元は敵の立場。もし私が同じ立場なら、色々な複雑になつてしまつて、もう縮こまつてしまいます。だというのに。そんな素振りどころか、もうずっと前、この特異点に突入してからこちらの味方であつたかのように、ここで我々と喋っているのが当然とばかりに振舞つていらつしやるのが……

「贅沢、つていうか、厚かましいよなあ」

——そう。厚かましい。

面の皮が厚い、と申しますか。私とは比べ物にならない程に。恐らく、顔面に鉄砲水を浴びせかけられても、大蝦蟇の如くけろりとしていく程に。

マスターが、怪訝な顔でそれを申すのは……それに対する懸念からでしょうか。裏切りに対して、何も気にも留めないというのは信用に取る相手なのか。

些かと厳しい見方ではありませんが。今やマスターも、三度の特異点を越えて来たカルデアの立派なマスターです。その辺りは何を置いてもしつかりと見極めをしなければならぬというのを、分かっているでしょう。

「女の子の膝枕とか、それこそ財宝と同等クラスの価値——それを分かつて言つてんの

かい、大海賊様よお」

「えっ」

……あの、分かっていると思っていたのですが分かっているとは全然思えない発言が飛び出したのですけれども。

「そんなの、当たり前でござーましようよ！ 財宝も、女性も、暖かならぶらぶ膝枕も手に入れてこそその七つの海の支配者って奴だろうが！」

「はっ……分かっててそれでも口にするたあ、流石大海賊黒髭、か？ 成程。その辺りを分らない愚者ならちつとばかり信用に欠けたが……」

「マスター!？」

とんでもない事で信用しようとしてないでしょうかこの人。あつ、ゴルゴーン様に首根っこ掴まれて……ああ、投げ捨てられてしまいました。いえ、船の外とかではなく、船の隅へと。グレイ様が受け取ってくださいました。

「だ、大丈夫ですか？」

「うん、平気……ちよつとはしゃいじやつただけだから」

『久しぶりの男子との会話に心が躍り過ぎた結果の自らも大失態に、思わずして自己嫌悪に陥ってしまう少年なのであった』

……マスターの物凄い奇行は今、置いておくとして。はい。彼も一人の男の子である

事は間違いないのでしようし。それを言うのも、酷ですし。反省している模様ですし。ああ私のこの術、というのはどうしてこういう、あんまり大切ではない時に限って発動するのでしようか。じゃあなんであんな不機嫌そうな視線をしていたのでしようか……

兎も角、気にするべきは目の前の黒髭、です。

「まあ呆けたマスターは兎も角として、だ。ある程度は弁えて欲しいものだな。海賊風情が。温情にて生かされている、という事を理解しているのか？ 貴様？」

「おーおーすっごい迫力ですコト。温情って言うか win-win の関係って奴だと思っただんですけれども？」

「貴様など居なくても、何とかなる——そうは考えないのか？」

取り敢えず、マスターに代わって彼に相對するのはゴルゴン様。ただそれは、此方の事を考えて、という訳ではない、と思われます。恐らくは単純明快に、黒髭が気に入らないのでしよう。ゴルゴン様はただでさえ人間が好き、という訳でもありません。そして黒髭が万人から愛されるような男かと言えば、それもまた、違うと思いますし。「いやはや、拙者が言うのもアレですが、この海渡れる能力は結構替えが聞かないと思うのですけれども」

「己惚れるな。カルデアの召喚術式を知らんわけでもあるまい？」

「サーヴァントをある程度自由に呼べるってやつですか。ですけれどお、もし本当に誰でも好き勝手呼べるなら——BBA呼んでるっしょ？」

しかし、彼女の醸し出す迫力にも黒髪は全くもって怯みません。寧ろ、ゴルゴーン様の目を真正面から見つめ返しているのです。

「第三特異点、BBAの船に乗ってましたからねえ？　縁、って奴、結ばれたんでしょ？　それ頼りで呼べるって言うならそもそもの海をBBA呼んで渡ってますでしょ？　そりゃああのフランシス・ドレイクの船ですからなあ、最高の船ですからなあ」

「——貴様」

「おんやー？　動揺しちゃいましたかなー？　いけませんぞレディ、そんな簡単に動揺晒しちゃ。付け込まれますぞー？」

神代を生きた圧倒的な存在。我々、人間とは文字通り格の違う、神格に等しい彼女。下手をすれば、一瞬でその首を刈り取られても不思議ではないというのに。

彼はむしろ、造作もなく此方の実情を見抜き、そこへ付け込むかのように『自分の必要性』を淡々と語って見せます。

油断ならないサーヴァント。敵方も、もしやすれば彼を持って余していたかもしれない。そんな想像が出来てしまう程の……

「まあ拙者としても？　こんなね？　おにやのこだらけのパラダイスから追い出されるのはちよちよつと勘弁オナシヤスってなもんでございますれば？　こうして有能性を示すのもいとわないくろひーなのでございました、完!!」

「――」

「――ん？　どないしたのですかな？」

「いや。今までの言動を、私の胸の辺りをじろじろ見ながら言っていなければ、説得力もあつたのだらうと思つただけだ」

……もしかしたらただの阿呆なのかもしれません。

「ありや、バレちつた!?!」

「それだけ見ていれば気づきもする」

「いんやー拙者生粋のロリっ子、少女趣味なのですが……規格外おっぱいはやつぱり別腹つてか、男の子の夢、つていうか？」

「死ね」

「ぎやーっ!?!」

なんでしょう。警戒するのが何だか馬鹿らしくなつてまいりました。この人を目の前に油断をする、というのは宜しくない、とは思うのですけれども……ただ、目の前でゴルゴーン様の尻尾で弾かれて、『どひやー!』等と言いながら宙を舞うのを見ていと

……どうにも、どうにも、気が抜けると申しますか。

「——油断をしちやいけないよ。紫式部」

「……えつと、ライネス、様？　でしようか」

「ああうん。今は私だ——で、そんな私からの意見なのだがね」

「相対して気が抜けるような相手程、意外と油断ならなくらい、腹をくくつてたり、覚悟を決めていたりするんだよ」

……そんな私を見て。

隣に立っていたライネス様は。まるで、経験があるかのように。そう呟いたのでした。

第六十一章

黒髭君の宝具で海を逝く実況、はーじまーるよー。

さて、前回は黒髭君から『えつ、拙者紙とか知らんでござるけど?』とかいう衝撃的過ぎるお言葉が飛んで参りました。船から突き落としてやろうと思いましたが、幽霊船が沈んでしまった以上、裏切つてこちらについてくれたの彼の船を運用するしかないのでそうするわけには参りません。

とはいえ、この特異点について色々喋ってくれたりして色々情報は集まりました。なんだつたらプレイヤード的にはくろひーが加入してくれただけで本当にありがたいんですけれども。

『さーて、拙者の船で大海を渡しますぞー。何処へ行きたいですかな?』

足が加わつたので、我々がいける範囲が大きく広がりました。これで紙片を回収できるぜやったー……とはなりませんで。

『因みに、バカみたいに島が点在してますし、それ一つ一つ回るのクツソ面倒なんで、その辺りは賢く行きましょー』

そういう事だよ! 本来の目的である問題の紙片については一切が謎のままだねえ(謎

の万国長女) この海の何処かに安置されているのは間違いない、というだけで。足を手に入れても足を解決しただけでそれ以外を何も解決してないっていう。

ここで『足で探そう』という事ならプレイヤーお得意の全島巡りが始まるだけではないのですが……やっぱりそれでそう簡単に見つかる様には出来ておりませんよねえ。

『うーん、そうは言っても、賢く行くための情報を得られなかったのは痛いねえ』

『何か、手がかりが欲しい所だが……紅の都の様な何か、分かりやすい場所があればいいんだけれども』

『分かりやすい場所……?』

『ああそうだ。何か目印というか、そんな感じの——』

『……ありますぞ? それなら』

めっちゃ簡単に見つかるようにできてた!?

『あるのか!?!』

『拙者もこの辺りで色々暴れるつもりだったもので。一つ下見をしてみました。まあその時にねぐらとか、暇潰す為のリゾート地的なモノを見繕っておりましたら……』

黒髭君!! そんな真つ当な海賊みたいなことしてたのかい!? 実際の海賊も、全員という訳ではありませんが、自分のナワバリに何かがあるかって言うのは、やっぱり態々島をしつかり隅まで見ていたらしいですよ。その辺りはやっぱり人間なんすねえ。

という事で黒髭君の情報網ならぬマメな地形把握により、まさかの行き先の候補地が判明いたしました。どうやら、遺跡らしいものの入り口があるそうです。

『というか、明らかにそこが怪しいじゃないか……なんで言わなかった？』

『聞かれませんでしたし？ 拙者只の海賊ですので、そう言うのは聞かれんと今一歩分からのですよ』

もーくろひーつたらお茶目さん！ 思わず滅つ☆（いかりのじゅもん）

そういう所は直ぐに教えてもらわないと困るんですけれども。まあいいや、この後徹底的にこき使う事でこの苛立ちは晴らすとして。

んで、案内された島へ無事に上陸——しようと思っただんですよ。ですけれども、しながら当然と言わんばかりに妨害を行ってきておりますはシャドウサーヴァントの皆様。普通に海の底から這い上がってくるんじゃないやねえ!!

『いやー凄い数ですなー!!』

『落ち着け。グレイ、相手は海の亡霊、フライングダッチマンを組み込んだ相手だ。君の得意分野だと思うのだが……』

『つ、通じるかどうかは分かりませんが、やってみます!』

しながら今回に関しては、対霊戦闘を得意とするグレイちゃんが居るお陰で、こいつらはただのカモにも等しい。徹底的にすり潰してやるから覚悟の準備をしておい

てください！（黄金の風）

勢い任せで叩き潰して最高にハイって奴だア!!（全滅）

『——いやー、やっぱこつちについて良かったわ。圧倒的にボロカスにされてて草なんだリンボ殿マジで』

『まあ相性もあつただろうけれど。君の援護が無ければ厳しかった。君を拾ったのは想像以上の収穫だったらしい』

『ま、集団戦ならそこそこの心得ありますしー?』

因みに海の上での集団戦なら、英雄王よりも強い人のお言葉です。なのにそこそことか謙虚だなーあこがれちゃうなー。なおその本性はナイトどころか忍者にも劣るレベルの畜生の模様。汚いな黒髭流石汚い。

という事で島に無事上陸成功……したんですけれども？ ちよつと待ってくださいよ海から昇つて来た奴らが砂浜にもいるんですけれども!! あれ？ さつきも似たような流れをしたような？

『多いです!?!』

『今までとは熱が違うな、これは』

『強力とはいえシャドウサーヴァント一騎だけ、って言う状況とは明らかに色々違うよね。うん』

『ふむ——何か心当たりは？ 黒髭』

『さあ？ ただ、あのエセキャスター殿ならこれくらいやりかねないな、という感想ならっ。』

『……成程、参考にはなりそうだな！』

画面いっぱいには並ぶ刀を構えた影法師。

絶対に突破させないという密度を感じますねえ。

『——ンンン！ やってくれましたな黒髭殿！ この裏切り者！』

そしてその中の一匹、頭に札を張った一匹が前に出て来て突然の『裏切り者！』宣言でございます。実に特徴的な喋り方をなさっています……しかしながら、この特徴的な話し方ですよ。知ってらっしゃいますか？ 黒髭殿。

『おんやーリンボ氏。拙者がシレっと裏切つてしよんぼりしていると思つたのですけれども。意外とそうでもなさそうですねー』

『当たり前でしょう。貴方が裏切るのはまあ想像つきますし』

『じゃあなんで裏切り者呼ばわり？』

『こういうのはやはりお約束かと？』

意外とユーモアに溢れた御仁ですね。リンボさんって。意外と話し合えば通じるかもしれないね!!! (希望的観測)

『そもそも裏切りそうって言うならアンタもそうでしょリンボ氏』

『——ンンン、何のことやら』

『アンタみたいな獣が欲を我慢できるわけないっしょ？ 下手な言い訳する前に、諦めてさっさと噛みついたら？』

『ンンン風評被害も良い所ですぞおおお？』

風評被害ちやうやろ（素）

おっと、初めて会った方になんという失礼を。まあ、目の前の……いえ、目の前には居ませんが、それでも胡散臭いと分かる様な男ですからね。そりゃあこんな感想も出ちやうしね、しょうがないね。

それは兎も角、どうやら出て来てくれたようですね。ホモ君をここへと連れて来た黒幕らしい男が。

『さてさて。お初にお目にかかります、カルデアの皆様。恐らく黒髭殿から聞いているとは思いますが、一応、名乗らせて頂けば——拙僧、キャスター・リンボと申す者。主の名代として、この特異点の仕切りを任されております。以後お見知りおきを』

『これはこれはご丁寧に。カルデア、万能の天才たるレオナルド・ダ・ヴィンチだ』

『ほほう？ かの万能の天才殿。しかしながら、はて？ 随分と様相が、想像していたのとは違う様な？』

はつ、舐めるな変態坊主。お前もさぞ名の通つた変態だろうが、此方に負わずは自分の理想の肉体になるために自分が掻いた絵の美女になり果てた至高の変態だぞ。お前とは変態としての純粹さと格というものが違う。

『——カルデアばかりを見ていてもらつては困るな。特異点の黒幕』

『つと、これは失礼……あまりにもちつぽけな物で、目にも入らず』

『ほう?』

『ああ……貴女の背丈とかそういう事を言っているのではないので、ご安心を』

『それは明らかに余計な一言だったなりンボとかいうの!!』

そしてマナーも宜しくないと。身長の低さを取つて煽る等、程度が知れるな。黒髭殿ならその身長の高さは寧ろペロペロする為の大切な材料になつているぞ! ふ、所詮は傀儡を通してしか喋れぬ三下か……

とかいろいろ言つてますが、底は気にするべきではなく。なんで我々の前に態々姿を現したかですよ。

『まあ、些事は兎も角として——』

『カルデアの皆様、並びに協力せし者共、我が主からの伝言は一つ——『踏破せよ、でなければ死して屍晒せ』との事……我が主は、皆様がこの試練を乗り越える事をお望みになつておられるのです。決して、容易く死んではくれぬよう、お願いいたします』

——そのリンボの言葉と共に、無数のシャドウサーヴァントが戦闘態勢に入りました。

どうやら黒幕は、此方に対して圧倒感強めの就職面接でもしたい模様です。であればこちらも暴力を持って面接に臨むとしましょう。

第六十一章・裏：海原馬鹿旅情

「……一つ聞きたいんだけども」

「はいい？」

「この船、どうやって動いてんの？ 船員一人も見えないんだけど」

「見せない努力をしますからなあ。それより少年、なーんで拙者の所に？ というか

なんですか、その渾身の気の良い少年ポーズ」

『ヨッ、大将、調子はどうだい』ってか？ いや……あの姦しい空気の中に居られなくなつて……？」

そ、そんなに姦しいのでしょうか。今この空気は。

寧ろ皆さん、欄干に肘を乗せたり、マストに寄り掛かったりして、静かに海などを眺めてるように見えます。探しているのは、黒髭の言っていた『心当たりのある島』。我々が向かっている場所です。

黙っているのは、それを集中して探しているからというのもあるからでしょう。

「姦しく、なくない？」

「鈍いな、女性だけの沈黙の空気つてのは、男子にとつちや致命的……なんだよ。姦し

いつて言うのは意味じゃない、状況と雰囲気を実現するために使った。今経験した。うん。知識では知ってたけど」

そんな静寂を乱したくない、という事でしょうか。

実際、黒髭さんと話すホンゾウインさんの表情は、先ほどまでと違って、少し気が抜けたようにも感じます。そういえば……師匠の教室の皆様も、『男子だけでしか話せないようなこともある』と言っていた事が、あつた気がします。

ただ、シキブさん、はずつとホンゾウインさんを見ていらつしやるようです。ただその視線は、師匠が生徒の皆さんを見るときのそれと、そつくりな気も。

「あー、分からないでもないですな……ところで小僧、テメエ誰に話しかけてるか分かってんのかオイ？」

「ロクデナシの大悪党。ちつとでも気を抜いたら食われかねない人食いサメ」

「——ならヨシっ！ いやー空が青いですなうしよねん！」

「お前の情緒どうなってるの？」

……ただ。彼が話しかけている相手が、相手だと思つたので、その表情も仕方ないとは思いますが。一瞬、拙もアツドにお願ひしようか迷つてしまひそうになる程に。一瞬だけ溢れた濃密な殺気は。彼が『黒髭』である事を否応なく思い出させます。

黒髭——世界でもっとも有名な海賊。

「拙者の情緒はいつつも思春期男子の如く不安定故致し方なし」

「そこだけ若くてどうするんだよアンタは。もうちよつと若くあるべきを別の所にするべきじゃねえのかい?」

「んー、拙者のマグナムとか?」

「そのデリンジャーしまえよ」

……一瞬互いに確とにらみ合ってから即座にすん、となつて二人とも前に向き直るその切り替えの早さは、最早は滑稽というしかありませんが。拙としては胃が痛くなつてしまいます。サーヴァントの恐ろしさ、というのは、拙も自分自身で嫌という程味わっているのです。

恐らく、舵の前で舵輪を回している黒髭が、ほんの少し本気になるだけで、彼の首は容易く引きちぎれてしまうと思えます。それを分かっている訳は無い。であればその上で、ホンゾウインさんは黒髭に接しているのでしょうか。

「拙者のマグナムは兎も角、そちらさんの「豆鉄砲はどうなんです?」

「あ? もう使いもんにはならねーからご安心を」

「えっ?」

「……なんですかあ? 文句おありですかあ?」

「いや文句はありませんけど……そもそもお主が文句があるのでは?」

「無いですよ。半ば自業自得ですからねー」

実際、ホンゾウインさんと黒髭の間には絶妙な距離がある様な気がします。踏み込み過ぎない、そんな感じの距離を。

「……えつ、そんな見た目にそぐい過ぎるような事やっただんです?」

「する訳ねえだろポケナスご婦人方にありもしないデマとか船長のデカマラ伝説とか流すぞおみまいするぞーゴラ」

「やめてくださいー拙者は基本的に女性に優しい紳士なんですー」

「紳士ならその豪快過ぎるファツションとはお別れをした方が良いのでは船長?」

「これは海賊の正装みたいなものだし……」

……とここで。

先ほどからあのお二人、どんな話をされているのでしょうか。あまり詳しくないのですけれども、マグナムというのは拳銃の名前なので、武器のお話とかされているのでしょうか。師匠はゲームの武器のお話はたくさんされていきましたけれども。

拙は余り詳しくないですけれど……って?!

「お、どうなさったんですか式部さん!? お顔が真っ赤に!?」

「な、なんでもありません……お気になさらず……!」

と、とてもそうは見えません、風邪をひいているみたいに真っ赤です。横になった方

が良いのかもしれませんが——と、思っていた所で、誰かにポン、と肩を叩かれて。振り向いてみると、顔いっぱい笑顔の浮かべるライネスさんが。

「良いんだグレイ。彼女の事はそつとしておいてあげたまえよ」

「で、ですけどお体の調子が……」

「彼女はサーヴァントだよ？ 病気も何もありませんさ」

「で、ですけど特異点というのはそういった常識が覆される場所だと」

「く、くくつ……グレイ、そう彼女を虐めてやるんじゃない。デリケートな問題なのさ」
ライネスさんの言っていることは良く分かりませんが。ですけど、兎も角放っておくというのは無理です。とにかく、船の何処かで寝かせるくらいは、別に問題ないのではないかと——

「あ、あのつ……ほ、んとう、に、大丈夫ですっ！」

「そんな、無理しないでください。拙が肩を貸しますので」

「い、いえ本当に大丈夫なんですう……！」

「耳まで真っ赤ですよ!? 大丈夫じゃないです！」

どうしてこんなにも二人して『平気だ』なんて嘘を吐くのでしょうか。拙にだって、流石に今の式部さんが平静じゃないのくらいは分かります。

だって、彼女がこんな風になってしまったのに、他の原因らしきものが見当たらない

のです。こちらは黙ってばかりでしたし、ホンゾウインさんと黒髭は、ただ銃器の会話をしていたばかりだったので……

「ライネス様……あの、お願いします……!」

「何がだね? 私には何も分からないなあ。ただ君が平気だつてことだけは分かるけど」

「あのっ! それはっ!」

「分からないなあ」

「ふうふうふうふうん」

「し、式部さん!? どうとう足に力が入らなく!?」

顔を覆つてしやがみこんでしまわれて。絶対に平気じゃありません。こうなれば、力づくでも式部さんを確保しなければ――!

しかしながら、あと一步を踏み込もうとしたところで、腕を掴まれ止められてしまいます。今度は、ゴルゴーンさんが。

「落ち着け、本当に平気だ」

「でも……」

「……はあ、仕方ない。良いか、今式部は、向こうの男共の、全くもつて無遠慮な会話を聞いてこうなった……というか、なんで私がこんな事を……」

「無遠慮？」

「そうだ。いいか？ 奴らの言っているのは——」

——その後私が変形させたアッドをどうしたのかは、多分、分かると思います。

「俺は……巻き込まれた側なんだけれども」

「拙者だつて別に悪意を持つてやったわけじゃありませんし……ブーメランで首が飛びそうになるのは初めての体験でございました」

「自業自得ですお二人とも!!」

「うう……ししよー……ししよー……ごめんなさい……拙は……拙は汚されてしまいました……ふうう……」

「ひつでえ風評被害!」

ゴルゴーンさん曰く。男性の間では、そういう風に比喻して、その、大切な部分を呼び合う事は普通の事らしく……で、でもそれにしたつて、そんな堂々と話をするなんて想像も出来なくて……せ、拙まで顔が赤くなっている気がいたします。というか、ライネスさんもゴルゴーンさんもどうしてそんな顔色一つ変えないんですか。強すぎませんか。

「はっはっはっ、この程度で顔を赤らめる程ピュアじゃないさ」

「その程度は慣れている」

「ええええええええええ……」

ライネスさんは笑ってますし。ゴルゴンさんは……なんででしょう。ちよつと色気がある様なお顔をなさっているというか、舌を少し出しているのはなんでなのでしょう。何を舐めているのでしょうか。

『——つと、わいわい会話しているところ申し訳ない。海の方から』

「敵性反応か!? 上等だゴラ」

「いやー凄いですなー! ——オレは今、機嫌が悪いんだよ、すり潰してやる」

「落ち着け。グレイ、相手は海の亡霊、フライングダッチマンを組み込んだ相手だ。君の得意分野だと思うのだが……」

「はっ、えっ……あ、はいっ! つ、通じるかどうかは分かりませんが、やってみます!」

み、皆さんの切り替えが早いですけれど……拙も、今のなんだか、色々なものが溜まった感じを発散したいので! 頑張ってみます! はい! アッドにはとつても頑張ってもらわないと……!!

第六十二章

謎の遺跡に駆け込む実況、はーじまーるよー。

『これで最後——だっ！』

渾身のライネスちゃんの攻撃により、最後の敵がダウン。全く、本当に、長く苦しい戦いでしたね……

何重にも仕掛けられた執拗なリンボの妨害を潜り抜け、まして……まし……お前『踏破しろ』って言うてんのにここまでしつかり、念入りに妨害するとかどういう見なんでしょうかね（憤怒）

こちらら何戦したと思ってるゴラ。もう何戦とかじゃなくて何ウエーブとか数えなきゃいけない程だぞ分かってんのか？ あの数が押し寄せてくるのはよう。しかも地味にクラスも今までと違って混成だし……

まあ……ともかく、苛立ちと恨み言を吐きつつ、敵陣を突破した先に、いよいよ到着したのは謎の石造りの出入り口となります。

島の中心辺りにぽっかりと口を開いたこの入り口の下には、黒髭曰く、広大で、探索もキツイレベルの迷路が広がっているとこの事です……ん？ なんか聞いた事あるなそ

れ？

『——成程、第三特異点を模倣したのはこういう部分もつてことかな』

『この形、地下の迷宮（ラビリンス）……！』

『そうだ。アステリオスが守っていた地下遺跡。もしそうだとすれば、それに相当する何者かが、守りにについている可能性もある』

という事で、どうやらこの島、というかこの遺跡はアステリオス君が居た場所を模しているようで。黒髭君はリンボと共にこの入り口に、のこのこと入り、二人して必死こいて逃げだして来たらしいです。

……ん？ あれ？ 今、二人して逃げ出したって……リンボ君も一緒になって普通に逃げたの？ どうして？ ここの特異点仕切ってるんでしょアンタが。もしやしなくてもリンボ君ってバカだったりします？

『……リンボと君は敵方だったんだらう？ なんでここで逃げ出してるんだい？』

『いやー……正直な話、拙者のクライアントことリンボ氏も、ここの仕切りを任せられただけの模様で。ここがどんな構造しているのかとかも全然分かってないって言う。という事で中身の確認とかは必要じゃねーかなーって提案したら……』

『ふ、二人一緒にひどい目に合った、って事でしようか』

『そうなんですよフードちゃん……いや〜ホントに、『御大将!? 大将殿!? 手加減を！』

『御加減をば!』とか言つて綺麗なフォームで走つて逃げてましたなあー。ちよつと笑いました』

リンボ君さあ……なんだろう、クツソ情けない悲鳴上げて逃げ出すのやめてもらえませんかね(真剣)

一応この特異点における黒幕側の人間なんだからさあ、本編のシリアス具合を見習つてどうぞ。後フードちゃんじゃねえグレイちゃんと呼べやっぱ呼ぶな(一息) 全く、馴れ馴れしいことこの上ない……

取り敢えず、大脱走クソダサリンボ君の犠牲によつてこの遺跡の中身がある程度分かっているのがありがたいので特別文句ばかりも言つていられません。

そんなミスター被害者のもう片方、黒髭君の先導により、いよいよこの海の都にある、筈の紙片を探して。こちらのダンジョン探索! 開始!

『あ、ここクツソ狭い上に敵もウロウロしてるんで、さつきよりも楽になるとか考えないでください。寧ろこつちの方が不意打ちとか全然ある分クソですぞ、ステージとしては』

『狭い通路で見通しも悪い上に角も多い……一瞬でも油断すれば狩られるか』・

『こちらでも周辺の索敵はするけど。まだ完全じゃないから見落としがあるかもしれないから。くれぐれも気を抜かないで欲しい』

あ、探索中誤った場所を探索したりすると普通に襲われますので。アイテムだけじゃなく普通に敵が出てくるこの恐怖。再臨素材がもつと出るようになるよ♡ 探索で間に合ってます（激ギレ）

『——さて、ここら辺は……？』

『マズい！ 敵の反応が——』

『なにっ!? くそっ、隠れていたか!』

因みに迂闊な探索をした結果がこちらでございます。

バックアタック仕掛けられて向こう側から攻撃、しかも攻撃されたら確定クリティカルとかいうクソ仕様。お前マジかよやってるな……もうライネスちゃんHPが半分切りかけてるんだけど。星5のステータスを一体何だと思ってるんだよこいつらは。

皆様はこうならない様に気を付けましょうね。オラッ！ 探索！ 失敗！ 探索！ 失敗！ 探索！ 失敗！ 探索！ 不意打ち！ 見ろよオラア、この無残な姿をよお！（嘲笑）

『——大分進んで来たような気がするけども』

『んー、拙者はもうわかりませんなあ。ここまでしつかり奥まで進んでた訳ではございませんので。はい』

『そうか——であれば、引き続き壁役として草分けを頼むよ?』

『アスヨネー……』

なお最も狙われているのはライネス殿の模様。コイツ、このパーティで一番の脅威が一体誰なのか分かってやがる……！ バファアとして大活躍のライネス殿。彼女が居ないと難易度がまあ、ググつと上がりますので。

さて、そんなこんなで不意打ち上等のクソみたいな状況逆境、しかしそれも終わりが無い訳でも無く……

『——開けた場所に出たな』

『お宝……が、ある訳ではないみたいですが、ガランとしてますぞ』

『いや、そうでもない。君にとつてのお宝は確かに無いが、しかしこちらにとつてのお宝はあったな。紙片の反応アリだ』

おつ、どうやら間違いないようですな。このただっ広い部屋、その中心……再び台座が設置されて、その上に紙片が安置されております。壁も、箱も、紅の都と同じように依然何もなし。

さて、それがただの無防備な放置か、と言われれば、それも絶対にノン！

では、一体どんな防備が展開されているのか……となるとまあ当然、紙片の目の前にはそれに相応しいブツの守り主がいますよ。

『だが、当然の様に通してくれる様な甘さは無い、か』

『敵は——』

『この反応。そして、あの二つの斧は……成程、この場所なら、この敵、という訳か随分とまあ、良い性格をしている。』

まあさんざ脅威と言った訳ですし。黒髭が普通に出てきたなら、ここのシャドウが誰かは凡そ決まったようなものです。そりゃあ第三特異点最大の敵をね、スルーしていける訳がないって奴ですよ。

大柄な体に、靡く髪は雄々しく、そしてその両手に構えられた二つの大斧は、此方の首を容易く——アレツ？ 二つ？

『ラビリンズ、迷宮の支配者。ここをロケーションとするなら、これ以上の敵は居ない』
『……成程？ 第三特異点で、もう一人いたビッグゲームか』

『こちらに味方してくれたのが大変ありがたかった。だが、敵に回ってしまった今、頼もしさはそのまま脅威になる』

おんやー？ 逞しい筋肉とかは一緒なんですけれども……あの、化け物みたいな英雄って言うよりは、英雄みたいに優しく強いはけものの姿が見えているんですけれども。つかしいなあ……？

『もう一つ、恐ろしい事を言うのであれば彼は、ずっとアウエイで戦っていた』

『特異点での様子が本当なら、そうだな』

『ラビリンスという伝承においてのホームを出て、守る人を背に戦っていた彼は、本気ではあったが、本来の戦い方が出来ていたかは分からない』

『今の彼は——本来の戦い方が出来るわけだ。思う存分に』

彼の名は、アステリオス。雷光の名を持つ雄々しき勇者。またの名を——迷宮の怪物ミノタウロス。恐らく世界で一番有名な怪物の一角にして、この遺跡の原型となった場所であるラビリンスの支配者でもあります。

で、恐ろしいというのは……ダ・ヴィンチちゃんの言う通り彼はラビリンスの中から出てこちらと一緒に戦ってくれたわけで。そして本来の戦い方が出来ないその状態であつてもヘラクレス相手に一時は互角に戦って見せたんですよ。

ヘラクレスがどれだけの化け物かは極まった型月住人の皆様なら凡そ分かっていると思つていますが……それでも彼は足止めして見せたのである。強いんですよ。アウェイの状態でそれだけ出来たって言う。

では……今はどうなんでしょうか。

『英雄としてではなく、シャドウサーヴァントとして、迷宮の守護者にして怪物の役割を機械的に遂行してくる、というのは……うん、悪夢だよね』

自分自身が最大の力を発揮できるホームにて。

一切の情も差し挟まない。

控えめに言つて『怪物』が目の前に立ちただかつております。

第六十二章・裏：迷宮狂乱

通路に漂うのは埃つぽさと——血なまぐさい香り。

人の住んでいるそれとは思えない。陳腐な表現をするのであれば……人食いの化生が住まう洞穴、と言ったところでしょう。しかしながら、洞窟ではなく、人工的に作り上げられた神殿と言った方が正しい佇まいで。そして——我々は今。

さて。何をしているのかと言えば。

「攻撃攻撃！　ゴルゴーンさん、取り敢えず蹴散らす意識で！　まともに戦ってたらキリねーやこんなんよお!!」

「不意打ちに気をつけろという話はでたらめか！　結局は物量戦ではないか！」

「角からこちらに来るのは間違いなく不意打ちではあるのだが、しかし通路いっぱい広がってくるのは最早不意打ち、ではなく遭遇戦のそれだな？」

じりじりと、出来るだけ下がらない様に。三步進んで二歩下がるのを繰り返していきます。ここに突入して……黒髭さんが踏破していた場所を、さらに一步踏み越えたその先へ、こうして踏み込んだ、その直後から。

「ひーっ！　なんていう熱・烈・歓・迎☆　くろひー感激——」

「そんな呑気な事言ってる場合でしょうか!」

「無いでーす!」

「ええい、リンボとやらも中々性格も悪かったが……これを設置したのも、相当にねじ曲がっている性格だろうな! 一步奥に入った瞬間に入り口の倍近い戦力が増えるようになるとは!」

「策士ってそういうもんじゃナイ!?」

ともかく、一步曲がれば敵、敵、敵。暗がりから一匹飛び掛かってくる……等という甘いものではなく。自分たちのテリトリーに一步でも入り込めば、上下左右、隙間なくおそりかかってくるのです。

ライネスさん曰く——『攻撃するのではなく、体に組み付き僅かでも足を止める事を優先している』動き。どうして、という私の疑問に、ライネス様はこう答えました。『僅かでも足を止めれば、そこに殺到して押しつぶしてしまえばよいから』と。

ならば、絶対に前のめりになる訳には行きません。結果として迷宮内の探索は遅々としたものにならざるを得ず……今、漸く、一つの通路を抜けられる手前まで来ています。

「つだあ! 撤退! いったん撤退じゃあ! 敵の層厚い厚い! 無理無理っ!」

「つかあ……無理かつ! ダ・ヴィンチちゃん!? 迂回路は!」

『——発見した! ちよつと下がる事になるけど、そつちからならいける、かも!』

「アイアイ了解！ 一旦下がって体勢立て直す、でいいかい！」

「問題ない。だが、あくまで逃げ出すのではなく、牽制しつつゆっくり、だ」

「分かっている……式部さん、援護しつつ下がってくれ。船長！ グレイちゃん、悪いが殿に付き合ってもらわず俺と一緒にア！」

「貧乏くじい！」

「分かりました！」

突っ込んでくる獣が剥いた牙、ぬらめく触手、魔術によって編まれた焰の弾丸、粗末なれど血を吸った武器たち、多種多様な攻勢に向けて、何発か。それと共に——前線を張って、少し消耗していたゴルゴン様が一步下がりにライネス様と共に離脱。

その代わり、再び角を生やしたマスター、そして拳銃を構えた黒髭様、そして巨大な槌を両手に握りしめたグレイ様が、私の前に立ちました。

「——っ、強化は無理だが。露払い位はしてやるよ船長さん！」

「へっ、小僧が。若造にそんなことしてもらう程、この黒髭は落ちぶれていないってんだよ！ あ、司書さんは全然応援くださない、出来ればチアで！！ 年齢とか考えてない痛いレベルのえつぐいチア衣装で!!!」

「あ、あの。無理はなさらないでください、拙が居ますので……！」

……マスターやグレイ様は兎も角として、もう一人の方はもう放っておいていいん

じゃないでしょうか。

あつ、いえいえ。私の盾になって下さっているのですから、援護しないというのは流石に、流石に……はい。良くない、です。

という事で、取り敢えず後ろから何かの拍子に誤射するかもしれないぐらい、すれすれを狙つてみます。いい事なんですよ。出来るだけ前衛の方を避けて迂回せず、直線距離で攻撃を叩きつけた方が。

「……なんか殺意感じますなあ？」

「それこそ自業自得では？」

「うーん黒髭は分からない——つておうっ!? なんかエライの居ません!？」

等と。呑気な事を考えている暇はありませんでした。

その直後、私の視線に入つて来たのは。他とは明らかに大ききの違う、影。人ならざる形であるのは、遠目でも分かります。

響く、ドシ、ドシンと重たい足音。その四肢は——当世では百獣の王と称えられる獣のそれ。しかしその背中から生えているのは、蝙蝠の羽の様な漆黒のそれ。そしてその奥から伸びる、蛇の尾。

異形。

「——合成獣（キメラ）!？」

「おーおー伝説通りの姿ですなあ。でも他とは明らかに格つてもんが違いすぎませんか？

あーれサーヴァントレベル無い？」

「そんなもんポンポンでないで——っ欲しいんだが」

グレイ様の悲鳴に応えるように、鳴り響く咆哮。

ビリビリと肌に伝わってくるほどの大声は、一体どれだけの力をあの獣が秘めているのかを、そのまま表しているかのようです。

叫び終えたと同時に、此方へと真つ直ぐに走り出すその巨体。周りの他の敵たちも構わず轢き潰しながら向かってくる姿は、さながら大江山から転がり落ちる大岩。我々四人を容易く跳ね飛ばすやもしれません。

震えながらも、指先で描いて放った五芒星が一瞬、相手の体に絡みつき——しかしほんの一瞬もかけず、容易くその壁を突破してきます。

「そんなっ……!!」

「オイオイちったあ怯むとかも無しかよ——しようがないですなあ!? もういつちよ頼みますぞお嬢さん方あ、今度は三人がかりだア！」

「は、はいっ！」

一瞬、驚きで呆けかけたところを、黒髭の一言で持ち直します。腐つても海原に覇を唱えた男。黒髭……いいえ、黒髭殿の胆力が無ければ、先ほどの咆哮一つで恐怖に飲ま

れてしまっていたかもしれせん。

しかし、驚いてしまいます。第三特異点にて、油断や状況の援護もあつたにせよ、あの神代の魔女を相手に、何とか足止めすることが出来た——そんな僅かな自負が、私にもあつたというのに。

そんなモノをあざ笑ひ、あつさり突破するあの合成獣。

油断していた、と一つ深呼吸。

その間にも、真つ先に走り出すグレイ様、そしてその一步後ろにつきながら、グレイ様よりも早く拳銃を発砲し、攻撃を開始する黒髭殿達を見て、改めて気を引き締め直し。

「——ハアッ！」

裂帛の呼吸と発声と共に、文字通りハンマー投げの様に振り回された槌が、キメラの顔を強烈に捉えます。しかし、キメラの勢いは先ほどと全く変わらず。その勢いを殺しきれぬのか——否、先ほどの私と違うのは一人ではない事。

衝突するインパクトの直前、迷宮内に響く甲高い破裂音。黒髭殿の拳銃が狙っていたのは……キメラの顔面、その瞳。

敵を目の前に、一瞬でも目を閉じることなど出来ない、その一瞬を狙って鉄の礫が突き刺さったのです。激痛か、衝撃か。何れにせよ怯んだそこに突き刺さる、グレイ様の鉄槌が。今度は、明確にキメラを止め、地面に転がしました。

「——つし、式部さん！」

「はい、今度こそ……！」

横から抜けて来た魔性の一体を蹴り飛ばしながらのマスターの言葉。

捕えろ、という言葉に、飛ばすのは、先ほどよりも大きな『封』の為の五芒星。上から覆いかぶさるように、転がったキメラに刻み込まれ——次は、砕かれません。しつかりとその体を拘束します。とはいえ、それがどれだけ持つか。

「よし、んじゃ撤退！ 逃げますぞオ嬢様方あ！」

「はいっ！」

「式部さん、こつちに」

「お、お願いします！」

その一瞬の内に。

もう慣れた、マスターに抱えられての移動。隣をグレイ様が、一步下がって黒髭殿が続きます。マスターが少し顔を顰めて居るのも、分かる気がします。もうこんな事を、この迷宮内で何度繰り返したか。疲れが出ているのでしよう。

兎も角、既に時間稼ぎは出来ました。迂回路を通れるだけの準備は——

「——急げ、こつちだ！」

ライネス様達が、終わらせているでしょう。

彼女たちのいる通路へと飛び込んで、さらに先へと——その少し暫く後、私達を見失った獣が、私達の通っていた通路を真つすぐ駆け抜けて行くのが見えませんでした

間一髪、と言ったところでしよう。やはりあまり長くは持ちませんでした。しかし一瞬時間を稼げるだけでも、今はお役に立てます。

「——ふう、何とか一旦撒いたか」

『今の内だ。奥に進もう』

態々戦う必要は無く。であれば、こうして逃げ、煙に巻いて逃げ出すのも必要な事。それがこの場所の特性だと、ダ・ヴィンチ様は分析していました。第三特異点にて歩んだ迷宮を、文字通り形にしたような——いえ、更に悪辣に仕上げたかのような、というその評価は、我々の苦戦という形で、間違いない事を証明していました。

『しかし、本当に神話に伝わるラビリススそのものだな。広大な面積の迷路に、解き放たれた無数の魔獣とは。伝説通り過ぎて、逆にチープにすら感じる』

「奥にある大部屋には、さて。一体何者が潜むのか——」
伝説通りであるならば。

まだ、この迷宮には支配者が存在する——それが一体何者なのか。第三特異点を模した場所ならば、あの巖の如き巨人が、もう一度立ち塞がる事になるのか。

……物語通り、というのであれば。

一瞬、私は第三特異点にて出会った、あの心優しき雷光の事を思い出して、しかし直ぐに首を振りました。

やめましょう。嫌な事は、想像してしまえば現実になるものだ、と。そんな、子供を諭す様な言葉で自分を落ち着かせながら――

第六十三章

そりゃあお前だよなー……えっ君!?!な実況、はーじまーるよー

黒髭が普通にサーヴァントとして召喚されてしまった以上、第三特異点枠はもう一人しかありえません。

その法則に則って顕れますシャドウサーヴァント枠は、ヘラクレス——ではなくまさかのアステリオス君でした。やっぱり舞台がラビリスとなると、そこに居る存在と言えはヘラクレスではなく彼の方なのでしようか。

まあ同じバーサーカーですけれども。

ともあれ、所詮血も涙も通っていない当人ではないシャドウサーヴァント。男気溢れるうしくんとは存在としての格が違います。

形だけを真似した影法師風情、今までのボスシャドウサーヴァント達の如く、冷静に散り散りにして差し上げ……ファッ!? いきなり此方の全サーヴァントに信じられない数のデバフが!?

い、いや、というかこれは……うしくんの宝具のデバフとそっくり! ダメージも同じくらいいしょぼい! そしてこっちの食らうダメージは馬鹿程デカイ! バーサー

カーで殴るのやめろ！

『——だ、ダメです！　まるでダメージを与えられません！』

『ええい、まるで壁を殴ってるみたいだな……今までのシャドウサーヴァントも弱い訳じゃなかったが、ここまでじゃなかったぞ！』

『敵わねえなら戦うのは愚の骨頂でござる！　逃げるんだよおおおおおつ！』

とはいえ、流石にこれで勝て、というのは無茶だった模様で……全員、即時撤退を選択しました。どうやらイベント戦だったようです。

しかしながら、先ほどは即座に粉々にしてやる、とか言っておいて大変申し訳ないのですが……よく考えてみればこのラピリンスにおいて、うしくんのシャドウサーヴァントと真つ向から戦えって言う方が無茶と言えば無茶なんですよね。

ダ・ヴィンチちゃん先ほどおっしゃっていたように、ここはうしくんが支配するラピリンス……の模造品の最深部。アステリオスのシャドウサーヴァントである存在に有利に作られていても不思議じゃないと思われます。

『ええい、厄介な。ダ・ヴィンチ、取り敢えず一旦仕切り直す。シャドウサーヴァントの動きを追ってもらいたいのだが』

『——』

『ダ・ヴィンチ？』

おや？　ダ・ヴィンチちゃんの様子が？

へんじがない。ただのしかばねのようだ。

なんという絶望。いよいよもって心強いバックアップからの通信すらもままならなくなっているという事態。

『通信も遮断された、か。いよいよここがあのだのシャドウサーヴァントのテリトリーだと分かったな』

『ど、どうしましょう。ダ・ヴィンチさんにマッピングをして貰っていたのに……』

あ、脱出も困難になりましたか。成程……つまり、この後はこの迷宮を徘徊する支配者たるシャドウサーヴァントの一撃であつさりと狩られる事になる、と。成程。FGO実績解除、完！

……完になってはいけません。別に戦闘で負けた訳でもなく、探索不足で素材が足りず苦しんでいる訳でも無いのです。今の所順調、順調に行っているのですから、負けてはいけません。強くありましょう。

という事で、ダ・ヴィンチちゃんが居ない以上、ここで頼りになるのは、もう一人のブレイン役である……やはりライネスちゃんでしょうか。状況を打開するための一手をここは一発、スパーンと出してくださいよオウ！

『——仕方ない、 그레이に切り札を切らせたんだ。私も、最後の一手を切るとしよう』

『最後の一手、という事は——宝具を?』

『ああ。ここまで彼の要請で出来る限り隠し通してきたが、しかしここで切らずして死んで元も子もない。とはいえ——俺の宝具は、相手に関する情報が命だ。最低でも三回程度は会戦し奴を観察したい所だ』

という事で、このラビリンスにおいての支配者を打倒する為には、最低でも三度は激突し未だ真名も分からぬ英霊の宝具にて切り抜けなければならぬ、と。

……さて、このシャドウ・サーヴァント、アステリオス戦ですが。基本的に勝つことは不可能で、一定ターン生き残る——プラス、その間に一定のダメージを与える事がクリアに必須になって来ます。

とはいえ、相手はバーサーカーのサーヴァント。全クラスに有利を取れる上に、こちらの防御力は下がっているんで、一定のダメージを与えつつの生存は結構難しいです。黒髭殿の回復スキルを上手に生かすのがカギになって来ますね。

『——ええい、まだなのかオイ!? そろそろキツイぞ!』

『ふざける余裕も無いか!?!』

『当たり前だろうなんだこの怪物!?! 劣化してこれって、勝てる奴いんのか!』

います。ヘラクレスって言うんですけどね。

アステリオス君が、まあくろひーみたいな現代に近い英霊からしてみれば、破格も破

格な強さだというのは間違いないと思います。

集団で絶望に抗う時代ではなく、個の強さで絶望を食い破る時代に居た、絶望の一角です。そりゃあ強い。で、当然だが実際に相対する敵としても普通に強い。デバフが乗った上で殴り合えばこちらは溶けて向こうは健在とかいう理不尽が完成する。

しかしこれで三度目の交戦にて。いよいよ此方の宝具による逆転の準備は出来ているでしょう。さあその宝具を開帳し、真名を私たちに教えてくれ、ライネスの中に住まう、知の英霊よ——

『——勝てる存在は居ないだろうな』

『はあ!?!』

『少なくとも、今、ここに居る我々の中には。あるもので勝つしかない以上は、我々以外の戦力、要因を考える事に価値を見出すことは出来ない』

『じゃあどーすんですの!?!』

『だから勝てない相手の——勝てる部分を見出す。それが、俺の宝具の真骨頂だ』

——先に言っておくと。彼の宝具は形あるものではありません。

彼の頭に秘められた『叡智』を持って、敵の弱点を炙り出し、その上で相手の得手をも潰す、それが彼の宝具。

『とくと我が策——『混元一陣』かたらずのじんを、御覧じろ!』

幻の月輪と、日輪が昇り、彼女の瞳は二つの輝きに露にされていく、隠されていた筈の敵の弱点を見抜き、当然の如く勝つための道筋を切り開く。『叡智』そのものが反故となった一例ですね。

そして、この宝具。混元一陣はまたの名を……混元一気の陣は、とある軍師の有名な逸話の一つでもあります。

『それが貴方の真名なのですね……司馬懿仲達殿』

『ああ。そして、これでもう一人の真名も割れただろうが、状況が状況だ。許してもらわないといけないな』

司馬懿仲達。かつて、諸葛孔明最大の宿敵、曹操が作り上げた大国、魏を滅ぼし晋を作り上げた皇帝にして軍師。知の英霊としては、正に頂点に存在する一人でありましょう。

……んでもう一人って誰？ えっ？ まだ誰かいるの？

『俺がここに居る、という事はもう一人いるという事だ。俺を呼び寄せた輩がな……まあそれは今どうでもいい。問題は、俺が見出した結論だ——先ず、このまま逃げ続ける方針は変えん』

『えっ!?!』

『理由は走りながら説明する。兎も角、今はアレに勝つのは不可能だ。そして、対策する

べきはアレじゃない』

……えー、という事で。どうやらこの特異点まだ我々が合流できていないお仲間が一人いるらしいです。あの、それらしい痕跡を一切発見していなかったんですけれども。

今までありましたか？ それともF G O特有の細かい伏線とか張ってあつた感じ？

紅の都の通路のアレ？ あ、あれって結局交戦の跡だったんですね。まあ誰が誰と戦ったかは結局明言されて無かつたんですが、その誰かが潜入した後だったと。

『……ともかく、俺の結論としてはアレを真つ向から突破は出来ん』

『弱点が……見つからなかつたのですか？』

『いや、見つかつたのは間違いない。だがアレではない。アレを崩すための道筋が見つかつたのだ』

どういう事だ（K R Y U K Z M） 思わず式部さんもハテナ浮かべてらあ。

プレイヤーちゃんはその英霊みたく頭切れないんで三ちやい児でも分かるように説明してくだち（懇願）

『——結論を言うが、現状、我々を脅かしているのは、迷宮の方であるのは間違いないだろ』

『ミノタウロスではなく、迷宮、ですか？』

『ああ、我々が真つ先に攻略するべきは、シャドウサーヴァントではない。このラビリッ

スの方だと思われる』

成程、分かりやすい……シャドウサーヴァントのミノタウロス君をどうにかせねばならない。その為にはラビリンスをどうにかする事が必要であると。ふむふむ成程。へーへーはいはい。

どういう事だ（K R Y U K Z M）。

第六十三章・裏：特異点考察

雷光の名を持つ彼は、とある島の王子なのだという。

『怪物？ いいや？ アステリオスとして顕現した彼は、いわゆる童顔系のイケメンだったとも。私個人として、是非とも絵をかかせてほしいくらいにはね』

見た目も良し。とある女怪曰く理不尽の塊のような女神を当然の様に助け、壁となる程には心優しく、そしてかの半神たるヘラクレスと互角に戦う程に力も強く、そして生命力は死ぬ程の重傷を負ってなおそれでも笑って守る者を励ませる。

二物どころか、怪物として放逐したことを愚行と笑い飛ばせるレベルには、彼はありとあらゆるものを持って生れて来た。選ばれし者だ。

そんな彼が、生涯を過ごしたのが、ラビリンズという迷宮。迷い込んだものをけつして外には出さぬ呪われた石造りの構造物。何処までも果てが無い様な広い広い迷宮の中に解き放たれた無数の魔物に阻まれ、彼の元に辿り着けるかどうかも怪しい。

ミノタウロスという存在がラビリンズを脅威にしているのではない。迷い込んだ獲物を食らうラビリンズというそのものも、独立して十分な脅威である。

「ミノタウロスではなく、迷宮、ですか？」

「ああ、我々が真つ先に攻略するべきは、シャドウサーヴァントではない。このラビリンスの方だと思われる——君たちの辿つて来た歩みから見出した結論だ」

彼——司馬懿殿が見抜いたのは、アステリオスと、影となったミノタウロスの強さとの差異だった。と言つても単純な話だが、シャドウサーヴァントであるアレの先ほどの強さは、明らかにオリジナルを越えている。

だがあり得ないのだ。シャドウがオリジナルを越えるなど、普通では。しかも文字通りどうしようもない程に無敵性を獲得するなど。

「あのシャドウサーヴァントという存在は、確かに脅威ではある。だが伝え聞いているアステリオスとはあまりにも違い過ぎる。アレは真つ当に強い、というよりは『無敵』と呼ぶ類の強さだ」

「ほんまチートみたいなの強さでしたけど……その心は？」

「絡繰りがある。強さの質が前者であれば俺の宝具とは相性が悪いが……恐らくあの強さは、俺で対処できる類」

司馬懿殿が、私の魔術の知識、そして特異点でカルデアが獲得したアステリオスという存在の情報、そしてここで獲得したこの場所での経験。材料は大いにそろっていた。そこから司馬懿殿が考え出した、考えうる限り最も合理的に、かつやり易い強化方法は……環境と楔を利用した結界の構築である。

結界。

自分の領域を作り出し、その中で圧倒的な有利を約束する。この広大な迷宮はミノタウロスの牙城を再現している。シャドウサーヴァントであるミノタウロスとて、影響を受けられないという事は無いだろう。

さらに言えば、ここ全体を利用した結界ならば、普通よりも大きな効果の付与が期待できる。

「結界内では無敵に等しい恩恵を受けている、という事ですか。ライネスさ……あ、いえ。し、司馬懿さん」

「その通りだグレイ嬢。しかし、得てして単純な策こそ、破り難く、厄介だが」「んでー？ その結界つてどうやって破壊するんですう？」

さて、ごちゃごちゃと話しているが。実際黒髭の言う通りだ。それを突破する事が出来なければ、解析しても何の意味もない。が。

「俺は魔術の事は分らん。分らんが、しかしどんなものにも共通するのは……基礎を破壊すればあつという間に崩壊する」

「楔を破壊する、という事でしようか？」

「ああ、そして楔が何かはもう分かっている——さて後は、そこを先んじて破壊する為にミノタウロスを出し抜くだけだ」

「とはいえ、楔など、そう簡単に破壊できるとは……」

紫式部のいう事も間違いではない。彼女も、魔術師としてはメディアと同格レベルの存在に師事をした女性だ。その辺りは当然気にするだろう。

だがしかし。

「心配するな。どんな物が楔なのか、位置も凡そ把握できている」

「えっ!？」

「とはいえ、分かりやすい方だとは思うが」

司馬懿殿として、それを理解せず核を破壊する、等とは言わない。

破壊できると判断したからこそ、そこを叩くという結論に至った——否、砕く、とい

うよりそれを排除するやり方も、凡そは分かっているのだ。

まるでそうするように誘導されているかのように。

「——単純だ。今までと同じように触れてしまえば崩壊するとも」

「触れてしまえば、つてもしかして」

「その通り。此度の結界の核は——あの紙片。それに間違い無いだろう」

そこに、収束していくのだ。

ずつと、ずつと、それが何者なのか分からない。向こうが設置したあからさまな罠。

まるで迷路の解法を目の前に垂らしておくかのように。

分かってしまえば余りにも、今まで通り。もう少し時間をかけてじっくりと想像すれば意外にも、辿り着けたやもしれないくらいの分かりやすい答え。

私も、司馬懿殿も。これに気が付いた時には、当然というか、分かりやすく顔を顰めていた。いや、私は内側に引っ込んでいたので、そんな感じの感情になった、という感じなのだけでも。

「触れれば紙片は力を失う。それは今までと同様だろう。魔力を失えば核としての役割は果たせなくなる。流石に何の魔力も無い紙で結界を維持する事は難しい、だろうと俺は判しているのだが」

「……それは、ええ。間違いないと思われます」

「間違っていないのであればありがたい。後は君が触れるだけで解決だ」

一回目、二回目よりも明らかに明確な意思を感じる。触れて突破しなければここでゲームオーバーになりかねない程の完全包围。ここに入って紙片を発見した時点で、あの紙片を回収しなければ詰む様に、念入りに念入りに、作り込んである。

ヘラクレスではなく、ミノタウロスを選んだのも、それが理由だろうというのは分かりやすかった。

……ここまで、三つの特異点をモチーフにした都を巡って来た。

そして、ここもそうだ。彼らが第三特異点で踏み込んだという迷宮。最後まで、その

傾向は曲がらなかった。

意味がある。そして、その想像は凡そ出来る。

彼が紙片に触れると、体に影響が出る。しかし紙自体に何かしら特筆するような仕掛けがある様な訳でも無い。ただの微弱な魔力の塊。

そこから、一つの思考を導き出す。

「はいはい。もう覚悟はできてますよーっと」

やる気のなさそうな少年を見つめる。

もう既に、彼が、この特異点に入った時点で……何かしらの細工を受けている可能性もある。であれば紙に細工は要らない、のだろうが。それをカルデアのバイタルチェックが見逃す、とは思えない。

となると、他に考えうる可能性は？

ないでもない。だが、それは今言った考えなど及びもつかない程に……正直、妄想にも近い仮説だ。そもそも、そうだったとして、なぜこのようなまだるっこしい手を取る必要があるというのか。

「方法は簡単だ。グレイ、黒髭、ゴルゴーン、紫式部……この四人は別動隊だ。出来るだけ迷宮の魔獣とミノタウロスの目を引きつけつつ逃げる」

「別動隊って事ですか。いんやー、でもでーじよぶなんですか？」

「何がだ？」

「要するにそつちのマスターとライネスちゃんだけでその核、だつたかをぶつ潰しに行くわけっしょ？ リスクガン上げじゃなくい？ 拙者、余りにも紳士故いたいけな美少女にリスク負わせんのアレなんですが……代わりましょか？」

……などと、考えても考えても、回答は出ない。

目の前の黒髭があまりにも情報を持つていなかったのが大きい。もう少し彼からの情報があれば、仮説に一つの輪郭という物を持たせることが出来たかもしれないのだが……

「冗談だろう？ 戦闘力はそちらの方が上だ。別動隊は囹役、そちらに潤沢に戦力を割かずして本隊が動ける訳も無い。それに」

「なんです？」

「貴様の様な野獣の様な男を、アキレス腱と一緒にする訳がない」

「——言いますなあ、拙者の女神の如きライネスちゃんの中に居なけりや、引き裂いてましたぞインテリ野郎」

ともかく。司馬懿殿の言う通り。今回は私と本造院が作戦のカギだ。ここでキツチリと紙片を回収できれば、全てが好転する機。逃がすわけにもいかない。それに……

私は見逃す訳にはいかない。彼が紙片に触れる瞬間。ダ・ヴィンチという観測者と意

思疎通が取れない現状、その一瞬をこの目で見て観測するのは、必要な事だ。
「では、派手に頼むぞ——反撃開始だ」

第六十四章

英傑に毒婦なら、怪物には何が効くのか分からない実況、はーじまーるよー。

さて、前回いよいよ発動した宝具——混元一陣によつて、見抜かれましたは『この迷宮の弱点』でございます。どうやら、この迷宮はある一つの物質を起点として、結界に包まれているとの事。すなわちは……シャドウサーヴァントを強化する為の結界が。

『とはいえ、ここがラビリンスの模造品で、シャドウサーヴァントがアステリオス……即ちはミノタウロスの影であるからこそ効果を發揮できるのだろうが……しかし、しつかりと型を作った結界というのは強力な事は間違いない』

んでその物質って何ですか!?

例の紙ですけど（無表情） 寧ろ他に心当たりあるんですか？ あなた？ あの紙片

がこの特異点においての大抵の元凶ですよ。そんなもんに触れるなさつさと捨てろ。

でも触れるとダ・ヴィンチちゃんよりしつかり通信が出来るようになってきているので、特異点の解決にはこの紙片に触れるのが必要なのは変わりないという。さらに言えばその結界を崩すなら触れて使ってしまうのが一番早いという。

『——よし、どうやら別動隊は上手くやってくれているようだ。今の内に。そうだ、身代

わりを起動してから触りにいきたまえよ。せっかく用意したんだから」

という事で、戦闘が行えるサーヴァントの皆様を全員別動隊にして陽動してもらい、その隙に、戦力的にはクソ雑魚マスターとサポートの方が得意なサーヴァントの二人で、今こうして紙片の回収に行っている。

つまりどういう事？ 下手をすれば俺たち、残ってる敵の戦力にあっさり削り切られちゃう？！（呑気）あれだ、単独潜入からの敵に捕縛されてほにやらのアレだ。

まあ向こうが出来るだけ引き付けてくれることを祈って。エツチなアレ見たく檻樓雑巾にならない様に周りに残っている雑魚敵を殲滅してまいりましょう。

さて、今回相棒として共に行動するライネスちゃんも基本的には後方支援を得意とするサーヴァントなので、余り戦いに参加はしてこなかったのですが、ライネスちゃんは基本的に遠距離からトリムマウを喚ける事で攻撃するので、前線を張る事は先ず無理です。

という事で、自然、マスター君が前線を張るしかないのですよ。おっしやあ！ やつたるでえ!! 鍛え上げられたマスター君の強さを舐めんな。ターン限定ではあるが取り敢えず盾になるくらいのは事はもう出来るようになってるんだ！ それは褒められるレベルの事か……？（困惑）

ま、まあ覚醒すれば迷宮の魔獣相手でも張り合えるくらいには強くなったと思いたい

ですよ。シャドウサーヴァントと殴り合い出来るレベルって、エネミーを瞬殺できるレベルではないんですね。まだまだ道のりは長い……

しかし一瞬、一瞬でもしつかり後衛への攻撃を凌げれば……ライネスちゃんが殲滅してくださいます。サーヴァントの出力を舐めてはいけません。そしてライネスちゃんのスキルで無敵張って、もう一ターン持たせれば更に一体。防衛バフをかけてもらえばもうちよつと粘れるのでさらにもう一体……少しづつ少しづつ削って参りましょう。

後はある程度敵を間引いたら、漸く台座への道が――

『よし、突破した！ 急いで台座の元へ！』

という事で、ライネスちゃんのお言葉に従って敵の包囲網のその先へ！ 白い台座の上へと、ダツシユダツシユ！ 魔獣が立ち塞がってきますが、しかしそこに横からトリムマウの文字通りの鉄槌が！ 重厚な一発で吹っ飛んでいくう!!

走れ！ 走れ！ 止まるんじゃねえぞ……！

はい。キボウノハナを睨かせる前に、その勢いのままに紙片を勝ち取る事に成功いたしました。多分妙に体がゴツイホモ君が止まらずに土台までたどり着いたんだと思われますはい。B B。

しつかりとその手に掴み取って――反応、アリッ！

画面の中で『何か』が割れたような演出が入りました。ついに結界が決壊!! (激ウマ

ギヤグ) ……それは兎も角として。

『——この感じは……よし、無事に結界が瓦解したようだ！ よくやったぞ！』

ホモ君が初めてこの特異点でマトモに活躍した気がいたします。今までは基本的にずつとライネスちゃんとかの仕事の後ろから見つめてただけですし……やったぜ。成し遂げたぜ。投稿者、変態ハゲマスター。ワシ(約17歳)と特異点で盛り合わねえか。

『——おーい！ ちよつと！ 誰でもいい、返事してくれ！ 頼む！』

『おつ、通信が復活したという事はほぼ確定か！』

『あ、漸く聞こえるようになった！ 一体何がどうなってるんだい!? ちよつと！』

『説明はあとだ！ 周りの敵……というか、シャドウサーヴァントの反応を確認してくれ！』

『……何だか分からないがいいとも！』

本当に盛り合おうと連絡してくれた人が居るんですけれども(困惑) いや、別にそんな事はないんですけれども、ただ結果によって遮断されていたダ・ヴィンチちゃんとの通信が復活しただけでございます。はい。

しかし、これでいよいよもつてこの無敵の結界が解除されたことが確定いたしました。此方の作戦は成功。無敵の怪物はもうどこにも存在いたしません。

『後はこのまま別動隊と合流して、シャドウサーヴァントを叩く……しかし、もう紙片は

触れたのだから、このまま撤退しても構わないと思うわないでもないが……?』

成程……このプレイヤーに、今、この場から逃げ出せと?

『——まあ、そりゃあやる気にもなるよね。良いだろう。どうせ脱出するのに此方の邪魔をしてくるのだろうし』

ここで戦いもしないで撤退するか玉無しのやる事だよなあ!?

こちらら逃げ出してしまえばいいのはそうですけど、今まで無敵の結界的なモノに頼ってこつちを蹂躪してくださったお礼です。始めてですよ、ここまでとんでもない無敵性でゴリ押しして来たおバカさんは……

絶対に許さんぞ!　じわじわとなぶり殺しにしてやる!! (FRZ)　うーんお兄さん
 ゴールデンになつちやうぞー!

『——マスター!!』

『いやー(ヾノ・▽・)ムリムリ!　勝てん勝てん!　あんな化け物どないすればよろしいのかサツパリですぞーおほおほおほおつ蹂躪されちやうのおおおお!』

『煩いですね……』

『でも様子が変わったような気が、しないでも』

黒髭君が焦つてるとかじゃなくて笑つてて草も生えない。式部さんたちはちゃんと焦った緊迫の表情なのに。もうあきらめてにっこにこ笑つてんじゃねえ!!　後真顔で

黒髭を罵倒する式部さん狂おしい程好き。

まあでもそんな心配しなくても大丈夫ですよ皆様。もう割とあつさり殺せるようになってますから（ニツコリ）

チートみたいなバフデバフかかって無けりや無けりや、神様だって殺して見せるんだよオ!!（らつきよ） チェーンソーとスカサハ師匠を一緒に連れてこい！ 削り切つてやる!! いやまあ今相手してる奴は神性ではありませんけれども。気分じや気分！

という事で感情悲喜こもごもな別動隊も無事に戻って来まして戦力も充実。となればここからは……！

『——いいや、今ならやれる！ 奴の無敵性はもう剥がれた』

バ ジ リ ス ク タ イ ム じ や（にっこにこ）

いえ、戦闘パートです。殺せるようになったので全力で屠り去りに行きましょう。個の戦力を叩きつけてやるツ！ 具体的には全サーヴァントの戦力を。

さて、圧倒的な無敵性を失ったシャドウサーヴァントですが、しかしボスとしてのエネミーのパワーはきつちりとありますので油断してはいけません。怪力や、防御力アツプのスキルで案外と硬くなったりするバーサーカーが相手です。想像していたよりも削れなかった、なんていう事も全然あり得ます。

『ライネスの言う通りだ！ さつきよりも反応が明確に弱くなってるのが確認できた！

これなら押し切れるよ!』

『おっ、マジでつか!?!』

『ここからは真つ向からの勝負。グレイ、アッドを叩き起こしたまえ、戦闘準備だ!』

『——はいっ! いきますっ!』

さて、ここからは——中ボス、三戦目です。

敵の編成は、ラビリンスのボスらしく無数の魔獣をお供に連れてカチコミかましてまいました。んでそのボス以外の敵の数は……あ、はい。凄まじい数が来てますね。数十体とか今の状態で削り切れるわけないので、ボスを倒せば終わりになる形式です。

さて。このボス周りの雑魚敵にターゲット集中が付与されてたりして、ボスを直接叩けないようにはなっていますけれども……それでも、先ほどの様な全くダメージもクソも入らないそんな状態ではございません。

落ち着いて殲滅してまいりますよ!

第六十四章・裏：迷宮決着

直撃し、怯み、そして、吠える。

結界は解け——黒い巨人に対し、我々の攻撃が全く効かない訳では無くなりました。そして……

『さつきよりも明確に弱くなってる！ これなら押し切れるよ！』

ダ・ヴィンチ様からのバックアップも復活し。これは、我々ではどうしようもない戦いではなく、何時もの戦いなのです。特異点を突破する為の。であれば何も問題は無く。

私は背後から、相手の妨害と、皆さまの援護に徹して。マスターを挟んで、ゴルゴン様が前衛に布陣する、基本中の基本の戦い方です。

藤丸様達がいればもつと心強かったです……しかしながら、ライネス様とグレイ様に、黒髭殿が今ここに居ます。恐れずして我々に向かってくる敵に、先ずは……開戦の狼煙代わりに、先頭で向かってくる獣に向けて一撃！

「——ギャンツ!!」

「おー強烈う！ 獣が吹っ飛びましたぞおーオラダメ押し!!」

——そして転げた獣に向けて一つ、容赦なく弾丸が突き刺さり。しかしそれを押し退け更に続けざま、廊下を横、縦でも埋め尽くすほどに、とんでもない数が押しあい、へし合つて、攻め寄せて来ています。迷宮に散らばっていた獣たちが、文字通り、一斉にここに雪崩れ込んで来ているのでしょうか、この数は。

廊下が歪んで見えるほどの敵の壁——そこに突き刺さり、そして諸共に何体かを引き裂く黄金の爪。そして死体を吹き飛ばし、多くの敵を蹴散らす為の弾丸とする尻尾の一撃も、横殴りに見舞われて。

それでもなお生き残った相手の近くには、黒髭殿が何処からか取り出した爆弾が、跳躍からほいほい、と軽く投げ込まれて——爆砕。その火炎に煽られ、グルグーン様が顔を顰めているのが見えました。

「おい貴様、私を巻き込むつもりか？」

「いえいえそのような。拙者、皆様が絶対に巻き込まれない距離は把握してますぞー」

「……では爆風に煽られた私の胸の揺れでも見ようと思つたか？」

「ははは拙者がそんな美少女以外の胸揺れになんて釣られクマー！」

「死ね」

「ぎゃあああああつ?!」

……後ろで上がる紫の輝きと悲鳴は兎も角として。

「——グレイちゃん、礼装で援護する！ 突っ込みな！」

「分かりました！」

その閃光の奥から敵の真ただ中に飛び込む灰色の影。すかさずグレイ様の背に向けて二つの術を、一つはグレイ様に向けたもの。援護の為の術——そしてもう一つの術の群れは兎も角数を重視した弾丸。

正面の敵に向けて飛んで行ったそれは、何れかにぶつかって弾け、足元に届いて足元を掬い——そこで怯み、後ろとぶつかり、怯む獣が幾体か。そして、数体が怯めば後ろから押し寄せる者たちが詰まり——

「……そッ！」

鎌の一閃が、詰まり、とどまった者達の首を刎ね、それでも対応に一步遅れ、その一步の遅れの間大きく振りかぶったもう一撃が——群れに大きな、大きな一文字の斬撃を刻みます。

「——いい感じに怯んだなあ、オイ。ゴルゴーンさん、ここでは？」

「ふん、随分とサーヴァント使いの荒い事だ……まあいい、先ほどまでやられてばかりだったのだ、憂き晴らしに一発、強烈なのを見舞ってやるとしよう！」

そして、黒髭殿と話しているその時間は、準備の時間でもありません。ゴルゴーン様が反故を発動するまでの。ゴルゴーン様の宝具発動までに、敵の動きを止めておくのが

此方の狙いでしたので。

魔力は高まり、はち切れる寸前——我らがカルデアの主砲が、いよいよその全力を持つて火を噴く！

「貴様らに返してやろう、此方に試させてくれた鬱憤という物をな……存分に味わってから——融け落ちるがいい!!」

ゴルゴーン様の髪が絡まり、体に纏い、一つの巨大な塔と代わり……そして巨大な力を顕現する砲台へと変わっていきます。撃ち放たれば、一切万象を融け落ちさせる希

臘の神格の一撃。

『バンデモニウム・ケトウス強制封印・万魔神殿』!」

真つ向から飲み込まれ、生き残る敵ははおらず——奥への道は大きく開かれて。そしてその先に立つのは、一体の巨人。

飲み込まれこそしなかったものの、その輝きの一端が届いていたのでしよう。体から煙らしきものが僅かに立ち上っているのが見えました。しかし、それでもまだ膝を突く様子はありません。

「なんだあのデツカイ穴……突つ込まざるを得ない!!」

「グレイ、黒髭に合わせるんだ、大将を狩れば他は自ずと散っていくだろう!」

「分かりました!」

そこに向けて走り出す二人。黒髭殿とグレイ様。そして、前方を走るお二人に渡されるエンチャントは、ライネス様の物。

お二人の攻勢に問題は無くもはや盤石か、とも一瞬思いましたが、しかし。式部さん、と静かに口にしたマスターの言葉に、ハツとしつつ、視線を向けました。そうです。ただどうなるか分からない……

そう考えた時でした。

二人を阻む様に……いえ、阻むつもりもないのでしよう。ただ獣の如く敵の群が二人に向けて走り出しました。何の躊躇いも無く。だというのに。その数の多さから、自然と二人を阻む強固な壁となつていつています。

であるならば！

「式部さん、よく狙つて。サポートはするからさ」

「はいっ！」

マスターの宣言に、応えるとほぼ同時——体の感覚が研ぎ澄まされていくのを感じました。狙うは、グレイ様達が抜けるだけの隙間を作れるだけの場所。彼らの向かう目の前にいる何体か。そこに向けて……

「——当たつて」

半ば祈りにも近い言葉と共に、三つの弾丸を解き放ち。

真つすぐ、というより、お二人の脇を潜り抜けるような軌道の弾丸は——何とか、二体の敵に命中。そこに、奥へ進むだけの道を作り出すことに成功いたしました。

そこを抜けていくお二人の姿に、ほっと息を撫でおろしました。

「つし、取り敢えず送り込めしたが……ゴルゴーンさん、そろそろ行けるかい？」

「ふん、問題ない」

「じゃあ前線押し上げるぞ。黒髭とグレイちゃんが先に進んだからそつちにつられて若干敵が下がったみたいだ」

「といつても、我々が追撃で援護しなければ、二人は挟み撃ちの形になりかねん形だが」
——そして。続いてはゴルゴーン様を先頭に、我々が前へ動く番。

爪が、水銀の鉄槌が、私の術が。四方八方から襲い来る獣たちを蹴散らし、弾く。先に向かった二人の背後を突く真似などさせぬように。確かに、先ほどまで物凄い数を誇っていた魔獣は、数を減らしていています。

数は脅威。とはいえ。この質では、打ち倒すのに苦労はありません。

先ほどの结界というのは、迷宮の主を『無敵』にする為の物。彼が支配する迷宮にも、何かしらの加護を与えていたのかもしれない——そう思えるほど、今の魔獣たちは、先ほどよりも脅威足りえない。

「――」

「黒髭さんっ!」

「えいえいほー! 決着付けますかなあ!」

我々がお二人を目の前に捉えたのは、予想よりも早い時間でした。

「ドウフッフッフ!! 女の子に首切られるとかいうご褒美なんですぞ——跪いて首差し出せや、デカブツ」

「——っ!」

冷たい宣言と共に。

甲高く響く鉄火の音、二発程。狙われた先は——シャドウサーヴァントの両方の膝。声にならぬ悲鳴を上げて、その巨体が文字通り膝を突き、首を垂れるような姿勢へと。その姿を、腰に手を当てた黒髭様が冷たく見下ろし。

そして差し出された首の前には、鎌を携えた——麗しい死神の姿が、あります。

「ありがとうございます」

「いえいえー。やっちゃいなさいな」

「はいっ!」

中腰で、鎌を背負うその構え。

いつそ、過剰と呼べるほどの大振り。敵を確実に両断する為の、袈裟に構えられた大鎌が、一瞬の静止、そこから解き放たれて、罪人の首を落とす、断頭台の如く、銀閃を

描いていって——

「……やっぱり、女の子が武器持ってんのは苦手だなあ」

「ん？ 武装系女子はお嫌い？」

「この距離で聞こえるとか変態か？」

その黒い影の首を、綺麗に跳ね飛ばしました

断章：企む怪僧

「——ンンンン、抜けました、か」

三つ目の紙片の消滅を確認し、白と黒の大柄な怪僧、リンボは呟く。一応、もう一体、練り直した海坊主も居ない事は無いのだが……多分同じ結末を辿る事にはなるのは分かり切っている。これ以上のちよっかいは、たぶん自分の首を絞めるだけだ。

ともすれば主の狙いである少年を潰し、一つ自分の手で練り直してから献上するのも悪くないとも思っていたのだが。まあ突破したのであれば是非も無い。今は指令に従って動くばかりである。

「仕方ありませんなあ……取り敢えず主のご意向に従い次の段階に移りましょうか」

ここで仕方がない、と言い出すのがリンボの主への忠誠心の現れである。要するに、心の底から忠誠など誓つちやいない。まあこういう輩だ。

とはいえ。リンボも、自分の主がそれを承知で自分を使っていることは分かっている。自分に常に仕事を押し付けたり、シャドウサーヴァントの調整を任せたりするのは、『やれるものなら』というある種、寛大さの表れでもある。

そういう点で考えると、同盟を結んだあの『獣』とは大違いだと思う。アレは確かに

脅威ではあるが、些かと『生真面目』に過ぎる。

一方で自分の主はそれと同じくらいの強大な災厄になり得る存在ではあるが、何処までも『人間らしい』恐ろしさを持つ。厄介さで言えば、間違いなく後者の方が厄介だろう。

「……しかし、本当に回りくどい事をする。精神崩壊させてからさつさと回収するではいけないのか。はあ、全く。その辺りも人間らしいと言えばいいのか」

——五体満足で手に入れたい。

そう言われた時、明確に『面倒な注文をする』と思ってしまったことを覚えている。

主に着いた直後の事だ。かつて敗れた『使徒』であつた私の残骸から呼び出した、この事だつたが……まあ全くもって覚えていない。というか、何の使徒だつたのかすらトント分らない。

それでいい、とは言っていたし、やる事が凄まじく破滅的で、ろくでもない仕事だったので面白いと思つたから受けたのだが。

しかし、まあ、蓋を開けてみれば付けられる注文の多い事、多い事。まあ生前が生前だから仕方ない、とは思うのだが。

「全くもって真つ当に、丁寧に、悪だくみをする。ある意味相性は宜しいのでしようけれども」

犯罪というのは、如何に緻密に計画して、そして如何に冷静に遂行するかだ。勢い任せで成功する訳がない。基本落ちこぼれが社会への反逆の為にやる、という昨今のイメージとはかけ離れ、社会でも活躍するような生粋のエリートこそが犯罪という物をキツチリ成功させる素養はあるのだ。

そのお陰で自分はこんなに苦勞している、と愚痴りたくもなる。

「まあお陰で、拙僧もやりたい事をやらせて貰えているのですが……」
とはいえ。

そのエリートが組み上げたこの特異点の仕組みは見事なものだ。
自分で考えるのではなく、元々あった『記録』を元に築き上げ、その問題点を修正しつつ、目的達成の為に特化させる、という無駄のない方法を取っている。

その為の協力者にも、きつちりとした目的意識を持たせている辺り、裏切られるという事も無い。とはいえ、その協力者の思惑を反映しているかと言えば違うが。

そして、ある程度仕上がった彼に協力者を『始末』させる事で後始末も兼ねている。実にスマートと言える作戦だ。真つ当な感性の持ち主ならば、間違いなく唾棄する程には見事に組み上げられている。

「——しかし」

そこまで考えて、ふと思う。

自分も、協力者も、『この場所』から拾つて来たものではない。一つズレた場所で拾つて活用している、との事だった。

そもそも、一つズレるだけでもそれ相応の準備を整えなければならぬというのに。そこから拾いものをした挙句、自分の駒として利用する、という。

権能がある訳でもないそんな彼が、どうしてそんな事が出来たのか——曰く『向こうから利用しようとして近づいてくれた大馬鹿者のお陰だ』との事で。それでどうして自分を見ていたのかさっぱり分からないのだけれども。

——兎も角。

「底知れない事だけは間違えようもない、か……」

繰り返すようだが。彼は決して今の主の下に跪いている訳ではない。

大怨霊たる彼を利用し、何れ自分は——『獣』すら超える存在へと成り上がる。そして何れはあの、忌々しき、天才陰陽師を。

そこまで考えて、頭を振つた。いけないいけない。今にも主の首を取りに行つてしまひそうになつたが、それはいけない。

自分とて馬鹿ではない。今、力を順調に蓄えている彼を相手に、自分一人で勝てる等と奢る昂る等と……普通に考えて、彼を操ろう等と考えていた術者は何を考えていたのか。恐らくその間抜けが失敗したのは反応からして分かりやすかつたが。準備不足で、

自分が全能等と言う傲慢な思考で彼に挑んだのだろう。これから愚か者は困る。

「まあそんな間抜けはどうでもいい。それに做わぬように冷静に事を成し遂げればいいのですから——ええ、ええ」

この私は、そんな大間抜けとは器が。格が。実力が違うのだ。少しずつ少しずつ、念入りに準備を進め、実験も繰り返す。此度の黒髭の召喚も、その一環である。自分が想定している『英霊の凶化』。そしてそれを踏まえた更なる自分の進化。そこへ繋げる為の『サーヴァント』という存在の把握。

我ながら見事な仕事の術であると自負している。

とはいえ、流石に大々的に実験する訳にもいかないのが苦しい所だ。特異点の一つでも貸して切つて大々的にやれたなら色々出来るのだけれども。さて。

「いっそ、本気でやりましょうか——」

特異点を構築する事。それが出来るだけの圧倒的な魔力を蓄える事。双方……とんでもない難題ではある。難題ではあるのだが……不可能ではない。魔術師達が悲願とする『魔法』への到達。多くの憧憬の果てに『伝説に残る英雄』になる事。それに比べれば、『難しい』程度に収まる難易度だ。

決して、リンボという男に出来ない理由は無い。

問題は主がそれを許すか、なのだが。

「——有用と判断すれば、見逃すでしょうね」

彼は、愚鈍ではない。自分にとって利があると判断すれば、例え部下の反逆とて見逃すだろう——ただそれは、器が大きい、とかそういう事ではない。生前の経験から得た、いわば経験則。

本当に賢い者、というのは死後であつても経験を活かすものだ。例えば、サーヴァントは基本的に成長しないが、それは肉体面とかの話であつて。知識に関してはその限りではなく。

寧ろ生前よりも死後の方が恐ろしい策謀を巡らす者だつて容易にいる。

恐らく今の自分がそうであり——そして、サーヴァントではない彼も、生前の経験を嫌という程刻み込んで、そこから今のやり方を取っている。

例えそれが、当人にとって憤慨たらしめる事であろうとも……堪える。

そうでなくては、潜り抜けられない。どうしようもない。そんな部分がある事をよく知っているだろうから。

「いやはや全く。生真面目な策謀家程厄介な事は無い」

立場は秩序。

性根は悪。

元がどうあれ、今の彼はそういう存在だ。反転したのではなく、悪を知り、やり方を

覚え……そして転向した。善であつた頃は、それはもう周りから疎まれた事だろう。

そして……それは今もそうか。

「——おや？」

『聞こえるかい？』

例えば。今の同盟相手、とか。

『全く、調停役が居なくなつたからつて僕がどうしてこんな事を……』

「おやおや。これはキングウ殿。ご機嫌麗しゅう……如何ですか？ そちらのご様子
は。我々の商品の性能は」

『そんな話をしに来たんじゃない』

「おや、失敬」

『——君の主、マサカドに、母からの伝言だ。『戯けた挑発、今は乗つてやる。精々かのお方を崇め、我の怒りを買わない様にしろ』とな』

——思わず、口の端が弧を描く。

承知いたしました、と嘯くその裏で。自らの主が、同盟相手からも欠片も良しと思われず疎まれている事。そして、彼らが自分たちの思う通りに動いている事……一応、此方の軍師として動いている身としては。

それが、余りにも滑稽で。面白くて。

第六十五章

海を抜けて——な実況、はーじまーるよー

前回、シャドウサーヴァント、ミノタウロスを（非常に個人的な私怨で）撃破！ 海の都を脱出する準備も整ったので、さあいよいよ次です。次ですよ。霧の都へと突撃をかけるのです!!

まあ道中敵には襲われるんですけどもね。偶に半魚人とか出て来たり、海魔が主力だけどその中にゴーストタイプの敵が混ざっていたりと、今までで一番の敵の種類が多さが特徴ですね。この海の都は。後、クラスが統一されてねえからやりにくい事この上ねえなあオイ（恨み言）

ここまで今までの都の在り方、というか敵の分布とかと色々違うと、ここだけなんか他と違って、誰かの手によって特別に設定されたのではないか。とか考えたりしますけれども。まあそんな事はないんでしようね。

後、海坊主（聖杯の泥の巨人）をランダムで出してくるのをやめろ。全体クリティカルとか出されると普通に死にかけるんですよ。

これで悪意が無いとか逆に世界からの悪意を感じる。絶対髪型ゼンマ的な野郎が悪

さをしてに決まっているはずなのです。他人を改造して自分のしもべにしたり、計画を途中で物凄い速度で大アドリブ変更する、策士としては二流な平安陰陽師の気配がするのですけれども。

ですがそんな事はないのです。おのれおのれおのれ……！

そして海坊主が無駄に硬いのもめっちゃめんどい。普通に現状のサーヴァントの宝具一発じゃ押し切れないレベルなのがクソ面倒。一発で仕留められず、体力が微妙に残ったりすると非常にうざいのです。

で、そんな海を渡る最中、見ている光景もまあ大きく変わってきていますよ。

『……海の色が、灰色になっていきますね』

『所々水ですらない所も見えますなあ……海が陸地になるとかどんなマジック?』

『恐らくはここが一番、無理やり成立させられたのかもしれない。陸地も無い大海原をロンドンの街並みに被せようとか、とんでもないやり方だよな』

紙片を回収したからまたぞろ世界に縫い付けられたテクスチャが剥がされて……海の中に忽然とロンドンの道路が、なんか、離れ小島みたくボンと浮いてる、みたいなのがいっぱいあるんですよ。

んでもって、何処までも広い青い空は灰色の霧に覆われて、ちよつと先が見えない漢字となっております。うーん、今までで一番変化が大きいと申しますか。最早、ちよつ

とした『異界』に迷い込んだ気分でございます。

木造船に乗っているのも相まって、物凄いな気味な雰囲気。しかしこれで漸く藤丸君側と同じ空気になっただけだと思うと……これに加えて、霧そのものが毒性つていう。藤丸君がどれだけ大変な所を駆け抜けているのかと。

『拙者の操船があるからまあイケてますが、普通だったら迷子の迷子の小猫ちゃん確定ですな、これは』

『まあ流石にそれは海に関しては素人の私も分かるが……ああ、そうだ。そう言えば身代わり人形は結局役に立ったのかな。マスター君？』

まあこちらも十分大変と言えば大変ですけども。向こうが毒性の霧ならホモ君には謎の紙切れでございます。触れたらどうなるか……今の所どうなるかも分からないまましかしながらこの特異点を解決に導くには必要な事らしく触りまくって参りましたよ。これで三回目です。

あ、藤丸君は毒の霧大丈夫だから危ないのはホモ君だけ？ やっぱオリ主の扱いなんでこんなもんですよね。と。それは兎も角として。

『——ふむ、良く分からない、か。まあ体に明確に出るようなダメージやら呪詛やらを肩代わりする為のモノだし……そういうモノは結局なかったという事かな。流石にちよつとは心配してたし、うん。何もないならそれに越した事はないね』

まあ今の所ホモ君にシステムのなダメーは無いので、攻略には差し支えないので気にはなりませんよね。

とはいえ、その事についてライネスちゃんの小悪魔スマイル、ではなく普通の優しい笑顔で『心配してた』と言ってもらえると思うと……うつ、持病の借が（股間を抑えつつ）

可愛いしサポーターとしても優秀だし欲しいなあライネスちゃん。

『ライネス殿、拙者もちよつと長旅で酔ってしまつて……』

『トリムマウ、取り敢えず気持ちよく吐けるようにシエイクして差し上げたまえ』

『承知いたしました』

『NOッ！ シエイクノウ！』

そして黒髭への対応も慣れていたいへん好ましい……やっぱり、個性的なパーティー極まっていますからね今は。

ストッパーたる藤丸君は別の特異点、常識人的（比較的）なマシユも一緒とあれば、最早此方カルデア側の突っ込み役は式部さんのみ。余りにも戦力が足りなさすぎる（確信）

となれば場を回す役割と案内役、更にシレつとどぎついツツコミを熟してくれるライネスちゃんが余りにも頼もしく……特に黒髭はボケとボケとボケの塊、時に応じてツツ

コミ役にもなれますが、まあ今はボケ役でしょう。ライネスちゃんの黒髭へのド辛辣対応は正に完璧だと言わざるを言えませぬ。

『いやー美少女にすぎなくされるのも、これまた風流でございますれば。くろひー感激しちやつて……ほ？ おんやあ？』

『船長、美少女だからと言ってトリムに吐しゃ物を混ぜるのだけは許してくれたまえよ』『拙者に一体どんな性癖があると思われてらっしゃる？ 前方になんか、ひと際デカい影が浮かんで来ているんですけれど！』

まあそのレベルじゃないと対応できないのがかの変態黒髭なわけですから。いくら超美少女ライネスちゃんとはいえ、いや超美少女だからこそゴミみたいな目で見られたら心に来ません……？ 来ない？ あっそう。

しかししながら、変態船長の業の深さは有能さとは一切関係なく。トリムさんにシエイクされながらも黒髭氏、どうやら船の向かう先の水平線上、というかその下に潜んでいる何者かを捉えた模様です。

『——気を付けてくれ！ 此方の探知に感アリ！ 船の前方に大きな反応だ！ 妨害が大分なくなつたからねえ、これくらい察知するのも難しくないとも！』

『大変申し訳ないが船長の五感に負けているよその探知！』

『……えっ？ マジ？』

今回ばかりは黒髭殿が有能だったとしか……ダ・ヴィンチちゃんドンマイ。ま、まあ兎も角いつも通り、接近している脅威を先んじて探知できるくらいには諸々の探索能力も復活している、という事で。

さて、そんなダ・ヴィンチちゃんと黒髭氏が捉えた影とは……海から浮上し、波を引き裂き、飛沫を上げて目の前に出てくるのは巨大な黒い影——結局の所は海坊主（偽）じゃねえか！ ストーリーでも出てくるやつを普通に道中での確率次第的な難敵で出すな！！

……とか思ったんですけどすけれども、ちよつと違いますね。あの、ひと際デカイです。後は、変わった装飾とかついてますねえ。オイ、ちよつと待つてくれよ、この海の都のラスポスってうしくんと違うんですか？ クソ、ここに来て更なるボスとは一体何者が……！！

『ンン——ンンンツ!! 逃がしませぬぞオ!』

『で、デカイッ!』

『それに……喋った!?!』

あつ（殺気）

ほーん……大変と見覚えのある喋り方ですねえ。そのデカイ海坊主。おうお前さん名乗りなよ。

『恐らくは遠くから声を届けてるんだらうけど……問題はそこじゃない、あのデカブツを解析してみたんだけど、出力だけならフアブニール級じゃないか!?』

『お待ちになつて貰いましょうか、星見の方々! この海の都が最後のもてなし、カラクリを仕組んだ責任をもつて、このリンボが勤めましょうぞ!』

言つたな（歓喜）

取り敢えず、将来殴り飛ばす為の拳の量が三倍近くになるのは確定でございます。いやーシステムとか難易度の都合とかじゃなくて、この海の敵の出現具合とか、面倒なクラス編成とか、時々現れる微妙に硬い敵とかは、ホントに君が頑張つて仕組んでくれてたんだねえ……楽しくなつちやうなあ（殺意） お礼しなくちや（使命感）

しかし、態々巨大な海坊主を作り出して、自分で操つてこつちを沈めに來るとか、変に律儀ですよねあの白黒ゼンマイ。この海の都は攻略された訳ですし、もう一旦ここは放つて仕切り直すタイプな奴な気がするんですけれども。

『あ、リンボ氏ちーつす。お元氣?』

『ええ、貴方に裏切られた事で大変に!!』

さては黒髭君にあつさり裏切られたのが割と腹に据えかねてたな? そういう所が平安最強陰陽師との差やぞリンボ。

『いや、別に逃がしてもなんという事もないのですが。しかしながら拙僧の渾身のもて

なしがここまで好き勝手に突破された挙句、召喚されたサーヴァントまでもつていかれたとなれば……！　流石にこのまま逃がすには些かと！　業腹！』

『要するに八つ当たりか!?!』

『そうとも申しませぬ!!』

分かりやすい小悪党で草も生えませぬわ。という事で。海坊主の奥からどんどん上ってくる水棲生物（怪物）共と合わせて、巨大な海坊主が押し寄せてまいります。どうやら海の都本当のラストバトルは、こちらの模様です。

『一応、襲う時の為の、主への言い訳もございますれば、存分にいいいいー！』

今までの恨みも込めて、ここは奴のケツ穴に確定させてあげましょうか。ガバガバにしてやるから覚悟しろ（殺意）

第六十五章・裏：サメの餌

「——サメつているのかな、ここに」

「……急にどうされたんですか？」

「いや。ふと気になったんだけれどもさ……ホラ、あそこ」

指さしたのは——今や、深い深い霧に覆われ、魔の海の如く変貌しながら、瓦礫の如き下敷きにされた都市を小島の如く浮かべる、まるで崩壊した直後の文明の様な様を晒している『海の都』。ただ、よく見てみると……海の底に沈んでいるかのように、倫敦の都市が見えています。

『テクスチャ』の事を考えるとこうして見えているモノが実際にそうなっている、とは限らないのですけれども。

兎も角、そんな風に変わり果てた海を眺めて。マスターが呟いたのは……サメ。例えば『ここつてさあ、サメとか出るのかな、怖いねー』等と海の上で話題にするのには何の違和感も無いと申しますか。普通の名前なのですけれども。

「あんな風になつてゐるんだから、もう生物とかも居ないのかな、つて」

「……そもそも、なぜサメなのですか？」

このような状況なので、サメに限定する必要は無い気もします。普通の生き物はいないのか、とか。そのように言うかと思つていたのですか。

というのも。そう思う原因は目の前に広がっています。

「えつと、なんでかか……そりやあまあ、俺を……」

「その二人！ 喋つている暇があつたら片付けを手伝つてくれないか！ 船の上に寝かせておくには些かと臭いが生臭いんだよ！ 此方のお客様は！」

ライネス様が、ご自身の従者であるトリムマウ様に先ほどから……甲板の上に転がっている、鱗とヒレ、エラの生えた、人と魚の特徴を併せ持つ異形のモノ、それに、蛙の様なぬめついた肌とギョロリと飛び出た目を持つヒトガタなどを処理させているのです。

ご自分では触りたくも無いのでしよう、明らかに距離を取っていますが……気持ちわかる気がします。特に、蛙に似た方の異形に関しては、私も少し、近寄りがたい気も致します。

「あーはいはい。ご婦人にやらせる仕事じゃないし、俺がやりますよ……」
先ほどまでの戦闘の名残です。

リンボと名乗った巨大な影が浮上し。此方を襲撃してから、暫く。

海の巨人と共に、海の底から浮上したり飛び上がって、黒髭様が操舵する我々の船に

乗り込んで来たのは、半魚人を筆頭とした屈強な海の怪異達

そんな風によく床に沈んでいきました。現状、船の上にはそんな生臭い方々が、力なく横たわっているのです。

生臭い匂いだとか、死体ばかりの景色だとか。

そう言うのを考えてれば、若干とうんざりして海の可愛らしい生き物に思いを馳せるのも決して不思議ではない、と思つたのですが。しかしながら、マスターが話題に出したのはサメ。男の子ですから、カッコいい生き物の方が、お好みだったりするのでしょうか。

「……うわつ、本当に生臭い上にぬるぬるしてんなあおい。水死体とかには詳しくないんだけど、実際こんな感じなのかい船長」

「臭いはもつとひどいですな。でもヌルヌル具合は割とこんな感じで、クツソみたいにな不快オブ不快で船長吐き気がしそうですぞー……っていうか、カルデアのマスター殿、水死体とかつて、他の死体にはお詳しいの？」

そんな私の目の前で、マスターは男の方らしくそんな匂いやらなにやらの不快感の元を豪快に担いで。海へ。ポイ。そして入れ替わるようにして、今度は黒髭殿が担いで、海へポイ。二人とも不快そうな顔のまま、話は軽快に弾んでいます。

「いやそんな死体に詳しい訳ないだろ。あんなもん、好き好んで見てると思う？ 華の男子高校生が」

「いやそんな事は思いませんが。ネクロフィリアか何かと思っただけで。若い身なりで業深すぎワロタでございませぬあ、とは」

「オーケイ侮辱罪確定だこの野郎。昔日のルールに則って手袋投げてやるから覚悟しろ」

「拙者海賊なんでそんな決闘受けませんけどー闇討ち上等ですよ」

……男の子同士であれば、マスターのサメ発言も分かるのでしょうか。ああして話題が弾んでいるのを見ると、そう思ったりします。

しかし会話が弾むにしても、マスターが死体死体と連呼するのは、ちよつとどうかと思ったりしますが。マスターは、もしこの人理修復が終われば、ごく当たり前の生活が待っているのですからあまり血生臭い事に慣れてしまうと……ええ。

「つしよお！ あー……疲れた。これで最後かあ？」

「おい待てや。ご婦人方が万が一ぬるぬるで滑らないようにキツチリとデッキの掃除すんだよ青二才」

「えー……掃除とか一番タルいやつじゃねーかよー」

「高校生か。高校生だったわ」

——疲れたあ。と一言だけ残して戻ってきたのは、更にしばらく後。

年頃の男子らしい姿を、ここまで見たのも初めてだったのではないでしょうか。カルデアのマスターとして藤丸様といた時とも違う。何処か浮かれたような様子で。身にも何もならない様な会話をして。

それが逆に、何も気にしないで、話しているようにも見えて。

「……で、サメの話なだけどき」

「え？　結局サメに戻るんですか？」

「うん、まあ」

「え、えつと……どうしてサメなんですか？」

「今、身を投げたら真っ赤な花とか咲くかなって」

「マスター!？」

冗談だよ、と。マスターは笑いました。

こうして戻って来ても、いつも以上に、何処か気軽に話している様にも見えます。

冗句にしても。些かと線を越えそうで越えない所を行き来している。とても微妙な塩梅の言葉だと思うのですけれども。それくらいの事を、まるで此方を揶揄う様に笑いながら言う様子は……やはり、何時もと、なんだか違う様に見えるのです。

海原の向こうの辺り、水平線を越えた更に遠くを見つめる姿を見ていると、その言葉

がただ冗句ではない。何処か、真実味を含んだものと申しますか。瞳の奥に、まるで刃が光を照り返す様な揺らがぬ光を宿している様な気がして。

本当に、目を離れた一瞬で横から消えてしまふ様な危うさを感じるので。

ずっとそうなのか、と言われれば。普段は……というよりは、私の知っている限りはその様な事はない、答えられます。少なくとも。

無理をしていつも通り振舞っている、かとも一瞬思ったのですが。

しかし、それでは『目を離れた一瞬で』というのとは似合わない表現です。

自然と、あくまでいつも通り振舞っていても。何処か不安が残る様な、そんな仕草をマスターはしているのです……先ほどの一件があつてから。

『やはり厳しいですなあ。しかしながら、仕込みがあつてこれとは、やはり七面倒な事をしていると言わざるを得ません。全く、もっと手っ取り早い手を何故取らないのか』

『何の話だ、黒坊主』

『これはあくまで拙僧ではございませんぞ？ ……まあ兎も角、現在の話でございますよカルデアの鬼子殿。とつくに、美しき景色も剥がれた灰色に……ちようどこの特異点の様になつている予定だったのですが……どうにもそうではないご様子』

その言葉に何の意味があつたのかは詳しくは分かりません。しかしながら……少な

くともリンボ、というキャスターは、何かを確かめるためにここへ来たのは間違いはないのです。可能性としては、マスターが触れた紙の欠片が最も大きい。のですが。

ダ・ヴィンチ様曰く『本造院君の体調？ 異変も何もないけれど……パロメータにも一切異変は見られないし』との事で。彼らだけに分かる『仕込み』があるにしても、即時マスターの命が奪われたりするような事だけは無い、らしく。

『もしリンボの言う位に大きな変化が見られたら、此方で察知できない訳がないからね』との事で。

カルデアの体調管理……当世風の言葉で言うのであれば、バイタルチェックは最新鋭の機械によって完璧に行われているので、そう容易くは騙す事も出来ません。であれば、マスターの体調に一切の不備が無いのは間違いないでしょう。

ブラフ——という周りの意見は大きく。ただの個人の意見を言うのは、些かと躊躇われてしまうので……言えなかったのですが。

マスターのこの姿を見ていると。先ほどの一件がただのブラフである、とはどうしても思いきれないのも、また事実なのです。

「——式部さん？」

「あ、すみません……なんででしたっけ」

「だから、どうしたら綺麗に船の舳先からサメの口へダイブできるか、って言う話」

「そんな話しないでください!!!」

……そうやって気にしても仕方ないのでしょいか。けれども今、目の前でお馬鹿な過程で話すマスターは、どうにも。まるで綿毛の如く、手を離せばどこかへ飛んで行ってしまいそうにも、見えるのです。重荷から解き放たれたような……逃げ出してしまったような。彼を見て。

第六十六章

霧の都に再挑戦する実況、はーじまーるよー。

さーて。あのリンボ野郎を見事に海に沈める事には成功いたしました。当然の如く全体クリティカル薙ぎ払いビームを連打されて、結構削られましたよ。ごりっごりに。

うしくんみたくチート染みた強さでギミックボスで追い詰められるのとは明らかに違う単純にステータスと出力でゴリ押されそうなのを普通に討伐しなきゃいけない、って言う奴ですよ。ああいうのが一番厄介。権能だとか色々ありますけど、結局の所『地力が普通に強い』って言うのが一番厄介って言う。

お陰でやりたいくも無い消耗戦強いられて、黒髭君が女性主体のパーティで回復役として大活躍でございますよ。相手のクラスが律儀にキャスターだったのも幸いしまして、最後まで生き汚く戦ってくれました。

『やはり厳しいですなあ——』

『ンンンッ！ それではご機嫌よおおおおお！』

因みに海坊主君は消滅する事なく、海のデカイゴミとなって船の前に立ち塞がったのでこれを避けていかなないといけないのでちよつと時間がかかるとかいう物凄い地味な

嫌がらせを残して終わりました。あのゼンマイマジで……

とはいえ、これでようやく。やっとですよ、海の都突破！ でございます。という事で、今度こそ海を渡って、現在の拠点である竜の都の砦……砦って言うか、まあとりあえずアジトには再帰還出来ました。

あ、砦と呼ばなかったのには理由もあって……

『……も大分変わったね』

『灰色の部分が増えたのは間違いないかな。この砦も……ちよつとした廃墟というかアパートメントというか……そんな感じになってるし』

砦としてテクスチャを被せられていた場所は、彩度の低いボロの集合住宅に姿を変えていました。ホーンテッドマンションと呼ぶに相応しい姿。屋根が出来た代わりに若干埃っぽくなりました。

さて、その室内にて、いよいよ最後の作戦会議です。霧の都の攻略作戦を練る事になりました。

『さて……ここまで三つの都を攻略したが。結局の所、最大の問題は解決できていない』
『霧の都の無数の人形に關してはもう経験してるからね……』

『此方をもみくちやにして押しつぶす程の物量、そして無限に再生するその力をどう突破するか。シンプルかつ、強力な防衛だと思ふよ、あの人形の群れは』

結局の所、我々は三つの都を順々に攻略していっただけで、結局の所は我々は……最初のもつとも危険地帯を突破するやり方なんて誰も探っていないという。

結局の所、力押しでゴリ押されるのが一番キツいんですよ。単純にクリティカル火力や耐久力もガッツリ有った海坊主君もクソ面倒だったのはさつき程言った通りです。

で、今回ですが……前回、というか一番最初に経験したのですが物凄い数、次々供給される後続、という分かりやすい数の暴力ですよ。

『という事で、対策は……無い』

『ええええええええええ!?!』

『オイオイマジかよ……』

『お、良いリアクションありがとうグレイ』

普段大きなリアクションをしないグレイちゃんも絶叫、逆に普段はやかましいアツドが若干呆れ気味で静かになってしまう程のぶん投げた結論。プレイヤーもグレイちゃんと似たような感想ではございますが。

『そ、それじゃダメじゃないですかライネスさん!』

『ダメだ。でもこれから攻略をしないとほ言っていない』

『——なあるほど、即ちは、威力偵察! いつも『威力偵察だから! さきつちよだけだから!』と血の気の多い奴らの言い訳に使われるアレを正式な意味でつて事ですな

！』

『話が早いな船長。その通りだ』

しかしながら、だからと言って何もしない訳が無く。先ずは攻略の糸口を見つけ出すところから、という事で……今回はまあ戦う訳ではなく、霧の都に一回赴いて先ず、行うのは相手の観察、でございます！

敵を知り己は知れば云々。百戦もしたくはありませんが。取り敢えず勝利の為には必要なので頑張りましょう。

という事で、ここからは霧の都へと向かって——行きました（到着済み） そりやあまあ見た事ある敵しか居ませんし、ここまでの道のり全カットもやむなしというか。

さて、その霧の都にて。今、一番目立つのは……

『……凄い威容ですね』

『なんだあのデツカイモノ……』

辿り着いたこの都で皆様が呆然と見ていらつしやるのは……空、というか町の中心に聳え立つ塔、と申しますか。黒髭君は普通にびっくりしている、式部さんもそんな感じですが。しかしこの中に明確に反応の違う人がお二人ほど。

『——ら、ライネスさん……アレは……！』

『ああ、私たち二人には見覚えのある形をしているじゃないか。我々が呼ばれたのはア

レに呼ばれたから……という事なのかな？」

瞳孔が収縮しきってしまっているグレイちゃんと、逆に一切驚いているように見えな
いがしかし、据わりきった目で天を眺めていらっしやるライネス嬢。特にライネス嬢の
方のハイライトが消えてるんですよ。でも司馬懿殿にはなっていないんですよ今のと
こ。つまり……真剣！ コワイ!!

んで皆様の向いている先にあるものというのが……そうですね。霧の都の中心にじ
わじわと現れ始めていたあの、巨大な構造物！ 紙片を全部集め終わった影響でしょう
か。いよいよ霧の中に隠れていたその巨大な全貌が明らかになって参りました。

螺旋状に、上へ向けて渦巻く、巻貝にも少し似た奇妙な外装。その外壁の色に関して
は白銀、ではあるのですが、しかしながら霧が太陽を遮っている故か、それともそのあ
まりの巨大さ故か。がっつりと影がかかって暗い色に見えてしまっていて。

塔っぽい建物なんですよ。それが、灰色の世界の中心で、更に濃い、グレーとブラッ
クの間みたいな色彩でそこに建っているのです。

『心当たりが？』

『……君たちにも説明したと思うが、グレイの宝具の事を覚えているかい？』

『ああ、現代に残された世界を繋ぐ楔——ロンゴミニアド』

『そう。そのロンゴミニアドだよ。その本来、というより、力を解放する前の槍の形は』

『まさか、アレか!』

アレです。そうです。アレこそはグレイちゃんが所有する輝ける槍。アーサー王が最後に振るった伝説の宝具。ロンゴミニアドの似姿そのもの!

『色々理由もあつて、詳しいんだけど……そっくりだよ』

『で、でも待つてくれ。どうしてあの塔はロンゴミニアドとそっくりな形を?』

『分からない……だがしかし。少なくとも、こうして偵察に来たのは、間違いじゃなかったらしいね。アレについても、出来る限りデータを取らせてもらおう……!』

そりやあまあ、自分たちの良く知ってるモノが目の前に現れたんですから胸中穏やかではないと思いますよ。少なくとも。さて、今回の任務に一つタスクが追加された所で威力偵察開始です。

まあやる事は霧の都の比較的外側をぐるぐると回りつつ、人形たちと接敵、戦つては逃げる……を繰り返すだけなので、何度か人形どもをシバキ倒せば勝ちです。勝ち切る事は出来ずともデータが取れば目的達成。

に加えて。中心の建造物をチェックしたいという目的も急遽出来ました。まあこれに関してはプレイヤー君に出来る事は特にありません。ダ・ヴィンチ様のお力を借りてキツチリとチエックを行いましょ。

まあその間敵を追い払う、位のミッションはあるでしょうか……まああつてもそれく

らいでしょうね。それ以上の難敵なんてありえないありえないはっはっはっ。

『——取り敢えず、人形たちの巡回ルートの再確認、彼らのデータの詳細も把握できた』
『後は……中心のデカブツだけ、という訳だ。ダ・ヴィンチ、ここらへんで観測はいけるかい？』

『問題ないよ。とはいえ、観測している間は邪魔されないようにして欲しいけど』

『了解。まあ邪魔になりそうなやつにはご退場願うとしよう！』

はい。

という事で、後はやってくる人形達を蹴散らして、ここに一定時間留まるだけで良い！
まあよしんばリーダー的な個体が出てきたにせよ、同じように叩き潰すだけです。相手はアサシン編成、こっちはキヤスターが居るので、ライネスちゃんに致命的な以外は有利ですよ。あ、くろひーも致命的か……意外と苦しい？

とはいえ、雑魚敵だけならグレイちゃん、ゴルゴーンさん、式部さんの三人だけでも十分に戦えますし気楽に行きましょう。

『第一波は退けた。順調だね。どれくらいかかりそうかな？』

『まだ結構かかるけど、この調子なら問題は無さそうかな』

『ああ、よつぼどの化け物が出て来たり……』

あつ（震え）　そ、その発言は……画面も揺れましたし。

『——ちよつと待つてくだちい、なんか、ものつそい寒気がするんですけれど。なんです今の揺れ』

『!? 待った、物凄い魔力反応……! 大型エネミー、にしたつてこの大きさは!』

フラグ、という間もなく場面が切り替わり……一枚絵。一枚絵でございます。態々一枚絵が用意された、という事は……ああ、建物にデカイ手が置かれて、そして曲がり角の奥から出てきましたよ!

周りの建物。普通に現代建築で一階建てとかじゃないような。

そんな建物を優に越す様などんでもない高さの。超巨大なゴーストが、今、此方に顔を覗かせました。

怪獣映画かな? (震え声)

第六十六章・裏：最後の『指し手』

——それは、文字通り、見上げるようなデカブツだった。

ヒュージゴースト。そう呼ばれる類の敵。

ゴースト、幽霊、怨霊……明確な形を持たず、魂の力でこの世にしがみつく、本来はあの世の住人達。ゆらゆらと地も空中も関係なく、何なら壁もすり抜けて、物理法則など無視して突っ込んでくる、ホラーの敵役。

その中でも、『想い』が協力故に、そう容易く撃退できず、肥大化したり、強力な力を持った『突然変異個体』とでも呼ぶべきそれ。

凄まじい怨念や執念でこの世にしがみつく故に、そのパワーは下手な竜種よりもよほど強く。瘴気を撒き散らし此方の気力を奪い去ったり、信じられない程の念力で触れずして締め上げたりなどやってくる。

「——おい、なんなんだアレは」

『数値で言うならば……』『下手な神霊クラスの悪霊』かな』

しかしながら……目の前のヒュージゴーストは、もつともつと単純に、ただのゴースト風情との『格』の違いが実に明確に、誰もが一目見れば『ああ』と納得してくれる程

には堂々と表れていた。

それは我々がそのヒュージゴーストを『見上げ』ながら警戒している事からも分かりやすいだろう。

『観測した事あるサイズは、人間三人分くらいだったけど』

「三人分？ 明らかに、近くのアパートメントを優に越す背丈じゃないか……」

『最大記録更新！ と喜ぶべきなのかな？ コレは』

「絶対にそんな事を言ってる場合ではございませーん!!」

デカイ。兎も角デカイ。先ず道一杯に詰まるくらいに横幅がある。幽霊なのにふくよかなのか……そんな訳がない。横幅がデカイなら更に背丈もそれ以上に大きい。横が道幅なら、浮き上がった腰から下の無い骸骨の背丈は周りの建物を容易に超える程。『竜種とタメを張れるサイズか、下手すると上背に限って言えば此方の方が勝っているかもしれないなあこれは』

「これ以上絶望的な情報は要らないのだけど。一応言っておくが、グレイだってこのサイズのゴーストは……一応確認してもいいかな？」

「(ブンブンブンブン)」

無言で首を振る程には無理な相手らしい。まあ想像通りではある。こんな化け物染みた悪霊なんて墓守でもなかなかなかお目にかかれるわけないだろう。

多分、貴族の屋敷が丸ごと居るくらいには巨大な霊園全体の墓石を、鼻歌でも歌いながらスコップか何かでリズムよく叩いて砕いていくぐらいの罰当たりを引き起こせば、可能性はあるぐらいだろうか。

要するに、常識の外にいる相手なのだ。目の前のゴーストは。

「――で、マスター。やるのか、やらないのか」

「やれるわけないっしょ！ 退却！ 退却ウウウウウー！」

ホンゾウインの言葉と共に、目の前の化け物が無数の腕を広げて。ギャリギャリと無数の金属同士をこすり合せたような、理想的なまでに耳障りな金切り声が灰色の空に向けて上がる。

余りにも巨大すぎる存在から放たれた絶叫は、耳だけではなく私達が立っている地面をもビリビリと振るわせている気がした。

先ず真正面からやりあったら、先ず間違はなく力でねじ伏せられてそのまま、カルデアと協力者の旅はあつという間におしまいになるだろう。それだけの圧倒的な力の差というものが彼我の間には存在する。

そしていよいよ。巨大な幽霊が、一本道を此方に目掛け、動き始めたのを見て。

まともに戦ったら終わりだと、私も全力で背を向けて逃げ出した。他全員も逃げ出している。流石に勝てない事くらいは分かり切っているのだから、そりゃあもう脱兎のご

とく逃げ出すのは当たり前だと思う。

「に、逃げてねーし！ 後ろに向けて全力前進してるだけだし！」

「それを逃げると申すのでは!？」

「式部さん、喋らない方が良いで、舌嚙むぞ！」

「は、はいっ！」

「ホンゾウインさん！ 辛くなったら言ってください！」

「お気遣いサンキュー!!」

誰も後ろを振り返らず。そしてわき目も振らない。当然だ、下手をすればあつという間に追いつかれそうな勢いだ……

先ほど、動き出した時の動きを見ていたのだが……その動きが鈍重だったらまだ救いがあったのだけれども。巨大でもその動きは当然の様に素早い。ゴーストなのだから物理法則など関係ない。大きいからと言って鈍重になる訳が無いのだが、それにしても普通に全力で走っても引き離せるかどうか、な程に動きが早いのが厳しい。

「……貴様、自分で走っている風な顔をしているが、自分の礼装に乗って移動しているではないか」

「いやあ、余裕をもって思考を回せるのは大切な事だと思うよ？ それとも乗せてくれるかい？ その立派なお体の上に」

「殺すぞ」

……実際全速力で走っているのは間違いないし。私自身が最も早く動く手段はこうしてトリムに乗って駆ける事なのだ。それにこうして後ろに乗ったまま、冷静に後ろの巨大ゴーストを観察できるのはかなりのアドバンテージだ。

まあ、見た所でそれをどうにか出来るかどうかは全く別の話なのだが。

見た目だけから分かる情報だけでも、単純明快にリーチが違う。腕一本取っても巨大ゴーストの体と同じくらい長さをしている。アレで適当に薙ぎ払われるだけでも、避ける事すら困難だろう。

「ええい、ただここを偵察するだけの積りだったのだけどね……！」

「というか、何処まで逃げればいいんだコレは!? 振り切れんのか!?!」

「分からないが、何処までも追ってこれる程、ゴーストは安定した存在じゃない。流石にこの都からは出てこないで欲しいが……!」

正直、保証は出来ない。アレだけ巨大なゴーストだと安定して何処までも徘徊できそうなおもしてくる。魔術の世界は割と法則はしっかりとしているが、例外も多い。目の前のそれが例外で無いことを祈りたい。とはいえ例外というのは、例外無くどんなタイミングでも正直勘弁して欲しいのだが。

「——うげっ!?!」

「ねっ、熱烈大歓迎!？」

特に、今とかは、本当に。上がる男子二人の悲鳴。嫌な予感と共に、ちらりと巨大ゴーストの方から、逃げる方向へと視線を向ければ。そこに。白亜の壁が出来上がっていた。

具体的に言えば、無数の殺人人人形共の群れ。

横並びに文字通り機械的に正確に整列し、隙間も無く通路を埋め尽くすその群れに、更にどんどんと横の路地から合流して来ているのも見える。

その大量集結を阻止も出来なかった結果……合流に合流を重ねたその数で、ガッツリと分厚い壁が出来上がっているのがここからでも分かる。

しかしまあ、何と最悪のタイミングで来てくれたものか。

「はえ〜スツゴイ壁……」

「ゴルゴーンさん、体当たりで蹴散らせるか!？」

「ええい、流石に数が多すぎるわ!」

「あわわわ……!」

「ら、ライネスさん……!」

不安そうな瞳を向けるグレイ。間違っていないだろう。その不安は。

圧倒的な範囲と貫通力を誇るグレイの一撃以外では、あの分厚い列を突破するのは不

可能だろうというのは分かりやすい。しかしそれだけの準備を整えるのを後ろの巨大ゴーストは許してくれないだろう。

思わず唇の端を噛みしめる。

しかし思考を回すのだけはやめない。

——最悪、自分は居なくてもいい。

カルデアのマスターが指揮を取れば、なんとか行ける。それに、もう一人が生き残つていれば、自分の代わりも務まるだろう。

それを考えて、ここで費用対効果が最も良いのは自分だ。一応、サーヴァントとして最低限戦える実力はある。

もしこれが特異点で無い、自分の地元のロンドンなら、自分は当主としての立場があるからこんな判断は出来ないだろう……特異点だからこそ下せる、自分を捨て石にするという決断に、思わず歪んだ笑みを浮かべそうになる。

まあ、後でグレイにはどうにか詫びるとしようか。

覚悟は決まった。

「全く、か弱い女子がする事ではないな」

トリムに、足を止めるように指令を送ろうとする。

正直、怖くない訳ではないが。しかしまあ、あの顰め面の探偵気取りの兄上には自慢

できる終わりではないだろうか——

そう思つて、改めて巨大ゴーストに視線を向け。

ふと、地面に視線が向いた。石畳の中に混ざる、白い線。アレは……ただの模様ではない事に、すぐさま気が付いた。誰が描いたのか、アレは、何方かと言えば『東洋』方面の術式にも見える——

「——お前の何処が弱いんだ、ライネス」

その直後。巨大ゴーストが進んでいる真下の陣が、稲妻の如くほとばしる魔力と共に起動する。瞬間、此方を追つていたその動きは不自然に……まるで、此方の姿を見失つたかのような。そんな動きをしているように見えた。

余りにもいきなりの出来事。でも。ここまで『完璧』なタイミングで間に合わせる律義な奴を、私は……一人しか知らないのである。強張つていた顔の筋肉がほぐれ、思わずして笑みの形に変わつて。

コツ、コツ、と。革靴が石畳を叩く音が聞こえてくるのに、その方向……我々の横の路地を振り向いた。

「——遅いぞ、義兄上殿」

「仕方あるまい。敵地で調べ物をするほど難しい事も無いのだから」

黒髪を靡かせて。

いつも通りのベビーフェイスに顰め面を浮かべて。

「し……師匠!!」

「ああ、遅くなって済まないな、レディ」

ロード・エルメロイ二世が、遂に盤上に姿を現した。

第六十七章

頭腦が増える実況、はーじまーるよー

迫る怪物。追い詰められる我らカルデア分隊。そしてそこに颯爽と顕れる……知的な歴代主人公！（しかめ面） ロマンあふれる展開だなあー憧れちゃうなあ。

はい。前回、此方に向けて前進を開始した超巨大ゴーストに、此方は後方に向けて全力前進して対抗、しばし相手と距離を保ちながらのにらみ合いを演じていました。

互いの視線が交錯し合う、迫力のある睨み合いを、是非とも皆さんにもお見せしたかった……！（大嘘） まあダ・ヴィンチちゃん曰く、珍しいガチ焦り顔で『ちよつとした神霊クラス』、一切笑っていないライネスさん曰く、『真正面から戦ったら間違いなく負け』との事で。追いつかれたらそりゃあ壊滅かなあ、と。

しかしそんなバケモノだからこそ、追いつかれかねないその一瞬に颯爽と現れたこのしかめつ面軍師がカッコよく見えるんですけれども。

第二特異点において、敵方（所説）でありながらシャドウサーヴァントと共に戦った軍師である、ロード・エルメロイ二世、またの名を諸葛亮孔明、参戦でございます。

もう一度説明させて頂くと。

Fateシリーズの一つである『ロード・エルメロイ二世の事件簿』にてタイトルに上り、そして主人公を務める超人格マトモ（他の魔術師と比較しなくても）の魔術師です。魔術師としての実力はお世辞にも高いとは言えませんが、しかしながら頭のキレは一流、魔術世界の奇妙な事件を紐解き、解決に導くその手腕は本物です。

そんな彼が、かの三国志において、蜀の大軍師として名高い諸葛孔明から霊基を譲り受けた『疑似サーヴァント』として成立した姿が今のロード・エルメロイ二世にして諸葛孔明の姿なのです。

しかし、それにしたってあのデカブツをちよつとの間とはいえ抑え込むのは違和感満々ではあるんですけど。ロード・エルメロイって基本はまあクソ雑魚ナメクジなんですよ。魔術の腕とか実力とか。

そんな彼が、化け物染みたあのゴーストを抑え込む程の陣を設営……？ 妙だな。もしや偽物か？（過激派ファン）

というか、一体どうして孔明Pがこんな所に。いやまあ、メタ的な視点で考えたらイネスちゃんとグレイちゃんを呼んだ相手がいると考えて、するとこの二人を呼べる可能性が最もあるのはやはり孔明Pではあるんですけども。

『ええい折角の仕込みが一つ、もうパアになるとは！ 幸運の女神が一切微笑まん！』

『——それで可愛い義妹と、愛しい内弟子の命が救えたのだから、安いものだろう！』

『余計な口を叩いてる暇があったらそこを突破して逃げろ！ カルデアのマスター、君たちが拠点にしている場所で合流だ、問題ないな？』

『ああいいだろう、暗躍しながら調べていた事を洗いざらい喋ってもらうぞ義兄上！』

しかしそんな疑問に答えてくれる訳も無く、衝撃的な事実が判明。カルデアのマスターはライネスちゃんだった……？（困惑）

んな訳も無く、ホモ君へのお言葉をかつさらつていった形です。流石ライネスちゃんはお兄ちゃんが大好きなんだね!!!（クソデカボイス）

どうも、義兄妹はすべからくカツプリングにする過激派閥、会長です。

そんなのはどうでも良いんです。些か、限界を今は撤退路を切り開いてくれたエルメロイ二世に感謝して撤退いたしましょう。さあ逃げろや逃げろ。名より実を取る派閥のカルデアでございませう。

『あ、暗躍？』

『ああ。そうだ。我々はこの男の擧めた眉の上で踊らされていたんだ……彼はそういう盤上の駒を動かす事の天才でね』

『おいやめろ、人の悪評を流すな』

うわあライネスちゃんがキラッキラしとる。エフェクトマシマシだ。天使みたいな優しい笑顔を浮かべているだけなのに、ロードと一緒にいる彼女からは、何というか底

知れない深い闇というか悪意しか感じないぞこの演出。一体どれだけこの人を弄る事を楽しみにしていたんだ……

まあライネスさんとエルメロイ二世の関係はこんなもんです。

基本ド真面目、若干ユーモアも分かりますけどまあ基本は真面目なお兄さんと、策略大好きで真面目な人を揶揄ったりそんな人が悪戦苦闘してるのを眺めるのが好きな小悪魔の二人が揃うと、只管にエルメロイ二世がライネスちゃんに振り回されつつ、大変疲れるみたい。ハイ。

『でも師匠がとっても賢いのは本当です。拙は……師匠に何度も助けられましたから、良く知ってます』

『……ありがとう、レディ。そして、こんな凄まじい面倒に巻き込んでしまつて、本当に申し訳ない』

『い、いえつ。そんな。あの……迷惑、とかは、思つてませんから……』

そして、もう一人。

彼の内弟子という立場のグレイちゃん、エルメロイ二世にとつては、こう、言葉にし難いお人であり……単純に親しいというだけでもなく。まあ、兎も角『頼りになる相棒』という曖昧な表現が一番似合うのがこのお二人である事は間違いありません。

この二人が揃つてこそ『ロード・エルメロイ二世の事件簿』という所があるので。

まあ心強いですよ。師匠と内弟子で、何人もの魔術世界の事件を解決していった実績がすごいですので。これは強い。

『——つてそうではない！ ええい、アレ程の化け物をいつまでも足止め出来る訳じゃないんだぞ！ 早く目の前の敵を突破しろ！』

『じゃあカッコつけて一人だけ離脱とかせず手伝いたまえよ義兄上』

『格好つけている訳じゃない！ 私は一人いたところで物の数にもならないだろうが！』

足手まといにならない様に私は素早く離脱しようとしただけで！』

『そんなんでも一人でも多く仲間が欲しい状況だと私は思うが？』

『……全く、全く仕方ない、ささやかながら援護してやろうじゃないか！ 言っておくが本当にささやかな事しか出来んぞ！』

『お願ひします！ 師匠！』

楽しそうね君たち（ニッコリ）特に嬉しそうなグレイちゃんを見てると俺も嬉しくなってきたやうよホンマ。もうちよつと何とか……何とかならんのか。この三人だけで特異点攻略とか（本末転倒）カルデアの意義。

という事で、エルメロイ二世を擲擧っている間にごく当たり前のことを言われましたのでギャグやってないでさつさと本題に戻りましょうか。

さて、後ろの巨大な奴が動き出すまでに目の前の人形が編成したスクラムを、早めに

突破できるかという話なのですが。

これに関しては問題ございません。此度は此方をエルメロイ二世、及びライネスちゃんという二大疑似サーヴァントのフルパワー援護を受けたつよつよグレイちゃんが参戦してくださるので何の問題も無くあっさり蹴散らしてくださいませ。

そりやあまあ、エルメロイ二世にとつては可愛い可愛い内弟子、ライネスちゃんにとつては数少ないお友達、そして二人はそりやあ三人そろえば圧倒的な実力差をもつて蹂躞する事も全く以て可笑しくないというか。ラスボスの時にやって？（懇願）

はい、という事で三位一体のフルパワーにてあつという間に敵を殲滅しました。因みに戦功第二位は式部さんです。最後の宝具ブツパで一気に人形たちを引き裂いたのが大きな要因ですかね。あ、くろひーは海坊主君戦から翻って人形の襲撃を恐れる哀れなひな鳥と化していました。ライダーの悲しい宿命……

『よしっ！ 取り敢えずぶち抜いた！ 離脱するぞ！』

『またぞろどこから集まってくる前に急げ！』

という事で、二大軍師のお叱りを受けて我々も離脱。無事に霧の都包囲網を突破いたしました。終わった後のグレイちゃんの自信満々にやり遂げました的な『フンス！』がめちやくちや可愛かったです（小並感）

さて。これで取り敢えず我々は無事に帰還。今は再び元砦の一室に入って来ました。

そう言えば、ストーリー上ではゴルゴンさんは会話に参加できない訳ですが、結局我々と一緒にいる訳で……物凄く狭そう（小並感）

『——しかし、取り敢えずは無事でおめでとうと言っておこうかな。義兄上』

『別にそう難しい事はしてない。一人で行動する分には、彼らの目を掻い潜るのも不可能ではないのよね』

『その割には『紅の都』では派手にやらかしていたじゃないか』

『……うまく溶け込んだつもりだったのだがね。まさか僅かなイントネーションの違いでバレるとは思っていなかった』

えっ。孔明P『紅の都』エリアに来てたんですか？

……あー成程。あの宮殿に続く道の惨殺状態。アレって紅の都の人達がイカレポンチ過ぎた訳じゃなくて、孔明Pが脱出する時の巻き添えになったんですか。うーん南無。

しかし、他のエリアでは全く分からない様に我々よりも先んじて潜入し、色々な情報を探っては何時の間にか撤退していたとの事。スゲエ。キャスターなのにアサシンみたいなことしてるじゃないかこの人……

『リンボ氏もそちらのおにーさんが居るとは分かっていた模様でしたが、結局は捕まえ切れてませんでしたなあ』

『紅の都では正直『これは先に脱落か』とひやひやしたがね』

『んで？ 結局そちらさんどちら様なの？』

あ、そう言えばこのメンバーの中で孔明Pを知らないのは黒髭だけなのか……これには孔明Pも『あ』とちよつと間の抜けた驚きと共に眉間の皺も若干薄れざるを得ない。

なんとというか巡り合わせですよ。こちらは敵対する相手として。ライネスさん、及びグレイちゃんも味方として、何方もある程度は彼の事を知っているメンバーがそろっているという。

『ああ、すまない。全員が私の事を知っているつもりだった。一応、第二特異点でカルデアは別の私と遭遇した、というのは記録に残っていたのでな……では、改めて自己紹介させてもらう』

『ロード・エルメロイ二世だ。しがたない魔術師……ではあるのだが、現在は一応、サーヴァント諸葛孔明でもある。とはいえ、蜀の大軍師の名で呼ばれるのは些かと面はゆいし見合っていないのは明白だからな。ただエルメロイ二世と呼んでもらいたい』

という事で、役者がそろったところで今回はここまで。

ご視聴、ありがとうございました。

第六十七章・裏：エルメロイの帰還

「——では、改めて自己紹介させてもらおう」

……自ら口にされなければ、自己紹介を始めようとは思っているとは分からない物凄
いしかめ面です。

「ロード・エルメロイ二世だ。しがたない魔術師……ではあるのだが、現在は一応、サ
ヴァント諸葛孔明でもある。とはいえ、蜀の大軍師の名で呼ばれるのは些かと面はゆい
し見合っていないのは明白だ。ただエルメロイ二世と呼んでもらいたい」

さて、その自己紹介が正しいものなのか、と言えば……違う気がいたします。

カルデアで知った事なのですが。ロード、というのは西洋の魔術師においての一つの
到達点を示す称号である、との事で。右大臣や左大臣に当たる地位と言われると、目の
前のお方を言われた通り『ただの魔術師』とは言えないのは間違いなく。

そのロードと呼ばれるお方をただの魔術師、等と呼んでいい訳も無いかと思ひます。
絶対に。

「ライネスの……書類上の義兄、そしてレディ・グレイの師をさせてもらっている」

「成程、即ちはハーレム野郎と。爆ぜろロード・エルメロイ」

「誰がハーレム野郎かそのオタク海賊。グレイにそんな下卑た感情など向けようもないし、ライネスに至っては……そんな隙を見せようものならとって食らわれて終わりだ。というか、分かってて言っているな貴様」

「んー？ 何のことですかなー？」

そのようにロードと呼ばれる程のお方なのに。

私から見ると、何処かマスターと似通った部分がある気がするのです。その厳正にして冷静と言った表情の彼から出てくるとは到底思えない『ハーレム野郎』だの『オタク海賊』だのと言った語彙には、何処か、いい慣れている節がありました。

「ん。ああ、すまないね。ミズ・式部。君の様な貴人……特に、言葉を貴ぶ貴女のような方に聞かせるような会話ではないな。余りにも低俗過ぎた」

「いいえ。お気になさらずとも……」

魔術師、と申しますのは。まあ割と人離れた方も多く。

多い、というか殆どが人間性が些かと、その、可笑しなことになっていると申しますかハイ。わ、私が良く知っている例はお二方だけなのですが、しかしそのお二方とも、魔術師……というより陰陽師としては頂点に位置するお二方。

そして……比較的まともな性格をされていたお方よりも、私の師は実力は上でして。そしてその上で凄まじい人格破綻者と申しますか。で、何方かと言えばその、真面な性

格をされていた方は、陰陽寮では逸れモノとして……

私の経験で言うのであれば。人間として些かと……ちよつと、どうなんでしょう、的な人が、優秀な気がしないでも……いえ、そうではなくて。

兎も角。目の前の魔術師は、人としての『温もり』のようなモノを、他の魔術師よりも残しているように見えて。

「おやおや、随分と険しい顔じゃないか。何時もならもう少し愛想良くしていたように思うのだが？」

「それをする余裕があるのであればしている。だが現状はソレをする必要も無い緊急事態の真つただ中だろう」

「まあ確かにそうではあると思うがね。しかし、どんな状況であれ最初の挨拶は実に大切だ。礼を尽くすに越した事はないんじゃないか、と思つただけだね？」

「……まあ、それはそうだが」

一方。その傍らに立つライネスさんの笑顔は、いつも以上に輝いている、というか生き生きしている気がします。更に言えばお肌が、ちよつとツヤツヤとしている気がします。

多分ロード——ロード自体が敬称なので様は要らない、筈だと思うのですが——の自己紹介には全く問題は無く、寧ろ丁寧な物だったと思えますが

しかし、恐らくライネス様はそういう事を本当に気にしているのではなく、単純に楽しんでしよう。

「つて、そうではない。今は私の最低限の紹介が必要だっただけで、それ以上は必要ない」

「ちえ、無駄に猫を被る冗上が見れると思ったのだが」

「おい貴様ライネス。取り敢えず座っている……全く」

ライネス様は……擲揄っているのではないのでしょうか。何処か生真面目で、若干苦勞人気質のあるロードを。

ああ、そうです。私の師、晴明様をライネス様、ロードにその件の陰陽師様を当てはめると、あんな感じになる気がします。都にて、人でなしの晴明様とその方は、仲がいいのか悪いのか……そんなやり取りとしていたような。

そんな事を思い出す目の前で、ロードは一つ。ため息を挟んで。些か、というか大分疲れたような顔で、天を見上げました。

「はああ……すまないレディ。紅茶を淹れてもらえるかね。少し喉が……つて、ここでは紅茶もクソも無いか」

「はい、師匠。もう用意は出来ています！」

「……あつたのかね」

「はいー」

「……すまない。ありがたく頂こう」

そんなロードの周りで、先ほどから何処かそわそわとしていたのが、グレイ様でした。今は、紅茶のカップを両手に持って、とつても楽しそうにしています。

我々と一緒にいた時よりも、些か以上に活き活きしているのは、ライネス様と似通っているのですが。しかし、彼女は純粹にロードと一緒にいる事に喜んでいるようで……『擲揄い甲斐のある相手が来てエンジンがかかって来た、と思うライネスなのであった』

因みに、何がと言いませんが。上がライネス様。下がグレイ様のモノです。なんでしようか。ストレスと癒しとが混ざってちよいどいい感じになる……なのでしょう。とてもそうは思えないのですが。

その癒しの方のグレイさんは、紅茶を入れ終えたと同時に、ロードの髪を少し弄り始めました。弄る、というより整えていると言った感じですが。

内弟子、とは言つてらっしゃいますが。師の世話を甲斐甲斐しく焼く姿は弟子というよりはまるで、母親の様で。しかし、そんな彼女を見つめるロードの視線にもまた、慈愛の色が混ざっているのも、間違いない。

そんな風に見ているロードが、はたと何かに気が付いたような表情を見せたのは、本

当にその直後でした。

「……そういえば、レディに施した『それ』も解除しなければいけないか」
「え？」

「……まあ、暗示の様なものだ。彼女の感受性は、優れたものではある。しかし、時にはその優れ過ぎる感性が仇になる事もある……と違ってね」

ゆつくりと歩き出したロードが向かった先は……グレイさんの目の前。キョトンとしている彼女の額に、トン、と指を当てて。ぱちぱちと瞳を何度か瞬かせると。グレイさんはそのまま、ストーンと膝を突いてしまいました……ロードの髪を握りしめて

「あだだだだグレイツ、グレイツ、髪を、髪を放してくれっ！」

「ぐ、グレイ様!? どうなさったのですか!？」

「……（ふるふるふるふる）」

『髪ひつつかんで動かなくなっちゃったんだけど……これは?』

「ぐ、グレイはつ亡霊への感受性が……高ついでいいだっ! それをつ、どうにか、抑えないとっ! 特異点など、突破できないと、思っただだだだだっ!？」

『あー、耳が良すぎて大声で怒鳴られたら倒れるみたいなものかな?』

「まあそんな感じだあっ!？」

……しばらくして、漸く落ち着いたグレイ様に髪を放してもらってから。ロードは改

めて説明に入りました。

こうなってしまったのは先ほどの巨大な亡霊から本来感じる感覚を、思い出したからだろう、との事で。

グレイ様は、曰く、対霊の専門家であると同時に……その霊的存在を感じる感覚が鋭すぎて、逆にゴースト……というより亡霊が大の苦手なのだと。今まではそうとは思えなかったのですが。

しかし、何時もの感覚が戻った今、先ほどのゴーストの事を思い出し、本当に立てなくなってしまったようで。アレがどれだけの怪物なのか。彼女が一番、実感できているのでしょうか。

「んー……もしやサーヴァントになった際、その辺りも克服できたのかと思っていたがそうではないようだな」

「当たり前だ。彼女の霊的感受性の高さをそう簡単に上手い事制御出来れば、彼女はここまで困っていない。無理矢理鈍くするような力業で、今回は何とかしたが……彼女の長所を潰す様なこんなやり方は、好むところではない」

『……で、対霊の専門家がこの調子で、勝てる相手なのかい？』

そんな中で。ロードは……しかし、それでもニヤリと笑って見せました。

「ああ、無理ではない。というより、その為にこれだけ遅れて参陣したのだからね」

『ほう？』

「これより、あの怪物の対策を立てる。そして……あの巨大な塔に関しても、聞きたい事も多いだろうしな」

自信に溢れ、口の端に浮かんだ笑みには確信の色が溢れています。

それは、確かにグレイ様が頼りにしている、というその言葉を裏付けるような、『知恵者』の表情に違いありませんでした。

「……で、私はいつまで体を縮こまらせておけばいい、マスター」

「ごめんもうちよつと……あ、こっちはお気になさらず、どうぞ続けて」

……最後に物凄いいたたまれない空気になったのは、大変申し訳なく思います。

第六十八章

霧の都の幽霊の徘徊、はーじまーるよー。

なんかゴーストが徘徊老人みたいな言い方ですけど実際そんなもんでしょ（暴論）

とはいえ相手にする徘徊老人は、某海王みたいな何百歳の怪物級ベテランゴーストな訳ですが。これには地上最強の息子も解説不可避。

んで。

少なくとも、ここ最近出現し始めたあの化け物は、先ず霧の都からは出られないらしい上に、普段は只管に都の中を巡回していただけだったのが……ホモ君達が入ってきた途端にそっちに向けて直進し始めたとの事です。

顔に手を当てて『ああもう』とでも言いたげな孔明Pの顔を見るに、どんだけの直線具合かは推して知るべし。

『恐らくは、カルデアのマスターである君を狙う様に、プログラム、というか。そのような事をされているのだろう。そして、その精度は実に高い……まるで、GPSでもついているかの様に正確に、そして素早く探知して向かってくる』

とんでもないド迷惑な事をされてて草も生えない。まあリンボ君がここの仕掛け人

やってるならそれくらいはやるとは思いますが……全く、ただ禿げているだけのホモガキにどれだけの憎しみを抱いているのか。

『という事は、何処から侵入してもアレとかち合う事は避けられないと』

『その通りだ。レオナルド・ダ・ヴィンチ』

『どう足掻いても勝てない相手が真つ向勝負強いて来るとか、どんなクソゲー?』

『……それに関しては同感だが。まあ攻略の余地を残す必要があるゲームと違い、実際に戦うのであれば、一切の付け入る隙を晒さないのは当然だろう』

思わず黒髭君もホールドアップしてお手上げムード。

ゲームなんですけどね。一応は。しかし辟易、つて言う様子の孔明Pの言っている事も正しいです。攻略不可能! 解散! 撤退! つてさせるのが一番の上策で、そもそも実際に戦う段階に入った時点で下策つてそれ一ですよ。

そう考えると相手に対して如何にクソゲーを強いる事こそ上策つて事でFA? そんな上策なんて投げ捨ててしまえ。

『まあとはいえ、勝てない訳ではない。確かにアレは十分なバケモノだが……アレが魔法によるもので無い以上は、攻略手段は必ず存在する』

『あるのかい? 文字通り古き神秘に匹敵する大悪霊をどうにかする手段なんて』

『まず前提としてなのだが、アレは出力が無駄に高い事は間違いないが、しかしながら別

に何かしらの伝承防衛、若しくは概念的な守りがある訳ではない』

まあ要するにアステリオス君みたいな理不尽系ギミックボスではない、と。『あ、特定の攻撃じゃないと通らないんでそこ宜しく』的な事だったら確かに『ふざけんな！（声だけ迫真）』となっていましたからね。

まあ出力が無駄に高い時点で、真正面からの削り合いなんぞしたら間違ひなくねじ伏せられる事確定なんですけれども。

『で、ですがあの巨大な悪霊に勝てるのでしょうか……』

『何の手立ても無くぶつかり合ったのであれば、確かに勝ち目は薄いだろうが。しかしながらこうして態々こうして遅れて合流したのだから、流石にある程度の下調べ位はしてきたとも』

『下調べというと……』

『あの巨大な怪物についても、だ』

しかしそこは歴代主人公ロード・エルメロイ二世。何の準備も無くそのような事を言い出す訳もなく、少し得意げな表情、及び

『先ず、アレは西洋のゴースト……というより、東洋、それも日本の怨霊をベースに作られた存在の様だね。あそこまで霊が出力を上げているのはその為だ』

『へえ？ 東洋の』

『我々の暮らす地域にも、変わらず悪霊、亡霊の伝説は存在する。するがしかし、そのスケールは日本のそれとは違う。我々の知る悪霊は祓うイメージなのに対し、極東のそれは圧倒的な力を『鎮める』、という印象が大きい』

曰く、将門公伝説。北の天神、菅原道真。そして崇徳上皇の引き起こす災害。荒魂と呼ばれる者達。ゴーストによる被害の物騒さで言えば、何方かと言えば東洋の方が凄まじいとの事で。

そして、その恐れと畏れにより、死後には神にすら祭り上げられる程の圧倒的なスケールの亡霊は、西洋には存在しないのだと言います。

『そして、あの大怨霊の手本とされたのは恐らく……平将門』

『マサカド。確か、日本の片田舎の貴族を率いて国王に叛逆した男だったかな？』

『その通りだ、ダ・ヴィンチ殿。その経緯は兎も角として……最後には打ち取られ、しかし晒上げられた首は一月以上に渡り怨念によってその姿を保ち続けた、という凄まじい伝説を持つ』

『……もうそれ個人のゴーストの範囲越えてないかい？』

『私も始めてその逸話を聞いた時、世界の広さを実感した気がしたよ』

怨念って凄い（小並感）

で、そんな怨念の凄い人が一体どうしたのかと言えば。

『——マサカドの伝説をなぞっていると?』

『あの怨霊は首。そして……マスターはあの首にとつての『体』。かのマサカドは、自分の体を追い求め、西の都から、東の自分の体が埋められた塚まで飛んで行つたという逸話があり、それを利用してマスターを追う様に作り上げたのだと思われる』

つまりホモ君はあの巨大ゴーストのボディにされる……? それなんていう某吸血鬼なんでしょう。禿げ頭がそっくりそのままデカイ骸骨にすり替わるとか、体がアンバランス過ぎて洒落怖の雰囲気を出しています。

どうでもいいですけど、指揮棒を持って、黒板の前うろろしながら解説を挟んでいるロード見てると、本当に『先生』『講師』『師匠』って感じがしていいですね。

『うーん拙者とは真逆で草』

『……恐らくは、その為の君でもあるのだろうか』

『はん?』

『君を召喚したのは、色々理由があるという事だ。黒髭。マサカドの伝説を再現するために、全く逆の逸話を持つ君を召喚し、そして君の記録している『歴史』から逆算してそのゴーストを構築するための骨子を補強したのだろうか』

『えっ……つまりあの巨大幽霊は拙者の生き別れの兄さん……?!』

『随分と顔色の悪い兄弟だな。それは兎も角』

まあ要するにサーヴァント等まで利用して念入りに構築した良くてきた人工の化け物である。そこまでこだわって作るとかマメな職人だなあ……そんなゴースト構築の職人とか要らないですけれども。

『アレを仮称『マサカド式ヒュージゴースト』とする』

『ま、将門公は何にも関係ないはずなんですけれども……』

『だから仮称とつけたのだよミス。万が一こう呼んでいるのが本物の御霊にバレて、祟られても困るのでね』

んで、マサカド式ヒュージゴーストについてなんです。どうやらその脅威は実際にぶつかって殴られたりする……とかではなさそう。やっぱ、怨霊らしい『祟り』やら呪詛やらが圧倒的な脅威らしいです。

『つまり、アレは我々を呪い殺す方が得意だと?』

『その通りだ。将門伝説では、彼に祟られた多くの者が謎の衰弱死を遂げている。彼自身と直接関わっていない人物もだ。殆ど面識も無い相手を十数人、短時間で呪い殺す等、冠位の魔術師とて難しい。呪詛とはある程度、『繋がり』が必要になるからな』

『まあ何も細工していない相手を遠距離から呪い殺せたなら、我が時計塔は呪詛による暗殺で祭りになっているだろうがね』

『想像もしたくないが……少なくとも、アレは直接相対したなら、目の前の相手を短時間

で呪い殺す位の単純な出力はある』

ひえっ……（恐怖） そんな事しちゃいけない！ 要するにあの巨大なゴーストは殴ってくる間に大量に呪詛を付与してくるタイプのエネミーだと……一番厄介なタイプの敵じゃねえか!!! 全体弱体解除居ないとクツソだるいタイプの敵じゃねえか!!! それに加えて普通に出力もあるから殴りも強いって？ それはこのレベルの特異点に出していいエネミーのレベルじゃねえ！ 高難易度とかでやってどうぞ（懇願） マスター虐めを楽しむならそれ相応の対処をせざるを得ない（激怒）

『——しかし、同時にそれが最大の弱点でもある。アレは亡霊であり、巨大なゴーストではあるのだが……呪詛の塊ではない。あくまで『巨大なゴーストタイプのエネミー』の粹を出していない』

『特別な概念的な防御は無い、って言う話だったね』

『ああ。アレは相手を呪い殺す事は出来ても、その呪詛に対策を練っている訳ではない。要するにアレは、自分の呪詛で死ぬような間抜けなのだよ』

ええ……？（困惑） それって猛毒を持った蛇が、自分の毒が回って死ぬような物なんですけれども。

『加えて、頭が特別いい訳でも無い。良くも悪くも、命令以外をほぼ全く実行できない傀儡だ——ちょうど、向こうの陣営が主力としているシャドウサーヴァントの様な』

『成程、読めて来たよ。要するに自分の呪詛を跳ね返されるのが最も苦しい訳だ』
『古来より、呪詛返しは魔術師の本領。そしてオート射撃のタレット風情に、プレイヤーが負けるわけがないとも』

成程。どういう攻略をするかが分かって来ました。要するに、あの巨大ゴーストが向けてくる呪詛、というか祟りを、相手に向かって跳ね返して自滅を狙うと。

呪詛返しっていう明確な対策もあるって言う。なんていうか、力でねじ伏せるのではなく、相手の力を利用して自滅仕掛けるあたり、巧く戦うエルメロイ二世らしい戦い方ではあると思います。

『とはいえ、それだけの呪詛返しを町中で準備するには時間がかかる。そこで——』
『——ああ、成程。あのゴーストの習性を逆手に取る訳か』

……はえー、それまで時間を稼ぐためにホモ君が頑張る訳ですねー……どうやってかは敢えて考えない事にします（白目）

第六十八章・裏：小賢しい男

「——それで？」

体を小さく丸め大人しくしているのも正直疲れた。体の大きさというモノを、いやという程理解させられた。取り敢えず天井の一つでも破壊してやろうと思ったが、しかしながら、流石にそこまで私も大人げない事はしない。

という事で、私は外に出た。別に中で言っているのは私には関係ない。相手がどんな策を練ろうと、私はあくまで力でねじ伏せる事しかない。小賢しい真似などはしない。なので彼方で勝手に策を練り、それに私が乗れば何も問題は無い——頭を回す事ばかりが賢い立ち回りではないのだ。

という事で。

何とか体をくねらせ、外に出て来て。ついでにワイバーンを何頭か軽い運動がてらにねじ伏せて……

ある程度スツキリとしてから戻って来たきたところで。急に香って来た匂いが不意に鼻についた。

ちらりとそちらに顔を向けると。立ち上る煙と、深い眉間の皺。ポケットに手を突っ

込みながら片手に葉巻を摘まんだその姿は、此方を恐れてはいないし、畏れても居ないのは分かりやすい。

ロード・エルメロイ二世、だったか。

先程まで、部屋の中でなにやら色々説明をしていたのは覚えている。説明を終えて外に出て来たのか、しかしながら。それにしては、私に視線を向けるのが些かと、早かった気はする。まるで――

「――待っていた」

その男は、私の思っていた事と、同じ答えをその口から吐き出した。

「君が、このメンバーの中では一番カルデアに呼ばれて日が浅いと聞いているのでね」

「……フン、それがどうかしたのか？」

「安心して欲しい。貴女を害するつもりも、カルデアへの裏切り仕事を仕掛けようという積りも無い」

しかし、その次に続いた言葉の、余りにも青臭い事には、私とて嘲笑の笑みを浮かべそうになってしまう。

別にカルデアの連中と私は、裏切る裏切らないの次元にはいない。あくまで、あのマスターは私がこうして現世にあるための楔の役目でしかないし、協力というよりは、利害関係が一致したから……こういう事をしている。

人理焼却、というのが、何のために引き起こされたかなど知らん。だが姉上達と、私
が過ごした時代をも焼かれた、というのは度し難い。気に入らない。故に、私は無礼を
働いた相手を殴り倒すことにした。それだけだ。

仲間の類と、我々の関係を勘違いしているのであれば……余りにも滑稽な勘違いだ。

「下らん心配をするな。要件を話せ」

「——では率直に。あのマスターの変身……貴女はどう思う？」

とはいえ。その滑稽な勘違いを直してやる義理もないので、取り敢えず話の先を促し
てみれば。奇妙な問いが帰って来た。

もつとも関りが薄いと自分で言っている相手に、それを聞くとは。正直、頭が良い悪
いに関わらず、道理から外れた行いを目の前の男がしているのは分かる。

マスターの事を聞きたいのであれば、それこそシキブに聞く方が早いだろう。奴が、
一番最初に召喚したサーヴァントのだと、マスターが言っていた。

「……そう怪訝な顔をしないで欲しい。貴女でなければマズいのだ」
「何？」

「彼に近いミス・式部では、万が一ということがある。客観的な視点が欲しい。彼の事を
今の所、最もそのように見れるのは恐らく貴女だと、私は見ている」

しかし、そう言われれば。最もマスターと近いサーヴァントではなく、私を選んだ理

由も理解できた。まああのハゲマスターに何か遠慮したり、逆に何かしら憎しみを抱いていたり、等はない。

あくまでマスターとサーヴァントの関係である事は間違いないだろう。

「……あの変身について、だったか？」

「ああ」

「面白い、とは思うが。まあ真つ当な『由来』の力ではないだろうな」

マスターのアレは、先祖由来のモノだと言っていた。

しかし、そんな先祖由来の力が簡単に表に出てくるのであれば、誰も苦勞はしない。

半神、と呼ばれる神と人との間に産まれた存在とて、まんじりもせず日々を過ごすだけで、文字通り神の如く血に流れるを振るう事など。多少体が強くなったりはするが……それまでだ。

それを表に引きずり出すのには、それ相応の『努力』が必要になる。

例えば……忌まわしきポセイドン、その血を引くギリシャの半神、ヘラクレス。アレも自らの意思で武を鍛えて、文字通り半神と名乗るに相応しい怪物染みた力を手に入れたのは間違いないだろう。

そして、自分で努力したもので無ければ……他人から恣意的に押し付けられたモノ、という可能性もあるだろう。

「あのマスターは、平和ボケした国で、無為に日々を過ごしていたような只人だ。それが急にあれだけの力を目覚めさせた。何もなかったと思わんな、その前に」

「下地があつた……という事か」

「貴様ら人間のお得意ではないか？ 自分でダメなら次代に、というのは」

まあそれがどのような意思で実行されるかにもよるだろうか。

私個人の、まあそれこそ客観的ではなく、主観的な意見にはなるが、『マトモ』な方向で目覚めたような物には到底見えない。

マスター曰く、『ずっと昔の言い伝えを真剣に信じ続けてる変人の集まり』だったらしいが。それだけで済む話か？ いいや、決してそうではないだろう。

そうマスターが言うのは、本当に知らないからか。はたまたそれが『話すのも嫌で嫌で仕方ない事実』なのか。

「……魔術刻印の様に……しかし、カルデアのマスターは一般人として生活していたのは間違いないらしいが……であれば何故」

「知らん。謎を解き明かすのは、貴様の役割だろうよ。頭学者風情が」

だがそれはあくまでこやつが求めているモノではない。欲しいのは『客観的な』意見なのだから、私の主観的な意見など、それこそ邪魔にしかならないだろう。ああ、何かのヒントになりそうではあるのだが、実に残念で仕方ないというしかない。

「……ではもう一つ」

「なんだ？」

「貴女は……復讐、恩讐、そう言った強い思いの元に——特殊なクラスである復讐者、アヴェンジャーとして顕現している。それは間違いないかね？」

「——」

私が男の首に噛みつかなかったのは……その事を聞いている男の方が、恐らく私よりも険しい顔をしているからで。明らかに『正直、突きたくない事でも訊かなければならないだろう』というのには目に見えていた。

興味本位だとか。そういう方向ではなく。私と刺し違える位の覚悟でその質問を持つてきた、というのが余りにも明確に示されていたからで。

「——貴様、クソ真面目だと言われた事はないか？」

「……さて、ね」

「くくつ、まあいい。薄ら笑いやら、同情やらでそれを口にされるよりはよっぽどマシではあるからな——ああ、その通りだ。私の中には抑えきれないぐらいの怨嗟の念が渦巻いているとも」

私がマスター共を食い荒らさないのは、あくまで『目的』が同じだからだ。

人理……否、世界という土台を吹き飛ばされているのだから、誰だつてそうならざる

を得ない。この状況で、それでも尚、一旦矛を収めないのは『想いに忠実』を通り越してただの愚か者だ。

「それで？ ソレに流されて、私が途中で気が変わった、と口にするのが恐ろしいか？

軍師よ」

「……」

「そこは安心しろ。忌々しいが、今のマスターの元に居るのは、比較的マシなのでな。少なくとも、邪魔をされぬ分には最低限の仕事はしてやる」

まあそれでも。前提として『マスターが気に入るか気に入らないか』というのはある。即座に縊り殺したい程の愚か者であれば、共同戦線を張る気にもならず、私は召喚後マスターを食い殺し自滅していただろう。

『精々俺を利用しろ』

そう堂々と口にしたマスターだからこそ。最低限、轡を並べるだけの『格』はあると判断したからこそ、私は奴のサーヴァントとしてこうして共に戦っている。

奴は私が『仲良しこよし』をしたい訳ではない事を、恐らく直ぐに悟っていた。その上で『自分を利用しろ』と言えるだけの胆力があるのであれば、上等だ。

少なくとも奴が怯えたり、逃げ出そうとしたりと、情けない姿を見せない限りは。利用価値ありとして、利用しつくしてやる。故に……まだ、そのような気まぐれを起こす

予定はないと、告げてやった。

「——そういう積りではない」

「何？」

「その怨嗟の念は……他者に分け与えて尚、有り余るほどの物なのかね」

のだが。しかし、返ってきたのは、想定していない答え。

「……この怒りは私だけのものだ。他人に渡すつもりはない。貴様、縊り殺されたいか」「いや、すまない。そういう積りは無い。ただ……気になっただけだ。君の怒りは当然だと思われる。自分の怒りを他人に『譲り渡す』、『分け与える』などとゾツとしない。ならつまり、そういう事なのだろうな」

「貴様、何の話をしている」

「『Why done it』の話だ。恨みというモノを他者に渡せないのはごく普通の事。しかし普通にはなれないのであれば、それ相応の理由がある」

全く意味の分からない質問に、当然の様に感じた苛立ち交じりの答えは、どうやら男にとつて十分な『答え』になっただらしく、顎、というか唇の直ぐ下あたりに手を当てながら、その眉間の皺は余計に深く。

今、目の前の男が見ているのは、恐らく、私には見えないどこか遠くの深淵だ。

「ありがとう、参考になった」

「……一つ聞かせろ、貴様、何処を見ている？」

「この『人理焼却』の裏に蠢く謎を。シャーロック・ホームズではないが、解けそうな謎を残しておくのは些か以上に気になるのではな」

そう言つて、男は踵を返し室内へ歩き出す。

「ふん、カッコつけおつてからに」

解き明かす者。

私と戦つた、あの英雄とはまた違う『小賢しさ』を持つた男。それが、今はほんの少しだけだが、頼もしく見えてしまったのが……非常に、忌々しかった。

第六十九章

首で胴体を探す実況、はーじまーるよー

ちなみに上はこれから戦う通称『マサカド式ヒュージゴースト』の元になった平将門公の怨霊伝説の一つでございます。首刎ねられてから一か月だかそれくらい腐りもせずグリグリと色んな所を覗みつけ、最終的に『ボディ……我がフューチャーなつてもう一戦始めようぞ!』とかどこぞのD I O様っぽくなつて首だけで飛んだとかいう。

その習性を組み込んで追跡してくる相手を、ホモ君が囷になる事で相手がある程度誘導しつつ時間を稼ぐ、という大方針が打ち出されたのが前回でございます。

基本的に型月主人公は酷使されるといふ運命ですが、しかしながらホモ君に関して言えば酷使というより、単に雑に扱われている気がしないでも無いです。流れるようにホモ君に囷役を任せられるっていう……

『いやあ、でも彼もカルデアのマスターだ。流石に囷役にそうホイホイと使う訳にはいかないというか……』

『私とて、危険性を理解していない訳ではない。しかしながらあの怪物を相手にリスクを出来れば避ける、等とは言っていられない状況だ。下手をすれば、此方があっさりと

全滅しかねない』

『……確かに、だけでも……』

『私も未来ある若者を無為に死なせたりはしない。出来る限りの努力を尽くし、彼を必ず戦場へと返す——頼む。ここから生きて帰るために、君の命を、一つ貸してもらえないだろうか』

『——どうする？ 君が嫌というなら、カルデアは全力で君無しでも撃破できるプランを練ると約束する。それでも……やるかい？』

そんな風に言われちゃあ任されるしかねえよなあ!? 男一匹ホモ野郎、ここで逃げたら男が廃るつてもんよオ! そうだろう、諸葛亮孔明殿よオ!?

……こんな風に安請け合いするから雑に扱われるんじゃないですかね（正論） だってそんなこと言われちゃったらプレイヤード的にも選択肢的にも『NO』って選択は出てこないですよ。これがNOとは言えない日本人ちゃんですか（現代の闇）

という事で、大方針が、改めて、決定されました。因みにイエスって言った時一番楽しそうに笑っていたのはライネスちゃんでした。そこは頼んで来たお兄さんみたくもうちよつとくらしいは神妙にしろやオラアン!?

まあだからといって攻略立てたその日の直後に仕掛ける……という訳にもいかず。

それにまだまだ説明する事は多いという事で、いったん休憩、という事になります。

んで今回、交流できる人は一人だそうで……では、やっぱり式部さんが良いかな。フアーストサーヴァント！

『——キャスター・リンボとは、何者なのでしょうか』

おおっと。まさかのそこから……敵にキャスター・リンボが出ていて、此方にその情報が出ているタイミングであれば出てくる特殊会話、と言ったところでしょうか。

『そこまで気になるか、ですか？ ……その、なんと申しますか。かのリンボという術者の方……似ているのですよ。ただ、あそこまで悪辣だったかは、些かと自信が無いと申しますか』

懐かしさ、っていうか。多分同時代のお方だとは思いますが。あのゼンマイ。

式部さんは、一応、普通の文豪の英霊ではあるのですが……しかし、知っての通り、ただ物語を書き記す陰陽術を使えたりします。

それは、彼女が本物の『文豪』である事が理由であり。彼女は、物語を書くために行っていた取材の最中に出会った、本物の陰陽師である『安倍晴明』に弟子入りを行ったのです。物語で魔術を登場させるため、自分で魔術を使ってみるという筋金入りの『作家』魂が、彼女をそこまで邁進させたとの事。

んで、その関連で実は、キャスター・リンボと式部さんは一度出会っていて、面識があるのです。遙か昔の事ですし、その当人とは多少変わった部分もあるので、気が付

いていないのですが……まあそれは後の話でしようか。

『何かお役に立てるか、と思つたのですが……どうにも曖昧で申し訳ないです。え？
何処で会つたとか？ 宮中で一度程』

まあ曖昧でも何でも取り敢えず当面のヒントの獲得が急がれる感じですかね。敵勢力の一人の正体を炙り出す為にも必要な事です。オラッ！ もつと昔のお話語れッ！
隅々までねつとりお願いね♡ 日本書紀。

『……十二単とか来ていた頃？ あ、いえ、生前はずつとそのような服装だったの
で、別にその時ばかりではないのですけれども』

割と踏み込んだ会話ですよ。これって。式部さんにとつて宮中に入入りしていた頃
つて輝かしい日々でもありますが、しかし『源氏物語』を書くきっかけの出来事が起
きた時期でもあります。複雑な時期でもあります。

つまりそれを話してくれるくらい絆も上がつて来た、という事なのでしょう。

『綺麗なお着物、似合つてたんだらうな、ですか……うふふ。なんだかそう言つて頂ける
と、その頃の格好もしてみたくもありませんが』

『……でもすみません。今しばらくは、この姿で』

大切な思い出はあるとは思いますが。はい。式部さんにとつて、宮中に、というか
あのお方に仕えていた時代は。具体的なお名前は決して出してはいけない（氣遣い）

絆レベル十五行けば出してもええんじやないか？（遠き理想郷）

『源氏物語、ですか。はい、その頃に書いたものです……あの、もしかして、お読みになっていたりしますか？』

で、著書を読んでいるか読んでいないかの選択肢ですが。まあ会話イベントが発生した時点で好感度の上下は変わらるので気楽に『読んでいます』を選びましょう。教科書で一部読んだら気になってしまつて結局図書館まで行つて全部読んでしまった、割と学生諸君ではあるあるだと思います。

熱意をもつて『俺は源氏物語の正当な読者』だとアピールいたしましょう。

『あ、そうですね……読んでくださっているんですか……それは、何とも……嬉しいのですけれども、それ以上にこそばゆいと申しますか……えつと』

照れて顔隠しちゃう式部さんカワイイヤッター!! まあ源氏物語つて典型的なハーレムラブコメ物小説ですから……しかも半ば同人というか、あんまり広めるつもりで出した訳でも無いって言う。

そりゃあ『ファンです!!!』と熱意をもつて伝えられるところもなりますよねえ。じゃあなんでそれを口にしたのかつて？ こうなる式部さんが見たいからに決まつてるだろルオオ!!

『うう……私……喜んで宜しいのでしょうか……楽しんで読めた？ そ、それならまあ

著者として喜ぶべき……なのでしょうか。えっ？ 日記も？ ……えっ？』

因みに源氏物語よりも紫式部日記の方が読まれたら噴飯モノの模様。このゲームでは読んだ選択肢だと自動的に日記の方も読まれている事になるようですね。完全にフリーズしてて草も生えないんだ。

『……い、いえ、あの、えつと……違うんです。違うんですけれども……読まれているのは知っていましたけど……面と向かって言われてしまうのはその……シヨックが』

まあ自分の愚痴やらなにやら赤裸々に綴った日記やし……それがその次の世代の若い人達にガンガン読まれているともなれば、そりゃあエゲツないストレスで禿げたりもするというものですよ。

それに式部さんの場合は、とある人に関しての猛烈なデイスが書いてある日記でもあるので、心の内の暗い部分があつとりと文章の中に出ているんですね。これがネットタトゥーならぬ日記タトゥー。

『清少納言、とですか？ ああいえ、当世で想像されている様な、色々こう、お互いがお互いを意識し合つて罵り合つて、呪い合う……と言つたような険悪、という仲ではありませんでしたよ』

ですが、それはあくまで心の中の事。

清少納言と紫式部は、同年代のライバルライバルと煽られてはいるのですけれども、

活躍している時期が微妙に違うので、実際お互いに顔を突き合わせて会った事が無いというオチが付いてきます。

『——と言った感じですね。彼女とは。はい。言葉での殴り合いなんて本当になくて。歴史とはそんな感じで。存外と普通なものです。私は彼女とは結局互いに言葉を交わす事も無く——それでも気に入らなくて、同じくらいにどうしようもなく……』

『え？ あ、いいえ……何でもありません』

式部さんにとつてにとつては、清少納言という女性は遠くにあつた『めつちや複雑な気分で見える人』であつたのです。

まあ、清少納言に関しては、他にも彼女が思う所はあるのですが、それは恐らく別の機会になると思われます。

『つて、色々話してはいましたが、本筋から大分離れてしまいましたね。えつとそれ……その宮中に居た頃に、清明様と同じ、陰陽師として仕えていた方です。私が思い描いたのは』

で、今はキャスター・リンボの声を聴いて思い出した事。

『私は、法師様と呼んでいた方……芦屋道満様。どこか、その方とよく似ていた気がするのですが』

という事で、いよいよ出てきました。『芦屋道満』の名前。

敵方の参謀、キャスター・リンボ。そして彼女が口に出した陰陽師の蘆屋道満。
蘆屋道満と言えば、平安時代に活躍した陰陽師であり、彼女の師匠、安倍晴明のライ
バルと名高い男。

その二人の関係性や如何に（ネタバレ：同一人物）

第六十九章・裏：とある宮廷の二大才女 前編

「——こうやって式部さんの昔の話をキッチリ聞くのって、実は初めてですなあ」

「そう、でしたっけ？」

「うん。こう、普通に話す事は結構あったけど……やっぱりナイナイ」

マスターとはよく話していました。

本を借りる時など、どういった本が好きなのか等を饒舌に話していた覚えがありません。小説、専門書に、参考書。それに歴史書や、雑誌なども。それに私の唯一の著書の源氏物語に、著書……ではないですけども紫式部日記も読んでくださったと言つて下さったのは覚えていきます。

しかし意外にも、その流れで多少は話している、という事も無かつたよう。

「親しい人相手でも聞きにくい事だよ？ 過去つてさ。ましてや俺が勝手に呼び出して戦わせてる人に楽し気に過去を聞く……って、マナー違反でしょ」

「では、今マスターが私の過去について聞いてくださっているのは？」

「ええ？ だって、式部さんの方から振つてくれたから。そりやあまあ、これで耳を傾けたり、質問したりしないのはちょっと酷いでしょ。やっぱりダメだったたりした？」

「ふふつ。いいえ、そんな事ございません。昔日を懐かしむのも、やはり良いものですよ」

このきつかけとなった話は、懐かしむ、という感じではありませんでしたが。ただ敵方にいる何者かの話から、自分の過去について語る事になったというのは、些か奇妙な転がり方をしたとは思いますが。

まあ兎も角。そこからここまで。宮中でそのリンボと似た雰囲気の方と出会った事があるかもしれない、という話から、私にはどのような知り合いが居たのか、という話に繋がり……生前の事を思い返ししながら、話すには些か憚られることを除いて、つらつらと。

まあマスターに話せる事など限られてはいるので、口にするのは、侍女達との他愛のない会話だとか、後はちよつとした……それこそ宮中が震えるだとか、そういう事もない本当に、ちよつとした噂話で盛り上がった事とか。

後は……ある方との、関係、だとか。

「にしても、意外だったよ、清少納言とはクソほど仲が悪いってイメージあつたけど。意外とそうでもないんだね」

「そ、そのような事は……彼女とは、若干反り、と言うか、当世風に言えば『ノリ』が合わない部分がありましたけど……それでも、お互いを罵り合ったりは、全然ありません

でしたし。そもそも、出会う事も稀でしたので」

「えっ、そうなん？」

当世の方であれば、恐らくは気になるであろう事。本当に、嘗てどのように接していたのか……その程度であれば、別に話しても何ら問題はありません。本当に、彼女については憎み合つて、互いに会うたびに地獄のような空気になっていた、という事もありませんでしたので。というか、そんな顔を合わせる機会自体がありませんでした。

……正直、正直です。若干どころか、私としてはあの人を……当世風に言う『マジであり得ない!!』と思つていた節はあるので、その辺りを、こう、胸の内を大暴露するのは、些かと。今は、柔らかく、濁しておきたいです。

「……まあ、そんなキツイ性格じゃないしねえ式部さんは。じゃあなんでそんな噂がたったのやら。向こうが結構きつい性格だったとか？」

「恐らくは割とそうだと私は思っています」

「お、おう」

思わず食い気味に行つてしまったのは、その……永遠に独り相撲染みた事をしていた所為か色々と思う所は多かつたのではない。でも、マスターに一步後ずさられてしまったのは少しショックでした。そんなにかぶりつくようにしてたでしようか……

実際は、どうか。それは会つてみないと分からないですが彼女とまた会う機会がある

かと言えば。恐らくは、もう二度と無いので。出来るだけ、私の主観的な意見だという事を強めに言つたつもりですが……出来ていなかったかもしれない。

「つて……すみません。私ばかり話してしまつて」

「ははっ、いいや。式部さんの話、ずっと聞いてたいよ。というか、いつつも敵とバチバチやる事考えてたら……まあ、疲れるし。うん。息抜き息抜き」

「はあ」

「でもそつかあ。かの清少納言と紫式部は、実はそんなにライバルライバルしてなかったんだあ。歴史の真実、思わず驚愕」

「そもそも、私を、あの人は認識していたのかどうか……ええ、私も意識なんかしてません、はい。これっぽっちも」

「私はずうつとあの方に何とも言えない思いを向けていても。彼女がどうだったかはサツパリと分かりません。いえ、そもそも、私の事だつて知つていたのかどうか。」

「ああいえ……恐らく、名前だけは、知つていたとは思うのですが……それでも。」

「……でも、その割にはスゲエ苦い顔してるね式部さん」

「あう」

「つん、と額をマスターに突かれて。いつの間にか、そこに皺が寄つていた事に気が付きました。自分でも気が付かない内に。」

「話してる間にどんどん皴が寄ってくるの面白くって見てたけど、何？ 実は相当嫌いだったりする？」

「……嫌い、とかではなくて……いえ、本当に会った事も殆どなく、そういう事を考えた事も無くて……本当に……」

「ノリが合わなかったにしたってそれだけこんな皴寄るもんなんだ」

……やはり、どうしても意識してしまっているのは間違いありません。

正直な話。人伝で聞く話では。あまり、私は良い想像が出来ませんでした。傲慢で、誇りが強く、慎みがなくて、底意地の悪さが滲み出ているような……ただ、私が聞いた事柄で私が想像しているだけの主観の意見でも、生前のイメージはどうしても拭い去ることは出来ません。

しかし……それでも、彼女の『枕草子』を見た時の衝撃だけは、どうしても忘れることは出来なくて。

あの様に、宮廷内の出来事を楽しみに、面白おかしく書き綴った書物など、私は始めて見ました。そして活き活きと書かれた文から伝わる、彼女の思いは実に。実に、キラキラと輝いていたように、思えて。

「……」

「どんな顔よそれ」

「あつまたつ……す、すみません……」

「いや凄かったよ。梅干し食べたみたいになってたもん」

……ああ、本当に。

「……凄い人だとは思ったのです」

「ほーん？」

「でも……」

思い返してみれば。

私はずっと、ずっと。こんな風に、手の届かない彼女を睨みつけていたのだと思います。いえ向こうが上だとかそういう事ではなくて。

そういう事ではないのです。私の手が届かない、と言うのは。

……本当に、ライバルどころか私ばかりがこう、一人で色々と『キーツ!』としていた気がします。今みたいに。空回りしていた気がします。

凄くない訳が無いのです。でも、どう足掻いてもあの人の事を好きになれないのです。私ばかりが『手を決して伸ばせない』彼女の姿……

「うーん、良い顔してんねえ。本当に好きと嫌いがぐるぐるしてる」

「……好き、とかではない、のですけれど」

「そっかあ」

……マスターは、私の吐き出す、鬱屈した思いを聞いても、楽しそうに。先程言った通りに、私との会話を楽しんでくれていているようで。そんな、楽しめるような会話では、無いと思うのですけれども。

この、胸の中の如何ともしがたい感情は、まるで、昔日のその時の様に、いやに鮮やかに蘇って来て。でも、口にするには、あまりにも。形に、ならなくて。

「……どうしようもないよねえ。誰にも話せない、形に出来ないと、特に」
「つ、はい……とても、とても苦しくて……」

ちらり、とマスターの顔を覗き込みます。

まるで私の心を読んだかのような一言でした。

「チープな言い方だけど……『その気持ち、良く分かるんだ、俺も』」
「……そう、なのですか？」

「うん。好きと嫌いと、後……まあ色々な感情がごちゃ混ぜになって、ドロドロした汚い感情になって、でもその感情を言い表すことも出来なくて……嫌なモノだつて自分で分かっているのに」

マスターの一言一言に、私は一々ハッキリと、頷いてしまいます。本当に、私が思っていた事を、そのまま、丁寧に並べているかのようでした。

そうです。私は、紫式部日記で、彼女について、色々と書き綴りました。けれど、心

の奥底で渦巻いているのは、そんなものではないのです。もっと、もっと……それを、マスターは当たり前前のように言い当てる。

「——相手への負い目、っていうか罪の意識もあるから、余計に」

「っ!？」

「お、ドンピシャ？ やっぱりー」

そして。私が、その奥に潜ませていた……マスターには言った事の無い、それすらも。当然の様に。

「どうして……」

「式部さんの事情はサツパリと知らんけど、でも顔から何となく。ね。良く分かるって言ったでしょ？ 実は存外、近い部分もあるのかな、俺達」

そういつて、マスターは笑いました。

「……多分、その感情は一生消えないよねえ。今もこうやって思い出しちゃうし」
「はい」

「だから必死こいて向き合うしかない……苦しいけど。俺たちは『加害者』側だから。忘れずに踏ん張るしかない訳だ」

「っ……はい」

加害者。

そうです。私は……心の奥底で、彼女に『恨まれている』という思いを、持っていたのです。私は、彼女にとって加害者であるだろうと、と。

「でも。きつと式部さんは大丈夫だよ」

「え？」

そんな私の隣で、マスターは立ち上がって、此方を見下ろしたのです。とても。とても静かに、笑いながら。『貴方は大丈夫』と、言うのです。

私よりも全然若い筈のマスター。

物理的な長さでも。そしてその中に詰まった濃さも。普通に過ごしてきたマスターよりも、宮中で様々な人間の『業』を見て来た私の方が、ずっと……ずっと長いはずなのに。人生経験は、私の方が積んでいるはずなのに。

「少なくとも、『相手を凄い』って認められてる。そこはデカイ——俺みたく、認められもせずにグズグズしてるクソガキなんかより全然」

その言葉が……ただの気休めとは思えなかったのです。

第六十九章・裏：とある宮廷の二大才女 後編

私を見たその笑顔は、とても、透き通っていました。

間違いなく笑顔を形作っているのです。いかめしい顔を、ゆるりと崩しているのは間違ありません。寧ろ、それを笑顔と言わず何を笑顔と言うのでしょうか。けれど。

どうしてでしょう。私は……私は、笑っているように見えませんでした。笑顔なのにその中身はまるで別物。仮面を被っている、と言えればいいのでしょうか……いいえ、仮面と言うには、些かと『不自然さ』が足りません。

マスターは、自然と笑いを浮かべているのです。ですけど、それは純粋な『笑顔』ではありません。

人間は……感情そのままの表情を何時も浮かべているとは、必ずしも限りません。怒りが有頂天に達した結果、逆に無表情になる事もあれば。面白さに振り回されて苦しんでいる様に顔を顰める事もありますし。悲しみの極致に達した結果、涙を抑えようとしたり般若の如き形相になる事もあるでしょう。

「……なあ、式部さん」

「は、はい」

マスターの笑顔は、そのような感じでした。笑顔を浮かべているのに、その奥にある何かとは、明確に『種類』が違うのです。快活で、元気、ではありません。とても純粹でそして……儂くて、崩れやすい。そんな笑顔。

私は、硝子を思い起こしました。薄く、薄く、薄く……それこそ、あるかどうかも分からない様な、そこまで薄く削られた。一枚の硝子で作られた、仮面。

そして今、私から視線を逸らして、濃く濁った黒い夜空を見つめるその姿は。

船の上で感じた。海風に攫われそう。自ら海に飛び込んでしまう様な。あつと言う間に私の前から霞のようになって消え去ってしまう様な。あの時の姿を思い起こさせました。

「思うに、その『ぐるぐるした思い』って言うのは、悪い事ばかりじゃないんだ」

マスターはその直後、コレはあくまで俺の主観的な意見だけど、と付け加えて。私に向けて……まるで、子供に自分の思いを話す、親の様に、優しい声で。

「単純な話だけど、その人を『凄い』って思う感情と、『気に入らない』っていう感情は全然別の物で。そして『どちらかしか持っていない』っていう人よりも、デカイ」

「……思いの、大きさが、ですか？」

「正解。だってそりゃあそうだろう？ 一つの感情を百までもっているのと、二つの感情を百まで持っているのとじゃあ大きさは全然違う。単純倍だ」

クソデカ感情ってそういう事なんだろうなー、というマスターにそれはちよつと違うのではないでしょうか、と思ったりもしましたが……よくよく考えてみたら、確かにそうではあるのです。

そんな単純なモノじゃない。

この台詞は、当世の読み物に多く出てくる言葉でもあります。私もこれを取り乱しながら言う人が、一体どれだけの思いを抱いているのか、その先に続く彼らの次の言葉が気になってしまうのは間違いない。

しかし、物語の中で彼らが怒る理由はなんなのでしょう。思いが複雑だからそれを誇るのでしょうか。いいえ、きっとそうではありません。彼らは自分の思いの大きさがそう言った相手に負けているとは絶対に思っていないでしょう。

同じくらいに、例えば、好きだと思っていたり、憎んでいた……そして『ただそれだけじゃ足りない』から、そんな単純なモノじゃない、と言うのではないのでしょうか。二つの相反する感情で相手を思うことが出来ているなら、それをちゃんと自分の向いている方向に向けられたなら、『出力は単純に二倍』だ

「……感情が二つあるから」

「単純で、頭の悪い理屈だけだな」

確かに、この理屈は単純ですが。

「人間の思いのパワーは凄いつてのは、式部さんだつて知つてるだろう？」

「そ、それは……確かに」

とても……分かるのです。

私も、人の想いを綴り、そして書き上げて来た英雄であるのですから。人の想いは、正負関係なく、恐ろしい程の強い力を、体に満たす事を……私はよく知っています。

想い人に送る歌。仇敵を呪う言葉。政敵を睨む呪詛。親子の合間に生まれる確執。立場や派閥を越えた先に生まれる、そんな友情の力。

それらが生み出す力は、それこそ自分も他人も、活かすも殺すも、全てが自由自在。世界を滅ぼす様な強大な敵に屈さず、未だこうして歩みを進めるのも……思いの力である事は間違いありません。

けれど、それはただ想うだけでは、決して生かす事は出来ない事も、私は知っています。内に秘めて……ただただ、煮詰め続けるだけでは。

矛盾するようですが。

思いの力は、一度自分の外へと向けなければ……自分の内側に満ちる事はありませぬ。

「その思いを、外へ」

「うん。まあ俺が言わなくても、式部さんは知つてたと思うし、なんだつたら、もうその

思いを外に向けて、物凄いパワーを得てた……『紫式部日記』なんて言うのは、正に代
表格だと思うよ。今でも、多くの人が読む本である事は間違いない」

「……あの、それに関しては……あの……」

そして私も。彼女への鬱屈とした思いを……あの、向けました。外に。私の夫の事と
かも色々言われていたり、とか……それもありましたが。兎も角。ほんの、ほんの
ちよつとだけ、彼女への称賛も混ざっていましたが。けれど。主に負の感情が込められ
ていた気がします。

「だから、凄いんだよ。式部さんは、」

「……」

「自分の中にある、それよりも更に深い物があっても。それでも、片方の思いを外に向け
ることが出来た。本来なら、向き合う事だつて嫌なはずなのに。それでも……貴女は書
き上げたんだから」

「マスター……」

でも、それでも。マスターは凄いと云ってくれます。

こんな、うじうじとしていた私の事を。

それは……純粹に、嬉しくて。私の生きた国、その後進からの、真つすぐな誉め言葉
は。

とても、心に沁みます。

「後は……そうだなあ。式部さんのライバルかどうかは兎も角、まあ、同じくらい有名な清少納言さんも、サーヴァントになつてゐるかもしれないし」

「え——そう、ですね？」

「出会つたその時は、思いつきり言つてみたらどうかな。貴方が生前、言えなかつた……例えば『貴女の枕草子、凄かつたです。ファンになりました』とか？」

「えっ!？」

そして、そんな風にちよつと泣きそうになつていた私に、もつと凄い事をおつしやつてくれやがりました。

「ふあっ!?! ファンツ!?!」

「だつて。ファンでしょ。枕草子の」

「いいいいいいいいいえ! 確かに枕草子の冒頭の『春はあけぼの』の一節の衝撃だとか彼女の独特の感性によつて書かれた面白おかしい説話だとかそれは確かに見るべきところが沢山あつてえええ……で、でもでもなんというか知識をひけらかしている部分だとかもう明らかに『これ間違つてますよね』という解釈もあり、特に『私は日々輝いている』とひけらかしている様な説話も多く——」

「うん。そこまで読み込んでゐるならファンだね」

「~~~~~っ!」

……砕け散りました。マスターの真つすぐな視線が、私の何かを打ち砕きました。これ以上誤魔化しても、何の意味も無い気がしました。余計に墓穴を掘ってしまいう気も致しましたので、即座に白旗を上げました。

「……うう」

「くつくつくつ……まあまあ。作品のファンとしての感情と、個人の好き嫌いは別に区別できるし。それにそんな凄い思いがあるなら、やっぱりもつたない」

「……何がですかあ……」

そんな私を見て、マスターは……先ほどの笑顔とは違い、何時もと同じようにけらけらと笑っています。余程私の今の姿が滑稽なのでしょう。若干意地悪です。

けれど、マスターはさんざっぱら大口を上げて笑ってから。今度は優しく、私に向けて微笑みました。

「相手へのデイスだけを生前書いたなら、後は相手の凄い部分。作品に対してのファン魂でも何でも、もつと爆発させたら、パワーは二倍だ——相手への複雑な感情、向き合わなくちゃいけない事だって、決してマイナスになるだけじゃない。デカイプラスにもなる」

「背負わなくちゃいけないなら……背負うモノも力に変えられたら、一番いいよね」

「……」

その微笑と言葉には。一つの、彼が示してくれた答えがありました。

清少納言とは、複雑な関係でした。

一度も出会う事はなくとも、私は彼女の……大切な方を破滅に導いた一派の一人。直截な事はしていませんでしたし、私は自分が出来る事をしていたにすぎません。しかしそれは回りまわって……彼女を滅ぼした事に変わりはありません。

それは……彼女に対しての、私のしこりであった事は間違いありません。立場の違いや人伝で聞いた評判で一方的に醜い感情を向けているだとか、彼女の書いた枕草子への想いだとか。そう言ったものと混ざり合って、処理しきれない感情になっていて。

もしかしたら。彼女から恨まれている事は、変えようのない事なのかもしれません。でも——それでも。

「背負ったものも……力に変えられれば、確かに、一番いいですね」

「式部さんがどうするかは、俺がどうこう口を出せる事じゃないけどねー。もしそうだったら一番いいよね、ってだけだ」

「……いいえ。私は、マスターのサーヴァントですから。素直にそのアドバイスにも、従つてみようと思います」

もし、マスターの言う通り。この思いを、清少納言に向けてぶつけられて。私が先に

進むための力に出来たなら。

そんな理想の光景があるなら。

「ふーん……じゃあ、改めて聞かせてよ。清少納言とは、どんな感じだったの？」

「……はい。今まで行つた通り——と言つた感じですね。彼女とは」

「言葉での殴り合いなんて本当になくて。歴史とはそんな感じで。存外と普通なものです。私は彼女とは結局互いに言葉を交わす事も無く——それでも気に入らなくて、同じくらいにどうしようもなく……焦がれている処もあつて」

「もし、何時か奇跡的に出会えることがあつたら？」

「はい……正面から、ぶつけてみようと思います。私の、思いを」

目指してみようと思うのです。

お互いがサーヴァントとして出会うなんて。そして、この記憶を有している今、この時に出会う、なんて。そんな奇跡、滅多に起こらないかもしれないけれど。

それでも——何もせず、今までみたいに体の中で押し込めているだけ、よりも。ずつとまじだと思つたから。

目指さないで、何もしないよりもマシだと、思つたから。

彼女の恨みに怯えているよりは……良いと思つたから。

「うん。出来るといいね」

「はこ」

怖い、と思う部分はありません。

けれど。今はサーヴァント。本来得られない筈の第二の生だから。やれなかったことをやってみようと思う心が、上回りました。

それは……目の前の若い少年が、凄いと、言ってくれたからでしょうか。それとも、こうして話している間にも、既に思いの力は外に向いて、内に満ちていたのででしょうか。いずれにせよ。

こうしてマスターと話せて、とても良かった。良いマスターに巡り合えた幸運に感謝して。そして……マスターにも、感謝を。

「内に渦巻いてるモノを力に変える、か」

「……俺が出来てねえ、っていうのに。偉そうによ」

「はっ、ホント……馬鹿みてえだなあ」

第七十章

次の講義を聞く実況、はーじまーるよー

さて。式部さんとの会話も終えて、次ですよ。

いよいよ孔明先生が調べていた事のもう一つ……『あの塔について』ですよ。いったいどうやって調べたのかと聞いてみれば『魔術師らしく、地道にやったさ』との事ですよ。具体的なやり方を述べよ!!!

そんな事を言ってもつらつらどうやって調べて来たのか納得させるよりも、調べて来た結果をドン!! とした方が分かりやすいのでやらないとは思うんですけれども。

『——さて、講義を再開しよう。先程のマサカド式の巨大ヒュージゴーストについては作戦の詳細を詰める際、改めて解説を入れる。そして、あの塔についてだが。グレイ』

『は、はい』

『先に結論を言おう。アレは……君も知っている『ロンゴミニアド』。その模造品だ。別時代の君が持っているソレ、とかいう事も無い』

はい、という事でそっくりさんなだけでしたー、拍手ー……じゃなくて!! どうして似ているかを聞いてるんだよオ! そこを話せて言ってるんだ!!!

『アレが君が持つている『ソレ』に似ている理由についてだが……これに関してはサツパリと分らない』

『いや、ここまで引つ張つて分らなかつたのかい？ 義兄上、それは些かと……』

『まあいいだろう。似ている理由はこの際、取り敢えず捨て置いていい。気にするべきはアレの『役割』だ』

まあ当然ながら、アレがただのデカくて目立つモニュメントならそんな楽な事はありません。こんな可笑しな特異点の中で目立つだけ目立たせておいて『ただの飾りでした』とかそれはもう罪です。

という事で、エルメロイ二世は当然ながらその辺りを探り出してくれた模様で。流石、術式の解析に関しては魔術師の中でもトップクラスのロードだけはありますねえ!! 『アレは——殻だ。分かりやすく言えば』

『殻?』

『そうだ。中にある物を保存し、同時に外に見えないようにするための強固な外殻。あの巨大建造物が重要なのではない、中にある物を守るための装甲に過ぎない』

『その為だけにアレだけのデカブツを作ったと?』

『そうだ』

要するにただの城壁とか、装甲とか、そういう理由だと……どうしてあんな凝った形

の装甲なんて作る必要があるんですか（困惑）

『アレが魔術的な装置である可能性、神殿としての役割があるかどうか、更に言えばロンゴミニアドとしての機能を持っているかどうか……全部考えて調べてみたが、見事に全て空回り。結果として『アレはただただ頑丈なだけな外殻』という結論になった』

『あ、あんなに立派な形と、大ききなのに……』

『……ライネス、何を笑っている。ツッコまんど』

式部さんがそれを言うのと誤解しか招かないと思うんですけど（小並感） まあ美人さんで未亡人が立派な形と大ききとか、ギリギリ法律違反レベル。ライネスちゃんも笑うのも分からないでも無いです。それは兎も角。

そしてエルメロイ二世が説明してくれたところによれば。ただ単純に『硬い』と申してもその度合いは桁違い。計算上、対城宝具とて防ぎきれないほどの守りの力を誇るといいます。要するにエクスカリバーだって突破しきれないという。馬鹿かな？

『単純な『守り』という一点においては、最も苦しい難関だろう。我々の戦力では真正面から突破するのは、ほぼ不可能と言ってもいい硬さだ』

『——グレイのアレでもかい？ 偽物であるなら、本物に勝る道理は無い』

しかしながら此方にも切り札はあります。

そう、此方にも『ロンゴミニアド』はあるのです。カルデアの戦力を含めて尚、最高

火力かもしれない程の圧倒的な火力が。

相手のあの塔が、ロンゴミニアドを模したものであれば、あくまで偽物。本物に突破できない通りは無いはずなのです。

であればブツパでいいじゃないですか！ ええ!? 何がいけないんですか！ 諸葛孔明さんよお!!

『グレイの一撃であれば、可能性はある』

『だろう? それなら……』

『しかし、それでは手加減が利かない。あの中にある物は、破壊したら致命的なダメージになりかねないからな』

はえ? (困惑)

『……中にある物、ですか?』

『そうだ。ミズ・式部。場合によっては、そこにいる君のマスターにも致命の傷を負わせかねないものだ』

『——っ!?!』

いきなりこつちに飛び火してきて笑い話にもならなさそうなんですけれども。そんな馬鹿な、この特異点は今の所、ホモ君にとつてはただの歩んできた道のり(特異点)を再現してるっばい感じしかしてなかったというのに。これが此方のホモ禿に何の関係

があるというのですか!!

『ライネス。お前はカルデアと共にこの特異点を旅し……何か気が付かなかったか』

『気が付いた、というか。一種、露骨ではあつたな』

『その心は?』

『記憶の再現。カルデアチームも、その辺りは疑問に思っていた』

『——再現。そう。そこが重要だ。さて、この特異点は誰の記憶を再現したもののか?』

えっ? 誰とかあるんですか? 普通にカルデアのメンバーが進んできた色んな特異点を普通に真似しただけとかそういう事ではないんですか?

『誰かの、記憶を?』

『そうだ。ただカルデアの進んできた道を真似しただけならば。ここは『三つ』のエリアが乱立するエリアの筈だ。何故ならば、カルデアが突破し、攻略に成功した特異点は、まだ三つしかないのだから』

『……そう言えば』

『この特異点に至る前に、君達が降り立ったのはロンドン、と言うのは聞いている。だがそれは本当に一時の事。三つの特異点と並べるにしては、足りない。三つの特異点を再現する事に『意味がある』ならば、何れの特異点よりも、効果は薄い』

成程、ホモ君が第四特異点を放棄してこつちの特異点に来たのをこの様に解釈してく

るとは……よくできたゲームだ……さて、それは兎も角、確かにホモ君達が第四特異点に居たのは本当に短い時間ですし、彼らに霧の都ロンドンを元にしたエリアを見せても『えっそれが?』となるのが目に見えていますし。

『であれば。何故この世界は三つの特異点と似た形をしているのか。そしてなぜ、霧の都ロンドンの姿をも形どっているのか……動機から紐解くのは非常に難しかった』

『おや、義兄上ともあろう方が珍しい。得意のホワイダニツトはどこへいったのかな?』『お得意ではない。それしか手が無いだけだ……相手がどういいう人間であるのか分かれれば話も別なのだがな。流石に顔も知らない赤の他人ともなるとどうしようもない』

来た! ホワイダニツト来た! これで勝つる! ……えっ? ホワイダニツト使えないんですか? そんなー。

まあホワイダニツトなんてそれこそクローズドサークルの中が一番推測しやすい、本当に面と向かって容疑者とかからキツチリ話を聞かないと成立しないモノですし……こういう『犯人すらいない』って言う時には一番キツイという話。

『しかし、今回は動機ではない別のアプローチから、突破口を掴み取ることが出来た』
『その心は?』

『先ほども言ったが、『霧の都』はロンドンを模倣したエリア。君たちが一瞬しか見えないエリアで、与える印象も薄い……だからこそ気が付かなかったのだろう。一つ聞

いていいかライネス』

『なんだい?』

『お前はロンドン、本来の霧の都をよく知っていた筈だ。だというのに、キリングドールに襲われたお前は、暫くここから脱出できず……ルートを探っていた』

『……ああそうだと。全く、アレは非常に困った事態だったよ』

最初の方ですね。ライネスちゃんはキリングドールの群れに襲われてグレイちゃんと逸れて、再びの合流を図りつつ、ここからの脱出を狙っていた。とはいえ特異点なのでそこまで難しい事は無いと思うのですが。

『その時、どういう印象を得た』

『印象?』

『そうだ。ここから抜け出そうとルートを探っていたお前の印象を聞きたい』

『……言い方は悪いが、厄介ではあつたよ』

『ほう?』

『私には司馬懿殿が付いてくれていた。それなりに頼りになるブレーンが居て尚、グレイと一緒に脱出するのが遅れたのは、キリングドールのせいもあるが、もう一つ……まるでちぐはぐな状態だったからだ。街の姿が』

ライネスが語って曰く、『霧の都』は、まるで真つ当な形をしていなかった。本来そん

な繋がり方をしない、要するに『人が動くことを考えていない』道筋がたくさん存在したのだそう。

成程……知の英傑たる司馬懿殿が付いていてなお、その可笑しな町の形から、正しく抜けられるルートを探るのに骨が折れたと。

『ふむ。おおよそ正解ではあるか』

『とうとう？』

『ここは、他よりも造りが『雑』という事だよ。他は、特異点を再現している、似ていると評されるだけあって、造りはしつかりとしていたが……ここだけは違う。建物が乱立している所為か分かりにくい、まるで『パッチワーク』のようだ』

『まるで、『情報が足りない』まま、急いで仕上げたように』

ロード曰く。

ここを作った黒幕が、人理焼却の側についているのなら、もうちよつとこの霧の都も四つ目の特異点に似せようという努力をしただろう。他の三つも出来るだけ似せる様に作ったのだから。たった一つだけここまで雑に作る理由は、魔術的にもあまり存在しないのだそう。

『当たり前的事だが。雑に作った方が良い術式になる等、魔術の世界ではまずあり得ない。しつかりと作り込んだ方が力を発揮するのは万物共通だ』

『では……どうして』

『こうならざるを得ない理由があった。この特異点を作るのに、ある物を利用したから。では問いを返そうミズ・式部。一体、なんだと思うかね？』

『——それが、誰かの記憶……？』

『記憶、または記録というのは魔術の世界でも重要な力を持っている。君たちサーヴァントも、一種動いて触れて喋れる『記録』または『記憶』と言えない事も無いからね。そんな重要なファクターなら特異点の土台とするのにも問題は無い』

さらに言えば、記憶というのは個人の主観に寄る事もあるので、本当に僅かな記憶しかないと再現しきれないというのも十分にあり得るらしく。それが『霧の都』が雑に作られた説明にもなる、との事。

『そして、ここを構成するのに必要な条件は『三つの特異点を攻略し、なおかつ霧の都を雑に構築するだけの記憶を持った人物』……それに当てはまり、なおかつ、向こうからアプローチを受けていた人間が一人、存在する』

……紙の欠片とかそういう言えば拾わされてたねえ。

いかついハゲのキャラクターが一人ねえ、居たねえ。

『君だ。カルデアのマスター……君の記憶から、この特異点は形成されているのだ』

——と言ったところで今回はここまで。

ご視聴、ありがとうございました。

第七十章・裏：『記憶』の特異点 前編

『——あまり吹っ飛んだ見解、とは言い切れないね。ギリギリ筋は通ってる』

「と言うより、他に理路整然とこの状態を説明できる理由も何もないんだ。全てが完璧に仕上げられている訳でも無く、かといって雑に作っている訳でも無い……」

『どちらか、ならまだ分らないけど、その中間……微妙な所だ。あり得るのは『時間が無くて途中で切り上げた』とかだけ……』

「であるならば向こうから彼を引き入れた説明がつかない」

正直に言つて。びっくりしました。

「……こゝ、こゝこゝってホンゾウインさんの記憶の中、なんです。えつと……ホンゾウインさんの中に私が、居る、と？」

「うーんグレイちゃんその一言、ちよつと間違うとえらい事になるから気を付けてね」

「? はい」

「そう言うボケをするタイミングかい? 本当に……」

「俺にとつては割と死活問題。年頃の男子はそう言うネタに敏感なんだから男子高校生舐めんな……しかし、記憶をこんな形でなあ。スゲエな魔術」

いいえ。全く理解の外である、という事ではなくて。

記憶を形にする、なんていう技術は……拙も経験したことが、無い訳ではありません。師匠が若返ってしまった一件の時は、『想い出』の中に師匠たちは閉じ込められて……凄いい事になりました。無事に解決出来ましたが。

でも、アレはあくまで思い出を『上映』してそれを箱庭としていた、だけで。本当に記憶そのものを大きな舞台に変えてしまう、等と言う魔術は、拙も始めて聞きました。「それとそこの思春期。グレイで変な想像をしない様に」

「ギクウツ!」

だからこそ、気になる部分は幾らでもありません。拙とは全然別の部分を気にしている方もいらつしやる、ようですけれど。

「……おいおい、そんな青臭い想像する年かね、ブラックビアードとあろうものが」

「心はいつも少年ですしお寿司……まあそれは兎も角として。ここがそのなまっちらいマスターの記憶の上だとして、ボーイになーんの影響も出てないのはなんでです?」

……真面目なのか、不真面目なのか、やっぱり良く分かりません。でも、黒髭さんの言う事は確かにそうです。

記憶を上映して箱庭にする。そんな術式を使っていた魔術師の人も、相当にダメージを負っていたのを、私は覚えています。それよりも更に大規模な……こんな世界を作り

上げて、どうして彼には何の影響も無いのでしょうか。

「単純な話だ。この世界はあくまで『コピーされた記憶』を元に作られた特異点でしかない。彼は元データでしかなく、それをコピーした所で破損も何も起こりはしない」

師匠は、それをパソコンのデータに例えました。

元のデータがあつて。それをコピーして、ペーストして、二つに増やして。ペーストしたデータを壊した所で、元のデータには大きな影響を与えないのは至極当たり前のことである、と。

「だが、あの巨大な塔……アレだけが『この世界に於いての』本物の異物。記憶を元にして世界を作つて、その中心に据えられている。そして、紙片を回収することにその塔は姿を現していった……それが紙片の役割なのだと思う」

「役割？」

「紙片に触れる事で、アレは霧の中から現れた。だが、アレは姿を現していたのではなく、紙片に触れる事で、形作られていたのだろうか」

『……紙片の役割は、アレを構成する事だったのか!？』

「アレは……文字通り、カルデのマスターから直接回収した何かしら……恐らくは『記憶』で形成したのだろう。表面的な記憶を読み取って作ったこの世界とは、文字通り『繋がり』の深さが違う」

師匠は、紙片に触れればこの特異点が崩壊し、解決するように作られている……というのは、やはり一種の餌だったのだと言います。

紙片に触れさせると、特異点の中心……彼らが形成しなかった、巨大な塔が作られていく。そして最終的に、遂に塔は完成した。

師匠の推測では、ホンゾウインさんの、記憶を読み取る事だ。

「そこから更に推測すると……あの巨大な塔の中に封じられているのは……恐らく、君の心の中にある『とても重要なファクター』だと私は推測する——本造院康友」

——視線が一点に集中する。

全員が見ているその中で。

ホンゾウインさんは、じっとしたまま目を閉じて、そして——眉間に皺を寄せて、全ての視線を受け止めていました。

けれど、口をへの字に曲げて、足で地面をトントンと叩いて、肩をいからせて……という風に、不機嫌になつているといよりは。

体を縮こまらせて。ぎゅうと両方の手で互いを握りしめて。口をきゅう、と引き結んでいるその姿は。周りの視線にさらされて、居心地が悪くなつてい様な。それは、何処か見覚えがある様な……

「……」

「マスター？」

「心当たりは？」

一瞬。ホンゾウインさんは、ぴくり、と体を震わせて。少し長めに、息を吸い込んでから……ため息を吐きだしました。はあ、と大きく、まるで師匠に聞かせるように。それから、目を開いて顔を上げて、師匠を見ました。

「——意地悪な事を言うじゃない名探偵。もうアタリは付けてるんだろう？ ただの事実確認に、俺が否定した所でどうしようってんだ」

「名探偵ではない。だが……良く分かっているじゃないか、その通りだ」

「まったく性格の悪い。自分の頭の良さをひけらかしたいのかい？」

「そうではない。大体、その態度を見て心当たりがあるのか分からない訳が無いだろう」

「さいで……ああ、あるよ」

そして。ため息と同じくらい、体の奥から絞り出すように。彼は、その口から問いに對する答えを口にしました。か細くて、弱々しくて。今まで見て来た彼の、何処か飄々としている姿とは、まるで違う。

それは何処か……誰かに似ている様な、そんな。

師匠は、それに一つ頷いて。では、と言葉を続けます。

「君の感覚が良い。どの程度の確率で当たっているか、言ってみて欲しい」

「百パーセント」

「――！」

「安心しろ。俺の想像している物以外を見せてくるなら――向こうは文字通り無能だ。というか、俺だって見えてたんだから、分かるよ」

そして、その問いに、即座に。彼は答えました。

余りにも断定的で、そして迷いの見えない一言。でも、余りにもその声は弱々しくて震えていて――そして、何処か、自嘲気味に笑っています。

師匠も、一瞬驚いたように目を見開きましたが、それ以上に驚いているように見えるのは、式部さんでしょうか。

「そうか。君には自覚があったんだな。あの紙片に触れた時、『想い出』を見せられている、と」

そして、その師匠の言葉に反応したのは……

「……」

『……本造院くん、本当かい？』

カルデアから通信を送ってきている、ダ・ヴィンチさんでした。彼、あるいは彼女の声は、余りその声を聴きなれていない私でも分かるくらいには……『硬い』色がにじみ出ています。

「体に本当に影響は出てなかったのは本当。でも、アレが何をしていたのかが分かって話さなかったのは……悪い。それも本当だ」

『君ね。それは報告してくれないと——』

「……申し訳ない。でも正直、ここに来たのは偶発的なもんだし、直ぐに脱出しなきゃいけないかった。マジで大したことは無かったから、それでマスターとしての業務に支障が出るのもなあ、って思っ……」

カルデアの皆さんは、組織です。報告と連絡と相談、それが大切なのは、言わずもがなだと思います。それに……当然、心配していたのもあるのだと思います。

ダ・ヴィンチさんがそんな態度をしようのは……仕方ないと言いますか。

それを言われてしまうとホンゾウインさんも、流星にやつてはいけない事をした自覚はあるのでしょうか。少しばかり申し訳なさそうに頭をポリポリと指先で引っかいて。

「記憶を覗かれてる、とは思いつらなかつたけど。さっきのと合わせて、漸く相手の狙いに気が付いたんだ。悪い」

『本当に……それで、何が見えたんだい？ いや……どんな記憶を、向こうは覗いたんだい？』

「俺の……過去の記憶。カルデアに来る前の……それこそ、ギリギリ小学生に入るか入らないかとか……それくらいの記憶だなあ」

そう言いました。

『……』

「……うん。それだけ」

『えっ？ それだけ？』

第七十章・裏：『記憶』の特異点 後編

『……えっ？ それだけ？』

「うん。マジでそれだけ。本当にそれだけなのよ？」

特別に何かある訳ではない。と言いたげな表情で。

返ってきた言葉は……ダ・ヴィンチさんの声から、詰まっていた緊張がスルッと抜けてしまう位に、なんて事の無い、本当に拍子抜けしてしまう様なもので。思わず私達も、目を丸くしてしまいます。

何てことない。そう言われて本当に相手のやってきていることが『別になんてことも無い事』である事なんて、どれくらいあるだろう。私たちが戦っている相手は、私達を容赦なく襲う恐ろしい相手……なのに。

思い出した記憶が、例えば『トラウマ』だったり、そういう事でも無く。

「えっと、あの……本当に、幼い頃の記憶が？」

「そーそー。小っちゃい頃の、可愛がられてたころの記憶が。まあ幸せかっていうとちよいと分かんけれどもさ」

「あ、えっと、その」

「なんでしようなー、この、思いつきりホームラン予告でもしそうな勢いでバントぶちかまされたかのような……肩透かし感」

先ほどまでの張り詰めた空気は何処かへ行ってしまったています。ああ、ライネスさんがトリムさんを大きなクツション型にして『トリムマウは柔らかくてやさしいなー』とか言いながら溶けています。

『お、思い出を……ええ〜？　ちよ、ええ〜……う？　何それえ？』

「何それと言われても……いや、マジでさ。昔の……ホント、家族、それこそ妹とかと話していたような。そんな記憶というか」

『んー。ちよつと予想外過ぎるんだけど』

「でもまあ、俺にとつて大事な記憶ってのは間違いないし……」

ねえ？　とでも言いたげな、少し口の端を歪めた笑顔は、瞳はちよつと虚ろで、その若干投げやりな感じは、今の空気にとても合っています。

あああ……皆さんが、皆さんが何だか、とつてもやるせない感じになっています。先ほどまでのいい意味での緊張感も何処かへ吹っ飛んでしまいました。黒髭さんは漫画みたいにならずつけていますし、式部さんは……ジーンと、ジト目でホンゾウインさんの方を見えていますし。

この凄いい、生温いとも、冷えるとも言えない空気の中、師匠も、アレだけこう、なん

でしょう……シリアスな空気を作り上げていきなりのコレなのですから、それはもう……凄く微妙なお顔をされているのでは、と思つて。

「あ、あの……師匠……師匠？」

「——ふむ、そうかね。であれば……む？ どうしたかね？ レディ」
しかし。

誰もが気が抜けて、空気が抜けてしまったみたいなのその空気の中で……ただ一人だけ。師匠だけが、何事も無かつたかのようにその先を促そうと、いつも通りなままで。

寧ろ私の方を見て『どうしたのか？』と尋ねたそうにもしています。

「師匠は……驚かれないんですね」

「ああ、そうだな。別に『君にとつて重要なファクター』と言つただけで、何か特別に彼自身の価値観を変えるような大きな出来事とは言つていないからな」

……そう言われれば、そうです。師匠は重要なファクター、とは言いません。それが例えば、何かとても美しい景色だったり、とてもつらい経験だったり、と……：：～
言つた事は一切言つてません。

「限定的にシチュエーションを定めてしまうと寧ろそこから離れた時に此方の思惑とすれ違い、結果として正確に情報を把握できない可能性がある。こういう時は下手な事は言わないに限るという訳だ」

「えっ？ あ、えっと、確かに、そういうえば……そう、ですけど」

いえ、そう言われてしまうと確かにそうではあるのですけれども。それでもちよつと
いまいち……いいえ、全然納得しきれないのですけれども。納得しきれなくてアツドを
握りしめてしまうのですけれども。

「グレイ、グレイ、痛え、痛えって痛デデデデデ」

「むう……」

師匠にそんなつもりは無いのは分かってますし……師匠は賢いですからそういう言
い方こそが正しいと確信をもつてやっているものであつて、寧ろ混乱を招かない様に気を
付けていたのだとも、分かりますけれど。

「……まあ、加えて言うなら、だ。普通の青少年にとつては少年時代の思い出も大切な思
い出ではあるんだ。私やグレイの様に、誰も彼もが波乱万丈の人生を送っている訳では
ない」

「あ……」

でも、続けて師匠がいった異に手の力を緩めてしまいます。

こんな特異な状況下と言うのもあるとは思いますが、確かに、拙の基準は……ちよつ
とだけ人からズレていると言われても仕方ないです。

母と過ごした頃。墓守だった過去。師匠に拾われてからの生活……特に師匠に拾わ

れてからの人生は平穩ながら、色んな事が多くて。驚く事が多くて。そして、色んな楽しい経験もさせてもらって……

「彼にとつては重要な事がごく普通の、当たり前前の思い出だったりする……という事も当たり前前のようにあるだろう」

「——あ」

そして、もう一つ。

そうです。そうなのです。誰かから見てみれば、なんて事の無いごく当たり前前の景色でも。拙にとつては何よりも、大切な思い出一つである事なんて。それこそ……拙には、自分にもつたいたくないくらい美しい思い出である事なんて。

「……あります。拙にもいっぱい。師匠と過ごした生活も、そうです」

「——ありがとうございます、レディ」

だからこそ、ホンゾウインさんの大切なフアクター……記憶、思い出が、ごく当たり前前の景色である事は、決しておかしな事じゃない。そして同時に……

「そんな、大切な思い出を、利用するなんて……!」

「あ……グレイちゃん、あの、そんな、カッコしないで。怒る様なもんじゃないよ俺が覗かれたモンなんて——」

「いいえ! ちゃんと怒ります!」

「お、おう……ちよつとロード、お弟子ちゃんたきつけちや駄目だろ」

「そんな無粋な真似はしない。彼女の怒りは彼女だけのものだし、彼女の感情も彼女以外に手綱は握れんよ」

胸の内に沸いて来るのは……闘争心や、怒りに近いような、やる気です。

拙は、この思い出がとつても大切です。

先程までみたいに気を抜いてなんていられません。ホンゾウインさんの大切な、彼方の記憶を取り戻すために、頑張るのです!!

「ふんす！」

「……奪われた訳でもねえんだけどなあ」

「それは彼女に言っておいてあげてくれ」

「やる気へし折るのは良くないし……」

あれ？

どうして拙の方を見ながらお二人でひそひそ話を……？

「——」

「……なアロード」

「なんだね」

「おかしな質問をするが——俺は、傍から見ただけ『普通に見えた?』」

「まあ私でなければ欺けるくらいには、普通をしているとも」

「そつか……なら、いいや」

上手い事、誤魔化せてたなら。良かった。

今、外を見る余裕なんざ、殆ど、ないから。

「君のサーヴァントはそれでも無いらしいがね」

「——っ!」

「見ていたよ。君が上手い事誤魔化した辺りで……ずっと君の事を。良い相棒だ、君の事をよく見ているらしい。寧ろ、思いをつづる英雄だからこそ、君の事に気が付いたのかもしれないね」

ああ……俺の、俺みたいなやつ、ファーストサーヴァント。

優しい小説家さん。麗しい貴婦人。俺の、キャスター。式部さん。

慣れない説教染みた真似をしたからか。いや、そんな事しなくてもあの人なら気が付いていたかもしれない。誰よりも人の想いに寄り添う英雄、ある意味、俺が召喚したの

は運命だったのやもしれない。

あの人の前じゃ、隠し事は……いつまでもは出来ねえ。

「……出来ればギリギリの所まで、言わないでくれ、頼むよロード」

「言う積りも無い。そんな濡れネズミのようなザマの君を見て、これ以上の追い打ちは出来んよ」

「ありがてえ……」

何時かは、暴かれる事だろう。でも……せめて、せめてまだ。このぬるま湯の様に暖かいこの場所で。微睡んでいたいんだ。

第七十一章

ホモ君から出力された世界を散策するRPG実況、はーじまーるよー

あのデカイ塔の中にあるのは、よっぽど大事な部分——要するに、この特異点、ホモ君の記憶から出来たここに関する物凄い大切なものである可能性がある。そこをぶち抜く！今度こそホモ君が致命傷を受ける事になる——と。

まあ最悪の場合、ホモ君が悲しい事になるだけなので止まる必要は無いな！ ヨシ！
ヨシではない（反転攻勢）

このゲームはホモ君が死んだらゲームオーバーなんだよ!! フェニックスの羽も世界樹の葉も何処にも存在しねえんだ！ 分かるか!?! 分からないよなあ!?! 分かっているならホモ君を投げ捨てる真似はしねえよなあ!?! という事で、いつも通りホモ君の扱いが悪い実況ですが『鬼種の魔』で頑丈になってるからちよつとくらいならバレへんやろ。

『色々と言ったが、彼と深い部分で繋がっているとすれば……適当にあの外装諸共塔の中身を吹き飛ばしたりしようものなら、彼に反動が返つてきかねない、という事だ』
『この特異点の中心に聳え立つ『明らかに怪しい建造物』。それを調べようにもそう上手

くはいかないって事か』

『そういう事になる』

『……あの、そう言えば、なんですけど。普通に調べる、という訳にはいかないんでしょうか？ 皆様、ずっと塔を破壊する事にこだわっていらっしやるので……』

あつ（気づき）

そ、そーだよ。ホモ君が幾ら頑丈だつてそんな、真正面から打ち破るみたいなの、我々は蛮族ではないんですから、そりやあ……文明的にね？ 調べてね？ 塔をちゃんと調査して進入するっていうのが良いじゃないんですか？

いやー式部さん忠言ナイスウ!!

『まあ、普通に調べるだけの時間があればそうしたいのだがね。問題は、あのマサカド式のヒュージゴーストが、『人造』であるという点だ』

『アレだけの代物を『造れる』という点でも脅威だが……アレを倒した後で、更にお代わりが来ようものなら、そりやあ調査どころの話じゃない』

『あ……つ、追加で作って送り込まれたりしたら!？』

『そういう事だ。まあ時間を取ってじっくり調べられるなら、入り口を探す事も難しくは無いのだがね……それに、あのキリングドールも居る』

普通に切実な理由で出来なかつたのか……（困惑） そ、そりやあまあそうだよ。あ

んなもん造れるならそりゃあ次を造つてぶつけて来てでも不思議じゃないよね……で下手に時間をかけてじっくり調べている間に再び攻め寄せて来た第二陣に今度こそ押しつぶされかねない、と。

『今までの特異点では、結局の所『追加の戦力をどんどん送り込んでくる』っていう敵はいなかった。フランス、ローマ、オケアノス……全ての場所で、敵の数はある程度決まっていた訳だけど、今回はそうじゃない、つて事だね』

『どんなリソースがあるかは知らないが、キリングドール達は無限に湧いて来る。結局の所、あの塔へ侵入する為には、出来るだけ手っ取り早く、そして最速で進入する必要がある訳だ』

だから力で突破するしかない訳ですね（確信） そうするとあの塔と繋がっている可能性のあるホモ君が致命傷を負う事になると……アカンこのままじゃホモ君が○ぬう！ ホモ君が逝くねんこのままじゃ！

『余りにも面倒、且つ厄介な構造をしているねえ。この特異点モドキは。それじゃあ、あの塔の調査は一旦諦めてしまおう！ ……とやりたいけれども』

『アレだけデカイブツを、紙片を集めてここが崩壊するに連れて少しずつ形作つていったんだから。うん、まあそういう事だろうなあ』

『塔に来なければここから返さぬ』と向こうが言っているのが、言葉にせずとも伝わっ

て来る。この特異点……の様な隔離空間から脱出するのが最大の目標である以上は向こうのあからさまな誘いに乗らないという選択肢は無い訳だ』

『はえーすつごい分かりやすい畏ですコト……』

そして逃げられもしない、と。ダ・ヴィンチちゃん、ライネスちゃん、ロードの三人が揃って苦々しい顔をしております。黒髭もビツクリな露骨さ。

考えてみれば、紙片は何も書いていなくても、最後には塔に辿り着くように設置されたメッセージカードだった訳です。

触れば特異点が崩れていく紙の欠片、それに触れた事で少しずつ、霧の奥から現れて来た……エルメロイ氏の言葉を借りるなら、ホモ君の記憶を読み取って構成した巨大な塔を『うし、なんだから分かんし面倒だからスルーや!』はどんな間抜けでもできませんよねえ。普通は。

『そこに何が待っているのか分からなくても、かい?』

『それでも、だ。レオナルド・ダ・ヴィンチ。向こうは特異点を崩壊させる様な紙片をばら撒いている……向こうにここを維持しようという気はさらさらない』

『それに加えて。態々『分断して誘い込んだ』と言うのが肝……だろう? 義兄上?』

『ああ』

そしてロードとライネスちゃんのお言葉の意味が全く分からないんですけれども。

『どういふ事なんですか、ライネスさん、師匠』

『単純だよグレイ。殺したいのであれば、本来君たちが行く予定の第四特異点に戦力を集中させて潰す方が効率がいい。態々こんな空間を作つてまで、別々に分断した意味は何処にあるのか』

『少なくとも、殺すのではない……紙片の事を考えると『この空間を攻略させる』のが目的である事は間違いない訳だ』

ロード曰く。

カルデアの目的を考えれば、ここで大人しく待機したり、ここからいったん撤退するとかそういう方策ではなく『取り敢えずここを解決して合流する』という方向に舵を切るのは相手から想像しやすいらしく。

『じゃあもう、我々は相手の狙い通りに大分動いているってコトかな?』

『そういう事になる。それなら、いつそ最後まで相手の思惑に乗つていくところまで行つてしまう方がいい……ここで下手に相手の思惑から外れれば、それこそ本気で『排除』に動いてくるかもしれん。そこで、初めに戻つてくる訳だ』

まあ、要するに。

結局は時間をあんまりかけられない状態で、素早く、未だ入り方も分からない鉄壁の塔を出来るだけ早めに突破して内部へ入り込まなければならぬという。はえークソ

みたいな状況ですわねえ！

まあ、アレだ……でも三人もね、軍師が居るから。その為の頭？ 後その為の叡智？

知恵！ 知啓！ 知識！ って感じで（TTT） 何とかしてクレメンス。

『そ、それで……何とかならないんでしようか』

『ふむ。『現状は』アレを破れるだけの火力がグレイの『切り札』だけなのは、先ず間違いないだろう』

『……』

諦めないで！ 沈黙なさらなくて、もうちよつとだけ言葉を尽くして式部さん！ 頑

張って!!（必死） 張り切って!!（懇願） ダーリンではないけれどプリーズ！（平成ミ-

ム）

ああでもダメそう……分かってる、カルデアの（オリ主）マスターってこういうもんだから……藤丸君以上に酷使されて当然ってところあるから……

おかしいな、藤丸君と一緒にロンドンの霧に巻き込まれてお亡くなりになってしまったとか笑い話にもなりませんからその代わりにこの特異点に来たはずだったのに……どうしてこつちでも命がけになってるんでしょうか。特異点で命がけじゃなかったことが無いだとう……？ それはそう（瞬間的納得）

『——とはいえ、一応、その辺りをサポートするだけのプランが無い訳ではない。流石に

致命傷を負わせるのを覚悟で作戦を執行する程、考えなしではない』

えっ……それってさあ……カルデアのオリ主、でも、優しく扱ってもらえる……って、
コト……!!? わ、ア……! (感涙) やっぱ誰にでも厳しく優しいエルメロイ教室の名物
講師は最高やな!!

『いやはや、その辺りは流石神経質なまでに考えているな、義兄上。』

『正直、策とも呼べない力技にも程があるやり方ではあるがね……その辺りは、後で改めて説明するので今は置いておく——さて、一通りの説明が終わった所で、まとめに入るとしよう』

そしてそんな名物講師の講義のまとめでございます。

此度の特異点、最後のエリア。霧の都での主な脅威は、無限のキリングドールと、そしてそいつらに気を取られてきたら襲って来る超巨大ゴースト。相対する此方をあつという間に呪殺する程のパワーを誇るバケモノ。

それをどうにかするには、その力を借りるに限る。という事で、相手の呪う力を逆に相手にぶつけてやる作戦で行く事になりました。

そしてそのゴースト達を潜り抜けた先にあるのは……巨大な塔、ホモ君の記憶を利用して作り上げられたというそこは、エルメロイ氏の現地調査ですら強固な『殻』であるという事以外は分からない程に堅牢。

ここを攻略する様に相手にお膳立てされ、力づくでの突破はギリギリ可能。ただし下手に壊せばホモ君に大ダメージ。うーん突破して欲しいのかしてほしくないのかはつきりしろ（半ギレ）

とはいえ、そこを何とかするための策もロードは準備している、との事です。

『それを踏まえてプランは単純な物にした。キリングドールの群れの一旦の殲滅。及び次のキリングドールの群れが補充されるまでにヒュージゴーストの撃破。そしてその一瞬を突いての塔の破壊……リソースを全て費やしての電撃作戦だ』

『作戦、と言うより説明したタスクを順にこなしているだけだけど……まあ確かに、シンブルで分かりやすい。良いんじゃないかな？』

という事で今回はここまで。次回は……いよいよ、霧の都、攻略作戦です。

第七十一章・裏：カルデアの大人達

「——さて、と……あーきつつい……幾ら天才でも、殆ど眠らずにぶっ続けてサポートするのはきついなあ」

だが、存在証明だけは出来ているだけマシと考えるべきか。恐るべきはカルデアのカバー能力。特異点から特異点へのワープとかいうバカみたいな例外off例外でも何とかなっているのだから、設備は文字通りトップクラスだと言えるだろう。

まあ設備だけではなく、ここにいる人員は皆、間違いなく人理を守る防人、スーパーエリートたちばかりではあるが。

まあ、ただのエリートではなく、間違いなく社畜根性のエリートだとはダ・ヴィンチも思うけれども。

そうじゃなければ二十四時間戦えますかが基礎理念みたいなこのカルデアで、二人のマスターの十全なサポートなんて出来やしない。そして……サポートを継続するその限界ギリギリ、誰が先に倒れるかの瀬戸際を探りあうみたいなチキンレースみたいな環境をまだ何とか維持できているのは。

「お疲れレオナルド」

「いやー、結構疲れたよロマニく……こおいコーヒーおくれえ」

「いやダメだよ。君この泥水飲むの何杯目なんだい？」

「自分の作ったコーヒーを泥水と呼ぶその自虐はなんかのジョークかい？」

「そんなわけないだろ……もうほぼ練り物みたいで、カフェインもクソも無い苦さだけ追求したコーヒーモドキを作らされるこっちの気分にもなってくれ」

「はっはっはっ。サーヴァントにカフェインはあんまり意味ないからねえ」

医療部門のトップに君臨する、ロマニによる細かいケアもあつての事だろう。藤丸をサポートしつつ、此方、本造院の体の調子のチェックも欠かさない。こういう実にマメな所は、ダ・ヴィンチにとってロマニの素直に尊敬できる部分だ。

「苦味で無理矢理目を覚ますのが一番いいんだよ。サーヴァントにはね——という事で、強烈なのを一杯！」

「だから駄目だつて言ってるだろ。泥水はもう売り切れです」

「えー……泥水が売り切れるってどれだけの物資不足？」

「泥水は比喻だろ！ 全く……さつき向こうでも一旦次の作戦まではお休みになったんだろ？ 幾らサーヴァントだからって、精神的な疲れは溜まるんだから。君が今、呑むべきは……コレ！」

そんな男がダ・ヴィンチの目の前に叩きつけた（比喻）おすすめの飲み物は……黒と

は正反対の真つ白な、仄かに湯気の漂う——ホットミルクである。

「うわあ、舌に優しい飲み物だこと」

「これ飲んで、一旦気を緩める！ 張り詰めたままだと、万が一切れた時が一番危ないんだ。いざつて言うときに気を張れるように、ね？」

その言葉は真理だと思ふ。

ダ・ヴィンチは、ボルジアで軍事に携わつた事もある。

ある将から話を聞いたのだが。あんまりに気を張り過ぎて、限界寸前になつてしまつた挙句、一瞬でも気を失つたその後の兵士は、今までの訓練が嘘の様に動きが稚拙になるのだという。

本当に賢い将は、例え相手と睨み合いをしている最前線だとしても、兵士にほんのわずかでも休ませる時間を取らせる。気を緩めて張り直すだけの時間を与える——そうではなくては、戦いにはならず、ただ只管に兵をすり潰すだけの結果になりかねない。

「……はあ。なんだか、小さい頃を思い出すなあ」

「君、小さい頃牛乳なんか飲んでたのかい？」

「暖かい白湯なんかを呑んでたさ。ああいうホツとした時の感覚を思い出すと、どうしても気が緩む。君の狙い通りにね」

「それなら良かった。きちんと仕事を」

……目の前の彼がそれを行えているか——特に自分に対しては——そこに関しては
敢えて言わないでおく。言っても聞く男ではないし。無粋だと思ったから。それは兎
も角。

自分は、カルデアの数少ない兵であり、将でもある。そんな自分がいざという時、そ
んな状態になろうものなら目も当てられない。流星にダ・ヴィンチもその辺りを弁えて
いない訳ではない。

とはいえ、流星に本当によだれ垂らしてだらけ切るのは些か以上にマズい……ので、
一つ確認したい事があった。

「ロマニ、君って精神科とかそう言う方面は納めているかい？」

「いやなんだい唐突に……まあカルデアの医療のトップだからね。一通りは納めてると
は自負してるけど」

「そうか。じゃあ……」

ダ・ヴィンチがロマニに対して手渡したのは——カルテだった。

「……これは……本造院君の？」

「さつき、急ぎで印刷して貰った。合計で三枚。確認してもらえるかな？」

「……分かった」

一枚目。真剣に、隅から隅までキツチリと視線が動く。決して素早くはないが、确实

に読み進める。才人ではないが、真面目な彼らしい表情だ。

終わって二枚目。表情が変わったのが見て取れた。驚きか、それとも……今度は一枚目以上に、彼の目がカルテの上をくまなく見渡す。

そして最後、三枚目。最早驚きの表情は鳴りを潜め、険しい皺が彼の中の『危機感』を如実に表していた。一、二枚目に一瞬目を向けてから、三枚目に即座に戻る。それは確認の作業だった。

最後に……顔を上げたロマニは、唇を固く引き結んで此方を睨むような険しい顔になってしまっている。

「——レオナルド、コレは……どういうデータなんだい？」

「彼のデータだ」

「そういう意味じゃない。三つとも、多少の違いはあれど、『似たような反応』をしているんだ。それも……明らかに『異常を示している』ものばかりだ。それも、病気とかそういう類の物じゃないし、呪詛に犯されているものでもない」

その辺りまで理解できたなら話は早い——ダ・ヴィンチは、少しホットミルクを口に含んで、喉を湿らせてから……口を開いた。

「例の三つの紙片に触れた時の反応だ。そのどれもね」

「……本造院君が、『昔の記憶を思い出させてきた』と言っていた、という？」

「そう。彼は上手い事誤魔化したつもりなんだろうけど……こっちはずっとバイタルをチエックしてるからね。とはいえ、あんまりにも振れ幅が小さいから、分かりにくいのは間違いないけれど」

専門家が見れば、その僅かな違いであっても一目瞭然なのである。現にロマニは、本造院のデータを見て、一発でその異常を指摘して見せた。そして、ここで問題になつて
いるのは……

「君は把握してなかったのかい？」

「本造院と藤丸君が分断されて、緊急事態だったからね。観測体制を整えるだけで精いっぱいだった……で、ひと段落付いたから、君もその辺りを指摘したんだろう？」

「まあ一回目が明確に異常だったことだけは分かっていたけど……その後、体に影響がない、緊急性は低い、と判断されて多少のバイタルの変化があっても見逃されてきた」

しかし、他ならぬ彼本人が口にした証言が、寧ろその見逃されてきた『二回目』と『三回目』に目を向けさせたのだから、やはり迂闊な嘘は吐けないと、改めて認識させられてしまう。

「単刀直入に聞く。それ。かつての郷愁に浸っているような精神状態に見えるかい？」

ドクター・ロマニ

「——NOだ。明らかに、トラウマを思い出して苦しんでいる時のバイタルだよ、これは」

「……そう、か」

予感があった。

本造院康友、という少年について、ダ・ヴィンチは疑いを持っている。

それは……決して彼を『不穏分子』だとかそう思っているという事ではなく。寧ろ特異点解決に誰よりも……それこそ『体を張って』突っ込む彼を見ていれば、そんな事は思えないのが、人情というモノだ。

だが逆に、その体を張る様子は、まるで『自殺』でもしようと思う程に、苛烈過ぎて。ダ・ヴィンチに『どうしてそこまでするのか』という疑問を抱かせている。

「ロマニ。私は天才だ」

「うん」

「故に……疑問に思ってしまったえば、想像せずにはいられない」

「何をだい？」

「自分を破滅させるが如く、『突如芽生えた』筈の能力を使い『特異点解決の為に命を懸ける』、少年の過去に何があったのか？」

——彼が見た景色、紙片に『見せられた』景色、心乱された景色。

答えはきつとそこにあるのだ。

『トラウマ』を見たかのような反応に。

まるで……悪い事をした子供の様に、必死にそれを隠そうとする、本造院康友のその、何処か『幼い』姿に。

「……あの塔に何があるか……何があっても、ロマニ、君には彼を支えて欲しい」「当然だ。僕らは……彼ら二人を地獄の如き最前線に送ってるんだ。こんなろくでなしで支えになるなら、なんだつてするとも」

このカルデアの懐は、存外と深い。

それこそ、ここの創設者であるマリスビリーからして『ロクでもない』人間であつた。特異点を本来攻略するはずだつたAチームのベリル・ガットは、腹に一物どころか、真つ黒でしかない人間だつた。

如何に、根が深い『闇』がそこに広がっていようとも。

カルデアの『大人』二人は、それを受け入れ——そして、もう一人のマスターと同じように日常に返す。

その覚悟は、とつづくに出来ているのである。

第七十二章

雑魚を蹴散らす実況、はーじまーるよー

なお雑魚は雑魚でも数がめっちゃ揃っており、厄介この上ない模様……という事であくる日、いよいよ攻略作戦開始です。ここまで……長かった……しかし到達してしまえば後は蹴散らすだけ。

さて作戦の第一段階、只管にキリングドールの姿をサーチ&デストロイしながら前進し数を減らし……次の作戦を遂行する為の時間を作る。作戦であり、次の作戦への下準備でもあります。ここで数を減らせば減らす程、後の時間が確保できるのでキツチリと敵を踏みつぶしてまいりましょう。

相手のキリングドールは全員アサシン、シナリオ上では数が多く苦戦していましたが。ゲームともなれば式部さんのカモ！ なんだったらゴルゴーンさんと言う超最大火力が此方にいる以上、イージーゲームです！

『さあて、一気に蹴散らすうじやないか！』

『ええいそう簡単に行くか！ 短時間で一気に削り切らないと時間を稼ぐことすらできないのだ、余り手間取るようなら撤退も視野に入れておけ——グレイ、すまないが前を抑

えてくれ、一気に数を焼き払う！」

『はい師匠！』

という事で、ライネスチーム達による開戦の号令に合わせ、進軍開始！ 最終的な目的地は、あの中心に聳え立つデカブツの麓ですので、あんまり飛ばし過ぎない様に行きましょう、ホモ君（肉盾）の投入タイミングはよく考えて行いましょう。

さて、画面後ろで雑魚敵を狩り殺すだけではあんまりにもちよつと……面白みがないのでまあ今は、ちよつと現状のホモ君についてでもお話を……えっ？ もうほぼ壊滅寸前なんです？ ちよつとキリングドール君弱すぎんよー。ストーリー上ではそこそこの強敵みたいな扱いしてあげてるんだからさあ……もうちよつと頑張つてどうぞ（呆れ）

まあとはいえ、孔明師匠が定期的に『火刑だ！』『罨だ』『グレイ、援護する！』だの言いながらダメージやらバフやらかけてくださっているのでダメージはさらに加速する訳でそりやあもう、瞬殺とは言いませんが、秒殺ですよ（類義語）

『——良し、これだけ数を減らせば、流石に即座に沸いて出てくることも無いだろう。後はあの……巨大ゴーストだ！ 早速来たぞ！』

しかしこれだけ倒して漸く次の作戦への布石が出来ただけという。流石は特異点、一筋縄ではいきません。白い霧の中を突き進み、そして此方に一直線に向かつてくる影。

寧ろ自分が周りの霧を、更にどす黒く染め上げて、一直線に突撃してくるその姿は、強大な怨霊の風格を纏っておりませう。

来ました超巨大、マサカド式ヒュージゴースト！

アレを撃破して、塔に侵入する準備を整えるのが、この作戦の第二段階。そして最後には塔を突破するのです。

『相も変わらずちよつとした神霊レベルだなあ……』

『まあアレとマトモに戦うのはシヤレにもならない。という事で、出来るだけの『呪詛対策』は出来ている……。困役は任せたぞ。カルデアのマスター』

で、アレと戦うのは……ハイ、当然、ホモ君でございます。ホモを追っかけてくるホモを釣るんですからハゲがケツを愉快に振るのが一番だと思われませう、それを最も効果的だと思われるので。

そう！ ホモ君が単騎です……。だと思ったか！？

『大丈夫です。拙が守ります！』

グレイちゃんが一緒に来てくださいませ。師匠が来てくれるから、グレイちゃんが恐ろしい程に元気に、逞しくなっています。ロード・エルメロイ二世の事件簿において、割としっかりとして強い子な部分を見せてもいるんですけれども、漸くその部分も見えてくる気がします。

数々の難事件をロード共に解決して来た本編モードのグレイちゃんが護衛についているのであれば、大分安心はできると思います。

んで？ その後ろの大量の人形は何だい？

『ふふ、紙片に対して使った『身代わり人形』作戦をそのままスライド、仕事は上々だとも……ぶち壊した人形達の残骸でもう作成は完了した！』

『速攻でそれを作るだけの設計しなおしたのは私なんだけどなあ〜』

『流石は万能の天才レオナルド・ダ・ヴィンチ。お見事！』

あ、成程。紙片の時にはあんまり役に立たなかった身代わり人形君！ 成程、アレもちゃんもこうやって改めて役に立つてくれる訳だ！

それにしても大量の人形が山のように積まれているその光景は、若干どころではなく不気味ですが……しかしこれだけの数があれば多少呪われても大丈夫でしょう。

量産体制をここまで整えられちゃうダ・ヴィンチちゃんは凄いなー憧れちゃうなー。

『とはいえ、コレだけ数があっても、あんまり時間は稼げないと思われる。基本的には一瞬相対して足止め、その後、即時離脱して逃げるって感じで。ヒット&アウェイならぬヒット&ラン作戦だ！』

ヒュージゴースト君はまともに相手するのではなく、ホモ君が生き残れば、自動的に勝ちが確定。逆に言えばホモ君が時間を稼げずやられてしまうと皆纏めて呪われて

ゲームオーバー……責任が重大!!! (クソデカボイス)

『グレイ、ゴースト相手の戦いは君が一番よく知っているはず。逃走経路は落ち着いて冷静に選びたまえ——怖いかもしれない。それでも大丈夫だ、君なら出来る』

『——はい、師匠!』

でも、亡霊ニガテのグレイちゃんが、その恐怖を振り払って頑張ろうと奮起するを見せられてしまうと……責任重大とか弱音吐いてる場合じゃねえよなあ!? ロードと一緒にいるとグレイちゃんはホント強くなる。

さて、ここからはホモ君とグレイちゃんの二人——かと思いきや、ストーリー上では役目の無いゴルゴーンさんも一緒です。アレ? 火力出す役割が二人もこっちに來てるんですけれども、それは……

ま、まあ向こうはあくまで呪詛返し of 準備が主力なんで、火力は特別必要ではないのは間違いないですけれども……まあ万が一邪魔が入ったりした場合は、黒髭君に全てを託しましょう。そうならない様にキリングドール達をとにかく徹底的に焼き払った訳なのですけれども。

『よし、二人とも頑張ってくれたまえ! けれど決して無茶はしない事! 何事にも適度に! ヒュージゴースト撃退作戦、開始だ!』

ウツスお願いしまーす。

さて。ヒュージゴーストを引き付ける……この作戦は、実行するだけなら簡単です。ホモ君が逃げる方向を探知して、的確に追いかけてくるので。

自分の首を探し回ってるんですよ。首じゃないけど。ハゲだけど、追いかけてるの。とはいえ、それを完遂するのは難しいですよ。なんてつつたつてヒュージゴーストがドンドコ呪詛を放ちながら、此方が逃げる足よりも速く、此方を追いかけてくるのです。そのまま逃げるだけなら、普通にホモ君も終わりです終わり。

彼が放ってくる呪詛の影響を最小限にしながら、逃げ切るにはどうすれば良いのか。

『アツド、お願い……！』

『ヒヤアツハア!! こりゃあ喰い切れるか分からねえ特盛だア、なあグレイ!』

単純明快。

グレイちゃんが殴る! ダメージを与える! ヒュージゴーストが足を止める! その間にホモ君が必死こいて逃げる!! これだけ。

グレイちゃんには護衛ですが、同時に迎撃する為の移動砲台でもあります。彼女が呪詛の範囲外から仕掛ける攻撃で、ヒュージゴーストが若干怯んでいる隙に出来る限り逃げる。

因みに逃げるペースは一応操作可能、というかコマンド群が逃走やら休むやらペースアップやらに置き換わっているだけで、基本は同じです。此方のHPを上手に削りつ

つ、捕まらない様にそれぞれのコマンドを操作して逃げるのです。

休みすぎると向こうから『呪詛』の状態異常を付与されます。じわじわ此方の体力を削ってくるので、余計に逃走が難しくなります。とはいえ、何回かは例の人形の身代わりで何とかできますが、それでも食らわれない様にするのが一番ですね。

『聞こえるかい、もうちよつとで予定の時間だ。キツイだろうが、もうちよつとだけ頑張りましたまえ！』

そしてここでホモ君に入るダ・ヴィンチちゃんからの通信。

よーし、じゃあお兄さん全力で逃げ切っちゃうぞー……ここまで覚醒を切らなかつたのは当然、覚醒すれば逃走にもバフがかけられるからです。しかし、マジで短時間しか持たないブーストなので、こういう大詰めの中で使って確実に逃げ切るのが良いですね。

とはいえ、出し渋ったお陰で綺麗に身代わりは使い切ってしまったので、切るしかないというのが正しいですが。

さて。この特異点攻略もいよいよ大詰め。

ロードとライネスちゃんの呪詛返しの際に期待しましょう……後、ロードの言う『塔』に関しての対策を。ホモ君の命がかかってますからね（震え声）

第七十二章・裏：対霊戦線

霧の都に響く……悲鳴の様にも、怒号の様にも聞こえる声。そして何れにしてもその標的は、拙達二人、というより、隣のホンゾウインさんなのですけれども。

建物の上から見える黒い影は、灰色の街並みを、真つすぐに突っ切つて此方に向かつて来ています。建物を丸ごと無視するその動きは、普通であれば不可能な動き、肉体の無いゴーストならではの動きです。

「ひえー……俺、これからアレの追跡を躲しながら逃げ切るのかよー」

「物凄い一直線にこっちに向かってきますね」

「竜巻がこっちに突っ込んで来てるみたいなんだけど」

「実質そんな感じだと思えます。あの大ききの亡霊、だと」

しかし、彼らは物をすり抜けられても、そこから辺りにある家や地面にも、物理的に干渉できない訳ではなく。その呪詛に満ち溢れた腕を振り回せば、我々を檻褸布の様に引き裂く事も容易いです。

とはいえ……そんな暴力よりも、恐ろしいのはあの亡霊が放つ、人を容易く呪い、そして命を奪う、呪詛なのですけれども。

「ひええ……マジで視線が合っただけで寒気がすんなあオイ」

「だ、駄目ですよそんな事したら！ 亡霊というのは見るだけでも悪影響があつたりするんですから！」

「その言い方だと全部じゃないんだらうけど、あいつは見るだけでもアウト勢つて事か」
「そう、ですね」

……今言った通り、見ただけでも亡霊の放つ呪詛は人を犯してくる事はあります。

亡霊がどうして恐れられているのか。彼らは、触れずして、寧ろ近寄らずとも、どんなやり方でも人を呪う事が出来る、その『なんでもあり』な部分が、最も恐れられると思います。

あの巨大なゴーストは、そう言っても不思議じゃない程に、強烈な呪詛を纏っている。念には念を入れた方が良いと思いますが。

「……そんな化け物相手に、いくら備えをして貰つてるにしたって無茶だよなあ、こつちを真つすぐ狙つて突つ込んでくる災害から一人で逃げ切るとか、自分で了承しておいてなんだけども」

「——ククク、良いではないか。昔の勇士とやらは自ら災害にも等しい試練に命を懸けて挑んでいた、英雄に至るためにな。貴様も英雄に成れるやもしれんぞ？」

「いやー英雄とかガラじゃないですし……」

「あの、そもそも突っ込んだんじゃダメですよ」

今からホンゾウインさんにはたった一人であれから逃げてもらうのを考えると、その言葉が余りにも、薄っぺらい心配には聞こえなくもないです……けど、決してただ一人で逃げてもらう訳ではありません。その為の、拙と——ゴルゴーンさんです。

「つと、ここら辺で良いかな。十分離れたし、そんじやまお二人さん……後は任せませ」
「はい……十分に気を付けてください」

「ふん、まあ精々死なぬように生き残れよ」

「あいあい。んじやまあ——行ってくる」

走り出すその背中を暫し見つめてから……振り返ります。巨大なゴーストが、やはりホンゾウインさんの走り去って言った方向に、向かっているのが屋根の向こうから見えました。我々の役目は彼に追いつくまでの時間を、少しでも稼ぐこと。

「ゴルゴーンさん、屋根の上にお願います」

「フン……」

先ずは、ゴルゴーンさんのお体に乗せてもらってから、屋根の上に飛び乗って、どこからでも長距離から射撃が出来るようにします。敵からの呪詛が届かない様な位置……正直に言えば、どれだけ離れていても届く時は届きますが……それでも、無いよりは有った方が良いので。

弓による射撃。矢は既にライネスさんや師匠たちが用意してくださったものを持ってきています。対霊の為の細工が施されている特製の何本か。拙は弓の名手ではありませんがそれでも、アレだけの大ききなら、じっくり狙えば当てられない事も無いと思います。

……とはいえ、あの嵐のような亡霊に、それこそ矢の一本が直撃した所でどれだけアレの進撃の足を止められるか、と問われれば。不安が残る、としか言えないのですけれど。

「——随分と青い顔をしているな小娘」

「……あ、いえ……そんな事は」

「そうか？ くくつ、私に殺される前の、勇気取りの男共と似たような空気を感じ取ったが……気のせいであつたか？」

多分、そんな不安はもう見抜かれてしまっているのは間違いない。流石は古き時代において、挑んできた勇士を悉く返り討ちにして見せた——多分、あの巨大な亡霊よりも更に畏れられる、偉大なる神性……ゴルゴーンさん。

遙か昔に在ったこの方に、小娘の下手な隠し事なんて通じないのでしよう。

「まあ、別に外しても構わん。私は外さんからな。足止めの任務、とやらは何れにしても上手く行くだろうよ」

「……それは」

「なんだ？ 励ましてもらえなくても思っていたか？ 私はそこまで温い性格はしていない。慰めてもらうならば、貴様の師匠にでも頼むんだな」

「い、いえ、その、そんな事は……」

実際の所。拙自身、正直今にも倒れてしまいたくなる位、苦しいです。

物凄い『強い』思いがあそこから流れてきて、膝が笑ってしまいそうになってしまっていて……頭の芯にまで、何か響いてくる気がします。

独りぼっちだったらきつと……フードを被って震えているだけの弱々しい半人前の墓守が、そこにいるだけだったかもしれない。

けれど。

『——レディ、君が今まで出会った来たのは、きつちりと人生を生きて、それでも強い思いを持ってこの世界にしがみ付いた厄介者ばかりだ。それに比べれば、力こそ神靈級だが、アレが過ぎた時間は実に短い。赤ん坊同然だ。まるで恐れるには足りないよ』

拙には……ゴルゴーンさんの言う通り。師匠が居ます。

『どつちつかず』を『内弟子』にしてくれた、大切な師匠が。

師匠が、拙の目を見て……拙は負けない、そう言い切ってくれたのが。何よりも心の支えになって。今、拙の心を支えてくれます。

恐れるに足りない、というのは流石にそう簡単に言い切れはしませんけれど。それでも立ち向かう事くらいは、出来ます。

当たれば、きつと何かしらの意味があると……いえ、必ず、あの巨大な嵐を止めるだけの一撃になり得る、と信じて。この矢を――

「……あつという間に持ち直したか、つまらん」

「ご心配をおかけしました。拙は……大丈夫です」

「だから心配なんてするか。全く」

「あ、ごめんなさ――あつ」

……は、話してたらつい、矢が。明後日の方向に……というか、向こうつて、あの。ホンゾウインさんが走って行った方向の様な。

「……」

「……くくくつ、気分だけは持ち直しても、矢がへっぽこではどうしようもないな？」

「ご、ごめんなさいっ！」

き、気を引き締めて！ 頑張つて、矢を当てていきたいです。ハイ……

「……なんか、飛んできたなあ」

『大丈夫かい？』

「うん。大丈夫、直撃はしてない」

下手をすると、こっちに直撃するんじゃないだろうか、と思わないでもない勢いだつたけど。

矢が当たったのは、傍らの家の屋根で、深々と突き刺さってる。もうちよつと角度とかズレてたら普通に頭がトマトじみた事になっていたかもしれない。

「大丈夫？ 向こうに呪詛届いてない？ それで狙いずれたとか？」

『いや？ そんな様子はないねえ』

「ならいいけど。んじゃあこっからは逃げる事に専念したいから、通信にも応えらんなくなるけど……」

『ああ。一応、時間が来たら此方から連絡はするからその時だけは返事頼むよ』

「りょーかい」

そんな光景を幻視しつつ、ブン、という通信が切れる音を聞いて気を引き締め直した。後ろから追いかけてくるのは、恐ろしい嵐の如き亡霊に間違いない。下手を打てばそのまま俺が消え去って終わりだ。

しかし……このタイミングであればこそ、俺はこうして一人きりになれたのだろうしこうやって気持ちを整理するだけの時間も……この後の事も……

「……いつそ吹き飛ばしてくれた方が楽なだけだなあ」

俺と繋がっているという『塔』……その中に詰まっている物ごと、俺を消し去ってくれればどれだけ楽になるモノかと思う。

それはきつと——俺がまだ、小さな小さな『クソガキ』だったころの記憶で……今も『どっちつかず』な自分を、決る様なモノに、違いないのだから。

第七十三章

作戦完了へ向かう実況、はーじまーるよー

さて、前回、巨大ゴーストの襲撃から逃げきる囃作戦。楽しいかけっこでした（大嘘）でしたが目的はソレではありません。

本来は、ヒュージゴーストを倒すための準備を整える時間を稼ぐ事が目的。それが達成出来た所からの、続きです。

なので、ここからは折り返し、この巨大ゴーストを特定の地域に誘い込むのが目的になります。やる事は変わらないんですけれどね。基本的に。

陣を敷いた近くのエリアに誘い込めば、相手の呪詛を直接、ヒュージゴースト君に弾き返せるとの事でしたが……呪詛返しってそう言うもんじゃなくない？（困惑）そんなカウンター技じゃないんですから……

『相手が普通じゃないんだからこちらも普通じゃないやり方でなくてはな』

『最も厄介な力を最も効率的に此方の矛にする為のやり方だからな。まあ大規模になつてしまったのは間違いないのだが……』

因みにダ・ヴィンチちゃんと同じような事を二人に言ったところ帰って来た返事が上

記二つ。ライネスちゃんが楽しそうに上を、ロードがやれやれといった様子で下を、それぞれ回答してくださいました。あ、そっかあ……（納得）

『さて、後もうひと踏ん張りだ！ ここまで来たんだ、無事にここを解決して帰ろうじゃないか！』

納得できた所で特製のヒュージゴーストホイホイに誘い込んで殲滅してやるぜ！

やり方は行きと同じ、コマンドを入力して逃げるだけ！ 簡単！

（誘導）行きますよーイキスギイ！（コマンドミス）イクイクイクイク……（余りにもデカすぎる呪いダメージに困惑するホモ）ンアツー！（完走）

はい（瀕死）

はいではないが。どういう事なの？……？

いやー、ゴースト君の本気を侮っていました。幾度か追いつかれて呪いダメージは加速した。グレイちゃんとゴルゴーンさんの援護があつて尚、此方の全力の逃走に追いつかるという。悪夢かな？

まあ操作ミスもありましたけど（素直）アツ、ちよつと逝くつ！ ちよつと逝つてんじやねえ！（危機管理）苛立ちと生きてる、喜びの合間で語録を垂れ流しつつ、死なずに指定のエリアに誘い込めたことを喜びましょう。

それにしてもゴースト君ちよつと頑張り過ぎじゃないですかね、お陰で呪いがイッパ

イイツパイユウジロウ……（瀕死）

『よし、良く戻って来た！ 後は我々の仕事だ！』

『いやあ、此方の人形もいよいよもつてすつからかんみたいでねえ、とはいえこれだけ大量に持たせた甲斐があつたというものだね。さあ、ここからはこっちのターンだ』

『マスター、此方に！』

ありがとナス！ へっへっへっ、コレだけ頑張ったんだから、やつぱりヒロインである式部さんの膝枕堪能しつづつ疲れを癒すぐらいの役得があつてもねえ……えっ？ そんな場合じゃない？ ワカリマシタ（ \wedge q \wedge ）

仕方ないので大人しくいつも通り式部さんの隣に並んで、と。さて来ますよ。ヒュー
ジゴーストが此方を追いかけて！

『正確に目標を狙う……それを狙つての設計が仇になつたな。まんまと罠にかかつたくれるのは、此方としてもありがたいが』

『では我らが策、とくと御覧じろ！』

そんなゴーストを目の前に、孔明P、ライネスちゃんの合作の術式が起動！ 雷が爆ぜるような音が響き、二人の周辺から青い光が、壁の様に溢れだしていきます。先ず一つ洋風の魔法陣が、続いて道術風の文字が、様々な術式が組み合わさつて行つて……巨大な陣が構成されていきます。

そしてその陣から浮かび上がるのは……結界、というかレンズの様な何かです。空中に浮かび上がり、道全体に大きく幅を取って、その先から巨大ゴーストを此方にまるで進ませる事をしません。

なんというか最早ここまで来ると魔術というより……

『すっげえ！ マジでバリアーじゃん！ 光子力エネルギー!!』

『うーん、君のアイデアを採用すると聞いてちよつと不安だったのだが……ここまで有効なのは正直驚きだ。義兄上、慧眼じゃないか』

『何、バリアーというのはロマンであり実用性にも優れているのは現代においては当たり前の事なのだよ、ライネス』

科学じゃねーか!!! (クソデカボイス)

魔術だけど科学じゃねーか発想！ 鉄の城じゃねえか！ 研究所じゃねえか！ スパロボじゃねえか！ 結局守り切れずにパリンって割れる奴じゃねえか!!

『見ろ、ヒュージゴーストも——あの通り』

『うわ、ホントに物凄い勢いで崩壊してるよ』

しかしその魔術バリアーに突撃して来たヒュージゴーストはアワレ！ 勝手に苦しんで崩壊寸前！ マコト苦しんでいるのである！ なんとマツポー染みた景色か！ おおブツタよ、寝ているのですか！ ナムアミダブツ!!!

そしてゴーストが大崩壊時代を迎えている処でグレイちゃんも帰還。ゴルゴーンさんもありがとナス！ こんなに活躍してくれたのにストーリー上では描写されないのが悲しいかな（不満点）

『す、すごいです。こんな簡単に……』

『まあ普通ならあり得ないのだがな。これは向こうの呪う力が強すぎる故の失態だ。過ぎた力はこうして自らの身を亡ぼす事もある。レディ、覚えておきたまえ』

『っ……はいっ』

そんな帰って来たグレイちゃんに、孔明先生が人生の教訓を講義した所で……ヒュージゴーストの体はもう殆ど崩れきっており、それでも尚、この結界の向こうにいるホモ君に手を伸ばそうとして——しかし、その手もいよいよもう、形を保てず。

『——力を純粹に求めた結果の自壊、か。完成された『兵器』では到底ないな』

『兵器？』

『特定の相手を狙う習性。そこから生み出される自我もクソも無いロボット染みた固定的な行動。そして人造である事。アレは明確に意思の無い『兵器』として設計されている』

『……確かに、言われてみれば、その厄介な特性を考えなければ、素人の魔術師でも使えるように設計されているのか、一応は』

『一応、だがな。さて此方がやる事はすべて終えた。後は——向こうしだいだ』

シュツ、とロードが灯したマツチの火が葉巻に明かりを灯し。その煙が周りの白い霧に溶けたあたりで……ついに、巨大ゴーストはその姿をただの黒い靄に変えて、完全崩壊しました。あれっ？ 主人公ってロードだったっけ（すつとぼけ）

という事で、遂にこの霧の都の難関、ヒュージゴースト、突破です!!! いやーキツイっす（自白）

これで残すは、最後の最後……巨大な塔、ロンゴミニアドの攻略だけとなります。作戦の最終段階ですね。

『……さて、これを突破するのが、最後の課題になるわけだが……一応、聞いておこうじゃない兄上、策はあるのかい？』

『……』

『え？ 一応？』

いち、おう？（震え声）

『あの、えつと、師匠？』

『ライネス。分かっているなら態々訪ねなくてもいいだろうが』

『まあつい先日のあの歯切れの悪い言い方で何となくは、ね。義兄上は自分の考えを出し渋る様なタイプじゃないのは、私が一番よく知ってる。なんだったら、声に出して自

分の考えを整理する事の方が多い』

あのロード・エルメロイ二世さん、すみません、プレイヤーですけれども、まだ（安全の為の作戦）時間かかりそうですかねー……？

『——ないんだろ？』

『ああ。無い』

スウウウウウウツ……（大迫真）フウウウウウウツ！（怒りの呼吸）

これえ！（死亡宣告された哀れなホモハゲ）これなんか見ろよこれ……なあ！この無残な姿をよおなあ！（半笑い）ここまで最初っから、丁寧に覚醒とかも育てて来たんだよなあオイ！

おのれロード・エルメロイ二世！ 凶つたな!!

『というより、必要が無いというのが正しいか』

『まあそうだね。義兄上の話を聞く限り、彼らはこの塔に辿り着くようにルートを引いている訳なのだから……』

『そうだ。恐らくは……』

ん？（察しの悪いホモ）

アレ？　なんか、目の前の巨大な塔が、一人でに捻じれた部分を解くように開いていく……こ、これは一体!?

『ここまで来たのなら、向こうから、口を開けてくれるだろうとは思っていたよ。確証はなかったのに、一応は黙っていたのは、申し訳なく思うが』

ロンゴミニアドが、自ら中に入る為の、入り口を作り出しました……！

成程、ロードはこれを見抜いていたからこそ……じゃあお前『策』とか言っていないでちゃんと言わんかい!! 一言足りないって以蔵さんに叱られたのかよオオン!?

まあロードが若干意地の悪い事をしてくださった所で、今回はここまで。次回は……この中で待ち受けている何者かと交戦する事になると思われます。

第七十三章・裏：塔に秘されしモノ 壺

「へへ。じゃああの結界、式部さんも手伝ったんだ」

「はい。呪詛のやり取りに関しては、一応……宮廷時代は、本当に、本当に良く目にしていたので」

「あつ（察し）」

マスターの、若干、こう憐れむような……苦笑い交じりの視線に晒されて私が即座に顔を反らしてしまいました。恥ずかしいです。私は、そんなはしたない事はしていないのです。ただ晴明様からお話を聞いたことがあっただけです。

『私だつたら恥ずかしくてとても人様に晒せない稚拙な呪いを見てると、宮廷だという事を忘れて大爆笑しそうになる』とか言いながら、人様が物凄い練り上げた呪詛を着にお酒を飲んだりしていたのを聞いたので、呪詛についてそこそこ詳しくなつたとかは……ちよつとは、ありますが。そんな、あの、大層な物じゃありません。

「じゃあアレか、例のあの人にもちよつとおまじない位で……小指とかタンスにぶつけろーとか、可愛い奴感じで呪っちやったりとか？」

「やってません!!!」

「あ、うん。ホントゴメン。もう二度と言わない。クズでゴメン。うん、普通なそんな怖い事しないよね。うん。本当に申し訳ない」

「しません。絶対しません。いえ、日記を見た晴明様に『そんなに気になるならおまじないしてみる？』一回顔を合わせるきっかけを作るおまじない』と言われた事はございますが……物凄い葛藤の末、断ったのです。ハイ。

「……そんな事言っていて、マスターの方は本当に大丈夫なんですか？ 呪詛は」

「そうやって話題を逸らしたのは、そんな昔日の若干思い出したくない赤裸々な思い出等を思わず口にしてしまいそうで——というのもほんのちよつとだけありますが。最も大きな理由は目の前にあります。」

「人形が呪いで粉碎されて行っている時は、私、正直生きた心地がしなくて」

「あーそれは大丈夫だよ。ピンピンしてる」

「本当ですか？ 無理とか、してらっしゃいませんか？」

「ナイナイ。大丈夫……まあ最悪ピンピンしてなくても、弱音は吐けなかつたけどナ。目の前がこれだし」

「そう言つて指さしたその先に聳え立つのは……大きく形を変えた『ロンゴミニアド』。周りを囲っていた外殻が、着物の合わせを開くが如く大きく口を開けて、その内に入る道筋を作っているのです。」

入る入り口など何処にも見えなかった『ロンゴミニアド』は、今、底の見えない闇を腹に宿して、此方を待ち構えているのです。そんな特異点の中心の奥には、聖杯らしき反応も確認できたと、ダ・ヴィンチ様はおっしゃっていました。

「なんだろうなあ、俺だつてここからは脱出したいと思うけど、ここまであけすけに『こちらへどうぞ!!』されると行きたくも無くなるよなあ……色んな意味で」

「何もなくそのまま帰れる……訳は無いですよね」

そして恐らくは聖杯だけが置いてある訳も無いと思われます。ここへわざわざ誘導されたのだから、それなりの『理由』が中にある筈なのです。

「そこまで温い相手なら、ここまで苦労はしていない」

「ゴルゴーンさんが苦労したのつて狭い建物とかでしょ」

「——ちようどいい、今日の餌はお前だマスター」

「あつ、やつべ」

その割には……緊張感が若干、というか大分足りません。今も目の前でマスターとゴルゴーン様が追いかけてこ始めちゃってますし。

「そこまでにしたまえ。あまりじゃれ合っていると、再び巨大亡霊が押し寄せて来てても不思議ではないぞ」

「いや、俺だつて割と命がけで……それに、自分から入り口を開けておいて、もう流石に

それは無いんじゃない？」

「畏の目の前でいつまでもじりじりと動かない獲物を、猟銃を鳴らして追い込む猟師も居るだろう。銃声の代わりに呪詛が飛んできたら洒落にもならん」

「うひえ、ゾツとしねえ……」

結局逃げ切れずゴルゴーン様に指先でつままれてますし。私的には、ここまで来ていつも通りなマスターの様子が、逆にぞつとしませんけど……肝が据わっている、と言っているのでしょうかここまで来てしまうかと。

「んじゃゴメンゴルゴーンさん、そろそろ乗り込むので二、三回くらい噛むので許してちよーだい……頭かみ砕くとかは、まあ……やってもいいけど」

「ちっ、仕方ない」

「い、いえあの……早く向かった方が良いのでは？」

「まあまあ、マスターとサーヴァントのじゃれ合いなんだから、その辺りは見逃してあげようじゃないか、グレイ」

「頭かみ砕くのはじゃれ合い……でしょうか」

……多分、じゃれ合いの範疇だと思います。ギリギリ。

足の裏から伝わる感触は——硬質、そのもの。霧の都の石畳よりも、更に硬くそして

重たい感触が下には有ります。

「……コレが、ロンゴミニアドの、中身……？」

「ほへー、めっちゃくちやパンクですなー。こりやあ」

「機械仕掛けの巨塔、といった感じだが、コレは……」

それも当然といえば当然で。

外壁や床は、奇妙な『機械』の様な部品で構成されていて。そして

「ひどい有様だね。外はアレだけ立派だったというのに」

「中はグチャグチャボロボロ……ぐふふ、なんか燃えるシチュですな。鉄壁の装甲の内側は柔らかいとか」

「黙っている。食われないか」

「おひえっ」

そのどれもが多少壊れていたり、ボロボロになっていたり『壊れかけている』というのが、最初に私が抱いた印象でした。

外の何れの場所とも類似しない奇妙な……とても奇妙な中身の機械群は、ギリ、ギリと重い耳障りな音を立てて動き、しかし、削れ、歪んだ部品は正常に動かず。バキリ、と時折碎ける音も混ざります。

まるで……もうこの中で既に戦いが起きた後のような、そんな有様でした。

「ちよつとロード、俺たちがぶつ壊さなくても、元からボロボロじゃないのこの塔」

「……正直想定はしていなかった。この有様は」

「もしかして、ここにも侵入してたとか?」

「馬鹿をいえ。だとしたらもう少しこの塔について調べているに決まってるだろう……正直あまり調べられなかったのが不満だったんだ」

そう言つて見下ろす先には……碎けた歯車が転がっています。それを持ち上げれば……それだけで、ピキリとひびが入つて、半分ほどが欠けて、地面に落ちて転がっていききました。マスターが、それを目で追いかけて、一つ息を吐いています。

「おーおーほんとボロボロ。ここ、俺の記憶から構成したんなら、この有様だと俺とつくに死んでも不思議じゃなくねえかな」

「いや、死ぬという事は無いと思うが」

「それにしてもダメージは少ないね。珍しく義兄上の推測が外れたかな?」

「ここがキミの記憶から形成された特異点、というのは間違いない。そこは間違いないのだが……であれば、コレだけが……?」

『——お考え中の所悪いね。この先に感アリ。気を付けて進んでくれ』

しかし、周辺に気を配っていたのも、そこまで。ダ・ヴィンチ様の一言で、皆様が歩いていく先を見つめます。

暗い通路の奥へと向かう我々の視線……そこに、僅かに周りと違う『明かり』らしきものを見つけられました。

何も言わず、ゴルゴーン様が先頭、グレイ様がその後に残き……黒髭殿が殿を務めながらゆつくりと奥へ。奥へと。少しずつ、明かりが大きく、はつきりと見えてきて、そしてそれが目の前まで迫り――

通路ではなく、開けた空間に、辿り着きました。

同じ意匠の空間……ですが、ここが最も傷が深く、壁一面に斬撃、爆破、その他諸々の傷が幾つも走っています。

「ダヴィンチちゃん、どう?」

『聖杯らしき反応は……ここじゃないね。でも別のナニカが――』

「あの皆さん、アレー!」

そんな部屋の有様から――グレイ様が上げた声に従い、その指の先へ。

彼女が見つけたのは……天上から吊り下げられた『女性』でした。

黒い鎖の様な何かにぐるぐる巻かれて、動く事すら出来そうにない彼女は……長い髪も、青い手袋も、洗練された衣装も。

頭に装着された絡繰り染みた仮面以外は、その全てが。

「――ダ・ヴィンチ様!」

「落ちて着け式部さん……ダ・ヴィンチちゃん、見えてる？」

『……ああ、見えてるよ。予想以上に可笑しなモノが出て来たねコレは』
ダ・ヴィンチ様に、酷似していたのです。

第七十三章・裏：塔に秘されしモノ 式

腕を、足を、首を。そして胴体に至るまで……何本もの鎖で幾重にも幾重にも、嚴重に拘束されたその姿は……私たちが知っている方によく似ているからこそ、私の目にはより痛々しく見えてしまっています。

ですが私が、あの女性が誰なのか、そして、どうしてこんな所に吊り下げられているのかと考えている間に——既にマスターは通信の礼装を起動させ、ダ・ヴィンチ様に連絡を取っていました。

「確認するけど、敵性反応は？」

『——ない、というか気絶して縛られて、吊り下げられている女性にそこまで警戒するのもちよつと可笑しな話だと思うけど』

「二応つて奴さ……ならいいか。ゴルゴーンさん、やっちゃつて。受け止めるから」「ちつ、便利に使いおつて」

些か早すぎる程に出される、ゴルゴーン様への指示。直ぐに二回ほど魔力の光が閃いてから、マスターの手のの中にその女性は落ちてきて。黒い鎖は、ゴルゴーン様の一撃で砕けた後、塵となって消えていきました。

「……マジでそっくりだなあオイ。体型から何まで」

マスターの手の中の女性は、長い濃いブラウンの髪を広げてくたり、となつてマスターの腕の中で全く動く気配を見せません。そして……どう見ても、その女性は我々のサポートをカルデアから行つてくださっている、サーヴァント、レオナルド・ダ・ヴィンチ様その人にそっくりなのです。

「意識は？」

「……無さそうだな。ロード、治療つて……魔術で出来んの？」

「まあ、本当に簡単なモノであれば私も出来るが」

「じゃあ頼む。ケガは……そんな意外とないな。単純に弱つてるだけか？」

取り敢えず既にこと切れていた……という訳ではなかった模様で。

「ふむふむ……一応聞くけどダ・ヴィンチちゃん、心当たりは？」

『んー。ありすぎて困るかな』

「おつと予想外の返事だなオイ」

ありすぎて困るのは寧ろ此方が困るのですけれども。寧ろ『幾ら天才でもとんと見当がつかない』というお返事を期待してマスターも聞いたと思うのですけれども、物凄い冷静にそう言われてしまうと……反応に困ると申しますか。

「自分とそっくりのナニカを生み出した心当たりがあり過ぎてとか変態のそれだろ。聞

きたくも無かった……」

『褒めてもらってありがたいが、何れの心当たりもここになんているかの説明にはならないから、役には立たないと思うけどね』

「そうかい……生きてる人？」

『んー……人間の反応ではない、とだけは言っておこうかな。少なくとも』

「はえー。スゲエ分かりやすく怪しいなあ。こんな有様じゃなけりや。どうするのが正解かねえ、コレ」

ダ・ヴィンチ様の心当たりかどうかとも分かりませんが。

正体も全く以て詳しくは分からず、しかし、目の前の彼女は見た目通りの存在では決してないようだ。ここまで来てしまうと、露骨に過ぎます。しかし、こんな意識も無い、最初から何の抵抗も出来ず晒されて吊り下げられていた、そんな女性に一体何を警戒しろというのでしょうか。

「この中に居たからなんかここについて知ってるとかねえかな」

「いやーでもこの人、捕まってお楽しみタイム一步寸前だったんでしょ？　ないんじやないですかねー流石に」

「成程なあー……何がお楽しみタイムじゃぶち殺すぞセクハラ髭おやじ」

「は？」

「ア？」

「くだらない事で争っている場合か、周りを警戒しろ！」

まあ、こんな風に言い争えている時点で、そこまで警戒をする必要も無いのかもしれないけれども……ライネスさんの言う通りではありません。ここは敵地の最深部ですし警戒してし過ぎるといふ事はないと……思います。多分ですけれど。

「まったく……そんなに気になるなら起きてもらおうか？　ちよつと無理にでも」

「吊り下げられて気絶してた女性相手に？　一応世界を救う組織なのにちよつと極悪過ぎないか？」

「ここは敵地の最深部だよ？　気を使つてる余裕はあるのかい？」

「いやーだからつてな……一応、仲間の姿してるしなあ」

そう言つて、視線を向けたその時……マスターの腕の中の女性が、小さく呻き声を上げました。

「——おい、アンタ、気が付いたか？」

「う……あ……あ？」

「弱つてるところ申し訳ないが、アンタ、自分の名前、分かるか？　ちよつと今面倒な事になつててな……取り敢えず、名前だけでも先ず知りたいんだが」

そう問われ、女性は暫し、所在なさげに周りを見回してから……改めて、マスターの

方を見つめてから、はつとなつたように体を震わせ。

突如としてマスターの両肩に掴みかかりました。

「おおっ!？」

その一瞬、全員が殺気立ち……しかし、マスターがそれを制するように掌を私の方に向けて。それで一旦全員の動きは——黒髭殿だけはゴルゴン様に小突かれるまで拳銃を下ろそうとはしませんでしたが——落ち着きました。

「——カルデアのマスター、ですね」

「ああそうだが……アンタは？」

「自己紹介などしている場合ではありません。今すぐここから退避を——いえ、特異点の形を考えれば、それも不可能……」

彼女は……マスターを傷つけようと殺意を向けている訳、でもなく。しかしそう錯覚してしまう程の、勢い。仮面で隠れていても分かる程の、鬼気迫る声色、表情。思考が冷静に回っているかどうか、疑わしい状態ではあるのですが、しかし。それでも真剣さだけは彼女の態度全体からあふれ出している、そんな。

「お願いです、この先に進むのであれば、気を、気を強く保ってください。分かる筈ですこの先に、何が待っているか」

「——」

「レオナルド・ダ・ヴィンチ。貴方も聞いているはず。お願いです、せめて、せめて彼の精神保護を徹底的に……！」

『——君は、まさか』

——その、直後の事でした。

広い空間に響き渡る甲高い、噴き出す様な音。

「っ!？」

「なんだ!？」

その音と共に、周りから噴き出して、そして満ちていく白い靄。しかし、外の霧とは違うこの——濃密な魔力を纏っているこれは、まるでマスターが彼女と接触し、彼女が目覚めるのを狙っていたかのように……!

とつさに術を使い、靄を払いのけようとしますが、しかし、それよりも周りに漂い始めた靄の動きは実に早く——

「ダ・ヴィンチ様!」

『毒性はない!』

「落ち付きたまえ! 狙いはあくまでもカルデアのマスターだ! 殺す事はしない!

それにこの、この魔力は——!」

全員が完全に混乱しているその最中、白い霧は……我々を中心として、渦巻き、そして一点へと集おうとしています。マスターを中心として——!

「マスター!?!」

とつさに走り出そうとしたその一瞬、しかし、その手はロードに捕まれて……振りほどこうとしますが、強く掴まれてそれも容易くはなく。

必死になって、腕振ろうとしましたが、しかしそれよりも早く。

「ええい、間に合えよ——『石兵八陣』!」かえらずのじん

直後に霧の中で巻き起こる、巨大な魔力の渦。

それは恐らく——諸葛孔明としての宝具!

展開された中華風の陣が広がって、この空間の中心にいたマスター——には、一步届かず、しかしそれ以外の面々はその内に巻き込んでいます。白い霧は、この内においては、どうやら力を発揮できるものではないらしく。何処かへと散って消えてしまっています。

「本来はこういう使い方ではないのだが……! 本造院!」

「——なんだ」

「殺されはしない! だから……存分に戦え! 逃げるな! 向き合え! 私から言える事は……それだけだ!」

その中から、霧に包まれて見えなくなる寸前のマスターに向けて、ロードは声を張り上げて。そして。

マスターはその声に……重苦しそうに、頷くばかりでした。

第七十三章・裏：塔に秘されしモノ 参

世界を救う、なんていう事を言われた時。思わず啞然としたのは……『こんな幸運があつていいのか』と思つたからだ。

だって、こんな自分でも、世界を救う位の事をすれば。もしかすれば、許されるかもしれない。コレは、きつと最後のチャンスで、そして自分にへばりつくあの景色を漸く振り切るための、最後の機会だと、思つていた。

そして同時に『報い』だとも思つた。

自分に対しての、置いて来た者達からの心からの贈り物。こうして今も生き延びている俺に対しての——当然、当たり前前にやって来た報復。

この機会と報いを乗り越えて。最後まで走り抜けられたら俺は——漸く許されると思つてた。

そう思つて、いたんだ。

何処までも、真つ白い景色……そりやあまあ、あんな大量の霧の中に巻き込まれたのだから当然ではあるのだが。最早ここまで濃厚な霧だと、ミルク色、とかいう次元を超えてそういう色の壁の中に入り込んでしまった様にも見えてしまう程だ。

完全に『閉じられた空間』だった。動けはするが……それだけだ。声が他に届く訳でも無く。他の誰かの声が聞こえる訳でも無い。

「……」

そんな中で、俺は確かに前に進んでいる。確かに足を前へ踏み出している感覚がある。まるで何かに手を引かれるように、ドンドン先へ進んでいる。

今、自分は相手の術中にハマって、とつくに操られているのかもしれない。今、自分は相手の術中にハマって、とつくに操られているのかもしれない。

仮にそうだったとしても。今、自分はその事があまり気にならない……というか、気にしても仕方ないと言える。危機状況だというのに、心は酷く落ち着いていた。

いや、落ち着いている、というのは多分正確じゃない。嵐の前の静けさ、というだけの話じゃないか、と思う。

これから何が待ち受けているのか……『俺の心』から特異点を作ったのであれば、その中心となるのは何なのか。余りにも抽象的な前提でも、凡そは想像できてしまっているから。見たくないモノを見せられると分かっているから。

半ば、やけになつてゐるんだ。

「……ん」

その事に気が付けば、既に周りの霧は大分薄まつていて——ふと、足先に見えてくるのは薄茶色、とも汚れたクリーム色とも取れる、整備されているとは言えない、小石が転がっていたりひび割れていたたりデコボコになつていたり……と。

少しずつ、見えてきたのは、さつきまで居た『霧の町』の整備された道とは違う……しかし、竜の都の牧歌的な何処までも続いている様な田舎道ではない、脇の草は生え放題になつていて、獣が分け入つて出て来ても、分からない様な。

「——懐かしいじゃない」

分かつていた。俺の記憶から景色を作り出すなら、コレしかないだろうと分かつていたんだ。子供の景色。染み一つない綺麗な青空。なんだか分からない蝉の音が、空と耳に響いて、苛立つてくる。気温までは再現されていない筈なのに、蒸し暑い気温に包まれてる気すらしてきた。

思い出す。山道というのは、ただの『ちよつと整備されていない道』ではない。足元は不安で、獣たち『の』邪魔にならない様な程度に整備されているだけの……ほぼ自然に近いような、そんな道だ。

そも、人が住む……否、住める場所じゃないんだ。山つてのは。無理矢理住んでいる

人間の方が可笑しい。けれど、それを言っても仕方ない。俺の先祖は、どうしてもこの『御山』にこだわってしまったのだから。

「良くこけたよなあ。山道で」

こうやって、大人になってから昇ると余計に分かる。

普通の山とは、険しさは桁違いと言つていいし、『人』の世とは余りにも隔絶された日ノ本の秘境……とは名ばかりのト田舎だ。自分の『故郷』は。

どうやって子供の時、こんな人に優しくない環境を歩いて抜けてこられたのか、とうしてもう一度見直すと改めて疑問に思えてくる。

「……というか、こんな閉じた環境だからご先祖はここへ立て籠もる事を選んだのか。はっ、それでこうなっちゃったら、世話ねえだろうよ」

山道を、一步一步進めば思い出す。いやって程に。

あの古臭い家が嫌で、何度も飛び出して、でも結局戻るしかなくて……何十回もこうして帰って来る景色を見た——そうして、結局今回も、こうして。

「……ああ、本当に。そのままだ」

見えてくる。

ヒビが入って薄汚れた白い壁、そしてそこにツタの絡みついた正門。古いだけで、歴史もクソも無い。カビの生えた面構え……ため息が止まらない。

ヒビの位置も、中途半端に剥がれかけた門の上の瓦も、片方だけ変に新しいアンバランスな門扉も。

「俺の記憶から作ったってんだから、当然だけどなあ」

……嫌で嫌でしようがないのに。けれど足が止まらない。初めからそうなる様に入力されてその通りに動かされている。まるで自分の体だけが機械仕掛けになったように。自分の体を、自分で動かしている感覚が無い。

足が張り付いた様に動かなくなる、それくらい、自分の感覚では、体が重い。その筈なのに。それでも勝手に動き出して。まっすぐ進む。

門を越えて……見えてくる。古い古い、屋敷。平安時代から残っている、っていうのがたつた一つの傲慢な、ポロ屋。渡り廊下は幾つも潰れ、後付けで作った蔵やら、西洋式の井戸やらが、それこそパッチワークの様に、ちぐはぐに点在していて。

「……生き残る事しか考えてなかったんだよ、アンタたち」

どんな時代でも。どんな発展があっても。どんな次の時代が来ても。

ずっとずっと生き延びて、かつてから受け継がれたものを叶える。それだけに特化した一族。ローマの為に自分達よりも圧倒的に強いはずのサーヴァントに、命を捨てて向かって来たアイツらと同じ、まるで昆虫の様に只管にそれを追い求める。

……恐怖も無く、只管にそれが『正しい事』と信じて。

「いや、ローマの連中のほうが、一応『熱』はあつたからまだマシか？」
ただ自分には、根本的に同じものだと見えたから、どっちがマシか、なんて判別でき
たもんじゃないけれど。

……ふと、家から外へと点々と続く紅い色が見えた。

相手を焦がす様な狂奔の情熱を示す、赤ではない。

それは、人が見る赤の中で最も人の生き死に近い色。そして最も人の悪意を具現する
為の色……体を流れる血潮の、どす黒い紅。

ああ、こんな所まで良く再現している、と酷く無感情に、そう思った。

苛立つても、逃げ出そうとしてもどうしようもないのは、もうとつくに分かつてる。
だから諦めて、身を任せて……一歩一歩進んでいく。

これは自分の体が覚えているから。ここまで覚えてしまった事を、もう忘れることな
らぬ出来ないのは、分かつてしまっている。

庭の砂利交じりの土を踏みしめて、先へ進み……血痕はずつと、玄関まで続いて、そ
してその奥まで続いているのを——知っている。

引き戸を開いたその奥。

「——」

そこには、地面に落ちていた血痕よりもハッキリとした——紅い紅い、血の跡が広

がっている。生臭い香りが暗がりにも充満し……しかし、外から差し込む明かりが、その闇の中の、一点を殊更に照らす。

一つ。浮かび上がってくるのは……足跡だ。

それは、外へと向けて、ペとり、ペとりと家の内から外へと続いていく、真つ赤で小さな足跡……その色は外の血痕と同じくらい、汚れた、紅い色をしていた。

血液によってつくられた、悪趣味な落書き。

「……よく出来てやがるじゃねえか」

そうだ。コレはあの日のまんま……俺がここを離れて、必死で逃げ出した時の——全く同じ景色だ。そのままだ。

一步を踏み出す。

外から入って来た白い光以外は、全てが黒い暗がりにも塗りつぶされている。酷く閉じた室内の、アンバランスな色を見つめて。

意識は遠ざかりたくて、何処かブラウン管テレビでも見ている様にぼやけているのに。家の中の飾りの一つ一つも、湿気った空気も、軋む家の音も、はつきり感じてしま

う。
そして何よりも——この奥から漂う、濃い、濃い、ぶちまけたかのような生臭い香りから、逃げられない。

一步を踏み出す。

景色が左右に揺れている。

まるで、幽霊みたくに左右に身体が揺れている。

「……ああああああああ」

声漏れている。人の声とは思えない様な、調子の外れて、揺れるような、不快な、耳にへばりつく様な声が。

それが自分の声だと気が付くのに、少しかかった。

第七十三章・裏：塔に秘されしモノ 肆

藤丸は、きつと優しいご両親に恵まれたのだろう——と勝手に思う。そうじゃなけりやあ、あんな気の良い善人は生まれやしねえ。

俺の両親だって妹だって、決して負けてない自信はあるが。

もし違いがあるとすれば、ほんのちよつとの運の良さ、悪さくらいか。

……今も、俺はそれが、分からないでいるんだ。母さんも、父さんも、妹だって。決して悪い事をしていた訳じゃないって言うのに。どうしてそんな不運に見舞われちまったって言うのか。

ごつ、ごつと硬い無機質な音が、静かな家の中に響く。

土足で家の中を歩き回るなんて始めてで。なんだか不思議な気持ちになつてくる。少し、楽しい。

悪い事をしているといふ背徳感なのだろうか？ いや、そもそもこんな家、土足で荒

らしまわろうが罪悪感の一つもないのだが。それとも、昔の景色を思い出して、心が子供の頃に戻っているのだろうか？

「……」

周りを見てみると、若干割れた花瓶やら、積まれて縛られた本やら……見覚えのある物が転がっているのが分かる。

あの日から一体どれだけたったのか、それでも尚、この場所は余り荒れてない……と思い、しかしながら、そもそもここは自分の記憶から作り出した場所だつてことを思いました。荒れるも何も、変わる事も無いだろう。

どうやらあんまりにも嫌な記憶を思い出し過ぎてしまったせいで、頭が可笑しくなつて来ているのかもしれない。今ここは、現実の家ではないと言うのに。

「……まあ昔っからか。俺が可笑しいのは。そうじゃなけりやあ、俺がこんな所にいる訳もねえよなあ」

さつと額を軽く撫でる。思い出すのは、俺の額に伸びるあの角。

あれを今まで使つてこれたのは……一種の、当てつけだ。一族の思つた通りの使い方なんてしてたまるか、と。俺の中にあつた淀みの様な感情に任せて、必死になつて『特異点解決の為』に使つた。

正直な話、命を懸けて任務に励めたのも、アイツらの希望の星だという俺がさつさと

潰れてしまえばあの世で嘲笑えると思ったから。

人理を必死になつて救おうとしている藤丸達よりも、俺は間違いなく不純な動機でこの任務に臨んでいたのだろうと思う。

羨ましくなかつたのか？

そんな事はない。とういか羨ましく思うなんていう発想すらなかつた。カルデアの彼女らは天上の星で、俺は血泥にまみれてのたうち回るバケモノ。元から立ち位置も、住んでいる世界も違う、『美しいモノ』だ。

それをどうして羨めるだろう。妬めるだろう。だつてそれは覆りようのないただの事実なのだから。事実を事実と受け入れる事は全然苦しくも無かつた。

「——そうだ、だから……この景色を覚えてたら、そりやあそんな『贅沢』出来ない」
ああ。そうだ。目の前の——大広間に続く道。

奥へ進むにつれて更に濃密に香る、血の香り。それを辿れば……いや、辿らなくても迷う事すらないか。

もう辿り着いている。両開きの板戸の目の前。そして……子供が通れるギリギリの幅くらいに開かれた板戸が見えた。俺を待っているのは、きつとこの先の景色だろう事は凡そ分かつていた。

だから——

「——ああ、父さん、母さん……——、居るかな」

ここは幻の世界だけど、そうと分かかっていても、言うんだ。

返事なんざ帰ってこないのは、分かり切ってるけど。

だって、もうこの部屋の中では、だーれも。だーれも。生きちやいないから。

あの日の景色——地獄はそのままに。生臭い匂いが満杯になった大広間の中。噎せ返るような匂いは、腹の奥底から、人の中身を引きずり出す、悍ましい類のものだ。命が腐り果てた後の、成れの果てのモノだ。

散らばっている砕けた器、ぶちまけられた豪勢だった料理の成れの果て、そして……それらと混ざり合う血漿——それらを垂れ流す、無数の死体共。

部屋の端まで這いずる様に逃げている者がいる。苦悶の表情を浮かべて中心で転がっている者がある。力なく折り重なっている者共がある。

皆、一様に歯をむき出して、顔を歪めて、赤に塗れて。

覚えている顔もある。覚えていない顔もある。

どれもこれも、俺の『親戚』と言っていた奴らだった。どいつもこいつも喉を引き裂かれている。

酷い景色だ。

一体誰がやったのか、なんて白々しい事をいう積りは無い。とはいえ、ここまで綺麗

に首を引き裂いているとは、意識が無かったにしては随分殺意に塗れたやり方ではないかとは思えてくる。

「——そっか、そこに、居たんだ」

そんな中で。

手を繋いで——彼らだけは、静かな表情で。そこに居た。

ワイシャツを真っ赤に染めた、ごくごく普通の男性と。カーデイガンの中心に大きな穴をあけて倒れている、ごくごく普通の女性。

その腕の中に、小さな命、小さな女の子を一人、抱え込む様に。倒れていた。

あの日、どうなったかも確認しないで逃げ出したから。分からなかった。

ふらり、倒れ込む様に三人の傍に身を寄せた。

あの時は気にする暇も無く、無様に逃げ出す事しか出来なかったから。俺の記憶から作り出して良くここまで、と思ってしまう。

そうして傍に寄って……ふと、三人の傍らにもう一人、三人の傍に倒れている藤色の着物を着た、老婆の姿が見えて、顔に皴を寄せてしまった。

「ん………つたく、ババアも一緒かよ」

その顔に刻まれた辛気臭い皴を、覚えていない訳がない。ずーつと俺の目の前で、この家の歴史の事をぐちぐちと語っている時に嫌という程に見せられていた。

知りたくもない悲願。そんなものを大事そうに語って。つまらなかつたし。何なら怖かつた。正直、ずっと嫌いだった。俺は。

祖母って言う繋がりが無ければ、二度は顔を合わせたくない様な人だった。

変にしやつきりとしていて、他の奴よりも脳が死んでない人だったと思う。その老人らしからぬ元気を、どうして他のクソツ垂れな親戚と同じ方向に使っちゃまったのか。

「……ババアにも、悪いことしたよな」

ふと。

そんな口から言葉が漏れてしまう……彼女が倒れている近く、血が比較的溜まつていない所を選んで、腰を下ろした。

恨みしかない。俺の嫌いな人だった。

けれど、こんな終わり方を迎えていいかと言えば、そうではないと思う。

そうだ。少なくとも、こんな所まで来て謝る事一つできない、クソガキに殺されて良い訳なかつた。

「——こうやって見せつけて、俺に謝罪でもしろってか？ はっ……もうそんな言葉、

とつくに枯れたってんだよ。謝つたって、返つてこないし、戻ることだつて出来ねえつてのによ」

たった一人で逃げ出して。あの日の事に怯えながら暮らして……十年近くかけて、こ

こへ戻るまで。俺が出来たのは。

悲しみも、恐怖も、怒りも……全部全部、擦り切れて、殆ど感じなくなるまで。何千回と繰り返し、思い出す事だけで。

飲み込むことも出来ないで。

悼むことも結局出来ないで。

ずっと恨み言と謝罪を繰り返すだけで。

漸く傍からは正気に見えるようになるまで、こんなにかかった。あの時の事を思い出して静かに絶望できるようになるまで、こんなにかかった。無様に涙を流さないように心に刃を突き刺せるようになるまで、こんなにかかった。

「——ババア。アンタは言つてたな。『何れ自分達、呪われた血族を滅ぼしに、一族に鬼が宿る』つてよ。それを先祖たちはずうつと待ち望んでたんだつて」

アンタらが望んでいたのは。血族を終わらせる運命は。自分達を滅ぼしに来る鬼は。こんな情けない、童に追われて泣く様な、そんな鬼だったのかい。

自分が殺した人たちを置き去りにして。

その罪の意識と、こんな運命への恨みに潰されて、とつくに狂つて。

ただ生きてるだけの抜け殻同然になるような、そんな情けない。鬼だったのかい。

第七十三章・裏：塔に秘されしモノ 伍

「——マスター……」

「……」

酷い空気としか言えない。

彼のサーヴァントである紫式部は当然、そういうイメージはあまりなかったゴルゴンの空気も、明確に重い。その二人だけでなく、暫く彼と過ごして情が移っていたグレイも、酷く心配そうだ。

ここで迂闊な慰めを言える程、私とて酔狂ではないし、そして壁に寄り掛かっている黒髭も、ここは流石に、流石に空気を読んでいるのだろう。先程から黙って動かない。

そんな三人が見つめる先には——巨大な霧の塊が鎮座している。本造院を巻き込んでから構成された、あの霧の塊は……ダ・ヴィンチの解析に寄れば『ドーム』のような物なのだという。

『彼を取り込んで害そうとか、そういうマズい反応は、彼が巻き込まれるギリギリまで確認したけどなかった。礼装からの反応で彼にダメーヅらしきものも見えない』

とはいえ本当にただの無害な霧、という訳ではない。カルデアの調査結果から分かっ

たのは、どうやら此方から内部へ直接干渉する事は出来ない。強固な壁のような性質を持つているのだという。

『内部と外部を完全に隔離して、しかし……連れ去るつもりにも見えない。あの中から彼の反応が消えた様子はない。彼が捕まってから、もう何十分も経つて言うのに』
「随分とまあ強固な『檻』を作ったものだ」

『……正直な話、向こうは『こう』なってしまう後は何もしなくていい、と思つたんだろうと思う。だからカルデアからでも調べ放題だし、番人すら置いていないと来た』

実際、その自信は間違つてはいないと思われる。

その中に入つても、どうしてか此方に戻つてきてしまうのは先ほどから試して実証済みで。ならばと我々の攻撃も何処かへ跳ね返されてしまう。サーヴァントクラスの攻撃を跳ねのける程の防御で、見事な仕事だ。

要するに我々は、こちら辺で向こうの出方を伺うしかなくなつたわけで。それを予期していたかのように、一切の反撃も何も無い。

「で、ですがマスターに身体的なダメージが無くても……」

『精神的な洗脳だとか、そういう危機機の話をしてるんだよね。それは』

「そうです、そう言つた魔術を使われたら」

『それは当然分かつてる。けれど、流石に本造院君に対して何かしらの魔術が使われた

なら、礼装が何かしらの『異常』を検知する。特異点解決にあたり、その辺りはカルデアも抜かりはない。でも……』

「そういう反応も無い、か」

ここまで来ると、中で隔離しているだけというのが、最早逆に不気味に感じてくると思うのは、時計塔で謀略に親しんできた私の性だろうか。目に見えないモノというのは、正直何よりも恐怖だ。

それを最も良く表しているのが彼に最も近いサーヴァントの、紫式部のあの様子と言えるだろうか。

「……それで兄上。どうするんだい？」

そんな彼女とは対照的に、私と兄上は無駄に取り乱すことはしていなかった。私はまあ魔術師的な価値観が奥底へ根付いているからこそ、情を排して状況を見れているというのが大きく。

義兄上は……ここで自分が取り乱しては、周りに与える悪影響が大きくなる、特にグレイに関しては。その辺りを自覚して、冷静に落ち着くように努めているのだろう。

「どうしようもない。というしかないだろう。先程、一縷の可能性をかけて攻撃を仕掛けても全く通用しなかったのだから」

「言うじゃないか。兄上がもう少し早ければ、彼が捕まる事も無かったと思うんだが？」

「責任は全て私にある。責を取らせたいのであれば、腹の一つとて切るさ……サーヴァントの身ではあるがね。とはいえ、その前に答え合わせだけは済ませて欲しいが」

そう言って、兄上が振り向いたのは、地面に座り込んだ女性。先程、本造院が救い出した女性だった。先程から呆然としているばかりで、何もする様子はない。

「確認したいのだが。こうしてこの塔に幽閉されていたという事は、君はこの一件に関わっている存在……それは、間違いないな」

「……………」

「しかしあの状況下で、君は我々に危機を伝えて来た。ダメージを受けた自分の事を顧みずに、先ずはマスターである彼の事を。少なくとも、此方に敵対しているのならそんな事をする必要は無いことは分かる」

義兄上の声は、酷く静かだった。

状況は切羽詰まっている事は間違いない。だがそれでも尚焦らず。彼女を刺激しない様に。それが最も、この状況を打開できると信じているから。

「君が我々の敵ではない事は、承知している。その上で、だ。君が一体何者なのか、どうしてここに居たのか、それを——明かしてはもらえないか」

「……………私は……………」

『——ロード・エルメロイ。その前に、一つ確認させて欲しい』

……だがまあ、その鼻っ柱はキツチリとへし折られてしまった訳なのだけでも。

「……ダ・ヴィンチ殿。それならば私が話を始める前にだな」

『すまない。先程の事があつて、少し確認したい事があつてタイミングがね。その私そつくりの君。君は、私の事を『レオナルド・ダ・ヴィンチ』と呼んだね?』

「……はい。間違いなく」

『私はこれでも生前の顔そのままではないし、声も違う。自分の理想の顔へ自分の体をちよつとだけ弄つたからねえ。それでも尚、私の事をダ・ヴィンチと判断するには、必ず一つ説明を挟まねばならない。けれど……君は私の声だけで、即座に判断した』

しかし、ダ・ヴィンチの話を聞けば、そう言えばと思う。あの一瞬。目の前の女性は誰よりも早く、『レオナルド・ダ・ヴィンチ』というサーヴァントの事を認識して、警戒を促していたのである。

『君は私を知っている——そして、私も君の正体に少し、アタリを付けた』

「——」

『いくつか可能性はあつた。しかし、あの即座な『マスターの保護』の判断を考えるとほとんどの道は潰れ——たつた一つに絞り込めてね。その確認がさつき出来たよ。カルデアのあるデータに『細工』……というか、『干渉』された跡が見つかったんだ』

彼女を振り向けば。先程よりも深く、首を垂れて。酷く怯えている様な。そして何処

か悔しがっている様な。そんな風に、口の端を噛みしめているのが、傍らから、ちらりと覗けてしまう。

それは何処か……親の目の前で叱られて、竦んでしまった子供のような。そんな姿にも見える。

『——『ムネーモシユネー』。それがキミの名前だ。そうだろうか？』

「……」

ダ・ヴィンチの、抑揚の少し抑えられた何処か優し気な声に、目の前の彼女——ムネーモシユネーは、小さく、それでも此方が何とかわかる程度には、ハッキリと頷いた。

「……そう、です」

「ムネーモシユネー。確か、ギリシヤにおける記憶の女神、だったかな？」

『うん。カルデアにおいて、特異点におけるマスターの存在証明や、その身の保護の為に作られた自立型のサブシステム——要するに人工知能なだけだね。その名を『ムネーモシユネー』。私が設計したんだ』

ダ・ヴィンチが話して曰く。万が一カルデアがレイシフトの際に壊滅した場合、現地へとレイシフトしたマスターの存在証明を、カルデアの人員に代わって行う為の『記憶』と『観測』のエキスパートとして、カルデアに眠っていたのだという。

眠っていた——そう、ムネーモシユネーは先ず、起動する事なくカルデアの中に置か

れていた筈だそうで。

「しかし、今はこうして人の形を得て、我々の前にいる訳だ——本来いた筈のカルデアを大きく離れてね」

『そう……最大の疑問なのは、そこだ』

ムネーモシユネーは、カルデアの技術と英霊の叡智を結集させたオーパーツにも等しいモノで、持ち出しなんて到底あり得ない。そしてもう一つ、ダ・ヴィンチが疑問視したのは、大前提としてムネーモシユネーは『完成していなかった』のだという。

『計画が頓挫してね。まあその所為で他のデータと共に、ストレージの片隅で埃を被っていた筈、なんだけど。それがいつの間にか持ち出された上に『完成』されて起動されていると来た』

「——」

「成程……では私は、敢えてこういう言い方をさせてもらう——君がこの特異点に連れてこられて、そして、連れてきた相手に望まれた役割は何だい、ムネーモシユネー？」
即ち。

彼らには、未完成のムネーモシユネーを強奪し、そして『完成』させてここへ連れてくるだけの必要があったのだと、私は勿論、恐らくはダ・ヴィンチもそう思ったのだと思ふ。

だがしかし。

「……………いいえ……………因果関係が、違います」

「なに？」

ムネーモシユネーは、その推測に、首を振った。

「彼らは『私』を欲していたのではありません。欲しい『結果』を求めた『過程』で私を回収したに過ぎません」

『……………君が、過程？』

「彼らが欲していたのは……………ここへの道筋です。その為の『ビーコン』として、私が選ばれたんです。彼らは……………『もう一つの私』を通して、私に干渉して来たんです」

第七十三章・裏：塔に秘されしモノ 陸

「……『もう一つの私』を通して、私に干渉して来たんです」

『もう一つの私?』

ダ・ヴィンチのオウムのような繰り返しに、ムネーモシユネーは、力なく頷いて見せてから――

「そもそも、私は……カルデアの奥、本来、誰にも知覚されていないような所に、死蔵されていたモノ。回収するにも、カルデアが察知できない訳がありません」

『ああ。我々だって、そんな懐に潜り込まれて気づけない程は間抜けじゃない』

「ですがそれにもかかわらず……カルデア側に一切把握される事も無く『私』に敵は接触して来た……」

カルデアの能力は、この特異点で見て来たとおり。現地へのサポートに関して言えば、正直他の魔術的組織の追隨を許さない程に見事なものだった。

人理最後の砦は、伊達ではないという事か。しかしながら、そんな組織を相手にしてなお敵は、目の前のムネーモシユネーを篡奪せしめた。

「相当インチキ染みたやり方をした、と言ったところかな?」

「正直……こうして被害を受けた私も、到底信じられてはいない、のですが……敵が先ず接触したのは——『並行世界の私』、だと思われれます」

だがしかし。彼女の口から紡がれた言葉は、インチキ、というか魔術畑の我々にとつては、最早トンチキと言つていい程のワード。

「……ほー……平行世界、と来たか」

「はい。我々の世界と『似て非なる隣り合う世界線』……」

——例えば。

目の前の彼女は、今こうして力なく地面に伏して現状を話している訳なのだが……しかしながら、もし一つ何かが違えば彼女がこの世界の核として、そして黒幕として、我々を襲っていたかもしれない。

分岐した可能性の世界、IFの世界、それを並行世界と呼び——魔術の世界では、昔からそれなりに知られた探求材料でもある。

ではあるのだが。

「いやー……特異点やら『限定的な時間遡行』やら、凄まじい事は幾らでも起きてるとはいえ、遂に並行世界の住人か。どうだい義兄上、ご感想は」

「驚きというしかない」

しかし、有名だからと言って、その並行世界へ干渉したり、移動したりするのは決し

て容易い事ではなく。薄壁を隔てて自分達の隣に在れども、しかしそのほんのわずかな壁はこの世の何よりも越えがたい絶対的な『隔たり』なのだ。

「この一件に『並行世界』という要素が絡んでくるならば、それは最早『魔法』の領域の話になってくるのだが」

それこそ、この世界で並行世界に干渉、あまつさえ移動できるとすれば。第二魔法に到達した、この人理焼却という事態の中で尚、多分どつかしらで飄々と生き残っているような魔導元帥殿だけだと思っていたのだが……

「……当然、自由に行き来できる訳ありません。たった一度、しかも無数の世界を行き来出来る訳ではなく、無数の世界の内、『一つ』と『一つ』を繋ぐことしかできない」
「それとても、普通のやり方では到底為しえないだろう、一体どうやって……」

「——そうか、それで君なのか！ 観測を得意とする『ムネーモシユネー』！」

——真っ先に得心したのは、やはり彼女の開発者であるダ・ヴィンチであった。

「どういう事だね？」

『並行世界への干渉が難しいのは当然だが、しかしそれでも『切っ掛け』を作れば、決して不可能という訳ではない。それは第二魔法の实在が証明してる』

「まあ、それはそうだが」

『ムネーモシユネーは、レイシフトといういわば限定的な『タイムスリップ』内でも、マ

スターを決して見失わない様に設計されている。彼女の観測は、『縦』の観測を可能としているんだよ。となれば……』

「——そうか、彼女に『横』……並行世界の観測をさせるのか！」

先ほどまでは何処か吹っ飛んだ会話をしている、と思っていたのだが。しかしながらそう考えれば決して不可能ではない。

時間進行
レイシフトに対応し得る程の技術ならば、魔法に限りなく近い難行への助けにだとも、十分なりえる

魔術の世界で、見る、発見する、観測する、というのは重要な意味を持っている。

もし並行世界を『観測』する事が出来たのなら。それは、その世界へ干渉する為の大きな手掛かりになり得るのは間違いない。

『並行世界にて……我々とは別のカルデアから強奪したか、それとも別の方法を使ったか。いずれかの方法で、敵は『ムネーモシユネー』を手に入れた』

「現実な考えで行くのであれば、『繋がり』が強ければ強い程、並行世界の観測が上手く行く可能性も上がる。故に、観測して足掛かりとする為の『ビーコン』が……」

「目の前の君、この世界の『ムネーモシユネー』だったという訳だね？」

「……はい」

話が見えて来た。

彼らが目の前の『ムネーモシユネー』を選んだのは、彼女の力が欲しかった訳ではなく並行世界の『同じ存在』という縁を辿って、観測をよりやり易くするため。

彼女そのものが狙いだったわけではない。分かりやすく言えば、見つけやすい目印が彼女だっただけだ。

そしてどうやってカルデア内のムネーモシユネーに干渉したのか。

単純だ。『並行世界のムネーモシユネー』という反則染みたマスター^触キー^媒を使ってあらゆる妨害をスルーして、直接手に入れた。

魔術とは万能ではないが、しかしある程度の無茶は利く。必要なモノさえあれば。

「そして、一度目印として利用し、そして回収も終えたビーコンを、こうして有効活用して作ったのがこの……特異点、という」

『ムネーモシユネーは、『記憶』、『記録』に關してもスペシャリストだ。彼女と聖杯、そして本造院君の心を利用して、この『記憶』から作られた特異点を……成程』

「——そちらの、金髪の方の問いにお答えするなら……」

「君の役割はこの特異点が成立した時点で、終わっている、か」

この記憶を利用した特異点は……初めからこういう形をしていた訳ではない。ムネーモシユネーという存在を利用したからこそ、こういう形になった、という方が正しい。要するにここは、敵が自分たちの後始末代わりに『リサイクル』を行った結果、作

られたという方が正しいだろう。

「……私はここへ、連れてこられました。その際、私を捕まえた彼らの狙いが……ここを構築する為の記憶の持ち主……あのマスターだというのを、聞いたんです」

『だから目を覚ました時に、警戒を、と』

「その情報を、活かす事は、出来ませんでした……」

ただ、不思議だったのはとムネーモシユネーは続け。

——なんと最早、ここまで来てしまえば『放つておくだけ』とは……口惜しや！

自分を連れて来た男は、そう言っていたのだと、話す。

義兄上の方をちらりと見れば、軽く頷いて返すのが見える。彼が標的とされている

事、そして『傷つける』事が目的でない事は確認できた。

『……反応からして、そうである事は凡そ想像できてたけど。やはりあのドームは、本造

院君を傷つける類のものじゃない、という事はコレで確定、か』

「——その割には、ほっとした様には見えないけれど」

『疑念は余計に深まったからね。ここまで大掛かりな特異点を作って、最後にマスターを隔離して……『放つておくだけ』と言いつけられたら』

——そう、結局の所、それだ。

こんな風に彼を閉じ込めて、何をするつもりなのか。『放つておくだけ』。相手の思惑

も透けて、見えないモノが見えたというのに、逆に分からない部分は増えたのだから、コレは非常に気持ちが悪い。

コレだからこちらから見えない者、物、モノというのは始末が悪い。大抵頑張つて水面下の見えない部分を一つ何とか明らかにしても、こうやって芋づる式にどんどんと更に分からなかったり、厄介だったりするモノが出てくるのだから。

「……………ですが、申し訳ありません。その疑念を晴らすお手伝いは、どうやらできない模様です」

「あ……………」

「体が……………」

しかし、思考はそこまで。

そこまで話し終えた目の前の女性の体が、青い、燐光となつて少しずつ解けていくのが、見えた。

「私の体は、仮初のもの……………そんな不安定な体で、この特異点をどうにかしようとするの抵抗もしましたので、無理をしまして……………もう、限界が来てしまいました」

『———そうか、もしや、その三人を喚んだのは』

「……………縁でした。どうしてか分かりませんが、その貴方……………黒髪の貴方とは、縁があった模様で……………どうか、ここへ呼び寄せることが出来ました」

そう言つて、ムネーモシユネーが見つめたのは、義兄上だ。どうやらこの特異点に彼を招いたのは、彼女の仕業だったらしい。そして、そこからやはり芋づる式に、私達も呼ばれた。という事なのだろうか。

敵に利用されても尚、彼女は最後まで抵抗した。我々を召喚するという一手で。

この言葉と目の前の景色は……何よりも、彼女の言葉を信じるに足りる一言だと、流石に思う。

「すみません、あまり、役に立てなくて」

『いいや……ありがとう。ムネーモシユネー。君の情報で、少なくとも敵の影くらいは見えて来た気がするよ』

「……そう言つて頂ければ、十分——」

最後に、造物主と言葉を交わし、少し微笑みながら。

ムネーモシユネーは小さな輝きを残し、その場から消えていった。

第七十三章・裏：塔に秘されしモノ 漆

その後が続いた無言の時間は……恐らく、ダ・ヴィンチにとつては黙禱代わりのモノだったのだろう。それを義兄上が察していない訳もなく。当然私だつて、流石にこのタイミング位は空気を読む事はする。

『——よし……さて、ムネーモシユネーの言つた事を踏まえて、もう少し話をさせてくれないかな』

「……もう良いのか。もう少し位、悼む時間をとつても罰は当たらないと思うが？」

義兄上の声に、何時もの様な重苦しさ、という辛気臭さは見られない。誰かを氣遣う優しさというモノが明確に見え隠れしているのが分かる。こういう所は、どう足掻いても魔術師らしくはなれない義兄上らしい。

しかしながら、そんな氣遣いに対して、寧ろそんな声をかけた兄上よりも全然氣丈そのうにダ・ヴィンチは声を返した。

『いいや、自分の発明した物……いわば、我が子があんな根性見せたんだから、そりやあやる氣も出てくる。この特異点が終われば、君達も消滅するんだ。その前にこの二人のブレインと話せることを増やしたい』

「……そうか。なら、良いのだが」

その二人の様子があんまりにも真逆なもので、面白くなってしまう。今度は私の声が弾んできてしまう。こういう所は私の悪い所だと思う。まあ治すつもりも毛頭ないのだけれども。

「おいおい。義兄上の方が落ち込んでいてどうするんだい」

「生憎、貴様も知つての通り、私は魔術師としては到底二流なのでな。こういう落ち込み方とてする」

そして結果として、辛気臭い空気になつてゐるのは兄上だけ、という状況が出来上がる訳だ。置き去りの兄上が実に面白い。

「——それで、私達と話したい事つて言うのは？　ダ・ヴィンチ殿？」

とはいえ面白がつてゐるばかりでもいられないだろう。善きものが、ごく当たり前に頑張ろうとしている。別に私とてそれを否定する程性格は悪くない。特異点の解決、という仕事も。まだ、こうしてここに居るなら、終わつてはいない。

『——ムネーモシユネーは、敵が『並行世界』からやつて来た侵略者だという事を教えてくれた。その上で、何故ここまで彼を傷つける訳もなく付け狙うのか……今まで、ずっと疑問ばかりで、何もメスを入れなかつたポイントだ』

「まあ普通に考えれば、傷つけて弱らせてから攫つてしまふのが一番手つ取り早いのは

間違いないが」

「……貴様ら……ああもう」

切り替えが余りにも早い事に辟易とした、という表情をしていたが……しかし、直ぐに兄上も表情を切り替えて、口を開いた。

「——繰り返し様ではあるが、傷をつけてはマズい理由があるのだろう」

『それが特定できないから、この議論は先へ進めなかった。幾らでも理由は想像しようがあったからね』

「しかし、ムネーモシユネーの証言から、今度はある程度は絞り込めるかもしれない。違うかい？ 義兄上殿？」

こういう時、義兄上は徹底的に『相手』の人となり調べようとする。

相手がどんな人物であるかを具に観察、解析、分解して、どんな動機からどんな思考に移り、最終的にどんな行動を起こすかを、割り出すのだ。

今までは特異点の情報、そして敵の今までの行動から、ギリギリ『カルデアのマスターをどうにか傷つけずして手に入れようとしている』という事しか分からなかったが。しかしながら……今、更なる情報が手に入った。

「そうだな。先ず順を追って解体していくと……相手は——間違はなく、当意即妙を得意とするタイプではない」

『と、い、う、と？』

「根拠はいくつかある。まず、我々の存在だ」

義兄上曰く——敵は、ムネーモシユネーの最後の抵抗である我々に対し、特別な対応という事をせず、あくまで自分たちの目標を果たすために一貫して行動していた。シャドウサーヴァントに黒髭、ヒュージゴーストに至るまで。全ては、我々の対策として置かれていたというより……元々から想定していた特異点の防衛機構に間違いはない

「そして、先ほどのムネーモシユネーの証言もそうだ」

敵は、念入りに、念入りに『並行世界』からの干渉という難行へと近づいている。直接干渉する為の手段を構築する……という『不可能を突破する』やり方ではなく、『観測』を得意とするツールを先ずは手に入れて、『不可能を可能な範囲に落とし込む』という所から始めている。

「順序だてた、お行儀の良いやり方——言い方を変えれば、古い、定石通りのやり方ともいえる。だろ？ 義兄上？」

「その通りだ。そして、こういった作戦を立てる人間、というのはアドリブよりも作戦自体を落ち着いて遂行することを優先する」

にやり、と浮かべた薄い笑いには、何処か確信じみたものが浮かんでいる。

キツチリとプラン通りに、型に嵌めて行動する。そんなやり方が透けて見える、お役

所仕事臭いというか。融通が利かないというか。こういう事が得意なはずの兄上でなくても見えてくる。相手の思考が。

「故に、この特異点の仕掛けやカラクリには、全て意味があると考える方が自然と言えるだろう。たとえば多少のイレギュラーがあつても、無視して遂行できるほどにだ」

『——この塔に入るのも、聖杯らしきものが一切見られず、特異点が出るためにここへ入り込まざるを得なかったからだしね』

「多少、道中での問題が解決しやすくなったとしても、大筋は変わらない様に……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～のように、念入りに練つて。後は『何もしない』事を選んだ」

何とも分かりやすい。自分が何か余計な事をする事で、自分が丁寧に築き上げたプランに何か歪みを生んでしまう事を恐れている訳だ。

何もかもを自分の手中で操れる——と勘違いするタイプが良くやる。

『ではこれらの要素から、大軍師殿が推測するこの特異点の意味とは？』

「——霧の都、ここに至るまでは『試し』の意味があつたように思える」

「まるで一つ一つを攻略すれば、何れここに至る様に——それは義兄上も言っていた事だろうと思う」

「しかしその試しに一切の容赦はない……：：：：：：：：：：～妥協する事はしない真面目なタイプである事は……でも伺えるか」

その試しを突破できない程に弱くては務まらない——では強さを必要とする事、例えば分かりやすい所で言えば、『戦力として引き抜く』のが目的なのか？

「それは違う——そもそも、人間をどれだけ強化した所で……分かりやすい所で言えばサーヴァント等に及ぶべくも無いのは、そちらも分かっていると思うのだが」

『向こうは聖杯でサーヴァントを喚べるんだから、態々人間を使う意味は薄い、と』

キツチリとした手順を踏んで動くのを得手としている様な人間が、そんな無駄な事にここまでの大掛かりな事をするか。

それは違うと思う。そういう人間は、得てして無駄な事をしたくない。自分の思う通り、最も『効率的』で『完璧』な手段で策を練ってくると思われる。

「であれば他には何がある？」

「そうだな——太古から強いモノ、または価値の高いモノ……そう言ったものが必要とされてきたものと言えども一つ」

——生贄。

兄上の口から呟かれた言葉は、先ほどよりも低い声に乗せられていた。

「例えば強い霊媒の血、例えば処女の乙女、そして……強い戦士なども、だな」

成程。

彼が『先祖返り』の力を発揮できるほどの強い霊媒体質である事は、まずもって疑い

ようがない。その特別な血と、人理修復を成し遂げて来たマスターとしての強さ。成程、戦力としてカウントするよりは、よっぽど説得力がある。

だがしかし。

「だとしたら、もうこのタイミングで誘拐しても良いんじゃないかい？ 義兄上」

「——生贄、と呼ばれるモノの中には、供物であったり、他には『触媒』として神に捧げられる事もあった。神を下ろす『巫女』とは違い、完全に『生きた人形』に仕立ててからそこに神を下ろす——この世での肉体として」

『その場合には、先ずは精神的にへし折ってからじゃないといけない、か』

三人で、ちらと白い霧の塊に視線をやる。ダ・ヴィンチの方で、未だ異常が検出されないというバイタル。一切『ダメージを受けていない』という結果が、今も検出され続けている——のだが、しかしながら。

殺される事はなく。傷つけられている事実も無い。それでも、彼は隔離された中で間違いなく『何か』が起きている。

「——精神的なダメージについては観測できないのかね」

『無理だ。我々はあくまで体のバイタルの変容から、彼の異常を見抜く……身体的なダメージは一切見逃さないが、体に一切の異常を及ぼさず、動悸と言った異常もない。そうなってくると』

「……全く以て、分らない、か」

胸の奥から、ため息染みた結論を吐き出した——その時だった。

僅かに、白い霧の端が、少し揺らいだ気がして。それに、誰よりも近場に居た、紫式部が即座に反応したのが分かった。

——否、我々が見ている景色ではなく、別の『者』に、彼女は反応したのだと思う。

「——マスターっ」

霧の塊の中、その中から滲みだす様に出てくる影に、既に紫式部は走り寄っていた。彼女には分かっていたのだろう、サーヴァント故に。

ややあつて、霧の中から出てきたのは、霧の中に巻かれた時のまま、黒いスーツ型の礼装に身を包んだマスター・本造院の姿。

ゆらり、ゆらりと揺れながら。しかし、足取りはしつかりとしたモノで。何処か傷ついた様子も見えない。

駆けよつて来た式部に対して、笑いかけているのがこちらからも見えている——

「師匠！ ライネスさん！」

「……ああ、今行く」

「義兄上」

「分かっているさ」

だが。

その紫式部を見つめる目が。飲み込まれるまでの、ごく当たり前の人の目の輝きではなくて。

何処か水あめの様に、透き通りながらも何処か光をゆがめたモノに変わっているのは、余りにも分かりやすかった。

第七十四章

特異点崩壊確定な実況、はーじまーるよー。

前回は……特には……な……にも……な……か……つた……つ……！（死にかけ並感）
嘘ですけど（掌大車輪）

まあそりやあね！ 敵の懐に潜り込んでしまえば罠の一つも嵌りますよ！ でもそれを無事に（所説）突破して、取り敢えずムネーモシユネーおねいさんを救出しました。ホモ君が何か捕まってデバフ貰いましたけどまあ誤差だよ誤差！！（大嘘）

でもムネーモシユネーおねいさんはあつという間にほどけて消えてしまいました……どうやらこの特異点を解消するために、頑張つて下さつたようで……

……えっ？ ムネーモシユネーおねいさんとは何者だつて？ ムネーモシユネーおねいさんを知らねえとかお前F G O エアプかよ……（誹謗中傷）

彼女を分かりやすく言えば……機械ツ！ スチームパンクツ！ 巨乳ツ！ 美人ツ！ クール系ツ！ とかいふ男の子大好きお得パツクみたいなもんです。後若干ヤンデレ気質も持っていたりします。なんてこつた、コイツはハンバーグカレーみたいなもんじゃねえか……（個人の感想）

まあ真面目に話しますと、とある特異点においての黒幕みたいなもんです。イベントのネタバレになりますので詳しくは言いませんが、私、イチオシの女性キャラです（正直）

『——ムネーモシユネーが消滅した後、聖杯が出現したのが確認された。コレを回収すれば、この特異点は崩壊する』

『ふーむ。意外にあっさりとは決着がついたねえ——？』

まあそれは兎も角。

やったぜ!!! コレで特異点攻略や!!! はいという事でね。巨大ヒュージゴースト君が実は中ボスじゃなくて大ボスだったっていうね!!!（半ギレ）完全にただのイベントボスやったやんけえ!

まあ確かに全部が一撃必殺の打撃ではあったのは間違いないですけれども、にしたってそんなギミックボスがラスボスで貴方……やる気イ!

まあそこに文句言ってもしょうがないですけれどもね。とはいえ最後が全部イベントで終わるって言うのが、余りにもまさかだとは思いますが、ともかくもね。

『では聖杯の回収をしてくれ。レイシフトは、まあ大丈夫。ここまで到着した時点で、通信他全ては完全に復旧したんだ。君を問題なく連れ戻せると思うよ』

まあね。いっつも恐ろしい特異点の強敵とギリギリの戦いをし続けるんじゃないかも

君の身が持ちませんよ！　ホモ君は藤丸君とかいう完璧主人公と違って余りにも足りないものが多い主人公ですので……死ぬときは死ぬんだよオ！　（当然の帰結）

まあその代わりに、さっきばつちりデバフを頂きましたから。

実は、この特異点というかで、それを貰う事はある意味想定していたとか……第四章では藤丸君も、キツチリカツチリ敵の黒幕（猫被り）から呪詛を食らう訳なんですけれども。見るという行為は魔術世界で云々。

それに合わせてなのか、此方の主人公も第四章辺りで必ず何かしらの『ダメージ』を貰うんですね。イヤーキツイっピ！（正直）イベント特異点でも必ずや食らうとかスタツフの徹底した難易度上げを感じますねえ!!!

それが一体何なのかはそれぞれ違うんですけども、今回は……あく『呪詛系』だあ！　藤丸君と一緒に！　つまりホモ君の昏倒が確定いたしました（半ギレ）藤丸君も監獄戦艦するんやしホモ君も対魔忍くらいせいという事でしょう（意味不明）

まあその要望に応えまして、取り敢えず目の前の聖杯を回収しておきましょう。下手なボス戦が無いのであれば、それに越した事も——

『——ンンンンッ！　いやはやいやはや、そのようにあつさりとここから立ち去られては興ざめ甚だしく！』

『……の声は……?!』

ツハアアアアアアアア……（クソデカため息）

『折角ですので、もう少し楽しんでいかれよ、カルデアの皆々様ア!』

『何っ、聖杯が……!』

『うわっ!? リンボ氏!? まさかこの空気読まないご登場の仕方は間違いなくリンボ氏ではございませぬか!』

もうこの、黒幕 確 定なボイスを聞いてしまうと、この後に非常に『楽しい』事が待っているのを凡そ想像できてしまうと……

あーあー聖杯が何か、どす黒く汚染されて浮かんでいきますよー……この演出で次に強敵が来ない、とかは流石に嘘だと思おうのですけれども……

『——成程、最後の最後にトラップが待ち受けていた訳か……!』

『ふん、些かアドリブが利きすぎている気もするが——胡散臭い君の独断かい?』

『ンンン——胡散臭いとは心外』

お前が胡散臭い以外のどんな感想を抱かれるというんだ（憤怒）

『されど、まあ、そうですな。些かと我が主は念入りな仕掛けと、準備を良しとするお方なのですが……拙僧からしてみると、『些か』以上に鈍重、亀の如くに見えてしまうのも確か。もつと手つ取り早く行ってしまいたいと思うのが、人情!!』

あの一その雇い主の悪口を、今しつかり言っていらいしたんですけれども……それは大

丈夫そうですねえ？　もしや分かっついていらつしやらない？　コレがカルデアを苦しませている強敵……？　嘘でしょ……？　（大逃げUM娘）

『良いのかい？　君の雇い主なんだろう？　そんな人の悪口なんて言つて、怒られないのかい？』

『いえいえ、今回の一件に関して言えば、主に秘密裏に進めておりますが故——一切バレル事は非ず！　正に！　完璧！』

『それを言つちやつてる時点で答えてるような物じゃないかい君』

うーんダ・ヴィンチちゃんの言っている事が完璧な正論で草オブ草ですよ。

というか、お母さんに隠してたら全部ないになるんや！　とか言つてるの完全に小さい子の理屈なんだよなあ……怒られるつて自覚している時点でダメでしょ。もうちよつと頭働かせて、どうぞ（辛辣）

『ふふふ……そして！　そしてそして！　こうしてこの中に閉じ込めてしまったならば捕まえるのも最早容易に違いなく！　我が『大怨霊』の力を發揮するのに一切支障はありませぬ。存分に味わっていただければ、と——！』

しかしながら、そんな全然怖くないように見えてしまう謎の術師様でも、厄介なのは間違いございません。

そう……ここは、本来突破できない（一部例外アリ）巨大な塔の中。入つてしまえば、

入り口が閉じれば完全な密閉空間。そしてどうやらあの巨大ゴーストはこのボケナス術師様謹製だった模様で。やっぱり量産型だったじゃないか（憤怒）

『——成程、逃げ場の密閉空間で巨大な敵と戦わせる。態度は兎も角、結構いやらしい戦い方をしてくれる』

『先ほどは上手い事誘導されました、我が力を発揮しきれぬ内に無様に粉碎されましたからなあ、この場であれば、そのような小細工など、無用！ 無意味！ 無駄ア！ 真つ向勝負で捻り潰してくれましょうぞ！』

性質を利用して、上手い感じにガン処理されたの、割と根に持つてて草 of 草ア！ 相当の自信作だったんでしようねえ！ 絶対にどうしようもないって思ってたんでしようねえ！ でも実際ギミックボスにされるくらい厄介だったのは間違いないですねえ！

『術者の癖に真つ向勝負を望むとか、君、根本的にズれてないかい？』

『ははは。拙僧、血の気の多い後方支援故に致し方なし』

『それを後方支援とは言わん』

『ンンン……兎も角！ カルデアのマスター以外は必要とはしておりませんが故——邪魔者の皆様は、ここで！ おさらば！』

くつ、このリンボ野郎……！ ライネスちゃんとロードに二人して論破された挙句そ

れで逆ギレで強襲してくるとか、あんまりにも質が悪い！

しかしながらそれでも、この塔の中には召喚されるんですよ……出てきましたよお、再び出ました。

『我が術式、将門公の伝説を再現したもの——それはもう解析されているようですが、ならばその強度もご存じでしょうなあ、小癩なる魔術師殿！』

『……私の得手もすでにご存じという訳か』

『……ここではその厄介な『槍』を使う暇も無く、我が呪霊の呪力に蝕まれて、それで全てお終い!! ご安心を、カルデアのマスター、貴殿は一応、治療だけはして差し上げますので——』

『ま、とはいえ問題は無い、かな? イケるね? グレイ』

『ああ。レディ。君が居るのであれば問題はない』

『……えっ?』

『……ンン?』

……ホワイツ!? ダニット!?(蛇足) あの、さっきまで『真つ向勝負とかヤバイですよ!』とか言ってた相手だというのに……その脅威をコロつと忘れたかの如き『グレイならいけるやろ』宣言に思わず敵味方陣営問わず大困惑なんですけれども……?』

『し、師匠……っ!』

『そう焦るな。レディ。今の君はさっきの君とは違う』

『ここが何者に支配されているものならいざ知れず。そういう様子でもない……じゃあもう後は、君の、グレイの力を思う存分振るうだけだ』

……という事で、妙に自信満々な師匠方と、明確に『やべえよ……やべえよ……』となつているグレイちやと私。さて、次回、彼らの策略が火を噴くのかは……その他一切の事は分かりません（無責任）

第七十四章・裏：輝ける聖なる槍

「しかし、本当に君もまあ、馬鹿だと思うよ」

私が、少し嘲笑う様な声で言ってしまったのも、仕方ないくらいには、ね。

『ンンン……馬鹿、とは、随分な言われようです事で！　もしやご自身の現状を分かかっておられない？』

「いいや？　今、目の前に厄介な化け物が現れているのは分かっていると」

だって、目の前にその原因が堂々と聳え立っているのだから、嫌だって理解させられるというもので。

我々を容易に呪い殺しかねない巨大な怨霊。まあ確かに我々は先ほど、アレとの正面衝突を避けて戦っていた。それを覚えていない訳ではない。当然、それを意識させるため、威圧の為に、不意を打つでもなく、こんな堂々と目の前に出しているんだらう。

——最後の最後に現れて、全てを搔つ攫う、的な黒幕ムーブをしておいて、余りにもやり方が脳筋過ぎる気もするが、それはまあ今はいい。

『その割には——先ほどの発言といい、今の態度といい、随分と余裕そうですね、お二方とも。今、急いで結界を張って防御を硬め、カルデアのマスターと共に時間稼ぎして

いる割には」

「ああ、コレはただの時間稼ぎだ——レディが覚悟を決めるまでの、な」

「彼女は幽霊にとても弱くてね。それは体質的なモノだ。震えを抑える位の時間はくれたって良いんじゃないかな？」

実際、向こうから見れば、圧倒的に不利に見えるのは間違いないだろう。こちらはアレからの呪詛を凌ぎ、死ぬまでの時間を伸ばしている様にしか見えないのは、確かに間違いないと思う。

「——式部さん、大丈夫そう？」

「正直、アレだけの怪物を相手に何時までも持つモノでは……」

「そう……んじや、ゴルゴーンさんとその船長の時間稼ぎ次第って事か……はっ、随分とまあクソみたいな追い込まれ方だ事。囮作戦でもやるく？」

「するな。邪魔だ。愚か者」

「あー、すみません。余計なこと言つて」

陰陽術を元にした結果を、しゃがみこんだ紫式部と共に維持しつつ呪詛を凌ぎ。

その間にゴルゴーンの光線、両手に構えた黒髭の拳銃で何とか敵の大振りな一撃をけん制している。あくまで時間稼ぎ、そんな風に向こうからは見えている、だろう。

「——それに関しては何っ！ 拙者も同意見なんですけど!? 完全に拙者達つてチエスで

言う所のチェックメイトにハマってらっしやらない!? 大丈夫!?

『ンンン、流石黒髭殿! 拙僧と全く同じ意見とは……どうです? 今からでももう一度程裏切つて見ませぬか?』

「おにやのこいねーから却下じやボケエ!」

『左様で——ふんっ! 呪詛ッ!』

「狙い撃つなあっ!?!」

……しかしながら別に、今も男同士の間抜けな漫才をしている様な、あの術師が見ている程に、我々の現状が苦しい訳ではないのだ。それは、私と義兄上の共通の意見だろう。何故ならば、この中でも最も信頼できる彼女が、今なら全力を發揮できる。

「んで? 実際の所、こうやって悪あがきしていると勝てんの? お二人さん」

「ああ」

「——あつそ。なら精々、無駄にじたばたしてみようかな。どうせ俺に何ともできないなら、灰色の奇跡を信じてみるのも、まあ一興でしょ」

本造院が、そう言つて視線を向ける先には——グレイがいる。

目を閉じて、胸に手を当てて……何度も、繰り返して深呼吸しながら、気持ちを落ち着けているグレイの姿が。

ただでさえ、少々と自分への信頼感のない彼女だ。そして特上の霊感体質も相まつて

目の前の化け物は——吐き気がするほど、きつい筈だ。

先程、彼女がああな化け物相手に、遠距離から援護に徹していたのは……その為だ。物理的な距離を取らねば、彼女はあな化け物染みた敵を相手に、戦える状態ではなかったと思われる。

実際のところ彼女が対霊戦闘を得意としている事を加味してもそれがマイナスになつて、近場で戦わせてもただ無意味にグレイを失つていただけだ——だが、だ。

「どうだいグレイ——改めて聞くけど、やれるかい？」

「無理はしなくていい。不可能であるならば、他に方法は幾らでも——」

見開いた彼女のその目には、何時もの弱気さなんて。

何処にも存在してなんかいなかったのです——なんて、言えればよかったけど。やはり残っている。少しだけ心配そうな揺らぎ。それでも。

「……いいえ、アツドも、やれる、と言つてくれました」

「へへへっ、どれだけの影響を及ぼすかは知らねえがな!? まあ普段よりは、マシなんじゃねえかつてなあ!!」

「何時もの拙より——少しだけでもマシなら、頑張つて、見ようと思います」

そこには確かな『戦う』意思が一本、大きな柱の様に、堂々と立っているのが見えた。それならば、もう後は彼女に任せても良いだろう。ああ本当に。

寄りにもよって、この塔に我々を閉じ込めて勝負を仕掛けるとは。確かにやり方自体はそう間違っていないが——しかしながら、それでも私は致命的に間違いだつたと酷評するしかないのだ。

『その様な、僅かな輝きでこの『大呪霊』の闇を払えるとても——!!』

「ここは形だけとはいえ、何を模しているのか……コレを態々構築したのは君達なんだけども、それは分かつているのかな？」

『——ええ、ええ。当然！ 世界を繋ぐ楔！ とある島国にて裏切り者を突き刺した誇り高き騎士の王の持ち物。あの『人工知能』の記憶から作り上げし『偽物』の『贋作』です。しかししながら。それでも！ この強度！』

「そうだ。ここは、ロンゴミアントの内部。それがどれだけ偽物でも。その姿を真似しているというのは——どれだけの意味を持つか。魔術……否、ありとあらゆるこの世の事象において、『模倣』というモノが大きな意味を持つのか、知らない訳でも無いだろう。だというのに。」

「所で——彼女は、一体どんな武器を有しているのか。知らない訳じゃないよね？」

『ええ、それはもう。魔力を食らい、そして神秘を払う、十三の——あつ？』

「そうか、知っているのか。それなら話は早い筈なんだけれどもねえ。まあ、このキツイ一発は講義代だと思つて貰えれば」

「アツド……お願いッ！」

「ギャハハハハハッ！ コイツあお祭り騒ぎだッ！ 『偽物』と『本物』のコラボレーションとくりやあ——特大の花火を打ち上げるしかねえわなア!!」

結界の中で、天に掲げられた彼女の掌の上で『グレイの相棒』が起動する。

本物のロンゴミニアド。そして偽物のロンゴミニアド。二つの大槍は同じものだ。その輝きはこの中でだけは更に——輝きを増す。

ここは、本物を似せて作られた巨大な塔の中。それは最早、『神殿』と呼んでも構わない程に、彼女にとっては『相性のいい場』となる。

「凶悪な大呪霊——如何にグレイの渾身の一撃でも、一発で倒せなければ、という不安が付きまとう程の大物だ。それはお見事だよ。だがね？」

「レディの力は、ここではさらに跳ね上がる。その可能性を考えていなかったのが最大の失態だと知れ。アイツを追い詰めたあの騎士の力は——伊達ではない」

「今度は、ワンパンチで沈めてくるぞ」

「——疑似人格停止。魔力の収集率、規定値を突破。第二段階限定解除を開始」

その手の中で『匣』が輝き——その中に秘められた輝きが、今一度隆起する。

否、その輝きは、更に強く、今まで以上に、この塔の中を黄金の光で満たしていく。眩しい程の黄金の光に照らされて、暗い巨影がたじろいだ。

分かるのだろう。あの輝きの強さが、自分を消し去る事が出来るだけの、強大な出力を持つているのだと――

直後、黒い斬撃か、それとも打撃か。何れかが巨大な大呪霊の量の腕に寄って叩きつけられたが、しかしながら。時間稼ぎ用に無駄に硬く作つてあるのだから、そうそう突破も無理だろう。そう思うと、ちよつと笑えてくる。

「――Gray……Rave……Crave……Deprave……」

『シンン――十三の拘束を解除しないその状態で』

「Grave……me……」

『最早コレは、神霊級の……！』

『Grave……for you……！』

……恐らくはそんな事は無いのだと思う。しかしながら。

これは、利用され尽くされながらも、それでも足掻いた『ムネーモシユネー』の、最後の抵抗だったのかもしれない。

輝きは一点に集い、渦を巻き……そして、一つの形を成す。

それは最早、槍ではない。強固な外壁に包まれた槍の如きエネルギー塊。それは最早『砲』と呼ぶべき程の威容を誇っていた。

「聖槍、抜錨」

『……ンン、ンンン……い・宜しい、今回は、今回ばかりは、拙僧も負けを認めましょうぞカルデアの皆様。ええ！ ええ！』

『最果てにて——輝ける槍——！』

解き放たれた輝ける大槍が、此方の結界を叩き割り——真つすぐに、暗い影へと直進する。それを必死に阻む為か、ヘドロの様に煮詰められた呪詛がその両手から叩きつけられるが——しかしながら壁にすらならない。

呪いの沼を一瞬に縦に二つに突き割り、干上がらせて。

それでも尚勢いは衰えぬままに一直線に向かつていつて、そのままに——目の前の影に大穴を、こじ開けた

第七十五章

その正体は？ な実況、はーじまーるよー

ねえねえどう思います皆さま!? グレイたんの一撃で砕け散りましたあの哀れな骸骨の姿をよオ！ ンンンツ！ 正に！ 完勝！（にっこにこ） いやはや凄い、完全勝利って奴ですよ！

いきなりNPフルチャージされて、たつぷりバフがかかって、そしてエライ宝具の威力で一瞬で特大ゴースト君が蒸発した時は笑っちゃいましたよお！

とはいえ理屈が分かるかって言われると分からないんですけれども……まあ要するにグレイたんが力を発揮するのに最も適している場所に、リンボ氏は我々を閉じ込めてしまった模様です。えっ!? 自滅……て、事……う？

『——それで？ 今の御気分は如何かな？ 術師殿？』

……」
んで完全に自滅やらかした男のクツソ哀れな姿が此方になります。

黙っちゃってさあ……（煽り） もうちよつとなんか言いなさいよ（拗ね男） お前の悔しがる表情が見てえんだよオ！（ド外道）

『敗北を認めただから、何かしらご褒美くらいくれたって良いんじゃないかい?』

『ン……ンンツ! 余りにも! 厚顔無恥!』

『おや怒られちゃった。出来るだけ搾り取ろうと思ったただけなのに。ねえ?』

『ねえではない。流石に今のはそう言われても文句は言えんぞ』

……ライネスさんが煽る処の騒ぎじゃないんですけれども(困惑)

どうしてポツコポコにした敵から更に情報を絞り出そうとしているんですか(恐怖)

普通だったら『さっさと去れ』位で終わらせるところを、死体蹴りどころか死体を利

用しようとしてるんですけれども。ネクロマンサーかな?(専攻違い)

とはいえ声だけの術師殿もまあ『んな事する訳ねえだろボケナス』な声色なんで絶対

に無理でしょうけども……。

『——まあいいでしょう。永遠にリンボ、リンボと名乗り続けるのも些かと味気ない。

となれば拙僧からも少しばかり名を明かす位は、ね?』

あ、そこ言うんだ……お前自己顕示欲高すぎない?(困惑) もうちよつと、自分の事

を隠すとか、なさらないんですか?(震え声)

『へえ? なんだ言ってみるものだなあ?』

『ンンンンン……拙僧、そこまで狭量ではないもので。では——改めて!』

『よっリンボ氏イ〜!』

『——呪詛オツ！』

『ぎよわーっ!? めっっちゃ何か地面から湧いてくるううう!』

……どっちもロクデナシだから仲がいいのでしょうか。黒髭氏が何か謎の魑魅魍魎っぽいものに群がられています。マズいですねえ、このままだと黒髭氏が腐り落ちてしまつたりも……まあええか（寛容） 黒髭氏ほど殺しても死なない様なサーヴァントもいませんし今回もちよつと肌が爛れる位で済むでしょう。

しかし、リンボ氏かあ……どうするんでしょうね。

『我が名はキャスター・リンボ……我が真名、安倍晴明！ 人類史の末席に刻まれた陰陽師なれば！ 以後、お見知りおきをば！』

あーあ、言っちゃった♪ 言っちゃった♪（少佐並感）

名乗っちゃいましたよ、見事に『安倍晴明』つて。はーい皆さん、此方見えますか？ この見るからに胡散臭い悪役リンボ君が『安倍晴明』だそーです！ 言わずと知れた平安最強クラスの陰陽師様だそーです！

スゲエな平安最強陰陽師、人類を滅ぼすために敵方についていたのか……!! こりゃあ強敵と言わざるを得ませんよ（真剣）

『安倍晴明……だど?』

『ほーう? 私達だつて知ってる極東の宮廷魔術師、ビッグネームじゃないか』

流石にこれだけのビッグネーム、ロードもライネスちゃんもそりやあ驚いても不思議じゃありません。

国の政に口を出している魔術師、というかオカルトに精通した知恵者は多いですが、しかし王朝でその実力を明確に認められて、はつきりとその国の歴史に名を遺す程の『地位』を与えられた魔術師、というのは実はそう多くありません。

その中でも、清明の陰陽寮筆頭というその地位は、魔術師界限の中でも相当な偉業、神祕で表に食い込んだ稀有な例でもあるのです。

古い神祕を操り、国のありとあらゆる陰陽師など相手にならず、何人もの天皇からの信頼を受けて、日本において長く伝わる伝説となった陰陽師、それこそが『安倍清明』なのです。ラスボス張つても不思議じゃない格の持ち主と言えます。

彼は、場合によってはサーヴァントの中でも『冠位』と称される程の、特別なサーヴァントに任せられる程の存在である可能性すらある怪物。

魔術師の中でも相当トップクラスの知名度を誇っているのも当然……成程！　これは強敵ですよ……！（迫真）

『ほうほうほう、君が本当に安倍清明なら……アレだけのとんでもない怨霊を使役するのも不思議ではないか』

『ンンン——万能の天才にそのような評価をされるとは、光栄しきり。とはいえ、拙僧が

清明であるのは、嘘偽りない事実ですが？」

『ふーん？』

あつ……本当に、つて言われてる辺りもうメツキというかそんな感じの奴が剥がれてませんか？ 自分で安倍清明つて名乗っておいて、速攻で『ええ？』 ホントでござるかあ？』されてるとかどれだけ胡散臭いと思われるのかリンボ君。

いやまあ、彼が仮に本当に安倍清明だったとしたら、かの大陰陽師が自分の圧倒的に不利なフィールドに相手を誘い込んで倒そう、とか思っちゃった、ちよつとオツムの弱い子つてなつちやいますので……ちよつと『アレ？』と思うのも不思議ではないですがまあでも本人がそう言ってるんだからそうだよな！ そんな他人の名前騙るようなみみっちい奴がこんなすごい化け物を使役出来る訳ないもんな!!

『——まあその真偽は兎も角、だ。グレイの一撃で頼みの大呪霊を消し飛ばされた『安倍清明』さんは、どうするのかね？ まだもう一戦やるなら、此方も覚悟はあるけど』

『いやはや、ここまで派手に負けてこの先を望むのはそれこそ厚顔無恥に過ぎる、引き際というも、拙僧弁えておりますれば……』

引き際を弁えて居る奴は聖杯を手に入れる途中で奇襲は仕掛けてこねんだわ……まあリンボですし、それくらいは普通にしようというのはありますけれども。

兎も角、突如として空中に浮かび上がり、巨大ゴーストを構築する為のリソースと

なっていた聖杯も、その闇を取り払って下りてまいりました。そして、コレでようやく、ようやく——

『……何か反応は?』

『罨らしい反応は一切なし。今度こそ、お墨付き……と言いたい所だけど?』

『——ふむ、此方でも一応確認してみたが……特に何も無い。ただただ純粋な力の塊がそこにあるだけ。要する聖杯以外の何者でもないな』

めつちや警戒されてて草ア! ロード、ライネスさんの知性派二人が、浮いている処から地面に転がった『聖杯』を挟んでしやがみこんでウンウンと唸ってるのが凄いシニールですが……

しかしまあ、そこまでしつかり調べているので、問題は無いでしょう。という事で、後は回収なのですが。

『——えっ!? 私が回収するのですか!? ……わ、分かりました。丁重に回収させていただきます!』

何時もの聖杯回収役のマシユ……は、今回当然ながら同行していませんので、その代わりに式部さんが聖杯を回収してくれることになったので——無事、特異点修正完了! です! 後、なんか桐の箱っぽいものにコトンと聖杯を入れて、ぺたりとお札を張りつける式部さんがカワイイ!!

『よし、コレで——うん。大丈夫！ 特異点の崩壊を確認できた。レイシフトで戻ってこられるよ』

っしやあああああ！ 終わりっ！ 平定！

漸く特異点突破です！ くう疲。

まあ第四特異点の中で、常にデバフを受けながら効率の悪いレベル上げをするよりはいい感じでレベルも稼げたと思います。そしてレベルを上げて只管神秘に振るのは基本中の基本。

そして青得獲得のチャンスでもあるんですが……その前に。

いやー、先ず、前回特異点に突入して獲得した奴も紹介し損ねていたという。ずっと使ってたんですけどね……まあ、皆様からは見えていない所では凄い力を発揮してくださいました。

『飛躍の兆し・神秘』という青得は、特定のパロメーターが一定に至ると、その神秘関連の強化値が大きく跳ねあがる青得。

前回、ちよつと無茶をして大きくレベルが上がったからこそ採用できる強力な青得なのです。というか、一定レベルが無いとまるで何の意味もない青得になってしまうので、はいホントにね……とはいえ、この特異点ではレベルをがつつり上げたホモ君の火力上げに凄い貢献してくれました。

レベルが上がっても今までと同じように活躍できてたでしょ？　コレのお陰なんですよーうへへ。

んで、一緒に獲得した赤得ですが。

『古い呪縛』という赤得なのですが。見た事ないんですよー……まあめっちゃマイナーな赤得なんでね。大した効果もないでしょう！

とか思ったらこのこのイベント特異点が終わった直後に精神面のパロメータに、急にデバフがかかったんですけれども（震え声）

どういう事？

第七十五章・裏：マスカレイド

「——本当に、大丈夫なんですか？」

「マジで大丈夫だつてえ。特に何にもされてなかったし、ホラ、無傷無傷。見てよどつからどう見ても傷ないでしょー？」

「……本当ですか？」

「ホントです、マジで。うん、ホント。だからそんなジツと見ないで、恥ずかしいから」
まるで姉と弟だな、と彼と彼のサーヴァントを見ていると思う。

特異点という危険な場所を共に駆け抜けて絆を育んだ結果、あの美人とヤンキーが特別に爛れた関係にもならず、酷く健全な関係を築いているのは、最早微笑ましい。ティーンエイジャーにしては、豊かな肉体で美人な女性に飢えているという事も無い。そう言つたぶしつけない視線を向けない、実に紳士——そう表現するには余りにも顔が些かに厳めし過ぎるのは間違いない。何方かと言えばまるでマフィアの下っ端として、娼婦でも漁っている方が似合いな顔をしているが。

「ええい、何時までもマスターと乳練り合うな鬱陶しい……マスターの体から血の臭いはまるでせん。ケガなどしてはいない」

「ゴルゴーン様……ですが」

「もうレイシフトで帰還できるのだろう——帰る前に話すのであればさっさとしろ」

見た目よりも、彼はもつとずっと幼いのかも知れない、等と思いつながら彼が此方へ歩み寄ってくるのを見ていた。

「……ありがとな。世話になった」

「いや、君から形作られたモノを、君が打ち壊したただけだ。我々は僅かに力を貸したに過ぎない。恩を感じる事は無いよ」

「いや、それでも、さ——もう二度と会えないかもしれないからな。言っておかないとダメでしょ、やっぱり」

その表情はにこやかだ。アレだけの強敵の連続を凌ぎ、自分が標的にされていた、という自覚がある様にはとても思えない様な顔をしている。肝が据わっている、と判断することも出来なくはないが。

——まあ、そこは今は、気にはしまい。

「特に、俺個人としては、アンタに一番世話になった」

「おや？ 私かい？」

「いやアンタの後ろのフードの娘だよ」

「……せ、拙ですか？」

可愛い友人が折角別れの挨拶をするのだから、野暮な事は言うまい。

実際、我々の中で、一番彼と行動を共にしていたのは、実はグレイだろう。

「……ありがとうな。グレイちゃん」

「いいえ。拙も……あの、共に戦えて、良かったです」

「この事が終われば君はここから消えて……何も覚えてないんだらうけど。ま、でも俺が覚えてるよ。かつこいい灰色の勇者様の事は、さ」

「ゆ、勇者様?!」

それは彼も分かっているのだらう。目の前で丁寧な頭を下げているのは、まあ顔に似合わない恐ろしく丁寧な態度だったが……まあ勇者とまで言うとは思わなかったが。

そのグレイと笑い合う顔には、どこにも影はみつけれない様に見えて——しかし、何処か力が無い様にも見える。

まあ、こんな特異点を必死になって超えて来たのだから、疲れてきても何ら不思議ではない。それでも、そんな疲れを押してまでここまで特異点を一緒に戦い抜いて来た戦友に対し、一つ頭を下げている……

そう考えると、彼が健気なただの少年に見えない事も無い。

「ははっ、終わりまで何処か自信なさげなんだよなあ……何、自分が嫌いだったりするのグレイちゃんは」

「——それは……ちよつと違います。拙は……」

「……ああいや、その先は言わなくていいや。うん。分かりやすく良い顔してるし」
さて。

……下手な事は言わない。グレイは楽しそうに、そしてとてもいい顔をして話しているのだから、水を差すのは些か以上に無粋だと思われる。

とはいえ、じーつと話している男の隅々まで観察はしてしまう訳なのだが。

そう、例えば。

グレイを見ている彼の瞳だとか。その表情の隅々だとか。少し疲れた様子にも見えるその体の傾け方だとか。いろんな所を。

何処かその仕草には、ほんの僅かな『慣れ』を感じる。

「良い隣人に恵まれたんだなあ、アンタは」

「——はいっ！」

その視線が、ちらりと此方に向いた。

私と兄上の方を見つめる瞳は、透き通っているようにも見えて。しかしながら何処か粘りと、歪んだ輝きが宿っている様にも、見えた。

「義兄上は、どこまでたどり着いていたんだい？」

「——どこまで、とは？」

瓦礫の中、日の光の指す瓦礫の上に、兄上が。そして、暗がりには置いた、そこらへんに転がっていた椅子——グレイに持ってきてもらった——の上に、私が。

カルデアの連中は無事にここより帰還する事が出来て……今、ここに、我々がこうしている時間は退去までのカーテンコールの様な時間。カルデアの者達と話すべきことは出来るだけ話したのだから後は。ただの与太話だ。

「とぼけないでおくれよ義兄上——彼の中にある何かを察していたんだろう？」

「……」

「彼、というの……ホンゾウインさん、の事ですか？」

「ああそうだとも。人間観察ばかり上手い兄上は、彼の中にある深い深い深淵を覗き込んでしまった——そうだろう？」

とはいえ、カルデアにとつては与太話でも。私にとつては、こうして『特異点を解決する』という使命を終えた後、消える直前の言わば最後の楽しみ。耳に聞き流させてもらつても罰は当たらない、と思う。

「深淵、つて……そんな暗い方には、見えませんでした、けど……師匠」

「……こういう時はお前の目を誤魔化せない自分が嫌になってくる」

まあ彼女にとつては聞き流すどころか寝耳に水、位の驚きではあると思うが……まあそれでも仕方ないと言えばそうだ。特異点の攻略でギリギリの連続、私も目の前の彼の『仮面』を見破るだけの余裕が無かった。

だが先程の彼を見ていれば、分かる。

否、先ほどだからこそ分かったのだと思う。特異点の最後の最後、被っている仮面が剥がれてその奥にある物が見えて来た——それが見えてきたのは、やはりあの白い霧に彼が飲み込まれた後だろうか。

「しかし、上手い事だ。自分を偽るのが」

「上手いというよりは、そうせざるを得なかったから慣れているのだろう。恐らくは、ずっとそうして来たのだろうよ」

「……さつき、拙と話をしていた時ですか?」

「いや、君と話していた時は特に何かを偽っている訳ではなかったよ」

グレイが私の言葉に首をかしげるが、まあ気持ちもわかる。

彼ののは非常に分かりにくいタイプと言えば良いのか……否、分かりにくいようになるまでずっと吐き続けて来た、と言うのもある。両方だ。

「だが、私が見つかったのはそこまで。義兄上は更に奥を覗き込んでいる——そうだろう?」

「——覗き込んでいる、というよりは、目に入つて来たというべきかな。彼の奥には強い『諦観』が根付いている」

……世の中への悪意、とかではなく。諦観。

意外、といえれば意外だ。例えば、聞かれてしまう事自体少し避けたい、悪意に塗れた絶望……とかであれば、隠すのも分かる。

しかし、諦観であるならば、『隠す』必要は何処にある？

「……諦観、ですか？」

「ああ。それも恐らくは……自分に対してのモノだ」

「自分に対して？」

「そうだ。例えば、グレイ。彼がキミを見る視線の中に、何かを羨むような感情は感じたかね？ 率直な感想で良い。答えてくれ」

「え……つと、無い、様に思いました」

「——私も同意見で、恐らくは間違いないだろう。しかしながら……彼の瞳の奥には、間違ひなく暗い輝きが見えた」

沈み切つたその輝きは、しかし他者に向けられるものではなく……深く深く、自分に向けて永遠に照らし続けられている——自分の有様を永遠に浮彫にする為に、と兄上は口にした。

「他人に一切の悪意を抱かない程の、自分への諦観——ひっくり返せば、絶望。彼はそれをずつと仮面を被る事で隠し続けて来た、私は見ている」

「——誰に？」

「自分自身だ」

絶望と向き合えば、自分が遠からず『自死』を選ぶことを彼は察していた

だからこそ……『生かす』為に隠す事を決めた。自分は正気だと。死ぬことは『許されないごく当たり前の存在なのだ』と。

あの仮面は、彼にとつて、拘束具なのだ。この世に自らを縛り付けておくための。

そこまで想像できたものだ——と、揶揄おうかと思つた。だけど、他人に向けられるあの透き通つた瞳……そこに一切の悪意もクソも無かつた事を思い出して。

どうにも否定しきれないのも、また事実だつた。
では。

仮面が剥がれかけている今は？

「……我々が解決した所で、どうしようもない」

「自分で解決するしかない、か？ 義兄上」

「自分で始めて、自分で縛り付けて……自分自身で自分と相撲を取っている様なもの。外から無理矢理解決してもいい結果にはならん」

それをどうにか出来るとすれば。

『今の彼』にとって近しい存在だけだろう、と兄上はマズそうに葉巻を吸いながら口にする。

葉巻から立ち上る煙は、何処に行くでもなく、不安定に、ゆらゆらと立ち上って行った。

第七十五章・裏：『浄化』のやり方

「——個人面談か。何年ぶりだったかなあ？」

「個人面談、っていうか……だよなーコレは……さして」

医師として、個人的な話をさせてもらおうと。目の前の彼の様子に、不審な所は一つも見られない……と、思う。何か不安そうな表情をしているとか、そういう様子は、今のところ見られない、気がする。

『——康友!!』

『藤丸くウくん、なんだ元氣そうじゃねえか。っていうか、そっちの方が早かったんだな
決着ついたのは』

『それは今どうでも良い！ 大丈夫、なんだよなあ!!』

『……式部さんにも言われたんだけどなあ。俺、そんなに具合悪いように見える?』

『見えない！ 何時ものチンピラフェイス!』

『テメエは心配するか揶揄うかどっちかにしろこのスットコマスターが!』

何とか突然のアクシデントで送り込まれた未知の場所から帰還した時も……彼の調

子は本当に、ごく普通で。特に何か問題がある様には全く見えなかった。見えなかったんだけれども……

——特異点の、報告をレオナルドから受けた。

彼を狙い撃ちにして送り込んだ、余りにも特殊な特異点の構造。そしてその中で彼ら、本造院君達が戦い抜いたその記録を……正直な話、驚く点は多かった。

しかしながら、その中でも最大の問題、疑問点はやはり、彼に行つたいくつかの干渉方法……『紙片』や『霧のドーム』は特異的、と言つていいだろう。

「単刀直入に行こう。レオナルドから、報告を受けてる」

「ふーむ……そうか。一体どんな報告だろうなあ。もしかして俺問題ありな態度してたりした？」

「だとしたらこんなのんびりお茶なんて出してないよ」

特異点内において、不審なバイタルの変化はなかった。戦闘中の急激な変化は想定範囲内だし、それ以外で特別、大きな変化をしている様子もない。そして彼は無事に特異点から戻つて来た。数日程おいても、何か異常は見られない。

それでも、とレオナルドは言ったのだ。僕に向けて。

『……初めて特異点でのサポート、というモノを行つてね。見ているのと実際やつてみるのとは、大きく違う。私のサポート一つで、目の前の少年の命を左右しかねないと

いうのは——正直、割とプレッシャーだった。天才なのにね?」

だからこそ、レオナルド・ダ・ヴィンチという英霊は真剣に取り組んだ。カルデアに召喚されてからも何処か飄々としていた態度のアイツは、初めてレイシフトというモノに真正面から取り組んだ。

『今までも色々サポートはしていただろ』

『いや、君の様に特異点の彼らと直接話しながら、というのは無かった。君という存在を挟む挟まないでここまでの差があるとはねえ。一応ベテランだって言うのに、一瞬新兵みたく狼狽えかけたりしたよ。まあそうはならなかったけどね? 天才だし』

そして……真剣に取り組んだからこそ。レオナルド・ダ・ヴィンチは、最後まで面倒を見ると言った。特異点を乗り越え、そして戻って来た彼の。

何か怪しい点があるなら、ちゃんと疑う。そして……話してもらおう。隠したままにはさせない。いつも通りなようで、彼は少し感情的になつていたように見える。

……そんな彼の期待に応えたいと思つたのは、悪友だったからだろうか。彼と。

「——正直に話してくれ。あの特異点で、何があつたのか」

「……何を、とは惚けらんねえよなあ。ここまで来たら流石に」

「そりゃあ、まあね……あの霧のドーム。君を取り込んで暫く実体化していたあの中で何があつたのか」

特異点では。敢えて聞かなかつた、とレオナルドは言った。『特異点解決が先決』等と言われれば、言い逃れされる可能性があつた。二人の英霊と共に、白い霧について話していたにも関わらず……何も聞かず、無事かどうかだけ確認するのは、カルデアで確実に話を聞くためだ。

「泳がされてたつて事〜？」

「まあ結果的にそうなるかな」

「うーん容疑者っぽいなあこりやあ……え？ 拘束されたりする？」

「しないよ」

「だよねー。そこまで優しくないよねー。それで済ましてはくれないよねー……あゝそうかそうか〜……」

そして。

レオナルド・ダ・ヴィンチから『こういう方向では君が専門なのは、つい最近言つた通りだろう』と言われて。僕はバトンを受け取つた。彼から、聞き取りを行うために。

「……出来れば語らずに終れば良かったんだけどなあ」

「話して、くれるのかい？」

「先に宣言しておく。俺はまだここで『役に立つ』為に全部は話さない。多分全部話すと俺は……使い物にならなくなるから」

……そう言った彼の目は、とても普通に見えた。否、普通過ぎて普通じゃない、というべきだろうか。とても凜いである。平坦な……でも、硝子の様に感情の無い瞳をしている訳じゃない。あくまで、何も感情がさざめいている様には見えないだけだ。

彼が言う通り『語りたくない』類の思い出ならば、なんらかの反応があつても何ら不思議じゃないというのに。

コレは、相当難儀する相手かもしれない。ひそかに思いながら、彼の目と改めて視線を合わせた。

「——前提として、信じて欲しい事がある」

「なんだい?」

「俺が、あの『角』を発現させた、というか。発現しているのを『知覚』したのはここが初めて言うのは嘘じゃない。そこは、信じて欲しい」

……不思議な言い方だ。

知覚、というの。『自分でそういうのが生えている』というのを知ったのが初めてだという事だろうか。その言い方だと『自分に何かしら異常がある』というの、何となく知っていた、という事になるのだが。

とはいえ、ここに来てそこを強調する『メリット』は……あつたとして、罪の所在の有無に関してだろうか。

彼は、ここカルデアに来てから何ら問題行動を起さず……寧ろ『過ぎる』程に献身的に特異点攻略に取り組んでいる。一切罪が発生するような問題は無い。

寧ろ、そのような所を意識させるのは、要らぬ疑いを発生させる気すらするのだが。

「……俺の生家については、言ったっけな」

「あ、ああ。君の血筋……というか、についてだね」

——一応、彼の実家について調べてはいた。

と言つても、彼の特異な体質について、何かしらのヒントにならないかと考えて調べ上げたのだけでも……しかしながら、まあ、見つからない。

カルデアは、そう言った神秘については物凄い量のデータが揃っている……揃っているのだけでも、まあ彼の言う条件で探しても見つからないのだ。

……千年近くの間生き残り続けて、古い言い伝えと幻想種の血筋を引き継ぎ続けている家。一応、表ではなく裏でなら欠片くらいの情報であれば残っている、と思つていたのだがしかし、箸にも棒にも掛からない程、まるで引つ掛かりが無い。

「それで、その話をするって事は……」

「俺があ霧の中で見せられたのは……その家にいた時の景色だ」

実家での景色。そう言われると普通の話に聞こえる。だけれども。

「そこに、問題が？」

「問題、うん。問題しかなかった、って言うべきかなあ」

「……何か可笑しい景色を見せられた、とか？」

「一般的な常識に照らし合わせれば、かな。俺にとつては、ごく当たり前の景色だったけれどもねえ」

そう話す彼の顔からは、するりと表情が抜けて、酷く無表情だ。

「……俺の家、っていうのは。昔からの言い伝えにこだわる家だった。呪われた血を浄化する『選ばれた子』、って言うのに拘っていたのは、前にも言ったかな？」

「う、うん。それはまあ」

「それで、だ。自分の血、ひいては脈々と受け継がれてきた一族が『呪われている』と思っている俺の親族の皆様にとつちや……俺はまあ、言わば『悲願』そのものだ。でも子供俺にとつちや『浄化』っていうのが何のことだかさっぱり分からん」

……確かに、その表現には引っ掛かっていた。本造院君達の一族にとつて、聞いていた限り、彼の誕生こそが『一つの契機』なのは間違いない。

だからこそ、それを待ち望んでいたのは分かる。だがそれなら『解放』とか、そういう表現でもよい気もする。『浄化』という言葉には何処か不吉な臭いが、する気がする。「だからある日聞いてみたんだ……浄化ってどうやるの、って」

酷く、平坦な声だった。その不吉な臭いに混ざり、背筋を冷やす。そんな声だった。

彼は——ぐりんつ、と首を回して、僕を見た。まるで、人形が首を回すみたいな、酷く無機質な動きで。そして。無機質な、ガラス玉みたいな透けているだけの目で。僕を見ている。手先が、震えた。

「みんな笑つて答えたよね……『君が皆を……先祖様の所へ送れば、それで呪われた血は全て綺麗になるんだ』つてさ」

「……それ、つて」

「まあよーするに俺が果たすべき『浄化』つていうのは……一族郎党皆殺し！ 親族血族女子供に爺婆、だれかれ構わずみーんな俺が介錯する事つてなあ、おい、笑える話だよね……ね？」

横に倒れた顔に浮かんだ笑顔は、まるで酷く精巧につくられた人形のように。背筋が冷えてしまう程『お綺麗な』笑顔だった。

第七十六章

カルデアスは何も答えてくれない……な実況、はーじまーるよー

前回はなんか、急にデバフが入り込んできたんですけれども。ええ……取った直後はホント、なんも無かつたんですよ（病人の言い訳並感）　なんか、特異点を突破したら急にデバフが……デバフが……

戦闘に何かしら問題があるか、といえれば問題があります（震え声）　そもそもホモ君の火力はホモ君が健康優良児で常にフルスペックであること前提で出せるように組んであります。というかデバフ付いた時の対策する余力なんて残っちゃいねえよ!!　という事でこのデバフが付いている時点でホモ君の火力が落ちるのは確定なんですけれども……ちよつと強い雑魚敵であれば十分通用するレベルの打撃力には育ってきていましたから、それが失われるというのは些かと……

『——コレは、僕に対処できる類のモノじゃないね』

一縷の望みをかけて向かった保健室（何でも治し）でも草津の湯でも、スキルのデバフは治りやせぬ……カルデア内、ロマニのいる医療室は彼との会話ができると共に、特異点で負ったダメージを回復する事が出来ます。大抵のダメージやかかった呪いだと

かを治療出来るんですが、しかし今回はそれですら、無理……っ！ 不可能……っ！ スキルのデバフなんだから解消できないのは当たり前と言えばそうなんですけれども。そしてスキルによる発動なんですから、条件を満たさなければ……発動しないしデバフも外れるはずですよ。

しかしっ！ この赤得ッ……発動条件が『神秘レベルが一定を上回る』事で解除条件も『神秘レベルが一定を上回る』……曖昧……っ！ めっちゃ曖昧……っ！

という事で、神秘レベルがどれくらい上がれば解決するかも分からんのでこのデバフを背負ったまま実績を突破しなければならなくなりました（半ギレ）

初めからある程度ランダム赤得でちよつと危ないのがへばりついても大丈夫なように超徹底神秘火力ビルドでゴリ押しを狙っていたんですが、実際押し掛かってくると厳しいですねえ……早く解決しなきゃ（使命感）

まあ突破するにはその分神秘レベルを上げりゃあいなので黙々とレベル上げに励みましょうか取り敢えず。今は。今は、というのはまあ、暫くしたら強制的にレベル上げ中断されるので、それまでは、という事で。

『——大変だ！ 藤丸君が、倒れてしまった！』

そらきた、トラブル！

第四特異点終了直後、藤丸君は確定でラスボスからかけられた呪いで、倒れてしまっ

て……他のサーヴァントの援護も無いまま、意識だけが敵の用意した特異点に送り込まれてしまいます。

なんてことを……（憤怒）いや本当にサーヴァントの護衛も無い

何も知らねえ一般人に呪いをかけて罠に嵌めるなんざぜってえ許せねえ!! この怒りを持つて藤丸君を助けよう……と思つて突撃したい所なのですけれど。

『くそつ、なんて強い呪詛だ……これは、我々では解呪できない』

しかしこの一件はホモ君には関われないのです。無念ですネコレは無念……（無力感に打ち震えるホモ）この一件には、ホモ君がやったように速攻イベント特異点突入などせず、第四特異点と一緒にいっていくと関われるのですがしかし、このルートを選んだ以上は再び道を別つしかありません。

まあ彼が向かったとある場所では彼が生涯になり付き合う事になるもう一人の『相棒』が待っているのです、彼の無事はそちらに託すとして。

その間は、ホモ君は頑張つてレベル上げをしましょう。どうせどうしようもないなら同僚たるマスターを信じてお前もがんばらだよ!!（強がり）

後、この間にも徹底的に式部さん、及びゴルゴーンさんとの絆レベルを上げておきましょう。恐らくゴルゴーンさんは間に合いませんが、式部さんはギリギリで間に合うと思いますので……

『——物語を綴ることはそれはもう……楽しくて楽しくて』

あ、このセリフが出たらセーフ、ですかね。取り敢えず絆レベルが四以上あれば……つと、さて彼女の絆レベルが高いとどうなるのかと言いますと。まあこの先についての備えと言えれば良いでしょうか。

スキルによるデバフは想定外も良いところですが、一応特異点後のBADステータス……いわゆる今ホモ君にかかっている『呪詛系』のそれに関しては、一応想定が無かった訳ではありませんし、だからここまで徹底的に絆レベルを上げて来たんですよ。

藤丸君にはマシユが居ますが、ホモ君、というかアバターには特定のヒロイン、というか相棒のサーヴァントはいません。コレはまあ当たり前というか、想定通りなのですけれども……しかし、その代わり、絆レベルをちゃんと上げておくと、色々イベントに絡んで来てくれるのです。

先のイベント特異点がまさにそれですね。

式部さんに関してはファーストサーヴァント、というのもあります。ですがそれを踏まえても、絆レベルの最も高いサーヴァントがイベントでの『相棒』になるのは間違いないですね。

場合によってはゴルゴーンさんが相棒サーヴァントとなつて特異点ストーリーを戦っていた可能性もあります。

あ、因みにゴルゴーンさんの『コミュニケーション困難』な性質はきつちりと相棒サーヴァントとなると悪さをします。具体的には特異点解決に若干の現地人とのコミュニケーションパートナーが挟まり若干グダるなどの問題が発生してきます。ちゃんと優しい式部さんが相棒でよかつた……！

『……おい貴様、何を見ている』

終始この調子ですからねえ。ゴルゴーンさんも。

とはいえこれでも一応絆レベルは上がって来ているんですけれども。彼女は基本的にこつちと迎合はしない姿勢を崩しません。流石にずつつて事は無いですけれども、それでもまあまだ時間はかかりますよ。

『ふん……もう一人のマスターが倒れたとて、やる事は変わるまい。情けない面を見せるな。さつさと走り回れ。何方にせよ、ぼーつとしてるだけの時間は必要あるまい？』

因みに、藤丸君を全く心配していないのもゴルゴーンさんだけです。うーんロック。とはいえまあ仕方ないと思います。まあ他人を気にしない分、人理を元に戻すっていう目的の為に徹底しているっていうのもあると思いますので。

因みに藤丸君がマスターだともっと周りへの態度が軟化します。ゴルゴーンさんは。うそでしょ……（困惑）藤丸君は戦闘力とかその辺りを全てコミュ能力に振ってるか

らね。多少の格差もしようがないね。

『——藤丸君の意識が戻った!』

お、とか言ってる間に、漸くですよ……どうやら上手にやって下さったようでした。

藤丸君ご帰還! 藤丸君、無事にご帰還でございます! 無事でよかったです!

しかし藤丸君も、別に彼一人の力で戻ってこれるような人外ではありません。マシユも連れていけない様な地獄のような状況の中、先ほど言った『共犯者』が見事に彼を導いてくれた模様です。

まあ特異点の内容に関しては……取り敢えず置いておくとして。問題は、彼を助けてくれたサーヴァントですよ。

『無事でよかったよ……しばらくは精密検査は欠かせないけど、取り敢えず致命的なダメージはなさそうだ。復帰はそう遠くなさそうだね』

そう。そして復帰が早い、という事は問題なく召喚も行えるという事! (強行軍) 鬼かな? でもここで出来れば藤丸君に召喚して欲しいんですね。超高確率でこのタイミングなら……彼がっ……彼が引けるはずなんですっ……藤丸君の生存率……っ!

望外の圧倒的上昇……っ!

このゲームのクリアを安定させるために、彼を、彼を召喚させて欲しいっ……!

『——諸君、緊急事態だ。新たに特異点を観測した』

『今回、藤丸君は先の一件で安静にせざるを得ないので、君に行つてもらふ事になるね』
 ウッ、ウッ、アッ、アッ、アッ!!! ウッ、ウッ、ウッ、アッ、アッ、アッ、アッ!!! ウッ、アッ、アッ……
 ……(慟哭) うるさいんじゃない! だつて何事も上手く行かなくつて……そりやあこ
 んな声にもなる。

ここで、ここで来ちやつたかあ……呪詛影響による特異点発生。今回藤丸君は呪詛によるダメージを考えて取り敢えずお休みなのですが、いずれにせよ今回の一件はホモ君がソロでやるしかありません。何故なら……

『どうやら……この特異点に行ける人数は限られているらしい。向こうから入り口を絞られていくというか』

『明確に罠というしかないなあコレは』

『うん。それでもコレを無視することは出来ない。人理の不安定な状況では、たとえば小さな特異点でも、致命打になりかねないからね』

……出来れば藤丸君に召喚を促すダンスでも踊りたかつたところですが。しかしながらここで時間切れ。後は藤丸君が召喚を行うかどうかですが。それは彼を信じて、此方も特異点に向かう準備をいたしましょう。

絆レベルとファーストサーヴァントボーナスで、恐らくは式部さんが一緒について来てくれると思うので、取り敢えずBADコミュはあり得ません。というかそれ位しか備

えが出来ませんでしたけど……まあ、それが実を結ぶと信じましょう。

第七十六章・裏：平安の時へ

「——では、特異点の概要を説明するけど……今回は、というか今回も、君一人での特異点攻略となる。本造院君」

「ま、藤丸がああだったからなあ。因みに回復するまで待つっていうのは？」

「……些かと厳しい、かもしれない」

マスターに問われ……すまない、と言葉を結んだロマニ様。その浮かべた表情は、非常に険しいものでした。

藤丸様は、今、先の一件にてダメージを残しており……流石に病み上がりの彼を戦われるのは些か以上に危険という判断が下されています。そして。藤丸様が動けない、という状況でなお、カルデアはこの決断を下しました。

「そっか……専門的な理由があたりで？」

「色々、ね。説明があるかい？」

「いや、いらん。どうせ行かにならんのなら聞く必要もないでしょ」

第四特異点にて遭遇した、この人理焼却の黒幕——魔術王ソロモン。余りにも強大な敵の正体に、些かと暗い空気になったカルデア内。そこから続いて起こった、敵側から

の呪詛による藤丸様の昏倒。

ただでさえ、土気が下がり、そして多少の混乱が見られた我々に対し、畳みかけるようにして、問題の特異点は姿を現しました。

ロマニ様が、些かと憔悴しているのは、艶の無くなっている肌で、想像が付きまします。それほどまでに……此度の一件は大きな衝撃となったのでしよう。

此度、マスターと、その契約しているサーヴァントのみによる単独攻略が計画されたのです。

「それにまあ、唐突に表れた特異点にひっくり返らんばかりの大騒ぎで、皆さんお疲れでしょうからね。その解消に一役買えるならやる気も出るつてもんよ」

「そう言ってもらえると助かる。ありがとう」

冗談めかしてマスターは言っていますが……実際、突然として現れた脅威ですから、この状況であっても、対処を我々に命じたのです。

「それで——場所は何処だ。それなりに古い時代、とは聞いているが」

「それなんだけど……君にも馴染みがある場所だよ、本造院君」

「馴染みがある場所？　って事は、まさか……」

「うん。君、それに君のサーヴァントである、紫式部さんの生まれ故郷、日本。そこから特異点の反応があつた」

マスターと私が目を合わせます。

日本。海洋に囲まれた島国であり、唐の様な大国に比べれば小さな国。しかしその後は大きく成長しつづけ、今や世界有数の国の一つとまで呼ばれるまでになった、私とマスターの出身国。

「えーでも、日本で特異点、つて。そんな世界の転換点、的なところあつたか？」

「い、いえ。私は特に思いつきませんけれども……」

「だよなあ、極東の山猿の国だしなあ。ゴルゴーンさんはなんか思いつく？」

「思いつくわけないだろう。貴様、私の出身が何処だと思つている。外様も外様だぞ」

しかしながらマスターがおっしゃる通り。日本が、人類史に与える影響がそこまで大きいとは、正直思えません。実際の所、我々の出身の国、日本は極東の島国に過ぎないのは間違いないのです。

サーヴァントとして召喚されれば、私などよりもほど特異点において武勇を誇られるであろう『源氏武者』の方々もいらつしやいますがかし……

「……そこになんか、あからさまに特異点っぽい反応？」

「うん」

「おかしくない？」

「そうなんだよねえ……あからさまに畏なんだよねえ」

人理に致命的な一打を与える訳でも無い位置に、急に出現した謎の特異点。寧ろコレが畏で無ければ何が畏なのか。

「藤丸が、ああいう事になった。でもって、次は俺たちがカルデアやつている以上は見逃せない歴史のシミを作ってる」

「……こういう時、僕らの不利を実感するよね」

「向こうは好き勝手やればいい。俺たちはその尻ぬぐいに回らざるを得ないっていう」

せめて、此方も全力で立ち向かえればまだいいのですけれども。しかし藤丸様は倒れマシユ様、セイバー様は行動不能……戦力は半減のまま戦わざるを得ません。明らかに不利に不利を重ねていると言わざるを得ず。

「まあ、一応俺たちの地元、って言うのが唯一の救いになるか？」

……ちらり、と私をマスターが見てきますがしかし、それも首を横に振らざるを得ません。そもそも、私が知名度による力を得たとしても、たかが知れているでしょう。

とある『特殊』な聖杯戦争では、自らの祖国に召喚されたサーヴァントが、自分に向けられた『信仰』にも近い知名度の力を受け、神代のそれにも匹敵するような恐るべき力を発揮して見せた、という例もあつたそうですが。

私には無理です。多分。

それだけの力を発揮するとなると……やはり怪異殺しの大英傑たる『俵藤太』または

『藤原秀郷』様か、藤太様が討ち果たしたかの新皇『平将門』公か。

恐らくはお二方であれば、神仏ですら討ち果たす程の豪傑となつて、日ノ本の大地に屹立すると思われませんが。

「ん……そうだな。向こうで味方になつてくれそうな人は、まあ探しやすいだろうし。同じ日本人だしなあ、俺も式部さんも。怪しまれない、つて言うのもデケエな！」

「そう、ですね」

とはいえ日本であれば、日本人である我々は怪しまれずにその中に馴染む事も出来るでしょう。決して恩恵がない、というわけではないです。

しかし……我々が日本人だとしても、もう一つ気になるのは……一体、何時にそれが発生したのか。

「んでロマニ、特異点は何時に発生したんだ？」

「うん。それに関してだけ幸運、と言つていいのか。今回向かう先は……君のサーヴァント、紫式部が活躍していた時代なんだ」

「——それは」

「そう、『平安時代』になる」

それは……私には聞き覚えは無い言葉ではありますが。しかし、私にはとても、なじみ深い言葉でした。

「平安時代、つて……生前の式部さんが居るじゃねえか!？」

「そうなるね」

「えっ、連れてつて良いのか？ 対消滅とかしない？」

「君は特異点とサーヴアントをなんだと思ってるんだい!? 別に特異点内の本人と顔を合わせた所で、お互いに悪影響も何も無いよ。あくまでサーヴアントは本人の影法師なんだから」

千年の都、平安京が栄えた時代。

そう。私が生きていた時代でもあり、そして。何よりも……日本に神秘が余りにも強く残っていた時代でもあります。

京の外には神代のそれと見紛うような大妖が悠々と闊歩し。時折ふらりと京に紛れ込んでくる。そしてそれらを討ち取るのは京が誇る剛の者、『源氏武者』達。

彼らが苦戦した『鬼』もまた……

「……マスター」

「ん？」

「ま、マスターのお家も、確か……」

そこまで思い出し。マスターに視線を向けました。私が生きた時代から続くマスターのご実家が、存在しているはず、なのです。マスターのご実家の伝承が本当なので

あればですが。

マスターも、何も気にせず、という事も——と思つていたのですけれども。マスターはきよとん、と。私が思うような、重苦しい顔をしていませんでした。寧ろ、今言われて気が付いた、と言わんばかりで……

「——あ、そつち。あーそうだね。それもそうだろうけど……まあうん。アレだ。気にしないでいいっしょ。うん。そんな重要なもんでもねえし？」

「ですけど……」

「今は特異点解決が先決！ おっけい？」

「は、はい」

そう言つて、彼はロマニ様の方を見ます。嫌なモノから目を逸らしている——という風にも見えません。そして、どうしてでしょうか。

先のマスターの表情が、何処か……どこか酷く、無機質なものに見えてしまつて。無表情、ではなく。無感情、でもなく。その感情が酷く、温もりや、冷たさ、と言つたような命の通つたものを宿しておらず。

陶器で出来た、仮面を被つたかのような——

「——本造院君。今回の一件は、解決を急いで貰うために君一人を派遣する事になつたけれども。本当に厳しい様なら、一旦引き返してくれて構わない。君の命を失うなら、

どうなるか分からないパンドラの箱を静観する方が、まだマシだ」

「そう無理な事はないから安心してくれやロマニ。最近は、寧ろ調子がいいくらいなんだよ。気持ちの問題かねえ」

言いようのない不安。

あの特異点から戻って来てから。マスターは……何処か、変わってしまった様にも、見えているのです。

第七十七章

デバフとは何なのか哲学する実況、はーじまーるよー

さて、神秘レベルが一定レベル……とかいうしつかりとした基準も分からぬままに俺たちはここまでやって来た訳だが——気分はどうだーい!? 事ここに至ってノリ切れてない奴はいるかーい!?

まあ特異点に入って直後にノリもクソも無いんですけれどもね（冷徹）デバフの解除条件が分からないって言う不安しかない状況で、ここに来てしまうとは思いませんでしたよはい。まあ、敵が目の前にいるとかは無い様なので、取り敢えずは安心。

今回はホモ君がクソ雑魚ナメクジなので、サーヴァントの皆さんが頼りの綱（本来のスタイル）という事で、式部さん、ゴルゴーンさん、一つド派手に——

『——あら？ どないしたん？ 旦那はん』

んっ？（心拍停止）

『そんな、蛙が鉄砲水浴びたみたいな顔しはって……れいしふとで、酔うたり、なんぞしたん？ ふふっ』

……んー……日本系……反英霊……黒髪で可愛らしい……スウウウウウウウウッ

……ンンンンンンンン……（目力リンボ） 和服……HOT L I M I T ファツ
 ション……はんなり……ンンンンンンンン……（二度漬け目力リンボ）

ヨシツ!!!（迫真）

という事でね。今回は、頼れるサーヴァントのこの『名称不明』さんと一緒に戦って
 いきたいと思えます!!! 対戦よろしくお願いします!!! ……誰なんでしょうねこの人
 は一体（困惑）

というか名前欄に『アサシン』としか記されていないのが怖すぎるんですけれども。

『平気？ せやったら、さ。はよう行こうやない』

えっ？ なんだって？（難聴並感）

『……旦那はん、やっぱり平気ちやうみたいやね。お医者はんにはアレだけ口酸っぱく言
 われたないの、うち等はここに出来た『門』を打ち壊しに来たんやろ？』

門、門、門の破壊……成程！ それが今回の目標かな！（適応最速）

特異点に入って、取り敢えず特異点の原因を探って、どうにかする、っていう流れが
 多い筈なのに今回は初めっから特定できてるなんていつになく有能だなーカルデア!!
 そういう事ならホモ君目標に一直線に頑張っちゃうぞ〜！

『——ふふ、ええ顔になったわ。漸く目え覚めたんちゃう？』

そうだな！ という事で、我らが頼れる相棒、和装露出度高め鬼っ娘アサシンと共に

通りにたつぷり広がつてるんですけれども（震え声）　なんだつたらその横の幅と見合
う位にガツチリ高さもあるんですけれども。

『アレがうち等を阻む——『鬼』の住む門、羅生門や』

うわああああ羅生門だあああああ！　羅生門イベだあああああ！　しかしなが
ら相棒が本来のラスボスとか元凶とかそんな感じの方だああああ！　なんも
かんもがちげええええええええええええ！

……えー、取り乱しました。申し訳ない。

さて。羅生門イベ……つぽいモノが来ましたね。

つぽいものつてどういう事？　と思う方にご説明しますと……ほんへにもこれと似
たようなイベントがあつたんですよ。イベント、つていうか当時のマスターから言えば
恐怖でしかない初の『高難易度レイドイベント』だったので……。

レイドボス。

その圧倒的な体力と、馬鹿みたいな破壊力を持ち、一対一では（普通は）絶対に太刀
打ちできない筈の馬鹿みたいな強敵を『だつたらこっちは数で攻めればいいだろ！（筋
肉式解決法）』で殴りあうイベント。

因みに世の中にはレイドボスじゃないと敵にもならないつていう極まり切った修羅
もいらつしやいますけれども。

……まあそれは兎も角。今回の特異点、っぽいイベントは本来、馬鹿みたいに強いとあるバーサーカーを只管殴ってゲージを削り戦う、お祭りみたいなイベント……だったんですよね。

『ほんま、ええ色なのに、あーんな無駄に大きかったら雅もなにもないわあ……』

んで、そのイベントで案内人を……ではなく、言わば原因というか、聖杯モドキというか……そんな担当になっていらっしやったのが、この隣のセンチティブ少女。『エツチ』って言うより『エロ』、っていうか『妖艶』な鬼娘ちゃんなんですよね。

もしこれが羅生門イベントであるならば……先ずはつよつよレイドボスちゃんの方が先に出て、彼女は最後に出てくるんですよ。というかその前に、めっちゃカッコいいゴールデンな漢がお味方に付いてくれる……筈、なんですけれども……

『ん？ ウチ？ 何時から？ いややわあ。最初に喚び出してから、ずうつとウチのこといろいろおんなトコ、連れ回して、乱暴に扱ってるくせに……いけず』

そんな馬鹿な話があるか……！ 俺が……最初に呼び出したのは……っ！ 全然別の物腰柔らかい……！ 話の通じる人だった……！

ちがう……そうじゃないっ……！ 大体……マスターが、そんな、サーヴァントを……好き勝手出来るなんて……幻想……！ 真つ赤な幻想……！

いきなりまあまあな重ためのボディプローが辛いです、仕方ありません。この子は

こういう子なんです。

取り敢えず画面では真名を明かしてないのでアサシン、と呼んでいます。アサシンが何者か分かっている方は、『これくらいならまあ言うやろ』と思つていてと思います。本へでもこういう方なんですよ……

『ま、周りとかげえんぜん気にしはらず、好き勝手にするんは、ウチ、好みやけどね。さあさあ、そろそろ出てくるで……おつかない『鬼』が』

兎も角、若干（個人差）困つた人と共に、巨大な門の目の前で上を見上げますと……あつ、誰か立つてますね。門の上に。

しかし羅生門イベントなんでね。多少案内人が変わったとしても、立ち向かう事になる相手は変わらないでしょう。そう、そこには黄金に輝く髪を靡かせ、着物をいなせに着こなした、背中に焰を背負う可愛らしい鬼の少女が――

『ああ……凄いわあ、源氏の大将。震えが来るわあ。偉い顔、してはるねえ』

『――来ましたね』

ンンンンン……ンンンンンツツ!!! (激震)

金髪！ イズ！ 何処！ 目の前！ 黒髪！ ボインツ！ 刀！ ゲイシャ！！ ラ
 バースーツ!! (発狂)

……さて。落ち着いた所で現実を見ましょう。

えー、巨大な門の上に立つのは、私が想像していたサーヴァント……『茨城童子』という黄金の少女、立派な鬼っ娘、バーサーカーの彼女ではなく、寧ろ背丈から体型まで全てが真逆な凛として、しかし何処か母性を感じる女性。

『都の——頼光が守護するこの門を通ろうとしたのが運の尽き。大人しくここで、塵芥と化しなさい。蟲風情が』

でも迫力は負けてねえですよ……まあそれも当然。皆さま、頼光という名前からお察しでしょうが目の前の彼女は、日ノ本におけるマジモンの『バケモノ』に分類して言い英霊の一角です。

頼光……氏は源。

源頼光。平安時代において、都の守護に着いた『四天王』と呼ばれた優れた武人たちを束ねた都の武士の棟梁。

日ノ本最強の『怪異殺し』の一角である『源頼光』様が、今、此方を睨みつけていらっしやいます。

第七十七章・裏：『相方』

……目の前のサーヴァントに、ほんのわずかな違和感がある、気がする。

激動の記憶を辿り確認する。俺が召喚したサーヴァントは、確かに『日本』の出身だったし、『反英霊』であった。何処か落ち着いた印象だった。

彼女である、っていうのは疑う余地はない。

第一特異点、第二特異点、第三特異点、そして第四特異点も……目の前のアサシンと駆け抜けて来た。非常にコミュニケーションが難しい、コミュニケーション強者と。

アホ程強いサーヴァントだ。それでいて、教養もある。雅という文化を解するだけの落ち着きもある。マシユの防御、リリーの攻撃、それらを『越える程』の凶暴性を持ち合わせてずっと前衛を張っている。

だけどもあ。頼りになる相棒……と、どうしても呼べない。

いや、この状況で、二人とも物陰に隠れてやり過ごしてるから、とかそういう理由ではないのだけれども。

「——っ……なあおいアサシン、アレ生前のお知り合いなんだろう!？」

「せやねえ」

「だったら説得とかできないか!」 もうちよつと、こう……降らせる雷の量に手心加えるとか! 雷と雨じゃなくて『雷が雨』だぞこりやあもう!!」

「むりむり。うちとあの女、目え合ったら殺し合う仲やで?」

それじゃあ多分、この一切の容赦のない攻勢は、目の前のこの『鬼』が居るせいで攻撃が激しくなってるんじゃないかねえかな、つて思つてしまふんだが? その辺りどうなんだろうかお嬢さん、と。

とはいえ……目の前のコイツに迂闊な態度を取るとマズいのは『良く知ってる』。コイツは酷く気まぐれで、そもそも真名すら『気まぐれで明かしてもしない』と来た。お陰でここにくるまで非常に苦労した部分も多々ある。

……もうちよつと、どこか真面目な部分があつた気もするんだが。それも気のせいだろうか——いや、それを考えている暇は、今はないか。

「つたく、ここを守護するつて……周りの塀だとかも破壊してんじやねえか」

「門の向こう以外はいつでもええんちやう? あの牛女、京というかそこに居る帝を守るのが仕事やさかい」

「はっ、滅茶苦茶な理屈だ事」

俺たちが、こうして塀の裏に隠れ、こそこそと様子を伺っているのは……周りに降り注いでいる雷の所為だ。

この特異点を解決する為に、俺たちはこの、古い日本の都、『平安京』と思われる場所にやって来た。

その為にはあの朱色のテツカイテツカイ……それこそ、巨人の為に作られたんじゃねえか、っていうサイズの『門』を破壊する必要がある。そしてあの門を守っている……護衛を討ち果たす必要がある訳だが。

門の上、瓦屋根の部分を見つめる。

そこに立っているのは腰を越えてくるぶし辺りまで伸びる黒髪の美しい、女性が一人。ラバースーツっぽい装束に甲冑とかいう、青少年には目の毒でしかない格好なのが……その殺気は毒どころの騒ぎではない。

『――』

「つたくよお……だったらどうすんだよ。あの門の上のべつぴんさんは」

「取り敢えず落ち着くの待ってればええんやないの？」

「あのな、痲癩おこしてんじゃねえんだぞ」

その護衛が、門の上からまあビカビカビカビカ、さつきから絶え間なく降らせてんのがこの……とんでもない量の雷だ。

ぴしやあん、という音が、先ほどよりそこかしこから聞こえてくると言えば、それだけで異常性が分かるだろう。そもそも雷なんて物は、そんな数が降る訳がないっての

に。

「ただの癩癩みたいなもんやろ。こーんな見るものぜえんぶ消し炭にするみたいな、雅さの欠片もありやせえへん。ピカピカ喧しいし、雷様にでもなったつもりではしやいでるって言うのもありそうやねえ？」

「アレは雷様でも駄々こねてる子供でもねえ。アサシン、お前が言ったんだろうが。アレはマジモンの『武将』だつてよ」

まあ、俺は当たつたら間違ひなく一発で黒炭になつておじやんになる、位の威力はあるだろうか……そんなもんを、この数降らしている。

流石は源氏の総大将、『源頼光』……と言つていいのだろうか。

本当に幸運だったと言える。

アレだけの威容を誇る強大な敵がいきなり現れて。こっちはなんも出来ないまま、隠れるしか出来なくなつてしまった。

打開の手立てすら思い浮かばない、こりやあ相当厳しいか……と思つていた所、『カルデア』と通信の繋がらないこの状況』において、アサシンが偶然『あのサーヴァントについて』の情報』を持つていた。

まあその情報が今の所、何か役に立っているかと言えば話は別なのだが。しかし何も無いよりは、マシだ。今現状、藤丸もいない、味方は隣のアサシンだけ。枯れ枝だつて

あるだけありがたい状況だから。

「……つたく……アサシン、アンタだけでもどうにか掻い潜れないか？」

少なくとも、ここを打開した先に、戦うだけの余地がある、という希望を繋ぐくらいの効果はある。という事で。まあ頑張つてその希望に縋りつつこら辺で必死に耐えている訳なのだが……何時までもここにのんびり耐えていても仕方ない。という事で、取り敢えず打開のために深い仲のサーヴァントに頼る事にする。

「やつて見てもええけど。ウチが傍から離れたらあの女、旦那はんの首に一直線やと思うわ。ほんま、遊びもなんもない大将様やし」

「はえ〜こつわあ」

「行くんなら、旦那はんも一緒にあの中駆け抜けるのが、よさそやねえ？」

……結局は俺も危ない橋を渡らなきゃいけないらしい。下手に俺が一緒だとアサシンの足手まといになるかとも思ったのだが、寧ろ見えているクソ雑魚な弱点を放置する方が危険との事。全く以てそうとしか言えん。

「じゃあしや〜ね〜……行くか」

「あら早い」

「アンタが言うならそれ以外に道もねえんだろ？ 自分のサーヴァントのこと疑う程マスタ〜として腐つちやいねえよ」

だつたらせめて手の届く範囲に。っていうのは間違いないだろう。

それに、今更だ。命惜しんで何になるつて話。死地にでも踏み込めば他の事も考えなくともいいかもしれない。

見せつけられて、思い出して……それからずっと纏わりついてくる影を、振り切れるかもしれないんだ。

「——ほーんま、ええ顔しはるわあ……旦那はん」

「アンタから言われても素直に褒められてる気はしねえなあ。アサシン」

何処までも素直じゃないのがこの『鬼』だ。揶揄うのも、本気で褒めているのも、くるくるくるくる表も裏も、直ぐに入れ替わる。人間とは異なるもの——コイツの血を自分が引いている、と思うと。

「……ふふ、なあに？　うちの事考えてくれてはるん？」

「——分かるもんか？」

「そりやあもう……はらわた、ぐちゃぐちゃにされたみたいな顔やもの」
……ああ。全く。似合いの主従じゃねえか。俺らは。

「ああ、大当たりだよ馬鹿野郎……行くぞっ!!」

「はあい——」

一瞬。

影から飛び出して、一步を踏み出し——ぼしゃん、と水の弾ける音にも近い、何らかの音が耳に届く。ちらり、と見たその先に、紫色の光が弾けているのを見て。アサシンがその手に持った大太刀を持って、雷を切り払ったのだと察した。

「……雷切とは、やるう」

「褒めるような事でもないわあ。だつてえ——」

さらにもう一筋——次に振つて来た雷電は、その爪の先であつさりと散り散りに引き裂いてしまった。

「ただの猿真似やし」

「何の猿真似だよ……」

足は、止まらない。何も考えず、門に向けて走つて行ける。

隣のアサシンを見つめる。源氏の大将が降らせて来ている凄まじい火力の雷を、まるで蠅でも払うかのように剣で、手で、打ち払って先へ進んでいつている。

先ず人間業じゃないのは前提、しかしながら、その『格』というモノも、並大抵のそれでないのは間違いない。

「ふふっ……♪ ええねえ。こういうのをなんていうんやろ」

『ノつて来た』とかじゃねえ？」

「——それ。ノつて来たわあ……ふふ、たーのし」

雷の雨の中。アサシンは地獄の如きその景色を縫うように駆け抜けて——笑う。心底愉快そうに。それこそが、彼女の本性。全てを悉く『愉しみ』尽くす、魔性の精神。まるでこつちが悪者にも見えて来てしまふ。

そして。

「——蟲風情が……！」

此方を、厳しく、そして真つ直ぐな視線で見つめる黒髪の彼女の方が……此方を誅する為の正義の刃にも、見えなくも無いのだ。

第七十八章

撤退ツツツ!!! な実況、はーじまーるよー

つええっ!!! どっちもっ!!!

……あの、一戦、やり合ってみたんですよ。頼光さんと。すっごい殴り合いしたんですよ。凄い殴り合いでした。

先ず敵の頼光さんがどえらい火力を叩き出してきました。クラスはセイバーになったのですけれども、しかしそのセイバークラスだろうが関係ない『えっバーサーカーですかアナタ?』って言うレベルのダメージが出て来ております。

ダメですよ……そんな事しちゃあ……

これでは味方のアサシンも危ういか! とか思ったんですが、こっちはこっちで戦闘開始と同時にバフがゴン盛りされて、圧倒的な筈の火力を凌いでいるんですよ。特に防御方面。あ、火力バフも中々……

まあ要するに、二人とも特異点としては二、三段階は先の火力を二人して叩き出しての殴り合いになったと。その結果としてホモ君が入り込む余地、まるでなし!!! なんていうか、今までの特異点攻略がお遊びにしか見えない位の激戦でございます。

『——ちっ、小癩な。致し方ありません。此度はここまでです』

命を燃やし互いに激戦を繰り広げ限界ギリギリバトルを生き抜いたその結果……一定ダメージを与えたあたりで、門の向こうへと撤退されてしまいました。

逃げるな、と言いたい所なんですけれども。正直、一定ダメージを与えるだけでもアサシンがボロボロになってるので……逃げてもらって逆に助かりました。火力はほぼ同格なのですが、エネミー特有のクソ高体力の所為でダメージレースで負けているという。

微妙に変わっているとはいえ、一応はバラキイイベントにそって、強大なエネミーの体力を、何度も何度も戦って削るっていうやり方の模様です。

『ああ、全く疲れたわあ……なんなんあの牛女、無駄に元気すぎひん?』

まあマスターもそれはそう思いますよ。一回ぶちのめしても尚、シレつと退却していったあの姿、全盛期のバラキイを思い出します。

とはいえバラキイではなくそれを行っているのは頼光さんなんですけれども。

源頼光。

FGOでも大分古参な方のサーヴァントであり、本来のクラスはバーサーカー。彼女はバーサーカーの中でも、会話が成立するタイプのバーサーカーだったりします。

いえ、別にバーサーカーの全てが会話が通じない訳ではないんですけれども。あそこ

まで流暢に理性的に会話が出来るのは、頼光さん位なものだと思えます。

本来の歴史においては男性——なれどF.G.Oにおいては、女性として実装されました。いつも通りですね(思考停止) 偉人が実は女性、っていうのは型月のお家芸だからねしょうがないね。

しかし相手が頼光ママとなるとある意味、ホモ君単騎でのレイシフト、及びサーヴァントがアサシン一人で本当に良かったと言えます。

頼光ママは、嘗ては『最強』のバーサーカーの一人としてうたわれていたお方でもあります。宝具レベルが一だとしても、一人持っているだけで攻略が相当に楽になる、との事で。

クリティカルの火力。全体宝具の火力。そしてバーサーカーという全てのクラスに有利が取れるクラスが合わさり、周囲、攻略問わず、幅広い活躍が出来るサーヴァント。しかし、彼女の性能が全開に生かされるのは、やはり対多数人数戦です。その化け物染みた火力の全体宝具に加え、生き残った敵にもきっちりクリティカルを叩き込んで切り伏せるという……高い体力の敵が混ざっていようと関係なくすり潰せるのです。

しかし。こと単体戦において、彼女の力は半減します。というか、彼女の強みの一つである最強の武器である全力の宝具攻撃が火力を叩き出さなくなるんですよね。と
いうか力を発揮しきれない、と言った方が正しいでしょうか。

攻撃の対象が一人に限定されるなら、スキルのバフに合わせてガッツを切る……等もやり易いですし。兎も角、ある意味ラッキーではあるのです。

とはいえ、アサシンがガッツスキル持ちで、きつち育ち切ってる状態じゃなかったらまず負けてた、くらいには強いですけどもですね。

今の所、私のサーヴァントとして味方に付いてくれている彼女は、既に最終再臨……要するに式部さんゴルゴーンさんの先の最終レベルにまでたどり着いていますし、スキルのレベルも上がり切っています。

ホモ君も、特異点探索の合間にちよこちよこ素材を集めてはいますが、それでも完全体まではまだまだ至っていない、という状況です。しかしやっぱ完全体サーヴァントつええは……アサシンありがと……

『せやけどあの女、昔のまんまやったなあ。影法師っちゅうんは、割と生きてる時のそのまんまなんやねえ』

つと、今は頼光さんの話でしたね。我がサーヴァント（所説）の話の腰を折ってはいけない。

さて、頼光さんですが性能面もさることながら、そのキャラ性でも人気が高いです。つやつやの黒髪をほぼストレートに伸ばし、貴族のご婦人かのようななたおやかでおしとやかな人。マスターの子を『我が子』と呼んで可愛がってくださる優しいお母さんで

もあり『頼光ママ』とまで呼ばれるお人。

なのですが、ひとたび戦場に出ればそのままに敵を鮮やかに蹂躪する文字通りの『狂戦士』ともなれば、ギャップも強い。キャラとして、実に濃い。

まあぶつちやけた話をすると思髪ロングストリートボインボイン優しい系（おっとりではない）ママキャラとか嫌いな奴はおらんやろ？　と言った感じですよ。

イベント出身キャラの中でも、ほんへに對しての出演率はトップクラス。季節イベントへの出演ともなれば、イベント出身は愚か全サーヴァントの中でも一握りの頂点に位置するレベルでしょう。

水着すら実装されている処から、その人気ぶりが分かりやすい。そんなキャラクターなのです。

ですが……

『ほーんま、ウチみるたんびに角尖らして……あの女。鬼は嫌、嫌、なんて言っておいて自分で角生やしてたら世話ないわなあ……せやろ？　旦那はん？』

今、目の前で我々と戦った頼光さんは、FGOでの『母性』（本来の歴史では男性）を強調されたその結果として、優しいお母さんとして振舞っている彼女とは違い……彼女はかつて京を守護していた『源氏武者』の『総大将』としての一面が強くピックアップされています。

常に集落の周りをとんでもない化け物がズラズラとうろついている、そんな平安の時代において、神代に片足突っ込んだみたいな存在達を打ち破るために京に配置されていたのが人間やめてる人しかいない化け物集団『源氏武者』達です。

彼女は、その源氏武者達を統括する立場にあり、その中でも『最強』を謳われる無双の武将。平安京においては『守護者』として厳格に振舞っていらつしやいました。

今の彼女は、あらゆる敵を冷徹に塵殺していた頃の『マジ』モードの頼光様なのです。命令に忠実、一切の情が通じない無双の剣、人とは思えぬ程のかつての『源氏武者』モードなので、そんな『ママ』等と口が裂けても言えない状態となつています。

目の前の羅生門を守るためのモードになつていると言えるでしょう。

それが自然な事なのかそれとも、ここに召喚されている事による変容なのかは分かりませんが……いや、多分それが自然なんだろうな。バーサーカーとして頼光さん召喚する方がイレギュラー極まりないんだと思います。

つまり今回は向こうがごく真つ当なしていた可能性が……？（困惑）

しかしこのアサシン、語り口からしてそんな恐ろしい武者様と与した事がある鬼らつしゃるようでした……フーン？ 何となく見えてきましたね（すつとぼけ）

『おんなじ舞台で武者だすんなら、小僧の方が良かったわあ……ん？ 小僧？ ああ、旦那はんも知ってはるやろ？ 『あしがら山のきんたろう』さん』

因みに、この目の前のアサシンは、何方かと言えば彼女の配下と因縁がある人だったりします。

あしがら山のきんたろう、と言えば、昔の伝承に残る武人の一人をモチーフとして語られているおとぎ話。その武人の名前は……坂田金時。源頼光の配下たる『四天王』の一角として名高い『源氏武者』です。

アサシンと本来イベントで関連があつた茨城童子、アサシンと因縁のある都の守護者たる源頼光、そして……坂田金時。ここまでくると、いよいよ揃い踏みって感じがしてきましたねー。さて、ここから導き出されるアサシンの真名とは――

『んー、取り敢えず、回りとか調べたりする？　そういう事するんやろ？　カルデアってんのは。ちやうん？』

……それよりも明確にこの子怪しいんですけど。ずっと一緒にいるって言って『カルデアってそういう事するんだろ？』はおかしいだろオラアン!!

敵か!?　味方か!?　はつきりせえ!!

第七十八章・裏：狡猾な童

「……おい。アサシン」

「なあに？」

文字通り、人っ子一人いない大通りを見つめながら、隣で全く以て何にも気にして無さそうに、のんびりと立っているサーヴァントに声をかける。

「めっちゃ逃げられるんだが？」

「んー、しようがないんちゃう？　うちやし。一緒にいるの」
「そっかあ」

先ほどの激戦を見てビビってる、とかではなく、自分だからビビられている、と自分で言うあたりある種の自覚はあるんだろう。

実際、皆さんは先ほどのまでの激戦を繰り返しているヤバい奴らを遠巻きにじーっと見ている……という訳ではなく、明確にアサシンを見て逃げ出しているのが分かりやすい。完全に怯え切っている。

「……の皆さんに何したの？　お嬢さん」

「んー？　別にいい？　好き勝手にしただけやで？　うちの」

「いやどんな好き勝手したのよ。ここまで怯えさせる好き勝手して。お前自分の事災害かなんかだと思ってるの？」

その目は……人や、動物を見て恐れる目ではない。それならばまだ、瞳には恐れるものが映っている。恐れる相手から目を逸らしてはいけない。見ていなければあつという間に喰らわれてしまうから。

けれど彼らは違う——アサシンを見ていない。否、見る余裕すらない。

目の前に……竜巻が、火の渦が、鉄砲水が、災害が来ているなら……それを見ながら逃げる馬鹿が何処にいる？ 後ろから聞こえる音が、地響きが、熱が、見ずとも心胆を寒からしめる。

まさにそれだった。彼らがアサシンを見る目は……災害と同じだった。一瞬、それを認識した時点で、背中を見せるだとか、そんな事も考えず、兎も角逃げる事以外をまるで考えずに走り出す。

「——あら、旦那はんもええこと言うやない？ 似たようなもんやで？ うち」

……アサシンはそれを否定しない。

寧ろ、につこりと笑ってそれを——肯定して見せた。自分が、最早人が測れる範疇に収まる器ではなく、文字通りの災害である事を。

「そこは否定しておくれやアサシン」

「うちがそんな、獣やらと一緒にされてたら、それこそ心外やわ」

「……心読んだりしてる?」

「んーん。せやけど旦那はん分かりやすいし、それに実際おつたし。うち等を御山の獣と一緒にしたにして向かって来たお武家さん。今の旦那はんみたいな顔で」

——みーんな、骨になってしもたけどね。

そう言つて、アサシンはけらけらと笑つた。楽し気に。

好き勝手に振舞う。ただそれだけで、人にとつての災害となり得る。それが——鬼である。アサシンのあの暴れ具合と、周りの様子から納得せざるを得ない。

……いや、その力が脅威である、というよりも。

その圧倒的な力で、あらゆるものに縛らないで、自分の好き勝手に振舞う。アサシンの様な『在り方』であるからこそ、鬼は災害として恐れられているのだろうか。

前者は、力を振るわなければ、何とかなるかもしれない。

しかし後者は……もう鬼が『その様に在るもの』であれば変えようがないのだから。全く、そんなつまみ食べるみたいな感覚で人喰つてんじやねーですよ」

「向こうから来たつて言うのにそんな風に言われるのは心外やわあ。それに全部食うたわけちゃうし……そんな大食らいに見える?」

「そういう問題じゃねえ。俺だつて人なんだよ」

アサシンは、自由だ。

それは例えば……発想が、だとか、振る舞いが、とかではない。

生き方の問題だ。人の如く理性と知性を持ち合わせているにも関わらず、しかし自分の生き方を曲げない。

『愉しく』生きる。彼女がそれを曲げた事は、無いのだろう。

「——ふーん？ 人、なあ」

「なんだよ」

「んふふ。旦那はん、一応うちとお仲間、なんやろ？」

「一緒にすんな」

……それが少し、ほんの少しだけ。

「……せやねえ、おんなじちやうねえ」

「……」

「だって、うち、そんな窮屈な生き方、してへんもん。そんながんじがらめで、息詰まりそうになって。我慢できる気、せえへんわあ」

羨ましくも、なる時もあるのだ。

そう思うのは。我が儘なのだろうか。

「——良かったよ、良い感じの廃屋見つかった」

野宿にもいい加減慣れて来たけど。流石に野宿が良いとは口裂けても言えない。野宿だと、油断してたりすると急に獣に襲われたりもする。

それに……野宿、というのはアサシンは、意外にも嫌がるのだ。

『別にぼろいのはええねんけどなあ……野に転がるって言うのは、ちよつと。それこそ獣と同じやし。うち、これでも箱入りやねんで?』

そういうアサシンは、何というか都会派な印象を抱くのは間違いないのだが。箱入りとかいう冗談をかましてきた辺り、多分全部本気ではないのは分かりやすい。アサシンが箱入りだとか、一体何の冗談だと。

アサシンは、反英霊だ。

彼女は人と同じように朗らかに笑う。はんなりと笑う。揶揄う様に笑う。しかし——しかしだ。その顔の裏に潜んでいるのは、決して人と同じモノではない。

——邪悪。

一切の、何の瑕疵も無く、彼女の本性を語るのであれば、それだ。善性とは明確に逆の位置に存在する彼女は——何よりも、自分の思うように振舞う。

そして、同じくらいには、狡猾だ。

小賢しい、という事ではない。勇者の知恵とは違う、別方面の知啓の形。相手を絡め

とり、そして奈落へと優しく引き込み、突き堕とす。見えない剣みたいたるくでもない厄介さしかない。

そこには間違いなく、長い事えげつない戦い方をしてきた『経験』が生きているのだ。箱入りなどと、口が裂けても言えるようなそれではない。

「……ん？ どないしたん？」

「いや、なんでもねえよ。随分と良い顔してんな、と思っただけで」

「そやねえ……あんな可笑しな靨を纏つて。別の顔してるお月さんを肴に一杯……つていうのも、おつなもんやと思つて、ね」

廃屋の上。

薄紫の霞に包まれてぼんやりと輝き、地上に怪しげな輝きを落とす満月。それを背負いながら朱色の盃を煽つて飲み干すアサシンは、実に風雅だ。

それすらも。彼女にとつてはある種の『擬態』である。

彼女は、鬼らしく本能剥き出しで暴れようと思えばできるのだろう。だがそれを敢えてしない。自らが楽しむのに必要だからこそ、『本能を上手に抑える』やり方を知つて活かしている。人としてそれを知っている者は、何人いるだろうか？

「旦那はんも、こつち来て楽しまん？」

「酒は生憎と苦手だね。遠慮させてもらうよ」

「ああ——それも、あるけど、そうやなくて。角生やして、抑えてるもん、晒してみいひん？　ここに來てから、ぜえんぜん暴れてへんやんか」

——それは、俺も同類ではあるのだが。

「……いや、ちよつと、調子が悪くてね。悪い酔い方しちまいそうだ」

「ええやん。別に。變に我慢せえへんでも……我慢は体に毒やで？」

「お氣遣いごーも。先に寝てるぜー」

彼女は。鬼だ。

俺の中に流れる血と、同類だ。

それを知つていてか。彼女は、時々……ああ、時々。こうして、俺を、誘ってくる。出会つた時から、それはきつと。

……出会つた時から、本当にそうだっただろうか？

否、もう分からない。大分時間も経つてゐる。兎も角、彼女相手に油断してゐては。俺の本性すら……おもちゃにされてしまふだろう。

俺の中に眠る鬼の血を、彼女は……楽しそうに、楽しそうに見ている。ずっと。そうなのだ。彼女のあの瞳に、暴かれるという恐怖を、俺は見ている。

……特異点を一緒に乗り越えてきたはずの相棒に、恐怖なんざ抱くのも、可笑しな話だと思ふのだが。

「……俺がアサシン、としか呼べねえとも、その辺りに関係してんのかねえ」
そもそも。

どうしてアサシン、としか呼ばないのだろう俺は。頑なに。彼女の真名を知る事はマ
スターとして、必要な事の筈なのに。

どうして、アサシン、と呼んでいるんだろう。

第七十九章

挑め！ 二度目の挑戦！ はーじまーるよー。

アサシンと共に廃墟で迎えた朝チユン……今までと違い、マジでサシ一つ屋根の下二人きり聖夜の一步半ぶちかましてらっしやいますが、しかしながらこの怪しい魅力と見せつけてくれる肌の白さがえぐいアサシンと二人きりとかちよつとオイラの股間のエクスカリバーが屹立しちまうぞ……しようがねえ、一騎打ち（意味深）挑むか!!!（天下無双）

まあそんなことしたら間違いなく俺とホモ君のエクスカリバー粉々にされてキラキラしながら消えていくんですけれども。

この世界の女性は男の象徴一本で怯んでくださるような生易しい人達ではないので。催眠かけた所でお前らの一本満足が力加減不足で砕け散るだけやからやめとけ（真剣）さて、そうして節度を保ったまま眠った後、起きて直ぐなのですけれども。

『ああ、またあそこにおるねえ。あの大將……昨日よりせせっこましい顔してはって。今日は昨日より、激しい事になるやろね』

そんな我らの男の象徴を粉碎してくださる女神の如き女性の一角、頼光様とのバトル

が再度迫っておりまして。こうしてもう一度、門の前に姿を現した我々を前に、めつちやおつかかない顔で睨めつけております。

この特異点の特徴として、特異点を探索する暇はほぼありません。というか探索出来るエリアが全くなく、巨大な門と、自分の宿とそれがああるぼろ町と……くらいしか存在しないのです。

そして、ぼろ町までたどり着いたら『疲労しているのもう休む』という事でサーヴァントと共に休息したり、交流する事しか出来ないのです。その後、ターン経過したら門の前にイベントが発生し、そこに行けと促されます。

というか行かないと他になにもしようがありません。なんというかこう、もう少し手心というか……そんなものは無かった。アサシンを連れて、もう一度門の前へと向かいましょうか。

『また姿を堂々、この門の前に晒すとは……随分と舐められたものですね。私も。良いでしょう。此度こそ、この門の前に散る、塵芥の一つまみにしてあげましょう』

『昨日は出来ひんかった事を、よう言う口やねえ』
煽らないで（震え声）

『——蟲風情が。良いでしょう。そこまで言うのであれば、塵すら残しはしない程、念入りに註罰を執行いたしましたしょう』

『こわいこわい……うち、震えてきそうやわあ』

という事で第二戦です。

と言つても同じ事を繰り返すだけなんですけれどもね（冷静）如何に強敵と言えども同じ敵と戦うならただの作業ですよ作業。フロムゲー出身の俺を舐めるな（ブチ切れ）

——とか思つてたら親方！ いきなり空から雷電が！ 最初手でダメージを与えてこないでください！ 固定値の暴力やめてください!!!

『昨日の事を忘れましたか』じゃないんですよ!!

ダメージが痛い……ですが、昨日よりもアサシンの動きをかなり最適化できているので何とか、何とか戦えています。はい。

という事で、無事撃退!! キツチリ防御とガッツスキルで凌いでその先へと行く。これってえ……勲章ですよ……（恍惚） まあ普通に致命傷ですけど。

しかし、二度撃退して思うのですが。頼光さんは何故ここを守っているのでしょうか。

頼光さんのお仕事自体は、京全体を守るお仕事の手筈で、京に続く門を守るのは普通なのですが、しかしそこだけに集中して守るって事も無いと思うのですけれども。というかこんなデカイ門が出来てる事自体が異常でしょ（正論）

『知れた事。源氏の棟梁として。京を守るのは当たり前前的事了』

『京、なあ。アンタの知ってる京に、こないなひようげたもの、あつたん?』

『当たり前です。この『羅生門』こそは都へ入り込むあらゆる妖を跳ねのける金剛不壊の堅門。この門がある限り、この京は、容易く入るも容易く出るも不可能』

そう頼光さんは堂々と行ってくださいました。

京を守るために門の守護に着く、つていうのは確かに可笑しなことではないですがしかし、目に見えるような異常から目を逸らして……ん? えっ? 出る事も不可能?

あの可笑しくないですか? この門から出ていく事も不可能なんですか!?(震え声)

それではまるで、京から出れないようにこの門が外界と京を完全に隔ててみたいなこと言ってますんかね……?!

『京の民は、安全な門の内、安寧を送る。私はその暮らしの守り人——その怨敵たる貴様らを、見逃す訳ありません』

『——へえ? それは、結構な事やけどねえ?』

アサシンも思わず困惑顔。こっちも思わず宇宙猫になってしまいそうです。とか今もうなってます。もうこの瞬間。

それ、守っているってより監禁してるだけ……い、いえ何でもございません。

というか、セイバーとして規則とかに厳しい全開モードの頼光さんの筈なんですけど

今回のやってる事、聞いてる限りほぼバーサーカーの行いやんけ！

あの、その安寧って。ちゃんと丁寧丁寧丁寧に守られているんですかね？ 到底守られていたとは思えないんですけれども。

『今日は——退きます。しかし、コレで終わるとは思わない事です』

『んじゃ、うち等が明日もここに来たら、また来るんやね？』

『ええ……今日、昨日……この次こそはこの失態、必ずや雪いで見せましょう』

しかしながらその疑問を問い詰める前に頼光さん、一跳びにて再び羅生門の中に軽々と撤退していつてしまいました。

言うだけ言われて逃げられましたねえ……

『……普通に変なこと言うとなつたよねえ。あの女。うち、鬼やさかいその辺り感覚、ずれてるとかやないよねえ？』

アサシンですら『ええ……？（困惑）』と口にするほどの支離滅裂な発言。

それも当たり前ですよ。頼光さんが言ってる事そのまま直訳すると『お外は危ないから監禁しておこーね!!』って事です。典型的な母性が暴走した母親みたいなこと言つてらつしやる……!!

寧ろそれが正しい、なんて普通の頼光さんだったら口が裂けても言うとは思いません。幾らママキャラって言つたつてそんな事しませんよ。

……どうしてか彼女は絆が上がつたり、イベントによつては『マスターの母』を名乗りだしますけれども。どうしてか自分のマスターの部屋に侵入しますけど。『愛』の名のもとに溶岩を当然のように泳いだりしますけれども。

あれっ？　なんか頼光さんだったらワンチャンやつても不思議ではない気がするんですけども？

『ん〜……旦那はんも、やっぱその辺りが気になるん？　やるなあ、そりやあ。となると次はそこを突つついてみるのも、ありかもしれないね？』

……まあ、サーヴァントでも色々な側面があるという事で。そこは一つ。

兎も角、二連戦してぶつかつてから漸く彼女の『おかしな点』が見えて来たので、次の第三戦からはそこを突いて『それは違うよ！』する事になると思われます。

大丈夫かなあ、普通に凶星突いて大打撃が返つてきたら洒落にもならないなあ……怖いなあ（震え声）

さて、震えが来ると言えば続いてアサシンです。これから頼光さんとの激戦が控えているというのに、その後は彼女とのコミュパートに入ります。

しかしねえ、君。私たちは今まで全くコミュニケーションを行つてこなかったというのにここで急にアサシンと仲良くしろと言われてるのだから……無理だと思えます（急ハンドル）

『ほんま、あの女……』

しかもアサシンのご機嫌が大変悪いです（震え声）

いやあまあ、そりやあね？ 向こうからしても仲が悪い事は丸見え、みたいな態度でしたけれども。それを含めたとしても、静かにブチ切れてるアサシンの方が個人的には怖いです。

声を荒げている、とかでは無いんです。

静かに、こう、ため息を吐くみたいに『ほんま……』って言っているのが余りにも怖すぎるんですよ。重たいお声に感情が宿って背筋が凍るう！

『ああ——旦那はんになんか言うてる訳ちゃうから、そんな顔せんといてえな』

無理です（震え声）

どうやってコミュニケーションを取ればいいのか！ 心配ご無用！ そんなときでもこのゲームなら選択肢を選ぶだけでイベントが進む!! お手軽!!

取り敢えず、アサシンとはこの特異点が終わるまでの仲でしようし適当に被害を避けて喋る事に致しましょうね。フハハハ!! ホモ君に！ そんな！ 藤丸君みたいなコミュニケーションが！ 出来る訳ねえだろうが!! こちとら脳筋マスターなんだよ！

あつ、待つて選択肢そつちちゃう。踏み込むような事は言わないで、こう、無難に済ませるつもりだったんです待つて！ 生まれ！（迫真）

『——へえ？ おもしろいこと言うんやね。旦那はん……ふふ』
やだこわい……やめてください……アイアンマン……（クソ雑魚ナメクジ）

第七十九章・裏：鬼の本性

——先ほどまでの時間、俺たちがぶつかり合っていた門は、この深夜、距離を置いたここからでもよく見える位に朱色に輝いている。

アレが、血の色なら分かりやすい狂気だったろうと思う。

しかしながらあの色は、暗に夜にも映える『美しい』朱色。それは間違はなく京を守るための正気の色だ。自らの狂気を狂気と知らず、自分で正気だと良く『分かっている』彼女の今を表したような。

「旦那はん。何見とるん？」

「……京の景色だけでも？」

「へえ。その割には……朱い物みて、怖い顔しとるけどねえ」

「京の景色には変わりねえだろうがよ」

「あんな景色ぶちこわしにする無粋な門、うち知らんけど？　コレが京の景色なんて言うのはやめておくんなはれ？」

……当然ながら、戦っている源頼光は最早正気などではないのは間違いないだろう。京の人達をあゝの門の内に閉じ込めて何処にも行かぬように『守る』とは。

生前からの知り合いのアサシンの言う所では。まあ言いかねないが、しかし正気であるならば口が裂けてもそんな事は言わないし、冗談でも言うような愉快さを持ち合わせてはいない、との事だった。

『つまらない女やしねえ』と……彼女は頼光への評価をそう締めくくっている。

アサシンの頼光への評価は一貫して辛辣なモノが多い。というより単純に嫌いらしい。

「お前にとつてもあんまり愉快なもんじゃねえか、あの門は」

「ただでさえあの女と何度も何度も顔つき合わせてるんやで？ あの無駄なデカブツの前で。愉快なんて思えへんけど？」

とまあ、頼光憎けりや門まで憎し。日に日にあの特異点の原因である筈の門に対するヘイトが溜まるくらいには彼女との仲は宜しくない。門破壊へのモチベが上がる分には良い、のだろうか。分かん。

……ここまで付き合ってきて、アサシンのモチベが上がるのが良いのか悪いのかも分からんとは。マスター失格ではないだろうか、とは思う。いや、上辺だけでも彼女を理解できてしまっているから故の弊害だろうか。

彼女のテンションが上がる、というのは必ずしも福音ではないのだと、分かる。

「……なあに？ っつち見て」

「なんでもない。怖い鬼の面を眺めてただけだ」

「へえ。それで？ どないやった？」

「ああ。相変わらず……背筋が凍る程の美人だよ。お前は」

——ああ、こんな顔をした時だとか。

にんまり、と文字が出るような、牙を少し見せつける何処かこちらを揶揄う笑顔。純真に喜んでいる、訳では到底ない。寧ろ、奥底の邪心を牙と共にこちらにちらつかせる様な笑い方だった。

俺が『褒めている』訳ではない事を分かっている。俺が必死になって自分を『警戒している』事を、アサシンはきつと分かっている。自分の血が呪われているから。その血の元となった鬼を、俺は警戒している。

まるで……それを幼子が頑張る姿を見ているかのような優しい目で見つめ、獲物を食らう為の舌なめずりが聞こえてきそうな笑顔を向けている。

「ふふ。旦那はんも、真面目やね。あの女と同じ」

「……」

「せやけどちやうわあ。全然ちやう……うち、旦那はんの『それ』は嫌いちゃうで？
まあでも。やっぱり我慢しすぎやない、とは思うけどね」

人と同じように愛でていても、昂ればそれを喰らう。

鬼の『裏表』激しい性分を表したかのような、そんな表情だった。

「……そんな今にも人喰いそうな顔よせよ、俺はおビビり肝つ玉ゼロニキなんだ俺は。」

「ん？ そんな顔しとった？ んふふ、ゴメンねエ。よし、よし」

「なでんな」

実際頭撫でられてる間に、軽く頭を捻られてぶちんと——つて事もあるだろう。まあここでビビったら、もつと酷い終わり方をするのは目に見えているから、見えてる地雷は絶対に踏まない様に努力するが。

……気を逸らすために取り敢えず視線を向こうにやってみる。

実際、気にならない訳じゃない。頼光の話が本当だったとして、あの巨大な門の向こうはどうなっているのか。

「……どうなってると思う？ アサシン」

「んー？ なにがー？」

「あの門の向こうだよ……彼女が守りたい、つて言う京や民は果たして言う通りに、果たして残ってるのかって話」

頼光は、その向こうに人が残っているという言い方だった。しかしながら、入るのは兎も角出るものもない、というのは少しおかしい。

あの門が幾らデカいとしても、京すべての出入り口つて訳でも無いのは間違いないだ

ろうし。しかしながら。

『——ほ、本当だよ。あの中から、ここ暫く人は出て来てないよ……』

『普通の住人も、商人も……貴族様だつてな。ああ、本当に』

『ここら辺は、京に入れなくなつた奴らが作つた『避難場』みたいなもんなのさ』

あの巨大な門が出来てからというもの。本当に京を出入りする者は一人も存在しないらしい——そんな事実があるのに、京の中が未だ安寧の中にある、とだけ考えるのは流石に抜けている、と言つていいのではないだろうか？

アサシンはその疑問に対し——笑つた。

それを聞くのは、最早愚悶なのではないか？ とでも言いたげに。

「無事やと思う？ 旦那はんは」

「——そうだと良いな、とは思つてるし。諦めてもない」

「まあせやろねえ。旦那はんはそう思つてるやろねえ。全力を尽くすと思うわあ……もしあつこがだあれもない、空の京でも」

……それは、確信をもつての一言か。それとも、ただ適当に言の葉を紡いでいるだけののだろうか？

多分だが。どつちでも、アサシンならばあり得るだろう。寧ろ、アサシンだからこそどちらの可能性もあり得るといふべきか。

「……ああそれでもやるさ。悪いか」

「真面目やもんねえ、ひょうげてるみたいに見えて」

その意図は読めない——なら、それでも先に進む。ここから下がるって選択肢は存在しないのだから。前のめりに、さらに突っ込んでやる。

逃げて逃げて、どこまでも来ても結局……：どうにもならないのは、知ってる。否、良く分かった。忘れられそうだった過去が、どういう目的か知らんが、追いかけて来たんだ。きつと逃しちやあくれねえだろう。

どうせ赤い花咲かして散るなら、せめて真つすぐに。行ける所まで突っ込んでから。

「——ほんま、不思議やねえ。旦那はん」

「あ?」

「自分のやりたい事抑え込んで。他のやりたい事へ必死。鬼やったらせえつたいそんなことせえへん。窮屈やさかい」

そう思った時。

アサシンと、目があった。

酷く、温度の無い目をしている。さつきまで愉快そうにしていた顔からは想像も出来ないような、物を見るような冷たい瞳。

ゾツとする——今の中に、彼女の何か、琴線に触れるようなものがあつたのだろうか。

だが。もう止まらない。苦しくても、先へ、先へと。

「——鬼の中にも、どこまでも『他人』を思い『自分』を思わない。そういう奴が居ちゃいけないのかい。アサシン」

「……」

「俺は、そうは思わんよ」

ああ、それは何処か逃避の様ですらあつた、と自分ですら思う。俺はずっと、家族の事だけを思つて生きていた——そう、情に訴えかけるように嘘の皮で覆う。

ただ自分と向き合いたくないだけ——そう思いたくない、という方が正しいのだからかと思う。おかしな話だ。目の前に答えがあるというのに。

それでもなお——俺の中のその血から、まだ俺は逃げようというのか。俺は誰よりも『自分の事』しか考えていない。鬼子じゃないのか。

「——へえ？ おもしろいこと言うんやね。旦那はん……ふふ」

「……」

合間に、呼吸を一つ。

「……おらへんよ」

瞬間、背筋に。甘い痺れが走つた。

耳に、硬い何かの食い込む感触。痛くはない。そして、そこから囁かれたのは……濡

れた様な、囁き声。

唾液にではなく——己が食った、人の血に。

「そんな鬼。居ったとしてそれは……必死に無理してるだけやったり、そうして堪えるのが『愉しかったり』……結局は、己の為に戻って来る。存外とそういうもんやで、鬼っちゆうんは」

ちらり、横を見る。

アサシンが、先ほどとは打って変わって——酷く、酷く楽しそうに笑っていた。

まるでクルクルと形を変える万華鏡のように、彼女は……一つ、時を刻む度に、その顔を変えるのだ。

美しい童から。

艶めかしい、捕食者に。

第八十章

三戦目、イクゾおおおおお!!!

という事で、昨日は大変熱い夜（当社比）を過ごした我々は、いよいよ特異点解決のために頼光さんとの問答に打って出る事に。

まあ特別な事をする訳ではありませんよ。いつも通り殴り倒せば、後は我々が代弁者たるホモ君が勝手に『それは違うよ!!!』してくださいるので。我々は兎も角ここを生き残って、出来るだけレベルを上げる事に終始しましょう。

だって未だこの特異点に入ってからからのデバフは付きっぱなしなんだもんなあ!!
いい加減コレをぶつちぎってよお……能力をよお……最大火力発揮してえよなあ!?!
雑魚敵もないこの特異点では土台無理ですけれども（冷静）

やつぱり、アサシンでギリギリまで削ってから殴り倒すしかないんですかねえ……
まあ今のホモ君であつても、ミリ単位の削りダメージであれば入れられますけれども。
しかし序盤ならば兎も角、今、ダメージが加速して来た状況でどうやって調整なんてするのかつていう話ですが。

『——やはり来ましたね』

まあ今は取り合えず頼光さんとのご対面です。

相も変わらず睨まれて悲しいなあ……頼光さんが『この京を守るんだっ!』って思っているのは間違いない以上、都に押し入る無法者にしか見えないですからね、こちららは。

『まあ、ねえ。旦那はんは諦めてへんし、うちも、なあなあでアンタとの決着を終わらせるんも、気持ち悪いし。しっかり首と体、泣き別れにしておかへんと、ねえ?』

『ふん。実に口だけは良く回る事……しかし、不思議です』

『ん?何が?』

『そちらではなく……貴方です。そちらの、異国風の貴方』

おや? ホモ君ですか?

どうしたんでしょう。門の前に辿り着いて、二、三回程頼光さんと言葉を交わしたら即座に戦闘開始、かと思っていたんですが。

どうやら頼光さん、ホモ君が気にかかった模様。俺? 何かやつちやいましたか?

いえ特に何も……(無慈悲) 本当に何もやってないのが余りにも哀れ。

『良い顔をしています。あの子とは違いますが……それでも、目の前の私という脅威を相手に、それでも怯まない。捨て鉢になっている訳でも無い。自らの意思を持って、足を踏ん張って立っている』

『強い子なのです。貴方は』

それでも褒められちゃった!!! やったあ!!! ママに褒められたぞ!!! バブバブさせて欲しい（真顔） 控えめに言って悍ましくないか（理性の民）

それはともかく、この特異点に来て、初めて頼光さんの優しい笑顔を見た気がします。そうです。このたおやかで優しい笑顔こそ、頼光さんのもう一つの側面。厳しいだけではない、優しいお母さんとしての……!

まあそつちも普通に暴走するので喜ばしいばかりではないのですけれども（冷静）

『何ゆえに京を狙うのです。金や富欲しさには見え、かといって京の民に恨みを持つようにも見えませんか——人を食らう、物の怪の類でもない。貴方に、ここを狙う謂れはない筈です』

そりやあこの『門』が可笑しいからだよお!!!（反撃の一矢）

『——この門は、京を守る鉄壁の守り。何が奇妙だというのです』

『まさか分からの？ その門が出来てから、だあれも出入りしてへんらしいけど？』
『……』

『天下の帝がおわす京が、誰も入るのを受け付けへんし、出るのも許さん。そんなん、誰やって『おかしい』って思わん？』

当たり前だよなあ？ 言いたい事があるから口に出して口に！（ファーストペンギ

ン)

自由な人の流れを許さない国は、管理された人の手によって何れ滅びるって、それ一番言われてるから（深謀遠慮）

『——門の手に屯す者達の声を聴いた、と』

『そういうんちゃうんやけど。まあ結果的には、な？ 旦那はんは『おかしいな』って

思った事は、口に出さずにはおれへん質やし。うちも——ふふ、苦勞しとるわ』

二戦目までは敵対者としてしか会話も出来ませんでしたので、シナリオもクソもありませんでしたがしかし、漸く彼女と一つ話が出来た気がしますね。

『成程。その真つ直ぐな心持、実に——惜しい』

』——

『私は、この門の守護を務める者。貴方の言う事に、一切の理がない、とは言いませんがしかし。それでも、いいえ、だからこそ相容れる事はない。私は、貴方のその思いを砕かねばなりません。この京に生きる民の為に』

うーんこの話に通じているようで通じていない感。

仕方ねえ!! お前もその仲間に入れてやるってんだよお!! (天下無双) 第三戦イク

ゾオオオオオオオオッ!! あっ開幕雷電はやめて……痛い……やめてください……またアイアンマンなっちゃうよお……

『貴方が強い武士（もののふ）である事は分かりました。故にこそ。私もより念入りに註戮せざるを得ませんね』

ん？ バトル中にメツセージ……うわあああああつ!! あつ、待って向こうのバフが増えてるっ!! アサシンのバフよりも数上回ってる! こんなクリティカル一つでも貰ったら消えるっ……あーやっぱ逝キソ逝クッ……（ガッツ発動）

『……あかんなあ。思ってたより、全然……暴れ牛やん』

『何時、私の本気で戦った、と言いましたか……？ 虚仮にされたものですね。あの程度で全力だと思われていたとは』

いかんです、前まで防げていたのがバフのお陰だったと良く分かった……あつという間にアサシンが沈みました。まあガッツのお陰でギリギリ踏みとどまったとはいえ、それでも一撃! 致命的!

くそっ、舐めプしてたのに急に本気出してこっちを蹂躪するとは卑怯だぞ! はじめっから全力で戦え!!

『手の内をはじめから全て明かすのは愚の骨頂……兵法の基礎中の基礎ですが?』

おっしやるとーりでーす!!（負け顔ダブルピース）

うう、寧ろこの辺りまで冷静に相手の実力を見極めて、見極めたとみるや一転、一息に全力で殺しに来るそのやり方武人って言うより狩人だよお……（震え声）

しかしイベントが有ったあたり、一応は負けイベントらしいのですけれども。これ逃げられるんですか……？ アサシンやられてますけれども？

『しかし、私が全力を出すだけの實力はありました……誇りなさい。異邦の術者』

『はっ、随分なやり方やなあ……せやけど……うちかて、別に全力を出し切ってるっちゃう訳ちゃうで？』

しかしその時、マスターに電流走る。

『っ！ 待ちなさいっ！』

『待たれへんよ。ほなまた……あんじょうよろしゅう』

アサシンさん!? やるんだな、今ここで!!

と言う事で、今までの頼光さんのお株を奪うが如き大大大跳躍！ 一瞬にして門の前から退く事に大成功致しました。

アサシンさんがまだ残っていた底力、凄まじいですねえクオレハ……流星ははんなり鬼っ子アサシン。底知れぬ力は伊達ではありません。

このアサシンは、基本デバフを撒いて立ち回るタイプの性能しているのですけれども。

しかしデバフアアとして後衛タイプかと思いきや、前衛としての性能はまあ高く、ガッツスキル持ち。それらがカチリとあてはまると、いつまでも死なない生存の鬼が出

来上がります。

まさにそれを表すかの如き、凄まじい生命力、見事な大跳躍による逃走。取り敢えず死ぬな、命を惜しんで、生きていけ（戦場の鉄則）

あわや全滅寸前でしたが、しかしながら生存!! これってえ……勲章ですよ……感謝永遠に。

『嫌やわあほんま……着物が台無しやないの。うちの玉の肌も焼けてしもて』

しかしながら、そんな千両役者な当人は存外余裕そうと言う。カッコいい（小並感）
とはいえ重傷なのは変わらないので、ちゃんと令呪で治療しておきました。寝るだけで回復出来る量には限りもありますから。

さて、生き残ったは良いものの。次から本気モードの頼光さんを相手にする事になるのですが……それは次回考えようかなあ!!（現実逃避）

第八十章・裏：剛の雷

「——生きてるか、アサシン」

「んー……何とか、やな」

……アサシンの有様は酷いもんだった。

全身に渡り大きな帯のように伸びる、爛れた様な跡が残ってしまっている。ケロイド状のその肌は、目を逸らしたくなる程に、痛々しい。

当然だ。頼光が放ってきた必殺の雷電をモロに浴びたのだから。

『——四天王などほれこの通り……!!』

昨日から降らしていた雷なんぞ、ただのお遊びにしか見えない——大蛇の如く、地面を喰らい、そしてこちらへ迫る一条の雷の斬撃。正直な話、『いつも通り』前線で戦ってたら……俺も消し炭になっていた。

アサシンの動きについていけないのは分かっているけど、今までは出来るだけ近くにいらる事で、アサシンのスペックを最大まで引き出せるように努力はしていた。しかし、この特異点においては、本来のマスターとサーヴァントと同じ、アサシンに前線を張って貰っている。

……いや、正直に言おう。

あの景色を見た後、俺はマトモに『力』を使えちやいない。アレが『一族』が追い求めた力だと、改めて再認識させられた今、この時……意識するのもきついくらいで。

お陰で、彼女を連れ出すのも、キツイ程だった。

『全く……洒落にもならへんわあ、一旦引かせてもらおうで』

『逃がすと思っっているのですか！』

『まあ追いかけてもええけど……アンタ、門からそんなに離れてええん？』

『——っ！』

『追うんなら、自分のお仕事、放りだしてくるんやね。ほな——』

しかしそんな状況下でも何とか彼女を連れ出せたのは、まだまだ底知れないアサシンの生命力の賜物。大きな傷を受けても尚、一足飛びで門から離れるだけの余力を、彼女は残していたのだ。

離れた後は、俺が抱えて逃げ切る事になったが。それでもアサシンが稼いでくれた一歩が無かったら、多分俺たちは碎け散っていたと思われる。全くもって……向こうも化け物だが、こつちもこつちで怪物であることに間違いない。

……俺はこんな奴と今まで一緒に『前線』張ってた、のだが。どうしてそんな事が出来たんだろう、と思う。もつと『接近戦に向いていない』相方だったら、俺みたいなの

シロでも、ある程度は壁くらいにはなれるのだけれども。

いや、今更考えても仕方ない。兎も角、今までの俺は無茶ばかりする大馬鹿者つてだけの話なのだから。兎も角、今気にするべきは……アサシンの調子の方だろう。

「……治りそうか」

一応、確認代わりに問うては見る。アサシンの底知れない生命力ならワンチャンスであればあるかもしれない……と

だが。アサシンは、やっぱり首を横に振った。

「ちよおつと……時間かかりそうやね」

「分かった、ちよつと待ってる。お前にやられたら、こつちも困る」

であれば。許可はもらえてないがしかし、今使い時だろう。

生き残っているのであれば。その体を修復するくらいはの働きを持つ、切り札を俺は持っているんだから、と右手の紋章に視線をやった。

そこにあるのは——サーヴァントへの絶対命令権……ではないが、しかし膨大な魔力リソースを秘めた紋様。

「——令呪を使う。それでなら回復行けるだろ」

「ふふつ……使つてええの？ 大事なもんなんやろ？」

「お前は、俺のサーヴァントだからな。使つたつて誰も文句は言わねえだろうよ」

三画しか存在しない、切り札中の切り札だ。サーヴァントの霊基の修復、魔力の装填や攻撃のブーストなどに転用できるのだが……サーヴァントの霊基修復に利用したのはコレが初めてかもしれない。

「——『令呪を持って命ずる！ 万全と成れ、サーヴァント・アサシン！』」

……兎も角、アサシンの傷が消える事をイメージして、出来るだけ威厳を込めて言い放つ。そっちの方が効果が出るか、とか思ってたからで。

唱え終えた後、手の甲から何かが消えるような感触がする。間違いなく発動はした。後は……目の前のアサシンに視線を向ける。

「——ん……」

「どうだ？」

「んふふ、ええ感じや……」

その言葉に嘘偽りはなかった。

一瞬だった。まるで、そこだけを『塗りつぶす』かのように、焼けて酷い状態になっていた肌が、美しい、疵一つない肌へとすり替わっていく。

まるで、ペテンを見ているようですらある。本当にさつきまでの酷い有様を頭に刻んでいなければ、『上質なマジックだ』と言ってしまっていたかもしれない。

現実からかけ離れた光景。しかしながら、コレがサーヴァント、コレが令呪というモ

ノなのだと、改めてこの掌の切り札について、震えが止まらなくなる。良く今まで、こうして治療に使わなかったものだ。

アサシンは最前衛、怪我をする事などいくらでもあったと思うのだが。

「初めてやけど、ええもんやね。術者に、支えてもらういうのも」

「そうか……やっぱ初めてか」

「まあ、うちもそんな、何度も死にかけるくらい、ぬるい訳ちゃうし？」

それでも。アサシンは『無かった』というのだ。だから本当になかった、のだろうが。

「……」

「どないしたん？」

「いや。なんでもない。しかし、エライ出力だったなあ、さつきはマジで」

——その一瞬の違和感から、目を逸らし。

思い返すのは、あの頼光の圧倒的な攻勢だろう。文字通り雷電を纏った本気の一撃に完全に気圧されてしまった。単純明快で『強いから強いんだよ』と言わんばかりの、実直で真つ直ぐな一撃で、こっちは壊滅しかけた。

今までの比ではない。

正に『剛』の剣で……いけると思っていた所から、最早此方に勝ち目があるのかもギリギリな所だと悟ってしまった。

「どうするかね、アレを突破するには」

「真正面からは無理やろうねえ」

「……お前が自分でそう言うとは思わなかった」

「うちそんな『強さ』に誇りもつ方ちやうで？」

いや、だからと言つて自分から言う方でもない気がするが……兎も角。アサシンがそういうのであれば、俺が『厳しい』と思つたのは間違いないのだろう。

アサシンが決して弱い訳ではない。しかしながら、兵器の王、天下一の名槍を一本持っていたとして、相手が重戦車では流石に太刀打ちも厳しい。

……真正面から戦えば、の話だけでも。

「不意打ちか？ やるとして……通じると思う？」

「まあ無理やね。下手な不意打ちしたら、それこそ餌やし」

「だよなあ」

如何に彼女とて、人間だ。強い技とて、出す暇も無く首を搔つ切つてしまえば、勝てるだろう。理論上は。一瞬の間を突いて……一撃で首を狩る。

要するに誇り高い武人相手に誉もクソも無いやり方を打つという事なのだけれども。

しかしながら、果たして彼女に対して不意打ちなんぞ通用するのか。俺が見ていた限りでは、以前見ていたアサシンと彼女の死闘は……文字通り隙なんぞ無かつたように思

う。

四方八方を飛び回り、爪牙と手に構えた大剣を無秩序に振り回して攻勢を仕掛けるアサシンに対し、一切動かずしてそれらを冷静に迎撃していた。

今日見せていたのは、更なる技術というよりは……それに上乗せされた『剛』の力だ。その力を見せずとも、此方の迎撃を成し遂げていた辺り、彼女の『技』は力なんて関係もないくらいに怪物級であろう。

「……せやけど、今やったらいけるかもしれへんで？」

「何？」

「んふふふ。あの女、いくら何でも強くなりすぎや……うちかて、流石に『ホントはアレくらい強かったんちゃう？』なんて呆けた事言えへんよ」

しかし。

それを踏まえても尚……アサシンは笑った。

「ま、自分で目エを潰して、みたくないもんから逸らして『自分は守ってる』なんてほざいてる女相手には、ええ気付けになるんちゃう？　うちも——流石に気に入らんし」

しかしその笑顔は余りにも牙をむき出しにした——人を喰らうかのような、そんな笑顔である。先程——『黄金の雷』を目にした時のように。何処まで攻撃性を曝け出したその顔に……背筋が冷えるのが、止められなかったのである。

第八十一章

四戦目に考え無しに突っ込むとか頭が猪なのですか？ な実況、はーじまーるよー。だつてよー……しょうがねえじゃんか。アサシンちゃんが固定のサーヴァントとして出て来て、ホモ君の方の能力も半ば故障している都合上、向こうの思うツボで動いてやるしかないんです。

とはいえ、一応、現状残っている戦力で何とか出来るように設計されている都合上、頑張ればなんとかなりますので頑張りますよ。サーヴァント固定するタイプのクエストは案外と好きです。頭回している気になれるので。

しかし前回、此方のアサシンが致命打を浴びるように設計されているのは間違いない。半ば強制的に令呪を一面使うように仕向けられたのは厳しいですね。令呪なんて三画あつてナンボみたいなどころありますし……まあ残る後二画、上手に使って攻略していきましよう。

『——旦那はんは、あの女の事、どう思う？』

さてそんな攻略に入る前の会話パート。早速酒？ちゃんとの会話からスタート。

うーん……頼光さんですか。そうですね。

まあ、アサシンからのご要望ですし、ここらで改めて頼光さんを更に深掘りでもしてみましようか。どうせ対決までは時間もかかりませんし。

頼光さんはこの平安の時代の出身の英霊で、この平安京を守護するお役目を果たしながらの『酒? 童子』をはじめとする魑魅魍魎の物の怪たちと幾度となく衝突してきたのは以前話しましたが。

実はその当時、頼光さんが平安貴族の皆様から多大な信頼を置かれて重用されて、栄光に満ちた人生を送っていた——かといえそうですが、実は意外と（予想通り）苦しい人生を送っていたりします。英雄なんて悲劇的な人生で上等だろ（悪意発露）

というのも当時、頼光さんのお父さんがかなりの毒親（火の玉ストレート）で、先ず女の子として生まれた頼光さんに向けて、

『お前は男になって源氏の棟梁になるんだよ!!』（性別偽装）』

とか脅迫染みて言い聞かせていた上に。

『源氏の棟梁としての激務を熟しながらさっさと世継ぎ産むんだよあくしろよ』

とかマジで脳味噌トリカブトな要求をしていたという。現代で考えるなら初手球団解雇って言ったところか……（廃棄される豚を見るような目）

まあでもこんだけ言われても、とつてもいい子だった頼光ちゃんは、去勢からの首切り根切りして当人から感謝すらしてもらいたいレベルなクソ親のエゴに振り回されて、

色々鬱屈した人生を送る事になってしまった。

それが原因で、嘗ての理想、というか、憧れだった『普通のお母さん』としての生にとんでもない（ここ重要）執着を、密に抱くようになって……バーサーカーとして現界した彼女は、その秘めた野望を全て吐き出してくるのです。

その発露を具体的に言う……狂戦士の状態の彼女にとつて、愛おしい人、大切な人はすべからず『自分の子』と認識してしまう様になってしまふんですよ。なんだって!? 強制母子プレイ!? ああ！（ガンギマリアイ）

とか言っていますがこの状況、そんな呑気な話でどうか出来るものではなく……そもそも話、彼女の『お母さん』への憧れは、本当に小さい頃に抱いていたもので。それをずーつとずーつと、お父さんとの諸々の間も、英霊になるに至るまで……

『私を母と思い、甘えてくださいませ』

ゲーム内で上記の台詞をマジで言うんですよ。頼光さんは。そりやあもうとつても優しい笑顔で。

お分かり？

彼女は、小さい頃からの憧れを決して捨てずに、ずうつとここまで来ちゃったわけなんですよ。戦いにおいては練達の実力者なのですが、しかし一転、内面を覗いてみれば、彼女は実に『幼い』……

小さなころの夢を、キラキラとした目で見つめている。そんな弱い部分を、まるで鋼の鎧で覆う様に、源氏の棟梁としての自分で隠している……それが彼女なんです。

バーサーカーの頼光さんは何処か寂しがりで涙もろいのですが、それは内面の幼い部分が、源氏の棟梁としての要素が薄まった結果、その幼い部分が少しずつ出て来てしまっている……という考察もあります。

つまり、圧倒的な強さを持っている人で、精神的にも同じように強いように見えて……致命的な脆さを持っている人でもあるのです。

『——強いように見えるん？ ふふ。旦那はんも、意外と騙されやすいんやねえ』

『そう言えば、年喰った果物ってどうなるんやろ……旦那はん、知ってはる？』

えっ何急に。知らなあい（目反らし。）

『外は無駄に硬あくなるくせに、内はえらいグズグズ。一皮むいたら、まあ見てられへんようなモノが出てくる……まあ、それはそれで乙なもんではあるんやけど』

……んで、アサシンはどうやらその事を話題に出しているようです。んで、なんでそんな話題を出しているかと言えば……お許しください!!（震え声）

まあ、あの人を真つ向から倒そうとすると、マジで血で血を洗って血で漂白するようなエゲツナイ戦いになりますからね。戦力で劣る（？）此方が弱い所を突いて叩く隙を作りそこから崩していく事こそ最も効率が良いですからね……

『あの女は『京の守護者』っていうお役目を演じて、悪酔いしとる。せやったら、うち等が優あしく、酔いを冷ましてやらんとあかんのとちやう、旦那はん?』

うわあ、いい顔なさってるう……ここまで、何というか『上つ面』なお言葉も珍しいというか。そんな事欠片も思つてらつしやらないでしように。

なんでしよう。アサシンが若干不機嫌な気がします。

FGOにおいて、このアサシンは、文化人として、雅と風流を愛で、筋という物を理解している人外として描かれているのですが、妖としての荒々しく、恐ろしい一面を秘めた一面もあり、今はそれが全面的に出ていている様な……

『……昨日の今日で、良くもまああつさりと顔を出せたもの。殊勝にも首を刎ねられに來ましたか、蟲』

『そんなそんな——そちらはんのお手煩わせる様な真似、ウチ、出来ひんわあ』

『でしようね。そんな生易しい訳がありませんでした』

……なんと申しますか。

アサシンから繰り出される凍り付く様な皮肉のお言葉と、源氏の棟梁たる源頼光殿の妖一匹位なら消し飛ばせる様な下迫力一睨みの応酬。

お二人の仲が悪いとか通り越してとんでもない地獄の有様だつて事を殊更に表していて怖いよお……鬼だよお……ジヨバリそう（小並感）

『であれば。首を刎ねるのではなく、二度と蘇る事すら出来ぬように……念入りに、討ち果たしてあげましょう。生中なやり方では殺し切れないのは、誰よりも私が知っていますから』

『ふふ、よう吠えるわあ——ほんま狗みたいやねえ』

弱い狗程つて事ですかアサシンさん（震え声） マズいマズい、いきなり唾飛ばす位のとんでもない挑発だよこれえ……ああ頼光さんの目が睨むのを越えて単純に細められてるう！ 知ってる！ これ怒り過ぎて、表情が若干抑えめになったやつだ!!

『旦那はん、何呆けてるん？ こっからやで？ あの女を扶るだけの隙、頑張つて作らへんと。ほら、きばりや♡』

アンタが挑発して全力出させてるんですけれどもねえ!?

はい、という事でアサシンが余計な事を言ってくれた事でブチ切れた頼光さんとの戦い四戦目、張り切つて行つてみましょうか……

とはいえ、今回のバフは前回よりも比較的控えめ、とはいえ攻撃力アップのバフが三重で付けられてるんで殺意しか感じられないんですけれども……『蟲風情が……!』つて台詞と共に三つバフが乗るの恐怖でしかない。

とはいえ、クリティカルが乗つて一撃ドカーン！ とか宝具で一発ずんばらりん、とかではないだけ有情ではありません。引き続きアサシンにバフも乗つてるので、まあ耐え

きれない事も無いと思いますが……

攻撃だけしかバフが乗っていないのが、意外とちゃんと挑発に乗せられてしまつて冷静さを失っている感じを醸し出していますね。

とはいえ、やつぱり攻撃の削りが痛いので、キツチリガッツとかを使つてターンを稼ぎつつ……覚醒出来たらもうちよつとターン稼ぎとかも出来ない事はないんですが、今の頼光さんの前で覚醒したら余計に怒られそうだし……（震え声）

しかしまあ、相手には防御バフとかもなく、無事に体力ゲージを一本削り切りました。『ぐつ、おのれちよこまかと……!!』

『どないしたん？ まだ、首も、落ちてへんねえ』

『——っ!!』

ひいつ！ 怒つてる！ 黄色い稲妻が！ 凄い勢いでこっちに襲い掛かってくるう——ん？ あれ？

『——やつぱりなあ？』

『っ、何が！』

『それ、アンタの雷ちやうやろ……冷たい、相手を絡繰りみたくすり潰す、紫電がアンタのそれ。せやけども、その、悪党を痺れさせる轟雷は、ちやうやろ？』

……私が感じた違和感ですが、どうやらアサシンが口にしてくださるようです。とい

うか、ああそっか。頼光さんの内面を攻めるって、先ずそっち方向から削っていくんですねとは思わないでもない。

『それは小僧のもん。一体、何時小僧から奪い取ったんや？ 牛女』

第八十一章・裏：とある死線

「……アンタの事について、同情はしねえよ」

手が震える。

圧倒的な怪物を目の前にして、自分の生物的な本能に責め立てられてるみたいだった。

目の前の女にかける言葉とは裏腹に。茹だる様な熱さの頭とは裏腹に。こうして、逃げようとも思わない心とは裏腹に。

勝手に体が震えちまって、全然……収まって、くれない。

ああ、それもそうだろう。納得しか出来ない。俺に向けられるあの目は……守護者としての厳しい目じゃない。見られてるだけで、心臓の鼓動がゆっくりになる気がするくらいに怖い顔……俺を殺してやろうって、思ってる顔だ。

「……」

「だから——悪いな」

それでも、俺は——

「……正直に言うぞ、アサシン」

「あの牛女に勝てると思えない……やろか？」

「おい。言いたい事を潰してくれんな。勘弁してくれ」

ちらり、と天を仰ぐ。此方を押しつぶして来る様にも錯覚する厚い、重苦しい、半ば黒のに近い、濃い、濃い、灰色の雲が立ち込め……その中心、端、と所かまわずゴロゴロと音が聞こえ、一瞬の閃光が目が届く。

先日までは、戦うまでは少なくとも稲妻までは、のたうってはいなかっただろうに。最早、本気を出した彼女には、天候すらも掌の上なのだろうか、と思えてくる。

「またぞろ雷に打たれて撤退、なんぞシャレにならん。というか今度はお前が耐えられるかも分からないだからな」

この前の一撃は……不意打ち気味の一発、だったのを加味しても。

あの一撃をアサシンが耐えられたのは幸運の部分がある。彼女の『技能』と呼んでもいい程の生命力が、ギリギリで仕事をしてくれた。

だがしかし、それすら把握して仕掛けられたら？

俺はこの特異点で唯一の味方を失い……今度は、俺の首まで跳ねられて終わりだろう

「……無駄に消耗させんのは、流石に興味じゃねえよ。俺だつて」

「ふふつ。お優しい事……自分が先に死ぬかもしれない、とは言わへんのやね？」

「お前がサーヴアントとして存在するのに必要な楔を、無駄に失うような間抜けとは思えねえよ。まあ俺がお前の不興を買ってんなら話も別だが……そうでもないだろ」

「旦那はん、自信家なんやねえ——」

……こんな風に、気づく前に、首元に刃が当たっているだろうし。俺に今、静かにし
かし素早く、突きつけられたのは。刃じゃなくて、俺のサーヴアントである筈の酒？ 童
子の爪なのだが。無造作に、アサシンの右手が俺の喉に向けられている。

「もう買つてる、とは思わへんの？」

ちらり、と彼女の顔を見る。

冷たい顔をしている。壊れた玩具を見るような顔だ。成程。俺が首を刎ねられる時
はこんな温度で殺されるのか。

だが、それは今ではない。流石に、それくらいはコイツの……マスターだ。うん。分
かる。分かっている。筈だ。

「だったらもう俺はこの時点で首が飛んでるよ——そんな、首を切る素振り見せる程、お
前人間染みてないだろ。気に入らないと思つたらその時点ですぱん、だ」

「……いけず。もうちよつとええ顔見せてくれてもええやん」

俺がそう返せば、あつという間に張り詰めた空気は霧散し、少し拗ねた様にアサシンは口をすぼめた。可愛らしい仕草だ。だけでもその頭の中で、どんな事を考えているかは分かったもんじゃあない。マジで。

「そうしたら余計にお前さんを調子づかせるからな。勢いづいたまんま本当に首を持つていかれたらシャレにもならん」

「ふーん……」

実際、その詰まらなさそうな表情も、あつという間に鳴りを潜めて……にんまりと、アサシンは笑う。寧ろ、俺が断るのを待っていたかのような、実にレスポンスの早い意地の悪い笑顔に、一つ溜息を吐いてしまう。

「ふふふ、ようわかつてるなあ」

「分らないでか。一応お前のマスターだからな、下手な真似は出来ねえさ……今は特につて言うのもあるが」

……最近、コイツとどうやって上手い事接して来たのか、ちよつと分からなくなっているが。マスターとして、激情家……ではないが、バリバリに人外なコイツとどうやって付き合つて来たのだろうか。

そもそも、自分の血の事があるというのに、今までそれを考えずに良く接する事が出来たな。緊急事態だから、自然と目を逸らしていたのか——それとも……

「……—そういえば、旦那はん、今日はえらい調子良さそうやね。どないしたん？ 昨日までと全然ちやうやんか」

はつと、思考の海から浮上する。いつの間にか、アサシンが俺の目の前に立っていた。……片手を後ろ手に、口元に手を翳して隠しながら言うアサシン。下から俺を覗き込む様な彼女の目は、隠しきれない『愉悦』に三日月を描いている。

流石に口元が見えてしまえばモロ分かるからこそ、敢えて隠しているのだろう。しかし一応隠す『フリ』をしているだけで、目元は取り繕う積りが無い辺り、コイツの性格の悪さが伺える。

俺がどうして少しばかりやる気になつてるのか——このサーヴァントが、まるで分かつていない、等と言う訳がない。

「……ホント性格悪いな、アサシン」

「ん？ 何が？」

「けっ……精々乗せられてやる。どうせあの人をどうにかせん事には、ここから帰れない訳だしな」

……相手を哀れんであんな話をした訳がない。目の前のアサシンが。

であれば、彼女個人からのちよつとした嫌がらせと、こつちを奮起させる為に言ったんだろう。此方を鼓舞してくれる頼もしいサーヴァント……そう言えれば相当に気が

楽だったんだが。

「……つっても、俺が出来る事なんざ限られてるか」

「そんな弱気言わんの。うちかて、旦那はん抜きで、今のあの女を潰せるとは思うてへんよ。ほんまえらい強くなって、羨ましいわあ」

「良く言うぜ。やろうと思えばお前一人だつてやれない事ないだろう」

そう言い捨てて軽く睨めば、アサシンはやつぱり口元を隠して、何も言わずにコロコロと笑うだけ。否定も肯定もしてないそのあいまいな態度は……誤魔化している、というよりも、『言わなくても大体わかるでしょ?』と、揶揄っているのだ。俺を。

ああ。コイツと共に、これから俺は……特大の逆鱗を蹴つ飛ばしに行くわけだ。

非常に、気が重い。

「……出来りや、今日で勝ち切りたい所だな」

「かるであに早う帰りたいん?」

「否定はしないが、それだけじゃねーよ……今から、俺たちは特大の地雷を自分達で踏みに行くわけだからな。ブチ切れた後のあの大将とまだまだずっと戦う、とか想像もしたくないだろ」

「ああ、それは、せやねえ」

視線の先。

まだ遠く見えている門が……余計に重苦しい空気を纏っている様に見えるのは、多分気のせい、だと思った。

「——であれば。首を刎ねるのではなく。二度と蘇る事すら出来ぬように……念入りに、討ち果たしてあげましょう。生中なやり方では殺し切れないのは、誰よりも私が知っていますから」

「ふふ、よう吠えるわあ——ほんま狗みたいやねえ」

バチリ、と火花の爆ぜる音がした。

「旦那はん、何呆けてるん？ こっからやで？ あの女を扶るだけの隙、頑張つて作らへんと。ほら、きばりや♡」

「……呆けもするわ。開戦直前に、いきなり相手の顔面に水ぶっかける馬鹿が何処にいるんだよ」

少しばかり呆れもする。

一つ、一つ、一つ、丁寧に、空気が歪んでいつてるように見える。濃密な互いの圧力が強すぎるせいなのか、何となく、ではなく知覚できるように錯覚してしまった。

互いに向ける敵意は、常に前回は更新し続け。今は……もう、怖いとか通り越して、少しばかりこつちの肌を痛めつけてくる気すらしていた。

呼吸を整える。

額に汗がにじむ。

頼光が刀の柄を改めて握り直し、アサシンが手に構えた大剣を雑に背負い直した。たたり、とたつぷり溜まった汗が、頬を伝って、顎へ、そして地面に落ちて――

「……っ!!」

見合った二人の『怪物』が、大地を抉る程、強く地を蹴った。

第八十一章・裏：雷電一閃

——動きたくても動けない、というのが正しいだろう。

ピリツとした空気の揺れみたいなのを感じた——と思つたら、俺の傍に雷が着弾して大地を焦がしている。今まで、一応若い小僧なりに必死こいて戦場を駆け抜けて来たつもりだったのだが、しかし。

それでも尚、今、俺は一步も動くことが出来ていない。

結局の所、俺が戦つて来た戦場は『英雄』のそれではなかったのだろう。藤丸、そしてマシユやリリイが前線を引き受けてくれて、俺はあくまで後衛……の、誰かを守るだけであつた。圧倒的な強さを誇る『英雄』と戦わなくて良かった。故にこそ、生き残っていたという部分はある。

そして……俺は今まで、一番英雄の戦線に近い所にいる。そして肌で感じる——圧倒的な力の差に、震えが止まらず。

そしてそれは、頼光の圧倒的な力だけが生み出す物ではない。頼光の繰り出す悉くの攻撃を凌いでいる……アサシンが生み出す物でもあつた。

「……つたく、信じらんねえ。アレがこの前一撃でやられてたサーヴァントの姿かよ」

爪で引き裂き、腕力でねじ伏せる。圧倒的な強さ……それがアサシンの印象だったのだが。しかし今、目の前で戦っているアサシンは、身軽に、その体を柔軟に使って、相手の攻撃を最小限で躲す。技巧派な動きだ。

まるで舞でも舞っているかのようで一種、優雅にすら見える。人ならざる者と分かっている。見入られてしまいそうになっている。

しかしその動きは、決して人のモノではなく。獣のそれともまた違う。人間離れた跳躍力で、しかし攻撃の切れ間を正確に縫って、ぬるりと抜けていく。正に『人外』と呼ぶに相応しい動きだ。

しかしながら……剣の範囲からは、出ない。あと一步踏み込まれ、剣を振るわれたなら今度こそ、首が飛びそうな、そんなギリギリの所を、踊る様に、揺れる。

「ちっ……やはり、一筋縄ではいきませんか」

「ちよつとばかり興が乗ってるさかい——楽しみや、牛女」

そんな後一步のところで、踊っていい相手ではない。頼光は。

斬撃が一直線の線ではなく、まるで『網』の様に見えている時点で、彼女も十分に人外の所業を行っている。

……今は、ようやく目が慣れてきて、ぎりつぎりだがそれが『網』ではなく幾重にも束ねられた『線』であるのが知覚できるのだが。つまり、一瞬の間に、素早く剣を奔ら

せて『刻もう』としているのだろう。真つ当な殺し方じゃない。

「……ジャンヌ・オルタの炎も、これと比較できる時点で相当なバケモノだよ。マシユとリリイに、改めてお礼でもしておくか」

……この中で今の斬撃と比べ物になるのは、第二特異点のアルテラだろうか。向こうは圧倒的なパワーで切り裂き、此方はスピードと技量によるゴリ押しという違いはあるけれど、人間を捨てた戦い方であることは間違いない。

源頼光の武器は、この圧倒的な『技量』と、アサシンは言っていた。如何なる武器も初見で完璧、どころか手足の様に扱って見せる程の極め切った武芸こそ、彼女の厄介な所なのだ。

それを踏まえて見ていると、確かに分かる。

「——せいやあつ!!」

叩きつけられる勢いで振り下ろされる太刀。クルクル回転しながら後方に跳ねて躲すアサシン。彼女が立っていた地面に、刀身が激突して……まるで『力いっぱいハンマーでも叩きつけた』様なひびが入る。

「鬼さんこつちら、手の鳴る方へ……ふふふ」

「……随分と思いがりましたね、蟲!」

軽々と着地し、クスリと笑ったアサシンに向けて、更に空を切り……否、空気を拭き

散らし、ばぁん、と爆音を立て、迫る、二の太刀。

これも冷静に一歩半程下がったアサシンには掠りもしない。彼女の前髪を風が盛大に揺らすだけに終わった。

物凄い剛の一撃だ。普通にそれを目の前に薄く笑うアサシンが凄いとすら思う。

だが……確かに違和感だ。無数の剣で相手の逃げ場すら奪う網の様な先程の剣は、正直見ている此方の背筋が凍る程だったのに。それと比べて、余りにも『合っていない』。あの太振りは脅威である、とは思うがしかし。まるで、荒事に慣れていない子供がナイフを振り回しているかのようで。危なくはあるが、使い慣れた不良達と比べれば、全く恐ろしくはない……そう、自分のモノではない気がする。

俺ですらそう思っているのだ。アサシンにとつては……ああして、少し距離を取ったところで、軽く欠伸をするほどに、あの一撃を捌くのは容易いのだろう。

「そんな怒らんといた方がええんちゃう？ そんな偉い派手な太振りしはって、直ぐに疲れてまうからねえ。ふふふ」

「――」

圧倒的な力、アサシンではどうしようもない程の暴力を振るっているというのに。源頼光の方は、明確に余裕を失っていつている。

疲れではなく、苛立ちで息は荒れ。太刀の間合いの外のアサシンに向けられる、血

走った瞳の眼光は、怒りに塗れて鋭さを失って鈍らのようじやないか。

昨日、『黄金の稲妻』で一瞬の内にアサシンを縦に引き裂いて見せた……都の門番、源頼光の底知れぬ恐ろしさは、この時に限っては大分鳴りを潜めていた気がする。

「それとも、なあに？　うちに手加減してくれはってるん？　優しいなあ……？」
「……っ!!」

踏み込み、一閃。

疾い。文字通り、瞬く間の内に踏み込んだ太刀は、何時の間にかアサシンの髪を何本か切り飛ばし……しかし、アサシンはもうそこにおらず、彼女が剣を振り下ろした真横でばち、ばち、と軽い拍手を送っている。

今の斬撃は……怖かった。見えない。感じない。そして、地面に切っ先がめり込んでいるがしかし、壊した、というより、やはり切っ先が地面に『切り込んだ』のだろう。ヒビの一つすら見えない。一体、どんな振り方をすればアレだけの切れ味を出せる。

「ぐっ——おのれちよこまかと……!!」

「どないしたん？　まだ、首も、落ちてへんねえ」

「——っ!!」

正直な話、既に勝ち目は見いだせてしまっている。

圧倒的な技量と、天から降る雷をも操る力。遠近を熟せる無敵の門番……しかし、そ

の強みの一つを、アサシンは今、上手い事殺している。

劍の範囲から出ないのは、態とだ。

もし劍の範囲から出れば、即座に天からの雷で先手を打たれる。圧倒的な武の冴えと劍の一閃よりも尚速い、雷電。

速度は正義。天から一瞬で落ちてくる雷は何も工夫せずとも撃たれるだけで厄介この上ない。最初の勝負で雷を引き裂けるのは確認出来ていても、アレはあくまで『様子見』だった部分も多く……勝ちに行くのであれば、引き裂く一瞬の隙ですら、致命打になりかねないだろう。

アサシンは、勝ちに行くために……敢えて『超近接戦闘』を選んだ。雷を打てば自分も巻き込まれかねない劍の間合いに身を置く事で、遠距離の札を潰す。

当然、近接こそが頼光の得手だと、アサシンは分かっている。

『強いように見えるん？ ふふ。旦那はんも、意外と騙されやすいんやねえ』

その上でアサシンが語った、付け入る隙は、二つあった。

「——ハアアツ!!」

アサシンの挑発に乗って彼女が劍を振りかぶる。両手を構えて。しかしアレは先ほどの一瞬に繰り出す一撃ではない——剛の一撃。付け入る隙の一つ目。その一瞬に、避ける事は愚か寧ろ彼女は踏み込んで。

「……ふふっ」

「っ!? しまつ——」

ずん、と。

力こぶでも作るように曲げた腕が、握りしめた拳が——頼光の胴に、彼女の全身が『く』の字に折り曲げる程、深く深く、突き刺さって。

ほんの一瞬の間において、そのまま門に向けて、頼光は吹っ飛ばされて……叩きつけられた。此方からでも、痛々しい音が聞こえそうな程に、痛烈に。

しかしそんな状態からでも、僅かに咳きこみながら、頼光はすぐさま体勢を立て直した。そして……自分目掛けて追撃を入れようと突っ込んで来ようとする、アサシンを見た。状況は、アサシン有利に見える。だが。彼女には——まだ、切り札がある。

「——」

追い詰められた、その一瞬。バチリ、と彼女の刀を稲妻が覆う——その名に恥じぬ『黄金』の輝きが。つい先日、アサシンを焼いた、あの『黄金の雷』だ。アサシンを一撃で追い詰めた、轟く一閃。

「——やっぱりなあ?」

その輝きを目に写したアサシンの表情が——消えた。

「っ、何が!」

「それ、アンタの雷ちやうやる……冷たい、相手を絡繰りみたくすり潰す、紫電がアンタのそれ。せやけども、その、悪党を痺れさせる轟雷は、ちやうやる?」

アサシンが一步を踏み出す。

頼光が、劍を——振るう。

先の再現か。放たれた頼光の一撃で、アサシンが焼かれ、再び地面に倒れるのか——
否。

「——それは小僧のもんや。一体、何時小僧から奪い取ったんや? 牛女」

「ぐうっ……!?!」

次の一瞬に、戦いの主導権を握っていたのは……頼光の首根っこを、一瞬の間に自分の手のひらにて掴み取ったアサシンだった。

第八十一章・裏：おにさんどちら

——同じ景色。

稲妻で身体を焼かれ、一瞬、傾ぐカラダ。それは、前回アサシンが相手の雷を受け倒れた、その時を再現したかの様な景色で——

違うのは、二つ。

黄金の稲妻を放ち、アサシンを焼いたのは頼光だが……しかし、敵を切り裂いたはずその顔に余裕はまるでない。額に脂汗を浮かべながら、まるで苦し紛れの様に、その『黄金』の稲妻を纏った斬撃は放たれた。

その一撃を受けてグラついた——のではなく、喰らっても尚、自分から『前』に傾いだアサシンは、そのまま、撃つた直後の僅かな間に入り込んで、頼光の首を掴み取った。確かに雷は彼女の肌を焼いたが……しかし、それはほんの肌一枚だけ。ギリギリの所で、彼女は自分の傷と引き換えに、頼光の懐に踏み込んだのだ。

ギリ、と首が締め上げられる微かな音が聞こえる。ほんの僅かな音ではあるが、しかながら、そこには確かに強い『敵意』が込められているのが分かった。

「ぐうっ……!？」

「アンタ、何処でそれを手に入れたん。牛女。それ、アンタのものとちゃうやろ。なあ聞いとるん？」

……もう一度同じことを、先ほどよりも冷たい声で、彼女は繰り返し——首を締め上げたまま、彼女の体を持ち上げた。

「な、何の話を……金時が、なんだと……？」

「知らん？ ふうん？ やっぱ、とぼけとるのとも、ちゃうか。頭ん中弄られとるんやろ
うか……ねえ！」

「うあつ……!? がふつ!？」

アサシンの動きに容赦はない。

首を締め上げられて持ち上げられた頼光はそのまま……振り下ろされるアサシンの手に引きずられ、思い切り地面に叩きつけられた。

圧倒的な強さを持つ英傑だとしても、状況が悪い。完全に動揺を抑えきれないまま、踏ん張りの利かない空中に持ち上げられて、そこから流れるような追撃。

頼光は強いのだと、俺でも分かる。

如何なる局面にも対応できるよう、実戦で鍛えられた強い武士だと思う。しかしながら自分より小柄な者に首を締め上げられながら持ち上げられる、なんていうレアな状況を一体、どれだけ想像して訓練できるだろうか。

そもそも、一度もあるかどうかわからない。

無意識の内に対処できるようになるまで、地面に手すらついていない状態で剣を振れるようになるまで、どれだけかかるだろう。

頼光がそれが出来ない訳ではないのは当然だが、しかし、アレだけ煽られ、そして『坂田金時』と『四天王』の名を出され、明らかに動揺している処で、無意識に剣を振れるのは最早人間ではなく『機械』だろう。

俺は……頼光が、まだ『そこ』まで行っているようには見えない。

一瞬の心の隙、そこに付け込んで、ダーティプレイと力業を叩き込んで捻じ伏せたその姿は正に『怪物』。背筋が冷える。俺はこんなサーヴァントと特異点を越えて来たのか。頼もしいと同時に、最早恐ろしい程の手際だ。

そして……隙を見つけた慧眼にも、改めて恐れ入る。

いくら生前の頼光を知っているにせよ、俺では全く気付く事すらなかった違和感に気づき、そして頼光を潰す為の『勝ち筋』を見つけられたのだから。

「っ……」

「まあでも何となく想像つくわなあ」

とはいえ、流石に殺し切れる訳ではなかったようだ。事前の手筈では、やれるなら首を取るという話だったが、十中八九無理ではあるとの事だったので、そこは良い。

「一つ、聞いてみよか。なあ、源氏の大将はん。自慢の四天王は、どこ行つたん？」

「な、なに……？」

「ここが『京』で、アンタが『源氏の大将』やつとるなら、小僧も、他の三人も、来ると思つてたんや……やのに、ぜえんぜん。顔も見いひんのやけど？」

……そう。正直、無理な話なのだ。

真つ向から、真つ当に勝てるならそれが一番いいだろう。良いのだが、しかしながら此方は今回、単騎なのである。

マシユという鋼の城にも匹敵するタンク、リリイというアサシンと並ぶアタッカー、二人を欠いた状態で、単騎でアルテラクラスの化け物を狩らなければいけない。

もう一人、または現地の協力者がいればまだマシだったのだが……残念ながら、何故か俺のサーヴァントは一人だけ。現地の協力者らしいサーヴァントも居ないと来た。

……幸運が乗ればなんとかなる、かもしれないが。一か八かの勝負に乗って、勝てると驕れる程、俺だつて馬鹿じゃない。

『——ああ、成程。合点が行つたわあ』

悩んでいた。どうすれば勝ち目を作れるのか。

アサシンが気づいたことを口にしたのは、その時だった。

特異点にカウンターとして呼ばれているサーヴァントもいない、と口にした……その

辺りで、アサシンはにやり、と何かに気が付いたように笑ったのだ。

『——ちよつと試してみたい事あるんやけど』

『ふふ……まあまあ、どうせ真つ当にやつても勝てへんのやから、色々試してみても悪うないんとちやう?』

『ウチも、あの女に首刎ねられるんは、ちよつと……ううん? 大分願い下げやし……付き合つてくれへん?』

……自分のサーヴァントの提案に対して、時には否、時には是、それを判断するのはマスターの役目だ。まあ令呪に強制力もないカルデアのマスターに、どうしてアサシンみたいなやつが肅々と従つてるのかは分からないけれども。

俺は……コイツを信じてみる事にした。どうするか、その詳しい内容は聞かなかった。無駄に疑うのは趣味じゃない。

故に、俺はアサシンが、何の話をしているのか。その仔細は分からない。俺が分かっているのは、どういう風に戦うのか位なもので。

「……金時たちは、他の、門の、守りを……任せている、だけです」

「へえ。京を脅かす鬼が来たんに……随分悠長になつたんやねえ? 小僧も」

そして今、アサシンの顔を見ると、やはり無駄に聞かなくて正解だつたと思わないでもない……口元だけは笑つてはいる。だがしかし、その瞳はまるで笑っていない。

特に、繰り返し口にする『小僧』という相手にどれだけ思いを抱いているのか……想像もつかない。

「昔やったら、そやなあ。小僧は当たり前前に自分ですつ飛んでくるやろし、あの堅物も連れて来て、アンタと三人で首狙う位はするんちゃう？」

「……なになが、言いたいのです」

「なあ、ほんまはいないのと違う。アンタ以外」

ぐい、と顔を近づけるアサシン。

「ここまで話を聞いていると……ふと、アサシンが笑みを浮かべた、その時に俺が何を言っていたかを思い出す。」

『カウンターとしてのサーヴァント』、という言葉聞いた時に、彼女は何かに思い当たったようであった。

頼光の異様な強さ。そして『お前のモノじゃない』というアサシンの言葉。

「……まさか」

「ここまで言葉の繋げ合わせて行けば、アサシンの真意を聞きはせずとも、ある程度想像が出来る。つまりは、そういう事なのか。」

「――」

「ここまで揃って、想像も出来なかったら、そっちの方が阿呆かもねえ……開きもせん門に

様子の分からん京、アンタ以外見えもしない源氏武者」

「……やめなさい、やめて」

「あの大振り、思い出すわあ……小僧の『鉞捌き』の真似っ子とちやうん？ 猿真似、つて言うた方が良くくらしいの酷い出来やつたけど」

アサシンに組み伏せられた頼光からは、とつくに威圧感が消え失せている。力で押し潰されて、負けを認めたからか？

否、そうではない。アサシンの言葉聞く度に、顔から色が分かりやすい程に抜けていつているんだ。今は、死人の様な酷い顔色と、生気の抜けた瞳が、痛々しい。

アレは、『理解』して、思い出しているからこそ、心が軋んでいるのだ。アサシンの言葉。

「なあ、もういつペンだけ聞いわ……」

「アンタ、自慢の四天王をどこへやったん？」

「――」

そんな所に叩きつけられた一言は、彼女の中の『何か』が決壊する、最後の切っ掛けだった。

ばかり、と再び空気が震えた。その出所は……空ではない。頼光の――

とつさに声をかけるよりも早く、礼装をアサシンに向けて使ったのは、集中力を研ぎ

澄ませることで、少しでも早く離れられるように……自分で異変に早く気が付いてもらうのが、最も早く逃げ出せるだろう、と。

「——っ!？」

瞬間、首根っこを押さえていた手を振り払うようにして、アサシンが飛び下がった——僅かに一瞬の後。

まるで弾けるように、紫電の稲妻が四方八方に向けてあふれ出した。

第八十二章

地雷踏んだ実況、はーじまーるよー。

まあ、考えてみればおかしかったですよ。聖杯のバツクアップがあるにしても、天候を操り、アサシンちゃんを一撃で討ち果たすバカみたいな出力。

そもそも聖杯は特異点を維持する為に使われている都合上、頼光さんを無敵にするだけの力がある訳でもないんですよ。

だつてのに、とんでもない雷がバリバリ降り注いでこつちを削つて来るし、物凄いパワーで上から削つて来ますし、普通の雷とは違う金色の雷を使って削つて来るしで、絶対なんかインチキしてるでしょ……というのはアサシンが気が付いたわけですが。

『——ひどい様やねえ』

んでそこ突つついた結果……突如として頼光さんがダークなオーラを身に纏い、大地を揺らしながら、激おこぶんぶん丸になりました。

わー凄い、雷がじゃんじゃんバリバリ降り注いでるう……うーんイイ焦げ目ついてんじゃん。グラタンみたい（小並感）大地でやるグラタンとはさすが頼光ママ、スケールが大きい。コレが母性か……（現実逃避）

『ツ……あかん!』

あつぶえ! (震え声)

ええい、いきなり雷を落とすな!

全くお母さんのお叱りつてのは何時オツムに降つて来るか分からねえ……冗談は兎も角として、咄嗟にアサシンちゃんに突き飛ばされて、助けてもらつて事なきを得ました。うーん、流石は第一特異点からホモ君と一緒にいてくれたサーヴァント! (白目)

『こんな遠くまで落とせるようになるなんてなあ。厄介な坊なこと』

というか先ず間違いなく我を忘れてますねクオレハ……個人的に、どうして地雷を押し込んだんですか? (確認猫) したい所ではあるんですけども、多分ですが、精神的に追い詰めてから彼女を叩き潰そうと思つていたんだと思います。アサシンちゃんは。

単に問いかけてるつていうより、ねちっこく責めてるようにも取れるような口ぶりでしたからねえ彼女。

んで追い込んだ結果がこれだよ!!!

どうすんですかコレ! どうやって突破するんですか!? 天から降り注ぐ雷がまるで檻の様にみっちりとございますねえ!? 触れれば焼け死ぬぞあの出力!! アサシンちゃん!? どないするんですか!?

『んぐ……これアカンねえ。一旦退散するう？』

あつそつかあ……であるなら即座に退散しようかなあ!!! (激ギレ) アサシンちゃん
が言うなら仕方ないねえ! あつはつはつはどうしようもなく殺し切れんやん!!
ここまで追いつめても尚、倒し切れないどころか、更にパワフルに暴れるようになって
ちやつたねエ!!! 状況悪化あ!!

……しかし、状況が悪化した代わりに、とんでもない可能性が浮上しましたね。

一体何の話なのかといえ、まあ、京から出てくる人も、特異点に呼ばれたカウンターのサーヴァントもなんもおらん、その代わりにと言わんばかりに、たった一人でどうしてか化け物染みて強くなってる頼光さん。

おい頼光……その強さ、一体何処から手に入れた？

君の様に勘の良いマスターは嫌いだよ……

『うーん、まあ自分が『小僧ら』を糧に強うなった、なんて。そんなん聞いて正気保てるほど太うは無いと思てたけど……正気失つたら坊みたく泣いて暴れるやなんてなあ』

まあ、凡そアサシンちゃんの言う通りです。

要するに、頼光さんは『カウンター』として呼ばれていたお味方のサーヴァントや、京の皆様を薪として、アレだけの馬鹿みたいな強化をされた、と……その可能性が非常に高いと言わざるを得ないと。

先に言った通り、聖杯は特異点成立の為のリソース。それを使ってサーヴァントを強化するのは先ず出来ません。

ならばその代わりとして選ばれたのが……恐らく、頼光さんと共に召喚されていた特異点と呼んだカウンターのサーヴァント達だったのでしよう。

高濃度のエーテルで編まれたサーヴァントは、同じサーヴァントにとつて最高の強化の為のリソースとして運用出来るのです。

んで、今回呼ばれたサーヴァントとして可能性があるのが……特異点の国に関係があるか、それとも頼光さんに関連したサーヴァントで。

その中で、頼光さんが放つてきた『黄金の雷』の使い手には、アサシンが心当たりがあつたのですよ。

『四天王の中で、ウチが一番ようしつとる小僧……坂田金時。多分やけど、それをあの女を鍛える為に使つたんやろねエ』

言わずと知れたおとぎ話のヒーローたる『金太郎』。

鉞担いで野山で過ごし、動物たちと戯れて過ごした、気が優しい力持ち。お話の中では少年でしたが、しかし彼はその後成長し、立派な武士として、京を守るお役目に着いたのです——その名こそ、坂田金時。

頼光さんが率いた頼光四天王の一角、京の脅威足る物の怪どもを討ち果たす、選ばれ

し源氏武者の一人。

大斧を一つ携え、金色の髪を逆立てて、豪快に笑うその姿は、正に剛力無双、轟雷一閃、豪放磊落の快男兒。

正しく『英雄』、『正義の味方』、『ヒーロー』と呼ぶにふさわしい益荒男。どんな聖杯戦争に出しても『お前が出たら型月じゃなくて熱血ヒーローモノになつちやうから……』と専らな評価を受ける言わずと知れた『主人公気質』。

『よう知つとる、つて？ ああ……小僧とは、ようけ遊びましたし……最後に殺されもしたからねえ』

そして。かつて、アサシンを討ち取った張本人でもあります。

因みに真つ向から戦つて、ではなくお酒を飲まされた後に、酩酊状態で倒されたりしたので……主人公の戦い方じゃねえなあ!?

というか、坂田金時と源頼光がお酒飲ませて討ち取った鬼つて確か……うん！ 偶然かな！（目逸らし）

まあ兎も角、アサシンはそんな彼の事をよく知っているんですよ。

それこそ、戦い方から、彼が振るう雷に至るまで……そんな良く知っている彼の稲妻を、頼光さんが振るっていた、つて言うのはあんまり納得はしかねる訳ですよ。彼女からしたら。はい。

あの頼光さんのダークオーラの大爆発の仕方を見る限り、多分ですが、金時が頼光さんの強化の為に使われたというのほほ確定といえるでしょう。

『ウチを焼いた雷やしなあ、あれは……ふふつ、間違う方が難しいわあ』

おうおう、ビビるくらいにえぐい話を嬉しそうにお笑いなさる……！ 自分の死因ですよ？ そんなニコニコ話しちゃあ……ダメだろ！ とはいえ自分の死因であれば、先ず間違えないか（掌返し）

んで、坂田金時は源頼光にとっては四天王として一種に過ぎた大切な部下でもあり仲間でもある……うん……仲間……ともかく、相当に大切な存在だったわけで。そんな彼を含む、四天王他を『使われた』となると、頼光さんも動揺するかもしれない。

まあ、そこを突いてどうにか出来ると思つた結果として、さらに状況が悪化した模様なのですけれども。どうするんですかあの暴走頼光さん……

『……まあ、せやけど上手くはいったんちやう？』

はっ？（素）

『そりやあえらい暴れてはるけど……あれやつたら獣が暴れてるみたいなものやし。いなすのも躲すのも難しくもないやろ？』

……あつ、それは……成程ねえ。

今の頼光さんは、要するに完全に暴走している状態な訳で。ゲームでもない限りは、

ブチ切れて暴走しているだけの状態なんて、それこそ付け入る隙ばかりと。

いやこれもゲームだと言われてしまうと全てが破綻しかねないのでそれは置いて頂けると幸いです。はい。

『今なら、あの女の首取るくらいは難しくもないわあ』

おー。頼もしいこと言ってくださる！

相手が暴走してとんでもない暴力を振りまいているのは間違いないですが、しかしながら付け入る隙は出来たという事で、今回のデバフ囁きには確実に意味があつた模様です。

であるならば、次の戦いで決着が付くのは決定的に明らか……まあ目の前のこのアサシンちゃんの謎はデカデカと未だ残ってるけど、大丈夫！ 素直にスムーズに分かかれるってヘーキヘーキ、ヘーキだから……（震え声）

と言ったところで今回はここまで。

ご視聴ありがとうございました。

第八十二章・裏：それでもマシに

「なあ、アサシン」

「なあに？」

「知ってて、話さなかったのか？」

「さあて、どうやろうね」

—— 例えば。

昔の商品をリデザインしたバッグと。昔の商品のデザインを引き継いだバッグ。

その二つに、一体どれだけの差という物があるだろうか。少なくとも、同じものを祖として血脈を継ぐ。本質自体は、決して変わらない。

俺は人になりながら先祖の鬼の血が目覚めた存在……らしい。そして、俺の中に息衝く血は、あの時の……雷電と共に、ゆらりと立ち上がった頼光さんに、何か……シンパシーの様な物を感じていた。

慣れて……いる、アサシンのモノとは違う。確かに感じる『同族』の血を。

アサシンは、自分を殺した雷を、感覚で感じ取った。

それと同じように……俺は、自分の血と同じ……否、それよりも更に濃い、混血の血

を感じ取った。アサシンの言う言葉が、何となく理解出来た気がする。

似た者同士の感覚派なのか。なんて、どうでも良い事は頭からいったん追い出して。

「……不思議な話だ。どんな物よりも、先ず俺の血が反応するとはな」

「近しいもんやしねえ。そりゃあ共鳴位するんちゃう？」

「でもあの人は『神』との混血なんだろう？ 『鬼』とは違うじゃねえか」

事実を確認する——彼女が混血である事実を。

「確かに、アレは神さんとの混ざりもんらしいけどねえ……言うてちやーんと『鬼』やさかい。安心してええよ」

「……安心できねえよ。俺の血が無駄に有能なのがバレちまうじゃねえか」

アサシンも詳しくは知らない……らしいが。頼光はとある神格の血を引く『半神』なのだという。だがその本質は、聖なるものではなく、魔性としてのモノだったようだ。

実際……暴走して見えた頼光からあふれ出したモノは、神々しいものでもなく、荒々しく、そして何処か禍々しい力だった。

そして、俺に近いモノだった、と思う。

「……だとしたら、だ。あの人は、妖の類を大層嫌ってるんだろ……だったら自分の中の血は、嫌っていないなかったのか？」

「嫌で嫌でたまらんのとちゃう？ そこはよう知らんけど……まあ、あの女なら、自分の

中の『鬼』を殺そうと位はしても不思議やないなあ？」

「こーわ、平安時代」

そこまで行くと、自殺ではないか、と思わないでもないけど。

その気持ちがかかる……とは言わずとも、ほんの僅かに、思い至るくらいは出来なくもない。俺だつて、そりゃあ、俺の中にある血を好ましく思えるわけがない。

寧ろ、俺自身、自分で……ああ、そんな事を思わなかつた、なんて言えない。

何度もこの血の事をクソツたれと思つたし。そして、どれだけ自分が『底辺』にいるのを、嫌つて言う程に自覚してきた。

「……ああ……そやねえ。もしかしたら、そんな顔して、自分の中の『モノ』を殺そうとしてたんと違う？」

思い出せば、顔も余計に歪み。

そんな俺の隣で、鬼が嗤っている。俺の顔を見てコロコロと涼やかな声で笑っている。今の俺がどんな顔しているかは知らないが、しかし、余程お気に召す様な顔をしているんだろう。

「……ええ顔してはるねえ、旦那はん？」

「お前はイイ性格してるよ。アサシン」

「そんな褒められても、照れるわあ」

「照れるな。褒めてない……」

……仕方ないんだ、と言いたい。正直。

自分の一肌剥いたその中に、腐った肉から零れ出す様な汚水が詰まっていると、想像した事があるか？

想像だけではない。実際に匂いが鼻に付く。喉の奥に入り込んで無理矢理に臓物を引きずりだす……自分と絶対に相いれない、そんな匂いがするんだ。

ああ……実際、肌の下の匂いなんざ、分かる訳ない。きつと幻覚だ。そんなのは分かっている。分かり切っている事なんだ。だがそれで納得なんて、できやしない。出来るならこの事で苦しんだりなんざしない。

「なあに？ もしかして、あの女に同情とかしてはるん？」

「……んなバカな」

そんな生易しい事は出来ねえ。

俺も苦しい、『から』同じ彼女もきつと同じだなんて、口が裂けても言えない。俺だってそんな無神経な発言をされたら、言った奴を殴り殺したくなる……自分の地獄は、結局自分だけしか理解できない。

勝手に理解した気になって、大変だったね、なんて……いえる訳がない。

俺みたいに気楽な学生じゃない。責任のある立場でもある。話す相手だっていな

かったのではないか。俺なんかよりよっぽど苦しい筈だ。

そんな中でも、自分の配下を纏めた源氏の大将をやつてたなんて。

「同情なんか、出来ねえよ」

……想像しちまったら。アサシンを喜ばせるような顔にもなるだろう。

彼女は、俺の先輩なんだ。自分以上に苦しんできただろう、大先輩だ。

想像だにしない苦難をきつと、頑張つて乗り越えて来たであろう先達に、一体何を思ふかかっていやあ。

「寧ろ、尊敬する」

「尊敬？」

「あの人は最後には、立派に源氏の大将やつてたんだろ。それが、例えどんな形だとしても……スゲエとは思ふよ。正直、憧れる」

……オマエはどうだ、本造院康友。

昔のトラウマ一つで無駄に傷ついて、立ち直れるかすら微妙な所と来てる。藤丸も、マシユも、リレイも、ダ・ヴィンチちゃんも、ドクターも……俺の、サーヴァント達も。誰もが必死になつて世界を救うつて言う凄い目標に走り続けてるつて言うのによ。たつた一つ、俺だけが……トラウマに怯える事を、やめられていない。

「……話を聞いてみたかった。どうやったら、そんな強くあれたんですか、つて」

「ふうん？」

もういい加減、そんな最底辺で、ロクでもない意気地なしの俺にも、慣れてる。だから他の人が羨ましいとかは、思わない。

俺は決して藤丸の様にも、マシユの様にも、リリイの様にも、ドクターの様にも、ダ・ヴィンチちゃんの様にも……

平安の貴婦人の様にも、神話の大化生の様にも、強くなれない。そんなのは分かり切ってる事だから。

「……それでも足掻く事だけはやめられないんだよ。どうしても……」

「——マシになりたい、諦めきれへんのやろ」

「ああ。少しずつでも俺は——あつ？」

……ちらりとアサシンの顔を見してみる。

スツゲーにやにやしてる。口の端からちよつとだけ牙が覗いてる。特異点に来てから多分一番のスツゴイいい顔をしてる。悪い笑み、というよりは……悪戯っ子ばい、ちよつとイラつとする感じの……

ちよつと待とうアサシン。一旦その笑顔ひっこめよう。嫌な予感がする。

「……あの」

「なあに？」

「もしかしてだけど……もしかしてだけどき……漏れてたり？」

「何の事お？ うーん、せやけど嬉しいわあ。ウチの事、平安の貴婦人だの、大化生だの褒めてくれて。旦那はんウチにべた惚れなんちやうん？」

「うごああああああああ？」

漏れてた!!! めつちやモノログ漏れてた!!! こ、こんなつ……ああクソ顔が熱いッ

！ 恥つず!! めつちや恥ずいんだが!? なんだコレは!? 地獄か!? ああクソこれから先が地獄ではあつた!!!

「あははっ、おつかしいわあ。そんなおつかない顔で、七面相して。おもしろい入道様やねえ」

「し、七面相だつてするつてんだこんなもん……！ つて誰がハゲだゴラ」

……ああくそつ、だめだッ。このままじゃダメだ。ズルズル流されてはいけない。いやもう寧ろ、このおかしなテンションのまま突つ込め！

どうせこの後、もつとひどい事が待つてるんだ！ なんとというか、いくら俺でもアサシンにいきなり突つ込んだことを聞くのは躊躇われたけど、このテンションとその事実を合わせて遠慮をぶつ壊す！ ヨシ!!

「——平安の貴婦人なら、平安の武人について色々知つてんだろ。宮中の噂とかはお好きか、ご婦人方」

「……さあて。噂は兎も角、まだ知ってる事も、あるかもねえ？」
「だったら知ってる事、ここで全部教えろ。出し惜しみはもう無しで行こうぜ」

第八十二章・裏：主従出撃

……なんだろう。コイツがあんな顔したのも、何となく分かった気がする。

「ほんま、初心でおもろい反応してなあ……おかしくって仕方なかったわあ」

「そうかあ。あの、途中で顔引きつってたりした？」

「してたねえ」

「そっかあ……うん、まあお前なら気にしないかそのあたり」

アサシンは、人外だ。それも、鬼だ。決して人間とは相いれぬ種だ。そして本人はその事をしつかりと分かっている。決して相互理解を求めるタイプではない。

しかし……それでも尚、人間とつるむのをやめる事はしない。別に鬼は鬼のまま、人は人のままで。分かりあえずとも、酒の一つくらいは飲み交わせる。それ位に気軽にも、考えている。

イイ女、というのはいく奴の事を言うんじゃないだろうか。

そんなアサシンが、こんなにも——ともすれば、マジで惚れてるんじゃないか、と勘違いしかねない位に話す相手だ。坂田金時、という男は。

それがまあ、気に入らない相手に『食われた』となれば……そりやあまあ、コイツで

も顔に出ても不思議じゃない、気がする。

「でもその後、すーぐあの女がこつち来て……見つかる前に逃げえ、なんて言うたんやで小僧。ほんま、惜しかったわあ」

「……頼光にとつても、坂田金時は重要なファクターだった訳だな。話を聞いてると」

しかしながら、それは源氏の総大将にとつても同じ事だったらしい。直接話は聞いていないが……まあ、めつちや大事にされているのは何となく分かる。そんな人物を自分が食いつぶした、という事を言われたのだから洒落にもならないだろう。

そして心乱れたその影響で、自分の中の危険な血が目覚めた訳だ。言ってる事だけ切り取つてると完全に中二病のそれなのだが……しかしそんな言葉で茶化せる様なものじゃないアレは。

「小僧の事だけやったら、まあ直ぐに立て直したかもしれんけどなあ」

「それに加えて、意志が揺らいだその間隙を突くみたいに、彼女の血の中に眠る『魔性』が目覚めて、立て直すどころじゃなくなつたって訳か」

「ま、そういう事やねえ……」

鋼の意思も千々に乱れ。

暴れまわる血に振り回されて、今は源氏の大將としての真つ当な判断も出来ない。すなわち……戦力の限られている俺らでも十分与しやすし、という事になる。

成程。素人でも分かるくらいの大チャンスな訳か。笑える。

「つて言うより、アレが馴染んでしもたらもう勝てへんね」

「馴染む……？」

「今のアレは、人として我を忘れて……自分の中にある物を抑えられなくなっただけ。せやけど、自分の中にある物が、完全にあの女を、染めたら？ どない？」

……完全な魔性が完成する。

さしづめ、本物の『鬼神』が出てくるつて所か。

元から強化されて強かったあの源氏の大將が、いよいよ本物の荒ぶ神となって、顕現する訳だ。第三特異点のヘラクレスと同等か、それ以上の難敵として。

そうなりやあ……ああ、確かに戦力も何も不足しているこつちに、最早勝ち目は一切ないだろうとは、流石に分かる。

「やるなら今が好機」

「せやねえ」

「それは、分かる……分かるんだが、だがなあ……」

こういう時、カルデアと連絡が取れないのが、とことんキツイ。あの状態の頼光が何処まで耐えられるか。正確な時間も分からん。

ナイナイ尽くしの中で……決断をしなければならん。

今、速攻で攻め込むのが本当に正しいのか。それでも多少のリスクを覚悟で、もう少し体勢を整えるなりなんなりしてからの方が良いのか……正確な判断がつかない。

例えば、こつちのコンデイション。

アサシンは先ず問題ない。だが俺は貧弱な人間だ。昼間の戦闘で消耗している状態でここで攻め入り、アサシンの足を引つ張る形で共にお陀仏、なんてのだけは避けないと。

……自分の中の『血』を隆起させられたなら、まだその辺りも何とかなるかもしれないが。しかし今はそれも厳しい……厳しい。うん。

「……」

考える。考える。考える。

他にやれる事はあるか？ 早めに攻めるリスクとメリットは？ 残る令呪を『何画』切るべきか？ 一つ一つ……細かくかみ砕いて。

多分だが、ここが『分水嶺』だ。ここでしくじつたら、俺はカルデアに帰還する事は愚か、こちら辺に転がるしやれこうべの仲間になつて終わるだろう。

だが考えれば考える程、まだまだ乏しい俺の経験則で出来る判断は……結局の所、たつた一つに絞られていく。

「……今夜叩く。それしかねえか」

結局の所、頼光が完全に覚醒したらどうしようもないって言うのは、凡そ間違いない事実だ。そして、完全に我を忘れた頼光が、完全覚醒したその後の頼光よりも弱いとは到底思えないのも、間違いない。

不確定要素が多い。賭けの部分も確かにある。

しかしそれでも……それでも尚、この現状で勝負を仕掛けるのが一番勝率が高いというのが想像できてしまった。

ギリギリの賭けになるのは正直否定できないが、しかしながら、そのギリギリを攻めなければまず突破できない。それほどの難敵だ、頼光は。

よしんばダメそうでも、早めに撤退すればいい……兎も角、一回仕掛ける事は決して無駄にならない。

「アサシン、今なら首を取れる……って言い切れるか？」

後は……アサシン次第な所はあるのだが……いや。

「んー、それはまあ無理やけど。旦那はんが『やれ』って言うんなら……ウチは旦那はんのサーヴァントやし？ やるしかないわなあ？」

あつたというべきか？ ちらりと見みてみたその顔は……困っているどころか、寧ろ口の端を大きく吊り上げて、愉快愉快、と顔に描いているあるみたい……笑つていやるんだ。

思わずこつちまで、釣られて笑ってしまふ……普通に笑う、というよりは。背筋が冷えてしまつて、漏れ出でてしまつた苦笑いだ。

これから、とんでもない難敵に挑むつて言うのに。ケラケラと声が聞こえてきそうな位気軽に笑う……強敵に臨み、それでも尚、強きに笑うのとは、まるで根っこから違ふだろう。アサシンのその笑いは、危険ですら『愉しむ』笑いだつた。

……ならもう、『やる』以外の事は考えなくてもいい、か。

「……はつ、頼もしいこと言つてくれるじゃねえか。流石は俺のサーヴァント、つて言つた方が良いか？」

「んー？ それ本気で言うてるう？」

「ああ。お前は『鬼』だけど……マスターとして、サーヴァントとして、ここにいるアサシンは誰よりも信じてるさ。うん」

……その笑いも、一発で鳴りを潜めたけれども。

この特異点に来て、始めてこんなきよとんした顔を見せた気がする。俺の前ではいつつも、こう……余裕と含みを持たせたような笑顔とか、すこしとぼけた様な困り顔とか。何処か一枚、薄皮を隔てた様な。そんな感じがしていた。

その薄皮の向こうにある物を、若干不意打ち気味に覗けた、そんな感じがして。今度はこつちがにやりと笑ってしまった。

「警戒は、してるさ。してないと首もつていかれそうだ」

「……」

「でも警戒だけじゃどうしようもねえだろ……まだ付き合いもそこまでじゃねえが、少なくともこつちがしつかり見てる分には、お前はちゃんとサーヴァントとして振舞ってくれるんだからな」

……正直、コイツの思惑は、全然分かってないけど。

でも今はそんな事を気にするよりも、難敵に共に挑む相棒として。事が終わるまでは信じようと、もうとつくに覚悟は決まつてる……つもりだ。

サーヴァントに首は預けた。今から突っ込むのは地獄の底。コンデイションは、取り敢えず戦えない訳じゃない、位で。

酷い状況だ。

でも……不思議と、気持ちは落ち着いている。

なんでだろうな。あんまりにも必死にやらないといけない状況だから、逆に何も考えずに、集中できて入りからだろうか。

「決着つけるぞ、アサシン。いい加減、雷模様の空にも飽きた——晴らしてやろうぜ。この曇天をよ」

「——カッコつけて。ま、ええよ。付き合つたるわ」

第八十三回

一日二回行動なホモ君実況はーじまーるよー。

前回は頼光さんの集中力を乱しに乱し『頭がパーンツ☆』ってなった所で、頼光さんが大暴走しました。んで、今は体の中に潜む頼光さんの『悪いモノ』がまだ目覚め切っていないので、今が一番倒しやすい！

今こそ好機！ とばかりそこに付け込んで殴り倒しましょう、という下種な作戦を採択、一日二回行動に打って出ました。

うんまあ、正直な話、カルデアのマスターが取る様な作戦ではねえなあ！ 他人の心をチクチク攻めた挙句、体勢が整わない内に奇襲しかけて殴り倒すとか。

とはいえ頼光さんと普通に戦ってもぶちのめされる事は確定なので……しかたないですね！ 誉は浜で死にました……頼光どん！ 介錯しもす！ 合掌ばい!! (覚悟完了)

さあいざや、勝負!!

『あーあー……もうめっちゃくちややねえ。周りぜーんぶ焦げて、灰になつてもうてる』
あーん頼光殿が全てを焼き尽くしてる!! 前回ここに来たときは門の色も綺麗な朱

色だったのが、所々焦げ付いております。アレだけデカイ建造物のでっぺんまで、焦げ付いた跡が……つまりそれだけ頼光さんの放電が凄い事になるって事で……

成程……けえるか！（平穩派カカロツト）

いえ、流石に奇襲しかけた挙句、何もせず帰るとか流石に誉投げ捨てすぎなので、ちゃんと向き合いますよ。

さて、改めて向き合った頼光ママの様子ですが……うーん、放電がますます激しくなっている様な気がいたします。頼光ママって、あんな放電するキャラでしたっけ……それ位我を忘れてるって事だとすると全然笑えないんですけど。

『ふふっ、どない？ 怖気ついてしもた？ ……そないな事は無さそやね。はあ、安心してわあ。きちんと男の子の顔してるやん』

うう……アンタもしホモ君が怖気づいたら何のためらいも無く骨抜くでしょうに……知ってるんですよ！ 貴女、全身の骨を抜く宝具持つてるでしょ！ とんでもないグロイ宝具持つてるでしょ！ ええ!? アンタの事何も知らないと思っただけじゃあ！

え？ 名前？ いや、それはまだ……（焦らしマスター）

『——あの女を殺れば、ウチ等もカルデアに帰れるんやねエ。なんやろ、結構長い間ここにいた気がしたわあ……』

おっそうだな（震え声）……結局、あの、此方のアサシンさんは本当にカルデアに来てしまっただけですか？ その場合、元からいたサーヴァントと合流して三人になるのか、それともやっぱりアサシンちゃんだけが残るのか……単純に戦力が減るとかキツすぎでしょ（半ギレ）

まあ言うてそうはならないのは把握済みではありません。イベント次第でアサシンちゃんと今までいたサーヴァントと入れ替わるとか、悲しい事態を引き起こす程このゲームだって……あ、いや、絶対にならないとは言い切れないんですけども……

『旦那はん、帰ったらまずどないする？』

……いや今このタイミングでそれを訊くのアンタ。プレイヤーの心でも読んでいらっしやる？ 読心術の使い手だったりする？

『旦那はんはカルデアの『選ばれた』マスターやしなあ。特異点解決して戻ったらみんな喜んで出迎えてくれるんとちがう？ ああ、でも……盾の嬢ちゃんなんか、心配してくれとるんかねえ。謝るのが先やろか』

——ほおう？

せやね。アサシンちゃんの言うとおりにやねえ。うんうん。まあ確かにホモ君達はあの意味で『選ばれた』マスターですもんね。

まあ、帰った後どうなるかは、この特異点を問題なくクリアすれば分かる事でしょう

と思います。はい。

『さ、張り切つて行こうや。どうせキツいのは変わらへんのやし。ここで黒焦げになつて砕け散るつもりで、そっちの方が後腐れもあらへんし?』

そうだね。取り敢えず……この特異点における大ボスとは、恐らくはコレが最終決戦となるでしょう。弱体化（議論）した頼光さんを討ち取るだけの簡単なお仕事……となり得るでしょうか。一切の事は分かりません（震え声）

……ああ、見えて来た。我々の終わりの景色。凄いどんがらどんがら雷が鳴り響いておりますねえ。頼光の雷がどんがらどん。

『アレの中に突つ込むんやけど……旦那はん、覚悟できてるう?』

ハイっ!!（正直）

……まあ覚悟だつて決めるしかないんだよこんな状態じゃあそりやあねえ。たとえ今までの中で一番見た目的にヤバそうなボス相手だとしても、やるしかないんですよねえ。

という事で、やつて参りました。暴走状態頼光さんです。夜の闇の中にバチバチ光る雷がネオンみたいで綺麗ですね……はい、現実逃避はここに置いておくとして。

凄い有様ですねえ。この雷の中を今から突つ切つていくつてマジ? まあ、流石に頼光さんの所に行くまではそのままストーリー内で向かうとは思いますが……それに

したってマジで竹林レベルの密度やこんな……

『ええ返事やねえ……せやったら、まああんじよう、ウチの後を着いておいで？ 散歩みたいなもんやと思つて、な？』

その中にアサシンちゃん、堂々と入場！ 先ず一発目の雷をさらりと払つて、一步先へと侵入！ はえくまるで暖簾をくぐる？ 兵衛みたいな気安さダア……流石に宝具クラスの威力があるという訳ではないようですな。というか頼光さんの最大出力並みの雷がこの密度で降り注いでたらお霊基こわれるわゝゝ（確信）

『んー……なんや、見た目だけはエライ勢いがよろしおすなあ。街に明かり灯すんには使えるんとちやうん？』

そして若干詰まらなさそうなアサシンから飛ぶ余りにも痛烈なお言葉。バースデーケーキにでも灯してろ雷小僧……派手な葬式になりそう（白髭並感）雷小僧だと頼光さんじゃなくて金時くんになるだろ、いい加減にしろ！ つまりはエース枠!! アサシンに胸貫かれて退場しそう（エース並感）そろそろ海賊王は自重。

さて、勢い任せで源氏進軍（広義）したところで……その先に当然の様に待っていましたね、彼女は。ぼんやりと、眠気を誘うみたいに。少しゆらりと揺れながら。その姿はまるで……眠る直前の赤子の様でもあります。

『のんびりしてからに……ま、言うてもこっからやねえ』

その周りをたつぷりの雷が覆っていなければ、まあ純粹に赤ちゃんかな？ とかほんわか出来たんですけれどもねえ。目が光っている赤ちゃんが何処にいる（震え声）

という事で源頼光との、コレが正真正銘の最後の戦いとなります。

『ほんじゃまあ、やろうか——』

今回の頼光さんはまあ……特にバフが乗っている訳でも無く、体力もちゃんと普通の数値で、アサシンちゃん単騎で削り切れるだけのレベルになっています。その上でアサシンにはしっかりとバフが乗っかっているという完全勝利確定のアサシンヨイシヨミツシヨンになっていますねえ……

『つたくう……こまで来てもまあだピカピカするんこの女』

』——』

と思っていたのかあ？（AKMTN）

残念ながらそれで終わる程生温くねえんだなあコレがア!! 先ず、頼光さんの雷が固定ダメージとして降り注ぐ仕様が発生。割とちゃんと減るなあ!! これガッツ張つても普通に削り切られちゃうんじゃ……

……い、いや。そこは考えない事にしましょう。問題は頼光さんの現在のクラスになつて来ます。えー、彼女の現在のクラスは、そうですね。セイバーではありませんねえ。はい皆様ご覧ください、あの悪魔染みた紋章を。

頼光さんが実装された当時のクラスであるバーサーカーでございます!! ほうら、御バフ越してもHPがゴリつと削れるねえ! 痛いねえ! コレだから敵に回ったバーサーカーはよオ!! 痛えんだよお!!

まあ現状は、殆ど暴走状態みたいなもんなんで、クラスがバーサーカーになつてもまあ不思議でもないんですけれども……それにしたつてありとあらゆるバフを乗つけたセイバー状態よりも地味に厄介になるな(半ギレ)

事こうなれば、クリティカルとバーサーカーのダメージ二倍の防御不利を突いて、ゴリゴリ殴り倒すしかない……!

『——ほんま。最後まで手古摺らせてくれて……せやけど、これで王手』

そしてゴリゴリとクリティカルその他諸々の力押しでHPの全てを削り切ったのが此方になります……キツツイ、ホント、結局、バフを含めてガッツ二回くらい使わされたんですけれども……!

ええい、この源氏の悪魔が! ホントめっちゃ抵抗してくれてお可愛らしい♡ 首落としてやるから覚悟しろ? 千紫万紅・神使鬼毒(宝具展開) あつ、ちよつと体力残つたえつとえつと……ホモ君の素のパンチ!(ゴリ押し)

『——目エ覚めた?』

『ええ。悪い夢から、漸く——最初に見るのが、貴女であることが、非常に腹立たしいで

すけれども』

という事で、源頼光退治、工事完了です……最後はホモ君で削り切れたんだからマジで危なかった。え？ ホモ君のダメージ通らないんじゃないかって？ 今まで神秘めつちや上げてたから流石にミリ削りくらいは出来るようになってんだよ！

進歩最小恥知らず、しかしその一步誉高い。

さて、次回は……こつちのサーヴァントについて、ですかね？

第八十三章・裏：実力拮抗

「——触んなや」

ぱしやり、という軽い音は、到底激しい稲妻を払った時に出る音ではないと思う。爪と剣で雷を蹴散らす光景は、ここに来た初めの方でアサシンが見せていたのだが……しかしながらまあ、今回は……うん。

「んー……なんや、見た目だけはエライ勢いがよろしおすなあ。街に明かり灯すんには使えるんとちやうん？」

「多分俺みたいなのだったら黒焦げには出来るんじゃないか？ 流石に」

アサシンが言っている様に、実際派手な見た目ではあるのだ。あるのだが、しかしやはり暴走しているからか、前までのヒヤリとするような怖さが、薄れている気がする。

いや俺が直撃したら死ぬの間違いないだろう。だけど、鼻先に普通に剣を突きつけられるのと、大剣を持ち上げられるのとじゃあ、絶望感が違うのだ。明確に。

「案外行けるんとちやう？ がんばり♡」

「いや頑張りたくはねえなあ！ 俺だって体張って頑張る事はあるけど今は違うなあ！」

しかし。自分で突つ込むって言うておいて……流石に無茶を言い過ぎたかとは思う。さつきから、マジでアサシンが払ってくれてなきや、何度直撃していたか分からん。

いや、仕方ないんだ。だって結局の所、アサシンの力を全力で引き出すには、俺が限界まで近くにいるしかないんだし。

……ああクソ。そもそも、俺が……万全ならって言う話ではあるんだが。

「まあでも、今こそ気張り時ではあるか。目の前まで来てるんだ——本丸が」

「せやねえ。ああ——見えてきたで」

……そして、無数の雷によって編まれた、神殿の如き嵐の中で。たった一点の空白地帯に、彼女は立っている。台風を中心の『目』の如く、完全に出来上がったエアスポツトに彼女は——酷く、ぼんやりと立っていた。

周りの雷と同じ——否、彼女自身はそれ以上か？ まるで炭酸の抜けてしまったソーダの様に何か『足りない』印象を受ける。

とはいえ。その『砂糖水』の濃さは……正直、あつという間に歯がボロボロになってしまう程のえげつない仕上がりなのは間違いないのだが。

「……意識は、無いか」

「あつたらウチ等、こんなものびり喋る暇もあらへんよ」

「だろうなあ……」

……そもそもこつちに気が付いているのか頼光は。気が付いているのなら、そのまま襲い掛かって来ても不思議じゃないと思うんだが。暴走しているなら猶更、獣の様に襲い掛かって来る、つて言うイメージがあつたのだから。

なんでピクリとも動かないんだろうか。

というか。動かないんじゃないかマジでこのまま。え、まさか動かない相手に対して奇襲しかけてこのまま勝っちゃうとか……

「これさ、マジで周りの雷だけが怖かつただけ……」

「んなわけないやん。見ててみ」

等と温い事を考えていた俺だが、しかしアサシンは黙って首を振り、近くにあつた焦げて塊になつた土塊を、適当に頼光に向けて投げつけた。ポーンと放られたそれはこげ茶色の軌道を描いて飛び――

――直後、銀色の一閃で真つ二つに切り裂かれた。

「――わーお」

「ほけほけ寄つたら『ああ』なるよ？ 氣いぬかんとき」

やつぱり見えなかつた。

成程……要するに今の頼光は、近寄る敵があれば自動で迎撃する機械みたいな状態な訳だ。意識が無いのは間違いないから、無意識の内に身体が覚えている動きをしている

んだらう。流石は源氏の総大将。とんでもない鍛錬をして来たと見える。

「ま、でも気合い入れてる時よりは全然やねえ——旦那はん」

「分かつてる。礼装の強化入れる」

圧倒的な力を持つ英雄の相手になるのは、それ相応の人外だけだ。すなわちは俺のサーヴァントである、アサシンただ一人。

「後は頑張ってくれ」

「ええよ。せやけど旦那はんも、気張ってくれはる？」

「——当然！」

全てをアサシンに賭けて、その上で勝つ。

礼装を起動させ、アサシンを強化。効果が表れたのを確認したアサシンは、一歩、二歩と歩き出して——そこから、童の様な軽い足取りで、頼光の元へと駆けだした。

彼我の距離が一歩ずつ詰まっていく。ゆらり、と一つ頼光が揺れる度に、一歩が詰まりそして……こっちの呼吸も詰まりそうになる。

酷い緊張感だ。彼女達の間の距離が詰まる度に、ぶつかり合って爆ぜている気がする。それはきつと——殺意、とか、敵意、とか……形あるものじゃない。

コレは原初の負の感情だ。単純な物だ。相容れないと自らが判断する不快感——そんなものが互いの間で吹き荒れている。

なんという——無意識下ですらそこまで荒れ狂う頼光に驚くべきか。それとも笑いながらもここまでの『モノ』を練り上げるアサシンに苦笑うべきか。

「——」

それが、限界まで張り詰め、捻じれ、集まって——そして。

ぎぎぎぎぎぎぎ——!!!

複数の金属の爆音となって、爆ぜた。

打ち合う、二つの牙と一つの刃。片や野性的に、片や機械的に。

アサシンの爪と剣、そして頼光の刀が、切り結び、弾け、ぶつかり合う。切り裂き、いずれ劣らず、競り負けない。二つの嵐が、激突する。

「——っ……い——」

巻き起こるは、旋風。此方にまで届く様な、強い風だった。

何とかギリギリの所で踏ん張る事には成功した。しかし、動きようがない。頼光は、今まで一番弱っている、という話だった。しかし——

冗談じゃない、この、この時の戦闘こそ、飛びぬけて激しくて、そしてどうしようもない程に、荒れ狂っているではないか。

「くっそ、冗談だろ……外の雷が、生易しく見えてくるなんざ……い——」

今までは、鋭く、そして文字通り、一切の無駄のない、『決闘』と呼ぶのが相応しい流

麗な激突であった……あったのだが。

今のコレは、決闘ではない。正に『殺し合い』と呼ぶべきだろう。

今までの戦いがそうでなかったとは言えない。だが、戦いと殺し合いというのは厳密には別なのだろう——それを、今、目の前で証明させられている。

一撃を持つて切り捨てる、のではなく。互いに相手の肌を浅く切り裂くような無数の攻撃の応酬。防御を捨てているのか、それとも攻撃を優先するべきだと判断しているのか。何れにせよ、視覚に見える『紅』の色は、多分一番多い。

……戦争が一番悪化するの、『双方の戦力が拮抗している時』らしい。理屈はよく知らないが。でも現実を目にすればそれが間違っていないのは分かった。

「……アサシン……」

だが、それでも今がチャンスなのは分かる。頼光に攻撃が通ってるんだから。

右手の令呪を強く握る……方が一の時は、令呪を切つて宝具を飛ばす、それくらいのサポートしか出来ないけども。

正直な所、俺は俺をもうこれっぽっちも信じちゃいない。所詮は……人間として終わってる人でなしだつて事を思い出した。

意志も強いなんぞ言えない。こうしてここに立っているのも、意地とかでもなんでもない。この旅から降りるのは、そうすると、本当に終わってしまうから。それがあんま

りにも怖いからで。

……そんな俺とサーヴァントは違う。アサシンは、強い。そんな彼女の足引つ張ってここで終わるのは……嫌だ。カスだけど、改めてそう自覚したなら。カスはカスなりにやれることやらないと、カスにすらなれないから——!!

「——あ」

そう思つて、顔を上げた時。

見えてしまった。

なんでかは分からない。アレだけの殺し合いだ、地面に跳んだ血が土と混ざつて、屍泥の様になつて、足元がぬかるんでいたのかもかもしれない——兎も角。

一瞬、足元が崩れてしまつている。それは、あの無数の剣劇、殴り合いの中では致命的な隙にしかない。ダメだ。止めないと。でも止める手段なんてない。

そのまま彼女の顔面に、頼光の太刀が吸い込まれていつて。ダメだあの軌道は、避けられない。

吸い込まれていく。アサシンの頭を、あの土くれの様に切り裂くために——

「——クソがあつ!!」

その景色に。

額から、頭の奥まで。全部が、真っ赤になつた気がした。

第八十三章・裏：悪魔のささやき

顔面。直撃。一瞬、思考、停止——

「——クソがあつ!!」

飛び出した。頭が真っ白になった。先ず、アサシンを引つ張り出さない事には。いやちがう、先ず彼女に声を、かけた方が……いやけど……いや、待て落ち着け俺、それも、令呪の発動だって。

でもダメだ、もう飛び出しちまった。足を踏み出した。止まらん。止まらない。このままだと、踏み込んで、そのまま、スッパリ——!

「アサシンツ!!」

それでも。叫んだ。

どうしても我慢できなかつた。額が焼け付くように熱い。手を伸ばす。一瞬先の、死ぬ未来が分かる。歯が鳴りそうになる。指先が強張る。それでも——

「——ひゃけばんでへえほ」(さけばんでええよ)

——それでも、俺の手の先のアサシンの口の端は、此方に向けて、さつきと変わらぬいや、笑つてる、じゃねえんだけど、オイお前。

ちよつと待て。待てよ。

「……アサシン!?」

「ぺっ」

アサシンは、あの頼光の剣を顔面に向けて、あの最速の太刀の直撃を受けた。だつて言うのに……ぴよい、と相も変わらない身軽そうな動きで、俺の目の前に着地すると『はいはい、下がり』と俺を押し返した。

驚いたのだが……どっこい、アサシンは生きている。

思わず顔全体を凝視するも、特に何処か切れているようには見えないし……いや、ちよつと待て。唇の端つて言うか、口の端辺りが赤いぞ。

……まさか、アサシン。

「お、おまつ……まさか」

「あー、武者の太刀唾えるなんて、何年振りやろねエ」

不味い、と非常に不機嫌そうな顔をしているのだが。それどころの話ではない。あの刀を、口で受け止めたつてのかコイツは。

思わず、変な笑いが零れてしまった。つくづく——アサシンというサーヴァントは、人間の常識の範疇には収まってくれないらしい。

「し——心配させんなー」

「心配してくれたん？ ああ——嬉しいわあ、そんな、お頭に角とんがらせてまでえ」

そう言われ、一瞬首を傾げ……ふと、額に覚えのある熱さが宿っている事に気が付いて急いで手をやったら——

「……あつ、え？」

生えてる。つていうか、ある。ちよつと手に震える位のバチリとした感触はマジで間違得ようもなく、俺が、能力を発動させたときに使った時に生える角だった。

どういう事だ、俺は発動もさせてないのに。勝手に。

暴発か、しかし……今、自分は酷く冷静に思考も出来ている。ロマニの備えてくれた礼装の機能は使えている。だけど。

そういう事じゃない。そもそも俺は——

「そん……な、んで……」

「——旦那はん？ なあにぼうつとしとるん？」

そうやって思考に頭を沈ませようとした所で……

ぐいつと急に頭を掴まれて、無理矢理にアサシンの方を向かされてしまった。相当強い力で、少し驚きそうになって、しかし。そんな事をする暇も無かった。

「羨ましいわあ、こんな鉄火場の中で、なんや考えこむ余裕があるんやねえ——余計な事」

「よ、余計な……」

「余計やない、つて言えるん？」

アサシンに覗き込まれる。睨まれている訳でも無い、つて言うのに。まっすぐ見つめられているだけなのに。頭を掴まれてなかつたら、たじろいで、一步引いてしまつていたかもしれない。

それだけアサシンの瞳は、俺の奥を鋭く突き刺してえぐる様に、見つめてくる。温度を感じさせない、そんな色のままで。

「……………」

「終わつたら、色々考えるのもよろしおす。せやけど、ねえ……………」

彼女はこつちに一步踏み込んで、下から見上げるように笑う。そして——
後ろに光る紫の雷、空からうねる様に落ちてくる一条の光、完全に不意打ちにも近い一瞬の一閃。それをアサシンは目にする事すらなく、くるん、と彼女は袖を翻し、その場で一つ回りながら、軽くその紫の光を振り払つて。

にんまりと、もう一度俺に笑つて見せた。

その姿は、あんまりにも艶やかで。引き付けられて。

「こつやつて、血の見せ合いしとる時くらいは、そんな事忘れてもええんやないの？」

そしてそこから紡がれたのは……………まるで、悪魔のささやきにも似たような、あんまり

な言葉だった。それは。

忘れちゃいけない事の筈なんだ。コレは。必死になって答えを出さないといけない俺の事情なのに。それを忘れるなんて、よくぞまあ口に出来たもんだと思った。

想うのに、どうして俺は……咄嗟にその事を否定できないんだろう。

「無駄に解決しないまんま、悩んで死ぬのも馬鹿らしいやろ」

「そ、それは……」

「それに、今、旦那はんは一人とちゃうし……ウチも巻き込むの趣味なん？　ふふつ、旦那はんの手ひどい扱いされてしまうん？　ほんのちよつとだけ、昂るわあ」

ぎしり、と頭が軋むような音がした気がする。酷い話だ。まるで俺の心の中の傷を抉って来るみたいない方で。

ああ、でも、そりゃあそうなんだ。アサシンが言う通りなんだ。

俺が悩んでいるこの一瞬で、ほんの僅かの、一手の遅れが生じるかもしれない。

その僅かな遅れが、特異点という余りにも厳しい環境では、致命的なダメージに繋がりにかねない、酷く厳しい。

「……っ！」

自覚はあった。正直な話。

俺は自分の過去を蒸し返された時から、それを理由に『自分から折れた』んだっての

は。結局の所、辛くて、耐えられなかったんだ。

こんな力使ってられるか、っていう反発も。流れる血が恐ろしい、って恐怖も。俺のした事は一生ついて回るんだ、っていう絶望も。そして、その絶望に、殆ど、諦めたみたいに感じた、納得も。

全部に負けて。使わず、そして『悩む』ことを選んだ。どうやって向き合えば良いのかを。それを先ず探さないと……嫌で嫌で、しようがなかった。そうでもなししないとマシになれないと思ったから。けれど――

「……今は、それじゃダメか」

「ウチは別に構わへんよ？　そういう『終わった』喧嘩も、それはそれで味わい様はあるし。ゲテモノも、嫌いやあらへんしねえ……せやけど、旦那はんは？」

――今、少しでもマシになるなら。それじゃダメらしい。

ああ。アサシンには感謝しないと。俺は……藤丸達と一緒に、また特異点で戦う前に一つ確認することが出来た。酷く当たり前の事だけ。

「まあ、真面目そやしね。納得できへん、って言うんなら……取り敢えず、今だけ、お試しでやるのもええかもね」

「……今だけ、か」

「せやせや。気に入らへんかったら、後からサツパリ辞めたらええし。悩みながら戦

うつちゆうんも、上手い事出来るなら悪いとは言うとらんし、なあ？」

……笑いがこみ上げてくる。まるで、麻薬に手を出させる時の誘い文句じやないか。そう言えば、鬼というのは西洋ではデーモンとして扱われるらしい。デーモン、即ち悪魔という事で。成程、墮落を誘うは、魔性のやり口か。

だが、今は。そんな麻薬で頭キめてでも。立ち上がる時か。

奥歯を強く噛みしめて。拳を握りしめて。がりがり頭の中の、理性を削り落とすように。それを、受け入れる。

「——なら、今だけのお試しついでに一個追加で。俺の血の事を思い出させてくれやがった混血サマに八つ当たりコースだ！」

「んふふつ……それは楽しそやねえ」

そうだ今は。

どの面下げて血の力を使うとか。

過去の事とか。

どうやって向き合うとか。

そんなもん——一旦、忘れる！ 悪魔の誘いにも乗つてやる！ 二度と戻れないかもしれないドラッグキメて、改めて真つすぐ突つ走らせてもらう！

ああくそ、酷いもんだ。懺悔とか、そう言うもんを忘れちゃいけない罪人の筈なのに。

それでも……感謝したくなってくるぜ、アサシン。

第八十三章・裏：振り向けばそこに

使う積りはもう無かった。

あの景色を見て、あんなクソみたいな景色を生み出した、あの家が崇めてたこの血をどうしてまだ使う気になれるか。本当に、考えたくもない位に。

けど……そうだ。俺の苦しきなんざ、全然関係なく脅威は襲い掛かって来て。悩む暇なんざくれないんだ。

甘ったれて、悲劇のヒーローを気取ってる余裕なんてのは存在しないんだ。

どれだけ苦しくたって、誰かを俺の無駄な葛藤の迷惑の巻き添えにしていい訳がないんだ。

……だから、どれだけ嫌でも、こんなものに頼りたくなくても、吐き気がしそうな気分になっても。

「ふふっ……ええね。分かるわあ……滾るわあ!!」

「っ……!」

やるしかないんだ。必死になって食らいつくしかない……とはいえ、最初っからまあそんな割り切っていける訳も無いのだから——今回だけは盛大に、八つ当たりさせても

らうつもりだが！

「ほうら!!」

「……かつ……!?」

その八つ当たりを助けてくれる一撃。懐に飛び込んだアサシンの振り上げた斬撃が思いつきり頼光にヒット。跳ね上げられる刀、そしてガラ空きになる懐。アサシンは——どうやら上、それなら、俺は！

「胴だつてんだあ！」

アサシンの脇を抜けて、ドストレートを、そのしなやかなおボディ様に一発のしたたかなプレゼントを!! ぐいっとした感触に感じるのは……やっぱそうだよなっていう納得の感覚が返ってくる。

ああこりやあ——全然通じてない! 流石は神祕の塊サーヴァント、たかが混血のパンチ一発じゃあまるで意味もねえか。とはいえ。

「揺らいだな——ぶへっ?!」

「はいはい下がるとき」

……ちゃんと頼光の体が僅かに身じろぎしたのを確認した所で、後ろ向きに軽く蹴っ飛ばされた。あの、普通に頭クラクラするんですけどアサシンさん。もうちよつと手加減をばして欲しいんですが。死ぬぞ、俺普通の混血ぞ。

「あたーっ……っつと、おうお見事なもんで」

そう思つて顔を上げたところに広がつていたのは——俺の一撃で揺らいで、隙を晒したそこに剣を振り上げて胸板を縦に切り裂いた、アサシンの姿。

先ほどの太刀の一撃を返すかのような豪快な一発、鮮血が飛び散るのが見えた。間違いないダメージ。

「カツ——!?!」

「遠慮せんでええよ、もつと沢山お見舞いするさかい……たらふく味わえば、宜しおす」
そして、振り上げた剣を掴み直しそのままに——さらに打ち下ろす追撃が、傷口を更に深く抉る——筈だったがしかし、それは流石に頼光の刀がすんでの所で受け止める事に成功していた。

だが、にんまりと笑う。やはりこの状況下、二人の実力が拮抗しているからこそ、俺みたいな大したことのないやつ介入でも……十分天秤を傾げるだけの、力はある。

アサシンが踏み込む。もう一度、刃がぶつかり火花を散らし、剣劇が始まるその一瞬に地面に足を手と両足を突いて……姿勢は、クラウチングスタート。一番早く突っ込めそうなイメージの奴。

アサシンがぶつかり合っている間、何時だって殴り込める訳じゃない。

とはいえ互いに拮抗している状況、アサシンの攻撃だって、さつきみたく入る時は全

然ある。そこに、さらに『もう一発』を打ち込む、追加の打撃が、俺の役割だ。たとえダメージは通らないにせよ、それでもさつきみたく、ほんの僅かな隙くらいは作れる。僅かな隙すら致命打になるのが——英雄と英雄の戦う聖杯戦争、特異点の厳しい現実なのだから。

「——イツ!!」

「ふふつ、鬼さんこつちら……」

だから、一瞬すらも逃さない。突貫する覚悟で突っ込んで、何としても叩き込む。

その一瞬は、アサシンが作ってくれるものと信じて、しつかり見て、機を待つ。

アサシンが片手で大剣を振り回す。直撃する。まだだ。瞬間的に頼光が反撃する——

—そうだろうな。全くよろけてるように見えなかった。

ぴしり、と振り抜いた斬撃が、避けずにそこに留まったアサシンの肌を裂いたのが見えた。飛び出しそうになってしかし——アサシンが嗤う。足が止まった。

それは、会心の笑い方だった。

「——手え鳴らして、待ってたさかい」

頼光が振り切った一瞬の間隙に、もう片方の——空いていた方の手が飛び込んでいく。体勢を戻せていない。分かる。避けられない。直撃する……! !

「ガッ——」

ぐらり、と頼光が、大きく、よろめいた。

ちらり、と流して此方を見つめるアサシンと目が合った。頷くそのままに頭を低くしながら……飛び出した。真つすぐに。

横を駆け抜ける。彼女が体勢を立て直せない位のダメージを負った、その最大の隙を突いた。気が付けば、目の前に、生気のない頼光の顔が、見えていた。

「……アンタの事について、同情はしねえよ」

手が震える。

圧倒的な怪物を目の前にして、自分の生物的な本能に責め立てられてるみたいだった。

目の前の女にかける言葉とは裏腹に。茹だる様な熱さの頭とは裏腹に。こうして、逃げようとも思わない心とは裏腹に。

勝手に体が震えちまって、全然……収まって、くれない。

ああ、それもそうだろう。納得しか出来ない。俺に向けられるあの目は……守護者としての厳しい目じやない。見られてるだけで、心臓の鼓動がゆつくりになる気がするくらいに怖い顔……俺を殺してやろうって、思ってる顔だ。

コレが、無意識の下で荒れ狂う血の暴圧か。そう見えないのにそう思える。

なんで俺は、今この人の目の前に立って、拳を振りかぶってるんだろう、って言うの

もつくづく思う。でも。

「……」

「だから——悪いな」

それでも、俺は——怯えてる事だけは、出来ないみたいだ。

コレは決別の拳じゃない。取り敢えずの、現実逃避の拳だ。この一発で、俺は自分の過去から一旦、盛大に目を逸らす。この人理焼却に関係ない罪悪感とも、無駄な恐怖心とも、今だけは、取り敢えずバイバイだ。

アンタに全て押し付けて、消す。

酷い八つ当たりだと思う。恨んでくれていい。残念ながら、俺は藤丸程にはカッコよくもないただの禿げたチンピラだ。これくらいしか出来ない。

同じ鬼を倒す、って言う理由で、無理やり奮い立って……同じ混血に、押し付けて。

「俺の、勝ちだ!」

酷い事をたくさんしてでも俺は——前を、向かせてもらう。

今はせめて、少しでもマシになって……立ち上がる事だけはしておきたいから。

「おおらあっ!!」

突き出した拳が、柔らかな頬に突き刺さる。チクリと胸が痛む。女の人の顔を素手でぶん殴る、なんて。つくづく正義っぽいことは出来ないなって、笑いすら漏れてくる。

それでもなお——この拳に、手ごたえは、有った。

後ろに流れる頼光の体。

倒れる、そう思った——が、しかし倒れない。

「いつ!？」

マズい、しくじった、死ぬつ、下がれ——間に合わない。

頭の中を無数の思考が駆け抜けて、地面を転がって避けながら地面に伏せるように危険を避ける体勢に入って……けれど。何時まで経つても、反撃の刃は飛んでこない。

「……あれっ?」

「——安心なさい。異邦の魔術師さん。もう、私に戦う力は、残ってません」

酷く、穏やかな声が聞こえた。

ハツとして顔を上げる。先ほどまでの殺意たつぷりの顔じゃない。寧ろ、優しく……まるで『お母さん』みたいな、そんな顔で、笑いかけてくれていた。

源頼光は、今、確かに正気を取り戻していた。

「——目エ覚めた?」

「ええ。悪い夢から、漸く——最初に見るのが、貴女であることが、非常に腹立たしいですけれども」

「見たのは旦那はんやろ?」

「その子は下に伏せていたので、一瞬目に入らなかつたのですよ」

そして、もう一つ。その体から、黄金の輝きが立ち上っている事にも気が付く。どうやらちゃんとの今の一発はトドメになつていたらしい。とはいえ……ギリツギリの所まで追いつめてもらつてからの一撃だったか。

「——お見苦しい所をお見せしてごめんなさい。そして、私を止めてくれた事、本当にありがとうございます」

「あ、いえいえ。そんな」

しかし、彼女はそんな死ぬ直前ですら、俺に向けて見惚れる程綺麗なお辞儀を一つ寄こして来る。戦っている最中の様子でも何となく分かつていたが、真面目な人なのだろう。体を起こしながら、こつちも頭を下げた。

俺の覚えている母さんと……うん。ちよつと似ている気がする。母さんも、何処か大人しくて真面目で、大和撫子つて人で。いやここまででは強くなかつたけど。

「……」

「あ、あの、なんででしょう」

そうそう、怒る時はこんな風に少し悲し気な瞳でこつちを見る事も……いや、なんでこつちをジツと見ているんだろうか。

その疑問は——彼女の表情が厳しそうな、苦しそうなモノに変わった事で、一つのあ

る予感に、変わった。

「ごめんなさい。もう時間がありません……ここから早く逃げなさい、魔術師さん」
「え、なんで——」

「私は、元はこの特異点に『カウンター』として呼ばれたサーヴァント。敵対者を狩るために。まだ、敵対者は——貴方の後ろに、立っています」

——それだけを言い残し。

頼光は、黄金の光の欠片となつて消え失せた。

一つ。大きく呼吸をして、天を見上げた。

雷を支配していた雲が晴れて、綺麗な夜空が見えて来ている。そして、その間から差し込む満月の光も。それはまるで——魔の時間の始まりを告げている様な、妖しげな色を纏っている様に見える。

その光を追いかけるように、振り向いた。

俺の後ろ。立っている奴は独りしかない。俺とずっと一緒に戦つて来てくれた、アサシンのサーヴァントが。

「——ほんま、最後までつまらん女。ウチからバラした方がおかしいと思わへん？
なあ旦那はん」

いつも通り。

けらけらと軽く笑いながら。彼女はその手に付いた頼光の血を、舐め上げた。

第八十四章

いえーい！ ホモ君見ってるー!? アサシンに裏切られちゃいましたー！ な実況はーじまーるよー。

ふーん。ピンチじゃん（震え声）サーヴァントに裏切られたマスターの末路なんて大抵碌でもないモンって決まってるから（ガチ震え声）所詮は小賢しいクリティカルでダメージをせこせこ稼ぐことしか出来ない雑種マスターにガチの純血鬼っ子に勝てるわけないだろ!! いい加減にしろ!!

『——ほんま、最後までつまらん女。ウチからバラした方がおかしと思わへん？
なあ旦那はん』

といつても、それをバラしたのは彼女からではなく、頼光さんからなんですけれども。流石は大英傑、腐つてもただでは終わらないか。

お陰で、最初にホモ君を殺す、つまりは暗殺するために召喚されたサーヴァントがサーヴァント・アサシン……『酒? 童子』という事が分かりました。

その鬼の名を知らない日本人はそう多くない程のビッグネーム。

人間を容易にその細くしなやかな手足で切り裂く、悪い『童子』。血だけではなく酒に

も酔う『鬼らしい鬼』でありながら、風流や雅を愛する文化人でもある——神秘色濃く残る平安時代において尚、最大と言つてもいい程の大化生。

脅威なのは力だけではなく、そのカリスマ性も怪物の中でトップクラス。

普通の鬼としてではなく『鬼の首魁』の内の人として最大級の脅威と都から捉えられていた程のカリスマは下手な王様では太刀打ちも出来ない程に高いのです。

普通は群れぬ筈の強き鬼たちを纏め上げ、一大勢力を築き上げ、御殿に住まい酒宴を開いていたとの事です。

『まあええわ。そんな訳で。アサシン、酒呑童子。旦那はんのサーヴァントやなくて、旦那はんの首を欲しがる鬼。改めて宜しゅうな？』

……頼光さんと、金時と関係が深い鬼でもあり。

源頼光や坂田金時を始めとする四天王を要する源氏武者でも、余りに被害が大きくなることを考えたのか、『真つ向から力で捻じ伏せる』のではなく『酒飲ませて不意打ち』という手段を取らざるを得なかつた程に彼女は強いのです。

『まあ——（ハハ）で首とつてもええんやけど』

さて。そんな彼女とマトモに殴り合つて勝つとかハハワロスとしか言えないと言いますかはい。しかし、若干雲行きが変ですね。

戦う雰囲気ではありません。どうやらいきなり酒？ちゃんに全身の骨抜かれてガメ

オペラという訳ではない模様です。

『まあ、一緒に牛女を討ち取った仲やし。一晩くらいは待つてもええよ？ どうせここから出られへんのやし……最後まで、ゆうつくり楽しむのも、悪ないわあ』

許されたツ……!! やったあああああ!! (寂海王並感) やつぱ命は拾ってこそナンボ、ハッキリわかんだね(弱者の心得) この実況を続けるためならば俺は彼女の足の先をも舐めよう……えっ!! 酒? 童子さんのあのおみ足をペロペロできるんですか!?! ご褒美じゃないですか! (セルフ発狂)

という事で、この拾った命で何しよう……ぐへへ、カルデアのマスターに反撃の時を与えた事を後悔させてくれるわ……!!

『それじゃあね? 旦那はん』

はい、酒? ちゃんばいばい。

……さて。皆さま。ここで悲しいお知らせがあります。ホモ君はこのままだと普通に死にます(震え声)

まあ、うん。そりゃあそうなるだろうな、と思う方もいらつしやるでしょう。うん。今ホモ君には、カルデアのマスターとして呼んだサーヴァントが付いていないのです。そしてアサシンちゃんの裏切りと、頼光さんが元は『特異点の呼んだカウンセラー』だった事を考えるとホモ君は単騎でここへ来たことになり。

頼れる仲間とは敵の思惑で綺麗に隔離されてしまったのです。わー……ふざけんなあ！ カルデアのマスター、死ぬ気で集めた戦力や！ サーヴァント二騎言うたら、どれだけの血（経験値腕の）が流れたか、わかっとなのかあ!!

あんまりにもあんまりな状況に、思わず東の極道組織の古き大幹部にもなるうというモノです。

罪ですよ……詰みでもありませんよ……どうすれば良いんでしようねコレ。

いや、落ち着きましよう。いくら何でも特異点を誘導通りにクリアしたらそのまま死が待ち受けているとか型月作品じゃないんですから……何かある筈です流石に。

先ずは、我々のアジトに戻ってですね――

『――おつ、やつと戻って来やがったか』

おんっ!?

『まああの酒?の事だ。裏切つてそのまま背後から……なんてダセエ真似はしねえと思つてたが。やつぱ何処に召喚されてもアイツはアイツつて訳か』

古びた廃墟の中に堂々と立ち上がる、アサシンでは無い背格好の影が一つ有り！ なんとという偉丈夫、一般人ホモ君との圧倒的な格の差を見せつけるような胸板の厚さ、腕の太さたるや！ ヒューッ！ 見ろよあの筋肉、アイツならやれるかもしれねえ！

そのマツシブな肉体を直で包む白い衣の、襟をバリ立てしたヤングでヤンキーな着こ

なしに、金髪おかつぱの下の、ゴールドンなフレイムのサングラス！ 黒いパンツに同じくゴールドンなチェーンを飾り立てたイカした兄ちゃんが！

『おおツと、そう警戒しないで良いぜ、兄さん。俺っちは、真っ向から戦ったアンタへの頼光サンの最後の手向けて奴だ。ったく、頼光さんを止める為に来たってんに、なんも出来ねえまんま消え失せちまったからなア……その分まで、張り切つて力になるさ』

その手には、人間では震えぬ程のゴツツイまさかり！ 頼光さんからの送り物、ならぬ送り者。

『足柄山の金太郎、そして頼光サンの四天王、坂田金時、ゴールドンに推参つてなあ！』
源頼光を打ち倒し、そして酒？童子が敵に回ったとなれば、この男が出てくるのは最早道理と言つてもいいでしょう、誰よりもゴールドンな源氏武者、堂々不敵な主人公（氣質）の坂田金時が登場でございます！！

どうやらこの特異点、これからは彼がこの特異点内でのサーヴァントになってくれる模様です。ありがてえ……！ ありがてえ……！ 流石にサーヴァント一人をマスタ―一人でお相手いたす、とかとんでもない無茶をさせられるとかではなくてホントに良かったです……！！

という事で……？場を改めて？

金時君を迎えて、改めて檻樓アジトで、ブリーフィングと洒落こみましようか。

Hey、ゴールデン！ どうしたこんな事になってしまったのかを教えてください！（滅びの日を迎えるホモハゲBB）

『オーケイ。じゃあ先ずは、ここが『何の為に用意されたか』……そこから説明する事になりそうだな』

という事で、ここからは解説するゆつくりと化した金時君による怒涛の解説パートだオラア!! 金時君ゆつくり化するのクツソ似合いそうですね……東方キヤラって言われても一瞬信じそうな気がする（節穴）

という事で金時君の解説してくれて所をめぐちやかみ砕いて説明すると。

そもそも刺客として召喚されたアサシン——酒？童子は、しかし彼女を召喚した術者とクソ程反りが合わず半ば離反とほぼ同じ位の勢いで暴走。

そのままアサシンの首輪は術者から外れる事になってしまい。

それを見た術者の方はといえば『ファツ!? やべえよやべえよ……』と大混乱した挙句『せや！ カウンターとして召喚されているサーヴァント鹵獲したろ!』と頼光さんを卑劣な手段で捕獲し、他に召喚されていた頼光四天王を、彼女を囿に何とか各個撃破、一人一人頼光さんにむしゃむしゃ（比喩）させて強化させて新たな刺客に。

よしこれで暴走したアサシン諸共カルデアのマスターに一発でブツパでゲームクリ

アでワシが天才や!! (歓喜) していたら今度はアサシンが此方と改めて組んで頼光さんを叩き潰しに動いたという。

……ええ……? (困惑)

『向こうとしてもSo Crazyだったろうよ。自分と反りが合わなくて離脱、それだけならまあ放っておいてもまあいいが、結局敵と組んじまったんだから』

控えめに言つて酷い。何が酷いつて、アサシンが裏切つた理由が彼女らしいカッコいい理由なのに、そこからの流れがクツソ雑なんですよ! なんだよ! 取り敢えず鹵獲してからの後は流れで、みたいなその……その! しかもアサシン放つておくなよ! せめてそつちを討ち取れよ! スルーしておくなよ!

『まあお陰でアンタは助かったから結果オーライつて奴か?』

予想以上にぐっだぐだしてますけど……向こうからしたら、それだけアサシンに裏切られたつてのは驚きだったのでしょうか。分からないですけども。その辺りはプレイヤーには知る由もない事。それに結局の所は……

『まあ、その酒? 童子も、最後にはアンタの敵に回つた訳なんだが……』

そうだよ (便乗)

第八十四章・裏：黄金の益荒男

正直な話をしよう。

あの享楽主義を掲げてそんなアサシンが、あんな楽しそうに話す男って、一体どんなのか。まっつったく想像できていなかった。

少なくとも真つ当な奴である事は分かっていたが、しかしそれ以外がさっぱり。金髪碧眼くらいしか聞いてなかった。

ので、金髪をさらりと流した細マッチョで、それが意外にもデカイ武器を使う……的な事を考えたりもしたが『いやそれどうなんだろう』と思いとどまったりもした。

「……なんだよ、俺つちの顔になんかついてるか？」

「サングラスが付いてるな。カッコいいとは思うけども」

「お、そうか!?　へへっ、話せるじゃねえかアンター！」

しかしいざあつて見たらそんな想像を吹き飛ばす様な『えっ、日本人?』と言わんばかりのゴリゴリマッチョメンの姿がそこにありました。

アサシンの好み……そっか、正統派な細いイケメンかと思いきや筋肉か。男の子も憧れるし、筋肉。やっぱり筋肉なんだなあ。

しかしまあ。そりやあアサシンの『遊び相手』になるだけの事はある。ゴリマツチョの中でも更に極まったタイプだとおもう。胸板がシヤツのボタンを弾けさせるレベルだよ。ちよつと動いたら『ぶちんっ♡』てしそっだよ。誰得だよ。

「……んでよ金時さん」

「ゴールデン、つて呼んでくれや」

そんなマツスルメンこそは、アサシンの首を取った伝説の源氏武者。足柄山の金太郎こと坂田金時である。えー、洋風にかぶれてるけど。おかつぱ頭以外和風な所が一切無いけれども。ゴールデンつて結構な呼び名だなあ。まあいいか、本人が望んでるなら。

「オーケイ、ゴールデン。状況を教えてくれや。話してくれるんだろ？」

「ああ。だが……かなりクールだな。もうちよつと焦ってるもんかと思つてたが」

「はっ……流石にもう分かつてたからな。俺のサーヴァントじゃないって」

……そんな顔する事はないじゃないか。

「はっ、それでも酒？と組んでたつてのか」

「アイツは至らないマスターの俺をささえてくれたからな。だつたらマスターとして応えないとなあ。ちがうか？」

「……はっはっはっはっ！ いいねえ！ ゴールデンだぜ、大将！」

ばしり、と差し出された手とハイタッチ。

特に気が付くきっかけがあつて、劇的に思い出した、とかじゃない。

例えば、どうして俺はずつとアサシン呼びなんだろう、とか。

戦つてる時に、記憶の俺はマシユを援護する位置にいる事があつたのに、俺のサーヴァントはバリバリの前線タイプ。俺はもうちよつと前にいても可笑しくなかつたんじゃないか……とか。

じわじわと違和感が形を成して、結果として二人のサーヴァントの事を思い出した訳なのだけれども。だから、まず気になるのはそこだ。

「んでだ、ゴールデン。俺の二人のサーヴァントは、何処に行つたんだ？」

「あー……俺つちも詳しい事は知らねえ。だが少なくとも死んだって事はねえから、そこは安心してくれ」

「そうか。ならよかつた」

……ああ、一番知りたかつた事が確認出来て、安心した。

流石にあの二人に居なくなられるのは、ちよつと辛い……どころの騒ぎじゃない。そこが確認できたなら、次だ。

「じゃあ、次はアサシン……酒？童子と、源頼光の事だな。どうして彼女達は立場が逆転してるんだ？」

そうだ。アサシンが俺のサーヴァントじゃなかつた。ここまではまあいい。だが、ど

うして敵側にいた筈の彼女が、俺のサーヴァントを名乗っていたのか。そして本来、その敵のアサシンを狩るために召喚された源頼光が、敵に回っているのか。

流石に、その理由を無視はできない。

「オーケイ。そうなると先ずは、ここが『何の為に用意されたか』……そこから説明する事になりそうだな」

「この平安時代の特異点が、か」

「おう。結論から言っちゃまうと……ここは『アンタを捕獲する』為に用意されたもんだ」
……いきなり背筋が冷えそうな事を言われたんだけど。なんだ。どうしてそんな俺は人気なんだ。嫌な人気だなチクシヨウ。

「デカイ門やらは、態々アンタを取っ捕まえる為のブツだ。まあ魔術的な意味とかあるっぽい……そこは良く分からん！」

「そ、そうか」

「んで、その門の中にアンタを押し込める為の刺客として、酒？は呼ばれた」

「……捕獲する前に興が乗ったからって殺してきそうな刺客だなあ」

いや、そこまで短絡的ではない……が、しかしアサシンにはやりそうな『危うさ』がある気がする。しかも、不安定が故、という訳ではなく、当人の気質から来るものもあるし。やってしもたわあ、とか悪びれもせず言っつてそんな気がしないでもない。

「まあ、言わんとする事は分かるけどよ……アイツは昔っから『掻っ攫う』鬼だったからな。この場所との相性とか考えて、捕獲する最適格だと思つての選択つて訳だ」

「ああ……」

鬼、つて言うのはそういう側面もあるか。山から下りて人を攫う。そんな物語は幾らだつて存在していた気がする。

成程。向こうにとつて、アサシンはその『人さらい』としての性質を見込まれての抜擢だった訳なのか。まあそう考えると……いやあ、それでもどうなんだろうな。

「まあ、それがB A DもB A Dな選択だった訳だが……どうやら、アイツと召喚した奴の気質は合わなかつたらしくて、初手で家出G I R Lとなつた訳だ」

「……もしかして、話した？」

「ま、俺っちもここにカウンターとして呼ばれてたサーヴァントだからな。アイツとは何度か顔を合わせた……記憶が連続してんのは、まあ頼光サンของサービスか、八幡様のお導きか、どつちかは分かんねえけどよ！」

——アサシンが言う事には。

『あの法師、ほんまいけすかんわあ。ウチかて人攫うのは別にかまへんけど……攫うもん位選んでもええやろ？』

という事らしい。何処まで行つても、彼女と召喚者とは趣味も反りも合わない以上、

平行線なのは目に見えている。故に最早話す事も無しと、召喚者の元を去ったのだ、と嫌そうに彼女は語ってから、何処かへ行ったのだという。

……いや、語っていた、ではないんだが。

「去った、って……サーヴアントって魔力供給がないと現界し続ける事は出来ないんじゃないのか!？」

「……そこがソイツのやらかした所だな。素直に自分の戦力をぶつけりやあ良かったのにどうやら現地生の陰陽師を嚇けたらしいんだよなあ」

その疑問に、金時は軽く頭を掻き、やれやれとでも言いたげに苦笑した。

……そもそも、彼女を召喚した術師——恐らくはここまで俺を狙って来る流れを考えると、以前と同じようにリンボである可能性は高い——の立てていた作戦は、本来この平安京の中に居た住人ですら組み込んだ、かなり大掛かりな追い込み漁の様な作戦だったらしい。

だが、その要の一つである酒？童子が気分が乗らないとバツクレた事で、状況が一変し潰し合いになったのだが……しかし人食いの鬼に、魔力の塊みたいな生の陰陽師（現地の協力者）を始めとする現地戦力を嚇けた事で、状況が悪化した。

「お陰でアンタを捉える為の箱庭は大荒れ。酒？は首尾よく魔力の『供給源』を手に入れた事で撤退に成功し、術師は練つてた策を完全崩壊させて……仕方なし、つてなもんで

咄嗟に別のプランを練らざるを得なくなつた」

「……なんだろうな。頭は悪くねえんだろうが、肝心な所が抜けてるっていうか」

確かにリンボとかいう魔術師は、悪辣で、頭も切れる。俺の護衛のサーヴァントを排除し、そして人さらいとしてこの箱庭に俺を連れ込む為の人員も最適な奴を連れて来たのだろうとは思う。思うが。

しかし、ソイツと反りが合わなくなつてからがまあひでえ。

「……その代わりに、何時の間にか頼光サンを奴らは手に入れていた訳なんだが」

「あー……そこは、良いよ。別に。話したくねえだろ」

「悪いな。つたく、自分が情けねえ……」

……少し話しただけでも、分かるくらいに金時は快活な男だ。そんな彼が余りにも分かりやすく顔を顰めたの。正直、想像もしたくねえほどの事を、金時達にしたのだろう。向こうは。

「とまあ、土壇場で酒？をなぎ倒しアンタを取つ捕まえる準備を見事整えて、さあさあ一戦、と向こうはヒートアップ……だが強かさならアイツの方が上だったらしい」

「アサシンは、本来敵側だった俺のサーヴァントになつた」

「へへっ、ゴールデンな意趣返しだろ？」

俺が来る前に、マジで特異点の行く末を占うような大戦が一つ二つ起きていたんだ。

道理でアサシンと頼光さんと俺しか見ないし、カウンターサーヴァントも居ねえし。俺がやって来たのは戦いの終わり際なんだから、当然の事だった。

「元々、酒？は『記憶をボヤかされたアンタのサーヴァントとして一緒に行動する』っていうプランだったらしい。んで、その下準備を上手い事使って、アンタと契約を結び……そつからは、アンタの知る通りさ」

「なるほどな」

「——だが、共通の敵が消えた今は違う」

そんな目まぐるしく変わる状況の中、最後に残ったのは……アサシンだ。

それを口にした金時の表情は、明確に険しいモノに変わっている。ガシャリ、と音が鳴る程強く柄を掴んだその手に、彼の強い思いが現われているように見える。

「……昔の知り合いだから、って訳じゃねえ……って言えりやあ良かったけどよ。でもどうしたって、アイツとの因縁はオイラには忘れられねえ！ だったら、俺はまっすぐ進むしか——！」

「ゴールデン」

……しかしながら。彼がどんなに強い思いを抱いていようと。今の俺は、アサシンにそそのかされた悪いマスターなんだ。悪いが、キミの思いはぶち壊しにさせてもらえないんだよ。

此方を驚いたように見つめる彼に、悪ぶって笑顔を浮かべて見せた。

「——悪いが、因縁は俺にもあるんだ」

第八十五章

今度はこつちがバーサークするんだよオ!! な実況、はーじまーるよー。

……ハアツハアツハアツハアアツ! (アサシンにごめんね♡された俺) ならばア!

答えはひとつだア!! バキイツ (ゴールデンと合流) あなた (バーサーカー脳) にイ

! 忠誠をオ! 誓おオオオオ!!

いや単に新しい味方なサーヴァントが来てくれただけでしょ (冷静)

『さあて大将。見えるかい。あの暗い群れがよ』

さて。そんなゴールデンを引き連れて、再び立つのは巨大門の前。この前の頼光さんの暴走で、かなり荒廃してしまっているのですけれども、そんな荒れ果てた道を歩く、死神みたいな奴らの列が見えます。

シャドウサーヴァント君たちです……なんだよもおおおおお!! またかよおおおお!! (半ギレ) 多いんだよオ!! (迫真)

黒くも歪んでもないモヤ纏っただけの死神モドキ風情がよオ……前回は質をバツチり高めて来たから今度は物量戦ですってかあ!?! ドズル中将みてえだなお前だ (戦いは数だよ兄貴並感)

『どうやら向こうさんは相当焦ってるらしいな。酒？が向こうに着いてるなら、ここを出てくるだろうが……それもねえ。へっ、戦うだけ、ゴールデンな意志もねえ、傀儡ばかりならべた所で、怖くもなんともねえさ！』

だがしかしその数頼みの敵が全く怖くない不思議。

ガツチャン、と得物の大斧をならし、ホモ君の後ろから一步悠然と踏み出すは。

轟雷一閃！ 威風堂々！ 敵の脅威を破顔一笑に伏す源氏武者！ 気は優しくて力持ちを地で益荒男！

『骨の髄まで……逝っちまいなあ!!』

黄金の鉞の一撃が、荒々しくも剛く、敵をあつという間に蹴散らしていきます。頼光さんの時は、その力を発揮しきれていたかは疑問でした。しかしこうして本人が振るえば正に轟く稲妻と言っても過言でなく。

これぞ、FGOにおいて伝説を謡われる日本産バーサーカーのサーヴァント、坂田金時!! 個人的にですが、悪名高いかの殿ヘラクレスと同レベルの名声を誇ると思いません。はい

バーサーカー、というクラスの名を良くも悪くも高めた彼の特徴と言えば、単純なパワーの凄さです。

ほんへでは『バスター三枚束ねて殴りや、クエストクリアの音がする』ってなもんで。

ちよつとした高難易度のボスであれば、金時君が宝具絡めてバスターブレイブチェインすると『あれっ？ 死んだ？』ってなります。

まあちよつと言い過ぎな面もありますが、宝具が絡んだ金時君のパワーは、現在でもバーサーカー有数。

このFGORPGにおいても、バリバリの前衛型として、全てを破壊尽くしている事で有名。もし最初に彼をサーヴァントとして引き当てたら『RPG、完!!』と叫んでも許される程の圧倒的な性能を持っています。

『行くぜ大将！ 真つ向から突っ切ってトラッシュシュ&クラッシュユだ!!』

そんな彼が前衛として突っ込んでくれるんだから頼もしいことこの上……お前パッションリップやったんか!?(困惑) いや、金時の雄っぱいはそりゃあ大層立派なもんで、すし、リップと張り合えるくらいむち♡っとしてますけれども……

まあ『壊して塵にする』位の勢いで口にしたんでしようけど、なんという偶然の一致。とはいえ、実際彼らが相手では、金時の雷は過剰戦力、一発で塵になっちゃおうのが関の山ではありませんが。

という訳で……恐らくは大ボスの酒? 童子の前座となる、シャドウサーヴァントの群れとの一戦となります。

敵は変わらずセイバー一辺倒の量産型。アーチャーがいれば一網打尽に出来る鳥合

の衆なのですが……しかし、ちらちらと微妙に体力の高い奴らが増えています。この前の特異点を経て、無駄に進化したのでしょうか。

まあそれすらも金時君の轟雷一閃で大層ゴールデンな（比喻）事になるんですが。バーサーカー最強火力の一角にぶつけるには余りにも戦力不足。鍛え直して出直すがよい。

『っし……抜けたぞ！ 抜けた、は良いんだが……』

ですがシャドウサーヴァントを蹴散らして突破し、門の前に辿り着いたは良いんですが酒吞童子がいらっしやいませんねえ。

てつきりこちら辺で待っているとはかり思っていたので。何処にいらっしやるのでしようか彼女は……

『いっやで。ハハ、ハハ！』

上かつ!?

——いました。

赤い門の上、瓦葺きの斜面の上に、ゆるりと腰を下ろす小柄な少女。白い肌だからこそ黒い瓦をバツクにするととつても映えて。見上げる先には、まるで彼女の盃に入りそうな満月が一つ。

赤い盃を傾けて飲み干せば——零れ落ちる透明な雫が、月の光に僅かに輝いていま

す。

『待つとつたで？ 旦那はん……なーんや、ええオマケも連れて来てるみたいやけど』

背後の大剣に写る、とても鬼とは思えぬ静かな笑み。

そこから顔を少し傾けて、牙を見せて笑う姿は。可愛らしくもあり、艶やかでもあり、そしてほんの少しだけ……凶暴にも見える気がします。

『酒？……!!』

その名は、大江山の鬼の首魁——サーヴァント・アサシン、酒？童子。

一献、酒を口にしながら。堂々の一枚絵を引つ提げてのご登場でございます。うわあ
コレはラスボスの風格ですなあ……

『なんや小僧、あの女に食われて消えたもんやと思てたけどなあ？ 生きてたん？』

『……その頼光サンの最後の送りもんつて奴だよ』

『ふうん。まあええわ。今日の相手はアンタとちやうの。飴ちゃんこうたるさかい、今日
日は早う帰り？』

『笑えねえ冗談だな、オイ』

そうだよ（震え声） ここで金時に帰られちゃうと俺死んじやうから……悪いが酒？
ちゃんには、ここでバーサーカー最強理論の前に露と消えて頂く。申し訳ないが、コレ
は確定した未来なのだ。

『ええ？ 嫌やわあ、冗談ちゃうんやけど』

『……大将置いて帰ると思うか？ 酒？、アンタを目の前に』

『いややわあ、皆してウチを怖い鬼みたいに言うて。今は普通の娘と変わらへんよ？』

出来る訳ないだろいい加減にしる!! 全く……酒？ちゃんはお冗談が上手。魔力供給の尽きたサーヴァント相手だつて、普通の人間はまるで勝てないつて言うのに。まだこつちとパスが繋がってる酒？童子相手にどう勝てと……

『そんな訳ねえだろ、つたく……あん？ いや、酒？、お前、ちよつと待て』

『旦那はんの魔力なら、もう貰つてへん。今、ここにおるのは……まあ、ただの意地みたいなもんやねえ？』

フアツ!? (困惑)

まままま魔力を供給していらつしやらない!? つまり酒呑は魔力が枯渇してエロ同人みたいに発情している……!?! (脳死) つしや! 酒呑の盃に俺の金棒をぶち込んでやるぜ! (竿役並感) やめろ (純愛主義)

それは置いておくとして。魔力供給を貰っていない、という言葉が本当だとすればどえらい事です。サーヴァントというのはマスターの魔力供給が無いと、あつという間に消滅がするすさまじい魔力喰らいなのですよ。

なので魔力供給が無いと存分にも戦えませんし、何なら即消失モノの大ピンチではあ

るんですよマジで。

……いやまあ消滅の危機を『気合い』で乗り越えたり、世界消滅の力を受けて尚『気合い』で何とかするサーヴァントが居るので、意地で消滅するのを先送りくらい出来ても不思議ではない気もしますけど。

『——さて、もうええやろ？ やりあおうやない』

とはいえ、要するに彼女はガス欠寸前の高級外車みたいなもんです。それすなわち置物と同義、酒？ちゃんには大変申し訳ないが、ここは金時君と協力して、即座に叩いて終わらせて頂こうかと——と、思うんですけれどもね……

『ねえ、旦那はん？』

まあこのイベントは『鬼の血』出生からのモノな訳でして。

それを金時君と一緒に袋叩きにして『ヨシ!!』と出来る程には、型月世界は甘くないらしく……ここからは。

丹念に育てて来て、今、万全になったホモ君と、ガス欠寸前バットコンディションたっぷり敗北寸前の酒？童子という、絶望的な一騎打ちになります。

第八十五章・裏：語らずとも

人って本当に吹っ飛ぶんだな……と。金時君が目の前で敵さんを吹き飛ばしていると思ふ。

いや、そりゃあマシユヤリリイの暴れっぷりを見なかったのかって話ではあるんだけど。それでも、こんな天高く飛んで行く哀れな黒い影法師を見ると……人間って小枝とか、塵とか、埃とかの親戚だった気がしてくる。

いやー……星空が綺麗だなー……ああ、黒い影が黒い夜空に滲んで見えなくなるな。わっはっはっはっ……あー、うん。えっと。イヤー力強さが大変ゴールデンなこと。

「っしやあ！ 大将、見えて来たぜ！」

「あ、うん。ありがとうございます……」

「どうした？ なんか元氣ねえぞ」

「いや何と違いますか……圧倒的な暴力の前で人はこうなるっていうか……うん」

「……？」

そして当人は一切自覚していないという。

いやー、まさか配置されていたシャドウサーヴァントの群れを、突撃しながら真っ向

から切り裂いてどんどん先に進んでいくとか乱世乱世とかそういう問題じゃないレベルの暴れっぷりだよ。

というか、体重を乗せた縦振りなら兎も角、軽くぶん回しただけの斧の一撃で、シャドウサーヴァントが受けるどころか押しつぶされてるんだもんなあ。

「っし……抜けたぞ！」

……とか思ってたらもう敵陣突破かよ。すっごい良いテンポだなあ。そして中心を割って最短距離で突っ切っていた筈なのに、シャドウサーヴァントの群が完全に崩壊しているんですけれども？

えっ、もしかして通常攻撃が全体攻撃だったりする？ このマツシヴメン。

いやそんなふざけてる場合じゃねえか。向こうの術師の最後の足掻き、シャドウサーヴァントを抜けて、ここに来たんだ。ここに居なけりや嘘だつて話だ、が。

「抜けた、は良いんだが……」

「……何処にもいねえな」

俺とアサシンが幾度も立った巨大な門の前。

昨日からの頼光の暴走でかなりボロボロになっているが、それでもなお『健在』と言える辺り、俺をこの中に閉じ込めようって言う強い意志を感じる。

そして……この門の前で、アサシンと別れた。そして。アイツが待っているとしたら

俺たちが最も戦ったここ以外は考えられない。

しかし、見回した限り、彼女の姿はない。正直、シャドウサーヴァントの死体を積み上げてまっている、くらいは想像していたのだが……それすらも無いという。

意を決し、大きく息を吸ってから——声を張り上げる。

「アサシン！ 来たぞ！ 何処だあ！」

「——（ハハ）やで。（ハハ）、（ハハ）」

その声は、拍子抜けするほどに気軽に上から降って来た。

上を見上げれば……屋根の端から垂れる白く細い足と、そして手に掲げた、その白い肌に見える朱色の盃。その中の酒をを飲み干して、風に袖を靡かせる——いなせで風雅、都会派な鬼が一匹。

居た。まるで昨日と変わらない、俺のサーヴァントの姿が。

「アサシン」

「待つとつたで？ 旦那はん……なーんや、ええオマケも連れて来てるみたいやけど」

「酒？……!!」

金時が、思わずと言った様子で一歩前に出た。

「なんや小僧、あの女に食われて消えたもんやと思てたけどなあ？ 生きてたん？」

「……その頼光サンの最後の送りもんつて奴だよ」

「ふうん。まあええわ。今日の相手はアンタとちやうの。飴ちゃんこうたるさかい、今日は早う帰り？」

「笑えねえ冗談だな、オイ」

さつきまでの暴れようを見ていただろうに。強い戦士ではなく、子供の様に扱うあたりは流石にアサシンと言える。とんでもない肝の据わりぶりだ。

金時も……そんな彼女の様子に馬鹿にされた、と思うでもなく、寧ろ落ち着いて返す辺りは、長い付き合いゆえだろうか。

「ええ？ 嫌やわあ、冗談ちやうんやけど」

「……大将置いて帰ると思うか？ 酒？、アンタを目の前に」

「いややわあ、皆してウチを怖い鬼みたいに言うて。今は普通の娘と変わらへんよ？」
その言葉に……ちら、と金時と視線を合わせる。

金時は俺の視線に。ほんの少しだけ、頷いて見せた。

「——そんな訳ねえだろ、ったく……あん？ いや、酒？、お前、ちよつと待て」

「ああ。旦那はんの魔力なら、もう貰つてへんよ。今、ここにおるのは……まあ、ただの意地みたいなもんやねえ？」

そう言つて……まるで、『ああ疲れた』とでも言いたげに、彼女はこてん、と屋根の上を体を横たえて見せる。恐らくは本当だろう。必要とあれば嘘もつくが、しかし今回は

かりは嘘を吐く理由が無い。

……何となく分かる。それを明かして誘っているのは、同情ではない。そんな真似をアサシンはしないだろうとは思いうし。流石に死線を越えて、協力した仲だ。短い間でもある程度はアイツは分かった。

「せやからね、ねえ……」

「待てアサシン」

それでも最後に一つ。確認しておきたい事はある。大事な事だ。アイツとここで分かれるのであれば、絶対に確認しておかないといけない。

「元マスターとしてののよしみだ。最後に聞かせろ。大切な事なんだ」

「ん？ どしたん？」

「お前と協力して俺を捕らえようとした術師の名前は、なんだ」

「……」

恐らくはリンボ……なんだろう。しかし確信を得ておかないといけない。こういう小さなところで間違いがあったら偉いことになってしまう。推理小説でよくある奴じゃないか小さなすれ違いから云々って言うのは。

だから大切な事なのは間違いいんだけども。

ものっそいアサシンに凄い残念そうな顔をされた。『やれやれ……』という声が聞こ

えてきそうな位に、凄いこう、アレな顔をされた。どうしたんだろうアサシン。俺ってなんか可笑しなこと言ったかな？

うーん……ダメだ、普通に黒幕の名前を聞いただけなのに。おかしなところは見当たらない気がする。

「……旦那はん、ウチに会いに来てくれたんよねえ」

「ああ。お前と決着付けに来た」

「それで最後がそれって。ちよつとあんまりやない？」

……ちらりと金時を見る。金時も首をかしげる。そつかあ、ゴールデンなお武家様でも分からんかあ。だったらしががない農民のオラに分かる訳ねえだなあ。

そんな顔で改めてアサシンを見つめ直すと、心底残念なモノを見るような顔をされてしまった。うーん哀れまれている気すらする。

「こういう時って、なんで裏切ったーとか。ウチはよう知らんけどそう言う湿っぽい話になるところちやうん？」

「えっ、そんな愁嘆場をお望み？」

いや、アサシンだったらそう言うのもお好みそうではあるんだけどもさ。

どうしような。だとしたら期待には応えられそうにもねえぞ……そう言う方向にもつていくのは、流石に興味ではないと言いますか。

大体。そんな事を聞く意味あるか？

「こつからはお前と俺のサシだからな。余計な言葉はいるか？ アサシン」

「——」
そう言つて——拳を構える。所詮素人のケンカ殺法。上手な戦い方なんざ出来ないだろう。山の獣相手に鍛えた反射神経がどれだけ役立つか……いや獣とは格の違つてんでもない怪物なんだけれども。

まあ……その驚いた顔を見るに、その始まりを切る舌戦においてなら、ラッキーパンチは上手く行つたらしいが。

「……やあねえ。氣い付いてたん？」

「そりやあなあ。マスターとサーヴァントだ。何時の間にか切れてたのは分かつた。それで改めてやろうと言つたんだから。会つて話の一つ……じゃ済まねえだろ。その辺り、妙に律儀じゃねえか、お前」

「そんなんちやうよ。ウチかて、一緒に血イ見た相手を、上からすり潰すんは雅とちやうなつて思つただけやし」

だが……うん。ダメだな。そのラッキーパンチで、余計なモンまで目覚めさせちまつたみたいだこりやあ。相手の弱体化とか望むべくもない。

「——金時、後ろは任せる。横やり入れさせてくれるなや」

「おうよ大将——『マスターとして、サーヴァントととのケリは自分で付ける』……ゴ
ルデンに言い切ったんだ、齒ア食いしばってやり遂げなあ！」

「いいわあ今日は……ええ日、ええ日——さて、もうええやる？ やりあおうやない。
ねえ、旦那はん……ウチ、もう我慢できそうにないわあ」

今までで、一番うれしそうに……牙を剥き出して笑つてるアサシンを見るに。

寧ろ、弱体化なんてしているようには全然見えない気がするんだよなあ。彼女の元マ
スターとしては……！

第八十六章：討鬼の巻・その一

今の酒呑童子について。

『先ずもって人間が戦えてしまっている時点で弱体化著しい』

カルデアにいるお歴々ならそう言うだろうと思う。まあ、サーヴァントと言う物を間近で見てる俺も、普通なら同じ判断を下すとは思う。双方の見解は一致、ならば弱体化してる、でQED……になる筈なのだが。

しかし、しかしである。

事実と言うのは現場に出なければ分からない事も多い。外から見ているだけでは分からない事も多くある。

例えば、キッチンなんかで感じる熱気。アレは焔が熱いものだから、顔の辺りが熱そうだなあ……とか思ったりしたのだが。あの熱は実はキッチン全体に広がっていて。文字通り料理をする時は、冬でも真夏並みの温度になる事も少なくない。

そんな事は常識だろうか？ そう思う人もいるだろうが……しかし、知識で聞いているだけでは、それがどれだけの事かを実感する事は難しい。

そんなキッチンの熱気のように……今、目の前のサーヴァントの勢いは、こうして肌に

感じる事ではか理解できないだろう。

「つあア！」

——地面を転がりながらも回避には成功、何とか体を起こす。

さつきまで俺が立っていた所に振り下ろされているのは、特大の両刃剣。酒呑童子が愛用している得物だ。もしあと一步でも退避が遅れていたら俺は、綺麗に真つ二つ、まるで料理人に捌かれた魚の如くにオロされていると思う。

背筋とか肝とか、色んなモンがまとめて冷えた。

「ああんもう、いけず。そおんなころころ、逃げへんでもええやん」

しかし剣を振り下ろした当人は、こっちの恐怖などまるで気にもせず、寧ろ不満すら漏らす始末。一応、元マスターなんだからもうちよつと気遣いをだな……と言おうとしから、そんな手合いではないと思ひ直してから、素直に文句をいう事にした。

「逃げるわあ!! こちとらステゴロだぞ! お前とは間合いが違うんだ間合いが!」

「ええやん、腕一本くらい賭けて、ウチにかたあいの、おくれやす……♪」

「おうもうちよつと待つてろや、五体満足でゲンコツくれてやるよ!!」

……取り敢えず、心からの文句を言った事でスツキリした。立ち上がり際、大きく呼吸を一つ。息を整え直して真つすぐと改めて前を向けば。

酒呑童子……アサシンが笑っていた。

サーヴァントが現界するのに必要不可欠な魔力供給は、もうされてない。例えるならばガス欠寸前のスーパーカー。燃費が最悪クラスの超高級パワフルマシンは、燃料が無ければ動ける訳がない筈……なのだが。

目の前の彼女は、何が楽しいのか、ゆらゆらと、舞踊ともステップともつかない足取りで揺れながら、満面の笑みを浮かべている——牙を見せつけて、ちよつとだけ眉をハの字にして、『嬉し過ぎて困ってしまう』とでも言いたげな、顔を。

「うふふ、萎えてへんみたいで安心したわあ。元気がいちばんやねえ」

「そりやあなあー！」

「ほな——次、いくで？」

「ああくそ……こいやあー！」

ぴよん、と。

彼女は跳ねた。その表情が、こけおどしではない事を、存分に見せつけるように。

剣について文句を言われたからか、今度は……敢えて此方に見せつけるかのように、片手を、その指先の爪を、大きく振り上げて、飛んでくる。下がるか、当たるか——もう一度撤退。転がるのではなく、一步飛び下がる……しかし、その一步は全力。

地面を蹴って、下がり——鼻先を掠める勢い、五つの矛が、横から空の場所を薙ぐ。

直撃していれば。俺の頭は、地面に叩きつけられたトマトよりも酷い有様になってい

たかもしれない。

「……やっぱりいけずやん？」

「あのなあ！ お前ほど頑丈じゃねえんだ！ それとも負けるつもりで猪みたいに突っ込んで欲しいか!？」

「それはつまらへんよ」

「そんな真顔で怖い顔すんなら初めから言うなアサシン!!」

余りの理不尽に叫びつつも、ある種の確信を得る。

……アサシンの動きは、確かに遅くなっているかもしれない。だがしかし。その動きにぎこちなさは何処にもない。

なんだったら、此方に向けて跳ねるその一瞬……軽く曲げた膝、地面を蹴った指先、そしてバレーボールでも打つかのような姿勢から、掲げられた指先に至るまで。無駄な力みは何処にも見えないし、しなやかに躍動し、綺麗に振り抜かれて。

そう、寧ろ頼光と戦っている時よりも、何処か活き活きとしている様にすら見えてしまふのだ。

「本当に楽しそうな事で……」

燃料不足で、足を動かすのにも一苦労、不利な状況で大分苦しんでいる……スーパーカーにサーヴアントを例えたのだから、そう思うのも全然不思議な事ではないのだが。

それが的外れに思う程、今も酒？は楽しそうに此方に歩みを進めている。

しやなり、シヤなりと……足先で土埃を払いながら、いつそ優雅と言えるほど、余力すらある様な歩き方で。

「——っ！」

そんなゆつたりした歩き方されたら——突つ込まざるを得ない。

額が焼けるように熱くなつたのを確認してから。

土を削るくらしいの気持ちで、思い切り大地を蹴り飛ばして、前へと飛び出した。ちよつと足が痛いくらいだが……思つた通り、あつという間に俺の体をアサシンの目の前に運んでくれて——

若干痛いくらいに固く、強く、五指を結んでげんこつを作ってから、腕を思いつきり背後に向けて、振りかぶる。弓に番えた矢を、思い切り、引き絞る。一発で撃ち抜く。額を殴る。角をへし折る。そのつもりで。

振り抜く。

「……そんな軽々受け止められるとショックなんだが」

「軽々、やなんて。今のウチがそんな大したことできる様にみえる？　ほおんま、手が痛

くて痛くて、たまらんわあ」

いや、振り抜いた気になつてた。だけだつたらしい。軽く手の甲で攻撃を受けてい

た。掌じゃない。普通、拳がめり込もうもんなら悶絶モノの方だ。だというのに、俺の拳がガツチリヒットしても、まるで痛そうにしてない。

まるで通じてやしない。弱体化してるとか何の冗談だろうと思う——

「——おっ!？」

「あん、惜しいわあ」

鳥肌が立つ。アサシンの鋭い蹴り足が、こめかみ狙いで飛んで来てた。こつちのパンチとは違って、直撃したら普通に致命傷になると思う。

……やっぱり、楽しそうに、そして伸びやかに飛んでくる。鈍くなった動きを、身体に満ちた活力が補っている。

「楽しいわい、アサシン!!」

「楽しいわあ……!」

振り抜いた蹴り足。背後を向いた、今が機会——そう思っていた所で、動きに違和感を覚えた。ただ後ろを向いた、と言うよりはこれは次につなぐための——

後ろ回し蹴りの姿勢。

噛み砕く位の勢いで、歯を食いしばって、力込めて背後へと——倒れ込む。

『跳ぶ』なんて言う上等な真似は出来ない。一步でも遅れたら引き絞られた一矢を回避するのが間に合わない!

びゆん

……背中から、受け身すら取らず思い切り叩きつけられて。若干顔が歪みそうになつたその直後に、前髪を揺らす程の風圧を伴つて、アサシンの蹴り足がまつすぐ顔面の目の前を通り過ぎて行つた。

アレが腹にめり込んでいたら痛いじゃ済まなかつただらうなあ！

「あつぶ——なあいつ!？」

一瞬、落ち着く間もなく全力で転がり——風圧に押し飛ばされて、転がるどころかさうに遠くに吹つ飛ばされた。酒?の踏みつけの風圧は、俺を軽く吹つ飛ばすくらいの勢いがあつて……それを俺の股間目掛けて振り下ろしてきやがりました。

「ひえっ……そこ狙うとか冗談だろ……?」

「アカンねえ……あかんわあ、滾つて、ついおいたしてもうた」

「おいたつてレベルの所業かコレ!？」

男としての象徴を破壊するおいたとは。許しがたい。

「せやけど旦那はんに着いた時から——ずうっと待つてたんやから」

「この時をかあ!？」

「せやで」

だとしたらとんでもないじゃじゃ馬としか言いようがない——と、飛び掛かつて振り

下ろされた大剣から、ギリギリの所で逃れてから、ああ言いようがないではなくじやじや馬だった、と改めて実感し。ようやく拳を構え直す事が出来た。

……まあ想像は、出来なくもない。というか納得はしてしまう。

『どうして楽しみにしていた』とか細かい理由に関して一旦、一旦何処かへ投げ捨てるとして。目の前のサーヴァントが、マスターと殴り合いをするのを楽しみにしていたという一点だけは。

あらゆる理屈をかなぐり捨てても、納得できてしまうのだ。

「……アサシンらしいなあ」

「ふふっ、せやろ？」

「でも、らしくない事もある」

……そうして納得してしまっただけからこそ。

それでも納得できない部分も見えてくる。

「はじめっからそうだったのか？」

「——ちやうねえ」

俺の問いに、アサシンは当然、とばかりに否と答えた。

俺の言う『はじめっから』というのはこの場合……『サーヴァントとして俺の側に付いた時』になる。一応の確認がてらに問うて見たが、やはりそうだろう。

こんな風に、殴り合う為に俺の味方に付いた……なら説明もつくが。何となく分かってた。そんな計画的にコイツが動いたかと言えば、それも想像がつかない。

アサシンは聡明だが、しかしそれを計画的に活かすのではなく、寧ろ刹那的に生きる際の『アドリブ』に故意的に使い潰している。

そう。俺に付いた時も……ふと『思いついたから』此方に付いた。そこまでは良い。面白そうだったから。そう思つて付いたのも、想像は付く。だけれども……そこまで凡そ想像が出来ても、納得が出来ない部分がある。

協力者として。つかず離れずの距離にいる事も出来た。だが——ほぼ形式だけとはいえアサシンは『俺の下に付く』事を良しとした。それも彼女が楽しそうだと思つたら、誰かに使役される不自由を楽しもうとするのも、ありえなくは無いかれど。

「なら——アサシン、どうして俺の『サーヴァント』になつたんだ」

そこだけが、今、一番しつくりこない。その問いに対し。

「……ふふふつ。さあて、ね？」

「教えちゃくれないのか？」

「んー……せやねえ」

「うち。それは、旦那はんに、考えてみて欲しいわあ……！」

裂けるような笑顔と共に、アサシンは此方に飛び掛かつて来た——！！

第八十六章：討鬼の巻・その二

どうしてアサシンが俺の『サーヴァント』になったのか？

思考するのは、マスターとして必要な事ではある。サーヴァントとの相互理解、彼らをより深く知る事は大切だ。

だがタイミングつてもんがある。

「——い・た・だ・き」

「っー」

少なくとも、こうして目の前に敵が襲い掛かって来てる……そんな状況に考えるべきじゃない。今、別に深く考えて思考を沈ませる必要は無い。

現にあと一步、思考に気を取られていたら、多分俺はざつくりと胸元辺りを複数の十字に挟られて、ダウンしていたに違いない。

そうしてみたアサシンの両手、広げられた掌に感じる一瞬の違和感。両手の爪で攻撃したなら、剣は何処に——

「——上かつー！」

嫌な予感に、さらにもう一步下がっておく。

直後……白銀の一閃が落ちて来て、俺が元居た場所に深く突き刺さった。

恐らくは、此方に襲い掛かる一瞬で放り投げて、爪を躲したところに自由落下で威力を増した剣がドスン、という算段だったか。

「つぶなあ!!」

「せえかい——よい、しよつ、と。よう分かったなあ、旦那はん」

……地面深く突き刺さった剣を軽々と引き抜き、肩に担いで見せた目の前のアサシンの笑みを見て、どうして別の事に思考を割こうなんざ、どうして考えられるか。

戦いに集中しないといけない。戦えるわけがない。気もそぞろなままだったら俺はコイツに縊り殺される。それは……今の一瞬で凡そ分かった。

だが。

「……つち」

どうしても、思考をすばつとやめられない。

思考してみる。アサシンは、態々『考えてみて欲しい』と言った。

想像してみれば、とはぐらかすのではなく、どうでも良い、と切り捨てるのではなく。態々、考えてみる、態々と口にしてきた。

……頼光との戦いで、心を攻めて戦いを有利に進めた。悪辣なやり方をも当然の如く熟すアサシんだ。これも、無駄に考えさせてその間隙を突く。そんな罠かもしれない。

寧ろそれを警戒して、戦いに集中するのが一番だろう。

「でもよお………」

アサシンは、自分から魔力供給を打ち切つて。こうして態々、致命的なハンデを背負つて戦つてゐる。別に、俺から魔力を吸い続けることだつて出来た筈だ。契約の破棄の仕方なんざ、俺は知らないのだから。

それでも尚……アサシンが自ら重たい枷を負つたのは。

奴の俺への義理立てだと、思いたい。

悪鬼羅刹だ。文字通り、人とは相いれない存在の筈だ。だけど、俺は知つてゐる。奴は人の価値観とは違う法則の中に生きてゐる。それでも——義理を知つてゐる。情を知つてゐる。心も無い怪物では、無い。

触れ合つて、それを知つちまつた。

「だからなあ………」

知つて。それを見て見ぬふりをして、アサシンを悪者扱いをして。

もしそれで、アサシンと戦つて、殴り勝てたとして。きつとその事は、一生喉に突き刺さつたままになる。

ただでさえ、クソみたいな思い出を背負つてるんだ……これ以上、胸にチクリと刺さる様な思い出は残したくない、せめて——

「……」

「なあに？ こっち見て」

——ああ、せめて。

目の前で、自分と共に戦ったサーヴァントとは……後腐れの無い、すつきりとした決着をつけたいから。

そもそも、俺がこうしてここに立っているのも、最後まで自分のサーヴァントと向き合おうと思ったからだ。ここで逃げ出して何がアサシンのマスターかって奴だ。だつたらもう最後まで我が儘にやってやろうじゃねえか。

視線を真つすぐ前に向ける。

俺が思考を回していても尚、多分、アサシンは欠片も手加減なんてしてくれないだろう。そんなのは分かっている。抵抗しないのは論外だ。だがそんな合理的な考えだけで、人理修復やってきた訳じゃない。

「——いいや、覚悟完了したただけだ。続けるぞ」

「へえ？」

少し、腰を落として、ボクシングみたいに両の拳を、構える。

だからって何もなくて考え込まないのは論外なんで。全力を注ぐつもりではあるけれども。しかし、頭の中で別の事を考えながらアサシンと殴り合いとか……普通に死に

そうだなあ。

ああクソ、藤丸の事『お人よしだなあ』とか考えてたけど、俺も大概、賢い選択は出来ない奴なんだなあ。うん。

「ふふ……旦那はん、本当に律儀やねえ」

一つ溜息付いたその直後、少し揶揄う様にアサシンは笑つて。

まるで、内面で必死にもがき苦しんでいる俺の内心をあつさりで見透かしたような事を言われ、思わず顔を赤くしてしまふ。古い時代を生きた鬼のお嬢さんには、若い青年の悩める心なんてお見通しつてか。泣くぞしまいにや。

「旦那はんがそんなにノつてくれるなら、ウチも手は抜かんようにせんとなあ？」

「……出来りやあ考え事に集中させて欲しいけど」

「そんな旦那はんはんに失礼やん、ねえ？」

「ねえじゃねえ。なんでこんな時ばかり律義かなあ!？」

まあそう言うタイプだつて知つてるけどさ。

一瞬、そう思つて視線を合わせて——既に、右の手が顔の傍に持ち上げられているのが見えた。

「——っ！」

その直後、まっすぐ伸びてすつ飛んでくるくる手刀から、先んじてしゃがみこんで転

がりながら逃れて……アサシンから距離を取った。

首狙い。なんだったらさつきより殺意が増している気がする。

んで。ちら、とアサシンの方を確認してみる。なんだらう。にこにこしてる。戦場に似合わない位イイ顔してる。殺意マシマシの一撃とまあ相反する顔をしている。

テンション上がったら『よし、ヤっちゃお♪』になる辺り、絶好調だなホント。

……冷静に考えてみれば。ちよつと気が変わっていけば、一緒にいる時だつて、こうなる可能性は全然あつた訳だ。そう考えると……少し、光明が見えてくる気がする。

「待つてたんなら、もうちよつと時間かけて楽しもうとかは無い訳かー」

「うち、焦らすのも好きやけど……焦らされるのは、嫌やし？」

「ああ素直で大変宜しい！」

アサシンが心変わりを起こさなかつたとすれば、それはそれだけのとつかかりがあつて彼女の心を動かさなかつた、という事ではないだらうか……都合の良いモノの考え方をしているだらうか。鬼と人との心の機微はきつと違うというのに。

愛しいからこそ殺す。楽しいからこそ打ち壊す。恋しているからこそ喰らう。

そんな倫理が成り立つのが鬼だ。だけど——アサシンは、そこに至る過程を楽しむ事が出来るタイプではある、と言うのは分かっている。

コレが最終的な到着地点として。そこに至るまでの過程も楽しんでいた、と仮定する

なら。アサシンは、そこを俺に言わせたいのだろう。

言わせたい事、俺を背後から討たなかっただけの理由……それは、そう遠くはない気がするのだ。そして、過程を十分に楽しんだからこそ。彼女は俺に、殊更楽しそうに牙をむいて来た。

「……一番の違いは、コレだよなあ」

そう言いながら、額を撫でると——ばちり、と指先に走る、軽い痺れ。

稲妻が如き、エネルギーのよって構成された、紛れもない『角』

アサシンと組んでいた時の違いと言え。間違はなく、今、俺の額によき、と生えている『コレ』だろう。自分の血の中に流れている、鬼の血を再び目覚めさせて、俺はアサシンと向き合っている。

じゃあアサシンは——コレを待っていたのか？

「……違う」

自然と口から漏れていた。

もしこれが見たかっただけなら。あの時、頼光と戦った後で、即座に戦闘に入っても良かったはずだ。一旦、仕切り直さなくても良かった。

……アサシンは、一度仕切り直したこの状況を、『待っていた』んだ。じゃあ、どうして仕切り直す必要があったのか。

不思議な時間だった。

さっきの一撃から逃れた俺を、アサシンはただ見つめていた。視線が間違はなく交差して、お互いにはつけよいで飛び掛かれる、そんな絶妙な間合いなのに。

薄水でかためられたみたいに。お互いに視線を交わして動かない。

どうして更に仕掛けてこないのか。そんな当然な疑問をかなぐり捨て、勝負に不必要な思考がよく回る。

仕切り直す価値は、有ったかもしれない。

だってアサシンは、こんなにも自由奔放で、強くて、美しい鬼なのだ。

こんなにも綺麗な存在と、誰にも邪魔されず、自分と彼女の二人きり、一騎打ちで戦えるというのであれば――

「……あれ」

そこで、回る頭が、止まる。

そもそも、前提として。彼女は鬼なのだ。自分の血の中に流れる……その大本と同じ存在なんだ。今自分は。

どうしてこんなに、彼女と穏やかに向き合えているのか？

「……これ、は」

一つ。何か大切なピースを見つけ出せた気がした。

アサシンが敵に回った時、俺は……もつと、もつと憎悪の類を剥き出しで、彼女と向き合っても、おかしくない、筈だ。自分の血への恨みが、身勝手に、八つ当たり気味に暴れ出して……悪意と怒りに塗れて突撃しても。全然。

でも、今俺は、寧ろその事について、穏やかに冷静に考えられている。

『鬼』と言う存在を、警戒していい訳じゃない。

彼らの生き方は人とは違う、と何度も言い聞かせている、けど。

「——旦那はん、うちの事、好きなんやねえ」

視線の先で、アサシンがクスクスと笑う。

俺は、どうやら——鬼と言う存在が、そこまで嫌いではない様なのだつた。

第八十六章：討鬼の巻・その三

鬼と言う物に、もつと爆発的な感情を抱いている、と思っていた。

だけど……思えば、最初の時点で『アサシン』という鬼の少女が自分のサーヴァントとして一緒に戦っていた、と言う偽の記憶を受け入れていたのだから、そんなモノは存在していなかったんだ。

「……好きかどうかは、分からないけどな」

「そうなん？　うちの事、初めっからずっと見てきたさかい、てつきり」

俺の言葉に、アサシンはその事を『分かっていた』かのように笑っていた。

ずっと。俺とマスターとして契約してから、ちよつとしてからか。それとも、事情を知っていたのだから、もう初めから彼女から見抜かれていたのか。今の言葉と共に、俺に笑顔を見せたのは。直接は言わないその代わり、言外に……

不思議な話だ。

自分の血を恐れ、忌み嫌い……骨の髄どころか、脳の真ん中にまで染みついて、焼き付いた、暗い感情は確かにあった。それは……この前、嫌って程見せつけられた。

忘れてスッキリした、なんて思いこんでいたけれど……忘れる事なんざ出来ない。

でも、酒？童子……いや、アサシンという『本物の鬼』を見て、それを爆発させたことは全然なかったし。寧ろ、自分で爆発させようにも、そんな火種すらなかったというのが本音だ。

『嫌で嫌でたまらんのとちやう？　そこはよう知らんけど……まあ、あの女なら、自分の中の『鬼』を殺そうと位はしても不思議やないなあ？』

あの時。

酒？と、頼光さんの事を話していて。落ち込んで、辛くて……正直、若干泣き出した気持ちすらあった。だが。

自分の中に流れる血と、同種のモノの話をしているというのに。煮え滾る様な激情に捉われる事は、まるでなかった。

だが……それらよりも、おかしかったのは。それを『不思議』と思わなかった事だ。そして、自分の中で納得してしまっていた事だ。

自分の中で、最も重要な位置にあったはずの、『鬼の血』というモノに、こだわっていなかったことに何処かで気が付いたことだ。

……目の前に地獄を生んだのは、その血のせいだったはずだ。鬼と言う物が俺達に仕込んでくれた悪意のせいだった。それが、俺達を狂わせた。

けれど。そう思えないなら、何が違う。俺は何を分かっていた。

「……ああ、そうか」

一步、前に踏み出す。一つ、結論が出た。

俺がどうして、こんなに鬼と言うモノを忌避したり、嫌っていなかったのか。

「俺は——血に宿る鬼よりも悍ましいモノを知っていたんだ」

それが、あの悲劇を生んだと知っていた。

歪んでいったのは血に宿った魔性のせいじゃない。長い時間をかけて、一族が『自分達』で少しずつ歪めていった。自分達の在り方を。

俺たちの始まりは悪意に塗れたような生き方でも、その後、どうするかは自分達で決められた。それを——一族を『浄化』して貰って罪を清算するなんていう、イカれた方向にもっていったのはあいつ等だった。

思い出す度に、顔が煮えるように熱く、胸がむかむかと気持ち悪くなっていく。一つ、口を開く毎に……酷く感情が荒れ狂う。

クソみたいな記憶と向き合って。一つだけ、分かって良かった事を、見つけられた。自分が『何を』憎んでいるのか、今ここで、明確に分かった事——

「アンタ達を憎める訳がなかった……!」

心が、叫ぶそのままに。真つすぐと突き出した拳は、やはり酒? 童子の掌に柔らかく包まれて、受けられた。

「……俺はあの人に同情できなかった。同じ立場でも、明確に違いがあったから」
「ふうん？」

「あの人は、自分の中の血に本当に苦しめられてきた……俺達は違う！ 血のせいで苦しんだんじゃない、自分たち自身で、喜んで自分の首を絞めたんだ!!」

外にも出ないで、山の中でぬくぬくと引きこもって。自分達が楽になる道を、気の狂うような年月、まるで昆虫みたいに機械的に這い進んできた。自分達の血と向き合うってことをして来なかった！

そんな初めから諦めていたような奴らに、誰が同情して欲しいだろうか。

「アンタらは、自分達の生を必死に生きてる。俺達は……何時か訪れる『救い』とやらに目を潰されて、もつと他に目を向ける事が出来なかった。結果が、あのザマだ」

「……」

「俺達は、鬼よりも悍ましいナニカに成り下がっていた。だから——」

……アサシンを、ずっと傍で見ている。

恐ろしい生き物だと思った。とんでもない怪物だと思った。畏怖した。

でも。ただ恐れる訳じゃない。俺と一緒に居た時に、くるくる、と様々表情を、心の機微を、見せてくれた彼女を見ていた。

万華鏡の様に、なんて。本当に綺麗な生き物じゃないと、そんな『誉め言葉』なんて

思い浮かばない。金時の雷を奪った頼光に怒った彼女に、『鬼として人と寄り添う』姿を垣間見た。イイ女だと思った。

仮初のサーヴァントでも、記憶を失っていても、それでも最後まで『信じる』事が出来るようになる位に、何時の間にか惹かれていた。

「——余計に、お前の事を、『美しい生き物』だと思った」

口から、言葉が零れてしまう。

「自分達と、元は同じなのに。こんなにも『自由』に生きてる。自分勝手に生きて、警戒させて、恐れさせて、見惚れさせて、熱くさせて……ああ、クソっ。もし一族がアンタのような鬼を見たのなら！ そうなるのも納得できてしまった！ 俺も、惹かれてたから！」

本当は昔から分かっていたんだ。

ゴルゴーンさんだって、大本は俺の血に流れる『魔』と似たような存在だ。けどそれを特別警戒した事は無かったし……冷静に受け止めることが出来ていた。そうある事が出来た。悪意って言うのは、血や肉に宿るんじゃない。生き方に宿るんだって。

だったら、憎まざとも、アサシンを意識していたのか。血の大本だと、何故殊更に、そう思っていたのか。思ってもいない事で、無理矢理に警戒なんざしていたのか。

かつての記憶が、警鐘を鳴らしてたんだ。無意識のサインとして。

憎むどころか。心の奥底で、コイツに惹かれ始めていたから。このままじゃ、俺も同じようになるかもしれない、と何処かで恐れたから！

「——自分が、アレだけ、忌避した生き方に……ああ、信じらんねえよ、ほんのちよつとだけ、共感しそうになったんだ！ お前を、見てただけでだ！」

ほんの短い間に、どうしようもなく惹かれて、共に戦うサーヴァントとして背中を預けられるようになった。足手まといになるのは嫌だと、強く願うようにもなっていた。アレだけ嫌だと思っていた血の力だつて、あつさりとお前とアサシンの言葉で、扱う気になつちまつた……！

血がそうさせたんじゃない。

人の所為にするようではあるが……アサシンが、狂わせてくれやがった。

「お前にだつたら——」

「——殺されても、良い？」

歯ぎしりが止まらない。

何時しか、そう思ってしまった。別に、殺されたい訳じゃない。でも、アサシンが裏切つて、俺と戦いたいつてなつて——それでも、俺が自ら、拳を使つて戦おうと思つたのは。自分にリスクを賭けてでも、戦いたいと思つたのは。

コイツとは、自分で決着をつけたいと思つた。そしてその時、負ける想像をしなかつ

た訳じゃない。自分の心臓を抉られる事を想像しなかった訳じゃない。でも、そんな想像が思い浮かんでも尚。

『ああ、それでも別に構わねえかなあ』

—と思っていたから—

「……アイツらの思想に同調なんざ出来る訳がない。でも、そうなってしまった事に、理解出来ちまった。ああ、お前みたいな奴を見たのなら。そんな風に、狂ってしまうのもきつと、あり得ない事じゃないって」

「旦那はんは、ウチに狂いたいん？」

「——いいや、そんな事はない」

だから、コイツの目の前に立った。

殺されても構わない、っていうのは……自分なりの覚悟だった。アサシンと、真っ向から向き合つて、恥じないマスターとして、最後まで居たかった。その思いだけは、嘘じゃないから。

その為に、例え世界を救うために戦う定めを背負っていたとしても。否、それだけの重みのある命だからこそ、賭けの代金として張るのは、悪くないと。

「でも、本当にそう思っていると、何故言える。もう狂っていないと……」

でも、普通じゃない。その思考は。自分の命を当たり前みたいに賭けて、強大な敵に

対し身一つで挑む。あの一族と、どれほど違う？ イカれ方だけなら、恐らくはどっこいだろうに、それでも尚、俺が狂っていないと、誰が保証してくれる。

「アンタらは、目の前に立とうと足掻いた。その後は——殺される事を望んだ」
酷く。似合わない、優しげな声が聞こえた。

握られた拳に、ぎゅう、と少しだけ力が込められたのを感じた。
顔を上げる。

口を、少し緩めて。果ての見えない高みから見下ろすように。禁忌に怪しく誘うように。蠢き、藻掻くモノに。地獄への片道切符を、そつと手渡すように……

彼女は、心奪われる程に綺麗な顔で、笑っていた。

「——旦那はんは、自分で目の前に立った。殺される覚悟と、戦う意思を持った」
「アサシン？」

「うちは、旦那はんの覚悟の方が、好きやねえ。自分の思い一つで、自分の命一つ、当然に賭ける、そんな自分勝手な『鬼』みたいな生き方——」

鬼の様な、生き方。

自分勝手に。

身勝手に振舞う。

ふと思う。

特異点Fでセイバーの前に立った時、セプテムでローマで民衆と相対した時、オケアノスでイアソンと戦った時……俺は酷く、我が儘な理由で、血の中の魔を隆起させて戦ってきた。

自分が気に入らないのだから、と。

「うちに惹かれてる？　せやったら——うちみたく振舞つてみるのも、ええんちゃう？」
アサシンの様に。自分の好き勝手に。

自分が最も嫌なモノには、なりたくない。惹かれて、狂つて、終わつて、そんなモノにはなりたくない——

だったら。その先へ。

惹かれたなら、惹かれた相手の様になればいい。誇り高く、自分のルールで、好き勝手に出来るように、嘗ての悪夢からも、自分の血に流れる悪意からも、全てを振り切つて一人で立てるように。

惹かれて、その後どうなるかは、自分次第だ。少しでもマシな自分になると自分の口で言つたのは、一体何処のどいつだ。

歯車がかみ合う音がする。

「お前の様に——」

そうだ。

酒？童子——アサシンの様に。

我らが血に 鬼の血が流れているからこそ 強く在る

誰にも 何物にも 負けずに ただ一人でも強く立つのだ

「鬼の如く——」

どくん

どくん

どくん

脈打っている。俺の血の中の何かが。沸き立つ。燃え立つ。煮え立つ。

『負』の熱じゃない。眠っていたモノが、今まで表に出なかつたモノが、本来そうあるべきだったモノが、目を覚ました——『生』の熱だ。

ばかり、ばかりと額の角が、殊更に弾けだす。嬉しそうに。

ああ、今。枷は外れた。

恐れは、ある。あるけれど——それでも尚。その先に、まだマシな自分があるのなら。ならもう一歩だけ、先へと行くべきだろうよ。

「——そう。そうやで。上手、上手……」

拳から、掌が離れる。

アサシンが、一步、二歩、三歩と離れて——追うように、一步を踏み出した。

互いに、拳も爪も、さらに一步踏み込めば、恐らくは容易に当たる距離だ。そして勝負仕切り直すのなら——きつと、最も丁度いい距離だと思う。

ニヤリと笑おうとして、ガチリと何かが、下の歯と噛み合う音がする。

舌で、軽く舐めるように確認すると……上の歯の一本が、鋭く、尖って伸びていた。ちよつとした痛みに、少し笑ってしまふ。まるでコレは。

「牙、か。いよいよもつて鬼の如しだなあ、ええ？」

ちらり、と手を眺める。変質した爪は——アサシンの物よりも、些かと分厚く、そして尖つてはいないが……しかし、鉋の如く、鈍くも鋭い形をしている。人の爪を『鬼』の如く変質させたなら、まあこうもなるだろうか。

「——ええやん。鬼と鬼との喰い合いも、乙なもんやわあ」

「悪食がよお。オツケー。情けない所見せた詫びだ、最後まで付き合つてやる」
まあでも。

こんな姿に『生る』のも。存外、悪くないもんじやないか。

第八十六章：討鬼の巻・その四

この血とは、おさらばできない。

そんな事を何度も思い知らされるくらいに、俺は一族の血を忌み嫌っている。だからずっと——その衝動に身を任せる、なんて想像をした事も無かった。

だからきつと、悪い鬼さんに導かれなきや、こうはなれなかった。

「おうー！」

「さあー！」

拳が、勝手に走る。

乗りこなせない程の暴力的な衝動が、土砂流みたくあらゆるものを押し流さんと、全身が躍動する——アサシント、互いの拳を真正面からぶつけ合う。

サーヴァント、しかも本物の魔性の鬼を相手に、しかしそれでも競り負けない。

身体の中で、脈動する血が、勝手に体を動かしている様な気がしている。

自分でやっていたならよかった。だが殆ど今、鼓動のの赴くままに、自分は体を動かしているだけで……ほぼ自分の意思は介在していない。

サーフィンで波の勢いのままに押し流されて、降りる事も止まる事も出来ない所まで

来てしまっている様な感じがする。

——正直に言おう、怖いくらいだ。

顔が強張る。

制御なんざ、土台無理だ。

岩すら押し流す様な高波、天を焼き尽くす様な噴火、大地を割る程の地震、木々を高々と吹っ飛ばす竜巻……大自然のとんでもないエネルギーを、制御しようなんて誰が考える？

この奥底から湧いて来る力は、それを思わせる。

コレが一族が何百年も伝えてきた『力』の大本……積み上げてきた年月故か、それとも元からこれくらいヤバかったのか、もしかすれば目の前の鬼に血が反応しているのかもしれない。

兎も角これは『発動』させたなんて口が裂けても言えん。

間違いなく『暴走』している。

「……………!!」

……否、怯えるな。

だったら今は、敢えてその暴れる河の勢いに乗ってしまえばいい。流されて、その暴威を体に焼きつけろ。目の前にいる鬼の大先輩に胸を借りるつもりで。

制御は出来なくても、更に暴走させるくらいだったら……

「つだらあ!!」

「つ……ふ、ふ、ふ♪」

……なんとか、出来る。

無理矢理に、アサシンの拳を、押し返すことが出来た。

勝手に動いた腕が、ビリビリと痺れている。暴走した力に振り回されてるのを、肉体からものはつきりと感じている。

だが、それを奥歯かみ砕く勢いで……体を締めて、無視して。

飛び掛かる。勢いそのまま。上から踏みつぶす勢いで、蹴たぐる。前蹴りともいえな
いめちやくちやな姿勢。でも直撃。防いだ相手の腕諸共に、太ももから、爪先に向けて
力を込めて、力強く、踏みにじって……!

後ろに、思い切り——押し込む!

「——っ!」

伸ばし切った足の先で、アサシンが、後ろに『吹き飛んだ』。

殴り飛ばして、ダメージが入った、とか。横から差し込む様な奇襲をして、体勢を崩
したとか、そんなんじゃない。今、俺は初めて——『力』で相手を無理矢理弾き飛ばす
みたいなの、『化け物染みた真似』をしたのだ。

——手応えが、違う。

使いこなそうとしていた時とは、全然。

足先に感じる熱に……肺の奥底からの荒い呼吸が、一つ、勝手に口から漏れ出していった。

宙で、くるりと体勢を立て直し、地面に降り立ったアサシンが。喜ぶように短く、呼吸を吐き出した。

「ああんっ……んもう、女を毬みたいに蹴っ飛ばすやなんて、いけずう……♪」
「うるせえっ！　そう思ってんなら笑うな！」

良くない。良くない事だ。自重するべきだ、とかつての俺がブレーキをかけようとしてくる。それ位に——今、俺は獰猛な笑みを浮かべている。

ノってる。今、人生で一番俺は……ノりにノっている。初めて、この力を目覚めさせたあの時？　特異点で力を目覚めさせた時？　普通に使っていた時——否、否、否！

何れよりも、今、振り回されるままに暴れれば、そのまま身体が奔る！

意識は制御しようとしていない。だけど、礼装が勝手にある程度抑えてくれている。ロマニとダ・ヴィンチちゃんには、死ぬほど感謝しないといけない——と、スーツの襟をびしりと伸ばしてキめてみた。

「やっばそれ、『抑え』やねえ。よう出来る」

「カルデアの責任者様直々の設計だ……感謝しかねえよ」

ベキリ、と。

言葉と共に。アサシンが、聞こえるように指を鳴らして応える。童女の様な顔が、裂けるような口の笑みに、凄惨に彩られ——そこに、『鬼』が宿るのが見えた。

「ええよ、最後まで付き合つたる……こうなるのを、待つてたんやからなあ！」

「上等、敵に塩送つた事、後悔させてやるつてんだ！」

アサシンは、魔力切れとなれば消滅は免れない……根性で持たせている、という言葉が本当なのは分かるが、それも何処まで続くか——時間はこつちの味方になる。

だが、それでも出力が上なのは、向こうだ。ガス欠寸前、消滅寸前、力をセーブして直ぐに消滅しない様に『戦闘続行』していても。向こうは、最高格の神秘の一角。こつちが抑えていたモノを解放した程度で、並べる訳がない。

だがそれでも、手を伸ばせば届く距離なのは、間違いない——

「——呆けててええん？」

はつとして、視線を少し上に。

一瞬、反応が遅れて。

目の前にアサシンが既に跳んできている。彼女の爪の射程だった。しくじった。下がっても、横から避けようにも……何方にせよ、間に合わない。

僅かな遅れが致命打になった。故に、その遅れた一瞬は……

「——ぬがあっ!!」

「っ?」

逆に前へと突進する事で無理矢理に、埋める。

ただ突撃するだけじゃ間に合わない。兎も角最短の距離を全力で駆けないと、間に合わないのだ。故に……何処に向けて突っ込むか。飛び込んでくるアサシンに最短距離、真つすぐに突っ込むのであれば。必然と——

「んむっ……!!」

「あんっ♡」

アサシンの、胸板に向けて。顔から突っ込んで。

むに、と柔らかい感触が顔を覆った。そこまで大きなサイズではないが、でもちゃんとするのは分かるくらいの——いやそうじゃねえ、無理な突進ではあったが、しかしそれでも空中で踏ん張りの利かないアサシンの体勢を崩す事くらいは出来た。

煩惱を振り払って、そのまま、空いている両手を肩にかけて——

「よいっしよお!!」

「っ!」

地面に、押し倒す。体重が軽く、小柄なアサシン相手だからこそその、力業だ。

馬乗り……の姿勢になつてゐる余裕はない。そのまま拳を握りしめ、この不完全なマウントポジションのまま。アサシンの全身を、タコ殴りにするつもりで、上に向けて振り上げ――

――それより先に。俺の胴に、細い両腕が回り、絡みつく。

「情熱的やねえ、嫌いやないわあ」

「っ!?!」

不安定な体勢だつたのが災いして、そのまま彼女の胸元に抱きすくめられてしまう。ラッキー等と、思春期かましている余裕はない。考えても見ろ、彼女の膂力は、成人男性など及びもつかない程の怪力。この姿勢は――

「抱きしめて、ええこ、ええこ、してあげようなあ……!?!」

ぎり ぎりぎりぎりぎり――!

「ぐうあつ……!?!」

締め上げられる。胴体を丸ごと。しまった。勝負を焦つた。いくらあの状況から脱出するためとはいえ、アサシンの懐に飛び込むんざ――こつちは、ある程度血を目覚めさせて頑丈になつてゐるにしたつて、鬼の怪力に耐えられる程じゃないつてのに!

押しつぶされ。声すら漏らせない激痛と共に、喉の奥が少し――錆臭くなつてくる。内臓にダメージが出たのかも、判断は利かない。

しくじった……だが、致命打じゃない。もう助からない程の絶望的な状況じゃない。
「ぬぐ……おとおおおおっ！」

「おおっ？」

振り上げていた手を、そのまま地面に叩きつけ——もう片方の手も突いてから、勢いつけて、起き上がる。アサシンを抱き着かせたままで。

既に口の中まで錆の匂いは上り切っている。ぬるりと、齒に絡みつく生臭い味が気持ち悪い。ダメージは深い、それでも——！

痛みを無視しながら、更に体を暴れさせる。体から、股間部へ、そして足へ、更に足先へと——迸る力が、思いっきり地面を蹴り飛ばし。俺とアサシンを、天へと運ぶ推進力となる。

しかしただ飛ぶだけで、振り切れるか？ この鬼を相手に？

否、ならば——！！

「はっ……な、んや、これっ……!?!」

「うおおおおあああああつ?!」

狂ったように。回る。くるくる、と飛ぶ力を敢えて偏らせる。制御なんてもんじゃない、暴走する方向を決める位の事しか出来ない。まるで独楽の如く、全身が遠心力で引き千切れるくらいの勢いで——前方に向けて加速する。

そうならば、どうなる？

そのままの勢いで、制御もしないで、スピンしながらの前方へのジャンプ。着地なんて、マトモに――

ごしやつ

「ぐ がっ」

「ぐぎっ……い！」

二人して、回った速度、跳躍の勢い、落下速度……全ての勢いを、全身で享受する事になる。俺を逃すまいとしつかり捕らえていたアサシンは、一步だけ、退避する為の反応が間に合わない。

二人して、竜巻に煽られて、上空から降って来たごみの様に、地面に叩きつけられて。

「ああ あああああああっ!!」

ぐちやぐちやに絡まりながら、二人して盛大に地面を転がっていつてる……と思う。

痛いし、目が回るし、ズザザザって音で耳はいっぱいで。自分が、どうなってるかは残念ながら、さっぱり分からん。

――それでも。

胴体の締め付けられる感触がなくなったのだけは、何とか知覚出来た。

「が あああ……っ!!」

べきいつ

地面に、手を叩きつけて。

無理矢理に、起き上がった。否、身体を跳ねさせて、空中で。なんとか普通に受け身をとつて、転がって。そこから、立ち上がる。

いやな音がした、が……ちらりと見てみた腕は、折れてはいない。

全身、ヒリヒリと熱いし、ずきずき頭に響く位に痛いし。大分自滅したが、しかし。それでも何とか——引つpegがした。

「——」
顔を、起こす。

「——調子、のんなや」

血に顔を濡らし、牙を覗かせて——笑う鬼が、目の前まですつ飛んで来ていた。

「~~~~~っ!!」

体勢なんて立て直せない。ただ真つ直ぐ、前に飛び出して。

体が、ぐるん、と回った。

今度は、前にではなく、右向きに。物凄い衝撃と共に——アサシンに、蹴つ飛ばされた。多分だが、視界に、ちらりと足が見えていた。

でも……吹っ飛ばされたわけじゃない。

めちやくちやな姿勢だったのが、幸いした。踏ん張ることも出来ない体が、まるで風車みたいにくるりと、その場で回って……力を、受け流す形になった。

「ほうら、もう一発！」

……が、次の一発で、普通にぶん殴られて、今度はこつちが吹っ飛ばされた。

胸板が、軋む。とんでもないパワー……ハンマーでぶん殴られたかと思った。鬼らしいパワフルな拳だ。

背中から、叩きつけられて、僅かな間、地面を滑って。

から、なんとかくるりと後転の要領で、起き上がり——そこで。

拳を、腰に貯める。

「……アサ、シイン……！」

次が来る。容赦はない。俺はサーヴァントと違って、人間だ。何発もサーヴァントの攻撃喰らって、持つ訳ない。だから——この一発で、終わらせるつもりで。

めき、めき、と腕から。なつちやいけない音がする。コレを振り切ったら、多分、本当に俺の腕は使い物にならなくなってしまっただろう。

それでも。

霞む視界の中に、艶やかな振袖を纏う、美しい鬼の姿が、浮かぶ。

晴れた蒼天の元、軽やかな足取りで地面を駆けて、楽しそうにこつちに爪を向ける。

彼女の姿が。

「……ああ、分かつてるよ」

面白そうなおもちやを見つけて。折角だし、本気で食い合いたいな、って思つて。態々サーヴァントなんて存在になつて——近い距離だからこそ、擦つて、導いて、暴くのも、容易かつた。俺が、こうなるように仕向けるのも。

そんな遠回りも……楽しかつたんだろうな。お前の性格なら。

「そんな、性格の悪さもよオ!!」

考えさせて、目を向けさせて、吹っ切らせて。その上で——食らい潰す。本当に、良い女じゃねえか。アサシン。ああいいさ。そんな好き勝手なお前を相棒だと信じた、俺の負けだ。だから……!!

お前がそうするように、最後まで、付き合つてやるさ。

「——」
「……っ!!」

拳を、腰を、全身を。捻つて。

真つすぐに。最短距離に拳を伸ばす。

愚直にまつすぐ伸ばした拳なんて、弾かれるかもしれない。でも。残念ながらそれ以外やる余裕なんて残つてないから。

せて、まだまだ湧き上がる力で、ボロボロの体を、ぶっ壊す勢いで——!!

ずん

僅かに。

拳の先が、何かにめり込む感覚だけが、した。

第八十六章：討鬼の巻・その五

打ち抜いた、感触があつた。

息が荒い。結果を見る事も出来ないままに——とさり、と僅かな音と共に、何かが倒れるような音が、耳に聞こえる。

それがどういふ意味かをしっかりと考える間もなく。

足から力が抜けて、地面に尻餅突いて崩れ落ち。直後全身が、どう、と、まるで鉛の如く重くなつた気がして。

そのまま、自分も——同じように、青天向いて倒れているアサシンの様に、大の字になつて地面に転がつた。

もう限界だつた。

「——ああ」

勝つた。

勝つた。

勝つたかもしれない……いや、ほぼ負けかもしれない。正直、抱きつかれて締め上げられた時点で大分体はボロボロになっていた。正直、大分息も苦しくなつてきている。

しかもその上で、テンションが上がってアサシンと殆ど真正面から殴り合いをしてしまったという。立てないのは痛いのと疲れたのと関節がボロボロなのと……まあ全部だ。

ちよつとアルミ板を巻いたレベルで頑丈になったからって、重量級エンジン積んでの総金属製のスーパーカーと正面衝突なんぞしようもんならそりやあ重症も必須だよ、という話で。はい。

「……ちつたあ手加減しろよ」

「無理やねえ」

「そうかい」

思わず口を突いて出た愚痴は、しかし我がサーヴァント様には通じないらしい。というかまだ喋れるのかアサシン。手応えあつた、喋ることも出来ない位に、砕いた、と思つていただけれども。

流石は鬼の首魁、酒呑童子と言うべきか。まだ喋るだけの余力を残しているとは。流石に、立ち上がって来る様子はないが。

「——ああ、負けや負け……悪くないなあ、ここまで盛大に負けたら」

そんなアサシンが、ポツリとつぶやいた声が。二人して倒れ伏した俺達の間で、酷くハッキリと聞こえた。

「……そうかい」

「まあ、元気なまんま暴れられたら、それがよかつたんやけど」

「冗談キツイぜ……お前の本気とか、引きちぎられて終わりだ」

まだガス欠のアサシンだったからこそ、なんとか戦えたただけだ。しかも余裕なんざ全くなかった。それを考えると、あの時の本気のアサシンの事を考えてみると……あーいや無理無理力タツムリ。瞬殺が良い所だろう。

それで『おつ、そうなん!』とかテンション上がる程、馬鹿じゃねえんだよ俺だつてさあ……

「……んふふ、やっぱり分かってへんかつたんやね?」

「何がだよ」

「うち、一応そこら辺の黒子で胎ア満たしてたんよ。全開、つて程やないけど。それなりには、やれたやろ?」

……おい。ちよつと待て。

「ちよ、ちよつと……えっ? 補給してたの?」

「うん」

……コラ。おい、コラ。

それが本当だとすると。弱体化の規模が、予想よりも全然小さくない? こっちはガ

ス欠想定だったのが、燃料切れのピンチ位だったって事だろ？ イイ所二、三割と思つてたのが四割以上……下手すりゃ六割近くって事も……

いや、なんか。『コレで弱体化してんのかー』って思うレベルで、動きが良いとは思ってたんだ。でもそれは、戦う時に勢いづいて、テンポよく暴れてたから、そう見えて居るし実際気持ちの有無は大きいっていう事かと。

「お、おまつ……なつ、あの……騙した、って言うのも変だけだよお!? なあ!」

「だあつて。旦那はん、存外へタレやし？ うちがまだまだやれるって思ってたら、突っ込んできてくれた？」

「いや……俺だつて明らかな自殺は流石にしたくないし……う？」

……ここで『おうやってやるよ』って言えないのが俺のクズな所だよなあ本当に。

しかし。しかしだ。その状態のアサシンに、俺は勝てたわけか。なんというか、サーヴァントの圧倒的な力を知ってただけに。凄い事をした、っていう事は、分かるんだが。困惑の方が、ちよつとデカイ、気がする。

いやホントなんで勝てたんだ俺

「……俺の血筋って本当にすごかったりする？」

「そんな事、うちは知らへんよ」

ああごもつともすぎて何も言えない。

そりゃあ、まあ、アサシンがそこまで知ってたら『お前が最早黒幕だろ』って事になつてしまふから、流石に知らなくてよかつたとは思うんだけども。

「そこは自分で調べるか……」

いや、まあ全てが終わつて、気持ちの整理がいたら、だけでも……今はいいだろう。兎も角。勝つた……いや、勝つたは良いんだけど。ちよつと、マズくねえかコレ。

アサシンに勝つために、全部費やしたぞ。でもまだ聖杯手に入れてねえぞ。ここからもう一波乱とか、今度はこつちがガス欠なんだけれども。やべえなあ……金時さんにもうひと踏ん張りしてもらうしかないか……

いや、諦めるには早い。取り敢えず、アサシンに聞いてみるか。

「なあ、アサシン」

「んー?」

『聖杯』つて、持つてるか」

「ほ」

その声に応えるように。ぽーん、と向こうから飛んできた金の盃を、その手に受け止めた。どうやら、コレらしい。

「お前が持つてたのか?」

「んーん。拾つた。もうあの法師、尻尾巻いて帰つたみたいやねえ」

成程。計画が滅茶苦茶になった時点で、この特異点には見切りをつけていたのか。

いや助かった。正直、まだ居残られてたら大ピンチだったし。とはいえ、綿密に立てた計画が盛大にぼしやったら、撤退するのも止む無しってやつか。

よし分かった。後は……えっと。あ、あったあった。コレだコレ。このお札をペタリと貼れば……よし。コレで封印、というかは完了、だったかな。

「回収完了、かな」

本当は式部さんと一緒にこれやるつもりだったんだけどなあ……つと、そう言えば大切な事を確認しないと。

「式部さん達は？」

正直、考えない様にはしてた。

記憶をボヤかしたアサシンを俺の偽のサーヴァントとして付ける、という計画なら。邪魔なサーヴァントが二人いる。彼女達とは、未だこの特異点では出会えていない。そしてここまで出会えていないなら、来ていない、と考えるのが普通だろう。

そして……事と次第によっちゃ、俺は……アサシンを召喚した法師様を。無数の肉片に引き裂いて、その肉片全部、改めて塵にする誓いを立てなきゃならん。

うん。絶対やろう。せめてお二人の鎮魂に……ならんかな。ならいいや、自分でやる。どうせなら、鬼らしく、好き勝手に。気に入らんから。綺麗か、醜いか。いずれに

せよ、その顔が二度と思ひ出せなくなるくらい、惨い最期を迎えさせよう。決めた。

「カルデアにとんぼ返り。ほんまは、ここに来た時点で分断して始末するつもりやっらしいけど、うちの事でそこまでやる余裕なかったみたいやねえ」

「——そうか。なら二重でお前に感謝しないとなあ」

よかつた。二人が無事なら、一発顔面に拳叩き込むだけでいいや。

しかし。

もし、アサシンが敵を裏切つてなかつたら。俺の物語は残念ながらここまでだった、つていう事だ。いやまあ、リンボの奴がアサシンを刺客として選んだ時点で、必然の大失敗だったのかもしれないし。なんだつたらコイツ、徹頭徹尾、俺を助けようとかそんな事を考えてたわけでもないし……

つて事は、不安材料もない。コレで。全部終わりか。

青い空を見上げている。もう直ぐ、この特異点を去る事に、少し……寂寥感を覚え始めていた。金時とも、お別れか。アサシンよりも更に短い間でも、俺と戦ってくれた快男児は……無事だろうか。

「——大丈夫か、大将?」

聞こえて来た元氣そうな声に、ああ、全然杞憂だったな、とちよつと微笑みながら。顔を金時の方に傾ける。

「ああ、男前が、上がったよ……」

「……へつ、そうだな。酷え顔してやがる」

「言い方あ」

取り敢えず、無事でよかった。

正直、アレだけの数のシャドウサーヴァントを全部任せてしまった事には、大分申し訳なさがあつた。苦勞を掛けてしまったなあ、という思いが――

「……そつちは大丈夫そうだな、金時サン」

「あたぼうよ！ 任せてもらったからなあ、オイラ、ついはり切つちまつた！」

――こみ上げてすぐにどっか行つた。そこに立っている、戦いによって出来た僅かな傷どころか、白いシャツに対し汚れ一つもない金時を見て、おいおい冗談だろうアンタとしか言えなくなつてしまった。

少なくとも、シャドウサーヴァント、どつさりいた筈なんですけれども。あつさりと突破できるような人数じゃない筈なんですけれども。

そんな『ついはり切つちまつた！』でどうにか出来るんですか。そうですかそうですかいやはやはつはつはつ……

「……源氏武者、やべえ」

第八十六章：討鬼の巻・その六

「源氏武者、やべえ……」

「ん？　なんか言ったか大将」

「ああいやなんでもない。ありがとナス……」

ああいかん、思わず語尾が破壊されてしまった。おのれ十周年。

頼光サンも中々の暴れっぷりであったのを覚えているが。しかし今回の相手は、一応まがい物とはいえ、最強の使い魔の、その名を冠する影法師。ただの魔獣とかとはまあ訳が違うはずの、シャドウサーヴァントを相手に。

「あの……本当に大丈夫そう？」

「ん？　おうとも、傷一つねえさ！　心意気もねえ、熱い男気もねえ、何よりも熱が足りねえ！　そんなゴールデンじゃねえ奴らに、負けてらんねえさ！」

……ああクソ。かつけえ。そう言い切つて。そしてまるで晴れの日のお天道様が如く笑うその姿。コイツと一緒に戦えたっていうだけで、多分一生モンの思い出になるだろう。

だけど。

そんな何処までもそこ抜けて準うしな笑顔は、視線を俺の向こうにやった時に、すうつと隠れてしまう。

「……酒？」

俺は、下から、金時を見上げるように見ている。歪む顔は、睨んでいる様にも、後悔を滲ませている様にも……ああ、それこそ。涙を、堪えている様にも、見える。

ボロボロになっているアサシンが、見えたのだろうというのが、一発で分かった。俺は二人の仲をまるで知らない。

二人がどんな風に過ぎしたのかも知らない。春の如く、穏やかに過ぎしたのかも、冬の如く厳しく過ぎしたのかも。知らない。最後をどのように迎えたのかも、知らない。

「なあに？ 小僧……そんな顔して……泣きそうちゃう？」

「っ、んなことねえよー！」

くすくすと笑うアサシンに、慌てる金時。

まるで、二人して子供の様なやり取り。昔からの仲、というのは伊達ではない。その一つ一つに……俺では、推し量れない思いが、宿っているのだろう。

「……お暇しよか？」

「NO。変な気使わんでくれ大将」

「可愛いサーヴァントの最期、看取ってくれへんの……最後までほんま、いけずやわあ」

「変な言い方止めろ!!」

……とはいえ、どうやらこの場には居ていいらしい。まあ、流石にマスターとして、アサシンと金時君にはぶられたら悲し過ぎて泣いちゃいそうだし。うん。許して貰えてありがたい。

とはいえ、この微妙な空気の二人の間に挟まれてるって言うのも、素直に喜べないっていうか。分かれた彼氏彼女の間に挟まる第三者っていうか。兎も角、物理的に間に挟まれているのが、ちよつとキツイ。

いやこの二人がそんな色っぽい関係だったかは甚だ疑問なんですけれどもさ。あー何とか、なんとか転がって、離れ……らんねえな。うん。

しゃーねーや……野暮は承知で。幼馴染の会話、聞いてるしかないだろうな。

そう思つて、ちらりと見つめる金時の視線には。水面に煌めく夕日にも似た、光が宿っている気がした。コレで何も無い、と思う程。馬鹿じゃない。

「酒?」

「んー?」

「オイラとしてはよ。お前が、そんなボロボロになつて笑つてんのは。いい気持ちでは見れねえ。それは、分かるだろ」

アサシンが、それを分かっている訳がない。見えなくても……人を食った様な、薄

い笑みを絶やしていないのは、簡単に想像出来る。そして。金時の言葉に、どんな表情してんのかは……余計に複雑そうな顔になった金時の顔を見てみると、寧ろ想像したくも無くなった。

「ふふ。さて、どうやらか。うち、鬼やし。人の小僧の気持ちなんて、そんな、全部見通せへんわあ」

「……そういう、ひらりと躲すような所も、変わんねえな。一度死んだくらいじゃ」「ふふふ」

「けど……今だけは正直に応えろ。そこが聞きてえんじやない」

だが、その顔は。直ぐに——真剣なモノへと移り変わる。

顔の筋肉を引き締めて……無理矢理に感情を押し込めた様な苦しいものには見ええない。だからって、余計な感情を削ぎ落して、感情を固定した感じでもない。

一つ、ゆっくりと呼吸を入れて。リラックス。

かちやり、とつけていたサングラスを、金時が自ら外した。露になった碧い瞳は、血に倒れたアサシンを、真つすぐに見下ろして。

「——そこまでなつてよ……」

低く。少し小さくて。

穏やかな声だった。

快活、豪快に笑うこつちまで笑顔になりそうな笑い声や。敵を一喝する時の稲妻の様に腹の奥まで響く怒声とは違う。穏やかな海原の如く。何処までも広く、受け止める度量を思わせるような。

気は優しく、力持ち。

金太郎、と言う童話に書かれた、そんなフレーズを、思い出す。

「楽しかったかよ。その最期は」

その問いかけに。

サーヴァントとして、契約していた名残からか。見えない筈のアサシンの気配が少し緩んだように、感じ取っていた。

視界の端に。金色のきらめきが。一筋。昇って消えていくのが見える。

はつとして、身体を起こす。痛い、気がしない。口の中が、ちよつと錆臭くなつたけど、無視した。起こした頭が、どうしてかフラフラと揺れる。それでも、何とか、真つすぐアサシンの方を向いた。

「——ああ、悪うなかつたよ」

サーヴァントの消滅を示す、輝きが立ち上っている。その中で。

春の日差しの中で、何も考えないままゆつたりとした眠りにつく様に、のどかに……

アサシンが、微笑んでいた。

何も不満はない。自分は満足した。そう、口にしているようだった。

「そうかい。大将に、礼の一つでもいっとけ。つき合わせたんだからよ」

「変なこと言うんやね。うち、旦那はんをきちんと守ったんやから。お駄賃貰うのは当たり前前つて思わん？ ねえ……あれ？」

……消えていく。まるで何でもない事のように。昔馴染みと言葉を躲しながら。俺を助けてくれたサーヴァントが、消えていく。

ぐつ、と。目からあふれ出しそうになる熱を……堪えた。コイツに、みつともなく泣いてる姿を見られたら、ケラケラと笑われるだろうから。

ああ、だけど……目を潤ませているのは。バレバレだろうか。此方に視線を向けたアサシンは。また、此方を揶揄うように、今度はハッキリと、笑った。

「……くすくす。なんや、泣きそうなのは、旦那はんの方やった？」

「泣いてねえよ」

「せやね。泣いてへんね。ええ子やもんねえ」

結局、コイツには最初から最後まで笑われっぱなしだった気がする。一回くらい、カツコつけたかったけど。そうはいかなかったらしい。

「……ま、言う積りも無かつたんやけど。しょうがないわあ。旦那はんがそんな顔するもんやさかい、おもしろくて、口も滑るつてもんやね」

もう、身体の半ばまで、アサシンのカラダは消えてしまっている。そんな中で……アサシンは、はつきりと、こつちと目を合わせてくる。自然と、背筋を伸ばしていた。

「うち、旦那はんを始めて見た時……蓮みたいな人やな、って思たんよ」
「蓮？」

「汚あい泥の中で、それでも綺麗に咲く蓮。うちは、桜とかの方が好みやけど、それなりには楽しめたわあ……血と糞の汚泥の中で咲いた、蓮なんてなあ」

……それなりとは、批評してくれるな、と思ったけど。まあ、褒めてくれているのだろうと思っておく。確かに、俺の育った環境はお世辞にも綺麗なもんとは言えない。血と糞どころか、悪意塗れの酷い場所だった。

最後まで椰揄ってくれたから、最後に褒めとけ的な事なのだろうか。

「……せやけど、蓮っちゆうんは、泥の中の力を吸って咲くもんや。そんな綺麗な花咲かすんなら、余程のモンを吸ったんやねえ」

「はっ、全部ロクでもねえさ」

「——うちは、それでも無いと思うけどなあ」

その言葉に、顔を上げる。

視線を絡み合わせ、大本の瞳を、否、更にその奥までを見つめながら……アサシンは何かを見ている。黄金の光は、既に胸元から立ち上るようになっていた。

「『マシになりたい』。そう誰に誓ったのか思い出してみるとええ」

「そ……アサシン、それって」

「したら……もうちよつと、マシになれるとちやうん——」

ふわあ、と。

一陣の風が、最後の輝きを吹き散らす。

手を伸ばした先に、もう誰もいない。僅かな——酒と、花の匂いが、鼻先をくすぐつて消えていく。それを確認してから。ゆつくりと、手を下ろし。

両手を後ろに付くようにして、空を仰いだ。

「……最後まで意味深なこと言つて消えやがつて」

「昔からあんなんでな。悪い、大将」

「だろうな」

隣に。ドサリ、と金時が腰を下ろす。

隣に首を傾けると、ほんの一瞬顔を見合わせる形になって。お互い、何も言わず、また空を見上げた。

「……サンキュー、マスター。アイツに最後まで付き合つてくれて。あんな満足そうに逝くなんざ、生前じゃ無理だったろうからよ」

「なんて事ねえさ。アイツのマスターだからな」

少し恥ずかしくなつて。頬を搔いた。特別な事をしたつもりもなかったからだ。

……その言葉に。どれだけの重みがあるかは、分からない。分かつてはいけない。それはきつと、アサシンと、金時の物だ。だから、自分は自分として、やりたい事をやっただけだと。あくまで、そう返した。

「へへつ、そうかい……」

「ん」

「——なんかあつたら、呼んでくれ。今日の礼だ。オイラの鉞マサカリ、アンタに預けるぜ」

「そいつは嬉しいが、呼べるかどうかは運しだいだからな、ウチの召喚式」

「Oh、そいつはBADだな……」

まるでガチャの如しだ。

本当に、縁を結べば誰でも来れる代わりに、誰が来るかなんぞ分からない。普通に金時の様な英雄を呼ぶ可能性の方が高い、とは思うが……もしかしたら、アサシンみたいなお時話の敵役だって、呼べるかもしれない。

まあ。でも。ゼロじゃないなら。

深く呼吸を一つ。

期待しないで、待っておくのも。良いんじゃないだろうか。

「もし来たら——昔のアサシンの話でも、聞かせてくれ」

「趣味が悪いな大将……ま、いいさ。昔話位なら、いくらだつてしてやるよ」

第八十七章

鬼を蹴散らして戻って来た実況、はーじまーるよー。

しぬかとおもいました（小並感）

本当にサーヴァントと殴り合いをすることになったという。

普通だったらもつと、こう色々ね？ 特異点で見つけた素材とか使って、色々ね？

礼装を組み上げて、それでサーヴァントを相手に時間を稼ぐとか、そのくらいなんですよ。

そんな、いくら弱体化してるって言ったって、真正面からの殴り合いをしていくとか想定してないんですよ!! 普通は！

……正直、勝てはしましたよ。

しかしながら、結果としてホモ君は大変な重症となりましたね？ 見ろよホラア、この無残な姿をよオなあ！ 体力が真つ赤じゃあ……多分、ざあこ♡ざあこ♡なエネミーにあと一回小突かれただけで、YOU LOSEですよ。

えっ？ その割にはテンションアゲアゲだったって？ 『決着ウウーーツ!!』とか態々音声入れてたって？

だってえ……なんだか僕も楽しくなっちゃってエ……期間限定の相棒サーヴァントとの一騎打ちとか燃えちやってエ……覚醒の具合も試したくってエ……

そうやって殴り合ってたら楽しくなっちゃったわけで。はい。

ま、まあ兎も角！ 此方の勝ちですよ！ 酒？ちゃん！

『——ああ、負けや負け……』

そしてボロボロになった酒？ちゃんの一枚絵に不覚にも（ry

『……酒？』

『なあに？ 小僧……そんな顔して……泣きそうちゃう？』

『っ、んなことねえよ！』

金時君も、無事シャドウサーヴァントを殲滅して戻って来てくれたようです……しかし一枚絵に変化無しなんですけれども。あの、金時君。まさかとは思いますが、あの数を相手に……ああ、無傷。いやー、空が青いなー（現実逃避）サーヴァントよりマスターが先に死にかけるとかキヤスター陣営か何か？（困惑）

あ、いや……流星にホモ君より先に、サーヴァントが去ってしまいますか……酒？ちゃんの体が、黄金の光となって、消えていきますね。

正直、敵に回ったにしても、彼女の事は最後まで敵とは思えませんでした。戦っている最中も、殺意剥き出しと言うよりは、戦いを楽しむ余裕のある戦い方は変わりません

でしたし。最後まで、後ろの黒幕に従うのではなく、自分の意思に従って暴れまわった彼女は正に、鬼の鑑でした。

『——ああ、悪うなかつたよ』

酒呑童子殿、御帰天です。お疲れさまでしたあ!!

正直な話、今まで一番キツイラスボスだったと思います(正直) でもとても戦い甲斐もありました。楽しかった……

さて……こうしてラスボスを下した事で、特異点も崩壊を始めます。

『……サンキュー、マスター。アイツに最後まで付き合ってくれて。あんな満足そうに逝くなんざ、生前じゃ無理だったろうからよ』

同じく、期間限定でサーヴァントをやってくれていた金時君とも、ここでお別れです。酒? 童子から代わって、本当に短い間でしたが、その圧倒的なパワーを体感させてくださったことに感謝永遠に。

出来ればこの後、召喚出来れば心強いですが……

『——なんかあつたら、呼んでくれ。今日の礼だ。オイラの鉞、アンタに預けるぜ』

お礼なら召喚した時に来てクレメンス(強欲)

そうして……綺麗な青空の一枚絵と共に、メが入り……あ、さあて。

さて、さて、さてさて……来ましたよお。いよいよ、大きな大きな成長ター

イム!!! 此度の呪詛特異点、別に悪い事ばかりではございません……なんせ、ホモ君単騎での攻略ですからね。成長にポーナスも乗ります。

更に……そう！ そう!! アサシンちゃん（弱体）を破った事で、大きな、大きな経験値がホモ君に入って来たんですよ！

そりゃあ一般ホモガキが平安時代最強格の大化生相手に、まさかのサシ、ステゴロで殴り合い宇宙した挙句、競り勝ったんですから大金星も大金星。このゲームだって、その功績を無視する程鬼畜仕様ではありません。

しかし、これも今まで少しづつ積み上げて来たからこそ……そしてデバフが特異点内で解除されたが故。いやー、まさか特異点内で何時の間にか神秘レベルが上がって、それのお陰でデバフが解除されていたとは……ホントいつ上がったんですかね（ガバガバ記憶力投稿者）

それは兎も角。

大量の経験値をムシヤムシヤした事で……『鬼の混血』による覚醒は、危険な段階へと突撃していきます。

覚醒ターンは……運にも寄りますが、いよいよ数ターンもの間に渡って継続するようになり、更に出力も、シャドウサーヴァントを相手に真つ向から力でねじ伏せられるレベルにはなりました。フウ！ ムキムキイ！

その他ステータスも、最初の『覚醒(笑)』と言えるレベルのクソザコナメクジとは最早一線を隔す段階に入ってきて来ます。

とはいえ、普通のサーヴァントさん相手には『金！(リソース) 暴力！(戦闘力) S○X！(神秘の格)』って感じでまだまだ劣るレベルですが……それでも、一応、戦えないレベルとは言えない位、潤沢に手札が揃って来ています。

ここからのプレイで、どれだけ経験値を乗せられるかが問題となつて来ますが……しかしこの先の特異点は、第四特異点までとは明らかに難易度が変わって来ますので、このステータスでも前線に出て経験値を獲得するには不安が残ります。

という事で、特攻しても問題ないくらいに、周りの環境が整って来てくれていると嬉しいのですけれども……

『クハハハハッ！ 奇妙な運命に翻弄されて尚、生き延びたか……面白い』

ツツツツツシャア!!! (フルガッツ)

天運、我にあり……藤丸君は、どうやらここでサーヴァント召喚をしてくださったよううで。見事に引き当ててくれました。藤丸君の相方となる、もう一人のサーヴァントを！

サーヴァント・アヴエンジャー。真名を、巖窟王。エドモン・ダンテス！

藤丸君とは、とある奇縁により共犯者の仲となった、人類史で最も有名な『復讐者』で

あります。

恐らくは、カルデアで一番『ギャグの中でも尚、キツチリシリアス熟せる』タイプである人です。ギャグ落ちしても、それでも尚シリアスに持ち直せるのは……ああいやそうじゃないですね。

FGOに置いて、真つ先に実装されたアヴェンジャーであり、そしてその壮絶な逸話を元にして持ってきた主役のイベントで、大きな反響を得たサーヴァントでもありません。

『サーヴァント、巖窟王だ……我が共犯者を嗤う為に参上した。お見知りおきを……』でも言っておこうか?』

まあこのように、ちよつと面倒な言い回しが気になる人ではあるんですけども。しかしカルデアの中でもぶつちぎりの有能な人でもあります。

FGO本編全体を通し、藤丸君の影にて、正に相棒と呼べるような活躍をしてきた、ダークヒーローの見本みたいな人です。投稿者も大好きなサーヴァントの一人ですね。

さて、ゲーム的な性能の話ですが。

無敵貫通に弱体解除に、アヴェンジャーとしての広い等倍の範囲で、アタッカーとしてゴリ押しするのが容易いのです。

恐らく単純なアタッカーとしての性能であれば、後発のサーヴァントであつても見劣

りしない……と言うか、神となった某アーチャーとか妖精の女王レベルの怪物のラインへ行くための登竜門辺りに、ずっと居座っている気がします。

そしてゴルゴーンさんと同じ、前衛と後衛を何方でも熟せるタイプのサーヴァントでもあり。前線寄りだった藤丸君のパーティが、コレで大分バランスが良くなりましたね。

……と、ここまではただの建前。

巖窟王は、本編でも自らの共犯者、と呼んでいた藤丸君を様々な形で支えていたのですが、このゲームでもその有能さは健在。

巖窟王が藤丸君と一緒にいると、様々なサポートを藤丸君に対して行ってくれるので。結果、藤丸君の死亡率が大幅に下がるのです。

藤丸君が死んでもこのモード、ゲームオーバーなのですが、巖窟王がいる事でその危険性がグリーンと抑えられ、結果藤丸君を自由にさせても問題なくなり、更に此方が無茶をしてレベルを上げやすくなる……コレは大きいですよ。実際。

ここから先のステージは、今までの特異点から更に難易度が上がり、迂闊なプレイをすると、マジでどっちのマスターもコロっとお亡くなりになってしまいます。

その対策としても、巖窟王の召喚成功はかなりのプラス。

『——そんな第五特異点に向けて、戦力増強をしておきたい所だね。リソースも溜まっ

た。新たなるサーヴァント召喚と行こうじゃないか!』

そして、プレイヤーの意見とカルデアの意見は一致している!! ダ・ヴィンチちゃん
の提案によって、次は……ホモ君の三騎目の召喚になります。

藤丸君には巖窟王という頼もしいサポートと戦力増強を。ホモ君にも、戦力増強となる頼もしいサーヴァントを召喚するチャンスを、このタイミングでくれるのです。

この最高のチャンス、出来ればホモ君のパーティが盤石となる『前衛』タイプのサーヴァントが欲しい所です。後衛の式部さん、前後衛を熟せるゴルゴーンさんに、バリバリの前衛が加われば、最早鬼に金棒。

とはいえね。もう先ほどの特異点で縁は結びました。今や激熱リーチ状態。彼を召喚する準備は整っています。勝ったな、バーサーカー引いてくる(慢心)

まあ見ていてください。皆さんに最高の召喚をお見せしますよ。

第八十七章・裏：『三騎目』

気にしいと言われてしまえば、それまでなのだけれど。

「……そこんところ鯖たらしの藤丸さんはどう思います？」

「いや、俺としてはお前の方が違和感あるんだけど……いきなりそんな、曇天だったのが快晴になるとか」

「えっ」

いや、台風が過ぎ去った後とか、全然あるじゃん。嵐模様から晴天に一気に空模様が変わるとか。それで綺麗になった空に『わあー』とか言ってみんな注目する、とか……ああいやダメだこの理屈だとこの状況を補強してしまう。

もうちよつとなんか良い言い方ないかなあ。と頭をひねっていると。というか、と藤丸の方からジト目で見つめ返された。

「なんだよ鯖たらしって」

「ええだつてー……そんな怖いお兄さんまで何時の間にか味方に付けちゃって」

「怖いお兄さん呼ばわり!? ちよ、エドモンに失礼だよ……!」

……いや、アンタの後ろのポークハット、なんも気にせずコーヒー飲んでるけど。な

んだったら怖いお兄さんの辺りでちよつと笑ったけど、そのエドモン。

俺らは、なんでか知らんけども。

それぞれ背後にサーヴァントを背負って、会話していた。

「こういう所、来ないと思ってたけどな。アンタ」

「ハッ、サーヴァントに食事も、休息も必要はない……と言ったのだがな」

「居ないと心配になるから、最低でも食堂には顔出して、って」

あー。成程。一々言われるのも面倒だから、取り敢えず顔出しだけはしてる、と。これアレだ、本当に照れ隠しとか何でもなく、『言われたから顔出してただけ』だ。んでコーヒーは完全に趣味だ。

んで、なんで俺らの近くにいらかって言えば。

「……うう、タイミングを逸しました……マシユ・キリエライト、最大の不覚です」

「ま、マシユさん。もうちよつとだけ待ちましょう。同じ藤丸さんのサーヴァントとして相互に……とはいかずとも、理解するのは大切ですから！」

さつきから、ちらりと偶に視線をやってる方向が原因だろう。マシユと、リリイが二人して食堂の入り口からチラチラこつちを見ているのが視界に入る。

恐らくは、ここ最近の新人りである巖窟王と話がしたいのだろう。どんなサーヴァント相手でも、先ずは話してみようと思うのは彼女達の素直な美徳だと思う。

だがしかし。雰囲気が独特な巖窟王相手に、一体どうやって話せばいいのか……それに苦心している、と言ったところだろうか。さもあらん。俺だつてこんなバリバリ『ダークです』つていう雰囲気の奴に『どるくん♪ 待った〜?』とか声は掛けにくい。『……んで、その防波堤にここを使つてゐるか?』

「何の話だ。ククク」

「自覚あんじゃねえか……」

んで巖窟王としては、ああいう初心でピユアな視線は慣れないし、別に彼女達が嫌いという訳でもないけど、特別話す事も無いから。こうやって俺たちの会話に混ざつてゐるフリをする事で、唯一のお話しできるタイミングで近づかれるのを避けている、と。

うーんこれは巖窟王の知啓……なのだろうか。

「……やつぱり、二人は苦手?」

「——些かに、眩しいのは否定はせんがな」

「そつか。まあ……気が向いたらで良いから、話してみたい、かな」

しかし残念。藤丸のサーヴァントになった時点で、その防護も何処まで続くかは微妙な所だ。コイツは確かにサーヴァントに配慮するだけのデリカシーはある——だがしかしそれをあえて無視するだけの度胸もある。

そう言う所を気に入ったのなら、それを分かっているだろう……巖窟王は、少しばか

り疲れたようにため息を吐いていた。

「なア藤丸。この調子で、この後の召喚の間も見られてるっていうのは、ちよいと具合が悪いんだよ」

そんな巖窟王にとっては、朗報か、悲報か、何方かになるのだが……これから少し後位に、俺が三騎目のサーヴァントの召喚を行う事になっている。

立香は、三騎目のサーヴァントの召喚を行っている。そして今回は、俺に対する戦力増強も同時に行うらしい。

『我がカルデアは、キミが敵勢力の標的である、という事に対する対策を……考えたけどでも根本的な解決は無理!!! 情報が足りないからね!!!』

と、ダ・ヴィンチちゃんに豪快に言われ……まあ、そうだろうなと思った。

カルデアに無数にあるハイテクと魔術の融合した最新機器を用いた（嘘発見器も希望して使ってもらった）ヒアリングの結果。俺には、まあさっぱりと、（俺が知っている事も自覚していない事も、両方関係なく）心当たりがない事が分かった。

ならばご実家の方に何かあるか、という事になったのだが残念ながら我が家はただいま大炎上中である。

……その途中で、家の中の事も、話そうと思った。

藤丸の事で、ごたごたして話せなかった、あの特異点の事……その中で見た景色。

何か関係があるかも、とヒアリングが終わってから。

全てを話す、勇気はない。迂闊に口を滑らせて、変な事を話してしまう。嫌な想像ばかりが先行していた。

それでも。狙われているのが自分である、という事ならば……隠しておくのは、何となく嫌だった。自分が、そうしたいと思つたなら。恐れも何も、捻じ伏せて。口を開こうと思つて——

『いいや、それは良いさ』

しかし、それはダ・ヴィンチちゃんに止められた。

『言いたくない事なんだろう？ なら話さなくていい。このダ・ヴィンチちゃん謹製のスーパーマイ・ガジェット達が君に一切の心当たりがない、と判断した。であれば、この天才にとつてそれ以上の事実は必要ない』

椅子に腰かけた俺の前に、まるで小さな子供と視線を合わせるようにしやがみこんで。口に指先を当てて……クスリと笑つた。

『私達だつて節穴じゃない。藤丸君も勿論……君も、必死に体を張つて前線で戦つてくれている事に、疑いはないよ。そんな君たちにこれ以上の負担をかけてまで知りたい程の情報じゃない——なあに、カルデアは強いんだ。情報不足程度じゃ、へこたれないよ』
今まで得た情報からでも、まだ何か分かる事もあるだろう。とケラケラ笑いながら。

なんというか。初めて、ダ・ヴィンチちゃんがかちゃんとした『大人』に見えた気がしていた。いや別に、今までも普通に大人としてバックアップしてくれていたんだけれども。先の特異点などは、不眠不休で助けてくれたのだというし。

でも……それ以上に。

輪をかけて、目の前の天才が、頼れる存在に見えたと言えば良いのか。

『とはいえ、コレから先、敵の攻勢も、キミに対するアプローチも、過激なモノになっていくのは想像しやすいからねー……』

『——そんな第五特異点に向けて、戦力増強をしておきたい所だね。リソースも溜まった。新たなサーヴァント召喚と行こうじゃないか！』

……まあ、そんな彼から出てきたのはとんでもないお力業だったんですけれども。お陰でこの後、召喚を行う事になっている、訳なのだが。

せつかくここに来て下さった英霊の方に、チンピラじみたマスターの背後からじーつとその背中を熱心に見つめる美人の和風美人という光景を見せて『あれ……？　もしかしてここって……？』的な疑念を持たせるのは忍びなく。

「なんとかならんかね？」

「なんともならんだろ……ちゃんと顔つき合わせて話さないよ」

「話せと言われても、なあ……」

そして始まるまで……それこそ後三十分くらいしか時間は無いという事実を踏まえ、その僅かな間に何とかもろもろの特異点の事を圧縮して話すことが出来るかと言えばちよつと内容濃すぎて無理という事を悟つて……そういえばコミユニケーション能力の鬼である男が近くにいたなあ、と思つたので。

とはいえそんなコミユの塊でも。どうやらチチンパイパイ、とはいかないようだった。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ——繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する」

コレで三度目、いい加減この舌噛みそうな呪文も慣れて来るといふモノ。

ばちばちと流れる魔力の奔流は、周りに控える皆の髪を、服を、たなびく位に激しく揺らす程に、強い。因みに俺に髪は無し、礼装もぴつちりとしたスーツなのであんまり関係ない……寂しい。

いや、寂しくはないか。こんな中でも、やつぱり熱視線（広義）はずうつと俺の背中側から飛んで来てゐる訳だし。

「――告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ！」

それは兎も角。

この召喚の時……自分は、奇妙な手応え、と言うモノを感じている。

式部さんの時は、焼けそうな周囲の熱の中に、静かで、しかし確かな勢いを持っている川の流れを、想起させる感覚が。

ゴルゴーンさんの時は、こつちを深淵に引きずり込んでいくような、底知れない力強いモノが腕に押し掛かって来た。

どう表現すりゃあいいのかわからない。釣りとも、握手ともいえるような……まあ兎も角。本当にこれから召喚するサーヴァントが想像できるような、個性的なモノであることは間違いないと思う。

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者」

今、感じているのは……ゴルゴーンさんに近い。しかし、以前感じたそれよりも何処か此方に親しみ、というか。そんな物を感じる。此方の手を掴んで、水底から飛び出して来るような。そんな感覚がある。

にやり、とした。

この力強さは……どうやら、本当に鉞担いで来てくれたのだな、と。確信できるもの

だった。サークルが、黄金の輝きを持ってグルグルと回っている。

「こ、これは……大物が来るんじゃないか!？」

「ああ、とんでもない。神霊クラスとは言わないけど、それに匹敵するくらいのもの——!」
「汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——!」

黄金は、奴の色を表しているのか、それとも単純にエネルギーの高まり故か。どっちでもイイ。あの快男児が来てくれるのなら、頼もしい。

話を聞かせて貰おう。アサシンの。

そう……こんな風に、酒の香りでも、二人の間でさせながら。オイラ未成年だけでもなはっはっはっ……はっ?

酒の、香り?

……力強い感触に混じる。僅かな酒精のほひ。

他の人は気づいてもいない、俺だけが感じているこれは……おいちよつと待て。

「——冗談だろ!？」

極限まで煮詰まって、そして——花開くように、惑わすように、酔わすように。芳醇に目の前で咲いた。稲妻の如く、ぴしりとしたモノではない。魔性の……魅力に満ちた、危険な感覚と共に。

集まった輝きが——一つの形を、小柄な形を成す。

「——アサシン。酒？童子。ふふふつ、呼ばれたからきたで？ 旦那はん♡」

「お、おまつ……」

アジアンビューティフル、とテンションを上げるダ・ヴィンチちゃんや。ふん、と鼻を鳴らすゴルゴーンさん。背後で息を？んだのが分かる式部さん。他のみんなの反応の中で……みつともなく、狼狽えている俺がいた。

「小僧やと思ってたん？ ざあんねん……ふふつ、こんなおもろいもん、手放すの、もったいないわあ」

……サーヴァントは、記憶を受け継がない。

だけでも。そんな事を感じさせない程に。酷く気安く話しかけてくる、目の前の着物の鬼の童女に違和感を抱けなかったのは……その酒精に、酔わされていた故なのだろうか。

第八十八章

我ら!!! な実況、はーじまーるよー

えー。前回『ハッハー！ バーサーカー金時召喚余裕だぜえ!!!』とか言つて突撃して行つた結果、大分小柄で、着物が雅で、アサシンな金時君を引く事になりました。やつたねホモ君！ わつはつはつ……酒？ 童子だよ!!!（ホモは見栄っ張り）

えー、完膚なきまでに酒？ ちゃんが出来てくれました。こ、コミュニケーションそのものにまた難があるサーヴァントが……！ いや、コミュニケーションは気軽にこなしてくるんですけども、なんか間違えるとぱくっ♡（食事）されてしまうサーヴァントが、また、また……！

……気を取り直しましょう。

取り敢えず、前回までで分かつた通り、バリツバリの前衛なんですよ、酒？ 童子は。だから悪くはないんです。寧ろコレでホモ君のパーティーは盤石になりました。寧ろコレで文句を言う方が可笑しいというモノ。

戦力的には問題なし！ ヨシ!! 第五特異点だ!!（前向き）

……因みに背後で流れている不穏なマッシュとドクターのやり取りは敢えて無視する

事にします。すまねえ……前線に出し過ぎてすまねえ……タンク役がマシユしか居ないから自然と君に頼りきりになるんだ……

更に言えばここに来るまでシレっと酒？ちゃんとか式部さんとかゴルゴーンさんとイチャイチャ（会話）していて本当にすまねえ……（懺悔）

もうちよつとタイミング選べって？　こちらら実績解除の為に全てを賭す必要があんだよ!!（貪欲）　早めに絆を上げて!!　強くならないといけない!!　え？　にしたってタイミング考えて？　二回言われては、はい。そうですわとしか。

……まあ兎も角、不穏な事も増えてまいりましたが。しかしここで焦るわけには参りませんよ。何せ、この次の特異点は。今までとは色々と訳が違いますから。

『ではブリーフィングを始める……所員も聞いてくれ』

『ロンドンの戦いで、敵は魔術王ソロモンと明らかになつた』

えっ？　あ、はいっ。そういうえばそうだったね……いや、ここ最近ほモモ君がボロボロになるまでずうっと頑張っていた所為で、藤丸君の方は大分放置気味になっていてまして完全に……失念してましたね……

はい、という事で、一分で分かる藤丸君が行く第四特異点へ

吸い込んだらバイ霧のはびこるロンドン!!　ここまでは、ホモ君が経験したのと同じ!　そこから現れる『M』の刺客!　蒸気機関の天才バベツジ!　霧の中の殺人鬼

ジャック・ザ・リツパー！ 錬金術師の大家パラケルスス！

そんな強敵ばかりの敵に対し、味方もまあ豪華。

円卓の騎士モードレッドに、人造人間フランケンシュタインに加え、伝説級の作家、ア
ンデルセンとシェイクスピア。更に巫女つと狐さんや、ゴールデンバーサーカーも、
後に力を貸してくださって……

ああ、そういうえば、藤丸君はもう彼と会っているんですね。

どつちのマスターとも会っていたというのにここまで来てくれないとは、何と俺らの
運は酷いモノなのか……掠り位しなさいよ……いや、ホモ君は掠っていましたけど。

兎も角。多くの英霊の力を借りて、悪しき霧を追い払い、倫敦に齎されようとした緩
やかな滅びは回避されて、黒幕である『M』……マキリという、更なる黒幕からの刺客
も打ち倒し。漸く特異点解決、めでたしめでたし……

『魔元帥ジル・ド・レエ。帝国真祖ロムルス。英雄間者イアソン。そして神域顕学ニコ
ラ・テスラ』

『多少は使えるかと思つたが——小間使いすらできぬとは興醒めだ』

——しかし。

どうやら暴れ過ぎた結果、黒幕の『興味』を僅かに引いてしまったようで。ついに現
れたのは敵の親玉。以前から、七十二柱の契約者として、この人理焼却事件の第一容疑

者になっていた伝説の魔術師、ソロモンがいよいよもつて、表に出てきたという！

『無様だ。余りにも無様だ。それはお前たちも同様だ。カルデアのマスター』

……まあ、圧倒的な力の差を見せつけられた挙句、更なる余力を見せつけて、此方の事を罵倒して、あっさりとう去って行きました……と。

あの白髪褐色のスカした野郎はいずれぶん殴るとして。まあ兎も角、第四特異点にて向こうから姿を現してくれた事で、犯人がソロモンだと確定したのです。

んで……

『ソロモンは、残り三つの特異点を、此方が攻略する分には構わないらしい』

ソロモンは、去って行く前にその一言を残していきました。

要するに舐めプ宣言（偏見）です。ソロガキ、コイツ……!!（心の中のモブオジ）

そもそもそこまでは此方を敵としてすら認識していない、と言う事らしく。舐めているといふかそもそもそこにすら至っていないという事らしく。なんともまあ、カルデアも舐められたモノです。

しかし、幸いと言えば幸い。残り三つの特異点に関して言えば、魔術王殿は直接の妨害はして来ないという宣言同然。

『では引き続き特異点を修正する、という作戦内容で良いのですかね?』

正にマシユの言う通り。向こうから積極的に力を振るってこないなら、そこは問題に

はしません。

え？ ソロモン王の対処？ 無いよんなモン（正直）

ダ・ヴィンチちゃんも、ロマニも、カルデアの大人たちが揃って匙を投げ、『居場所すら特定するのは不可能』とまで言い切ってしまう位に実力差があるのです。

という事で、今は目の前の特異点攻略に全てを注いで。ソロモン王についてはこの後に改めて考える、という事で。

という事で……話題が、漸く特異点に戻ってきます。

今回、我々が向かうのは。

『今回のポイントは、魔術師的には驚きの場所だね』

『北アメリカ大陸。 “アメリカ合衆国” と呼ばれる超大国だ』

U・S・A!!

そう。世界一の国、と公言しても唯一許されるレベルの国、表の頂点、裏の魔術師達が『いや歯牙にもかけませんが？』とか強がりながらも唯一気にしなければならぬ程の規模を誇る大国——それが、アメリカ。

超物質主義で、神秘、オカルトとはまあ無縁と言っても差し支えない様な、現代の国家の見本のような形です。歴史は浅い。聖杯戦争は執り行われた事も無いと、魔術的な価値はぼろくそレベルの場所なのですけれども……

しかしひと昔前まで遡れば、アメリカにも一応独自のオカルトはあるんですよ。精霊とか。いやマジ、インディアンは嘘つかない。

『また、英霊の存在も確認している』

そう……更に言えば。そんな歴史の浅い国とはいえ、キツチリ召喚されるレベルの英霊だっています。人の時代の英霊たちは誰も彼も曲者揃い。そんなユニークな英霊たちが立ち塞がって来ますからねえ。今までにない程に个性的で、今まで見た事も無い旅になる事は間違いないでしょう。

そして、FGOほんへで『えっ……コレ本当に第四特異点の次……?』と当時のプレイヤーが困惑した難易度の跳ね上がり方をしているのもこの特異点です。全く以て油断は出来ませんねえ。

『ではレイシフトを開始する。マスター両名は準備を』

あ、はいはい。コフィン乗りまーす。

まあしかし……第五特異点で跳ね上がった難易度に対して、此方も迎え撃つ準備は万端となっております。

何せサーヴァント二騎が増え、その何れも超有能サーヴァント。

藤丸君は念願……かどうかは兎も角、後方からの火力を補える巖窟王を味方に引き入れ、パーティの安定性抜群に。ホモ君は神秘レベル爆上がりで覚醒が完全覚醒（文法知ら

ず) そしてアサシン・酒呑童子というバリバリの前衛役を迎え入れ、陣容は万全!

生中なエネミー相手ではまあ競り負けませんし、遠距離近距離どちらにも隙は無し。間違いなく、今までの特異点をこのメンバ―で攻略できるなら、間違いなく何の苦労もなくあつさり突破できると思う位には最強の布陣。

はっはっはっ、こいつらを突破するなら神霊の一人や二人持ってこいつてんだ!!!

……うん、まあ。まだ詳細は言いませんが、この陣営をもつてしても、不安と言うしかないのが第五特異点なんですよねえ。はい。

ああ、黒丸に吸い込まれていく……

簡単に言えば、この先に待つのはそれぞれの特異点のボスクラス——が、幾人も乱れ舞う地獄の大地。想像すらできない程の『大戦』が、大口を開けて、我々を待ち構えております。

彼が、此方を『敵』としてすら見做してなかった理由は、このさつき三つの特異点を戦えば、おのずと分かって来ると思われます。

北米神話大戦『イ・プルーリバス・ウナム』……攻略、開始です。

第八十八章・裏：新入りとマスターに付いて

「えつと……式部さんが、コツコツ揃えてくれるから、その……本は、結構豊富だからさ。まあ退屈はしないんじゃないか？」

「ふうん、ええやん。ハイカラなんも悪ないけど、うちはこっちの方が、風情があつて好きやし……」

……マスターに無理を言った、自覚はありません

カルデアに慣れていないサーヴァントを案内するというのは、間違いなく必要な事でもあります。同時に、言わば会つて日の浅いマスターとサーヴァントとの『コミュニケーション』を取るための口実でもあります。

彼女はカルデアに、始めて来たサーヴァントですから。こうするのも当然ですし。特別おかしなことをしている訳でも無いのです。

更に言えば。マスターは、ゴルゴーン様にも同じように案内はしていました。その時は別に私もこうして着いていってはいませんでした。

今回ばかり、今回ばかり……私は二人のカルデア行脚に、付いていこうと思つてし

まったのです。

「あ、そう言えば。召喚した時におつた、大きい人、何処行つたん？」

「ゴルゴーンさんなら自室だけど。え？ 会いたいの？」

「うん。あかん？」

「いゝやゝ……アカンよりの、アカン……かなあ？」

理由は、と言えば。

それこそ、目の前にいる『彼女』に関わっています。

身に纏つた着物を、非常に煽情的に着崩した童女……見た目は年若いのですが、その実際の年齢は、私よりもはるかに上。その真名は、大江山に住み着く恐ろしい大化生……酒？童子。

私の生きた時代、平安の世において。

京の住人を心胆寒からしめた恐るべき怪異。私は宮使えだった故に、直接会つた事は有りませんが、しかしその悪名だけならば。幾度も耳に入つて来たことがございます。

召喚されたあの時——その容姿を知らずとも、此方に伝わっていた悪名や、噂がフワリと頭に思い浮かび、『ああ、彼女がそんなんだ』と思えてしまう程の、多くの事が。

恐ろしく、しかしながら……会つた人達は、私に話をする時、周囲に聞こえぬようなかすれ声で『されども、風雅に、美しくもあつた』と口を揃えていました。

余りにも小さな、しかし、それでも僅かに熱情に浮かされた様な、内緒話。

ロマニ様は『当時の鬼の伝承間違ってるんじゃないのかい!? なんだこのオタク共大
 歓喜なロリ鬼っ子は!? ヤバさは分かってても突っ込まざるを得ない、月までぶつとぶ
 このシヨック!!』等と言つて、皆様に怪訝な眼で見られていました……

朝廷が恐れる程の、まつろまぬモノ共の頂を、美しく思つてつい見惚れた等と、一体
 誰が大きく口にできたでしょうか。それこそ、平安の魑魅魍魎の巢窟であれば、その一
 言が致命の一撃となりかねないのに。

故にこそ。伝わらなかつた——

「……ねえ」

「——はいつ? あつ……ひえ」

そこまで、考えた所で。

耳に入つて来た言葉で、深く沈んでいた思考から浮上し。顔を上げたそこには。此方
 を覗き込む、あどけない——というには、些かと艶に塗れた少女の顔が。そして、日本
 の角が此方に向けて、にゆい、と伸びています。

「これ、似た様なの他にもあつたと思うんやけど。ないん?」

「あ、えつと……そちらの、本棚に」

「ああ、こつち——ふうん。書かれてる事で、分けてるんやねえ」

「は、はい……そうした方が、書に慣れていない方でも、読みやすいかと。同じ作者の方の本を探するのは、慣れてる方ですのので」

「分かれてても探せる。へえ……」

得心した様に、彼女は笑ってすたすとマスターの元へと戻っていきます。

その姿に、殺意も何も感じられません。

殺意敵意の類には、到底詳しいとは言えない私ですがしかし……感情や、人の心の移り変わり、それには詳しい自信があります。故に殺意を持つまでの、その一瞬の心の変化は。目の前にあるならば、きつと見逃さないと私は思うのです。

しかし。

「それ何」

「んー、『奇書』って奴やね。旦那はんも見る？」

「ほーん、どれどれ……おいテメエなんてもん見せやがる」

「なあに？ ただの——」

「奇書じゃなくてエロ本じゃねえか!!! うげえ、やなもん見ちまった……そんなもんマジと見て描くなよ作者あ……」

顔を顰めて居るマスターを指さして、ケラケラと笑っている彼女には、人を害そうという素振りすら見えません。しかし……彼女は、そこから当たり前の様に『人の頭をね

じ切つてみせる』のです。

私には、その判別がつきません。

彼女が何をもって、人を殺す殺さないの舵を切るのか。

真に恐ろしいのは、そこでしょうか。人とは根本的に精神の構造が違う……誠意を尽くせば帰つて来る、という訳ではなく。害意をもってあたつても必ずやしつぺ返しが来るとは限らない。

笑いながら殺し、心底つまらなさそうに敵を見逃す。

今も。

私の目の前にいた彼女に……胎を貫かれていても、不思議とは言えなかつたのです。

そういう意味では、ゴルゴーン様とも違います。彼女は、相手を殺す際、確実に『嫌悪』か『憎悪』をもって殺します。その範囲は、やはり普通よりもはるかに深く、逆鱗も

人のそれと違う場所にあるのでしょうか……それでもある意味、生真面目な方なので

す。
「はー………つたく。はしやぎすぎだろ」

「えー？　うち、山育ちの田舎者やし。物珍しいもんばっかりやし？」

「お前がそんなお上りさんみたいな反応する方が怖えよ」

では——私が、お二人に付いて来たのは。

そんな都にて恐れられていた存在が、マスターと共にあるのが、些か以上に心配で、監視する為にここに……

という訳ではなくて。

はい。そういう訳ではないんです。別に。

そんな話をすれば、同じ魔性であるゴルゴン様も同じように、恐れ、そして気を払うという事になります、ですが……私は、どうにもそう言った魔性と戦った経験に乏しく。一応そう言った物への危険も、理解が出来ぬわけではないのです。

……私は、自らの思いを綴る事でサーヴァントと言う位置へと至る事が出来ました。故にこそ、敵意や本能だけでこちらに向かつてくるわけではなく。明確に思考し、複雑な感情を抱き、それを言葉にする……読み取りたくなるような感情を持っている相手と、相対した時——ゴルゴン様や酒？童子……様のような、彼女達と向き合った時。恐れより先ずは、その感情を紐解こうとしてしまうのです。

人とは違う、彼女達の思いと言うモノを。

……危うく、そして余りにも無謀な事だとは思っていても。それであつさりと引き下がれるならここまで来ていないのです。多分。

そして、そんな私が、今回、どうしても気になるのが。

「……………えっと、何か御用ですかね式部さん」

「あ、いえ。何でもありません」

マスターの変容です。

……………あ、はい。酒？童子様の方ではないのか、と。ここまで説明して……………いえ、実際、とても必要と申しますか……………はい。という事で。

つい先日まで、まるで凍り付いたように、しかしながら人形の如く、かくつく如き『平気』を装っていたマスターが。

特異点から戻ってきたら……………なんというか、精神的にも肉体的にも物凄い、えっと『パンプアップ』と言えば良いのでしょうか。して戻って来てたのです。親戚の子供が夏に遊びに来て、頭から下が急に仕上がっていたら気になる、じゃないでしょうか。そんな感じですよ、はい。

……………つい先日まで、あの仮面の如き表情に。不安を覚えていたばかりだというのにいきなりの事で、それは……………もう。なんといいいますか。

「……………」

「……………ど、どうすれば良いんだホント、コレは」

「放っておいていいんちゃう」

……………心配していいなかつた訳がありません。

マスターとは、多くを話し。語つて来て。共に苦難を乗り越えました。無茶を言われる事も、無茶をされる事もあつて。昔の事を語り合う事もありました。

信頼を築き。感謝を抱き。そして……何が出来るのか、と。考えようと思つていたその矢先に。

その心配が一瞬で問題なくなりました、と言わんばかりに元気そうなマスターが。

とある特異点にレイシフトしようとして。その後、我々が引き離されて……カルデアの皆さんが慌てている処に、戻つてきて。

『へへっ、ただいま』
と。

……正直な話。敵の狙いを探る為、なんて言つてマスターの精密検査をしたのは。ドクター様と、ダ・ヴィンチ様の、若干苛立ち交じりの提案でした。

此方は、かなり心配していたのに。特異点から戻つて来たマスターは『ん？ どしたの皆』なんて。引き離されたのはマスターの所為ではないのは、ドクター様もダ・ヴィンチ様も十分理解していたのですけれども。それにしても、キミはおじいちゃんの家から帰つて来た子供かと。

『……無事でよかつたよ、ホント』

藤丸様が呪詛で倒れた時も、カルデアの皆様は、不眠不休で彼を看病していました。

その直後で、色々と不安だったのでしよう……検査を終えて、燃え尽きたように椅子に倒れ込むドクター様、そして、そんなドクター様に代わってマスターの質問に應對するダ・ヴィンチ様も……それくらい、マスターの事を大切に考えているのです。

……私も。

少し、今もけろつとしてるマスターに、もやもやとしているのは、本当です。全然何があつたかも分かりませんし。

故に。何があつたのか。何がどうして、大丈夫そうになつて戻つて来たのか……
その事に。

「……ふふつ、そんな睨まんといて？」

「睨んでは、いませんけど」

目の前の酒？童子様が、絡んでいないと思えるほど。私は……鈍い訳ではないのです。

断章：森の中の死闘

「——見つけたぞ」

荒野の広がる大陸の、一地方。何処までも広がるカントリーサイド（田舎町）とまで称された、その広大な森林の一つの中。

暗がりに包まれた道の中を、しずしずと歩いていた……優に普通の人より頭一つは抜けた背丈の大男の前に。その赤い影は、降り立った。

片や、人食いの悍ましき魔性。ケダモノの如き眼光を有した『術師』

片や、研ぎ澄まされた刃の如き闘志、獣を思わせる迫力を滲ませる『戦士』

対極的な両者は……似通った表情を浮かべていた。

即ちは、『笑顔』。口が裂けたか、と勘違いする程に。相手を怯えさせ、竦ませる、威嚇の一笑であった。

「なんとまあ、驚きました。まさか本気で追って来るとは。状況、お分かりですか？ 貴方のような腕利きが、コレを放って、ここまで来るとは」

「力か。そなたの言う事も分からんでもないが。獣故な、鼻が利く……貴様の腐臭は流石にこの満漢全席の如き景色の中でも、見過ごせん」

似通つた表情に宿る感情は、されどと言うべきか、やはりと言うべきか。対局。

術師は、心の底から愉快、とばかりに笑い。戦士は、殺意と敵意を濃密に込めて、獲物を逃がさぬ為の『示威行為』として、敢えて笑う。

「何をこそこそと企んでおる……キヤスター・リンボ」

「いえいえいえいえ!! 別に、こそこそと等……ええ、全く! 表立つて、この特異点を

『更なる地獄』に変える策を練つておりましたが故!!」

そこから——戦士は、表情を消し。持つていた得物を文字通り。リンボと呼ばれた大男が『瞬く間』に、その手に構えた。

槍である。短槍ではない。優に身の丈を越える程の大きさの槍だ。常人ならばただ振り回すだけでも一苦勞な大きさのそれを、まるで——子供が小枝でも振るうかの如く、実に容易く、脇に柄を挟み、刃を下に。緩く構えて見せた。

熟練。

槍を、まるで手足の如く、好き勝手に振るうその動きを見て、そう思わぬほうが目が腐つている……そう思わせるような、流麗な動き。

「ンンン〜っ……流石は、神なる槍と名高い武人、李書文! 全く! 軽く振るつただけの穂先が、まあ見えぬとは我が記憶にも——ここまでの使い手はおりませんなあ」

獣の如き戦士の真名は——李書文。

中国武術界に伝わる本物の伝説。

合理を極め、六合大槍の妙技を『真』に修めたと言える武人は、比較的新しい時代の英霊でありながら、『神槍』とすら称えられる程に、極に至る。

この渾沌極まるアメリカ大陸に置いて。ただ一人でも、単騎でも、それでも如何なる勢力にも屈さず、只管に赴くままに、首を狩る事が許される程の実力者である。

ここが神話渦巻く舞台であつて尚、それでも通用するだけの『技』が彼にはある。

穂先一つで焰を割き、地面を砕き、波を割り……銃弾も矢も、当然向けられた刃も、何もかもを……全て。往なすも。壊すも。自在。

六合の極致ともなれば、宇宙の合理を理解し、その中で自らを自由に『操る』。そして技一つで、魔術すら目を見張るような奇跡を顕現させる。

「はっ、抜かせ。儂が構えた時点で、貴様も布陣しておつたらうに」

「……どうりで、踏み込んで、こない！」

「侮ると思つたか？ 下衆も極まれば、猛毒。そこまでの腐臭ともなれば、伝承に語られる悪鬼も同然と考へても然りであろう」

「ンンっ、正に、『然り』!!」

……そんな彼が踏み込まないのは、『バレた』と踏んだリンボが。

自らの影から——のみならず、夜、森にかかった影からも。好き勝手、有象無象、大

小様々な形で……

うぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞ、と。

詰められた壺の中から、光を求めて虫共が溢れるが如く這い出るかのように……沸いて来る。湧いて来る。湧いてくる。

魍魅魍魎の化け物共を、自らの傍に控えさせたから。

一つ目、角付き、混ざりモノ、岩の人形、そもそも形を持たぬ不定形……名前を持っているかも分からない程に雑多で、無秩序なモノ共。

そんな蠢く闇の住人たちが。

「気味の悪い兵を、良くもまあ、そこまで」

「おや、お気に召しませんでしたかな？」

「……怨霊の類は、苦手ではあるがな。しかし、実体がある魍魎風情、物の数ではない」

「ほうほう……左様で！」

大男の指先の指揮一つにて。地を走り、宙を飛び、書文を囲む様に飛び掛かる。空を覆いつく影の如き影の群れは、たった一人に余りにも過剰な戦力か。

否、相手は一騎当千のサーヴァントである。

「——噴ッ!!」

鞭のように、槍がしなり——ゆらりと揺れる穂先が、一閃！ 二閃！ 稲妻の如き軌

道が闇を裂く！ 白い傷を深く刻まれた闇の一部は、ぶるりと震えてから……空気に溶けるように、消え失せていつて。

その中心。襲い掛かって来た恐ろしい怪物達を相手にまるで冷や汗一つ掻かず。獯猛に睨む書文が微動だにせず、立つ！

「——その程度の鬼（グエイ）をどれだけ使役しようが。物の数ではない。分かっていなかった訳ではあるまい？」

「ンンン……それは当然。されどまあ、拙僧は術師なれば。下準備は必要なので」

「それが終わる前に死なぬ事を祈れよ——」

その堂々たる立ち姿——そこに有ったのは、一瞬。

とつさの反応で、術師が指先をちよいと上に挙げれば、その前に立ち上り、壁となる黒いモノ。それらが。

目の前で、あつという間に五分に刻まれた。

それを確認した時点で、軽い口笛と共に術師は下がり……再び、自らの周りに無数の邪気と怪物を侍らせ、立つ。

「その大言壮語、虚言に非ず！ ですなあ、油断すれば拙僧の首——」

「——既に飛んだぞ」

そう。立った、その瞬間だった。

その僅かな間に、黒い壁を、鋭い槍の穂先が貫き——そして、再び。否、先ほど以上に柔軟に、槍がしなる。入り込んだ敵のテリトリーの中、文字通り、斬、斬、斬、と凄惨な音を響かせて——

闇の中から、一つ何かを釣り上げた。

槍の穂先に、切り飛ばされたそれは、貫かれて引つ掛かっている。不敵に笑ったままの表情を残したまま——術師リンボの首は、見事、放物線を描き書文のその手の中に、すぼりと納まったのである。

「ふむ」

余りにも呆気ない決着。一瞬の攻防の直後、更に踏み込んだ神なる槍の一撃にて、術師はあっさりとその命を散らしたのである。

……そう、見える光景だが。しかし。

李書文の表情は、コレで勝ちを確信したようなモノではなく……

「器用な真似をする。空蟬とは」

「——ンンン」

そのまま、くるり、と。何もいない、筈の背後の暗闇を見つめる。

じゅわり、溶けて消えていく術者の守り——その更に奥から、代わって白と黒の影が、再び現れた。紛う事なき、キャスター・リンボである。

今、書文が切り裂いたのは、本人ではない。分身だ。素人が触ったならば、本物と信じて疑わない。もし死体に慣れたものが触っても、違和感はあるが偽物とは見抜けないだろう。それほどの精巧な偽物。

だが……書文の野獣の如き感性はごまかせない。

偽物に意識を向かわせ一瞬で切り裂く。狙っていた策は掠りもせず。再び、二者は闇の中で向き合う。

「そのまま引つかかっていたら、良かったモノを——!!」

「はっ、その台詞が出てくる時点で、底が知れるわ……!」

お互いに、自ら研いだ牙を存分に見せつけた。後は武器を構えりゃあ——小手調べはお終い。本気の殺し合いが、始まるばかりだ。

片や地面を蹴って弾丸のように真つすぐに飛び出し。片や再び闇を身に纏って矢の如く風を切って走り出し……再び二つの影は交差する。

「シァアツ——!」

「ヌウツ——!」

切り裂き、切り裂かれ、血が飛び散り、撒き散らされる——嵐の如き、二つの英霊のつぶし合いは、さらに加速して——止まらない。今、この地で起きている争いなど、双方何も気にしない。狙うは、相對する化け物の首一つ。

誰知らぬ筈の、その戦いを。されど。

「……チッ」

木立の天辺より見下ろす影が一つ。

狐の面に烏帽子、鎧に高下駄を履いたその姿は。正に、平安の世の武者そのもの。見
つめる先には、リンボと戦っている書文の姿。

一つ鼻を鳴らしてから……その腰に携えた刀を引き抜いて。そのまま向けた切っ先
の先もまた――

第八十九章

第五特異点、いざや突入——な実況、はーじまーるよー

開始地点は森の中、開始と同時にスティックを右斜めに……今やってんのはRTAじゃねえんだわ!! 実績解除ブレイなんだわ!! という事で、怒りの第五特異点全力攻略スタートでございます。

『ここが1783年、アメリカ——のどかな森ですね』

さて。1783年、この年は未来のアメリカ合衆国にとって、とても重要な年だったりします。それはなんでかと言うと……

「正確に言うくと、アメリカ合衆国はまだ生まれていません。この年に集結するイギリスとの独立戦争を経て、アメリカは国家として成立します」

そう。この年は——アメリカが、国家として誕生した年なのです。1783年は言わばアメリカの誕生日。ここで生まれたアメリカは、以降世界の歴史に多大な影響を与えながら最終的に……怪物的な巨大国家として成立します。

そんなアメリカがここでイギリスに負けて、もし国家として成立しない等と言うとんでもない事態があれば。人類史はめちやくちやになる事は間違いないでしょう。

しかし。

『ただ、独立戦争の勝敗程度で、歴史の流れは変わりません』

そう。マシユの言う通り。

実は、アメリカ独立戦争が起きている時点で、アメリカはイギリスから独立しようという強い意志を持っています。故に、多少の時間のずれはあれど……アメリカは、何時かイギリスから独立する事は変わりなく。

大きな歴史の流れは、勝手に人類史君が修正してくれる辺りとかの影響もあつて。これで特異点になるレベルとなりますと、まあよつほどデカイ改変が起きている可能性が高いとのマシユの解説でした。ありがとナス!!

もうこの時代のイギリスとかが敵じゃ説明つかないレベルの大問題になつてしまつて来ている可能性が微レ存……?

『すまない、着いたそうそう緊急事態だ! その先の荒野で大規模な戦闘が発生している! 詳細は分からないが急いでくれ! これはちよつと、普通の戦いじゃないぞ!』

……さて。そんな事を言つたら早速ですよ。ここまでの特異点を潜り抜けて尚『普通の戦いじゃない』と言う程の事ですからねえ。そりやあもうとんでもない戦いに——『あれは……』

ほうほう。片や槍を構えたゴツイオッサンの群れ。漢臭そう（小並感）

そして対するは銃を構えた普通の兵隊と、機械兵、って感じの奴らが……オフアッ!? 『あ、あれは……バベツジさん!? 先輩、バベツジさんですー!』

バケツ被ったみたいな頭つから、足元のローラーを覆うスカートに至るまで完璧な鋼鉄一色、そしてその片腕には重たい機関銃を積み込んだ、近未来的なパッションの作品で出てきそうな、機械兵隊がそこに!

たった数体位ならともかくとして、マジで軍隊と呼べるレベルの数が、ずらりと並んで砲塔を並べて弾丸の雨霰を槍構えたウオリアーたちに向けてブツパしております。

おいまで、今は近代、アメリカの真つ最中だぞ……過去から英雄を連れてくるならともかく未来の技術をお取り寄せするんじゃないのか!? (レベルがゼロ並感) FGOは割とキツチリとしたファンタジーモノではないのか!? (レベルがゼロ並感)

……彼らにそっくりなサーヴァントもいるって? あ、アレはかのサーヴァントの固有結界なだけだし (震え声)

『おうテリブル! 敵増援を確認。威嚇射撃からの排除を開始します!』

……まあ今はそんな事を気にしている場合ではなさそうです。どつちの軍勢もこつちに迫つて来ている。まさかの我々、何方にも敵として認識されている状態!?! うーんコレは挟み撃ちされる形になるな。

という事で、カルデアご一行の何時もの孤立無援の戦いスタート。ここから味方を探して戦力を安定させるのが何時もの事なので、まずはここを切り抜けましょう。

ふふふ。神秘ビルドにて、大幅にレベルが上がった事で取れた青得の性能、お見せいたしましょう……！

さて、お相手はレトロなタイプの槍持ちウオーリアー。第五特異点ともなれば、レベルもそれなりに高く、普通のビルドのプレイヤーでは、マトモにぶつかれば大怪我必死の強敵です……が！

先ず覚醒！ 重ねた青得等でクリティカル確定からの威力は高倍率のバフはかかり、更に神秘のレベルが上がった事で、倍率がかかる元も結構高まっております。そんな拳に丹念に殺意を込めてぶん殴ると——？

『——っ!?!』

屈強な兵士が見ての通り、ワンパンっ！ 完全勝利！

ふはははは！ 見よ、このサーヴァントと遜色ない（鼻肩目アリ）の威力を！ 今まで雑魚敵とて、多少の警戒も必要でしたが、しかしながら、遂に、遂に！ 雑魚敵相手であれば、ある程度気を抜けるレベルに到達したのです！

その秘密が、この青得『古い血筋』であります。

神秘レベルは、高ければ高い程、覚醒などの特定のスキルに補正が乗りますが。その

補正を更に高めてくれるのがこの古い血筋です。

神秘以外に一切乗らない上に、一定の神秘レベルまでビルドを上げないと取れない、ちよつとお手軽さに欠けるスキルではあるのですが、とつてしまえばこの通り！

『!!』

警戒していた第五特異点の強敵たちも、ホモ君単騎で余裕で討ち果たせるように！

なっておりますよ！ いやもう、今までみたいな『無双（笑い）』というような情けなさは何処にもありません！

……というか、それくらい出力を上げないと、この第五特異点は辛くなつてくると申しますか……まあおいておいて。

更に……この『古い神秘』は、なんと『対サーヴァント戦』に関してかなり重要なもので。コレを取っておくと、サーヴァントに攻撃が通りやすくなる——サーヴァントの神秘の守り、最早恐れるに足らず！

……とまでは行かずとも。完全無欠の守りを実現していた筈のサーヴァントにダメージが通りやすくなつたのは嬉しいですよ。まあ結局は覚醒時のクリティカルのダメージが通りやすくなっただけと言えましょうなんですけれども。

『ほんなら骨抜いてまうけど、よろしおすなあ？』

あと、アサシン。酒？童子の活躍も正に怒濤、と言つた感じですね。

今までホモ君のパーティは、『魔性』タイプの相手への特攻効果と、ゴルゴーンさんの等倍をもゴリ押し高火力で何とかして来た一面があります。

まあ、ホモ君の魔性特攻付与、というウルトラCで魔性特攻の火力を無理やり乗せる事も出来なくもないのですが……それはそれとして。やはりもう一伸び、安定した火力バフが欲しい所ではありません。

その火力を補う事が出来るのが、正に酒？ 童子。強力な攻撃力バフ配布のスキルに、全体防御力ダウンに加えて確率でスタンのデバフスキルもあります。

これらが乗ると、まあ我らが式部さんとゴルゴーンさんの火力が結構伸びる！ 元から攻撃力アップのバフを持っているゴルゴーンさんに関しては若干控えめですが、式部さんの火力の伸びはかなりの物です。

更にガッツスキルも持ち合わせ場持ちも非常によろしいと来れば、並みいる敵兵を捻り潰すだけの力と合わせ、大活躍も必死。

『——よし、殲滅完了！』

とまあ、ホモ君の成長等、大きな要因もあり、見事攻め寄せてくる敵を凌ぎ切る事に成功——しましたが、しかし。特異点というのはそう甘くない、というのを表すかのよう。まだまだ敵が此方に迫って来ます。

このままでは敵の軍勢に挟まれる！ 逃げなきや（使命感）

『マスターはなるべく後方に下がって——ダメ、逃げてください!』

しかし、逃げる一步手前、敵の砲撃が逃げようとする我々の背を射抜こうと此方に飛んできております!

『——世話の焼ける』

が。その黒い砲弾は迫る前に黒い炎によつて焼き尽くされました。

来ましたよ! 巖窟王セーフティ! このように、巖窟王が藤丸君のパーティにいると一部のシナリオに影響が出たのです。この特異点の序盤、砲撃が藤丸君に直撃してしまふと、巖窟王セーフティが無いと藤丸君が砲撃のダメージを暫く引きずるといふ悲しい結果が待っているのですが。

しかし! ダメージ! 無し!

なんとという完璧な防御。こういうエスコートが心強いのです。巖窟王!

本来ダメージを負つて、ある程度響くモノがまっさらになつて……コレで、我らカルデア、アメリカ旅一行は無事に初めのピンチを潜り抜けまして。

さて選択のお時間です。

戦っていたのは二つの軍勢。何方も、現地のアメリカ軍ともイギリス軍とも見えない未知の軍勢な訳ですが……さて、謎多いこの特異点を調べる為に、先ずは何方を追いかけるか、と言う話になつて参りました。

『——どうしました？ 急患ですか？』

選ばれたのは、銀髪紅眼の美人な婦長のいるアメリカ軍でした。

第八十九章・裏：活きる少年

「おーおー、えらい形相だ事……止めないのかい。伊達男さんよ」

「……恐らくは、言つて聞かせて納得する類でもあるまいよ」

マスターと、巖窟王様のお二人が、半ば呆れたような表情で見つめているのは、視線の先の藤丸様とマシユ様とそして……もう一人。

赤い軍服と、銀の髪。そして……

「——彼は患者です」

「ですから！ 先輩の傷は専門の処置をするほどではなくてですね……！」

「ううつ、凄いパワーですう……！」

サーヴァントであるリリィさまが、後ろから羽交い絞めにして抑え込もうとしているというのに。それでもなお、一步、一步と、確実に前進を続けて、最早マシユ様の盾に掴みかかりそうなその力強さに、遠くでこうして見ている私までちよつと、びくつとしてみまいます。

逆らう気になれない、と申せばいいのか……他者に有無を言わせない凄まじい『圧』が

あるのです。

「ねえ坊」

「な、なに？ アサシン」

「アレだけ熱心なんやさかい、カラダ診せるくらいええんちやう？ てあつうく見てくれると思うで。くすくす」

「いや絶対それだけじゃ清まないって分かつてるよね？」

……藤丸様の傍にしゃがみこみ笑っている処を見るに、そんな圧なんてまるで意に介していない方もいらつしやいます。

といつても。酒？童子様は、ただ傍で様子を見て楽しんでるという訳ではなく。マスターに頼まれて、先ほどから前のめりの姿勢を崩さない看護師の方を見ているのです。

サーヴァント三人がかりで見なければならぬ程の人物……当然ながら彼女は普通の看護婦ではなく、サーヴァント。特異点に召喚された彼女の名は——ナイチンゲール。

マシユ様によれば、世界でもっとも有名な『医』に携わる者の一人。

先の敵の襲撃を退けた後。我々がやって来たのは……アメリカ合衆国、というより現地のアメリカ勢力の駐屯所、先の戦闘に置いて、我々も交戦しながらも様子を見ていた

結果、まだ『話を通じそう』という事で此方にやって来まして。

そこで——彼女に会いまして。

『——その貴方』

『えっ？ 俺？』

『そうです。その腕の裂傷は』

『あー……そう言えば、さつき巖窟王が撃ち落としてくれた弾丸の破片が——』

『——食い込んだのですか？』

……その一連の会話がきっかけとなって、彼女は一気呵成に突撃しだし。それを抑えるのにリリイ様、マシユ様の二人がかりとなって……そうなった直後にマスターは逃げ出しました。私を連れて。

その時点で、此方が名乗る暇すらなく。鋼の如く意思を固めた彼女に藤丸様が襲撃（治療）されてしまい。そして——そのまま、藤丸様を囿に、様々な情報をアメリカ軍の皆様から聞き出したのです。正直、大変申し訳なく……

彼女の名前や、この特異点の状況など……残念ながら、ナイチンゲール様が助けていた人達も敵軍が一体何者なのかは把握していませんでした。それでも分かったのは。相手は間違いなく——歴史においての正しい敵、『イギリス軍』ではないという事。

そして……我々がアメリカ軍ともう一つの軍勢を纏めて打ち払うまでは、アメリカ軍

も多少劣勢であったという事。

槍と、弓と、短剣と。この時代には些か以上に古い筈の装備を構え、鬨の声を上げて呐喊を繰り返すあの軍勢に。

『——あんなオーバーテクノロジー込みでも劣勢。アメリカ軍側が』

「アメリカ側が歴史を塗り替える勢いだつてのになあ……あれ以上つて、イギリスの英雄つて、アーサー王とかか？ 呼んだのは」

『いやあ……あり得ないとは言えないね。このころのアメリカ軍の勢いは凄まじい。イギリスの英傑を呼び出してこの不利を覆すともなれば、そのレベルの猛者達が出て来ても不思議じゃない気がする』

当然ながら、お二人の言う通り、今までの特異点以上の強力なサーヴァントが敵側に付いている事も、考えられる可能性かと思いますが……

「……あの、マスター」

「ん？」

「あの軍勢、彼らも……普通では、無かったような」

ふと、そんな言葉が口を突いて出ました。

「ふうん？ どんなあたりが？」

「あ、いえ……ローマの時の敵兵や、シャドウサーヴァント達とも違う……一人一人が文

字通り、血に飢えていたと申しますか……兵、というより、アレは」

マスターと戦っていたあの兵たちには、『闘志』がありました。

自ら戦いに飢え、戦いに向けて狂奔するような。兵が上からの命令であったり、頂点のカリスマに酔って戦うのとは、何かが根本的に違う。一人一人から生み出される闘争の熱と言っても良いモノ。

そう――

「……『勇士』」

「ゴルゴーンさんの言う所の、アレか」

「はい。そのような気がするのです」

ちらり、とテントの外を見つめます。

『ああいう手合いとは関わらないに限る』と苛立ち交じりに霊体化し、今は外にいるゴルゴーン様の事を思い出しました。あくまで印象ですし、本当にそうだという確証も無いのですけれども。

「ふうん……ドクター」

『うん。もう調べてる。世界各国、『勇士』という存在が根幹となつている神話……戦士でもなく、勇者でもなく。『英雄』には至れずとも勇猛果敢な多くの輝きか』

「えっ?」

なので、あくまでちょっと参考にして貰う位の気持ちで、口にしたのですけれども。お二人の食いつきが尋常ではないです……！　あの、どうして。急にそんな、全力で調べて頂く位の熱量で言った訳では。

「あ、えっと、その、そんな、ただの思い付きですし……」

「ただの思い付きにしちや説得力があった。前も言った通り、式部さんは人の熱の専門家だと思ってるんでな、その意見には耳も傾けるさ」

「ああああ」

頼りにしてるぜ、と肩を叩かれて、思わず顔を覆って俯いてしまえます。いえ、そう言っただけのではありませんが、それでも面映ゆいと申しますか。したつもりもないのですが、それでも面映ゆいと申しますか。

それに……狙ってやった訳でもありません。戦いの最中も、マスターの事を見ていた副産物ではありません。

押し寄せてくる敵に相対する姿は、大きく変わっていない様に見える。

でも、地面を蹴って跳ぶ姿も、相手に向かって突進する足取りも、私が見ていた姿よりも活力に満ちている気がしました。

身体の奥底にあった、何かを……あの仮面のような表情に滲んでいた、あの暗い感情、鎖の様な何かを振り切って。

自由自在に、自分の意思で、好き勝手に。

比べてみると分かります。以前までのマスターには、硬さのような物があつた事。今はそれすらなく……まるで、本当に子供の頃に戻つたようです。

そんなマスターの傍にいたのは——小柄な姿。

『楽しそうやねえ』

『冗談、お前と違つて殴り合いが特別好きつて訳じゃないんだ』

『ふうん？ ま、せやつたら……無理せんようにな？』

『——はっ、そりやあ分かつてるさ！』

まるで嵐の如き、酒？童子様。その戦いの渦の中で、マスターは呑み込まれない様に上手に立ち回っていました。何処に切れ目があるのかを、当然の如く把握して……息が合っている、と言うより、マスターが彼女に合わせるのが上手、と言えば良いのか。

それに……

『アサシン。一応、最悪な所まで行かない様にだけ頼むわ。後は好きにしていいいから』

『——ふう、はい』

……マスターが、藤丸様の傍に酒？童子様を控えさせた時。

ちらり、と彼女を見つめて。それに即座に頷くその仕草には、何処か慣れさせ感を感じます。それは……初めてのマスターと、サーヴァントがするには連携が取れすぎてい

ると思いました。

何時出会ったのか。

『ゆつくりしたら改めて報告書書くよ——雑に書きたくないし。うん』

そう言つて、未だ口にはしない。

マスター単騎で赴いた特異点にて。

そこできつと彼らは——顔を合わせている。そうとしか思えません。

その時の事を知りたい。あの張り付けていた暗い仮面を引きはがして、元氣そうに

戻ってくるまでに。一体、何があつたのかを——

「……んで、その感情に強い式部さんにお頼み申したいんだけど」

「はえっ!? あ、はい! なんでしょうか!」

「あの感情丸出しの婦長様を止められる文言とか……思いつきませんか? このままだと

藤丸君解剖される勢いなんですけれども」

「いえそれはちよつと……」

……それを知る前に。先ずは藤丸様を助けねばならないようです。はい。

第九十章

イギリス？ 俺達は——ケルトだ!! な実況はーじまーるよー。

さて。アメリカ軍に合流し、そこにいらつさつた鋼鉄の看護師、ナイチンゲール女史に圧倒されて……いた所で、今度はアメリカ側と戦つていた謎の軍勢が、再びの攻勢を仕掛けてきました。お前ら戦つてまだそんな経つてないダルルオ!?! もうちよつと間を開けてどうぞ（懇願）

という事で、なし崩しと言うか、流れに乗るまま、今度はアメリカ軍について、カルデア側が出陣する事となりました。しかも、治療者を収容するテントを襲撃された上にここから更に傷病者を増やそうとする敵軍に対し、ココの看護師がブチ切れて味方となつてくれました。

えっ？ 看護師イ？ と思うじゃないですか。

貴様ー！ この看護師様をいったい誰だと心得る！ 衛生と言う概念を根底から覆したクリミアの天使こと、フローレンス・ナイチンゲール様だぞー！ えっ？ ナイチンゲールつてアメリカ独立戦争の時に居たのつて？ サーヴァントに決まつてるダルルオオ!?!

『このテントまで、敵を来させはしません。ここは我々の聖域です』

そう言つて颯爽とテントから去つて戦場へ向けて歩いて行くその背中なんと雄々しい事か……！ カッコいい婦長の背中に惚れそう。

あ、でもごめん、僕には式部さんとゴルゴーンさんと酒？ ちゃんが居るんだ……！（勘違い野郎）でもこの三人とハーレム築けると思うと、思わず心のエクスカリバーが（クソ野郎）そろそろ自重しろこの頭チ○ポ野郎。

とまあ、ここまで褒めておいてなんですが『でも看護婦さんでしょ？』つて言われてしまうのは想像できますので……まあナイチンゲール女史のFGOに置いての性能を解説いたしましょうか。

先ずクラスはバーサーカーです（至言）

ここままでまず大きい……ありとあらゆる相手を粉碎できる火力を備えるのがバーサーカーっていう。しかしながら、彼女の強みはそこではありません。

FGOもここままで多くのサーヴァントが登場しましたが、しかしながら、サーヴァントの体力を回復する、傷を癒すという一点において、恐らく彼女に並ぶかもしれないキャラは存在しても、上回るキャラは存在しません。

そう、ヒーラー……スキルによって、お手軽にダメージを負った味方のHPを回復できるといふ強みに加え、宝具もHPと全体の状態異常を回復し、ついでと言わんばかり

敵の火力を下げるデバフ付きのサポートタイプ宝具。

彼女がいる事で、割と味方の場持ちがよくなったりするのです。

とはいえ、それはほんへではあまり特別な強みにならず……いえ、十分強力な特徴ではあるのですが、しかしFGOの形式では強みにはなり辛かったというか。

しかし、このFGORPGでは違います。ヒーラーとしてほぼ唯一無二にも近い回復力を持つ彼女は、召喚できるサーヴァントが少ないこのRPGに置いて、人員を、そして何よりユニットとして独立している『マスター』を回復できるという余りにもデカイ、デカすぎる……！

マスターが死ぬことがゲームオーバーの条件に直結するので、そりやあまあ、マスターを回復できるナイチンゲール女史の存在はデカすぎるのです。召喚出来なくてもスポット参戦してもらっただけでも大分デカイ。

最早この章でマスターが死ぬことはないと思っただけ頂こう!!

『——敵性サーヴァントの反応がある。二騎!』

……と言いきれたらどれだけありがたかったか。

正直な話、第五特異点以降は、この婦長が常に居てくれないとマスターが辛いレベルまで難易度が上がって来てまして。

その難易度上昇している敵の第一陣が来ました。

『王よ。見つけました。どうやら彼らがサーヴァントの様です』

さあ一人目……両手に構えるは黄と赤の『剣』。逆立った黒髪と精悍なイケメンフェイスが眩しいサーヴァントです。なんつーか女難の相にも負けない感じのマツシヴを感じますけれども。さて。それはまあ……

『戦線が停滞するのも無理はない……今こそ我らの出番です』

『流石は我が配下、デイルムツド・オディナ。君の目はアレだな、そう、例えるなら隼のようだ』

そんなイケメン騎士を引き連れて堂々と現れましたるは——あこつちもイケメン……しかもマツシヴタイプとは別タイプの金髪美麗イケメンでございます。こつちはオタクの目が潰れるタイプですね。

なんとというイケメンの見本市。

何方を見てもイケメンofイケメン。イ、イケメン顔面偏差値だけならウチの藤丸君と巖窟王だつて負けてねーし……ホモ君？ 雑魚クラスどころか戦力外通告受けてますけれどもナニカ？ フハハハ……ヘヘツ……

『我らフィオナ騎士団の力、存分に見せつけよう！』

しかしながら、この二人、顔が良いだけじゃあございませぬ。

フィオナ騎士団——人類史において尚、燦燦と輝く、最強脳筋集団伝説ケルトに置い

て名を高めた騎士団。エリンに仕えた精銳も精銳の騎士達であり、なんとあの『円卓の騎士』の原型にもなったとも言われる古い時代、神秘の時に生きた伝説の猛者たちです。

その先駆けとなるのが――

『我はフィオナ騎士団の一番槍――ならぬ、一の剣！ デイルムツド・オディナ！』

そう。フィオナ騎士団に置いては、円卓の『ランスロット』のポジション。フィオナ騎士団最強の戦士と名高い、『輝く貌』のデイルムツド・オディナ。

そして、その彼を従えるあの金髪の男こそ――フィオナ騎士団団長、フィン・マックス。神霊を屠った伝説を持つ、人類史でも数少ない真の英霊の一人。

双方、フィオナ騎士団に置いてのワンツートップの強さを誇るバケモノ揃い。こんな近代もド近代なアメリカにはいけない『神話』の登場人物です。馬鹿なつ、こんな化け物がどうしてこんな……！ っていう反応をするレベルの怪物二人なのです。

『つまり、貴方がたが病原の一つということですね』

うーん、でもナイチンゲール女史のお言葉、大正解！ 実際こいつらがこの特異点の惨状を作り出して元凶に間違いないので……しかし、ただの病原ではありません。

という事で参りましょう。

先ずは一戦目、フィオナ騎士団最強と名高きデイルムツド・オディナ戦。かなりの数のケルト兵を引き連れての登場です。

さて、このデイルムツド。武装は、『剣』です。

デイルムツドを知る方の中には『アレ?』と思う方もいらつしやるでしょう。そう、皆様が良く知っているデイルムツドと言えば、両手に二つの槍を携えたイケメンではなかったでしょうか。F a t e / Z E R O において初登場したデイルムツドはその装備でした。

二つ槍装備のデイルムツドは、片方の槍によって魔力の防御をすり抜け、もう片方の槍で付けた傷を治せない等、普通に対人戦に置いてあげつない性能しているのですけれどもさて……こっちは別の意味で厄介極まりないのです。

何がって？

いやまあ、単純に出力がえげつないんですよコイツ。

セイバーのデイルムツドは、相手の防御をすり抜けて一撃を与えたりとかいう小技ではなく瞬間の火力に全てを振り切ったタイプのパワーサーヴァント。ゲーム内でもその性能は変わらず、一瞬でこっちの体力削り切る変態的な爆発力が脅威です。

『まだだ! ……断ち切るっ!』

断ち切るな(半ギレ)

……F G O R P G において、この第五特異点に、ランサーなデイルムツドと、このセイバーのデイルムツドと、何方が登場するかは運です。

んでどっちがマシか？ どっちもクソだよ（半ギレ）

ランサーのデイルムツドは、万が一マスターが宝具で負傷させられようもんなら、ランサーを撃破するまで最大HPが減少するクソみたいなデバフ付けられますし。

そしてセイバーのデイルムツドも上の通りですよ。ぺっ!!

ああ油断しきれぬ相手ではありませんが……しかし、此方も第五特異点に向けて戦力を整えて来たのですから、流石に単騎のサーヴァント相手に苦戦するというのは――

『――ふむ。流石に我が騎士がいかに勇猛とはいえ、この数の差は如何ともし難い。うむ、コレは切り時だな!』

……おん？ なんだフィンマックール、その不穏な台詞は。おいやめろ、これ以上の戦力の追加とか冗談にもならんぞ。

『――行くといい。私に比肩する程の神槍、李書文よ!』

『……っ?! 後方に敵サーヴァント反応、これは……挟まれた!』

……おふあっ?! (困惑)

えっ、誰が来たって言った？ 李書文？ えっ？

えっ？

第九章・裏：荒れ狂う神槍

それは——殆ど叫び声と言うより咆哮だった。

人の喉から漏れ出す類のモンじゃない。獰猛な野獣の口から放たれるそれだ。山で何度も、何度も聞いたモンだ。

闇の中に響き、テリトリーに入った人の足を竦ませる。

……つまりこんな叫びをするって事は、こっちに飛び掛かって来るその前触れで——
!

「——散開ツ!!」

咄嗟に叫び——くるりと振り向いたその先に居るのは式部さんのみ。どうやら残り二人は普通に逃げ出していたらしく、取り敢えず、残っていた彼女に向けて必死になつて突進である。全力全開である。

「失礼っ!」

「きゃっ……」

すつと足の下に手を入れて——相変わらず足ムチつとしてんなくこの人——彼女の

身体を抱きかかえて走り出す。うーん、相も変わらず持ち上げるのに全然苦勞しないな、もうちよつと食った方が……いやそれは今どうでも良い。急がないと隕石並みのインパクトが降つて来る気が！

「っ——」

ぞわつと背筋に走る嫌な感触に、予感確信になる。懐の彼女を、強く抱きしめて、さらに大きく一步を踏み出して、地面を——抉る。つもりじゃない。力任せに地面を抉る。その分の力を込めた反作用は——体に全て、働く!!

その途端——

身体が吹っ飛ばされたみたいに、景色が急速に流れていくのが分かる。しつかりと抱えていなければ、式部さんを取り落としていたかもしれない。それ位の、圧力が。

そして、ほんの一瞬、自分自身の出力に目を回した所で——

どん、と。何かが体にぶつかって来た。

「——っ!?!」

身体をこわばらせたけど、しかし痛みはない。何か攻撃がぶつかった訳じゃない。一瞬何かがぶつかったように錯覚したのだ。

崩れそうな衝撃に、何とか足を踏ん張って耐えてから。ちらり、と後ろを確認する。

地面に突き立っているのは——細い、槍の穂先。刃がザクリと、地に深く、深く……

そして大地を叩き、そこからクモの巣がきの如く、大きくひび割れているのが見えた。
「——やべえなありやあ」

細い刃。切り裂き、貫く為の繊細なモノの筈なのに。

落ちて来た流星の如く、地面を破壊するなんていう、それこそガチ鈍器でやるような大偉業を、やってのけると来た。

単純な膂力か、それとも全身の力を使って成した絶技なのか。どっちにしたって、サーヴァントの中でも間違いなく……トップクラスの怪物。

藤丸が請け負っててくれる、本来俺達が迎撃しようとした敵勢も、とんでもない大英傑二人組らしいが。それに追加がこれとか、笑い話にもならん。

「李書文、だっけ。どんなサーヴァントなんだありやあ」

『——神槍と謡われた武の求道者だよ。中国武術に伝わる『六合大槍』の妙技を極めたとされる飛び切りの、ね』

中国武術を極めた武人。

今回も俺のバックアップを行ってくれているダ・ヴィンチちゃんの言葉に、トップクラスの怪物と言う評価は間違っていないことを確信した。腕利き、とか、達人でもなく。神なる槍とは。

「武人、か」

『目の前の光景を見ればね……そりやあ、あんな馬鹿みたいな破壊を人のみでやってのけるんなら、神と謡われても何ら不思議じゃない、かな』

「まあ確かに、そりやあ神とも呼ばれても、不思議じゃないけども」

……ゆつくりと顔を上げる。

括られた紅い髪は、今は……まるで、血塗られた様にも見える。此方を睨みつける瞳は血走り切つて、まるで狂犬病の患者にも見える。

それだけ真剣に戦っているのだ、と考えてしまえばそこまでなのだが。

それでも、違和感がある。というか。

「……正気じゃねえよなあ、アレ」

『まあ、言つた私が言うのもなんだけど。アレで神の槍と呼ばれるようには思えないかなあ。どつちかと言えば『狂犬』とかあだ名がつくんじゃないかなあ』

「だよなあ……よつ、と。式部サンなら、アレになんて名付ける？」

懐に抱えていた彼女をそつと地面に下ろして。話題を振つてみる。

少しこつちを見つめて。迷うような仕草をしてから。

「……『魔槍』でしようか」

「うーん明らかに魔の者判定。まあアサシンよりもよつほど魔性のモノっぽいしなあ」

感受性豊かな彼女がそう言うのであれば俺達の印象は間違っていない気がする。と

なればマスター君、あの李書文さんが、なんであんな事になっているのか……凄い何と
いうか心当たりがあるんだけども。

「リンボ、とかいう奴の仕業かね？」

「——そうなんちやう？」

その言葉に、しゆたり、傍に降り立った影が応える。ランサーを見て、『うへえ』と言
い出しそうなくらい分かりやすく、顔を顰めて居る。まあ分からんでもない。彼女の趣
味とは程、遠いだろうしなあ。アレ。

もう一人は、と周りを見回し。丁度、少し離れた位置でにやにやと笑っているのが
……なんで笑ってるんだらうか。

「くくくつ、私に挑んできた勇士共など、あんな顔ばかりだったが。アレが案外、その李
書文とかいう奴の本性なのではないか？」

「いやあ。確かにそれも全然あり得ない訳じゃないけど」

流石にそうではない、と思いたいのは人間のエゴだらうか……うん。それは取り敢え
ず置いておこう。

見ただけなら分からない。だったら判断する手段は一つだ。

「ダ・ヴィンチちゃん。近くに行けば精度の高い情報得られるよな？」

『そりゃあそうなるかあ。リンボの情報は一つでも欲しいからねー』

「アレがリンボ野郎の仕業なら情報ゲット。素ならゴルゴーンさんが余計張り切る。どっちに転んでも得しかねえってな」

「おい、誰が張り切るだど？」

軽く屈伸運動。いや、俺が突っ込んでみてもどうにもならん事は分かってるんで。流石に援護してもらおうし、ちよつと一緒に突っ込んで来てもらおうけど。

「式部さん」

「はっ、はい」

「援護お願い。アサシンと一緒に、ちよつと威力偵察してくるわ」

いつも通り。援護は式部さんに。彼女以外はちよつと後ろは任せられない。んで、ついて来てもらうのは……アサシン。

まあ、ゴルゴーンさんでも良いんだけど……ゴルゴーンさんは我がチーム最強の火力だ。ちまちました戦いさせるよりは、最後に一発ぶち込んでもらうのが良いんじゃないだろうか。

それに、相当激しい殴り合いになるだろうし。そうなった場合、連携が上手く取れるのはアサシンの方だと思う。

……めっちゃニヤついた顔でアサシンがこっち見てるのが不穏でしかないけど。しゃがんだ姿勢で、両手で顎から頬を包むようにしながら、悪戯つ子を前面に出してい

るのが丸わかりの態度だけでも。

「……………行くぞアサシン」

「はあい。まあ、うちは楽しませてもらうだけやけど」

「そこは俺が合わせるさ。お前は——『好き勝手にやれ』」

「……………んふふつ、うちにそう言える旦那はん、ほんま好きやわあ。ええよ。楽しませて貰おうやない」

——風吹く。

その中に、髪を靡かせながら、アサシンが一步を踏み出した。その後が続く。

向かうは、槍を構え直したその一振りでここまで届く程の風を起こす、李書文と呼ばれたサーヴァント。

とんでもない怪物だ。想起するのは……………雷と風、という別種のモノではあるが、俺達に牽制とばかり雷を降らせた、平安の武人。

アサシンにとつても、余りにもキツイ正式なサーヴァントとしての初陣。しかし。

隣を歩む彼女は、まるで苦しそうな部分を見せない。どころか、喜悦の色すら浮かべている様にすら見えてしまう。

「ねえ旦那はん？」

「なんだよ」

「偵察、言うてたけど……別に、骨抜いてしても構わへんやろ？」
……コレだ。

全く、マスターとして油断できない鬼つ子だな、と改めて再確認する。あの怪物相手にもう自分の『ツمامミ』の事を考えていると来た。

サーヴァントの骨なんざ、コイツにとつちや最高の酒の肴だろう。

「そうだな——やって見せてくれ、アサシン」

だからこういう。不可能可能じゃない。ただ、彼女の思うように、ほんの少し背中を押すように。口にして——

「マスター」

ふと、声をかけられた。

ちらりと後ろを振り向く。此方をじっと見つめる、我がファーストサーヴァント様と目が合った。あんまり無茶をしない様にと、前から言われている事を、改めて思い出す。

だからまあ、今回の事にも、思う所はあるかもしれない。

とはいえ止まる訳にもいかんし。取り敢えず。

「——怪我しねえように、頑張るよ」

少し自意識過剰かな、とか思つて、面映ゆいけど。そう返す。

式部さんは……一瞬、口を開こうとして、止まった。それを見て、ああやっぱり自意

識過剰なこと言ったかなあ、と頭を掻きながら敵に向けて顔を向けて――

「――お気を付けて」

後ろからかけられた声に、目を瞬かせた。

にやりと、笑顔が浮かんでくる。

「おう」

言葉を尽くそうと思っただけ。

でも、変な言葉を言うよりも、と思つて。拳を掲げて、返す。

更に一步を踏み出して――めっちゃにやにやししながら覗き込んでくるアサシンが目の前にいた。思わず一步下がりがりそうになつて、耐えた。

「な、なんだよ」

「んーん？　なんや、青臭い臭いがすると思つてなあ？」

「やかましい」

第九十一章

どうして……どうして……な実況、はーじまーるよー。

さて、今は治療用テントに攻めて来た敵の軍勢を押し返した後でございます。藤丸はチーム・フィオナ騎士団を、こっちは背後から奇襲かけて来た暴走ランサーを。それぞれ全力で戦って追いつきました。

途中、こっちのアメリカ軍、フィオナ騎士団とランサーの軍勢の二つ以外の、別の手勢が乱入して来たりもしてましたが……残念ながら其方と接触することは出来ず。

顔の真ん中に真っ白な線を引いた、黒い肌に逞しい上半身を剥き出しにしたナイスミドルは一体……私、気になります!!

……んまあ、それは兎も角として

えー、順調に第五特異点に、大分変更点が出てきたのが分かりますね。はい。いきなり出て来た『李書文』なるランサーがいきなり背後からカチコミかけてくるとかそんなほんへではなかった展開ですしお寿司。

実績解除の為に色々やって、特異点にちよこちよこ変化が出てきましたが、第五特異点ともなればその変化もかなり露骨になって来ているという事です。

因みに変化がどっち方向のモノかって言えば……難易度を上げる方ですよね当然ながらハイ……知ってた。寧ろそれ以外は無い。ホモ君が強くなるうと、それ以上に強くなっていくのがFGOというもので……うう、辛くって……

『——ひとまず敵サーヴァントの反応は消えたようだけど……こ、怖かったなあ！ さっきのランサー！』

『君ねえロマニ。司令官なんだからもうちよつと威厳保ちなよ』

『だってだって！ あんなのタルタロスの番犬とかそんな奴らの親戚みたいな迫力してじゃない！ 本当にランサー!? バーサーカーじゃなくて!?!』

ああスゴく落ち着いたツ！（にっこり）

やっぱり絶望の未来を見つめた後のロマニとダ・ヴィンチちゃんの漫才はすう〜つと五臓六腑に効きますね……これだったらいくらだってやって行けそうです。

んで。ロマニの言う通り、襲い掛かって来た李書文なるサーヴァント、言葉にならぬ咆哮を上げ、只管に攻撃力を上げて殴りかかって来る暴走特急同然の怪物でした。

……ですが、これはおかしい。

かの李書文、と言うサーヴァント。確かに狂犬らしい一面はありますが、しかし激情を剥き出しにして大暴れするタイプではなく、寧ろ冷静に、且つ無駄なく、相手の命をとってくるヤベエタイプの狂犬な人なんですよ。

正に、殺人拳を極めた武人のスタンダードを、極めに極めた、みたいなガチガチな漢なイケ武人なはずなんですけれども。

しかし、先ほどホモ君達が迎撃する事になったのは、そんな冷静かつ冷酷に命を狙つて来る仕事人ではなく……文字通り、ダブルサンパワーを発揮するシャンプーとか消臭剤の精霊さん染みた力強さで圧して、押し、推して……みたいなどんでもない重戦車。

キャラがちげえ!!!

ほぼ別人!!!

いやアレが本性だと言われてしまえば否定はしかねるけど!!! (後方理解者面)

……とまあ、色々ありましたが、要するに敵の戦力が増えたという事です。これから色んなタイミングで、此方に向けて襲い掛かってくることでしよう。あんながこれからポンポン襲い掛かって来ると考えると割と恐ろしい気かしねえ……!!!

クソつ、どうせリンボだろこんな無茶苦茶な戦力を仕掛けてくるのは! 野郎、絶対に許さん……そんな確証ないけれどもさ、でもコイツに全責任を擦り付けとけばいいつていう風潮が……無いけどね。最近。ほんへで面白お兄さん化が進んでしまつて皆絆されてしまつている。

いや、俺も水着とか見たら割と『くそつ、夏をエンジョイしやがつて……!』つて思つてしまいましたけど。でもそう考えると、そういう濡れ衣を被せるのは良くない——

『因みに、あの槍使いに心当たりは？』

『ない。他の場所で戦ってる奴らにも、あんな化け物染みた野郎がいたなんて聞いたことが無いよ。出会ったら間違いなく噂になつてるだろうし』

『なんか、妙にデカいアジア人系の白黒な野郎は見た事あるけど……』

リンボじゃねえか!!! (激熱リーチ)

もうその特徴はリンボじゃねえか! デカいアジア系で白黒な男はもうほぼリンボじゃねえか! リール三つ揃つてんじゃねえか! やっぱアイツじゃねえか!

という事で、どうやらこの特異点、リンボ氏がキツチリ出張して此方を掻き乱しに動いてくださっているようです。よし、リンボ氏の熱いパトス、受け取つたぜ!! (殺意)

今度こそ冥府に送つてやるからなあ? (うきうき)

『ナイチンゲールさんがお医者様に指導している間に色々聞きこんでみましたけど。有力な情報は出ませんでしたね』

『うーん。とはいえかなり頑張つたからね。コレで出ないなら仕方ない、かな。これ以外の事は、この先で調べるとしよう』

と、私が殺意を滲ませてこの先の強敵に対する覚悟を新たにしていた所で、どうやらこちらも出発する準備が出来たようです。そう、あのナイチンゲール婦長も一緒に、この特異点攻略の旅について来て下さるといふ。

さっきの会話からも分かる様に『治療一筋』どころか、『重突撃治療専用戦車』みたいな怪物染みたぶつとい信念を心の柱にどつしりと据えている鋼の意思餅の婦長をどうやって!?! と思うでしょうが、藤丸君の『病原菌の元を絶てば皆健康になるから……』(下衆顔)とかいう極まったゆで理論みたいな事言い出して捻じ伏せました(震え声)

どうしてそれで説得できてしまったのか、と言う話ですが……しかし間違つてはいないですよ。

実際、婦長がどれだけ患者を治療していても、結局の所、向こうはこの時代を焼き尽くす為にやって来た侵略者な訳ですし。向こうが滅びるかこつちが壊滅するかしないかと患者は居なくならない訳です。

婦長としては、患者を少しでも減らすために只管邁進している訳で。ケガ人を無限に生み出すクソ野郎を滅ツ☆する事で傷病の根源を立てるのであれば『やりましょう』つて速攻で鎮く位には覚悟決まってるんですよ。

『……今、銃を撃つ音が聞こえたような』

『気のせいです、行きましょう』

とはいえね。看護婦さんですし、そんな拳銃バンバンブツパする程血の気が多い訳ではないですよ。うん。銃を撃った音が聞こえたの気のせいですよ、ええ。

……一つ事実を言うとするのであれば、彼女は戦場出身なため、戦場においての混乱

を力づくで収め、秩序を保つて患者を治療するというやり方を熟知しています。故に時間を無駄にしない為に、最短最速をいつも望んで、ちよつとしたパワーなやり方を取る事もありますよ。そりゃあ。

——さて、ナイチンゲール婦長を加え入れて、パーティは万全。いよいよ、アメリカ縦断、特異点修正の旅の始まりです。

『お待ちなさいなフローレンス。何処に行くつもりなの？』

さて、そんな勢い勇んで出撃——と言ったところでしかしながら、ここで出ばなを挫くかのように『待った』の一言がかけられました。

この野営地に、大破した筈の『機械化兵士』が何人もぞろぞろと……その数たるや、この場所を取り囲めるくらいには数が居るといふ。

そして敵を引き連れて現れるは……おお……お美しい。

明るいパープルの髪色は、その高貴なる魂を表す色。幼い美貌の中にも現れる理知的な光と、白い艶やかな肌と言い……うーん、コレは最強で究極のキャスター（恍惚）

光り輝くサーヴァントたちの中でも燦々と輝く、神秘学の権威たるオカルティスト。『自己紹介もせずにごめんなさい。アタシはエレナ・ブラヴァツキー。ま、世間的にはブラヴァツキー夫人の方が有名なのかしら』

皆様大歡喜のキャスター、エレナ・ブラヴァツキーさん、ここに降臨でございます。

ほんへの性能解説……は、直接対決した時に話すとして。取り敢えず、今は彼女がどうしてここに来たのか。まあ、要するにアメリカ軍に協力していたサーヴァントがいきなりここを出てこうとしているので『ちよい待ち』する為に来たのだと。至極当然！

つまり、エレナ・ブラヴァツキー氏は、治療の為に取り敢えずアメリカの野営地にいたナイチンゲール婦長と違い、正式にアメリカ側についているサーヴァント。

そして、そんな彼女が付いている側の『アメリカ西部合衆国』と『フィオナ騎士団擁する軍勢』が、アメリカを東西に分けた大戦争を行っているのが、この特異点の現状であるという事が、エレナさんの口から語られました。

南北戦争どころか、東西戦争な訳ですね、今は。そりゃあ歴史的な戦争が『別のモノ』にすり替わってるなら、アメリカの歴史も大きく変わるでしょう。

そして、そのアメリカ西部合衆国はと言えば。

『王様が世界……というかアメリカ大陸を制覇すれば、それはそれで問題ないわ。恐らく、何処の次元からも分離した孤島となって、彷徨い続けるでしょう』

東の軍勢とは別の意味で、こっちは相容れない事言ってるという……そんな事したら歴史こわれちゃうっぴ!!

エレナさんはその王様に力を貸している都合上、此方の味方には付いてくれないので。残念。

交渉は決裂、此方ナイチンゲール婦長を伴つて離脱する事となりました。

それが上手く行くかは……まあ、それは、此方に差し向けられたその王様によって、バベツジ氏の『力』を模倣し作られたという機械化歩兵共を叩き潰してから考えると致し
ましようかね……！

第九十一章・裏：太陽の如く

「一つ聞いて良いかい、お嬢さん」

「なあに？　頭のとかりの眩しい殿方」

「てかつ……!?!」

……なんと惨い。マスターが一瞬で崩れ落ちました。

当世風に言うのであれば、あまりにも『どすとれーと』な一言というしか……!!　いえ只管真つ直ぐという訳ではありませんが、しかし的確にマスターの特徴的な部分を捉える鋭い一刺しです。

今まで、禿等とは色々言われて気にしてもいなかったのですが……しかしテカるといふのは些か、効いたようで。地面の上に四つん這いで項垂れて――

「……俺そんなテカってる?」

その姿勢から。そう勢いよく振り返りながら聞かれました。余程気になっているのでしょう。一瞬、言うべきかを迷いましたが……しかし。

「い、いえ！　マスターはお若いですし、常識の範疇かと!」

頭皮と髪は、古来より人の美点でもあり、同時に弱点でもあります。下手にあげつら

れば、心の傷も深くなります。故にここは明確に事実として、気にする事は無いとはつきりと伝えるべきです。

「……テカってるはテカってるんだ……」

「ああっ!? しまった!?」

しくじりましたっ! 追い打ちをかける形に!

「ご、ごめんなさい」

「……大丈夫、大丈夫、そんな苦しくない。うん大丈夫だから」

「茶番は終わったかしら?」

……さて。

顔をしくちやにさせながら立ち上がる姿はとても大丈夫そうには見えませんが、兎も角。マスターは立ち上がりながら、そのエレナさんの言葉に頷きました。

とはいえ、マスターとしては頭を何度か撫せている辺り、決して終わったとは思っていないようですけれども。

「ふっ……いきなりこっちの出鼻を鋭い言葉で挫くとはやってくれるねえ」

「そんな落ち込むような事でも無かろうマスター。ただの事実だろうが……ふんっ」

ばきいっ

「まあ事実かは、事実かは! 兎も角としてな。さて、後ろの光景は見えるだろう?」

「……ええ。よく見えるわ。こっちの機械化歩兵の銃が、貴方のサーヴァントの手とうか尾っぽによって、粉々にされたわね」

「そうだ。んで、今ので、そっちの戦える兵は二桁を切った」

……もしかすれば、エレナ・ブラヴァツキーがマスターを刺すような一言を放ったのは決して、彼を悪戯に傷つける悪意に溢れたではなく。ある種の仕返しの意味があったのかもしれない。彼女の少し呆れたような、困ったような顔を見れば、そんな気持ちが見て取れる、様な。

彼女が展開した機械化歩兵は……我々の手によって既に制圧されています。

ここら一体を包囲するその数は驚くべきものだったのですが。しかしながら、此方も万全にて。マシユ様を先頭に、リリイ様と酒？童子様が切り込み。三人の動きに掻き乱されて敵方が混乱した所で、更なる鉄槌としてゴルゴーン様と巖窟王様が呐喊。

私も微力ながら背後から力添えをいたし……結果として、ナイチンゲール様が動く暇もなく。

「ゴルゴーンはん、殺したらあかんよ？　言うとつたやろ？　後々が面倒になるつて」

「大丈夫ですよアサシンさん！　ゴルゴーンさん、ちゃんと手加減してますよー！」

「ふん、と言つても半殺し（ミディアムレア）も良い所だがな……」

「手加減できる相手ではありませんでしたし……アメリカ西部合衆国の皆さん、凄い練

度だったかと思えます」

敵方の戦力は壊滅。流石に、決着がこうもあっさりと付いたことで、向こうとしても嫌味の一つでも言いたくなくても、不思議ではないかと思えます。

「サーヴァントが六騎つて。聖杯戦争じゃないんだから、溜まったもんじゃないわね」

「これだって『聖杯』を求めてやりあう戦争には変わりねえだろ？」

「ま、そうなんだけどね……」

それでもマスターが『まだやるか』と声をかけたのは。恐らくは……エレナ・ブラヴァツキーが『余裕』を持っているのを、見抜いたからでしょうか。

呆れにも、困ったような表情にも。彼女の確かな微笑みが混じっているのです。余裕がなくとも笑うような、闘志を鼓舞するようなモノではなく。勝ちを疑っていない、そんな表情の様な……

「とか言つて愚痴つてるのに、余裕を保っているのが解せないけど」

当然の疑問符を浮かべるのは、藤丸様。

ダ・ヴィンチ様をお願いして、周辺の探知をしていただいていますがかし……追加の機械化兵の反応も、別のサーヴァントの接近反応も見られません。

彼女は、ほぼ孤立無援と言つても、不思議ではない、気がするのですが。

「まあ、私がやる必要があつたのは、時間稼ぎだし」

「時間稼ぎ? でも、近くに援軍は……」

「案外早く来てくれて助かった。それじゃ——」

「後は任せるわ、カルナ!」

——その瞬間の事。

「——っ」

『うわっ!? なんだ!? 真上!? コレ真上に反応無いかいレオナルド!?』

『あるよ! 強制転移だとう……!? ええいどんなチートをやったんだいコレ!?』

天を仰いだのは、巖窟王様と、酒? 童子様の二人。

そして同じタイミングで、管制室のお二人が焦り出したのが分かりました。真上、そ

の言葉に、天を仰げば、そこに——

「——了解した」

それは、降りてきました。

体を溶かし尽くしてしまおうと錯覚する程、此方の肌に汗をにじませてくる程、そんな中でも、背筋が凍りつくような、寒気が体に走る程に。ジリジリと、全身が焼け付くような魔力を身に纏いながら——

『——な、んだ、この零基数値……トツプクラス!? いや、コレは更に……!?!』

雪よりも白い髪に、同じくらい白い肌は、余りにも人離れした色。太陽の如き輝きを

自ら放つ黄金の鎧と、そして武器とは思えぬ、美術品と言えるほどの見事な装飾の槍を一振り、携えて。

同じ人型なのに、そこに居るだけで、同じ生き物とは思えぬ程の『圧力』が、身体にかかる気がします。巨人と相まみえたのかと思う程のそれと、熱と、光。まるで、そこに居る青年は――

「太陽……?」

ぼつり、と言葉が口から零れます。

そう、まるで、天より日輪が人の形を取って降りて来たかのような。恵みの日のそれではなく、余りにも矮小な人を容赦なく焼き尽くす、暴威の化身として、形を成して。

「異邦からの客人よ、加減はしない」

そこで、ハツとしました。

アレは、エレナ・ブラヴァツキーが引き連れて来た援軍。敵なのです。見ているだけではいけません、逃げるにしろ、戦うにしろ。

しかし。

既に高まりつつある魔力。最早それは、熱だけではなく……魔力そのものが焰の如く、揺らめく程に濃密に、そして更に高温に、高まりつつありました。宝具による攻撃である事は明確。もう間に合わない、という絶望的な事実が頭を過り――

「——悪いなロマニ、自己判断だ！ 令呪をもって我がサーヴァントに命じる！ ゴル
ゴーン！ 宝具を解放しろ！」

「良いだろう、その命令、今は従ってやる……!!」

——それに応えるように。

膨大な魔力が、背後から吹き上りました。振り返れば、天に拳を掲げるマスターの姿。
その手から……一画、令呪が消えています。

承認は得ていませんが、その前に令呪を解放したのでしょうか。魔力を注ぎ込まれ、そ
してそれを呼び水に、更なる力の撃鉄を起こす、ゴルゴーン様の姿が

それはあの太陽にも負けぬ程に高まる、呪詛の気配。

「そっちの奴が切り札らしいなあ……!!」

「ゴルゴーンって……ウソ!? ギリシャ神話でもトップクラスの怪物じゃない!」

「だがこつちも『力』と『格』なら負けてねえってんだ！ いっちよこつちの偉大なるお
方と、力比べと行こうぜ、大英雄！」

伸びた髪が螺旋の如く絡まり、そして……巨大な生き物の如く形を成す。

その姿に——一瞬、天上のサーヴァントが、目を細めたように見えました。

「——貴様らの呪いを返してやろう」

「成程……道理だ。此方にあるものが、そちらに無いとは言いきれぬのは——良いだろ

う

「その無駄に眩しい装飾ごと、溶かし尽くしてくれ……！」

天上に太陽。

地上に暗黒。

二つの力が、ぶつかってもいないのに、火花を散らす程、吹き荒れているのです。最早一步も動けません。

迂闊に動けば。それだけで、全てが吹き飛ばされる如き、この圧力の中で。

「墜ちよ英雄……『強制封印・万魔神殿』!!」

「『梵天よ、地を覆え』!!」

「や、やばっ……マシユっ！ 防御を！」

その、圧力が弾けた、その瞬間。

私は——意識を飛ばしてしまいました。

それ程の、衝撃だったのです。しかし……確かに、記憶には残っています。

目を焼く真夏の日差しにも勝る程に、眩く輝く一条の熱線が、天より撃ち降ろされ。そしてその輝きを呑み込まんとする赤黒い呪詛の咆哮が、天に向かって叛逆するかの如く上り。

文字通り。

天を割く程の、激突を見せたのを。

第九十二章

結局ソロ活動……な実況、はーじまーるよー。

前回は……絶望のカルナさんとの『戦闘』に突入しました。

ほんへではなかったこのイベント。ほんへではカルナさんが下りて来た時点でボロカスに負ける展開になるので存在しないのですが、しかしながら、今回は一応、戦って抵抗する事が出来るようになっていきます。

やったぜ!! とはいきません。このステージのカルナさんはイベントのボスとして無慈悲な強さを振るつて来るので、ほぼ負けイベです。

じゃあなんでそんなイベントやらせるかって言えば……このイベントで何をやったかによつて選択肢の分岐があつたりします。

『手洗い歓迎だが悪く思うな。『梵天よ、地を覆え』!』

このセリフと共に宝具が撃たれるのは一ターン経過後。これまでに相手の体力を削り切るのは、不可能な数値なのですが……しかし、その宝具発射に合わせて、唯一こつちも出来る事は……令呪を切るか、NP溜まる礼装使つて宝具をぶつ放す事。

そう、頭の悪い即ブツパである!

今回は、そうですねえ……何となくこつちの中で一番火力高そうなゴルゴーンさんにお願いしましょうか!! 令呪いくゾオオオオオツ!! オオアっ!! (最大出力)

直撃! 破壊! 粉碎! ……とはいきません流石にカルナさんですからね。そりゃあゴルゴーンさんの宝具の直撃でもそうは倒れませんよ。

んで? さつきからカルナさん、カルナさんって言ってはいますが、今、目の前に立ちはだかっているのはいったい誰なのかっていう話ですが……

カルナさん。

インド神話に登場する英雄にして、インド神話世界でも恐らくはトップに位置する強さを誇る伝説の武人でもあります。

インド神話はぶっ飛んでる描写も多いハイパワーインフレみたいな世界観なのですが。その中でも武芸の達人と言う明確な描写があり、更には最高ランクの神格である『インドラ』より加護を受けたというバフもかかっているのです。

ノーマルな神話でも、まあイカれているのですが……型月ナイズされたカルナさんはさらに化け物染みているのです。

F G OでもほとんどのステータスランクがB以上。F a t e / E X T R Aに至ってはB以下のランクが一切なしという、マスター次第によつては文字通り何物も敵にもならない戦闘能力を発揮するのです。彼、カルナさんと言うサーヴァントは。

そしてここまで圧倒的に強いのに加え、何と性格まで清廉潔白と来ました。

欲も無く、無駄におしやべりという事もなく、そして、サーヴァントとして、自らの武に確かな誇りを持ち、敵に敬意を払う事を忘れない……魔力の消耗とかを考えなければ理想のサーヴァントと言えます。

……唯一の弱点はちよつとだけ、ほんのちよつとだけ言葉が足りない部分があるところくらいですが、まあそれは後々という事で。

んで、プレイに戻りまして。

まあそんなバケモン染みたサーヴァントとの宝具ブツパ合戦が起きると、一体どうなるかと言いますと……

『——み、皆無事かい？ 全く……宝具の打ち合いをマシユが防いでいなかったらどうなっていたか……それでも君は大きく弾き飛ばされた訳だけど』

ホモ君は離脱する事と相成りました。

どういふ事かと言いますと、宝具と宝具の激突による余波が、ホモ君達を吹っ飛ばしてくれたわけなのです。要するに事故によって奇跡的に離脱できた、と。

因みにこれ、他のサーヴァントでもなる事はなるんですが、しかし神代の反英霊としてトツプクラス、神祕の質も桁違いのゴルゴンさんと、インド神話最強の英雄の一角として名高いカルナさんの宝具の打ち合いでなら、寧ろマスターとサーヴァントも吹っ

飛ぶという説得力も出るというモノです。

という事で、コレがお互いに宝具をぶつ放すとなる分岐です。因みにコレで宝具をブツパしなかった場合、普通にカルナさんに捕まってデンバー行きになるのですが、そうするとほんへと同じルートになります。

んで、こつちのルートは……藤丸君達が取っ捕まってしまうのまでは同じなのです。ホモ君達は無事とは言えずとも離脱が出来るのです。

『さて……藤丸君達とは、離れてしまったようだね』
ですなぁ。

『幸い、キミのサーヴァントは一緒だ。取り敢えず、周辺を警戒しつつ、野営できる場所を探して欲しい——ちよつと藤丸君達を救出するプランを練らないといけないからね』
……と、こうなるのです。

という事で、カルナさんにとっ捕まった藤丸君率いるカルデアメンバーと、フローレンスを無事に救出する手立てをこつちで練っていきたいと思います。

同じ特異点にいても結局この前と一緒に単独行動か……いいえ、今回はダ・ヴィンチちゃんと一緒に居ますからねえ。カルデアのバックアップを受けているという時点で余りにも大きい。

此度、藤丸君は無念にもアメリカ西部合衆国の懐に仕舞われ、それを取り返せるのは

こつちのホモ禿しくない……よっしゃ！　ここは主人公藤丸君以上に主人公らしい活躍するチャンスやで!!

まあ、本来アメリカ攻略に必要なのは向こうのルートなんですけど。やっぱ現地の問題を解きほぐし、特異点を解決するのを……最高やな！（王道主義）……じゃあなんでホモ君はこつちルートかって？　経験値稼がないといけないから（真顔）

向こうのルートは、割と脱出するまで敵が少なめなんですよね。いやまあ捕まっているから当然と言えば当然なんですけど……しかし、此方は彼らの脱出の為に色々やらねばならない都合上、その間も敵と戦えるのです。

兎にも角にも、これからの特異点、一つ越えるだけでも一段階どころか二段階三段階も難易度がブツパしていく修羅モード。

乗り越える為には、只管に自らを研鑽し、レベルを上げ、マスター自身もより強くなっていかなばなりません。強まれ筋肉。深まれ神秘。今こそホモは極まれり。ホモが窮まった所で内なる野獣が目覚めるだけなのでは？（名推理）

ホモ君と藤丸君の関係で薄い本が厚くなりそうな疑問は良いんです。そういう訳で、如何にホモ君がピンで活動する事になろうとも、将来に向けてレベル上げは必須。

という事で、ホモ君によるアメリカピンの旅、スタート！　先ずはその為いったん落ち着くための野営地探しからになります。地道イ！

『——つと、早速か！ 反応アリだ。此方に気が付いた野生の獣、かね。反応がある辺りは……うん、良い感じに開けてて野営地にも良さそう、だけど……？』

『どうされました？ ダ・ヴィンチ様』

『いや、これ、こつちに近づいている様な』

という事で、一時ナビゲーターをマシユから式部さんにチェンジして、早速こちら辺の獣を力づくで抑え込んで野営地の確保開始……という訳ではなく。どうやらその獣の反応は、此方に向かって来ているようです。

『……一頭だけ、だね』

『此方を見ています。警戒している……様子も、ないような』

『野生の獣は、そんな簡単には襲い掛からない位に警戒心が強い。でも目の前の彼はそうじゃない……なんだろうね、このコヨーテ』

ただ一匹で我々の前に現れたそれは——狼、ではなくコヨーテ。アメリカに生息する狼の仲間。アメリカの先住民民族達は、彼らと共に生活していた事もあるという程にアメリカではメジャーな種。

そう……彼は、ネイティブ・アメリカンのお友達、というか、同士と言うか。兎も角近しい存在なのですよ。

『——彼は、私に協力してくれているだけだ。危険はない』

『サーヴァント反応……?!』 驚いた、カルナの強制転移も目を見張ったが、こっちの隠遁術も興味深い、まるで探知が出来なかった』

『私の業ではない。仲間の宝具を借りているだけだ』

つまり。このココロテ君は……目の前の民族衣装を身に纏い、顔の中心に白い線を一本引いた特徴的なお人——ジェロニモさんの手のもの、という事になります。

ジェロニモ。

アメリカの先住民族、ネイティブ・アメリカンに伝わる伝説の戦士。侵略者たるメキシコ人、そして白人と戦い続けたその人生は、悲劇によって戦士として目覚め、そして多くの血を流す恩讐の戦いへとなだれ込んでいきました。

その戦いぶりは、バーサーカーとして召喚される資格を持つほどに凄まじいものだったと言われています。

普段は今の様な冷静な口ぶりで、落ち着いた大人な人なのですが。ガチとなれば『ぶつ殺すと心の中で思ったなら、その時すでに行動は終わっている』を、地で行くような凄惨な戦いを躊躇なく行う、正に『戦士』。

こうして単独で行動するのは、そんな戦士の時代のゲリラ戦での経験から、お手の物なのです。

『……君達を探していた。捕らわれている者達の救出に、手を貸したいのだが——』

という事で、ジエロニモさんから、救出作戦への協力の提案が出てきたところで、今回はここまでとなります。

ご視聴、ありがとうございました。

第九十二章・裏：アメリカの賢人

『以上が、此方で確認したアメリカ西部合衆国の現状だよ』

……正直、目を丸くすることが多すぎる。

夜の森の中、燃える薪を囲んで、聞いていた話は、『藤丸が体験したアメリカ西部合衆国の真実』である。

小市民の俺は兎も角、式部さんが眉間を抑え、ゴルゴーンさん嫌そうなを越えて肥溜めを見るような視線になり、アサシンは大爆笑して腹をつらせていると来た。

それ位に何というか……ザツツ・カオスと言うべきか。

「——いやー……ちよつと、衝撃的過ぎたなこりやあ」

アメリカ西部合衆国の長。大統領を名乗るは、かの発明王トーマス・アルバ・エジソンなのだという。俺だって知ってるレベルの超有名人だ。エジソンと言えば。

輝かしい栄光の中を歩んだ人生や、人としてどうなん？　っていうエピソードの数々も後世では有名に過ぎて『エジソンって素直に尊敬できる人じゃないよね！』っていう評価もあながち間違いない感じになって……ああいや、今は関係ないかそこは。

それだけでも十分に驚きなんだが。その上に頭が……うん。

「ライオンかあ……ライオンかあ」

真つ白なライオンだった。

俺が頭を押さえて、式部さんが眉間を抑えている理由の半分くらいは多分これ。アサシンはその有様を見た時点でツボにはまったらしく、声こそ出してないが、それでもまあ笑いまくって動けなくなつた。

そう。かのエジソン。王なんぞと言うそんな大層な職業について、カツコよく、理的に名乗り上げた割にはまあ。理性とは真逆で顔が獣性そのものなのである。

快活に笑うのも、神妙な顔をするのも、睨むのも。人間が行う仕草が全部ライオンナイズされて、何とか違和感とか諸々が緊迫した空気を全て粉碎してしまつてまあとんでもない空気になってしまつていくというか。

いやまあもつと身も蓋もない事を言ってしまうと、あのライオン頭、たまくに吠えるのだ。

『——グオオオオオオオッ！』

……俺が聞いた彼の『鳴き声』がこれである。

もう一度言う。雄々しく、百獣の王の如く、堂々と、吠えるのだ。

結果、それを聞いたアサシンの腹は見事に碎け散つた。まあ笑えるのも気持ちちは分かる気がする。ちよつと鳴き声が逼真に過ぎて、シリアスを保てない……

「百獣の王だから大統領王ってか？ センスねえなあ……」

「——ふん。下らん。なんと名乗ろうと、その下の汚い腹の色は変わらぬわ」

とはいえ。そんな呑気な感想を抱いてる奴らばかりではない。ゴルゴーンさんは非つ常

にご機嫌斜め。まあ……ゴルゴーンさんは基本的に人間が大つ嫌いっていうのがある。マスターの俺ですら利用される形で一応関係を結べているだけだし。

んで、マスター君の偏見塗れの人物評で考えてみると……エジソンは、ゴルゴーンさんはまあ嫌いそうなタイプだろうと思う。

そもそも理屈っぽい上に、相手を一見してまず批評（批判ではない）から入る。ドクターの通信を『古臭い』と言ったし。藤丸に対しても、自分の下で働かないかと、しよっぱなから上から目線、マジで王様気取ってる気がする。

いやまあ、相手はアメリカを統率する立場だし、こっちは現地調査員だし……って言うのもある。ドクターの通信を古臭い技術、と言った後、その詳細を聞けばそれがこれだけ有能が技術なのかを見抜き評価し直す……という冷静で有能な部分もある。

だが『人間大嫌い』なゴルゴーンさんにとつては、そこよりも悪い部分が目立って見えるというのもある。いや、別に有能な部分だってあるって事は分かっているだろう、この人は人間よりもよっぽど『賢い』人だ。

分かっていて、それでも自分とは反りが合わない、気に入らないという部分を優先しているだけだろう。……なんていうか、やっぱりアサシンもそうだし、ゴルゴーンさんもそうだが、基本人外人たちは、自分に合うか合わないかを優先する部分がある気がする。

「いやまあ、中身は兎も角として……いや中身も凄まじくて無視は出来ねえか」

「そう、ですね。まさかアメリカ以外の世界を全て見捨てて、アメリカだけを救う事に視線を合わせるとは」

でもまあ、自分勝手な部分は向こうも同じだ。人理を救うとかは置いておいて、ピンチのアメリカだけを綺麗に救うプランでいっております——なんて普通通らん。こちらアメリカ出身一人もいないんだし、お前の政策に誰が頷くかっていう。

「兎も角……エジソンがああいう方針であれば救出した後の俺らの方針も確定になる」

つまりは、向こうさんとは絶対に相いれない。それは藤丸も分かっていて、気持ちが良いまでの啖呵切って交渉決裂と来た。

自分の国だけを救う方針のアメリカ、そのアメリカ曰く『野蛮人』の集まりの東の『ケルト』。その二つもどっちも駄目と来た。であれば、俺達は自然とアウトローになる。

「アウトローの群れに身を寄せるのも、自然な流れだろ——ジェロニモさん」

「……アウトローという言い方は些か心外だがね」

んで。そんなアウトロー連中を纏め、三つ目の勢力である『レジスタンス』を率いているのが、目の前のジェロニモさんだった。アメリカの英雄であり、歴史に残る程に苛烈な戦いにて伝説を打ち立てた、アパッチ族の戦士……らしい。俺は知らなかった。

でも、それを言ったら『私の血濡れた名が有名でない事は良い事だ。後の世が平和である証だろう』って笑って言ってくれた。凄い好きになれた。

『改めて、此方から申し出をさせてもらいたい。ジェロニモ。私達の仲間を助けるのに力を貸して欲しい』

「——元よりそのつもりだ。よろしく頼む」

好ましい人には礼を尽くしたい。手を伸ばし、しっかりと握手。

……先ほどゴルゴーンさんとアサシンの事を言っていたが、俺も人の事を言えない気がする。エジソンとジェロニモさんに対する態度の露骨な差とか。

比較してはいない。寧ろ比較するまでもなく、どちらも凄い偉人だとは思うし。でも『自分と合うかどうか』って言うのは、その何れの要素とも関係ない。

……アサシンや、ゴルゴーンさんが見ている世界は、こんな感じなんだろうか。

別に、二人の見ている世界を共有したい、って訳じゃない。それは二人のモノだから共有なんて土台無理だし。でも。

自分は、人間だ。でも、過ぎた力を体に宿している。それとどう付き合っていくか。

一応は、アサシンが指針を示してはくれた。でも……答えは出ていない。

キツチリと答えを出さないと、いけない気が、最近している。故に……答えのヒントになりそうなものは、少しでも考えたいと思っている。

俺の血に流れる大本……魔性の人達の視野とかは、そういうモノになりえるんじゃないかと思っっているのだけれども……

「……ふむ」

「ん？ なんすか、そんな見つめて。頭気になります？」

「いや。その禿頭ではなく……遠目からは確認できなかつたが、君には随分と不思議なモノがやどっているのだね。そら、額から漏れてるぞ」

「え」

ハツとして額を触る。ぱちっ、と痺れる感触があつた。

なんてこつた、自分の血の事について考えてたら、勝手に角が生えてた。いかんいかんコレは。幾らある程度は制御できるようになったつたつたつたつて、気を抜きすぎてる。

「あ、あはは……お恥ずかしいモノを……あ、握手痛かつたすか!？」

「いや、そんな事はないよ」

「ならよかつた……」

「——しかし。うん、なんというか……」

そんな様子を、ジエロニモさんはジーっと見ている。いや、見つめてるっていうか、ジロジロ観察されているというか……なんか、恥ずかしくなってくるレベルで見られて、ちよつと、額とか隠してしまう。

「な、なんすか……？」

「そうだな。コレはただの老人のお節介だと思つて欲しいのだが」

「はあ」

「君の姿勢は間違つてはいない。正しい付き合い方ではある……だが最善ではない」

そう言われ、思わず目の前の人を見る。

周りに揺れる木々みために、とても静かな瞳をしていた。

「魔と付き合うには、先ず寄り添い、そしてその流れに乗る……正しい事だ。恐れ、抑え込もうとするだけでは、寧ろ自らを焼くだけだろう」

「……」

「大人しく暮らすのであれば、それで十分だろう……だが、これから先にも君たちには苦しい旅路が待ち受けている。それならば、更に先へ進むのも、考えてみると良い」

……アサシンと出会つて、一度は自分の血に流れる『鬼』と言うモノに向き合つて。その美しさに惹かれ、その中に吞まれ——その流れに自ら乗るかの如く、向き合う術を見つけた。

そしてその先に、俺が何かを探しているかを。

その瞳は、静かに見透かしている様な気がした。

「……」

「魔と寄り添うだけではなく。人と語り合うと良い。その相手は——そうだな。そちらのご婦人など、良いのではないかね」

そう言われ。彼が視線で示す、後ろを振り向いた。

目が合った。俺のサーヴァント——初めて召喚したサーヴァントの式部さんが、そこに居る。

彼女と語り合う。それが、どういう意味を持つのか。俺には分からなかったけど。その言葉は……何となく、脳の奥に、刻まれた気がした。

第九十三章

救出のカギは俺達!? な実況、はーじまーるよー。

前々回カルナさんの襲撃を受け、蹴散らされた俺達は、なんとかその場を脱出し、近くにキャンブを張った……しかし、そのままゆるキャン△する様な俺達じゃあない。

味方さえ（現地のレジスタンス所属のサーヴァント）揃えば、例え大統王にだってチコミかけて見せる命知らず、それが俺達、人理保証機関（野郎一人）、カルデア所属、ホモチーム。

という事で、ジエロニモさんと合流し、戦力増強。大統王に捕らえられ、あんな事（ごく当たり前の引き抜き）やこんな事（普通に投獄）をされている、藤丸君達及び婦長を助ける為に進撃開始です。ふふふ、華麗な救出劇って奴をお見せしましょう。

『——では、作戦を確認するよ。といっても、ドシンプルだけどね』

という事で、華麗な救出劇の為にプラン説明、ダ・ヴィンチちゃん、オナシヤス!!

その一。先ずは藤丸君が捕らえられている敵の城を目指します。

その二。到着したらジエロニモさんとはお別れします。

その三。一切のなりふりなんて構わず暴れます。破壊活動はしませんが暴れ回りま

す。

その四。後はジェロニモさんが藤丸君を助けてくれるのを待ちます。

その五。助けたらスタコラサッサです。

うーん、例えばどんな馬鹿でも分かるくらいクソシンプル！ 華麗な救出劇どころか最大全速で力押しして草 of 草なんですわ。

『作戦は、シンプルな程いい。戦場では考える事が少なければ、その分、目の前に集中できるところからね』

まあでもジェロニモさんが良しって言うてくれたからいいか!!! (思考停止) ジェロニモさんは戦士としても指揮官としても有能ですからね、彼に肯定して貰えるって言うだけで、この作戦は取り敢えず問題ないという自信がつかます。

『それで、ジェロニモ。大丈夫なのかい？ 藤丸君達の救出を任せて』

『ああ。危険な役割を君たちに押し付けたのだ。その分の仕事はちゃんとする。信じて欲しい』

そうですね、ジェロニモさんに失敗はあり得ません。潜入する為の切り札を彼は持っているんで、それがあれば、最悪一人でも救出自体は出来るのです。失敗するとしたら私が操作するホモ君の方なので、うーん……プレッシャーwww

『とはいえ、ランサー・カルナへの警戒は怠らないでくれたまえ。間違いなく強敵である

事は疑いようもない。下手をすれば、陽動の間に消し炭にされかねないぞ』

ふええ……プレッシャーが二乗にされたよお……（震え声）

『うーん……となれば、最悪、カルナが出てきた時点で撤退するのも視野に入れていいだろうね。その辺りの判断は——マスターである君が行うんだ。分かったね？』

そしてダ・ヴィンチちゃんからのお言葉で、無事私に陽動作戦の責任者の任が託されました……と、これで失敗したらホモ君に全責任が問われる事になります。なんて事だ、もう助からないゾ☆（責任逃れ封じ）

どういう事かかっていうと、今回の戦闘は、ホモ君……即ち、私が途中で『撤退』するかどうか選べるYO！って事です。

旅路も後半の第五特異点ともなれば、今までとは桁の違う、いわゆる高難易度設定のエネミーも出てきます。今回の陽動作戦においては、西部のアメリカ側の最高戦力であるカルナさんが途中から乱入してくるのは確定的に明らか。

そんな高難易度カルナさんと戦うかどうかは、我々プレイヤー次第なのです。本来のFGOよりもその辺りを選択させてくれて嬉しいですねえ。

まあホモ君は当然カルナさんと殴り合うがな!!!（首狩り族）

ホモ君は幾ら経験値が有っても足りない身です。強力なボスはその分経験値をくれますので、逃げるという選択肢は存在しません。果てにこそ栄えあり、武士どもよ、艱難辛苦を乗り越えて進むべし、つてなわけだね。

それに、此度ホモ君の戦力は充実しております。カルナさんに有利を取れるセイバーこそいませんが、しかし単純なサーヴァントの数は三倍、カルナさんが如何に怪物級のサーヴァントであろうと、三対一なら物の数では……数では……

……いやが一流サーヴァント三人揃えていたとしても、きついレベルの超一流サーヴァントなんだよなあ。カルナさん……今からでも逃げ出していいかな……お客様（実績解除走者）は逃げ出してはいけない、ハッキリわかんだね。

『——見えました、マスター。アメリカ軍の機械化歩兵達です』

という事で、逃げ出さずして……後日。

遂に藤丸君達を救出する為にやって参りました……はるばる藤丸君達が連れられてきた西部アメリカ側の拠点、デンバーに！

流石に此方がカルナさんの襲撃から逃れた事は理解しているので、戦力もたっぷり用意して此方をお迎えをしてくださっています。

ずらりと並んだバケツ頭の群れ、群れ、群れと来ました。あれら全てと戦い、更に言えれば此方に目を向けさせにやならないとかいうかなりの難行が、今回の任務。

いやあ、流石に藤丸君にアメリカ強制横断旅行をプレゼントしたFGORPG。此方ホモ君に対しても一切の情け容赦をしてくれませんか!!

『敵将カルナ、やはり姿は見えませんが……藤丸様たちの救出を警戒しているのでしょうか。やはり、我々が暴れて、おびき出す以外ない物かと』

式部さんの言う通り、先ずはカルナさんを此方の眼前に引きずり出さないと、藤丸君達の救助もままなりません。という事で——警察だ！（謎のヒロインXX）

『——出やがったな！ クソツたれのホモ野郎！』

『その穴に特別製のおもちやをくれてやるからケツ向けな！』

『ホールドアップはしなくていいぜ……ハチの巣だ！』

おおう、なんと皆様お口が悪うございます……何故でしょう、私は囚われの仲間を助けに来ただけだというのに……ただその為に、ちよつとこら辺の機械兵の皆様を圧倒的な戦力で蹂躪しようというだけだというのに……

明確な理由を確認した所で、血気盛んな皆様をお相手しつつ、陽動作戦開始でございます。数は……あ、はい。そりゃあ『∞』って表示もされますよね。要するに終わりはないという事で。

雑魚敵に関して言えば、無限に替えが出てきます。ですが、途中で出てくるカルナさんに関しては、当然彼一人しかいない上に、彼を倒せばこの戦闘も終わってくれる筈。

という事で、取り敢えずアメリカ機械兵の皆様を倒し――

『――そこまでにして貰おうか』

ました（過去形）

アメリカの兵士諸君をほぼ式部さん、酒？ちゃん、ゴルゴンさんの三人で蹂躪しつつお零れをホモ君で念入りに狩り殺していた所、いよいよやって来ました。

アメリカ軍の最大戦力にして、ホモ君チームの作戦遂行の最大の障害、そして同じく、最大の目標でもある――カルナさんが。

いよいよ彼との再戦……なのですけれども。こつちカルナさんが来るまでは軽く十人以上は確実に倒した。それだけ倒さないと出て来てくれないとは思ってませんでした。お陰でお零れ狩りまくってたホモ君の経験値も結構稼げましたが……カルナさん
案外薄情？

『ふむ――やはり目的は、陽動……狙いは俺個人、と言ったところか』

『分かって出てくるとか！　こりゃあ自分の実力に絶対の自信ありってトコかな？　うーん天才ってこれだからね』

『その様なつもりはない。寧ろ、自らの天才性をつゆほども疑わないのはそちらだと推察するが、カルデアの魔術師』

『――流星はインドの大英霊、観察眼も人一倍ってやつかい？』

少なくとも、ダ・ヴィンチちゃんの言う通り。観察眼もそうですが、戦術眼も一りゆなカルナさんです。外で戦闘が始まったら即座に跳んで来てバトルするくらいの戦場を見る目と判断力を、彼は持ち合わせているはずなのですが。

もしや何か牢屋組の方でも何かしら抵抗があったのでしょうか。であるならば、何かしら消耗してくださっていてもいいんですけれど？

『とはいえ、大英霊の力も、これだけ周りに味方がいれば、そう簡単には震えないんじゃないかな？』

『事実だ。流石に、これだけの味方を気にせず槍は振るえまい。その悪辣な策略は、賞賛に値する』

と言つてもまあ……カルナさんについては特に何も言う事はなく。この前言った事で全部です。この前と明確に違うとすれば、今回のカルナさんは、宝具をブツパしてくる事はない、ぐらいですかね。

俺達が何のために態々敵の本拠地まで殴り込んで来たか……それはカルナさんの圧倒的な範囲の暴力を、敵軍を巻き込む事で最小限に抑える意味合いがあったんだよ!!

な、なんだってー!?

やり方がまるつきり悪役のそれなのは、正に、正論! という事なので、ヴィラン・カルデアとして、正義の味方のカルナさんをキツチリ足止めすると致しましょう。対戦よ

ろしくお願ひします！

第九十三章・裏：陽動作戦 前編

伸ばした拳には——手ごたえアリ。

ぐらり、とバケツみたいな頭が後ろへと傾ぐ。

そのまま、踏みとどまる様子もない。ちいとばかり大柄だったから、通じるかどうか不安だったが、どうやらちちゃんと相手の意識は刈り取れた……らしい。

『Ohh…なんとバイオレンス……!』

最後にそれだけ言い残して……鋼鉄の巨体が、地面にズシン、と倒れ伏し。そのまま動く様子無し——やつぱり、アメリカさんってそういう感じなんだろうか、デカめの機械兵士を見ながら思う。絶対違う。

そして。アレだけのゴツイ機械を、普通に殴り倒した自分の拳を見つめる。当然だがあんなデカイ鋼鉄の塊に、ガッツリ拳の跡を残せるのは、ただの一般人と言える段階を超えてるとしか言えない。

ううむ、チンピラ相手にしていた頃を思えば、随分と遠くまで来たもんだ。

「——大体、ご婦人に鋼の塊が飛び掛かる方がバイオレンスだろう常識的に考えて……」
「ありがとうございますございました、マスター。お怪我は？」

「ん？ うん、全然へーキへーキ、そっちこそ大丈夫？ 式部さん」

「は、はい」

まあ、ただの日本人高校生だった俺が、こんな綺麗なご婦人のエスコートがなんてやってるんだから遠くにも来るだろうという話だが。エスコートっていうよりはSPなんだけれどもね。

「んもう、しつこい」

——が ぞん

……まあ、俺の周りはそれこそエスコートなんて必要ない位パワフルな人が殆どなんだけれどもね。ああ今も、その小さなあんよで、蹴鞠の如く気軽に鉄の塊を蹴つ転がした童女が目映っておりますし。アレは、まあ生きてる、かなあ。

んで向こうで光線の余波で吹っ飛んでる機械化兵士君はもう生きているかの保証は出来ない。一応原型留めてる辺り、まだ本気を出すつもりもないだろう。

そんな風に暴れている

「旦那はーん、こっちにも襲い掛かって来てるんやけど」

「まあ、襲い掛かれてるけど……俺が守る前に吹っ飛ばしてるじゃん」

「せやねえ。怖いし」

いやそんな『当然じゃない？』みたいな顔されても。そこまで強い奴エスコートして

何の意味があるって話。というか……怖い。

その感情とは一番無縁なのがお前さんだろうに。

「つたく、そんな冗談飛ばすだけの元気があるなら大丈夫だろ」

「ふうん？ 守ってくれへんの？」

「——お前を生中な心意気で守るなんて言う方が失礼だ」

まあ、そういうコイツの人となりを知ってるから——たかが陽動作戦一つで、無駄に心配する方がアウトだろう、って事は分かる。確かにアメリカ力機械化兵団は間違いなく脅威ではあるが……アサシンが相手にしてきた源氏武者と比べてしまうと、物足りないどころの話ではない。

故に。コレで心配する＝舐めているというのと同義。

アサシンのおちよくりは気にせず、このまま作戦続行、である。

「ま、本当にピンチなら、お前に首喰い千切られてでも助けるから安心しろ」

「——ふふつ、言うやないの。期待しとるで？」

とはいえ。

エジソンの築き上げた機械化兵団の強さは、間違いなく並じゃない。俺はあくまで、アサシンとゴルゴーンさんの二人の大暴れから抜け出して、式部さんに向かって来るお零れだけを相手にしてるから、ギリギリ何とかなっているんであって。

俺だって割と人間やめるところまで来てるけど、それでも数体相手が若干きついレベル。十体になればまあ普通に負けるだろう。

アサシンとて、この機械化兵士相手であれば、思わぬ足の掬われ方をすることだってあるかもしれない、と言う話だ。

「……鬼の首魁、酒？童子がそのような窮地に陥るでしょうか」

「強いけど、案外脆い所もあるから、万が一があるさ——特に、これからやって来る野郎を考えるとね」

ちらり。と、目の前に築き上げられた、巨大な城砦を眺める。

いや、マジでデカイ。ちよつとした小山くらいあるかもしれない……この機械兵団もフルに使って作ったのだろうか、っていう仕上がりに。

そしてこの巨大な城砦に相応しい『英雄』がやってくるのを、俺達はその城の真前で暴れながらも待っている。

待っている、とは。陽動作戦だったのに、おかしな話だとは思う。

ダ・ヴィンチちゃんも、あんまりヤバイ相手が出てくるようなら、直ぐにでも撤退しろと言っていた……だがしかし。

「ダ・ヴィンチちゃん、反応どうだい？」

『今のところは……本当にやるのかい？』

「うちの麗しの女神さまが、ね」

此度、残念ながら逃げる、と言う選択肢は今の俺には存在しないのだ。

視線を……もう一度、彼女の方へと向ける。先程から、無駄な力を使わない様にならな
り気を使つてる。それが結果として陽動としての最適な動きになつてているが。

しかし、あのランサーが現われたなら、即座に貯め込んでいた力を爆発させた後に――
文字通り、怪力乱神と暴れ回るだろう。

ゴルゴーンさんにとつて。別にカルナは因縁の相手でも何でもない。ただ一つだけ。
ある一点が、気に障つた。

『――あの宝具、アレは、奴の本気の一発ではない』

向こうからして本気でなくても制圧は可能だ、と思われたのが至極気に入らないとの
事である。さらに正確に言うのであれば……ゴルゴーンさん曰く、向こうも本気を出し
ているつもりではあるのだろうが、それでも本気の中の本気、ではないとの事。

まあ要するに……。

ゴルゴーンさんのカルナに手を抜かれてナメられたのが非常に気に入らないらし
い。

ノリは田舎のヤンキーに近い。一応は一緒の生活圏内にいたから分かるのだが、アイ
ツら面子とプライドで暴走してるとような連中ばかりで、ナメた真似をされると即瞬間

湯沸かし機と化す。

まあ、ギリシヤ的にもナメられるのは絶対に許されないうで。ただし、ゴルゴーンさんの場合は、若気の至りとかそんな生易しいものじゃなくて、自分の存在意義を賭けて強さ誇ってるんだから、ナメられるは自分の人生諸共馬鹿にされる、位の勢いだ。

お前なんか本気を出すまでもない……と言われたのと同然。ゴルゴーンさんにとつては顔面にノータイムで泥叩きつけられたのと同ほ同意。許すまじと、とんでもない勢いで大噴火の直前だ。

『——勇士風情にその程度の怪物、等と侮られるなどと、屈辱以外の何者でもない。分かつたら、口を、閉じろ。囁るな』

……と言ったような感じ。正直、どうして俺はあの時『まーまーゴルゴーンさんちよつと落ち着いて』位の気持ちで声をかけてしまったのか。多分今まで頑張つてコミュニケーション取つて来たから、アレで済んだんだと思つてる。

「この前の一回以来、大分神経尖らせてる……この前のエジソンの一件でも、機嫌悪かつたろ？」

『あれつてそう言うのも含めて、だったのかい？』

「エジソンが起爆剤だったのは間違いないけどね。フラストレーションを貯めてくれたのは、あの黄金のランサーだ。それで……まあ、俺はゴルゴーンさんを甘やかしちゃう

「悪いマスターって事で」

「んで、今回の方針に舵を切ったのは……まあその迂闊な聞き方したお詫び代わりだ。『全く……サーヴァントを体張って庇う、サーヴァントに助ける宣言する、サーヴァントを甘やかす、か。身の程知らずにも限度があるんじゃないか?』」

「世界を救うならそれ位酔狂じゃないとな。んで?」

『——感アリだ。漸くお出ましみたいだよ』

時の到来を知らせるダ・ヴィンチちゃんに報告に、首を軽く一回転。グキリと音がするくらい、軽く解しながら……傍らの式部さんに軽く頭を下げる。正直、このお礼参りに関しては、俺とゴルゴーンさんの二人でするのが一番の筈なんだが。

「巻き込んでごめんなさいね。まあ、最悪スタコラサツサするから、絶滅戦争するつもりはないから、その辺りは安心して貰えれば」

正直今更ではあるが、一言でも謝っておきたかった。そもそもバリバリに戦うタイプの子のサーヴァントではない……それを、最も危険なサーヴァントとの殴り合いに連れてくるなど正気の沙汰ではないだろう。マスターのワガママに付き合わせる等、ロクでもない。

でも、そんな不甲斐ないマスターに……式部さんは、微笑みかけてくれた。

「いえ。陽動作戦、なのでですから。寧ろ派手にやった方が宜しいかと」

「そう言ってもらえると、ありがたいねえ……」

流石。歴史に名を残した偉人というのは、例え文系の人だろうと、戦い一つに怯える様な胆力ではないのだろうか。それとも……怖くとも、そう口にはしているのか。

いずれにせよ、彼女が頑張ってくれている事に疑いはない。胸に感謝の気持ちを改めてしっかりと刻み込んでから——声を張り上げる。

「ゴルゴーンさん、来るぞ！」

その一言に。

先ほどまで適当に振り回していたその爪をびたりと止めてから……彼女は、此方に向けて振り返った。

冷ややかに、見下すように、敵を睨めつけていたであろうその瞳に——熱が灯るのが、見て取れる。

「——漸くか」

「リベンジマツチだ。令呪いるか」

「必要ない。どうせこの戦場だ、奴も大掛かりな宝具は使うまいよ。その上で、膂力でねじ伏せてやる」

「あいあい」

どうやら、本番に向けて適度に力を抜いていても、内の気合いは十分に高まっている

らしい。口元をふっと緩めているというのに、その瞳のギラギラとした光を見ていると、背筋が実に寒い。間違いない、噴火寸前だ。

そして、その瞳が——不意に、空の一点を見つめる。

何を感じ取ったのか。今更、それを考える程馬鹿ではない。来たのだろう、待ち人が。ゴルゴーンさんの見やる場所へと、俺も視線を向ける。その先に、滲む金の輝き。日の輝きを照り返す程に豪華なその鎧に、携えた槍は……間違いない、此方を一発で分断せしめたあのサーヴァントの物に、間違いない。

ジェット機の如く、焰を上げて飛んでくるその姿に、彼女の口元が——裂けたが如く、吊り上がった。

そのまま、突撃してくる——かと思いきや。

此方から少し離れた辺りの位置で、炎を逆噴射。費消してきた勢いを強引に殺し減速して……降りるときの足音すら静かに、酷く穏やかに目の前に降り立って見せ——ガチリとその姿に、金色の爪が、かちやりと威嚇するように鳴る。

「——そこまでにして貰おうか」

大英雄カルナが。再び、俺達の目の前に降り立ったのだ。

第九十三章・裏：陽動作戦 後編

堂々、としている。

ゴルゴーンさんからの殺意に溢れた熱視線のプレゼントにも、まるで動じない。

反応していない訳ではない。カルナが見ているのもまた、ゴルゴーンさんだ。彼女から目を離さない。空色の視線は、無感情な鈍色で……だけど、思わず掌に汗を滲ませる様な眼光がバリバリだ。

顔が欠片もいかつくなくても、本物って奴は瞳一つで人間なんて幾らでもビビらせられるらしい。

「……遅かったな、大英雄サマ」

「そちらの策で、此方も掻き乱されていたからな」

……だが、次の日一言で、一気に困惑の感情の方が大きくなる。策、と言うのは陽動作戦ではない、みたいだ。アメリカ側の内側に直接アプローチをかけていた訳ではない。こつちも。

ちらり、と通信機を見つめてみるが、その先のダ・ヴィンチちゃんから何も反応は無しである。となれば、ダ・ヴィンチちゃんも把握してない……？

「流石は牢獄を破り目的を成し遂げた復讐者。そもそも牢に捕らえられる事すらなく、陽動作戦に合わせて、城砦内部で行動を開始するとはな」

——だが、答えは向こうから提示された。

どうやらあのスパダリアヴェンジャー、カルナからの襲撃を自力でどうにかして、ずっと藤丸を助けるために単騎で行動していたらしい。

彼の逸話は聞いていた。しかしながら、だからと言って単騎でアメリカ軍に潜り込んで陽動作戦に合わせて動き出し、時間を稼いでいたのか。信じらんねえ、本当に人間か。サーヴァントか。

「——って事は？」

「既に捕虜は逃げ出した後だ。お前達の目論見通り、と言ったところか。四つの特異点を超えてきたその実力、認めざるを得ない。見事な手腕だ」

ちらり、と通信機を確認。返事代わりと言わんばかりに、一部が明滅を繰り返す。どうやら事は上手く行きすぎたらしい。ジエロニモさんは果たして、藤丸達が逃げ出すまでに牢屋に辿り着けたのか。

うーん、本来はこっちで派手にカルナを引き付けて。

その序にリベンジマッチって算段だったのだが。コイツは困った。マジでもう逃げても何の問題も無くなつちまった。そもそも、元からカルナが来たら派手に逃げて、お

びき寄せてもいい、位の気持ちだったのに。

となれば、後ここに残る理由は……個人的なこだわりだけになった訳だが。

ちらり、と式部さんを見る。ちよつと困った様に微笑んで、それでも頷いてくれた。

アサシンを見る。寧ろ面白い事になったと言わんばかりに、緩めた口の端から、一杯酒を口に含んで見せた。

もう一人は……見るまでもない、だろう。

「此方は……ふむ——やはり目的は、陽動……狙いは俺個人、と言ったところか。態々待ち受けている辺りは」

「まあ、そうなるかね。ウチの女神さまが、お礼をしたってよ」

撤退は、しない。

そうハッキリと告げる俺の一言に合わせるように。ゴルゴーンさんが、一步前へと踏み出し……否、蛇の様に尻尾をくねらせて、進み出た。

「——待ちかねたぞ、槍使い」

紫紺の髪より生じた蛇が、大きく背の後ろで広がる。まるで、翼の如く。

その中心で、ゴルゴーンさんは——本当に、貯め込んだものを、弾けさせるかのよう
に破願させて——一つ、笑って見せた。

ごくくり、と喉が鳴る。

彼女を蛇の怪物、だとか呼ぶのは正直な話、したくない。俺にとつちや力を貸してくれる力強い味方である事は間違いない……のだが。

音を殆ど立てず、静かに、目標へとにじり寄る動き、『慣れた』動き。一瞬剥きだした牙を、ちろり、と艶やかな舌で磨くその仕草から、少し体を沈ませて、カルナを睨みつける構えにシームレスに移るまで。

どれだけ強い勇士だろうか、食らい尽くしてきた、『歴史』を感じる。そりやあ、ナメプの一つでもされたなら、苛立ちもする、その権利がある。

「——綺麗だなあ」

口から漏れた。どうにも、アサシンを見てからと言うモノ、人以外の美しさと言うモノに頭をやられたみたいだ。

怪物性を前面に押し出して、自らの目の前に立つ英雄に『強さ』を見せてける、麗しき蛇の化生——まるで、絵画の様に、荘厳で、そして惹かれる。正に、神話に生きる『うつくしい いきもの』だ。

多分、俺はこの怪物を目の前にしたなら……腰が抜ける。他の奴だつてそうだろう。その間には、多分感情の大きな差があるけれど、どっちにしたつて結果は変わらん。

うん、そんな宝石みたいにキラキラしてて、おそろしい瞳に見つめられたら……つて。

「あ」

「……フン」

「どうやら聞こえていたらしい。見られてた。」

「ちよつとだけ睨まれてから。鼻を一つ鳴らし、つん、と不機嫌そうに顔を逸らされてしまう。ううん。折角のご機嫌取りも台無しか。後で埋め合わせ、どうしようかね。」

「でも実際、そんな感想が自然と口から出てくるくらい、物凄いのでは間違いなくて。どう足掻いても睨まれるのは避けられなかったと思う。」

「分かって出てくるとか！ こりゃあ自分の実力に絶対の自信ありってトコかな？ うーん天才ってこれだからね〜」

「だというのに、これを見ても尚……目の前に立つカルナは、眉一つ動かさないと来た。その様なつもりはない。寧ろ、自らの天才性をつゆほども疑わないのはそちらだと推察するが、カルデアの魔術師」

『——流石はインドの大英霊、観察眼も人一倍ってやつかい？』

寧ろ、ダ・ヴィンチちゃんの事を冷静に推察するだけの余裕すらあると来ている。

「ダ・ヴィンチちゃんの言う通りの絶対的な自信が無意識の下にあるのか、それとも、これすらも、目の前の大英雄にとっては日常茶飯事なのか。」

『"とはいえ、大英霊の力も、これだけ周りに味方がいれば、そう簡単には振るえないんじゃないかな？』

「事実だ。流石に、これだけの味方を気にせず槍は振るえまい。その悪辣な策略は、賞賛に値する」

……賞賛つて言うなら、悪辣言うなや。いや、あれでも純粹に褒めてるのか。駄目だ全然あの人の事分かんらん。槍を携えて一步たりとも動かない立ち姿と言い、超自然的というか、人間味が若干足りない。寧ろゴルゴーンさんの方がまだ人間臭い気がする。

『……まあ實際悪役側なやり方だけど、でも気にしたら負けつて事で、じゃあ一つ、我々との足の引つ張り合いにお付き合いたいだこうじゃないか！』

「——心にもない台詞を、よくぞそこまで堂々と言つたものだ。足の引つ張り合いなどと其方はそんな生易しい方針を取るつもり等、毛頭ないだろうに」

だがまあ……そんな立ちながら泰然自若としてられるのも、ここまでだろう。

もうこつちの女神さまは、我慢できないとばかり、蛇たちの牙を鳴らし始めてる。これ以上無駄口を叩こうもんなら……いや、想像するのは止めだ。

そもそも、俺達がおしやべりしてるのにここまで付き合ってくれただけでも御の字、そんなの気にせずに、自分から殴り合いを始めても良かったというのに。

それでもなお、ゴルゴーンさんの方から、襲い掛からなかったのは単純に——「ならばオレも、その殺意に……我が槍をもつて応えよう」

カルナが、構えていなかったから。

ゴルゴーンさんは、理性の無い獣じゃない。尋常を越える上位者である。そんな彼女が不意打ちなどと言う『格下』が使う戦い方で、このカルナに痛手を与えて、良しとする訳がない。

ナメられて、それを払拭する為に戦うのなら……寧ろ、真つ向勝負をこそ、彼女は望んでるんだろう。

故にこそ。カルナが手にしている黄金の槍。その切っ先が自分に向けられて初めて——ゴルゴーンさんも、自らの爪牙を剥き出しにして、その槍の間合いへと、何の躊躇もなく踏み出していく。

「……ぐだぐだと。得物を構えるのにどれだけかけている」

「神格に等しい魔の物と相對するのも久しい——こちらも、それ相應の覚悟と言うモノが必要にもなる」

「——抜かせ」

相手も此方も、互いに名高い『神話』のモノ達。

「貴様のその黄金の鎧を引きはがし、我が神殿の飾り付けにでも使つてやる」

「残念ながらそれは——不可能だ」

今、始まろうとしているのは文字通りの——『神話大戦』だ。

第九十四章

さらばカルナさん……な実況、はーじまーるよー。

こちらら覚悟の削り愛だ、という事で。前回は全開で盛大にカルナさんをお出迎えしまして、ゴルゴーンさんと共に殴り合いました。今までで一番きつかったです（正直）そんな第五特異点時点で体力ゲージのストック制を採用すな（怒り）

個人的な話なのですが。

カルナさんの槍捌き、相手の攻勢を潜り抜けるみたいな繊細な癖に、ゴリ押し of 極みみたいな力業も行けるっていう。更に言えば雑に投げたりしても当たり前みたいに狙いすましたスナイパーみたいな命中精度を誇り。更に普通の遠距離手段まで豊富と来た。

その強敵ぶりをよオ……遠近距離完備のオールラウンダーな上にとの一発も十分な威力を持つクソみたいな難易度で示すな（半ギレ）

前線に居るのに我がマスター君に向けて射撃を飛ばすな（半ギレ）危ないと思ったら後衛に下がるな（絶ギレ）サーヴァント三人それぞれに対応できない距離を押し付けてくるな（絶望）

こちらら三人で全距離対応してるっていうのにその分厚い筈の壁を無理矢理に突破

してくるんじゃないねえ……とまあ、苦戦はしましたよ。狂う程に。

『——してやられた、と言うべきか』

それでも何とか、削りましたよ……逃げるか、カルナさんのゲージを一定数削り切るのが此度の陽動作戦の勝利条件です。

しかしまあ、削り切ったとは申せど。別にダメージを大きく負った、って感じもしませんし……自らの槍を傍らに携え、静かに此方を見据える姿には、余裕すら感じられる気がいたします。

『見事だ。この場におけるの勝利は、お前達のモノだ。誇ると言い』

『……そう言えれば良かったんだけど。こっちもかなり疲弊させられたよ。うん』

『買いかぶりだろう。この結果はお前たちの奮闘の成果だ』

『奮闘した割には疲れている様には見えないけど？』

『ああ。其方の戦いぶりは見事。しかし、それでも疲弊しきる程の激戦とはなり得なかった。それだけの事だ』

で、このお言葉である。いやー、まあ余裕ですな、的な煽りに聞こえてしまいそうですがまあ……これでも素直に賞賛しています。カルナさんなりに。

この言葉に『互いにここで決着をつける程の血戦でなかった以上、そちらも余裕は残しているだろう。であれば俺ばかりが疲弊するのも情けない。ここは僅かながら矜持

をもって『余裕』を見せておくさ』位のあと『一言』が足りません。

……コレは自分のマスターに説教されても仕方ないというか。

『どうする？ まだやるかい？』

『——いや。やめておく。破られた以上は、素直に負けを認めさせてもらおう。それに……これ以上に戦い、疲弊するのは、そちらにとつても痛手だろう。その程度の事が分からぬ、と言う訳ではあるまい』

という事でカルナさん、見事撃退!! 撃退です!!

いやー……ちかれた……（疲労困憊） 第五特異点からの難易度爆上がりを形にしたかのような激戦でございました。因みにこれで序盤なので、全然ここから強敵がどんどん出てきます。最悪だねえ!!!

もう帰りたい……（震え声）

でもまあ、ここで大きな経験値を得られましたんで、第五特異点突破後のホモ君のステータス成長が楽しみになって来ます。

このプレイのある種のラインである、Fateシリーズの中でも間違いなく強者側である人間、『バゼットさん』を越えられるかがようやくよく見えてきましたねえ。

は？ バゼットさん越えるとかお前調子乗り過ぎだろ……と、ファンの皆様は思っているでしょうが、しかしながら、彼女ですら、サーヴァントを倒すには、明確に特定の

条件付きなんですよ。

この実績解除のラスボスを倒すなら、少なくともサーヴァントを、覚醒状態なら条件無しで殴り倒せるようにならないといけません。未だ道はまだ遠く……

あ、因みに今回のバトルのMVPはゴルゴーンさんです。同じ遠近両方熟せるタイプのサーヴァントとして、幾度となくカルナさんの猛攻を凌いでくれました。

後、気が狂ったみたいにクリティカル叩き出して、カルナさんの体力を最も削って下さったのも彼女だったりします。なんででしょうか、カルナさんに恨みでもあったんでしょうか……

今回のカルナさん戦は、カルナさんとゴルゴーンさんの横綱相撲をずっと眺めてる感じでしたね……周りの機械化兵士とかを地道に削っていた他のお二人は、そりゃあ大層暇だったと思われれます。お疲れさまでした。

『よし、それならこつちもスタコラサツサだ！ 流石にアメリカの物量戦に付き合う程には私達も酔狂じゃない……B u o n v i a g g i o！ また会おうじゃないか、諸君！』

これにて陽動作戦、無事終了、退散!! ダ・ヴィンチちゃんの捨て台詞と共に、盛大に撤退開始でございます。

『うるせエー!』

『YES! OK! ソウデスカ! で終われるかあ!』

『地の果てまで追いかけてケツの穴を倍プツシュだ!』

あ、当然ながら無事に撤退できるわけもなく。アメリカ軍の皆様が頭ポツポさせながら追いかけてまいります。カルナさんとの激戦後で大分消耗しつくした自分達をさらに削りに来るアメリカ兵隊の皆様は非常にまじめだね♡ その、もう少し手心と言うか……(半ギレ)

全く……疲労してるとはいえ、此方もサーヴァント三人に加え、強化済みのマスターが一人だぞ、舐めるな!! 追いかけてきたことを精々後悔させて——やったからな(戦闘終了) カルナさんからはぐれてまで追いかけてくるから……!

とはいえ、ホモ君のアメリカ一人旅もここが一区切り。最後まできっちり頑張つて戦いましようねえ。おや? なんか黒いシルエツトが浮かび上がつて——

『——待て』

斬!

……ファツ!? (不意打ち)

『な——……』

『あ、れ……』

あ、アメリカ機械兵士諸君!?

なんてこつた！ 我々を追いかけていた兵士諸君が、突如として一発で首やら胴体やらをずんばらりん、血潮ブシャー！ 赤色の雨エ〜……いやふざけてる場合じゃありませんよ第五特異点にあるまじきグロ表現で敵が死んだんですけど。

なんと、事ここに至ってまさかの新手でございます。

『見つけたぞ』

そして新手の下手人の手元には……鈍く光るニンジャ・ウエポン・KATANAが！
しかも二本体勢！ 手数重点！

さ、サムライ!? アメリカン・サムライIIサンのイントリー!? いや、一本下駄から銅鎧に至るまで、バリツバリガチガチの国産の侍でございますけれども。

アメリカ機械兵団を切り裂いて、主人公たちに追いついて来たるは……白い狐面と、全身着こんだ真つ赤な大鎧の、室町というか、鎌倉っぽい武士。

どうやら、此度の追撃戦、そう容易くは終わってくれない模様。カルナさんクラスの怪物——すなわちは、サーヴァント戦の御代わりでございます。そんなメインディッシュをお代わりするとかこつちはフードファイターじゃないんだから……

『仲間割れ、つて雰囲気じゃないね』

『——その首、貰い受ける』

『話を通じるタイプでもじゃなさそうだ！ 取り敢えず迎撃準備！』

しかしながら、こちらら血の気の多いカルデア24時、この大盛オーダーを受けてたつ宣言でございます。

まあ、突如として現れたと思つたら無感情に機械兵士を切り捨てた挙句、そのまま二刀流で刀構えてにじり寄つて来る侍相手に、『先ずは会話から始めようじゃないか』つて判断する方が可笑しいとは思うので真つ当な判断ではありません。

ええい、陽動作戦から、機械兵、カルナ、機械兵、そしてサムライ。一気呵成の四連戦です。体力も限界だつてんだ休む暇を与えろ（半ギレ）

さて。突如として現れたこの謎の敵。

クラスは……アヴェンジャーですね。おい、アヴェンジャー多すぎだろこのFGO。味方に二人、敵に一人、どうなつてやがる。エクストラクラスは希少だつて話だろ、教えはどうなつてんだ教えは！

んでカルナさんより少ないとはいえ、この人もちゃんど二ゲージあるわりかし強敵だしさあ！ これはちよつとW a s s h o i 案件ですねえ！

『——行くぞ』

この謎の侍サーヴァント、果たして、その正体は——なんか源氏殺してそんな顔してんなお前な（ネクスト・○ナンズヒント）

第九十四章・裏：景より、怨、滲みて

——ふと、自分が何をしているのかを、考える事がある。

自分は、『——』を殺すためにこの身を得た。ただ一つ、ただ一つ、ただ一つだけ。その一つを全てを切り裂き、引き裂き、粉々にする。その為の存在だ。

翻つて、今はどうだろう。自分がいるのは、彼の者達の血筋の住む故郷ではなく。相手にしているのはその血筋どころか、人種すら違う。

『ひ、ひいつ……なんだ、なんなんだよ、お前は?!』

相手の首を刎ねるその度に。

切る直前、あふれ出す怯えと共に、心の底から『なぜ殺されなければならないのか、分らない』と言う顔をされる。

やっているのは自分だが、その態度も至極当然だと思う。

名乗りも何もなく、仮面に顔を隠し、叫ぶことも無く。静かにただ、斬る。何人いようと、どんな時だろうと、どんな相手だろうと。

向こうから見れば、何の因縁も無い相手が、突如として襲い掛かって来る。自分を殺し得る得物を携えて。仲間を切り捨てているのだから。

人間、目的も正体も分からぬ敵に襲われるのが最も恐ろしい。それは、この体に僅かに残る記憶からも、思い出される。夜闇に包まれた山の中、何処にいるかも分からぬ敵兵に弓を射かけられれば、歴戦の武士共とて容易く怯えて逃げ出す。

最も恐怖を与えるやり方で、自分はこの地の兵士を切っている。

……事になる、が。別に、それは意識してやっている訳ではない。

自分にとつて因縁も無ければ、本来であれば相手にする理由もない。それを敢えて切るというのだから、やる気も起きず。

ほぼ、『作業』だ。

『それでいい。お前は、その身に刻んだ『怨』の一文字の命じるままに、切れば宜しい。

その結果として、私の目的は、勝手に成就される』

雇い主からは褒められ通しだが、自分としては何も喜べもしない。こんな作業をどれだけ繰り返そうが——胸は満ちる事すらなく。最早虚しくすら感じてくる。

「——下らん」

我が恨みを、彼奴らにぶつけてやろうと思っていた。自分勝手とはいえ、我が身を動かす熱意を満たす事も出来ない。

自分は何のために召喚されて、何のためにこうして剣を振っているのか——天を見上げた時、思い出すのは、あの言葉。

『——を、切らせてやろう。存分にな』

それが、自分を乗せる為の甘言であらう事が、分らない訳もない。

それでも、構わず一も二も無く飛びついた。それは、自分の生まれた意味である、今こうしている存在理由である、そして……未来永劫忘れず、必ずや果たすと誓った、自らを導きそして我が目を焼き焦がす、灯でもある。

成せるのならば、と。

まるで、毒餌に飛びつく、飢えた獣の如く。浅ましくも、首を縦に振った。

そうして——今や、自分は、雇い主の思うままに地を駆け、無感情に木偶共を狩り尽くす飼い犬の如くだ。

此度の命の相手は、『大物』との事であったが、自分にとっては、どれだけ大物だろうと関係はない。こんな所で奴らと顔を突き合わせる訳もなく。『処理』して終わりだ。

「……………」

びくり、と感じる気配。

あの胡散臭い法師の言う通り、どうやら目標はここを通るようだった。

曰く。例えば方向性は違えど、同じ『もつとも撤退するのに良い場所』を探っているの
に変わりはないのだから、そこから相手がどのよう動くのを、相手の良いケを調べる
事で逆算する、との事。

少し懐疑的ではあったが……どうやらあの法師、腕は確からしい。

木から伸びた枝一本、その上より、視界に写る森全体をゆつくりと見つめ……その姿を漸く、捉えた。

男が一人と女が三人、そして、四人に少し遅れるように、鉄屑の集団が追いかけて来ている。あの槍使いの姿は見えず、気配も感じない。どうやら無事にもう一人の『かるであ』のマスターを救出せしめたのだろう。

消耗し、追撃を受けている敵を狩る……やる事は落ち武者狩りと変わらない。相も変わらず、些かも乗り気にならぬ仕事ではあるが。しかしながら、今までに比べ、まだ歯ごたえだけはあるやもしれない。

せめて、この暇を、剣を交える事で、少しばかり慰められれば、と……

「始めるか」

二刀を抜き放ち、枝を蹴って跳びあがる。

目標は、鉄屑の集団の後ろ。まずは余計な横入りの可能性を断つ。連戦の後とはいえ自分と同じサーヴァントが相手だ。僅かな横やりが、致命打になりかねない故に。

「——む」

宙を駆ける、その一瞬。集団の中にいた、小柄な一人と目が合った。

頭に生えた朱色と、艶やかな和服が、妙に美しい……人ならざるモノ。

その角からして、鬼であろうか。此方を見つけ、しかし驚くでもなく、睨むでもない。まるで空を飛ぶ小鳥を、偶然見つけたような、穏やかな眼で――

にやり、と。口元をゆがめた。

「……っ」

背筋が一瞬冷える。

酷く、蠱惑的で……それは、到底敵に向ける様な表情ではない。

暇を潰す、その程度に考えていた。だが、直ぐにその甘い考えを投げ捨てる。あの三騎の内、あの小柄な鬼一匹、少なくともアレは決して容易い相手ではない。

敵を前にして、獲物と舌なめずりをするでもなく、敵として警戒するでもなく、ただただ無邪気そうに……笑う。

得体の知れぬものをこそ、人は恐れる。そう思っていた事が、そのまま此方に帰ってきた形になる。アレは……底が知れない。

「気を、引き締めねば」

そう考えつつ、地面へと降り立つ。

くるり、と振り返り……少なくとも、今までの様な不意打ちは通じないと想定し、鉄屑を切り捨て、その流れで一気に切り込む案は捨てた。様子を見つつ、戦わねばならない。

そう考えつつ、先ずは目の前の鉄屑共に、一閃、二閃。取り敢えず首を外さぬように確かに刎ねる。これらが残っているだけで、大きな痛手を被るかもしれない。流れ作業ではなく、念入りに、狙いを定めるのは、久方ぶりだった。

すぱん、と猥雑な機械仕掛けの鎧を裂いて、首の肉へと切り込みそして……骨と骨の継ぎ目をすり抜け、根元から——断ち切った感触。確かな手ごたえ、今の剣に僅かなブレも無し、最速の冴えだ。

……不思議だ。何故だろうか。剣が、何時もよりも奔る気がする。久々の緊張感が、存外と、良い影響を与えているのだろうか。

口元が弧を描く。

適度な緊張が好く働く、等と。そんな段階は、既に通り越していたと思っていた。存外と、サーヴァント等になってなお、若いつもりか、と。

崩れ落ちる木偶共の先、見えてくる相手。女が一人、女怪が二人……なるほど、よく見れば、そう容易くやれそうな相手ではなさそうだ。

如何に切り込むかの一つ、頭を回そうとして——その中に。

ふと、懐かしい、感覚を覚えた。一体何だろう。そう思ったのは、刹那。

は、と。気づけば。弧を描きかけていた口が——殊更に大きく、裂けたが如く、広がったのが、分かった。

「——見つけたぞ」

成程、調子も良くなるわけだ。そうか、我が身は、自分よりも先に、この感覚を捉えていたのだろう——ほんの僅か、鼻先に香る程度の、薄い……薄いコレを。

怪訝な顔をしている。見られる理由もわからぬと見える。当人すら分からぬ程に、薄い繋がりなのは間違いないだろう。

遙か遠い先の子孫か？ それとも——ああ、何れにせよ、関係はない。久々に齒ごたえがある相手だとか、そんな事はもう関係ない、気合いが、瑞々しく、乗った。

哀れには——思わぬ、その一族に連なるという事が、殺す理由だ。

雇い主に感謝を一つ。

我が眼前の目標は確かに大物、自分にとつては一日千秋と待ちかねた獲物。

憎きかの『——』に、繋がる者ではないか——!!

「つ……コイツ……!」

『仲間割れ、つて雰囲気じゃないね』

「——その首、貰い受ける」

『話を通じるタイプでもじやなさそうだ！ 取り敢えず迎撃準備!』

我が身は、『——』を恨む。

我が身は、『——』を呪う。

我が身は、『』を殺す。

ただ一つ、『』を塵殺おうきつすという『情』一つが、我が身を芯から燃やし、駆動させる。この時、その情は熱く、大きく、そしてとめどなく、盛りだす。

これを阻む者諸共、悉く。

「——行くぞ……源氏、死に候え——!!」

第九十四章・裏：シャーマンにして戦士 前編

「ぎん

「——つふう♪」

「ちいつ……」

二刀と大剣の衝突と共に、そこから二人のサーヴァントが飛び下がる。

知らなかった。鋼と鋼が最高速でぶつかり合うと、こんな音がするのか。また一つ、賢くなつてしまった。

金属同士の奏でる甲高い音がするかと思いきや……酷く重たく、低く、そして……確実にあの間に入ったら死ぬことを、聞いただけで想像出来るような、こんな音がするとは思わなかった。

最後の一撃に至るまで、どれだけあの二人の打ち合いが激しくなつていったのかを。当人達ではない此方ですら、想像するのは余りにも容易かった。

「やるねえ……」

カルナとゴルゴーンさんのつぶし合い見た後だと、大抵のサーヴァントがちよつと怖くないみたいに錯覚しそうだったけど、気のせいだ。

「ちいつ……シャアツ!!」

「ふふふつ、ええ顔しよる、なんや都の武者を思い出すわあ……!」

疾風の如く、木々の間を駆け抜け。

木立の間、僅かな隙間で散る火花が、二人が戦った軌跡と僅かに残る。

状況は……恐らくは、互角と言つていいか。

アサシンの俊敏さは文字通り人間離れたモノで、先ず滅多な事では追いきれないだろうに……しかし、襲い掛かって来た敵の二刀の冴え、その身のこなしの素早さは、獣ですら追いつけない程のアサシンの鋭敏な動きに、ついて来ている……

否、寧ろ時折、アサシンよりも素早く、目の前に回り込んでいる様にも見える程で。

アサシンを援護すべきか、一步を踏み出そうとした所で――

「――っ!」

鋭いまなざしが、此方に向けて突き刺さり、踏み出そうとした一步を縫い留められる。どれだけアサシンと激しく剣を打ち合わせ、爪の強襲を凌いでいようと。欠片たりとも俺に向けられた意識は反れないし、締め付けは緩まない。

ゴルゴーンさんはつまらなさそうにしているが、大変申し訳ないが、ここは堪えて貰わないと……いや、俺も別に『加勢したい』と思つていない訳でも無ければ、寧ろ積極的に殴り合いたい所なんですけれども。

『本造院くうん?』

「あ、すみません姉御……」

『誰が姉御か。まあ綺麗な姉さん女房かもしれないけど……』

「アンタを女房にする奴は相当度胸あるなあ」

このように私、マスター本造院。この中で立場が最も低い故に、最高責任者のお言葉は受け入れないといけない……という事で。大人しくしている。

『良いかい? あのサーヴァントの君への入れ込み方は尋常じゃないんだ。もしアサシンがカバーできない所まで君が踏み出した時点で——もう一度、命をかけて……いや、命を捨てて挑みかかって来るぞ』

というより、大人しくしてないとマズい事くらいは、分かる。

先ほど——襲い掛かって来た奴の動きは、正に狂的だった。

自ら切り殺した兵士の身体を蹴散らし、文字通り弾丸の様に突撃して来た。真正面、当然、ゴルゴーンさんもアサシンも、式部さんも、当然、突っ込んできた奴を、迎撃したのだ——だがしかし。

一切、奴はソレを気にしなかった。振りかぶったアサシンの大剣を受け止める以外、ゴルゴーンさんの魔力光線も、式部さんの拘束する為の術も……全部、避ける素振りすら見せようとせず、受けたのだ。

正直、その時点で面食らったのは確かだが——問題はそこからだ。

サーヴァントからの攻撃をほぼ無防備な状態で喰らって、ダメージも生中なもんじやない筈……だというのに。あのサムライは、真つすぐ此方との距離を詰めようと、突進しようとすらししてきたのだ。

『な、なんと……!?!』

『本造院君、下がれ! どうやら、あのサーヴァントの狙いは——』

『俺かよつ!?!』

その時……奴は、対面しているアサシンの顔すら一瞥だにしなかつた。鏢迫り合いの最中ですら、仮面の奥から見ていたのは俺だけ。間違はなく傷だらけで、痛みに顔をしかめたっておかしくないのに——その瞳は、寧ろギラギラと、輝いていた気すらする。

怒りか? 違う、そんな分かりやすい感情なら、俺は『怯えない』。

あの時——俺は。

その瞳に見えた『喜悦』の感情に、どうしようもなく、ビビらされた。

喜悦、だけじゃない。その奥に、何かもつと、激しい感情があるのは、流石に分かる。じゃないと、こっちの攻撃受けて、顔色一つ変えず押し込んで来る、なんて出来る訳がないと思う。

しかし、その激情が……待ち望んでいたおもちゃを与えられた子供みたく、純粋な『喜

び』となって現れるなんて、そんなの聞いたことも無い。

『漸くだ……漸く……!』

『——旦那はん、下がった方がええと思うよ。コレ、首刎ねても、顎だけで食らいついてきよるから』

——アサシンだけが彼女と打ち合っているのは。単純明快。あのサーヴァントの圧力が文字通りの『脅威』だったという事。

『君が死んだ時点で、カルデアは大きく戦力を減ずることになる……流石に、死兵となった相手に、君をあてがうわけにはいかないからね』

万が一にも、俺を前線に出すわけにはいかない。それがダ・ヴィンチちゃんの判断だった。こちらもサーヴァント三騎、絶対にも近い守りと言っているが……

しかしながら、相手だつて現状サーヴァントと鎬を削っている強敵。文字通り、自身全てを薪に、殺意を燃やして特攻されれば、如何に三対一とてそれを凌ぎ切れるとは限らない……そのダ・ヴィンチちゃんの言葉を、笑い飛ばせないだけの凄まじい迫力が、目の前の武者には存在していた。

故に……カルナ戦で消耗の激しいゴルゴーンさん、接近戦を得意とする奴とぶつけるのは無謀に過ぎる式部さん二人は、援護等せず守りに専念……消耗も少なく、同じく接近戦を得意とするアサシンが、奴を相手取る事となり——

その二人の戦いは、未だ大きな動きを見せておらず。こっちとしては……手痛い足止めを喰らっている。

「……ダ・ヴィンチちゃん、反応は」

『ない。ないけど……このままここに貼り付けにされてたら、補足される可能性は全然ある……まだ、安全地帯と呼べる位置じゃないからね、ここらあたりは』

そう。

この場所は、アメリカ側の、デンバー拠点から、大きく距離を取った場所、とは言えないし全然、相手が追いついてくる距離でもある。一応、林の中で見通しは悪いが、向この数は尋常ではない……人海戦術を駆使されたら、普通に見つかりかねない。

一番まずいのは、復活したカルナ辺りが、もう一度襲撃をかけてくること。敵地に飛び込んだ事で間接的に宝具を封じ、ゴルゴーンさんとの単純な力比べに持ち込んだ事で何とか勝ちを拾ったが。

巻き添えを気にしないで良い場所で奴と戦って勝てると言えば。正直、苦いというしかないだろう。ゴルゴーンさんが弱い訳ではない、だが。アレは……尋常の強さじゃない。そもそも、人間ではないゴルゴーンさんと、単純な力比べで競り合う方が可笑しいと言えば可笑しいのだ。

故に……状況は、奴の有利に傾いている。もしも、アメリカ側が追いついて来たりし

ようものなら、場は混沌とし出す。その混乱に乗り、あのサーヴァントが、俺の首を真つすぐに刎ねに来るのは、容易に想像できちまう。

……解決策は、一つ。

『藤丸君からは、こつちに向かつてくれた、つていう連絡があつたんだけど……』『流石に向こうとは距離があつたからな……間に合つてくれることを祈るしかないつて言うのは、存外、歯がゆいもんだねエ……』

藤丸は駄目だ。三人のサーヴァントの足並み揃えて動くのは当然目立つ。

であるならば……一応、こつちと協力関係を結んでくれている——
「——遅くなつた」

彼に頼るのが、一番だろう。

その声に振り向けば、木々の中から進み出てくる男が一人。

接近にすら気づかぬ、『借りた宝具』での隠密行動。しかしながら、それを最大限に生かせるのは、本人の技量あつてこそだろうと思う。

「……悪いなジェロニモさん、無茶させちまつて」

「君たちとは、協力すると言つたのだ。この程度気にすることはない」

構えたナイフと、傍らに浮かぶ不思議な人形は……彼の戦闘態勢が整っている事を示している、のだろうか。彼が戦っている場面を見た事ないから、分からんけれども……

でも、少なくとも頼もしく見える事は確か。

此方に向けて軽く笑ってから——ジエロニモさんは、木々を見つめつつ笑った。

「木々の力を借り受け、彼女を罫に嵌める……少し手間取るが、構わないかね」

「おう。でもなるべく早めで頼みます」

「承知した」

第九十四章・裏：シャーマンにして戦士 中編

先ほどの直感は、間違っていないかった。

「そうら、鬼さん、此方——」

「シイツー！」

振り抜いた剣の先にまるで手ごたえは無く、すり抜けて……すたり、と、降り立った先からは、最早——抜ける事は出来ないだろう。

僅か一分に満たない隙とはいえ。攻防の間に見出したそこは、自分であれば、容易に抜けて……首を刎ねに行けるだけのスキマであつたというのに、そこへ狙つた様に、降り立つて道を塞ぎ。牙を見せながら、僅かに笑んで見せる。

「——手えの鳴る方へ」

……封殺されている。

隙がない。と言うよりは、隙を作らない戦い方をしている。一々考える訳ではなく、思考と直感を柔軟に織り交せて、その都度最適な一手を打つ。しかも自ら切り込む割合と敢えて受ける割合を、自由自在に変えて、自分をここから逃がさぬように、戦っている。

お陰で、先ほどから、まるで狙いの首を刎ねに向かえない。

丹念に、丁寧に、織り込まれた布で柔らかく、しかし、しっかりと縛られている……感覚としては、それが一番近い。

もう一つ、厄介なのは……目の前の鬼が、それを、目標を守るためにやっている訳ではないという事だろう。

「そんな焦らんでもええんちゃうか？ もう少し、ウチと遊んでいかへん？」

庇う積りなら。もう少し、私から意識を外す。

私一人に意識を集中させている？ そんな温い話ではない……後ろの楔がどうなるうが、取り敢えずはどうでもいいのだ、目の前の化け物は。

今は、自分と切り結ぶ事で、楽しむ事しか考えていない。

だから上手い事、私との間に回り込んで、逃がさない。自分と戦え、楽しませろ、と強制してくる。私と戦う以外の事は、完全に些事としか思っていないだろう。

何処までも、自分が感じる刹那の楽しさに酔い痴れている、何処までも享樂的な姿勢は正に……人とはまた別の理を持っている鬼ゆえだろうか。

「——厄介な事を。まるで、足元に纏わりつく、泥だな」

「そつちも、ウチとじゃれとるのに、旦那はんばつかり見とるのは……ちよつと、失礼なんとちゃう？」

失礼などと、どの口が言うのか。明らかにそちらは自分の主を蔑ろにしているだろう。

罵詈雑言を苛立ちと共に並べ立てたいが……しかしながら、ここで下手に苛立つのは握手だろう。

護衛に気をもんでいる訳でもなく、自分が楽しんでやっている事だ、そう簡単に精神がすり減る等、まずはあり得ん。此方ばかりが苛立って、余計に余裕を失うのは、致命打になりかねん。

「――」
埒が明かない。

このまま、この娘に釘付けにされていては。

ただでさえ、向こうは此方の狙いを察して、私が直接目標を狙いにくいような体勢を取っている。無駄に消耗しては、守りに着いた二騎をすり抜け、切り込む事も苦しくなってくる。

ここは……腕一本程、犠牲にする程度は想定するべきか。

寧ろ、この化け物を相手に、無傷で通ろうと考えている、自分が甘いのか。念願の敵の首を刎ねるのに、自らの傷一つ惜しんでいて、成せる訳もない。

後で、あの胡散臭い法師の手を借りる事になるかもしれない事になるのが腹立たしい

ことこの上ないが……仕方がない。そう思つて、ちらりと視線を、戦っている鬼らしいサーヴァントの背後へと向け……

「今だっ！」

そこで。

声を上げ、こちらに背を向けて逃げ出す、三人の姿を捉えた。

一瞬、何が起きたのか分からなかつたが——しかし、理解したと同時に、胎の底からこみあげてくる、歓喜の感情。

「——ははっ！」

笑いが止まらない。

幾ら守りを固めていようと、逃げている間というのは、どう足掻いても隙が出来る。なんとまあ、相手が自ら背中に大きな逃げ傷を作ってくれと言わんばかりに、悪手も悪手な一手を打った。

付け込んでくれと言わんばかりの、大きな油断だ。まさか、追い詰められたここで、此方にとって最も都合の良い一手を打ってくれるとは。

位置がずれ、再び飛び込むだけの隙も見出した——ここだ。

即座に決断。目の前の敵を、敢えて無視し……最悪、背後から一撃貫う覚悟で、地面を蹴ろうと、少し、身体を沈ませて。

「逃がすか——っ!？」

「そんな逃げようなんて……あかんよ?」

瞬間。

踏み出そうとした自分の目の前に、鬼の娘が、再び立つ。あの一瞬で此方に回り込んで来たとは、随分と悪い冗談だ。反応の速さは、正に人外のソレと言うしかない。

再び、経路を塞がれた形にはなるが——しかし

「——邪魔だ……っ!」

それでも、一步を踏み込む。平に構えた二刀を船の衝角代わりに振るい、もう一步。お利口そうな瞳が、大きく見開かれた。

無謀な特攻にも見えるか。だが最早関係ない、今ならば。多少痛手を貰おうと、突っ込めばお釣りがくる程の好機。故に——

「ぬうううううっ!!」

「っ……!」

地面に突き立てられ、盾のようにされた大剣に、そのまま切り込み。

地面を、蹴り飛ばす。地面が抉れる感触がした。構わない。無理矢理に押し込む。金属と金属の、削れ合う音と……僅かな火花。

力で圧され、深く突き刺さった剣が、地面を引き裂くように、後ろへと押しやられて

いく。踏ん張ろうとしているが、初速の分、私に分がある——抜けられる。

「——ハアッ！」

……振り切った剣に、重い手応え。目の前から消えた大剣、浅く切り裂かれた敵の肌を確認し、競り勝った実感を得てから、胴を曝け出し、隙だらけの敵へ、切り込もうと振り抜いた刀を、再び降り降ろそうとして。

目が合った。

驚き？ 焦り？ それとも呆然としているのか……否、どれも違う。牙を覗かせ、まるで誘い込む様に、細い胎を晒して——

「——っ！」

抜けろ。

そう無理矢理に体に命じ、振り下ろそうとした腕を引き留めて、その代わり、脚に全身の力を回して、その脇をすり抜けて飛び出す。抜けたその直後——遅れてやってきた悪寒が背筋を駆け抜けた。

ちらり、と背後に視線をやる。

「ちえ。ざあんねん」

自分と同じ、肩越しに此方を見つめる鬼の目は——川魚を取り逃がした童の様ですらある。獲物を無邪気に見つめる、ある種、残酷な瞳だった。

直感は、恐らく当たっていた。あのまま切り込もうとしていけば、致命打どころでは済まない痛手を喰らっていた可能性がある。

腸を餌に、狙っていたのは——此方の、首か。

欲を出せば、碌な事にならない。煮立っていた頭が、急速に冷える。狙いは源氏の首一つ、他に欲張る等、愚の骨頂だ、と。

「——逃がさぬ」

改めて、視線を前に向ける。一瞬の攻防の隙に、多少距離を稼がれはしたが……しかし、何方へ向かったかくらいは、流石に分かる。我が足なら追いつけない距離ではない筈だ。万が一、後ろの追手に追いつかれぬように——全力で、地を蹴った。

しゅるりと。景色が後ろへと向けて、流れ出す。自分の最速、一手遅れた鬼の娘は最早追いつけないだろう。背後の気配は、はるか遠く——最早、私の事を阻む者は何もない。追いつけば、その背に特大の逃げ傷をくれてやる。

「源氏……我が一族の恨み、この景清が、必ずや……！」

燃え盛る胸の焔が、更に足を速く、加速させる。

脳が沸騰したかのように熱い。熱くなっている自覚はある、だが、この思いを最早抑える事敵わない。熱に従うまま、故郷の木ではない、見慣れぬ模様の木々が流れていくのを横目に、只管に加速する。

もはや、日ノ本ですらない、この場所で、恨みを晴らせるなどと、想像もしていなかったからか……想像以上に、浮かれているのか。ならば、この浮かれ切ったそのままに剣を振るうのも、悪くはないだろう。

その時。

鼻に流れる風の中で、ほんの僅かにだが……甘い、燻した様な、匂いが香った気がしていた。

「もう……行ってしもた。もうちよつと遊びたかったんに、ざあんねん——ま……早めに森、抜けられると、よろしおすなあ？」

第九十四章・裏：シャーマンにして戦士 後編

息を大きく吸い込む——森の香りではなく、少し埃っぽい、荒野の匂いだ。

周りを見回す。さっきまで抜けてきた森はもう大分後方に……自分達以外に、人影は一つもない。式部さんは少し不安そうに森の方を気にしている、うーん美人にはちよつと不安そうにしてる顔も似合う。ゴルゴーンさんはもう退屈がピークになったのか、軽く欠伸をしている。かわいい——

しゅっ（目の前を蛇が横切る音）　ぎくっ（地面に蛇の歯が突き立つ音）

「——何だ？」

「あ、いえなんでもないっす」

歯がとつても健康デスネ……良かった良かった……

うん。この人が気が立つてるところに余計な事はもう二度と考えまい……流石は神話の女神様、勘の良さは多分人間と比べ物にならない。

……それは置いておくとして。

兎も角、二人とも大きな傷も無しだ。本当にここまで何もなく。スムーズに逃げてこられた。てつきり、一回くらいは、追いついてくる事もあるかと思っていたのだが。

「——追いついてすら来なかった、か」

ちらりと視線を後ろへ向けるが……結局、最後まで先ほどの武者野郎は、一度森の木々の向こうに見えなくなつてから、一度も顔を見ることもなく。

感想としては、何時の間にか振り切つた、と言う感じだった。

「……物凄い執念深く追いかけてくるとばかり思つてたけど、あっさりだったな」

「まあ、そういうやり方をした。寧ろ殺意も強く、一点に熱中している程に、ハマリやすいというモノだ」

んでもって。それを成し遂げた吾人はと言えば……軽く腰など叩き、伸びしつつ、欠伸を一つしている。襲撃して来た敵から逃げ切つた後とは思えない程に、非常に呑気にしていらつしやる。

アメリカに根付いていた古いシャーマンであり、勇猛果敢な戦士でもある、という話だったが。俺だったらこの人を、『賢者』って表現する。

「後は、アサシンを待つて出発するだけか」

「……で、どうする」

「普通に逃げる……が、特定の場所に、彼女を誘い込む必要がある」

具体的には——自分が、通つて来た方向へと。

ジェロニモさんは、静かに、聞こえぬようにそう話を切り出した。指さす先には……森の木が一本。そして、そこに描かれた……文字、だろうか？

木の模様には紛れるように描かれて、ただの模様にも見えてしまう。どうやら、ジェロニモさんが施したものらしい。

「ここに来る前に準備は整えてきた」

との事。

『ふーむ、実に興味深い……この木に馴染みながら、確かに主張している、調和と浸食という相反するテーマを内包したこの文字、いや、紋様かな？　ううむ、現地でスケッチした〜』

「……魔術的とかじゃなくて、そつちなんだ」

『私は万能の天才である以前に、芸術家だからね。気になつちやうとも』
そつちでつか……つて。

見られた、睨まれた、ヤバイヤバイ……話しているのモロバレしちやう……

つたく、なんでアサシン相手においてこつち見れる余裕があるんだか。軽口の一つくらい叩かせて欲しいもんだ、万能の人と、友達みたいに気軽な会話するなんてそこ

そこ貴重な機会だしな。

……とはいえ、コレであのサーヴァントがどれだけ冷静に、そして執念深く此方を狙っているかは分かった。例えばアサシンが相手であろうと、絶対にこっちが逃げようとする一瞬を、あのサーヴァントが見逃す事はないだろう。

「——とまあ、あの調子だ。マジでいけんのかい、ジェロニモさん」

「ちゃんと引つかかってくれば、問題はない」

ううむ。物凄い自信。

「ここまでのはつきりと言われては、信じざるを得ない。

「とはいえ、確実に引き込めなければ、どうにもならない可能性がある……故に、万が一も無いように。手伝って欲しい」

「手伝う……えつと、どういう方向で？」

ちらり、と取り敢えず周りの二人を見回す。暴力ならゴルゴーンさん、頭使う仕事だったら式部さんになる訳なんだけれども。

そんな俺の視線に応えるように、ジェロニモさんが指し示したのは……式部さんの方だった。どうやら頭脳労働の方をご希望らしい。

「——やって欲しいのは……彼女の気を引く事」

「気を引く、ですか」

「どんなやり方でもいい。先ず一度、ハッキリと『此方に注意を向けさせる』事。それも回り込む様な理性ある戦いをさせてはいけない——此方へと猛獣の如く、襲い掛からせて欲しい」

そう言つて、ジェロニモさんは自分の持つている……キセル？ つばい何かを見せた。そこから立ち上つているのは、何かしらの煙なのだが、しかしながら。只のタバコの煙とは思えない。

なんだか、匂いを嗅いでいると、こつちの意識が、ぼーつとしてくる、様な——

「——よしなさい」

はつ、と。

肩を叩かれて、意識がはつきりと戻つて来る。

目の前に、ジェロニモさんが立っていた。何時の間に……と目をしばたたかせる。ふと、若干泣きそうな表情をしている式部さんと目があつた。何か俺はしてしまつただろうか、ふと思ひ出そうとしていると……

『あーっ！ 漸くバイタルが安定した！ 君！ 迂闊に変な煙とか吸い込まない！』

こちらの耳をぶん殴る様な剣幕のダ・ヴィンチちゃんの怒鳴り声が、通信機から耳に向けて飛び込んで来て。思わず顔を顰めてしまう。

……どうやら、さっきの煙を、ほんのちよつとだけ吸い込んだだけでエライことになつ

ていた、らしい。自覚がない。

ちらり、と。一番こういう時、冷静に話をしてくれそうなお人に視線を向ける。此方の視線に気が付いたのか、呆れたように息を一つ吐いた。

「……その男が、手元の煙の説明をしようとした途端、阿呆のように口を開けて人形のように立ち尽くし始めたのだ。面白い物を見れたぞ、存外とな」

……どうやら、俺が間抜けを晒しただけのようだ。

「しかし……嗅いだ、つていうか。鼻に香っただけで思考が鈍っただけ……ヤバい煙だつたりする？」

「少しばかり、ね。そして……サーヴァント相手でも、十分に通じる」

古くからアメリカの大地で暮らしていた、ネイティブ・アメリカンの人達。

例えば、ジェロニモさんが属していた『アパッチ』等は、たばこの煙や、自生していたサボテン、その他色々な物を使ってトランス状態に入り、精霊と交信していたのだという。結果として、彼らはそういう薬草などに自然と詳しくなった。

そしてそれを活かし——ジェロニモさん曰く『悪用』だそうだけど——彼らは、卑劣な侵略者達にゲリラ戦を仕掛けていった。

「——その知識の一つ。意識を一点に集中させて、その他の事に無防備になる。本来は集中力を高める為に使われるモノなのだ」

「それに突っ込ませさえすれば……後は？」

「彼女には、自らの手で迷ってもらおう事になる」

……その後。

式部さんの式神を使い、アサシンとこつそりと連絡を取つてから。作戦は実行に移された訳だ。

んで。式部さんのお手伝いで『意識するくらいの大声』を張り上げて逃げ出した俺に対して、完全に奴はロックオンを定めて、一発でジェロニモさんが散布していた煙に突っ込んだ訳なのだけれども。

「……結局、あれって言うのはどういう仕組みなんだ？ 本当に勝手に離れたけど」

しかし、集中力が高まっているのに変わりはない筈で。そんな状態で自分達を見逃すとは思えないのだけれども。そう思って尋ねた俺に、ジェロニモさんは、俺達が逃げて来た方向——森があつた方を見つめながら、口を開く。

「森、というのは元来より迷いやすい。木々の中と言うのは、我々が暮らす場所とは明確に違う『異界』なのだよ。故にこそ、その力を少し、借りるだけでも……知識のない者

は容易く、道筋を見失う。今回の場合は……間違つた道筋を追う、と言つた方が正しいか」

「なるほど……」

それは。

寧ろ集中力、一点しか見えなくなっているなら、致命的だ。誰か止める者もないのなら、間違つているかどうかも考えず、突っ込んでいってしまったても、不思議ではないと。

追いかけてくる追手を、間違つたところへ突撃するように誘導する。実に手慣れたやり方と言えるだろう。

「スゲエ知啓だ」と

「……誇れるようなものではないがね」

だけど。それを褒められても、ジエロニモさんは。

ちよつとだけ困つたように、頬を掻いて笑うだけだった。

第九十五章

強硬なやり方でボロボロにされた実況、はーじまーるよー。

はっはっはっ……君本当にもうちよつと、もうちよつとだけ手加減して貰えませんか
ねお嬢さん……あの、サーヴァントの皆様ではなく、マスターへ一直線に突撃するのは
勘弁してもらえませんかね。

カルナさんとはまた別の脅威だったんですけど。どれだけアサシンちゃんとかゴル
ゴーンさんとかぶつけてもそれでも尚、静かにホモ君に切りかかって来るといふ恐怖。

と言うか、前衛、中衛、後衛、何処に配置しようとも、只管に切りかかって来るとい
すよ。なんなんですか君は、カルデアオリジナルマスター絶対切り殺すウーマンなんで
しょうか。原理主義か？ 藤丸君しかマスター許さないマンか？ 気持ちには分かるぞ

(握手)

僕はね……ぐだメルが凄いい好きなんだ……だから万が一このホモ野郎が間に挟まる
うもんなら即座にガメオベラにして……いや、なんでもありません。

まあ、とはいえそのぐだ原理主義のお方は、私の手で叩き潰したんですけれども。な
んと同士をこの手で……まあ敵ですししやーないか(切り替え)

といつてもまあ、三人だつたらマジでホモ君と敵サーヴァントで等価交換されてガメオベラの可能性もありましたが……ジエロニモさんマジで助かったツス!! いやー、途中で参戦してくださったとき、神様かと思いましたよ。

流石に四対一の連携には敵わず、撃退には成功いたしました、と言う形です。

『逃がさぬ。源氏……我が一族の恨み、この景清が、必ずや……!』

コワイ! やつpegachで切れてるじゃんけ……消される! 消される! まあ殴り倒したの此方なので何も言えませんが……無事に撃退した代償は余りにも大きかった。

再戦の約束をされて震えが止まりません。うーんこれぞすんの……まあ明日は明日の風が吹くって事で(雑) 結局のところ、手持ちの札でどうにかするしかないって言うのは変わりませんからね。

それに、これからは漸くカルデアチームも合流出来ますし。今度あのサーヴァントがやって来ても、カルデアの総戦力で迎え撃つことも可能……次は、今回の二倍の戦力がある訳で、流石に今回よりは楽になる……と信じたい、です。

さて、漸くアメリカと謎の敵勢力を振り切って……ジエロニモさんについていったその先には、町が一つ。

『……お、漸くおいでなすつたか。アンタらが、カルデアの残りの人員だな。歓迎する

よ。ようこそレジスタンスへ!』

ウエスタン映画で良くある、町の入り口のモニュメント、ポツンと荒野に立つゲート。そこに単発式の長筒を携えたガンマンが一人、見張りについていました。ああ、漸くまともな特異点の住人に出会った気がいたします……

という事で、ここがジェロニモさん達、レジスタンスが拠点の一つとしている街ですね。藤丸君達と、ようやくここで合流でございます……長かった。ホモ君チームで戦力万全じゃないままに、強敵のサーヴァントを二人相手にすることになるとは思っておりませんでしたからね……ええ、一人は想定してましたけど。

『お疲れ様。色々と危ない役目を任せてしまって、申し訳なかった』

兎も角、最近は連絡の取れなかったロマニと漸く再開、お褒めのお言葉を頂きました。もう第五特異点の序盤も終わりそうな勢いですよね……だというのにこんな逸れまくってるの本当に慈悲もクソもないなあ特異点……

藤丸君達とも感動の再開を済ませた所で。さて、先ずはこっちの状況をロマニと一緒に考えましょう。既に情報は共有してますから、後は顔つき合わせて話すだけです。

因みにF G O R P Gのキャラクリシナリオの一番のツツコミどころとして『なんでマスターそれぞれにチームが分かれると、二人の司令塔の内、何方か一人としか連絡が取れなくなるのはどうしてなのか』と言うモノがあります。なんででしょうね。

まあそりやあ特異点なんていうイレギュラー地帯で、二人いるマスターをちゃんと手厚く見ないといけない、だから一人に一人、ちゃんとした大人が付いているっていう事なんでしょうけれども……情報共有してるなら頑張ればなんとかなるのでは……？

『——アメリカ側の追手では確実にない。かと言つて……アレ、ケルトつぼくはまあ見えないよねえ。明らかに。刀に、大鎧かな。アレは』

『そこから考えるに……鎌倉時代から平安時代の出身、と言つたところかな？』
まあ、そこは置いておくとして。

どう足掻いてもジャパニーズですな、我が同土の方は。なんだつたら相手の首を刎ねればハッピー♡時代のジャパニーズ・蛮族時代の方臭いんだよなあ……ん？ つまりジャパニーズ・ケルト？ 実質ケルト陣営だな！ うん！

いやまあ、流石に蛮族括りは不満ではあると思うので言いませんけれども……兎も角何れの陣営にも属さない第三勢力である事は間違いない模様です。

『僕らに味方してくれるレジスタンス。西部のアメリカ、東部のケルト、そしてもう一つ勢力が……か。ちよつと一旦状況を整理したい所だねえ』

『それは確かに……』

本来はアメリカおよびケルトの二勢力だけなんですけれどもねえ……もう一つの軍勢は一体何を目的とする集団なのか、まあ司令塔のお二人としても気になるところでは

あるでしょうか。

……うん。気にはなりません。

『ただその前に、目の前の一つの問題を解決しよう——マシユ頑張つて！ 貴重な戦力をキラキラ（退去）させちゃ駄目だ！』

『はいっ！ な、ナイチンゲールさん、落ち着いてください……！』

『いけません。最早その心臓では血液を送る役割は……！』

先ずは目の前の狂人の所業を何とかしなきゃ（使命感） いたいけな田舎少年に向けて両腕を広げ襲い掛かっているナイチンゲールお姉さんが怖すぎるっぴ！ 片手に握ったメスを振り上げる姿はシリアルキラー重点!!（震え声）

いや、その襲い掛かられている少年が割とイケメン……ならぬイケシヨタっぽい雰囲気があるせいで、わりかしちよつと、あの、見た目が青少年の育成的な事案だったりするのだけでも……

『さつきからそっちの方が騒がしかったのは、アレが原因かい？』

『うん……彼を治療できるようなサーヴァントを探していたらしいんだけど、その可能性がありそうなお人そのものが、冷静どころか情熱に目覚めてしまつて……この通りだよん……』

見た通り、ナイチンゲール女史が暴走を初め……この始末☆ いたいけな少年にむ

ちつ♡むちつ♡なえちえちボディを振りかざしながら迫る看護婦さんとは、コレはおねシヨタ本の表紙ですね間違いない……片手でメスが左胸に切り込める最適の準備態勢になっていなければですけども（事実確認）

え……なんなんだこの闇のおねシヨタ本。

当然ながら、ナイチンゲール女史がウゝス異本のシヨタ喰い旧支配者になっている訳でもございません。婦長がここまで熱意を上げるのは誰かの命を助ける医療行為だけでございます。という事で、これもそのイケシヨタを助ける為の医療行為でございます。

んで婦長、その子をどうやって治療すんの？

『だからと言って手から何から全て切除されては困る！』

『いいえ！ 貴方はこの大地に一つの命としてまだ生きている……どんな方法を取ったとしても、必ずやその命を繋いで見せる……！』

『いや患者本人がそれを望んでいないのだから諦めてくれ!!』

……だ、ダルマですか（震え声） ああいけないいけない頭がウゝス異本の浸食を受けている……いやまあ、でも普通じゃない治療をするのは、普通じゃない患者と言う証。

今回の患者なのですが、何と心臓を抉り取られた状態で『何とかならんか』と運び込まれて来たんですよ。いや、心臓を抉り取られて普通に生きたまま担ぎ込まれてくる

な。そこは素直に死んでおけよ人として……まあサーヴァントなんてね？

という事で、心臓がボロボロになっていく状態。新鮮な血液が全身に巡らないと、巡らない部分がどんどんダメになっていくから『切りましょう』ってなるのは分からないでもないです。

にしたつて肺以外全てを切除する勢いで詰め寄るな（）

『まあ、そりゃあ……『ラーマヤナ』の主人公、かのコサラの王のラーマだ。最悪手足を失つても、色々アドバイス貰えたりとか期待は出来るけど』

『よ、余は王である以前に戦士だ！ いただっ、戦う術を奪われては、たまったモノではないぞ！』

まあでも心臓抉られても耐えるっているのは、当然ながら普通のサーヴァントでは不可能でございます。此方のサーヴァント、というかイケシヨタ君も普通のサーヴァントとは一つも二つも格の違う兵^{つわもの}。

インドに伝わる聖典の一つ、そして、アメリカ側において最強の英雄と名高い、かのカルナが描かれた『マハーバーラタ』に並ぶ二大叙事詩、『ラーマヤナ』の主人公。

インドの最高クラスの神格、ヴィシヌの化身と謡われる伝説の王にして、インド最高格の英雄の一人、名をラーマ。数多の武具を自由自在に扱ったとされる武術の達人でもあります。

まあ要するにカルナさんと同格のバケモンです。火力は向こうに分があるかもしれないがしかし、単純な武術の腕では此方の方に分があるやもしれません。まあ高次元過ぎて他から見れば誤差みたいなもんですけど……

『しかし……そのラーマがこの有様とはね』

『仕方ないだろうレオナルド……ラーマーヤナにラーマがいるなら、ケルト神話には彼がいる——しかも、聖杯のバックアップを受けてるとなれば、僕は彼が人理焼却の黒幕と言われても疑わないさ』

『狂える王様、クー・フリーリンか』
んで。

それをこんな状態に追い込んだ敵がいる事実。

とはいえ、格としちゃあ負けちゃいませんよね。こつちが神話の主人公なら、向こうも神話の主人公。

その名を——クー・フリーリンと言います。

第九十五章・裏：劍客風聞

「残念ながら、心当たりはないな。俺達は結構コソコソやってるもんで、運よく遭遇しなかったのかもしんねえなあ」

「そう、か……ありがとな」

再びの空振りに、半分諦めの気持ちになりながらも話を切り上げた。

レジスタンスへのあいさつ回りがてら、例のサーヴァントについて話を聞いてみよう
と足掻きに足掻いて。だが、全く以て手ごたえはない。

否、手ごたえが無いというか。手ごたえはあっても、そこから全く情報を得られな
いっていう方が正しいのだろうか。

「……」

知らない、と言う奴は先ずいない。全員がとは言わないが、少なくない数のレジスタ
ンスの奴らが『その現場』を見た事があるのだという。

アメリカ、ケルト、そして……自分達の仲間も少し。いずれにせよ、その兵隊達が、無
残な姿で野風に晒されているのを。

機械の鎧を着こんでいたアメリカ兵など、機械と肉が、まるで……

「……やめよ、想像するだけ吐き気がしてくる」

……兎も角、敵を機械的に刻み、ボロボロにした挙句、それを見せつけるようにそのままにして去っていく。彼らとしては……知っていても、少なくとも関わり合いにならないとお相手じゃないのだろう。

それを、はつきりと口に出されて言われる事もあった。『あれは普通じゃない。荒野を彷徨う悪霊の類だ。話すのも呪われそうで嫌だ』と。

そんな、脳裏に刻まれた恐怖の印象だけが分かる対応をされまくった事を思い出しつつ……結局、収穫無しのままに合流地点に辿り着いてしまった。

少し考えながら、頭を搔いて……すたり、すたりと。誰かの歩み寄ってくる音に、そちらを振り向いた。

「ただいま戻りました、マスター」

そこには、俺と共に聞き込みをしてくれていた麗しのサーヴァントが一人。土埃舞うこんな場所でご婦人に聞き込みさせるとか、なんて思う。だが今更ではあるか、と意識を切り替えて……手を振った。

「お疲れさまー。どうだった？」

「申し訳ありません、手応えがない、と申し上げればよいのか……手応えはあれど、その

正体は、どうにも掴みかねる、と申しますか」

「どうやら——式部さんの方も、余り良い情報は仕入れられなかつたらしい。

そもそもあまり見かけない、というのもあるだろうが。運よく遭遇しなかつた、という言い方に現れている。アレに直接会つた事はないが、しかしながら……首やら体やらを無残にも真つ二つにされた死体には、よく遭遇するらしいのだ。

その事で、『なんかヤバい奴が居る』という認識自体は、このレジスタンス達の中にも広がっている。彼女の方でも、凡そ同じ反応が返つて来たとの事だつた。

「……出会つてもいけない相手まで恐れさせるとはなあ」

「はい。どうやら、かなり苛烈な武人の方なのでしょうね」

「残つた痕跡が死体の山だけなんざ、相当気合入つてるな」

「思い出すのは……あの時戦つた、源頼光。」

「少なくとも、容赦のなさは彼女以上である、という印象だ。」

「……全く見当がついていないって訳でもない。こつちのカルデアでも、正直、色々な意見が出て来てはいる。『魔術王ソロモンを名乗る敵が用意した刺客なのではないか』というモノもあれば、『シャドウサーヴァントを操っている一味の一人なのではないか』と言うモノもあつて。」

今のところは、ケルトからアメリカまで全部の敵を切り殺し、そして俺を積極的に

狙っている事から、シャドウサーヴァント側の勢力なのではないか、という意見が、強いっちゃ強いが……確証はない。

確証を得るには、一つ、確かめにやらねえところも、ある。

「んじゃ、行くかー」

「どちらへ？」

「藤丸ん処。結局、合流した後、ゆっくり話も出来てねーしな」

「成程なあ……んで、何時の間にもやら離脱してた巖窟王が、突如として見張りの兵隊を倒して、カギを開けて。ジエロニモさんと合流して逃げられた、と」

「うん。凄かったよ。エレナさんの意識が反れた一瞬で」

「そしてその後も大活躍で敵を蹴散らされた、と。正に、八面六臂、でございますね」

「いや、その後は『伏兵がいれば厄介極まりない。偵察に行く』ってどっか行っちゃってただけ……」

……ちよつと何言ってるか分からないですね。いや分かるけど。だからって再びマスターを置いていくなよ。単独行動が過ぎるだろうあの兄ちゃん。ちよつと苦笑いし

ながら式部さんと顔を合わせた。

まあ兎も角、藤丸の方も中々にカオスな状況だったらしい。と言うかその状況下でも拳銃ブツパして牢屋を削ろうとするナイチンゲール女史とかが主なカオスの原因だけでも。

「あ、話それちやったけど……兎も角、俺達の方でも話題にはなつてたけど……やっぱり話したくもない、つていう感想の方が大きい、かな。詳しい事は全然」

「ふーむ、そうか」

「お話、ありがとうございます。藤丸様」

まあそんなカオスの中でも、流石に情報収集は欠かしていなかったようで。寧ろ、レジスタンス側の奴らに話を聞いてた俺達よりも、アメリカ側の人達から色々聞き出しているようだった。

「——しかし、不思議な話だ」

「不思議、ですか？」

「何が？」

「もしあの武者野郎がシャドウサーヴアントの一味だったとして、だ。これまで俺達と戦つて来た奴らよりも、過激すぎやしないか？」

その話を聞いて……俺の中のその思いはよりはつきりとした形を持った。

アメリカ兵、レジスタンスの人員は勿論。何方の側で話を聞いても、『ケルト側も巻き込んで』という話を必ず聞く。間違はなく、あの武者は無差別に攻撃を仕掛けている。それも、無差別に恐怖をばらまく様に。

今までも、現地人に時折襲い掛かったりもしていた事は有った。あつたがしかしながらここまですりやられたか？ 敵も味方も、関係なく切り殺すようなやり方をしてきたか？ こんな目立つやり方を。

「言い方は悪いが、完全に後先考えない同士討ち同然だ」

「それは……確かに、そうですね」

「もしシャドウサーヴァント側の勢力じゃなけりや、ただの野良と判断してもいいかもしれなげどな」

その今までの違いを解き明かせば、何処についているかは、容易に分かるだろう。だが何処についているかの応え、それがどう転ぶかによつては、もう一つの疑問が湧いてくることになる。

「——シャドウサーヴァント側の勢力だった場合。今までのやり方から、方針を変えたのはなんでだ？」

「……俺達に対して更なる戦力を送り込むだけなら分かる……けど！」

「味方していた筈の、魔術王側の戦力まで巻き込む意味は？ 奴らの中にも、何かしらの

変化が出ているのか？　そうしても構わない、と判断するだけの変化が」

それは……俺達にとつて、福音とは到底なり得ないだろう。

「……まだ、推論に過ぎねえが」

「頭の片隅に入れて、行動した方がいいのかもしれない」

——暫し後。

藤丸は、改めてジェロニモや、マシユやリイと言つた自分のチームのサーヴァント達と話をすると、と言つて歩き出していつて。俺と式部さんは、それを見送る事となつた。今は、色々な人の意見を聞きたい、との事であつた。

一つ、呼吸をする。

さて。藤丸からの情報は聞けた。ならば藤丸のように、もう一つ……アイツとは別視点からの叡智も欲しい所か。カルデアの中で、源氏、と言うモノに恨み骨髓、つていう感じだったあの感じを知っているとすればただ一人だろうか。乾いた空気の中、転がっていくタンブルウィードを眺めながら、ポツリと、零すように言葉を落とす。

「アンタの意見も聞かせて貰えれば、ありがたいんだけど——復讐者殿」

「……ふん、貴様が欲しているのは、奴の属している勢力が何処かの確証であつて。奴自身の恩讐の在り方ではあるまいに。無理に知りたがるのは、人間の悪癖に他ならん」

その言葉に応えるように、空中……というか、虚空から、黒い霧の様な物を纏つて男

が一人、地面に降り立つ。ポークハットにマントと、絡みつく黒く重い気配に……式部さんは、思わずしてごくりと唾を飲み込んでいた。

全く、一々出方がおどろおどろしいというか。

「巖窟王様……」

第九十五章・裏：復讐言論

「巖窟王様……」

「……その呼び方は、やめろ。エドモン、で良い」

雰囲気たつぷりに登場した復讐者殿であつたが。

しかしその鼻先、素直に口から飛び出した式部さんのお言葉がクリーンヒット。しつかりと顔を擧めて、出鼻をくじかれたと言わんばかりに眉をひそめている。そりやあまあ、巖窟王様じゃマジでなんか悪い権力者っぽいもんな。分かるよ。

いやー全然姿が見えないけど、もしかしたら藤丸の近くならいるんじゃないかって半ば空振り前提で口にしたんだけど。マジでいてちよつとビツクリしてる。相当真面目に藤丸の事を守ってるなこの復讐者。

……つてあれ？　なんかすごい睨まれてるんですけども……なんでそんな顔を成されていらつしやるので？

「半分当て感で呼び出されただからな、こうもなろうよ」

「あ、それはお分かりだったので……」

「貴様分かりやすいだけだ」

……それ前も言われた気がすんなあ。

「そんな分かりやすいか？ 俺」

「はい」

そんな式部さん、断定するくらいにはフランクになつてくれたのね。うん。そこを喜ぼうかな、素直に……いや喜んでいいのか？ 絶対だめだよ多分だけど。もうちよつと服芸とか出来るようにならないとね本造院君。努力しよう。

……いや、それは良い。今話したい所は、そこじゃないんだ。

「まあ、分かりやすいのは追々として……それで、出て来てくれたつて事は、何かしら叡智を授けてくださるつて事でいいのかい？」

「……ふん、俺がフアリア神父の真似事など、ゾツとせんがな」

「悪いね。んで……」

意外な面倒見の良さに付け込む様に、俺は口を開く。

「率直に聞く——あれは、あの剣士が好きでやつてるのか？ それとも、そういう風に動くように指示をしているのか？ アンタは、どう思う？」

正直な話、ここが分かれ目だ。

前者なら、ただの野良サーヴァントと同等と判断して動く。正直な話……自分の感情のままに、あんな残酷な行為を繰り返していたのなら……恐ろしくもなるともない。血

に酔つて暴れてるだけなら、言い方は悪いがお山の獣と変わらん。

なんだつたら、マスターの俺ですら対処できるかもしれない。いやサーヴァント相手にフカした。調子乗り過ぎだろ、アレの目の前に立つたら一秒と持たないわ。

まあ兎も角、前者ならいいんだ——問題は。

「もし後者だつたら……間違ひなく、その裏の奴らは、意図して動いている筈だ。俺はそれが……相手の迷惑が進んだからの、変化じゃないか、つて思う」

……素人考えだが。

魔術王を名乗る存在と俺を狙っている勢力が、協力して動いていたのがほぼ間違ひない以上は。協力していたのは、『利』があつたからだ。それを投げ捨てる様な凶行に出る等と、ただの気まぐれとは思えない。

今までとは違う行動を取つたなら、そこにもまた『理』がある、そう考えるのは普通の事だろう。そして……それが、相手の何かしらの不利によつて起きた、と樂觀的に考えられる程、この旅はイージーモードじゃないんだ。

「——奴がただの獣である、と言う可能性を最初から排除している物言いだな」

「俺は、そうは思っていないからな」

「根拠は」

「……アレだけ狂気じみたやり方をしているのに、全く正体が割れていない事……これ

は、奴がこの凶行をやつてる、つていう事の証拠にもなるが」
そう。

これだけ派手に殺し、バラして……寧ろ目立つ殺し方だ。何処かしらから、何かの情報が漏れても不思議じゃないというのに。しかしながら、まるで尻尾すら……否、影すら踏ませないというべきか。

「——運が良いだけ……と言う発想もあるけど、普通はどう考える？ 式部さん」

「……慣れている？ 不意を打ち、各個撃破するような、動きに」

「うん。俺もそつちの方がしつくりくるなあ。アレは、手慣れた奴の動きだ。そして各個撃破、ゲリラ戦つて言うのは……」

「ケダモノの発想ではない、か」

「……ま、素人なりにだけど。山に住んでた頃の経験から、推測してみた」

俺が今まで、この大陸で出会つて来たケルトでもアメリカでも、レジスタンス側でもない敵は、二人。槍使いと、あの武者

片方は、文字通り狂犬そのものだ。あんなクレーバーなやり方が出来るかは、怪しいもんだ。そして……消去法的にも、戦つた時の印象的にも、それが出来るのは、あの鎧武者の方だと思う。

そして。奴がああ凶行を行っている下手人だと仮定して——

「もう一つ……俺の個人的な考えだが」

「……」

「俺から見て……あの剣士野郎は、あんな辻切りして、血を見るのを楽しむタイプにや見えない。もつと。執念深く、冷酷に、たった一つを追い求める、いつちばん……恐ろしい類の人種だ」

獸の発想ではない、と巖窟王は言ったが。

いるんだ。獸の中にも……血に酔わず、本能に奔らず、そして冷徹に獲物を狩るタイプのキレた奴らが。そう言うのは本当に厄介で。こつちも冷静に対処しないと、逆にこつちが獲物にされかねない。

奴は、アサシンと戦っている間も、ずっと奴は俺から意識を逸らしていなかった。文字通り一瞬の隙を見せれば俺の喉首に食らいつく……抜け目の無さは、山の中の油断できない獸そのものだ。

「……ああいう手合いは、冷静に、そして冷徹に目的を果たすまで、無駄な体力を使うどころか、下手に獲物を追う事すらせずに、機を待って、じつとしている。何の目的もなく、首を狩る、なんてしない、と思う」

実際、奴は俺らを追いかけて来ていたアメリカ兵を切り殺した時も……一瞬で、首を切り捨てて、文字通りに、最小限のやり方で済ませていた。

本当に無駄のない暴力……本来は、ああなんだ。阻む敵を最小限の労力で殺し。たった一つ、自らの狙う獲物だけを目指して突っ込んでくる。

あの剣士が、下手人とするならば。

「アレには、何か目的があったり、とかじゃないのか？」

「——恐らくは、な。話を聞く限り、楽しむ事は愚か、寧ろ心を殺すが如く、無心で切り殺しているのだらうよ」

……そこを解き明かすのには、彼の視座がいる。

世界でもっとも有名な復讐者。どん底から這い上がり、自らの暗い焰の命じるままに悲願を成し遂げた者。彼にしか見えない、視点がある。

「無心で？」

「く……クハハハハハハッ!!」

エドモンは、あざ笑うように、けたたましい笑い声を響かせた。酷く大きな音の筈なのに、乾いた街の静寂に、何処か寂しく響く。

ぎろり、と此方に向けられた目には——正に、獲物を狙う虎の如く、煌々としたギラツキが宿る！

震えが来るぜ。

これが巖窟王、モンテクリスト伯か——

「——我々は、この身を薪として恩讐の焰を滾らせる暴走する機関車にも等しい！それが道草を食う暇がある等と、思うか!？」

「じゃあ、あの派手な殺人は？」

「見せしめにしても、些か以上に『荒い』！自らの暗い炎に薪をくべられず、軋み交じりに苛立ちを抑え込んでいるのが聞こえてくるようだな！半ば八つ当たりの如く、切り殺しているのだらうよ……与えられた命を、洩々果たすために!!」

その言葉は、彼の意見を端的に表していた。

そして……今までの誰よりも、その意見は、感情的であり、しかしながら、誰よりも冷徹に、敵の武者の思考を読み取って紡ぎ出した、答えでもある。

ちらり、と式部さんと目を合わせる。彼女も、こくりと頷いた。

彼女が『そう』と頷いてくれるなら、心強い。心の機微についてちや、この人以上に参考になる人もいないだろう。

「——ダ・ヴィンチちゃんに報告かね。今度はこつちからソロプレイ志願したいってな」「という事は、マスター」

「シャドウサーヴァント側の勢力、その大物サーヴァントが来た——漸く、向こうが尻尾を見せる位の大きな動きを見せた」

……今まで、さんざやられっぱなしだった。アサシンの時も、ライネスちゃん達と協力した時も。随分とこっちの過去を抉る真似をしてくれた。

許す訳がねえ、一発。ぶち込んでやりたいとはずっと思ってたんだ。

「向こうが漸く姿を見せてくれたんだからなあ。そろそろ、反撃に打って出ても、誰も怒らねえだろうよ……！」

第九十六章

言え！ その方法を！ な実況、はーじまーるよー。

さて前回、ボロボロの痛々しい姿になったラーマ君にナイチンゲール婦長が襲い掛かったところからの、続きです。いや言い方あ!!

『——クー・フリーン。光の御子と呼ばれた、アイルランドはアルスター伝説に語られた大英傑。彼が戦場を共に駆け抜けた槍ゲイ・ボルグは、狙えば必中、一撃で心臓を穿つと伝わっている』

問題は、ラーマという英雄をここまで追い込んだ敵です。ケルトという伝説の軍勢が敵に回っているならば、真つ先に名前が挙がる程の脅威であり、抜群の知名度を誇っているのがクー・フリーンでございます。

影の国、と呼ばれる人外魔境の地を統べる傑物、影の国の女王たる『スカサハ』に武術の手ほどきを受け、クランの猛犬と恐れられた武術の達人。

ロマニの言う、必ずや心臓を穿つ呪われた槍『ゲイ・ボルグ』を手にし。短い生涯の中で参加した大きな二度の戦争で、多大な戦果を上げました。

その最期は、敵に奪われた自らのゲイ・ボルグに貫かれるという、なんとも悔しい終

わりだったと言いますが……それでも尚、クー・フリーンは自ら石柱に身体を括りつけ、内臓が零れる程の重症を負って尚、最後まで倒れる事は無かったと言います。

『ですがドクター、ゲイ・ボルグは心臓を穿つ伝説こそ持ちますが……ラーマさんのように心臓を呪う、と言う力は、ない筈なのでは?』

……しかし、マシユの言う通り。

ゲイ・ボルグは相手の『心臓を一撃で穿つ』というシンプルかつ強力な力を持つてはいますが、しかし逆に言えば、それ以外の特殊な呪い等は持ち合わせません。

ラーマ君の現状のように、心臓の治療を阻害する力とかは持ち合わせていません。

そういう力を持つているのは、クー・フリーンの後輩……そう、以前登場した、デルムツド君の持つ黄色の槍、『ゲイ・ボウ』と言う槍の方なのですが、ラーマ君が交戦したのはあくまでクー・フリーン。デルムツドが戦いに乱入した、という事もないらしいのですが……さて。

『ゲイ・ボルグは、『放てば心臓を破壊する』という現象を引き起こす。だから、ラーマにゲイボルグが直撃したんだから、『心臓が破壊されて死んでいる』という状況の方が普通で……根性で耐えているこの状況の方が異常なんだよ』

『——彼が生きている事が異常だと?』

『いやそういう事を言っているんじゃない?』

……うんまあ、そりやあそこは反応するだろうねナイチンゲールさんは。まあとりあえず落ち着いて、そういう事を言ってる訳じやないんですお嬢さん……今の状況を客観的にドクターが説明してくれてるだけだから。

え……取り敢えず寸断された説明の続きですが。

要するに、コレはゲイ・ボルグの能力じやなくて、ゲイ・ボルグに心臓を破壊された事によって起きている『現象』が近いという話です。

ゲイ・ボルグは『必ず』心臓を穿つ伝説を持つ槍ですが、それは宝具として昇華した後に『直撃すれば必ず心臓を破壊する』という能力として成り立ちました。

その確定した筈の事象を、何とラーマ君は根性と逸話と化け物染みたステータスとスキル諸々で堪えているのです。しかし、直撃したゲイ・ボルグの方も心臓を絶対に破壊してやろうと力を発揮し。

その結果、心臓にダメージを負いながらもなんとか耐えているけど、治療してもすぐさまその能力が修復した心臓を破壊しようと暴れ出す現状が出来上がる、と。要するに世界の選択に対してラーマ君がピンで抗っているというのが現状で。

その心臓を蝕むゲイ・ボルグの力が『呪詛』と言う形で、ラーマ君の心臓に現れているという事になります。みーんなー！ 分かったかなー？ 俺は全然分からん（無知の知）

で? どうやったたらラーマ君を治せるんです?

『これをおうにかするには……一番手つ取り早いのは、傷を負わせた相手を倒し、ゲイ・ボルグを破壊する事。そうすれば、彼を蝕むゲイ・ボルグの力も消え、治療すれば問題なく心臓を治せる……んだけど』

最終的に、全員○せばいいのだ!! (笑顔) ええ…… (困惑)

まさかのラーマ君を治療する方法が、承太郎さんがやったD I Oという元凶を叩き潰す脳筋方式だったという……結局の所、筋肉式はすべての問題を解決するんやな、つて……まあ理論的としてはそれでいいと思うんですけども。

『だけど、それが困難な事くらいは、通信の先の僕にだつてわかる……』

『先の二人の英傑、フィン・マックールにデイルムツド、それに無尽蔵に湧いてくるケルト兵たち……そして、ケルト、アメリカ、何れにも属さない二騎のサーヴァント。ケルトの大英雄殿を倒すには、余りにも不確定要素が多すぎる、かな?』

相手は最強クラスの怪物だつて言つてるだルルオ!? しかも今回の敵がケルトな皆様である点を考えると、少なくとも彼以外にもデイルムツドとフィン・マックールというケルトの重鎮がいて、他にも敵がいると考え……不可能に近いんじゃない? それが出来たらもう多分特異点攻略できてしまっている可能性が高いんじゃない?!

つまりラーマ君は最早助からないという事ですか!?

いいえ皆さま……心配をなさらず。当然、別の方法もございます！

『……とはいえ、この不確定要素たっぷり、渾沌とした状況だからこそ、我々には好材料がある、かな』

『うん。この世界が、到底安定している状況ではないという事……彼の身体を蝕む槍の力も、不安定なこの環境では絶対じゃない。ラーマ君自身の存在力、槍に対抗する為の力を補強できれば、かなりマシな状況になる筈だ』

そう、サーヴァントも決して弱い訳じゃありません。槍の力が絶対的でない現状ならばしっかりとラーマ君の存在を補強すれば……跳ねのけられるのです。世界がラーマ君へ押し付けている呪いを!!

『しかし、存在力の補強と言っても……』

『ふむ。一番わかりやすいのは、生前の彼の知り合いに会う事だ。生前の彼の『設計図』を知っている相手がいれば、治療の効果も上がると思う』

つまりは？ 絆パワー!!! (雑) いや絶対違う。

それは兎も角。この方法には、ラーマ君のお知り合いが召喚されている事が、先ず大前提な訳なんですけれども。ラーマ君の知り合いとなると……馬鹿な、聖人よりも数が少ない、だと……!?!

同じ神話から知り合いが特異点に召喚されてる、って言う割と絶望的な可能性を引か

ないといけないという。くそつ、折角ラーマ君の身体を治せる光明が見えてきたというのにそんな都合の良い話が――

『心当たりは、ある』

あつたよ!! 都合の良い話!! (歓喜)

ラーマ君曰く、この特異点には彼の生前の妻である、シータちゃんが召喚されているとの事。そもそもクー・フリーンに勝負を挑んだのも、彼女の行方を探るためだったという事です。

ラーマの妻シータ。ヴィシユヌの化身と言われるラーマ君に対して、彼女はそのヴィシユヌの妻であるラクシユミーの化身。前前世から結ばれているカップルと言うわけですねえ!! フウ! アツツウイ!! (茶化しホモ)

そして、ラーマ君が英雄だったように。彼女も強いヒロインでありまして。

特にラーマ君から二度の不貞の疑いをかけられながらも、決してあきらめることなく最後まで自らの誠実を訴え続けた、とつても強い……えっ? ラーマ君? (震え声)

一応、二度目はまあ理由があつての事だったんですけど……一度目は普通に妻を信じられなかったラーマ君に全面的な非があるという。

お前そんなことしておいてもう一度会いたいか抜かしてたの……? (困惑)

いやまあ、ラーマ君はシータちゃんを大切にしてたのも、ちゃんと仲が良い夫婦であ

ることも、原典でも一応、言及はされているらしいんですけれども……因みにF G Oのラーマ君はゲロほどその事を後悔していると自ら言及しています。残当で草も枯れるわ。

『成程、ラーマの妻、シータか。君の縁に引かれて召喚されたのか。その人であれば申し分ない。ゲイ・ボルグの呪いを跳ね除けるのも、不可能ではないだろう』

うーん生前の行いから割と恨まれていても仕方ないと思うんですけれども、まあ、それで恨まれていない事を祈りつつ、お力を借りに行くしかありません。ラーマ君は一応現状の最高戦力なので、コレを切り捨てる手はありませんしね。

『となれば後は——エジソン・ケルトの勢力と、アメリカ各所で惨殺を繰り返す、何れにも属さぬ武者のサーヴァントをどうするか、だな』

……んで。首尾よくラーマ君を復活させて、戦力が整ったとして……問題はそこに帰って来るわけですけども。

ロマニの分析曰く、エジソン側のの物量は単純な『アメリカンチート』との事。まあ、現代においても『物量戦』ならアメリカかって言う位に化け物染みてますから……

しかし、真に問題なのはもう一つ。積極的に人理崩壊を目指しているケルト側の勢力の方なのですが……こいつ等、恐ろしい事に兵士を『無限に増殖してくる』可能性が出て来ております。

ケルト側の証言（盗み聞き）から『女王クイーンさえいれば幾らでも替えが利く』とのお言葉が出ているらしく。そして向こうも実際、当然の如く敵兵を湯水のごとく使つて攻勢を仕掛けているとの事で、状況証拠もなんとなくその最悪の可能性を補強しており……つまり！ 戦力を削る事は、ほぼ不可能!! まあアメリカ側と消耗戦するのも不毛ではあるんですけども……

まあどつちにせよ頭である発明王と女王様を倒さねば面倒という事に変わりなく。

『となれば……』

『王キングと女王クイーンを同時に、そしていっぺんに討ち取る……ケルトを瓦解させるならば、『暗殺』が一番手っ取り早く、そして確実だと思われる』

という事で。

カルデア勢初めての……敵將に狙いを絞つた暗殺作戦が、今、ロマニの手によつて立案されました。うーん世界を救う側の戦い方じゃないねエ……

第九十六章・裏：ラーマと荒野を行く

『——余は、シートに……もう一度だけでも、会いたいのだ』

「もうそんな言われてソロプレイできるほど俺だつて人でなしじゃねーわ!!!」

「うわっ!? びっくりした!」

「急にどうした!」

「いや、ちよつと……この世の、何とも上手く行かない感じに、嘆きとこみ上げるモノをぶちまけて見た。気にせんでくれ」

式部さんにぽんぽんと肩を叩かれながら……ちよつと肩を落として荒野を進む。その姿を見て、さつきからアサシンは大変にやにやとしてゐる。じめじめしてるのは嫌いだ。嫌いなのかと聞いては見たが『そういうのが全部嫌いなわけではない』との事で。

「ほんま、面白かつたわあ……『これ以上、奴らに好き勝手されてるのも気に入らねえなあ』つて無駄にカッコつけて言うた後、あの坊の一言で聞いて、顔くしゃくしゃにする旦那はん、ええ酒の肴になつたわあ、くすくす」

「うるへー……」

……で、なんでそんなアサシンが楽しそうにしているかと言えば、一言で言えば、俺

が盛大に醜態をさらしたからに尽きる。

あの武者の事で、ダ・ヴィンチちゃんに『奴を追跡して、俺を狙ってる奴らの尻尾を掴みたい』と相談した所……流石に戦力を何度も分けるのは、リスク上ちよつと看過できない、と言う話になった。

とはいえ、俺も流石にここでそう簡単に引き下がる事も出来ない。何せ被害者だ。今までさんざ俺がぼろくそにされたのを、一発、派手に熨斗つけて返すチャンス。色々言葉尽くして説得しようとした所。

『——んー、じゃあちよつとそちらの王様に聞いてみようか』

『む？　余か？』

……まさかのダ・ヴィンチちゃんは、この街で俺達と合流したばかりのサーヴァントである、ラーマに対して話題を振った。

『そうそう。どうだい、奥さんに会うのに、出来るだけ協力してくれる人は、多い方がいいかな？』

『まあ、それはそうだな。余も、別に協力しろ、等と傲慢な事は言えんが……協力して貰えば、ありがたいと、正直に思う……許されない事を、沢山してしまった。彼女に会って、ただ一言だけでいいんだ、謝りたい』

少し苦々しく。でも、何処か申し訳なさそうに、それでも我慢しきれない様な期待に

瞳を僅かに震わせて——言ったのが最初のセリフだ。

「奥さんを救出するまでだかんなマジで!!!」

「す、すまん……余のわがままに、付き合わせて」

「ふん、変にお人好しな所が災いしたな、マスター」

「うるへー」

という事で、俺は奴らを探し出して追撃する事を諦め。取り敢えず……シータを探す為の人員と、人理を滅ぼそうとするケルト側のトップと、アメリカをこの形に保とうとするエジソンの二人の暗殺の為の戦力とを、集める旅へと出る事になった訳である。

……酷いことした、って思って。んでその上で謝りたい、と思ってるなら、そりゃあ手伝いたいと思っただっていいだろ。人として人情はあるんだよ俺だって。

最悪、奴らを追いかけるのは別にこの特異点じゃなくたって、良いっちゃ良いし……いや見つけたいのはやまやまだけど……というか。

「そう言うのを差っ引いても、流石に看護婦に背負われてる病人放って自分の敵を追っかけるのもなあ……?」

「……それに関しては言ってくれるな」

今のラーマ君を一言で表すなら……なんだっけ、こういうの……『おねシヨタ?』ああそうそう、そんな感じだ。そう言うのは疎いからなあ俺も、ありがとうダ・ヴィンチちゃ

ん。所で俺の心を読んで発言しないで頂けるとありがたいです。

……それは置いておいて。えー、バツクパツクみたいに背負われております。ラーマ君が。逞しい看護婦さんの背中に、ちよつと気だるげに体を預けてます。まあ預けているのは彼が弱っているからなんだけど。でもなんていうか……

「親戚の姉に甘える少年、つて感じだなあホント」

「ぐぬぬぬっ……運んでもらつておいて、ナイチンゲールには感謝してもしきれぬ程にありがたいのだが、それにしても何と情けない姿か……！ シータには見せられん……！」

「あまり興奮しない様に。病状が悪化します」

「あ、すまぬ」

とまあ、さつきからナイチンゲール婦長にまるで頭があがらないのも、その雰囲気も加速させている、気がする。だからまあ、こんな人を放つて自分の事ばかりついているのも、世界を救う組織つぼくないし？

……それに、今現状だつて、何もしていない訳じゃない。

そもそも、なんでこんな目立つ荒野をこの人数で、しかも分かりやすく歩いているかって言えば、まあこれがジェロニモさんの言う仲間たちがいる場所へと向かう最短距離、つていうのもあるが。

それだけじゃなくて、もう一つ理由が存在するのだが……ん？

「ありやあ……ケルトの斥候か？」

「そうみたいだね。マシユ、リリイ、戦闘準備お願い」

「はいっ」

「お任せくださいー！」

荒野に舞う砂ぼこりの先に……屈強な男共の集団、発見。機械じゃないって事はケルト側だろう。ちらり、と横を見れば、ナイチンゲールさんが、速攻で飛び出す前にジェロニモとアサシン、そしてエドモンが三方を固めるようにしてその動きを止めている

この人、さつきから敵を見かけようもんなら『病の原因』と判断して襲い掛かるもんだから、マジで何時か事故つてしまいうで困る。というか、そもそもラーマを背負っているんだから彼女が死ぬ⇨彼にもダメージが行くなので、ちよつとは自重して貰わないと困るのだが……言っても聞かないからしやーない。

「ゴルゴーンさんと式部さんで取り敢えず一斉射。それでも抜けて来た奴らは、藤丸達とナイチンゲールさん、アサシンで叩く……要するにさつきと一緒だ。お願いしまーす」

「分かりました」

「ふん、先ほどの様に、最初の一撃で殆ど使い物にならないと良いが……」

無理だと思ふ。ゴルゴーンさんの長距離砲撃を耐えられる程、あの兵士共は頑丈でも無けりや、強くもないし……とか言っている間に、ああ、巨〇兵の熱戦に焼き払われる。〇蟲の如く兵士が消し飛んでいく。なんとあはれ。

「情緒感じちゃう？」

「い、いえ……あそこから感じるの、あはれではなく哀れだと思ひますので……」

「その二つって違うの？」

「厳密には……はあつ！ 違ふと……えいつ！」

「そうかあ。うーんさり氣に相手の動きを封じた所に第二斉射えつぐ」

それに式部さんが相手の動きを制限する方に舵取つた所為か、殲滅がより効率的になつて來てるし……えつと、抜けてきた人数は……うん。数人くらいだな。というかあの二斉射の中で数人生き残つたのか。根性あるなあケルト。

「んじやまあ……後はそつちに任せていいか」

「うん。つていつても。ちよつとオーバーキルにも程があるけれども」

……とはいへ。抜けた所で待つてゐるのは更なる嵐。人から鬼まで揃つたこつちの最大戦力を固めた分厚い層の前線な訳なんですけれども。とはいへ、流石にね。この人数でタコ殴りにはせんけれども。リリイとマシユで十分。

……これだけの戦力を前面に押し出して固めてるのは。アイツがぶつかつて來るの

を想定しての事だ。

もう一つの理由。それは……囹。というより、誘因と言うべきか。

こうやって堂々と行軍する事で……あの武者のサーヴァントに、向こうから来てもらうのを狙う。追いかけるのは無理でも、向こうから突っ込んできたのであれば、叩く事も難しくない。

実質戦力を一点集中したまま、二つの目的を達成できる可能性がある、という事でもし引つ掛かったのであれば、その時は、この場の全員で叩き、その後は。

「……どうとでもできる、って言う予定なんだけれどもね」

「よし皆、張り切って行こ——」

「消毒します」

「だから余を背負ったまま呐喊するなあああああああ——」

ああラーマ君がナイチンゲールさんと共に前線に引きずり出されていく……とまあさつきからこんな調子で。引つ掛かるのはケルトの斥候ばかり。アメリカ側はガチガチに防衛を固めるって事で、出会わないのは当然ではあるが。

しかしまあ、それらしい影を見た覚えもない。一度こつちを捕捉したんだから、直ぐにでも突っ込んで来ても不思議じゃないと思っただが。

「……んー、警戒されてんのかね？」

『さーて、どうなのかなあ。あ、今度はワイバーンだよ』

「おっ、漸くゴルゴーンさんが満足しそうな獲物が……」

酷く静かだ。

別にこつちの思惑通りに動いてもらえず不満って訳じゃない、けれども……アレだけの気迫を見せたというのに。肩透かしを食らった気分だ。

シヤドウサーヴァントを使い、見つけ次第襲い掛かって来た今までは、やはり何かが違う気がする。まるで——頭がすげ変わつたような、そんな。

断章：甘やかな影の中で

「つがアアアアアアアアアッ!!」

部屋の中に響き渡るは、絶叫。

音の波は壁を震わせ、そして肌を痺れさせるほどで。腹の底で火薬が盛大に爆ぜたが如き轟音は——その中心で藻掻く、たった一人の武者の腹の底からあふれ出て。未だ止む気配を見せない。

……ただ、叫んでいるだけならいい。しかしながら、その絶叫の中で、本来動く事すら敵わぬような、幾重にも幾重にも体に巻き付いた嚴重な拘束の中で。体をねじり、地面を踏みしめて。

両腕に力を込めて、その戒めの縛を、ぎしり、ぎしり、と音を立て、僅かとはいえ引き延ばし、歪ませているのだ。

体中に張り付けた呪符も加えて、式神も駆使した鉄壁の檻——の筈なのだが。若干『これいつ破られますかねえ』等と、枷を嵌めた張本人であるキャスター・リンボは何処か遠い所を見ながら、考えてしまっていた。もし、余裕ぶちかまして真っ向から捕まえようとしていたらどうなっていたのか若干、背筋が寒くもなっていた。

「……御大将の命に従って正解でしたなあコレは」

——ほんの少しだけ、前の事だった。

リンボは自らの主から勅命を受けた。『彼女を拘束せよ』と。今、目の前にいる化け物染みたサーヴァント——平景清を。

雇い主が、何処からか連れてきたサーヴァント。平景清、とは名乗っているが。しかしながら。どうにも『個』として成り立っているようには見えない。何かしらが、混然一体になっている様な印象を受ける、得体の知れない剣士。

その女将を、雇い主は殊更に重用しており——『万が一、彼女を行かせては、むざむざと殺されかねないからね』と。口にした時には、少し困ったように笑っていた。

『彼女が合流場所に来たら、不意を打って拘束したまえ。そしたら『出入口』を使って屋敷に連れて……その上で、改めて二重、三重に拘束する。いいね？ 不意の打ち方は、ふむ——そうだな。いくつか候補を渡そうか。状況に応じて、一番良い物を選ぶと良い』

リンボは、自分が悪性の存在であることを自覚している……自覚しているが。その上で自分の味方を捕まえるのに、まるで詰将棋染みて、逃げ場もなく隙も無い、敵に使っても尚『もう少し手心とか……』と思うような余裕もクソも無いえげつの無いやり方を、顔色一つ変えずに提案するとは。自分の事を柵に上げ、若干ヒいた。

「——おのれ貴様アツ!! この柵を外せつ!! 外せえつ!!」

「いえいえそれは……主の命によつて嵌めた物ゆえに、主の命無しでは外せませんか？」
 「ふざけるなっ……!! 源氏が、我が怨敵が目の前にいるというのに……!!」

……とはいえ、その容赦のないやり方だったからこそ、こうして無事に拘束できているのだが。彼の恐ろしい所は、正にその『容赦ない』やり方だと思う。あの時代、絶大な権力に屈する者が多い中で、それでも尚、自らの才覚で頂点にあと一步の所にまで上り詰めたのは、正に天才の所業であろう。

後の世に恐れられ、祀り上げられたのも、むべなるかな。

『——景清』

ふと。部屋に静かに溢れたその声に、僅かにため息を吐いた。

どうやら、噂をすれば影、と言ったところだろうか。

「……っ！」

『おかえり——どうやら、見つかったようだね。良かったよ』

穏やかな声だ。後の世で謡われた苛烈な恐ろしさなど、欠片も感じられない程に。それこそ、ただの詩人であると、誤解してしまう程に。

そんな声に、景清は強く、不満をぶちまけながら声を——等という事もなく。寧ろ、僅かにぼつが悪そうに、顔を伏せ。先程とは打って変わり、静かな声でぼつりと呟いた。

「……外しては、貰えませぬか」

『それは出来ない。君の刃が届きうる、そんな機であれば、その枷を解き放ち、君の刃の冴えを堪能するのもやぶさかではないのだけれどもね?』

この狂犬を一体どのように従えているのか、リンボは知らない。何か特別な事をしたような事もなかった。

『かつて私は、一国丸ごとこの手に置きたいと口にした事があるけれど……君は、その国に匹敵する程の将なんだ。それを、むぎむぎ死ぬような道へとひた走らせる等と、出来るわけがない』

「……」

ただ、少なくともこの主と言うのは、自分達をよく観察し、彼なりに自分達を理解したその上で命を下しているのは間違いない。そうリンボは考えている。

リンボは、今の雇い主に対しても、腹に一つ黒いものを抱えている。しかしながら、最近分かったのだが……どうやら、彼はそれを初めから理解したうえで、リンボに仕事を任せている節があるのだ。

『ああ、先の作戦の失敗の事かい? いいさ、構わないよ。『彼女』を呼んだあたり、そもそも失敗前提だったところもあるだろう——私を容易に殺しうる刃を準備するのは、君としては当然の事だ。違うかな?』

……つい先日そんな事を言われた時は、正直、顔をしかめた。

此方は、この先への布石として、従順ぶって油断を誘うつもりだったというのに。寧ろ向こうの方からその先の事を笑顔で肯定されるなど。寛容等と言う話を越えている。

『私はね、君のそういう食欲な所を買っているのだから。多少は目こぼしもするさ。それは何者にもない、明確な長所だ……活かしたまえよ、リンボ』

そう口にした時の落ち着いたその態度に、感じた苛立ちを明確に覚えている。

自分の裏切りなど警戒に値しない——と言う訳ではない。背中から刃を突き刺される脅威を理解しても尚、泰然自若と構えているのだ。

最早、そこまで行けば『油断』ではない。

例え、背中を刺されたとしても。その刃すらも、纏めて呑み込んでしまえば……底知れない『余裕』がそこに有る。

『その時になれば、私も君を真つ向から相手するとも。焦らなくていい……じつくりと準備を整えたまえよ。その間は、私の手伝いも、ついでにやってもらおうけれどもね』

何時かは仕掛けてくる、というその言葉も。

逆に言えば、今は、その時でないのだから、仕掛けてこない——ちゃんと待つだけの聡明さは、此方にあるだろう、と。言外に告げているのだ。

此方の『有能さ』と言うモノに理解を示し、ある種それを信頼している様に口を開くのだ。そして、その言葉が間違っているのか、と言えば。

どれも、強ちそうでもない。

……景清を捕まえるように口にした時も、そうである。

『彼女は聡明な猟犬だ。獲物を追い詰める為なら、一旦退く事も良く分かっているだろう……必ず合流地点に戻って、目標の情報を求めるだろう——素直で可愛い彼女の様な将を、失うのは些か以上に惜しい』

等と。ペラペラと事細かに解説した挙句……その後、言った通りに景清が戻ってきた辺り、大分気持ちが悪いくらいに、彼女の事を理解している、とリンボは思う。

……此方へ向ける温かな情があるのか、と言えばそれは違う。友情、慣れ合い、仲間意識等と言ったものとはこの陣営は無縁ではある。

だがしかし、それでも尚……酷く温く、鼻に付く程に腐った甘い香りをさせて、弱々しく纏わりつく、この雇い主の作り出す仄暗い影の中は。

酷く仕事がいりやすく、そして居心地も良い。

『流石に、景清を動かした辺りで、向こうも『今までとは違う』という事が分かつて来ているだろうからね。リンボが担当したあの場所の時の様に、捕まえたサーヴァントから情報を聞き出そうとしたりしても、不思議じゃない』

「……待ち受けている虎口に、突っ込むようなものだ、と」

『君は戦巧者だ。ここで動くべきではないと分かっているだろう。されど感情を制御できると言えば違う……感情を納得させるのは、君に鬱憤を貯めさせた、私の仕事だ』

ああ、コレを何といえれば良いのか。リンボは、忌々しいながらも理解している。

『甘やかされている』……自分達は、雇い主に、甘やかされているのだ。決してやさしくなどない。此方の事を思つての事ではない。此方のやりやすい様に整えれば、その整え多分、自分の思い通りに動かせる、と思つているのだ。

『私を信じて待つてくれないか……君の獲物を用意した、契約を果たした、その僅かな縁に今しばらく、縛られてくれないか、景清。その時になれば必ずや——君の鎖を解き放ち忌々しき源氏の首の元へと、導くとも』

「……良いでしょう、貴方はワタシの望む通り、源氏を私の前に連れてきた。言を守つた

それに免じ、もう一度だけ、鎖に縛られてやりましょう」

『——ああ、ありがとう。景清。麗しき復讐者、無念を晴らす者……君の刃は、間違いなく義に満ちている。きつと、かの怨敵に届くとも』

……先ほどから既に大人しく話を聞いている景清と。雇い主との会話を見て。どの口が言うか、と反吐が出そうになる。

きつと、あの男は、別に景清の復讐が成功しようと失敗しようと関係ない。彼女がそのような動けば、それが自分の『利』になる様に、もう調整は済んでいるのだろう。

しかし直ぐに死んでしまうとそうはなり得ない。だから、あくまで『彼女の復讐を手伝う』体でその動きを押し留め——もつとも良き時を狙う。

『いいや……私も待っている。届かせてくれ。お願いしよう。その景色を、私に見せて欲しい。頼むよ、景清……』

第九十七章

合流!! アウトロー共! な実況、はーじまーるよー

嘗ての伴侶を探すにも、敵の首魁を暗殺をするにも、いずれにせよ必要なのは……頭数でございます。数がいれば何でもできる! 数がいれば、特異点攻略も出来るっ!

イクゾー! ダアーツ!! (遙かなる旅路への第一歩)

という事で、何時もの戦力を集めるターンの始まりでございます。どう足掻いたつて特異点の敵戦力は我々の上を行っていつていうこの理不尽。たまには我々が戦力的にも上回つても良いんじゃないですかね…… (愚痴)

それは何時もの事なのでもう諦めるしかないという話ですが……今回は先にジェロニモさんが何人か集めてくださっているらしいです。

『あの町だ。あそこで残りの二人が待機しているのだが、さつき程までの斥候を見るとあの街も斥候に見つかっているかもしれない……! 急がねばならん!』

という事でその追加人員が襲われている現場に即遭遇するとかいう、いやあ相も変わらず特異点は修羅の国ですなあ! (震え声) もう少しくらい出力を落としても良いんじゃないぜ本当に……

『——とか言っている間にナイチンゲールさんが突撃してしまいました!!』

『ええい! なんという事——』

それ以上に修羅がいて草も生えない。あの人、ラーマ君を背負っているというのに、なぜ突っ込んだ!? まあこの世界で、人々を傷つけている敵こそが病原菌だとかいう理論を提唱してしまつたカルデア側にも責任はございますけれども。

『——仕方あるまい。あの女は俺が援護する』

おおっと。

ここでもまさかの人物が、ナイチンゲールさんを助けに追従しました。その名は……エドモン・ダンテス!! 巖窟王、まさかのナイチンゲールさんの暴走をもフォロー! お陰で戦力が二人分抜けてダウン!!

……プラマイゼロつて所かな! (苦笑い) まあナイチンゲールさんと共にラーマ君諸共消滅するよりはましか。いやまあ流石に物語の展開的に死にはしなないと思いますけれども……はい。

『ええい、仕方ない。我々も向かうしかないだろう!』

『りよ、了解しました! マシユ・キリエライト、緊急呐喊します!』

という事で、なし崩しに我らも街へと突撃するしかなくなつてしまいました——といえ苦戦する要素はまるでないので戦闘はフルカットです。敵は幸いそこまで硬くな

かったので、ホモ君の経験値を稼ぐことが出来たのが大きかったくらいでしょうか。

……というか、先にナイチンゲールさんとエドモンが乱入していた所為なのか、町の中の敵のHPが削られてたんですね。だから楽だったとも言えます。こんな細かいイベントもあるのか。

『……なんというか、滅茶苦茶だ……はあ……』

『ねーねー、君さ。味方だよね』

『む。ジエロニモの言っていたアーチャーと言うのは……お主か』

『おつ、やっぱりそうだ。おーいグリーン！ やっぱり味方だったよー！』

……まあラーマ君の愚痴には一つ同情を捧げて置いておくとして。

漸く街に滞在していた二人の戦力と合流する事が出来ました。一人は、今画面に映っている金髪の少年……なんですけど、手に持つてるのはゴツイ拳銃が一丁。おおつと此方さんかなりストレートに物騒じゃねえか（震え声）

『そいつは良かった……流石に、この暴走特急みたいな姐さんとやり合うなんざゾツとしないしなあ』

そして、突如として虚空から滲みでて——否、それ位に完璧に潜んでいたというべきでしょうか。婦長の前に立ち塞がりながら、酷く疲れたような顔をした緑色のローブを纏ったとつぽい兄ちゃんが一人。腕には、小型ながらしつかりとした造りのポウガンを

備えております。

この二人がジェロニモさんが探していた、各地で抵抗運動を繰り返してくれていた二人のサーヴァントでございます。

『俺はロビンフット。クラスはアーチャー。んでもって、隣のコイツが』

『なんだ、言っちゃうんだ……まあいいけど。うん、僕はウィリアム——』

『ビリー・ザ・キッドだ』

あつ酷い（他人事）

『おいちよつと！』

『フルネームよりそっちの方が通り良いでしょ。看護婦の姐さんは、あんまりのんびりやっているとまた爆発しそうだしな……手早くの方がいいだろ？』

『つたく、そりゃあそうだけどさ……うん。という事で、ビリー・ザ・キッドだ。クラスは勿論アーチャー。よろしく！』

……まあちよつと雰囲気を台無しにする横入はありましたが。

兎も角、此方、二騎のサーヴァントは何方もアーチャー。

そして、一人は間違いないビッグネーム。アーチャーのサーヴァントを召喚するのであればまず最初に候補として挙がって来るであろう、世界でも有名な弓兵の一人である、森の狩人にして義賊……ロビン・フット。

子供向けのアニメの主人公にすらなっている彼です。知らないという人の方が少ないかもしれません。圧制者と戦った伝説でもっとも有名なのは、獅子心王とも呼べる十字軍の英雄、リチャード一世の弟、ジョンと戦ったエピソードでしょうか。

とはいえとある理由から、目の前にいる彼はそのエピソードとは全く関係のない『ロビン・フッド』なのですけれども……腕利きの弓兵である事には間違いありません。

そしてもう一人……こつちも、知る人ぞ知るアウトロー。西部劇が大好きな男の子であれば、目を輝かせて飛びつく世界最高峰の早撃ちガンマン——ビリー・ザ・キッド。本名を、ウィリアム・ヘンリー・マッカーティ・ジュニア。

アメリカ、西部開拓時代を代表する人物の一人で、少年悪漢王と呼ばれたそのローグライクな生き方と、悪人を力で捕らえる側の保安官ですら正面切つては勝てぬと早々に悟る程の拳銃の腕が有名ですね。

『二人とも、無事でよかつた、此方は——』

申し訳ないがジェロニモさんの此方の自己紹介はカットだ。

さて、コレでジェロニモさんに心当たりがある戦力は全員揃つた訳なのですが。

ここにおわす全員、正直、『ゲリラ戦』で戦うのであれば。逸話的にこの二人に加えてジェロニモさんがいれば、トップサーヴァントであつても容易に打ち取れるのではないか、という程の『名手』がここに三人そろつております。

こうなると『暗殺』という作戦が俄然真実味を帯びて来てしまった……しかもロビンさんとビリー君も承知してくださいました。無限湧きする敵を潰しまくる廃人プレイは流石にご遠慮願いたい所らしいですね。

『コレで戦力は十分……と言いたい所だが、万全を期したい所ではある。もう一人か二人、欲を言えば、セイバーかランサーあたりの、接近戦が熟せる人員が欲しいか』

しかしながら、加わったのは両方アーチャー。後方支援の戦力です。後衛が厚くなったら前衛も硬くしたくなるのは人情つてもんで。

ジェロニモさんの言に一理あり！　ここから更に更に戦力を求める旅は延長確定でございます。さーて、先ずは心当たりとかを確認したいのですけれども……皆々様方にはありませんかね。ケルト側とは所縁の無い人。

『残念ながら、僕の知り合いは召喚されてないねー。会ってないだけかもしれないけど』
『……周辺には反応は無し。少なくともここら辺にサーヴァントはいないね。うーん、別の所を探索すればまだ分からないのかもしれないけど』

はい先ずはビリー君とロマニ君からの情報で『サーヴァント？　いねえな!!』という事が分かりました。無知の知を誇りましょう!!

『となると……やはり、地道に足を使って稼ぐしかないでしょうか』

……いや、まあ待ちましよう。確かに余り反応は芳しくありませんが、しかしながら。

別に心当たりが全くない、と言う訳でもないようで……藤丸君が、ロビンの微妙な反応の機微に気が付いた模様です。

『どうしたの?』

『ああ……いや……そのなんつーか……無い訳じゃないんですけどねえ……』

微妙、っていうのは規模的な意味ではなく。見たくないものを見てしまつて、『うっわあ……』つてなつてる的な、そんな感じなんですけれども。彼的には、何か心当たりを探っている辺りで、すつと間髪入れず『知ってますよ』とは言えない様な情報らしいです。

『いやね? コイツと出会う前に、見かけはしたんだよ。セイバーとランサー……なんだけどなあ……』

……額に手を当てて、めっちゃ顔をしかめている辺り、素直で可愛い、王道セイバーリレイちゃんみたいな感じではなく、非情に厄介な部類のサーヴァントが二人、いらつしやるようですね。

ロビンが知つてる問題児なセイバーとランサー……なるほど? (察知)

なんででしょう。酷く、嫌な予感がすると申しますか。酷く脳を震わす(物理)な予感がしてくると申しますか……

第九十七章・裏：忘れ得ぬ郷愁

「……」

「……」

めっちゃや見てる。

ちよつと前を歩くりリイを——ロビン・フッドがめっちゃや見てる。

睨んでるだとか、観察してるとか。そういう感じでもない。なんというか……目元が優しいというか。

うーん……俺は、まあ見た事はないんだけど。立派になった孫を眩しそうに眺めるおばあちゃんと言うか。はたまた、遠くにある理想がもう手に入らなくなつて、それでも羨む事を辞められない老兵……的な。感じだろうか。

いや、ここでここまでではつきり言えるつて事は、どつかでそう言うのを見た事があるんだらうか……分かん。

うーむ、一度考えだすと気になる。うし。声かけてみつか。しかし、小さい頃呼んだ絵本の登場人物が、こうして目の前に現れるとはなあ……ちよつと、アレだ。あんまり気安過ぎないように……難しいな。

「……あの、すいません」

「うおっ!! な、なんだ……禿げた方のマスターか」

「おう遺言はそれでいいんだな優男。テメエそんな呼び方されたの久しぶりだよ……アタマに來ちまつた、こつち來てくれや」

ははっ、いきなり敬語を使おうとつて気が失せちまうとはなあ。流石はアウトローな義賊様だ……圧制者を煽る手練手管にも長けてるつてかあ!! 上等だ、今の俺の禿げ頭がどれだけサーヴアントに通じるかって言うのを、試したかったところだぜ……丁度な!!

「ちよちよっ、待て待て落ち着け、いきなりそんな目くじら立てなくたってよお」

「ハゲっていうのは別に気にしてねえんだ。安心しろ。だが『ハゲ』という括りで雑に表されたのだけが気に入らんだけだ。アンタだっていきなり緑の人、とか呼ばれたら複雑だろう? ううん?」

「い、いやまあそうだけだよ……待て! 悪かった! 謝る! だから、一旦その頭の物騒なもん引つ込めろ!! ツーかなんだそりや!?! なんでそんなもん生えてる!?!」

つたく……謝るくらいならはじめつから言うんじゃねえや!!

「……一応人間だよ。混じりモンだけどな」

「あー、そういう系……重ね重ね申し訳ないね」

「別に。もうそんな気にしても居ねえから平気だけどさ」

しかし。こういう反応新鮮だな。ジェロニモさんとか割と寛容だったし、今までの特典でも、頭から角生えてても全然驚いたり、反応する人の方が少なかつたしな……あれ？ 急に目の前のアーチャーが小物に見えてきたような。

「気になるかい？」

「いやあ、そりゃあ……見るからに一般人、つて感じの兄ちゃんから角生えてきたら誰だつてビックリもするでしょ」

「今までの特異点ではあんまり驚かれなかつたけど？」

「嘘じゃん……」

……いや、小物つて言うか。目の前のサーヴァントが意外と常人よりというか。いやまああんなえげつない動きしておいて常人とか鼻で笑うレベルではあるけど、でも精神的に言えばまあ、つて感じだけど。

いやそうじゃない。なんで俺は目の前の緑のサーヴァントの、人と也とを考察してるんだ。最初の疑問はそこじゃないだろうに。

「——おーい、二人とも、何やってんだ？」

「あつすみません……」

そして更に言えばなんでこんな棒立ちになったまま話をしてるんだろうか。置いて

行かれるヤバイヤバイ……いや、そもそもこの人が案内してる以上、俺達が足止めた時点で全員が足止めるか。

取り敢えず、二人して藤丸に向けて頭を下げたから歩き出しながら……改めて、ロビンに向けて口を開く。

「……んで、なんでリリイ見てたの」

「あん？」

「見てたでしよ。ずっと」

「あ……最初に声かけてきたのって、それかもしかして」

「それだよ。アレだけ熱心に見てて、なんも理由なしはねえだろ流石に」

……若干、ロビンはぼつが悪そうに頬を掻いた。どうやらリリイを見ていた自覚はあつたらしい。そして、その上で……ロビンは、もう一度、リリイの方に視線を向ける。流石にさつきの今だ、自分を見ている事に直ぐに気が付いて。リリイは、にこやかに笑うと、ペこりとロビンに向けて頭を下げた。何時もの事ながら、俺から見てもなんと華やかな少女騎士だろう、と思う。なんというか――

「……つたく、村娘かよ。あんなに屈託なく笑いやがつてさあ」

そんな少女の笑顔に……ロビンは、若干、戸惑いながら、ぽりぽりと頭を掻いていた。嫌がつている、というよりも。敵わない、とでも言いたげな表情だった。

「村娘？」

「そーだよ。穢れを知らない、っていうか……もし知ってても、それでも、信じたいって口にする的な……何とも、眩しいというか、ね」

「……」

ちらり、とリリイをもう一度見てみる。今度はこっちにも手を振ってくれた。アイドルかな？ 小さく手を振り返した。にこにこ笑ってる。天使かな？ うーんコレは完璧で極限な少女騎士ですなぁ……

うん。気持ちが分かってくる。あんな顔をどうしてしたのか。なんか、眩しいよねやっぱり。リリイちゃん。思い出されるものがあるよ、本当……奥の奥に息衝いてる……柔らかい所を、ごりって……うう。

「……アンタも似たような顔してんじゃねえか」

「うるしえ。眩しいんだよ……」

「……ホントにな。正しいと思つた事を信じて疑わない、少女騎士様とかよ……俺にとつちや目に毒だぜホント」

ああ、凄いデカいため息吐いちゃう。

「……っていうか、なんでアンタまでそんなしみじみしてんだよ。そんなしみじみするような年でもないでしょ。お兄さんと違って」

「あー、その、ね」

まあ、この特異点で出会った彼らは、俺の事情なんか知らんか……んー……ジェロニモさんにも、話してみろって言われてたっけなあ……そうだなあ……うん。よし。

式部さんに話す時の予行演習くらいはしておかないとな。いきなり話しだしてどもって上手に話せないとかめっちゃカッコ悪いしねえ。うん。まあ、ちよつとくらいなら。

「……妹がね。居たのよ。あんな感じで、澁瀬とした感じの」

「ほーん」

「ホント、可愛くてなあ。我が妹ながら、どんな男だつて一目見ればイチコロ、な可愛さしてたよ。勿論、オレもな？」

「鼻屑目って奴だな。分かる分かる。やっぱ身内つてのは可愛く見えるもんだよ」

「否定したいけど、しかねるのがなあ……他の子と比較する機会も無かつたし」

「ちらり、と。此方を見る目と視線が合う。」

まあ、自分でも、普通に考えると妙なこと言つた自覚はある。でもそれが事実と申しますか……ねえ？ うん。

だがそれにしたつて、何言つてんだ、とかそういう目じゃなく。理解した上で、若干引つ掛かった、と言つたような。そんな感じだ。

「……その妹さん以外の子は、その辺りにはいらつしやらなかつた、と」

「何なら男子も俺だけじゃなかつたかな。明確に直系つていえるのは」

「ほーん。まあ随分と、典型的に終わつてる……村？　でいいのか？」

「集落ですらねえなあ。屋敷だ屋敷」

あーホント。つい最近キツチリ思い出されられたからなあ……もう詳細まで言えるよマジで。山の中の周りに集落も無いぽつんとした一軒屋敷。無駄にデカイから、ちよつとした村くらいの人数はいた気はしないでもないけど。

「……まあ、じゃあ余計につて奴か？」

「そうだなあ。まあデカくなつてから他の子と比べても、もつときれいに育つてたろうなあ、つて思つたけれどもね」

「はっ……綺麗な思い出にはもう何者も勝てねえだろうに」

「全くなあ」

天を仰いで。その思い出に、一つ溜息……それに合わせるように、ぼんぼんと背中を叩かれた。ちらりと横を見ると、ロビンは、此方を見ながらへらりとした顔で緩く笑っている。同情した態度も、何もなく。

……正直、それが一番、助かる。これが『どういう話』なのかをちゃんと理解した上で変に氣遣わない。マジでイイ男だなコイツ。

「……好きだったんだな」

「うん。最期まで……ホント。目に焼き付く位な」

……その最期が、自分にとつても、彼女にとつても、幸福な思い出かは、また別の事
だけれども、な。

本当に……たべちやいたくなるくらい可愛い、妹だったんだよ。

第九十八章

耳がはち切れそうな実況、はーじまーるよー。

前回、前衛を張れるセイバーランサーに心当たりがあるという事で、その心当たりの元へ直行しております。しかし、何といえますか……嫌な予感しかしねえなあ。ロビン君の表情からして、何の問題もない、とは考えづらいというか。

見えてきたのは、ジエロニモさんが初めにラーマ君をかくまっていたような、ウエスタンな町が一つ、なんですが……

『おっと、敵性反応だ。皆、気を付けて……んんっ？』

『……なんだこいつ等、弱ってない？』

その目の前にも、ケルトの兵隊。いや、それは良いんです。しかしバーサーカーケルト野郎どもが、敵を見つけたら鬨の声を上げて呐喊するのが我が人生みたいな奴らが……なんというか、声に張りがないというか。疲れているというか。

『まあいいや、なんだか知らないがこつちにとつては都合がいい……やっちゃおうか！』

あ、はい……ピリー君の言や良し！ なんですけれども……しかし、どうして我々が来る前にここまであの意気軒昂な奴らが弱ってしまっているのか。疑問は付きません。

もしやこの先に、彼らを追い込む程の怪物が居るといふのか。

『まさか、まさかまさか……いやあ、まさかなあ……う？』

あのお……ロビン君のお顔が更に引きつっているんですけれども。やめませんか？

そういう顔をいきなりなさるのは……ねえ？ 不安になるから！ 本当に！ くそ、事ここに至つて、更なる敵が現われるといふのか！

そんな不安に押されながらも、取り敢えず弱り切っている可哀そうな敵部隊を打ち倒して。これで街へ向かう自分達を阻む者はいないのですけれども……？

『……むぐ』

『おん？ ジェロニモ、どうしたのそんな凄い顔して』

『いや……何か……奇怪な音が、聞こえた様な』

——あつ（震え声）

スウウウウウウウウウ……（深呼吸）

帰るか!!（即断即決） 帰ろうぜ!!（迅速果断） ラーマ君の奥さんをさあ、見つけてあげないといけない訳だしさあ!! ねえ!! こんな所で無駄に消耗するのも馬鹿らしくない!! 今の戦力で十分だよ！（戦略的撤退）

『うわ、ホントだ僕にも聞こえたんだけど……えっナニコレ。いや、一つ一つは、綺麗な音……なんだけどさあ、あの……全部纏まったら、いやこれ、控えめに言つてクs……』

ああ……歌っている……マゼンタカラーの美少女が、苦笑いしか出来ない様な歌を……
楽しそうやなあ……（現実逃避）

……因みに誤解しないで欲しいのですが、投稿者は彼女の事が割と好きです。宝具は五ですし、ハロウインな彼女のシリーズは一人たりとも逃していませんから。メカな彼女もいます。

スキルも実に使いやすいものばかりです。全体宝具で周回にも強かったです。

はい、という事で……第一特異点ぶりでしょうか。よりカラフルで、よりファツシヨナブルなアイドル衣装で、まさかの再登場——

『いいわ！ 私、エリザベート・バートリーのアイドル道は、このブロードウェイから始まるのよ！』

エリザベート・バートリーの、エントリーイイイイイイ！！

ただいま、アイドルとして特異点でも特訓中でございます！！

『あの、マスター……何か、的確な声をかけてあげた方が……』

『つすううう……いやー、俺か……』

『はい、言うべき言葉は、一つです。先輩であれば成し遂げられると信じています……では——張り切つてどうぞ！』

何気にマシユも中々無茶振りしてて草も生えない。アレだけ気持ちよく歌ってるエ

りちゃんに何を言えと？ 下手したらそのまま尻尾でびたーん、されて小さく縦に潰れてお終いでございますよ？ そんな彼女に向けて――

『――何度も出てきて恥ずかしくないんですか？』

『ちよつと誰よ!? いきなりアイドルに批判コメント叩きつけるのは!?』

い、言った!!! (大迫力)

流石藤丸君！ ホモ君に出来ない事をサラツと言つてのける！ そこに痺れる、憧れるう！ でも真似はしねえ！ (自己保身)

批判コメントともちよつと違う気がしないでもないけど！ でも言いにくい事をハッキリ言つた!! でもこのFGOではハロウィンやつてないから二度目くらいだ！

とはいえ、同じサーヴァントに二度遭遇する可能性つて大分低いらしいですし……それを考えればまあ、何度も、つて言うのも不思議ではないですけれども……とはいえ、取り敢えず、先ずはランサー、一人目を発見伝！

と言うかエリちゃん、こんな所でピンでアイドル活動つて、何をどうしてそうなったのかと言えば……

……まあ凄い長いのでめっちゃ端折りますけれども。

『ちよつと!?』

はいはい……えー、エリちゃんは、この特異点に召喚されてから、ここでもアイドル

活動に励み、特訓を続けていた。んでもって、歌ってたら自分の元へ熱烈なファンたちが押しかけてきて、嬉しくなっちゃって更にノって歌って、いた……と。

エリちゃん!! そいつは君の熱烈なファンとかではない!! 単に君のパワフルボイスに怯えてその元を断とうと襲い掛かって来た野生動物的なサムシングなのである! それ以上気を高めるなあ!! 落ち着けえ!! (PRGS)

……まあその刺客共は哀れな事にエリちゃんのクレイジーボイスにやられてクソ雑魚になってたんですけれどよね?

『彼らにはあなたの美声は届きません! この世ならざる邪竜が雄々しく咆哮している様にしか聞こえないでしょう!』

『……えっ? そ、それ褒めてるの……?』

という事で、そんな悲しい事実を、今漸くエリちゃんは自覚しました……皆もケルト兵やらモンスター共が弱っていたその理由が物凄く納得できたそうです。マシユも皆さんも二重三重で酷くて草も生えないんだ。

どうして……エリちゃんはただ、サーヴァントな伝説のアイドルになりたくて、ただの寒村を『ここをアタシのブロードウェイとする!!』とか若干唯我独尊、狂化EX気味に突っ走ってただけなのに……!! (事実陳列罪)

『エリザベートさんの芸術(敵に酷い歌声)は雑に振りまくものではありません! 時と

場所と相手を選んで披露すれば、必ずや相手に伝わるでしょう!」

『故にここではなく、この広大なアメリカ全土に、その歌声を広げに行きませんか、エリザベートさん!!』

『——分かったわ。なんだか色々酷い事言われた気がしたけど、分かったわ!!』

されどボコボコにした後、そのままにしないのがマシユPのクオリティでありまして。まさかのココからスカウトである。なんとという完璧な飴と鞭でありましょうか……流石です! クリテイカル叩き出してエリザベートちゃん、再びスカウト成功!!

……あれ? コレ最終的にベストコミュニケーションション叩き出したのマシユでは? 藤丸君がいなくてもマシユが居れば上手に会話ができる……? (気づき)

『——それで、次のセイバーなんですけど……』

『ああ、アンタもしかして察しつついてる? そうだよ、此方のランサーに負けず劣らずのねえ……うん』

そして藤丸君とロビンの悲しい表情……はい。まあ、エリちゃんとタメを張るセイバーという事で、お察しではあるのでまあ。

……まあ覚悟決めて次のスカウト行きましょう! 次も敵がいても倒しやすくなっているかもしれない! ポジティブに生きましょう!

第九十八章・裏：米国乱れ舞い剣閃 前編

……ランサーの時と違つて。

どうやら目の前に立つ奴らは、歌だけで弱り切つてはくれないようである。ロビンの案内で辿り着いたこの街に残っているのは……殿を任された『俺達』と。

ここにいたサーヴァントを狙つて来ていた、サーヴァント。

「……」つだけ聞け。偉丈夫」

——目の前に立つは、鋼の大剣……否、槍と剣の相の子の如き、威容と異様を誇る鉄塊を構える、益荒男。今まで見てきた中なら……レオニダス、金時にも匹敵する鋼と言えらるであらう筋肉を身に纏つた、分かりやすい戦士であらう。

さて……先ほど、ぶつかりあつた事で、真名は一発で抜けた。

僅かに見えた虹の輝き、僅かな情報からですら英霊の真名をすつば抜く我がカルデア相手に余りにも剣から漏れる虹の光なんて、分かりやすいモノを見せすぎたな！ と、言うのは余りにも言いがかりだらうか。

「アンタ……で終わる覚悟は、出来てんだな——ええ？ フェルグス・マック・ロイ」

俺の言葉に——男は不敵に笑う。

「当然だ——そちらこそ、数はそれだけで大丈夫なのか。そちらは数を減じて……四。流星に不利は否めんぞ」

……普通に考えれば、当然の一言だろう。確かに数は向こうの方が圧倒的だが、伝説のケルトの戦士なら分からもないだろう。サーヴァントの強さは。正直、屈強なケルトの兵隊を幾ら連れて来たにしたって、サーヴァントを相手は分が悪いという話で。という事で、それ込みですら『不利』と言い切る辺り、例え四対一の不利であろうとも自力で覆すだけの自信があるって事だろう。いや、流星はケルトの勇士か。

フェルグス、ケルトの刺客。

流星に目標であったセイバー、ネロ・クラウディウスを、戦う前に此方に逃がされたんじゃない、後は俺達を倒さんことには帰る事も難しいと見える。

「冗談だろ？ 寧ろ、こっちの布陣を相手にそれが言えるだけスゲエよ——」

逃がしてくれないのは分かりやすかった……容赦なく、火花を切つて落とす。

「——ぬうつ!？」

「逃がさん……!？」

フェルグスの足元から、包囲するかのよう湧き上がる禍々しい魔力のドームは……残念ながら、その攻撃を予期したかのように跳び下がるフェルグスを捉える事敵わず。

代わりに周りの兵隊を餌代わりと言わんばかりに呑み込んで消えてしまう。

「——手荒い挨拶だな……っ!?」

「冗談。コレで終わりの訳ないでしょ」

既に、俺の傍に控えた式部さんは、一手を書き終えている。

フェルグスを包围、追撃するは、黒の弾丸と、陰陽の術による空走る呪文。式部さんの陰陽術は、こういう隙を埋める小回りの利く技だ。ゴルゴーンさんでブツパ、散らばった所を式部さんで狙い撃つ——割と悪くない気がする。

「ぬうお……!　コレは流石にい……っ!?」

「どうしても大きく躲さないといけないからなあ、ゴルゴーンさんの一発は——」

大ぶりの回避だ、体勢立て直しも出来ない——咄嗟に防ごうと両腕を交差させた所にその上から文字が絡まり、相手の動きを縛り付ける。

動けなくなったところで……黒い弾丸が、直撃、一、二、三!　ピンボールみたいにいろんな所に弾けて跳ね、きりもみ回転しながらケルトの群れの向こうに飛んでいく。

「ピンゴ——」

見事に指揮がハマった。マスターらしい戦い方に思わずガッツポーズ……した所で、どしん、と両肩に結構な衝撃が乗っかってくる。何とか潰れる事だけは避けたが。それでも力士が四股踏んだ後の姿勢みたくなくなってしまった。重い。

「阿呆。アレでやられるわけが無いだろう」

「油断してはると、頭からぱっくり、いかれてまうで？」

……まあ、背後のゴルゴーンさんと、俺の両肩の上に飛び乗ってきた酒？のいう通りではある。その証拠と言わんばかり、まるでフェルグスの事を気にせず、ケルトの戦士たちが槍や短剣を構え、各々突っ込んで来るのが見えた。

迷いが無さすぎる——いや、既に俺達が戦場から離脱させた、ネ口と藤丸チームの方を追おうとしているのか。カルデアに合流する前に潰せ、と言う命令を忠実に守りたいのだろうか、もう追いかけても遅い。

「大丈夫——いかれるまえに、顎ごと砕いてやるつてんだ」

「ふふ♪ ええ返事どすなあ……ほんなら、お先に碎ける感触、楽しませてもらおか」

それに……腰を落とし、拳を構えた俺も。そんな俺にちらりと牙を見せてから、肩より飛び立った酒？も。真正面から突っ込んで来る兵隊さんを逃すつもりはさらさらない。

ひゅーん、と。肩から感じた軽い感触からは想像もつかない程に軽々と飛び立った酒？童子と、突っ込んできた兵士たちの矛が、一瞬、交差し——

「——うーん。こつちをぱっくりしても、喰い応えあらへんね」

先ずは、槍の穂先と短剣の切っ先が。それから——真つ先に武器を向けたケルトの勇士の首が悉くすぽん、と宙を舞い。それらが地面に落ちると同時、酒？は敵のど真ん中、

優雅に足を着いて、降り立った。

くるん、と袖を靡かせ、本当の童女かのように、周囲の勇士どもを見回して。彼女は不満そうに頬を膨らませた。

ケルト兵は、圧倒的な力を見せつける鬼の首魁に、それでもなお突進しようと武器を構えようとして。

「はっ、所詮は私の神殿の壁にもならん連中だ。何を期待していた？」

……その前に。

ある者は紫の輝きに、体を貫かれ、倒れ伏し。

ある者は、五指の爪に引き裂かれ、あつさりと地面に倒れ伏してしまう。

既にゴルゴーンさんは前進を始めていた。酒？に視線を奪われた哀れな雑兵たちを、背後からすり潰すように、魔力の光で、空を裂く爪で、振るわれる鞭のような尻尾で。ゆったりと殲滅していく。

「期待してたわけやあらへんけど……つまみくらいには、ねえ？」

「下らん」

……このままいくと、彼女達だけでケルト兵を一蹴し、そのまま壊滅できそうな勢いではあるのだが。しかし、ゴルゴーンさんは兎も角として、酒？に關してはそつちと遊んでもらっていても困るので。

後方からその様子を見ていた俺。

後ろに控える式部さんに肩越しに顔を向けてから、指で軽くサイン。先ずは酒？の後ろに立ち上る土煙に向けて一度、それから酒？に対してもう一度。

式部さんは、ちよつとため息を吐いてから、空中に文字を書き始める。どうやら意図は伝わつたらしい——ので再び、戦場に。もっと言えば、フェルグスの飛んで行つた方向に向けて、視線を戻す。

「——雄おオオおオ嗚呼アツ!!」

それと同時に。咆哮、轟き。

立ち上る土煙を袂り散らし、飛び出すは大槍の如き切つ先。飛び上がったフェルグスが両手にて逆手持ち、串刺しを狙うは……最も近い場所にいた酒？。

ちらりと上を見つめ、牙をちろりと覗かせ、童女の如き化生が笑う——いや嗤つてる場合ではないんだけどもなあ？

「貰つたぞ、カルデアのサーヴァント——!」

「おいでやす、おいでやす……って、やんつ」

という事で。剣を構え上から流星の如く落ちるフェルグス、下で軽く酒を煽りながら待ち受ける酒？……その間に、一瞬、旋風の如く術が一つ滑り込む。

空中を滑る赤い光の束は、飛んでいく符を中心とし別れ、うねり、結んで。空中に五

芒の陣を刻み込む。

それがフェルグスの切っ先とぶつかり——その勢いを、殺した。ほんの、僅か。

「ほう、中々に小癩な真似をする——だが！」

拮抗は、僅かに一瞬しか持たなかった。

ほんの一呼吸の間に、フェルグスの大剣は、ガラスでも破るかのように陣を粉々に打ち破つてしまう。普通ならまともな時間稼ぎにもならないだろう……が。

「どうだ！……と言いたい所だが……ぬかったな」

その僅かな時間の間ですら、東洋の大化生にとつて余りにも、大きすぎる——飛んでくる相手の、さらに頭上を取る程度、欠伸でもしながら熟す程に。

ちらりと、拗ねたような視線で見られるが——しかし、ここで疲弊して貰つては困るのだ。まだまだアメリカ攻略までは長い。申し訳ないが、ここはバリバリに手を出す。

疲弊は最小限に。礼装を起動。酒？に指先を向け——

「——打ち落とせ、アサシン」

「はあ、い」

二つの淡い光が、大地にさかしまに体を向けて跳ぶ、彼女の身体を包み込む。ぐぐ、と握り込むは彼女の拳。小さな子供の握りこぶしとて、鬼のそれならば大鉄槌と同義だ。

くるん、と。

駒の如く横に。体が回る。

勢いそのまま。振り下ろされる。真つすぐ——

どごん

弾き飛ばされるように、再びフェルグスは地面へと堕ちていって——爆ぜる。

先ほど、酒？が立っていた位置に、入れ替わりになる様に突っ込んだフェルグスは、そのまま質量弾が引き起こす様な無属性のエネルギーの爆発で——周りの味方を、散り散りに吹っ飛ばした。

「——私に飛ばすな、阿呆が」

まるで散弾のように四方八方へ散らされる勇士達。近くにいたゴルゴーンさんにも微妙に被害が言っており、ボールでも受け止めるように、飛んできた勇士を、頭を鷲掴みにして受け止めている。

んで、ゴルゴーンさんだけではなく、こつちにまで来ているのだが——その放物線上の軌道で飛んでくる勇士が、到達するその前に。

「うちに言わんといて——なっ！」

「はははっ！ 実に好い！ 打ち合いとは、こうでなくては！」

上空から、体ごと縦に回して振り下ろした酒？の追撃の大剣を——未だ健在、と言わんばかり堂々と立ち上がった、フェルグスの大剣が受け止めていた。

質量対質量。轟音に合わせるように、俺も髭モジヤのおっさんを蹴り飛ばして、どっかへとリリース。戦いは、まだこれからのようだ――

「――見つけたぞ」

「今度こそ……今度こそだ。源氏――死に候へ……！」
どこかで。

しやらりと。澄んだ金属の奏でる――殺意の音がした。

第九十八章・裏：米国乱れ舞い剣閃 中編

……状況は、此方が優勢だと思ふ。いや、確実に優勢な筈だ。

僅かな隙を作る可能性があつたケルトの勇士達は、最初の衝突で結構な数が四方八方に飛ばされた挙句に、その殆どがゴルゴーンさんやら、俺やらに殴り飛ばされて殆どゲームオーバー。数もそれなりに目減りしている。

おまけに残つた奴らもフェルグスからは引き離されて、今はゴルゴーンさんと、序に俺にも叩かれていゝのだから、連携を取る事も難しい。

……と言つてゐる間にも、またもや突つ込んで来た男の顔面に、ドストレートの拳をプレゼントして吹っ飛ばしてやった。

「あらよつと！ ふう……式部さん、酒？はどう？」

「……特に問題はないかと、思ひます」

「そう。ならいいんだけど」

翻つてこつちは、式部さんの援護が、酒？と戦つてゐるフェルグスに飛んで。その邪魔をさせない様に、こうして突撃してくるケルト野郎を俺が始末する盤石な体勢。

怪物退治はお手の物の勇士だろうが。とはいえ二対一、術師の的確な援護まで入つた

状態は初めてだろう。

「ぬぐうつ……!?!」

「うーん。やつぱ、あんまそそらへんねえ……一方的に鬨るやなんて」

そう言いつつ、酒?の爪がフェルグスの筋肉に傷を残すのはコレで幾度目か。

まるで悪役染みてケルトのヒーローを削るのは、些か以上に微妙な気分ではある。式部さんの顔色も、なんだか若干暗い。

とはいえ、ここで容赦しても、恐らく一瞬の油断に付け込んで、酒?を切り裂き、そのままの勢いで式部さんの薄い体を塗れ紙を破るみたく容易く千切る事も想像できる。

……時折、俺と目が合う辺り、俺のみを狙って切り捨てるプランもあると見える。それだけの一手を打つだけの体力も残しているのだろうか。

「……意外と完全なワンサイドでもないってか」

流石にここで一発逆転を許して敗訴はシャレにもならないので、周辺、変な茶々を入れる奴が居ないか、出来るだけ気を付けて戦場を見てはいる。

とはいえ、今のところ、おかしな事をしてる奴も特に見えない。

「ま……流石に勝ったか?」

ここまで順調そのもの。フェルグスは確実に袋小路に追い込んでいる。万が一の一発逆転だけに気を付ければ余裕だろう。そう、余程の不安要素が無ければ――

「……貴様、腑抜けるのをやめろ。油断している暇があるか」

「腑抜けちゃいない。街の至る所に目は配ってる……だけど、伏兵らしい奴も見えないし目の前の事に集中するくらいは良いだろ」

「そう言う事を言っているのではない。貴様、忘れたのか。あの武者のサーヴァントが何時襲ってくるのかも分らないのだぞ」

……それが、存在していない訳でもないのは重々理解しているつもりだ。

ラーマ、エリザベートとはぐれサーヴァントを回収して行っていて、もう大分経つ。そして。あのサーヴァントと遭遇したのも、かなり前だ。

恨み骨髓と言わんばかりに……次こそは、必ず、と。

そう口にしたあの武者の襲撃の可能性を、まるで考えていなかった訳ではない。

「……このタイミングで、襲ってくる可能性も全然ある、か」

「少なくとも、貴様がその可能性を頭から外していたのは事実だろう」

「そうだけど……」

ちらりと、戦場の風景を眺める。ゴルゴーンさんの言う通りの事が起きたなら、確かに今は一番まずい。一応、今は此方が圧倒しているのは間違いないとはいえ、絶対的な差ではないのだ。

もしあの武者のサーヴァントがここで乱入してこようものなら……間違いない、この

状況は混沌に陥る。そこを、あのフェルグスが突いてきたら――

「……そうだったら、真面目に」

――からん

「……!?!」

ふと。

固い、木の音がした気がした。それは、まるで、下駄のような甲高くも柔らかい、そんな音で――

思い出す。そう言えば、あの武者のサーヴァントは、確か高下駄を履いていたのではないだろうか。それこそ、平安の武者のようなあの格好に良く似合う、黒塗りの赤い鼻緒の高下駄を……

はつとして、振り返る。下駄の音がしたのは、なんだかそつちの方からな気がして、あの意味――反射的な動きで、そして。

視界に……僅かな、鋼のきらめきを、見た。

「――ゴルゴーンさん!!」

「ちいさいっ!!」

多分、今まで一番素早い反応だった。腑抜けていたという言葉を返上してやりたいと僅かに思ったが――今は、そんな事を言っている場合じゃない。

瞬間、振り抜かれていた二刀は、割って入ったゴルゴーンさんの五爪に受け止められていた。その二刀の先には……狐面の、二刀使いの武者の姿。

「邪魔だ……っ！」

「人間風情が、誰に向かつて口を聞いている……！」

最悪の予感は大当たってしまったらしい——それなら。

隣を見る。突如の不意打ちに、僅かにたじろいでよろめいていた式部さんの肩を、軽く叩いて正気に戻した。

「すまん式部さん任務変更！ 雑兵は俺が相手する！ 二人の援護頼む！」

「す、すみません……了解しました！」

ゴルゴーンさんが背後を受けてくれている事で、位置的には、ゴルゴーンさん、俺と式部さん、そして……少し離れて、ゴルゴーンさんの蹂躪を受けていた兵士達となった。圧倒的な暴力を受けながらも、まだまだ数は残っているようだった。

「つたく、仕方ねえ……っ！」

雄叫びが聞こえる。裂帛の気合いと共に、折れた槍を投げ捨てて。その代わりに誰かの落とした短剣を拾って、ケルト兵士が呐喊してくる。体は無事とは言えない有様で尚、雄叫び上げて突撃を止めないその顔面に——

思い切り伸ばした足先を叩き込んでやる。

額からばちり、と爆ぜる雷電の音。立ち上る高揚感。多分よくない高揚感ではあるの
だろうけど……これにノって振り切るくらいじゃないと、制御しきれないのだ。仕方な
い。

「ゴルゴーンさん、マジで頼むぜ……おらっしやああ！」

全身から立ち上る熱に任せて、兎も角前進。蹴り飛ばされて後ろに倒れていく兵士を
更にぶつ飛ばして、更に奥へと。出来る限り、俺に視線を向ける、と言わんばかりに前
へと踏み出していく。

「マスターっ!？」

「崩れたら立て直せねえ！　今はここが命の張り時だ！　大丈夫、死にやしねえよ！」

……いやまあぶっちゃけた話をする、だ。

特異点を戦つて来ると、ドラゴンやら、デカイヒトデやら、石の塊のゴーレムやら。こ
こに来てからは、機械を纏ったロボまでも。人間以外相手に体張る事しかなかった。
まあ正直、キツイ。何せ多少喧嘩慣れしてるって言ったって、大抵相手は人間だったも
ので。

そこから考えると、相手が人型である今の状況は……

「——ふっ!!」

こうして殴り飛ばしやすいし、突っ込みやすいってもんだ。人間のどこら辺が急所な

のかも良く分かるし……後は、体を突き動かす衝動に合わせてやれば――

「おらあ!!」

アツパーカットで空に向けてぶっ飛ばす事も、訳ない。

相手がちよつと人間やめ気味なおっさんだけで、あくまで人間相手の喧嘩の延長線上にあるのは間違いない。弱つたとはいえ、死ぬ気でやれば酒? 相手でも戦えたんだ。

ここでしくじろうものなら、酒? にも失礼つてもんだらう!

「ふう……っし」

ぐるり、俺を取り囲んで得物を構える兵士共を首を使って見回しながら……腰を落として適当に拳を構えておく。

これでこいつ等の目は此方に釘付けに出来た。酒? の邪魔もさせてない。取り敢えず、一発形勢逆転は阻止できた。後は、俺がこの中で生き残つてる間に、皆がサーヴァント達を倒してくれれば……という事を願うしかない。

ちらり、とゴルゴーンさんの方に目を向ける。

「……わあお」

目に入って来たのは、叩きつけられる極太の尻尾。飛びあがった武者のサーヴァントに向けて殺到する無数の蛇――細かく爪で引き裂く、なんてちやちな真似はしない。全身を文字通り凶器として、薙ぎ払い、叩き潰し、押しつぶす。巨大な体を存分に生かし

たパワープレイで、武者のサーヴァントを寄せ付けず、逃しもしない。

建物諸共、敵を粉碎する勢い。最早式部さんの援護が必要ないんじゃないだろうか。つてレベルの暴威。アレを心配する方が頭悪いだろう。

「酒?の方も……フェルグスは逃がしてない。やっぱヤバイのは……」

俺だろ。と。再び突っ込んで来た兵士さんに足の裏を御馳走しながら思う。ここで俺がこの兵士共にダメージを受けて隙を晒そうものなら、どちらの敵サーヴァントからも強襲を受ける可能性は、十分にある。

特に、あの武者のサーヴァントに関して言えば……俺も、出来るだけ気を遣わないといけないだろう。ゴルゴーンさんが、式部さんの援護ありで引き受けてくれているにしたらって何時、無茶な突撃を繰り出すかは分からないのだから——

「——っ!」

目があった。

ちらりと、ゴルゴーンさんの様子を伺おうとした、その一瞬。

狐面のその奥、琥珀色の瞳と、視線がかち合った。背筋が凍る。マズい、油断したか。ツッコんで来る。回避行動——と、そこまで考えた所で。

「……あれ?」

気が付く。あの時、森の中で遭遇した時に、遠くからでも分かる程に睨まれている、そ

う思っていたのが……違う。

寧ろ、ゴルゴーンさんから距離を取り。刀をだらんと下げて、口を引き結んでじつと此方を見つめる姿は何処か——本調子であるように見えない。

鬪争の場に酷く不釣り合いな、戸惑ったようなその姿に。軽く、額を撫でながら、首をひねった。

「何なんだアイツ……?」

第九十八章・裏：米国乱れ舞い剣閃 後編

……奴は、以前。隙あらば俺に向けて切り込まんとする、執念染みた動きを見せつけて来ていた。俺達は、その異常なまでの俺に対するヘイトに翻弄され、酒？ただ一人を相手に任せ、此方は完全に守りを固める事しか出来なかつた。

それだけ、あの武者のサーヴァントの狂気染みた攻勢は、こちらが一切動けなくなつてしまうような、異常な迫力と言うモノがあつた。

……じゃあ、今は？

「……コレで、五人か」

今の所、俺にかかつて来た哀れなケルト兵君達は全員仕留めている。とはいえ、サーヴァントの皆様のように素早く倒せている訳でもない……だというのに、五人倒すだけの時間が過ぎて尚、状況は変わっていない。

ゴルゴーンさんは、未だ武者のサーヴァントを捉えんと暴れ散らしてるし。酒？は酒？でフェルグスとインファイトの真つ最中……若干、式部さんの援護が薄くなつてはいるがしかし、それでも元からあの超人とやり合えるだけの力はあるので、何の問題もなさそうではある。

式部さんとは言えば、時には武者のサーヴァントの足元に黒い弾丸を打ち込み、時にはフェルグスに向けて動きを縛る術を放ち。援護も完璧。

驚く程に、静かだ。

「……正直、一度や二度、ゴルゴーンさんの所、無理に抜けようと思つてただけどなあ？」

いや、ゴルゴーンさんのキレが良いというのはある。何時もみたいに援護に徹させるわけでもなく、好き勝手に暴れ回つて貰つてるから、そりや当然と言えば当然なのが。

それにしても、さらに一步を踏み込んで此方に切り込む、と言つた勢いがまるで感じられないのだ。

「なんか、いきなりナイーブになつてる？」

……自分で言つておいてなんだが、先ずない気がする。

寧ろ不安になつたらそれを無理矢理振り切らんと余計に突撃しに来るタイプだと思う。じゃあなんであんなに静かなのか……些か以上に、不気味だ。

それが、僅かに引つ掛かる。

単純に攻めあぐねてるだけなら、まだいい。だが、万が一にもフェルグスと連携する為のタイミングを計つているのだとすれば……その時、自分是对応できるだろうか。

「……切るか？」

自らに問いかける。僅かに、手を強く握りしめて……突っ込んで来た敵に肘鉄を浴びせつつ、呼吸を落ち着ける。大切な切り札。ここで使つて良いものか。

ちゃんとしたタイミングで使わなくてはいけない。雑に切つて、無意味に終わつたらたまらない。

少なくとも、今ここで切れば何かしらの成果が確実に出るという見込みがあつて、相手が外からの刃に警戒心が薄くなつて、んでもつて妨害される可能性とかが一切なにもないという――

「いや今だなこりゃ!! うん!!」

敵が二人、こつちのサーヴァントに釘付け、何方かを狙えば不意打ちになるし、どつちも目の前にサーヴァントがいて、援護射撃まで浴びている。ここに大きな一発を投げれば何かしらのアクションも起こせる。ああうん。此処だわ切るの!!

「――つし……邪魔だつ! おらあつ!」

とりあえず、気合い入れついでに、突撃して来たケルトの髭面に拳を叩き込んで沈静しつつも……ちらりと式部さんに、ウインク二回で目配せ。

取り決めていた合図を確認し、式部さんが片手で空中に描くは、陰陽術の陣。攻撃の為ではない、コレはあくまで、合図の為の一発。

それを確認した所で——視線を向けるのは、武者のサーヴァント……ではなく、フェルグスに。酒？とガチンコでやり合っていただけあって、消耗も激しく。そして、ドクターとダ・ヴィンチちゃんから聞いた情報から考えて。宝具のヤバさは向こうの方が上だ。

「——狙え！」

もう既に狙いは着けている。

分かりやすくこうして声を上げたのは、注意を更に引くためだ。現に、俺が声をかけた方のフェルグスとは言え——此方をちらり、と見た後に、不敵に笑って見せた。

当てられるものなら当ててみる、と言わんばかりの挑発的な表情。

どんな一撃だろうと、必ずや食い破ってやる——そう、口にするまでも無い。彼の自信満々の態度が告げている。

「——撃て！」

そうして——解き放たれるは、閃光の弾丸。フェルグスに向かって真つすぐに飛んでいく。それを視界の端で捉えた酒？は……僅かに眉をひそめ、残念そうに一步、フェルグスから距離を取った。

「——もうちよつと遊んでたかったわあ」

「ふ、そう言うな。コレは戦争。こういう事もあろう。アレを打ち破ってからまた、お相

手願おうか！」

対するフェルグス。逆立つ髪を僅かに風になびかせ——胸を張って、不意を打つ弾丸に向かい合う。

発言一つとつても、実に豪快。

流石はケルトの大英傑だ。当然のように、飛んできた一撃を打ち破れると信じて疑っていない。大言壮語ではないのも間違いない。

事実、式部さんの攻撃では、フェルグスを討ち果たす事は難しいだろう——だが。
とすつ

「——む？」

「残念ながら、そのチャンスはないっすね」

一瞬の事だった。

剣を構え、飛来する弾丸を叩き落とさんと剣を振るおうとした、その一瞬の間に……フェルグスの左胸に。一本、矢が突き立っている。完全な不意打ちである。歴戦の勇士、フェルグスが反応すら出来ないレベルの一射だった。

唐突に、戦場に現れたその緑色の弓兵は——ただ一矢で、フェルグスの霊核を射抜いてあっさりとなり無効化してしまった。

「ナイスウ！」

「——旦那はん、喜んでるのはええんやけど」

思わず、勝利を確信して跳びあがって——その直後、のぼせ上った俺を諫めるかのよ
うに……空から落ちて来た血しぶきを、頭から被る事となる。

ぱちくりと周りを見回せば、此方に戻って来ていた酒？が、頬を膨らませながら、ケ
ルト兵の首を斬り飛ばしたところであった。

「うちは消化不良やわあ……どないしてくれるん？」

「そう言うな。どうせ最後に敵の本拠地に攻め込むときは地獄になるから、そこで腕を
振るってくれ」

「それまでお預け、なやんて……いけず」

……残念な事にそれまではだいぶかかるけれども。さて。出来るだけガマンして貰
うしかない。それまでも、まあ窮地の一つや二つはあるだろうし。取り敢えず、そこで
満足して頂くしかない、か

「不満なら向こうに混ざって来る？」

「んー……やめとくわ。先輩の獲物取ってくほど、野暮やないし」

「良く言うぜ。じゃあ一応、後詰としてここにいて貰えるか？」

「はい」

取り敢えず、酒？を傍に置き。それから、無事を示す為に式部さんに手をふって——

崩れ落ちている式部さんを見て、慌てて酒？をゴースさせた。流石にケルト共の血を頭から浴びたのはビジュアル的にマズかったらしい。大変申し訳ない……決着もついたら、帰る時はおぶらせてもらいます……さて。

一応、ゴルゴーンさんとの間に酒呑童子もいる。万が一の場合も備えられた。

という事で……くるりと振り向いて。地面に倒れ伏したフェルグスを確認——金色の輝きが立ち上り始めているのが見える。退去直前の光が確認できる。コレで……こつちの決着が確約された。

「全く——伏兵とはな。何とまあ、気が付かなんだわ！」

「まあアンタが気が付かない様に、気を遣つてたもんで」

その傍に……何処からか、まるで空間に突如として滲み出したが如く現れる影。散歩の様にフェルグスの隣を歩き過ぎて——軽く、俺に向けて手を上げた。

「ありがとう」

「ん。良いタイミングでしたよ」

「いやいや」

緑色の外套を脱ぎ捨て——森の狩人、ロビンフットが疲れたような顔を見せる。

残ったこちらのチームに『じゃあ一応、後詰として残りますよ』と着いて来てくれた

彼は、戦いが始まってから、伏兵として何処かへと消えていたのだ。

『四対一』。そう自ら口にしていたにも関わらず——最後には、フェルグスはその四人目のサーヴァントを、完全に意識の外に置いてしまっていたのが、敗因だろうか。

「うむ！ 完敗だ！ コレは素直に消えざるを得んか！」

「いやいやもうちよつと待て。アンタ敗軍。俺ら勝った側。なんかお土産の一つ置いていくまで消えんな。頑張れってくれー」

「ちらり、と背後のゴルゴーンさん側を確認しつつフェルグスの方に近寄ろうとして……そこで気が付いた。」

「……アレ？」

いつの間にか、ゴルゴーンさんの目の前から、あの武者のサーヴァントが消えていて。ゴルゴーンさんが顔をしかめてこつちを見ているのが見える。

「フェルグスを倒したその一瞬に、無理矢理切り込んで来るとか、その辺りも一応警戒していたつもりなのだが……？」

「……挟まされた時は結構ピンチだったとか思ったのだが。なんか、終わってみれば大分あつさり気味な。」

「……あの野郎、結局何しに来たんだ……？」

第九十九章

奇襲を切り抜けていく実況、はーじまーるよー

西部、及び東部側との更なる激戦を見据え前衛を固めるこの旅。

更なるセイバーを確保しに行った所、待ち受けていたのは、可愛らしいセイバー、ネロちやまと、正しく偉丈夫と言える男性サーヴァント。深く青い髪と、分厚い胸板、ぶつとい腕と、余りにもオスオスしいムツワなサーヴァントが向き合っている光景。

一触即発、一つ火が付けば切り合い削り合いになる睨み合い——を超えて若干もう削り合いをしている真つ最中です。

『敵将は……なんかすごい、分かりやすく戦士つて感じの人だなあ』

『相手もセイバー。そしてあの剣から零れる虹の如き輝きは——魔剣、かな？』

『ともなれば間違いないね。ケルトにおいての魔剣使い……フェルグス・マク・ロイだろうね。うわあ、またこれはとんでもない大物だなあ……』

……えー、その二人を見た現カルデアのブレイン二人の発言が此方。息をするようにオジキの真名を抜いていて草も生えない。

ロマニは『やだなあ……』的な顔をしてらっしやいますはやだなあなのはこつちの方

ですよ（半ギレ） 真名は英雄にとってアキレス腱だつてんだろ、ぼんぼんと抜くんじゃないやあねえ！

愚痴りはしましたが、カルデアのブレイン二人の推測、全く以てその通り。敵将の名前はフェルグスで間違ひありません。自慢の魔剣を振るって特盛のお山（本物）三つを切り飛ばしたとかいう、なんだそのデツカイ伝説……♂ ケルトには強敵以外が存在しねえのか……？（震え声）

兎も角、そんなケルトの大剣豪（広義）なフェルグス君の逞しい剣の脅威が、お色直しした純白のブライドなネロちゃまに迫っている訳ですからね。少女の夢は守らなきゃならないという訳ですよ嬢さん。我々紳士故。

という事で先ずはネロちゃま離脱優先で、藤丸君達が保護して離脱。我々が残つてその撤退を支援する……と言った感じで始まりましたこの戦闘。

数でこそ圧倒的不利であった我々ですが、遠中近揃つた我らがホモ君パーティに加え、ロビン・フットも合わせた四人パーティは盤石。雑魚を削り、フェルグス君を順調に追い詰めていた所で……背後からの奇襲でございますよ。

『吊いの木よ——牙を研げ……！——イー・バウ!!』

しかし、突如とした敵に構つて、大打撃を浴びるのも御免被りますので。こつそりとチャージしていたロビン・フットの宝具をフェルグス・オジキに即時放射。地味に毒も

入っていたので特攻乗って大ダメージ割り切りました。

実は我々カルデア三人パーティよりも、NPCのロビン君の方が瞬間火力に関しては圧倒的に高いという事実には驚えながら、目標であるオジキは無事に撃破。

これにより、此方も戦う理由はなくなったので、戦場から我ら、無事撤退に成功。勝者の権限として、無事ラーマ君の奥方の情報も頂きました！

『うむ。勝者の権限として情報を持つていくのは良いが、中々に強引だな！』

まあ、死にかけの所に『カツコいい散り際だったね♡ 敗者として持つてるもん全部出せオラツ！』と割とオラオラな事をしたので、大分正論返されながらのゲットだったわけですが。流石はオジキ『しようがねえなあ……』と寛大な心で教えてくださいました。

オジキですら『ありゃあクソだな!!』と評する女王の命令だそう。それも踏まえあつさりと口を割ってくれましたね。器のつけえ男だあ……

そして、情報を持つて撤退し、エリちゃんのいた街に戻った藤丸チームと、無事に合流に成功いたしました！ 早速手に入れた情報、及び確保した戦力なども考えて、ここからの方針を組み直す、作戦タイムです。

『アルカトラズ、脱獄不能と言われた監獄島。フェルグス曰く、ラーマの奥方がいるならその可能性が高い、という事らしい』

『……ふむ。であれば……よし。提案があるのだが』

そしてここで声を上げるは、やはりこういった少数精鋭の戦いにおけるスペシャリストであるジェロニモさんです。

現状、東と西の戦争は拮抗しているのですが……如何にサーヴァントの不足を機械化による量産と、システムも口もの改良とで補っていたとはいえ、聖杯を持つ西のケルトの勢力の方が時間が経つにつれ有利になっていくのは間違いない、との事。

現状の拮抗状態が保っているこの状態が崩れれば、数の少ない我々では、最早どうしようもなくなるのですが。

しかし、拮抗状態であるならば、ケルト軍の超個人的戦闘主義——まあ要するに個々が自由に進撃して好き勝手暴れる、攻撃的ではありませんが、守りに難ありな質を利用可能。

『その間隙を突くだけの戦力は整った。敵本拠地は、西の果て。元アメリカ合衆国首都ワシントン。そこにて——敵サーヴァントの総大将を、暗殺する』

方針確定。

とはいえ、全員を向かわせるわけではありません。ジェロニモさん曰く、全戦力を向かわせるオールインは余りにもリスクに過ぎる、との事で。戦力を二つに分け、片方を暗殺に、そしてもう片方を——ラーマ君の奥方を探索する部隊にするとの事。

『後者は、最後の切り札だ。此方が首尾よく事を運べればそれで良し。だがしくじった場合は……後を託すことになる』

そもそも、暗殺任務自体が結構なリスキーで、勝ち目も低い賭けでありますので。その辺りのリスクヘッジ流石ですねジェロニモさん。

……さて皆様、このゲームモードは、サーヴァントとの旅路。当然ながら、所属しているサーヴァントによって、道のりは様々変化していくわけですが。さて皆様。

ラーマ君の奥方、シータちゃんがいるかもしれない場所と言うのは……あの名高い監獄島である、アルカトラズ。沖の小島に築かれた、絶海の監獄でございます。

さて……似たような場所に所縁のある、奇跡のようなそんなサーヴァントを我々は一
人知っています。なんなら、我々一行の一人に加わっております。

『——監獄の島、か。であるならば、俺は適任だろう……不本意ではあるがな』
はい。困った時の巖窟王。

元々は無実の罪よって、監獄の孤島に捕まえられ……そして見事に脱獄に成功した、
いわば監獄、牢獄のプロにございます。

アルカトラズ監獄に閉じ込められたシータちゃんを救出するのであれば、監獄のプロ
フェッショナルたる、アヴェンジャー、巖窟王は正に適任。

んで、その巖窟王を編成に加えているカルデアのマスターはどっちかと言いますと

……

『では先輩と、私、巖窟王さん含む此方のチームは、ラーマさんの救出に?』
『その方がいいと思われろ』

はい。先ずは強制的に藤丸君が救出チームの方に振られるのです。適材適所。仕方ないね。

では残ったカルデアのマスターはどうするのかと言えば?

『彼が行くなら、アルカトラズは最早盤石だね。では、本造院君は……』

『皇帝陛下サマ以下、こっちチームって事になるな?』

でしようね!!! (確信)

……巖窟王が居ないと、この辺りある程度は自由に選択が効くんですよ。でもアルカトラズ側に完璧な担当者があると、『ヨシ! こっち側にこれ以上の戦力置くのは過剰だし暗殺側に割り振るか!!』という至極真つ当な結論になります。

これにて、ホモ君は暗殺任務を成功させなければ自動的にゲームオーバーな死にルートに入る事となります……おお……神よ……

『——いや、そもそも暗殺任務自体、ちよつと考えものじゃあないかい?』

おつ? (期待) どうされました? (一縷の希望)

『——と、い、う、と、っ、』

『敵側のあの武者のサーヴァント。どうにも、アレは向こうの——ケルト側の都合で動いているように見えなくてね』

まあ、それは確かに……最初の時も問答無用で襲い掛かって来ましたし、フェルグスさんと戦ってた時も、彼が疲弊し始めた頃合いを狙って強襲しかけてきましたし。前者も後者も単独行動な上、どっちもゲリラ的な戦闘と言うしかありません。

完全に遊兵なんですよ、動き方が。統率されているという意思を感じません。

『不確定要素が過ぎると思うんだ。綱渡りで一切のしくじり無しで行かなければならない暗殺任務に置いて、その不確定要素を無視するのは、ね?』

『……成程、余りにも通りだな。些か結論を急いたか』

万能の天才(UC)(コロンビア)(止まらないダ・ヴィンチちゃん)

かの森の賢人にしてゲリラ戦のプロ、ジェロニモさんに対し、真つ向から『ちよつ、待てよ』を実行せしめた我らがダ・ヴィンチちゃんに盛大な拍手を。生きてる、く(生の悦び)良かった……死ぬ気であのイかれた野郎を討伐しなきゃいけないホモ君はいなかったんだね……

『つて言ってもねえ……ここでオールインしなかつたら、いつやるのさ。もし東部合衆国分が悪くなつて、戦況が西部のケルト側に傾き始めたら、それこそチャンスは——』
『ふふん。別に暗殺する事自体が問題とは言つてないよ。ただ、発想を変えるべきだ。』

危険な敵地のど真ん中に突入するくらいなら、まだ居ない方でやった方がいい。いや……私が考えているのは暗殺っていうか、『篡奪』だけだね。皇帝陛下?』

……いや、あの。別にそんなね? 暗殺を止めてくれた事は嬉しいんですけども。

万能の天才の頭脳が、なんだか大変面白い回転をし始めているのは、私の気のせいではありませんようか皆様……?』

『——うむ?』

『アウトローの中にあつて、唯一の『体制側』の経験がある人間、ではなくてサーヴァント……これを活かさないのは、嘘なんじゃないかい?』

という、余りにも不穏なダ・ヴィンチちゃんウインクが飛び出したところで、今回はここまでとなります……じ、今回は……どうなるんでしょうか、私にも分からない……

断章：暗殺指令

『——珍しいね。君ほどの劍客がしくじるとは……景清？』

……絶好の好機だった。

別の相手と戦っていた所に、背後からの奇襲を仕掛けて。ケルト側のサーヴァントと共に挟み込みの形に持ち込み、完全に有利な状況に乗じる事には成功した。

相手のサーヴァントもいたが……大柄な蛇妖相手だ。体の一つでも千切る覚悟で踏み込めば、幾らでも、首を刎ねられたであろう機会はあった。

全てのお膳立ては整っていた。前回と違い、絶好の機だった。一切の横入りも何もなかった——だというのに。

何もいいわけも出来ない程に。酷く無能を晒して……今、ここにいる。

こうして、自らの大将の前に膝を立てて、顔を見せている事が、余りにも不甲斐ない。アレだけ大口を叩き、機会を寄越せと口にしたにもかかわらず、このザマ。

如何に景清が目の前の男に忠誠を誓っている訳でもないにしろ、ここでふてぶてしくもう一度機会を寄越せ、等と口にできる程に気が狂っている訳ではない。

『……いや、責めるつもりは毛頭ないんだ。サーヴァントとは言え人の子である事は変

わりないからね。とはいえ……何か、任に集中できない理由があるなら、私にも話してくれば、何かしら知恵も貸せるかな、と』

「いえ……そのような……事は……まるで」

責めてくれたのならまだいい。これだけのしくじりだ。昔から重用している家臣と言う訳でもないのだから、寧ろ無能となじるのがごく当たり前の反応だろうに——そんな素振りには欠片も無く。

『コレは別に、決して君だけの為に言っている事ではないのだ……君が任に集中してくれなければ、私も困る。情けをかけられている、等と考える必要もない。お互いに利がある提案なのだよ……気軽に話してくれると、此方としても喜ばしい』

自分に優しく語りかける。

ただ一方的に情を振りまく訳ではなく……此方が拒めない様に。仕方ない、と妥協できる理由を作って、自ら股を開けさせ、そこから中に潜り込むのだ。

その甘さが……酷く、心地が悪い。

まるで泥沼だ。冷たい代物ではない。寧ろ、人肌ほどに温かく、全身を包み込んで、冷えた体をじつくりと溶かしていくような……気持ちの悪い温度が、体に染み込んでいつて何時の間にか……自分の芯に染みわたっていく。

『どうだね……？ お互いの利益になるのだ、話しては貰えないかな……景清』

ぎり、と奥歯を噛み占める。この胸に燻る僅かな疑問は、確かに自分の判断を曇らせるのだ。コレを解かぬ事には、自分はアレの首を断ち切る事も出来ない。

「……貴方は——貴方は、何処であの男の事を知った」

『源氏の末裔という事を、かね?』

「やつは……源氏の末裔だという事を知らぬだろう。それは……初めて会った時の態度で分かった……自分ですら分かっていないものを、どうやって」

……違う。聞きたいのはそんな事ではない。しかし迂闊に踏み込んでのらりくらりとかわされては意味がない。楔を打ち込み、そこ搦んで逃がさぬように、聞かねばならないだろう。自分は今から……目の前の男にとって、都合の悪い事を聞こうとしている。

『なあに、ちよつとした伝手さ。リンボを拾った時の様なね』

「……そうか。何処からの伝手だ?」

『——血族からの』

だがしかし。

あつさりど、闇の向こうの怪物は……口を開いて見せた。特に隠す意味などない、と言わんばかりに。どうでもいい事の様……

「あの者は、貴方に連なる者か」

——あの時。

角を生やした、男を見た。源氏の臭い以上に……鼻にかかる物がある。あの男からにじみ出ていたのは……目の前の、暗い孔からあふれ出す、怪物の気配によく似ていた。

見て見ぬふりは出来ない。源氏に連なるならば、全て殺さねばならない。もしこの匂いが本物ならば——先ずは、自分を謀っていた不埒物から切り捨てねばならん。

『そうだね。酷く遠い縁に当たる存在だ。要するに私の身内だが、まあ……君の目的とも合致するのでね。任せる事にしたのさ』

「であれば——貴様は、源氏か」

かちやり、と。置いていた刀に手をかける。返答次第では、即座にこの暗い穴の中に飛び込んで——差し違えるのも、厭わない。体よく利用されるだけならば、許容もする。だがしかし、その素性を知って私の前で笑っていたならば。

『……ふむ。私の血が混ざった相手が、偶々源氏になった——その程度のつながりで君は私を源氏と断ずるかね？』

「……」

『私は源氏ではない。名も、何もかも違う。彼らと関わる前に、私は哀れにも、島流しの憂き目にあつた……まるで繋がりもない。正に赤の他人だよ。まあ、それでも気になるというのであれば——構わない』

……このカラダから溢れ出す殺意を、理解していない訳ではないだろう。

しかしそれでも尚、目の前の孔は、閉じるどころか——大きく、大きく、私が通り抜ける程に大きく、広がっていく。

『相手をしよう。不満を受け止めるのは将たる私の仕事だ』

その声に、僅かな震えも無く。この手が刀を抜くのを、寧ろ何も気にしていない……歓迎している節すらあつた。手が震える。

舐めている？ 媚びる色はまるでない……酷く穏やかな口調が癪に障る。自分の言っている事を、まるで疑っていない——自分の言葉を正しいモノと信じて疑っていない。

「……貴様を切った所で、貴様は私を哀れんで死ぬのだろうな」

『うん——そうだね』

「であれば、切るに値しない……源氏でも、平氏でもない。外野の貴様にそんなうすら寒い目で見られるなど、ぞつとせん」

これを切つて、愚かを晒すは——自分だけだ。

源氏を殺す『現象』が、この『景清』だ。しかし、だからと言って、この身が平氏であつた頃の事を覚えていない訳ではない。武士であつた頃の事を覚えていない訳ではない。

切るべき相手を選ぶ位の『作法』は……まだ、覚えている。

『……ふふ、そうか。景清は優しいね。信じてくれるのかい』

「ふん、よくぞ言えたものだ……」

事ここに至っては、信じる信じないの話ではない。自分が切る意味があるかどうかの話だ。ここまで、契約内の事はしっかりと熟して来た。無為な嘘を重ねて、此方の神経を無為に逆撫でする程間抜けではない。

……よしんば最悪の目を引き、私が目の前の闇に飛び込んでその奥の首を刎ねたとしても……奴にはリンボが付いている。身代わりの一つや二つ、用意しておいてあつても不思議ではない。この窮地を切り抜ける事等、難しくもなんともないだろう。

嫌な理解と、態々嘘を吐いて逃げる必要もない程に整えられた場が、この男がこの場で嘘を吐く必要性が一切ない、と言う事実を勝手に焙り出す。

「……まあいい。であれば、今度は迷わん。奴の首を……刎ねる」

まるで、この事実に通り着かされたこの感覚は……気に入らない。だが今は目の前の怨敵だ。気に入らずとも、切る理由もなく、まだ氣を与えてくれるというのであれば、互いに利用する関係は、続けるべきだ。

リンボの予測では……奴らは、いよいよ西の攻略に力を入れてくる頃合いだ。奴を切る機会は、ここからいくらでも現れる。

『うん。良い気合いだ——だが、それは少々厳しいかもしれないね』
「何？」

『どうやら、向こうは計画を多少変えたらしい。西ではなく……東の陣営に目を向けているようだよ、彼らは』

「なに……?!」

そう思っていた所だった。思わず立ち上がり、背後に視線を向ける。目の前の底知れぬ闇とは違う、薄暗い影の中から、『ソニン』と鳴き声が聞こえた気がした。

『道理ではあるね。人理に反する両陣営が争っていて……まだ『東側』はトツプを挿げ替えれば、人理修復のための戦力になる可能性があるのなら、そちらを先ずは叩く』

「しかし、それでは間に合わぬと判断すると……!」

『トツプを張れる人材がいなければ、と言う話だよ。景清』

……ラーマは、インドの王子。それが東側の頂点に立ち、改めて国を纏めればケルト陣営を一時的に押し返し、そこを楔に、サーヴァントの一極集中運用で一気に首を狩る。単なる暗殺よりもずっと勝ち目の大きな一手ではある。

しかし——ラーマは心臓を砕かれ、広大な東部を纏めるだけの力は残っておらず。それを取り戻すには時間がかかる。如何にアルカトラスのシータの事を嗅ぎつけたとて——あと一步が間に合わない。そう言う話だったはずである。

『——だが、この特異点には、もう一人——王が現われてしまった』

「……ネロ・クラウディウス……!!」

未確認であつた特異点の呼んだカウンターの一人。アウトロー、体制への反逆者の多いその中でも、数少ない体制の理解者にして、優秀な皇帝。

「奴を旗頭にするつもりか……!」

『心臓の無い理想王を頭に立てるよりは、現実において名君である時期もあつたネロ・クラウディウスを頭に据えた方が良い……表向きの神輿はこれまで通りにエジソンがやるだろうが、しかしネロと言う本物の『王』が付いた東部は、今まで以上の働きを見せる』

そうなれば——流石に、今までの様にはいかない。東部の合衆国の中で、自由に敵を切り捨てるのも、難しくなってくるだろう。

刀の柄を握る手に、力が籠る。血がにじむほどに、強く。

「おのれえ……!」

『——故にこそ、ここで彼らの好き勝手にさせる訳にもいかないだろう。此方も一つ、こちらで賭けに打って出ようじゃないか』

その言葉に。

後ろに向けて振り返る。

まるで焦らない。落ち着いた様子で……男は、薄く、笑って見せた。

『ふふふ。次の任は決まったよ、景清——ネロ・クラウディウスの暗殺を頼む』

第九十九章：裏：皇帝立つべし

「……ダ・ヴィンチよ。本当に余がやらねばならないのか？」

『いやまあ、流石にどつちも敵に回した状態で、ケルトの本陣の大将を暗殺するよりは先ずこつちを何とかするのが先だと思つてね。出来ればお力添え願いたいんだよ。ローマを総べし皇帝陛下』

ダ・ヴィンチちゃん曰く。

エジソンが如何に優れた偉人であろうと、流石に乱世極まったこの中で、臨時的な物とはいへ、『国』という巨大な陣営を完璧に纏め上げる事は流石に出来ていない。彼が生前経営していた会社とは訳が違う。

単純な人間の数も、関わる人の種類も。そして想像出来るトラブルに関しても、量、質から種類に至るまで、文字通り桁が違つて来るのだという。

合理主義を究め、最大限システムチックに運用しているが……それでも尚、埋め切れない無駄がどうしても出てくる。大統王としての威光と、現状の危機による国民の団結で何とかそこを補おうとしていても……

『限度が出てくる——彼は治世の発明家であつて、乱世の雄じゃないからね』

「ふむ。まあ道理であるな。治世に向く者、乱世にて刃を振るう者、それぞれある。この乱世に置いて、治世の才ある者が国の舵取りともなれば、無理も出ようが」

「……つて事は、この皇帝サマが舵取りをすれば？」

『東部合衆国は、今以上に戦えるようになる可能性はある』

……との事だが。

ロビンが興味深そうに見つめる隣で、スタスタと歩く皇帝陛下はと言えば、まあ全く以て乗り気ではない。

『戦況を覆すだけの要素になるかって言えば違うけど……それでも、ただ暗殺を狙うよりはまあ、可能性もあるんじゃないかなという事で』

「うーむ、そうは言うがな……」

ちよつとアメリカの上について欲しい、と言うお願い。ネロ陛下の人柄的に『そういう事ならば！ うむ！ 余に任せよ！』と二つ返事で答えてくれるかと思っていた。

がしかし。その話になったタイミングで、ネロ陛下の顔色が盛大に曇った。なんとうか、綺麗にした筈のタオルから結構な匂いがして来た時のような、若干や切なく、そして苦々しくもあるような、そんな顔をしていた。

最初は『今の余は皇帝ではなくアイドルなのだがなく？』等と気軽な調子だったのだがしかし……流石にその空気ではないと判断したのか、直ぐにそのトーンは、重苦しい

ものへと変わっていった。

『……アイドル云々は冗談としても、ここはアメリカ。余が続べていたのはローマだ。勝手も違う。まあ余ならやれんことはないが、上手く行くかどうかは未知数に過ぎる』
……まず最初に切り出したのがその辺りだったのに、正直驚いた。非常に真つ当で、当たり前な結論だった。

いや完全な偏見なのだが、いきなり『ハリウッドの栄冠を我が上に掲げる！』とかト
ンチキ言い出したネロ陛下が真つ先にそんな真つ当な台詞を言うとか何の冗談だと思つてしまった。

いや、まあ彼女も普通に皇帝として国を支配していた身だし、普通にどっかの組織を纏め上げて欲しいという話になれば、その辺りは真面目に考えるのも当然ではあるのだが。

「……やはり気乗りせんなあ。大統王とやらは大きなミスもしておらんし、そのままでもよいのではないか？」

『それで押されているのが現状だよ皇帝陛下。まあ頭を挿げ替える云々は置いておくとしても、少なくとも君からの……先輩からのありがたーいアドバイスを、ライオンヘッドくんに授けるのも悪くないんじゃないかい？』

「うーむ……」

とはいえ、もうここまで来てしまったところで、じつくりと悩まれてもかなり困るのだけれども。

しかも、自分には無理だからやめとけ、と言う訳でもなく。まあやってやれない訳でもないけれど、それが上手く行くか保証もないしなあ……的。正直優柔不断な感じで決断しかねると言った感じなんだよ。

「……上手く行くの？」

『十中八九。サーヴァント舐めちやいけない。その英霊の全盛期を呼ぶんだからね。彼女も『余裕ではあるが、気乗りしない』位の感覚だ。一度やろうと思ったなら、彼女は確実にこのアメリカの民も愛し、そして守り抜こうと努力するはずさ』

「つまり、いま必要なのは起爆剤、か……」

ゴルゴーンさんの方を見る。そもそもこつちを見ていないようだった。

酒？の方に視線をやってみる。ん？ 見つめ返される。解決する気なし。

どうやら我らカルデアメンバー人外組、どうやらネロ陛下のやる気を出させる方法は一切考えるつもりは無いらしい。

いや流石に、流石にそちらさんのメンバーに色々と考えて頂くわけにもいかない。んでもって他は野郎共ばかりで……となれば。

「……式部さん、何とかならないかな」

と言う事で、この中でも人間で、同じお嬢さん。

ネ口陛下よりも若干大人っぽい空気を身に纏った都会派、紫式部さんが一番頼れると判断。近寄ってこっそりと喋りかけてみる。

「……あるには、あるのですが……」

「お、流石俺の軍師様♪ 話が早くて助かるなあ。んで？ どんな手段？」

流石の知性派。

なのだが……なんだろう。非常に表情が宜しくない。若干青ざめている気すらする。というか凄い悲壮感漂う顔をしている。胸元で高速でクルクルと指と指を、こちよこちよくるくるしている。

その仕草一つで……さっきまで凄い頼れる軍師様だったのだが。いきなり不安になって来た。こっちまっで不安になりそうな面をしている。

「……何をすればいいの？」

「ネ口様は……その……あの、マスター？ つい先日。エリザベート様とネ口様が交わした会話を、覚えてらっしゃいますか？」

「会話あ？ ああ、覚えてるよ。確かあの……地獄みたいな合同ライブを、やりたいって話……たし……か」

……式部さんの仕草やらなにやらと、その言葉で思い出された光景が結びつく。いや

単なる勘違いかもしれないのだけれども……もしや、もしやですけれども……

「……ライブ？」

「我々で、盛大に盛り上げる形で……」

「えーと、もしやして、あのー、それはもう大規模で、もう一切の制限も無く？」

「そうともなれば……ネロ様も……流石に」

成程成程お……ほう、ネロ陛下と……なんなら、エリザベート嬢も加えて、超大規模に皆様のお耳に、あの歌声をお届けになると……ほう、は……あー、あの。そうか。式部さん的には、『皇帝陛下にこんな無礼な、餌で釣るみたいな真似を』とかそう言うのがド失礼に当たるとかと思っているからこんな顔してんのかなあ

……優しい式部さんと違って、その死のライブの光景を想像するだけで、俺はもう顔から血の気がゴンゴン引いていくのが分かるのだけれども。肩も重くなった気がする。コレは、アレだな。死ぬな。コンサートが開催されようもんなら。

「……たあしかにめっちゃやる気は出しそうだなあ」

とはいえ……コレは間違いなくやる気を出すと思う。愛する国民に慰安コンサートを盛大に振舞う。うん。実に派手好きな皇帝様好みの展開だ。コレでやる気を出さないなら嘘だろうとは思う。

……ちら、と。少し後ろで歩いているジェロニモさんの方を見てみる。聞こえていた

のだろう、菩薩像みたいな顔していらつしやる。どうやら覚悟は完了しているらしい。さてもう一人の同行者、早撃ちガンマンビリー・ザ・キッド君の判断は？

「……ヘイル・メリー……」

おう、銃弾を握りしめて神に祈つてらつしやる。うん。よし。皆巻き添えは覚悟していらつしやると見える。コレで俺が覚悟決めないのは流石に嘘だろう。

「式部さん」

「は、はい」

「説得任せていいかな。俺よりは式部さんの方が相手を説得するのは慣れてると思うし」

「……ええっ？ 私……!?!」

元は家庭教師。噛み砕いて説明するのはお得意だろう……俺みたいな禿げ頭の乱暴な台詞回しよりは、まあネロ陛下もノリが良くなるんじゃないか、という気持ちがある。まあそれによって更にコンサートの規模が拡大しようもんなら俺も責任もってコンサートの最前列に座り、ネロ陛下とエリザベート嬢の盛り上げ役を買って出るつもりだ。あ、式部さん達俺のサーヴァントのお三方は当然参加しなくて良いから……

「……本当によろしいのでしょうか」

「まあ、()でネロ陛下が立ってくれないと、特異点の修復に失敗するかもしれないし

なあ……適材適所を実現する為って事で、一つ」

んで。折角ならと、やる気を出してしまった式部さんの説得により。

ネロ陛下のやる気と、合同コンサートの規模が三割り増しほどになり。序に戦で疲れている民たちに贈る慰安コンサートまで割増しになつて。

最後の慰安コンサート以外は、ほぼ全員が了承した事だけはここに記しておくとする。

酒?? 『あのめんこいのが歌と踊りするやなんて、なんや楽しそうやねえ』とか呑気な事言つてくれたんで、コイツだけは巻き込む事に決めた。一緒になつて最前列にて碎け散つて貰うとしよう……

第百章

東部の体制を刷新する実況、はーじまーるよー。

西部をどげんかせんといかん、と思つていた所で、先ずどうにかするべきは、発明家がトツプやつてる東部だった件。

この乱世乱世の中で、会社の社長を王に据えてる暇なんがないって事で。ここは乱世に慣れたネロ陛下に頭を代わって貰う……のは流石に出来ずとも、大統領に背後から指示を出す、フィクサー的な立ち位置についてもらおうと。なんという事、政治の腐敗の臭いしか致しません。

という事で（目逸らし）、特異点攻略の暁にはネロちやまとエリちゃん、二人による地獄のコラボイベントの開催が確定し。その絶望の事実と引き換えに、東部を取り仕切つてくれることになったようです。

『ふふん。その大統領とやらに、如何に効率化しようとも埋められぬ部分があるという事を、統治者の先輩たる余が！ 余自らが！ 教育してやるとしよう！ 余に全て任せるが良い！ うむ！』

当然、ネロちやま単騎で向かわせるのもアレなので、レジスタンスメンバー全員ぞろ

ぞろと引き連れて、東部へ向けて進軍を開始しました。いやあ、原作に置いては、西部ケルト陣営に暗殺に向かい、しかしながらラスボス野郎の力業の前に全滅してしまう愉快な仲間達が、コレで助かる可能性が出てまいりましたよ。

まあ別にこつから行く先も全滅しないとは限らないんですが……何せ東部にも、ケルトとのサーヴァントの不足を補えるだけの、強力なサーヴァントはいるのです。

宝具を撃ち合った余波で、こつちを壊滅寸前まで追い込んでくれたランサー君が居るんですよ。あの白髪のインド系が……

『——とはいえ、そこに行くまでただ只管に突進、敵を全部蹴散らす……つて訳にもいかないでしょ。東部もケルト程じゃないにせよ、敵の数はまあキツイ』

『んで、ケルトと違ってこつちの合衆国さんは、防備キツチり固めてるし、無理に突っ込んで見つかったら、それこそ袋叩きに会うよね。機械兵にも、あの白いランサーにも』
流石にロビン、ビリーのアウトローコンビ的にもその辺りは気になりますよねえ。一切の策なしで特攻してどうにかなるわけが無い……という事で、事こうなれば『何時も』でございますよ皆様。

そう、ホモ君有するカルデアの得意技——隊を分ける作戦！ 至極当たり前のやり方なんだよなあ……という事で、陽動を引き受ける部隊と、その隙を突いて敵地に侵入する部隊に分けます。

ホモ君が連れて行けるのは……潜入工作の得意なロビン、アメリカのフィクサーとなる予定のネロちやまと、あと一人、自分のサーヴァントから。

『彼女でいいんだね?』

はい。

やつぱり……こういう時は、自分が最も信頼しているサーヴァントで行きます。というかまあ、単純に他の二人が陽動、というか敵の攻勢を受け止めるのに適し過ぎてるので半ば消去法ですね……

『必ずや、任を果たしましょう』

という事で。はい。式部さんです。ある程度は相手にデバフもかけられますし、ホモ君の礼装を組み合わせれば、実質高倍率の攻撃力アップのバフを付与する事も可能ですのでまあ普通に強いです。

上記の三人に、瞬間的ではありませんが火力の底上げが出来る要員のハゲマスターも加わって、一応最低限の陣容にはなったかと思われます。

『と言っても、マスターから離れたサーヴァントは、全力を出し切れない部分もある。何時までも時間は稼げないから、行動は迅速に、ね』

と、おっしゃってはいませんが……要するにターン制限があるという事でしよう。承知しました。その辺りも留意して、短期決戦で行くとしましよう。

『——さあ、見えてきたよ。敵首都デンバーだ！　どうやら彼らもこつちを捕捉したらしいね。それじゃあ、手筈通り……健闘を祈る！』

という事で、パーテイから陽動作戦のメンバー、『ジェロニモ』、『ビリー・ザ・キッド』、『酒？童子』、『ゴルゴーン』が離脱。残った三人のサーヴァントでデンバーへの侵入を目指します！

……なんか普通に陽動側が敵戦力全部削り切つて終わりそうな盤石が過ぎる面子なのは置いておきましょう。当然、カルナさんも出てくるでしょうし、そう簡単にはまあ、勝ち切れない、とは思います。多分。

『——さて、こつちはこつちで気張らないとね……そら見つけたよ！　暗殺警戒の歩哨部隊だ！　連絡が本陣に行く前に、速攻で仕留めるとしよう！』

まあこつちはこつちで気張らないときついので、頑張りましょう。というかターン数制限がある戦いで、全体宝具が一人しかないという中々クソな状況でございますので。

幸い、道中の敵は、数自体は三人以上はいないので、式部さんしか全体宝具がいなくても、ある程度は何とかなるでしょう。

『……陽動部隊の方も会敵したみたいだ！　戦況は……おや、意外とこつち有利？』
でしようね。

ここの台詞、サーヴァントの編成次第である程度変わるらしいですが、まあ神話クラスのモンスターサーヴァントが二人、全体宝具を振るっているのですから、勢いで勝ててしまっても不思議じゃないです。

いや、ここで勝ってしまうと東部アメリカ合衆国崩壊なのでダメなんですけど、

負けるのは当然として、普通に勝つのも駄目、相手の心をへし折る以外の勝利以外は認められないという……中々クソですなこの任務。

『うーん、何と大戦果。こつちに目を向ける余裕は、あんまり無さそうかな……であれば、こつちも急ぎ過ぎず、じっくり行つても良さそうだ……その分、バレル確率を下げるように、念入りに索敵して行こう』

んで、向こうの戦況次第で、こつちの戦況も多少変わります。具体的に言えば、敵と会敵する数が減り、敵自体の数も減っていきます。制限ターン自体は変わらないので、実に楽になりましたね。

『——見つけた。やつぱりあると思つたよ……物資の搬入口。あそこから改めて内部に侵入し、大統領閣下の元まで一直線！ ここからは慎重さは要らない、どうせ入った時点で遅かれ早かれバレるんだ、速度優先で行こう!!』

……という事で、ロビンの不意打ちの弓矢で、見張りの兵隊を仕留め、内部に潜入。昭和のギャグチックに、土煙を巻き起こしながら廊下内に陣取る兵隊をぶつ飛ばしてその

まま一気に敵司令部へ！ 戦闘のネロちやまが完全に勢いに乗っております。

『わはははは!! 進め進めえーい!』

『はいはい失礼しますよー……あ、そのアンタはちゃんと気絶しててな』

『えっ? あうっ』

そして吹っ飛んだ兵隊さんの中で、ガッツのある人たちはロビンが丁寧に意識を落とすとして行くと……此方の奇襲によって、完全に城内は大混乱状態、これだけ激走しているというのに、寧ろ兵隊が寄ってこないまであります。

そのまま直進! 只管直進行! 此方にカルナさんもエレナ女史も来ていないのは、外の陽動部隊が頑張ってくれているお陰です。その努力を無駄にすることなかれ、障害はすべて蹴散らして進みましょう!

『ぬう、こんな壁など……こうである!!』

ど が ん!

『ダ・ヴィンチ、方向は此方で合っているな?』

『あ、うん。間違いないです』

『ではこのまま直進である! もはや余は止まらぬぞ!!』

だからって壁ぶち壊してまで先に進む事はないかと陛下……ああいやなんでも無いですネロ陛下が楽しければなんでも……おや?'

『——というか、ここが本丸だね』

『な、何という……せめてドアから入ってきたまえ！ 壁を破壊して入室など、君達はケルトの脳筋連中か！』

どうやら我々の目標の元には辿り着いていた模様です。ネロちやまがぶつ壊した扉の先に、白いライオンヘッドの大統領が……しかし至極真つ当なご意見かと思われ申し訳ないエジソン閣下……

『ぬう、まさか表の大暴れは陽動か！ カルナ君とエレナ女史に対応して貰つて一安心と思つていた所だというのに……！』

『ふふん。やはりその辺りの発想が足りぬな。自陣の最高戦力で迎え撃つのは良いとしても、自らの喉元に刃が付きつけられる想像等、統治者ならば何時でもしておくものぞ大統領とやら！』

『なにい!? そ、そう言う貴女は……』

『なあに、お主の先輩である——お主の無駄を、切り落とすに來たぞ！』

そんなホワイトライオン向かい合は、白無垢の花嫁。くしくも白と白、王と皇帝の対決となります。この戦いに勝った奴が、アメリカのトップを張る事となる……強い奴が頭張る、西部開拓時代らしい、ストロングスタイルで良いじゃないですか！

という事で、今回はライオンヘッドを見つけた所でお終いです。

今回は、エジソン戦から。果たして、発明王エジソンにこれ以上の切り札は残されているのか、ご期待ください。

第百章・裏：酷い交渉術

「——カアツ!!」

牙を剥くは、変生し、魔に成つた女神。

その咆哮に應えるように彼女の髪が変じた無数の蛇妖が、正面に立つ白い戦士を取り囲む様に一齐に襲い掛かる。個人に対して向けられるには、余りにも圧倒的な物量の暴力を前に——それでも戦士は、眉一つ動かさず。

「ハアツ!!」

一瞬。一閃。一刀両断。目にも止まらぬ早業。両腕で払うように振るわれた黄金の槍の切つ先が、食らいつかんと迫る蛇の牙を蹴散らした。人外の猛攻に対するは、超人の絶技である。

この光景は、ただこれ一つで神話となりえるだろう。

黄金眩い武具を身に纏つた神々しき白いクシヤトリヤに対するは、多頭かつ巨大、禍々しき呪詛纏う、女神の如き麗しき蛇妖。

実際、周辺のアメリカ兵たちの中には——足を止めてその戦いに見入ってしまったている哀れな者もいる。そんな彼は。

「はい隙あり」(パァン!!)

「あひよんっ」

実に、実に哀れな事に。機械装甲の顎の部分を、弾丸で揺らされるといふ曲芸じみた狙撃で、意識を刈り取られてしまった。戦場にて、余りにも雄々しく、神々しい戦いが展開されてしまった事が、彼の不運だろうか。

「いやー……でも、気持ちには分かるよ兵士諸君。見ちゃうよね、ああいうの」

ビリー・ザ・キッドは、自身が享樂的で、割と好奇心に流されてしまいがちな部分がある事を知っている。プライドもあるが……しかし、アウトローとしての根っこは変えられないものだ——そう考えると、目の前の兵士の事を、まるで責められない。

隣で繰り広げられる、生前では決して目に出来なかつたであろう、人外魔境の一騎打ち。そりやあどつちが勝つのか、手元でコインの二、三枚でも弾きながら観戦したいと思うのは人間の性と言う奴だろう。

「んで、その辺り、君はどうなの。偉い学者さんなんですよ？ オカルトの」

「あんまり。そりやあまあ、カルナの活躍だつたら見ていて面白くないって事は無いけれど……でもあれから何か天啓を得られるかっていうとねえ」

「そっかあ」

まあ今、手元で悠長にコインなど弾こうものなら……目の前のキャスターに消し炭に

される未来しか見えないが。一応、彼女の後方に陣取っているジェロニモと共に、挟み撃ちで追い詰めている……つもりなのだが。一向にそんな風にはなってくれないのが現実だ。

単純な魔術師としての腕なら、自分より遥かに上、と。少し笑いながら言っていたのはどうやら事実だったようだ。

自分もジェロニモも、サーヴァントとして隔絶したパワーを持つてはいるが、しかしそれはあくまで対人に置いての力だ。一方の彼女に関しては……文字通り、手元に火砲を携帯しているに等しい火力がある、にもかかわらず取り回しもかなり良いと来た。流石に迂闊に飛び込めない。

「ま、良いけどさ——気づいてるだろうけど、僕らは今のままでも全然構わないし」

「ええ、まあ……カルデアのマスターの姿が見えないのに、最初に気が付くべきだったわね。今更言っても仕方ないんだけど」

……それが都合が悪いかと言えば、そんな事もないのだが。ピリーもジェロニモも、挟み撃ちで追い詰められれば更に良し、くらしいの気持ちだったのだ。こうして、このサーヴァントを短時間でも、此方に釘付けに出来ているのだから、下手に動く必要も無し。

……そして、今も激戦を繰り広げている、東部最大戦力、カルナもそう簡単には抜け

出せはしないでらう。逃げられないだらう。

何せ、彼を相手取るゴルゴーンの方は時間稼ぎとかそういう諸々の枷からは完全に解き放たれている。というか、彼女のマスターが解き放った。

『——ランサーとやり合いたい?』

『当然だ。あやつには諸々の借りが残っている。今度こそ、全部纏めて返してやる』

『おっけー。んじゃ令呪で魔力装填する』

『えっ?』

あの美声からは信じられない様な濁声が聞こえた気がした。その時は。

『ゴルゴーンさん。好き勝手に暴れてきていい。時間稼ぎなんて考えるな。ムカつく白面ランサーを思いつきりぶん殴って来い』

『……ふん、随分と無責任な事を言う』

『うん。言うよ。それが一番貴女が実力を発揮できる条件だ。寧ろ下手に時間稼ぎしてください、なんて枷掛けたら、ゴルゴーンさんの方が傷ついてしまいかねない相手だし。そうなるくらいなら好き勝手やって欲しいな……あ、フォローはビリー達に任せるね』
とか雑にぶん投げられた時、ジェロニモは無言で天を仰ぎ、自分は最大サイズのため息を吐いたのを思い出す。全力で。

カルナと言う最大の強敵を任せるのだから、自分達がそのフォローくらいしても何ら

おかしいことはない。ので、手加減してくださいとも言えなかった。

……まあ結果として、ゴルゴーンが暴れ回ってカルナと衝突する、その余波だけでもアメリカ側の兵隊も混乱しているので、そんなに此方のフォローが必要と言う訳でも無かったのだが。

寧ろ、自分達が何かするよりも先に、目の前の彼女が必死に周りをフォローをしていたのを覚えている。

「……王様をどうするつもり？」

「殺したり王座から引きずりおろしたりはしないさ」

「とはいえ、一度痛い目を見てもらう事にはなるが」

「成程……だそうだけどカルナ！　王様の所には戻れそうかしらー」

彼女が声をかけたカルナの方も、初めの方は出来るだけ周りに被害が出ない様に気にはしていた。だがしかし、もうそんな余裕もないらしい。

「不可能だ。この敵を相手に、無為な行為をするのは躊躇われる」

「当然だ。貴様が背など向けようものなら、喜んでその背中を撃ち抜いてやろう……！」

天空にあつて尚、此方の肌を焼くような『熱さ』が解き放たれている。どうやら、向こうもいよいよ本領を發揮するらしい……エレナのため息と、二人が得物を構える音が、静かに重なった。

向こうは上手くやれているだろうか？

そんな事を思いながら、ちらりと城砦の方を見つめる——僅かに、その中から、土煙が上がっているのが見えた。

どごーん

豪快な音と主に、床が割れる。壁に穴が開く。ぐおおおおおとおと迫真のライオンシャウトを高らかに上げながら、妙に綺麗に背を伸ばして全力疾走するその姿、到底アメリカ東部合衆国を滑る大統領とは思えぬ必死過ぎる姿勢。

背後からは剣を構えて追っかけまわすネロ。側面からはロビンと式部が鴨打の如く容赦なく遠距離攻撃を、撃つ、撃つ、撃つ。容赦なく撃つ。まるで屋台の纏当てを見ているかのようなクツソシユールな光景。

コレがアメリカ東部合衆国の未来を決める重要な戦いとは思えない程、見た目はコント染みている気がする。

「ええい、ハハハは熱く私を説得するとかではないのかね!? なんだこのサーヴァント三人がかりの筋肉式交渉術は！ 大統領をなんだと思っている！」

「アンタみたいな頑固なタイプの主張は、力でぶち壊しにするのが一番だつて言う経験則があるんで！」

「申し訳ありません！ 申し訳ありません！」

「謝りながらぶつとい黒ビームを撃つんじやあない！」

……まあ自分で命令したんだけど。この本造院康友、余りにも非道な事をしてい
るのではないかとふと考える。いややつてる。殺しはしないけど、追いかけて回して力づ
くで降伏を迫っている辺り、言い訳出来ない。

「いい加減！ 諦めて降伏せよ！ 今なら温情もアリアリであるぞ！」

「剣を構えて突撃してこなければその発言にも説得力があつたのだがね!!」

とはいえ、この『説得』を止めるつもりもない。そんな悠長やつてたら外の陽動が無
意味になるし、この逃走劇はもうしばらく経てば自然と此方の勝ちに終わるだろう。エ
ジソンは決して『強い』タイプの英雄ではない。流石に三対一の猛攻を耐え凌ぐのも無
理。

彼に『アドバイザーの言うこと聞け』と領かせるのは、大将を取つたと全軍に降伏を
促してからでもいいだろうし。じゃあ先ずは『捕まえる』と言う方向に舵を切つたのは、
多分間違いないと思いたい。

……懸念と言えば、先ほどまではあつた。とはいえ、もうここまで反応がないのであ

れば、大丈夫だろう。とはいえ、気になりはするので、一応通信機器を起動し、ダ・ヴィンチちゃんを呼び出して置く。

「——どう？　酒？の方、敵見つけた？」

『うん。『暗殺』に来ていたらしい武者のサーヴァントを、無事に発見したみたいだね。戦闘している大きな反応が、城砦の中からしてるよ』

それを聞いてから……ゆつくりと立ち上がる。

身体を伸ばし、首を鳴らして。ほぼ勝利を確信した。

「……頑張れよ、酒？ちゃん」

第百章・裏：鬼と武者、再び

地面に散らばった硝子の破片。それはこの時代にはまだ存在しない筈の物体、エジソンが率先して導入した裸電球達の末路だ。

天井に取り付けられた電球達が割れ、あるいは落ちて砕け散り、薄暗くなった廊下は最早荒れ果てた廃墟のようですらある。

その暗がりの中で……更に濃く滲む二つの影が、二度、三度と交錯する。

二つは、重なる瞬間に、激しく火花を散らしていた——それは、鋼と鋼のぶつかり合う軌跡。人と人が、武器をぶつけ合った時に爆ぜる輝きだ。

そう……二つの影は、何方も人型の超常——サーヴァントであった。

互いに常人には捉えられぬ程に疾く、狭い廊下の中を駆け巡る……否、跳ねて飛び回っている。床から天上へ、壁から壁へ、更には、壁を伝って天井へ、そこから更に床へ。超三次元的な超高速戦闘が、静かに暗がりの中で繰り広げられている。

それは——まるで、あの森林の中での出来事のように。

「——またも邪魔をするか、化け物風情が！」

直線的に加速する片方の影が、苛立たし気に叫ぶ。

「つれないわあ、折角また会えたんやしつきあつておくれや——!!」
身軽に四方を飛び回るもう片方の影が、楽し気に語る。

二人が交錯する度に、床から天井にまで、傷が一つ、二つと、どんどん増えて行く。五本の連なり傷、深い斬撃の跡、交差する二つの刀傷……森林の時の激突よりも更に狭い空間の中、高速戦闘の密度は最早異常なレベルにまで突入していく。

再現するは、武者のサーヴァントと、酒？童子。

接近戦のエキスパート二人の激戦。人気の無い場所が無ければ、多くのアメリカ兵を巻き込んで、凄惨な光景を生み出していただろう勝負は……決着が付く様相を、未だ見せてはいなかった。

「——つちい！」

その現状に、焦れたかのような、打ち合い、激突、互いに弾かれ——駆け巡っていた二つの影が、漸く床に降り立って、止まる。鳴り響く、苛立ちの込められた舌打ち。

再び切り込んでやろうか、と言わんばかり、一步を踏み出した武者のサーヴァントだがしかし。その一步だけで、彼女の動きは止まった。次の一步の代わりに一つ、大きく深呼吸。自分を落ち着かせる様な、そんな深い、深い呼吸だった。

「……逆上せれば、貴様の思うつぽか？」

「さあて、どないやろねえ。少なくとも、うちがアンタはんと競り合うのを楽しんでるの

は、違くないわあ」

「だろうな」

焦っているのが手に取るように分かる。

誰かの邪魔をするのが趣味ではない。が、しかしこうして強い武者が自分の手で顔をゆがめているのを見ると、してやったりという気分になってしまうのは……平安時代から染みついた、癖のようなものと、酒？童子は思う。

こうして、僅かな会話からすら隙を見出そうと必死なのだ。こうなってしまうと、存外とおしゃべりに付き合ってくれることを、経験則上、しつていた。そのおしゃべりの間にも、獯猛に牙を剥こうと狙ってしまふから。

故に……気になっている事を、何となく口にしてみる気になった。

「一つ、聞きたいんやけど」

「……なんだ」

隙を固める事はしない。敢えて、ギリギリのところまで、見せつけるように、僅かに体の力を緩めて見せる。付け込むには、些かに浅い……このまま話し続けければ、更に大きく広がるのではないかと期待させる。

会話に付き合う、理由を作りだす。

そうしてやると……呑気に口を開いても、静かに応えてくれている。どうやら上手い

事かかってくれたようだ。気が変わる前に——切り込んだ。

「旦那はんの『あれ』、どないなってるん？」

……そう、口にした時の、武者の表情を見て。思わずして、口の端が吊り上がる。分
かりやすい反応だった。

「うちとお仲間かと思つてたんやけど……旦那はんとちよいと結んでみたら……なんや
ちやうやんか」

「……」

「アンタら、旦那はんが狙いなんやろ？　なんか知つてはる？」

……答えるとは、初めから思つていない。

だがしかし……目の前の女は、咄嗟に口を引き結び、そして僅かに顔の表情をこわば
らせた。どうするべきかを、惑うかのように。

何も知らないのなら、虚を突かれぼかんとするか、眉を顰めてその問い事態を訝しむ
だろうか。それでは、目の前の今の表情は？

「……知つてはるみたいやねえ」

じろり、と睨みつけられる。思考が表情から読まれた事を悟つたのだろう。実に可愛
らしいというか。こう何百年と生きた後だと、こうして人を揶揄う楽しさと言うのがた
まらなくなつてしまつて、困る。

「どないなん？ ええやん、ちよいと話してくれたって」

「……それを貴様に話す理由は、無いが」

「そう言わんといて、な？」

が。読まれた割には、焦りの表情は見えない。上手く隠しているだけか、はたまた彼女にとつてはどうでもいい事なのか。

表情を読ませないのは……得意ではなさそうだ。恐らくは後者だろうとアタリをつけてさらに唇を——胸元を、開いて見せる。

会話に意識を傾けて……注意がおろそかになっている様に。

「うち、こういうの気になつてしもたら、夜も眠れへんのや……このままやつたら、あんなの腸引き裂いてでも、その答え、聞きたなつてまうわあ」

「ふん、やれると思わんことだ。その時には、貴様の首も落ちているだろう」

目の前の武者の意識が、自分の首に向くのが分かる。殺され方故に、ここへの殺意はちよつとだけ敏感だ。機を伺っているのが分かる。

もうちよつとだけ、目の前の武者の反応が見たい。つい最近、手酷いお預けを喰らつて大分欲求不満だったのだ。これくらい楽しんでも、罰は当たらないだろう。

答えなくても良い。その分、出来る限り観察させてもらおう。

自分の命をちらつかせ、ひりつくような殺意を愉しむ……一体、いつ以来の享樂だろ

うか。益荒男との真つ向勝負も悪くないが、こういつた『すれすれ』の際に浸るような殺し合いも、好みとするところだ。

爪が自然と尖る。口の端が吊り上がる。もつと命をちらつかせ、硬くて鋭い物を誘つてしまう。たまらない。さあ、どれほど口にしてしまうだろうか——

「——アレは……同じではあるが、貴様とは根本が違う」

……そう思っていた。

「貴様が魔なら、アレは……『怨』よ」

産まれた、僅かな一瞬の意識の隙間。

そこに向け、既に武者のサーヴァントは踏み込んで来ている。刃が僅かに閃く。ヒヤリとした冷たい空気が、肌に触れる——

「つとお」

「……おのれえ……っ!!」

間に合つたのは、人ならざる反射神経を持ち合わせ、命を失うその瞬間まで、いつそ冷徹と言えるほどに心を落ち着かせられていたから。実に落ち着いて、振り抜かれそうになった太刀を、僅かに首を反らし、薄肌をさくりと切る程度で納められた。

一応、爪をカチャリと鳴らしてその切っ先を向けると、武者のサーヴァントはすぐさま一歩下がって距離を取る。緊張感も途切れていない。ニヤリと笑ってしまう。今の

は中々の殺意だった。

「危ない危ない……なんや、あっさり話して、呆けてしもたわ」

「……別に、私が隠す様な事でもない。向こうも、隠すつもりもない。であれば、貴様への餌にはちようど良かろう」

「つふふ♪ せやなあ。もうちよつとで釣られてまうところやったわあ」

……楽しみながらも、冷静に頭を回す。

同族ではある……だが、あの匂いの違いは……

「——へえ、成程ねえ」

にま、と笑ってしまう。

自分は、昔からそうだった。だがしかし……成程、人がそう『成る』のもあり得ない話でもなく、そう言う事も幾らもあるだろう。その例を知らない訳でもない——

しかし、怨。怨である。それで成る、というのは……聞いたことがない。思い一つで化生になる等、そうそうあり得ない。だがしかし。聖杯に蓄えられた知識が、とある可能性を彼女に告げる。

だが、それを『隠す意味もない』というのは……

「ふふつ……ふふふふつ、なんや、おもしろくなって来たやないの」
かちやり、と刀が鐸を鳴らす、その中で。

酒？童子は、楽し気に笑って——再び、爪を、劍を構える。どうせ、何時までもは続かぬこの勝負……楽しい時間を、極限まで楽しむために。

第一百一章

東部、制圧!!! な実況、はーじまーるよー

俺達が真つ当に制圧すると思つたか? この場所を……ところがぎつちよん!! 脳筋式なんだなあ! という事で、やつぱり時間制限付きの戦闘で、味方を伴つての登場でしたが、エジソン、撃破でございます。

まあそれでも、規定ターンギリギリまでは大分粘つてくれましたが。はぐれメタル染みた耐久してんなお前な。E X ランクはやはり伊達ではなかつたか……

『ぐう……まさか、此方に強硬手段をとつてくるとは……っ』

うん、まあ流れるに悪のケルト軍団を討伐する流れだったというのに、まさかのこつち側をレジスタンスの最精鋭たるサーヴァント達が強襲して来たとかいう……そりゃあエジソンにとつちやあ青天の霹靂も当然。

向こうとしても、取り敢えずケルトを倒すまでは放っておくくらいの積りだったのでしようが……まあアメリカ側の思惑とか知らんで足並み揃えて戦力を西のケルトにぶつけて頂けると大変ありがたいので指揮系統を纏める事にしました。

『これで我らの勝ちだ。これより、お主には余の命に従つてこの国を統治してもらおう

か』

『ぐぬう……』

『安心せよ。何も東部アメリカを、我々が滅ぼそうという訳でもないのだ。より効率よく戦う為に、より上手く運用してやろうと言うのではないか』

うーん台詞が明らかに傀儡政権おつたてようとしている悪役のそれなのですけれど、そうだよ（便乗）戦力の逐次投入は何時でも愚策つてそれ一番言われてるから。こちらら乱世のプロよ。素直に言うこと聞いたつて罰は当たらんだろう。

『……ええい、分かった！　ここまで完璧に合衆国のトップを討ち取られては言い訳も出来ない、君達の旗の下に……ではなく、そちらのレディの言を聞いて、合衆国の指揮を執る事にする！』

はい言質取つたよ（早口）

よーし、後は藤丸君達がラーマの完全復活と言う大仕事を成し遂げてくれれば、戦力も盤石。いよいよケルトに攻め入る準備も出来るといふモノ——

『ほ、報告！　報告です!!　つて侵入者?!』

『ちよつ?!　タイミング今とか、間が悪過ぎやしませんかねえ?!』

『丁度良い。大人しくなつてもらいつつ、その報告も聞こう。その後の命令も伝えて貰おうではないか！　余の実力を、このライオン頭に示す良い機会だ!』

と、ここでいきなりのトラブル発生と来ましたか……宜しい。早速新体制となったアメリカ合衆国 with カルデアの実力を見せる事にしましょう。ネロちやま、オナシヤス!!

あ、その前に勇敢なるアメリカ兵君には大人しくなって頂くと致しましょう。たった一人だけで侵入者を仕留めようとするその心意気は凄かったよ……瞬殺だけど。

『……という事で、此方は新たに雇い入れた……軍事顧問である。彼女にも、報告を利かせたまえ。何が起きたのだ』

『あ、そうでした! 追加の敵襲です! 突如として……恐らくは、サーヴァントと思われる槍使いが単騎で攻め込んで来たんです! レジスタンスも此方の軍勢も関係なしにとんでもない暴れ方を……!』

『何い!?!』

成程、何方の勢力にも構わず襲い掛かって来て、んでもって報告しなきゃいけない位のえげつない凶暴な暴れ方をしてらっしゃると……おいどえらい事になってねえか!?! なぜもつと報告しなかった!! まあ、この兵隊君を叩き潰したのは我々なんで、完全に遅れてしまったのは自業自得なんですけれども。

過ぎた事は置いておいて。ここに攻め込んで来る命知らずなランサー、しかも単騎ともなれば結構血の気も多いタイプだと思われませんが……? ?

『うむ！ であればその兵力を——いや、先ずはそなたは先行せよ！ こういう場合、少数精銳は速度を優先させるべきであろう！ 余も急ぎ戦力を編成し、後詰にあたる！』
そんな奴には先ずは我々が先んじて当たるべし、という事で。エジソン倒した直後ですが取って返して、今度は外へです。うーん、藤丸君達と負けず劣らずのハードな任務だなあホント……

『——おつ、ナイスタイミングっ！』

『すまない、加勢を頼めるか！』

さて、城の外でビリー、ジェロニモさん達現地組と合流。そして、酒？童子とゴルゴンさんも戻って参りまして……んで、今回襲い掛かって来た敵と言うのは何処ですかね。ケルトの人達は殆ど脳筋みたいなもんですが、流星に軍隊も連れずというのは——
『——カアアアアアアアアッ!!』

『ええい、とんでもない暴れようだ！ 数の差なんて全然気にもしてないんだもん、厄介だよアレは！』

ケルトじゃねえ!? 書文先生だ！ 暴走状態の書文先生だ!? そう言えば序盤で一回ぶつかってましたね彼と……今このタイミングで襲い掛かって来るとか、本当に狂ってる？ 理性残ってない？

いやまあ、文字通り四方八方好き勝手暴れ回ってるし、瞳もない怖い目でケダモノみ

たく叫んでいるので、まあ理性なんざ残っていないんでしようけれども。

しかし、この特異点でクールな一匹オオカミをしていた書文先生に一体何があったというのか……取り敢えず、正気に戻っていたただくためにも叩いて元に戻すべし！

『言つとくけど、体の反動とか気にしてないのか、化け物染みたパワー振るってくるから、気を付けておきなよ！』

あ……ビリー君もう少しそれを早く言ってくれないかなあ!? 今、目の前でゴロンさんのHPが半分消し飛んだんですよ!?

何てこと、流石にただ暴走しているだけでもない、とんでもないパワータイプに仕上がってます……クリティカル強化に攻撃力アップ、この特異点ではやっちゃいけない火力してますねクオレハ……

しかしビリー君の言う通り、そのバケモンみたいな出力も一切のリスクなしと言う訳でもないようで。攻撃する度に、ガンガン向こうの体力が減っています。うわあ、自分の力で靈基を破壊しちゃってるよお（恐怖）

このタイプであれば、守りを固めるよりも、兎も角削つて先に潰すのが上策。長期戦なんざ考えず、一撃に全てを込めて叩き潰していかなければ。

幸い、NPCビリー君の単体宝具は宝具レベルも高くそれなりに火力もあるので、酒?と式部さんのバフデバフ乗せてぶち抜いて……いや君アーチャーやんけ!? 不利く

もく不利く……（嘆き）

と言う事で、一転、火力役はゴルゴーンさんをお願いする事に……クリティカルでゴリゴリ削つて下さいオナシヤス！

『ガアアアツ!!』

『マジかよ……結構銃弾ぶち込んでやったつもりなんだが!』

『痛みも感じていないのだろう、アレは完全に霊核を破壊しなければ止まらない』

ビリー君の銃弾あんまり効いてなかったですけれどもね……にしたつて、一回倒したんだからストーリーでももう少し位堪えたって良いんですよ書文先生。

そんな私の嘆きなどトーンと気にせず、書文先生は余計に槍を振り回し、大変元氣そうにしてらっしゃいます。アレをもう一ラウンドやるのか……

『——ちつ、まさかこのような狂犬と肩を並べねばならんとはな……』

いやアレとやり合うだけでも逃げたいのにさらに追加あ!! サーヴアント・アヴェンジャー景清、まさかの参戦! いやアンタも十分狂犬だろうというツツコミは取り敢えず置いておいて、さっきの攻撃力でも辟易としていたというのに……!

しかし、此方もただアメリカ東部へ攻め込んできたわけではありません。

先ほど城の奥で、ライオンヘッドの大統領を殴り倒して、友好条約（比喻）を結んだのですから、そろそろ……

『——あら、同じ陣営なのに、随分と仲が悪そうね』

『此方は命令があれば、禍根は関係なく協力する故に、違いが目立つだけだろう』

『もうちよつと言ひ方を考えましようねカルナ……つて事で！ 王様から許可も下りたし力貸すわよ！ うん！ やっぱり仲良きことはとつてもいいわね！』

キタコレ！！

東部アメリカのサーヴァント二人が力を貸してくれる事となりました！ 全体バフとNP配り能力持ちの優秀なエレナさんに、火力役のカルナさん、実にありがたい……彼ら二人がいる事で、大分火力に差も出てきます。

そして、これだけでは終わらず。

『待たせたな！ 余のローマ機械兵団達よ、一斉射で隙間なく打ち払え！ 倒さずとも好い、足止めに徹しつつ、ゆっくりと輪を狭め、囲めえい！』

『『サー・イエツサー！！』』

ネロちやまも、早速東部アメリカの兵たちを引き連れ参戦です。

とういか機械兵君達さあ……ちよつと最速で飼いなられ過ぎじゃないですかねえ。しかし、素早く命令を聞いて対応してくださるのは実に嬉しいですけど。

流星に数の差があるとは思いますが、では、その差を活かして、出来るだけ早くお引き取り願うと致しましょうか。

第百一章・裏：二凶騒乱 前編

「——■■■■■■■■■■ッ!!!」

「来るよー！ 後退ッ！」

絶叫と共に、近くの仲間達に合わせ、一步後退。手の中には、式部さんを抱えて。尖った切っ先が、空気を引き裂いて——そのまま地面に、こん棒の様に叩きつけられ、硬く乾いたアメリカの大地を、蜘蛛の巣状に引き裂いていく。

到底技術で成す技ではない。それを示すかのような有様を、目の前の男は見せている。

「つぶねえ……マジで血濡れの凶行だな！ 血に濡れてるの暴れてる本人なんだけども！」

「アレで倒れない辺り、本当にサーヴァントだよねえ……！」

ピリーが俺のボヤキに応えてくれるくらいに、李書文は全身から噴き出す血液で、朱色の服が紅く染まり切っていて。

既に死にかけてではないかと言わんばかりの有様になっている。アレがこっちの返り血ならまだましだ。体に絡みつき、服に染みる生臭いあの血漿は、全部、自らの体から

噴き出したモノなのだ。

全身を躍動させて……どころか、全身を、巨大な手に握られて振り回されているかのようによぶん回して、狂ったように飛び回り、跳ねて、叩きつけて、武器を振るう。

体が千切れそうな程に暴れると表現する事はあるが、しかし本当に体が裂ける程に暴れ狂うとは、いったいどれ程の力で武器を振るっているのだろうか。

「はあっ!!」

「——カアアアアッ!!」

ぎぎん!

「つ……ほんま、出鱈目な振りをしとるわあ……!」

……少なくとも、背後からの奇襲、そこから酒?が先んじて振り下ろした大剣が、後から礫の様に吹っ飛んできた槍の先に弾き飛ばされるくらいには、異常な臂力によって加速が乗っている。

しかも大剣の切っ先だけではなく、酒?自身すら槍の振りで大きく吹っ飛ばされる始末である。体を破壊するというデメリットと引き換えに振るう暴力の凄まじいこと。

「——合わせようか」

「やめといた方がええわ。うち、そう言うの苦手やし」

「まあ通りではある、君の本質は『荒ぶるもの』だからな……仕方ない、機を信じて堪え

るしかないか」

ジェロニモさんの方は、じっくりと隙を伺っているが、絶え間ない暴力の嵐にそんなものが現われるかと言えば……まあお察しだ。

まるで暴力装置。こんな風にサーヴァントを『使う』奴の気が知れない。間違いない。品もクソもない冷徹な化け物がやっているに違いない。

「……」

「ハアツ！ ハツ！ ……あー駄目だ！ 全部弾かれる！ 銃弾を弾くとかなんなんだよホントあのサーヴァント！」

「どんな反射神経してるんですかねえ……何、その苦虫噛み潰したみたいな顔は」
「いや、クソみたいな心当たりを思い出しただけで……」

ロクでもねえ心当たりを。スゲエな、敵の術師がここまで分かりやすく『悪』貫いているのも珍しいよ。っていうか、あんなひどい有様なのに、飛んで来た弾丸も矢も、的確に撃ち落とすとか人間業じゃねえなあ……いや、元が神槍って謡われる程の武人だからアレくらいは暴走していてもやれて当然、くらいのレベルのなのか。

もしくは暴走していない、とか……いや、今はそこは気にしなくても良いか。気にするべきはあのランサーをどうやって止めるべきか、だな……

この状況下で。

思考を落ち着けて、改めて……拳を構えて、じつと周りを見据える。刺客は、かのラ
ンサーだけでは無い。当然のように俺を付け狙う刺客さんがもう一人来ている。

「二応聞くけど式部さん。アレを拘束して何秒くらい持つ？」

「……拘束できないと思います」

「でしようなあ。弾丸ばらまいて、それが当たるのを狙うか……望み薄そうだけど」

ビリーの銃弾がまあ何発も散らされてるし……それに、もうここから動けない以上、
出来るだけ援護してもらいたい所もあるし。

がきん、と甲高い衝突音。それに合わせるように、式部さんの手から放たれる黒い光
芒が、三発。音のした方向には……ゴルゴーンさんが。

彼女を狙ったのでは、当然ない。狙いはその先……彼女の押し寄せる蛇髪すらも、水
面を跳ねるが如き軽業で躲す——『武者』。襲い来るゴルゴーンさんの物量に加えて、三
発で囲むようにぶつ放したのだから一発くらいは……そう思ったが。

「——温いわっ！」

しかし、結界の如く四方八方に飛ぶ刀の軌道が……三つの弾丸を散り散りに切り飛ば
して、近寄せもしない。うん。完全に調子を取り戻している。ゴルゴーンさんを相手
にしてなお、俺の首を切り取ってやる、っていう熱意に溢れてる。

ああなったら俺はもうここに釘付け。んでもって、流石に周りに一切の護衛無しって

いうのもアレなので、式部さんも俺の傍から離れられない……最悪だ。

咄嗟の事だった。ゴルゴーンさんとジェロニモさんを前衛に、ビリーとロビンで援護してあのサーヴァントを迎撃しようと思ったところで――

『――最早任は果たせず！ 後は貴様の首一つ！』

瞬間、飛び掛かって来たのはあの武者のサーヴァント。ランサーを抑えようとしていたゴルゴーンさんが、代わって迎撃する事となつて……完全に、こつちが万全の態勢を築こうとしていた、その一瞬を突かれた。

お陰で、あのランサーを討ち取るのも、今は厳しい状況だ。『武者』を追つて戻つて来た酒？に、咄嗟に迎撃を頼みはしたが……このように、二人に完全に翻弄されていてカルドアのアキレス腱である俺に、切っ先が付きつけられている状況である。

これを引き起こしている原因として、余りにも情けない話だ、実に苦しい。

「つたく……王二人はまだ到着せんのかい!？」

「俺達がボコつたんでしようが……そう簡単に復活も出来ませんよ」

「正に正論!」

……現状、アイツらと戦つてるのは、俺達だけだ。東部アメリカ側は動いていない。

周囲のアメリカ兵は、こつちに手出しこそしていないが、それはカルナとエレナの二人がアメリカ兵を取りまとめられているからで。

結果、邪魔はしないが味方もしない、と言う状況になつている。

あの二人も、状況を考へて一旦戦いを止めて味方してくれようとはした。したのだが問題は兵士の方だ。急に乱入してきた敵に襲われ被害も出てる上、先ほどまで衝突していた俺らとすぐさま協力しろ、と言うのは難しい。将に対応は出来ても、一兵士にそこまで完璧な対応しろと言われても無理、つばい。

となれば大統王の口から命令してくるのが手っ取り早いのだが、俺達が一旦ボコつた後に急いで出て来いとは流石に酷に過ぎる……向こうの連携が取れていない事が、最大の救いだらうか。

というか、どっちも好き勝手暴れてるだけだから、連携もクソもないというか。あの二人とも実力者、しかも片方の化け物染みた出力は折り紙付きだから、キツチリ連携とられたらきつい筈なのだが

「ええい……っ！ このような狂犬と肩を並べるような事に成ろうとは……！」
うん。ゴルゴーンさんの爪を掻い潜りながら、寧ろ舌打ちをしてる。

上手くやったら何とか同士討ちしてくれたりしないだろうか、と思つてしまう位に『武者』は向こうのランサーにイラついている。

いや、狂犬とは言うが、あんたも大分狂犬染みてるし、こつちから見ても大して変わらんように見えるけど。同族嫌悪か……？

だからまあ、ギリギリの所なのだ。一手……なんか一手があれば、状況も変わるんだけれども。

「……ん？」

ふと。

機械化兵ばかりの周囲に、一人生身の人間を見つけた。走って向かっている先は……どうやらカルナと、エレナの二人、らしい。

表情は……凄く焦ってる。急いでこの報告を届けねば、っていう感じ……おや？

……にやり、と口の端が吊り上がるのを自覚する。どうやら、その状況を変え得るタイミングが、漸く巡って来たらしい。となれば……とん、とんと目の前の『武者』に気を配りつつも、ランサーへの援護も行ってくれているロビンの肩を叩く。

「ん？ なんすか、今ちよつと余裕が……」

「合図に合わせて、ランサーの方に攻撃集中頼む。来たぜ、反撃のタイミング」
「はあ？ ……ああ！ 成程ねえ、いいタイミングで、来てくれたじゃないの」

此方に振り向いたロビンの視線が、俺が指さす先に向かい……俺と同じことを悟ったのか、揃ってニヤリと笑ってしまう。

兵士の何らかの報告を受けたエレナの表情が……僅かに、緩んでから。凛々しい笑顔に彩られたのが、見えた。

その視線が此方へと向かい——俺の目と会った。一瞬、目を見開く彼女に、軽く手を振り返してから……そのまま、くるりと手を回し、親指で軽く『武者』の方を指さす。

エレナは、深く頷いて俺に返し……その手から、携えていた本が浮かび、開いたペー
ジの間から……光が漏れ出して来るのが見える。確認完了！

「——撃て！」

直後に叫ぶ。ロビンが一転、ランサーに向けて狙いを定める。その瞬間の『武者』の動きは、実に露骨。カバーしていた一人の意識が完全に逸れたのだ。ここぞとばかりに首を切ろうと、ぐるん、と体を回し、此方に飛び掛かろうと——

その顔面の前を、一条のレーザーが飛び去って行く。

「なにっ!？」

「遅い」

その一撃に怯んだ、その一瞬だった。エレナの傍らにいた黄金の鎧をまとった白い戦士が、武者の前へと降り立って——その槍を一闪、振り回す。

その切っ先が、鎧諸共に胴を薙ぎ払う……と思われたが、『武者』の方も何とか両手の刀で斬撃を受け、斬撃を受け流すように一歩後退して難を逃れた……が。

顔が歪む。

後ろのランサーをぎろり、力を込めて睨みつけてから、その戦士、カルナにその鋭い

視線を向け直した。

「ええい、あの狂犬め……せめて傷の一つでも入れておけなかつたか……！」

「——あら、同じ陣営なのに、随分と仲が悪そうね」

「此方は命令があれば、禍根は関係なく協力する故に、違いが目立つだけだろう」

「もうちよつと言い方を考えましようねカルナ……つて事で！ 王様から許可も下りたし力貸すわよ！ うん！ やっぱり仲良きことはとつてもいいわね！」

第一章・裏：二凶騒乱 中編

「——すまん、任せる！」

「請け負った」

如何に『武者』とはいえ、あのカルナを直ぐに突破できるとは思えない——となれば任せてしまつてから、一点集中で出力を注ぎ込む。それが好し。ならば即断。味方になつたと仮定して、くるりと武者に背を向けて走り出す。残念ながら君の恨みには付き合つていられないのだ。

と言う事で。カルナと聞いて目をギラつかせる、実に律義なゴルゴーンさんに手を振つて合図。睨みつけられるがそこは四十五度のお辞儀で懇願。舌打ちと共にご承知を確認してから、式部さんの手を取つて走り出す。

「ベリー！——一応カルナの援護頼む！」

「了解！」

返事と共に、撃鉄が落ちて、鋼鉄の砲口が火を噴く音が聞こえた。

背後は西部のガンマンに任せ、傍らにロビンフッドを伴い、紫式部の手を引つ張りながら、ゴルゴーンに睨まれて走る……おお、何ともめちやくちやな英雄譚な事だ。今更

ながらだけでも。

「んで、ロビンフッドさん、出来るだけアレを速攻で仕留めたいんだけどなんかある？」
「とっておきつてコトか？　ない事はないけど……お宅のサーヴァントは？」

「式部さんは行けるけど、流石にこんな周りに味方がいる状態でゴルゴーンさんの宝具は撃てない。酒？も同様だ！」

片や全員融解しかねないし、片や全員毒酒を煽つてグロッキーつて事もあり得る。

こう考えてみると、ウチのメンバーつて広範囲薙ぎ払い系で周りの被害もお構いなしな化け物染みた出力の奴多いな……まあ、伝説に名を残す様な魔性の女（物理）が二人もいるんだから是非もないのだが。なんか後ろから睨まれてる気がするけど、それは兎も角。

「俺はサーヴァントの皆さんのお力を借りてるが、だからって無軌道に被害を広げるのを良しとはしねえ！　悪いか！」

「……はっ、甘ちゃんだねえ。が、嫌いじゃないぜ、そういうの！」

俺の言葉に、ロビンはその手甲に装着された弩を、そつと撫でて見せてくれた。

「あるよ。こつちも一応は英霊なもんでね。それもアイツには良く効くんじゃないか」

「そいつは頼もしい。是非ぶち込んでやってくれ」

「あいよ……つつつても、まあ一応は仕込みがあるんで、協力して欲しいんですが」

俺の視線の先には、酒？とジエロニモさん、そして二人とにらみ合い、動かないランサーの姿が……やっぱり、ただ暴走してるようには見えんな。ちゃんと足を止めて、様子を伺うだけの理性は残ってるのか。

となれば、その仕込みとやらがバレたら対処されるかもしれない、か……式部さん他で動きを止めて、ロビンの『とつておき』で確実に仕留める。うん。その方向で行くか。「分かった。任せる」

「なら……俺は潜伏しとくんぞ、適当に視線引いといてくれ」

「あいよ。式部さんの宝具に巻き込まれるかもしれないけど……」

「そつちもやめといてくれねえかな!? さっきの言葉何処行つた!?!」

うむ。と言う事で、自然と俺らカルデア第二チームの宝具は全封印される事となった。まあ遠距離攻撃二人と、前衛二人いれば、別に宝具を無理に使わなくても抑え込めるか。

作戦は決まった——と同時に、マントを纏ったロビンフッドは、俺の目の前から空気に溶けるように消え失せる。

相も変わらず、不意打ち、暗殺に向けた能力だ。

彼がいるのなら、俺達は盛大に暴れるだけでも十分に役割を果たせるだろう。

「頼むぜ、森の狩人さんよ……二人とも、加勢する!」

「お好きに？」

「助かった。流石に、暴れる勢いが強すぎてな……！」

と言う事で、式部さんとゴルゴーンさんを伴って加勢する。ここからは、俺の仕事でもある。流石にあの荒ぶる槍使い相手に前に出る真似はしないが……しかし。

ばかり、と額に走る電流の感触。それと同時に、礼装を起動。黒いスーツに、輝く緑のラインが浮かぶ。

「式部さん！ 対魔性戦闘準備！」

「はい！ マスターは巻き込まれないようにお気を付けを！」

「分かってる分かってる」

やる事は、『イアソン』の時と同じ。

奴にブチ当てたのは……単純なものだ。

詳しい理屈は分からん。分からないのだが……ダ・ヴィンチちゃん曰く、俺と『同調』する為の弾丸。コレが当てて、俺が角を生やすと、式部さんの知ってる対魔の陰陽術が相手に良く効くようになる、との事。

『本造院君と同じになった汝は魔性！ 罪ありき！ つて奴かな』

……冤罪にも程があるし、何なら角生やしてる俺にも式部さんの術が良く効くっていう証左にもなるので結構悲しかったりするが、まあそれは良い。

「アサシン！ もうちよつと耐えてくれよ！」

「はあい……それと、呼ぶときはどつちに絞つてくれへん？」

「……アサシンで!!」

呆れたようにこつちをちらりと見るアサシンに、そう返しておく。

こつちの方がしつくりは来る。うん。前はアサシンって呼んでたし……ううん、呼び名一つ取つても、サーヴァントとの信頼関係に響く事は幾らでもある。これからあの化け物染みた野郎を任さなきゃいけないんだから猶更そう言う所は気にしておこう。

俺の礼装の弾丸なんざ、どれだけ狙つたところで、素のアイツに直撃するわけが無い。となればアサシンと、ジェロニモさんに頑張つてもらうしかない。

加勢に來た、とか言つておいて情けないが……この後が勝負、ファイバータイムなのでそれまでの辛抱と言う事で、一つ。と言う事で、じつくりと狙う。

槍の穂先が、ひらりと煽る様に揺れるアサシンの着物の端を捉える。その一瞬、ジェロニモさんのナイフが、柄に噛み合つて動きを止める。そして、アサシンの爪が……ラッサーの足を、切り裂いた。

「……そこだつ！」

狙いを定め、指先から射出される黒い弾丸。

真つすぐと向かうその先は、爪によつて足を奪われ、反撃する槍もジェロニモさんに

奪われ、最早迎撃も回避も何方も敵わぬサーヴァントの元へと向かい。

額に向けて——直撃した。

「カッ!?!」

僅かに揺れる頭。ばちり、と相手の全身に走る電流のような波紋。この属性付与が持続する時間はそう長くない。一瞬だ。ここで一気呵成に追い詰める。

「式部さん!」

「承知しました……!」

式部さんの指先によって、空中に結ばれる五芒の印。

真つ赤な輝きと共に四人のサーヴァントに宿る、対魔の術式。準備完了。ロビンの切り札が発動するまでに削り切るつもりで、全ての手札を切った。一度相手に渡った流れを取り返し、そこからさらに無理矢理に抑え込むのだからそれ位はする。

故に——次に放つも、全力一手。出し惜しみせずに大号令を放つ。

「——全力だ! 全力でやっつたれえ!」

「ガアアアアアアアッ!!」

応えるように、ランサーが吠え、槍を振るわんと全身に力を——しかし、漲らせようとも、既にジェロニモさんに槍を抑えられ、更に、背後からは、アサシンが十本の爪を突き立て、その動きを止められている。

喰らった三体の化生は、耐えきれぬとばかりに、ぐらりと地面に倒れ伏したが……しかし、それだけでは終わらない。

「……まだ来ます！」

「そうみたいだな……！」

黒の孔から続々と現れる、魑魅魍魎、化生ばかりの怪物の群れは、何れもその敵意の視線を此方へと向けていた。

第百一章・裏：二凶騒乱 後編

……想像だにしていなかった。

こんな魑魅魍魎が突如として、この戦場に乱入してくるなんて——ああ。

「——ゴルゴーンさん、攻撃継続!!」

「っ……分かってる!!」

そんな事を言ったら? になつてしまう。

現れた奴らを見ても、そこまで焦っていない自分がある。想定内の範囲だ。これで、人理修復を駆け抜けてきた、マスターの戦術眼。既に英霊にも劣らぬわ——と、言えたら良かったのだが。

大変申し訳ない。ただのメタ読みです。

こちらら、多分カルデアの誰よりもリンボの悪趣味を知らされてるもんで、このランサーがリンボの野郎が操つてるなら……こういう横槍位は、普通に入れて来ても不思議じゃないんじゃないかと思つただけなんです。それがたまたま当たっただけなんです。

「つつても、一体二体屠つた所じゃ変わらねえか……い」

確かに向こうの奇襲は成立せず、出てくるところに半ばリスボン狩りのような感じ

でぶつ放して何体かは吹き飛ばしてやった。

だがしかし……それでも奥からあふれ出す物の怪の勢いを削ぐことは出来ない。出るわ出るわ、肉体を持つもの持たぬもの、首の有る無しまでバラエティ豊かと来ている。

「——アサシン！ そつちは大丈夫か！」

「大丈夫とちゃうねえ。さつき首飛びそうになったわ」

「気を付けてくれよ！」

「ジエロニモはんが」

「もつと気を付けてくれよ!？」

アサシン達の方も、抑えていたランサーに振り払われてしまった……折角の攻勢も、これじゃあほぼ意味なくなっちゃった……と、思っているだろうか。だが。

そもそも俺達の攻撃は、あくまで陽動。間違いなく本命のロビンがいる。二人が抑えている間にも、きつとロビンは仕事をしている。

なら、今は溢れ出して来る敵を出来るだけ足止めするのがやるべき事。万が一にも、何処かに潜んでいるであろうロビンに流れ弾が飛んでいかない様に。

そしてもう一つ……無数の化け物の湧きだす元凶の、あの穴を封じる必要がある。未だ化け物を吐き出し続けるあの底なし沼みたいな渦、時間制限があると樂觀視はとて出来ない。放っておけば、それこそ底なしに脅威を吐き出し続けたら、シャレにもなら

ない。

「式部さん、あれ、閉じられる?」

「……何とか。ですが」

幸いだったのは……一応、敵の使っている術が、式部さんと同じの陰陽術である事。何とか式部さんでも対応できる部類らしくて、一つ胸をなでおろす。

「しかしここからでは無理です。解除するには近くに行かなければなりません」

「OK了解……ゴルゴーンさん、あの化け物共と、ランサーを見といてくれ。俺は式部さんと一緒に穴を閉じに行つて来る。万が一、こつちに向かつてくるようなら——」

「あの何方も迎撃すればいいのだろう。分かっている」

よし。

幸い、最初の三体以外は、そこまでゴツそうなやつも出て来てない。態々サーヴァントを動かす必要もない、俺でも対処できそうなレベルだ。

とはいえ、俺じゃあの中で無双できる訳もない。式部さんを送り届けるだけでも割と命がけになるだろうが……

「マスター。ゴルゴーン様が援護をしてくださるなら、私単騎でも……」

「いや断言しても良いが絶対に無理だと思う。式部さんそんな軽やかに化け物共の襲撃躲せないでしょ」

「ううっ」

が、残念な事にそうでもしないと式部さん一人では無駄死にさせてしまうだけなので俺が付いていくのは必定なのである。ゴルゴーンさんが、色んな方向に攻撃を割り振れる人だっただけでも僥倖。援護はあるので、死にはしないだろう——

「っ—訳だ。俺の傍から離れるなよ、式部さん！」

「は、はいっ！」

拳を構え早速一歩踏み出せば、並ぶ妖共は、直ぐに此方に気が付き近づき牙を剥き、大地に爪を立て、二度三度と刃を研ぎ澄ます。

どいつもこいつも反応も実に良し。

成程、容易くやられてくれるような手合いではないだろう事は分かった。若干、掌に汗が染み出して来るのが分かる。

「つたく……エスコートするにも、道が無さすぎるだろうが——」

「——ならば真つ赤な絨毯付きの道を用意してくれよう!!」

瞬間。

耳をつんぎくような轟音が連鎖して鳴り響く。目の前の怪異達がびくんつ、と震えてから、四方八方に吹っ飛ばされるようにして倒れ伏す。

聞こえた音は……余りにも重い銃撃音。拳銃では出せない、重たすぎる連射音が体を

震わせる……それは、このアメリカで馬鹿程聞いた、重機関砲の発砲音だ。

は、と。確かに漏れだす、安堵のため息染みた呼吸。

くるりと振り返ると……周りでざわついていたアメリカの機械兵たちが、何時の間にか現れた化け物たちにその銃口を向けている。

そして、その中心で。白い衣装、白い剣を天に掲げた絢爛豪華な、金髪碧眼の麗人が一人、堂々不敵に笑っていた。

「待たせたな！」

「——おせーよ陛下！」

振り返って、手を突き上げ、本造院君怒りの抗議。笑顔交じりのそれに、ネロ陛下もニッコリ笑って手を振って返してくれる。

傍らの式部さんと目を合わせて……彼女の手を取って、一步、前進。

「余のローマ機械兵団達よ、一斉射で隙間なく打ち払え！ 化け物たちを逃がすなよ！」
俺達の動きに合わせるように。彼女の号令一つで、再び機関砲が構えられる音がする。

「二人のサーヴァントは倒さずとも好い——足止めに徹しつつ、ゆっくりと輪を狭め、囲めえい！」

『『サー・イエツサー!!』』

——恐らく、全方位から、敵勢力にアメリカ軍の砲が向けられているだろう。ケルト野郎共が更に攻め込んで来れば分からないが……少なくとも、今この瞬間の趨勢は、こつちに完全に傾いた！

一步、前進。無数の射撃音。俺達に触れる前から、倒れ伏していくバケモノ達。目の前に開けるのは、余りにもデカくて、真つすぐな道。進むのは、容易い。

残った怪物達も、二、三体と少ない。それだけならば——！

「——邪魔だあつ!!」

迫る髑髏、カタリ開いた顎の中につま先ををぶち込んで振り回し……真つすぐ蹴り抜ける、更に前へ、敵の向こうへ、あふれ出す化け物たちの根本へ。止める者もない。到着は実にスムーズに。

この仕掛けでもう少し、時間を稼ぎたかったんだろうが、いつもいつもそう上手く行くと思うなと言う話——目の前に見えてくる黒い孔。そこで、式部さんが一步前へ。

きつと表情を引き締めて、紅い紋様に向き合うと——浮かぶ紅い紋様の上から、別の陣を描いていく。

「何秒!」

「——三十秒、正面は平気ですのでそれ以外をお願いします!」

「上等!!」

式部さんの前衛に立つなんざ、もうこれで何度目かかっていう話だ。一斉射撃でも倒れられなかった哀れなお零れなんざより、もっとキツイ奴とも戦つて来た。なんて事もねえ。

くるりと振り返り、彼女と背中合わせに化け物共に向き合う。

初手、スケルトン。首の後ろの脊椎を渾身の蹴りで粉碎……動かなくなった本体を蹴つ飛ばして、僅かにでも時間稼ぎ。この間も、援護射撃は続いてる。時間を稼げばその分だけ背後からの射撃で削られる。

続いて鎧武者が一騎……だが、その自慢の鎧は穴だらけ、足元もおぼつかない。これなら苦勞する事もない——思いつき振り切った拳は、一発で鎧武者を地面に叩きつける。

その背後から飛び掛かる猪だが、甘い、お前の相手は一番慣れている。牙を恐れるな額は意外に硬い、狙うのは突き出した鼻一点。下から掬い上げるように、蹴り上げる。

「オラ来い！」

恐れない。向き合う。拳を構える。勝利を確信しながら、気軽に。

ここまでもう三十秒は経っている。俺のファーストサーヴァントは、口にした事はきっちり守る。既に仕事は終わっているだろう。信じて、だが最後まででは気は抜かず、時間を稼ぐ——！

「——なんだ、カッコいいじゃないの。少年。お陰で良い仕事出来たよ」
ふと……待ち望んだ声が聞こえた。

背後。振り返るその先、ゆつくりと閉じていく魍魎の門の前——式部さんの隣から湧き出でるようにして、現れる緑の外套。

そしてその弓の向かう先は、魍魎たちが阻んでいた、俺達の目標がある所。

暗がりの消え去った向こう側。ジエロニモさんも、酒？も一歩離れている——漂う、薄紫の煙が、その中心に槍兵を閉じ込めているのだろう。

「弔いの木よ、牙を研げ——」

そこに囚われた獲物を射抜くのは、潜み続け、好機を取った五月の狩人にとっては、余りにも容易い——！

『祈りの弓』!!』

第百二章

ケルトに一転攻勢をかける実況、はーじまーるよー

ネロちやまの援護に加えて、全戦力を注ぎ込んだ最大出力で漸く静まって下さいましたよ書文先生……単体宝具持ちがロビンしかいなかったもので、何がクラス相性だよ毒付与からの特攻宝具喰らえオラア!!!と言わんばかりに徹底的にイー・パウしまくって徹底的に削りました。

それでもこの中で一番火力出る辺り、特攻が偉大なのか、全体宝具しかない火力不足の悲しみの所為なのか……まあ、それは兎も角。

『どうする。まだ戦うというのであれば此方も全力を尽くす……とはいえ、そちらの不利は否めないが』

『——次だ。次こそ貴様の首を断つ……逃がすと思うなよ……つー!』

漸くアヴェンジマシマシのアヴェンジャーも退却……これで東部アメリカ合衆国を見事掌握いたしました!

やったぜ。所要時間丸一日(概算)で、最高級の合衆国をゲットだ! ご立派あ!

これでホモ君の側はキツチリ仕事をしたと、今度こそ胸を張って言えるでしょう。安

心して藤丸君達を迎え入れられます。後は藤丸君達がラーマ君を万全にして戻って来るだけです……（絶望）こんなに楽しみじゃない藤丸君の帰還も今回くらいでしようか。

『——さて、ネロ君の献策によつて、かなり我がアメリカ軍の無駄が露になつて来たのだが……ホントかねコレ、冗談とかではなく？』

『寧ろ余としてはアレだけの生産力を、ここまで無駄な部分に回せていたのが驚きだ』

『むう、コレがローマを続べた皇帝の力か……物は相談なのだが、特異点終つてからも我々のアドバイザーとかやっていたかどうかには』

『やらん』

おいやめい。こつちの貴重な戦力をかすめ取ろうとするな。つたく、油断も隙も無い大統領だこのライオンヘッドは……と言う事でこちら、デンバー城砦内司令部に、カルデアアメリカメンバー揃つて集結！

流石に藤丸君が戻つて来るまでのんびり待っているというのも無いので、ここで対ケルト戦線の作戦を練るのです。

『まあ、私のスカウトが袖にされるのは何時もの事なので置いておくとしよう。と言う事で、AC同盟の諸君、此方を見てくれたまえ』

『……AC同盟？』

『アメリカ・カルデア同盟』の略称だ。良い名前も思いつかず、こんなシンプルな名前になってしまったのだが……』

アセンブルが燃える世紀末ロボットアクションみたいな名前してんなお前な。FG
Oの

チーム編成の自由度（課金依存）はそのレベルくらいはありますけど……まあ名称のセンスに関しては置いておいて。

んでそのちよつと自由過ぎる名前が堂々と記された地図が、目の前に広げられています。流石に機械の兵士とか運用してらっしゃる国ですね、電子で地図を表示させるくらいの技術力はあると……その割には上に裸電球とか揺れてますけれども。流石に軍事方面に技術を集中させているのでしょう。それでも尚電球は作る辺り拘ってはいま
すけど。

『これが我が東部アメリカ側の領地。そして此方がケルト側の領地……100%正確と
言う訳でもないのだが、大まかにはこんな感じだ』

青いのが、此方側の領地。赤いのが、ケルト側の領地。うーんどう控えめに見ても四
対六くらいで此方の方が少なくて不利に見えますねえ……

『まあ見ての通り、陣取り合戦に置いては此方が明確に不利を晒している。そしてこれ
に加えて……こうだな』

そしてお次にそれぞれの領地の上に表示されたのは、領地と同じ色の柱。棒グラフと言うやつでしょうか。んでもって……これもケルト側の方が明らかに多いように見えるのですが。うーんコレも想像が付く。

『ケルトの側と、我々の戦力比較。これも今までは我々の方が劣っていたと言わざるを得ないだろうが……しかし、ここに関して言えば、今はそうではない』

うーんどっちも不利——だったのが、青い柱に、濃い青色の部分が追加されて伸びていきます。更に、その青い柱の隣に、緑色の柱が一本立ちました。

『濃い青色がネロ殿によって新たに捻出できた戦力。そして、緑が君達だ』

……濃い青色の部分大分ありますけど、結構遊んでた戦力あったんですね。それにしても流石にケルト側の戦力超える程じゃありませんけど。と言うか我々の緑の戦力、軍隊とか持っている訳でもないのに普通に渡り合えそうな位長い辺り、サーヴァントコワイ。

『コレが現状。AC同盟となった我々の総戦力だ。決してケルト側のそれに劣るものではない。向こうの戦力は時間が経つにつれ増えていくとはいえ、しかしこのタイミングにおいては、寧ろ我々が上回っていると見えよう——これは好機だ』

『うん。と言う事で我々カルデアのメンバーを、アメリカ側の戦力で無事にケルト軍の所まで送り届けて欲しいんだ』

『……うむ。そう言おうと思つていたのだが、アレだ。君たちも初めからそれが目的だったのだね』

お前の戦力が目的だったからな（ゲスマン） この場合、君が欲しかったんだってエジソンに言うのはちよつと草 of 草なので寧ろ健全なのさらに草茂。

まあ兎も角、我々の目的はここまで膨らんだ戦力で、無事に敵地の奥まで送り届けて貰い……このアメリカ力を滅ぼさんと暴威を振るうケルトを叩くこと。ここで漸くその準備が整いました。

んでもつてここからやる事は実にシンプルです。我々、レジスタンス、及びカルデアの戦力を集結させた『矢』を、東部アメリカ合衆国という『弓』につがえ、一点に撃ちだして首を狩る——かつて日ノ本で真田幸村が東照の大將首を討ち取らんとした時の様に。

『今まで我々はずつと防衛線を展開せざるを得なかつた——しかし、此度は違う。此方から全戦力を用いて、攻め込む。全てを『オールイン』した、この特異点始まつて以来の大戦となるだろう』

そして、動き自体も実にシンプル。地図に表示されるのは、大きな矢印。東部アメリカ側から、ケルト首都へと伸びています。

『これだけの大軍だ。細かい事は出来ない——我々は、東から、西に向けて前進する。正

面から真つすぐにぶつかって、力と力でぶつかり合う』

『……そして、東部アメリカとケルト軍が大きくぶつかって、敵が広く展開して、一点を固めるのが難しくなったところで……散らばった敵を、我々カルデアメンバー他、少数精鋭の部隊で各個撃破。戦線を一時大きく押し上げる』

そこで東部アメリカの現状の戦力で真正面からすり潰すと言えない辺り、ホントケルト軍とかいうインチキ物量組織よ……

『そして、首都を射程圏に捉えた時が、本番だ——相手の軍を我々が抑え、その間に』
『今度こそ、私達で首を狩る。万全の体制だ』

まあ、そんなインチキ物量を相手にしても、全くこちらも見劣りしません。

実際、本来なら生き残ってなかったメンバー、ジェロニモさん、ビリー、ネロ陛下の三人は無事ですし、更に改良され尽くした東部アメリカの戦力を、更に戦時用に編成などを直したトップレベル仕上りのアメリカ軍で戦えます。なんとという頼もしい事、これがF G Oアヴェンジャーズちゃんですか。

『——報告によると、藤丸君達も無事、ラーマの治療に成功して、此方に戻ってきているとの事だ。彼らが合流し次第、いよいよラストバトルだ!』

『……と言いたい所なのだが。流石に大攻勢を仕掛けるのだ。その為の準備が必要となって来る。反攻の準備が整うまで、未だなお続くケルトの攻勢を凌がねばならない』

とはいえ、そんな最強戦力も、準備が必要らしいです。その間、此方が目減りしない様にケルト側の戦力を凌がねばならない……らしいのですが。ちよつと待つてくたさい。藤丸君達はアルカトラズにいるんですけれども、その役目を負うのって……？

『と言う事で！ 我々も更に馬車馬の如く働こう！ 君はこれから、ケルトの前線を援護する為の遊撃隊として出撃してもらおう！』

です よ ね（震え声）

や、やつぱり俺ですかア〜!? 畜生、こつちの仕事多すぎんか!? いや、向こうも向こうで大変だとは思いますが……やる事が……やる事が多い……ええいせめて藤丸君達が戻ってきてからでも、あ、ダメですか。はい。

『そして、もう一つ……遊撃隊として各地を転々としてもらいながらも、君たちには更なる戦力を発掘してもらいたいのだ！』

『具体的にはサーヴァントだね。戦力的にはどれだけあっても足りない位だし、まだこの広いアメリカの中に、サーヴァントが召喚されている可能性もある以上は、それを見逃すわけにもいかないし』

追い打ちイッ!!（追加業務） どんどん攻め込んで来るケルトと戦いながら、更にサーヴァントを見つけると申すかこの白ライオン野郎に万能の天才……ええい、人理修復するのがこんなにブラック業務だとは……いや最初つからワンオペもいい所だったしそ

うだったか割と……！

と言う事で、東部アメリカを味方につけて尚、未だ我々に安寧の時は訪れず。次に向けて更なるお仕事を申し付けられました……戦力を探せ、だそうです。

うーん居るでしょうか、そんなバケモノ染みたケルトに対抗できそうなパワフルなサーヴァントなんて……と、次回へのフラグを立てたと事で今回はここまで。

まあケルト暗殺が行われていない辺りで、とあるサーヴァントが未だ登場していないのでその回収が主になるでしょうか。ただそのサーヴァントと万が一ぶつかる事に成ったら我がパーティ半壊しそうで怖いです……下手したら、一番の山場になるかもです……

第百二章・裏：逢瀬二人

掌の下……ベッドの感触、普通にふかふか。良し。

「あー……」

どさり、と背中からベッドに飛び込んで、天井を見上げる。

このアメリカに来てから、初めてじやないだろうか。こんなマトモなベッドに背を預けるのは……ずーと野宿、屋内だがベッド無し、つていうのを繰り返すクソローテだったからなあ。ベッドの上で蠢けば、ゴキゴキ体も鳴っている。

明日は久しぶりに泥のように眠れる……と思いたいが残念ながら、明日からは俺はアメリカ軍の攻勢準備が終わるまで戦線維持に向かひにやならん。まあ、良いベッドならいい睡眠もとれるし、起きるのに支障はなさそうだけでも。

まあ強いて問題があるとすれば……

「……」(チラッ)

「あの……なんででしょうか。酒？童子、様」

「んー？ 別にいい？」

「……」

……完全な個室でも。大人数での雑魚寝でもなく。チームごとの部屋になってしまった事くらいだろうか。うん。こういう分け方になったのは実は初めてである。

前者よりも後者よりも、なんとというか。微妙な気持ちになる。人理修復にクソみたくないやがらせ、ある程度過去と向き合ってみる……とか、いろいろしていた所為で自覚していなかったのだが。

こうして目の前にずらりと揃うと分かる。俺と契約してるサーヴァント、全員女性な上にとんでもねえ美人だ。いや誰も彼も美人さんだなあとかは、まあ今まではまんじりと理解してはいたのだが、それがどういう意味なのかをここで思い知る。

「……勘違いするやつ出てきそうだなあ……」

「……何をぶつくさ言ってる」

「いえなんでも」

儂げなお清楚お姉さんな式部さん。

色々デカイグラマラス女神のゴルゴーンさん。

色つぼさ全一な鬼娘、アサシン。

……自分中心のハーレムみたいだなあ、なんて。サーヴァントのマスターとして論外な勘違いを。俺じゃなかったらそれもいいかもしれない、とか思っただけでも仕方ないような環境だろう。

頭が痛くなってくる。特に一番最後。気も可笑しくなりそうだ……いや、頭を痛めるのは俺だけじゃないっぼいけども。

「うう……」

「んー、なんやらなあ。こんな素直に怯える反応久しぶりやねえ。やつぱりこういうのも悪ないわあ……ほれほれ」

「あつ、あのつ、爪で服の端を摘まむのは、あのつ」

平安京の住人。鬼への脅威を知ってる式部さんにとつては、アサシンの存在はまあそう簡単には受け入れがたいだろう。まあだからつて、信用できないと牙を剥くような事は、賢明な彼女はしていないのだが。

ここまで見てきて、特に問題はないように……見える。見えるけど、やつぱり式部さんが話しかけるのは、どっちかと言えばゴルゴンさんの方が多いいとか。

多分脅威としてはどっこいどっこいだが、それでも生前から知っているイメージってというのはそう簡単に覆せないのだろうとは思う。

さて。マスターとして、放っておくのは簡単だけでも。サーヴァント同士の連携が取れやすく出来るように仲を取り持つ——は、流石にお節介にせよ。最低限、連携が取りやすいように、ある程度は何かしないと。

「アサシン。その辺りにしておいてくれ。美女同士の絡みは、男にはちと目に毒だ」

「……そんな言うほど絡んでへんけど？」

「色々あんだよ……それに、俺も彼女に用向きがある。出来れば……二人きりで、な？」

……と言う事で、ちよつとした助け船と共に、美女をデートに誘う準備でもするでしょう。式部さんに視線を向けると……ちよつとだけ、キョトンとしながら俺を見ている。暫くすると、何かに気が付いたように、ちよつと頬を赤らめて、口元を押えて……いや何その表情？

ちらりと上を眺める。

排気ガスも夜の明かりも無く、良く見える満天の星空が、実にロマンチック。女性とのデートなら完璧なシチュエーションなのだが……残念ながら、隣を歩く彼女は人妻で宮仕えの貴ぶべきお方である。

前提から俺が誘えるようなお相手でも無いし、そんな俗っぽい事を、こんな綺麗な人に提案する事自体、気が引けるし。無いわなあ、と思いつつ。

「……それで、どうなさったのですか？」

「話すタイミングだと思ったただだよ……少し前の事を、さ」

ちらりと、今度は隣の彼女を見る。

普段結んでいる髪を下ろしているのはちよつと新鮮だ。つやつやの黒髪が、夜風に靡いて余りにも綺麗だ。そんなつもりなくても、見惚れてしまうのは雄の本能か。

なんでか知らないけど、俺が誘ったあたりで『あ、あのちよつとお待ちください』と言つて部屋を出ていつてから

そこから暫くしてから、ほこほこしつつ髪を下ろして戻つて来たのだ。

んで、初めの内はなんかもじもじと恥ずかしそうに俺について来ていたのだが……暫くすると、その態度も次第に鳴りを潜めていつて。今は、とても落ち着いた様子で。真剣な瞳を向けている

「それは……酒？童子様との？」

「それも……あるけど、まあそれだけじゃないというか」

……思い出す。そして、出来るだけ……冷静に。口を開く。

平安での強力な敵との激突。俺がアサシンとどういふ風に知り合つたのか……そして戦いの最中、アサシンに気づかされた事。ある種の覚悟を決められた事。

いや、これで式部さんの不安を払拭しきれとは思わない。けど。

生前の恐ろしい鬼と言うイメージから、少しでも視点を變えるきっかけくらいにはなれば、と……恩があり、信頼があり、共に戦える事については、嬉しい、と言うのとも

違うけど、まあ。悪くは思つてはいない、と言う事を。

「……アイツがいなけりや、多分、俺はこのカラダに流れる血との、向き合い方も分からなかつた。んで……過去に目を向ける気にも、なれなかつた」

見張り台を繋ぐ石造り通路、その欄干にもたれかかる様にして。割と長々と語つた。それを……式部さんは、後ろで、特に何か言う訳でもなく。静かに聞いてくれていた。

「……不思議、ですね」

「何が？」

「私が聞き及んでいた、鬼と言う者は……傍若無人で、人に仇なす邪悪なる怪物。都でも被害を受けた方は多く、そう言つた人達の話を聞いただけでも、私の背筋が冷えてしまふような……ですが。マスターの話を聞いていると……」

否定から、入る事は無かつた。不思議、と言う言葉は、零れだしたみたいだった。

不思議、というのは、間違つていないだろう。確かに、俺が見たアイツは……共に轡を並べて戦い。頼光が奪つた雷光に憤り。そして裏切つた後も、俺と真つ向からぶつかりあつた。何処か、人間臭いというか。

「良い奴ではないよ。警戒が必要じゃないつて訳でもない」

「……でも、警戒するのと同じくらい、貴方は信じている」

「ん。まあ、な。突飛に裏切る事もあるだろうけど……それが『今』ではない事だけは流

石に分かる。だったら、それで十分だ」

……僅かに空を見上げてから、くるりと振り返る。僅かに、不安そうな色は抜けない。まあ、それでも別に全てを疑ってかかってしまうようなところからは、抜け出したとは流石に思いたい。思えるだろうか。分からない。

これ以上は、言葉を尽くしても、変に不安をおおるだけかもしれない。ならちよつと話題を変える意味でも、ちよつと揶揄ってみようか。

「それに、アサシンのお陰で式部さんに心配かけなくても良くなったのは事実だし？」

「……えっ?」

俺の一言に、式部さんは一瞬小首をかしげてから……またちよつとだけ、頬を赤らめてしまう。

「……え、えつと……」

「俺がちよつとおかしくなつてた時……結構式部さん心配してくれていた、と思うんだけど。もしかして自惚れだったりする?」

「あ、いえいえ! あの、そうなのですが……」

「気づいてないと思つてた? いやー、結構顔に出てたし、あの状態でも案外わかりやすかつたぜ」

あああ……と、声にならない様な小さな鳴き声を漏らし、顔を包んで俯いてしまう式

部さん。うーん可愛らしい。彼女の的には、そんな余裕のない俺ですら分かりやすい位に表情に出てしまっていたのが、恥ずかしいのだろう……あれっ、なんかしやがみにまで移行したんだけど、どした？

「……か、可愛らしっ……なんてえ……」

「あ、心読んじやつた？ でも事実だし？」

「うう……っ」

式部さんの読心能力はこういう時にも暴発するのか。いやホント、生きにくそうだなあこの人……いや、まあ空気が切り替わるいいきっかけにはなったか。

「……まあでも、いくら可愛らしくても、またぞろあんな状態になって、あんたに心配かけるのも、流石に避けたい訳で……だからさ」

「……なんですか」

「いい加減、この血だけじゃなくて、昔にも向き直ってみようと思うんだ」

……ここで、そう口にしたのは。

目の前に、彼女がいるから。俺と同じ人間で。思いを綴る英霊の……式部さんが、いるから。彼女に……手伝ってもらいたいと、思ったからだ。

第百二章・裏：歪みを解くなら

「——今じゃなくても、この大仕事が終わってからでもイイって話なんだけどな」

俺が、自分の過去に向きあう、なんて物はまあ……本来であればこの人理修復の大仕事にはまるで関係ないのは間違いない。終わって平和になった後、自分探しと一緒にやっていてくれ、と俺自身も思う位だ。

「けど情けない話……向こうがこっちの過去に関して、揺さぶりかけてくれて、まあ割とあつさり、ああなつちまうとなあ……」

流石に、無視は出来なくなってくる。

「情けなくは、ないとは思いますが。過去を掘り返される、と言うのは、誰しも良い気持ちではないと思いますし」

「にしたって、今このタイミングでヘラるのはよろしくない」

……もしかしたらまたぞろ同じような手を取って、こっちの邪魔してくるかもしれないんだ。こちとらご丁寧な手順を踏んでまで一人で隔離された挙句にあんな真似をやられたのだ。二回、三回とやられないという保証は何処にもない訳だ。

一応、ある程度は区切りというか、立て直しというか……まあ、一回見て焼き付いた

所から、ここまで来たから。二回目は……それなりに、耐えられる自信は、ある。いや、正確に言うなら、前回の様にはならない、と言う事だけには自信を持てる、か。

とはいえ、もう一回やられて平静を保てるかってなると……んで、その状態で十全な指揮が取れるかとなると。いや、正直な話、キツイ。

「……それで判断ミスしようもんなら、被害が行くのは俺だけじゃない。かといって、自分で言うのもアレだが、無視できるような浅いもんじゃないし」

正直な話。

この前、一人で特異点に飛ばされた時は、相手の事故と、殆ど自分一人だったから、暴走気味に行っても特に他に迷惑をかける事は無かった。

ある意味、どれだけミスっても被害が行くのは『俺だけ』な訳だ。その事実が気が付いた時は、気が楽な事この上なかった。

だが……これからはそうはいかない。俺のミスは、全員の致命傷になりかねない。俺の精神的動揺は、俺の問題では済まされなくなってしまう。

「つまり……相手に過去を突かれ、動揺するというのは、その前に」

「自分の昔についての区切りを……ちゃんと答えを出して、何をされても笑い飛ばせるくらいになるのが、理想かね」

まああくまで理想ではあるが……少なくとも、吹っ切ったつもりで、結局ハッキリと

もしない今の現状を脱却しなければならぬ。少なくとも、何を見せられても、自分で納得して、暗雲を自力で振り払えるくらいの答えを出さなきゃ、まあキツイ。

「ですが、それなら先ずはロマニ様に……」

「いや、これはあくまで『昔の俺の問題』だからな。この旅で起きた問題なら、あの人に素直に預けたいんだが……藤丸についてもドクターは考えにやならんし。諸々の理由込みで、ドクターの手を借りずに解決するのが一番効率が良い」

カルデアは潤沢な物資と人材に恵まれてる訳じゃない。

ないない尽くしで、これ以上自分に何かしらのリソースを割かせるのも良くない。プロに任せないで自己判断とは何事かとお医者様には怒られるかもしれないが……非常に残念な事に、何もかもが足りないのだ。

結局プロに任せた方が早かった、と言うのは十分な時間とリソースがあれば言える事。プロの時間も何もかも、絶対的に限られているのなら、自己治療だって選択肢に入らなければ。

「と言う事で、式部さんに白羽の矢が立ちましたんでよろしく」

「あわわわわわわわわどうですかあつ!？」

うん。

そんな反応になるのも分かる。というか、寧ろいきなりこんな事頼まれて、困らない

訳がないし。でも……割と消去法で行くと貴女しかいないのよなあ。

「まあ、落ち着いて聞いて欲しいんだ。先ず思いつくのはダ・ヴィンチちゃん……なんだけど。良い人だけど、どっちかと言えば人の心の機微に詳しいかって言う……」

「……」

うん。式部さんも思わず黙り込む。と言う事で、それが答えて先ず一人。

んで、そこからは最早消化試合。藤丸、及び彼のチームのサーヴァントは、まあ藤丸のサポートに回って貰うのがいい。態々俺に回してもらうのは余りにも無理を言っているのは分かる。

では我がチームのサーヴァント二人は？

単純な戦力と考えれば、どんな人よりも間違はなく頼りになるお二人ではある。生中な精神攻撃なんざ屁でもないし、寧ろそんな舐めた真似をした奴を喰らい潰してくださいる頼もし過ぎて怖い位の人達だ。

けどまあ、相談してみた所で……

『——それで？ 貴様、私に何を求めているというのだ？』

『んー……悩むのも、ええんちゃう？ そう言う顔も乙やで？』

……反応は凡そ想像できてしまう。多分この場合に限って、この二人はカルデアに置いて最も頼りにならないだろうという確信が俺にはあった。

後はカルデアの職員の皆様がいるが……多分この現状で俺と同じかそれ以上にいっぱいいっぱいだと思う。寧ろ相談したらその人の精神的負担になりかねない。そんな酷い事は流石に出来ない。

「……と言う事で、式部さんしかおらんのです」

「ああああああ……」

床に手を突いて崩れ落ちる式部さん。そりやあまあ、余りにも無慈悲かつ分かりやすい結論過ぎてそうもなろうなあ……

「いやまあ、ただ消去法って訳でもないんだよ。式部さんでは、人の感情だとか精神性だとか、そう言うのに関しては、多分このカルデア内ではロマニに次ぐスペシャリストだと言つても過言では……」

「過言ですー!」

いやいや式部先生、そんなご謙遜を。

やっぱり、あの時代、アレだけの刺激的な小説を書くつてなると、色んな人に取材もしたでしょう。更に言えば、宮中内で色んな悲喜こもごも、愛憎劇をご覧になってきた事でしょう。

「若造の精神分析の一つや二つ、ねえ?」

「二つや二つじゃないです! 知っているからこそ、どれだけ人の心が複雑で、気軽に類

推してはいけないというのは身に染みておりますし……!」

「だったら丁寧にやってくれるでしょ。自分一人でやるよりは余程心強い……」

それに、ここで何もしないというのは、ある種戦犯になりかねない。自分の弱点を放置したままではいられない。夢見る少年ではいられない。見てるのは悪夢だけだ。

この弱点は、自分の最も深い部分に根付くもの。ある種、俺の原点になった記憶だ。コレが無ければ今の自分は存在しない。

……自分ですら、触れ難いモノ。

「……いや、俺一人じゃ、絶対に触れられない、っていうのが、正しいか。式部さんと一緒じゃなきゃ多分無理なんだよ」

ぼつり、と。零すように漏らした言葉を聞いてか。式部さんが顔を上げて、此方を見つめてくる。ちよつと恥ずかしくて、誤魔化すようにそつぽを向いた。

「私と?」

「うん。まあ……情けない話だけど。俺も、出来れば触れるのが嫌だたまらない、本当に怖い所でさ。一人だと、触れようと思うのすら、不安になって来る」

ああそうだ。結局の所、答えはそこに帰結する。

アレは、俺の明確な傷だ。深い所に出て、刻まれて、ねじれて、柱の一部となつて巻き込まれてしまった……厄介な歪み。もしもそこが開けば、俺自身、どうなるかも分

からない幼い頃のトラウマ。見せられて取り乱すしか出来なかったもの。

「誰かが傍にいてくれなきゃ、泣いて取り乱して、みつともなく逃げ出しかねない……だから、頼むなら、貴女に」

……特異点Fで、命を救われてからずっと一緒に駆け抜けてきた。

無茶をする時は、基本的に式部さんが傍にいて。最近、俺の事を叱ってくれるようになる位に打ち解けた。戦力的には別に、多分一番信頼しているのは、間違いなく式部さんだ。

最早、自分の家族は、人理修復の旅を終えても尚、この世界の何処にもいない。でも家族と同じくらい、背を預けられる人が、目の前にいる。

「……酷く情けない話だとは、自分でも思うけど……出来れば、助けてくれないか。式部さん……」

手を合わせ、深く頭を下げる。

何も彼女に対する利を示す事は出来ない。みつともなく、こうして助けると頼む事しか出来ない自分が、重ねて情けなくてたまらない。

受けてくれなくても不思議でも何でもない。その時は、最悪俺一人で苦しめばまあ、何とかなるだろう……そう成る時を想像し、歯を食いしばって、答えをじっくりと待つ。

「――」

……暫し後。

合わされた俺の両の掌を。柔らかな女性の掌が、優しく包み込んでくれた――

第百三章

前線に走る実況、はーじまーるよー

前回までで、拠点内でのキャラとの交流も進めておきました。と言う事で、やれる事は全部やりました。さあ、第五特異点内にて実質我らがホモ君チーム最大の山場がやつて参りました。

『ケルト側との決戦の為の準備が整うまで、前線を押し留めて欲しい』

……はい。以上、エジソン殿からのご依頼となります。

東部アメリカ合衆国の大反撃の為、いまし時間がかかるという事で。

その準備が整うまで、ケルト側の猛攻に耐えている最前線を支える遊撃隊として働きながら、ケルト側に対抗する為の更なる戦力を探すが、今回の我々に課せられたミツシヨンとなります。

前線を転々としつつ、ケルト兵たちを叩いて押し戻すのが主任務で、それを熟しつづどんどん先へと進んで行って、ついでにサーヴァントが見つかれば味方に付けていく、と。

やる事自体は何時ものカルデアでやってる事とは変わりませぬ。特異点修復RT

A 参加中の愚連隊みたいなもんです。

ええ、任務の内容自体は良いんですよ。

『それじゃ、張り切って行こうか。派手に暴れたら、もしかしたら目立って……サーヴァントが、向こうから近づいてきてくれるかもしれないよ?』

はい。出発前のダ・ヴィンチちゃんの台詞——皆さま、此方に注目してください。一行の旅立ちの前の、気さくな挨拶と言うか、そんな感じのアレだと思うじゃないですか。油断してはいけない、コレも一種のヒントなんですよね。

今回のミッションなんですが……ちよつとだけ、他のミッションと仕様が違うんですよ。

前線に辿り着いてからは、戦場から帰らない限りは基本的に何度でもケルト野郎が押し寄せてくる仕様になっています。

まあ、押し寄せてくる無限のケルト兵を押し留める……そんなノリですね。

一応、どれくらいの数の戦闘を熟すとかのノルマもありますので、それだけ熟して撤退するのもアリです。最悪、サーヴァントを見つけてこなくてもイベントは進行します。

逆に言う……：……どれだけ殴り倒そうが、幾らだつて叩き潰せる。すなわちは……：無限に経験値を稼げるんですよ。

第五章らしい、圧倒的な物量を相手取るミツシヨンと言えますが……実はこれ、ホモ君をかなり育成するチャンスでもあります。

確かに数は限りなく供給されますが、しかし一体一体の質がずば抜けて高いという訳でもない……体力が持つ限り、ホモ君で敵を討ち取り続けられれば、その分の経験値が入って来る、という。

それならいくらでもやれる、よーしマスター君、これからの厄介な特異点に向けてレベル上げ、ここで頑張っちゃうぞー……とばかり、調子こいて張り切って遊撃任務をこなしていくと……どうなるか。

『——よし、良い調子だ。この調子で次の増援もテンポよく撃破して行こう！』

と言う事で、流れるように攻め寄せるケルト野郎を流れるように叩き潰しておいたのが此方となります（覚悟完了） このように、元から設定されているノルマを超えてある一定の敵を撃破していくと……ダ・ヴィンチちゃんから通信が入って来ます。

なんだあ〜？ 頑張った俺達への労わりのお言葉と経験値のボーナス的な物をくれたりしてくれたりしちやいますう〜？（フラグ）

『これなら、大統王サマにもいい報告が——ん？ おや？ この反応は……っ!』

とか思ってたらいきなり顔が珍しいシリアス顔に変わりやがってくれました。

おやつ？ 雲行きが怪しいな？（震え声） これってご褒美とかの雰囲気とかそういう言

うんじゃねえな？（史上最速のフラグ回収）

『……ケルトの兵隊の反応以外にもう一つ、これは……いや、いやいや冗談じゃないぞこれは、なんだこの『疾さ』はっ!? 真っ直ぐにこつちに突っ込んで来てるっ、急いで警戒を——!』

うおっ?! 親方あ！ 空から紅い閃光が！

『——ふむ。最も『活きの良い』者にアタリを着けて来てみたが。成程、どうやら『当たり』を引けたようだな』

そして槍の上に乗ったドエロい全身タイツのおっぱい姉ちゃんが！（ド直球） 登場の仕方がコレもう桃白白だろ……とか言ってる場合じゃあねえ。これですよ。これが一定以上の敵を削り倒すと出て来ちゃうんです。

まあ、開発的にも、ここでガンガン稼がれたらたまったもんじゃないので、彼女を出して来たんでしょうけど……さて、この美人なチャンネー、当然ながら、ただの美人と言う訳でもありません。

『——サーヴァント……それに、なんだこのバカみたいな反応は。カルナに全然見劣りしないじゃないか……!』

『カルデアの一行だな。貴様らに話があつて参つた。のだが……』

当然、サーヴァント。しかも、どうやらダ・ヴィンチちゃん嗅ぎつけた所によると、と

んでもない化け物レベルのサーヴァントの模様です。

カルナさんレベルⅡサーヴァントの中でも上澄みも上澄みの最強クラス、ですからね。そんな人がまたぞろ現れたって……

『全く、何処にでも現れるものだ。ゆっくり話の一つも出来ん』

『『——っ!!!』』

そしてそんな彼女に続くようにしてケルトの皆様まで乗り込んできました。まさか貴様新たなるケルト軍の将か!?! とかなりそうな場面ですが、しかしながら、画面いっぱい埋め尽くすケルトの皆様とて——

『——ふんっ』

どうやら彼女の盛り上げ役以外にはなれないようだ。

手にした槍を横に一閃! それだけでケルトの皆様が纏めてドサリ、です。一応はケルトの勇士の筈なのですが、今までで一番雑に始末された感があります。

しかしながら……決して彼らが弱小と言う訳ではありません。寧ろ、目の前の彼女が強すぎるのです。

『……一撃、とは』

『そう驚くな。大したことはしておらん。この程度の兇戯であれば、西の狂王とて容易に熟すであろうよ——クー・フリーン。奴は私の弟子であるからな』

『西の狂王の、師匠……まさか!』

と言う事で、強いのも当然。今回の特異点においてのラスボスと目される、ケルト軍団の親玉クー・フリーン。そんな彼を育てたのが、ケルト神話に置いて『影の国』と呼ばれる修羅共の巢窟を収める剛き女王であり。

『スカサハ、という』

目の前の彼女こそが、そのスカサハなのですから。

と言う事で、敵の親玉がクー・フリーンなら、ソイツを倒せるだけの奴を呼べばいいだろルオ!?と言わんばかりに、瀕死の抑止力君が呼び寄せたのが、彼女です。

FGOでも結構な古参の皆様にとっては、永遠のおっぱいタイツ師匠にして今でも全然通じる火力モンスターとしても印象深い彼女。初登場時からの圧倒的な人気は何処までも健在、水着に追加霊衣に、彼女が主催するイベントまで用意されるという。

ストーリーでの初出はこの第五章で、ケルトの英霊ながら、そのサーヴァントとして成立する過程の特殊さから聖杯の支配に囚われず、強力な味方としてケルト陣営撃破の為に力を貸してくれました。

『……ここに来て、あの弟子の無様を見て何もしない、と言う訳にもいなくてな。奴の目論見を、この時代諸共『ご破算』に追い込む事も考えた。が、そこでお主たちが健気に頑張っているのが見えてな』

と言う事で、今回も彼女にお力添えを頂けるのか——

『少し、試してみる気になった』

と思っていたのかあ？（旧版）

どうして槍を構えているのかは……皆さん、分かりますよね？ いやもう最初に活きの良いとか言ってたあたりで、察しの良い方は何となく勘づいていたかもしれないが、要するに『力を見せてくれりゃ、手を貸しちやるが？』と言う感じでバトルになるのです。

色々複雑な事情があるのですが……まあ、そこは置いておいても、兎も角ここで戦う事になるのは確か。

『力を見せろ——あの狂王に届き得るか、見てやろうではないか』

何と傲慢なのだろうか。自分が我々を瞬殺できるとでも思っているのだろうか——はいそうです。マジで瞬殺イケますこの人。

実はこの師匠は、先ずご本人のレベルが今までの敵の連中と違います。

それこそ、道中のボスなのにラスボスと同レベルで攻撃が痛い上に、高頻度でスキルを回して来るので、まあここまでで戦力が整っていたとしても普通に負けるくらいには強い。

加えて、此方のマスター狙いを平然とやって来ますし、マスターを固めれば即座に

サーヴァントを削りに来るといふ、臨機応変な戦いも出来ます。

……そして、何よりも。

『神塵しの槍——目に焼き付けると良い』

スカサハ師匠のプレイアブルキャラとして最大の特徴は、とりわけ神性に対する絶対的な特攻能力。

さて、翻って我がパーティを見てみましょうか……式部さんは兎も角として、えー、女神が一人と、神性持ちの鬼っ子が一人、ですね。

……もう一度言しましょう。

この特異点、ホモ君のパーティにとって最大の山場は、ここです。

第百三章・裏：『師』の参戦

「……………こんなになるまで……………戦う必要、あつたんか？」

疲労困憊のまま、地面に腰を下ろす……………背後で膨らむ、とんでもない殺気から目を背けつつ。辛うじて、アサシンと式部さんが抑えてくれているが、下手な説明されたら割と鱗とかに傷とかちやんとついているゴルゴンさんとかの不満が爆発しかねない。

その辺りは……………目の前の、紅い槍を構えたサーヴァントにかかっている。

端麗な顔に僅かな微笑みを浮かべ——小枝でも扱うかのように、余りにも容易く、くると槍を回して。人を超えた域の女武者は口を開いた。

「当然。儂が単独で動いた方が良いか、それとも、お主らに力を貸した方が効率が良いかを試すには、コレが一番。手加減しての馴れ合いで、実力が確かめられる訳でもなからう？」

……………実に、シンプルで、分かりやすい理屈だ。

力を貸す、貸さない、と言うその判断基準を戦って決める。

いや。戦うまでもなく、力を合わせて戦った方が効率いいに決まってるだろう、一体何言ってるんだこの人……………と、普通なら考えるだろう。

だがサーヴァントになる様な『英霊』は、そんな常識が通用しない場合もある。足を引つ張る相手と歩調を合わせるくらいなら、自分一人で行動した方が上手くいく場合も幾らだつてある。

ましてや目の前の彼女は、その中でもとびつきの超人。下手に誰かとするむより一人の方がよっぽど気軽に動けて、強い……それも当たり前か、何せ彼女は、あの、クー・フリーンの師匠なのだから。

「まあそれに、実力も良く分からねえ相手が力を貸す、と言ったとしても、それは良かったならば力を貸してくれ……と、お主たち、なるか？ 特に後ろの娘は」

「…………いやあ…………」

…………と言うのを実感したのは、今、俺達が必死にやり合った後だからなので。

確かに、あの時声をかけてきて、彼女がケルト側だと知れていたら……どんな反応をしていたかは、まあ、うん。

普段なら、まあ別に誰が味方になろうが関係ない、邪魔さえしなければ、的なドライな感じなのがゴルゴーンさんだ。

しかしながら、ここ最近はと言えば……ケルト、ケルト、ケルト。兎も角前線に押し寄せるケルトの敵を殴り倒しまくり。数ばかり多い奴らをプチプチと叩き潰す地道な作業を繰り返していた……かなり気が立っていたと思う。

冷静な判断、出来ただろうか……うーむ。

「とまあ、些か乱暴な手を使ったのは否めんが、此方は実力を示した。其方の实力を見る事も出来た。お互いに組む利点を示しただけの事。」

「……成程な」

理由は分かった。こつちと不和が起きないように、思い切ったやり方をしたのも。ちやんとした理由があったというのも。

……んで。

俺は納得出来た。これだけの力を持った英霊が力を貸してくれるのであれば心強い。いや、向こうが矛を引いて、敵意がない事を示してくれた時点で、まあそこまでこう、不満があった訳でもないし。

最大の問題はと言えば……

「多分、その理由じゃ後ろのお嬢さんは納得しませんね」

「左様か」

「うん。つて事で……後で、あの、千切れた脚とか治療して貰えたら。ありがたいっすわスカサハさん。今からちよつと……死地に入るんで」

背後のゴルゴーンさんは、絶対に納得してくれない事が、確定した事くらいだろうか。

「……あげ、あげあげ……っ」

「ふん」

えー……暫しゴルゴーンさんの髪の毛の皆様に玩具にされながら必死に説得する事で、漸く彼女もおさまりが付いた模様です。ここまで積み上げてきた絆が無かつたら多分餌になつてた気がする。というか、俺ちやんと四肢体についてる？ 大丈夫？ 頬に感じる地面の硬さと、全身の痛みしか感じないんだけど。

「……私が言うのも何だが、お主とサーヴァントの関係はどうなっている？」
「い、いつもこんなだよ……あででっ……」

基本的に、こっちは力を貸してもらっている立場なのだから、マスターとか偉そうな肩書がついていても要するに彼女達が現世に居座る為の楔役に過ぎない。寧ろ扱いはこんなもんでも良いのだ。うん。

……取り敢えず、突っ伏した状態から、何とか体を起こす。

全身ぼろ雑巾見たくなつてる。痛い。辛い……ふら付いた所で、式部さんがそつと体を支えてくれた。ありがたい。うん。別にゴルゴーンさんが俺達の普通つて訳でもないし。式部さんはずつとこうやって俺の事気遣つてくれる優しい人だし。

「大丈夫ですか、マスター」

「うん……大丈夫。ありがとうな、式部さん」

「ボロボロやねえ。此処とか、痛い？」

「痛いから突くな。勘弁してくれ」

……そしてアサシンは楽しそうに俺の体を突いてる。うん。良いんだよ。こうやって色々なサーヴァントとの交流の形がある、で。

式部さんに礼を一つ言ってから、改めてしっかりと立ち直し……ダ・ヴィンチちゃんに通信を入れる。ケルトをそれなりに叩けたし、結構な戦力も引き入れる事が出来た。個人的に大ダメージも負ってるし、ここが引き時だろうと判断した。

……ゴルゴーンさんは、未だ不機嫌ではあるが。彼女も含めてサーヴァントの皆も撤退には賛成してくれたようだ。これで、大手を振って帰れる。

あのクー・フリーンの師匠を味方に引き入れた、なんて。これは大戦果だなあ、なんて内心ちよつとほくそえんで……こちらを見つめるスカサハの紅い瞳と目があつた。

「……まあ、良好な関係を築いている、と思う事しておくか」

「……なんか言ったか？」

「いいや、何も……それより、ほれ。傷を見せて見る。儂にも一応責任はあるからな。要

望通り、治療してやろうではないか」

「えっ？ マジで？」

彼女は、じーつと此方を見つめてから……そう口を開いた。治療をしてくれる、というその言葉に、ちよつと驚いてしまう。

さつきのは冗談のつもりだったんだが。アレだけ戦えるのに、それだけじゃなくて治療も出来るのか。その多芸ぶりに、素直に感心してしまうと同時に、とてもありがたい。

礼を言おうと、口を開こうとした——その一瞬、一步スカサハは此方に踏み込んで来る。驚いた所で、ぴとりと、額に彼女の指先が触れる。閉じた口の代わりに、彼女の口が再び開く。

「——それに、その体では、上手く扱えんであろう？」

「……………」

「厄介な物を背負ってるな、お主」

……一瞬、ちらりと周りを見た。

さつきの戦いの中で、下手に突つかかかって頭に血でも登ろうものなら、そこからあつさり切り崩されかねない。その危険から、一切『血』を目覚めさせてはいなかった。

なんだかんだ言つて、あの状態になるとブレーキが緩まってしまうのは自覚しているし……そこをスカサハに突かれそうな勢いではあつたから。

であれば、三人の中の誰かがその事を口にしたのを聞いたのか、と思った、が。マスタアの俺と違い、別にそういう要らんことを無駄に言わない、思慮深い頼もしい人達である事を思い返して、即座にその可能性を切り捨てた。

「……良く分かるもんだ。見せてもいないってのに」

「隠しても『そう言う匂い』は分かるものだ」

「獣じゃねえんだから」

……尋常の嗅覚じゃ測り切れないだろう。絶対。

戦いに、治療、そして俺みたいな奴を嗅ぎ分けるだけの知識まで。本当に多芸だ。底知れなさ、と言う一点だけで言うのであれば……あのカルナ以上に恐ろしい。

だが、彼女が力を貸してくれる、と言うのであれば。その恐ろしさは、心強さにそっくり変わる。現金ではあるが。

「くくつ、手を貸す一環として、助言の一つでもいるか？ そう言った類の事も、ある程度なら経験はあるが」

「——いや、それは大丈夫。間に合ってる」

とはいえ、そっち方面で頼る事はしないが。

ジェロニモさんにも言われたから……なのかどうかは分からないが。あの日に式部さんに割と素直に打ち明ける事が出来て。その後、ちゃんと時間を取って、話をしよう

と言う事になつてゐる。

早ければ、この特異点の中でも、少しずつ。話をしようと思つていた所だ。

割とはつきりと断ると、スカサハは少し目を見開いてから……にやり、と笑つた。

「付き合ひ方は心得ている、と言う訳か。成程、小僧に見えてしつかりしている」

「ま、精神は兎も角、体の傷の治療は是非ともお願いしたい。今も、これからも。アメリカ側とケルトとの大戦、結構激しい事になりそうだからな。傷を癒してくれる人は何人いても困らん——これから、宜しく」

「……加えて、私を衛生兵扱いか。くくつ、中々に豪胆なマスターではないか」

此方から差し出す手に、彼女はその笑顔のままに応じてくれる。認められた、かどうかは微妙な所だが。まあ、そこそこの信頼は得た、と言つてもいいだろう。

尚、スカサハさんに治療して貰えばまだやれる、と言う事がバレてしまつた結果、憂さ晴らしとばかりゴルゴーンさんに更なるケルト狩りに連れ回される事が確定したのはご愛敬である。

第百三章・裏：『師』からの言葉

アメリカ側の拠点の一つ。俺達に割り振られたテントの中。

テントの左右に配置された小さなマットの上、正座した式部さんと……マットの上に乗って動けない、クツソ情けないマスターが、視線だけを合わせている。

式部さんの視線は、とても真つすぐ、真つすぐ……俺を、心配してくれているのが良く分かる。潤んだ彼女の瞳を見つめ返していると、なんだか色んな悲しみを超えて、悟りを開けそうな気すらして来てしまった。

「……と言う事で……」

「あ、いえ。寧ろ今日は休んでください。ゴルゴーン様にとんでもない勢いで連れ回されてたのは、私も見てましたから……それを見て『しっかりしてください』等とは言えませんから……」

「ホント意気込んでおいてこのザマでごめんなさい……」

はい。と言う事で、第一回『自分の過去を見つめ直してみようの会』は、開催前に終了する結果となった。アメリカの広大な大地を、怒り心頭の女神様と駆けずり回って全身疲労困憊。もう喋る気力すら湧いてこない有様である。

明日を御休みにする訳にもいかない。ケルト側に大攻勢をかけるには、全員揃って動くのが大前提であり。だからこそ、じっくりと準備を整える為の時間を稼ぐ為に自分達が派遣されたのだ。

んで、その時間稼ぎで時間取られ過ぎて大攻勢に間に合わないとか本末転倒極まって天地反転まである。いやまあ、ゴルゴーンさんとカルナの衝突とか、ここでの戦いはマジで天地がひっくり返る位のとんでもない戦ばかりではあるんだが……それは兎も角。「……ここが一番いいタイミングだと思ったんだがなあ」

ごろん、とマットの上で寝返りを打つ。頭の上で僅かに揺れる、モスグリーンカラーのテントの天幕が目に入る。

それこそ。大きな攻勢のタイミングで、何かしら仕掛けられたら困る。だからこそ僅かにも、暇な時間があるここは絶好の機会だと思っていたのだが……

「戻ってから、時間あると思う？」

「……どうなんでしょうか。エジソン様達も、急ピッチで準備を進めるとおっしゃっていたので、到着した時には準備が終わっているという可能性も、十分にあるかと」

「……そうかあ、そうだよなあ」

……この野営地についてから、ダ・ヴィンチちゃんからの通信が入った。どうやら藤丸達も、無事にアメリカ軍本拠地までたどり着けたらしい。アメリカ軍の準備も着々と

進んでいるという話で。

色々忙しくなることも想像できる……最悪、カルデアに帰ってからって事になっても不思議じゃないだろう。

「そうなたらなつたで仕方ない、か……良し。切り替えて行こう」

ダメになつた事を何時までも引きずつても仕方ない……今は、それよりも優先するべき事がある、と言う事だ。

「そうですね。今日は早めに寝るのがお仕事、くらいの気持ちで参りましょう」

「贅沢なお仕事だなあ……」

この疲れを、明日以降に始まるだろう大攻勢に持ち込むわけにはいかない。時間がな以上は、体調を万全にしておくのが、マスターとして大切なお仕事だろう。

「……そう、思ってたんだけどなあ」

どうして私はこうして、テントから這い出して夜空を眺めておるのでしようか……結論を申せば、一度目を閉じて、意識が落ちた後だというのに、バツチリと目が覚めてしまった事が原因かと思われます。はい。

疲れすぎると、意外と眠れないという奴なのか。それとも、闘争に次ぐ闘争で、未だ脳味噌の中心が大興奮しているというのか……

ちらり、とテントの中を見る。

式部さんは、かなりぐつすり。サーヴァントに睡眠は必要ない、等と言う前提知識なんざ吹き飛びそうな位、可愛い寝顔をしていた。

やっぱり、生前そういう『無茶』をした事のない人なら、普通に寝た方が調子も良くなるんだろう。

「と言う事で、夜更かしするのは俺だけ……」

少し歩いて、気持ちが悪く落ち着けば自然と眠くなってくるだろう、と言う事で。

僅かに、橙色の光が差し込む夜闇の中を、一步一步、ゆったりと歩いていく。

まばらに生える雑草を揺らしながら吹くそよ風の中、ちらりと差す光を負って、そちらに顔を向ける。見張りの兵士さんが二人程、ぽつぽつと何事かを話しているのが見えた。

その内の一人が気が付いて、此方に手を振ってくれたのに、手を振って返した。

「……あんまり遠くまではいけないしなあ。となりや綺麗な星でも見て暇潰す位か、出来るって言ったなら——」

「——であれば、私と一つ話でもせんか？」

「つつつ?!」

「そうしてから下ろした手が、再び天へと向かって伸び上がる位にはめっちゃ驚いた。……いや、これは、仕方ない。背後に音もなく近寄られた挙句、いきなり声をかけられたならそりやあこうもなる。どきどきと、静まるどころか余計に高鳴ってしまった鼓動と覚めてしまった眠気に、若干ながら、イラつとしつつ……背後を振り向いた。

「……折角寝ようと思つて歩いてたのに、おどかす奴があるかよ」

「別におどかさうというつもりは無かった。まあ、生前から気配を消して動くのは癖になつていた故な、そこは許せ」

焚火の輝きで照らし出された俺の影の中に、滲み出すように——スカサハは、立っている。まあ別に、当然のように立っている事自体はそこまで不思議な事でもない。俺が起きた気配くらいならば、彼女であれば当然のように感知出来るだろうし。何処にいても手取るように分かるだろうから、こっそりと接近するくらいは訳もないだろう。だが、そんな事をする、と言うのをそもそも考えなかつたから驚いている。別に俺が起きて、外を散歩するくらい、そう咎めるような事でもない。野営地の外を出歩いていく訳でもなく、夜の番をしているであろう兵士達から見える位置にもいた。

「それに、一つ話つて……」

「何、安心しろ。そうして訝しんでいる通り、雑談でも楽しもうという訳ではない」

「……安心は出来ねえなあ」

……例えば、不意な遭遇で、ちよつとした雑談、なら話も分かる。

だが、彼女が雑談の一つでもしたいから、態々夜の暗がりに紛れて不意打ち気味に声をかけるか？つてなると……

会話が出来ない、しない、必要ない、とかそう言うタイプの人ではない事は、間違いないのだが。しかし、分かりやすく戦士肌の人でもある。話を楽しむよりは、武器を合わせて愉しむのがお好みの人なんじゃないか。

であれば……と思うのはごく自然の事だ。実際、的中したし。

「言っておくが、『コレ』の事だったら、何度でも遠慮させてもらうが」

と言う事で、先に一手。何時も角が生える辺りにとんとん、と指を置いて勘弁してく強調しておく。俺にかのケルトの大英傑の気を引く部分があるとすれば、これくらいしかないだろうし。

「何、そう言うな。別にあれこれと『指導』してやろう、と言う訳ではない」

「いやこの事ではあるんかい」

「ああ。少し、気になった所があつてな——」

「お主、どこぞの神性と所縁でもあるのか？」

……だがしかし。

彼女が口にしたのは、何というか……思いもよらない様な言葉だった。

「……………ええ？ えっ？ ど……………え？」

「私は、これでもそこそこの数の神性を狩ってきたからな。あやつらについて、ある程度は知見もある。そして……………うつすらと、だがな。感じるのだよ、貴様の内から」

視線が合う。何の冗談かと頭を傾げる。此方を真っすぐ見てる。瞳を見返す。ジーつと見つめられる。目と目が合つて見つめ合つて……………全然逸らさないなコレ。こんな真摯に見られると、嘘を言っている様に思えないというか。

……………でも、えーつと……………神性？

「……………心当たりないけど」

「そうか。ふむ……………であれば、その事は留意しておくといい。自分の知らぬモノが内に潜んでいることほど、恐ろしい事も無からうて」

そう言つてスカサハは笑う。いや、笑われても困るんだが……………えっ？ あの、いきなりそんな怖い事言われましても……………ええ？

これが、何の根拠もない言葉であれば、別に気にする必要もないんだろうけど……………目の前の存在そのものが根拠と言うか。英霊つて存在するだけで言葉の全部が信用マツクスみたいな存在だし。

「ふふふ、まあ信じるも信じないも、お主次第だ。頼れるカウンセラーの言葉だけ信じた

いのであれば、それも良からうて」

そう言うだけ言つて、赤紫の髪を翻し、スカサハは夜闇へと消えていく。

……武人肌なのは間違いはない。人の嫌がる事を進んでやる、とかいうロクでもないタイプつていう訳でもないのは間違いはない……そして。それらを踏まえて、分かった、と言うか確信できた事がある。

「……それを言われて気にしないでいられるのは、只のバカと思うんだけど」

こうなるのを分かつて言つてるであろうあのケルトの女武人様、絶対イイ性格してる。

第四百章

無事ボロボロにされた実況、はーじまーるよー

神性っていうのは良いコトばかりではない……気をつけなはれや!!

因みにボロボロになった後に師匠にちゃんと治療して貰えました。

んで、それでツシヤオラアツッ! もうちよい稼ぐかあ! とばかり再び出撃した所、調子乗り過ぎてホモ君は再度ボロ雑巾となり、結局は撤退する事になりました……皆は、プレイヤーキヤラの体力を大切に……生きようね!

まあ経験値も結構稼げたので、取り敢えずは良しとしておきましょう。

さて、大きな戦果を挙げての凱旋、ミッションが終わればこれでエジソンおじさんの大攻勢準備も終わりを迎えているでしょう、そうなれば次はいよいよ最終決戦へとなだれ込んでいくでしょう。

さあ如何でしょうか! エジソンおじさまはどれくらい万全に戦力を整えてくれているでしょうか! ただいまデンバー!

『おお! 良く帰って来た! 強力なサーヴァントを味方に付けたことも聞いたよ!』

ご苦労様! 此方の準備ももう直ぐ整う! いやあ、久しぶりの真つ当な労働の汗は心

地が良いなあ諸君！』

『……』

『……』

ああっ!? 帰って早々ジェロニモさんとロビンが死にそんな顔に!? しわしわ〇カチウウみたいなことになってる! し、しかしその代わりにエジソンおじさんがすごい元気だ! 心なしかライオンの鬣が良くなっている気すらする!

『……』めんなさい。久しぶりに誰かの為に頑張って仕事してたからか、技術屋としての血が騒いじやったらしくて。そ、その分準備も急ピッチで進んでるから、安心して『……』成程。その急ピッチの作業の犠牲になったのが、他のサーヴァントの皆様と。レジスタンスの野郎共は当然ながら、戦闘員として無類に強くとも、こまい作業は意外と苦手なカルナさんまで、なんか披露しきったような顔してます。

しかし、それでもなおレディースの皆様は特になんか疲れた様子じゃないのが、エジソンの妙な紳士的部分を示している気がしますね。まあ、それは兎も角として。

『うむ。万全を期したとしても、明日の明朝にはいつでも出発できる準備が整うだろうと思われる。故に……後は、『どのように動くか』と言う事になるな』

戦力が整ったなら、続いては作戦。この戦力をどのように相手にぶつけるか、と言う事になって来ます。

『——さて、よくぞ集まってくれた諸君』

全員集結。

本来だと、レジスタンスを構成していたサーヴァントのメンバーはクー・フリーンの暗殺に失敗してしまい、大分数を減らしているのですが……しかし、此度は我々の選択により、その全てが生存。大統領エジソンの前にずらりと集まっています。壮観ですねえ。

アレ？ 全員つて言ってるのに、どうしてシータちゃんはここに居ないんです？ それはね、そのルートに進むにはそれ専用の構築が必要で、このマスター脳筋構築では助けられないからだよ……ラーマ君が万全になっただけありがたいと思いましょ……『遂にカルデアのマスター二人もここに戻り、我々の戦力も整いつつある——いよいよケルト側との最終決戦だ』

『今から、当日どんな感じで動いてもらうかを皆に伝えるから、しっかり聞いていてね』
悲しい思い出は見えないふりをしておいて、と……その全員が参加しての、決戦前、最後の作戦会議、開催です。

『先ず前提として、これから始まるのは、『神話』としてこの大地に刻まれるような大戦になるわ。細かい作戦を弄した所で効果があるかが疑問になってしまう程の、ね』

『故に、此方が取る作戦も実にシンプルなものになる。すなわちは……無限に増える敵

勢を押しつけ、如何に君たちをワシントンまで送り届けるか』

まあ、作戦自体はそう成りますわよね。

敵が無限に増える以上、それら全部を討ち果たす事は出来ない。であれば……最精銳の戦力で、相手の首を狩る。アメリカ軍に協力を求める為に、その首脳をボコそうと決まった時の方針と基本は変わりませぬ。

『手勢は二つに分けるつもりだ。すなわち、愚直に攻め寄せて罠を買う『大隊』と、その際に最速でワシントンへと進軍する『本隊』の二つだ。我々の本命は、ほぼサーヴァントのみで構成された精鋭部隊による首狩り戦術にある』

『その恐ろしさは、食らった私達が一番分かっている。何より、罠になる大きな方は何も考えずに暴ればいいから、作戦もクソもないのがシンプルでやりやすくて良くってよ！』

いやあ、食らわせた張本人からそう言うて貰えると照れますなあ……でもエレナおばあちゃんかクソもないとかいうのは解釈違いです（過激派）
……んで。当然ながら。

『当然、本隊には僕たち、カルデアのメンバーが入る。ケルト側の最大戦力であるサーヴァント、及び、介入が予想される魔神柱への対処に関して、一番僕たちが経験があるからね。それに、聖杯を回収する役目もあるからね』

『となると……私と先輩は、マストメンバー、と言う事になりますね、ドクター』
『そうだ』

先ずは首狩りメンバーに、藤丸君、及びマシユちゃんが選定されました。同時に、彼の麾下にあるサーヴァント達も、ここに所属する事となります。んでもって、これに、ここ最近一緒に行動していたラーマとナイチンゲールを加えて……要するにアメリカ藤丸チームは確定、と言う事になります。

『これに、ロビンフッド、ジェロニモ、ビリー・ザ・キッド、及びエリザベート嬢の四人のサーヴァントと、少数精鋭の機械化兵団を加え、敵本陣を叩く『本隊』とする』

はいはい成程。相当数のサーヴァントを投入した贅沢な首狩り部隊ですねえ……それで？ 何となく嫌な予感がするんですが、ホモ君はどうするんです？

『そして……その本隊に出来るだけ目を向けさせないためにも、敵戦力を引き受ける大隊側には、この私、大統領トーマス・アルバ・エジソン、自らが総大将として出る！ それに加えて——』

『——此方には、君が付いてもらう。カルデアのマスターっていう戦力の要と弱点がこつちで指揮を取ってるとなったら、向こうも困役と分かかっていても無視は出来ない筈だ』

何時 も の。

うん、まあそりゃあマスターが二人いたら戦力分けて運用した方が効率いいもんね、仕方ないね……こうなったら出撃前にめっちゃ藤丸君と交流してやるから覚悟しておけよこの野郎……！

はい、不満を言っても始まりませんし……因みにレジスタンスの皆が倒されてしまっている本来の時空だと、人員の問題から藤丸君と一緒に首狩り戦術部隊に組み込まれる事になるので別れたのは自業自得って奴ですね！（苦笑い）

『まあ、藤丸君よりはやる事シンプルだから、難しく考える必要はないから楽だと思おうじゃないか！ この天才のサポートもあるし！ 厄介なのは無限に増える敵だけさ☆』
いやそれが一番辛くないですかねえ……（真理）

はい、と言う事でカルデアのマスターホモ君、立派に囹役を務める事となりました。可笑しい……人類最後のマスター様がやる仕事じゃねえ……（今更） やつぱり美味しい所は主人公きゅんが持つてくんですかね……

『——明日は、決戦だね』

その辺りどう思う藤丸君!!! 遊びに来たヨ!!! うーん、寝る前の黒インナー姿がセクシー……エロいつ！（正直） 普通にウゝス異本のサオ役に向いてるタイプだと思う（絶対的不敬罪）

と言う事で、全然この特異点で絡めてないので怒りの交流パートだ!! 彼と交流する

事で色々分岐するルートもあるので、絆、深めておきましょう（考え無し）

ウチさあ……：マスターやってんだけど……：（同族相哀れむ）

『——アメリカ軍改め、連合軍の諸君！ いよいよ準備が整った！』

はい。と言う事で藤丸君と熱い夜（意味深）した翌日となります。因みにこれが立香ちゃんになりますと、一気に絵面が宜しくない事になりますし、ジャンルが成否分かれるモブ主人公モノに変わりますので僕は基本藤丸君でプレイしてます。

それは兎も角……：アメリカ軍の皆さんの前で、エジソンおじさんが演説を始めております。そうです。いよいよ、明朝なんですすよ皆様……：居並んだアメリカ軍の皆様の士気を上げて、始まるのは……：

『これより、我々は東へ向けて進軍を開始する！ 最終目標は、我らが合衆国の首都、ワシントンD・C！ これを占拠するケルト軍を前例をもつて粉碎し……：私達の『アメリカ』を、この手に取り戻す！ 総員、奮起せよ！』

アメリカとケルトの戦争が始まって以来、最大の攻勢です。

第四百四章・裏：眠れぬ夜を

ちらりと、部屋の中を見回す。俺の部屋とも色々差異があり、そして寢床としては急ごしらえな印象である事が共通している辺り、このデンバーの城が『戦時用』に作られた物である事を意識させてくれる。

「こうやって話すのも、結構久しぶりな気がするなあ」

「お互い忙しかったしね……アメリカ軍と協力体制を敷けたって聞いた時はびっくりしたよ、ホントに」

「まあそこに関しては流れと勢いだよな」

「ここは、藤丸の部屋だ。俺の方から、尋ねた。今度こそ式部さんと話すタイミング……かと思ったのだが、しかしながら先ほど『極東の術師、オンミョウジの意見も聞きたいの』とエレナさんに連れていかれてしまった。

砦の中は、本当に忙しく、くるくると皆、働いている。俺達がこうして休んでいられるのは、ここまでに結構働いて『休むタイミングだろう』と言われたからで。先ほどまでは俺達も労働にいそんでいた。

「まあその分、お互いのサーヴァントをフルで働かせるレベルの事になってる訳だが。

まさか式部さんがアドバイザーとして連れて行かれるとはなあ」

「物理的なブースター以外にも、魔術的なブースターも使っらしいしね」

「あらゆる手段をつぎ込んでるって感じだな……巖窟王は？」

「夜の偵察。敵さん、結構な数の密偵を送り込んで来てるって。サーヴァントを一兵卒クラスの密偵相手へのカウンターに送るなんて、贅沢にも程があるってドクター笑ってた」

……んで、そんな僅かな一瞬の休息の間にも、両軍の小競り合いが終わっていない事に思わず苦笑いしてしまう。最終決戦直前らしい、何ともひりついた空気じゃないかと。

「……贅沢、って言えば。凄いサーヴァントを味方に引き入れたって」

「スカサハさんな。まあ贅沢の極みたいなものだよ。アレだけの怪物がこっちの最後のセーフティラインになってくれるってのは」

「大活躍じゃない、康友」

俺と藤丸、カルデアの二人のマスター以下、サーヴァント達も全員集結。アメリカ軍の機械化兵団はエジソンの狂氣的なまでの奮起とサーヴァントの皆の協力で、フルまでがつつり強化済み。新たなるサーヴァントを味方に引き入れ、質も量も万全。

そして……

「そつちこそ、俺達がこつちでアメリカ軍とわちやわちややつてる間にも、ケルトの将二人を討ち取つて帰るとは」

「いやあ、皆が頑張つてくれただけだから。巖窟王も、リレイも、マシユも……それに誰よりも……ラーマが、物凄い、頑張つてた」

「……そつか」

ついにラーマが十全な状態になって、帰つて来たのだ。最終決戦に、間に合った。

アルカトラズにて、どうやらラーマは無事に奥方と再会する事が出来た……らしい。藤丸から聞いただけだから、俺自身はその時の詳しい事は全然知らない。

ただ……望んだ形の再会ではなかった、と言う事と。

そして、望まなかった離別が訪れた、と言う事は、聞いた。

「……奥さんに、恥じるような戦いはしたくなかつたつて事かねえ」

「胸を張りたかつたつていうのもあると思うよ」

「ああ……そうか。そうだな。そうだろうな」

……そこで足を止めなかつた事を、素直に凄いと思う。と言うか、大切な半身を失つた後なら、止まつても、誰も責めない筈、だつてのに。

「そんな事されたら、どっかから見てくれてる奥方も、そりやあ嬉しいだろうな」

「うん。きつと、そうだね」

「……だから、今日も張り切ってたのかねえ」

「あー……ゴルゴーンさん、抑えるの大変そうだったね」

「ああ。理知的だけど、英雄が英雄していると『生意気』がどうしても抑えられないっぽいんだよなあ。まああの人の逸話考えるときやーないし、切っ掛け自体は向こう三人が悪いから、我慢させるのが申し訳なるんだけど」

デンバーに戻って来たラーマからは、そんな素振りなんて一切見られなかったし。寧ろ次回の攻勢に向けて、とんでもないやる気を見せていた。

昼間のカルナとの手合わせなんか、既に神話の大戦がはじまりそうな勢いのド派手なバトルで、兵士の皆は大盛り上がりだったし。

鍛えてやるという口実で始まったスカサハとの一戦は、目まぐるしい攻防の入れ替わりと一瞬の剣戟の音の甲高い切れ味鋭いサムライアクションと化していた。

因みにその三名の大暴れの余波を受けて、うろこが嫌と言う程に砂まみれになったゴルゴーンさんはキレた。んで、三人纏めてKOしそうな所を、また俺が止める羽目になったのだけでも。

兎も角。そう言った色んな余波が広がるくらいには……ラーマはやる気だ。

それに触発されて、エジソンも、その麾下のアメリカ兵たちも物凄いやる気で鼻息荒く、あのロビンフッドですら、一言もしやべらず、真剣な眼で、徹底的に弓の整備を行

う熱血集中ぶりだ。

「……一度、負けてるっていうのもあるのかもしれない」

「クー・フリーンか」

「うん……明日の決戦は、最後は俺達が彼を討ち取れるかにかかっている。その役割を任されたから。以前負けた時のリベンジで」

「流石英雄。そう言う所は血の気は多いわなあ」

天井を仰ぐ。

ラーマが。エジソンが。俺達の仲間のサーヴァントの皆も。この特異点に喚ばれたサーヴァントの皆も。此方の陣営が皆、一丸となつて。決戦の準備が整いつつある。

コレをぶつければ、まあ苦勞せず勝てるんじゃないやねえか……なんて。

油断を出来ないのが、特異点と言う場所だ。

何が起きるか、分かったもんじやない。

狂王、クー・フリーンはそんなラーマが一度敗れた相手。スカサハ曰く『自分でも正面からでは殺し切れない化け物』と太鼓判を押す程で……そんな王の傍に侍る女王、メイヴっていうのがどれだけのモノなのかも未知数だ。

向こう側に残っている将で判明しているのは、アルカトラズを守っていたっていうベオウルフ一人だが……それこそ、クー・フリーンに匹敵するレベルのとんでもない強さ

のサーヴァントが、急に現れたって不思議じゃない。

かつて、俺が経験したローマの激戦の時は——最後の最後に、レフが凄まじい破壊の体現者を召喚して見せた。そんなちやぶ台返しだって、幾らでもあり得る。

「一番キツイのが『そっち』だっていう自覚もあるんだろ。自分の恩人達が、共にそんな修羅場に殴り込む……今度こそ、理想王として恥ずかしくない活躍を見せるってな」

「あはは。キツイのはどっちも同じでしょうに」

「……いや、こっちは気楽なもんだぜ？ こっちは無限に湧く敵を出来る限り削ればいだけだ。RPGの作業みたいなもんだよ」

そう言った敵方の理不尽な『最後の切り札』を浴びせかけられる可能性が高いのは、藤丸の方でもある……のだが。

エジソンは、会議の時に、敢えて全員には話していなかったけど。会議の終わり際にある事を、俺に対して口にした。

『……例のサムライだが、未だに被害が納まっていない。寧ろ、その規模が広がっているという報告もある。かのサムライが戦場に殴り込んで来ようものなら、混乱は必至といつていいだろう。そして当然……狙われるのは、君だ』

……思わず、変な薄い笑いが漏れてしまった。

どっから刃が伸びてくるかも分からない。酷い戦場だ。囃役も、特攻役も、どっちも

普通に散りかねない。今までの特異点の戦いが、これ以下だったというしかない様な、規模と過激な戦いが、明日の決戦だ。

「……だからって、気を抜いたりはしないけど、な」

「うん。だね。それでどうする？ 人員、他に割いて欲しいとかある？」

「いんにゃ、これで完璧なんじゃねえの？」

んで、そんな事をどうして改めて確認しているのかって話だけでも。

いやまあ……本当にただの雑談をしているだけなのだ。俺ももちろん、藤丸も多分、そうだろうと思う。

「明日からは、ラーマとお前が、ワシントンに切り込むんだ。その間、俺達が精々敵を引き付けておいてやる。しっかりやれよ」

「……うん、そつちは任せるよ」

弱音を吐くだとか、意気込みを語るだとか、そんな事は出来なかった。

そう言う事が無い訳じゃない。だけど、そんな言葉を吐いて結果が変わる程、明日の戦場は甘くない。ちよつとした事を雑談代わりに、緊張の一つでも解せれば、明日は全力が出せるんじゃないかっていう。おまじない代わり。

……明日に向けて、やれる事をやる。

人類最後のマスター二人が。迫る明日の決戦に向けて。

休めと言われているのに。体を休めるどころか。何とも無様に、足掻いているのに、思わず、静かな笑いが漏れた。

「あとやれる事、なんかあったかな……」

休め、と言われて休めるなら簡単な事はない。

ああして話している時も、全力で『休もう』と気負っているのだ。俺達は。結局のところは、休むどころか変に緊張感深めて休むどころではなかった。

部屋に戻る気にもならず、何となく城砦の中を見て回っている。誰か、アサシンやゴルゴーンさん、カルデアのサーヴァントの一人と話せば……と思っていた所で。

「——ミスター、待ちなさい」

「それは無理な相談だ」

歩く視線の先。

深い緑のコートと、真っ赤な軍服が——視界に入った。

第四百四章・裏：眠れってんだよ！

……なんだろう。珍しい気がする。

「いい加減にしろ。俺は貴様の事を見ていた訳ではない……失礼する」

「いいえ、間違いなく此方を見ていました。何か用があるのであれば、誤魔化さずに直接伝えなさい。それに以前、私の事を別の名前で呼んでいた一件についても詳しく聞きたい事があります」

藤丸と話している時、というか誰と話している時も、基本はあの不敵な態度を崩した事のない巖窟王が……明らかに、焦ってる。と言うか、困ってる。

……いやそもそも、相手が目の据わったナイチンゲールさんともなれば、まあ仕方ないという話ではあるのだけれども。勢いに押されて、対応も難しいのだろうか。

主にラーマを看護する為に彼を背負って行動していた所為か、藤丸と一緒に動いていたから、『婦長凄かった』という藤丸の言葉にどうにも実感を持たなかったのだが……：：：：：頂面か意味深に笑うのが常みたいなああの伯爵に、あんな顔をさせると……

「……そんな覚えはないが」

「記憶分野に問題がありますね。やはり診療が必要です」

「……アレはちよつとした言い間違えだ。その程度も許容できんのか」

「そうとは見えない様な言い方であつた故です。患者の口調や態度から、内面を察するのも医に携わる者として必要な事なので、その程度は分かれます」

「ええい、半端に理性的なバーサーカーは、これだから始末の悪い……い」

うーん、あんまりな言い方だとは思うが……しかし、実際あの調子でガンガン詰められると考えると、気持ちは分からんでもない。なんていうか、優しく微笑むでもなく只管真顔で詰めて来てるんだよね。ナイチンゲールさん。実際こわい。

さて、どうあれを振り切る巖窟王……まあ、俺はどう足掻いても助けられんが頑張つてくれ。

「……そもそも、貴様の事を俺よりも必要としている輩は幾らでもいるだろう。其方に行くべきではないか——その禿げた小僧だとかな！」

「——はっ？」

そう思つて、踵を返そうとした、その時の事。

高らかに響いた男の声に、表情が引きつった。

今、信じられないなすり付けをされたような気がして思わず振り返る。

いやまさか、そんな人類史に残る英雄サマが、自分にとつてのピンチを一般人のいたいけな少年に擦り付けて逃走しようだとか、そんな情けない事をする訳が——

「——見つけました」

「いぎやあああああつ?!」 あの根暗アヴェンジャあああああつ?!」

しやがつてた。白い髪の鋼鉄の看護婦さんが、何時の間にやらポークハットの伊達男の所から、俺の目の前まで前進して来ていた。

間に合うか、後ずさりからくりと片足を軸にして最小限の動きでターン、明日への逃走の姿勢へと体を——

がしり

「逃げてはいけません」

「はい……」

無理だった。文字通り、一瞬で捕まった。サーヴァントにヒトは敵うワケなかった。人間というモノのよわよわ加減について、自覚というものが足りなかつたらしい。そのまま廊下をズルズルと引きずられていってしまふ。ああ、兵士の皆に『なんだコイツ』的な眼で見られてしまうのが恥ずかしい……

取り敢えず目を閉じて、全ての情報を遮断しつつ、取り敢えず笑顔を浮かべておく。笑顔と言うのはさざ波のたつた心を鎮めてくれる……

と言う事で無言で引きずられる事、暫く。

「……あの……えっと、何の御用でしようか……」

真つ白な医療ルームに放り込まれて。二人で椅子に座って、対面で膝付き合わせて向き合っていた。完全にどうでもいいけど俺の黒スーツ風の礼装にガチガチの軍服の婦長が一緒だと、完全にどっかの国の闇医者とマフィア風味だな……

まあそれはいい。問題は、めっちゃ雑に擦り付けられたりしたとはいえ、あの巖窟王の口ぶりからして、どうにも婦長さんは俺に明確な御用があるらしく……というか、そうじゃないと幾らなんだって婦長さんもあの場から俺に擦り付けられたりはしないだろう。

と言う事で、真つすぐに向き合って、その辺り。

口にすれば……すぱっと、簡潔に、言葉は返って来た。

「休みなさい」

「はえっ？」

「休みなさい」

……言葉の意味が理解できなかった訳じゃないんだが。余りにもシンプル過ぎた一言に一発で思考が飛んでしまって……思わず、ぽかんと口を開けたまま、その後の言葉が続かなくなかった。

「休みなさい。貴方が今一番するべき事はそこです」

「あつ、えつ、いやちよつと……よ、要件ってそれだけ？」

「それだけとは何ですか」

あつ、余計な事言つた。めつちや顔が近くてコワイ。美人つて、顔近づけて真顔で凄むだけでこんな怖いんだね。俺初めて実感した気がする。

その赤い目で睨みつけながら、ナイチンゲールさんはさらに口を開く。

「私にとつては万物よりも優先するべき事柄です。睡眠不足による体調不良等と、あらゆる悪徳などよりも私はそれだけを嫌悪します」

「そ、そりゃあ……」

「もし寝付けない等の症状があるのであれば、私にその理由を明確に示しなさい。あらゆる手を尽くし、貴方が安心休めるように対処します」

……これは参つた。

明日の戦いに向けて、実際先ほどまで眠れなくて……それで、外に出て来てしまつたのは確かだ。藤丸から聞いている彼女の性格的に、ここまで過激な反応をするのも不思議ではない気がする。

しかしながら、休めるような努力と言われましても、と言う話だ。そもそも、どうして眠れないか、なんて分かる訳もないし……

「いや、アレだから。ちよつと疲れたら自然と——」

「いけません。はつきりと症例を示し、それに対処するのが基本です。そもそもこの時

間に起きているだけでも十分な重症だというのに」

「重症で、ただ眠れないだけだよ、うん」

「いいえ。睡眠不足は心の病か、体の病か、いずれにせよ可能性のある厄介な症状です」
ダメだ。やっぱり話を通じない。流石はバーサーカーと言うべきか……俺じゃなくともつと他の、危ない症状の人とかいるんじゃないだろうか。普通に兵士さんとかの中に。そう言う人達を診察した方がいいんじゃないだろうか。

なんて、そう思っていると——余計に、彼女の視線の『庄』が強まった気がした。

「——私は、看護婦です。従軍した時に、多くの患者を診てきました。その中でも、最も厄介な顔の患者とそっくりの色を、今、見ました」

「や、厄介？」

「『私より先に』『先ずは他の人に』『助からないから別の人に』……彼らは口々にそう言つて、『善意』から私の手を取って、他の患者の元へと導こうとしました」

ギクリ、と。頭の中で、物理的な音が鳴った気がした。凄い。そう言う事を口にしたりだとか、なんなら素振りとか態度とかにも出していないつもりだったのが。

「ふざけないでください。何様のつもりですか。貴方達は、私が助けるべき人達だったのです。それなのに、自分から治療を拒むなどと」

「い、いやいやいや」

「貴方達の仕事は、何よりも『万全』になる事。不健康ならば、どのような事情も無視し自分が健常になる事を優先なさい。不健康な時に無理をして、更なる不健康を呼び込もうものなら本末転倒だと思わないのですか」

ぐいぐい、と目の前に乗り出す婦長さんの圧力に、完全に気圧されている。口を差し挟む事も出来ない。流石に、正論。寧ろ医療従事者として、余りにも完璧な言葉だ。患者の仕事と言うのは、何よりも先ず、健康になる事だと……

……あらゆる事情を無視して、か。

「……無視して、良いもんですか」

「当然です」

オウム返しの様な俺の問いに。

彼女は、当たり前のように頷いた。それが当然だと、強く言い切った。

……もしこれが、ある程度知り合つて仲良くなつた人の言葉なら、『気を遣つてくれるんだらうなあ』と思つていたかもしれない。けど。

この人と俺は……実は、この特異点内で、一番関わる事が少なかった。彼女とサシで話すのは、これが初めてだったりもする。

実に『フラット』な言葉だ、と素直に思う。

「……あの、なんか書くための紙とか、無いですか」

「症状を書き出したいのですね、分かりました」

……俺の要求に、婦長は躊躇う事も無く、白い紙とペンを探し始める。

その様子を見ながら、ふと思う。

割けるリソースは限られてる。故に、ドクターの負担を減らしたい、と思っているのは、本当の事だ。けれど。

相談してみるくらいは、良いんじゃないか。余裕がないと言われれば、改めて、自分で解決する方向にもっていけばいいんじゃないか。

そんな思いが、ふつと頭をよぎった――

断章：神話大戦の前夜、ワシントンにて

「——ああもう！ エジソンの奴……ホントに、ここぞとばかりに好き勝手やってくれちゃって！」

かつかつ、と踵によって奏でられる苛立ちの旋律を、彼は無感情に聞いていた。先ほどの斥候からの報告が、いよいよ女王の余裕というモノを奪い去つたらしい。

報告自体は、シンプルなものだった。そもそも、聖杯の力で生み出されたまがい物の戦士故に、単純な仕事しか出来ない。そこから、敵方の状況を的確に読み取った上で、感情が逆立っている。目の前の女王が出来る故にそれが裏目に出ている。

この女王が無能なのであれば、少なくとも自分はコノートとの戦い、彼女の首を刈り取つてそれでいつも通りに勝っていたのだから、目の前の女の癩癩はある種、想定通りの事とも言えた。

「うるせえぞ、メイヴ」

「だってクーちゃん！ 向こうに時間稼がれちゃって……その間で、向こうの兵隊の改良が大分進んでるのよ！ こうなると面倒だから物量で押し切ろうと思つてたのに……！」

「戦争なんざそんなもんだ。自分の思う通りに行くことの方が少ない……まあ、エジソンの野郎の『技術屋』としての実力を侮ってたのは、確かだがな」

想定外だったのは、大統領としての諸々を投げ捨てたエジソンの、化け物染みた最高出力か。『普及』と『既存の製品の改良』で、世界で未だ語り継がれる英傑だけはあるか。……万が一も無かった」

それは、メイヴ自身が、一番自覚しているのだろう。噛みしめた口の端から——僅かに鮮血が零れているのを、狂王は見逃していない。

「でも、向こうの勢いを考えると、『万が一』が出て来ちやったのは、間違いない。それが、それが一番悔しい……っ！ この私と、クーちゃんが揃ってるっていうのに、そんな僅かな隙を、作り出されたっていうのが！」

愛用している鞭を、最早へし折れるのではないかと言う程に力任せに曲げたその姿からは、『自分の不甲斐なさ』への怒りが滲み出している。

有能故に、実に、実にプライドの高い女だ。気づいて、そして怒り狂っている。自分と言う『理想』を手に入れたからこそ、喜んで、舞い上がって、そして増長した。自分達であれば、容易に勝てる、と。

「——あの、ムカつく女戦士は何処にいるの」

……故に。

向こうにとってはここからが、地獄だろう、と。酷く冷静に分析していた。

「分からない？ 探さない。必ず、向こうが仕掛けてくる前に……あのいけ好かないインテリ野郎との窓口になるのは、あの女しかないの」

今までは、彼女は夢を見ていた。

自分の理想の王、愛した男と共に戦える、そんな第二の生に置いて、理想の夢を。

だがそこに、いきなり冷や水を浴びせかけられた。原因は、自分の失態。ここまで揃えば最早……火が付かない理由がないだろう。

自分が、『死ぬほど』に苦しめられたコノートの女王が。間違いなく、はつきりと目覚めたのだと、『柄にもなく』少し恐ろしく思う。蜂蜜の様に甘く、しかしながら、敵対する相手には毒の如く容赦なく悪辣に殺す、あの女王が。

「良いのか？ そりが合わねえとか言ってただろうが」

「そうだけどね。こんな『無様な負け方』するよりはマシ。負けるにしろ勝つにしろ、いざって時には、見苦しくても全力尽くすのは、イイ女の基本よクーちゃん」

そして……思わず、口の端に。

久しぶりに、寧猛な笑みが零れだす。

「はっ——こうなってるから、一番乗り気になれるようなザマだ。悪くねえ」

「……こんな余裕のない姿、ホントは見せたくなかったんだけど。まあ、クーちゃんなら

そっちの方が好みよね。知ってた」

玉座から立ち上がる自分を見て、メイヴは苦笑する。

皮肉な話だ。彼女が、自分が、彼女の理想のままに振舞っていた時は、そこまで気合を入れるつもりもなかった。敵を只管に処理して食い荒らすつもりもなかった。

だがその理想をかなぐり捨てようとしている、今こそ……自分の槍が、この体になった時からの、一番の冴えを見せるだろうという、自覚がある。

「だから私色に染めたかったのに……ま、でもそんなクーちゃんも好きだけど」

「だったら普通に召喚しろ」

「や。だって普通に召喚したら……クーちゃんとべたべた出来ないし？」

「別に今もそこまでしてねえだろうが」

——鬭争だ。

冷徹、冷酷、狂った王となったこの肉体に、始めて熱を灯す様な……そんな、戦いが始まろうとしている。がちやり、と。獣の如き有様となった足を、踵を鳴らす。

浮かれている。自覚はある。とはいえ、こんな狂った霊基で、楽しめる事と言えば数も少ない。楽しみにしても、仕方あるまい。

『——お二人とも、仲が宜しい事で』

……そんな熱の中に、差し込まれる冷ややかな温度。

ちらり、とメイヴが声のする方を見る。

玉座の傍らに……黒い『孔』が広がっている。

声はそこからしていた。闘争の場とは無縁な、酷く穏やかな音色……聞いている此方の肌が栗立つような、『薄っぺら』な皮を被った声だ。

「……あんた、どうして」

『この玉座の会話は、逐一聞かせて貰っていますから。今、交渉役のリンボが手を離せない以上、私自ら売り込みをせねばなりませんのでね』

「最低。品性の欠片も無いわね、アンタ」

『これはこれは、申し訳ありません。されども、今はその辺りを言い争っている場合でもないかと——ご入用で?』

メイヴの顔が明確に顰められる。この女は、割と男をえり好みはするが、しかし一度はキツチリと見定める事をする好事家でもある。そんな女が、初めて声を聴いた時点で、明確に一線を引いた態度を取っている。

一番いけ好かないタイプのインテリだ、と。

「……あんたの所の影法師の兵隊、それと……カゲキヨって言う剣士、貸しなさい」

『景清を、ですか……分かりました。彼女には、狙いをアメリカ側一点に絞るように伝えておきましょう……彼女の扱い方は、御存じですね?』

「ええ。んで、兵隊は……あるだけ」

『——ほう、ほうほうほう。それはそれは……ありがたい事です』

別に、自分もこの声の主が嫌いかと言えば、特に好き嫌いはない。そう言った方向への起伏が低くなるように作られてはいる。だがしかし……ここまで『信用が置けない』タイプの声は、初めてだとは思う。

胡散臭い、だとか。ろくでなしだとか。悪辣だとか。人が嫌悪する様なモノを感じ取る訳ではない。寧ろ、一見して酷く真つ当にすら見えもする。実際、誰かを騙して得を積極に得ようとするようなロクデナシではないだろう。

……だが、全員を騙さず、誠実に仕事した——と振舞っている陰で、ヘドロの如き濁り水を、毒薬に練り上げるような類の輩ではある。

『頼って頂けるのは誠にありがたい事……お任せください、お気に召すままの兵をお渡ししたいしましょう』

「さっさとしなさいよ」

『はい——それでは。直ぐに景清も向かわせますので……』

……孔が閉じる。

はあ、と。盛大にため息が一つ。

疲れた、と言わんばかりに。メイヴは、玉座のひじ掛けに腰を下ろした。近くでより

はつきり見えるようになった眉間の皺は、今まで一番しつかりと寄っている。戦の準備とはいえ、相前に精神を削ったか。

「ほんつと、アイツは好きになれないわ」

「——お気持ちは分かります」

「あら？」

……そんな男の声に取って代わって響く、第三者の声。

視線を目の前にやれば。黒い肌に、白い衣服を纏った男が一人、此方に向けて、歩いて来ているのが見える。

「アレは、『人』であろうと『虫』であろうと、ある種平等に見ている……正直、意外でした。あの男に、貴女が頼るとは思ってもいなかった」

「頼りたくはないわよ。でも次は、本気の決戦。流石に手抜きは、ね」

「——決戦、ですか」

がちやり、と。男が構えた弓が、僅かに音を鳴らす。

先ほどまでの時に居なくてよかった、と思う。冷静に見えて、意外と激情家なのがこの男だ。孔の先の男とは相性最悪で、もし『因縁』の一つでも弄られたなら、爆発しかねないだろう……向こうが親切だと思つた事で、コレの感情が弾けようものなら、抑えるのが面倒この上ない。

「では、あの男も、当然前線に、出てくるでしょうね」

「その時はアンタに任せるわよ。アメリカ側の切り札、きっちり抑え込んで見せなさい」
メイヴの言葉に、男はこくり、と頷いてみせる。

アメリカ側が戦力を整えたように。此方にも未だ見せていない切り札はある。

波立たない筈の感情が、激しくなるであろう闘争に向けて高鳴るのが分かる。自分は
つくづくクー・フリーンなのだ、他人事のように自覚した。

第百五章

神話大戦——開始、な実況はーじまーるよー

『——進軍開始だ諸君！ 後の事など考えるな、全身全霊を賭して戦えば良い！ この戦いが終わった後を考える必要はない！ 何せ勝つにしろ負けるにしろ、決着が付けば、すべてお終いなのだ！』

エジソン大統領の号令の下、アメリカ及びレジスタンス連合軍進軍開始です。

真っ白な体毛が太陽に眩いエジソン殿の演説を、彼の乗った演説台の下から中継中のこちら、我らプレイヤーホモ君は、『大隊』所属でございます。

いやあ、非情に周りの機械化兵士の皆様の熱量が凄まじいです。折角なので私もウオオオオオオオ！ ケルトの髭モジヤ共の髭を狩れえええええ!! (毛狩り隊)

『進軍開始だ。全員を気を引き締めて敵へ向かえ』

『カルナの言う通り！ やる気を出すのは良いけど、焦らない事！ 事を急いで余計に被害増やしたら本末転倒だからね！』

アツハイ(神速の鎮静化)

クールダウンした所で、さて現状、我々大隊チームですが、敢えて大きく開けてどこ

からでも奇襲しやすいような、そんな広い荒野をのんびり行軍中です。

ワシントンに向けて急げって？ いやむしろ急がなくていいんですよ、この無防備な進軍に向こうが引つ掛かってくれれば万々歳なので。

我々囹部隊の役割は勝つ事ではなく、じっくりと時間をかけて相手を泥沼の戦いに引きずり込み、向こうに援軍を出来るだけ送り込まれないようにするのが目的。敵がいくら無限に敵を送り込むにしろ、それだって出来るだけ引き付けきや……（必死）

因みにアメリカ側の将、ホモ君のお仲間のサーヴアント以外でこちらに合流しているのは、ネロ陛下だけです。まあ現状のアメリカ合衆国の、実質的な支配者だしこつちでええやろ（適当）

大隊を指揮するのは、アメリカ合衆国の首脳ばかり。即ち、こつちが壊滅するとアメリカ合衆国の崩壊がその時点で確定いたします。はえーハイリスクな戦力分散だア……

『この大隊は作戦の要である。故の一点集中ではあるんだが……しかしながら余りにもオールインと言うかかないなコレは！ はっはっはっ！』

『ハイリスクハイリターンの勝負は人の上に立つ者のたしなみである！ しかしここまでのオールインは余もやった事はないがな！ リスクがハイどころか青天井である！』
『成程！ つまりリターンも天井知らずか！』

『おお、賢いな大統領！』

どっちも馬鹿だよ!!! (激ギレ)

一体どんな超理論の比翼連理なんですかねえ……まあ、実際この戦場を突破できれば全部解決するのは間違いないですけども。

まあこれくらいバカみたいな困使った方が敵を引き寄せるといふのは否定しかねますけれども……それにしたってリスク掛け過ぎでは？

……まあ勝てばいいか!! (脳筋墮ち) リスクとかそう言うものは俺達が全部粉碎すればノーリスクだし。よし、勝つか!! (思考停止)

『そこ！ 徹夜明けの死んだ脳味噌で反射的な話しない！ 敵、来てるわよ！』

『おお来たか！ であれば！ うむ！ 余達は、勝つ！』

『殺？』

『勝つ！ (思考停止)』

『勝つ！ (即断即決)』

お二人も真理に迫り着いたみたいですし！ 此方に行軍してくるケルト連中を殴り倒して終わりっ！ 平定！（乱の終わり） やっぱ脳味噌じゃなくて脊髄で会話するのが一番なんですから（脳筋の鏡）

と言う事で、我らいよいよ、ケルトの敵勢と接敵セリ、です！ アメリカ軍の戦列歩

兵の強化型ガトリングが、地平から攻めてくるとんでもない数のむさいおっさん達を薙ぎ払っていきます。

うーん、見かけ上はモロ現地人をなぎ倒す悪のアメリカ軍なんですけど……しかしながらやってる事はどっちかと言えば無限に押し寄せる人外の敵をなぎ倒す架空戦記物的な感じなんですけれどもね？

『——第一陣、サーヴァントの姿は無し。一切の呵責なく、一気呵成に薙ぎ払う』
はい、と言う事で先ずはカルナさんをゲストとして敵の第一陣を迎撃します。

後は我々のゴルゴーンさん、酒？ちゃん、式部さんの三連全体宝具が全てを押し並べて流しますのでそれで終わりっ！ 髭のおっさんを打ち払うだけの簡単なお仕事でした。

『——はいはい、油断しちゃダメ、次来るわよ！』

続いてはエレナママをお味方として第二陣を迎撃……なんですけど、全体宝具四人がかりの四連続波状攻撃は文字通り、敵にとつては余りにも過剰戦力らしく、どんどん敵が溶けていきます。因みにホモ君へ入る経験値の量は減ります。当然ながら。悲しみ。

まあ経験値諸々の事以外に関しては、実に順調極まりありません。進軍は破竹の勢いで。あれえ？ このままいったら藤丸君達がクー・フリーンを討ち取る前にケルト軍殲滅できちゃうんじゃないですかあ？（菌茎）

『ここまでは順調ではあるな』

『うむ。サーヴァントとも遭遇していない……まさか、此方に余り戦力を回していないのか奴らは……?』

それじゃダメだつて言ってるんだルオオ!? (自己猛省) いかん、破竹の勢いつて事は
 困としての役割全然果たせてないつて事じゃんヤバイヤバイ……早くサーヴァント見
 つけて泥沼の戦いに引きずり込まなきゃ……!

『——いいえ。それでもありません』

サーヴァントいるじゃない! (歓喜)

髭モジヤの進撃する兵士たちの中から、此方に向けて進み出る褐色白服の青年……霧
 困気が圧倒的に違う、これは幹部の風格……!

『何奴だ』

『今はケルトの将……アルジュナと言います』

——とうとう来ました。ケルト側においては、恐らくはこの特異点において一、二を
 争う最高戦力……!

『ネロ様! 我々の機銃掃射、あの男に一切届いていません! あの強さは——』

『——サーヴァント。それも、油断しかねる強い戦士である事に間違いはあるまいよ』

そして、アルジュナ、と言う男が現われた途端に、此方からも進み出でる一人のサー

ヴァント、あり。これは強敵が現われたが故に、前線に現れたのか——いいえ、そうではありません。

彼が出てくるなら、カルナが相手をする。そう言う関係なのです。彼らは。

『——居たか。居るな。そこに。カルナ』

『ああ、俺は今、ここに……俺としては、貴様がなぜ『其方』に付くのが、理解し兼ねるが。矜持すら捨てたか、アルジュナ』

『それほどまでに……お前との決着を、望んでいるという事だ』

かつて、カルナとアルジュナとは、神話の中で激突し……そして、勝負の綾を決める天秤はアルジュナに傾きました。しかし、明らかにアルジュナ鼻屑というかないこの勝負に彼は、未だ納得がいつておらず……まあその辺りの詳しい事は置いておくとして。

兎も角、彼はカルナさんとの決着を求めて、ケルト側に与して現れたという事です。その実力は……カルナさんと互角。文字通り、神話級の強さを誇る弓兵です。

FGOの性能で言うとは、何というか、何でもできてしまうが故に、若干器用貧乏感が否めないのですが……それでも尚、高性能と言う言葉が似合うアーチャー。尖った部分はないですが、その万能故に、王道の真つ向勝負なら普通に厄介な持久力と火力を持っています。シンプルな強敵ですね。

『なんと……敵方の戦力は、ケルトの勇士ばかりではなかったのか……!!』

『奥の手、つていう奴でしょ！ 幸い、アイツはカルナに釘付けみたいだし、『仕事』は出来ていると考えましょう!』

『——う、うむ！ そうだな……!』

しかし……かかつたなアホがツ!!

お前が大隊側に来た時点で、こつちの作戦は成功しているのだよ……大物がこつちに来れば来るほど、藤丸君の作戦成功率は高まるというわけだあ……! シナリオ的にもプレイ的にも大勝利、と言う事で、カルナさんには思う存分宿敵との決着を——

『——逃がさん!!』

ああん!? (恐怖)

だ、誰だつ! カルナさんとアルジュナの宿命の争いガン無視してこつちに切りかかって来るアホは!

『逃がしはせんぞ……カルデアのマスター、ここで貴様の首を取るつ!』

あつ、アヴェンジャーだ! (震え声)

か、景清ちゃん……このタイミングで乱入してきます!? いやまあ、このままサーヴァント殲滅してるだけで済むわけが無いっていうのは分かかってましたけど……ここまでプレイヤー単騎を殺そうとする敵もいないでしょうに……! —

ケルトとアメリカの大戦。いよいよもって混迷を極めて行っています……！

第百五章・裏：荒ぶる戦場の中で

「――下がれ下がれ！ 無理すんな！ いくら強化したからって、アイツら相手は分が悪いぞー！ こっちかエジソン、エレナさんの方向に回せ！ 後、皇帝陛下に置かれましてはもう少し一緒にお下がりいただければ！」

「むっ!? 余は駄目なのか!？」

「突出し過ぎなんだよ！ ベール切られてんぞ花嫁！」

「むむむっ!？」

混乱、渾沌、混乱。正しく乱戦極まりない戦場の中で、針の隙間を縫うようにして白い花嫁に近寄って来た不埒な黒い影法師の罅をぶん殴って、吹っ飛ばす。

「うーむ。確かに突き出し過ぎておるか……すまぬなカルデアのマスター！」

「いいさ、ここは引き受けるから問題も無く撤退しなさいな！」

……その一瞬の隙間を塗って、ネロ陛下は撤退していく。此方の用事のついでに回収できて良かった。しかしながら……

咄嗟の拳がクリーンヒットした結果、天を仰いで倒れ伏してるシャドウサーヴァントを見てみると、なんだか……複雑な気分になって来る。

自分、なんでこんな乱戦の中、的確に相手のアゴを捉えて殴り飛ばせてしまっただろうかと。一応、昔は適当に当たればいいかなくらいに気持ちで拳を振っていた覚えがあるんだけど。こんな狙いを付けられるように……

「戦乱の味、覚えちゃったなあ……」

「しみじみしてる暇、あるん？」

——とか思ってたなら、目の前に銀一閃。すぱんと突っ込んで来ていたシャドウサーヴァントの首が飛んだ。ぱちくりと瞬き一つ、ちらりと傍らを見つめれば、アサシンが立っている。片手には……ぼとん、と落ちてきた黒い首一つが。

「油断しとつたらあかんよ？ よそ見しとつたら、こうやって首がぽおんと、なっつてしまっやもしれへんからねえ」

「あっはい」

せんらんのあじ、おぼえてませんでした。

いや、諫める為とは言えいきなり目の前で大剣ぶん回して首をぽーんと刎ね飛ばすのは些か以上にちよつと血なまぐさい味付け過ぎない……？

そう思いながら、雄叫びと槍を挙げて突っ込んで来たお髭のおじさんを明後日に向けて蹴っ飛ばす。よし、無事返品完了。

「はいはい、上手上手……んで、どないするん？ アレ」

「いやあ……脱出したいのは山々なんだけど……っ！」

視線が合った。ヤバイ。来る。

「アサシン手え貸してくれ離脱する！ ゴルゴーンさん！ 四時の方向に援護!!」

「はあい」

言い終わるか、言い終えないか……そのタイミングで、思い切り上に向けて引つ張られて、体が宙を舞う。アサシンの跳躍力、正しく化生のそれである。そして、その真下で。

突っ込んで来た敵に向けて、あらぬ方向から飛んで来た紫紺の光が収束し。

——二回、爆ぜた。

巻き込まれたのは、周辺に居たケルト、及びシャドウサーヴァントの一团と……アイツに切り倒されて倒れていた、アメリカ兵——の抜け殻の装甲。既に、中身は離脱済みだから大丈夫だけでも。離脱していなかったら、多分……

「ぎりぎり……間に合わなかったか！ っていうか、良く躲したなアレ！ 俺に突っ込んで来た所で他所からの援護だぞ！ 避けるな！」

「しやあないやん。アレも尋常のソレとちやうし？」

「分かっているつもりだったがなあ！」

……正直な話、態々敵の多い方向に突っ込んで来たのはこれが原因だ。相も変わらず

あの剣客、一点集中、こちらにゾツコンラブ、らしい。

俺と目が合ったらあらゆるものをなぎ倒しながら突っ込んで来る、あの猪武者も生温いレベルの弾丸武者の巻き添えをアメリカの皆様に喰わせるわけにはいかん、と思つて、敵方に来ている。のだが。

「……二回目のアレ、カルナとアルジュナか」

「せやねえ」

「向こうに突っ込んだ方が良かったかこりや？」

そう思った直後、再び上がる爆炎と——頭の上を掠める、緋色の弾丸。

先ほど、ゴルゴーンさんの援護射撃の着弾直前に、降つて湧いて来て、二重の爆発を引き起こした正体が——あれだ。二人が交わした魔力の弾丸？

否、彼らは最低限周りを巻き込まない様な射線の取り方くらいしてる。

アレはそれでもどうにもならない……いわば、ただの『余波』だ。

「つたく、互いの攻撃を弾いて、撃ち落として……その魔力の余波であれかよ」

「言うて、見た目派手なだけやで」

「分かつてる。ゴルゴーンさんの一発とは比べるのもおこがましいのは分かつてるが」

それでも尚、周りの兵士達を傷つけるのには十分すぎる威力があるのは間違いない。

……ちらりと視線を向ける彼方で、俺達以上に巻き添え出してそうなおインドサー

ヴァント達を見てると、こうして努力しているのがほぼ無意味みたいな感じになって、若干虚しくもなる。それ程の、苛烈な攻防。

「……それにしても……っ！ ああもう、まだ来るかよっ！」

「ええやん。遊び放題やで？」

「お前は戦いも楽しめるからいいけどな、アサシン……生憎、根っこは穏やかな現代っ子だよ俺は！ おいゴラっ、テメエも逃げんなっ！ 拳もつてけ！」

「……血の気の多い鬼っ子の間違いちゃう？」

……それはどこもかしこも同じことではあるが。

アルジュナ、カルナのインド組の爆炎巻き上げる衝突。アメリカ、ケルトの軍団士の、機関銃と槍での小競り合い。その中を縫うように……俺達と、女武者との衝突も千々に混ざり合う。考える事が……考える事が……多い……！

この場合、囃役というのが逆に宜しくない。俺達の役割は、此方に出来るだけ敵を引き付ける事であり、少なくとも、相手を後退させる様な戦い方は出来ない。

お陰でじっくり耐えて、真っ向から戦わなきゃいけない……こういう時に、敵の数が無限だというのは本当に地獄だ。倒しても倒しても湧いてくるとかいう、終わりの見えない耐久を、人はクソゲーと言うのである。

「……ま、そのクソゲー状態が、今の俺達にとっては理想なんだけどな……っど！」

とはいえ。決戦に向けて強化しまくったアメリカ軍総戦力をもってして、数の暴力で無理くり拮抗状況を作られている、というのは……正に此方の理想通り。この時間が長引けば長引く程に、敵戦力を引き付ける事が出来ている。

その分、『二つ』の別動隊は楽に動ける、と言う話だ。いくら無限に湧いていようと、湧いた傍から全部をこつちに引き付けちまえば、向こうの脅威にはなり得ない。

「——ダ・ヴィンチちゃん、藤丸の方はどうだ!」

『今の所、順調にワシントンに近づけてる。敵の襲撃も最小限だ』

「そいつは何より……周囲に、アイツら以外のサーヴァントの反応は」

『今のところない。スカサハも、仕事をしてくれていると信じよう』

……一つは、藤丸率いる『本隊』。もう一つは……たった一人。スカサハが、クー・フリーンの暗殺に向けて、動いている。

此方を試せるだけの、単騎での強さ……そこから導き出される、分かりやすい彼女の運用方法、それは——ソロによる単騎駆け。下手に大人数で行かせるよりも、一人だけでこつそりとワシントンまで隠密行し、一撃を見舞う。それが元も効果的だという結論に、エジソン率いる首脳陣と、スカサハの意見が一致した。

本隊と合わせて進行するサブプラン。しくじった時の保険にも、本隊が首尾よく事を運んでいる時の、ダメ押しにもなる『二の手』。ついでに道中の強敵くらいは始末してお

いてやろう、とカツコいいお言葉もいただいている。

『私がここに召喚された事は、奴もまだ気づいてはいまい……今こそが、奴の心臓を影よ
り抉り出す最大の機会よ』

……とても戦士の台詞ではない、と思つたが曰く、『古い戦士というのは、誰もこうい
うモノだ』とニヒルに笑つて返された。実に頼もしい。

「……頼むぜ。こつちもいつまでもは持たねえからな」

「別に何とでもなるやろ。こうやってずーつと、耐えてるのがアカンのとちやう？」

「いやそこを突つ込むな!!」

……ああ、うん。まあ、そうですよね。

ちらり、と背後に視線をやる。

藤丸も、スカサハも頑張つてる。こつちも……何らか、成果と言うか。諸々を上げな
いといけない。それぞれ、戦うべき相手とやり合つてるとなると……やつぱり、俺の担
当はずつとこつちを追いかけてる、あの武者になるかあ……!

第百五章・裏：鬼の牙と武者の太刀

……自分が、アサシンを引き連れて、こうやって敵の合間を縫って、何とも情けない有様で逃げてるのは……ただ、無駄に時間を稼ぐためでも。勿論、アイツに怯えて逃げている訳でもない。

明確な理由が、ある。

あの武者と戦ったのは、このアメリカでは、数えて二回だけ。サンプルにするには、数は少ないだろうが……今現状と合わせて考えると、確信できることがあつて……っ!?

「——アサシン!」

「見えとるよ。前に回ってるわ」

「悪い……ったく、何時の間に、ちよいちよい背後は確認してるっのに!」

これだ。

「——死ねえい!」

振り返った前方から、ざん、と。耳に嫌に残る音が。そして共に……ケルト兵を真つ二つに切り裂き、その返り血を吹き散らしながら、迫る銀色の軌道が——っ!

「……アサシンっ!」

「はあ、い」

礼装起動。

瞬間、アサシンがその一点、その銀閃に的確に割り込んで、刃と刃をかみ合わせた。一瞬の拮抗、その僅かな隙に合わせ、相手の刃をしゃらり、太刀の側面を滑らせて、つんのめつた敵の刀を、絡めとるようにして剣を振り上げて——諸共に襲撃者を弾き返して見せる。

手に舌獲物が大剣であるとは思えない、余りにも冴えた動き。絶技、といつてもいいだろう動きは、一応、礼装の援護があるとはいえ、余りにも冴え過ぎた返しだ。

「つぶねえ……っ！」

「おのれ……鬼の小娘、またしても……っ！」

「その台詞、隠してへん血の香り、消してから言つた方がええと思うよ。そないな香りなんて、うちの鼻に匂わへん訳もないしねえ」

地面に降り立ち、此方を睨みつけるのは……先ほどまで此方を追いかけていた女武者。何時の間にやら俺達の前に回り込んで『不意打ち』を仕掛けようとしていたのだ。

もう、これで何度目だろうか。目の前の彼女がこうして、『周りの敵、味方』に見事に紛れ、影から不意打ちを仕掛けてくるのは……スカサハの言っている事もまんざら嘘ではないのだろうか。

『古い戦士のやり方』、か……はっ」

思えば、二度の戦い……彼女が真つ向から勝負を仕掛けて来た事は、無かった。木々に紛れ、大将首を狙う戦術に、二回目の不意打ちと。事ここに至り、彼女の得手とする戦い方を、漸く理解出来てきた。

即ちは……単騎での、ゲリラ的戦術。

ある時は狭い木々の視界の悪さを利用してしようとし、ある時は別の敵と戦っている時に背後より強襲する。混乱の中で、一撃にて致命打を与えるやり方が、奴の真骨頂。

……それ即ちは。

「こういう乱戦なら、寧ろもって来いってなもんだろうな……」

無数の他の敵に紛れ、不意を打ちやすいこの乱戦は、奴にとって最高のホーム。

「逃げられると思うなよ……キサマ」

「逃げられるなんざ思っていないっていうの」

それこそ周りの敵兵やらなにやら全てが、俺にとつての障害物であり、奴にとつての隠れ蓑であり、そして……周りに兵士が居る限り、この戦場全て、奴にとつては不意打ちの狙える、キリングゾーンだ。

……厄介極まりない。理解は出来ている。だから、逃げ回っている。ここから逃がしてもらえるかは……微妙な所ではあるとは分かってて。

「……式部さんは……まだ、掛かるか」

それでも尚、逃げ続けている。

……やっぱり、アルジュナが出てきて、カルナとぶつかりあつた時に思いついた即興の第二プランで行くべきなんだろうか？

……いやいや。こういう時にブレるのが一番よくない。

その結果として明後日の方へ走り出そうものなら、地道に積み上げて上手く行きかけたタワー建設とかがぶち壊しになりかねない。それはマズい。

と言う事で……辛くとも、ここからは忍耐の時だ。

「アサシン、もう一回離脱のチャンスを作りたい。頼めるか」

「はいはい」

礼装の起動状態を維持。目の前のサーヴァントに意識を集中する。下手に時間をかければ機を逃す。勝負は一瞬……それなら。

ちらり、と手の甲の赤い印を見つめる。どうせ帰還したら補充されるんだ。最終決戦のここでケチって何が切り札か——

「——突っ込んでくれ。令呪で援護する」

切り札なんでもんは、温存し過ぎても切りにくくなるもんだ。僅かな隙の一つを作り出す為に、豪快に切るくらいで、ちょうどいい。作戦は決まった。

カルデアの令呪の使い道は、そんなに多くない。一つは、英雄の切り札たる宝具発動の為の魔力装填と……そして。

二つの使い道を知っているアサシンは……此方に顔を向けてから、ニヤリと笑って。ゆっくりと——地面に、爪を突き立てるようにして、手を構え……足を、力強く地面に向けて、踏みしめる。

まるで、ケダモノが跳躍するその直前の姿勢。メキ、メキと。えげつない音が、太ももから響いてくるのが、僅かに聞こえる。

「……分かりやすい動きだ」

女武者が、呆れたように口を開く。

確かにそうだ。間違いなく、これから何をするか丸わがりの動きだ。一直線、弾丸の如く飛んでいって……喉首に食らいついてやる、と。最早宣戦布告といっても良いレベルの構え。

「それを凌げない私だと思うか？」

「さあて——どないやろねえ」

ざくり、と——太刀の一本が地面に突き立てられる。

刃を正面に構える、正眼の構え。両手でがっしりと握られて。まるで鞭のように立派な拵えの日本刀を自由自在に振るう、奇天烈かつ苛烈、そして瞬身の動きからは想像も

出来ない様な——どっしりとした姿勢。

そこから放たれるのは山の如き、うずたかく、そして揺るぎもしない、劍圧。
「劍客、と言う訳ではないが……『あの時代』に生きた者なら、この程度は出来る。見え透いた跳躍の一つや二つ、咎める事も訳はない」

真正面から突っ込んで来るだけなら——切つて捨てて、お終いにしてやる。

口に出して言わずとも、仮面の下から覗く薄笑いが、そう此方に告げていた。

「——はっ、笑わせる。なあおい」

「せやねえ……」

——可笑しいのは、こつちの方だつていうのに。

お互いの笑みと、引き絞られる弓の弦の如き殺気は——深まるばかり。お互いを喰らい尽くさんと構える獣二匹……ケルトの陣営のど真ん中だというのに、周りのケモノは気圧されたのか、近づくとどこるか、一步、後ずさっている様な有様だ。

気持ちは、分かる。俺だつて……こんな、一步動いただけで、二人のキリングゾーンの中でミンチ肉にされそうな状態、下手な事は死に買わない。

衝突の邪魔をするものは、周りにはなし。

開始の切つ掛けはなんだ。二人の間を抜ける風か、刃から滴る血の雫か、はたまた、ケルトかアメリカ、何方かの軍が上げる鬨の声か——否！

「——カルナああああっ!!」

「アルジュナっ!!」

天を見上げる。

二人の上。輝く日輪の内に滲む、二つの影。カルナ、アルジュナの戦いは、最早戦場の四方八方へと飛び回り、一つどころには留まっていなかった。

戦場に響くは、神話の激突。天を駆ける焰の翼と、四方八方より睨む蒼い矢の穂先が今や、激しく、激しくぶつかり合う。貫かんと迫る大槍、迎え撃つ神弓、激突は最早一つ一つが爆発に変わっていった。

そして——そこから弾けた一発の流れ弾が、墜ちて、落ちて落ちて落ちて……!

「——っ!!」

至近距離にて、爆発。

飛び出すタイムミングは、全く同時だった。

起爆剤に着火したかのような、言葉にもならない激昂の叫びが、一瞬の内に縮まって一つのカタチへと姿を変えていく——!

ざくり

二つの影の衝突の一瞬……相手よりも先んじて閃いたのは。

「——言わんことではないな、小鬼風情が……！」

噛み砕かんとする鬼の牙、ではなく。

振り下ろされた太刀の、日の輝きを照り返す銀色だ——

第百五章・裏：平安の戦

白い、珠のような肌が、紅に染まる。

女武者に組み付いているのはアサシンだ。あの姿勢になつたなら、最早尋常の相手では彼女を引きはがす事も出来まい。そもそも、文字通り弾丸のように飛び出した彼女の勢いを受けて引き倒されず、

「如何な切り札……否、宝具か？ それを打とうとしていたかは知らぬが、この距離での一瞬の勝負でなら、如何な大技よりも、ただの一太刀の鋭さが勝る——それが戦場というモノだ。くくくつ……！」

女武者が嗤う。無謀な挑戦、バレバレの突撃など容易く見切られて、こうなるのだ、と此方を嘲笑する。剣の柄を力強く握りしめ、そのまま振り抜いてしまえば哀れ、無能なマスターの指示に従って無駄死にしたサーヴァントが、黄金の光と消えていくだろう。

自らの勝利を、太刀にかかる肉を裂く感触から確信したのであろう、そんな女武者の嬉しそうな顔、自身に溢れた姿に——

「——くははっ」

「……何が可笑しい？」

胸の奥から……溢れ出すのは、喜悅。

なんなんだろう、この感情は。ああ、成程……これで、初めて分かった気がする。

あのキャスター・リンボが、どうして策略を練るのか。どうして、策を練って相手を嵌めるのが好みな性格なのか……理解も出来ないと思っていたけれど。

成程、こんな感じなのか——勝ち誇った奴の足元を、思いつきり掬ってやる気分は。

「いや？ 勝ちを確信するのはそっちの勝手だけだよ——」

「——ちよいとは目の前、見たらどない？」

……一瞬、キョトンとしていた顔の中、瞳だけが、その声の意味を理解して、ばか、と開かれる。そしてその視線を、此方から瞬時に今だ自分の身体に組み付いた離れぬアサシンに向けようと——

した所で。

それよりも早く、項垂れていたおかつば頭が、しやらりと揺れて……口の中の牙を剥き出しに、その顎を開いた。

「——つガアアアアアアアアッ!？」

絶叫。

ばしやり、と高く空に上がる鮮血。

喉元——ではない。肩口に、アサシンは食らいついていた。優しく抱きつくように首

に手を回し、身をくつつけてから……人間の体などは容易に食いちぎれるであろう、鋭い鬼の牙が、あの至近距離から、避ける暇もなく浴びせかけられた。

あの血の量からして、かなり深く、食い込んだか。

「っ♪」

「きっ——ザマアっ!!」

咄嗟に地面に突き立てられていたもう一本を引き抜いたか、アサシンの体で封じていた刃とは別の斬撃——それを避けて、俺の元へとアサシンは戻って来る。

ちらりと彼女の胸元の肌を見る。先程の斬撃の傷は——もうほぼふさがっている。僅かに残っている様な気もするが、それも直ぐに塞がるだろう。

「——令呪、を使って……切られた瞬間に、傷を……っ！」

「何も宝具を使うなんて一言も口に出しちやいないな？ 勘違いしたそっちが悪い。惚れ見ろ、こんな綺麗なカラダに傷なんて、残すのもアレだし？」

「旦那はん？ うちの胸見ながらそんな事言うて……ふふっ♡ 期待して、ええの？♡」
「何の期待だよ」

くすくすと笑うアサシン——思い出すのは、源頼光と戦った時の事。彼女の体に刻まれたのは、余りにも深い雷の傷……令呪を持ってその傷を癒したのは、何気にコイツが初めてだったかもしれない。

アレだけの深い傷を、瞬間的に癒した令呪の力は、伊達じゃない事を、その時俺は初めて知った。即死でさえなければ、一度なら凌げる。

切られるのなんざ初めから想定の内。

致命的な斬撃の傷を、令呪の力で即時修復し、無理矢理に押し通る——戦場で負った重症の一つや二つ、気にせず前進するのは、魔境平安のお家芸だ。

「戦場じゃ鋭い一太刀が勝る、だったか——それで敵が止まるような、生易しい時代の英霊って所だな、アンタは。少なくとも平安はそれじゃ済まねえと思うぜ」

「一太刀浴びせかけられようが……決死の覚悟で前進してくるだろうよ」

「く……がっ……」

……まあ実際平安がそんな時代かは置いておくとして。少なくとも、俺の傍らのサーヴァントは、そんなお行儀の良い戦いなんてしない。

その辺りを理解していなかった甘いお嬢様に、背を向けて走り出す。結構な深手を負わせたし、離脱する時間は、作れたはず。

まあ、向こうも深手の一つや二つ、気にせず追撃してくるタイプかもしれないが……少なくとも、素早い行動が出来るかは微妙な所だろう。

「んもう、旦那はんもひどいわあ」

先ほどまでの衝突に、氣勢を削がれた敵の間を駆け抜けつつ。傍らで並走するアサシ

ンに視線を向ける。

「……まあ、傷付く前提で突っ込ませたのは悪いと思うけど」

「ああ、それは別にええよ？　うちかて承知して行ったんやし？」

「じゃあ何が不満なのお嬢さん」

「二太刀で、ほんまに必死になるみたいな……うち、そない『やわ』ちゃうし。首刎ねられても噛みついたるよ？　首で」

「……ああ、そつち」

うん。前言を訂正させて貰おう。平安は『そんな時代』、どころかささらに魔境だった模様だった。一太刀で止まらないのはもう前提条件であつたか……なんか、もう一撃で倒さないと絶対に突っ込んで来るだろうこの平安脳鬼娘つてば……

ある意味可哀そうですらある。こんな鬼娘と、頭特異点な俺みたいなマスターを相手にしてしまった哀れな武者のサーヴァントに敬礼を。

……とはいえ、これから更なる無礼を働く事になるかもしれないのだけれども。

ちらり、と上空を見る。ちようど、その視線の先、天に上る一筋の線が見える。どうやら準備も終わつたらしい。

「——アサシン、退くぞ」

「向ここの準備も終わつたん？」

「ああ……後は、周りを出来るだけ巻き込まない様に、連れてこれるか、だな」

アレだけの深手を負わせたのだから、撤退を選んでも可笑しくはないが……まあそれならそれでもいい。俺達としては、逃げられたなら追撃する理由は特にない。

だが……もし、前回までと同じように、否、それ以上に……徹底的に襲ってくるようなら、『確実に倒す』準備を、整えているだけだ。

ちらり、と背後を見つめる。追跡者の姿は……いや。

此方に向かつて来ていたケルト兵の一人が、不自然なタイミングで崩れ落ちたのが、ちらりと見えた。どうやら、アレだけの深手を負つても尚、こつちを追跡して来ているらしい。物凄い執念と言うしかない。

「——ダ・ヴィンチちゃん、聞こえてる？」

であれば。こつちもそれなりのおもてなしをせざるを得ない。

『ああ、ばつちりだ。撤退するルートを探って欲しいのかい？』

「頼めるか」

『任せたまへ……つて、ああいや、そのままでもいいよ。どうやら、君のサーヴァントが気を利かせてくれたらしい』

上手い事誘導できるか——とか考えてた所に飛び込んで来たその言葉で、ハツと前を見る。視線の先、吹っ飛ばされる黒い影法師と……佇む、線の細い女性の姿。

こつちに一生懸命に手を振る姿と、揺れる黒髪に、思わずして笑顔が漏れる。

「——マスター！ こちらに！」

「迎えに来てくれるとは、ありがたねえ式部さん！」

現れた式部さんと、合流すると同時に。

彼女の周りに居る機械化兵たちが、背後から迫って来ていた兵隊たちに向け、腕の機銃を一齐射。それと共に——俺達から離れるように、左右に散開していく。

その中心に、自然と開けるのは、一直線の道だ。

「この先か」

「はい。エレナ様の位置の都合上、どうしても本陣の近くに誘い込む事になるとの事で」
「そっか。んじやま、確実に仕留めないと首脳部壊滅もあり得るか……はっ、とんだリスキーな戦いになるなオイ……っ」

背後に視線を向ける。

倒れ伏す屈強な戦士の間から——一陣の風の如く、端を赤く染めた、狐面が飛び出して来る。疾い……っというか、アレだけのダメージ負ってんに、寧ろもつと素早くなっていないかアレは。

こつちに向けて、脇目も振っていない。左右に展開した兵士達にも、それによって出来た『通路』にも一切お構いなしだ。

完全に頭に血が上って、周りが見えてない。さっきの挑発も、大分効いたと見える。これならもう……

「……逃げられもしない、か」

第百五章・裏：危鬼決戦 前

頭に血の上って周りも見えない敵がこっちに突っ込んで来てる。お供のシャドウサーヴァントすら無しで単騎。加えて、何か考えがあるかどうかすらも怪しいレベルと来た。

よつぼど、あの噛みつきでまんまと一杯食わされたのがお気に召さないのか。

まあ分からんでもない。そりゃあ、以前は無視して突っ込んでいた筈のレベルの攻撃で悲鳴上げて、完全に足止め喰らったんだから、そりゃあ分からんでもない。

こっちはそんなもん知った事じゃないし、勝手にブチ切れてくれてるだけだから都合がいいとしか言えないんだが。

「……………ここまで理想的にハマってくれるとかあるんだな」

「運が良かったと考えましょう」

「そうだなっ……………」

余りにも出来過ぎたシチュエーション。罨を疑いたくなるが、罨を張っているのは此方で、ここは敵地ではなく味方の陣地——しかも最奥、本陣の傍、ギリギリな所で……もしここで敵に暴れられでもしたら、前線にまで影響が出そうな所だ。

……まあ逆にそんな所に敵が罾を張れる訳もなく、安心ともいえるんだが。故に……確信をもって、踵を返せるといふモノ。

先に踵を返したのは、俺とアサシン。そして、ワテンポ遅れて、俺の背後を陣取る形で式部さんが構えを取った。

——その場で、まずは周辺確認。

周りに兵士の姿無し。というか、式部さんとアサシン、マスターの俺以外の姿は何処にもなしと来た。成程、完璧な仕上がりと言える。

問題なし。敵の状態もよし。確信をもって言える。

「——取った」

……長かった、かもしれん。

戦いが始まり。全ての敵がここに集まって来る事を、想像出来なかった訳もない。ちやんと休んだ頭で、それ位の事は閃いた。と言うか冷静に考えれば、逆にこんな混沌とした戦場、それこそ潜り込んで、俺の首を狙うチャンスではあると思つた。

ならば、これはチャンスだ。そうダ・ヴィンチちゃんは口にした。

「——巖窟王の前で、宣言してたところだしな。奴らの大物を取っ捕まえて、一つ内情を聞かせて貰うとしようじゃねえか！」

いよいよ、俺を狙つてくれてる勢力の鼻っ柱を、一発、豪快にぶん殴つてやるチャン

スなのだと。

「——逃がさんつ……!」

怒り心頭、俺達が待ち構えるのに、三拍子ほど遅れて、女武者が真つ直ぐに突つ込んで来て——ああ凄い、鬼みたいな形相してやがる。その有様で前傾姿勢のままに転びそうな勢いで突つ込んで来てるんだから、ひえーやつべえな、としか言えないというか。

ちよいとでも油断したら首持つてかれそうだ。うん。

……まあそれも覚悟で、ここまでアイツを引き込んだんだから、真つ向から向かい合つてやるつもりしかない訳だが。

「あの程度で、私が……儂が……止まるとでも思ったか、痴れ者が……っ!」

「いやいや、そんな風に思つてないさ。寧ろ、信じてたよ——」
もう、『ライン』は越えた。

今から取つて返しても、絶対に間に合わない。

「——ここに突つ込んで来てるつてな」

瞬間。

「——起動!」

「っ!」

女武者がいる辺りを中心として、四方が輝く。

狐面の奥の瞳が見開かれたのが、こつちからでも分かる。異変に気が付いて視線をその輝きに気を取られたのが分かる、その更なる一瞬の間に、天に向けて、その四方の閃光が真つ直ぐに飛び立っていく。

「砲撃……いやっ!？」

そして、もう一瞬。それが何なのか理解し——『嵌められた』事に気が付いた相手が慌てて、一旦踵を返そうとした、その一瞬。

それこそが、明暗を分けた。

「——『封』!!」

天に上った光は、それぞれ四つが直角に折れ曲がり——別の光が打ちあがった方向へ向けて伸びていく。線の『頂点』同士を結ぶ軌道は、それぞれ『辺』となつて、巨大な光の壁を作り出す。

そして……荒野に成された光の壁、その数は五枚。四方、そして上方を固め、それらは一つの『匣』の形を成した。

「結果、だと……っ!」

「そう焦んな。変なデバフ効果なんざねえよ」

即ちは、『結果』……色々と役割はある。目の前の女武者が警戒するように、敵対する相手に悪影響を与える『場』を形成したり、逆に自分にブーストをかけたり、と。相手

の攻撃を防ぐためのモノもあるだろう。

だが今回は、そう言うものではなく、単純明快。

自分と相手を、ただ一か所に閉じ込める為の……いわば、『檻』としての結界だ。

「もう逃げたりしないさ。寧ろ……そつちに逃げて欲しくないもんでね。態々こんなリングを用意したんだよ」

「——驕ったか、貴様」

かちやり、と。その中に響くように、刃が鳴る。

女武者は、此方を睨みつけるように笑っている。

互いに退路を断ち、逃げられないようにするための、この舞台は……諸々あれど、相手にとっても都合のいい部分はある筈だ。

「最早、逃げ場はない。お前自ら断つたのだ。其方から、首を差し出す様な真似をしてくれるとは……二度、三度と退けて、私に勝てる、とでも錯覚したか？」

「錯覚じゃねえよ。勝てる算段があるから、こんな真似してんだ」

「くふ……ふはははははははっ!!」

……笑ってやがる。酷く楽し気に。敵陣の真ん中で、閉じ込められて……普通は、もうちよいと不安げに振舞っても不思議じゃない。援軍もこの中には入ってこれない。逃げ出そうにも、出られない。

絶体絶命——そう思つても不思議じゃない所で。

笑えるという事は……こんな状況ですら、あの女武者にとつてはなんて事も無い。寧ろ獲物が自分から、柔らかかそうな腹でも無防備に晒してきたように見えるのだろう。勘違いか？ いいや、勘違いと思えるような強さなら——奴に苦勞はしていない。

「四方に壁、そしてこの広さ——」

薄笑いを浮かべ……女武者が、壁際に向けて、くるりと跳んで距離を取る。

背後には、結界の壁、その指先が無造作に、結界の壁に触れ——特に、何もならない。ただ透明なガラスの様に、その指先を受け止める。

当然だ。相手を傷つけるものではなくあくまで閉じ込める事に特化した結界。触れたものを傷ついたりしないし——その代わり、相応に硬いのは間違いない。

浮かべた笑みは、その事に、更に深いものになつた。

「儂にとつては、くくっ……自分の為に詭えられた舞台と変わらぬ」

そして……そんな壁が作り出す戦いの舞台の広さは……正に、広くもなく、狭くもなくである。飛んだり、範囲攻撃をしたり、遠距離を得意としたり、そんなサーヴァントではないあの女武者にとつては……太刀を振るうのに、理想的な大きさだろう。

「こんな中で、やり合うだと？ はっ——そんな貧弱な術師と小鬼では、一呼吸ともたんだぞ、貴様」

「ま、アンタにとつてはおあつらえ向きつてのは、確かにそうだろうよ。だけどな……それはこつちにとつても同じだ」

——条件は、同じ。

この中であれば、相手の太刀も、アサシンの爪も、牙も、全てが『必殺』の間合いだ。今まで、アサシンが完全にこの女武者に競り負けていたか？ いいや、違う。マスタ―としての鼻負が一切入ってない——とは言わないが。

互角以上に、戦えていた。

「人が、真つ向勝負で鬼に勝てるかってんだ、ばーか」

「——いうではないか、小僧……！」

……まるで悪役の言うセリフではあるが。しかし。これが全てだ。鬼の——人外の強さは、一番良く分かつてる。振り回されるように、自分の力を乗り回して……否、その前から振り回されてたからこそ、その『強さ』には信頼がある。

それに。

ちらり、と背後を見る。

頷きを返してくれた彼女は——そんな鬼の力以上に、信じられる。

「勝負だ。今までの借りを返すぜ」

「良かろう——積年の恨み、ここで晴らしてくれる……！」

第百五章・裏：危鬼決戦 中

がぎや

「——っ!!」

ぎぎぎぎ

衝突。衝撃。金属音。突進した影を、もう片方の影がどつしりと受け止めた瞬間、四方へと広がっていく——激突の余波。

突進したのは、やはり女武者の方。一方のアサシンは——大地に大剣の切っ先を深々と突き刺し、刃を壁の様に立てて受け止めて見せる……いや、暗殺者のクラス、とは言うがあんな風に真つ向から攻撃を凌ぐ暗殺者が何処にいるというのか。

しかし、意外と言えば意外だ。速攻でアサシンを無視して、俺の首を取りに来ると思っていたのだが……もしくは。

「——将を射るなら、先ずは馬から、だ」

「うち、別に野暮天を蹴り殺したりせえへんけどねえ……まあ、アンタなら、蹴り殺してもええんちゃうか?」

——アサシンを、明確な脅威と判断したか。

引き絞られた姿勢から、前傾姿勢で突っ込んで来た顔面目掛け飛び出すのは、シンプルかつ、モーシヨンの少ない前蹴り——が、くるり、と一回転、宙に飛び下がられて避けられてしまう。

しかし、下がった後は。ゆつくりと刀を構えるばかりで、続けざまに突っ込んで、来ない。冷静だ。

「蹴らせる暇も与えん——その目を抜いてくれる」

「うちの目えがお好みなん？」

「はっ、抜かせ。人を人として見ぬような人外の目など、願い下げだ」

一歩、また一歩、と。此方に距離を詰める動きも、実にゆつくりとしたものだ。アサシンの様子を伺いながらの接近、やはり、実に冷静だ。

先ほどまでの動きが、疾風の如き突進だったせいだ。その動きが、酷く緩慢に見えて来てしまう。じりじりと、ゆつくりと距離を詰める動きに、じれったさすら感じ始め――

「——しっ」

かちん

「……髪の毛一本程か」

「その一本が、ええ塩梅に遠いさかい……楽しみにしとき」

そう思っていた一瞬だった。

太刀が、アサシンの、瞳孔に——焦りそうになったが、しかし血の一滴も垂れてはいない。どうやら素手で受け止めたらしく、無造作に突き出された切っ先を掴んだからか、そちらからは赤い雫が滴っている。

聞こえた音は、掴んだ時に刃と爪がぶつかる音だったらしい。

「ちっ……」

舌打ちと共に、ゆっくりと太刀が引き戻される。追撃しないのか——なんて馬鹿な事は言わない。さっきの動きの異常な加速を考えれば、迂闊に手を伸ばせば、手首から先を持つていかれているかもしれないだろう。

……下げた剣の切っ先は、ゆらりと弧を描き。その動きに合わせるように、アサシンが大剣を握り直す——直後に、太刀の円の動きは、きらめきが一本の線になる程に、急速に加速して行つて。

「しっ……ハアッ！」

ぎっ！　ぎぎぎっ！

「んもう、じれつたいわあ……！」

踏み込み。

一撃の後に、次いで三連。最早、速いだけではない。此方にも認識できるほどに『遅

い』一撃すら組み込んで。いる。

素早い斬撃に目が慣れていと……アレは、キツいんじゃないのか。俺達でも見えてるってコトは、アサシンに取っっちゃ大きな付け込む隙にしか見えないんだろう……が。それを晒すか？ 目の前の相手が。

だからこそ、アサシンは時折顔を歪めて体をこわばらせている、ように見える……その時折は、やはり唐突に挟まれる、遅速な斬撃の時だ。要するに——罫と言う事だろう。「……っば、普通だったらアサシンでも確実に勝てる、とはいかん。」

人間以上の力、人間以上の疾さ、人間以上の反射真剣、人間以上の頑丈さ——ちよつとした災害じみた脅威、そんなアサシン相手に、躊躇いも無く間合いに踏み込める疾さ。そして——それを大胆にも捨てて、アサシンに迂闊な一手を打たせる隙を作る度胸も。

斬撃だけじゃない。突撃してくる時にも、速さの緩急を織り交ぜて来たなら——確かにこの閉じられた狭さ、突っ込んで来るか緩めるかの僅かな判断の差が、首が飛ぶという結果にもつながるだろう。

「——式部さん」

「はっ」

成程、このフィールド……エレナさん、式部さんの両名の魔力で補強した、絶対的な硬度を誇る結果を、自分の為に逃えられた舞台と、豪語するだけはあるだろうさ。

『遅さを活かす』……こちらと、ある種似通った考えに至るとは。

さて——では試してみよう。向こうにとつて詭えたような理想的な舞台の中で。『此方が仕掛けた一手』から、絶対に逃れられない状況下で、どれだけ耐えられるか。

「そろそろ始めてくれ——念を押すようだが……」

「はい、大丈夫です。巻き込むような事は、決して」

式部さんの指先に、光が灯る。

空間に描かれる文言は——呪詛。相手を傷つけるのではなく、触れた相手に呪いを与える類の業。決して相手に致命打は与えられないのだが……

「——」

ぴくり、と仮面の下の頬が僅かに動いた。視線が一瞬此方に向いたような気もする。やはり気づかれるか、とは思う。だが……関係ない。気づかれようが、気づかれまいが、

この一手は——

確実に、その羽の生えたような軽やかな跳躍を。

地を風のように走るその軽い足取りを。

その全てを纏めて絡めとるための、蜘蛛の糸のようなモノだ。

「——これが終わったら、うち、お楽しみさせてもらえるんやと」

「……何の話だ」

「せやから……堪忍やで？ こっからアンタ——羽腕がれてしもた、ちようちようさん
みたいになつてまうから」

——にやり。

憐れむように、女武者をアサシンが、嗤う。それに合わせるように。

ふわり、と……呪詛が空中に漂い始める。それも一つや二つではない、先ずは、六つほど、纏めて。アサシンの背後から、それこそ、蝶のように、華やかな輝きと共に、四方へ向けて広がっていく。

当然、自分狙いだろうと思つたのだろう、アサシンに振り下ろそうとしていた太刀を一旦、腰貯めに構え直して、一歩下がろうとした所で——

「……何つ？」

それを見た、武者の目が見開かれる。

驚いただろう、自分に向かって飛んでくる、そうとばかり思つていた呪詛の弾丸がまるで——こっちに突っ込んでこない。その上……実に、遅いのみだから。

そう、全く以て、この呪詛は素早くはない。

寧ろその逆で……酷く、緩慢だ。それこそ、歩いていれば、一呼吸もしない内に抜かせるだろうと言えるほどに、亀の歩みと言うのすら躊躇われる程に。空中に留まってい
るのではないか、と錯覚するほどに、だ。

ゆっくり、ゆっくりと空間を漂う動きは……更に。実に、無軌道で、自分を狙うような意志をまるで感じないと来ている。

「これ、は……!?」

「はっ、そう驚くな。お楽しみはこれからだぜ……式部さん、もう一発!」

「は、はいっ!」

——そんな弾丸が、更にもう一段。

再び、広がったそれは、同じように、穏やかに空中を漂い始める。

一歩下がった所で、女武者は……呆然とそれを見ている。まるで殺意の無い攻撃。やる気のない援護——そう見えているのだろう。ならば、一つ。

ここらで絶望を見せてやろうか。

「アサシン!」

「——ふふっ」

十二の弾丸、それが漂う空間の中に……狩人を、解き放つ。躊躇わず、爪を構えて突っ込むアサシン。その姿に女武者は——明確に、狼狽えて見せた。

「なにっ!」

「もーろた♪」

伸びる指先、空中に漂う呪詛、焦りを見せたそのまま——首に向けて飛んでくる切っ

先を、払いのけて見せた。流石に見事な反応だ。奇襲を仕掛けても、やはり生中なやり方では苦しんですらくれないらしい。

だが――

「……………そう言う事かっ……………」

寧ろ、払いのけた事で、武者の顔に滲む焦りは。

更に、深まった。

視線の先――爪の一撃を大きく払いのけられ、体制を崩し……………そのままに、空中を漂う呪詛に触れたアサシンは。

何事も無かったかのように、それを、『すり抜け』……………当たり前のように、何の苦しもうな様子もなく、立って見せる。

これがどういう意味か、分からない程にバカじゃないだろう。

「……………っ！」

「さーて、ここからは電撃イライラ棒の時間だ……………プレツシャーによる思わぬミスにご注意くださいってなあ!!」

第百五章・裏：危鬼決戦 後

『——何？ 素早い相手に術を当てる方法？』

『はい』

『あの』クー・フリーンの師匠なんだろ？ 最初にクー・フリーンと出会った時は、キャ

スタークラスでルーンでの火球でボンボン敵を薙ぎ払ってたのが記憶に新しく——』

『……アレがキャスター？ 火球で敵を……??？』

お前は何を言っているんだ？ と言った感じで。

サラリと紅髪を靡かせる可愛い小首の傾げ方と、強い意志の感じられる眉間と皴とがあいまった、実にシユールな表情をさせる所から、我らのスカサハ師匠への『指導願ひ』は始まった。

……まあ、サーヴァントを知っているものなら、『サーヴァントに指導』と言う言葉がそんなスカサハの表情以上にシユールな意味合いを持っている事は分かるだろう。

サーヴァントというのは、基本的にその人の『全盛期』を写し取って召喚される『影法師』である。写し取る、と言うその言葉に偽りはなく、その全盛期の實力から、劣化する事も成長する事も無い。

劣化にしろ成長にしろ、主に肉体面での事を指すのだが……重要なのは、サーヴァントというものは『成長』というモノに非常に縁遠い存在だ、と言う事だ。

そんな彼らに対する指導、というのは、果たして意味のある行為なのか。

『……まあいい。要するに、術を使い『狙い撃ち』にする方法が知りたいという事だな』
『そうだ。相手は攻撃をものともしないパワータイプじゃなく、一切の攻撃すら掠らないスピードタイプ。がむしやらに撃つてもまあ当たらん。なんかないか』

『ふうむ——まあ、無い訳ではないな。技術と言う程のものでもなく、ほんの少し、意識を変えてみるだけでも劇的に変わる場合はある。サーヴァントでも、技術を学べぬかと言えばそれは一概でもない』

結論を言おう——必ずしも、それはNOとは言えない。

肉体的な成長はなくとも、新しい技術……小手先の工夫であれば、それこそ習得はさして難しくない。人間として思考するだけの脳があり、きちんとした自意識がある以上はその記憶の中に『動作』を記憶させるのは、霊長を模した英霊として最低限『出来なければならぬ』事だからだ。

故に……成長に縁遠くとも、成長を『しない』と言う訳ではなく。

召喚された『その影法師』のみの話ではあるが、技術的な更なる向上がある事は決して珍しい事でもないのだ。

『イケるのか』

『私を誰だと思ってる。武芸百般を取めたが、ルーン魔術に関してもそこらの魔術師如きには遅れは取らん。いや、向こうの方から教えを乞うてくる程度には腕も立つ』

『成程、心強い——流石は『師』の英霊だ』

そして……もう一つ。

サーヴァントに干渉できるのはサーヴァント——教育、育成、そう言った逸話のあるサーヴァントの指導であれば、それこそサーヴァントが『成長』するのも決してあり得ない事ではない。サーヴァントというのは、何処までも『概念』の話だ。

『傷つける』という概念が形を取ったような武器で傷つけられれば、どれだけ守りを固めようと防げないし……伝説の英霊を多く育てたという『教育』の概念のようなモノでぶん殴られれば否応なしに成長もする。

スカサハは、戦士と言う一面を持ちながらも、『師』という概念そのものに近い特殊な英霊だ。彼女の指導であれば……式部さんも、あの女武者者に対応できるかもしれない、と俺は踏んだのだ。

『……が、お主たちにはそれは向いてはおらんだろう』

『えっ』

『そもそも。その娘、戦士ではなく学者、識者であろうに。それを畑違いの戦場に引つ張

り出して更に戦のコツを教えようというのが間違いであろうよ』

……が、相手が師匠としてグレードが上過ぎたせいで普通に諭されて終わる結果と相成りました。なんてこつたい。これでスカサハ師匠のぱーふえくと魔術教室おしまいおしまいと——

『が。しかしだ。識者であるならば、寧ろ『頭』を使う方向で何とかするのが良いのではないか?』

——は、ならなかった。

確かに、戦うための術を当てる方法は教えてはくれなかったのだが。

『例えば——そうだな。私のルーン魔術で言えば、これは何かに刻んで使うモノで、これそのもので攻撃するようなやり方は普通せんが……応用の仕方によつては、面白い使い方もある訳ではない』

その代わりに、ある『実践』の仕方を見せてくれた。

指先が、何も無い空中を走り。その度に描かれていく、『ルーン文字』。それは、式部さんも良くやっている、空中に文字を描く術……なのだが。

『——す、スカサハ様、まさかこれは……っ!?!』

『ただ空中にルーンを浮かべた訳ではない』

明らかに違ったのは……そのルーンに、俺達が『触れた』事。

『これは、空中に『固定』してある。分かりやすく、お主たちに触れるようにしてはあるが、触れる様にせずとも、足場として用いたりすることが可能だ』

実際、俺がこの文字の刻まれてる『空間』を足場にして、軽く二段ジャンプ擬きをやって見せた時の式部さんはと云えば、それを見て、真つ白すすべな頬を更に蒼くさせながら、気絶しそうになっていて。

曰く、簡単にやっつては見せているが、何気に自分の師である晴明レベルの超高等テクニクであり。生中な魔術師では真似どころか影すら踏めないレベルらしかった。

『こ、コレを今から私がやろうとなりますと……あわわわわわっ……!?!』

『まあ、お主は専門家ではないにせよ、才能はある方だ。百年もあれば確実。私のスパルタコースに耐えられたなら、最長でも三十年程度に短縮する事も難しくはないが……今すぐには無理だろう』

『ですよね……』

『——だが、このルーンを空中に固定する、というのは、存外と使い道がある。それこそ足場にするのであれば、相手に干渉し……』

『罫のように、使うとか、な?』

……故に。スカサハ師匠が教え込んでくれたのは。

そう言った、魔術を『当てる』為の考え方ではなく。魔術を活かして『追い込む』為

の言わば……狩人的な、思考論理だった。

『後はソレをお主が如何に活かすか、だ——さて、それはちよつとした実践の中で見せて貰うとしようか。なあに、思いつくまで、存分に追い込んでやるとしよう……!!』

……ああ、戦っている時に思い出しもする。

思い出すというか、刻み込まれているのだ。マジで。俺と式部さんとは、一緒になつてこの戦法を思いつくまで追い込まれまくつたのだ。クー・フリーンの師。影の国の女王。武芸百般……その意味を知る事となつた地獄のような時間だつたのだが……

しかし、そのおかげでこの戦法を思いつけたのだから感謝する事にしよう。素早い獣には対し直撃を狙うよりも、射撃を『置く』つもりで動いた方が宜しい、と言う事を……!

「式部さん、第6射いけえつ！ さつきまで潰れてたのを差っ引いても二重のラインは割つてない、この調子だ！」

「はいっ！ こうして……こうです!!」

「ええいっ……!! 小賢しいっ、真似をつ！」

相手を削る火力もいらぬ。素早い弾丸もいらぬ。何なら相手を追尾するようにしなくても良い。その代わりに、付与した効果はたった一つ……特定の相手、要するに『女武者』だけが、この術に触れた時に影響が出るように。

実に単純な仕掛けを施した術を、限られたフィールド内に、フラフラと漂わせるのだ。「ええいつ、狭苦しいつ……ここまで苛立たしい仕掛けをされたのは……つ!？」

地面を蹴り、結界の壁を蹴り飛ばし、まるでスーパースポールのようにぼんぼんと好き勝手に自由に動き回る。

そんなに限られた空間を縦横無尽に動き回れるのなら。その動く直線上に、機雷のように、ばら撒いておけばいい……日本人なら良く分かるさ、このイライラ加減。

見えている地雷に気を遣い、精密な動作でそれを掻い潜りながら。

「ほおれ……そつちだけ見とつてもあかんよ?」

「貴様つ、この、こんなつ——!」

どごん

「——ご、げえ……つ」

迫りくるタイムリミットに背を押されながら、焦燥感を煽られるのは、流石に彼女にも経験はなかつただろう——遂に、直撃だ。

自分の突つ込む先、浮かぶ紋様速度を出し過ぎて、あわや接触、再び動きを鈍くさせ

られそうになったところで身を躲し……その懐に現れた隙に、飛び込むようにして叩き込まれた鬼の膝が、女武者の体をくの字にへし折って。

「が……あつ……!?」

めき　めきめきめきい——!

ふっ……飛ばす!!

「……ふうっ」

降り立つアサシン。着物を軽くはたき、靡かせながら漏れる僅かな吐息と共に。

結界に叩きつけられて——ばちん、と弾かれた女武者が地面に転がった。

かなりのクリティカルヒットなのは間違いない。それでも立ち上がりとうとするが

……足が震え、膝を突き、流石にグロッキーなのは見て取れる。

「——呪詛の直撃、『十六発』か。やっぱ厄介だよ、アンタは」

「……ぬ、かせ……」

直撃だけではなく、掠って消えた呪詛もカウントすると……喰らった術の数は総合計で三十にも上るだろう。

それだけの大量のバフを受けて、体中に、その動きを呪い、阻害する呪詛を纏わりつかせ。更に空中には常に二十以上に接触したら更に動きが鈍るトラップが浮かびまくるキルゾーンの中だ。

それでも尚、最強クラスの鬼の少女相手に、僅かとはいえ競り合つて見せるとは……単騎で俺達を追撃し続けた実力と執念は、やはり伊達ではなかつた。

俺を……なんだろう、多分。狙つて来ている勢力が、満を持して送り込んだサーヴァントなのも頷ける程の強さだ

とはいえ……それだけ強いなら、知つてる事も、かなり多い筈。サーヴァントを捕まえて情報聞き出すなんざ、人生初めての経験だが……！

「大人しく、捕まつて貰うぜ……！ 式部さん、周囲の警戒と結界の解除を……アサシン、悪いが頼む」

二人が頷きを返してくれたのを確認し、地面に倒れ伏した剣客に向け、一步、一步と歩みを進めていく。

此方を視認し、向こうも一步——踏み出そうとした所でしかし、向こうは完全に体が動かないようで、ガクン、と力なく再び膝をつく事しか出来ない。

ちらり、と式部さんの方を確認し……黒髪が左右に靡く。特に何もない様で。なら、とさらに一步を踏み出す。アサシンが彼女の背後に回る。そして——

「——ンンンンンンっ！ どうやら！ 保険の一手が効いた模様にて！」
突如。

そんな男の声と共に。

「っ!？」

「甘いですなあ……あの男なら兎も角、弟子の貴女に悟られる程、温くも、非ず!!」
周囲から、黒い影法師たちが、湧き出し始めた。

第百六章

余りにも目まぐるしく変わる戦場の事を思う実況、はーじまーるよー。

敵勢の第一波、第二波と連続で撃破！ アルジュナの出現！ そして奇襲を仕掛けてくる景清ちゃん！ おお何という渾沌たる戦場か!! 正しく混沌究める戦場、これは最早戦いもクライマックスに突入しているのではないでしょうか……

とか思ってたんだよオ!! そう思っていた所に現れたのが、私が思ってた敵とは全然違い過ぎるんですけど!!

『——周辺に敵性シャドウサーヴァントの反応！ 総数……三桁近いんじゃないかいコレは!?!』

『これは……!?!』

『漸く来ましたか。メイヴ肝入りのシャドウサーヴァント連中』

自陣にまで引き込んで景清ちゃんを撃破して、いよいよこの戦場も佳境に突入すると思ったら、まだ敵部隊が本気を出してすらいなかったという……アルジュナさんすら『漸く』とか言っちゃってますよ!! 余りにも到着が遅い!

と言う事で、戦場に現れたのは無数のシャドウサーヴァント達! お前たちどつから

湧いて来た！ さつきまで影も形もなかったやろがい！

『——マズい、アメリカ側が若干押され始めた。如何に強化されたって言っても、シャドウサーヴァント相手に機械化兵じや分が悪いぞ！』

と言う事で、ここまでイケイケ押せ押せだった序盤から一転、まさかのシャドウサーヴァント達の投入により、一気に戦場の形成が逆転し始めてしまうという。まあ確かに、景清ちゃん乱入前までは、もう一気呵成に押し切れてしまう雰囲気だったので、余りにも情けない奴らだなあー、とは思っていたんですけれども……本気じゃなかったんかい!!

チクシヨウ……画面にデイルムツドっぽいシャドウサーヴァントが映ってるう……しかも髭のおじさん達と混成してて数も沢山いるう……こわい……

『よし、こちら辺に居るのは……片付けたけど、他にもいっぱいいるなあ！ これは、他の戦線にも顔出さないと、拮抗状態が崩壊しかねない……!!』

『——おおキミ達、無事だったか！ 此方は……すまない、敵に押される形で、ここまで流されてしまった!』

ああ怯えてる暇もないっ!! もう既に戦線崩壊の足音が！ アレだけ固めたこつち側の兵力で作り上げた優位が一瞬でペア！ なんて薄氷の上なんでしょこれっ！

と言う事で、今度はこの奇襲で逃れてきたエジソンおじさんと、エジおじが回収して

きた機械化兵士達も一緒に回収し、シャドウサーヴァントの闊歩する戦場をいったん突破して、もう一度戦いを仕切り直していきましよう。

……なんですが、この任務、連れてるエジソンおじさんがやられると、そのまま撤退になるという嫌な制限が付いており。上手い事相手の攻撃を最低限にしつつ突破して行かないといけません。後方に下げなきや……（震え）

尚、ここを出てくるシャドウサーヴァント君は上手く倒せばホモ君の餌になります。

前線に上げなきや……（使命感）

『此方の、劣勢か』

『今の我々には関係ない事だ。続けるぞ、カルナ』

『……良いだろう』

『——もし気になるのであれば、早めに私を倒せばいい。やれるものならな……っ！』
筋肉隆々のサーヴァントを、特別に体格が良いって言う訳ではないマスターが前線に出て守るとかいうちよつとした失笑モノみたいな事をやっている間にも、カルナさんとアルジュナの殴り合いは続いていますし……そしてその流れ弾はちゃんとこつちに飛んで来てちよつとしたダメージに……ええい！

ここまで来ると、ゴルゴーンさんをさつきから雑魚狩りにしか当てられないのが余りにも辛いです……流石に採集決戦だけあって、それなりに強い雑魚敵が多い。

ホモ君の赤得で、倒した後の連続攻撃がまあ悪さをすることが多く……雑魚敵の数を減らしておかないとダメージを負いかねない。故にゴルゴーンさんには後衛前衛双方に対応できるのを活かして、狩っておいてもらう事で安定択を。

『ああもう！ 頑丈過ぎない!？』

『エレナ君！ こつちだ！ こつちに來るんだ!』

『あら王様、ありがと！ でも——コレをどうにかしないと、無理っばい!』

と言った感じで、いきなり難易度の上がった中……何とか、エレナさんとも合流。今はこうやってアメリカ側の皆がやられない様に救援しつつ、全力で立て直していくのが基本なので……アルジュナとやり合ってるカルナさんを除けば、後はネロ陛下だけですね。

いやあ、あわや壊滅と言ったところでしたが、取り敢えずトップ首脳陣を全員回収できそうな所まで来れました。ふははは、俺がどれだけお前たちの足止めをして固めた軍隊だと思ってる、一度の奇襲では折れんよ。

『——ンンンン、これで折れぬならば！ おかわりをば!』

するな(半ギレ)

こ、ここであつ……こんなつ……漸く首脳陣集めて立て直しの見通しが出てきたところで更に追加投入とか馬鹿なんですか!? っていうか、この独特の喋り方……テメエリン

ボこんなタイミングでえ!! ライネスちゃん達とやり合った時以来かあ!!

しかし……こうして見てみると、リンボと景清ちゃんやんがDLCの影響で登場した敵だとして。めつちや二人も日本出身のサーヴァントなのは、主人公君の出生に合わせてくれているですかねえ、細かいなあ……じゃねえんだよ!!

『シャドウサーヴァントだ! 追加出現! ええいご丁寧に全員近接型……! 乱戦時は厄介だよ! みんな気を付けて!』

と言う事で、ネロ陛下を回収しようかと言ったところで極悪リンボマンの奇襲を受けまして、今度の敵は……あ、くくくやつぱりご丁寧に刀持ちの専用グラシャドウサーヴァントだよなあ! あ、でも普通のシャドウサーヴァントも居るなあ。じゃなくて! 『さあさ、ここで一気呵成! アメリカ首脳部の皆様、頂いてしましましょうや!』

クソがつ、態々俺達が纏まるのを待つてから現れたというのか……なんという性格の悪い、ここでトップを全部倒してしまえば、残るのはアメリカ側最強の将カルナ、そしてネロ皇帝陛下だけ……アレ? 案外まだやれそうでは?

このど阿呆すつときようリンボがよお、詰めが甘い! そんなんだからこの先で『正に! 正論!』することになるんだよオ!

……多分ですけど、ネロ陛下を生かしてないと『完全に相手の息の根を止める為にやっかいなカルナ以外の首脳陣を狩る準備を整えた、費用対効果まで考慮できる有能な

キヤスター・リンボ』になつて、ネロ陛下を生かしてると『原作 リンボ』になるのだと思われます。悲しいかな。

とはいえ、現れた相手シャドウサーヴァントも別に弱い訳でもなく、ちゃんとリンボマンのバフを貰っているので油断はしない方向で。あのクソ野郎を今度こそ、ここでひっ捕らえるのだから……！ アリの子一匹逃がしもせぬわっ！

『——よしっ！ 押し切った！ 押し切ったけど！ あーもう、やっぱり逃げられちゃつてるしい!! リンボの反応ないよー!!』

ま、油断しなくても逃げられるんですけどね(諦め) やっぱりこのクソツたれこういう逃げ足は抜群ですなホント。

まあいいや、地団太踏む可愛いダ・ヴィンチちゃん見れたからこれで。ちよつとロリンちゃん的な部分もちらつと見せてくれるの、二人の繋がりが見えてウレシイ……ウレシイ……

『……つてああつ!? や、やられた……撃破してたもう一人の敵性サーヴァントもいない。さっきの襲撃のどさくさで連れてかれたんだ、奇襲はコレの為でもあったのか、やられたなあ、コレは』

なんだとオ!! チクシヨウ、こつちが仕切り直した様に向こうも仕切り直すつもりだったのか……ネロ陛下の事に関してはポンでも、最低限の仕事を果たす辺りはやっぱり

り有能ですねリンボ。

どうやら戦闘はまだ中盤、敵幹部はそう簡単にはやらせてはくれない様です。と言う事で、ここで最初の殴り合いで大きく稼いだはずのアドを全部なしにされてからの、仕切り直しに入ります。

『……うむ、やはりシャドウサーヴァントの存在が厄介だな。余が戦場を抜けていた間も、かなりの兵士が撤退、もしくは……うむ、やはり脅威に過ぎる』

『問題は、それら全てを叩かねばならない事か……厳しいな。奴らは戦域に広く、多く散らばっている。状況を好転させるならば……それら一つ一つを……』

『なら急がないといけない——やっぱり、貴方達に頼らないといけないわね』

我らカルデアチームに新たに課せられた任務は、現れたシャドウサーヴァント達への追撃任務になります。戦場に溢れるシャドウサーヴァント共をそれぞれ叩き、戦場を安定させる事……道中の他の敵に関しては、無視して進んでも構わない、と。

そして……このシャドウサーヴァントが現われる切っ掛けになったであろう術者。即ち、キャスター・リンボの発見を優先目標とし、コレを見つけたなら何を置いても真っ先に叩く事……それが、新たな我々の任務となります。

第百六章・裏：台無しの一

「——ヤロウ、一体何処行きやがったっ……!! 式部さん、本当に大丈夫なのね!」

「は、はいっ、一応は何処にも、一切傷は……」

「そうか……良かった」

もし彼女に迂闊な事でもしてようもんなら、この拳に込める殺意の濃さが更に高まる所だったんだが……うーむ。流石に

「……なんでそないに残念そうなん?」

「えっ……? ま、マスター、私、何か粗相を……?」

「いや良いやそう言う事じゃなくていや、別に式部さんに傷ついて欲しかったとか、そんな事は世界が三順くらい加速しようが絶対にあり得ないんだけども!」

もし、もし仮に、式部さんの珠のような肌に傷なんぞつけようもんなら付けた奴をソイツの総体を千々に引き裂いてやるつもりだが……そうなつてたら、奴のお陰で僅かにでも傷ついてたら、もう更にリンポの野郎の鼻の孔に指突っ込んで突き抜けるいい口実になる、と思ってただけだ。無傷となるとさすがに虐めるのは自重しないとダメかあ……

まあそれでも、奴をブチ転がさんと決めたこの足は、アイツから敗北に歪む表情を勝ち取るべく止まらない訳なのだけでも。

「まあそれは兎も角……折角苦勞して組み上げた結界と、捕らえたと思つた捕虜……どつちも台無しにして逃げられたんだからな……こつちも、ちよつと腹に据えかねてるんだよマジで」

……突如として四方八方に湧き出したシャドウサーヴァント達の襲撃と共に。声と共に戦場に現れたのだらうリンボは最高の——こつちにとつちや最悪の仕事をしてくれた。

二人のキャスターによつて強固に作られた結界に大穴が開き、地面に崩れ落ちていた女武者が居なくなつたのを確認したのは、周りの影の剣士を蹴散らした後の事で。

しかも嫌がらせとばかり更に追加のシャドウサーヴァント達が表れ始めた所で、ダ・ヴィンチちゃんから報告が。敵の送り込んで来た追加戦力、その総数は三桁にも上るといふ事であつた。

そして反应的に……このシャドウサーヴァントを呼び出した術の行使は、何処か探知できない遠方ではなく、ここで行われた事も含めて。

「そりゃあエジソンだって、限界とばかりに吠えもするよ」

「吠えとつたねえ」

「……とても、悲痛な叫びでした」

……それでアメリカ側の戦線は崩壊。撤退と仕切り直しの判断が早かったお陰で人的被害は軽微で済ませてるようだが、折角頑張ってるみんなで作った優位を一発で崩された事への不満は大きかったのだろう。その怒りも背負って、俺達は各戦線のシャドウサーヴァント、及び、リンボの搜索を請け負っている。

「……エジソン的には、アイツが何するか分からないから、先に叩いておきたいって言う方が大きいんだろうけどな」

「そう、ですね。姿をくらませたとはいえ……どうにも、不気味です」

そもそも、あの女武者を回収したのだから、それで撤退してても、何ら不思議ではない状況で……それでも、アイツを追跡するという選択を取ったのは——

『さあさ、ここで一気呵成！ アメリカ首脳部の皆様、頂いてしましましょうや！』

あの、『シャドウサーヴァントから』聞こえた、自信満々な態度だ。

シャドウサーヴァントによる奇襲は確かに脅威ではあるが……しかし、それでエジソンやエレナを伴った俺達を纏めて倒せる確信を得ていた、とは流石に思わない。

どうにも、一見すると愉快に思えるくらいに印象の強すぎる（喋り方とか）サーヴァントではあるのだがしかし……

アレだけ自信満々に『やれる』という態度を見せておいて、アレだけの仕掛けでお終

いとかいうおまぬけな面白キヤスターおじさん——だとは流石に思えない。特徴的な声の中に、何というか……確かな悪意を感じる気がする。

『——おやおや、コレはいけませんな。しからば取り敢えずは、どろん!』

そう言つて風の中に消えて行つたシャドウサーヴアント……アレを操つているであろう本体には未だダメージすら負わせていない。ぴんぴんしてる。もう一つ程、なんか悪さをしでかしても不思議じゃない。

「おつ、また出てきたか!」

「っ—」

「んもう、これで何度目やろか。ほんま、元気のええこと」

「少なくとも追加を律義にこつちに向けて送り込んで来る辺り、ここから逃げてるって事はないんだろうが……さて」

しかし……アイツの言い方からして、リンボが今回目標としてるのは、俺じゃなくてアメリカ側、つまりリンボはケルト側の目標を果たそうとしてる。

だつてのに、首脳陣から離れてリンボを追つてる俺達に対し、こうやつてシャドウサーヴアントを送り込んでるって言うのは、どうにもちぐはぐだ。

「……何を狙つてやがる?」

首脳陣を更に叩くのであれば、シャドウサーヴアントもまとめてそつちに向かわせれ

ばいいだろうに……こんな風に戦場全体に散らせて、追加の敵もこっちに回してる。ケルトの兵隊達じゃ、首脳部を固めてる兵隊を突破するのも難しいだろうに。

……自分が単騎で打って出て……いやあ、一度会っただけだけどそんなこう、パワフルな戦い方するようなタイプには思えない。

それよりも、こつこつと積み上げてきたものを、土台を軽く蹴っ飛ばしてぶち壊すみたいなやり方を好むタイプじゃないのか？ それこそ、一手で全部がひっくり返りかねない様な――

「……この混戦の中で、何か狙って大きな効果を上げる様な場所があるのでしようかつ……一体、討ち取りましたっ！」

「ナイス！ あー分かんねえ……正直、さっきのエジソン、エレナの二人を討ち取れてたら、一番の効果を上げてたとは思うんだがそれもしくじったし……」

狙うとしたら、それ以上に致命的な『何か』である事は間違いないのだが。けどこの戦場の中に、そんなもんあるのだろうか。一手でこの周りが全部崩壊するような爆弾とかそういうのが……？

「なんかすごいサーヴァントとか投入する準備とかしてる？ 第二特異点の時のあのセイバーみたいな……」

「二騎で全てを覆すような、強力なサーヴァントを、ですか」

「そう言う奴を投入する為に陣を敷いてるとかだと、それが完成する前に叩かないと、とんでもなくマズいが……」

……ダメだ、ハッキリした確証が持てない。

出来れば、こうやって走って彷徨ってる所から、確信以て動けるだけの、『それはヤバイ』って思って行動できるくらいいのハッキリした……指針が……

「……うち、そう言うの詳しくないんやけど」

「ん？」

「あの二人は、どっちが自由になっても、周りは迷惑なんちやう？ 少なくとも、うちとかゴルゴーンはん位しか、白い方の弓使いは抑えられへんと思うわあ」

そう言われ、ちらりとアサシンの指差した先を見る。

未だ相争うカルナとアルジュナ、宿命の戦い。凄まじい戦いだ。確かに、今でも回り巻き込むレベルのとんでもない戦いを引き起こしてはる。

確かに、あの空中を飛び回って爆撃してくる色黒のアーチャーくんがカルナさんから解放されたら、あの位置だと……少なくともアメリカ軍の横っ腹は食い破られるか？

成程なあ……

「——いやアレだあああああつ!!？」

「はひひっ!!？」

「……うち、こない担当とちやうんやけど」

ち、チクシヨウつ、なんで気が付かなかった……っ！ そりやあそうだ、今一番、奴に茶々入れて欲しくない所をもっと考えるべきだったっ！ も、もしアルジュナで手いっぱいなカルナを、背後から突かれようもんなら、マズい！

「わ、悪いアサシンっ、ここは任せて先行してくれっ！ このままマジでカルナさんやられたら、あの化け物アーチャーが解き放たれるっ！」

「はあ……狂言やつとるんとちやうんやで？ 氣いつけてな？」

「お願いしますっ……！」

俺の必死の懇願で、アサシンが軽く跳躍して、カルナとアルジュナの戦いの場へと向かってくれるが……しかし、これ間に合うだろうか。

さっきまで結構探し回ってて、十分準備をするだけの時間はあった。カルナとアルジュナは二人ともお互いに集中してて、何時だつて横やり入れられるだろう絶好のタイミングである。

あそこから、リンボが何処にいるか探して、それでカルナさんへの横槍を防いでそれから……時間が無いわりにやる事が多い！！

「……アサシンを信じるしかないかっ……！」

最早鬼種という、人知を超えた怪物の第六感にかけるしかないだろう。即座に奴の悪

意を見抜き、そしてその魔の手を食い破ってくれることを……っ！

未だ現れる黒い影。焦る思考。狭まる視界。

俺でも探せないかとは、一応やっつては見るが……しかし、一介の人間の視界では、コレだけ乱れた戦の中で個人を探すなんて、それこそ——

「——生温く信じられたい訳ではない。想像しただけでも、鳥肌が立つが」

——女神のような、高い視座でもない。

耳を埋める戦場の喧騒……そんな中で尚——するりと俺の耳に届いたその声には、はっと顔を顔を上げる。酷く静かで、そして、酷く冷たい。

「ハナからアテにされない、というのも……」

「おっ——おのれっ、一体何時からっ……!?!」

天を仰ぐ。

屈強な尾が、その大柄な体を天に押し上げる……そしてその先から伸びた無数の蛇が、天に逃れんと跳躍した、見覚えのない男を追っていた。

白、黒に分かれ、若草色の着物を着崩したその男は。

「それはそれで、頭にクするものだな？ マスター」

世界最高クラスの、麗しき蛇妖の手によって、その耽美な顔を苦々しく染め上げてい

た——！